

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第500集

細谷地遺跡第9次・第10次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2007

独立行政法人 都市再生機構岩手都市開発事務所
岩 手 県 盛 岡 市
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

細谷地遺跡第9次・第10次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査



航空写真（東から）



航空写真 調査区北半 (直上)



航空写真 調査区南半 (直上)

航空写真

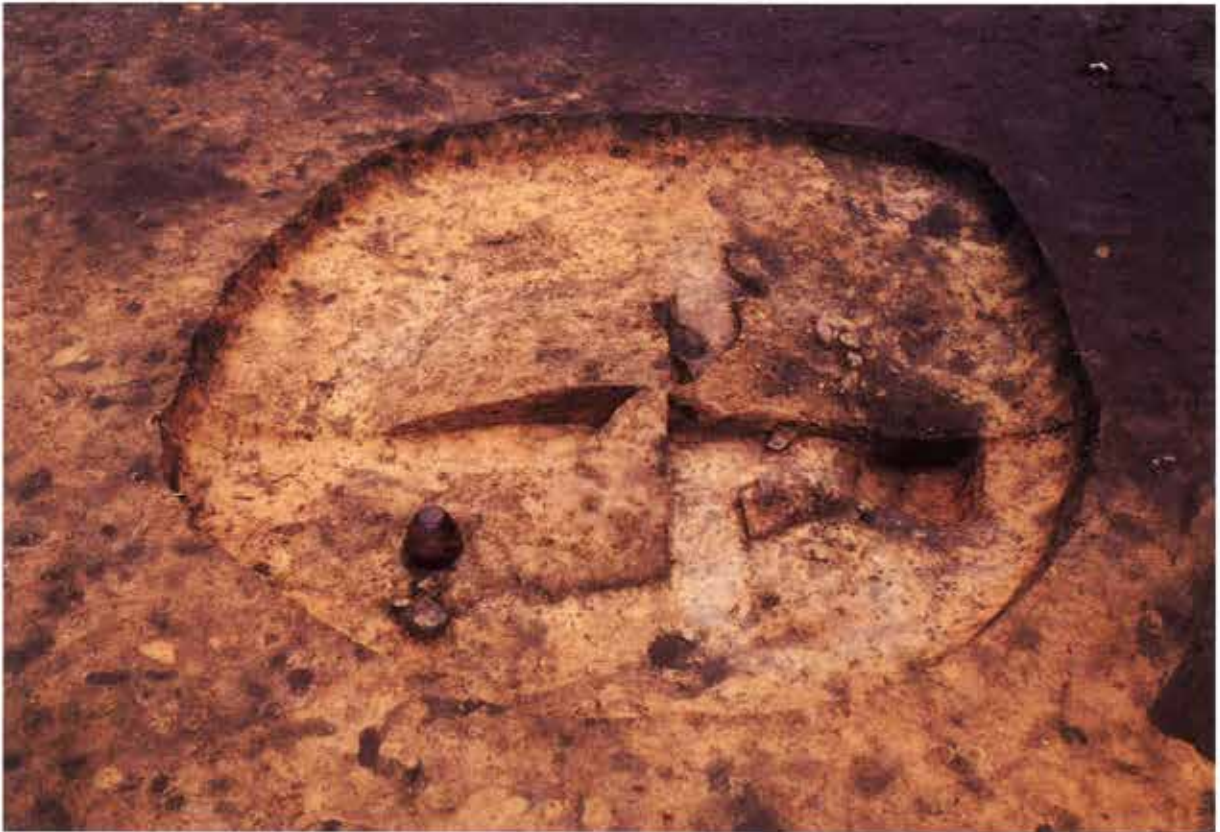


埋土断面（東から）



炭化材出土状況（南から）

RA052竪穴住居跡（1）



褐色土検出状況（南から）



完掘（南から）

RA052堅穴住居跡（2）



RA106竪穴住居跡



RA082竪穴住居跡 炭化材出土状況

RA106・RA082竪穴住居跡



RA098竪穴住居跡カマド構築礫、支脚検出状況



RD167土坑

RA098竪穴住居跡カマド・RD167



RD153土坑 灰黄白色土検出状況



RD153土坑 焼土検出状況

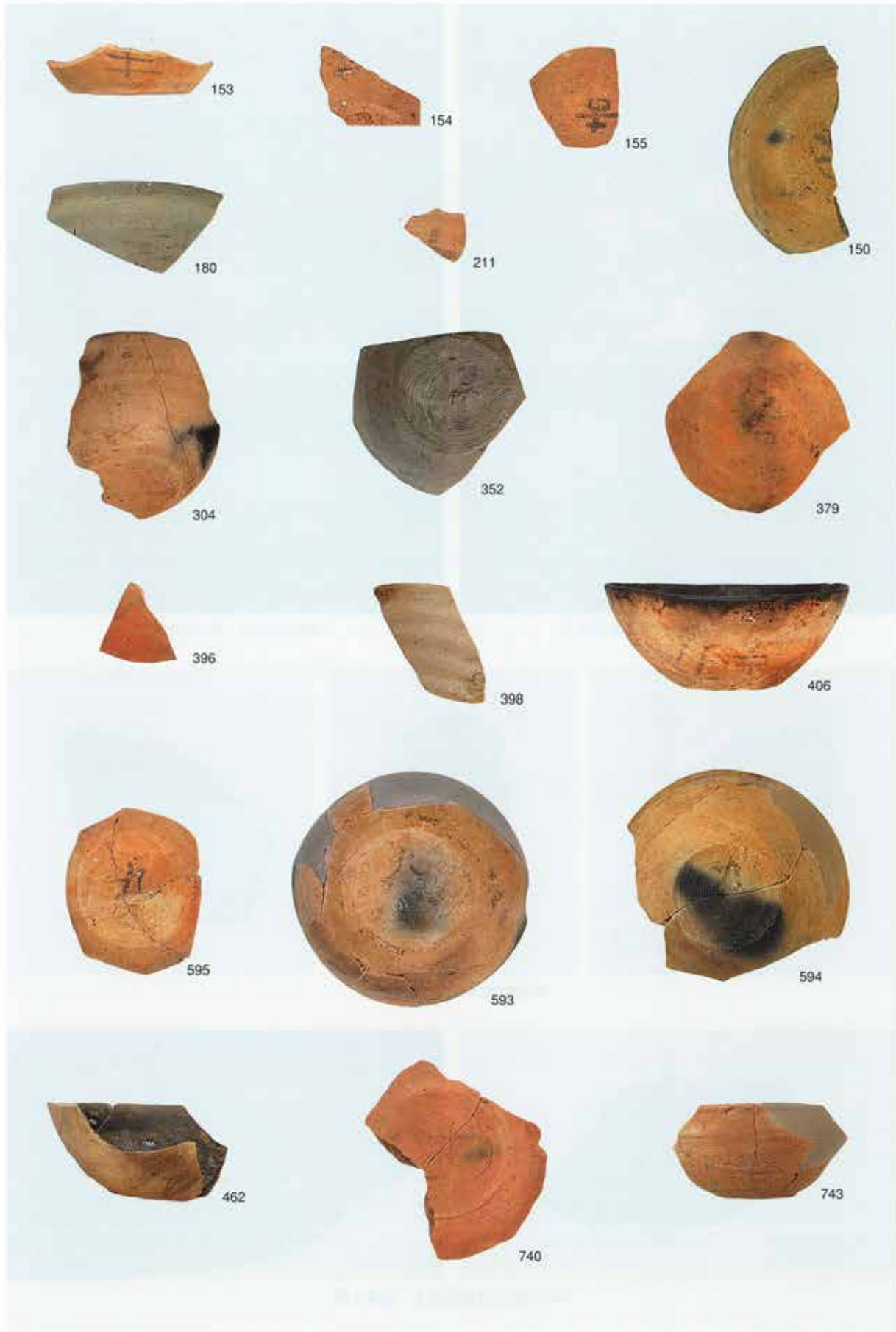


RA089竪穴住居跡出土 瓦



RA078竪穴住居跡出土 刻書土器

RD153・出土遺物



墨書土器

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県盛岡市の盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成17年度に発掘調査を実施した、盛岡市細谷地遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査で本遺跡は、縄文時代晩期前葉、奈良時代、平安時代には集落であったことが明らかとなり、北上盆地北部のこれらの時期の実態を解き明かす上で貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました独立行政法人都市再生機構岩手土地開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 牧 雄

例 言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市向中野字野原1-17ほかに所在する細谷地遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所及び盛岡市都市整備部盛岡南整備課と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡情報検索システムに記載される遺跡番号はLE-26-0214、遺跡略号は第9次調査分がOHY-05-09、第10次調査分がOHY-05-10である。
4. 発掘調査機関は平成17年4月12日～11月18日、調査面積は第9次分が1,835㎡、第10次分が10,545㎡である。調査は、第9次分を金子佐知子、第10次分を金子佐知子、北村忠昭、八木勝枝、木戸口俊子、金子昭彦、藤原大輔が行った。
5. 室内整理期間は平成17年11月1日～平成18年3月31日で、第9次分を金子佐知子、第10次分を北村忠昭、八木勝枝、水上明博、金子昭彦、木戸口俊子が担当した。
6. 本報告書の執筆は、金子佐知子、北村忠昭、八木勝枝、金子昭彦、木戸口俊子が行った。遺構に関しては文末に文責を示した。遺物に関しては文中に示していないが、以下の分担で行っている。
遺物出土状況 遺構担当者、縄文土器 八木勝枝、弥生土器 金子昭彦、石器 北村忠昭、奈良時代の土師器 北村忠昭、平安時代の土師器 金子佐知子、平安時代の須恵器 金子昭彦、土製品・石製品 北村忠昭、金属製品 北村忠昭、陶磁器 木戸口俊子
なお、遺構の時期は土器の担当者、墨書土器・刻書土器の积文は石崎高臣が担当した。
7. 発掘調査では、独立行政法人と市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、高橋善躬氏のご協力をいただいた。
8. 本報告書作成にあたり、次の方々にご指導いただいた。(順不同・敬称略)
伊藤博幸(奥州市埋蔵文化財調査センター) 高橋栄一(東北歴史博物館) 古川一明(宮城県多賀城跡調査研究所) 鈴木孝行(多賀城市埋蔵文化財調査センター) 鈴木まほろ(岩手県立博物館)
室野秀文(盛岡市教育委員会)
9. 各種委託業務では以下の機関に依頼した。
<遺構の測量図化及び遺構遺物実測図、写真図版の編集、デジタル図版化> (株)セビアス
<航空写真>東邦航空
<石質鑑定>花崗岩研究会
<金属製品の保存処理・成分分析>岩手県立博物館
<炭化材樹種同定>岩手県木炭協会
<土壌のプラントオパール分析>パリノサーベイ(株)
<炭化材の放射線年代測定>(株)加速器分析研究所
<黒曜石産地同定>パリノサーベイ(株)
10. 今回の調査結果は、現地説明会(10月22日開催)、及び調査略報、並びに遺跡報告会における発表(2月4日開催)などがあるが、本書と記載が異なる場合は、すべて本報告書が優先する。
11. 調査で得られた出土遺物や整理に係わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターで保管・管理している。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	1
1.	地理的環境	1
(1)	遺跡の位置と立地	1
(2)	遺跡周辺の地形と地質	4
2.	歴史的環境	5
3.	基本層序	7
4.	これまでの調査	7
III	野外調査と室内整理の方法	9
1.	野外調査の方法	9
(1)	調査面積	9
(2)	調査区の区割設定	9
(3)	粗掘り・遺構検出	9
(4)	遺構の命名	9
(5)	精査	12
(6)	普及活動	12
2.	室内整理	12
(1)	遺物の整理	12
(2)	遺構実測図の整理	13
(3)	写真類の整理	13
IV	検出された遺構と遺構内出土遺物	18
1.	調査の概要	18
2.	竪穴住居跡	18
3.	掘立柱建物跡	164
4.	土坑	169
5.	焼土遺構	194
6.	溝跡	197
7.	その他の遺構	210
8.	柱穴状土坑	215
9.	遺構外出土遺物	226
(1)	縄文時代の遺物	226
(2)	弥生時代の土器	226
(3)	古代の遺物	227
(4)	近世以降の遺物	227

V	まとめ	320
1.	遺構	320
2.	遺物	323
付編	細谷地遺跡の自然科学分析	329
1.	細谷地遺跡第10次調査出土炭化材年代測定結果報告	329
2.	細谷地遺跡第9次調査区の植物珪酸体分析	333
3.	細谷地遺跡第10次調査出土黒曜石の産地推定	339
4.	細谷地遺跡出土関連遺物の金属考古学的調査結果	343
抄録		505

図版目次

第1図	遺跡位置図	2	第29図	RA064竪穴住居跡(1)	48
第2図	細谷地遺跡周辺地形図	3	第30図	RA064竪穴住居跡(2)	49
第3図	遺跡周辺地形分類図	4	第31図	RA065竪穴住居跡	50
第4図	周辺の遺跡	6	第32図	RA066竪穴住居跡	52
第5図	基本土層	7	第33図	RA067竪穴住居跡	54
第6図	グリッド配置図	11	第34図	RA068竪穴住居跡	55
第7図	実測図凡例	14	第35図	RA069竪穴住居跡	57
第8図	遺構配置図	15	第36図	RA070竪穴住居跡	59
第9図	遺物集中区と沢状地形	17	第37図	RA071竪穴住居跡(1)	61
第10図	RA052竪穴住居跡(1)	19	第38図	RA071竪穴住居跡(2)	62
第11図	RA052竪穴住居跡(2)	20	第39図	RA072竪穴住居跡(1)	63
第12図	RA053竪穴住居跡(1)	22	第40図	RA072竪穴住居跡(2)	64
第13図	RA053竪穴住居跡(2)	23	第41図	RA073竪穴住居跡(1)	66
第14図	RA054竪穴住居跡	24	第42図	RA073竪穴住居跡(2)	67
第15図	RA055竪穴住居跡(1)	26	第43図	RA073竪穴住居跡(3)	68
第16図	RA055竪穴住居跡(2)	27	第44図	RA074竪穴住居跡	69
第17図	RA056竪穴住居跡(1)	29	第45図	RA075竪穴住居跡	70
第18図	RA056竪穴住居跡(2)	30	第46図	RA076竪穴住居跡(1)	72
第19図	RA057竪穴住居跡(1)	32	第47図	RA076竪穴住居跡(2)	73
第20図	RA057竪穴住居跡(2)	33	第48図	RA077竪穴住居跡	75
第21図	RA058竪穴住居跡	35	第49図	RA078竪穴住居跡(1)	76
第22図	RA059竪穴住居跡	37	第50図	RA078竪穴住居跡(2)	77
第23図	RA060竪穴住居跡	38	第51図	RA079竪穴住居跡	80
第24図	RA061竪穴住居跡	40	第52図	RA080竪穴住居跡(1)	81
第25図	RA062竪穴住居跡(1)	42	第53図	RA080竪穴住居跡(2)	82
第26図	RA062竪穴住居跡(2)	43	第54図	RA080竪穴住居跡(3)	83
第27図	RA063竪穴住居跡(1)	45	第55図	RA081竪穴住居跡(1)	86
第28図	RA063竪穴住居跡(2)	46	第56図	RA081竪穴住居跡(2)	87

第57図	RA082竪穴住居跡 (1) ……	89	第103図	RA102竪穴住居跡 (2) ……	151
第58図	RA082竪穴住居跡 (2) ……	90	第104図	RA103竪穴住居跡 (1) ……	153
第59図	RA082竪穴住居跡 (3) ……	91	第105図	RA103竪穴住居跡 (2) ……	154
第60図	RA083竪穴住居跡 (1) ……	93	第106図	RA104竪穴住居跡 ……	155
第61図	RA083竪穴住居跡 (2) ……	94	第107図	RA105竪穴住居跡 ……	157
第62図	RA084竪穴住居跡 ……	95	第108図	RA106竪穴住居跡 (1) ……	159
第63図	RA085竪穴住居跡 (1) ……	97	第109図	RA106竪穴住居跡 (2) ……	160
第64図	RA085竪穴住居跡 (2) ……	98	第110図	RA106竪穴住居跡 (3) ……	161
第65図	RA086竪穴住居跡 (1) ……	100	第111図	RA107竪穴住居跡 ……	163
第66図	RA086竪穴住居跡 (2) ……	101	第112図	RA108竪穴住居跡・RB007掘立柱建物跡 ……………	165
第67図	RA087竪穴住居跡 (1) ……	103	第113図	RB008掘立柱建物跡 (1) ……	166
第68図	RA087竪穴住居跡 (2) ……	104	第114図	RB008掘立柱建物跡 (2) ……	167
第69図	RA088竪穴住居跡 (1) ……	106	第115図	土坑 (1) RD150~RD152 ……	177
第70図	RA088竪穴住居跡 (2) ……	107	第116図	土坑 (2) RD153 ……	178
第71図	RA089竪穴住居跡 (1) ……	109	第117図	土坑 (3) RD154~RD157 ……	179
第72図	RA089竪穴住居跡 (2) ……	110	第118図	土坑 (4) RD158~RD161 ……	180
第73図	RA089竪穴住居跡 (3) ……	111	第119図	土坑 (5) RD162~RD164 ……	181
第74図	RA090竪穴住居跡 ……	114	第120図	土坑 (6) RD165~RD168 ……	182
第75図	RA091竪穴住居跡 (1) ……	115	第121図	土坑 (7) RD169~RD174 ……	183
第76図	RA091竪穴住居跡 (2) ……	116	第122図	土坑 (8) RD175~RD180 ……	184
第77図	RA092竪穴住居跡 (1) ……	118	第123図	土坑 (9) RD181~RD184 ……	185
第78図	RA092竪穴住居跡 (2) ……	119	第124図	土坑 (10) RD185~RD189 ……	186
第79図	RA092竪穴住居跡 (3) ……	120	第125図	土坑 (11) RD190~RD193 ……	187
第80図	RA092竪穴住居跡 (4) ……	121	第126図	土坑 (12) RD194~RD198 ……	188
第81図	RA093竪穴住居跡 (1) ……	124	第127図	土坑 (13) RD199~RD203 ……	189
第82図	RA093竪穴住居跡 (2) ……	125	第128図	土坑 (14) RD204~RD208 ……	190
第83図	RA093竪穴住居跡 (3) ……	126	第129図	土坑 (15) RD209~RD212 ……	191
第84図	RA093竪穴住居跡 (4) ……	127	第130図	土坑 (16) RD213~RD217 ……	192
第85図	RA094竪穴住居跡 ……	129	第131図	土坑 (17) RD218~RD223 ……	193
第86図	RA095竪穴住居跡 (1) ……	130	第132図	RF003~RF007焼土遺構 ……	195
第87図	RA095竪穴住居跡 (2) ……	131	第133図	溝 (1) RG022~RG030 ……	203
第88図	RA095竪穴住居跡 (3) ……	132	第134図	溝 (2) RG031~RG037 ……	205
第89図	RA095竪穴住居跡 (4) ……	133	第135図	溝 (3) RG038~RG042 ……	207
第90図	RA096竪穴住居跡 (1) ……	134	第136図	RZ009カマド状遺構 ……	211
第91図	RA096竪穴住居跡 (2) ……	135	第137図	RZ010畝間状遺構 ……	212
第92図	RA097竪穴住居跡 (1) ……	137	第138図	RZ011・RZ012不明遺構 ……	214
第93図	RA097竪穴住居跡 (2) ……	138	第139図	柱穴状土坑 (1) ……	218
第94図	RA098竪穴住居跡 (1) ……	140	第140図	柱穴状土坑 (2) ……	219
第95図	RA098竪穴住居跡 (2) ……	141	第141図	柱穴状土坑 (3) ……	221
第96図	RA098竪穴住居跡 (3) ……	142	第142図	柱穴状土坑 (4) ……	222
第97図	RA099竪穴住居跡 (1) ……	143	第143図	柱穴状土坑 (5) ……	223
第98図	RA099竪穴住居跡 (2) ……	144	第144図	柱穴状土坑 (6) ……	225
第99図	RA100竪穴住居跡 ……	146	第145図	遺構内出土遺物 (1) ……	228
第100図	RA101竪穴住居跡 (1) ……	147	第146図	遺構内出土遺物 (2) ……	229
第101図	RA101竪穴住居跡 (2) ……	148	第147図	遺構内出土遺物 (3) ……	230
第102図	RA102竪穴住居跡 (1) ……	150			

第148図	遺構内出土遺物 (4)	231	第187図	遺構内出土遺物 (43)	270
第149図	遺構内出土遺物 (5)	232	第188図	遺構内出土遺物 (44)	271
第150図	遺構内出土遺物 (6)	233	第189図	遺構内出土遺物 (45)	272
第151図	遺構内出土遺物 (7)	234	第190図	遺構内出土遺物 (46)	273
第152図	遺構内出土遺物 (8)	235	第191図	遺構内出土遺物 (47)	274
第153図	遺構内出土遺物 (9)	236	第192図	遺構内出土遺物 (48)	275
第154図	遺構内出土遺物 (10)	237	第193図	遺構内出土遺物 (49)	276
第155図	遺構内出土遺物 (11)	238	第194図	遺構内出土遺物 (50)	277
第156図	遺構内出土遺物 (12)	239	第195図	遺構内出土遺物 (51)	278
第157図	遺構内出土遺物 (13)	240	第196図	遺構内出土遺物 (52)	279
第158図	遺構内出土遺物 (14)	241	第197図	遺構内出土遺物 (53)	280
第159図	遺構内出土遺物 (15)	242	第198図	遺構内出土遺物 (54)	281
第160図	遺構内出土遺物 (16)	243	第199図	遺構内出土遺物 (55)	282
第161図	遺構内出土遺物 (17)	244	第200図	遺構内出土遺物 (56)	283
第162図	遺構内出土遺物 (18)	245	第201図	遺構内出土遺物 (57)	284
第163図	遺構内出土遺物 (19)	246	第202図	遺構内出土遺物 (58)	285
第164図	遺構内出土遺物 (20)	247	第203図	遺構内出土遺物 (59)	286
第165図	遺構内出土遺物 (21)	248	第204図	遺構内出土遺物 (60)	287
第166図	遺構内出土遺物 (22)	249	第205図	遺構内出土遺物 (61)	288
第167図	遺構内出土遺物 (23)	250	第206図	遺構内出土遺物 (62)	289
第168図	遺構内出土遺物 (24)	251	第207図	遺構内出土遺物 (63)	290
第169図	遺構内出土遺物 (25)	252	第208図	遺構内出土遺物 (64)	291
第170図	遺構内出土遺物 (26)	253	第209図	遺構内出土遺物 (65)	292
第171図	遺構内出土遺物 (27)	254	第210図	遺構内出土遺物 (66)	293
第172図	遺構内出土遺物 (28)	255	第211図	遺構内出土遺物 (67)	294
第173図	遺構内出土遺物 (29)	256	第212図	遺構内出土遺物 (68)	295
第174図	遺構内出土遺物 (30)	257	第213図	遺構内出土遺物 (69)	296
第175図	遺構内出土遺物 (31)	258	第214図	遺構内出土遺物 (70)	297
第176図	遺構内出土遺物 (32)	259	第215図	遺構内出土遺物 (71)・遺構外出土遺物 (1)	298
第177図	遺構内出土遺物 (33)	260			
第178図	遺構内出土遺物 (34)	261	第216図	遺構外出土遺物 (2)	299
第179図	遺構内出土遺物 (35)	262	第217図	遺構外出土遺物 (3)	300
第180図	遺構内出土遺物 (36)	263	第218図	遺構外出土遺物 (4)	301
第181図	遺構内出土遺物 (37)	264	第219図	遺構配置図 (縄文時代～古代)	321
第182図	遺構内出土遺物 (38)	265	第220図	遺物の遺構間接合図	322
第183図	遺構内出土遺物 (39)	266	第221図	土器分類図 (1)	326
第184図	遺構内出土遺物 (40)	267	第222図	土器分類図 (2)	327
第185図	遺構内出土遺物 (41)	268	第223図	墨書土器・刻書土器集成	328
第186図	遺構内出土遺物 (42)	269			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡	6	第3表	遺構名対照表	10
第2表	これまでの調査一覧	8	第4表	土坑観察表	169

第5表	焼土遺構一覽表	196
第6表	溝跡一覽表	210
第7表	柱穴状土坑計測表	216
第8表	土器觀察表1 縄文時代	302
第9表	土器觀察表2 弥生時代	302
第10表	土器觀察表3 奈良時代	302
第11表	土器觀察表4 平安時代	304

第12表	石器・石製品觀察表	314
第13表	土製品・瓦・焼成粘土塊觀察表	317
第14表	金属製品・古銭・鉄滓觀察表	317
第15表	近世陶磁器觀察表	318
第16表	竪穴住居跡一覽表	319
第17表	墨書土器・刻書土器一覽表	325

写真図版目次

写真図版1	航空写真	353
写真図版2	調査前風景	354
写真図版3	基本土層	355
写真図版4	RA052竪穴住居跡(1)	356
写真図版5	RA052竪穴住居跡(2)	357
写真図版6	RA053竪穴住居跡	358
写真図版7	RA054竪穴住居跡	359
写真図版8	RA055竪穴住居跡(1)	360
写真図版9	RA055竪穴住居跡(2)	361
写真図版10	RA056竪穴住居跡	362
写真図版11	RA057竪穴住居跡	363
写真図版12	RA058竪穴住居跡	364
写真図版13	RA059竪穴住居跡	365
写真図版14	RA060竪穴住居跡	366
写真図版15	RA061竪穴住居跡	367
写真図版16	RA062竪穴住居跡	368
写真図版17	RA063竪穴住居跡(1)	369
写真図版18	RA063竪穴住居跡(2)	370
写真図版19	RA064竪穴住居跡	371
写真図版20	RA065竪穴住居跡	372
写真図版21	RA066竪穴住居跡	373
写真図版22	RA067竪穴住居跡	374
写真図版23	RA068竪穴住居跡	375
写真図版24	RA069竪穴住居跡	376
写真図版25	RA070竪穴住居跡	377
写真図版26	RA071竪穴住居跡	378
写真図版27	RA072竪穴住居跡	379
写真図版28	RA073竪穴住居跡	380
写真図版29	RA074竪穴住居跡	381
写真図版30	RA075竪穴住居跡	382
写真図版31	RA076竪穴住居跡	383
写真図版32	RA077竪穴住居跡	384
写真図版33	RA078竪穴住居跡(1)	385
写真図版34	RA078竪穴住居跡(2)	386

写真図版35	RA079竪穴住居跡	387
写真図版36	RA080竪穴住居跡(1)	388
写真図版37	RA080竪穴住居跡(2)	389
写真図版38	RA081竪穴住居跡	390
写真図版39	RA082竪穴住居跡(1)	391
写真図版40	RA082竪穴住居跡(2)	392
写真図版41	RA083竪穴住居跡	393
写真図版42	RA084竪穴住居跡	394
写真図版43	RA085竪穴住居跡	395
写真図版44	RA086竪穴住居跡	396
写真図版45	RA087竪穴住居跡	397
写真図版46	RA088竪穴住居跡	398
写真図版47	RA089竪穴住居跡(1)	399
写真図版48	RA089竪穴住居跡(2)	400
写真図版49	RA090竪穴住居跡	401
写真図版50	RA091竪穴住居跡(1)	402
写真図版51	RA091竪穴住居跡(2)	403
写真図版52	RA092竪穴住居跡(1)	404
写真図版53	RA092竪穴住居跡(2)	405
写真図版54	RA093竪穴住居跡(1)	406
写真図版55	RA093竪穴住居跡(2)	407
写真図版56	RA094竪穴住居跡	408
写真図版57	RA095竪穴住居跡(1)	409
写真図版58	RA095竪穴住居跡(2)	410
写真図版59	RA096竪穴住居跡	411
写真図版60	RA097竪穴住居跡(1)	412
写真図版61	RA097竪穴住居跡(2)	413
写真図版62	RA098竪穴住居跡(1)	414
写真図版63	RA098竪穴住居跡(2)	415
写真図版64	RA099竪穴住居跡(1)	416
写真図版65	RA099竪穴住居跡(2)	417
写真図版66	RA100竪穴住居跡	418
写真図版67	RA101竪穴住居跡	419
写真図版68	RA102竪穴住居跡	420

写真図版69	RA103竪穴住居跡	421	写真図版109	出土遺物 (4)	461
写真図版70	RA104竪穴住居跡	422	写真図版110	出土遺物 (5)	462
写真図版71	RA105竪穴住居跡	423	写真図版111	出土遺物 (6)	463
写真図版72	RA106竪穴住居跡 (1)	424	写真図版112	出土遺物 (7)	464
写真図版73	RA106竪穴住居跡 (2)	425	写真図版113	出土遺物 (8)	465
写真図版74	RA107竪穴住居跡	426	写真図版114	出土遺物 (9)	466
写真図版75	RA108竪穴住居跡・RB007掘立柱建物跡	427	写真図版115	出土遺物 (10)	467
写真図版76	RB008掘立柱建物跡	428	写真図版116	出土遺物 (11)	468
写真図版77	RD150～RD153土坑	429	写真図版117	出土遺物 (12)	469
写真図版78	RD153～RD155土坑	430	写真図版118	出土遺物 (13)	470
写真図版79	RD156～RD159土坑	431	写真図版119	出土遺物 (14)	471
写真図版80	RD160～RD163土坑	432	写真図版120	出土遺物 (15)	472
写真図版81	RD164～RD166・RD168土坑	433	写真図版121	出土遺物 (16)	473
写真図版82	RD167・RD169・RD171土坑	434	写真図版122	出土遺物 (17)	474
写真図版83	RD172～RD175土坑	435	写真図版123	出土遺物 (18)	475
写真図版84	RD176～RD179土坑	436	写真図版124	出土遺物 (19)	476
写真図版85	RD180～RD183土坑	437	写真図版125	出土遺物 (20)	477
写真図版86	RD184～RD187土坑	438	写真図版126	出土遺物 (21)	478
写真図版87	RD188～RD191土坑	439	写真図版127	出土遺物 (22)	479
写真図版88	RD192～RD195土坑	440	写真図版128	出土遺物 (23)	480
写真図版89	RD196～RD199土坑	441	写真図版129	出土遺物 (24)	481
写真図版90	RD200～RD203土坑	442	写真図版130	出土遺物 (25)	482
写真図版91	RD204～RD209土坑	443	写真図版131	出土遺物 (26)	483
写真図版92	RD210～RD213土坑	444	写真図版132	出土遺物 (27)	484
写真図版93	RD214～RD217土坑	445	写真図版133	出土遺物 (28)	485
写真図版94	RD218～RD221土坑	446	写真図版134	出土遺物 (29)	486
写真図版95	RD222・RD223土坑・RF003・RF004 焼土遺構	447	写真図版135	出土遺物 (30)	487
写真図版96	RF005～RF007焼土遺構・RG022溝跡	448	写真図版136	出土遺物 (31)	488
写真図版97	RG023・RG024溝跡	449	写真図版137	出土遺物 (32)	489
写真図版98	RG025～RG027溝跡	450	写真図版138	出土遺物 (33)	490
写真図版99	RG028・RG029溝跡	451	写真図版139	出土遺物 (34)	491
写真図版100	RG030・RG031・RG033・RG034溝跡	452	写真図版140	出土遺物 (35)	492
写真図版101	RG032・RG035・RG036溝跡	453	写真図版141	出土遺物 (36)	493
写真図版102	RD208土坑・RG037～RG041溝跡	454	写真図版142	出土遺物 (37)	494
写真図版103	RG042溝跡・RZ009カマド状遺構・ 航空写真	455	写真図版143	出土遺物 (38)	495
写真図版104	RZ010畝間状遺構	456	写真図版144	出土遺物 (39)	496
写真図版105	RZ011・012不明遺構・柱穴群	457	写真図版145	出土遺物 (40)	497
写真図版106	出土遺物 (1)	458	写真図版146	出土遺物 (41)	498
写真図版107	出土遺物 (2)	459	写真図版147	出土遺物 (42)	499
写真図版108	出土遺物 (3)	460	写真図版148	出土遺物 (43)	500
			写真図版149	出土遺物 (44)	501
			写真図版150	出土遺物 (45)	502
			写真図版151	出土遺物 (46)	503
			写真図版152	出土遺物 (47)	504

I 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市として発展していくことを目指し、現在の既成市街地のほかに南部地域を新都市として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から面積313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に関わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査を必要とする範囲を確定し、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

本遺跡第9次調査、第10次調査については、岩手県教育委員会が独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所長、盛岡市と協議の結果、平成17年度の事業として確定した。これを受け、平成17年4月1日に、財団法人岩手県文化振興事業団理事長と都市再生機構岩手都市開発事務所長及び盛岡市長との間でそれぞれ委託契約を締結し、第9次調査1,835㎡、第10次調査6,678㎡発掘調査を実施する運びとなった。その後、第10次調査については岩手県教育委員会より通知があり、3,867㎡を加えた10,545㎡に面積を変更して1月20日付けで変更契約を行った。野外調査は平成17年4月12日から11月18日まで、室内整理は平成17年11月1日から3月31日まで行われた。（金子佐知子）

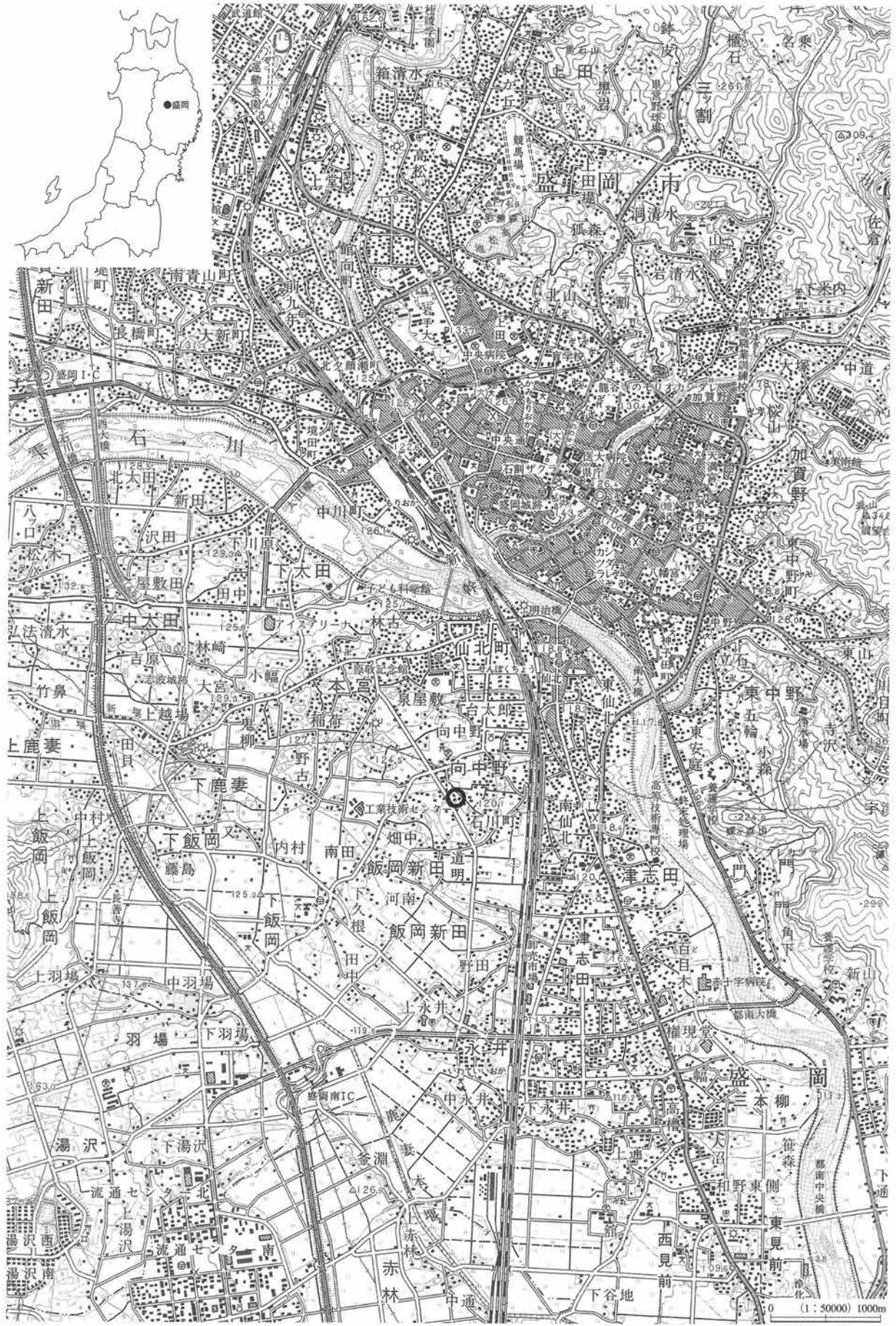
II 遺跡の立地・環境

1 地理的環境

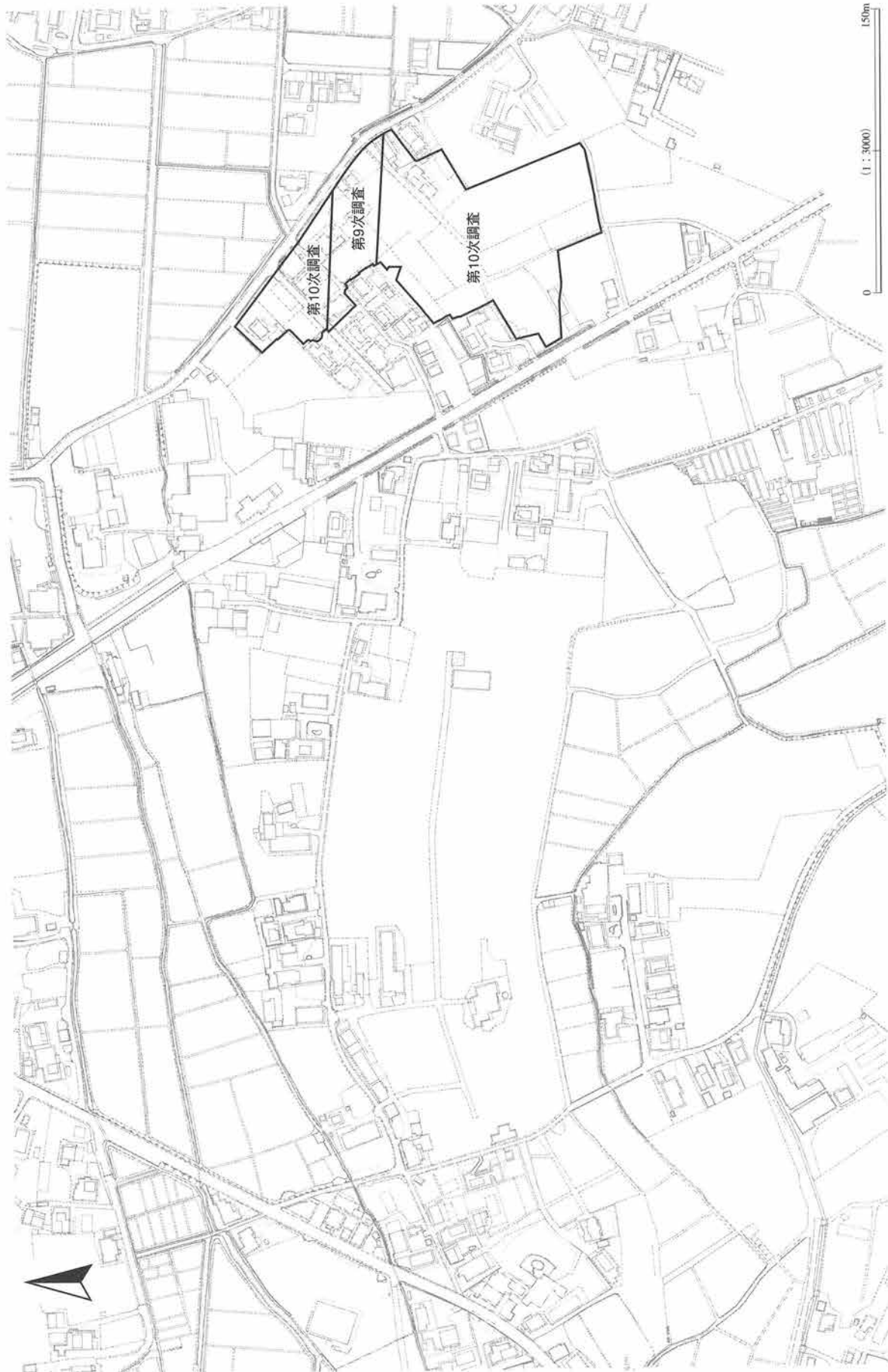
(1) 遺跡の位置と立地

細谷地遺跡の所在する盛岡市は、岩手県のほぼ中央に位置し、北は八幡平市、岩手郡岩手町・葛巻町、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、南は花巻市、紫波郡紫波町・矢巾町、西は岩手郡雫石町・滝沢村の2市6町2村と接している。南部藩主南部重直公による盛岡城完成の1633年より経ること370年、現在は岩手県の県庁所在地である。平成17年11月に岩手郡玉山村と合併し、東西約45.5km、南北約40km、総面積886.47km²、総人口約30万人となり、北部太平洋側における中核都市として更なる発展を続けている。市域の西側を東北地方交通の大動脈である東日本旅客鉄道東北本線、I G Rいわて銀河鉄道線と国道4号線が南北に縦貫し、東日本旅客鉄道田沢湖線と国道46号線が西の秋田県に通じている。

細谷地遺跡は、東日本旅客鉄道仙北町駅から南に約1.3kmに位置し、盛岡市向中野地内に所在している。国土地理院発行の2万5千分の1地形図「盛岡」N J - 54 - 13 - 14 - 2（盛岡14号-2）、同5万分の1地形図「盛岡」N J - 54 - 13 - 14（盛岡14号）の図幅に含まれ、第9次調査区は北緯39度40分35秒、東経141度8分27秒付近、第10次調査区は北緯39度40分32～36秒、東経141度8分25～26秒付近に位置する。調査区は雫石川によって形成された自然堤防上に立地し、標高は約122mである。現況は宅地跡、畑地である。本遺跡の北側には平成16・17年度に発掘調査の行われた向中野館遺跡が



第1図 遺跡位置図



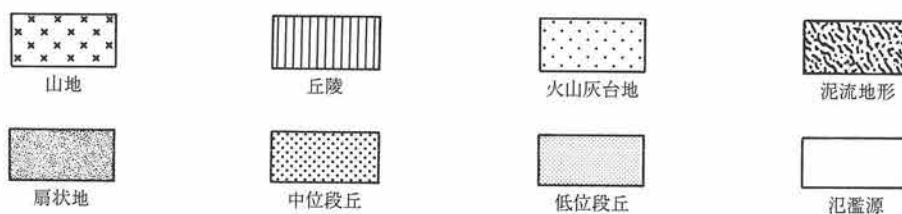
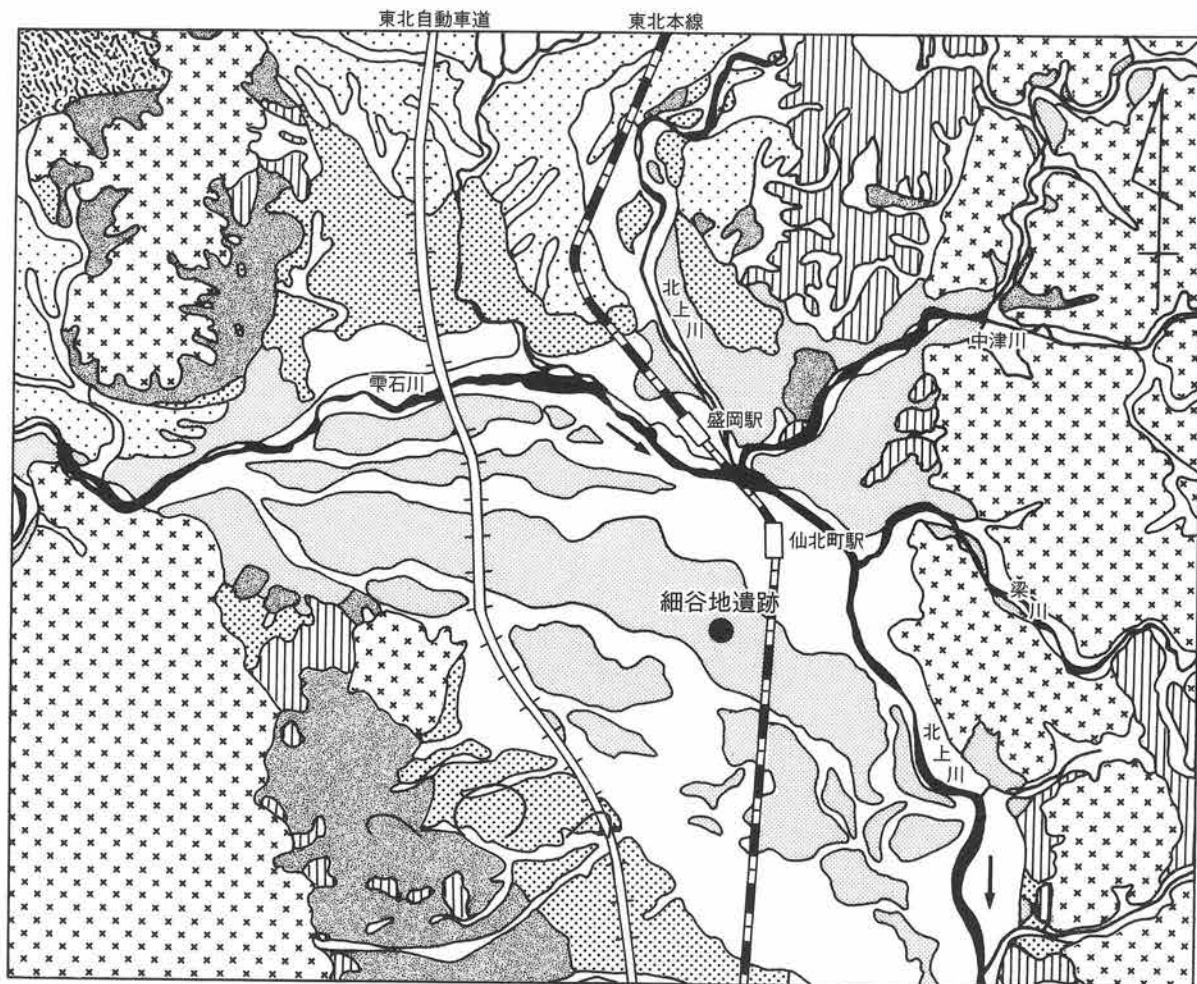
第2図 細谷地遺跡周辺地形図

隣接している。

(2) 遺跡周辺の地形と地質

盛岡市域の中央部を北上川が、支流の雫石川・中津川・築川と合流して南流し、東西に迫る山々に挟まれた盛岡盆地を形成している。市街地はこの盆地の中心部に広がっており、市街地からは、北西側に「南部片富士」や「巖鷲山」と呼ばれる岩手山（標高2,038.2m）、北東側には姫神山（標高1,124.5m）、南東側には北上山地最高峰である早池峰山（標高1,913.5m）を望むことができる。

北上川は県北部の岩手町御堂観音境内にその源を発し、延長243km、流域面積10,720km²、支流数216を数える、東北地方最大の一級河川であり、北上川の西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を涵養し、宮城県石巻湾に注いでいる。この流域は盛岡市北部の四十四田峡谷と一関市狐禅寺峡谷を境にして上・中・下流に分けられ、盛岡市は中流域の上部にあたる。北上川右岸に



第3図 遺跡周辺地形分類図

は新第三紀層の砂岩・凝灰岩を基盤とする台地、扇状地の末端に侵食崖を形成している。

北上川中流域の地形は背後に控える山地構造の違いによって対照的な様相を呈している。新第三系及び火山岩類を主体とする褶曲山地である奥羽山脈は、北上川に注ぐ多くの支流を持ち、それぞれに多量の土砂を供給し、北上川右岸に大小の段丘や扇状地、河岸平野、起伏量の小さい丘陵地が複雑に入り組む扇状地状の広い平坦面を作り出している。これらの平坦面の大部分は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって開析され段丘化したものである。これに対して、老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側では、山地に続く丘陵部縁辺部に小規模な段丘と沖積地が認められるにすぎない。

北上川流域の第四系及び地形の研究を行っている中川久夫らは、中流域の段丘を上部から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類し、中流域北部ではこれらに相当するものとして高位の石鳥谷段丘、中位の二枚橋段丘、低位の花巻段丘・都南段丘に区分している。

細谷地遺跡の所在する北上川中流域北部右岸では、大規模な平坦面と奥羽脊梁山脈から供給される多量の堆積物による扇状地が形成されており、雫石川以南北上川以西には雫石川の下刻・堆積作用により上位から、洪民火山灰層上部以上を載せる段丘、分火山灰層を載せる段丘、沖積段丘が形成されている。低位の段丘面には雫石川の連続する大きな旧河道が4条確認されている。文献資料等によれば、志波城は雫石川の水害が原因で廃絶されたとされており、発掘調査の結果からも志波城北辺部は雫石川の旧河道によりきられて消失していることが確認されている。さらに小規模な旧河道が網目状に入り組んでおり、小規模な自然堤防状微高地を形成している。本遺跡を含めた、古代遺跡の多くは沖積段丘面の微高地や扇状地の縁辺部に位置している。

2 歴史的環境

盛岡市に所在する遺跡は岩手県教育委員会が作成した2000年度版『岩手県遺跡情報検索システム(盛岡地方振興局管内北部・盛岡地方振興局管内南部)』によると716箇所登録されている。第4図には本遺跡を中心とする範囲に所在する40箇所の遺跡分布を示した。

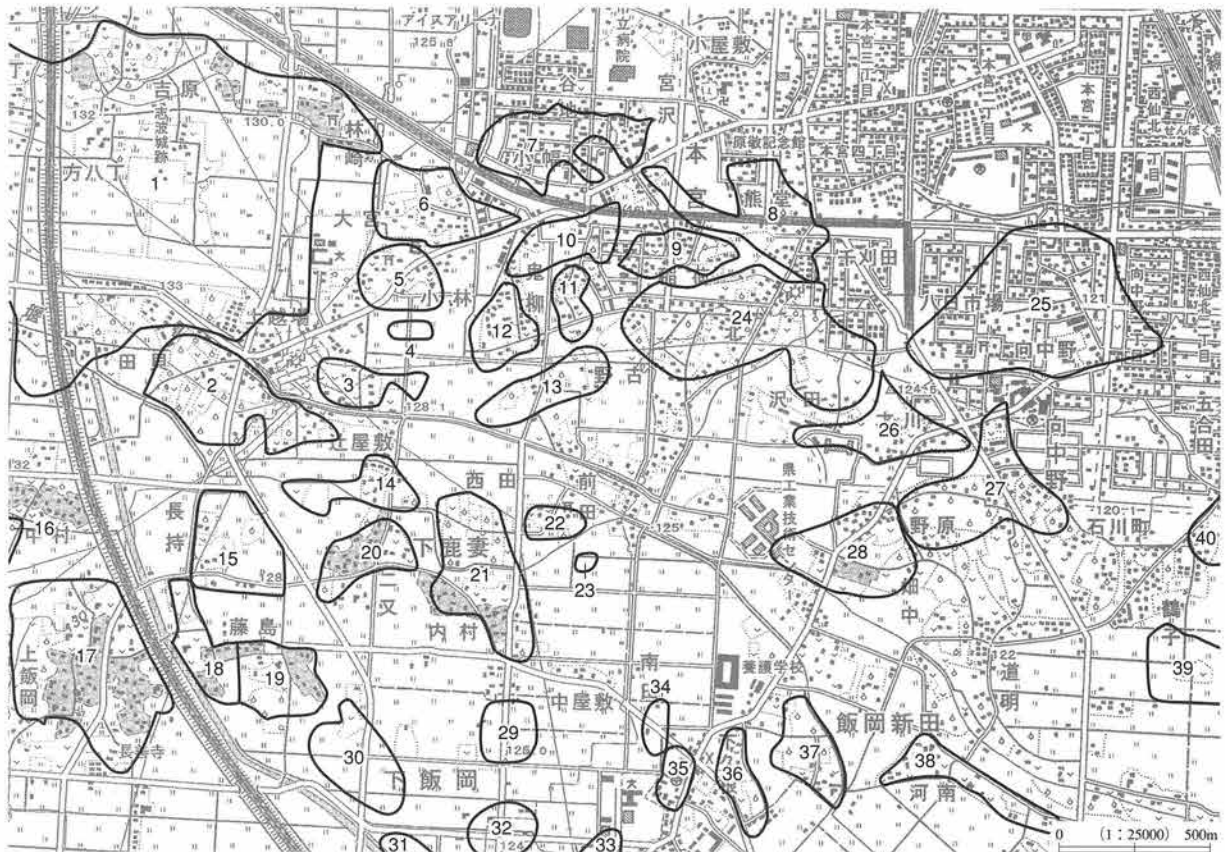
本遺跡を含む雫石川右岸地域は古代以降になると、集落遺跡が多く分布するという特徴が見られる。古代城柵の一つである志波城跡は、雫石川より約2km南に位置する。803年に造営された志波城跡は、廃止時期の記事は文献には見られないが、征夷将軍文屋綿麻呂がたびたび水害を受けるので便地に転移すべきであると奏言しているように、雫石川の水害が影響でその機能を814年までには徳丹城に移したと考えられている。

細谷地遺跡(27)周辺は、平成3年以降の盛岡南新都市開発整備事業等に伴う発掘調査によって、その様相が明らかになりつつある。この事業により調査された遺跡は、大宮北遺跡(6)、小幅遺跡(7)、宮沢遺跡、本宮熊堂A遺跡・本宮熊堂B遺跡(8)、稲荷遺跡(9)、鬼柳A遺跡(10)、野古A遺跡(24)、飯岡沢田遺跡、台太郎遺跡(25)、飯岡才川遺跡(26)、向中野館遺跡、矢盛遺跡(28)が挙げられる。これらの遺跡は、志波城に先行する古墳から奈良時代の集落もしくは徳丹城へ城柵機能が移行した後の9世紀中頃以降の集落遺跡である。志波城存続期間と併行する時期の集落は非常に少なく、廃絶以降に大規模な集落を多く形成するという特徴がみられる。本遺跡も後者の集落として営まれていたことは過年度の調査成果により判明している。平成16年度に発掘調査の行われた向中野館遺跡では志波城存続期間に見られる9世紀前半代の須恵器坏が出土しており、志波城存続期間の数少ない遺跡として注目される。

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	時代	種別
1	小沼	古代(平安)	集落跡
2	石仏	古代	集落跡
3	水門	古代	集落跡
4	小林	古代	集落跡
5	大宮	古代・中世	集落跡
6	大宮北	古代	集落跡
7	小幡	古代	集落跡
8	本宮熊堂	縄文・古代	集落跡
9	稲荷	古代	集落跡
10	鬼柳A	古代	集落跡
11	鬼柳C	古代	集落跡
12	鬼柳B	古代	集落跡
13	野古B	古代	散布地
14	上越場B	古代	集落跡
15	辻屋敷	古代	集落跡
16	堤	縄文・古代	散布地
17	大柳I	古代	集落跡
18	藤島II	平安?	散布地
19	藤島	縄文・平安	集落跡
20	二又	古代・平安	散布地

No	遺跡名	時代	種別
21	西田A	古代	集落跡
22	西田B	古代	集落跡
23	前田	古代	集落跡
24	野古A	古代・平安	集落跡
25	台太郎	古代	集落跡
26	飯岡才川	古代	集落跡
27	細谷地	古代	集落跡
28	矢盛	古代	散布地
29	深淵I	古代・平安	集落跡
30	飯岡林崎II	古代	集落跡
31	飯岡林崎I	古代・平安	集落跡
32	深淵II	古代・平安	集落跡
33	西	古代・平安	集落跡
34	高屋敷I	古代	散布地
35	高屋敷II	古代・平安	散布地
36	下久根I	縄文・古代	散布地
37	石持	古代	散布地
38	夕覚	古代	散布地
39	向中野幅	古代	集落跡
40	南仙北	縄文・古代	散布地・集落跡



2万5千分の1地形図「盛岡・小岩井農場」に加筆

第4図 周辺の遺跡

中世以降は認識されている遺跡数が少ないこともあるのか、古代までのような地域差は見られなくなり、市内に散在する程度に留まる。台太郎遺跡で中世の礎石を伴う建物跡、堀跡、土壇墓群などが確認されている以外は、ほとんどが城館跡である。

近世の遺構・遺物は各遺跡でわずかながらもみられるが、まとまって確認されているのは台太郎遺跡や小幅遺跡など限られている。両遺跡とも掘立柱建物などの遺構が検出されている。（北村）

3 基本層序

調査区は雫石川によって形成された低位段丘（沖積段丘）上に立地しており、基盤の砂礫層をシルト層が覆っている。（第5図、写真図版3）

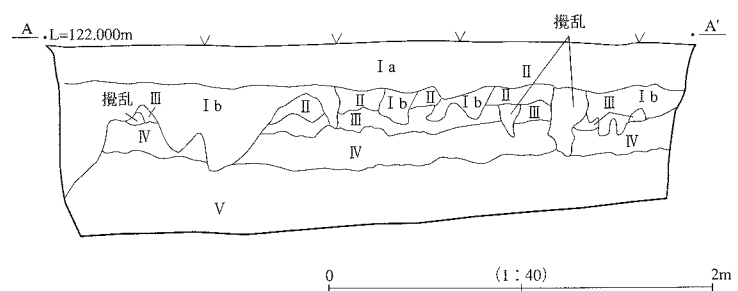
- I a層 黒褐色シルト（10YR2/2） 表土・耕作土 粘性なし しまりややあり 層厚15～30cm
- I b層 黒褐色シルト（10YR2/2） 耕作土 粘性、しまりなし IV層起源の褐色土ブロック～粒を少量含む 現代の耕作土 地点により部分的に認められる 5Nグリッド付近では顕著に見られる
- II a層 黒色シルト（10YR2/1） 粘性なし しまり弱 埋没沢にのみ堆積する 古代の遺物包含層 層厚5～15cm
- II b層 黒色シルト（10YR2/1） II a層より暗い 粘性ややあり しまりややあり 調査区内にあまねく堆積していた可能性が高いが、標高のやや高いところや、畑地は削平されている部分も多い。埋没沢では本層上面が古代遺構の検出面 本層中位に弥生時代焼土遺構の検出面 縄文土器、弥生土器包含層。層厚5～15cm
- III層 暗褐色シルト（10YR3/4） 下位はIV層の影響を受けやや明るい 粘性、しまりややあり 漸移層 II層の削平されている箇所では遺構検出面 層厚5～10cm
- IV層 黄褐色シルト（10YR5/6） 粘性、しまりあり～ややあり 層厚15～20cm 遺構最終検出面
- V層 褐色砂（10YR4/6） 粘性、しまりなし 上位はIV層の影響を受けてやや明るい部分がある 層厚25～40cm
- VI層 褐色砂礫（10YR4/6） V層の褐色砂と円礫の混合層 礫の直径は3～8cm 層厚不明

現状の調査区内はおおむね平坦であるが、もともとは多少の起伏があったと思われるが、削平され、改変を受けていることがわかった。

調査区を北から南に走る2条の埋没沢では、以上の堆積が見られるが、調査区東縁の段丘縁辺部ではII層～IV層が見られず、VI層の砂礫層がI a層直下に見られる箇所もある。縁辺部の標高はもともと現状よりやや高く、上面が削平されたことと縁辺部に礫層が自然堤防状に厚く堆積していることの二つに起因しているものと思われる。また、2条の埋没沢に挟まれた地区では、おおむねI層、II b層、III層、IV層以下の堆積が見られるが、特に畑地として使用されていた部分はII層がかなり削平され、ごく薄くしか残存していないか、IV層まで削平されている箇所もある。

4 これまでの調査

本遺跡は平成8年に盛岡市教育委員会が、土地区画整理事業に伴い試



第5図 基本土層

掘調査を行って以降、平成15年までに11回の試掘調査、本調査が行われている。第4次調査以降の本調査については財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより、調査報告書が刊行されている（第2表）。

平成12年の第4次調査、13年の第5次・第6次調査では、東西に伸びる本遺跡の主に西側計9,337m²を調査している。その結果、調査区東よりの微高地において、平安時代の集落跡、西側の旧河道において、縄文時代の陥し穴状土坑群、近世の遺構を検出した。平安時代の集落跡は竪穴住居跡39棟、掘立柱建物跡4棟、竪穴状遺構、土坑などから構成されており、9世紀後半～10世紀前半に営まれたものである。縄文時代の陥し穴状土坑は旧河道に挟まれた南北二つの微高地に分かれて配置されており、計23基検出された。水辺に集まる動物を対象とした罝猟が行われていたと考えられる。長軸方向が旧河道の方向と平行するものと、直交するものがあることから、これらの方向の違いが時期差を反映している可能性があるのではないかと調査者は報告している。そのほか、この旧河道付近では近世と思われる井戸跡や掘立柱建物跡を検出している。遺物は縄文時代後晩期の土器片、石器、平安時代の土師器、須恵器、あかやき土器、鉄製品、石製品、土製品が出土している。土師器では内面に花弁状の暗文をもつ内黒の土師器坏が1点出土している。

平成15年度に行われた第7次・第8次調査では、第4次調査の南に隣接する区域2,638m²の調査を行い、第4次調査区から連なる平安時代の集落跡を検出した。竪穴住居跡15棟、竪穴住居状遺構1棟、土坑17基のほか、調査区西端で、埋土に十和田a降下火山灰を含む畠状遺構が2箇所と、埋土に十和田a降下火山灰を含む杭列が検出されている。土坑には土器生産に伴うと思われる焼成時に剥離した未成品の土師器甕破片を埋土に多く含む焼土坑が3基含まれている。

以上のように、これまでに行った本遺跡の西側の調査では、縄文時代後晩期と思われる陥し穴状土坑の築かれる狩猟場と近世の民家跡が旧河道に、平安時代の9世紀後半～10世紀前半の集落跡が微高地上に営まれていたことがわかっている。

(金子佐)

引用・参考文献

- 岩手県企画開発室 1974 『北上川系開発地域土地分類基本調査 一日誌』
 1974 『北上川系開発地域土地分類基本調査 一日誌』
 中川久夫ほか 1963 『北上川上流沿岸の第四系および地形』『地質学雑誌』69 pp.163～171

第2表 これまでの調査一覧

調査次数	種類	調査年度	調査主体	報告書	発行年	検出遺構	出土遺物
第1次			盛岡市教育委員会				
第2次	試掘	平成8年度	盛岡市教育委員会				
第3次	不明		盛岡市教育委員会				
第4次	本調査	平成12年度	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集	2003	竪穴住居跡39棟(平安) 掘立柱建物跡6棟(平安4 近世2) 竪穴状遺構5基 土坑112基 陥し穴状土坑23基(縄文) 焼土遺構1基(平安) 溝跡22条(平安近世) 井戸跡2基(近世) カマド状遺構2基 畠間状遺構1基 柱穴状ピット238基	縄文土器(後晩期)・剥片石器・土師器・須恵器・あかやき土器・鉄製品(刀子・釘・鉄鏃・手鎌・足金具)・石製品(砥石・磨石・台石・石錘)・土製品(羽口・土錘・紡錘車)・陶磁器(近世)・古銭(寛永通宝)・木製品(曲げ物・杭)
第5次	本調査	平成13年度	同上	同上	2003		
第6次	本調査	平成13年度	同上	同 第397集	2002		
第7次	本調査	平成15年度	同上	同 第455集	2004	なし	なし
第8次	本調査	平成17年度	同上	同 第454集	2004	竪穴住居跡16棟(平安) 畠状遺構2箇所(平安) 柱列1条(平安) 土器焼成土坑4基(平安) 土坑13基	土師器・須恵器・鉄製品(鉄鏃、刀子、鉸具、鉄鏃)

Ⅲ 野外調査と室内整理の方法

1 野外調査の方法

(1) 調査面積

調査面積は第9次調査が1,835㎡、第10次調査が当初6,678㎡、変更後10,545㎡である。

(2) 調査区の区割設定

細谷地遺跡の区割設定は、盛岡市教育委員会の方針に準じ、平面直角座標第X系を座標変換した調査座標を用いた。細谷地遺跡の調査座標原点をX=-35,000.000、Y=26,000.000（日本測地系）に設け、ここを基点として一辺50mの大グリッドを設定し、さらにこれを一辺2mの小グリッドに区割した。大グリッドは原点から南に算用数字の1・2・3・・・、東にアルファベットのA・B・C・・・と付し、「1A」「2A」のようにあらわした。小グリッドは北から南へ算用数字の1～25、西から東へアルファベットのa～yを付し、「1A1a」「1A1b」のようにあらわした。

実際の区画設定には以下の基準点2点、区画割付杭2点を打設して、これを用いた。

基準杭1 X=-36,180.000 Y=26,660.000 H=121.935 グリッド 4 N16k

(世界測地系値 X=-35,872.314 Y=26,360.402)

基準杭2 X=-36,270.000 Y=26,660.000 H=121.983 グリッド 6 N11k

(世界測地系値 X=-35,962.315 Y=26,360.401)

補助杭1 X=-36,180.000 Y=26,710.000 H=122.290 グリッド 4 O16f

(世界測地系値 X=-35,872.314 Y=26,410.401)

(3) 粗掘り・遺構検出

はじめに調査区内に試掘トレンチを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面を確認した。埋没沢状の地形部分を除いてⅡ層及びⅢ層が削平されているか、耕作のため攪乱が激しいことがわかり、重機（バックホー）を用いて表土および攪乱層を除去した。南側の一部についてはⅠ層を重機で除去し、人力でⅣ層まで掘り下げた。表土除去後、人力で鋤簾、移植ベラを用いて遺構の検出を行った。

(4) 遺構の命名

検出された遺構は、検出順に○号住、○号土坑などと命名したが、報告書では盛岡市教育委員会の方法に準じ、以下のとおりにつけなおしている。野外調査、室内整理ともに旧遺構名で行っており、図面表記、遺物の注記などは旧遺構名である。なお、以下の遺構名によらない柱穴状土坑についてはPPとした。また、本報告書中、竪穴住居跡平面図、写真図版、及び遺物図版については旧遺構名も併記した。遺構名対照表を掲げておく。(第3表)

竪穴住居跡・・・RA 掘立柱建物跡・・・RB 土坑・・・RD 焼土遺構・・・RF

溝跡・・・RG その他の遺構・・・RZ

第3表 遺構名対照表

竪穴住居跡		報告遺構名	旧遺構名	報告遺構名	旧遺構名	報告遺構名	旧遺構名
報告遺構名	旧遺構名	RA102	27号住	RD186	23号土坑	RG024	2号溝
RA052	15号住	RA103	40号住	RD187	44号土坑	RG025	3号溝
RA053	32号住	RA104	22号住	RD188	53号土坑	RG026	4号溝
RA054	30号住	RA105	41号住	RD189	58号土坑	RG027	19号溝
RA055	16号住	RA106	42号住	RD190	9号土坑	RG028	7号溝
RA056	1号住	RA107	21号住	RD191	10号土坑	RG029	5号溝
RA057	17号住	RA108	44号住	RD192	15号土坑	RG030	18号溝
RA058	5号住			RD193	14号土坑	RG031	9号溝
RA059	49号住			RD194	7号土坑	RG032	6号溝
RA060	9号住			RD195	25号土坑	RG033	11号溝
RA061	25号住			RD196	73号土坑	RG034	8号溝
RA062	37号住			RD197	6号土坑	RG035	10号溝
RA063	23号住			RD198	16号土坑	RG036	12号溝
RA064	52号住			RD199	5号土坑	RG037	14号溝
RA065	54号住			RD200	19号土坑	RG038	17号溝
RA066	31号住			RD201	54号土坑	RG039	13号溝
RA067	35号住			RD202	72号土坑	RG040	16号溝
RA068	50号住新			RD203	35号土坑	RG041	20号溝
RA069	50号住旧			RD204	33号土坑	RG042	22号溝
RA070	59号住			RD205	31号土坑		
RA071	53号住			RD206	32号土坑		
RA072	56号住			RD207	30号土坑		
RA073	11号住			RD208	34号土坑		
RA074	12号住			RD209	46号土坑		
RA075	48号住			RD210	47号土坑		
RA076	33号住			RD211	39号土坑		
RA077	19号住			RD212	68号土坑		
RA078	18号住			RD213	70号土坑		
RA079	20号住			RD214	48号土坑		
RA080	2号住			RD215	49号土坑		
RA081	13号住			RD216	40号土坑		
RA082	57号住			RD217	50号土坑		
RA083	58号住			RD218	8号土坑		
RA084	55号住			RD219	56号土坑		
RA085	45号住			RD220	57号土坑		
RA086	6号住			RD221	59号土坑		
RA087	7号住			RD222	2号墓塚		
RA088	8号住			RD223	1号墓塚		
RA089	47号住						
RA090	46号住						
RA091	51号住						
RA092	10号住						
RA093	43号住						
RA094	34号住						
RA095	29号住						
RA096	24号住						
RA097	38号住						
RA098	36号住						
RA099	28号住						
RA100	26号住						
RA101	39号住						

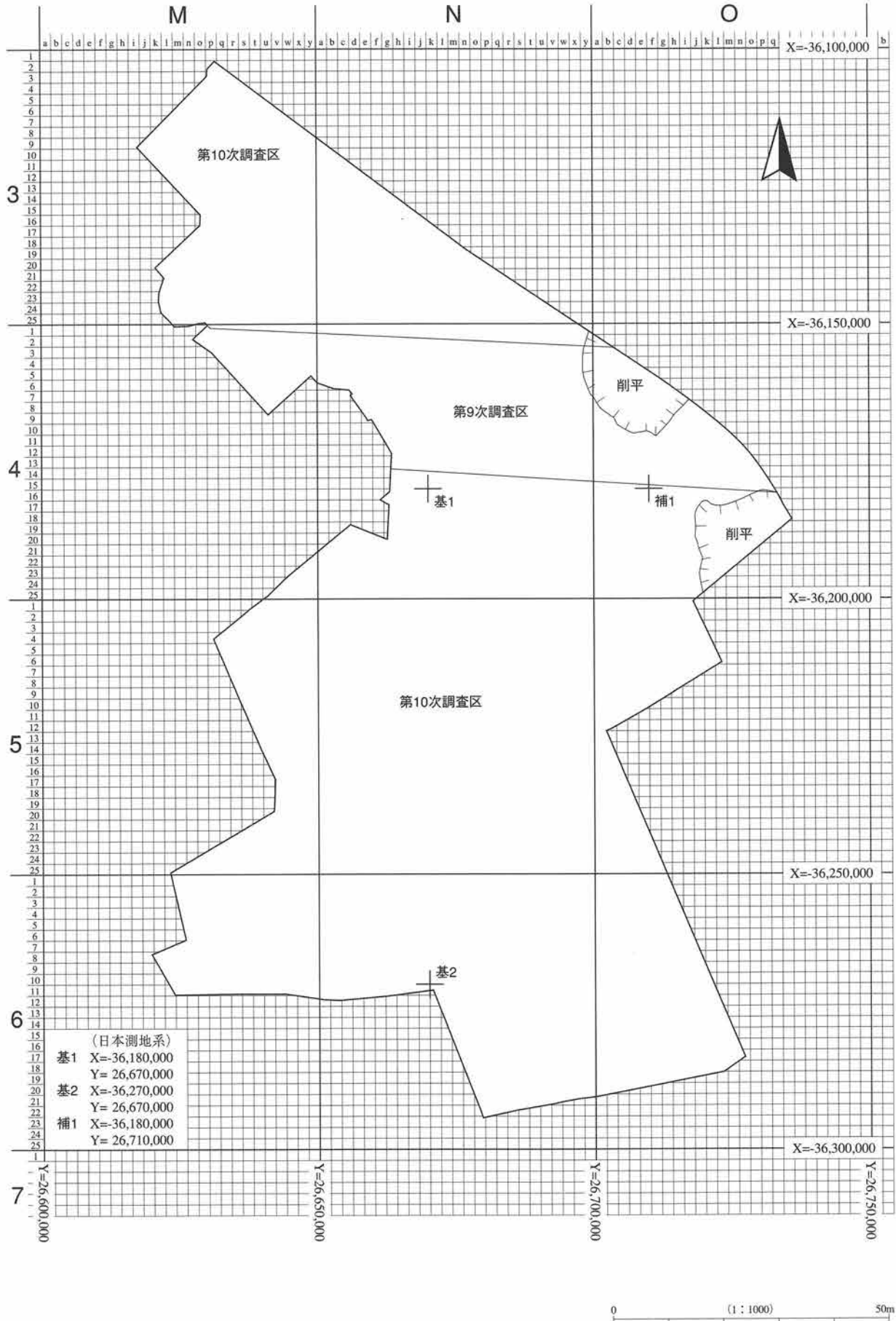
掘立柱建物跡	
報告遺構名	旧遺構名
RB007	1号掘立柱建物跡
RB008	2号掘立柱建物跡

土 坑	
報告遺構名	旧遺構名
RD150	18号土坑
RD151	21号土坑
RD152	17号土坑
RD153	4号土坑
RD154	3号土坑
RD155	7号焼土遺構
RD156	67号土坑
RD157	8号焼土遺構
RD158	4号焼土遺構
RD159	5号焼土遺構
RD160	11号焼土遺構
RD161	13号土坑
RD162	55号土坑
RD163	26号土坑
RD164	36号土坑
RD165	52号土坑
RD166	51号土坑
RD167	22号土坑
RD168	11号土坑
RD169	12号土坑
RD170	62号土坑
RD171	61号土坑
RD172	60号土坑
RD173	63号土坑
RD174	45号土坑
RD175	64号土坑
RD176	71号土坑
RD177	65号土坑
RD178	37号土坑
RD179	38号土坑
RD180	74号土坑
RD181	42号土坑
RD182	43号土坑
RD183	41号土坑
RD184	69号土坑
RD185	24号土坑

焼土遺構	
報告遺構名	旧遺構名
RF003	3号焼土遺構
RF004	9号焼土遺構
RF005	2号焼土遺構
RF006	10号焼土遺構
RF007	6号焼土遺構

溝 跡	
報告遺構名	旧遺構名
RG022	21号溝
RG023	1号溝

不明遺構・その他の遺構	
報告遺構名	旧遺構名
RZ011	1号不明遺構
RZ012	2号不明遺構
RZ009	1号カマド状遺構
RZ010	1号畝間状遺構



第6図 グリッド配置図

(5) 精 査

竪穴住居跡の場合はQ1～Q4に4分割したラインに沿って十字に幅25～40cm程度のトレンチをあけ、土層の堆積状況を把握した上で、上層から1層ずつ掘り下げ、埋土中および貼り床内の遺物は層ごとに取り上げた。床面や住居内の土坑などから出土した遺物はそれぞれ連番をつけて取り上げている。

土坑は2分割して、原則として底面などの遺物は残して埋土で取り上げ、土層記録後に、残る半分を精査する際に層ごとに取り上げた。

焼土やカマド状遺構は検出状態の記録を作成後に断ち割り、断面図を作成した。

実測は9月末までは簡易遣り方測量で行った。10月からは住宅等の立ち退き期限の関係で短い期間で多くの遺構を精査する必要から、実測の時間を短縮するため、平面図、断面図ともに写真解析測量(株式会社セビラス)を導入して行った。現場で作成した実測図は平面図、断面図ともに基本的に1/20で作成したが、カマドや焼土、灰層があるものに関しては1/10で作成している。

写真撮影は、6×7版のモノクローム1台と35mm版モノクローム1台、35mm版リバーサル1台、デジタルカメラの4台で行った。原則として報告書掲載用の写真はすべてのカメラを使ったが、遺物出土状況のアップ、柱穴などに関しては6×7版、35mm版リバーサルを省略したものもある。デジタルカメラは、すべてのカットについて撮影したほか、メモ的な写真にも活用している。デジタルカメラの写真は主に遺跡報告会や現地説明会資料、遺跡情報(財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターホームページに掲載)などに使用している。航空写真撮影は11月10日(木)セスナ機により行ない、6×7版、35mm版リバーサルの2種類を撮影した。

(6) 普 及 活 動

遺跡の現地説明会は近隣の向中野館遺跡、飯岡才川遺跡と合同で10月22日(土)10時から行った。当日はあいにくの雨模様にもかかわらず、110名の参加者があった。また、前述のホームページにおいても、発掘調査の進捗状況や精査中の遺構について随時情報を公開した。

2 室 内 整 理

(1) 遺 物 の 整 理

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器が当センターの収納用大コンテナ(40×30×30cm)で1箱、土師器・須恵器が13箱、弥生土器が9号袋で1袋、石器・石製品が大コンテナ4箱、鉄製品が大コンテナ0.3箱、古銭、土製品が大コンテナ0.2箱である。これらの水洗は野外調査の雨天時や室内整理作業員が行った。

その後、土器については袋ごとに遺物番号を付け、重量を計測した上で、手書きやジェットマーカーで注記を行い、接合して、掲載遺物を選別した。接合は、土師器については隣り合った数棟の竪穴住居跡及び他の遺構内で行った。須恵器は遺跡全体で遺構間接合を行っている。

土器は原則として、口径、底径が1/4以上あるものを掲載したが、破片であっても、他に遺物がない場合、遺構内で他に例のない種類の遺物については掲載している。これらは、必要に応じ石膏で復元後、実測、底部等の採拓、石膏部分の彩色、写真撮影、実測図トレースを行った。図版中の表現は凡例のとおりである。

石器は全点登録した。剥片や破片は黒曜石製のものは全点、それ以外のものは主に打点を有し、素

材形状の分かるものを掲載した。礫は炭化物等付着物の確認できる資料を掲載した。上記以外の石器・石製品は全点掲載した。

鉄製品は全体の形状が想定できず、現代のものと考えられる資料以外を全点掲載した。まず、簡単に泥を落とした後、ソフトエックス線撮影を行い、もとの形状を確認した。そのうえで、錆を落とし、実測・トレース・写真撮影を行った。その後、岩手県立博物館に委託し、保存処理を行った。うち数点については成分分析を行っている（付編4参照）。

土製品は全点掲載し、実測・トレース・写真撮影を行った。

古銭は近代以降のものを除き、掲載した。錆を落とし、可能なものについては採拓し、写真撮影・計測を行った。

以上の過程を経て作成されたトレース図は株式会社セビアスに委託し、デジタルデータ化した上で掲載順に並べ、遺物図版を作成している。

（2）遺構実測図の整理

手作業で実測した図面は、株式会社セビアスによりデジタルデータに変換後、平面図、断面図を照合し必要に応じ合成して、版組みを行った。また、写真解析による図面も図化した箇所の点検等を経て、版組みを行った。いずれの場合も実測原図、写真解析のオルソ図、解析図は番号を付し、台帳を作成して収納した。図版中の、焼土、炭等、表現は凡例のとおりである。

（3）写真類の整理

撮影した遺構写真は、6×7版モノクローム、35mm版モノクローム、35mm版リバーサルの種類ごとにアルバムに整理し、撮影カード順の写真台帳を作成した。航空写真は6×7版及び35mm、写真図版は6×7版を主に選んで、株式会社セビアスにより焼き付けたプリントをデジタルデータ化し、写真図版を作成している。

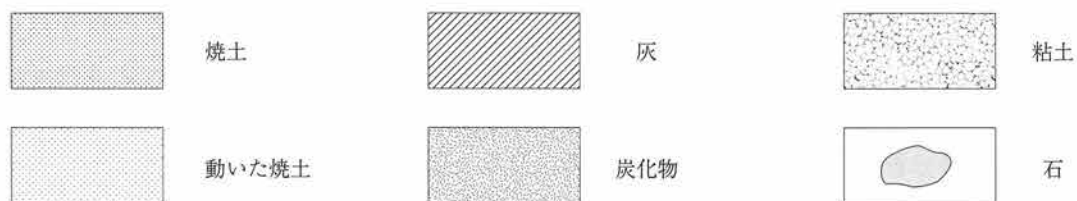
遺物写真は、当センターの写真技師により原則として1点ごとに撮影番号を付してデジタルカメラでRAWモード撮影した。これらのデータから株式会社セビアスに委託し、掲載番号順に写真図版を作成した。

（金子佐）

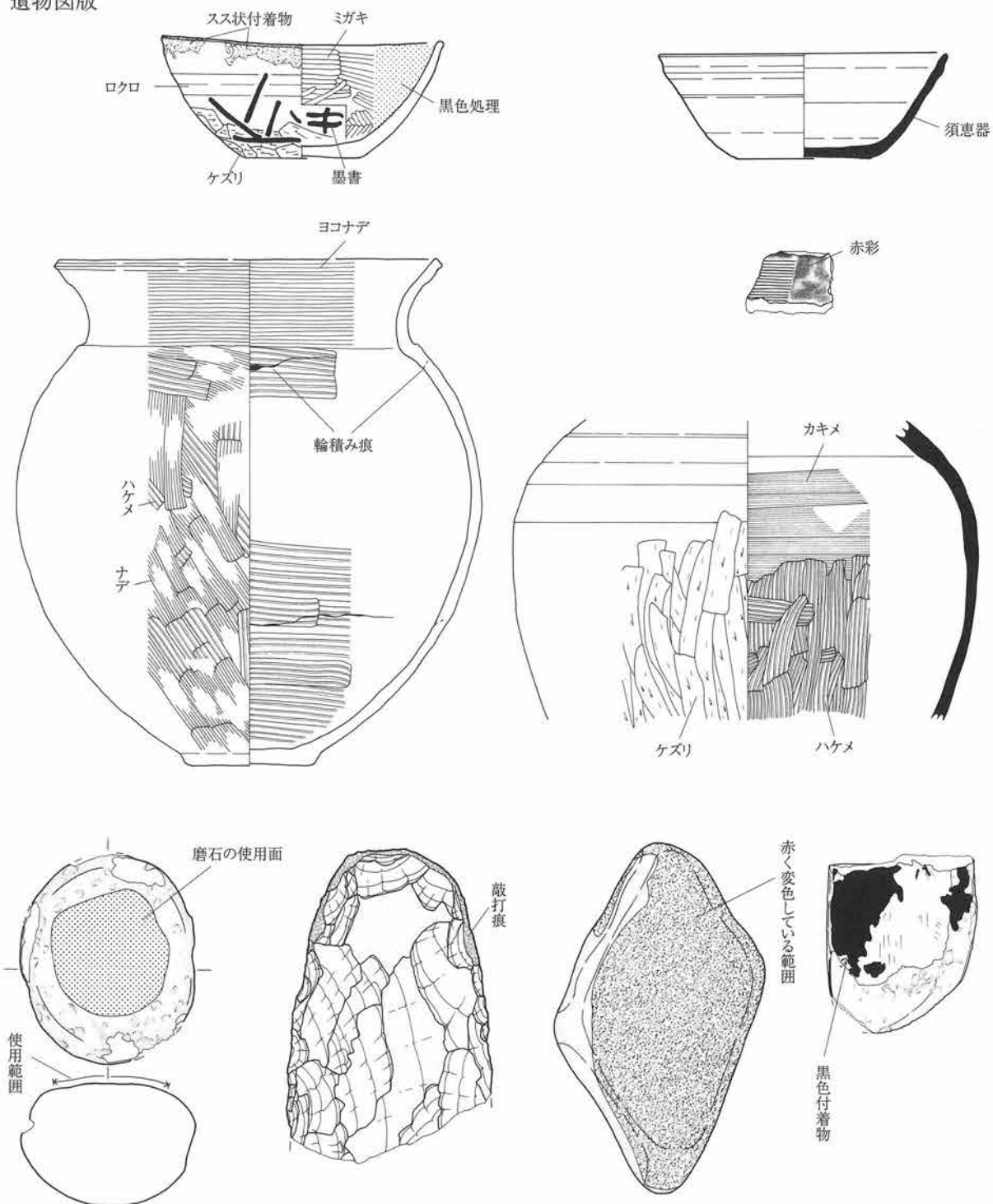
凡 例

1. 本報告書に掲載した遺構図の方位は平面直角座標第X系の座標北を、遺構図の水糸レベルは海拔高度を示す。
2. 遺跡内に設けた基準点の成果は、日本測地系における値である。
3. 遺構図の縮尺は、住居跡1/50であるが、カマドは必要に応じ1/25で掲載した。その他は1/40だが、土壌の堆積状況などにより、1/20にした例もある。また柱穴群の平面図は、1/80である。
4. 層名は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。
5. 土層の色調は、農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。
6. 遺物実測図の縮尺は、剥片石器2/3、礫石器1/3、1/4、1/6、土器類1/3、鉄製品・土製品1/2、銭貨は1/2である。
7. 遺物写真図版の縮尺は、遺物実測図の縮尺にほぼ準じている。
8. 本文中、竪穴住居跡の主軸方向はカマド煙道の方向である。

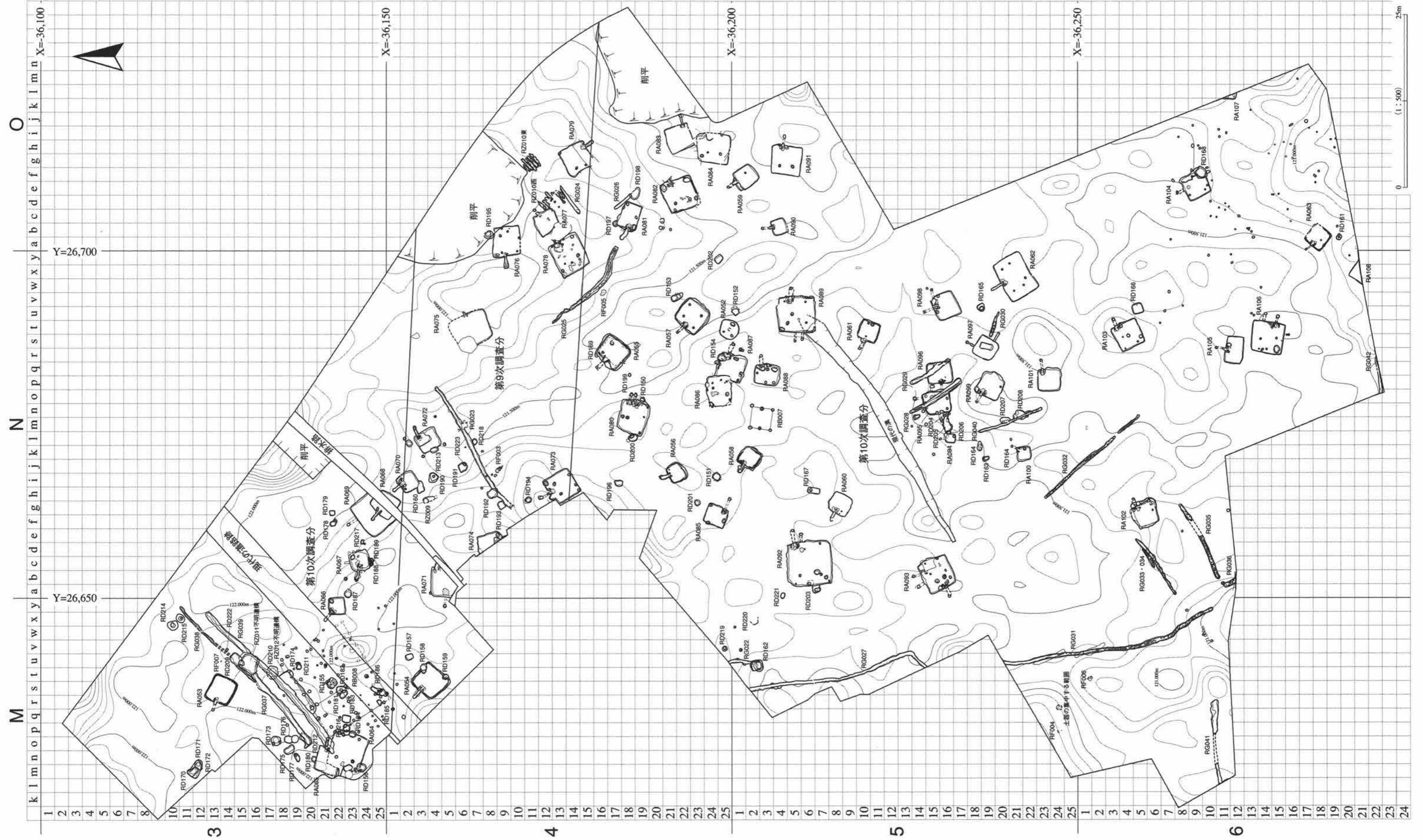
遺構図版



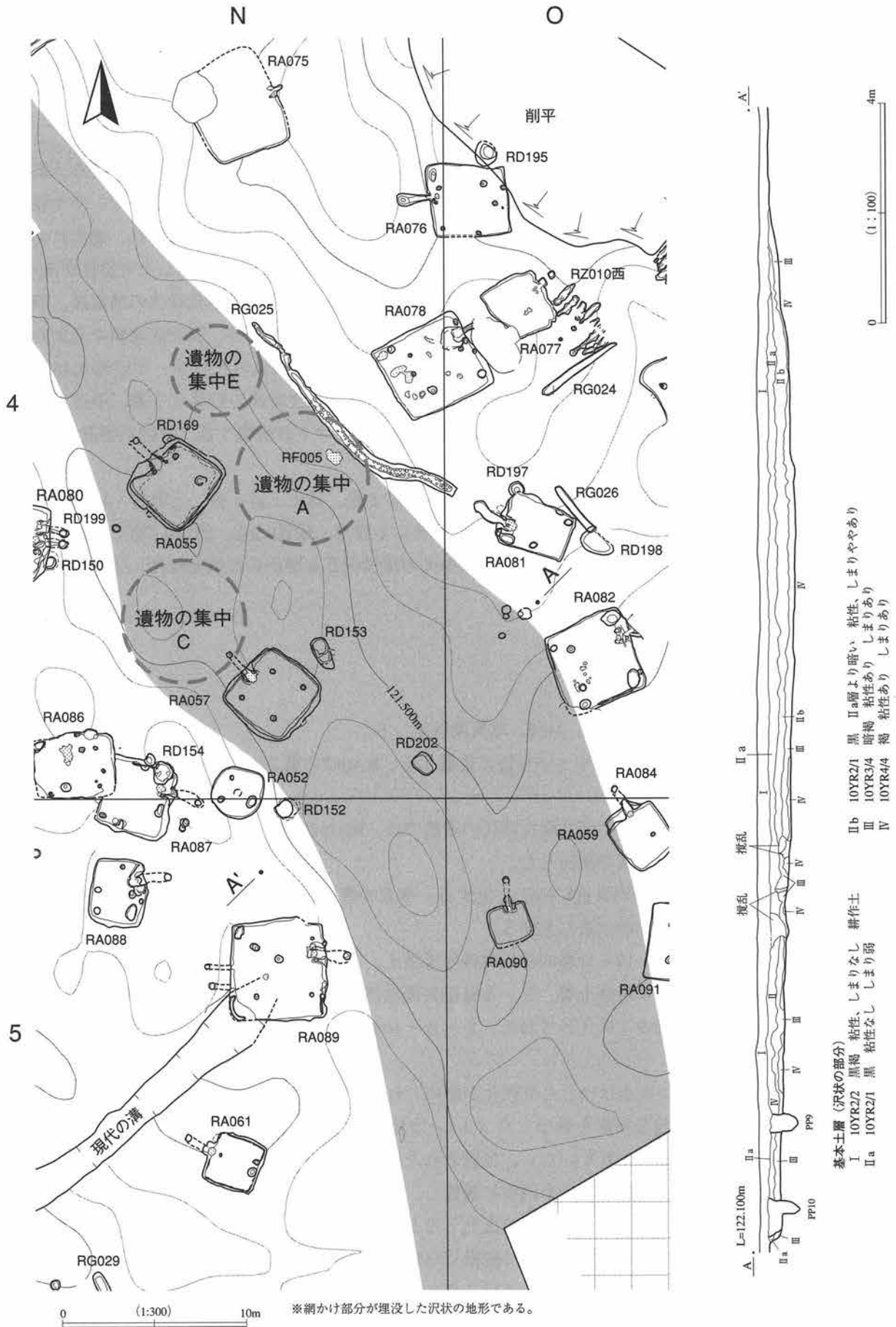
遺物図版



第7図 実測図凡例



第8図 遺構配置図



第9図 遺物集中区と沢状地形

Ⅳ 検出された遺構と遺物

1 調査の概要

今回の細谷地遺跡第9次・第10次調査の調査区は一見平坦であるが、表土を除去したところ、調査区中央と西端に南北方向の埋没沢状の凹みがあり、加えて、調査区東縁が段丘の縁辺部で、やや標高が高くなっている。また、2条の埋没沢に挟まれた箇所は若干標高が高かったと思われ、過去にはやや起伏のある地形であったと思われる。このような地形が各期の集落の形成を規制した可能性がある。調査区中央の埋没沢西側で縄文時代晩期前葉の集落跡、この埋没沢に沿って奈良時代の集落跡、調査区西側の埋没沢周辺と調査区北東の段丘縁辺を除く全域で平安時代の集落跡、調査区北側で近世の民家跡を検出している。遺構総数は竪穴住居跡57棟（縄文時代1棟、奈良時代11棟、平安時代45棟）、掘立柱建物跡2棟（平安時代1棟、近世1棟）、土坑74基（うち縄文時代の貯蔵穴3基、中近世以降の墓壇2基）、焼土遺構5基、溝跡21条、畝間状遺構1箇所、カマド状遺構1基、性格不明遺構2基、柱穴状土坑137個である。

出土土器は大コンテナ16箱、220kgで、内訳は縄文土器1箱、弥生土器1袋、土師器・須恵器13箱である。そのほか、石器・石製品4箱、金属製品0.3箱、土製品・銭貨0.2箱、鉄滓0.1箱である。ほとんどが、遺構内からの出土遺物であるが、調査区中央の埋没沢Ⅱa層からは縄文時代、奈良時代、平安時代の土器22.1kgが出土している。

2 竪穴住居跡

RA052竪穴住居跡（15号住）（第10、11図、写真図版4、5）

＜位置＞調査区中央部4 N25 s グリッド付近に位置する。RA087の東2 m、RA057の南2 m、RA088の北東6 mに位置する。

＜重複関係＞重複関係はないが、同じ縄文時代の遺構では、RD152から0.75mの地点に位置する。

＜検出面＞Ⅱ層下位～Ⅲ層上面で検出した。

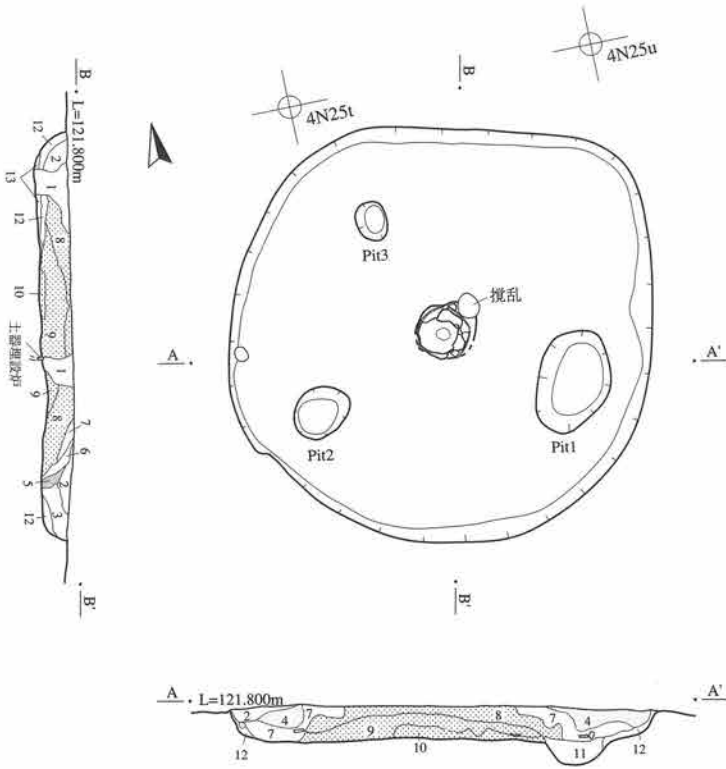
＜規模・平面形状・方向＞正円に近い円形を呈する。南北の直径が2.72m、東西の直径が2.68mである。壁は深さ18cm程度で緩やかに立ち上がる。

＜埋土＞12層に細分される。12・13層の住居廃絶後堆積土、8・9・10層人為堆積土、7層黒色土堆積土、7層上面に炭化材、4層焼土層、2・3層焼失後堆積土、1層攪乱層である。7層は住居北側で一部砂質土の5層・6層の下に入っており、8・9・10層の一連の人為堆積層に関わるものと考えられる。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面はほとんど硬化が認められず、掘り方・貼り床も認められない。

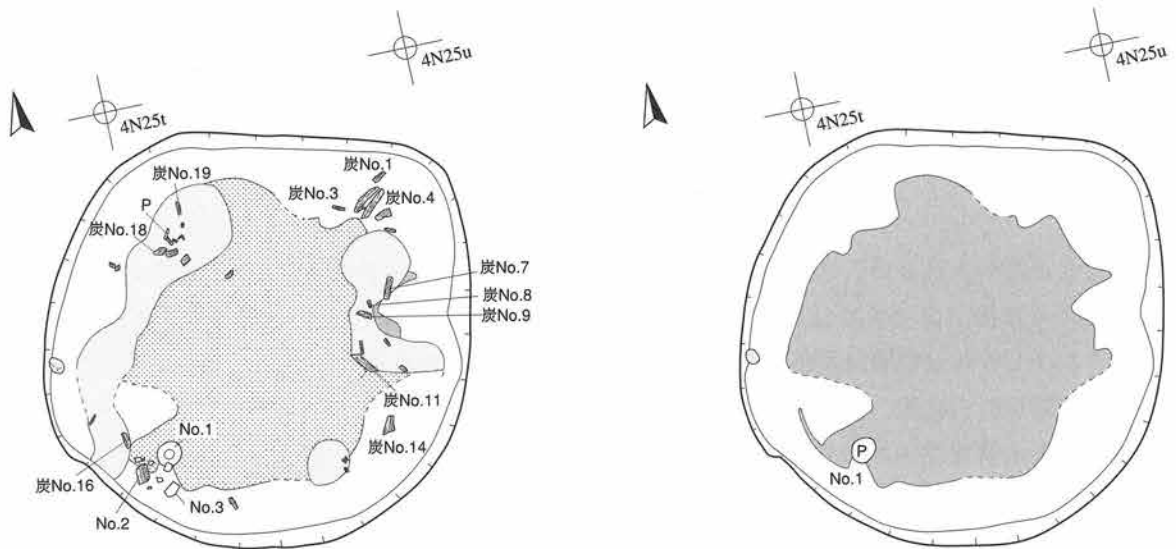
＜炉＞住居中央床面に土器埋設炉を検出した（1）。堆積土は暗褐色土単層で構成され、焼土は確認されなかった。炭化材も検出されていない。埋設された深鉢は胴部中位で上部と下部に分解され、床面を30cm掘り込み、最初に口縁部破片を円形に設置し、口縁部の内側に底部がはめ込まれていた。口縁部破片は大きな破片であったが、接合して復元したところ口縁部が全周せず、また、底部との接点も認められないことから、深鉢使用によって破損した個体を埋設炉に転用したことが推測される。

＜柱穴・付属施設＞柱穴の可能性のあるものは3個検出した。しかし暗褐色土の単層で構成されてお



- 1 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強 しまりやや疎
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性強 しまり密
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性強 しまりやや疎
- 4 7.5YR3/3 暗褐色シルト 粘性強 しまりやや密
- 5 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱 しまり疎 (砂層)
- 6 10YR2/1 黒色シルト 粘性強 しまり中
- 7 10YR2/1 黒色シルト 粘性強 しまりやや密
- 8 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまり疎 礫層
- 9 10YR4/4 褐色シルト 粘性強 しまり密
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性強 しまり密
- 11 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性強 しまり中
- 12 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性強 しまり疎
- 13 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまり中

RA052	Pit1	Pit2	Pit3
径 (cm)	40×46	40×33	27×19
深さ (cm)	20	12	16
埋土・その他	10YR2/2 黒褐色シルト 粘性強 しまり中 褐粒・炭粒少量含む	10YR2/2 黒褐色シルト 粘性強 しまり中 褐粒・炭粒少量含む	10YR2/2 黒褐色シルト 粘性強 しまり中 褐粒・炭粒少量含む

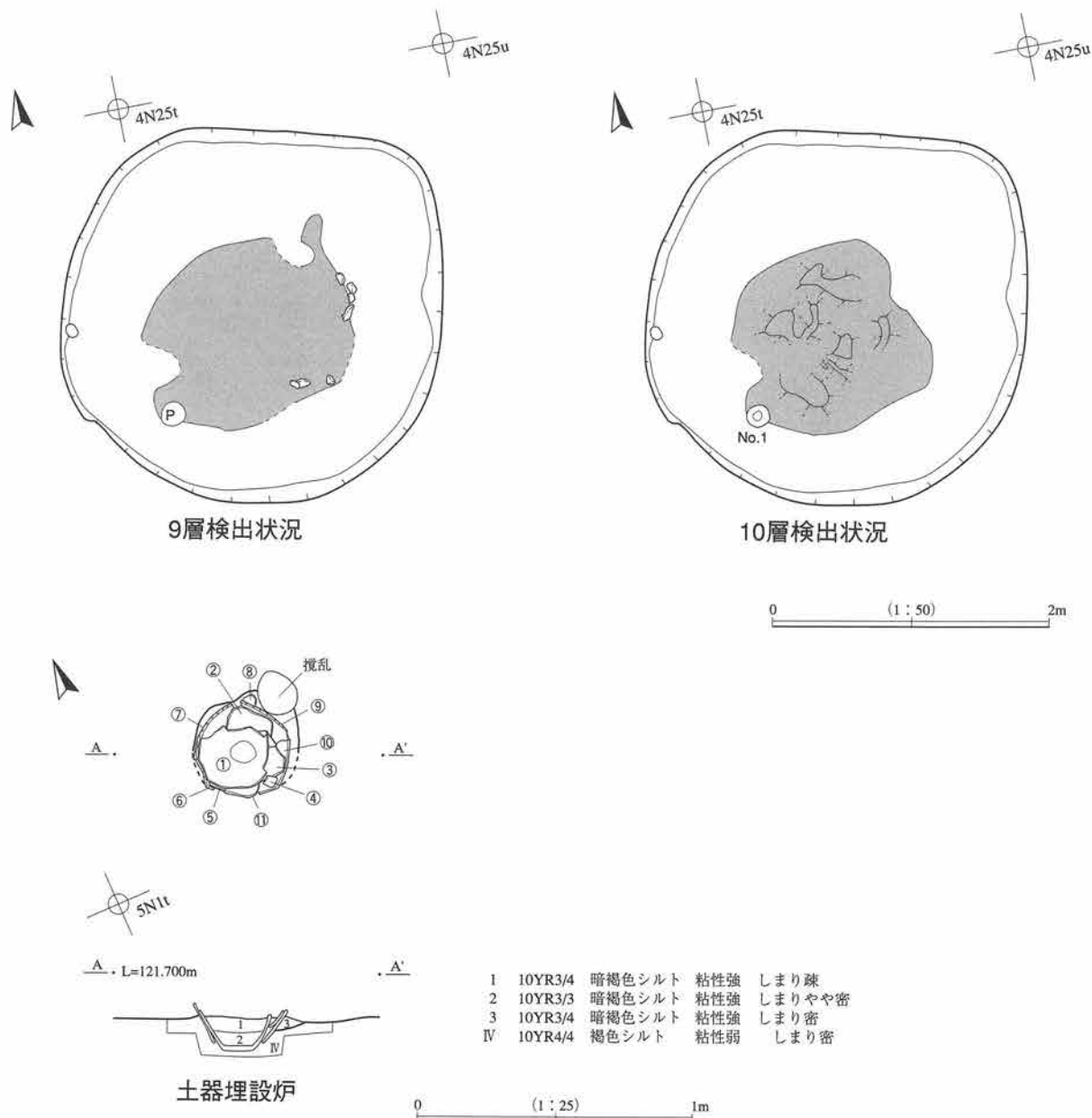


炭化材・焼土検出状況

8層検出状況

0 (1:50) 2m

第10図 RA052竪穴住居跡 (1) (15号住)



第11図 RA052竪穴住居跡 (2) (15号住)

り、柱穴とは言いきれない。この他直径10cm程度の攪乱木根痕を3個確認した。これらは断面にも見えていたように検出面ですで見えていたものであり、当住居に伴うものであるかは断定できない。このような小ピットは調査区全体で多数見つかっており、攪乱の可能性が高い。(八木)

<遺物> (第145、146図、写真図版106、107)

床面中央に土器埋設炉があり、土器は大洞B2式深鉢である。また、8・9・10層に伴うと考えられる土器(6)は逆位で据えられ、掘り込みは確認されなかった。土器は土器埋設炉同様、大洞B2式深鉢である。土器内の土は床面に近い深さから褐色土、暗褐色土と2層に堆積していた。土器底部近くは土の堆積は認められず、空洞となっていた。土は全て採取し洗浄を行ったが、小石が見られる程度で副葬品のような遺物は出土しなかった。土器はこの他にも(6)の土器付近に大洞B2式深鉢口縁部破片(3)や縄文施文のみの鉢が出土している(14)。石器は加工痕にある礫が1点床面から

倒位の状態で出土している(14)。出土した縄文土器の総量は1,511gである。

[土器] 1と6以外は口縁部破片で5点、他は縄文のみの胴部破片が出土している。1・7は土器埋設炉に設置されていた土器で、6は床面に逆位で据えられていた土器、6の近くから5が出土した。3は検出面出土で、6には伴わない。1・2・3・4は全て粗製深鉢で口縁部文様帯に入組三叉文が施文される。口縁端部には緩やかな刻みが施される。1と3の間には間層があり、層位的には時間差が認められるが型式学的には時間差はない。

[石器] 9は錐形石器で、錐部は両面からの調整によって作出され、断面形は菱形を呈する。先端部が欠損している。10はスクレイパーである。背面に大きく原礫面を残し、剥片剥離工程のごく初期のものであることが解る。左側面の腹面と下端の腹面に調整を施して刃部を作出している。9・10は検出面での出土である。14は実測図右側縁に加工痕がみられる礫である。床面直上からの出土である。調整は側縁のごく一部であることと、礫面を広範囲に残存していることから判断すると加工途中の未完成品である可能性が高い。図化したもの以外では埋土から剥片が1点、検出面から剥片が2点出土している。

<時期>床面に据えられていた土器埋設炉および逆位の6は型式学的に時間差が認められないため、住居廃絶後時間を置かず6を据え、上屋が焼失したものと考えられる。

出土土器組成は深鉢・鉢でのみ構成される。1の土器埋設炉は胴部下位にススが帯状に付着し、6の逆位で出土した土器も頸部内面にスス付着が顕著である。なお、6内面のススは年代測定を行い、 $3,080 \pm 30 \text{yrBP}$ の結果を得ている(付篇1)。

RA053竪穴住居跡(32号住)(第12、13図、写真図版6)

<位置>第10次調査区北側の3M14sグリッド付近に位置する。

<重複関係>P P97と重複しており、本遺構は切られている。

<検出面>検出面はⅢ層上面で、黒褐色シルトの広がりとして確認した。

<規模・平面形状・方向>平面形は隅丸方形で、規模は $4.00 \times 3.80 \text{m}$ である。壁高は最大32cm残存している。主軸方向は $N-62^\circ-W$ である。

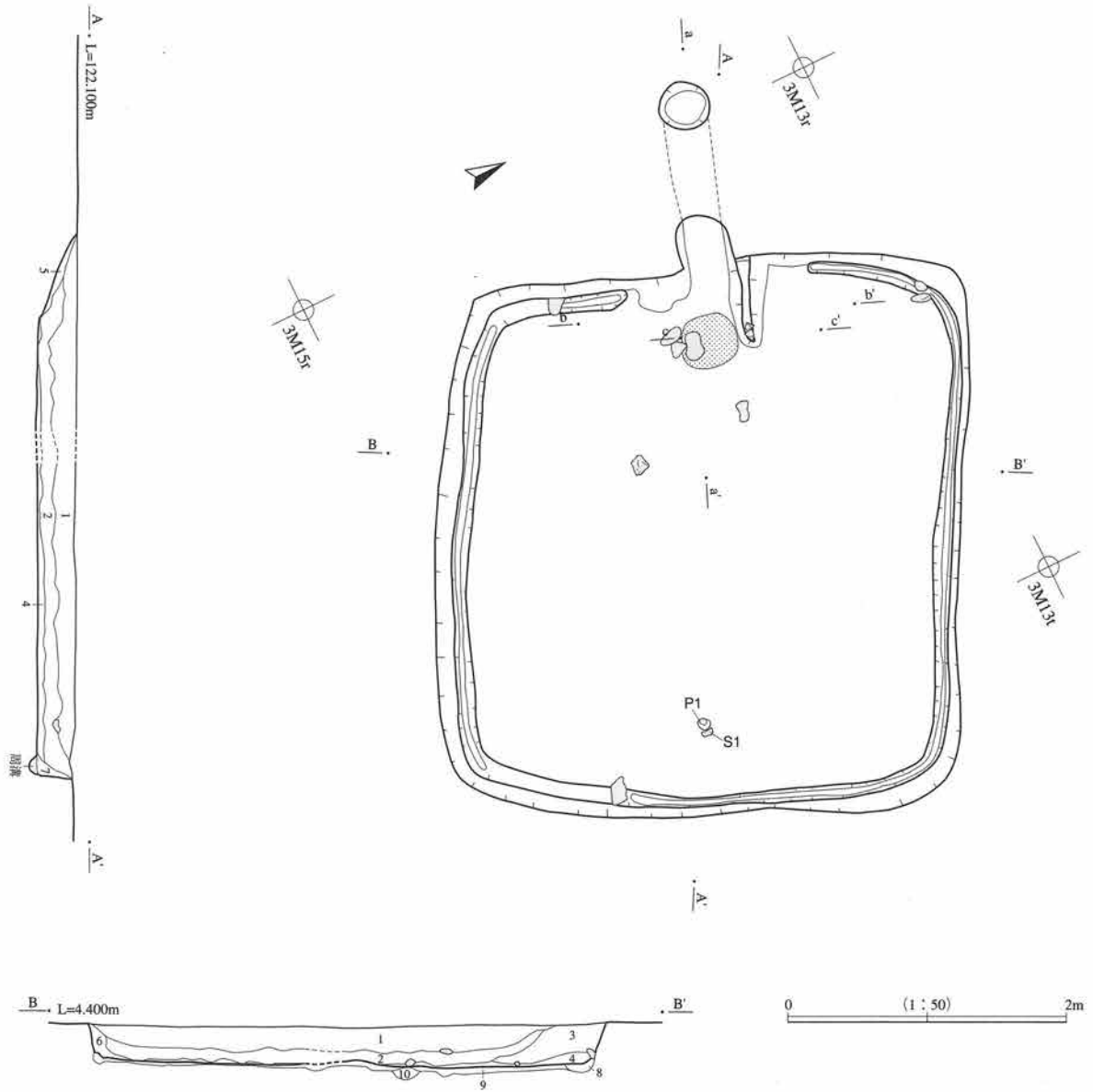
<埋土>埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とし、色調や地山の混入具合により7層に分層した。全体的に直径2～3cmの礫の混入が見られるものの、その他の夾雑物が少なく、レンズ状もしくは三角形の堆積状況を呈しており、自然堆積と捉えられる。壁周辺にはⅣ層に起因すると考えられる堆積土が確認され、壁の崩落土と認識した。なお、Q1とQ4の1層には十和田a火山灰と考えられる灰白色パミスがブロック状で散在している。

<床面・掘り方・貼り床>地山黄褐色シルトブロックを含む黒褐色シルトの掘り方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。床面の硬化が顕著な部分は確認されない。

<カマド>北西壁中央に設置され、煙道方位は主軸方向より西に8度振れる。袖の残りは悪く、北側に袖の構築土と考えられる地山黄褐色砂質シルトが浅く残存している。これらの構築土の上には垂角礫が残置しており、これらの礫を芯材に用いたものと推察される。燃焼部底面には $41 \times 40 \text{cm}$ の範囲の焼成面が形成される。燃焼部には礫が出土しているが、支脚は確認されていない。煙道の全長は100cmで緩やかに下降しながら先端の $37 \times 35 \text{cm}$ 、深さ45cmの煙出し孔に向かって削り貫かれている。

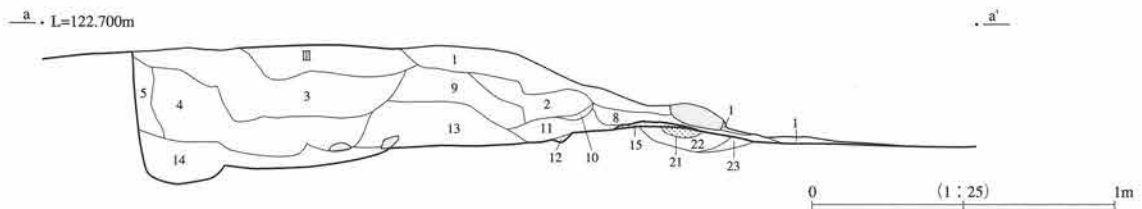
<柱穴・付属施設>カマド周辺及び南東隅の一部を除く壁際に周溝を検出した。埋土は黒褐色シルトの単層である。周溝の切れている南東隅の部分にはピットなどは確認されなかったが、出入り口と考えたい。(北村)

2 竪穴住居跡



A-A'・B-B'

- | | | | | |
|----|-----------|----|--------------------|---------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なく、しまり中 | 礫少量、灰白色バミス小ブロック少量含む |
| 2 | 10YR2/1 | 黒色 | 粘性ややなし〜中、しまり中〜ややなし | |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なく、しまりややなし | |
| 4 | 10YR2/2.5 | 黒褐 | 粘性なく、しまりやや有 | |
| 5 | 10YR2/2.5 | 黒褐 | 粘性なく、しまりやや有 | IV層粒極少量含む |
| 6 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なく、しまり中 | IV層粒少量含む |
| 7 | 10YR5/6 | 黄褐 | 粘性なく、しまりややなし | 黒褐色シルトとの混合土 |
| 8 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なく、しまりややなし | |
| 9 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なく、しまり有 | IV層小ブロック含む |
| 10 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なく、しまり中 | V層が層状に見られる |



第12図 RA053竪穴住居跡 (1) (32号住)



第13図 RA053竪穴住居跡(2) (32号住)

<遺物> (第146図、写真図版107)

土器の出土量は229gで、そのほとんどが埋土からの出土である。そのうち土師器高坏(15)が復元された。15はQ2の2層から正位の状態で出土した。上記以外に土師器甕の体部片が出土しているが、小破片のため掲載していない。

[土器] 15の土師器高坏は体部外面に段を持たない。内面は酸化して黒色処理がとんでいる。脚部の柱状部は中空で、裾部は八の字状にひらく。

<時期>出土遺物から判断すると8世紀後半～末(奈良時代)に属すると考えられる。

RA054竪穴住居跡(30号住)(第14図、写真図版7)

<位置>調査区北部の4M3sグリッド周辺に位置する。

<重複関係>東壁がRD158、南壁がRD159と重複し、本住居跡の方が古い。

<検出面>Ⅲ層である。

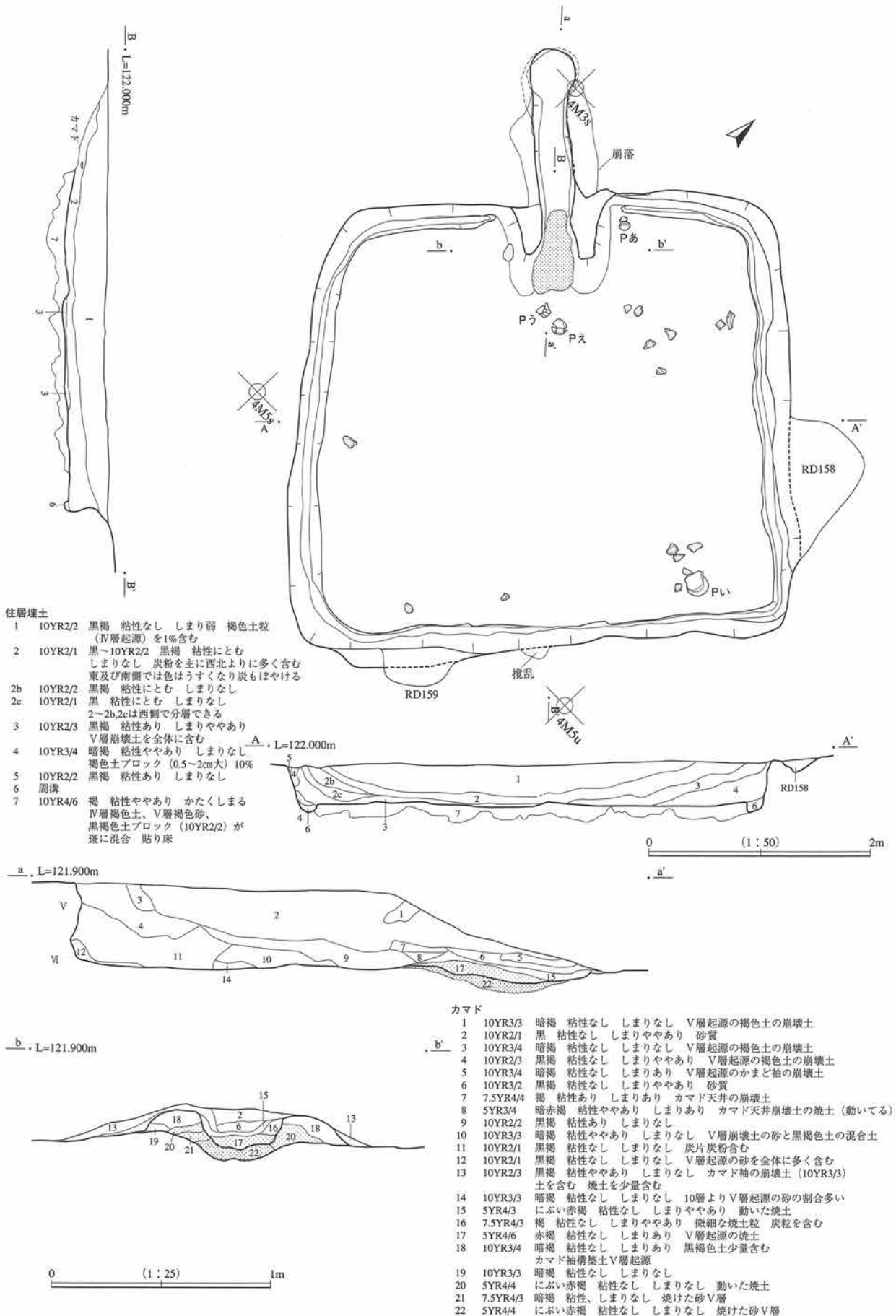
<規模・平面形状・方向>一辺の長さ4.50×4.22m、壁高37cmの隅丸方形である。方向はN-46°-Wである。

<埋土>5層に細分され、最下層はV層起源の褐色土ブロックやV層崩壊土を含む暗褐～黒褐色土、中位に炭粉を多く含む黒色土、上層は褐色土粒を含む黒褐色土である。中位の黒色土層に含まれる炭粉は西側、北側に多く、東側、南側には少ない。自然堆積と思われる。

<床面・掘り方・貼り床>床は平坦で固くしまっている。貼り床は南壁際のⅥ層が露出している部分を除き施される。掘り方は特に深浅はなく一様に凹凸がある。Ⅳ層の褐色土、Ⅴ層の褐色砂、黒褐色土ブロックが斑に混合した褐色土を貼って床としている。

<カマド>北西壁のほぼ中央に位置する。天井は失われており、左右の袖が残っている。袖はⅣ層起源の褐色土に黒褐色土が若干混入する暗褐色土である。燃焼部焼土は72×38cmの範囲で検出されている。カマド袖及び焼土を断ち割ったところ、焼土は新旧2層にわたって形成され、袖構築土の中にも焼土層が検出されたことから、古いカマドを修理して使用しているようである。焼土の厚さは新旧ともに5cm程度である。煙道は掘り込み式のものであり、長さ1.45mである。底面は平坦で、煙出しに

2 竪穴住居跡



第14図 RA054竪穴住居跡 (30号住)

至ってもほぼ同じ標高である。

<柱穴・付属施設>柱穴は検出されなかった。壁際に壁溝が周る。幅4～10cm、深さ8cm程度である。
(金子佐)

<遺物> (第146、147図、写真図版107)

土師器坏、高坏、甕が出土した。カマド前の床面から土師器甕? 甗? (Pう 20) と高坏 (Pえ 17)、カマド右袖の壁際床面から土師器高坏 (Pあ 18)、住居跡南東壁際埋土中位から土師器甕 (Pい 19) が出土した。また、住居北東床面及び南東壁際からこぶし大の礫が出土している。出土した土器の総量は1,436gである。

[土器] 16の土師器坏は、断片的な資料のため、体部外面の段や稜の有無は不明である。17の土師器高坏は坏部の体部外面に段をもつものである。口唇部は丸みを帯びている。裾部を欠損している。18の土師器高坏は坏部の体部外面に段をもつものである。口唇部は丸みを帯びている。19の土師器甕の口唇部は面取りされ、角張っている。20は小形の甕もしくは甗と考えられる。長胴形で、頸部に段を持たない。

[石器] 21は楕円形の礫を利用した磨石で、作業部位は表面のみである。図化したもの以外では磨石が3点、台石が1点出土している。

<時期>出土遺物から判断すると8世紀中頃に属すると考えられる。

RA055竪穴住居跡 (16号住) (第15、16図、写真図版8、9)

<位置>調査区中央の4 N16 r 付近に位置する。本遺構は調査区を南北に走る沢状地形の最深部上位に位置している。

<重複関係>RD169と重複し、本遺構のほうが新しい。

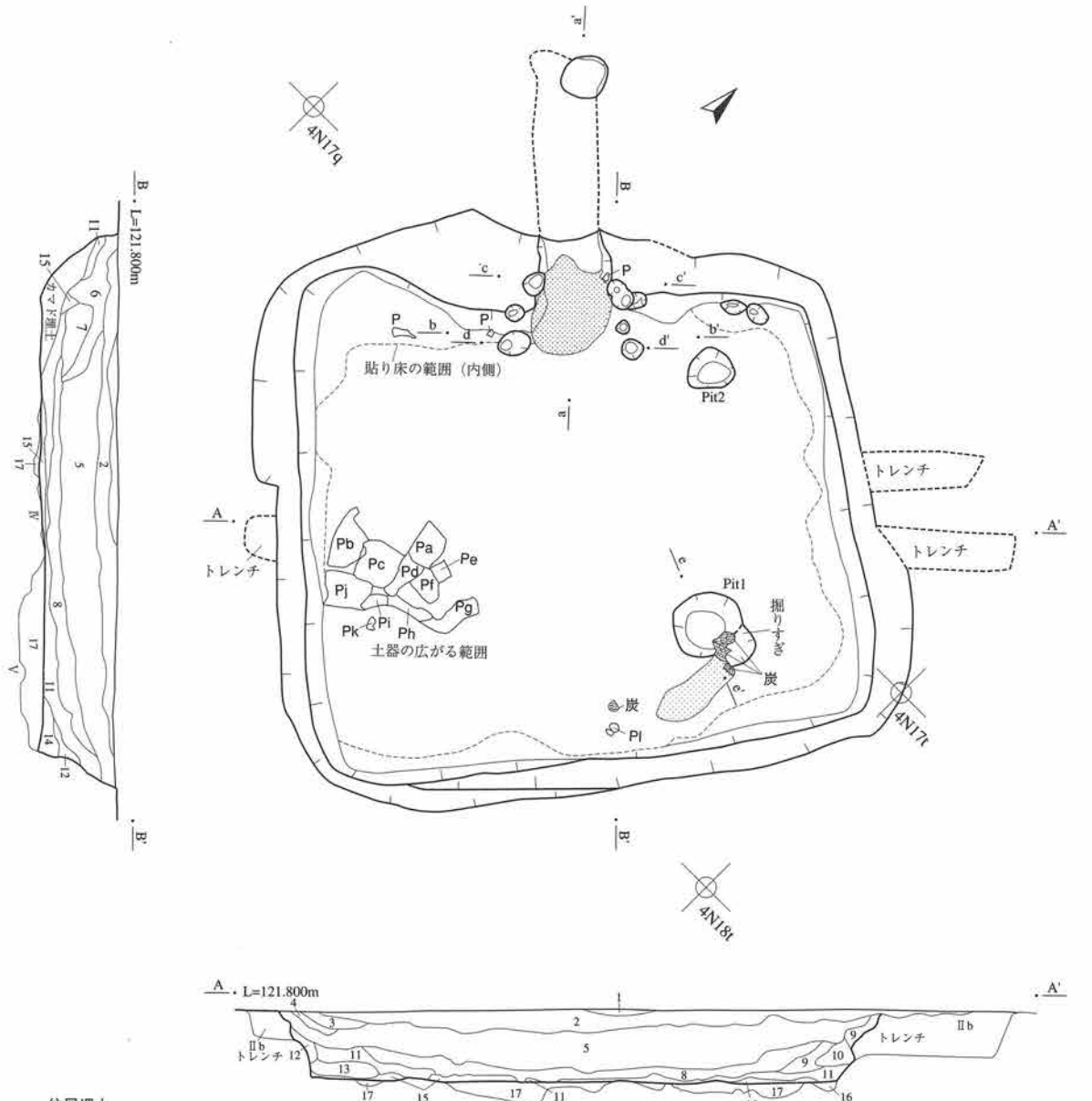
<検出面>II a層最下層で検出した。プランは全く見えなかったが、土の湿り具合による。II b層上面ではプランは確認できた。

<規模・平面形状・方向>一辺の長さが4.58×4.35m、壁高54cmの隅丸方形である。方向はN-47°-Wである。

<埋土>14層に細分される。壁際はIV層崩壊土、埋土下位は炭粉を含む黒色土、中位はIV層起源の黄褐色土ブロックや焼土、炭粒を含む黒褐色土、上層は混入物の少ない黒色土が主体である。特に住居北西隅の壁際はやや砂質のIV層が崩落し、壁と埋土の区別が難しかった。調査の際はやや掘りすぎたかもしれない。最上層は本遺構を含む沢状地形による窪み全体を覆っているII a層である。住居南東隅付近では埋土下位から焼土や炭がまとまって検出された。これら埋土の状況から、本住居跡は住居廃絶後しばらくしてから火を受けたか、炭、焼土が廃棄された可能性がある。

<床面・掘り方・貼り床>床は平坦で固くしまっている。壁際はしまりがなく、ややへこんでいて、浅い周溝の可能性もある。貼り床は壁際を除いて黒褐色土ブロックを含む褐色土が施されている。掘り方は中央が浅く、壁よりの部分が深い。

<カマド>北東壁中央に位置する。天井は失われている。袖は地山を削り出して土や芯材を貼り付けて作られたもののようだが、構築土や芯材はほとんど失われ、壁際の削り出し部分が残っている。極わずかに袖手前に固くしまった砂質の袖土が残っている。カマドの埋土はIV層起源の黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が主体で、天井や袖の崩壊土と思われる。燃烧部は70×58cmの範囲で残存している。焼土は最も厚いところで16cmである。IV層～V層の砂質土が焼けたもので、粘性はなく固くしまる。袖のあったところから芯材の据え方と思われる小ピットが壁に向かって並んで検出された。左袖は3



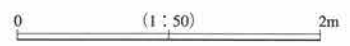
住居埋土

- 1 7.5YR2/1 黒 粘性なし しまりややあり (IIa層)
- 2 7.5YR2/1 黒 粘性なし しまりあり (IIb層起源?) 焼土粒含む 1層より暗い
- 3 7.5YR3/1 黒褐 粘性なし しまりあり 2層より明るい 炭粒含む
- 4 7.5YR2/1 黒 粘性なし しまりややあり 3層より暗い
- 5 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまり弱 IV層起源の黄褐色土ブロックを1%含む
- 6 10YR2/1 黒 粘性なし しまりあり 焼土粒を含む
- 7 10YR3/1 黒褐 粘性なし しまりややあり
- 8 10YR2/1 黒 粘性ややあり しまり弱
- 9 10YR3/1 黒褐 粘性ややあり しまりなし 黄褐色土粒を多く含む
- 10 10YR2/1 黒 粘性ややあり しまりなし IIb層の崩壊土
- 11 10YR3/2 黒褐 粘性、しまりあり IV、V層起源の黄褐色土粒を多く含む
- 12 10YR3/3 暗褐 粘性あり しまりなし 壁 (IV層) の崩壊土
- 13 10YR2/2 黒褐 粘性ややあり しまり弱 III層の崩壊土
- 14 10YR2/1 黒 粘性あり しまりなし IV層起源の黄褐色土粒を3%含む
- 15 10YR4/4 褐 粘性、しまりなし 砂質 V層の崩壊土
- 16 10YR3/2 暗褐 粘性、しまりなし V層起源の砂に黒褐色土が混入

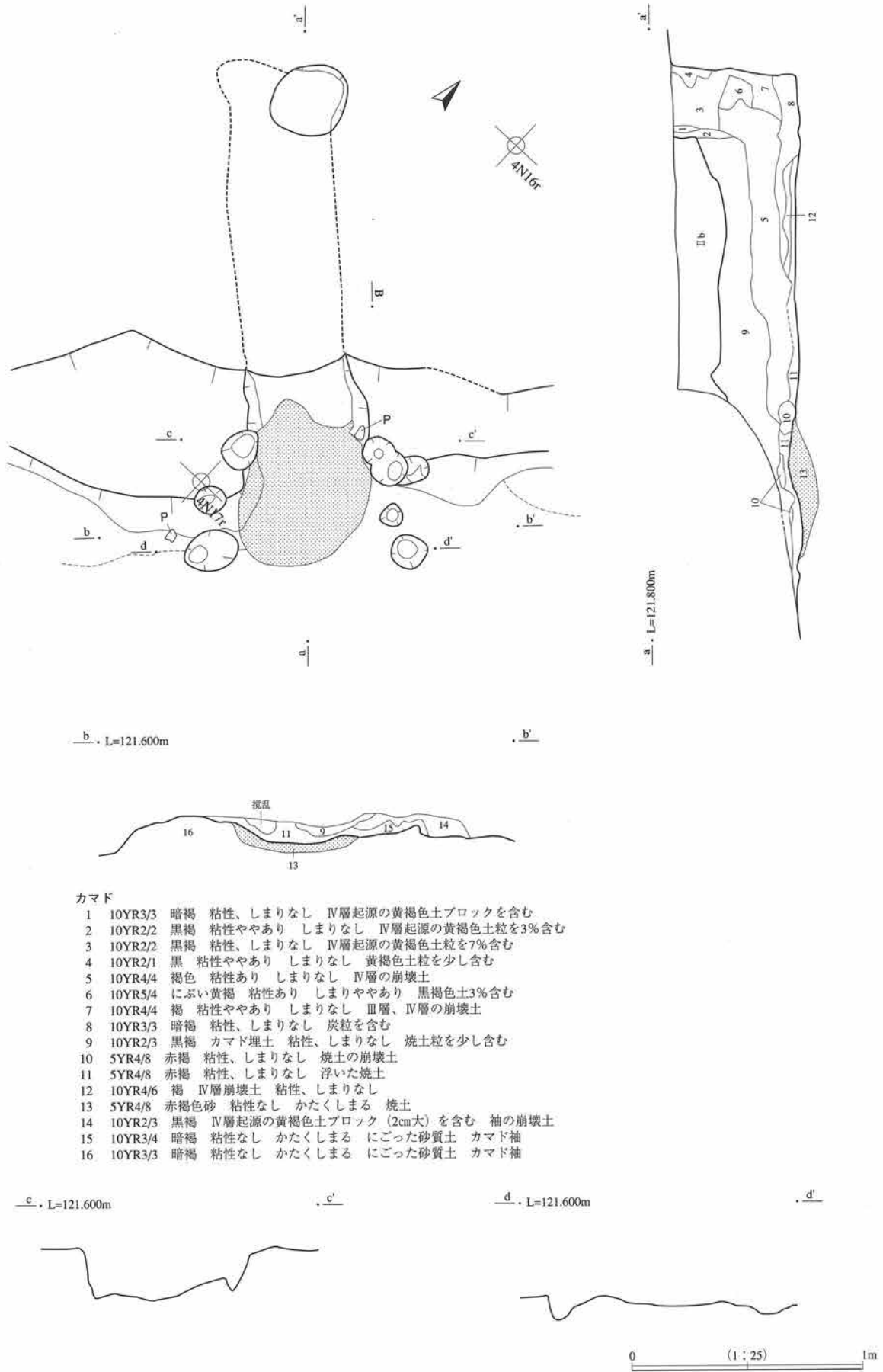
RA055	Pit1	Pit2
径 (cm)	50×46	35×29
深さ (cm)	11	18



Pit1
1 10YR2/1 黒 粘性、しまりあり VI層起源の黄褐色土粒3%



第15図 RA055竪穴住居跡 (1) (16号住)



第16図 RA055竪穴住居跡 (2) (16号住)

個で、径14～26cm、深さ11～13cmである。右袖は4個で、径10～22cm、深さ3～10cmである。これらの埋土は炭粒や焼土少量を含むV層起源の黒色土～黒褐色土である。煙道は長さ1.4mで、削り貫き式である。埋土はV層崩壊土及びV層起源の砂を含む黒褐色土～暗褐色土である。煙出し部分の最下層には焼土粒が含まれる。

＜柱穴・付属施設＞床面南東からPit1を検出した。径50×46cm、深さ11cmである。埋土はVI層起源の黄褐色土粒を含む黒色土である。また、床をはがしたところ、北東からPit2を検出した。34×28cm、深さ13cmである。いずれも浅く、屋根を支えるようなしっかりした柱穴とは考えにくい。（金子佐）
＜遺物＞（第147、148図、写真図版107、108）

土師器坏、高坏かあるいは高台付坏、土師器甕が出土した。西壁よりに近い部分では床面から3～23cm上から土師器破片が大量にまとまって出土した。住居がある程度埋まった時期に投げ込まれたものと考えられる。床面からはあまり土器は出土しなかった。住居北東部では埋土上層から土器破片が多く出土したが、中層以下では全く土器が出土していない。南西部では埋土上層から下層まで土器が多く出土した。なお、上層から出土した土器は平安時代のものも多い。出土した土器の総量は9,003gである。

〔土器〕土師器坏は、小破片のため掲載していない。土師器甕には長胴形（27～33、35）と球胴形（36、37）がある。

26は内外面とも黒色処理が施される。27は、頸部に段を持たないものである。頸部にはハケメを一周巡らせ、口縁部と体部の境界としている。28は頸部に段を持つものであるが、部分的に境界不明瞭となっている。口唇部は丸みを持つ。底部の張り出しは見られない。29は頸部に段を持つものである。内面に明瞭な屈曲部は見られない。底部は外側にやや張り出している。30は頸部に段を持つものである。口縁部内面には不明瞭であるが、段に対応する位置に屈曲部を持っている。31は頸部に段を持つものである。口縁部上端には稜を持つが、内面には屈曲部は見られない。32は頸部の段が不明瞭なものである。口縁部はほぼ垂直に立ち上がっている。口唇部は面取りされ、角張っている。底部の張り出しは見られない。33の底部はやや張り出している。

36の底部はやや張り出している。37は須恵質の非常に焼成の良好な資料である。頸部にはやや緩やかな段を持っている。口唇部は面取りされ、角張っている。34は長胴形か球胴形か不明のものである。口縁部は短く、口縁部は屈曲して外傾し、上半部は内湾気味に立ち上がる。口縁部上端にも稜を持ち、それに対応する内面には屈曲部を持つ。口唇部は面取りされ、角張っている。

〔石製品〕埋土から砥石が2点出土しているが、礫破砕片であるため、図化していない。

〔鉄器〕40は埋土から出土した棒状の鉄製品で、断面形が方形を呈するものである。断片的な資料のため詳細は不明である。この他に1点不明鉄製品が埋土から出土している。

〔時期〕出土遺物から判断すると8世紀中～後半（奈良時代）に属すると考えられる。

RA056竪穴住居跡（1号住）（第17、18図、写真図版10）

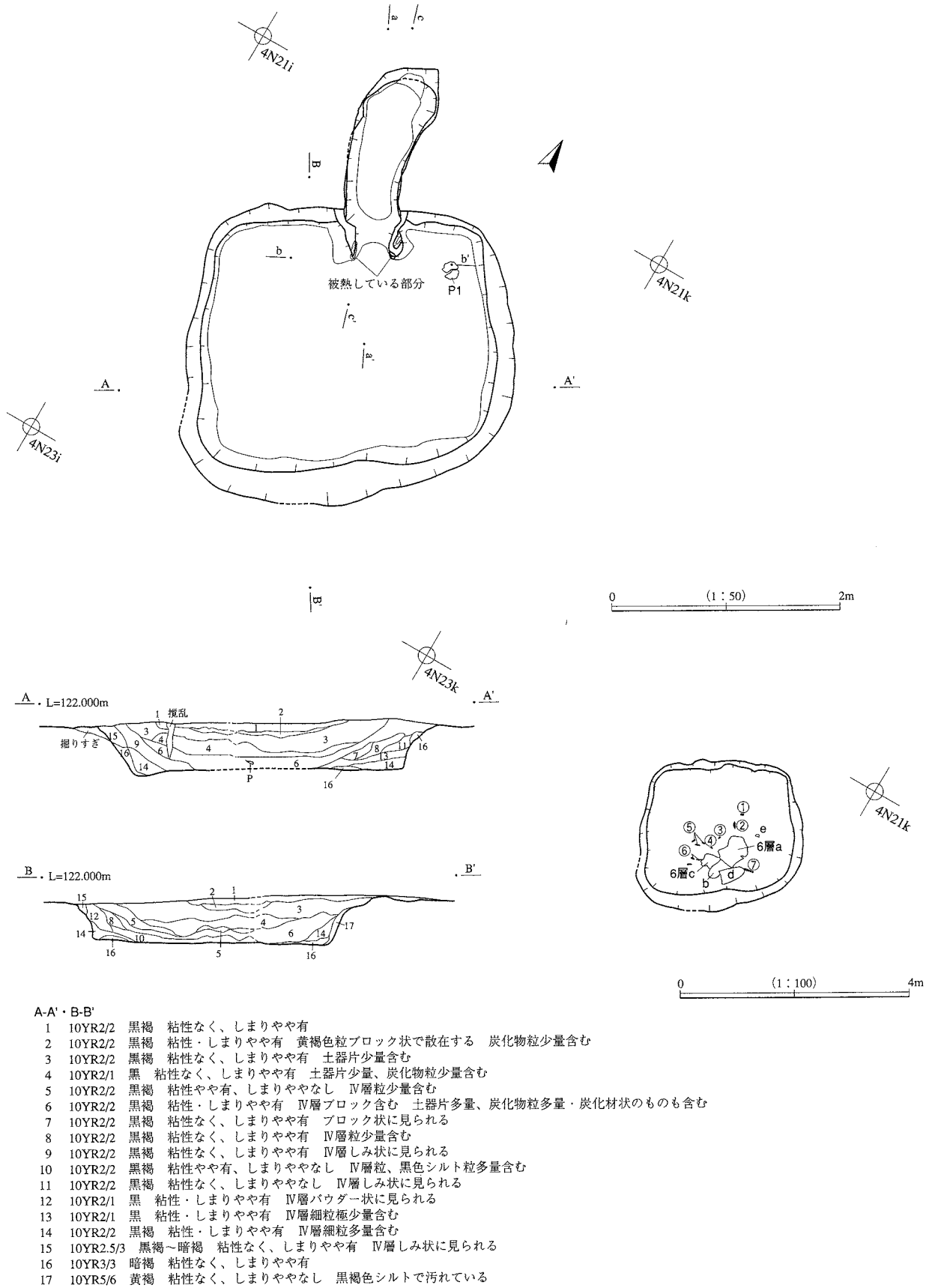
＜位置＞第10次調査区中央部の4 N22 j グリッド付近に位置する。

＜重複関係＞なし。

＜検出面＞検出面はⅢ層上面で、黒褐色シルトの広がりとして確認した。

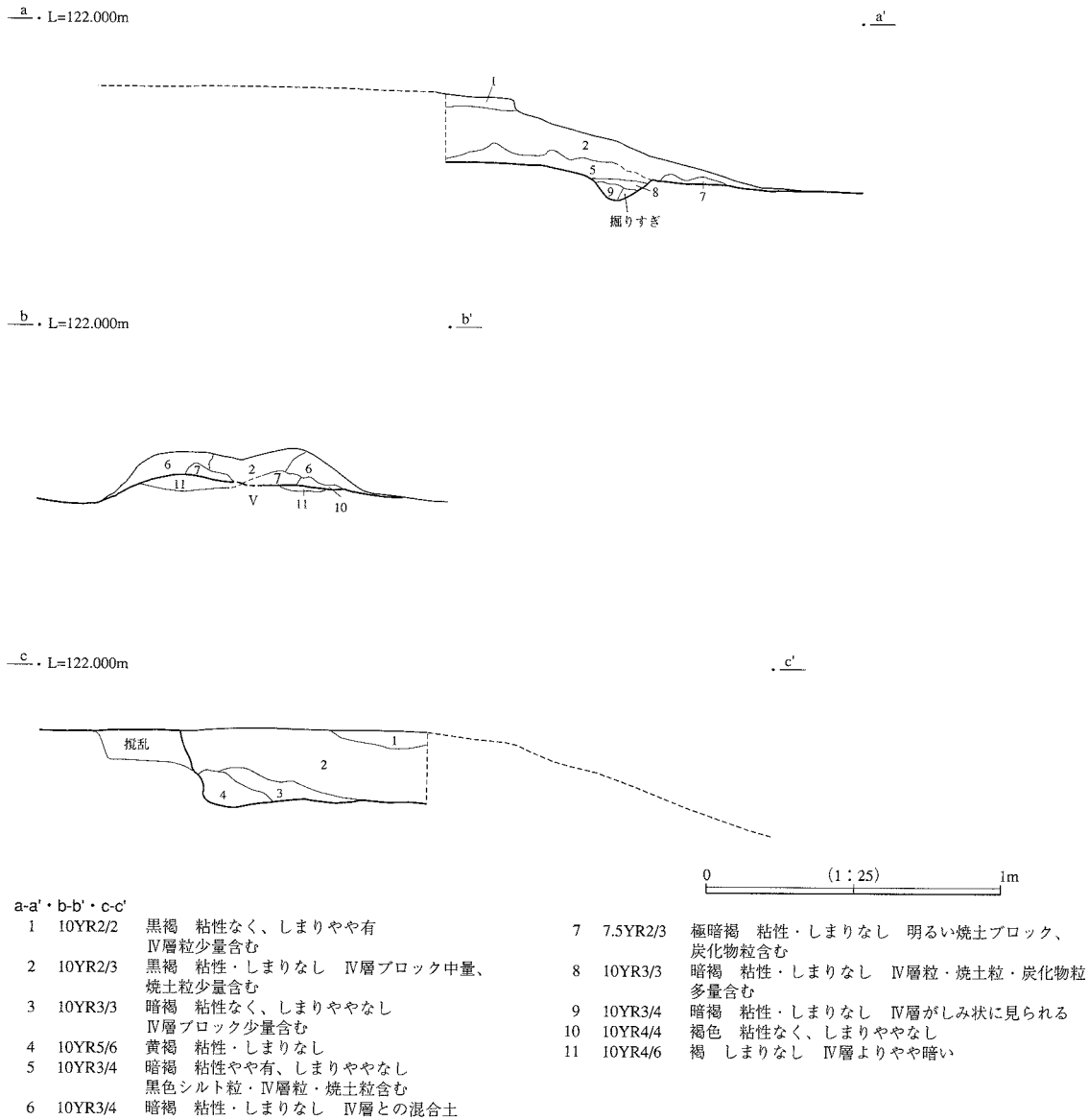
＜規模・平面形状・方向＞平面形は南隅がやや張り出す隅丸方形で、規模は主軸方向がやや短く2.67×2.89mである。壁高は最大47cm残存している。主軸方向はN-26°-Wである。

＜埋土＞埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とし、地山の混入具合により17層に分層した。1～5層や



第17図 RA056竪穴住居跡(1) (1号住)

2 竪穴住居跡



第18図 RA056竪穴住居跡 (2) (1号住)

7層以下は夾雑物が少なく、レンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積と捉えられる。ただ、6層は南東側から土壌とともに約2個体分の土師器甕、炭化物が投げ込まれている様相が確認され、人為堆積と捉えられる。壁周辺にはIII層もしくはIV層に起因すると考えられる堆積土が確認され、壁の崩落土と認識した。なお、2層中には十和田a火山灰と考えられる黄褐色の粉状パミスがブロックの状態で見られる。

<床面・掘り方・貼り床>黄褐色シルトの掘り方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。カマド周辺に床面の硬化が見られる。

<カマド>北壁中央に設置され、煙道方位は主軸方向より北に9度振れる。袖の残りは悪く、袖の構築土と考えられる地山褐色砂質シルトが浅く残存している。礫等の芯材の使用は不明である。燃焼部に焼土層の広がりは見られず、両袖の内部にわずかに被熱部分が確認される。燃焼部には土器片や礫が出土せず、支脚も確認されていない。煙道の全長は84cmでやや下降しながら先端の煙出し孔に向かって伸びるが、煙出し孔の付近はやや北東側に曲がっている。断面図にはあらわれないが、煙道部の

南西側の一部がⅢ層面を天井として残存しており、刳り貫き式の煙道と捉えられる。

＜柱穴・付属施設＞なし。

(北村)

＜遺物＞(第149図、写真図版109)

土器の出土量は約3kgで、そのほとんどがQ2～Q3の6層から出土している。埋土で述べたとおり土師器甕の破片がまとまって出土し、2個体分に復元された。カマドの北西側の底面直上でも土師器が出土したが、断片的な資料であるため、掲載していない。その他坏も出土しているが、断片的な資料であるため、掲載していない。出土した土器の総量は2,849gである。

[土器] 42・43は球胴形の甕である。42は底部の張り出しは見られない。43は頸部に段を持つものである。口唇部は面取りされ、角張っている。底部の張り出しは見られない。

[その他] 上記以外に埋土の6層から炭化物が出土している。そのうち3点の同定を行ったところ、樹種はクリ2点、ナラ1点であった。

＜時期＞本遺構に確実に伴うと考えられる遺物が少ないため、断定はできないものの、出土遺物から判断すると、8世紀中～後半(奈良時代)に属すると考えられる。

RA057竪穴住居跡(17号住)(第19、20図、写真図版11)

＜位置＞調査区中央の4N22uグリッド付近に位置する。この付近は調査区を南北に走る沢状地形の直上である。東方0.8mにRD153がある。

＜重複関係＞ない。

＜検出面＞Ⅱb層上面である。周囲の黒色土より若干明るい黒色土の広がりで見出した。

＜規模・平面形状・方向＞一辺の長さ4.44×4.12m、壁高56cmの隅丸方形である。方向はN-42°-Wである。

＜埋土＞埋土は8層に細分される。堆積状況から自然堆積の可能性が高い。最下層は壁際がⅣ、Ⅴ層の崩壊土を含む黒褐色土、住居中央床面が炭粉及び炭粒を多く含む黒色土である。特に床面中央に炭片が多い。中位は焼土を含む黒色土～黒褐色土、上位は炭粒を少量含む黒色土である。また、住居東壁付近と西側柱穴の周囲床面～10cm上位及びカマド前床面から炭化材が出土している。これらの埋土の様子から、本住居跡は住居廃絶後、しばらくしてから火を受けて焼失した可能性がある。

＜床面・掘り方・貼り床＞平坦で固くしまる。貼り床はほぼ全面に施されており、黄褐色土ブロックを含む砂質の暗褐色土である。掘り方は中央よりも壁際がやや深い。

＜カマド＞北西壁中央に位置する。天井は失われ、燃焼部と地山(Ⅳ層～Ⅴ層)を削り出して作った袖が残っている。埋土は天井や袖に使用したと思われる黄褐色土や焼土ブロックを含む褐色土が主体である。右袖の手前側から土師器甕が崩れた状態で出土した。倒立させて芯材としていたものが、崩れたものと考えられる。左袖手前側からは同じく芯材としたらしい土師器甕底部と被熱した礫が出土している。焼土は62×57cmの範囲で検出され、一部煙道に至る部分の壁面までよく焼けている。焼土の厚さは最も厚いところで8cmである。

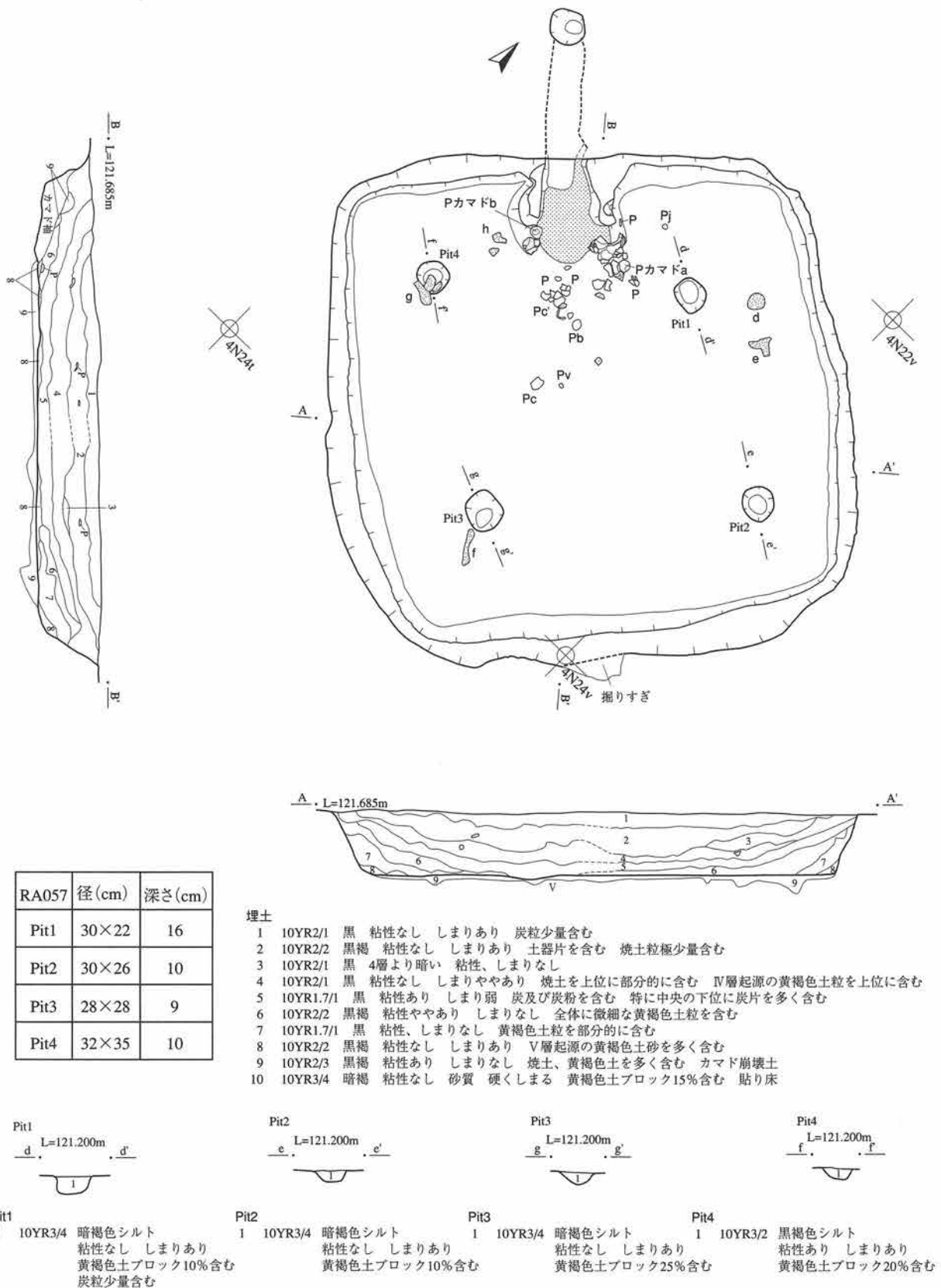
煙道は長さ1.28m、刳り貫き式である。底面は平坦で水平であり、煙出しに至って一段下がる。煙道天井はⅡb層であるが、崩落して天井自体がやや濁った層となっている。

＜柱穴・付属施設＞床面から柱穴と思われる小ピットが4基検出された。Pit1～Pit4である。いずれも比較的浅い。

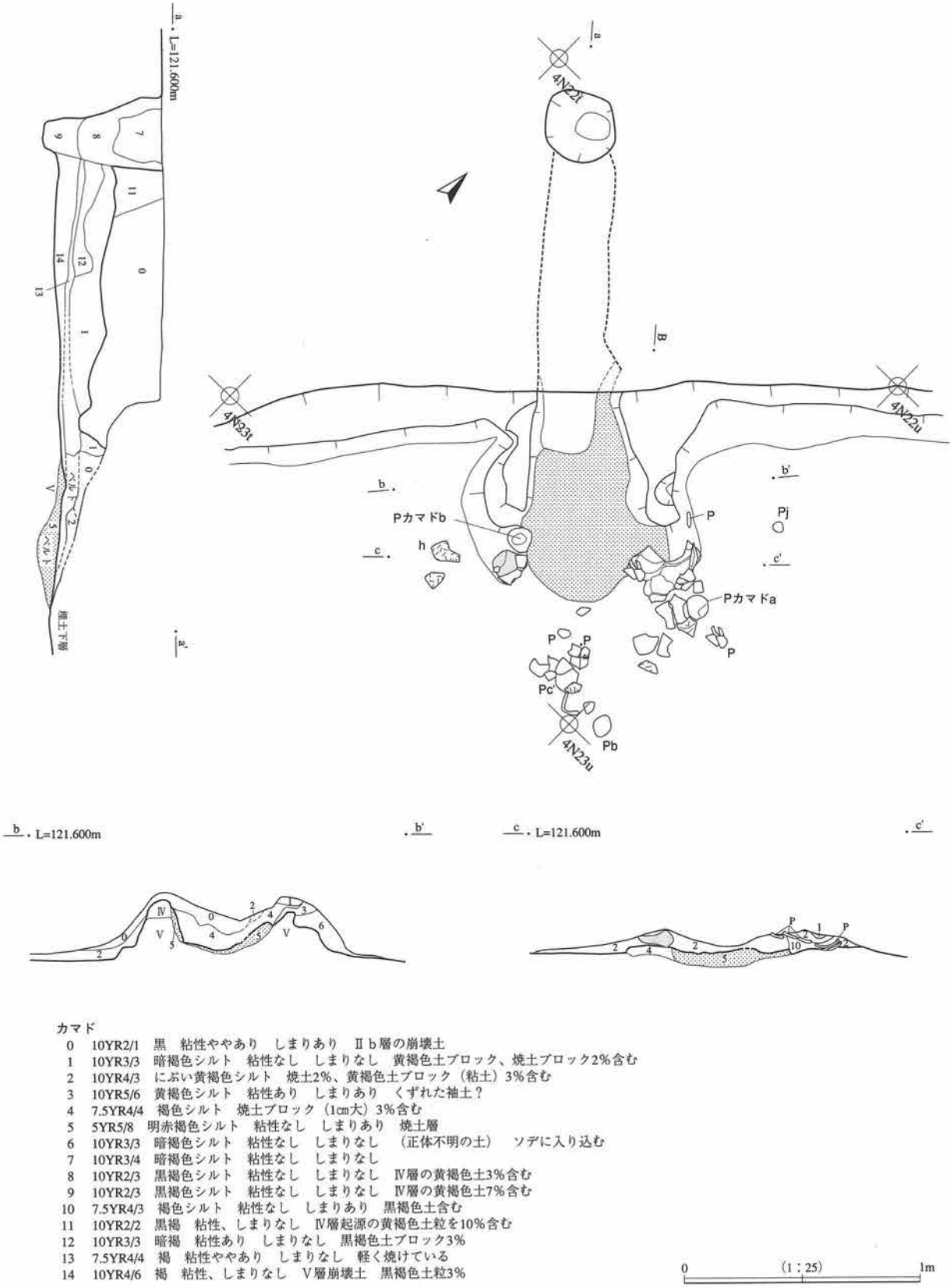
(金子佐)

＜遺物＞(第149、150図、写真図版109)

土師器坏、甕が出土した。カマド袖のほか、カマド前、カマド脇の床面から土師器が出土した。ま



第19図 RA057竖穴住居跡 (1) (17号住)



第20図 RA057竪穴住居跡(2) (17号住)

た埋土上面からも土器片が出土した。出土した土器の総量は4,380gである。

[土器] 44の坏は緩やかな丸みを持つ丸底で、体部外面の段はやや不明瞭であるが、内面には外面に調整の変化点に対応した屈曲部を持つものである。口径に対して器高が低く、皿状を呈している。口縁部は直立気味に立ち上がり、上端は外反気味になる。底部はヘラケズリにより平坦気味になっている。45～47の土師器甕は3点とも長胴形のものである。47は頸部に段を持つもので、内面には屈曲部を持たないものである。底部の張り出しは見られない。46は底部の張り出しは見られない。45は頸部の段が不明瞭なものである。最大径が口径にあり、底径が大きく深鉢状を呈している。底部の張り出しは見られない。

[土製品] 48は埋土から出土した完形の土製の勾玉である。一端に貫通孔が観察される。

[石製品] 埋土から砥石が2点出土しているが、礫破砕片であるため、図化していない。

<時期>出土遺物から判断すると8世紀中～後半(奈良時代)に属すると考えられる。

RA058竪穴住居跡(5号住)(第21図、写真図版12)

<位置>第10次調査区中央部の5N2kグリッド付近に位置する。

<重複関係>なし

<検出面>検出面はⅢ層上面で、黒褐色シルトの広がりとして確認した。

<規模・平面形状・方向>平面形は四辺中央がやや弧状を呈する隅丸方形で、規模は主軸方向がやや短く3.09×3.19mである。壁高は最大49cm残存している。主軸方向はN-57°-Wである。

<埋土>埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とし、地山の混入具合により9層に分層した。全体的に夾雑物が少なく、レンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積と捉えられる。壁周辺にはⅢ層に起因すると考えられる堆積土が確認され、壁の崩落土と認識した。

<床面・掘り方・貼り床>暗褐色砂質シルトの掘り方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。床面の硬化が顕著な部分は確認されない。

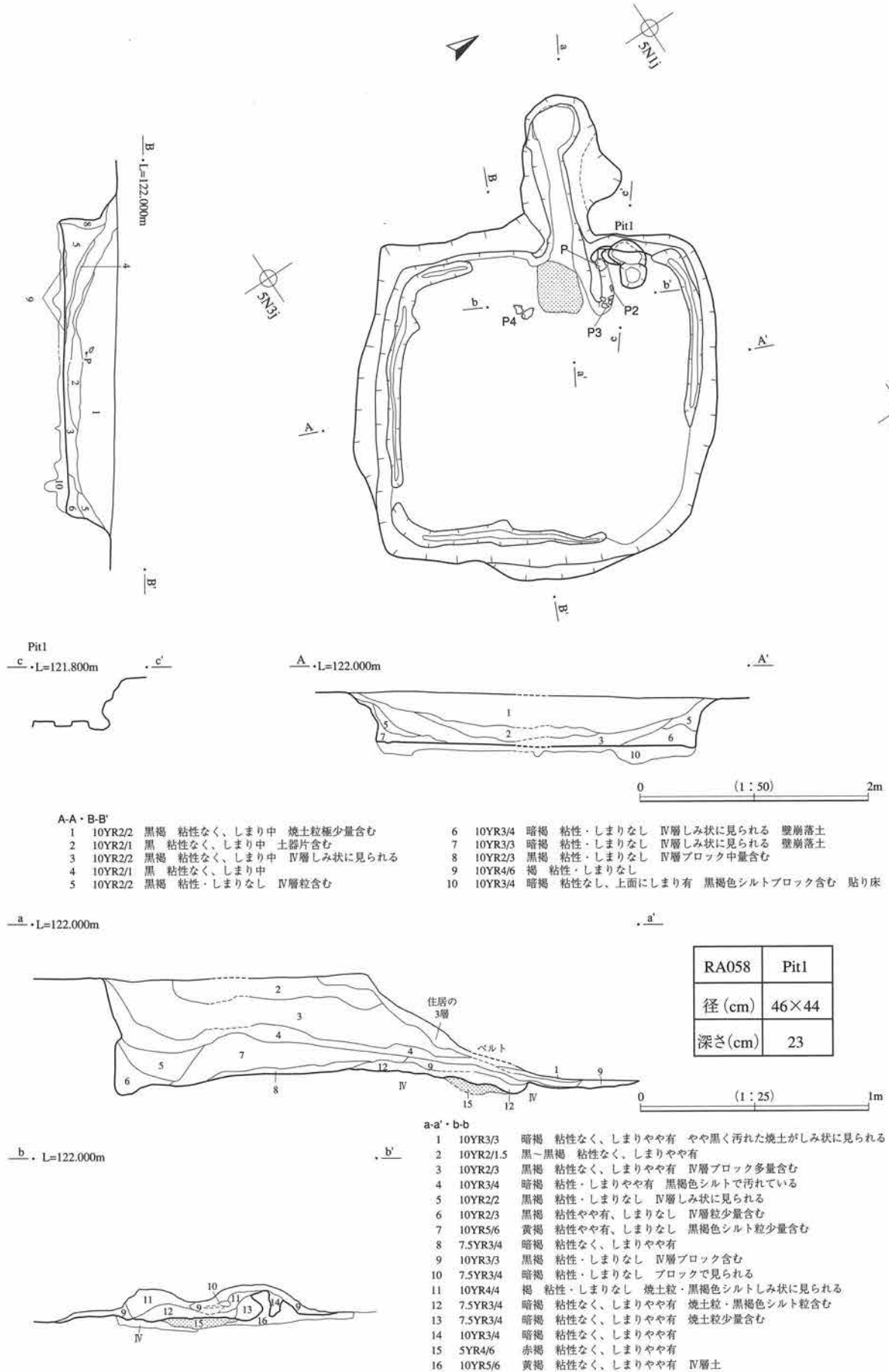
<カマド>北西壁中央に設置され、煙道方位は主軸方向より西に3度振れる。袖の構築土は地山黄褐色砂質シルトを主体とする。部分的に芯材の抜き取り痕が観察され、地山の削り出しをベースにしながらも、礫を補強材として使用し、その周囲に地山を貼り付けて構築したものと捉えられる。また、南側の袖は固い焼土層が外側まで見られ、焼き締めを行った可能性が示唆される。燃焼部底面には51×46cmの焼成面が形成される。燃焼部には土器片や礫が出土せず、支脚も確認されていない。煙道の全長は73cmでやや下降しながら先端の煙出し孔に向かって伸びている。煙道部の埋土には天井部の崩落土と考えられる地山黄褐色シルトが厚く堆積しており、煙道部は刳り貫き式と捉えられる。煙道部底面は若干であるが、被熱して赤化している。

<柱穴・付属施設>カマドの北側の北隅に46×44cm、深さ23cmのPit 1を検出した。北西側は袋状に掘り込んでおり、位置・形状から判断すると、貯蔵穴と考えられる。東隅・南隅・カマド南袖脇を除く壁際には周溝を検出した。東隅部分は広範囲にわたって周溝が検出されず、出入り口であった可能性が高い。(北村)

<遺物>(第150図、写真図版109)

土器の出土量は657gで、カマドの北側袖周辺の5層から出土した土師器坏の51とその直上層である4層から出土した52を除くと、ほとんどが埋土の1～3層の出土である。土師器甕も出土しているが、小破片であるため掲載していない。

[土器] 51は平底に近い丸底で体部外面に段を持つものである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端



第21図 RA058 竪穴住居跡 (5号住)

部は直立気味になっている。52は平底で、体部外面に段や稜を持たないものである。口縁部は内湾し、上端が直立気味になる。

<時期>出土遺物から判断すると8世紀後半(奈良時代)に属すると考えられる。

RA059竪穴住居跡(49号住)(第22図、写真図版13)

<位置>調査区中央東側の502eグリッド付近に位置する。

<重複関係>なし。

<検出面>基本層序V層(地山層)上面で検出した。

<規模・平面形・方向>本体部分の平面形は隅丸の正方形であったとみられるが、カマドのある北西壁は上部が崩落している。残存部分の規模は、北東-南西壁間が3.0m、北西-南東壁間が3.0mを測る。カマド煙道部を基準とすると、主軸方向はN-35°-Wである。確認できた壁高は、最大で43cmを測る。

<埋土>6層に細分した。上位は黒褐色土で、中位の黒色土を挟み、下位には褐色の砂質土が堆積する。壁面からの流れ込みと思われるレンズ状の堆積状況で、自然に埋没したものと推定される。

<床面・掘り方・貼り床>床面は概ね平坦で、堅く締まる。貼り床はほぼ全面に施され、深い所で床面下15cmまで達する。

<カマド>カマドは北西壁中央に設置される。煙道は削り貫き式で、壁面から先端までの長さは170cm、幅は40~45cmを測る。底面は、先端に向かって僅かに上昇する。燃焼部焼土は34×30cmの範囲で、床面から7cmの深さまで焼成を受けていた。カマド本体の構築物は、構築土・芯材を含め一切確認できなかった。

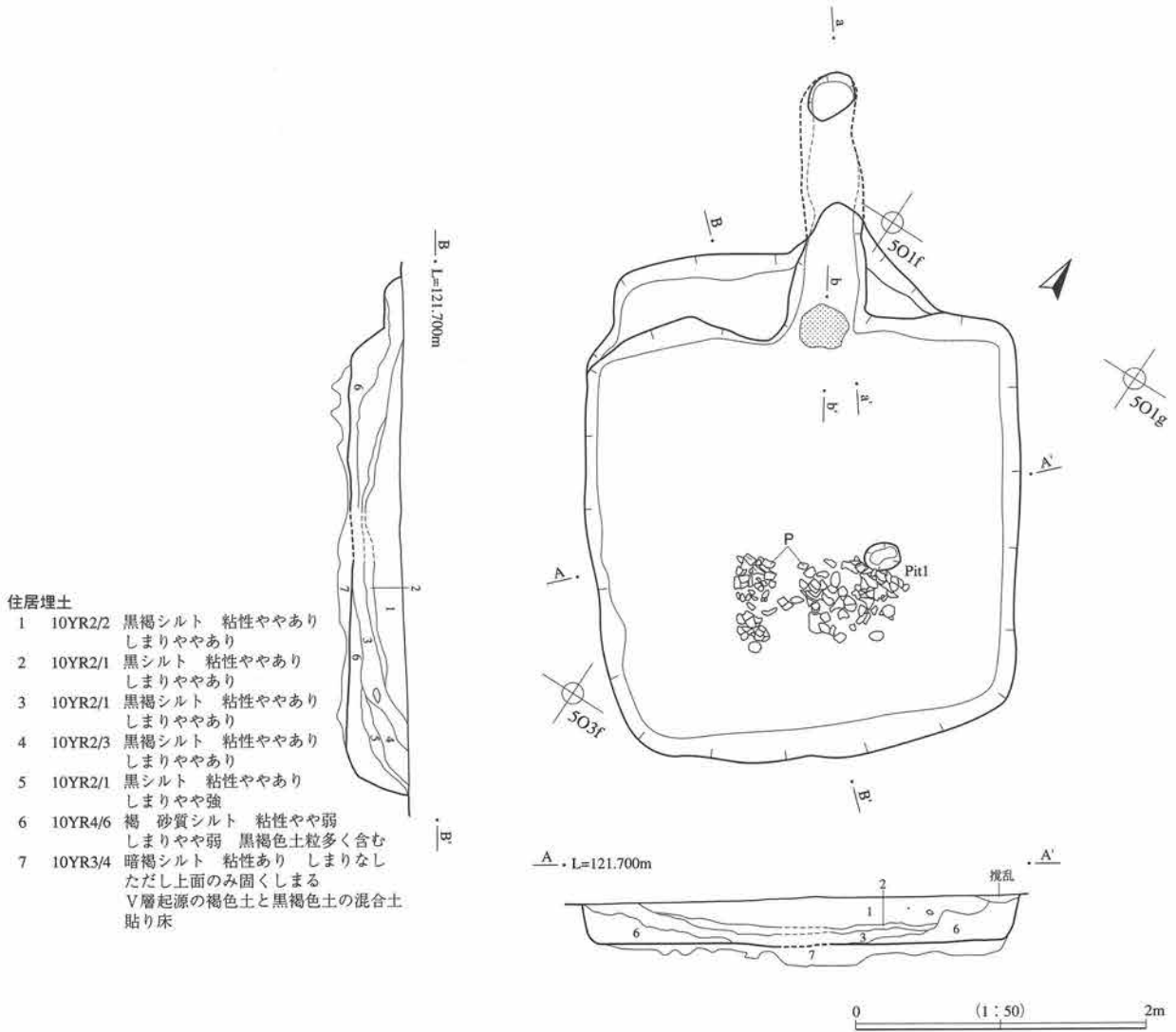
<柱穴・付属施設>中央に柱穴状ピット1個を検出した。規模は開口部径24×19cm、深さ13cmである。
(金子佐)

<遺物>(第150~152図、写真図版109~111)

土器は6,736g出土し、うち7点を掲載した。埋土中から少量が出土したほか、床面中央のやや南東よりでは数点がまとまり潰れた状態で出土している。土師器坏、埴、甕が出土した。埋土中から平安時代の須恵器甕破片も出土した。

[土器] 53は、平底で、体部外面に段や稜を持たないものである。口縁部は内湾する。54は外面に明瞭な段は持たず、平底気味で、体部は丸みを帯びている。体部外面の調整は横方向にヘラケズリの後、ミガキを施している。底部外面の調整も同様である。55は頸部の段が不明瞭なものである。内面は調整の変化点に屈曲部を持つ。底部は浅い台状を呈し、張り出している。56は頸部に段を持つものである。内面には屈曲部を持たない。底部の張り出しは見られない。口唇部は面取りされ、角張っている。57は頸部に段を持つものである。口縁部はやや長く、外傾しながら立ち上がり、上端でやや垂直になる。内面の口縁部上端は外面の変化点に対応して屈曲部を持つ。口唇部は凹面になっている。底部の張り出しは見られない。58は頸部に段を持つものである。外面に対応する屈曲部を部分的に持っている。底部の張り出しは見られない。口唇部は垂直に面取りされ、上端がやや尖っている。59は口縁部から体部上半の資料で、頸部の段が不明瞭なものである。口唇部はやや丸みを帯びるものの、くちばし状に尖っている。頸部内面には屈曲部は見られないが、口縁部上端は外面の変化点に対応して屈曲部を持つ。ハケメの幅は他の甕類に見られるものと比較すると幅広である。

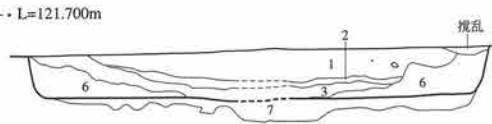
[石器] 60は棒状の礫を、61は楕円形の礫を利用した凹石である。作業部位は60が表面のみ、61が表裏2面である。60が床面から、61が埋土から出土している。



住居埋土

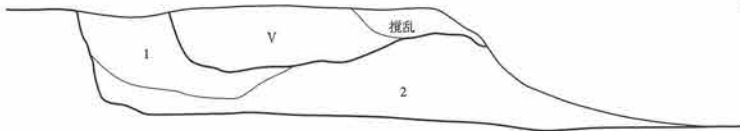
- 1 10YR2/2 黒褐シルト 粘性ややあり
しまりややあり
- 2 10YR2/1 黒シルト 粘性ややあり
しまりややあり
- 3 10YR2/1 黒褐シルト 粘性ややあり
しまりややあり
- 4 10YR2/3 黒褐シルト 粘性ややあり
しまりややあり
- 5 10YR2/1 黒シルト 粘性ややあり
しまりやや強
- 6 10YR4/6 褐 砂質シルト 粘性やや弱
しまりやや弱 黒褐色土粒多く含む
- 7 10YR3/4 暗褐シルト 粘性あり しまりなし
ただし上面のみ固くする
V層起源の褐色土と黒褐色土の混合土
貼り床

A-A' L=121.700m



0 (1:50) 2m

a-a' L=121.600m

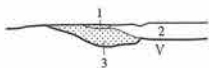


a'

住居煙道

- 1 10YR3/4 暗褐シルト 粘性ややあり
しまりやや弱 黄褐色ブロック多量、
炭化物粒少量含む
- 2 10YR2/3 黒褐シルト 粘性ややあり
しまりややあり 黄褐色ブロック、
炭化物粒少量含む

b-b' L=121.200m



住居 カマド燃焼面

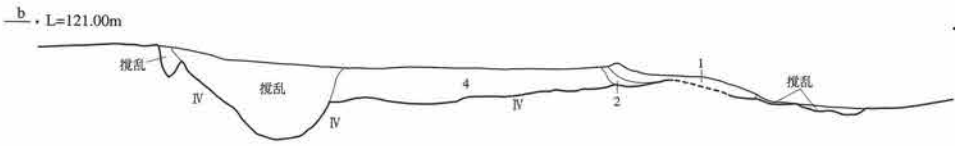
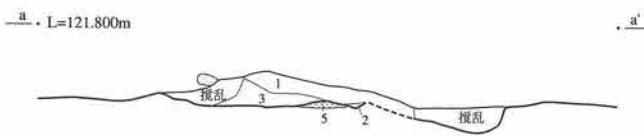
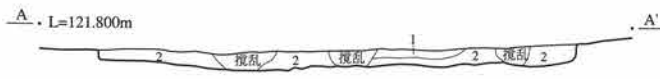
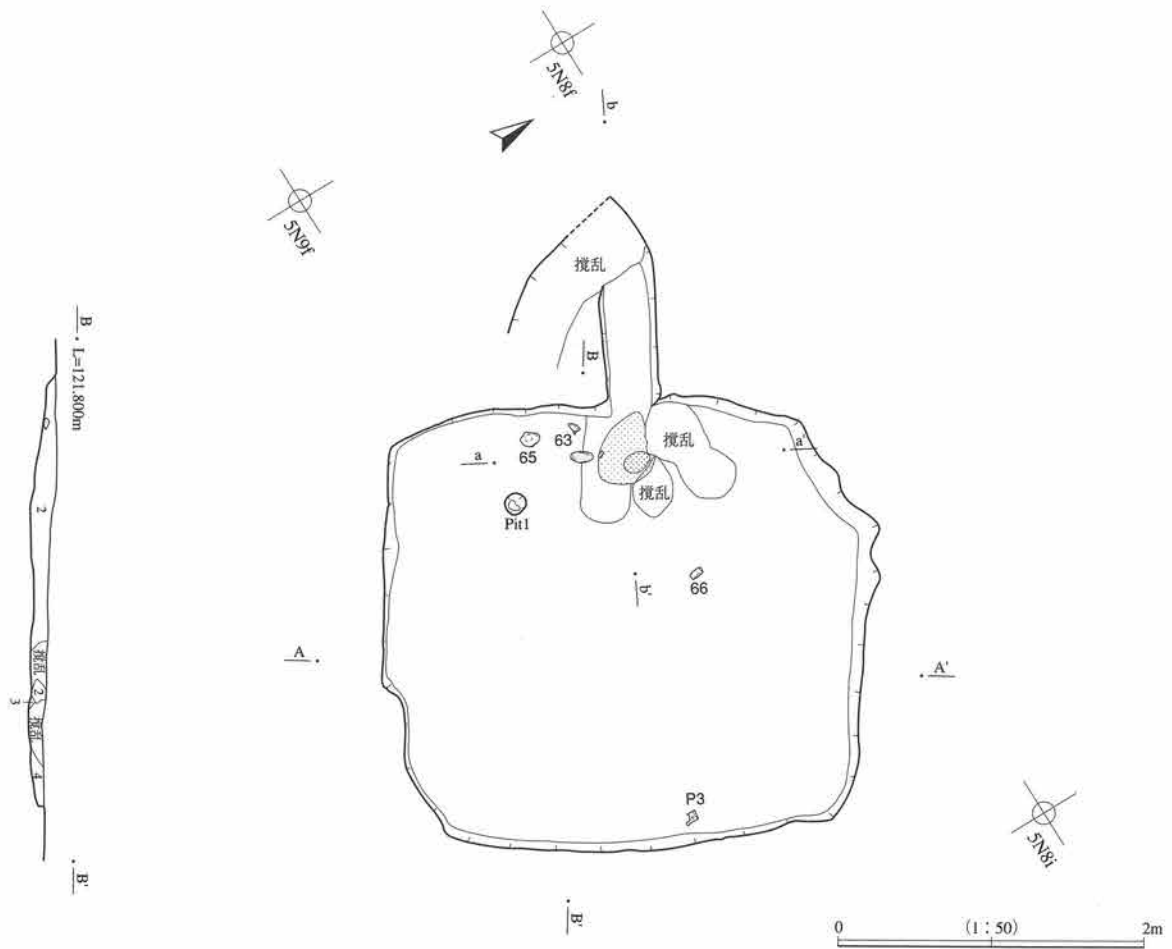
- 1 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト 粘性なし 固くする 焼土
- 2 7.5YR4/3 褐色シルト 粘性なし しまりあり V層起源の砂質土・炭粒を含む 貼り床
- 3 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト 粘性なし しまりあり 焼土

0 (1:25) 1m

RA059	Pit1
径(cm)	24×19
深さ(cm)	13

第22図 RA059竪穴住居跡 (49号住)

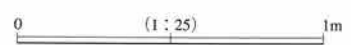
2 竪穴住居跡



- A-A'・B-B'
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまり有
IV層粒、礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐 粘性なく、しまり有
部分的にIV層粒や礫含む
 - 3 10YR4/4 褐色 粘性なく、しまりやや有
 - 4 10YR2/2 黒褐 粘性・しまりなし
円礫多量含む 南側に見られる

RA060	Pit1
径 (cm)	14×14
深さ (cm)	7

- a-a'・b-b'
- 1 7.5YR2/2 黒褐 粘性・しまりやや有 焼土粒少量含む
 - 2 7.5YR2/3 極暗褐 粘性・しまりなし IV層粒・焼土粒少量含む
 - 3 7.5YR3/3 暗褐 粘性・しまりやや有
 - 4 10YR3/3 暗褐 粘性・しまりなし 焼土粒・IV層粒含む
 - 5 5YR4/6 赤褐 粘性なく、しまり有 (燃烧部焼土層)



第23図 RA060竪穴住居跡 (9号住)

[鉄器] 62は薄い鉄板を円形基調に成形し、少なくとも六枚の筒状のものを重ねて、蛇腹状にしたものである。埋土最上面から出土している。

[時期] 出土遺物から判断すると8世紀後半に属すると考えられる。

RA060竪穴住居跡（9号住）（第23図、写真図版14）

<位置>第10次調査区中央部の5N8gグリッド付近に位置する。

<重複関係>なし

<検出面>検出面はIV層上面で、暗褐色シルトの広がりとして確認した。

<規模・平面形状・方向>平面形は北隅と南隅を部分的に欠くが、方形を呈し、規模は主軸方向がやや短く3.03×3.27mである。壁高は非常に残りが悪く、最大でも12cm、平均すると8cmである。主軸方向はN-59°-Wである。

<埋土>埋土は暗褐色シルトを主体とし、色調や混入物などの差異により4層に分層した。埋土は前述どおり浅く、主体となる堆積土で覆われているが、部分的に黒褐色シルト層が見られる。削平のため層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できない。

<床面・掘り方・貼り床>明瞭な貼り床は確認されず、概ねIV層を床面としているが、南側の一部はVI層まで掘り込んでいる。床面はカマド周辺と北東壁際がやや高く、南側がやや低く、傾斜がついている。また、カーブの緩やかな凹凸が見られる。

<カマド>北西壁中央に設置される。全体的に残りが悪く、燃焼部底面の焼成面が47×37cmの範囲にわたって確認されるにすぎない。そのため、袖の形態や規模などは不明である。また、煙出し孔部分は植栽により消失しており規模は不明である。残存する煙道部の長さは106cmでゆるやかに下降しながら先端の煙出し孔に向かって伸びている。煙道部の天井の痕跡は遺存しておらず、構築方法は不明である。

<柱穴・付属施設>Q4のほぼ中央に柱穴を1基検出した。単独の検出であり、柱配置は不明である。
(北村)

<遺物>（第152図、写真図版111）

土師器坏、鉢、甕の小破片が出土した。土器の出土量は551gで、床面から出土した63・65を除くとほとんど埋土からの出土である。63・65はカマドの南西側の床面から出土している。土師器甕も出土しているが、小破片のため掲載していない。また、鉄斧が埋土上層から1点出土している。

[土器] 63は丸みの緩やかな丸底のもので、体部外面には沈線が一条巡り、段や稜は持たないものである。口径に対して器高が低く、皿状を呈している。64は口縁部の断片的な資料で、頸部の段を持たないものである。65の口唇部は潰され平坦になっている。全体的に整形から調整まで粗い。

[鉄器] 66は袋状の受け部を持つ完形の鉄斧である。

<時期>出土遺物から判断すると8世紀後半（奈良時代）に属すると考えられる。

RA061竪穴住居跡（25号住）（第24図、写真図版15）

<位置>調査区ほぼ中央の5N10Sグリッドに位置する。当初は、調査区境にあった。

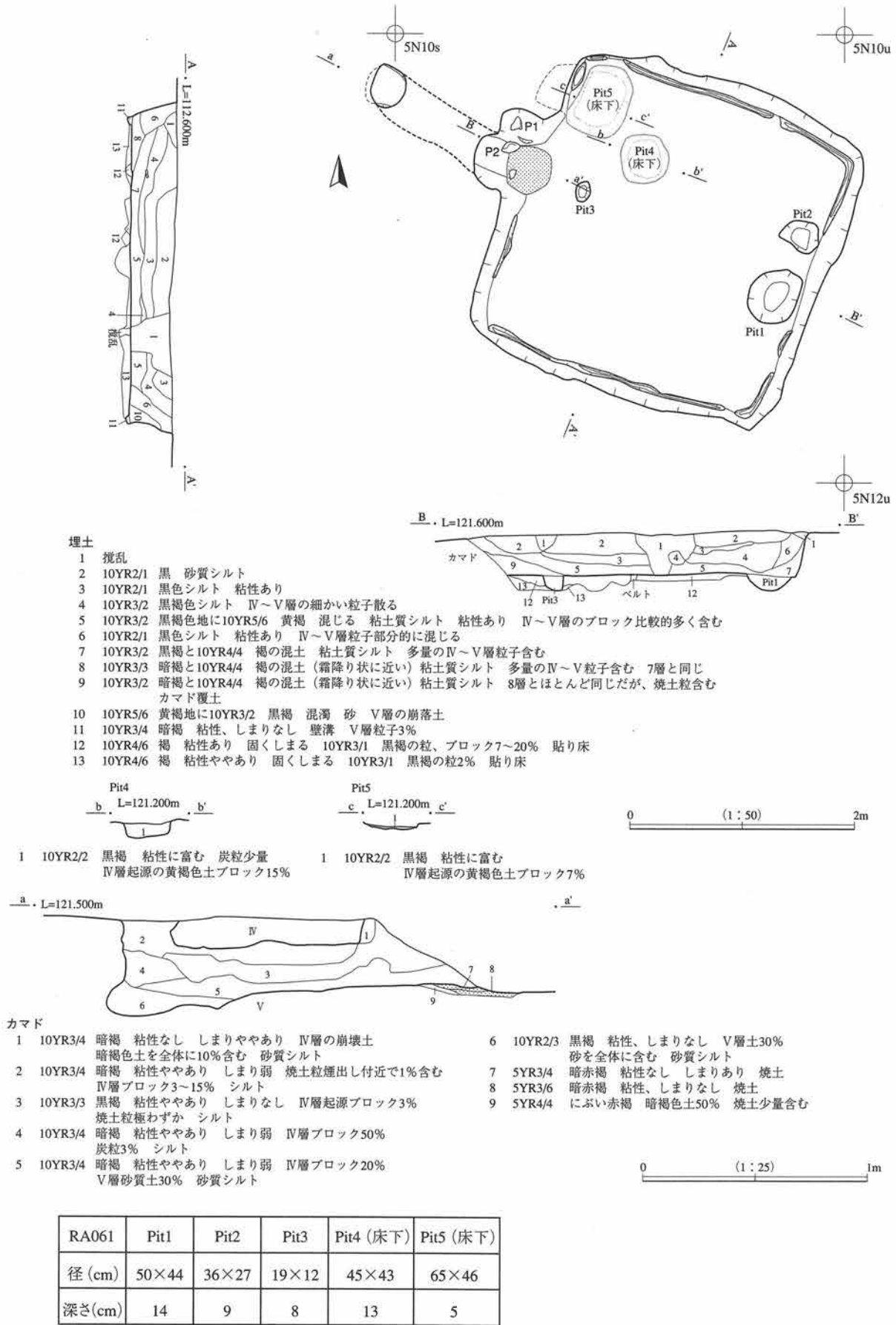
<重複関係>遺構との重複はないと思われるが、耕作時の攪乱が非常に多い。

<検出面>Ⅲ層～Ⅳ層正面。

<規模・平面形状・方向>2.9×3mの隅丸方形。主軸方向はN-66°-W。壁高は40cmである。

<埋土>深いせいか、多くの層で埋まり、Q4が特に分かりづらく、分層時辻褃を合わせるのに苦労

2 竪穴住居跡



第24図 RA061竪穴住居跡 (25号住)

した。4、5層は部分的に非常に良く似、5、8層はほとんど同じで、4～8層の分離に特に苦労した。断面実測の分層前にも、上上層、上中層云々と分層発掘を試みたが、層所が複雑であったためほとんど意味がなかった。一応、上中層が黒土で3層、上下層が4層、中層が黄褐色土で、5、7～9層に、下層も黒土で6層に相当するか。

＜壁・床面・掘り方・貼り床＞壁～底は、IV層というよりシルト化したV層。壁は、下部が袋状にオーバーハングする所あり。床は、北側を中心に非常に硬く締まり、南壁付近は砂が露出して柔らかい。貼り床はほぼ全面に施される。掘り方は凹凸が多い。北西隅付近では、貼り床をはがしたところ、IV層ブロックを含む黒褐色土の土坑のプランが2基認められた。貼り床の土よりも黒褐色土が多く、堆積状況から埋め戻しの土と考えられる。

＜カマド＞当初、煙出が確認できず、一部検出面に露出した煙道で推定したが、後に煙出を砂が覆っていたのだと分かった。袖はほとんど残っておらず、その残骸と思われるIV～V層ブロック（9層）が煙道前面に多く見られた。煙道は刳り貫き式で、長さ1.6m、煙出しの深さは43cmである。燃烧部には焼土が42×40cm、厚さ8cmの楕円形に形成されている。

＜柱穴・付属施設＞カマドの北側の壁下部が、洞窟状にオーバーハングした袋状土坑になっており、何らかの施設か。貯蔵穴としての用途が考えられるが、埋土はV層の崩壊土で、焼土、黒褐色土、炭などは含まれていない。また、壁溝が袋状土坑の前に周ることから、日常的に使用された土坑ではないのかもしれない。壁溝は西壁の一部を除いて周る。幅4cm、深さ14cmである。東壁際中央付近にPit1、Pit2の大小の土坑が検出された。いずれも埋土はIV～V層のブロックを含む黒褐色土で、炭粒も少量認められる。カマド前からは炭粒や焼土を含み、固く締まった黒褐色土の小Pitが検出されている。また、掘り方の項で記載したとおり、床下土坑が北西隅から2基検出された。（金子昭）

＜遺物＞（第152図、写真図版111）

土師器坏、甕破片が出土した。カマド埋土中位から68の土師器坏が完形で出土した。また、67の土師器坏はカマド上端出土の破片と本住居跡埋土3層及びトレンチから出土した破片を接合したものである。土器の総量は678gである。

[土器] 67は底部を欠損しているため、底部形状は不明である。体部外面の段や稜を持たないが、沈線が一条巡っている。口縁部は直立気味に立ち上がり、上端は外反気味になる。68は緩やかな丸みを持つ丸底で体部外面の段が不明瞭なものである。口径に対して器高が低く、皿状を呈している。内面には段に対応する位置に屈曲部を持つ。口縁部は内湾気味に立ち上がる。69は上端部に稜があり、口唇部は凹面になっている。外面の稜に対応して屈曲部を持つ。

[石器・石製品] 70は円形の礫を利用した磨石で、作業部位は表裏面を中心に4面観察される。床下土坑2の埋土から出土している。71は方形基調の礫を利用した磨石で、作業部位は表裏面の一部である。埋土から出土している。図化したもの以外では埋土から砥石が1点出土している。

[鉄器] 73は棒状の鉄製品である。両端を欠損しており、断面形は丸形である。

＜時期＞出土遺物から判断すると8世紀後半に属すると考えられる。

RA062竪穴住居跡（37号住）（第25、26図、写真図版16）

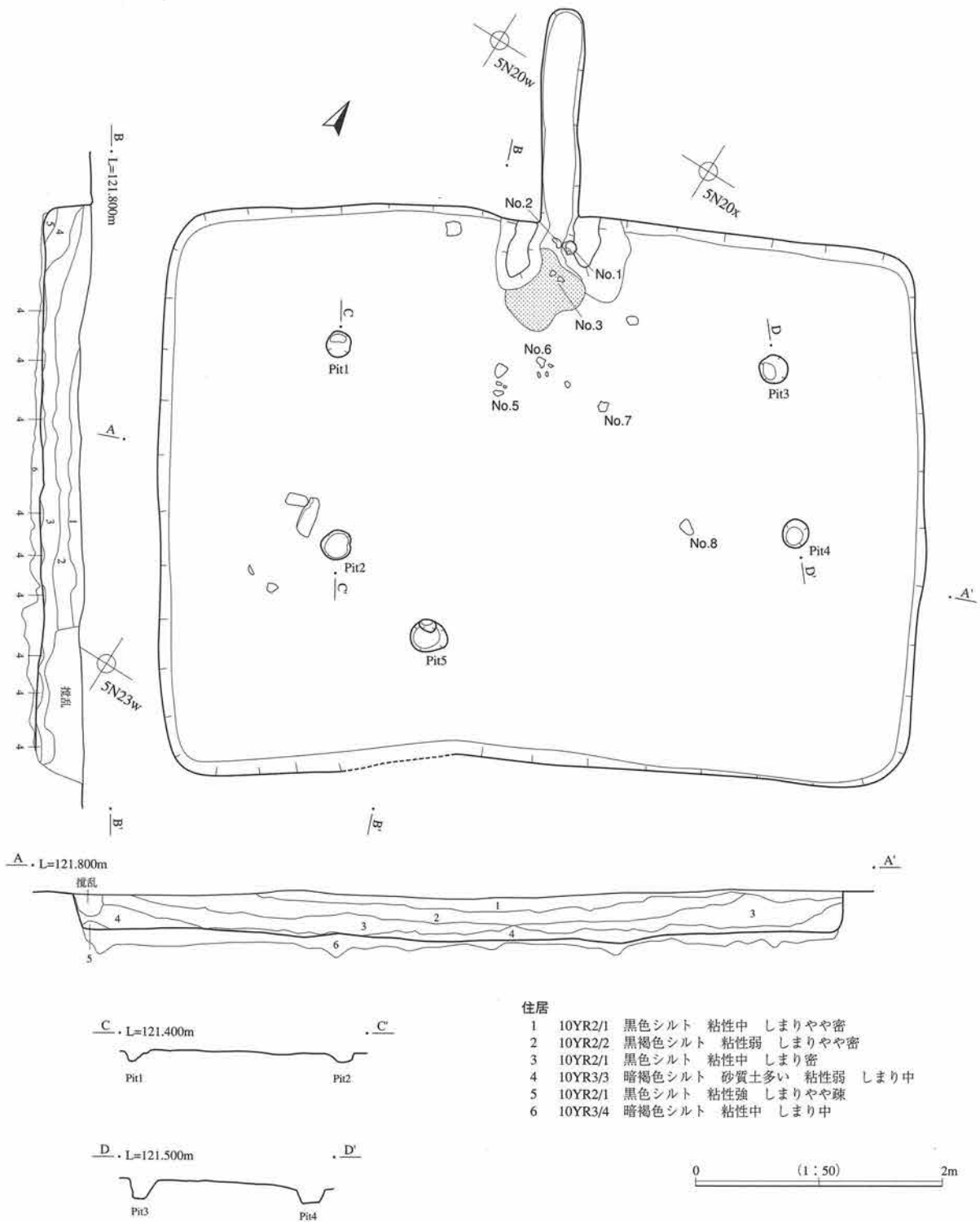
＜位置＞調査区中央部南寄りの5 N20wグリッド付近に位置する。

＜重複関係＞認められない。

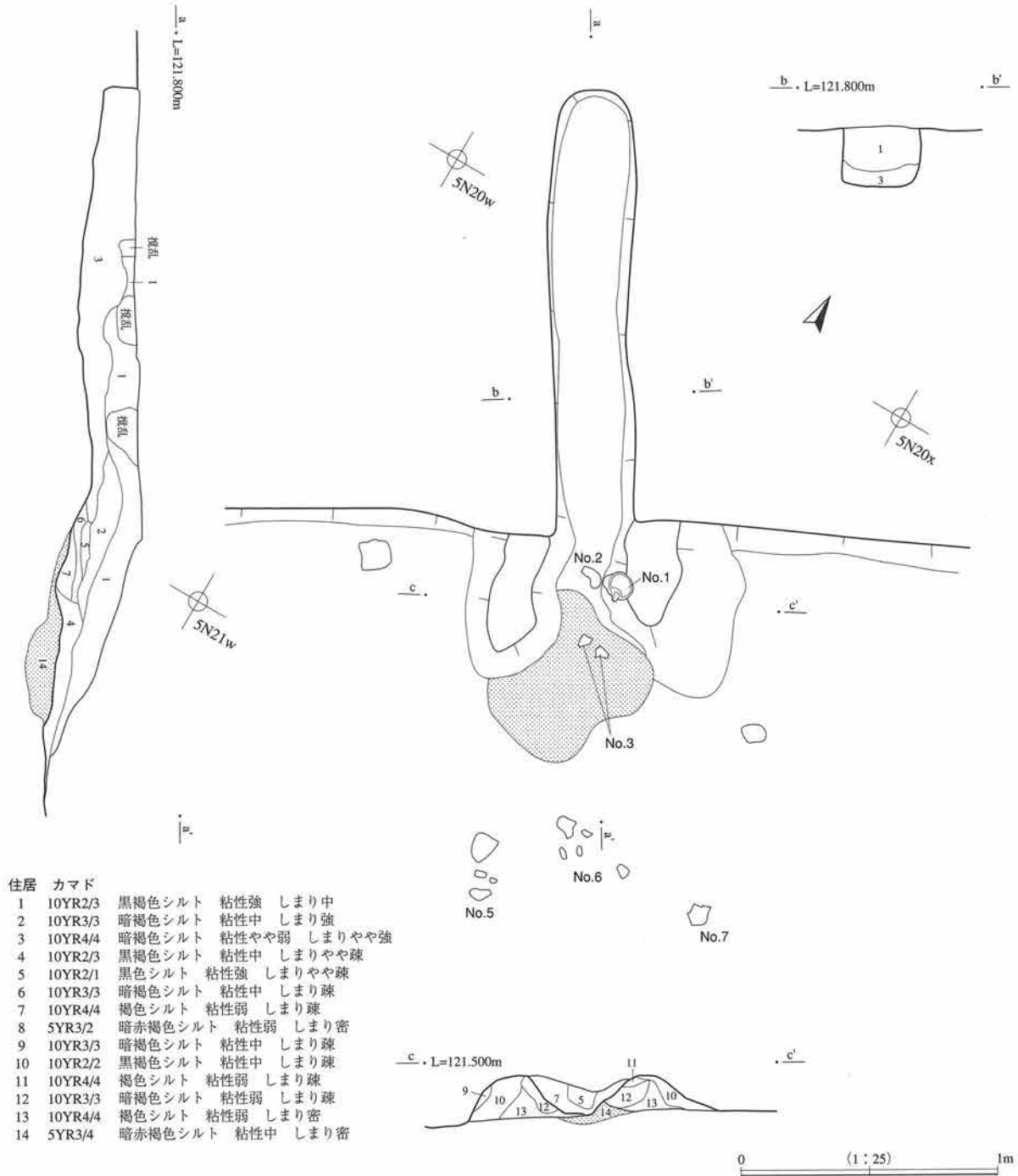
＜検出面＞IV層上面で検出した。

＜規模・平面形状・方向＞東西6.2m南北4.4mの長方形を呈する。壁高は22cmである。カマドの主軸

2 竪穴住居跡



第25図 RA062竪穴住居跡 (1) (37号住)



第26図 RA062竪穴住居跡 (2) (37号住)

方向による方向は $N-30^{\circ}-W$ である。

<埋土>主として1～5層で構成される。全て褐色土ブロック等混入物は認められず、自然堆積と考えられる。南端は最近の作物による攪乱が著しいが、底面近くは壁が若干残存している。

<床面・掘り方・貼り床>床面はあまり硬化していない。砂質土上面に貼り床が施されている。

<カマド>カマドは北西壁中央に作られる。方位は $N-30^{\circ}-W$ である。煙道は長さ1.6m直径26cmで、直径28cm深さ14cmの煙出しに向けて下降する。煙道上部は遺構検出時既に失われていたため、削り貫き式かどうかの判断はできない。袖はシルトで構成される。東袖の長さは68cm、西袖の長さは56cmで

ある。また、カマド東袖上面カマド側に高台付坏No1が正位で出土している。

<柱穴・付属施設>柱穴は4本で直径20cm前後、深さ18cm前後である。柱穴は長方形に配列している。(八木)

<遺物>(第153図、写真図版111、112)

住居南西部の住居覆土上層から鉄滓が出土している。出土した土器の総量は4,167gで、土師器坏、甕が出土している。

[土器] 74は平底で、体部外面に段や稜を持たないものである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、上端は内湾する。75は口縁部から体部の断片的な資料で、体部外面に段を持たないものである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、上端は直立気味になる。76は口縁部の断片的な資料で、体部外面に段を持たないものである。77は、坏部の体部外面に段を持ち、内面にはそれに対応する屈曲部を持つものである。外面の段はやや不明瞭である。口縁部は外傾しながら立ち上がり、上端は直立気味になる。口唇部は丸みを帯びている。78は頸部に段を持つもので、内面には屈曲部を持たない。口唇部は面取りされ、角張っている。79の底部はやや張り出している。焼成は本遺跡のなかでは良好な部類である。

[石器] 断片的な資料が多く図化は行っていないが、埋土やトレンチ・攪乱からUFが1点、剥片が4点、砥石が1点出土している。

[鉄器] 82は棒状の鉄製品である。一端を欠損している。断面形は丸形で、一端を面取りするように先端部を作出している。83は板状の鉄製品である。

[その他] 上記以外に椀形の鉄滓が1点出土している。

[時期] 出土遺物から判断すると8世紀中～後半(奈良時代)に属すると考えられる。

RA063竪穴住居跡(23号住)(第27、28図、写真図版17、18)

<位置>調査区南の6O18aグリッド付近に位置する。RD161から北西に0.6mの位置に立地する。

<重複関係>重複関係は認められない。

<検出面>表土耕作土の攪乱が著しく、表土直下IV層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向>3.09×3.00mで方形を呈する。壁高は30cmである。カマドによる主軸方向はN-50°-Wである。

<埋土>住居東側は木根による攪乱が著しく、床面まで破壊されている部分がある。埋土は1～4層に分層される。4層は住居廃絶後最初の住居壁崩落土で、埋土は自然堆積の様相を呈する。灰白色火山灰は混入しない。

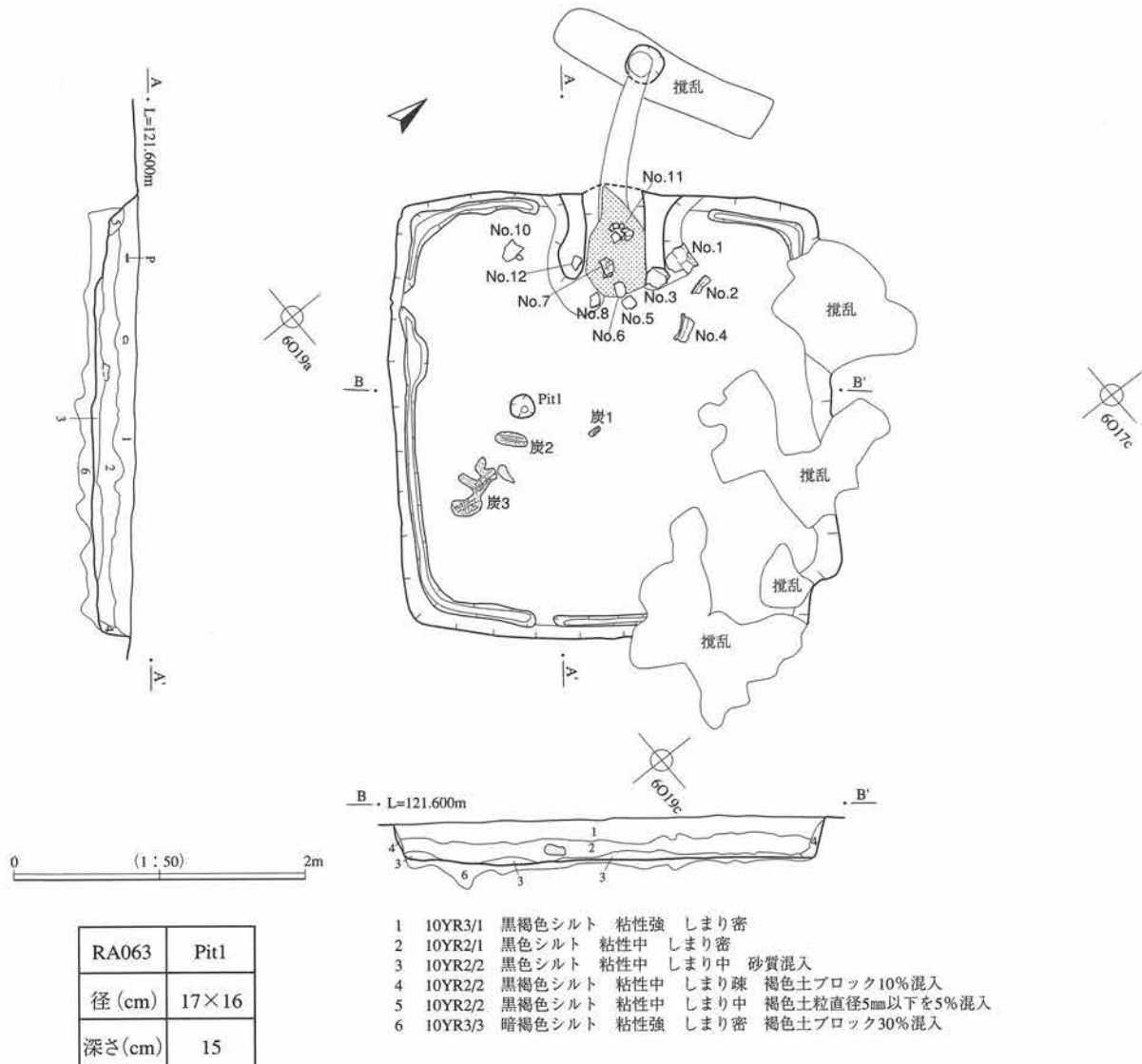
<床面・掘り方・貼り床>床面はやや硬化が認められるが、著しい程度ではない。掘り方は深さ10cm前後で浅く、貼り床が施される。

<カマド>北西壁中央に1基作られる。カマドの主軸方向はN-50°-Wである。袖部分はシルトで構成され、カマド燃焼部及びカマド手前から遺物がまとまって出土している。煙道は長さ2.4m直径20cmで、深さ110cm直径24cmの煙出しに向けて下降する削り貫き式である。煙出しは作物によって攪乱されており、現存値である。

<柱穴・付属施設>住居南東部分は作物による攪乱が著しいが、攪乱の及ばない西側の床面では周溝が検出された。周溝の幅は10cm、深さ5cmである。(八木)

<遺物>(第153、154図、写真図版112)

カマド付近から長胴形及び球胴形の土師器甕が出土している。出土した土器の総量は2,591gである。埋土から鉄器(88)が出土している。



第27図 RA063竪穴住居跡 (1) (23号住)

[土器] 85は頸部に段を持つものである。底部の張り出しは見られない。86は頸部に段を持たないので、底部を欠損している。体部上半に最大径を持ち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は尖っている。87は頸部に段を持つもので、口縁部から体部上半の資料である。口唇部は面取りされ、角張っている。焼成は良好である。

[鉄器] 88は先端部を欠損している釘である。断面形は方形である。

<時期>出土遺物から判断すると8世紀代(奈良時代)に属すると考えられる。

RA064竪穴住居跡 (52号住) (第29、30図、写真図版19)

<位置>第10次調査区北側の3 M22 n グリッド付近に位置する。

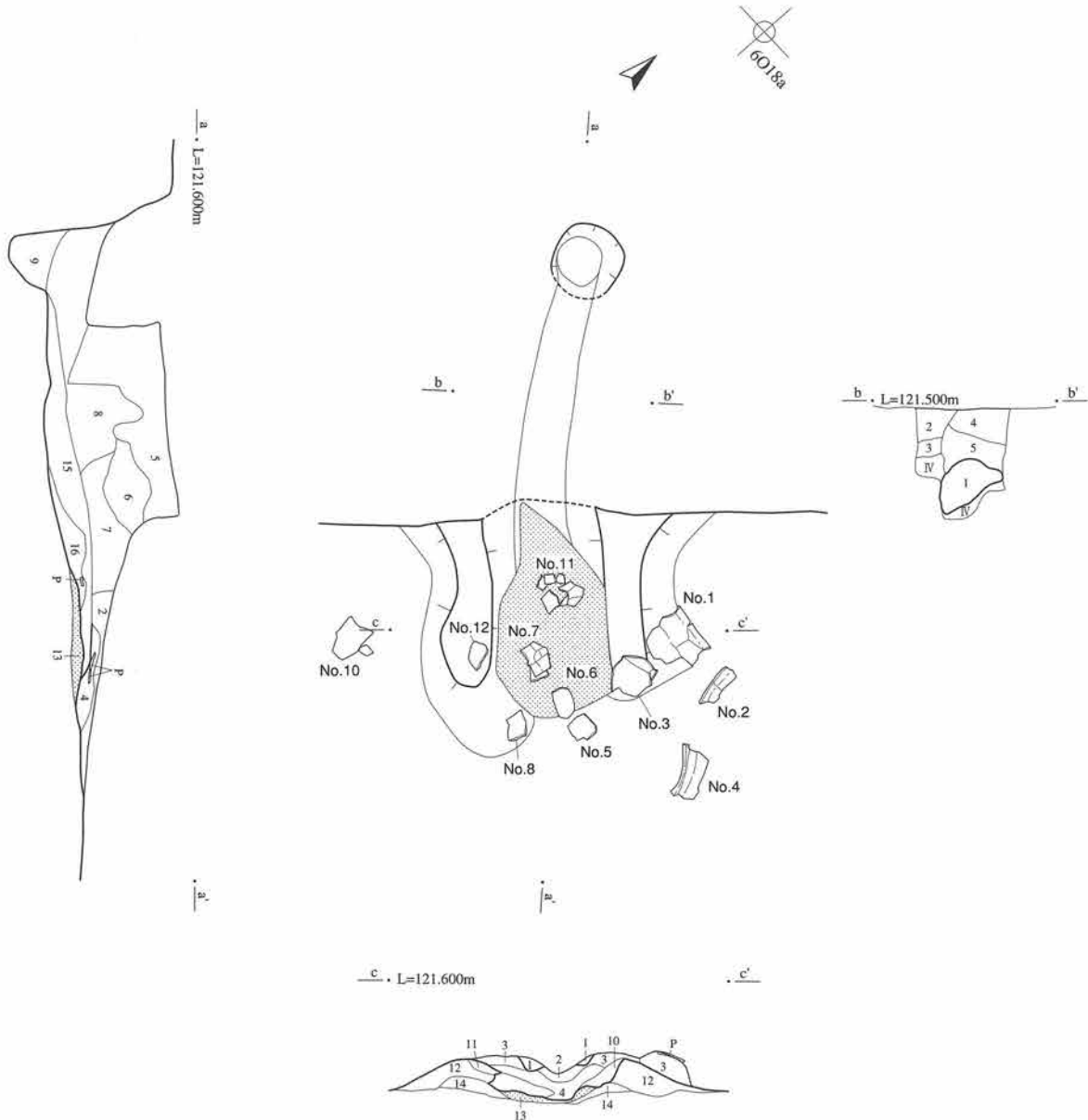
<重複関係>RA065、RB008 (PP127)、RD156、RD184、RD216、RG039と重複しており、本遺構はRA065を切り、RB008 (PP127)、RD156、RD184、RD216、RG039に切られている。

<検出面>検出面はIV層上面で、黒褐色シルトの広がりとして確認した。

<規模・平面形状・方向>検出時点ではRA065との新旧関係がつかめなかったため、新旧関係が把握

できるようにベルトを残して掘削を行っている。そのため、重複する部分は推定線となっている。また、現代の攪乱が縦横無尽に見られ、形状や規模把握の妨げとなっている。残存する部分から判断すると、平面形は方形を呈すると捉えられる。残存する規模は5.59×5.24mである。壁高は最大23cm残存している。主軸方向はN-73°-Wである。

<埋土>埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とし、色調や混入物により6層に分層した。上半1層・2層は礫以外の夾雑物はほとんど見られない。下半3層・6層には焼土粒や地山粒が散在する。一方、



カマド

1	10YR4/4	褐色シルト	粘性弱	しまり密	9	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性強	しまり密
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性弱	しまり中	10	5YR4/6	赤褐色シルト	粘性強	しまり密 暗褐色土混入
3	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性弱	しまり疎	11	10YR4/4	褐色シルト	粘性弱	しまり密
4	5YR4/6	赤褐色シルト	粘性弱	しまり疎	12	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性弱	しまり密
5	10YR2/1	黒色シルト	粘性弱	しまりやや密	13	5YR4/6	赤褐色シルト	粘性弱	しまり中
6	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	14	10YR4/4	褐色シルト	粘性弱	しまり中
7	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性強	しまりやや強	15	10YR4/4	褐色シルト	粘性弱	しまり中
8	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性強	しまり疎	16	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性強	しまりやや疎

0 (1:25) 1m

第28図 RA063竪穴住居跡 (2) (23号住)

燃焼部周辺に見られる4層には焼土粒や土器片を多く含み人為的な堆積を呈している。また、燃焼部を覆う堆積土やPit 7周辺では焼土ブロックとともに土器片が多く出土している。この堆積土は主に4層直下に見られる。壁周辺には崩落土と考えられるような堆積土は見られない。

<床面・掘り方・貼り床>地山黄褐色シルトブロックを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。貼り床の厚さは南側が厚くなる傾向が見られる。床面の硬化は見られない。

<カマド>西壁中央に設置される。非常に残存状態が悪く、南側の袖のごく一部と燃焼部が残存する。袖の構築土である褐色シルトが小山状に残存するが、芯材の有無等詳細は不明である。燃焼部底面には64×50cmの焼成面が形成される。燃焼部には土器片や礫が出土しているが、支脚は確認できない。煙道部は調査区外に伸びており、煙出し孔は確認していない。検出した煙道の全長は118cmで下降しながら伸びている。煙道の上部が現代の削平により消失しているため、構造は不明である。

<柱穴・付属施設>東壁際中央にPit 6、カマドの南西脇にPit 7、東隅にPit 8を検出した。Pit 6は平面形が円形を呈する袋状の土坑である。上半1層は黒褐色シルト、下半2層は暗褐色シルトで埋没している。形状から判断すると貯蔵穴と考えられる。規模は86×77cm、深さは最大で30cmである。Pit 7は規模129×83cm、深さ28cmの不整形の土坑である。土坑の南側半分は焼土ブロックと土器片によって覆われていた。下半3層・4層は黒褐色～暗褐色シルトで埋没しているが、焼土粒とともに、多量の土器片が含まれる。廃絶時に人為的に埋め戻されたかと捉えられる。底面からは96などが出土した。カマドの脇に位置することや土器が多く出土することから判断すると、貯蔵穴と考えられる。Pit 8は51×46cmの不整形の浅い土坑である。柱穴はPit 1～Pit 5の5個でPit 2～Pit 5が主柱穴と考えられる。(北村)

<遺物> (第154～156図、写真図版112～114)

内黒、非内黒土師器坏、須恵器甕破片、甑破片が計12,294g出土した。土器は24点図化した。貼り床からも土師器坏破片、土師器甕、黒色処理されない土師器の蓋破片が出土している。特に住居跡の西側であるQ 3・Q 4の各層から遺物が出土し、特に、Q 3・Q 4に広がる焼土ブロック内から土器片が多量に出土している。それらの土器は98や102などに復元された。また、出土状況図を示した89は倒位、103は口縁部が横位、101は底部が横位の状態で、埋土中位から出土している。

そのほか砥石3点がカマド周辺の焼土ブロック及び埋土から、台石が埋土から、釘が埋土から出土した。

[土器] 90は体部下端を回転ヘラケズリ調整している。91は細い刻線のある坏の体部破片である。これらのうち93と94は検出面や上位の攪乱層から出土したものである。97は甑と見られる土器の底部破片で、底が開口している。104は本遺構の埋土上位、RA071ベルト2層及びRG039出土の破片が接合したものである。このほか、図化に至らなかったが、埋土上層から出土した須恵器甕破片がRD156(67号土坑)出土の破片と接合している。

[石器・石製品] 13点とも安山岩製の荒砥である。114は表裏二面を、115・116は表面の一部を作業面としている。114の表面には溝状の使用痕が観察される。

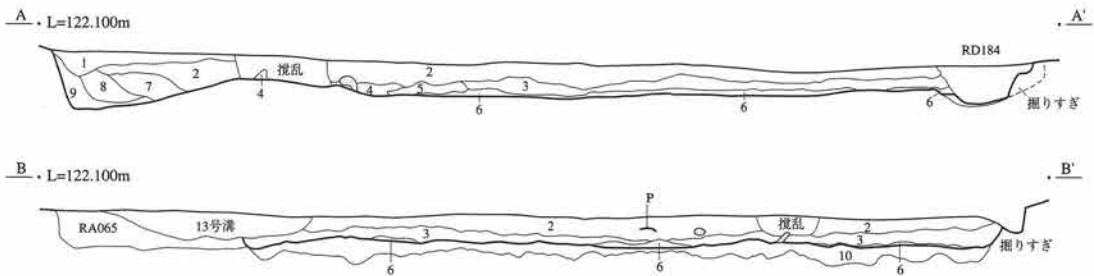
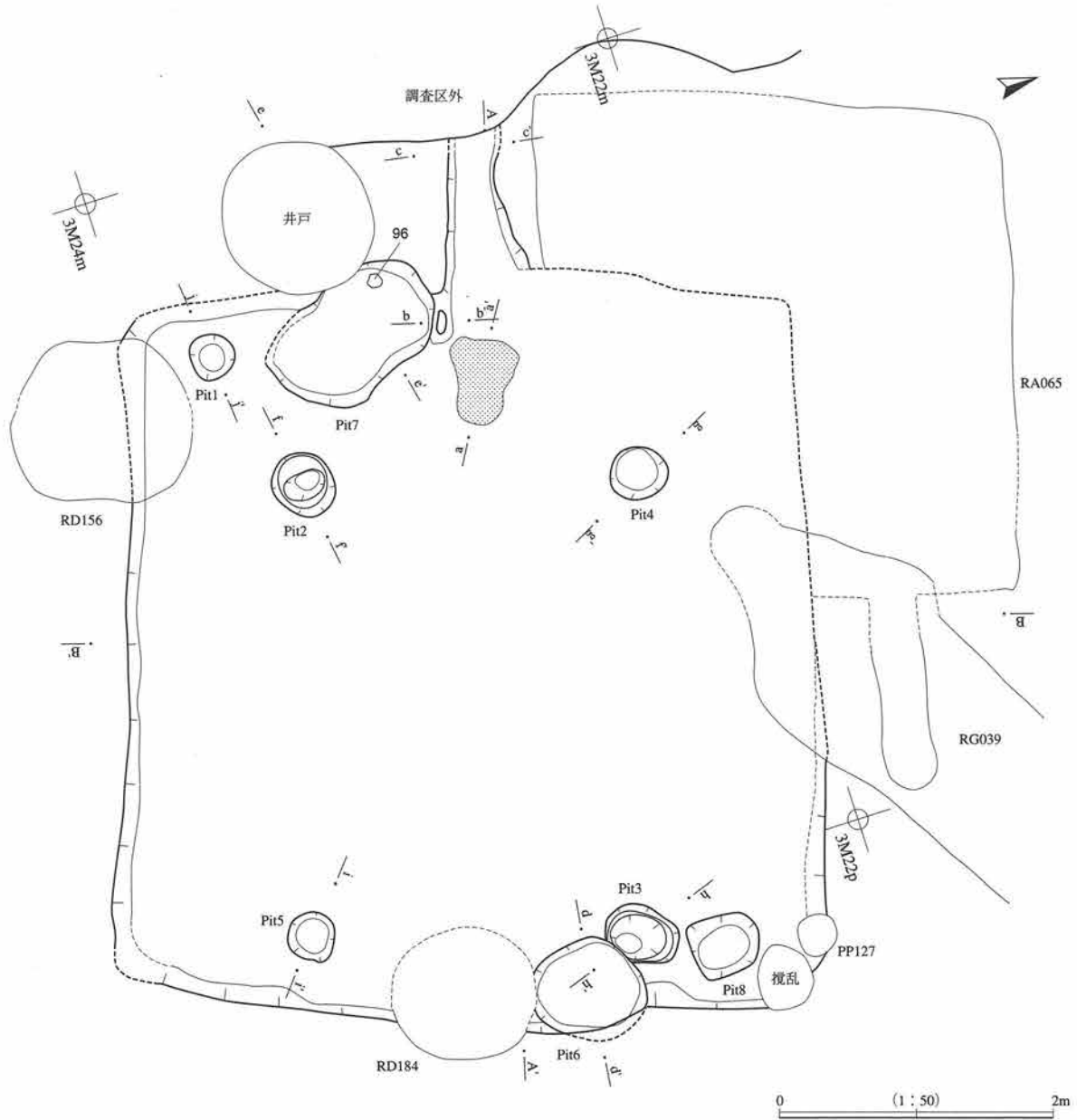
[鉄器] 117は完形の釘である。断面形は方形である。

[その他] 上記以外に本遺構にからむ攪乱層から鉄滓が1点出土している。

<時期>出土遺物から平安時代9世紀後葉から10世紀初頭と考えられる。

RA065竅穴住居跡(54号住)(第31図、写真図版20)

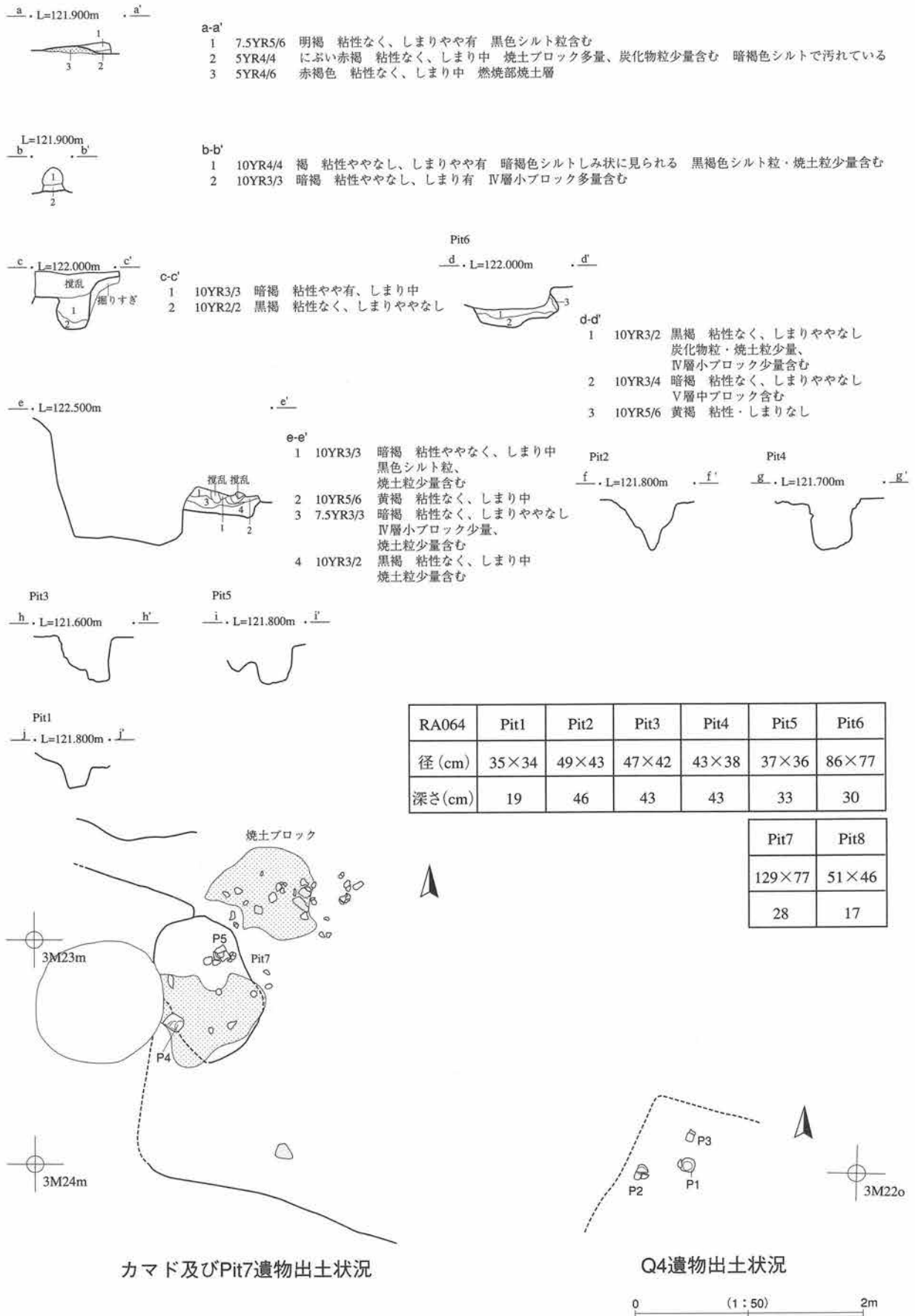
<位置>第10次調査区北側の3 M21 n グリッド付近に位置する。



A-A'・B-B'

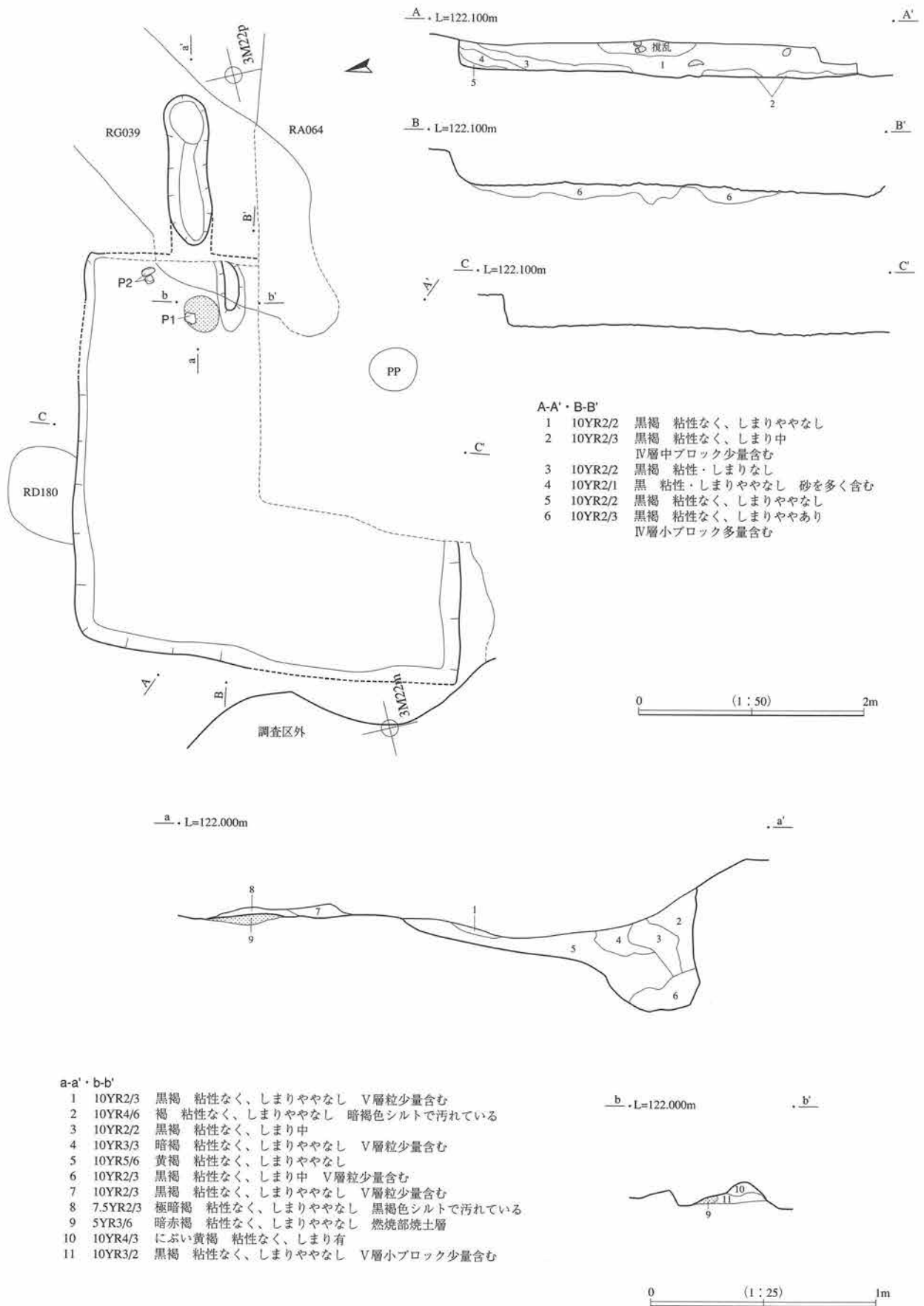
- | | | | | | |
|---|-------------|--------------------------------------|----|---------|--|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐 粘性なく、しまり中 | 6 | 10YR2/3 | 黒褐 粘性なく、しまり中 IV層粒中量含む |
| 2 | 10YR2.5/1.5 | 黒褐 粘性なく、しまりややなし | 7 | 10YR3/2 | 黒褐 粘性なく、しまり中～ややなし IV層粒中量、
黒色シルト粒極少量含む |
| 3 | 10YR2/1.5 | 黒～黒褐 粘性なく、しまりややなし
焼土粒極少量、IV層粒少量含む | 8 | 10YR2/2 | 黒褐 粘性なく、しまり中 IV層粒中量、焼土粒少量含む |
| 4 | 7.5YR3/2 | 黒褐 粘性なく、しまりややなし | 9 | 10YR3/3 | 暗褐 粘性・しまりややなし 黒褐色シルト中ブロック少量、
IV層中ブロック少量含む |
| 5 | 10YR3/3 | 暗褐 焼土粒多量含む | 10 | 10YR2/2 | 黒褐 粘性なく、しまり中 IV層ブロック多量、黒色シルト粒少量含む |
| | | 暗褐 粘性やや有、しまり中 | | | |

第29図 RA064竖穴住居跡 (1) (52号住)



第30図 RA064竪穴住居跡 (2) (52号住)

2 竪穴住居跡



第31図 RA065竪穴住居跡 (54号住)

＜重複関係＞RA064、RD180、RG039と重複しており、本遺構はRD180を切り、RA064、RG039に切られている。

＜検出面＞検出面はIV層上面で、RA064とともに黒褐色シルトの広がりとして認識した。

＜規模・平面形状・方向＞RA064とRG039に切られているため、壁面は北東隅の一部・南壁の一部・北西隅～北壁中央が残存するにとどまる。残存する部分から判断すると、3.76×3.46mの方形を呈するものと捉えられる。壁高は最大28cm残存している。主軸方向はS-75°-Eである。

＜埋土＞埋土は黒褐色シルトを主体とし、色調や地山の混入具合により4層に分層した。埋土の大半を占める1層はRA064の上層と非常に類似している。下層は全体的にしまりがなく、粉状の地山や細砂の混入が見られ、RA064の埋土とは容易に分層できる。

＜床面・掘り方・貼り床＞地山黄褐色砂質シルトを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。床面の硬化は見られない。

＜カマド＞東壁北寄りに設置され、煙道方位は主軸方向より6度西に振れる。カマドの燃烧部周辺が広くRG039によって切られている。そのため、残存するのは南袖の一部と燃烧部底面の焼成面である。袖にはぶい黄褐色シルトの積み上げで、礫等の芯材の使用は不明である。焼成面の範囲は33×30cmで、ほぼ円形を呈する。焼成面の直上からは土師器甕の底部が正位の状態で出土しているが、支脚の存在は確認できない。煙道の全長は推定100cmで、下降しながら先端の煙出し孔に向かって伸びている。煙道部の埋土には天井部の崩落土と考えられる地山黄褐色砂が厚く堆積しており、煙道部は削り貫き式と捉えられる。

＜柱穴・付属施設＞なし。

(北村)

＜遺物＞(第156図、写真図版114)

埋土から須恵器甕、土師器甕、内黒土師器坏、非内黒土師器坏の破片が1,222g出土した。図化したのは土師器坏、甕の4点である。焼成面直上で出土した122を除くと、ほとんどが埋土中からの出土である。119はカマドの北脇埋土下位からの出土である。

[土器] 119は二次的に被熱しており、黒色処理されていると思われるが定かでない。122は砂底である。

＜時期＞出土遺物が少ないので、確かではないが、平安時代の9世紀後葉～10世紀初頭に属すると考えられる。

RA066竪穴住居跡(31号住)(第32図、写真図版21)

＜位置＞調査区北部の3 M22 y グリッド付近に位置する。

＜重複関係＞ない。

＜検出面＞Ⅲ層である。煙道の一部と煙出し上面が道路側溝によって破壊されている。また、住居跡を水道管の攪乱が貫いており、壁の一部が破壊されている。

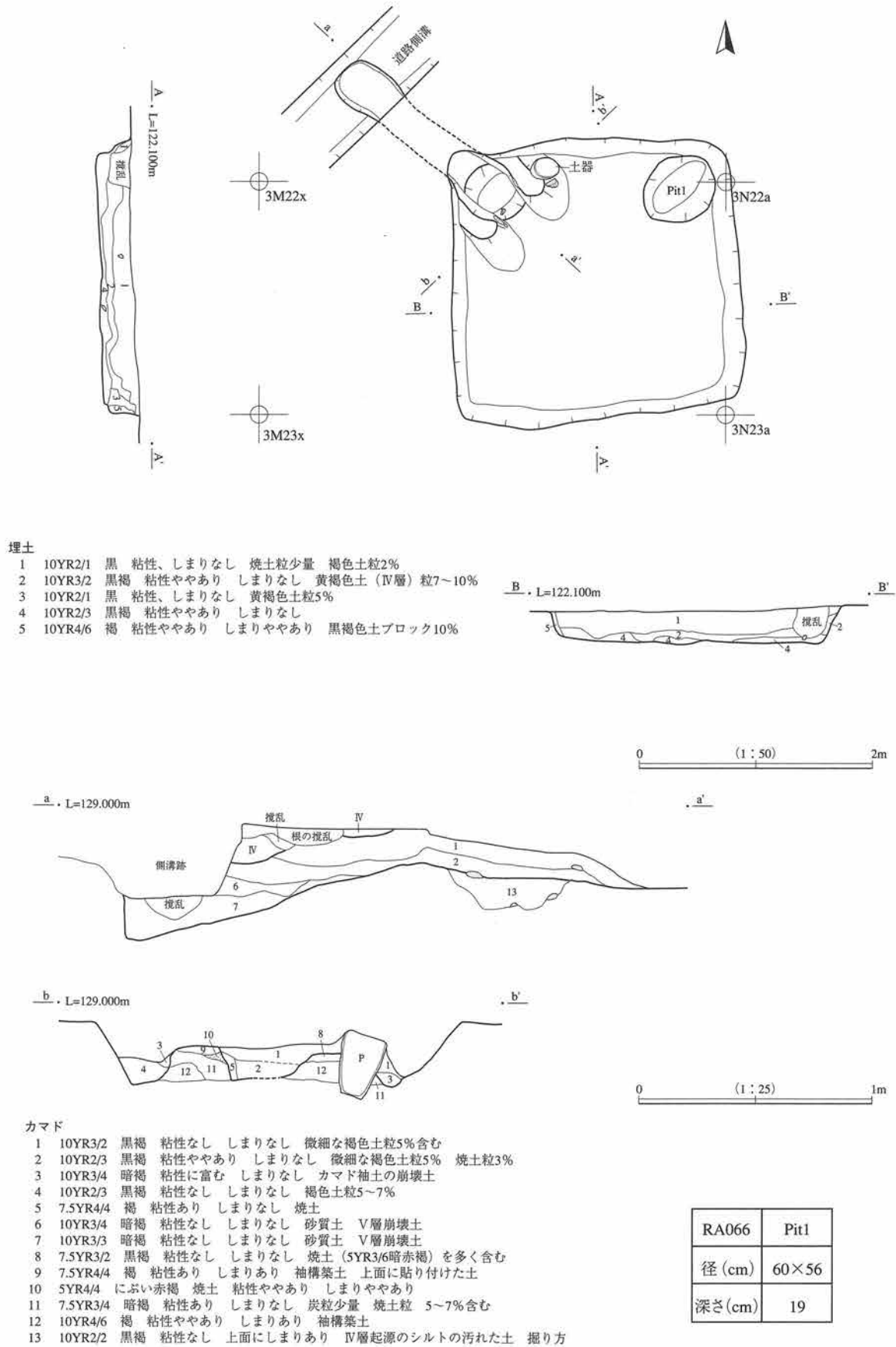
＜規模・平面形状・方向＞一辺の長さが2.51×2.43m、壁高31cmの方形である。方向はN-47°-Wである。

＜埋土＞5層に細分され、焼土粒やIV層起源の褐色土粒を含む黒～黒褐色土である。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面はVI層上面まで掘りこんでおり、VI層に含まれる小礫が部分的に露出するものの、平坦で固い。貼り床はない。

＜カマド＞北西隅に位置する。天井は失われているが、両袖は残存している。右袖から口縁部を欠いた土師器甕が出土した。芯材としていたものと考えられる。左袖は焼土を含んだ暗褐色土も構築に用

2 竪穴住居跡



第32図 RA066竪穴住居跡 (31号住)

いられており、カマドを修繕して使っていた可能性がある。燃焼部には焼土はあまり発達していない。袖内側側面に少し形成されるのみである。燃焼部底面は周囲より窪んだ深さ13cmの土坑となっている。煙道は長さ1.3mの削り貫き式で、底面が煙出しに向かって徐々に下がる。

〈柱穴・付属施設〉北東隅に土坑がある。径は60×56cmの楕円形で、深さは19cmである。（金子佐）
 〈遺物〉（第157図、写真図版114）

土師器甕、非内黒土師器坏の破片が1,295g出土した。図化したのはカマド右袖から立位で出土した123の1点のみである。そのほか、埋土から土師器甕、坏の破片が出土した。

[土器] 123の底部は砂底である。

〈時期〉出土遺物から、平安時代に属する。

RA067竪穴住居跡（35号住）（第33図、写真図版22）

〈位置〉調査区北部の3 N24 c グリッド付近に位置する。調査区を南北に走る沢状地形の直上にあたる。

〈重複関係〉南壁でRD188、RD189と重複し、本住居跡が新しい。

〈検出面〉Ⅱ b層である。

〈規模・平面形状・方向〉一辺の長さが2.88×2.86m、壁高31cmの隅丸方形である。

〈埋土〉6層に細分される。微細な褐色土粒を若干含む黒色土が主体である。本住居は沢状地形の最深部の上位にあり、住居跡のまわり全体がやや凹んだ地形であるため、埋土最上層は住居を含む窪み全体を覆っている。断面図で図化できなかったが、検出時には最上層の上面に灰白色火山灰が認められた。カマド周辺の床上には焼土粒や炭粉を多く含む層が堆積している。

〈床面・掘り方・貼り床〉床は平坦で、固くしまっている。黒色土や褐色土が斑に入り混じる暗褐色土を敷いて貼り床としている。

〈カマド〉西壁のやや北寄りに位置する。カマドの残存状況は悪く、袖や天井に使用したと思われる褐色土が西壁寄りや焼土周辺に残っているのみであった。焼土は燃焼部に24×21cmの楕円状に検出されたほか、煙道入り口に若干認められる。カマド袖の構築のため礫の据え方と思われる小土坑（径13～16cm、深さ7.6～17.5cm）が5個検出された。煙道は西壁に直交せず、27°北に偏っている。長さはmである。煙道の底は入り口から徐々に低くなり、煙出しに至って、さらに一段深くなる。掘りこみ式と思われ、上層には混入物の少ない黒色土、中層～下層には黒褐色土～暗褐色土が堆積する。煙出し部分からはこぶし大の礫が多く出土した。なお、煙道の壁上部は広く崩落している。

〈柱穴・付属施設〉北東隅に径74×54cm、深さ16cmの楕円形の土坑がある。埋土は炭粒を含む黒褐色土である。柱穴は検出されなかった。（金子佐）

〈遺物〉（第157図、写真図版115）

土師器甕、内黒、非内黒、内外面黒色の土師器坏が788g出土した。須恵器はほとんど含まれない。主に埋土からの出土である。図化したのは5点で、内黒土師器坏、非内黒坏、土師器甕である。

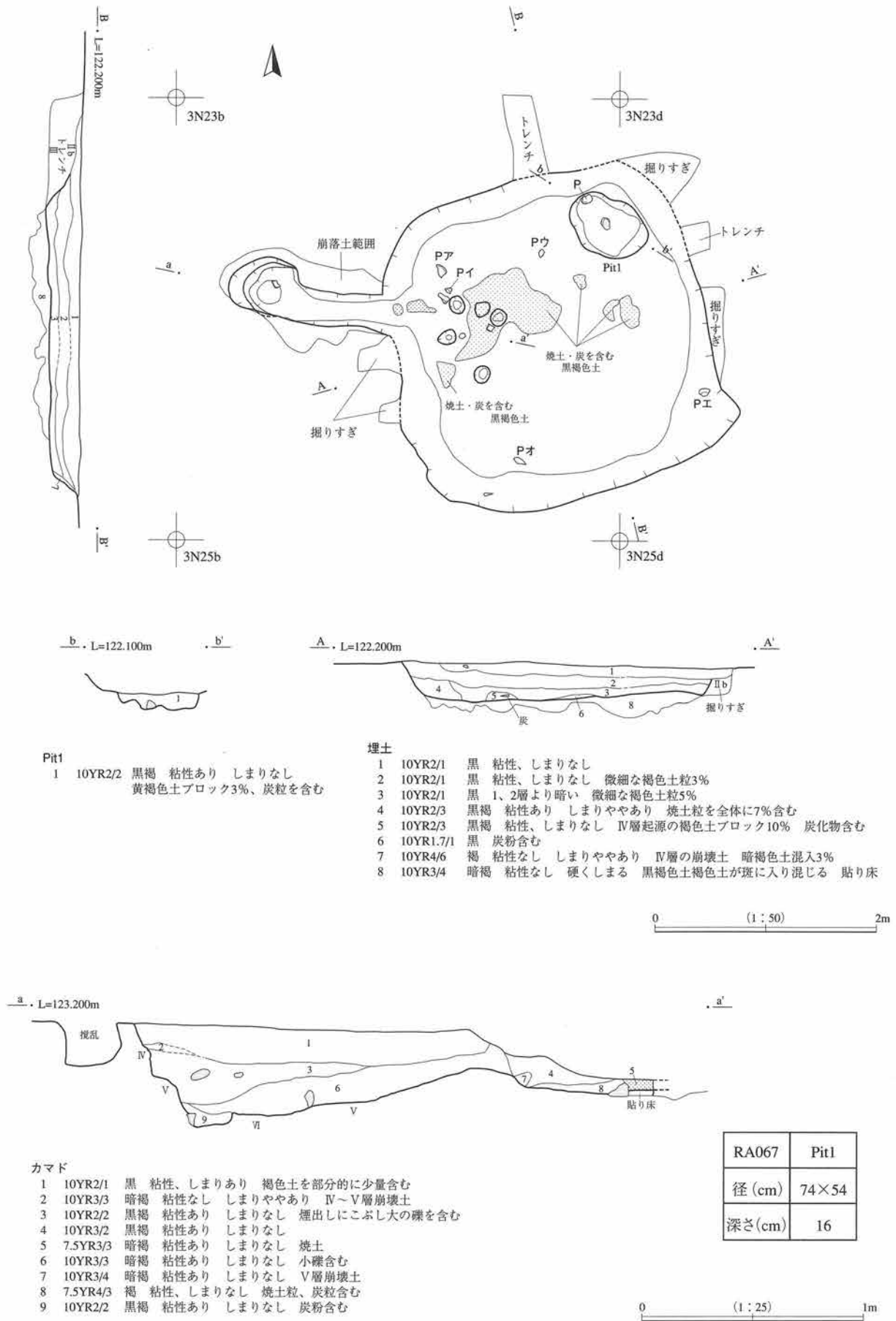
〈時期〉出土遺物が少ないので確かではないが、埋土最上層の灰白色火山灰と出土遺物から平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

RA068竪穴住居跡（50号住（新））（第34図、写真図版23）

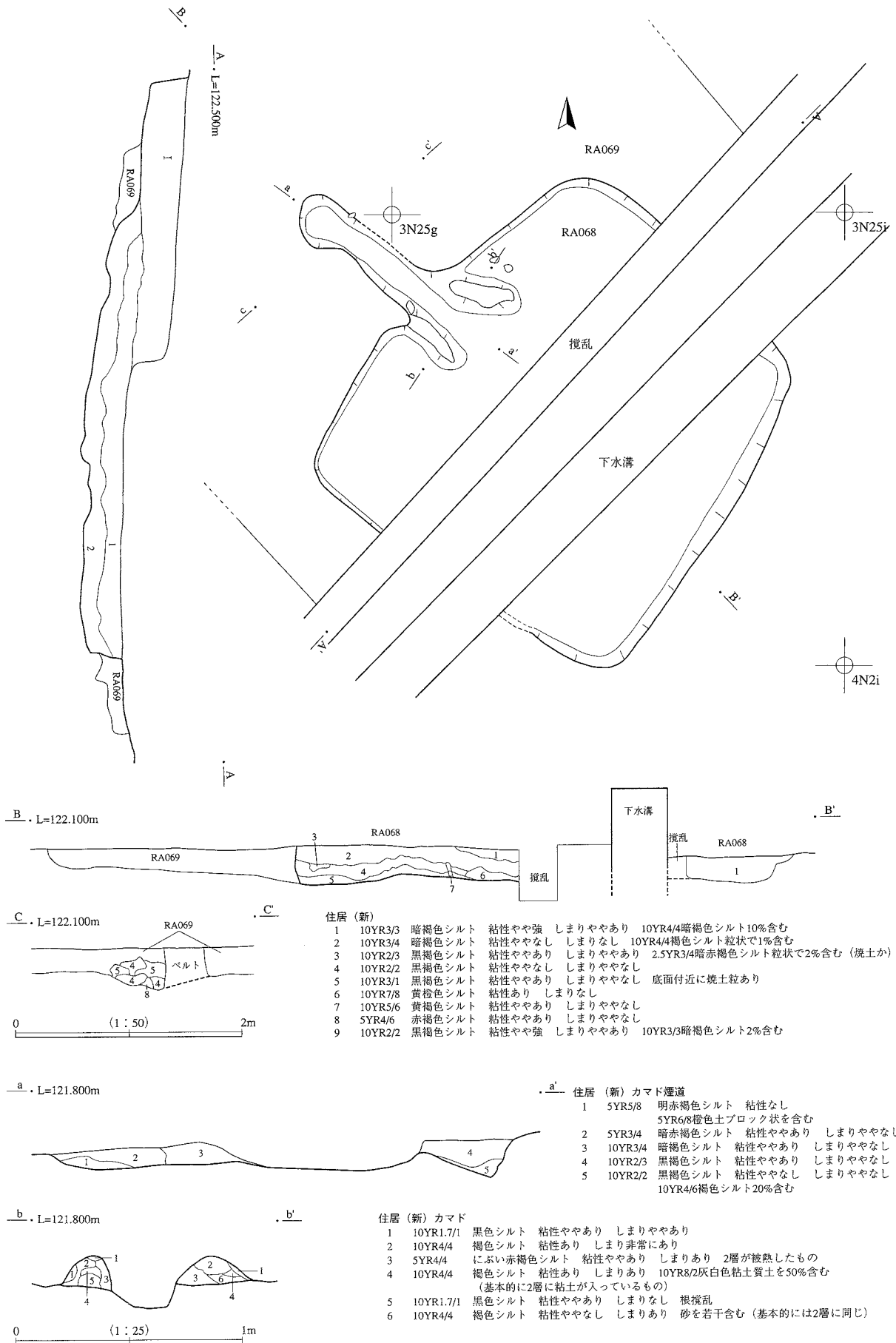
〈位置・重複関係〉調査区北部の3 N25 f グリッドに位置する。

〈重複関係〉RA069と重複し、それを切る。

2 竪穴住居跡



第33図 RA067竪穴住居跡 (35号住)



第34図 RA068竈穴住居跡(50号住居新)

＜検出面＞RA069のプランが把握しにくかった所（特に西側）があったため、攪乱を掘り抜き、それをトレンチをに見立てて断面にて立ち上がりを把握した。その際、西側で遺構の切り合いと思われる部分があったのを確認したが、反対の東側では基盤層と思われる砂礫層を黒褐色シルトが切り込む状況だったので、この時点では遺構同士の切り合いを想定しながらも、1棟の住居として精査し始めた。検出面であるIV層上面より5cmほど下げた時点で、やや暗めの黒色土の広がりを確認し、別の遺構が絡んでいると判断した。その住居をRA068とし、RA069とは別扱いにした。平面及び断面の観察から、RA069が埋没した後、RA068が構築されているのは明らかで、RA069→RA068という変遷になる。

＜規模・平面形状・方向＞3.7×3.4mのややゆがんだ方形を呈する。方向はN-50°-Wである。壁は直立して立ちあがり、20cm前後残存する。

＜埋土＞大きく2つの層に分けられる。これらはレンズ状に堆積しているので、自然堆積と考えられる。なお、50号（旧）住居の南北断面でも本住居の埋土が観察されるが、これは位置的に見て燃焼部から煙道にかけての埋土と思われる。

＜床面・掘り方・埋土＞床面は堀方埋土の黒褐色シルトによって貼り床が施されてる。

＜カマド＞北壁のほぼ中央に構築されている。燃焼部の規模は35×40cmである。地山の周りに暗褐色シルトや黒褐色シルトを貼り付けて構築している。礫や土器などは芯材として利用されていない。煙道は、RA069のセクションベルト脇に設定したサブトレンチと重なっており、カマドとして掘り下げていないが、セクションベルトの断面を見る限り、削り貫き式によって構築されていたものと推測される。壁から0.9m延びて煙出にいたる。

＜柱穴・付属施設＞柱穴や土坑などは検出されていない。

（金子佐）

＜遺物＞（第157、158図、写真図版115）

本住居跡はRA069を切っているが、精査中に重複が判明したため、取り上げた土器の中にはどちらに所属するか、不明なものもある。埋土およびカマド周辺から土師器内黒坏、非内黒坏、土師器長胴甕、球胴甕破片、須恵器坏、壺、甕が出土している。本欄では確実に本住居から出土したと思われるものについて、10点を掲載した。土器の総量はRA068、RA069合わせて4,241gである。

そのほか、埋土から用途不明の石製品が出土している。

[土器] 133はカマドと思われる箇所の直上から出土した。135はQ2の上層から出土した球胴甕と思われる口縁部破片であるが、外面に朱による赤彩が施されている。RA069の床直上から出土した141と類似しており、赤彩が施されるという特徴から同一固体の可能性が高い。いずれも時期は遡る可能性があり、流れ込んだものと考えられる。138はやや異形の壺であり、胎土に毛のような繊維質のものが、顕著に見られる。

[石器・石製品] 141は安山岩製の不明石製品である。中央部が環状にくぼんでおり、その内面には黒色の付着物が観察される。図化したもの以外では埋土から砥石が1点出土している。

＜時期＞出土遺物か少ないので確かではないが、平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属する可能性がある。

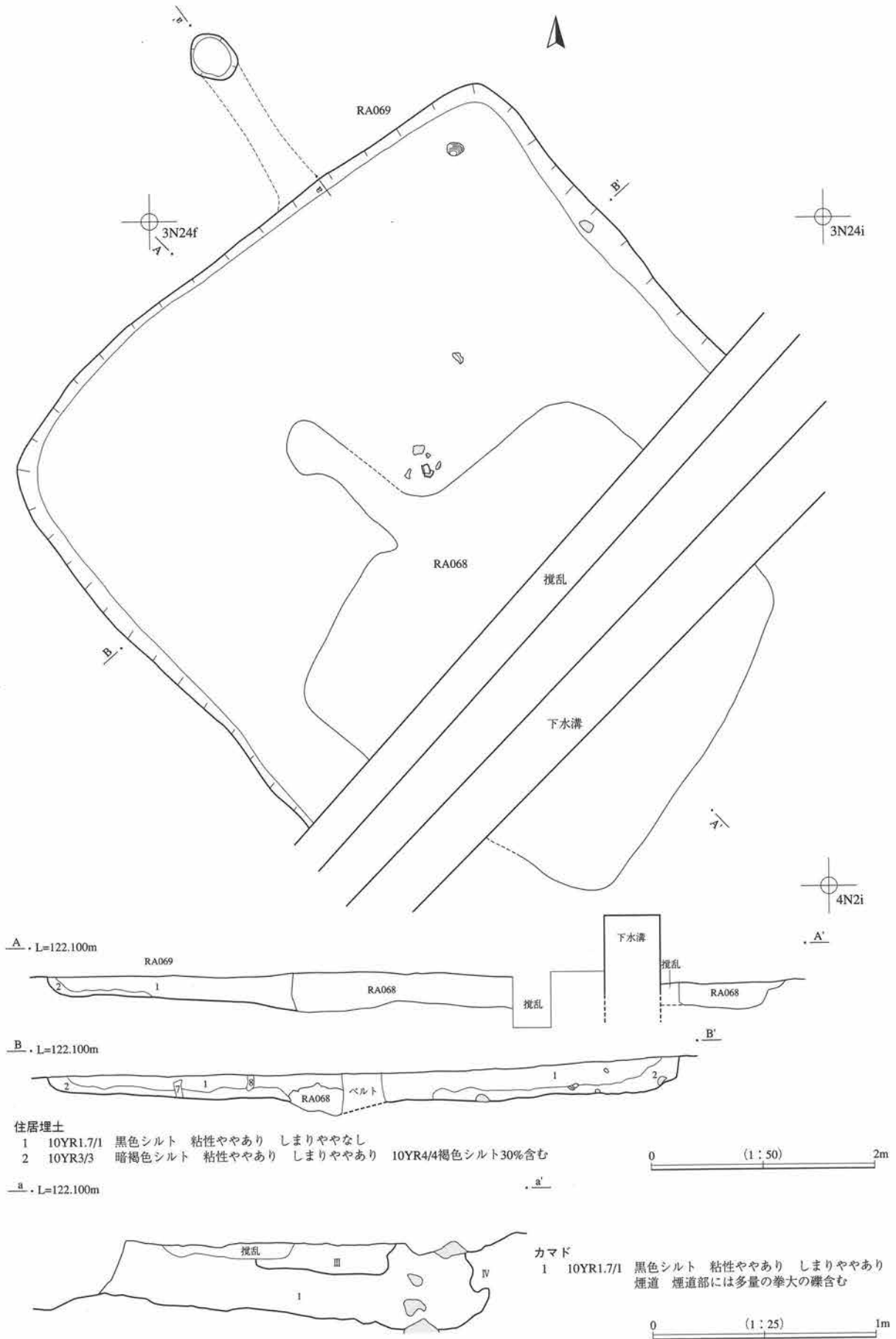
RA069竪穴住居跡（50号住（旧））（第35図、写真図版24）

＜位置＞調査区北部の3 N24 gグリッドに位置する。

＜重複関係＞RA068と重複し、それに切られる。

＜検出面＞IV層で検出した。

＜規模・平面形状・方向＞南側が下水溝により破壊されているので、全体の規模・形状は不明だが、



第35図 RA069竪穴住居跡 (50号住居旧)

一辺5.5mの正方形を呈していたと推測される。主軸方向はN-35°-Wである。壁は外傾しながら立ちあがり、15cm前後残存する。

<埋土>大きく2つの層に分けられる。これらはレンズ状に堆積しているので、自然堆積と考えられる。

<床面・堀方・貼り床>地山土上面を床とし、貼り床が施された痕跡は確認されなかった。床は南北のセクションベルト付近を境として東と西とで様相が大きく異なる。東側は埋土を除去した時点で基盤層である砂礫層が露出するが、西側ではその上に堆積するV層相当の地山となる。そのため、床面は水平でない。東西方向のセクションベルトの断面と攪乱を利用したトレンチを観察しても砂礫層の上にV層相当の地山は現れないので、東側では地山がそれほど厚く堆積していなかったため、住居を掘り込む際にすぐ砂礫層まで到達してしまったものと思われる。

<カマド>北側に煙出らしき小ピットがあり、北壁にカマドが構築されていると想定して掘り下げたが、天井部はおろか袖の痕跡も確認できなかった。ただ、埋土をすべて掘り下げ、壁が露わになった時点で、北壁に円い黒色のシミを確認でき、地山との境界付近にわずかに比熱痕が見られたので、煙道と判断した。このシミの周辺の床面を再精査したが燃焼部と思われるくぼみや、袖の痕跡は検出されなかった。また、燃焼部と思われる部分では焼土はもちろん比熱した痕跡も見られなかった。煙道は削り貫き式で、壁から1.2m延びて煙出に至る。煙出部分からは径が5～8cmほどの礫が多く出土した。カマドの袖が検出できなかったこと、煙出に多量の礫が充填されていることから、本住居のカマドは意図的に破壊されたものと推測される。

<柱穴・付属施設>土坑や柱穴などは検出されていない。

(金子佐)

<遺物> (第158、159図、写真図版115)

本住居跡はRA068に切られており、精査中に重複が判明したため、取り上げた土器の中にはどちらに属するか不明なものもある。主に住居の北東隅と中央部分の床面から出土している。本欄では、確実にRA068から出土した遺物を除いて、掲載しており、中にはRA068出土のものも混入しているかもしれない。RA068、RA069合わせて4,241gの土器が出土し、4点を掲載した。そのほか、小片で図化に至らなかったが、床直上から土師器甕、内黒土師器坏破片、埋土から須恵器坏、甕、壺の破片、非内黒土師器坏破片が出土した。掲載した土器はすべて土師器甕及び球胴甕である。

[土器] 141は球胴甕と思われる土器口縁部破片で、口唇部及び内外面に朱による赤彩が施されている。RA068の135と同一と思われる破片で、時期は遡る遺物と思われ、流れ込みの可能性はある。142は砂底である。

[石製品] 145は安山岩製の荒砥である。床面から出土している。5面全面を作業面としており、表面は強い湾曲を持っている。

<時期>出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

RA070竪穴住居跡 (59号住) (第36図、写真図版25)

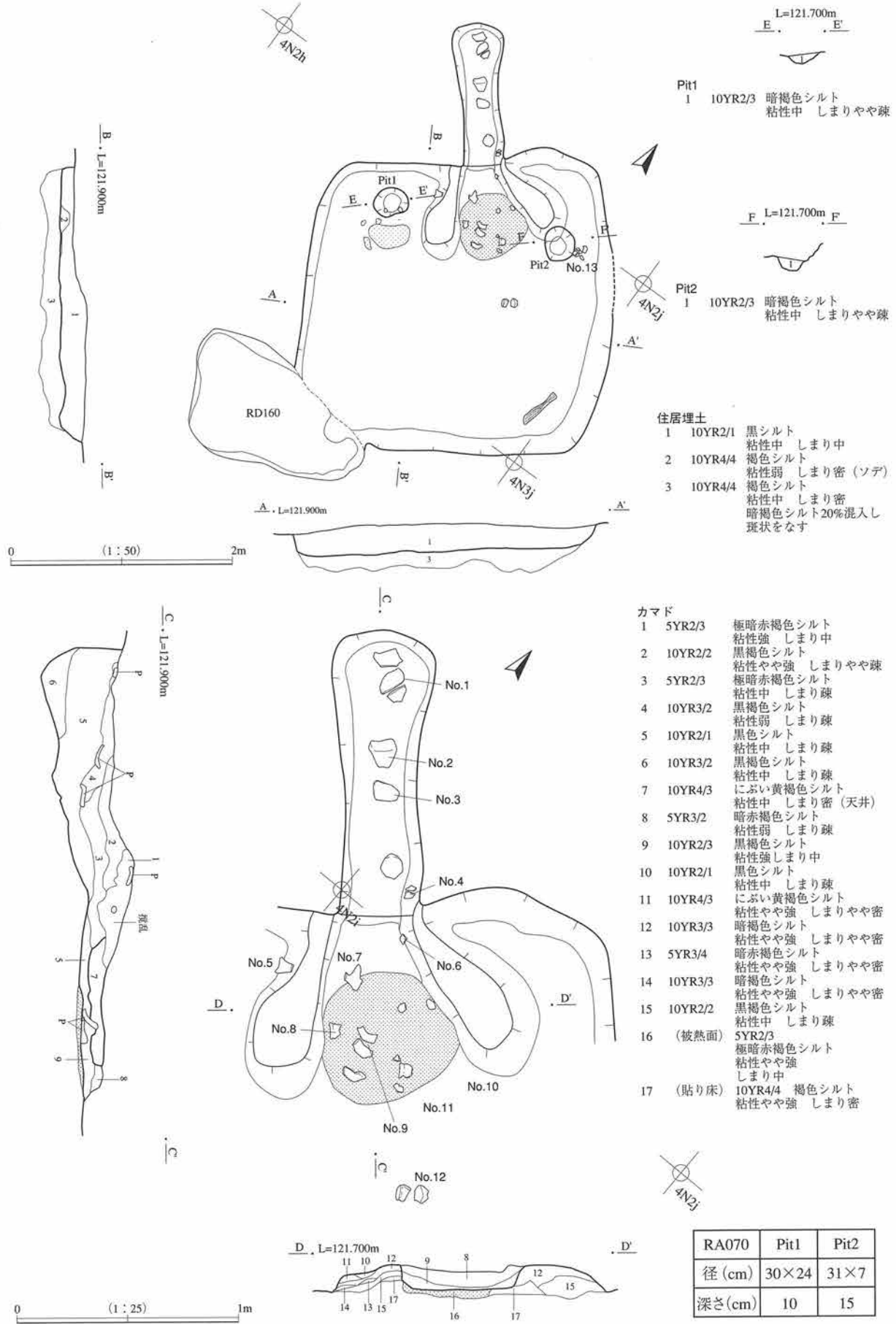
<位置>調査区中央部北、4 N 2 h グリッド付近に位置する。

<重複関係>南西端をRD160に切られる。

<検出面>Ⅱ層下位～Ⅲ層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向>2.8×2.58mで方形を呈する。壁高は20cmである。カマドによる方向はN-36°-Wである。

<埋土>南北断面では2層に分層されるが、2層はカマド袖であり、埋土は黒色土の単層である。混



第36図 RA070 竪穴住居跡 (59号住)

入物は認められず、自然堆積と考えられる。

<床面・掘り方・貼り床>床面はカマド手前から中央にかけてやや硬化している。カマド東脇に焼土、遺構南東端に壁に並行に棒状の炭化材が出土している。掘り方はほぼ均等で、深さ20cm程度である。貼り床は暗褐色土が斑状に混入する褐色土で構成される。

<カマド>カマドは東壁に1基確認した。東壁のほぼ中央に位置する。軸方向はN-36°-Wである。煙道は長さ1.3m直径33cmで、直径46cm深さ4cmの煙出しに向けて下降する刳り貫き式である。煙道入り口は燃焼部より一段上がっている。袖は褐色土を基本に構築されており、西袖の長さは86cm、東袖の長さは88cmである。支脚は出土していない。3・8層はカマド内部の焼土層である。天井部の被熱も著しく、非常に使い込まれている。煙出しから燃焼部にかけて遺物が出土している。遺物は全て床面直上ではなく、煙出から燃焼部出土全てが床面から浮いた層から出土している。

<柱穴・付属施設>ピットは2個確認したが、配置・規模から柱穴である可能性は低い。(八木)

<遺物>(第159、160図、写真図版116)

2,307gの土器が出土し、4点を図化した。黒色処理のない土師器坏、土師器甕が出土した。そのほか貼り床から内黒土師器の壊破片、床上及び埋土下層から土師器甕破片、埋土Q2、Q3及びPit 6から敲きのある須恵器甕破片が出土したが、小片で図化に至らなかった。

[土器] 146、147は埋土から出土した。土師器甕の148はカマド煙道、カマド及び検出面から、149はカマド煙出及び貼り床から出土したものである。

<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後半から10世紀初頭に属すると思われる。

RA071竪穴住居跡(53号住居)(第37、38図、写真図版26)

<位置>調査区北側の4N4aグリッド付近に位置する。

<重複関係>遺構検出が不可能だった下水溝付近以外では重複する遺構はない。

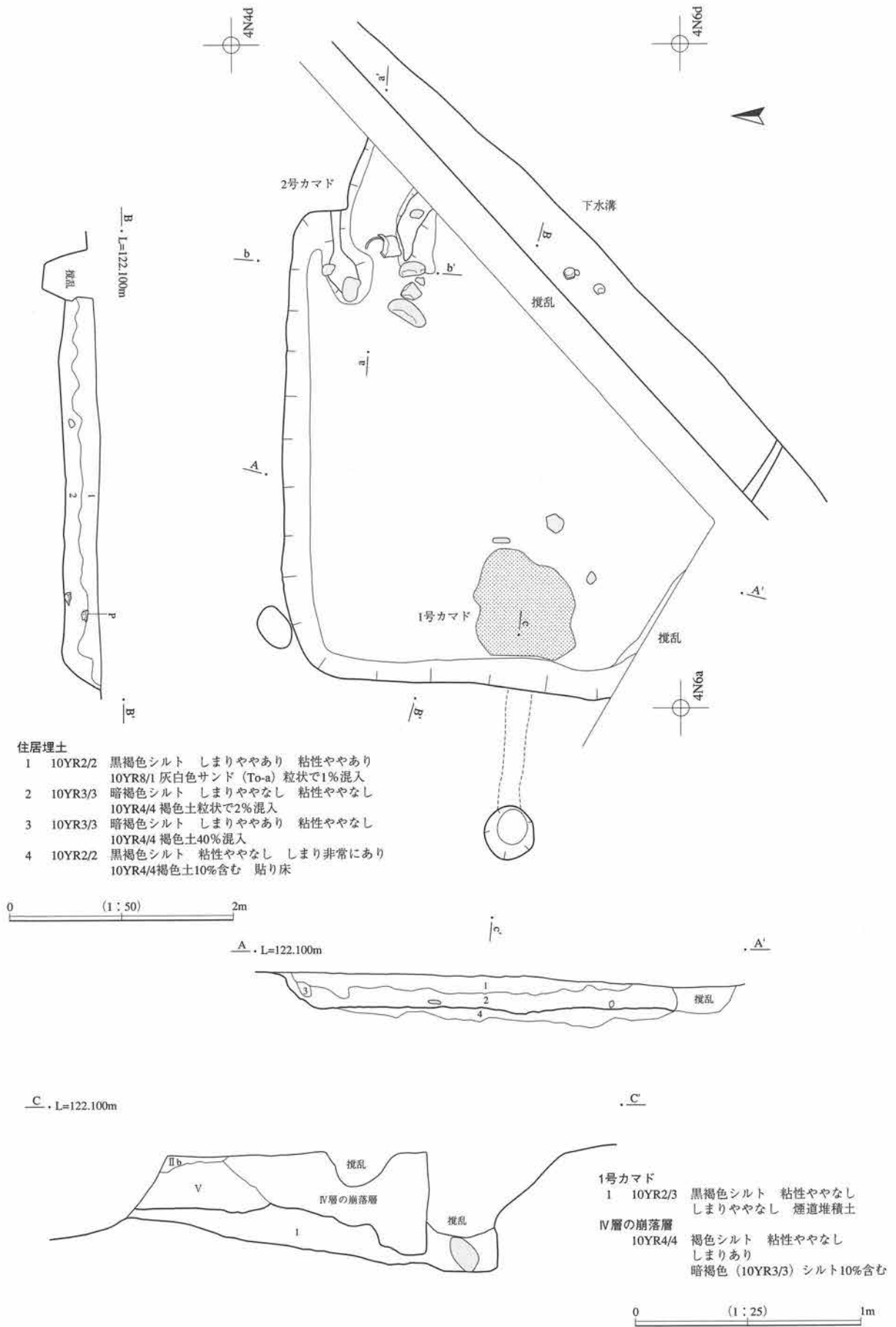
<検出面>IV層で推定方形のプランを検出した。

<規模・平面形状・方向>精査不能の部分があったため規模は不明だが、北壁は4.08mを測る。一部検出できた南壁の方向を見ると北壁とは平行しないので、全形はややゆがんだ形状だったと推測される。主軸方向はN-115°-Eである。精査できた壁は北壁と西壁のみだが、これらは外傾しながら立ちあがり、35cm前後残存する。

<埋土>3つの層に分けられるが、大部分は黒褐色シルトの1層と暗褐色シルトの2層で、3層は西壁際に見られるのみである。セクションベルトの断面ではほぼレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。ただ、下水溝際の断面では1層が一部波打っている部分もある。

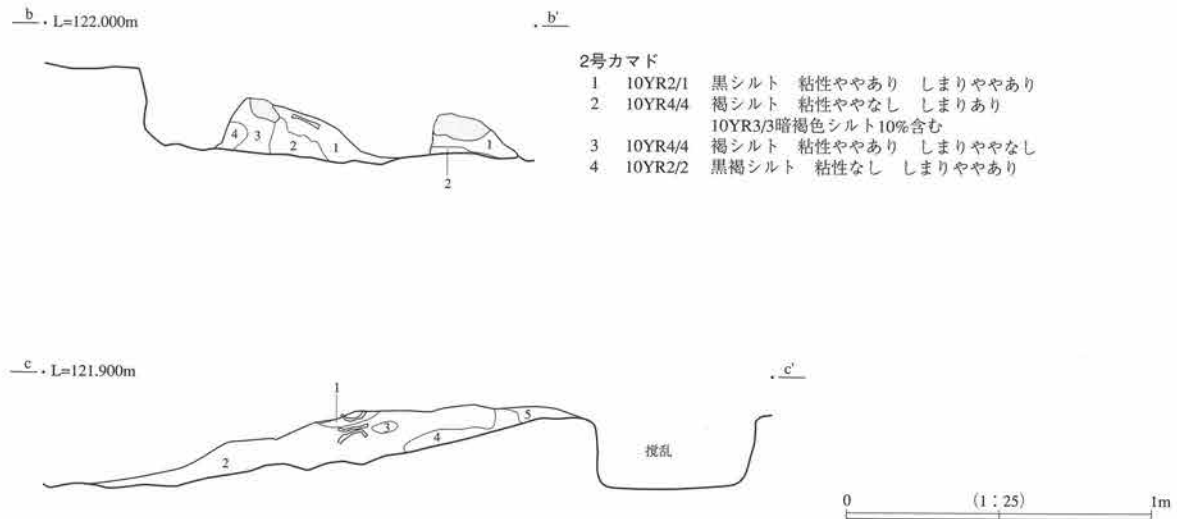
<床面・掘り方・貼り床>床は堀方埋土の黒褐色シルトによって貼り床が施され、硬く踏みしめられていて平坦である。

<カマド>1度作り替えられたようで、2基検出した。古い方を1号カマド、新しい方を2号カマドとする。1号カマドは西壁の中央よりやや北側に構築されている。西壁の周辺は水道管理設溝などの攪乱が多く煙出を認識していなかったため(事実、煙出は攪乱を受けており、底面から10cmほどしか残されていない)、住居の埋土を掘り下げて壁に煙道の断面が現れるまでその存在に気付かなかった。ただ、床面には焼土や比熱痕はわずかししか残されておらず、煙出には多量の礫が充填していたことから、作り替えに伴って意図的に破壊されたものと思われる。煙道は刳り貫き式によって構築され、壁から1.05m延びたところで煙出となる。煙出付近になると煙道の埋土は2~4cmほどしか確認できず、崩落したものと思われる。2号カマドは東壁の北隅に接している。天井部は崩落しているが、袖の残



第37図 RA071竪穴住居跡 (1) (53号住居)

2 竪穴住居跡



第38図 RA071竪穴住居跡(2) (53号住)

りは比較的よい。幅約15cm、長さ約35cm、厚さ4cm前後の礫と土師器甕の破片を芯材として、その周りに地山を貼り付けて構築されている。燃烧部は30×40cmほどだが、焼土や比熱痕跡は見出せなかったため、それほど使用されなかったものと推測される。煙道は、壁から約0.5m延びたところで攪乱を受けており、また上部も削平されているため、構築方法は不明である。煙道は徐々に高くなっており、燃烧部より煙道の底面の方が23cm高くなっている。

<柱穴・付属施設>柱穴は検出されなかった。

(金子佐)

<遺物> (第160～162図、写真図版113、116、117)

内黒及び黒色処理のない土師器坏、甕、須恵器壺、甕が出土した。2号カマドの左袖と北壁との間、2号カマドの燃烧部から出土したものが多。5,782gの土器が出土し、うち18点を図化した。このほか、貼り床から土師器甕破片も出土したが、小片で図化に至らなかった。

[土器] 墨書土器が4点出土している。底部や体部側面に文字が記されている。158はカマド右袖の、59は左袖の芯材である。104は須恵器壺で、本住居跡ベルト2層出土の破片とRA064の埋土及びRG039埋土出土の破片が接合したものである。166はカマド左側の底面から出土した須恵器甕破片である。

[石器・石製品] 168はアイサイト製の中砥で、表裏二面と欠損部を作業面としている。カマドの袖上から出土している。図化したもの以外では埋土から剥片が1点、磨石が1点出土している。

[鉄器] 169は両端の欠損した紡錘車である。円盤部の径は5.3cm、軸部の径は0.55～0.5cmである。170は一端を欠損した不明鉄製品である。素材の鉄板の厚さは1程である。169はQ2の床面から、170は埋土からの出土である。

[その他] 上記以外にカマド付近の検出面から鉄滓が1点出土している。

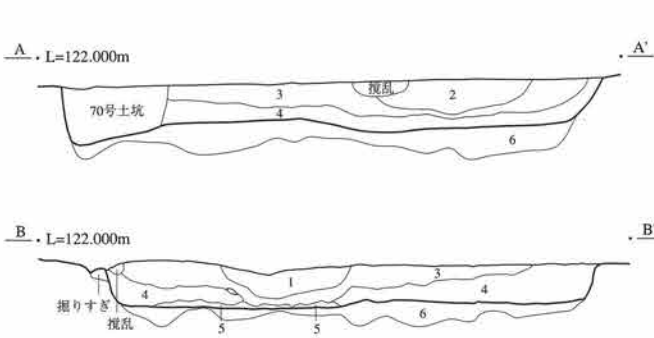
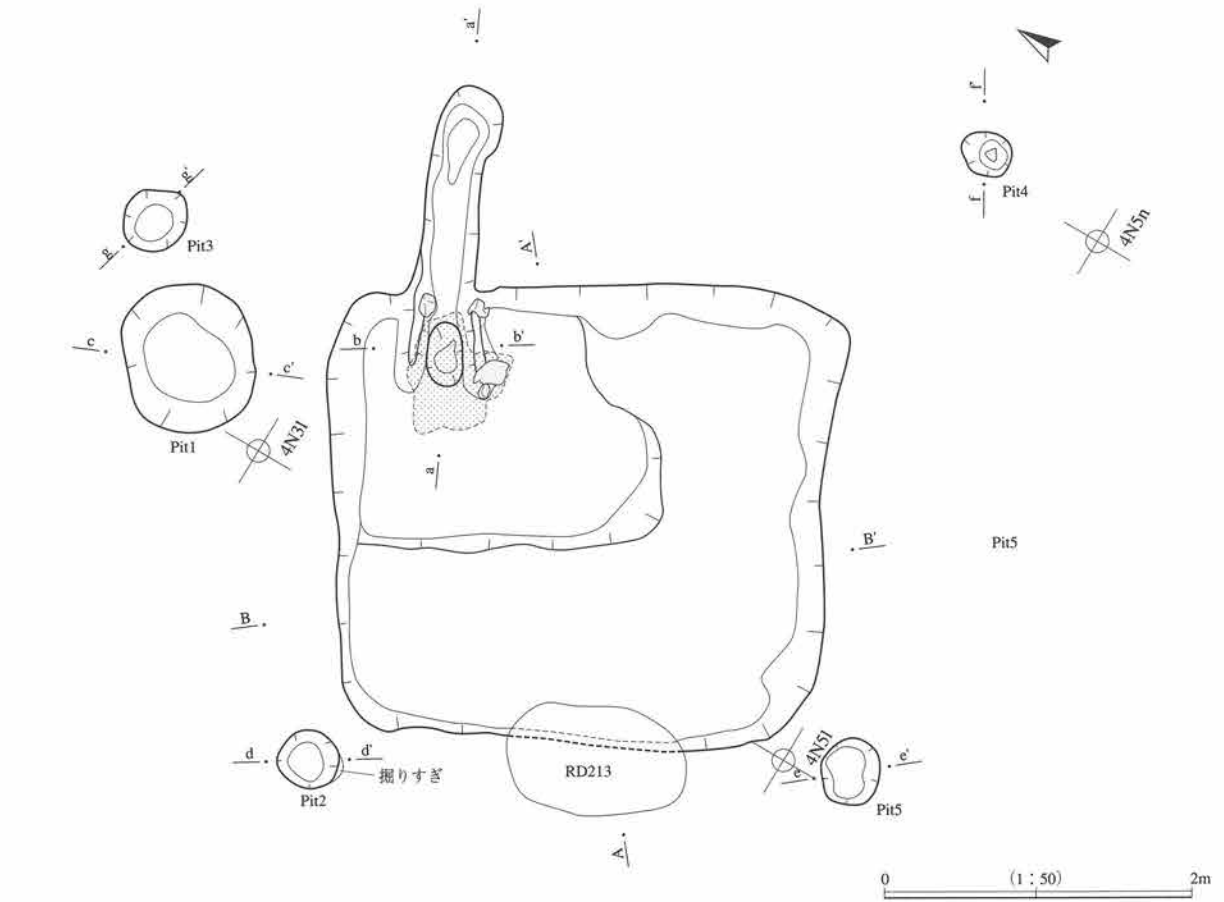
<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後半に属すると考えられる。

RA072竪穴住居跡(56号住) (第39、40図、写真図版27)

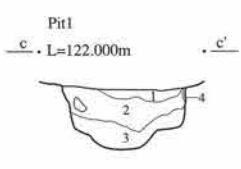
<位置>第9次調査区の4N41グリッド付近に位置する。

<重複関係>RD213と重複しており、本遺構はRD213に切られている。

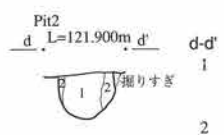
<検出面>検出面はII b層で、地山ブロックを含む黒褐色シルトの広がりとして確認した。



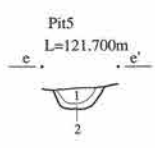
- A-A'・B-B'
- | | | | |
|---|-----------|----------------|-------------------|
| 1 | 10YR2/1 | 黒 粘性なく、しまりややなし | 灰黄褐色土粒少量含む |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐 粘性なく、しまり中 | |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐 粘性なく、しまり中 | IV層粒少量含む |
| 4 | 10YR2/1.5 | 黒～黒褐 粘性なく、しまり中 | IV層小ブロック少量含む |
| 5 | 10YR3/3 | 暗褐 粘性なく、しまりやや有 | IV層小ブロック多量含む |
| 6 | 10YR2/3 | 黒褐 粘性なく、しまりやや有 | 褐色土との混合土 黒色土粒少量含む |



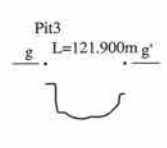
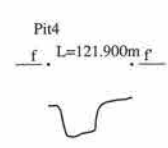
- c-c'
- | | | | |
|---|-----------|----------------|--------------|
| 1 | 10YR2/1 | 黒 粘性なく、しまりややなし | IV層粒少量含む |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐 粘性なく、しまり中 | |
| 3 | 10YR2/1.5 | 黒～黒褐 粘性・しまり中 | |
| 4 | 10YR4/6 | 褐シルト 粘性なく、しまり中 | 黒褐色シルトで汚れている |



- d-d'
- | | | | |
|---|---------|-----------|--------------|
| 1 | 10YR3/1 | 黒褐色 | 粘性・しまり中 |
| | | | IV層粒少量含む |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色 粘性なく、 | しまりややなし |
| | | | IV層小ブロック中量含む |

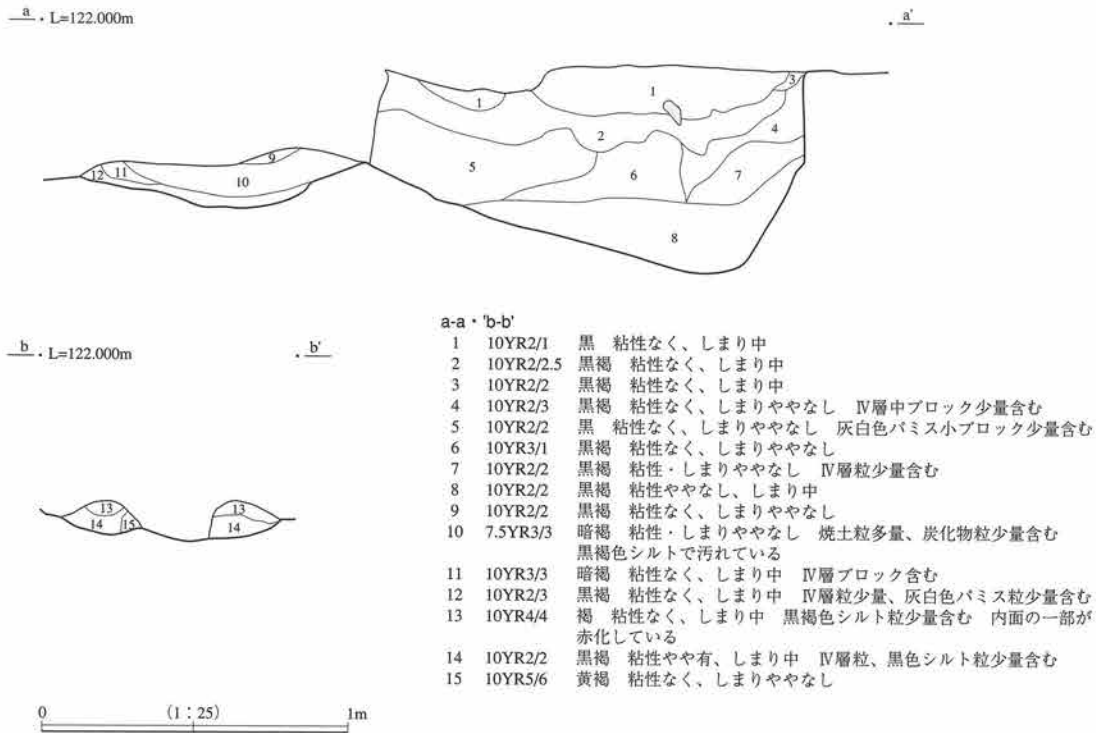


- e-e'
- | | | | |
|---|---------|----------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 黒褐 粘性やや有、 | しまり中 |
| 2 | 10YR2/1 | 黒 粘性なく、しまりややなし | IV層小ブロック少量、黒褐色シルト 小ブロック少量含む |



第39図 RA072竪穴住居跡 (1) (56号住)

2 竪穴住居跡



RA072	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5
径 (cm)	98×84	42×40	46×40	34×29	49×29
深さ (cm)	43	30	25	23	15

第40図 RA072竪穴住居跡 (2) (56号住)

<規模・平面形状・方向>平面形は東隅がやや張り出す隅丸方形で、規模は主軸方向がやや短く、(3.10) × 3.39mである。壁高は最大30cm残存している。主軸方向はN-62°-Eである。

<埋土>埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とし、地山の混入具合により5層に分層した。床面直上の5層には地山黄褐色シルトブロックを多く含み、人為的な堆積と考えられるが、夾雑物が少なく、レンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積と捉えられる。上半1層～3層には礫の混入が見られる。また、下半4層には十和田a火山灰と考えられる灰白色パミスがブロックの状態で見られる。

<床面・掘り方・貼り床>地山褐色シルトとの混合土である黒褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。床面はカマド周辺が周囲と比べて一段低くなっている。床面の硬化は見られない。

<カマド>北東壁北隅に設置される。袖は垂角礫を芯材とし、中心付近に黒褐色シルトを、外面に地山褐色砂質シルトを積み上げて平行に伸びている。燃烧部は残存せず底面の楕円形の浅い掘り込みのみ確認できる。煙道の全長は88cmで下降しながら先端の煙出し孔に向かって伸びている。煙道の埋土を観察すると住居の堆積土と一貫性があり、埋没時点では開口していたものと考えられる。

<柱穴・付属施設>住居内では検出されなかったが、本遺構に係ると考えられる土坑1基と柱穴4基を検出した。Pit1は楕円形の土坑で、黒色～黒褐色シルトで埋没している。規模は98×84cm、深さは43cmである。住居の約45cm北側に位置する。Pit2は住居の西側約25cm、Pit3は北側約120cm、Pit4は東側約133cm、Pit5は南側約33cmに位置し、掘り方埋土は暗褐色シルト、柱痕は黒褐色シルトを主体とする。Pit2～Pit5の4基で北東側がやや広い台形状の柱穴配置を取ると考えられ、煙出し孔部分

を除く住居がその内部に配置されている。(北村)

<遺物>埋土下位から須恵器坏、土師器甕破片269gが出土したが、小片で図化に至らなかった。

<時期>出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

RA073竪穴住居跡(11号住)(第41~43図、写真図版28)

<位置>調査区中央の4 N13 h グリッド付近に位置する。住居跡北西部が一部調査区外にかかっている。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層上面である。

<規模・平面形状・方向>一辺の長さが4.18×4.14m、壁高28cmの正方形である。方向はN-29°-Wである。

<埋土>7層に細分され、Ⅳ層起源の黄褐色土粒やブロックを含む黒色土が主体である。壁際下層には炭粒を含む。

<床面・掘り方・貼り床>床面北東隅が他より3~10cmほど高い。他は平坦で固くしまっている。貼り床はⅥ層に床面が達する住居中央やカマド前、北東隅にはほとんど施されていない。Ⅴ層に達する場所には小礫や黒色土ブロックを含む黒褐色土を貼り床としており、特に住居南壁付近の掘り方が深い。

<カマド>北壁中央に位置する。天井と左袖の大部分は失われており、右袖、燃烧部は比較的好く残っている。埋土は灰黄褐粘土を含む暗褐~黒褐色土で、天井や袖の崩壊土と思われる。袖は拳~掌大の礫を重ね、灰黄褐色の粘土で覆っており、よくしまつて固い。

燃烧部は65×53cmの範囲に焼土が形成されているほか、左右袖の内側も焼けている。燃烧部の焼土の厚さは5cmである。煙道は長さ1.65m、削り貫き式である。埋土はⅣ層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色土が主体である。燃烧部に近い部分の埋土には焼土ブロックが含まれる。底面は緩やかに煙出しに向かって下降する。

<柱穴・付属施設>住居内から土坑が3基検出された。カマド左脇に北壁に張り出す袋状土坑(Pit 3)、住居北東隅(Pit 1)、住居南西隅(Pit 2)である。Pit 1の規模は径55×52cm、深さ10cmである。Pit 2は径34×34cm、深さ12cmの円形である。Pit 3は西側が調査区外に延びており、規模は一部不明な箇所もあるが、幅72cm以上、奥行き74cm、深さ34cmで、北側壁の一部がオーバーハングしている。埋土から被熱した長楕円の礫、カマド袖に使用されたものと同様の灰黄褐色の粘土及び焼土層を検出した。カマド袖の崩壊土及び構築礫が廃棄されたものと考えられる。これらのうちPit 1及びPit 3は位置、規模等から貯蔵穴の可能性が高い。

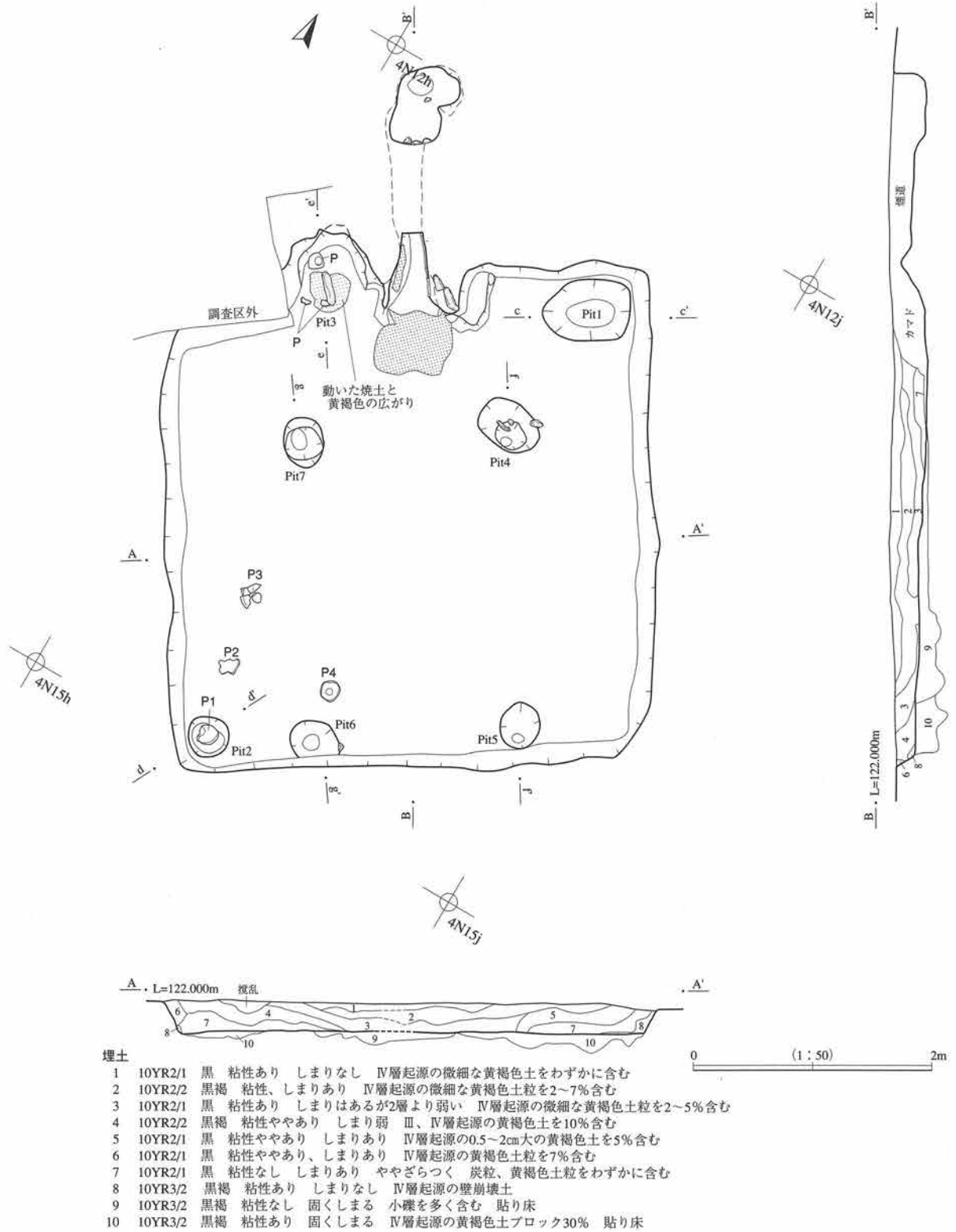
柱穴と思われる土坑は4個検出された。長方形の配置である。Pit 4とPit 7は床面北よりに位置し、比較的浅いのに対し、Pit 5とPit 6は南壁際に位置し深さも2倍以上深い。埋土は黄褐色土粒を少量含む暗褐色土が主体である。(金子佐)

<遺物>(第162、163図、写真図版117、118)

土師器坏、甕、須恵器坏、甕破片、壺破片の計2,766gの土器が出土した。図化したのは8点である。床直上から須恵器壺破片が出土したが、小片で図化に至らなかった。

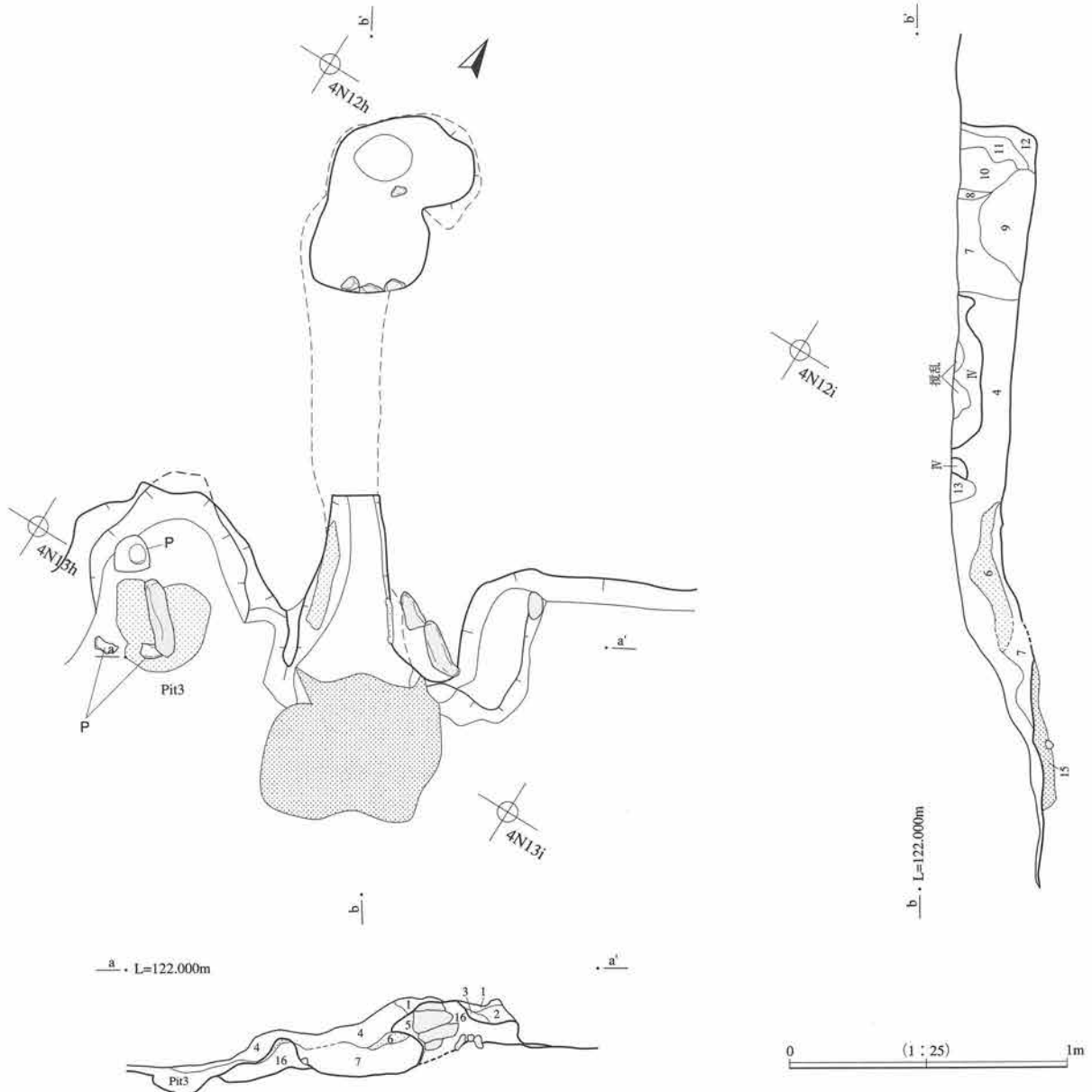
[土器] 173はカマドから出土しており、被熱しているため、黒色処理されているか不明である。175は床面から、176はPit 3の底面から出土した。178は、Pit 3の下層とPit 2の1層上面の破片が接合したものである。179は床直上の破片と埋土上位の破片が接合したものである。

<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後半から10世紀初頭に属すると考えられる。



RA073	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5	Pit6	Pit7
径 (cm)	<72>×74	55×52	34×34	52×38	40×34	35×34	40×30
深さ (cm)	34	10	12	20	50	22	49
埋土・その他							柱痕

第41図 RA073竪穴住居跡 (1) (11号住)

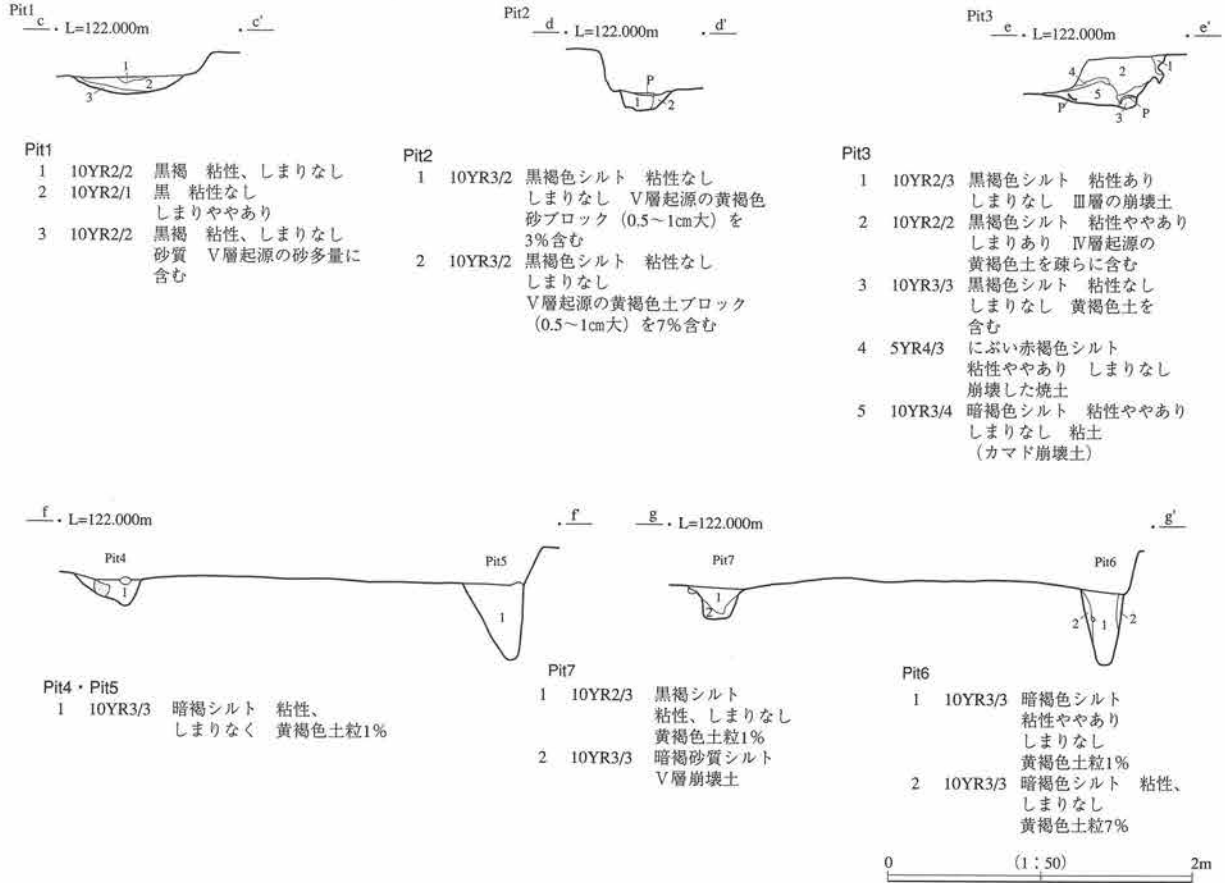


住居 カマド

- | | | | | | | |
|----|----------|--------|----------|---------|------------------|-----------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なし | しまりあり | 灰黄褐色粘土を含む | 袖の崩壊土 |
| 2 | 10YR3/2 | 黒褐 | 粘性なし | しまりあり | 1層より灰黄褐色粘土が少ない | 袖の崩壊土 |
| 3 | 10YR3/3 | 暗褐 | 粘性なし | しまりあり | 灰黄褐色粘土多量に含む | 袖の崩壊土 |
| 4 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性、しまりなし | | 焼土、粘土を少量含む | |
| 5 | 10YR3/3 | 暗褐 | 粘性、しまりなし | | やや崩落気味の袖~天井 | 灰黄褐色粘土を含む |
| 6 | 7.5YR4/6 | 赤褐 | | | 焼土 | 焼けた天井の崩壊土 |
| 7 | 7.5YR4/2 | 灰褐 | 粘性、しまりなし | | 微細な焼土粒、微細な炭粒を含む | |
| 8 | 10YR3/2 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりなし | IV層起源の黄褐色土粒を少し含む | |
| 9 | 10YR3/2 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | 3~5mm大の焼土粒を含む | |
| 10 | 10YR2/1 | 黒色シルト | 粘性ややあり | しまりあり | 黄褐色土ブロック5% | 焼土微細粒少量含む |
| 11 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性あり | しまりあり | | |
| 12 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 粘性あり | しまりややあり | 黄褐色土粒5% | |
| 13 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 粘性あり | しまりあり | 微細な黄褐色土粒3% | |
| 14 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性あり | しまりなし | 炭・焼土ブロック少量含む | |
| 15 | 7.5YR4/6 | 褐色シルト | 焼土層 | 粘性なし | しまりあり | |
| 16 | 10YR5/6 | 黄褐 | 粘性あり | 硬くしまる | | 袖土 |

第42図 RA073竪穴住居跡(2) (11号住)

2 竪穴住居跡



第43図 RA073竪穴住居跡 (3) (11号住)

RA074竪穴住居跡 (12号住) (第44図、写真図版29)

<位置>調査区北部の4 N 8 dグリッド付近に位置する。本住居跡は主に西半が調査区外に延びている。

<重複関係>調査した範囲内ではない。

<検出面>Ⅲ層上面である。

<規模・平面形状・方向>約半分が調査区外に延びているため明らかでないが、東壁は長さ3.6mで北壁は2.5m以上、壁高32cmの方形か長方形と考えられる。

<埋土>5層に細分され、IV層起源の黄褐色土粒を含む黒色土が主体で自然堆積である。南壁の調査区境際では焼土を含む黒褐色土が埋土中に検出された。

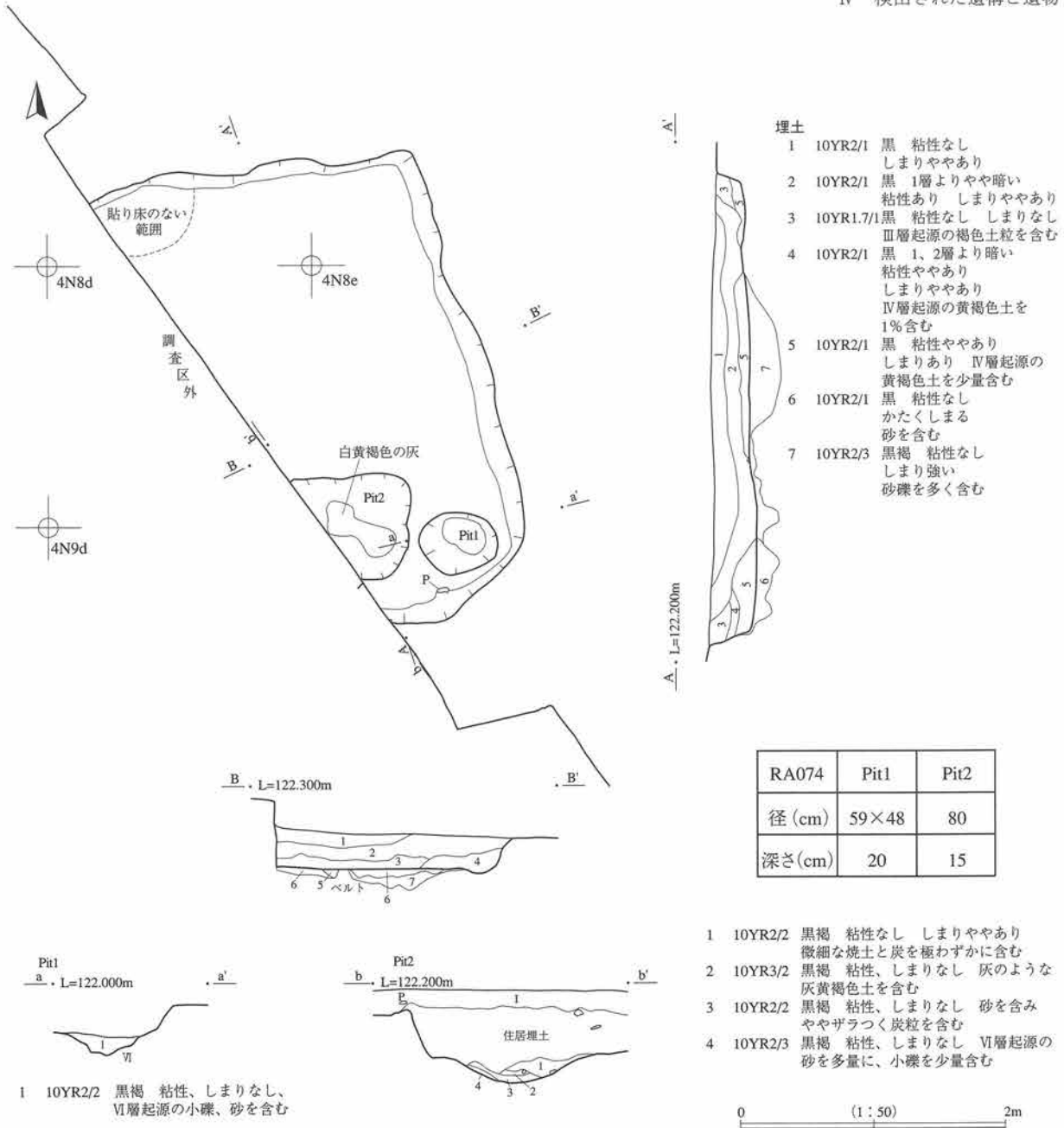
<床面・掘り方・貼り床>北壁よりの一部と南側のPitを除き、貼り床が施され、平坦で固くしまる。貼り床は2層に細分され、V層起源の砂や礫を含む黒~黒褐色土である。

<カマド>調査区内には検出されなかった。東壁以外の場所に位置すると考えられる。

<柱穴・付属施設>住居跡南壁よりに土坑が2基検出された。Pit 1は規模が59×48cm、深さ20cmの楕円形である。埋土はしまりのない黒褐色土である。Pit 2は当初土坑と捉えられず、固い床面のない範囲と考えていたが、周囲より15cm程度凹み、埋土下位に白黄褐色の灰が検出されたことから、土坑としたものである。埋土には微細な焼土、炭粒、黄褐色土粒が混入している。 (金子佐)

<遺物> (第163図、写真図版118)

非内黒の土師器坏、甕、須恵器坏、須恵器壺、甕の計395gの土器が出土し、3点を掲載した。



第44図 RA074竪穴住居跡 (12号住)

[土器] 182はPit 1 から出土した。180は墨書土器で、側面に墨書が施される。
 <時期>出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

RA075竪穴住居跡 (48号住) (第45図、写真図版30)

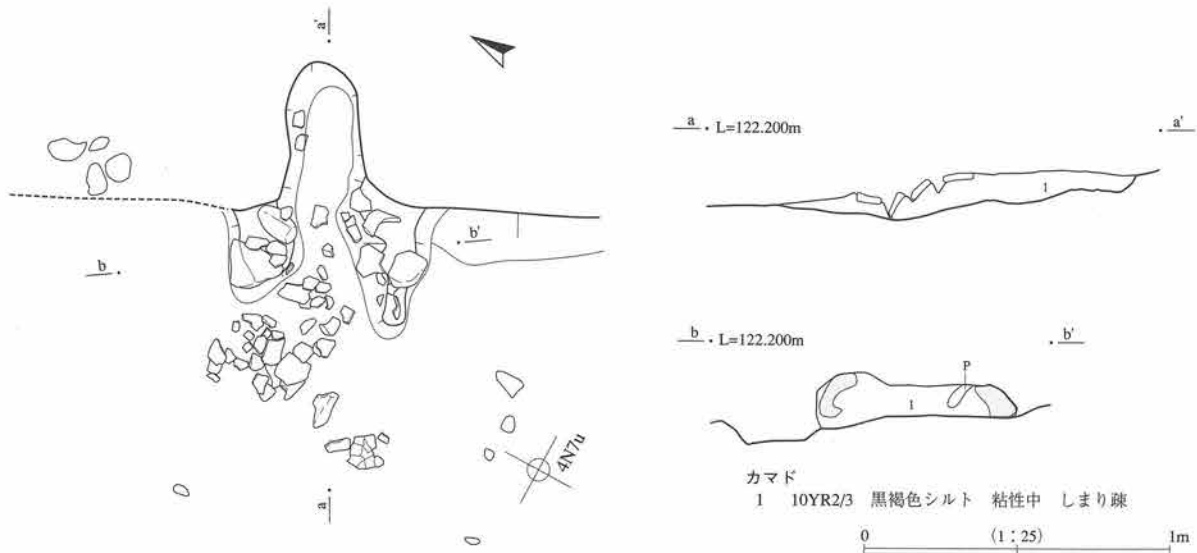
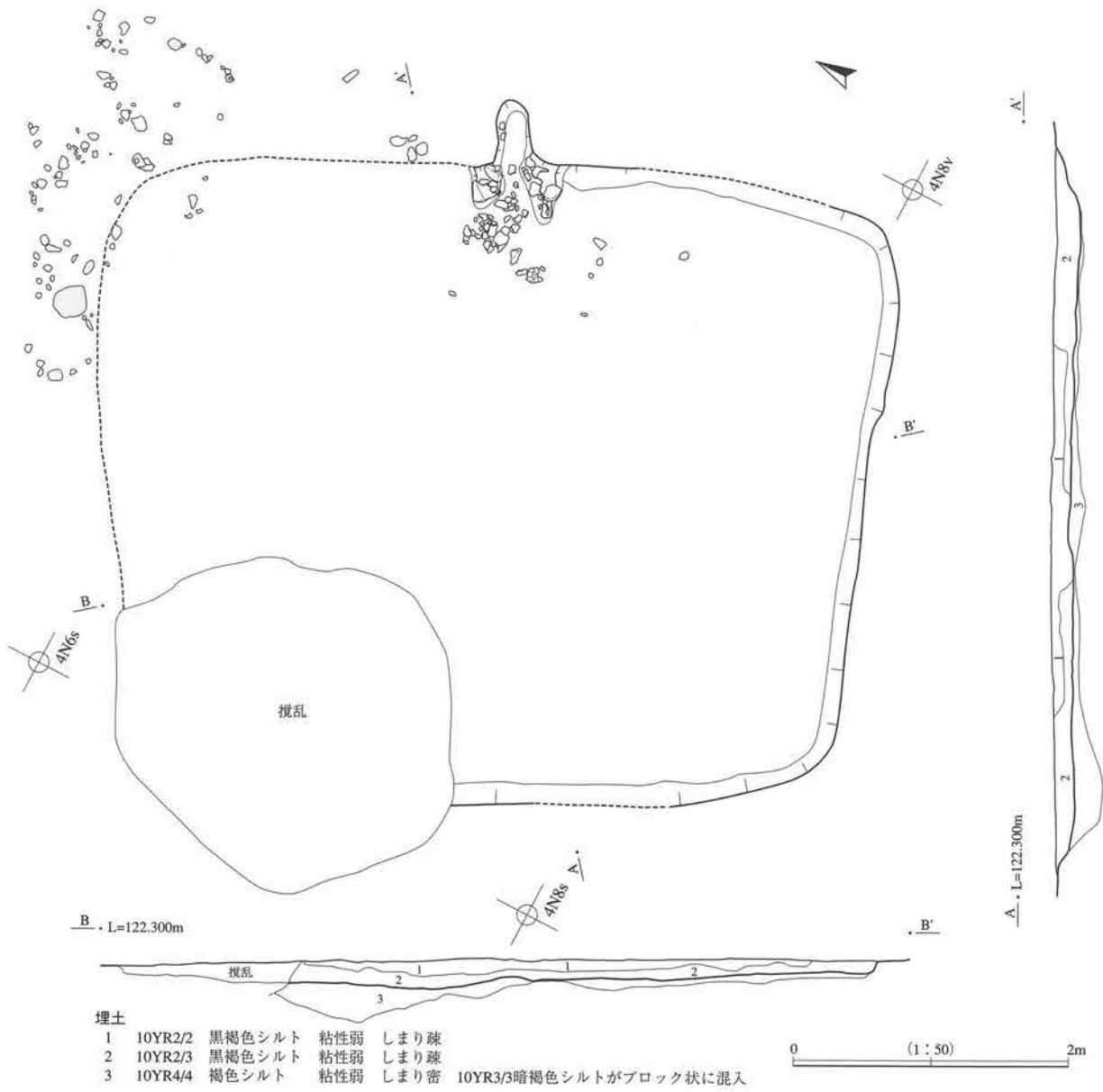
<位置>調査区中央部北の 4 N 6 s グリッド付近に位置する。

<重複関係>重複関係は認められない。

<検出面>RA075周辺は調査区内でも標高が高く、礫層が露出している面で検出した。

<規模・平面形状・方向>南北5.46m東西4.62mの長方形を呈する。壁高は最大18cmで上部がかなり削平されている。壁は北西端に風倒木によって壊されている。風倒木が巻き込んだ範囲に焼土を検出したが、攪乱されているため、時期・性格は不明である。北壁中央は一部残存しており、住居全体の形状を把握できたが、北東端からカマド北袖にかけては上部の攪乱が著しく、遺物も住居外の範囲に

2 竪穴住居跡



第45図 RA075竪穴住居跡 (48号住)

摩滅した破片の状態で散乱している。カマドによる方向はN-63°-Eである。

<埋土>堆積土は2層に分層される。堆積土には混入物が認められず、自然堆積と判断される。

<床面・掘り方・貼り床>床面はカマド周辺から北東にかけてやや硬化している。掘り方は住居中央が浅く、端にかけて厚くなっている。層厚は4~18cmである。

<カマド>東壁に1基確認した。東壁のほぼ中央に位置する。カマドの主軸方向はN-63°-Eである。既述のとおり上部の削平が著しく、煙道の大部分が失われている。煙道の残存する範囲の規模は、長さ48cm、直径23cmで、煙出しは認められない。袖は黒褐色土・自然礫・土師器甕破片によって構成されている。北袖の長さは32cm、南袖の長さは44cmである。カマド内およびカマド周辺からは遺物がまとまって出土している。

<柱穴・付属施設>認められない。 (八木)

<遺物> (第163、164図、写真図版118、119)

内黒、非内黒の土師器坏、高台付坏、甕、須恵器甕が出土している。カマド周辺と北東壁周辺に遺物がまとまって出土している。貼り床からも須恵器甕破片、内黒土師器坏破片が出土した。3,720gの土器が出土し、うち9点を図化した。

[土器] 土師器甕はロクロ使用のもの(188、189)と使用していないもの(190)がある。

[石製品] 192は安山岩製の荒砥である。表面など七面を作業面としている。裏面は欠損しているが、その部分も作業面としており、欠損後も使用していたことが窺える。カマドからの出土である。

<時期>平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭と考えられる。

RA076竪穴住居跡(33号住)(第46、47図、写真図版31)

<位置>第9次調査区の409aグリッド付近に位置する。

<重複関係>なし。

<検出面>検出面はV層上面である。北西脇にケヤキの大木があり、その太い根が本遺構の北西部分を覆っていた。その根を除去後、方形の黒色シルトの広がりとして認識した。

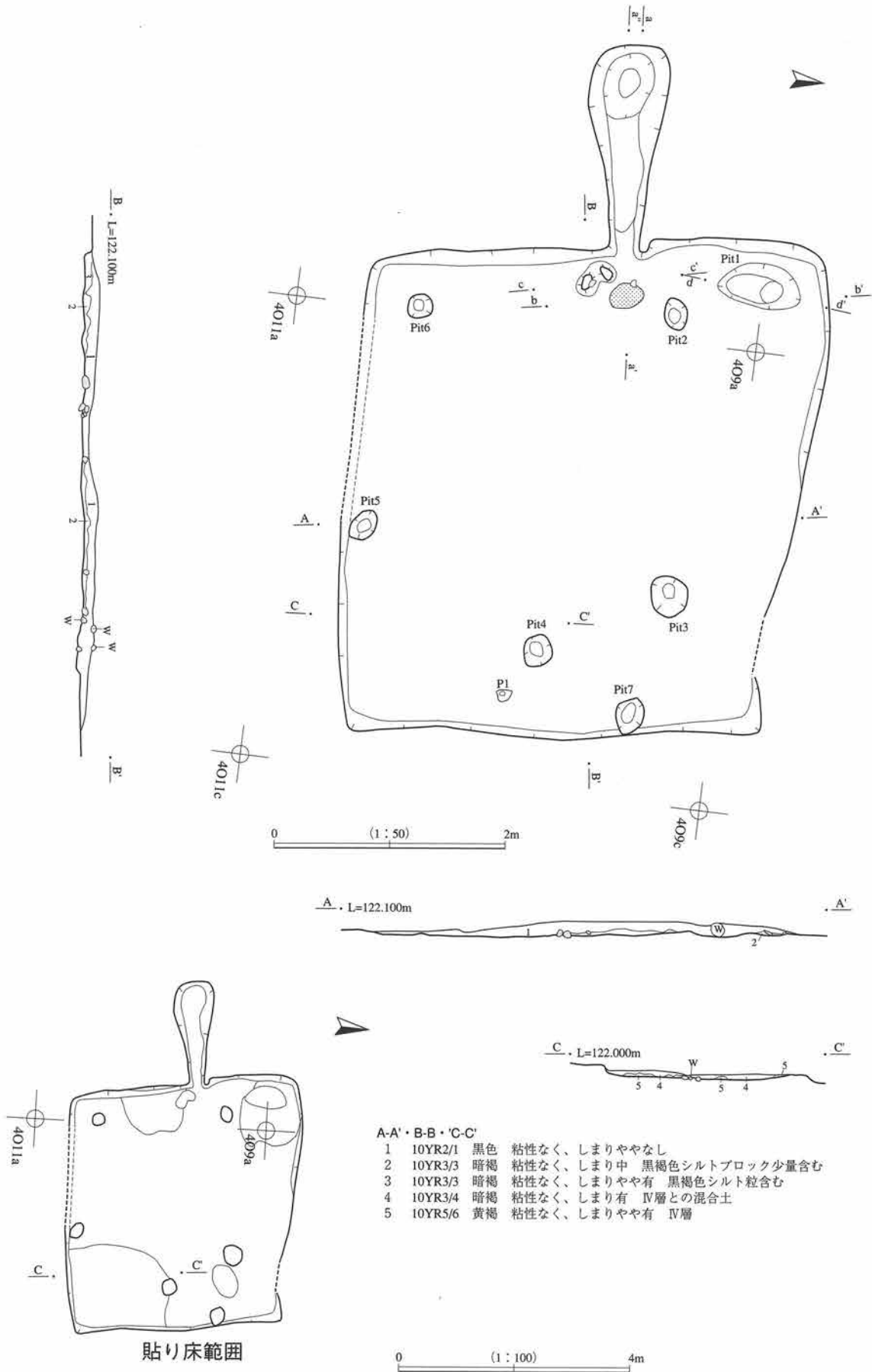
<規模・平面形状・方向>ケヤキの影響と本遺構の北東側が後世の削平により部分的に消失している。そのため、平面形は方形を呈すると判断したが、残存部分からの推定である。残存する規模は4.38×4.21mである。残存する壁高は最大でも12cmである。主軸方向はS-84°-Wである。

<埋土>埋土はケヤキの細かい根が縦横無尽に見られる黒色シルトを主体とし、床面周辺に黒褐色シルトブロックや黒褐色シルト粒を含む暗褐色シルトが部分的に堆積している。全体的に層高がなく、人為堆積か自然堆積か判断できない。

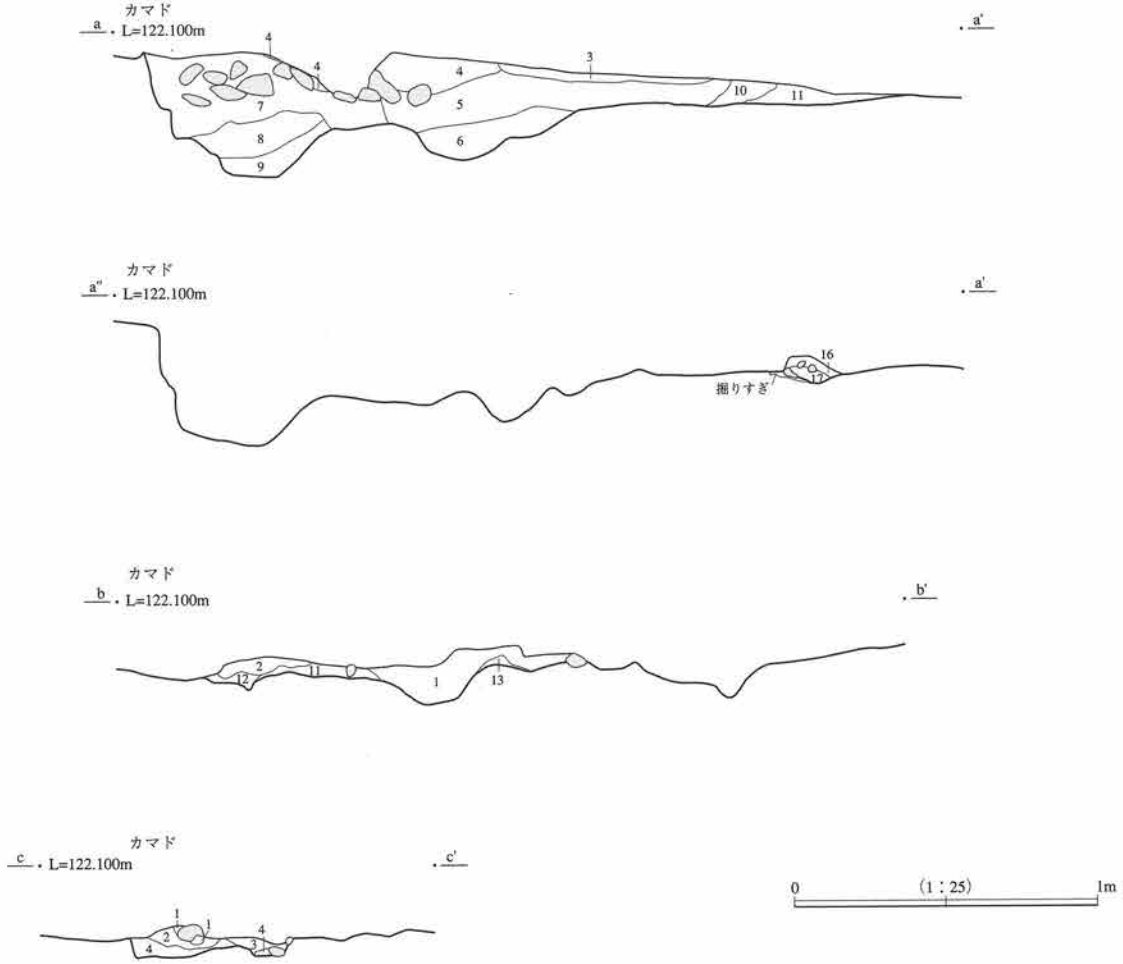
<床面・掘り方・貼り床>暗褐色シルトと黄褐色砂質シルトの混合土の掘り方埋土を床面としているが、貼り床が見られる部分は北西隅・Q1中央、南東隅、カマド南脇の4箇所である。それ以外はVI層が露出しており、緩い凹凸が観察される。

<カマド>西壁中央に設置される。残存状態が悪く、南側の袖の構築土と考えられる暗褐色シルトが小山状に残存するのみである。その脇には礫が出土し、芯材に礫を用いたものと捉えられる。燃焼部底面には31×24cmの焼成面が形成される。燃焼部には土器片や礫が出土しているが、支脚は確認されていない。煙道の全長は113cmで下降しながら先端の煙出し孔に向かって伸びている。削平のため煙道部の構造は不明である。ただし、煙道の埋土中には被熱した礫が多く出土しており、これらの礫が煙道を構成する礫の可能性はある。

<柱穴・付属施設>北西隅にPit1を検出した。楕円形の土坑で上半1層は住居の堆積土と同じ黒色シ

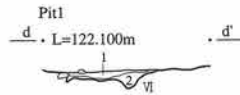


第46図 RA076竪穴住居跡 (1) (33号住)



a-a' · a''-a' · b-b' · c-c'

- 1 10YR2/1.5 黒~黒褐 粘性なく、しまりややなし
- 2 10YR3/3 暗褐 粘性なく、しまり中 黒褐色シルトブロック少量含む
- 3 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりやや有 V層小ブロック少量含む
- 4 10YR2/1 黒 粘性なく、しまり中 V層粒極少量含む
- 5 10YR3/4 暗褐 粘性・しまりなし V層ブロック中量含む
- 6 10YR2/3 黒褐 粘性なく、しまりややなし
- 7 10YR2/1 黒 粘性なく、しまりややなし
- 8 10YR2/2~2/3 黒褐 粘性なく、しまり有 部分的に硬くしまる 土師器出土
- 9 10YR2/3 黒褐 粘性・しまりなし V層粒含む
- 10 10YR2/3 黒褐 粘性なく、しまりややなし V層小ブロック少量含む
- 11 7.5YR2/3 極暗褐 粘性なく、しまりやや有 黒褐色シルトで汚れている
- 12 10YR2/3 黒褐 粘性なく、しまり中
- 13 10YR5/6 黄褐 粘性なく、しまり中
- 14 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまり中
- 15 10YR3/4 暗褐 粘性なく、しまり有 V層粒、焼土粒少量含む
- 16 7.5YR3/4 暗褐 粘なく、しまりやや有 φ2~3cmの焼け礫少量含む
- 17 10YR3/4 暗褐 粘性なく、しまりやや有 IV層ブロック中量含む



d-d'

- 1 10YR2/1 黒 粘性なく、しまりややなし 土器片出土
- 2 10YR2/3 黒褐 粘性なく、しまりややなし 土器片出土

RA076	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5	Pit6	Pit7
径(cm)	73×39	29×20	35×32	30×26	30×20	24×23	34×25
深さ(cm)	13	33	9	20	21	9	16

第47図 RA076竪穴住居跡(2) (33号住)

ルトで、下半2層は黒褐色シルトで埋没している。わずかであるが、土器片が出土している。その他に柱穴6基を検出した。そのうちPit 2～Pit 6の5基で五角形の支柱穴配置を取ると思われる。

(北村)

<遺物> (第164、165図、写真図版119)

1,717gの土器が出土した。多くは埋土中からの出土で土師器甕、須恵器、土師器坏、高台付の椀である。うち7点を図化した。

[土器] 193は体部下端と底面を回転ヘラケズリ調整された土師器坏である。高台付の椀が3点ある。

[石器・石製品] 200は円形の礫を利用した磨石で、作業部位は表裏2面である。被熱して、脆弱になっている。床面直上からの出土である。図化したもの以外では埋土から砥石が2点出土している。

<時期>出土遺物から平安時代の10世紀前葉～中葉に属すると考えられる。

RA077竪穴住居跡 (19号住) (第48図、写真図版32)

<位置>調査区中央東端の4 O 12 b グリッドに位置する。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層である。

<規模・平面形状・方向>南壁、西壁のコーナー付近を攪乱によって破壊されているので全容は明らかでないが、一辺3.3×3.16mの長方形である。本住居は床面まで削平されており、壁高は不明である。方向はN-49°-Eである。

<埋土>ほとんど削平されて残存していない。

<床面・掘り方・貼り床>平坦で、固くしまる。中央からやや南よりの床面が55×28cmの範囲で不整形に焼土化している。砂礫やⅣ層起源の暗褐色土を含む黒褐色土を貼り床とし、ほぼ全面に施されている。

<カマド>東壁中央よりやや北よりに位置する。上面は削平され、燃焼部に焼土ブロック、煙道入口の壁に焼土が若干認められ、煙道埋土が極薄く残っているにすぎない。煙道は長さ1.05m、底はほぼ水平で、煙出しで一段下がる。煙出しは深さ6cm程度で、Ⅳ層崩壊土を含むしまりのない黒褐色土が堆積していた。

<柱穴・付属施設>ない。

(金子佐)

<遺物> (第165図、写真図版119)

247gの土器が出土し、3点を掲載した。須恵器坏、土師器甕がある。図化したもの以外では貼り床からも土師器甕破片が出土しているが小片で図化に至らなかった。

[土器] 203、204は埋土出土とあるが、埋土はほとんど削平されていたため、床直上に近い。204は土師器甕で、本住居跡のカマドの脇から出土した破片とRA078のカマド埋土、Pit 1から出土した破片が接合した。

<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

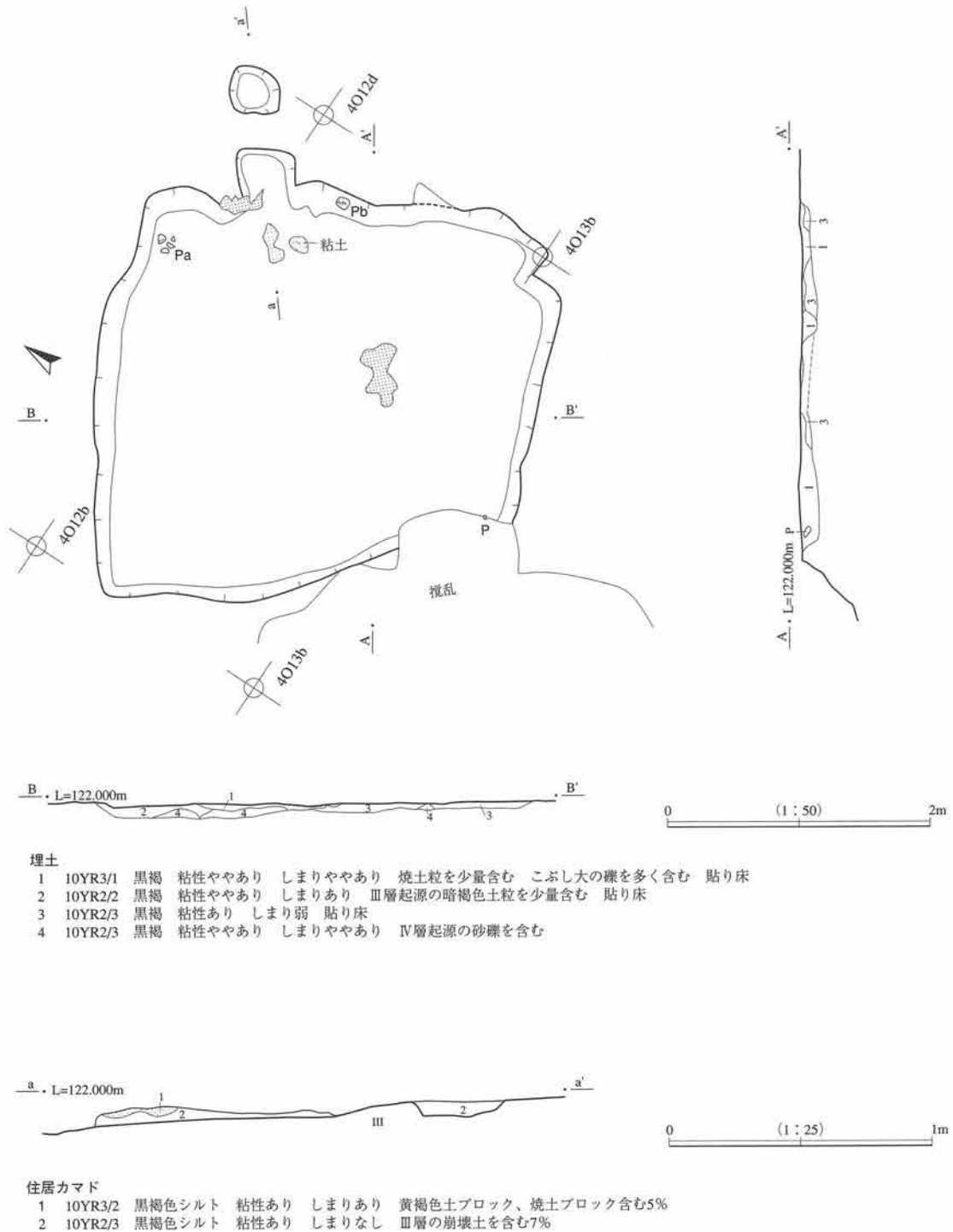
RA078竪穴住居跡 (18号住) (第49、50図、写真図版33、34)

<位置>調査区中央東側の4 O 14 h グリッド付近に位置する。

<重複関係>ない。

<検出面>おおむねⅣ層だが、礫層が露出している部分はⅥ層である。

<規模・平面形状・方向>一辺の長さが5.19×4.65m、壁高47cmのややゆがんだ長方形である。方向

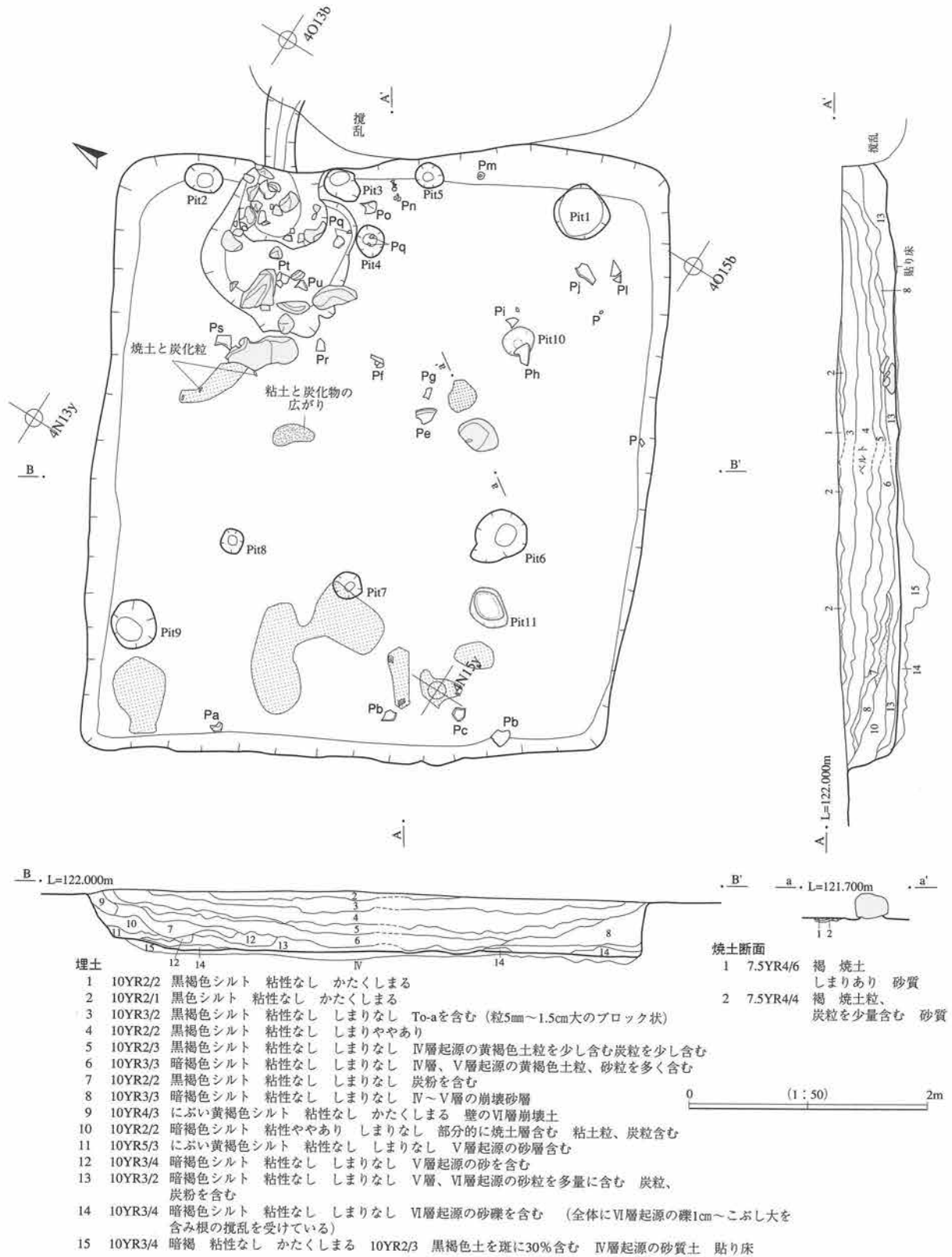


第48図 RA077 竪穴住居跡 (19号住)

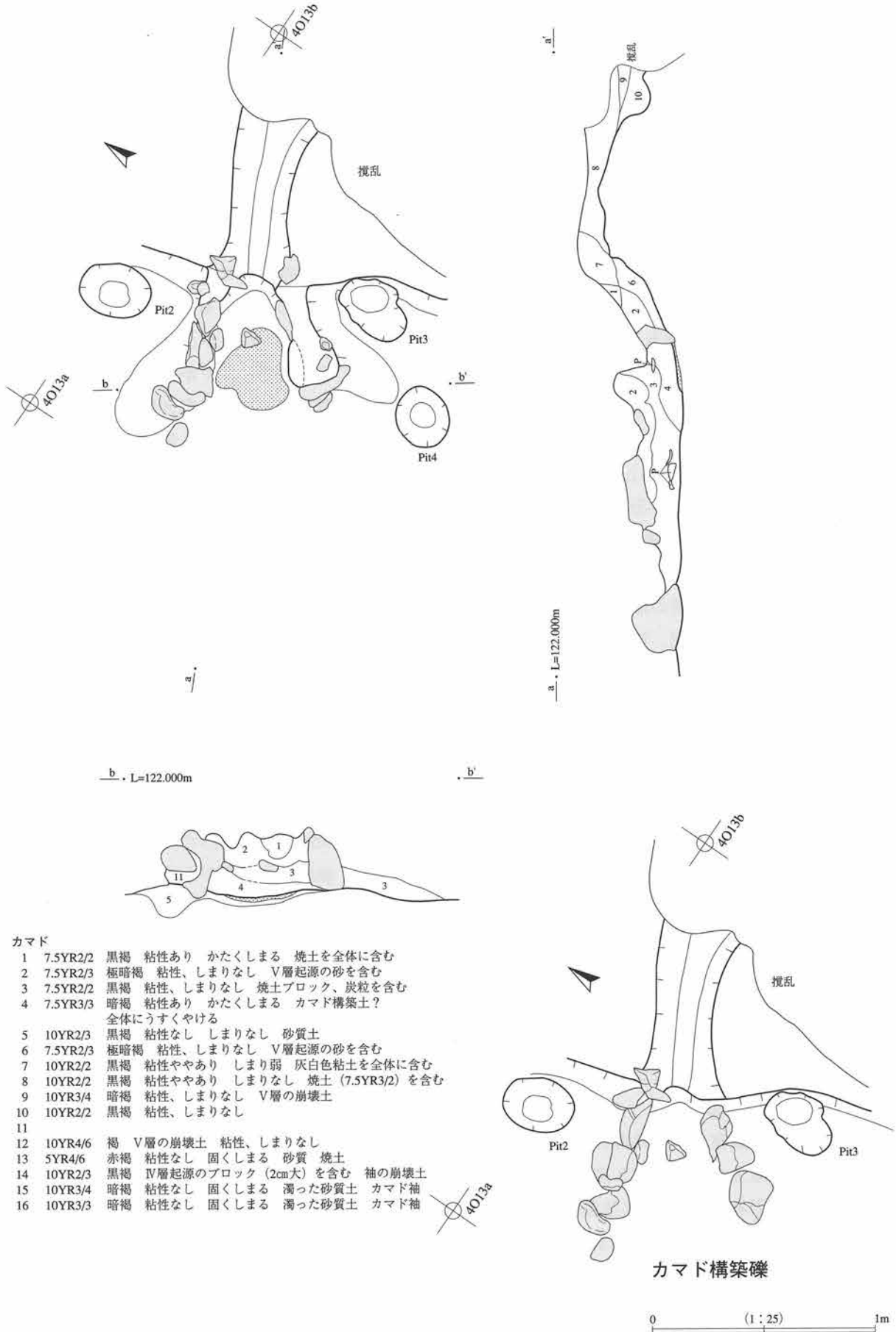
はW-23°-Nである。

<埋土>14層に細分される。全体にⅥ層起源の1cm~こぶし大の礫を多く含み、樹木根の攪乱を受けている。上層は粘性のない黒褐色土で、3層に灰白色火山灰が堆積する。この火山灰は、純粋な層ではなく、0.6~1.5cm大のブロック状に粗密があるものの、3層全体に層として認められるものであり、人為的に埋め戻した状況ではない。中層は炭粒やⅣ層起源の黄褐色土粒、Ⅴ層~Ⅵ層起源の砂を含む黒褐~暗褐色土である。下層は焼土粒を部分的に含み、Ⅳ層起源の黄褐色土及びⅤ~Ⅵ層起源の砂を多く含む暗褐~にぶい黄褐色土である。最下層は炭粒、炭粉及びⅤ~Ⅵ層起源の砂を多く含む暗褐色

2 竪穴住居跡



第49図 RA078竪穴住居跡 (1) (18号住)



第50図 RA078竪穴住居 (2) (18号住)

土である。特にカマドの前に炭が多く出土した。なお、住居西半の埋土10層中床から13~15cm浮いた状態で焼土のまとまりが4か所検出された。焼土の厚さは最大で5cm程度である。焼土と共に炭化材も検出されている。

<床面・掘り方・貼り床>平坦で固くしまる。貼り床は黒褐色土を斑に30%含む暗褐色土で、主に床がV層に達する西半に施される。床がVI層に達する部分は貼り床がない。V層に達する部分は掘り方が深い。

<カマド>東壁の北よりに位置する。天井は失われ、煙出しも攪乱によって破壊されている。カマドの前から天井に使用されたと思われる長さ40~60cm、幅25cmの大型の礫が出土している。袖は礫を据え、その上に粘性のある暗褐色土を貼り付けて構築している。燃烧部は37×28cmの範囲で砂礫層が焼け、厚さ3cmほどの焼土が形成されている。焼土の奥に支脚が据えられている。支脚は三角柱形の長さ20cmの円礫である。煙道は残存部分の長さ0.7m、掘りこみ式と思われるが、上層が削平されている可能性があるため不明である。底面は燃烧部から壁に沿って急に上昇し緩やかに下降する。

<柱穴・付属施設>住居中央からやや南よりの床面から径20cm程度の薄い焼土層が検出され、隣接して床上から長さ35cm、幅25cm、厚さ20cmの円礫が出土した。礫の上面が平坦で、鉄砧石の可能性はあるが、鍛造剥片や鉄滓は出土しなかった。また、この焼土から1.5m離れたやや北よりの床面からも径5cm程度の薄い焼土が検出されたが、現地性ではなかった。

住居内から土坑は11基検出された。これらのうちPit10とPit11は床下で検出された土坑である。Pit1、Pit4を除き、柱穴と思われる。Pit5は東壁にとりつく。埋土はPit10を除き、いずれも砂を多く含んだしまりのない砂質の黒褐色土である。(金子佐)

<遺物> (第165~168図、写真図版119~121)

6,969gの土器が出土し、21点を掲載した。内黒、非内黒の土師器坏、土師器埴、ロクロ使用の甕、ロクロを使用していない甕、須恵器甕、壺がある。このほか小片で図化に至らなかったが、埋土から須恵器甕、壺破片、床直上から須恵器甕破片も出土している。

[土器] 土師器の坏は底部のある7点のうち4点に底部の再調整が施されている。墨書土器が1点ある。破片であるが、坏の側面に墨書が施される。口縁部が若干外反する内外面黒色処理された土師器で、碗の破片と思われる212は床面から、213は壁際の下層から出土した。213には細い刻線で樹木様の文様が描かれている。刻線内のカーボンの付着状況等から、焼成前で器面がかなり乾燥した状態で描かれたと考えられる。204は本住居跡のカマド埋土及びPit1から出土した破片と、RA077のカマド脇から出土した破片が接合したものである。

[土製品] 230は板状を呈する用途不明の土製品である。カマドの埋土から出土している。同様の土製品がカマド右脇の住居壁際から割れた状態で出土しているが、接合できなかった。一面にはハケメ、もう一方にはナデが施されている。断片的な資料のため詳細は不明である。

[石器・石製品] 232・233は台石、234は砥石で、カマドの芯材に転用されている。そのため、外面が赤化していたり、脆弱になっていたりする。232と233の作業部位は表面のみである。234は荒砥で、一面に作業面の観察される礫破片である。作業面にはV字状の深い使用痕が観察される。図化したもの以外では埋土から剥片が2点出土している。

[鉄器] 235は刀身部の、236は茎部の資料である。235は棟側に関のある刀子である。先端部を欠損しているが、刀身の形状が長三角形を呈するものと考えられる。236は欠損のため、関の有無は不明である。2点とも埋土からの出土である。

[その他] 上記以外に埋土から焼成粘土塊が1点出土している。

<時期>出土遺物と最上層に堆積する灰白色火山灰から9世紀後葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

RA079竪穴住居跡（20号住）（第51図、写真図版35）

<位置>調査区中央東側の4014gグリッドに位置する。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅱb層である。盛岡市教育委員会が試掘を行った際にカマド焼土面と住居プランを確認しており、Ⅱb層上の周囲より若干明るく光る黒褐色土の広がりで見出した。

<規模・平面形状・方向>試掘トレンチにより西壁の一部と南壁の大部分、南側の床面が破壊されているため全容は明らかでないが、一辺の長さが 4.26×4.04 m、壁高18cmの隅丸方形と考えられる。方向はS-33°-Eである。

<埋土>3層に細分される。Ⅵ層起源の礫や小礫を含む黒褐色土がほとんどで、Ⅳ層起源の黄褐色土粒が壁際に若干入る程度である。自然堆積と思われる。

<床面・掘り方・貼り床>この付近はⅣ層、Ⅴ層の堆積がなく、Ⅲ層直下にⅥ層が堆積している。床はⅥ層に達し、礫が表出していてやや凹凸がある。床面は少ししまっているものの、他の住居跡に比すれば固くない。貼り床はない。

<カマド>南壁の東よりに位置している。天井は失われ、袖もおそらく試掘の際にほぼ床面まで削平されている。わずかに残る袖は基部が黒褐色の粘土で構築されており、固くしまっている。焼土は 60×48 cmの範囲に焼土が形成され、壁よりの部分に支脚としていたと見られる土師器甕が設置されている。焼土の厚さは6cmである。支脚は被熱して器面が荒れ、ポロポロの状態である。

煙道は長さ1.38m、上面が削平されており、割り貫き式か掘りこみ式かは不明である。底面はほぼ平坦で、煙出しに至ってわずかに凹む。煙道の埋土にも焼土が多く含まれる。

<柱穴・付属施設>土坑が3基検出された。Pit 1は住居北東隅にある。Pit 2、Pit 3は住居西よりに南北に並ぶ。Pit 3は斜めに掘りこまれた土坑である。これらのうち柱穴になりうるのはPit 2、Pit 3である。 (金子佐)

<遺物>（第169図、写真図版121、122）

880gの土器が出土し、5点を掲載した。須恵器坏、土師器甕、須恵器甕、壺がある。

[土器] 237はカマド左脇の住居南東隅の埋土上層から出土した。239はカマド支脚に使用されていたものである。

[石器] 242は楕円形、243は円形の礫を利用した磨石で、作業部位は242が表面、243が表裏2面である。2点とも埋土からの出土である。

<時期>出土遺物から9世紀末葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

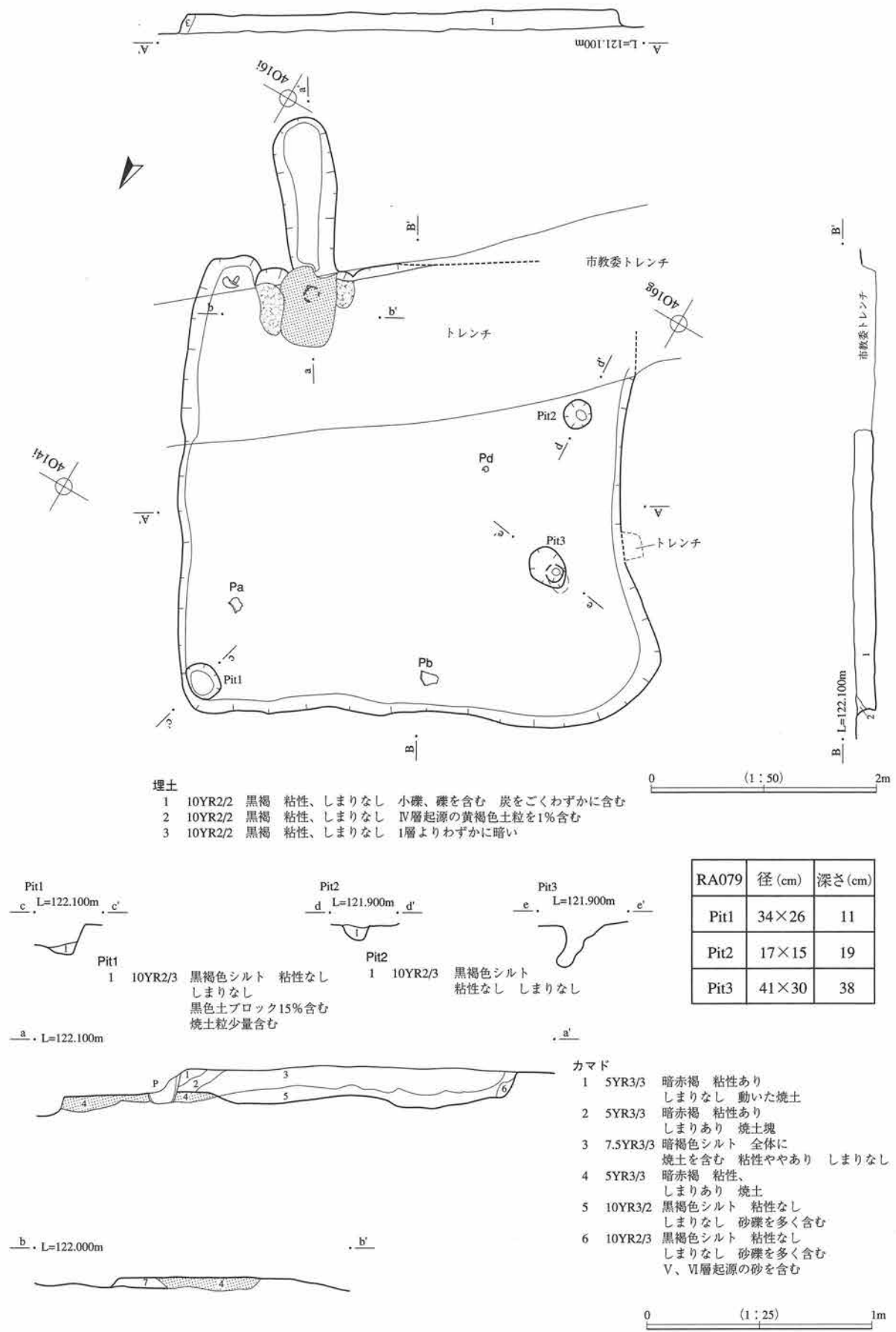
RA080竪穴住居跡（2号住）（第52～54図、写真図版36、37）

<位置>調査区中央部の4N18m～18o・4N191～4N19oグリッド付近に位置する。

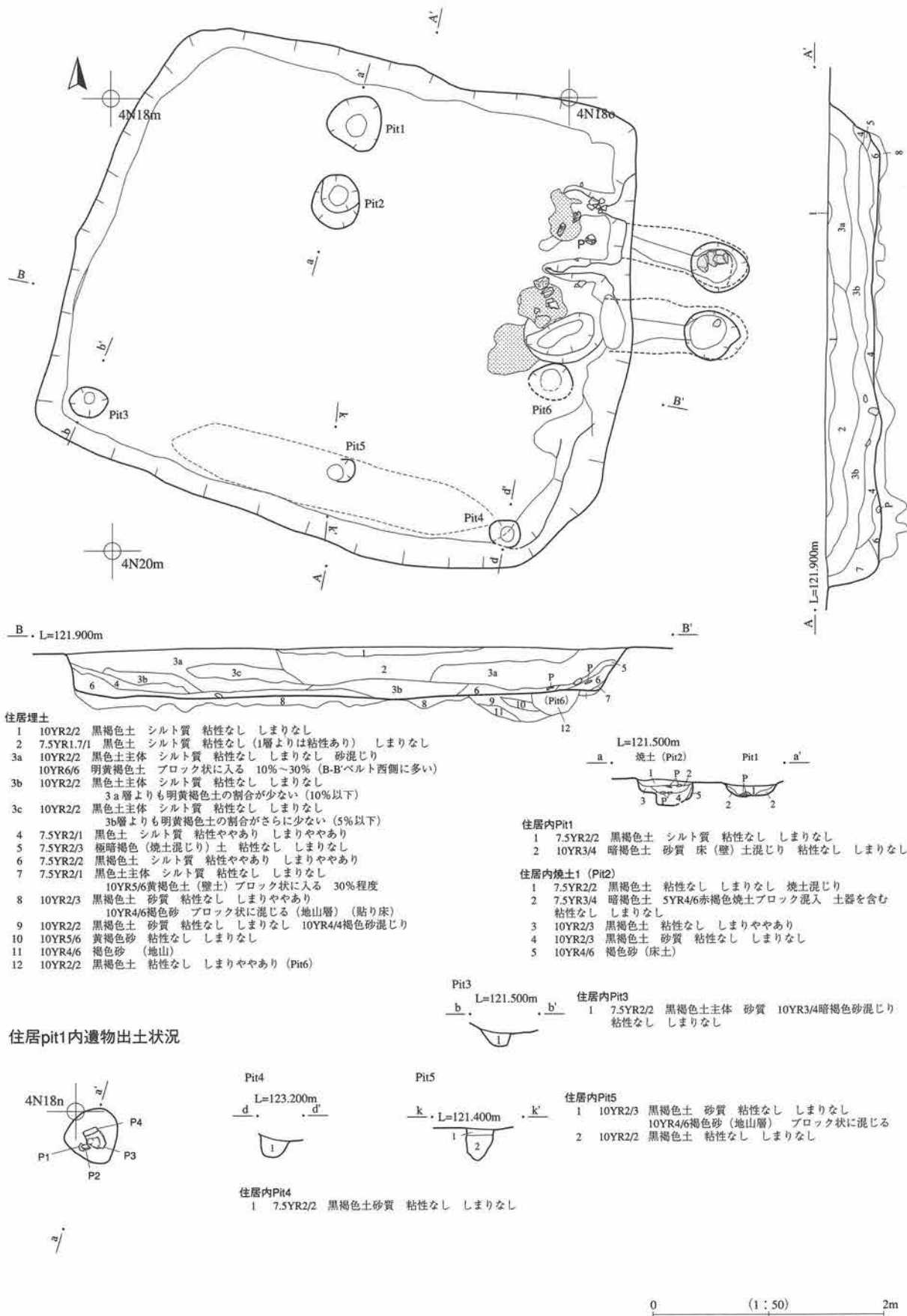
<重複関係>RD150、RD200と重複し、両土坑を切っている。

<検出面>Ⅲ層上面の黒褐色土上での検出である。

<規模・平面形状・方向> 4.6×3.8 mの概ね方形で、北側壁よりも南側壁が若干広がっている。壁高は40cm～45cm、2つのカマドを持ち、いずれも東カマドで新しい1号カマドの方向はN-106°-Eを向く。

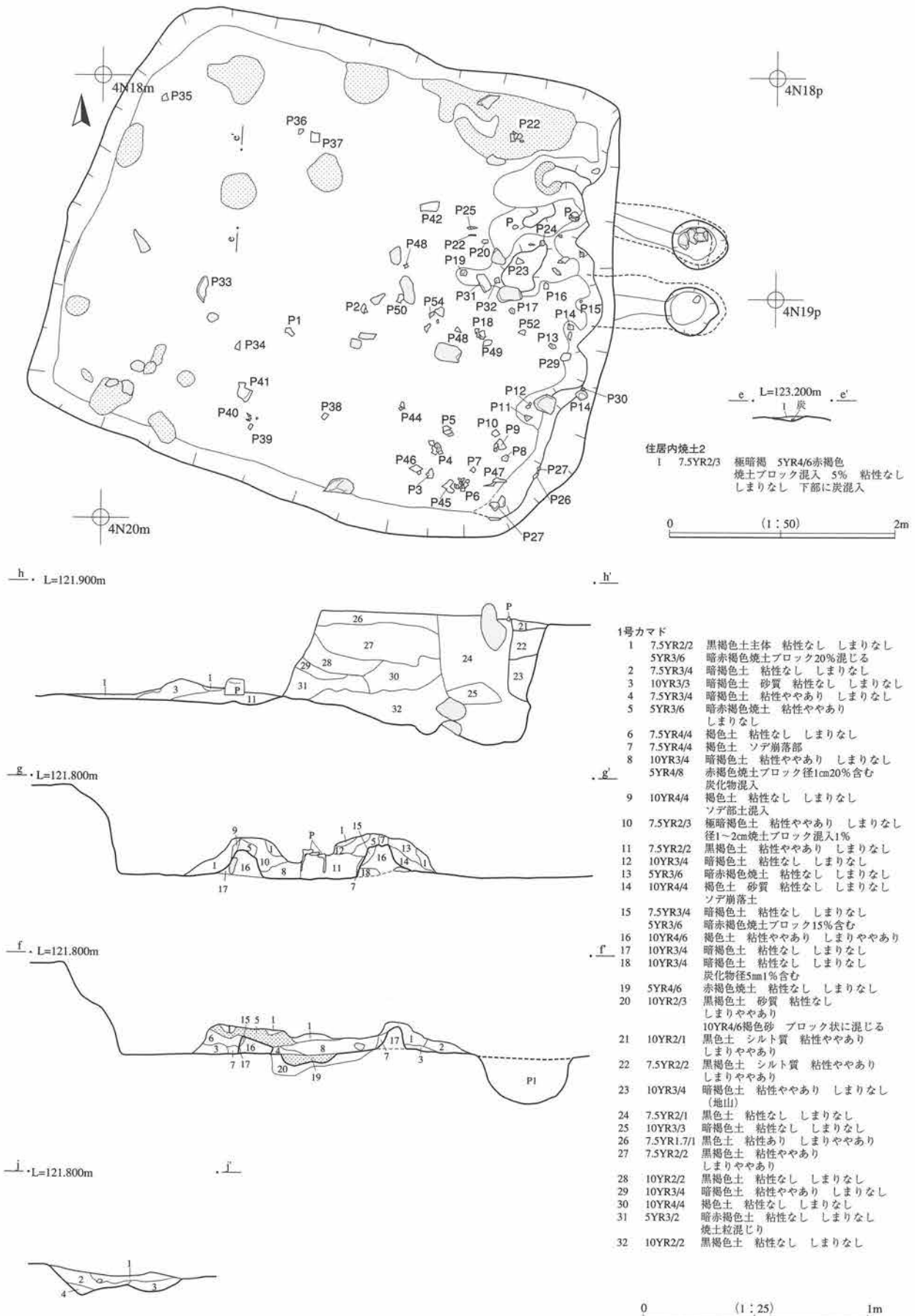


第51図 RA079竪穴住居跡 (20号住)

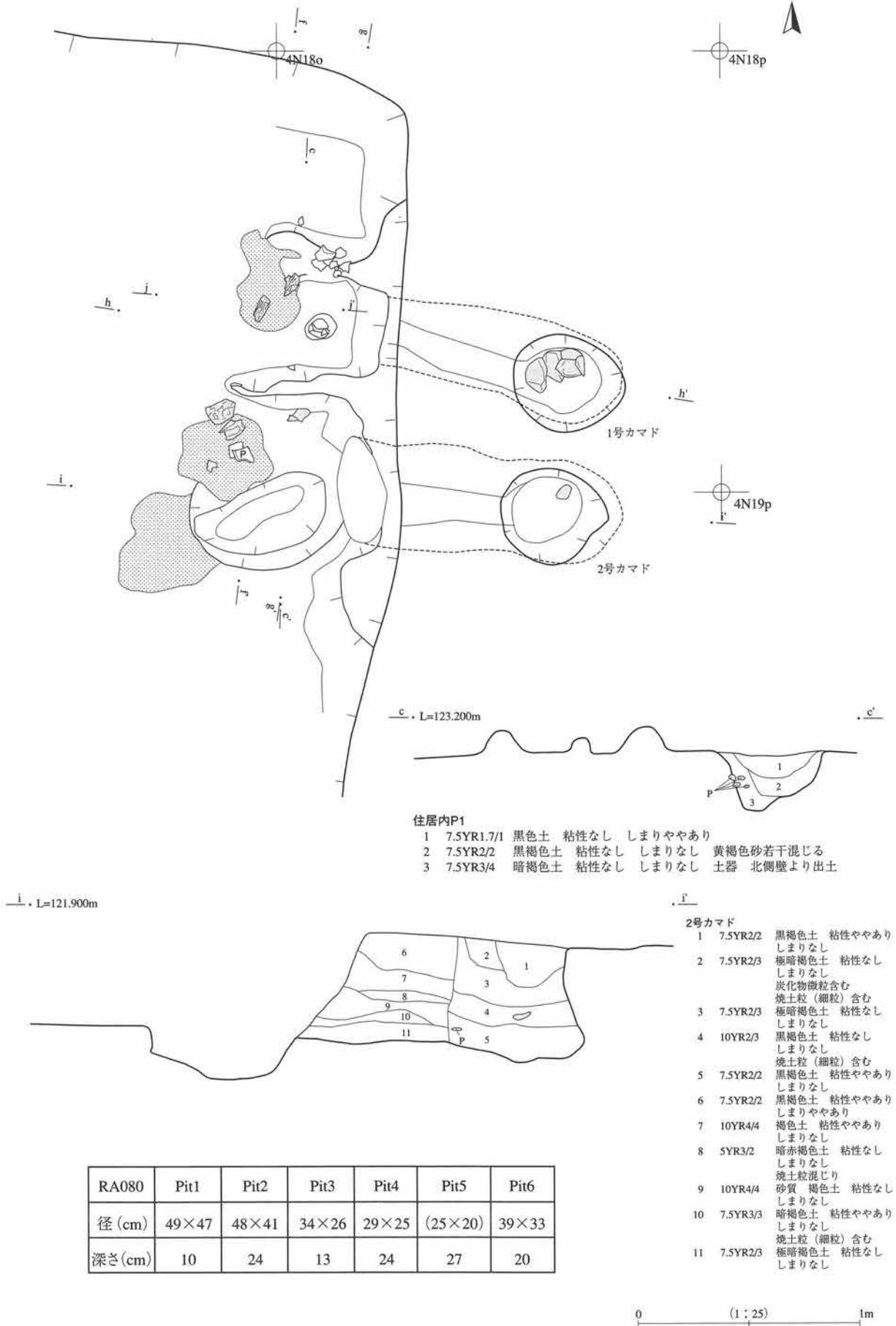


第52図 RA080竪穴住居跡 (1) (2号住)

2 竪穴住居跡



第53図 RA080竪穴住居跡 (2) (2号住)



第54図 RA080竪穴住居跡(3) (2号住)

<埋土>黒色土を中心とした自然堆積土と考えられる。この住居からは、壁際約1m内外で多くの焼土がブロック状に検出された。炭は焼土とともに南側から1点のみ(小片)出土している。いずれの焼土も床面より15cm以上上面での検出で、自然堆積の黒褐色土の上に乗っている。中には不純物のあまり含まないものもあるが、現地性のものとは言い難い。また、周辺の住居の床面地山の黄褐色土が一切混じらないことや一定方向からではないことなど、投げ込みによるものとは考えにくい。

<床面・掘り方・貼り床>床面は全体に砂質の黒褐色土で貼り床がなされ、しまっている。特に1号カマド周辺が硬くしまる。また南側において壁に並行するように50cm幅で他よりも厚く貼られていた。壁はほぼ垂直に掘られている。

<カマド>1号カマドー検出状況として概ね良好である。天井部分は袖と同様の粘土で作られていたが、検出時はすでに右袖部前方に崩れていた。カマドの袖は、据えた粘土の上に土器破片数点を並べ、その土器の傍(燃焼部側)に石をたてかけ、それを芯材としてその上から更に粘土を貼って作っている。ただし、この行為は左側の袖のみである。また、底径8.5cmの土師器の甕を倒立させ底部内部に剥片石器を据えて支脚としている。残っているのは胴部下部～底部のみである。煙道は刳抜式で煙出しに向かって下降している。煙出し先端部及び煙出しの底部煙道側部分に数点礫が出土している。しまりのない埋土とともに入り込んだものと考えられる。概ね残存状態の良好だった袖とは対照的に、燃焼部は使用頻度が少なかったのか、焼成は弱い。小炭化材が検出しており、樹種はケヤキである。2号カマドー当初から検出上面に焼土を含む煙出し状のプランが見えており、1号カマドの煙出しよりも検出状況が鮮明であった。精査の結果、住居内ではほとんどこの時のカマドは消滅しており、袖部と思われる若干の張り出し部が残っているのみで、1号カマドよりも古いカマドであることがわかった。ほぼ真東のN-96°-Eの軸を持ち、1号カマドと同様刳抜式でやや下降しながら煙出しに向かう。規模としては1号カマドと大差はなく煙道の長さが10cm程度短いくらいである。燃焼部分は、1号カマド使用時に小土坑が作られておりほとんどが壊されているが、小土坑北西側壁に1号カマドよりも焼成状態の良い焼土が若干認められた。

<柱穴・付属施設> 住居内には柱穴状ピットが6基、焼土が1基、小土坑が1基検出されている。pp1は大変浅く、10cm程度の深さである。柱穴底部において須恵器片および土師器片が出土している。pp2は、上部に焼土が埋土として入っている。現地性のものではなく、前述した壁際にある焼土と同様と思われる。pp5とpp6は貼り床の埋土を掘り下げていく際に確認できたものである。2号カマド使用時と1号カマド使用時で、住居の建て替え等は確認できなかったが、この2基の柱穴状ピットは、2号カマド使用時の施設の可能性がある。土坑は<カマド>の項でも述べたが、1号カマドの右袖隣、2号カマドの燃焼部分に設けられたものである。土坑の北側壁からは、もともと1号カマドの袖付近にあったと思われる土師器片が流れ込んだ状態で出土している。この土坑は1号カマド使用時のカマドの付属施設として使われたものだろう。(木戸口)

<遺物> (第170～172図・写真図版122、123)

完形品は少ないが、床直～埋土中位(壁際焼土検出面)で須恵器の杯や土師器のロクロ甕、杯、内黒の杯片など多く出土している。おそらく大半は焼土とともに流れ込んだものと思われる。6,732gの土器が出土し、18点を掲載した。内黒、非内黒の土師器坏、須恵器坏、土師器鍋、甕、須恵器甕破片がある。

[土器] 土師器甕は、ロクロ使用、不使用のいずれもある。256は1号カマドの支脚である。260は本住居跡3～4層出土の破片がRA104埋土上層出土の破片と接合したものである。また、261は本住居跡から出土した破片とRA055の5層及び遺構外から出土した破片と接合したものである。

[石器・石製品] 262は円形の礫を利用した磨石である。側面の一部に作業部位が認められる。263は砥面の観察される礫破砕片で、荒砥である。表面をはじめ、3面が作業面である。262が2号カマド、263が1号カマドのそれぞれ煙出し底部から出土している。図化したもの以外では埋土から砥石が1点出土している。

[鉄器] 265は茎部のみの資料である。266・267は穂摘具としたものである。2点とも欠損しているため、全体の形状は不明である。2点とも残存する一端に穿孔がなされている。

[その他] 上記以外に鉄滓が2点、トレンチ時に1点の計3点出土している。いずれも100g未満と軽量なものである。

<時期>年代決定に使える出土遺物が少ないが、平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属する可能性がある。

RA081 竪穴住居跡 (13号住) (第55、56図、写真図版38)

<位置>調査区中央東よりの4018cグリッドに位置する。東側0.1mにRG026が近接している。

<重複関係>RD198と重複し、本住居跡が古い。

<検出面>Ⅲ層である。盛岡市教育委員会がⅣ層まで試掘を行った際のトレンチが本住居跡にかかっており、それを目安にⅢ層上の暗褐色土の広がりで見出した。

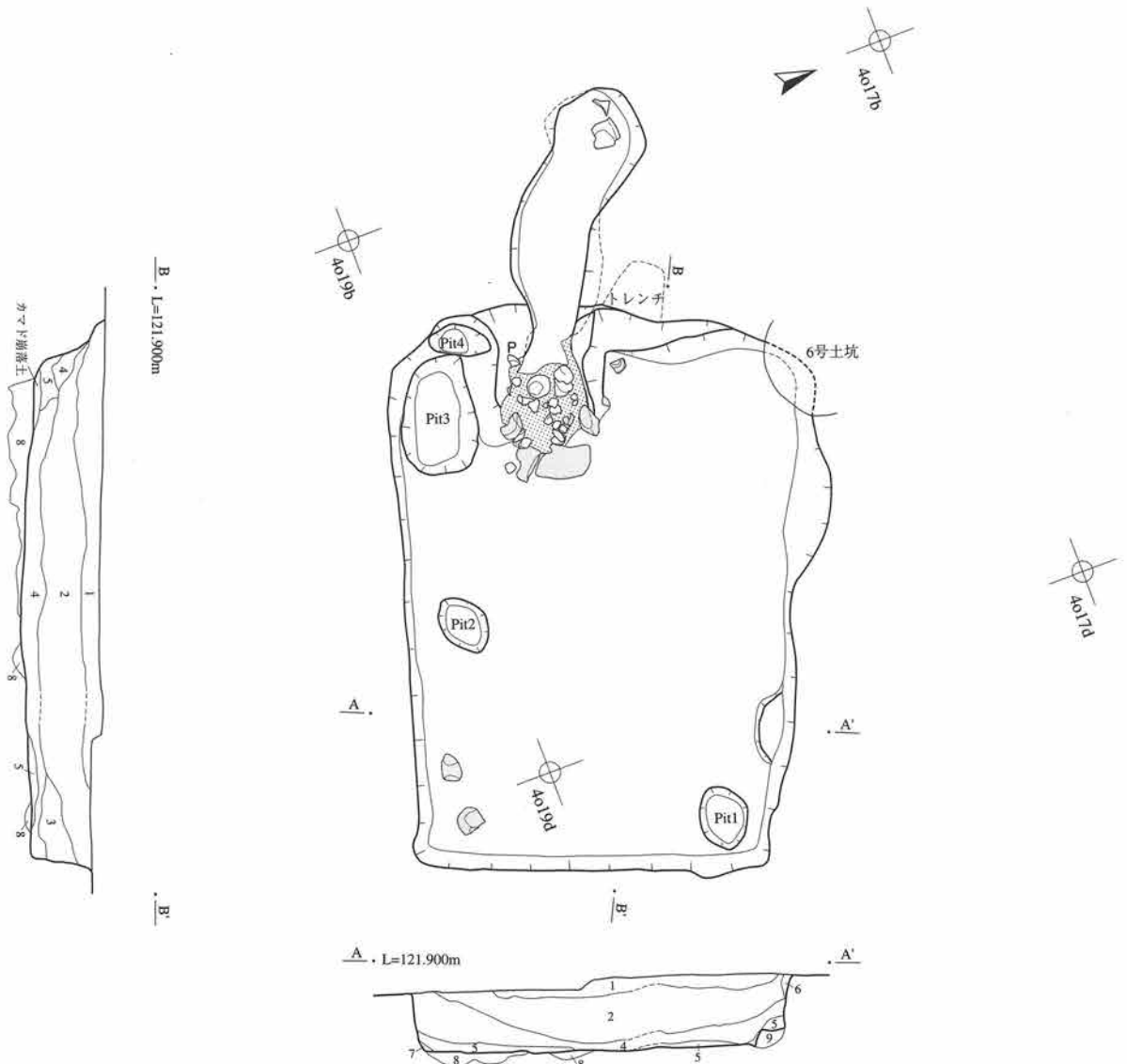
<規模・平面形状・方向>一辺の長さ3.98×3.08m、壁高51cmの長方形である。方向はN-57°-Wである。

<埋土>6層に細分される。床直上には黒褐色土が堆積し、下位はⅤ層起源の砂質土、中位はⅣ層起源の黄褐色土とⅡ層起源の黒褐色土がブロック状に含まれる黒褐色土である。この中位土層は人為堆積のようにも思われるが、ブロック自体が崩れており、掘り起こした土をすぐに埋めたというような状況ではない。掘り上げた土が自然に流入したものか。最上位は黄褐色土粒を少量含む黒褐色土である。

<床面・掘り方・貼り床>床面は平坦でしまっている。掘り方はⅥ層の砂礫層に達する部分にはなく、Ⅴ層砂質土に達する住居南西半と東コーナー付近にのみある。貼り床は、この部分に黒褐色土ブロックが混入する褐色土が貼られている。

<カマド>短辺の北西壁中央に位置する。天井は失われ、両袖が残っている。埋土は天井や袖の崩壊土である。天井に使用された可能性のある礫がカマド手前から出土した。特に最も大きい40×20×20cmの礫は表面が赤化している部分があり、被熱している可能性がある。袖はⅣ層起源の褐色土で構築され、両袖手前に長楕円の礫を立てている。燃烧部は67×62cmの不整形に焼土が形成されている。一部袖内面もよく焼けており、特に左袖の内面は焼けて硬化している。焼土の厚さは5cmである。支脚は燃烧部に左右2個設置されている。左の支脚は、土師器甕の体部下半を伏せたもので、燃烧部中央よりやや奥に設置されている。甕内部には土師器坏3点が上から内黒、非内黒、内黒の順に重ねて伏せて置かれていた。右の支脚は燃烧部右奥に設置され、最も上に土師器甕体部下半、土師器坏、須恵器坏の順に重ねて伏せて置かれていた。煙道は長さ1.5mで掘りこみ式と見られる。埋土は下層はⅤ層崩壊土を含む暗褐～黒褐色土、上層は焼土を含む黒褐～褐色土である。底面は煙出しに向かって緩やかに上がるものの、すぐ一段下がり、煙出しに至るまで水平である。煙道の周辺は地山が濁っており、雨裂等によるものと考えられる。

<柱穴・付属施設>北東壁の東よりの壁際に幅40cm、奥行き30cm、高さ25cmのステップ状の高まりがある。この部分は上面が固くしまっている。東隅にPit 1、南側中央壁よりにPit 2がある。いずれも

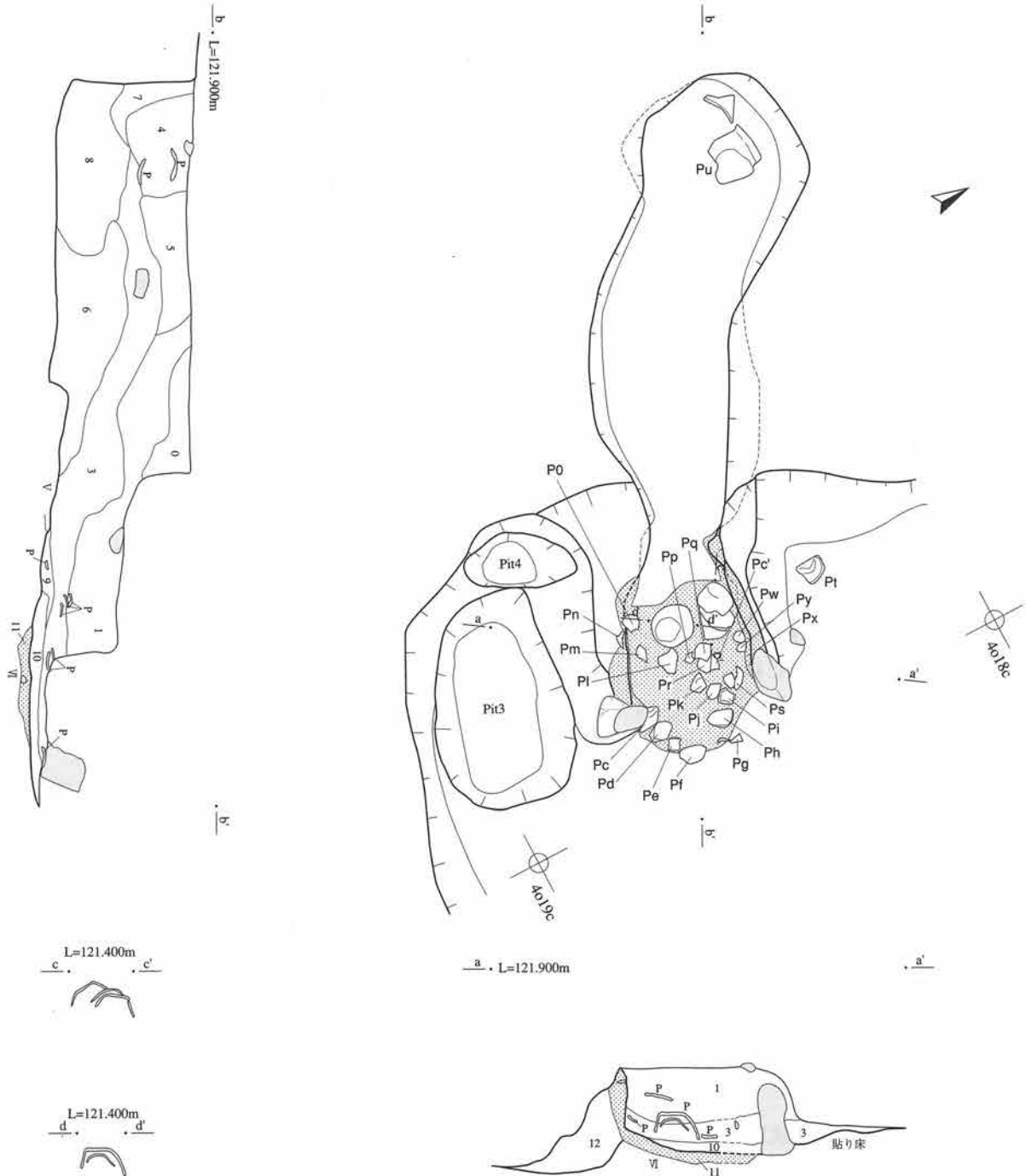


埋土

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまりあり 黄褐色土粒2%含む
- 2 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまりややあり IV層の黄褐色土ブロック5~7% II層の黒褐色土ブロック3%含む
自然堆積か人為かははっきりしないが、RA087・RA088ほどブロックがはっきりしない
- 3 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまり弱
IV層の黄褐色土ブロック10%、VI層黒色土ブロック2%含む
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりなし 全体にV層の砂質土が入りざらつく
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性なし しまりあり
- 6 10YR4/4 褐色シルト 粘性あり しまりなし IV層崩壊土
- 7 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性なし しまりなし V層崩壊土
- 8 10YR4/4 褐 粘性なし かくしまる IV層起源の砂に黒褐色(10YR2/3)土ブロック、粒が5%混入する 貼り床
- 9 10YR4/4 褐 粘性あり 上面のみかくしまる IV層起源の砂質シルトに黒褐色(10YR2/3)土ブロック、粒が3%混入する ステップ構築土

RA081	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4
径(cm)	45×34	44×31	84×56	50×21
深さ(cm)	10	2	8	35

第55図 RA081竪穴住居跡(1) (13号住)



カマド

- 0 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりややあり
- 1 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりあり 黄褐色粘土15%含む 焼土を少量含む
- 2 7.5YR4/3 褐 粘性なし しまりややあり 焼土を全体に含む 袖の崩壊土
- 3 10YR4/3 褐 粘性なし しまりややあり 焼土を全体に少量含む
- 4 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりなくボロボロ 礫 土器片含む
- 5 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし
- 6 10YR3/4 暗褐 粘性なし しまりややあり V層の崩壊土 黒褐色土5%含む
- 7 10YR3/2 黒褐 粘性ややあり しまりなし 炭、IV層崩壊土を含む
- 8 10YR2/3 黒褐 粘性ややあり しまりなし V層崩壊土25%含む 黒褐色土ブロック10%含む
- 9 7.5YR3/2 黒褐 粘性なし しまりなし 焼土を全体に多く、粘土ブロックを少量含む
- 10 焼土 動いており、しまりはない
- 11 焼土 かたくしまる
- 12 カマド袖 IV層起源の褐色土に黒褐色土が混入する

0 (1:25) 1m

第56図 RA081竪穴住居跡 (2) (13号住)

浅い。カマド左脇にPit 3、4がある。位置から貯蔵穴の可能性はある。

(金子佐)

<遺物> (第172~175図、写真図版123~125)

5,530gの土器が出土し、27点を掲載した。内黒及び非内黒の土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器甕、壺がある。カマドの周辺やカマド内、カマド埋土から出土した土器が多い。不掲載であるが、カマド前の埋土下層から長辺40cm前後の礫3点及び20cmの礫1点が出土している。カマド天井や袖に用いたと思われる。南側コーナー付近の埋土中から20cm角の礫が数点出土した。また、貼り床から土師器坏、須恵器坏の破片が出土したが、小片で図化に至らなかった。

[土器] 271は東の支脚として、290の土師器甕の内部から出土したものである。272、273、279は西の支脚として287の土師器甕の内部から出土したものである。そのほか、274、276、278、280、281、282、283はカマド内から出土した。土師器甕もカマド出土のものが多い。小型の290、292、293、294はロクロを使用しているが、他は不使用である。289は本住居跡1層及び床直上出土の破片とRD198(16号土坑)の破片が接合したものである。284はカマド出土の破片と煙出し埋土上位出土の破片が接合したものである。291はてづくねの小型の土器で、鉢かと思われる。296も極く小型の須恵器つぼである。

[石器・石製品] 299~301は砥石で、299は荒砥、300・301は仕上砥である。299は表裏面と側面を作業面としており、少なくとも7面の作業面を有する。側縁には深い溝状の使用痕が観察される。300は両端を除く五面を作業面としている。301は表裏2面と右側面を作業面としており、特に表面の作業面には使用痕が顕著に観察される。299は床面直上から、300・301は埋土から出土している。図化したもの以外では埋土から剥片が1点、床面直上から台石が1点出土している。

[鉄器] カマドから不明鉄製品1点、トレンチから刀子1点が出土している。

302は刀子の茎部の資料である。303は釣針で、断面形は方形を呈する。302はトレンチから、303はカマドからの出土である。

<時期>出土から9世紀後葉~10世紀初頭に属すると考えられる。

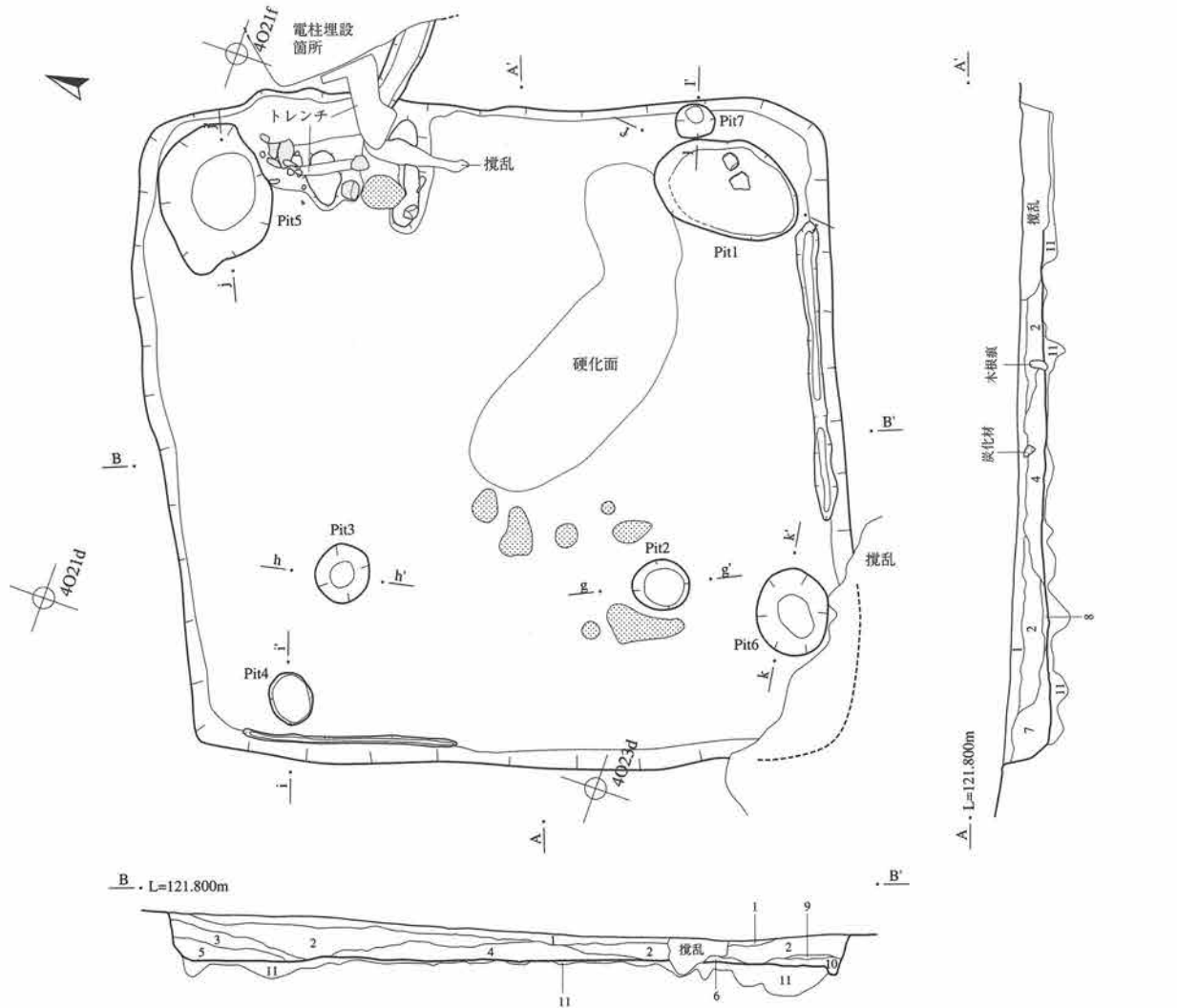
RA082竪穴住居跡(57号住)(第57~59図、写真図版39、40)

<位置>調査区中央の4 O21 d グリッド付近に位置する。本住居跡の東側に隣接して調査時も供用中の電柱が存在し、調査不能範囲となっていた。そのため、カマド煙道部東端については調査を断念した。

<重複関係>なし

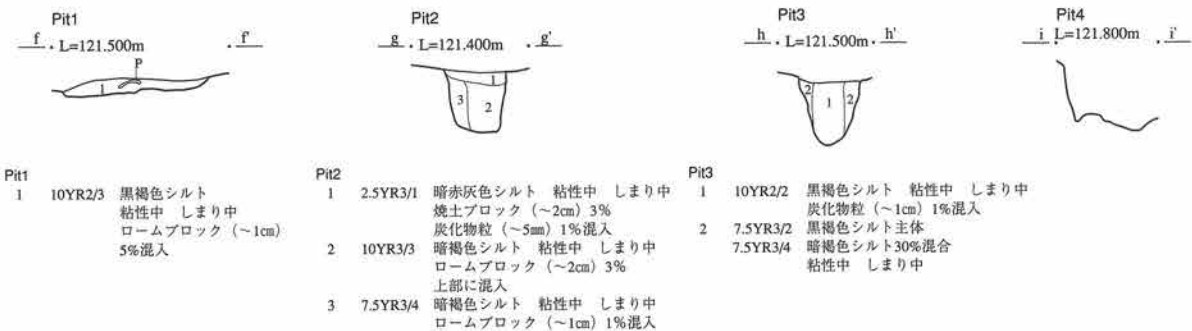
<検出面>比較的残存状態の良好であった北西壁~西端コーナー部周辺ではⅢ層上面で、削平が顕著な東端コーナー部分ではⅢ層中で確認した。調査以前の削平により、一部は埋土上部を欠く可能性が高い。そのため、掘り込み面、生活面は把握できなかった。また、検出段階で小規模ながら数箇所の攪乱が認められ、南端ではコーナー部分を消失させていた。

<規模・平面形状・方向>一部を攪乱により欠くものの、概ね正方形を呈する。規模は、北西壁4.52m(壁高33cm)、北東壁4.66m(壁高16cm)である。カマド軸線から算出した主軸方向は、N-84°-Eである。しかし、本住居跡ではカマドが壁と直行せず、斜めに構築されているため、他住居との主軸方向の比較には注意を要する。なお、平面プランから算出した主軸方向は、N-67°-Eとなっている。<埋土>焼失家屋と考えられ、焼土、炭化物を含む黒褐色土が主体に堆積している。焼土、炭化物は、住居の焼失に伴って二次堆積したものである。これを、混入物の状況を主眼に10層に分層した。この各層の土質は混入物以外に大きな違いは認められない。したがって本住居跡は、焼失という状況に何



埋土断面

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 ローム粒 (~3mm) 1%均等に混入
- 2 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 ローム粒 (~5mm) 3%、焼土粒 (~1mm) 1%混入
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 ローム粒 (~3mm) 1%均等に混入
- 4 7.5YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物粒 (~1cm) 3%、焼土粒 (~3mm) 3% 炭化材混入層
- 5 7.5YR3/1 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 焼土ブロック (~3cm) 上部に濃集5% 壁崩落ロームブロック (~1cm) 3%混入
- 6 5YR2/1 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 焼土粒 (~1mm) 1% 焼土と黒色土の混合土
- 7 7.5YR2/1 黒色シルト 粘性中 しまり中 炭化材混入層 ロームブロック (~1cm) 3%、炭化材 (~3cm) 3%混入
- 8 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物粒 (~5mm) 3%混入
- 9 5YR3/2 暗赤褐 焼土主体 粘性 やや弱 しまり中 7.5YR2/2黒褐色シルト30%との混合土
- 10 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中
- 11 褐 (10YR4/4) 地に黒褐 (10YR3/1) の斑 砂・根にする掘乱あり 掘り方埋土



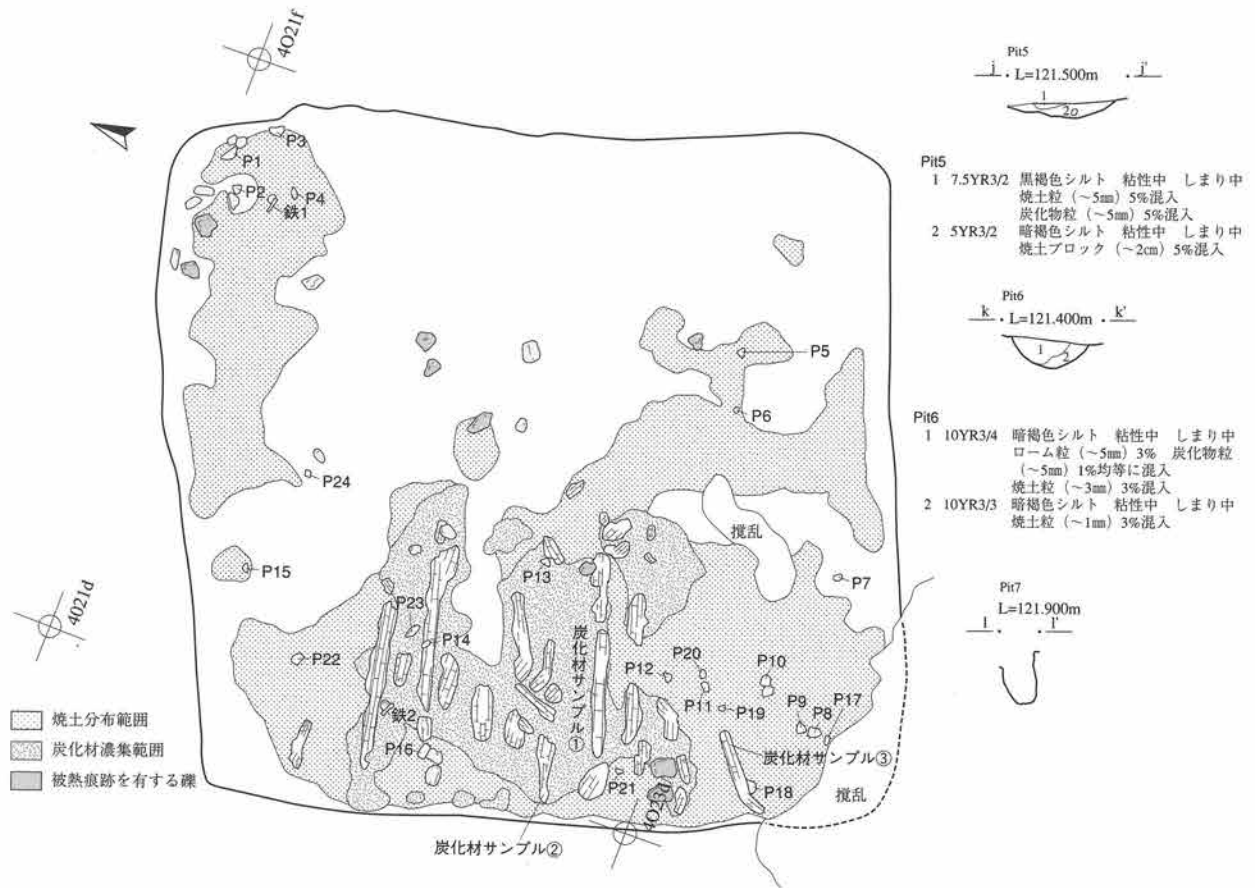
Pit1
1 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまり中
ロームブロック (~1cm) 5%混入

Pit2
1 2.5YR3/1 暗赤灰色シルト 粘性中 しまり中
焼土ブロック (~2cm) 3%
炭化物粒 (~5mm) 1%混入
2 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
ロームブロック (~2cm) 3%
上部に混入
3 7.5YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
ロームブロック (~1cm) 1%混入

Pit3
1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中
炭化物粒 (~1cm) 1%混入
2 7.5YR3/2 黒褐色シルト主体
7.5YR3/4 暗褐色シルト30%混合
粘性中 しまり中

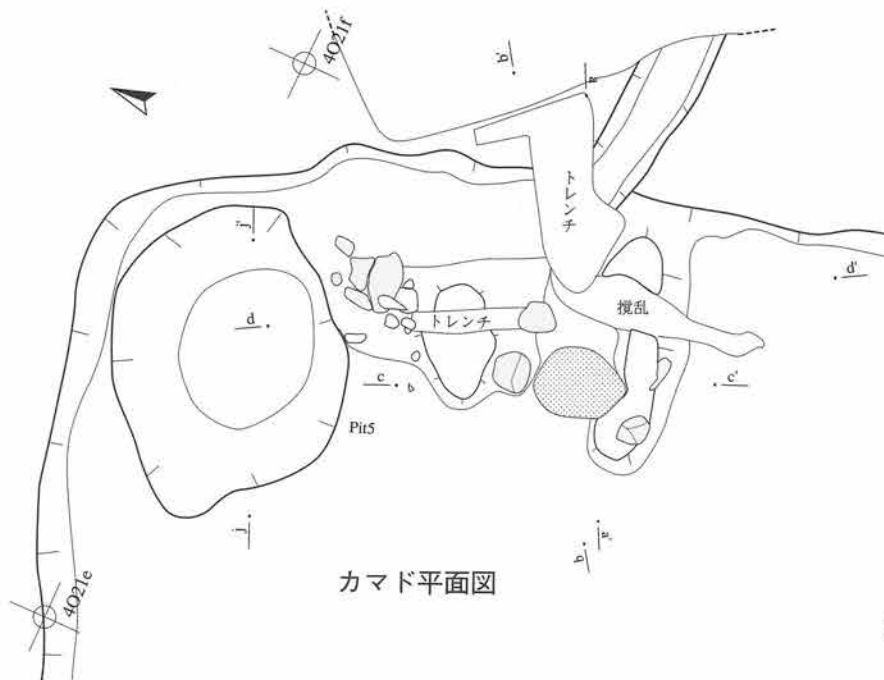
0 (1:50) 2m

第57図 RA082竪穴住居跡 (1) (57号住1)



遺物・焼土・炭化物出土状況

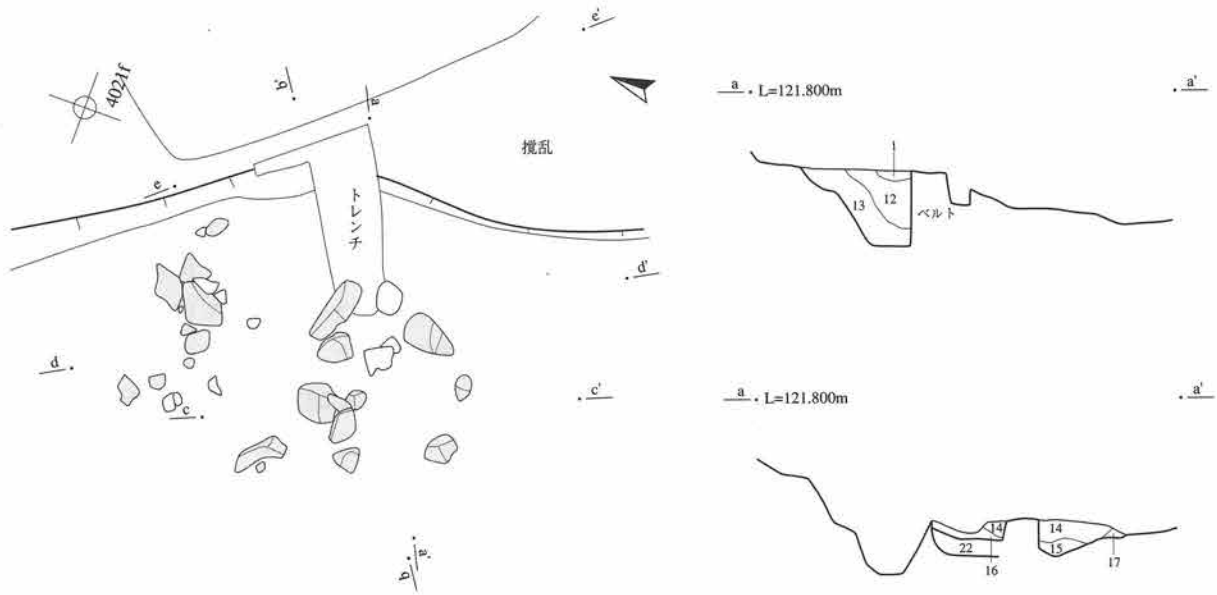
0 (1:50) 2m



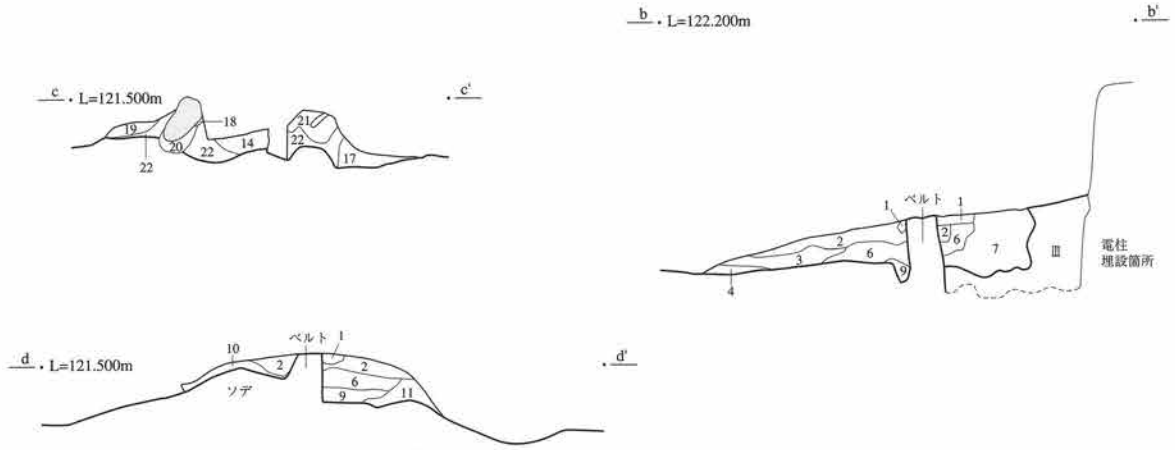
RA082	径 (cm)	深さ (cm)
Pit1	103×67	11
Pit2	39×36	40
Pit3	40×39	42
Pit4	36×30	40
Pit5	106×82	10
Pit6	60×49	21
Pit7	27×24	34

0 (1:25) 1m

第58図 RA082竪穴住居跡 (2) (57号住2)



カマド上部・遺物・礫出土状況



カマド断面

- 1 10YR4/3 鈍い黄褐色シルト 粘性中 しまり中 一部被熱により5YR3/2 崩落カマド天井?
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 焼土粒 (~1mm) 3%
- 3 7.5YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり中 黒色土と焼土の混合土 焼土粒 (~3mm) 5%
- 4 7.5YR2/2 黒褐色シルト 粘性中
- 5 10YR5/6 (欠番)
- 6 7.5YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 焼土粒 (~3mm) 5% 焼土と黒色土の混合土
- 7 10YR4/4 褐色シルト主体 粘性中 しまり中 一部10YR3/3暗褐色シルト混入 (25%)
- 8 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまりやや弱 (欠番)
- 9 7.5YR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまり弱 焼土主体層 火床面被熱層 被熱強
- 10 7.5YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 焼土粒 (~1mm) 1%
- 11 7.5YR2/3 極暗褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 ソデ構築土
- 12 7.5YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 焼土粒 (~5mm) 10% 上部に濃集 被熱中

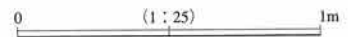
- 13 7.5YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 被熱弱
- 14 7.5YR4/4 褐色砂質シルト 焼土 上面固くしまる
- 15 7.5YR4/4 褐色砂質シルト 地山砂層が火を受けて変化したもの
- 16 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト 14層に似るがもろい 焼土
- 17 7.5YR2/1 黒色シルト もろい カマド底土
- 18 7.5YR2/1 黒色シルト もろい
- 19 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト カマド本体崩落土
- 20 7.5YR3/2 黒褐色シルト 焼土粒多い 袖石掘り方埋土
- 21 7.5YR3/2 黒褐色シルト 根に攪乱を受けていて非常にもろい 袖石掘り方埋土
- 22 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト 掘り方埋土

煙道



煙道

- 1 10YR2/1 黒色地に10YR5/6黄褐色土散るシルト 黒色土の再堆積土に地山粒子、ブロック含む
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性あり
- 3 7.5YR3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり 焼土粒を含む



第59図 RA082竪穴住居跡 (3) (57号住3)

らかの要因（人為的な要因を含む。）が加わり、比較的短期間のうちに埋没した可能性が高いと考える。焼土の分布範囲は、おおよそ中央部から西半分と北西壁際で捉えることができた。これは、中央部では床面に接する状態（4層）で、南壁際では自然堆積と考えられる黒褐色堆積土（10層）の上位（9層）で確認した。焼土の量は、壁際で多く、壁から離れる中央部では薄くなる傾向が看取できた。炭化材は、南西壁際から中央部にかけて分布しており、7層中で多く確認した。遺存状態は全体に不良であったが、一部については形状を捉えることができた。この炭化材は、丸木材であった可能性が高く、残存径約10cmの円柱状を呈し、長いものでは全長1mを超える。出土状態は、南西壁際から中央部方向へ向けて倒れるような状態で出土したものが多い。このうち、3点についてはサンプルを採取、肉眼による樹種同定を行い、3点全てがクリであるという結果を得た。埋土中からは、径15cm前後の礫が多数出土した。この中には赤変、煤の付着といった被熱の痕跡を確認できるものがある。これは、カマドの芯材として用いられたものが廃絶後に散乱したものと考えられるが、住居の焼失時に被熱を受け、焼土、炭化材と同時に埋土中に混入したと考えられるものも含んでいる。

<床面・掘り方・貼り床>壁は、4辺とも急角度で立ち上がる。掘り方埋土を床面としており、概ね平坦に作出される。床面では、中央部から東端コーナー部の間で顕著な硬化面が形成されている。また、床面の中央部からPit 2周辺では、斑点状に焼成面が形成されていた。これは、継続的な被熱の痕跡とは考えにくく、住居焼失時に形成されたものと考えられる。

<カマド>袖の残りがあまり良くなく、また煙道部分に電柱が立っており、さらには横に攪乱があったため、カマドの軸方向は掘る前に確認できなかった。精査後、当初設定した南北断面はカマドの中心からずれていることが分かったので、これを放棄し、礫をかけてより西側に設定し直したため、図がわかりづらくなっている。カマドの軸方向は、住居の壁に直交しない。袖は、礫（土器片も？）を芯にして黄褐色土で形作っていたようだが、すっかり崩れてしまっていた（北東側の礫ははっきり火を受けているが、南西側は不明瞭）。燃焼部は、床面より高く、カマド袖を構築した黄褐色土中にガラガラと立ち上がり、あまりしっかりと焼土を形成していない。煙道も、ガラガラと立ち上がる溝状のようだが、煙出は調査できなかった。

<柱穴・付属施設>Pit 2、3は、下端がVI層に到達し、他のPitに比べ深い。共に柱痕を残すことから、本住居の主柱穴と考えた。また、Pit 2は埋土上部に焼土、炭化物が混入している。一回り小振りなPit 4、7も同様に柱穴の可能性もある。Pit 7は、住居内側に向けて内傾している。

Pit 1は、底面が住居床面から続く貼り床で作出されている。Pit 5は、カマドに隣接しており、その位置から見て貯蔵穴の可能性もある。 (金子佐)

<遺物> (第175、176図、写真図版125、126)

床面出土としたものもあるが、大部分の遺物は、焼失と前後し埋土に混入したものと考えられる。内黒土師器坏、土師器甕、須恵器甕、須恵器壺がある。3,555gの土器が出土し、9点を掲載した。

[土器] 304は墨書土器である。Pit 5の底面及び5層から出土した。311の須恵器長頸瓶は本住居跡6層出土の破片とRD157出土の破片、遺構外出土の破片が接合したものである。

[石器・石製品] 313は楕円形の礫を利用した磨石である。作業部位は表面のみである。314は円形の礫を利用した磨石である。作業部位は表裏二面で、両面とも非常に平滑になっている。2点とも埋土から出土している。図化したもの以外では埋土から砥石が2点出土している。

[鉄器] 317は両端を欠損した鉄鏃で、刃部の平面形が羽子板状を呈する方頭（斧箭）式の鉄鏃と考えられる資料である。318は一端を欠損した紡錘車である。円盤部の径は4.6cm、軸部の径は0.45cmである。2点とも埋土からの出土である。

<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

RA083竪穴住居跡（58号住）（第60、61図、写真図版41）

<位置>調査区中央部4 O21 j グリッド付近に位置する。

<重複関係>重複関係はないが、RA084に近接する。

<検出面>表土直下のⅢ層上面で検出した。

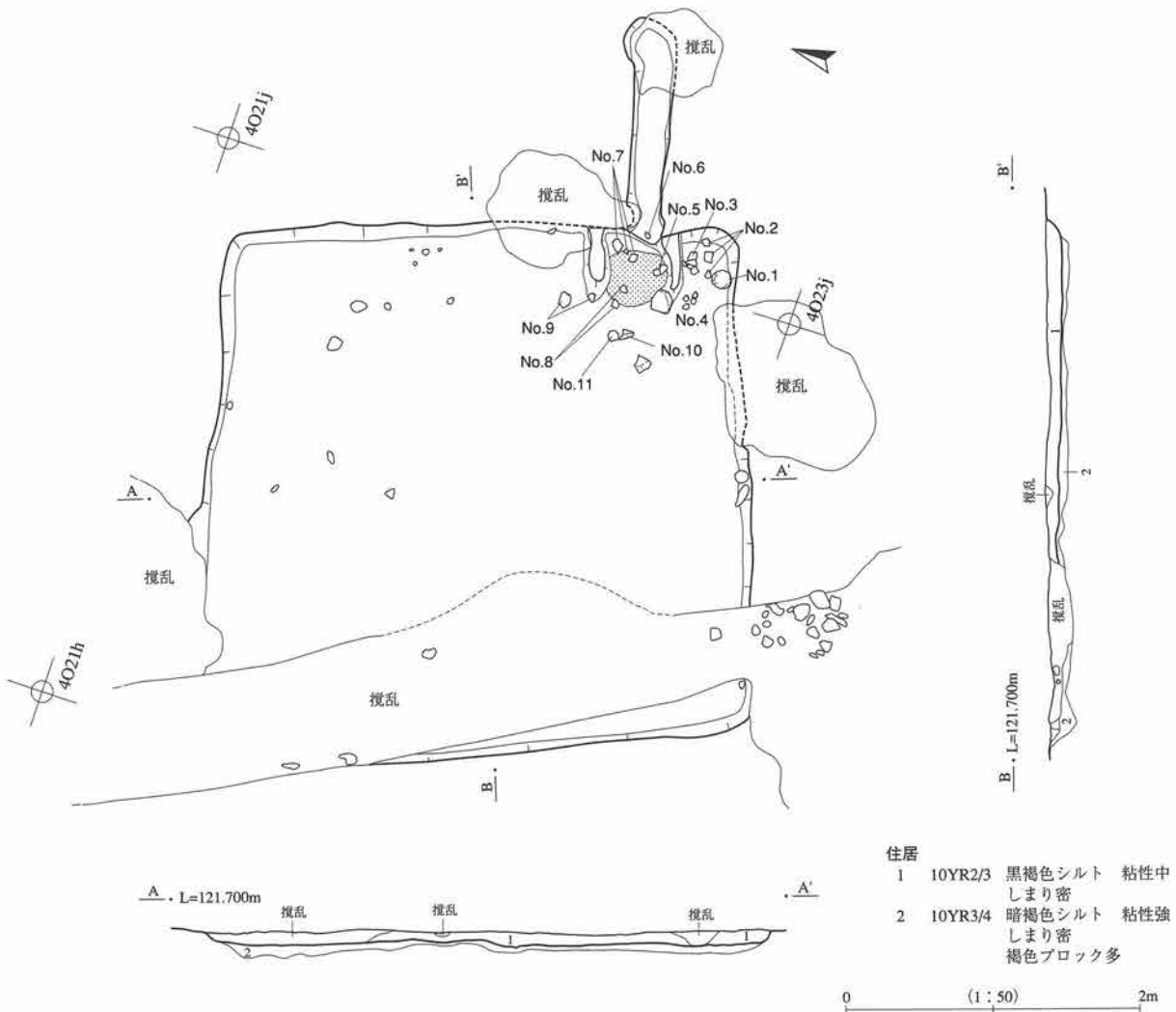
<規模・平面形状・方向>3.7×3.64mの方形を呈する。壁高は僅か10cmである。カマドによる方向はN-76°-Eである。

<埋土>Ⅱ層と考えられる土層が堆積している。上部の攪乱により全体的な堆積状態を判断する材料に乏しいが、混入物が認められないことから自然堆積と考えられる。

<床面・掘り方・貼り床>床面は全体的に硬化が認められる。掘り方はほぼ均等な深さで、6cm程度である。貼り床は褐色土ブロックを多量に混入する暗褐色土である。

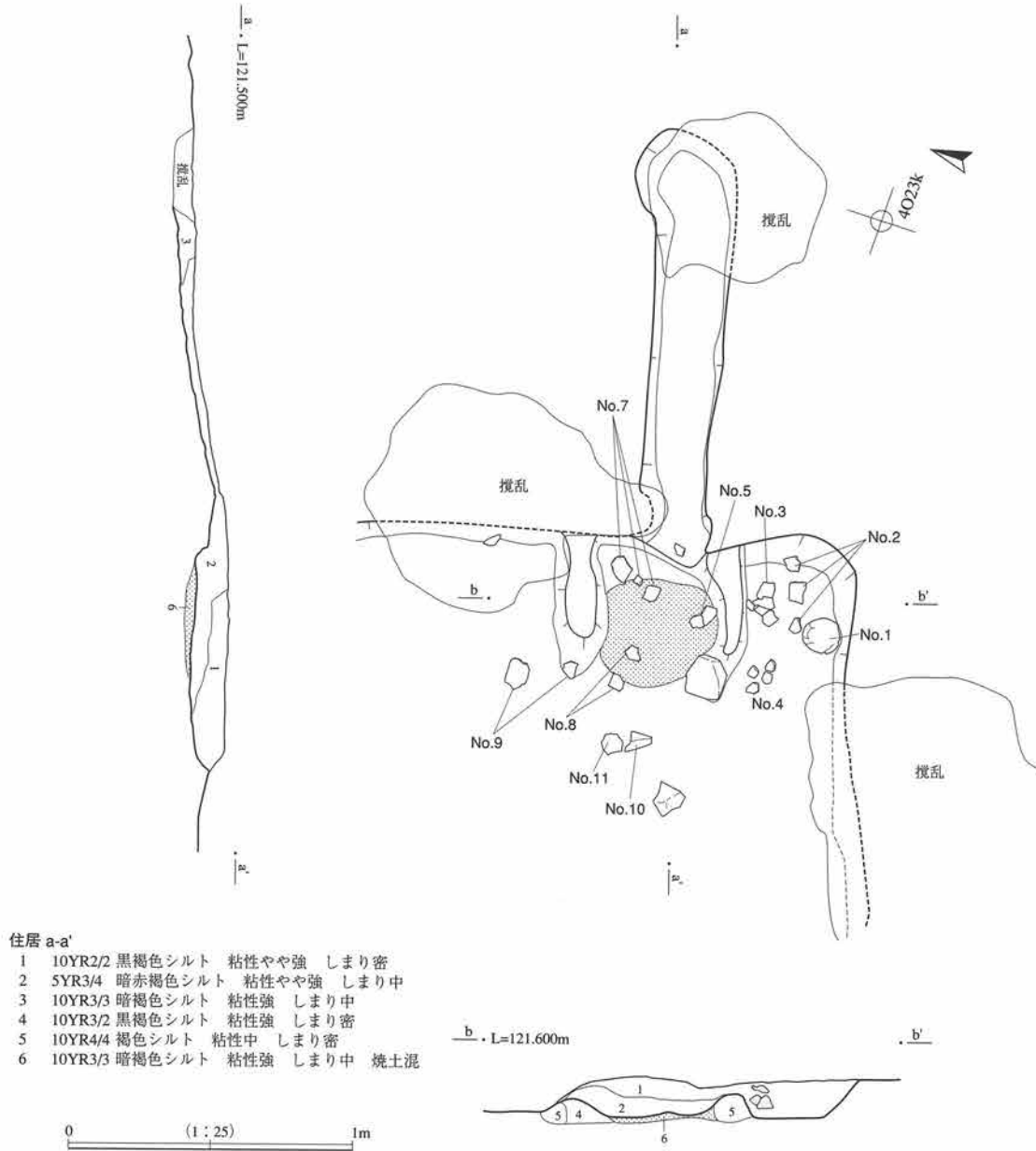
<カマド>東壁55号住同様、上部の攪乱が著しい。残存する範囲の状況で、煙道は長さ1.5m直径25cmである。煙道入り口は一段高くなっている。袖は褐色土を基本に構築されている。北袖の長さは51cm、南袖の長さは54cmである。支脚は出土していない。

<柱穴・付属施設>床面および貼り床除去後も柱穴等の施設は確認できなかった。 (八木)



第60図 RA083竪穴住居跡（1）（58号住）

2 竪穴住居跡



第61図 RA083竪穴住居跡 (2) (58号住)

<遺物> (第176図、写真図版126)

内黒及び非内黒の土師器坏、甕がある。カマド周辺からまとまって出土している。No 1 は土師器坏で、カマド南脇から出土している。土器の総量は1,739gで、3点を掲載した。

[土器] 319はカマドから出土している。320は口縁部内外にタール状の付着物がある。

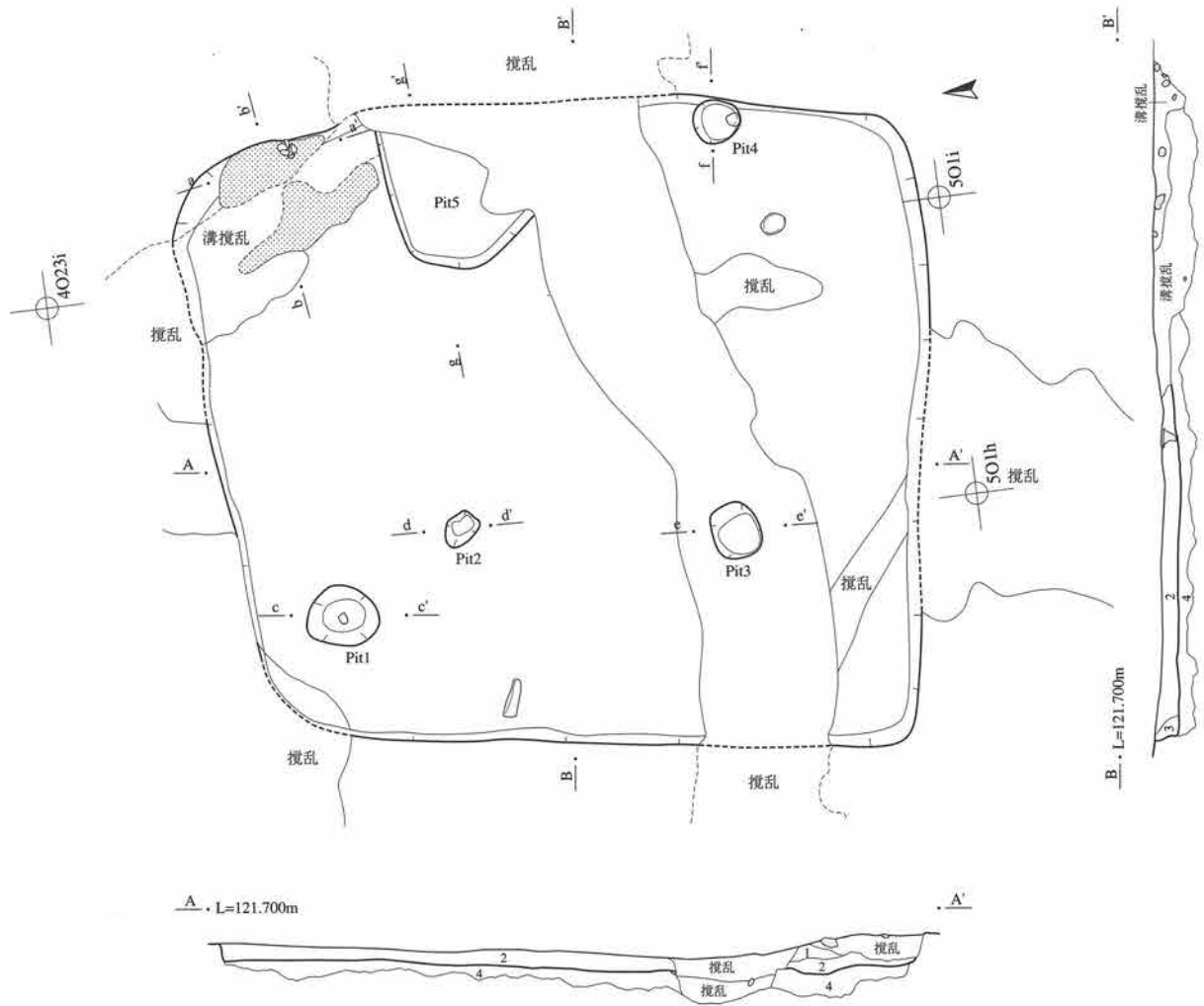
<時期>出土遺物が極めて少ないので確かではないが、平安時代の9世紀後葉から10世紀前葉に属する可能性がある。

RA084竪穴住居跡 (55号住) (第62図、写真図版42)

<位置>調査区中央部、4 O23 i グリッド付近に位置する。

<重複関係>重複関係は認められないが、RA059・RA083に近接する。

<検出面>RA091と同じく表土直下のⅢ層上面で検出した。ごく新しい溝の攪乱が2条認められる。

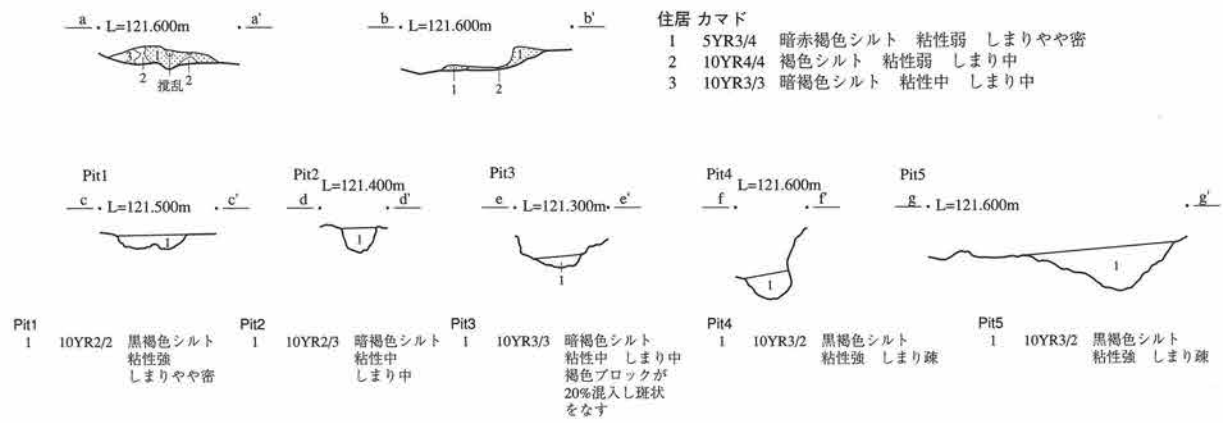


住居埋土

- | | | | | | | | | | | |
|---|---------|--------|-------|------|---|---------|--------|-----|------|------------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 3 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまり密 | 10YR4/4褐色砂10%混入 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性やや強 | しまり疎 | 4 | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性中 | しまり密 | 10YR3/3暗褐色シルトがブロック状に混入 |

住居 カマド

- | | | | | |
|---|---------|---------|-----|--------|
| 1 | 5YR3/4 | 暗赤褐色シルト | 粘性弱 | しまりやや密 |
| 2 | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性弱 | しまり中 |
| 3 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 |



- | | | | | | |
|------|---|---------|--------------------|-----|--------|
| Pit1 | 1 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまりやや密 |
| Pit2 | 1 | 10YR2/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 |
| Pit3 | 1 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 |
| | | | 褐色ブロックが20%混入し斑状をなす | | |
| Pit4 | 1 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまり疎 |
| Pit5 | 1 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまり疎 |

RA084	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5
径(cm)	49×42	25×19	37×32	33×30	95×77
深さ(cm)	9	16	9	17	29

0 (1:50) 2m

第62図 RA084竪穴住居跡 (55号住居)

＜規模・平面形状・方向＞4.52×4.34mで方形を呈する。上部の攪乱が深くまで及び、壁高は20cmにとどまる。カマドによる主軸方向はN-80°-Eである。

＜埋土＞上部の攪乱と溝の攪乱により残存状態は不良である。残存する範囲で覆土は3層に分層される。黒色土の1・2層と褐色砂の混入する暗褐色土が堆積している。これらはレンズ状に堆積しているものと考えられ、自然堆積土と判断できる。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面は全体的に硬化が認められる。掘り方は全体的に同じ深さで、6～12cmの深さである。貼り床は暗褐色土ブロック混じりの褐色土で構成される。

＜カマド＞カマドは東壁の北寄りに1基確認した。カマドの主軸方向はN-80°-Eである。調査時、煙道の残存部かと思われた黒色土を断ち割って確認したが、土層の層相から攪乱と判断した。既述のとおり上部の攪乱が著しく、煙道は失われていたと考えられる。上部の攪乱とカマドを南北に横断する溝攪乱はカマド本体にも及び、袖の大部分が失われている。残存する範囲では袖は褐色土を基本に作られていると考えられるが、形状・規模は不明である。カマドは僅かな袖の痕跡と焼土が認められるに過ぎない。

＜柱穴・付属施設＞柱穴は3個確認した。また、カマド南脇にP5を確認しており、位置と規模から貯蔵穴であった可能性が考えられる。(八木)

＜遺物＞(第176、177図、写真図版126)

内黒土師器坏、土師器甕、須恵器甕がある。2,473gの土器が出土し、6点を掲載した。小片で図化に至らなかったが、カマドから非内黒の土師器坏破片、土師器甕破片、Pit 5及び埋土から敲きのある須恵器甕破片、貼り床から須恵器長頸瓶破片、土師器甕、須恵器壺の体部上半の破片が出土した。また、Pit 1から土師器甕破片、非内黒土師器坏破片、貼り床から内黒土師器坏破片、土師器甕破片が出土した。また、黒曜石の剥片が1点出土しているが、溝攪乱の範囲から出土しているため、時期は不明である。

[土器] 332は底部中央付近が穿孔しているが、底が極薄いため開いた孔で、人為的なものとは考えにくい。323はPit 5から出土した極く小型のてづくねの土器で、砂底である。324～326はずれも住居北東部の床直上から出土した。

[石器] 329は楕円形の礫を利用した磨石で、作業部位は表面のみである。図化したもの以外では埋土や攪乱から剥片が2点、磨石が1点出土している。

[鉄器] 331は板状の鉄製品である。断片的な資料であるため、詳細は不明である。

＜時期＞出土遺物が少ないので、確かではないが平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属する可能性がある。

RA085竪穴住居跡(45号住)(第63、64図、写真図版43)

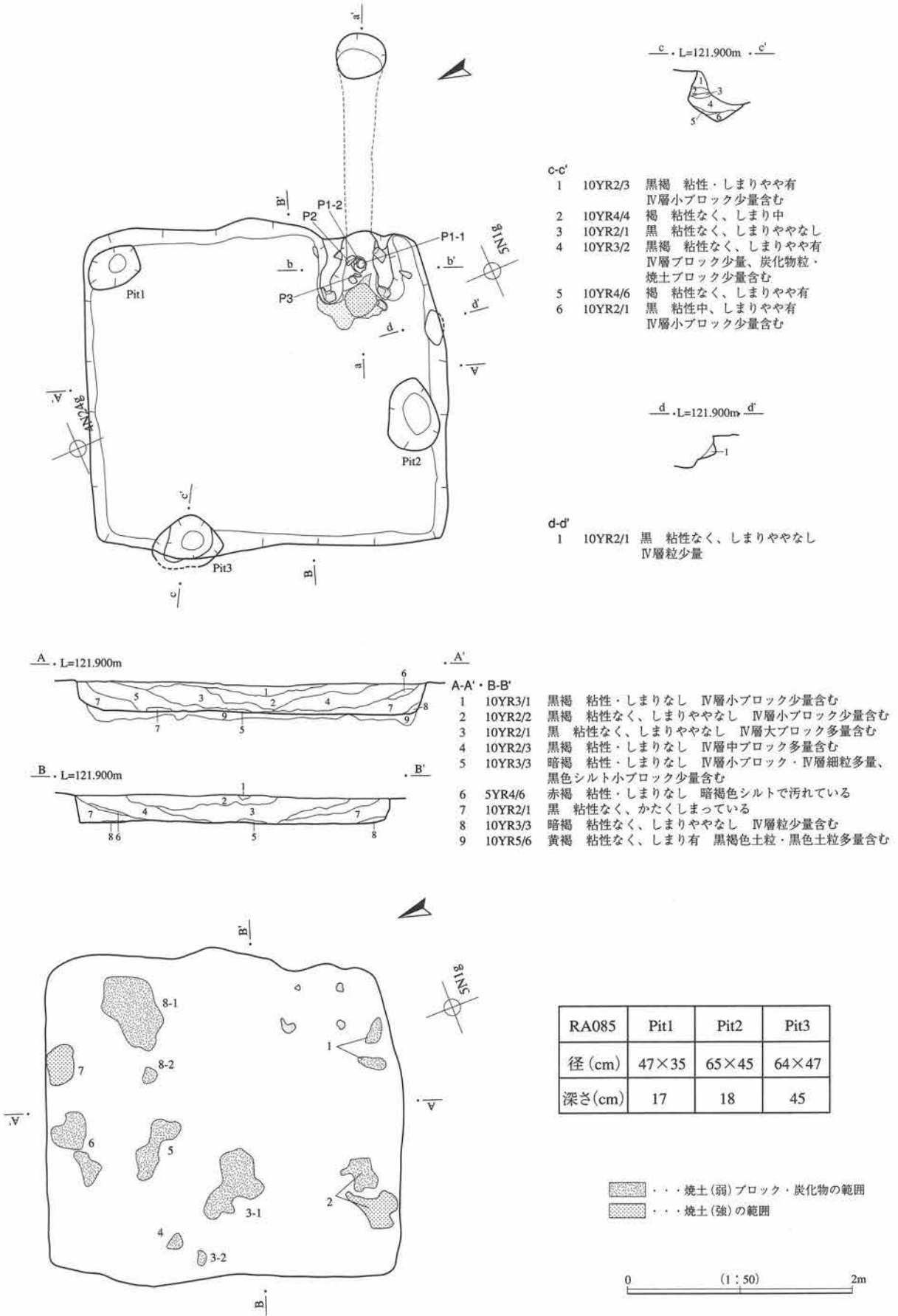
＜位置＞第10次調査区中央部の4 N25 g グリッド周辺に位置する。

＜重複関係＞なし。

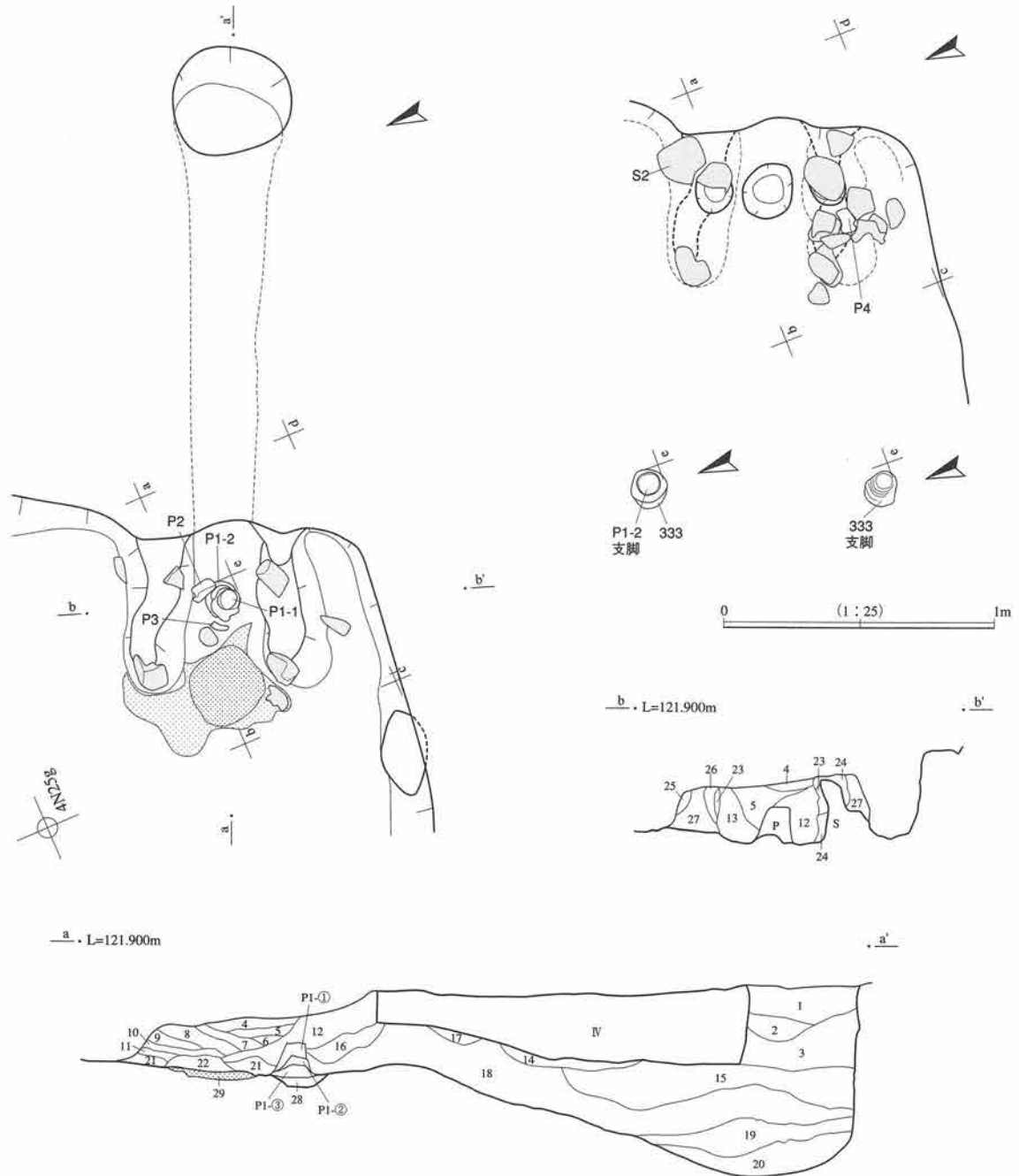
＜検出面＞検出面はⅢ層上面で、黒褐色シルトの広がりとして確認した。

＜規模・平面形状・方向＞平面形は方形で、規模は主軸方向がやや短く3.04×3.20mである。壁高は最大27cm残存している。主軸方向はS-67°-Eである。

＜埋土＞埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とし、色調や地山の混入具合により8層に分層した。3層～5層の中層は地山ブロックが多量に混入し、人為的な堆積状況を呈している。その直下である6層には薄い焼土層が堆積し、7層や8層の上面には断面図には反映されていないが、部分的に焼土層や



第63図 RA085竪穴住居跡(1) (45号住)



a-a'・b-b'

- | | |
|---|---|
| <p>1 10YR2/1 黒 粘性なく、しまりやや有
IV層粒少量、焼土粒・炭化物粒少量含む</p> <p>2 10YR3/1 黒褐 粘性・しまりなし</p> <p>3 10YR2/1 黒 粘性なく、非常にかたくしまっている IV層小ブロック少量含む</p> <p>4 10YR3/4 暗褐 粘性なく、しまりややなし
IV層ブロック多量、黒色シルト粒少量含む</p> <p>5 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまり中</p> <p>6 10YR4/4 褐 粘性なく、しまりやや有</p> <p>7 10YR2/3 黒褐 粘性・しまりなし IV層粒中量、黒色シルト粒少量、焼土粒極少量含む</p> <p>8 10YR4/6 褐 粘性なく、しまり有 黒色シルトブロック少量含む</p> <p>9 10YR2/1 黒 粘性なく、しまり中</p> <p>10 7.5YR3/2 黒褐 粘性なく、しまりややなし 焼土粒少量含む</p> <p>11 10YR2/1 黒 粘性なく、かたくしまっている</p> <p>12 10YR2/3 黒褐 粘性なく、しまりややなし IV層粒中量含む</p> <p>13 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりややなし IV層ブロック少量含む</p> <p>14 10YR2/1 黒 粘性ややなく、しまり中</p> | <p>15 10YR4/4 褐 粘性・しまり中 黒褐色土粒少量含む</p> <p>16 10YR4/4 褐 粘性・しまりなし 黒褐色土粒少量含む</p> <p>17 10YR3/2 黒褐 粘性なく、しまりややなし 被熱している</p> <p>18 10YR3/2 黒褐 粘性・しまりなし
IV層小ブロック・中ブロック少量、焼土粒少量含む</p> <p>19 10YR4/6 褐 粘性なく、しまりややなし</p> <p>20 10YR3/2 黒褐 粘性なく、しまり中 IV層粒少量含む</p> <p>21 10YR3/3 暗褐 粘性なく、しまり中 焼土粒多量、炭化物粒中量含む</p> <p>22 5YR4/4 赤褐 粘性なく、しまりややなし 汚れた焼土層 炭化物少量含む 暗褐色土で汚れている</p> <p>23 5YR4/6 赤褐 粘性なく、しまり中 袖の被熱部分</p> <p>24 10YR4/6 褐 粘性なく、しまり有 黒褐色土粒少量含む</p> <p>25 10YR4/6 褐 粘性なく、しまり中 黒褐色土粒多量含む</p> <p>26 10YR4/6 褐 粘性なく、しまり有 ブロック状に被熱している</p> <p>27 10YR4/4 褐 粘性なく、しまり有</p> <p>28 10YR2/3 黒褐 粘性なく、しまりややなし IV層粒少量、炭化物粒少量、焼土粒少量含む</p> <p>29 5YR4/8 赤褐 粘性なく、しまり中 燃焼部焼土層</p> |
|---|---|

第64図 RA085竪穴住居跡 (2) (45号住)

焼土ブロックの堆積層が見られる。6層とした焼土ブロックの堆積層はしまりがないことや暗褐色土で汚れていることから判断すると二次的な堆積と捉えられる。一方、7層・8層上面の焼土層もブロック状に見られ、二次的な堆積と捉えられるが、非常に固くしまっている点が6層とは異なっている。これらの堆積層の上層は夾雑物が少なく、レンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積と捉えられる。壁周辺にはⅢ層に起因すると考えられる堆積土が確認され、壁の崩落土と認識した。

〈床面・掘り方・貼り床〉黄褐色砂質シルトの掘り方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。Q1の東壁と北壁周辺は周辺と比較して深く掘りこまれている。床面の硬化が顕著な部分は確認されない。

〈カマド〉東壁南隅に設置される。袖は336をはじめ、礫を芯材とし、褐色シルトを貼り付けて構築している。燃焼部底面には30×28cmの焼成面が形成される。燃焼部には坏、甕、甕の順に3個体の土師器を倒位に重ねて設置し支脚としている。支脚部分には土師器を設置する前段階として円形の浅いピットを掘り込んでいる。煙道の全長は137cmで下降しながら先端の44×41cm、深さ71cmの煙出し孔に向かって削り貫かれている。煙道天井や側壁は部分的に火を受けて赤化している。

〈柱穴・付属施設〉東隅にPit 1、南壁際中央にPit 2、西壁際北寄りにPit 3を検出した。Pit 1、2は浅い楕円形の土坑で住居跡の堆積土である7層に近い黒色シルトで埋没している。Pit 3は袋状を呈する土坑で、その形状から判断すると貯蔵穴と考えられる。規模は62×48cm、深さは最大で46cmである。南壁東寄りでは幅33cm、奥行き17cmの棚状を呈する部分を検出した。側面観は袋状を呈し、黒色シルトで埋没している。 (北村)

〈遺物〉(第177、178図、写真図版127)

内黒、非内黒の土師器坏、土師器甕がある。カマド支脚の3個体の土師器の他は焼土ブロックを含む7層・8層からの出土が多い。334は支脚の最も上に重なっている土器であるが、芯材として利用された口縁部片と接合した。土器の総量は1,401gで、4点を掲載した。小片で図化に至らなかったが、カマド埋土から須恵器破片が出土した。

[土器] 333は支脚として使用されていたものである。334はカマドの支脚とカマド内、埋土、床直上出土の破片を接合したものである。335もカマドの支脚と煙道、カマド内、埋土出土の破片を接合したものである。

[石器・石製品] 336はカマド袖の芯材に転用された安山岩製の荒砥である。できる限りの面を作業面としており、少なくとも七面を数える。作業面は強い湾曲を持っている。337は煙出しの埋土から出土した安山岩製の荒砥である。表面の一部を作業面としている。図化したもの以外では煙出しの埋土から剥片が1点出土している。

〈時期〉出土遺物から平安時代の9世紀後葉から10世紀に属すると考えられる。

RA086竪穴住居跡(6号住)(第65、66図、写真図版44)

〈位置〉第10次調査区中央部の4 N25 o グリッド付近に位置する。

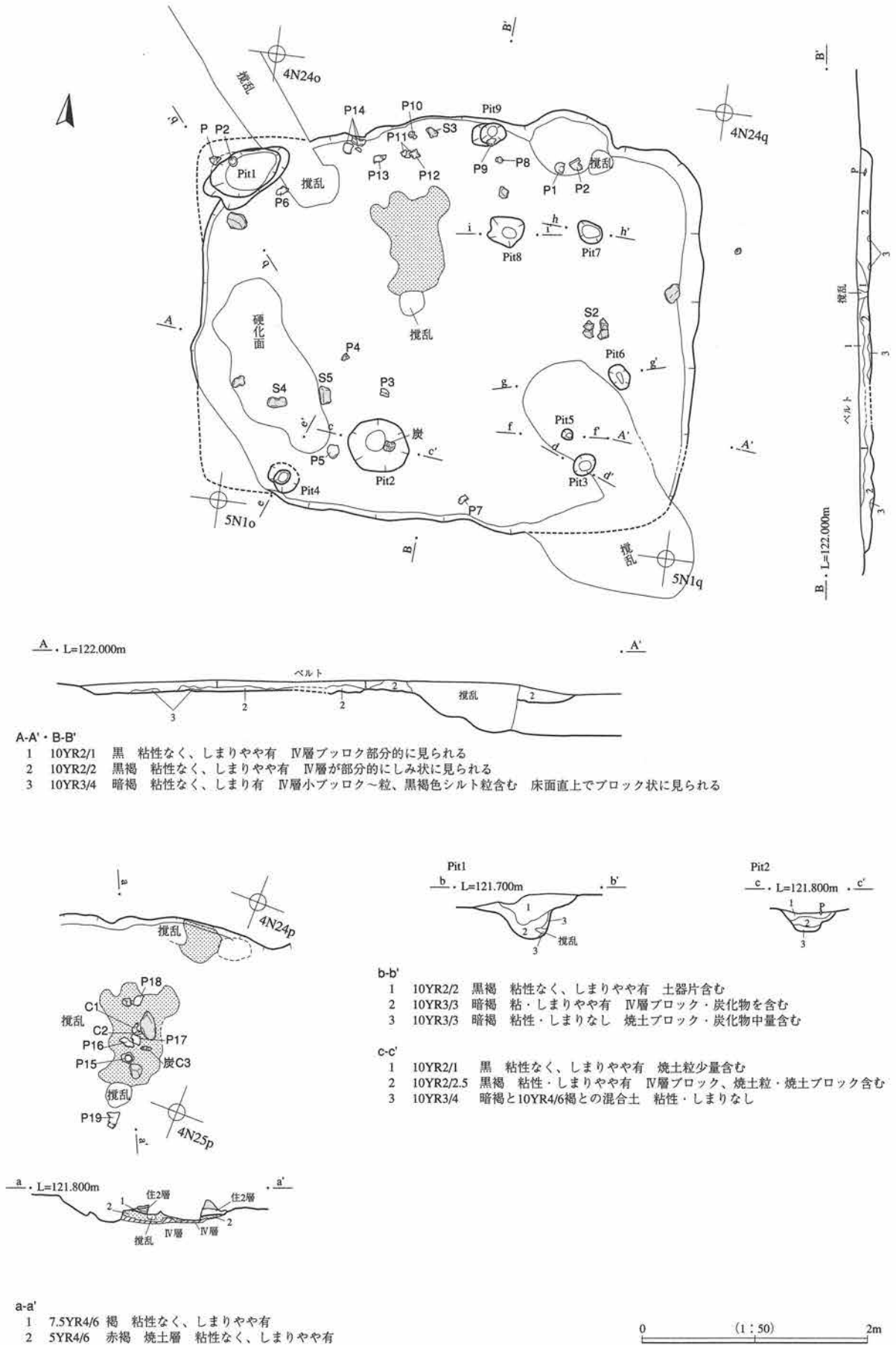
〈重複関係〉RA087と重複しており、本遺構がRA087を切っている。

〈検出面〉検出面はⅢ層上面で、黒色シルトの広がりとして確認した。

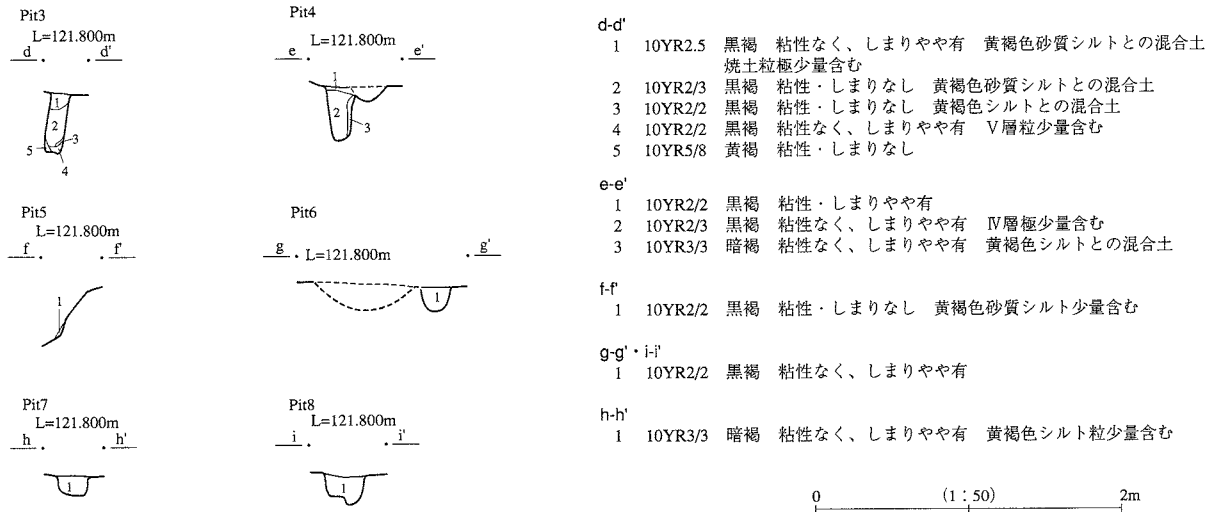
〈規模・平面形状・方向〉攪乱や重複などにより四隅の形状が判然としないが、残存する部分から判断すると、平面形は東西方向が長い長方形を呈すると捉えられ、残存する規模は3.76×4.51mである。全体的に掘り込みが浅く、残存する壁高は最大でも16cmである。主軸方向はN-6°-Wである。

〈埋土〉埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とし、3層に分層した。床面直上には暗褐色シルトがブロック状に散在する。全体的に層厚がなく、判断に苦慮するところであるが、レンズ状の堆積状況を呈

2 竪穴住居跡



第65図 RA086竪穴住居跡 (1) (6号住)



RA086	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5	Pit6	Pit7	Pit8	Pit9
径 (cm)	80×48	51×50	22×18	29×24	10×9	22×17	24×19	35×30	23×20
深さ (cm)	41	27	40	37	35	16	25	23	109

第66図 RA086竪穴住居跡 (2) (6号住)

しており、自然堆積と捉えられる。

〈床面・掘り方・貼り床〉V層上面を床面とし、ほぼ平坦である。貼り床は行われていない。西壁側中央から南西隅にかけて床面の硬化が見られる。

〈カマド〉燃焼部を除く、カマドを構成する構築物は確認されない。北壁中央寄りに不整形の焼土層を検出した。攪乱により正確な規模は不明であるが、残存する規模は96×71cmで、焼土層の厚さは最大で9cmである。燃焼部直上には土器片や礫がまとまって出土している。

〈柱穴・付属施設〉北西隅にPit 1、南壁中央寄りにPit 2を検出した。Pit 1は袋状を呈しており、その形状から判断すると貯蔵穴と考えられる。規模は80×48cmで、深さは41cmである。埋土には人為的に投げ込まれた廃棄焼土が確認される。Pit 2の埋土にも焼土ブロックや炭化物が観察され、人為的に投げ込まれたものと考えられる。規模は51×50cm、深さは27cmである。壁際を中心に7基の柱穴を検出した。Pit 3、4はその検出位置から判断すると主柱穴と考えられるが、相対する位置に柱穴が検出さず、その構造は不明である。上記の他に北壁東寄りに床面より一段高いステップ状の構築物を検出した。その範囲は74×57cmである。その周辺にはPit 7～9が検出されており、これらとともに出入口を構成する可能性が高い。(北村)

〈遺物〉(第178、179図、写真図版127、128)

土師器高台付椀、坏、土師器甕がある。土器の多くは床面、床面直上、燃焼部から出土している。特に燃焼部では焼成面に貼りつくように土師器甕の破片が出土し、343に復元された。土器以外では床面直上から台石が、埋土やPit 1の埋土から砥石や磨石が出土している。2,609gの土器が出土し、7点を掲載した。

[土器] 340は埋土出土、341は床直上出土の黒色処理のない土師器坏で、遺跡内の他の出土遺物と比較すると口径、器高ともに卓越して法量が小さい。

[石器・石製品] 345は閃緑岩製の石斧である。埋土から出土しているが、形態的に縄文時代の遺物で

あり、埋没過程において、縄文時代の遺構から流入したものと捉えられる。346は円形の礫を利用した磨石で、作業部位は表面のみである。348は安山岩製の荒砥である。表裏二面を作業面としており、表面の作業面には溝状の使用痕が観察される。図化したもの以外では床面直上から台石1点、Pit 1の埋土から砥石1点が出土している。

[その他] 上記以外に燃焼部直上から炭化物が出土しており、そのうち2点の同定を行ったところ、樹種はクリ1点、ナラ1点であった。

<時期>出土遺物から平安時代の10世紀前葉から中葉に属すると考えられる。

RA087竪穴住居跡（7号住）（第67、68図、写真図版45）

<位置>調査区中央の4 N25 q グリッドに位置する。1.4m南にRA088が位置する。

<重複関係>RA086、RD154と重複し、本住居跡が古い、

<検出面>Ⅲ層である。

<規模・平面形状・方向>一辺の長さが3.92×3.80m、壁高50cmの方形である。方向はE-20°-Sである。

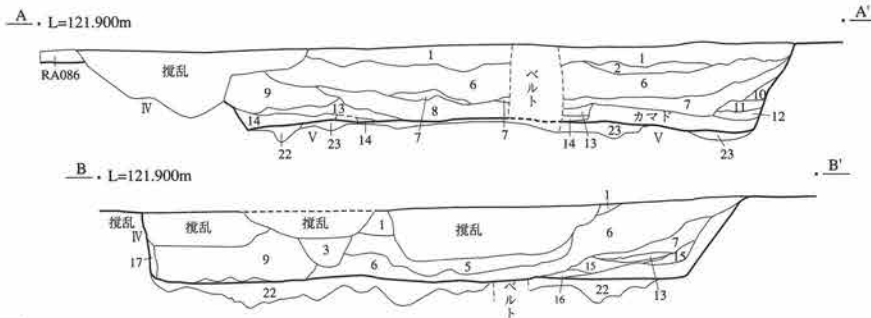
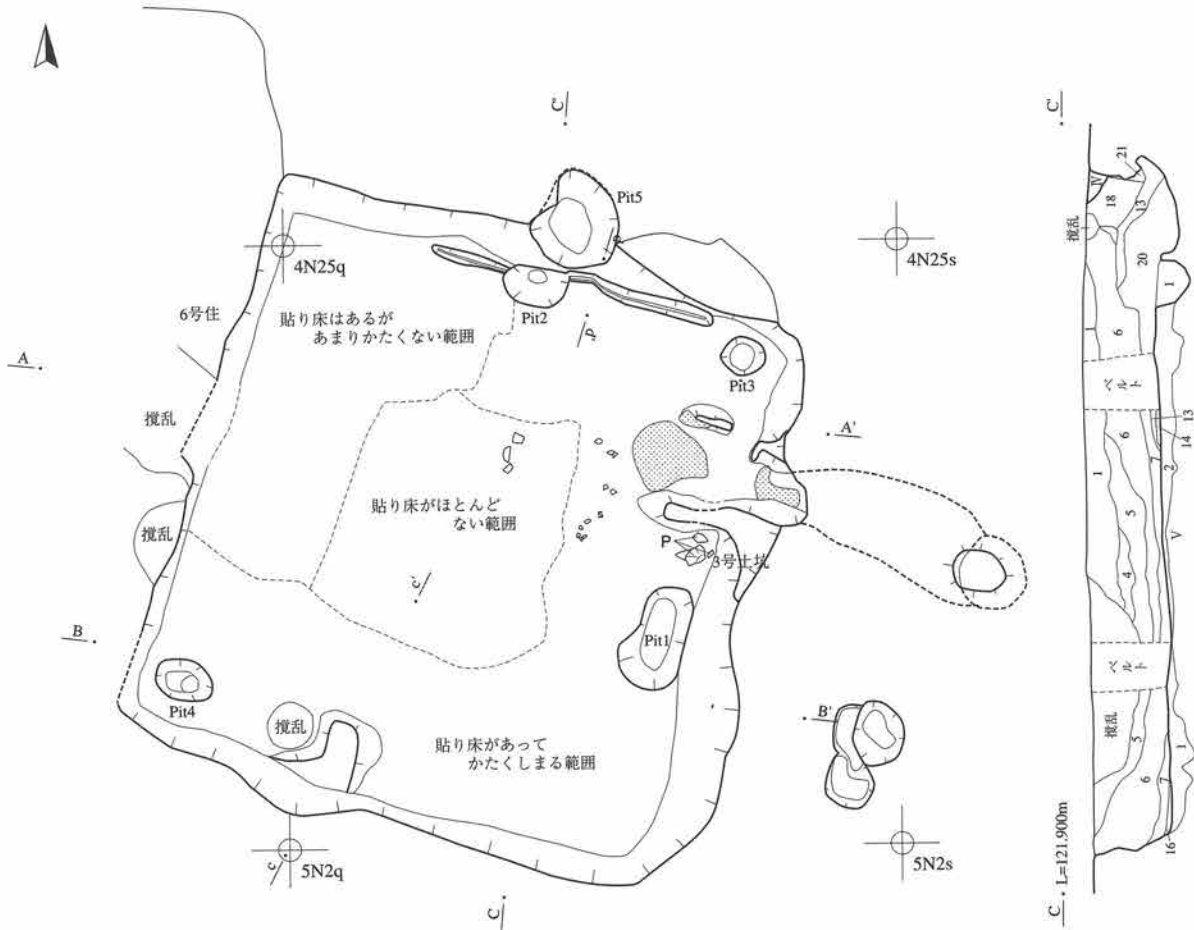
<埋土>21層に細分される。最上層は混入物の少ない黒褐色土で自然堆積と思われる。中層はⅣ層起源の褐色土ブロックやⅡ層起源の黒色土ブロックを斑に含む黒褐色土である。これらのブロックは非常に明確に捉えられ、中層に関しては人為堆積の可能性がある。また、埋土下層は混入物の少ない黒褐色土である。

<床面・掘り方・貼り床>床面は平坦で、西壁際中央よりを除いて、固くしまる。貼り床は、Ⅴ層の砂質土と黒褐色土の混合した暗褐色土で、床面中央を除いて施される。掘り方は住居西壁際中央よりが極浅く、そのほかの壁際が深い。

<カマド>東壁の北よりに位置する。天井は失われ、袖もごく一部しか残存していない。燃焼部は52×50cmの不整形に焼土が形成されており、焼土の厚さは6cmである。埋土にはカマド天井の崩落土と思われる焼土が堆積している。袖は基部が砂質シルトの若干の高まりとして残っている程度である。煙道は長さ1.5mの刳り貫き式である。煙道の入り口と煙出しよりの底面に薄い焼土が堆積している。また、煙出しの壁の一部に焼土が形成されている。底面は徐々に下降し、煙出しに至って25cmほど下がる。煙出し検出面から底部までの深さは98cmである。埋土はしまりのない黒褐色土が主であるが、煙道の入り口には焼けた天井の崩壊土が認められ、煙出しの底部には焼土や炭粉の含む黒褐色土が堆積している。

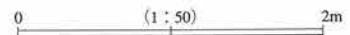
<柱穴・付属施設>カマドの右脇に浅い土坑（Pit 1）を検出した。60×30cmの楕円形で深さは約5cmと浅い。埋土は黄褐色土と炭を含む黒褐色土である。壁際からはPit 2～Pit 4の3基を検出した。埋土はPit 2、Pit 3が褐色土ブロックを含む黒褐色土で、Pit 4が黒褐色土ブロックやⅣ層起源の褐色土ブロックを含むⅤ層崩壊土主体の褐色砂である。これらPit 2～Pit 4は柱穴となる可能性がある。土坑では他に北壁の中央付近に壁から張り出した袋状の土坑（Pit 5）を検出した。平面形は楕円形で、壁の一部がフラスコ状に張り出して、オーバーハングしている。底面は住居の床面よりも15cmほど低い。埋土は住居と一連のもので、Ⅳ層起源の黄褐色土ブロックや微細な粒を多量に含む暗褐～黒褐色土が主体で、埋め戻している可能性がある。特に下位の2層分は住居床面から流れ込んだような様相を呈している。この土坑は貯蔵穴と思われる。

北壁際に壁溝を検出した。西側と東隅、及びPit 2、Pit 5の前を除いて認められ、幅6～10cm、深さ約20cmである。埋土はⅣ層起源の黄褐色土ブロックを含んだ黒褐色土である。



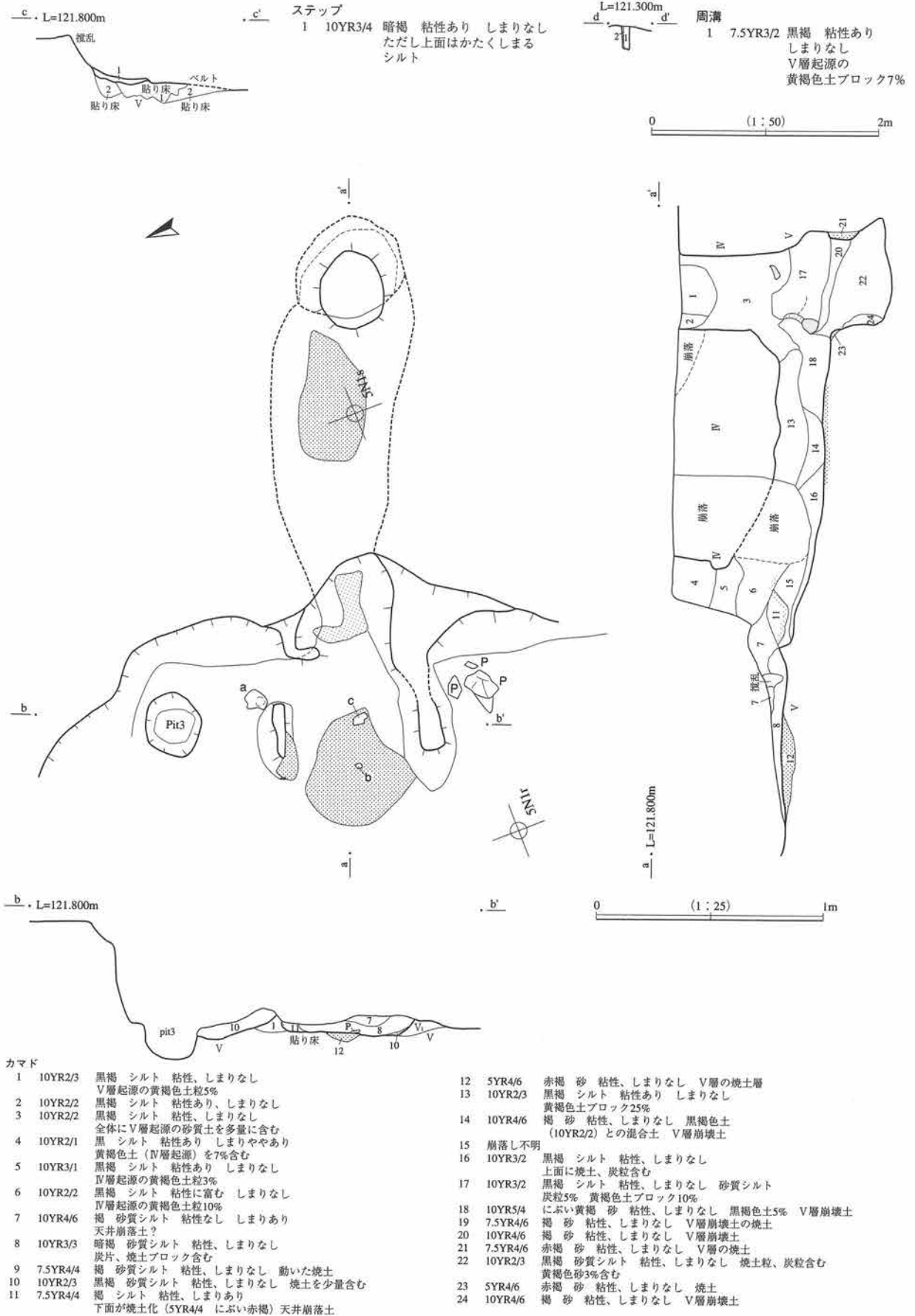
RA087	径(cm)	深さ(cm)
Pit1	60×30	5
Pit2	43×26	14
Pit3	30×24	23
Pit4	40×28	13
Pit5	58×55	60

- 埋土
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり IV層粒少量混入
 - 2 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややなし IV層小ブロック・焼土粒混入
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり、しまりなし 礫少量混入
 - 4 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり IV層パウダー状に多量混入
 - 5 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり IV層小ブロック少量混入 焼土粒極少量混入
 - 6 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりなし IV層・黒色土ブロック多量混入 全体的に見られ、覆土中位相当
 - 7 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり IV層しみ状で部分的に混入する
 - 8 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややなし IV層ブロック少量・IV層粒少量混入
 - 9 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり IV層粒・小ブロック多量混入
 - 10 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややなし
 - 11 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性・しまりなし 黒褐色土で汚れている
 - 12 7.5YR2/3 極暗褐色シルト 粘性なく、しまりややあり 黒褐色土で汚れた暗い焼土層
 - 13 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性なく、しまりあり
 - 14 10YR2/3 黒褐色土 粘性なく、しまりあり
 - 15 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややなし
 - 16 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性なく、しまりややあり 暗褐色シルト粒・黒褐色シルト粒多量混入
 - 17 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性・しまりなし 黒褐色土で汚れている
 - 18 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性・しまりなし IV層ブロック多量混入
 - 19 10YR2/1 黒色シルト 粘性なく、しまりややなし IV層ブロック少量混入
 - 20 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりなし IV層パウダー状に多量混入 非常にモソモソしている
 - 21 10YR5/6 黄褐 V層崩壊土 粘性、しまりなし 黒褐色土を含み少しにごる
 - 22 10YR3/3 暗褐 粘性なし 砂質土 (V層) と黒褐色土 (10YR3/1) の混合土20%
 - 23 10YR3/4 暗褐 粘性、しまりなし 砂質土 黒褐色土 (10YR3/1) ブロック3~7%



第67図 RA087竪穴住居跡 (1) (7号住)

2 竪穴住居跡



第68図 RA087竪穴住居跡 (2) (7号住)

南壁中央からやや西よりから、ステップ状の施設を検出した。西側が攪乱によって破壊されている可能性があるが、残存するのは幅45cm、奥行き48cmの台形で、高さは約5cmである。貼り床の上に暗褐色土をさらに貼って構築しており、上面は固くしまっている。入り口の可能性がある。

また、東壁の約60cm東から重複する小土坑2基（径34～45cm、深さ9～16cm）を検出したが、壁外の柱穴となるかどうかは判然としなかった。（金子佐）

<遺物>（第180図、写真図版128）

非内黒土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器壺がある。2,014gの土器が出土し、5点を掲載した。図化に至らなかったが、貼り床内からタタキ目のある平底の土師器甕破片、埋土及び検出面から須恵器甕破片が出土した。

[土器] 350は床直上から、351はカマド脇の床面から出土した。墨書土器が1点ある。352はカマドから出土した須恵器坏で、底面に墨書が施される。353はカマドの煙出し埋土から出土した。354は、本住居跡埋土出土の破片とRA104埋土上位出土の破片が接合したものである。

[土製品] 355は支脚と考えられる土製品である。円柱状を呈し、側面に少なくとも3個の丸い突起が貼り付けられている。

[石器] 357は楕円形の礫を利用した磨石で、作業部位は表裏二面である。両面とも中央部の一部に磨面が認められるが、裏面は特に不明瞭である。埋土からの出土である。図化したもの以外では埋土からUFが1点、剥片が2点出土している。

[鉄器] 358は棒状の鉄製品である。断面形は方形である。断片的な資料のため詳細は不明である。埋土からの出土である。

<時期>出土遺物から9世紀後葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

RA088竪穴住居跡（8号住）（第69、70図、写真図版46）

<位置>調査区中央の5N3qグリッドに位置する。1.4m北に7号住が位置する。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層である。

<規模・平面形状・方向>一辺の長さ3.98×3.08m、壁高38cmの隅丸長方形である。方向はE方向である。

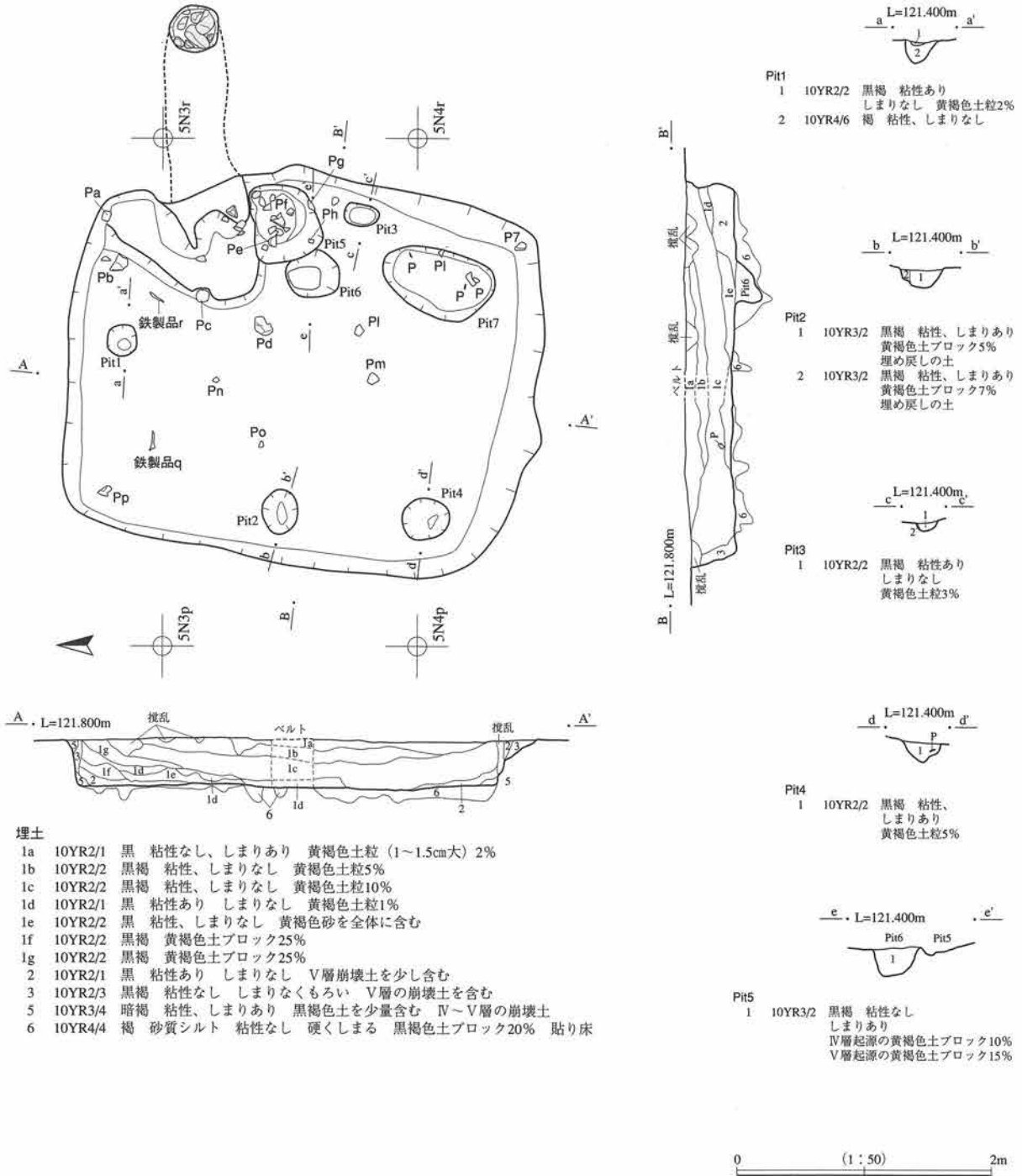
<埋土>5層に細分されるが、1層はさらに6層に細分される。1層は埋土の大半を占め、Ⅳ層起源の黄褐色土ブロックとⅡ層起源の黒褐色土の多寡によって細分した。同層はブロックが明瞭で、人為的に埋め戻した可能性が高い。最下層には混入物の少ない黒色土、壁際には壁に沿って黒褐色土が堆積する。壁際の黒褐色土は厚さが5cm程度で、壁をめぐることから壁材の痕跡の可能性がある。なお、住居北西隅の最下層の黒色土の上面とカマド崩壊土上から焼土ブロックを含む層が検出された。

<床面・掘り方・貼り床>床はやや凹凸があり、固くしまる。Ⅱ層起源の黒褐色土ブロックを斑に含むⅤ層起源の褐色の砂質シルトをほぼ全面に貼って床としている。掘り方はカマドの前が比較的浅く、他は深い。

<カマド>東壁の北よりに位置する。天井や袖の崩壊土が残っているが、本体はほとんど失われている。燃焼部は50×38cmの範囲に焼土が形成され、厚さは最大で5cmである。燃焼部埋土からこぶし大の礫と坏が出土している。燃焼部の両脇から袖構築材の据え方と見られる小ピット2個が検出された。規模は20×20cm、深さ6cm、13×12cm、深さ5cmで、焼土や炭を含む褐～暗褐色である。

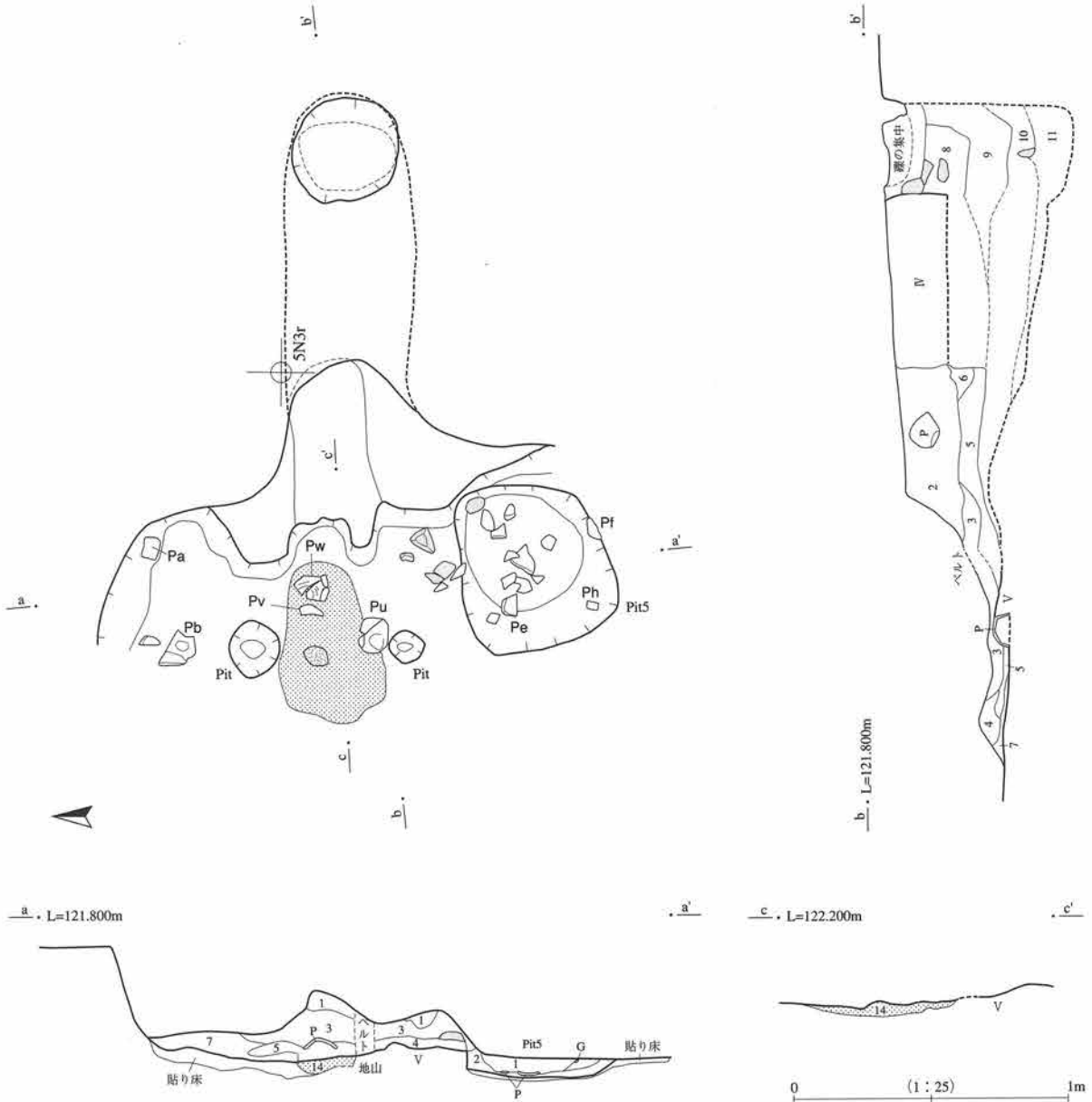
煙道は長さ1.43mで、削り貫き式である。煙出しの埋土上層からは大量の礫が出土した。また、土

2 竪穴住居跡



RA088	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5	Pit6	Pit7
径 (cm)	26×26	46×32	28×16	39×32	55×53	42×36	92×52
深さ (cm)	18	14	8	15	7	22	15

第69図 RA088竪穴住居跡 (1) (8号住)



カマド

- | | | | | | | |
|----|----------|-----|----------|------------------|---------------------|-----------|
| 1 | 10YR3/4 | 暗褐 | 粘性、しまりなし | V層期限の黄褐色土粒を含む | 焼土粒を含む | |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりなし | 黄褐色土粒5%含む | 焼土、炭粒少量含む |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性、しまりなし | IV層起源の黄褐色土粒を5%含む | II層起源の黒色土を5%含む | |
| 4 | 10YR4/6 | 褐 | 粘性なし | 硬くしまる | カマド袖等の崩壊土 | |
| 5 | 7.5YR3/4 | 暗褐 | 粘性、しまりなし | 動いた焼土を全体に多く含む | 天井、袖等の焼土崩壊土 | |
| 5' | 7.5YR3/2 | 黒褐 | 粘性、しまりなし | 焼土ブロック3%含む | | |
| 6 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | 焼土ブロック、黄褐色土ブロック3%含む | |
| 7 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりあり | 黄褐色ブロック5%含む | |
| 8 | 10YR3/2 | 黒褐 | 粘性、しまりなし | 黄褐色土ブロック50% | | |
| 9 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりなし | 黄褐色土ブロック3% | |
| 10 | 10YR3/2 | 黒褐 | 粘性、しまりなし | 黄褐色土ブロック7% | | |
| 11 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性、しまりなし | 黄褐色土ブロック5% | | |
| 12 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性、しまりなし | 黄褐色土ブロック5% | | |
| 13 | 10YR3/2 | 黒褐 | 粘性、しまりなし | 黒褐色土ブロック10% | | |
| 14 | 10YR3/2 | 暗赤褐 | 粘性、しまりなし | 焼土層 | V層起源の砂質土 | |

第70図 RA088竪穴住居跡 (2) (8号住)

師器甕破片も出土している。底面は徐々に下降し、煙出しに至って、一段下がる。煙道の埋土はIV層起源の黄褐色土ブロックや炭、焼土を含む黒褐色土である。

<柱穴・付属施設>床面から大小7基の土坑が検出された。これらのうちPit5はカマド脇にあり、埋土下層から土器破片が多く出土している。埋土は炭粒や焼土を含み、最上層は移地性の焼土の堆積層である。Pit7は、東壁際南端にあり、同様に埋土から土器片が出土している。これらは規模や位置、出土遺物から貯蔵穴の可能性が高い。他は柱穴の可能性はある。(金子佐)

<遺物> (第180、181図、写真図版128、129)

内黒土師器坏、土師器甕、須恵器坏、須恵器甕がある。北西隅の埋土最下層の黒色土上から373の雁又鎌が出土した。2,487gの土器が出土し、11点を掲載した。図化したもの以外では煙出しからロクロ使用の内黒土師器の埴破片、埋土下層から内外面黒色処理された土師器の片口の口か耳皿の口縁と思われるゆがんだ土器の破片、埋土から須恵器長頸瓶口縁部破片が出土した。

[土器] 掲載した土師器坏5点のうち3点の体部下端には手持ちヘラ削り調整、1点に回転ヘラ削り調整が施される。2点刻書土器がある。361には側面に刻線で図形のようなもの、362も底部に刻線が描かれる。これら2点は同一個体とは思われないが、2点とも胎土は緻密で、器厚が薄い点が他と異なる。内側のミガキも丁寧で、特に361は横方向のミガキの単位が長いという特徴がある。366は小型で、ロクロを使用している。内面口縁部から頸部にかけて、煤の付着が認められる。

[石器] 370は頁岩製のRFである。左側面腹面側に弧状に調整を施している。371は円形の礫を利用した磨石である。作業部位は表面のみである。火を受けており、外面が赤化している。370はトレンチから、371は煙出しの埋土から出土している。図化したもの以外では埋土やトレンチから剥片が1点、砥石が1点出土している。

[鉄器] 373は平面形が「Y」字状を呈する雁又式の鉄鎌である。先端部と茎部を欠損している。374は鉄鎌の茎部の断片的な資料である。

[その他] 上記以外にカマド袖脇の床面直上から椀形の鉄滓が出土している。

<時期>出土遺物から9世紀後葉に属すると考えられる。

RA089竪穴住居跡 (47号住) (第71~73図、写真図版47、48)

<位置>調査区中央の5N5tグリッド付近に位置する。現代の溝が本住居の床面近くまで削り、南西コーナーと北壁の一部は破壊されている。南西コーナー付近では床面が大きく削られている。また、住居北側の床面は大きな攪乱によって破壊されている。

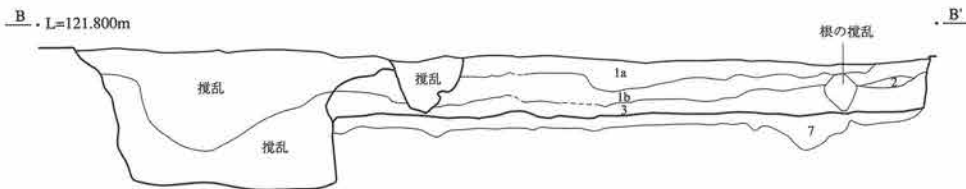
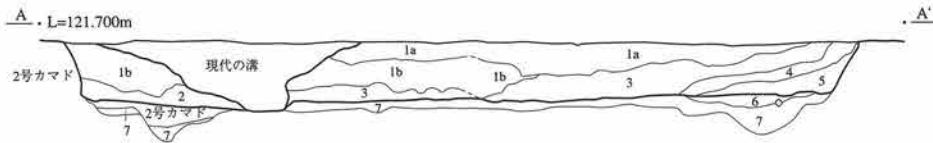
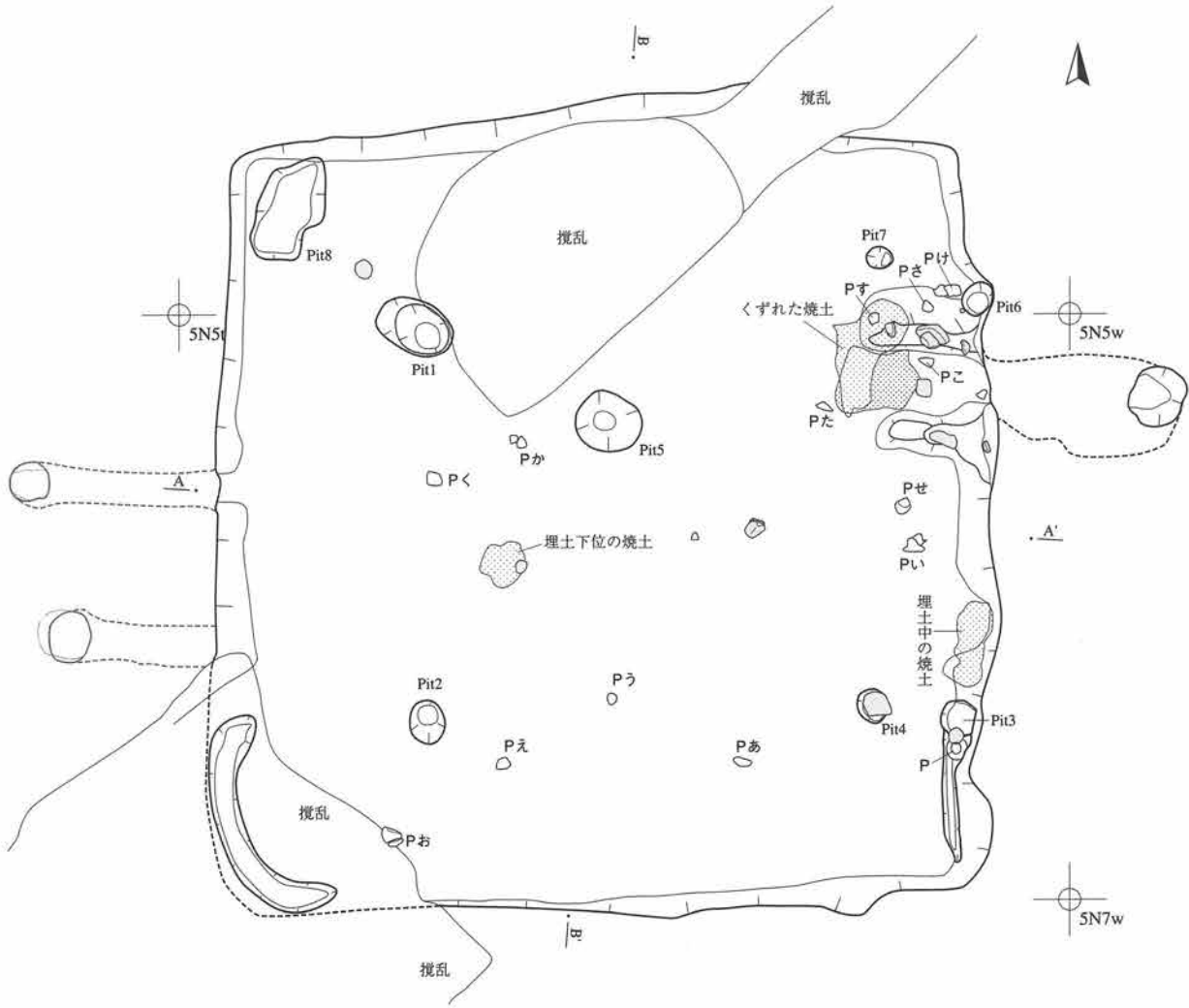
<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層である。

<規模・平面形状・方向>一辺の長さが5.28×5.23m、壁高37cmの隅丸方形である。方向はE-6°-Sである。

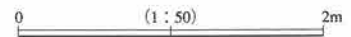
<埋土>木の根で攪乱を多く受け、現代の遺物が出土する1層が埋土中位まで及ぶ。埋土下層は不明瞭なV層のブロックが混入する黒褐色土である。南側の壁際には黒色土が入る。床面中央の床から1cmほど浮いた埋土下位から、厚さ1.5cmの焼土が検出された。東壁際の埋土中位には焼土ブロックが混入する黒褐色土が認められる。

<床面・掘り方・貼り床>床面は若干凹凸のあるものの、固くしまっている。貼り床は全面に施され、黒褐色土とV層起源の褐色土が斑に混入する土を貼っている。掘り方は第73図中に示す部分が深く、床面中央や壁際は浅い。



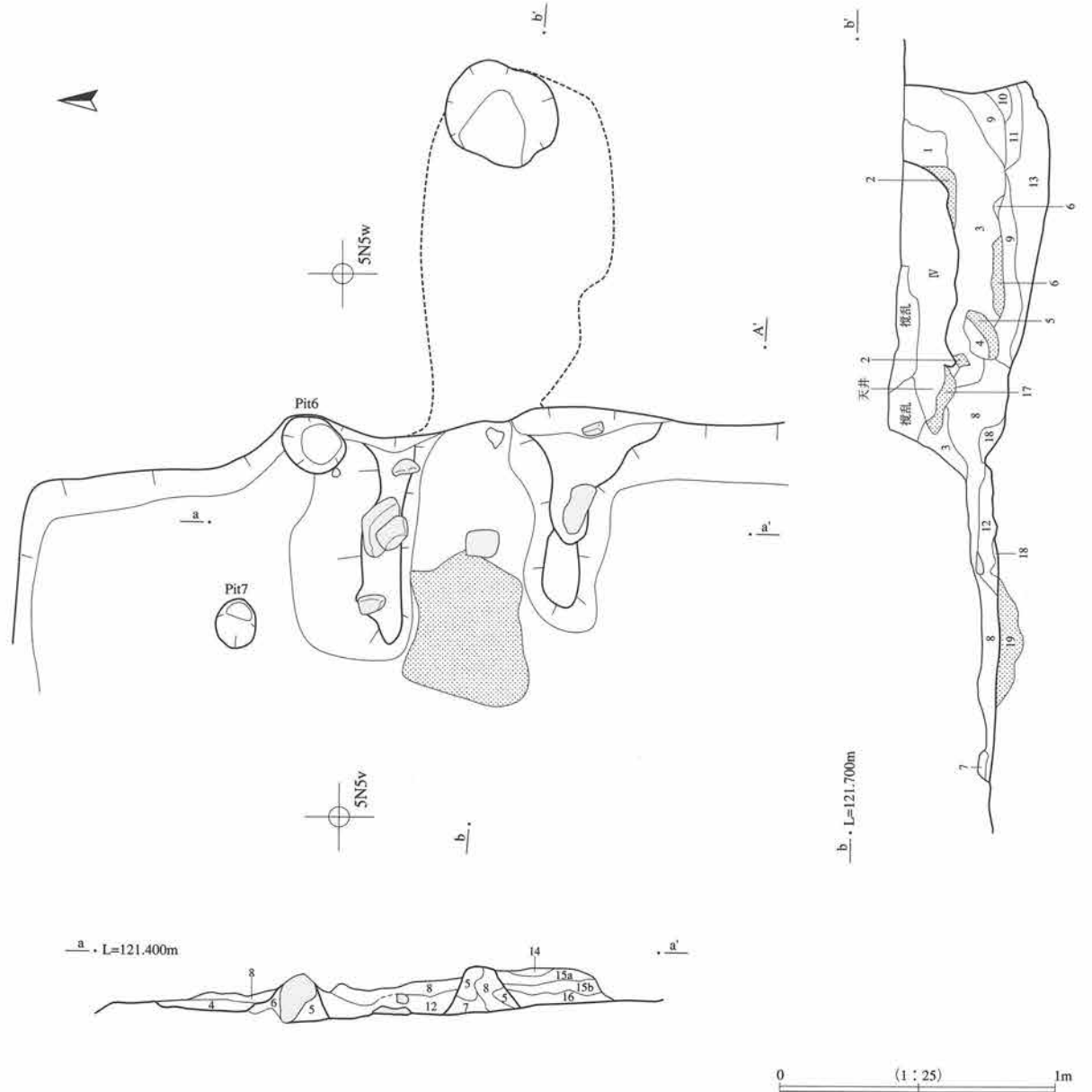
住居埋土

- | | | | | | |
|----|---------|------------|---------|---------|-------------------|
| 1a | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なし | しまりなし | 木根はびこり攪乱されている |
| 1b | 10YR2/2 | 黒褐 | 1層よりくらい | 同土 | |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なし | しまりなし | 褐色土 (V層起源) を全体に含む |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なし | しまりややあり | 不明瞭な褐色土ブロック3%含む |
| 4 | 10YR2/1 | 黒 | 粘性あり | しまりややあり | |
| 5 | 10YR3/2 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりややあり | 褐色土ブロック3%~10% |
| 6 | 10YR3/2 | 黒褐と10YR4/6 | 褐の互層 | 固くしまる | 褐色土の層には褐色鉄層入る 貼り床 |
| 7 | 10YR2/3 | 黒褐と10YR4/6 | 褐が斑状に混入 | 粘性なし | 固くしまる 貼り床 |



第71図 RA089竪穴住居跡 (1) (47号住)

2 竪穴住居跡

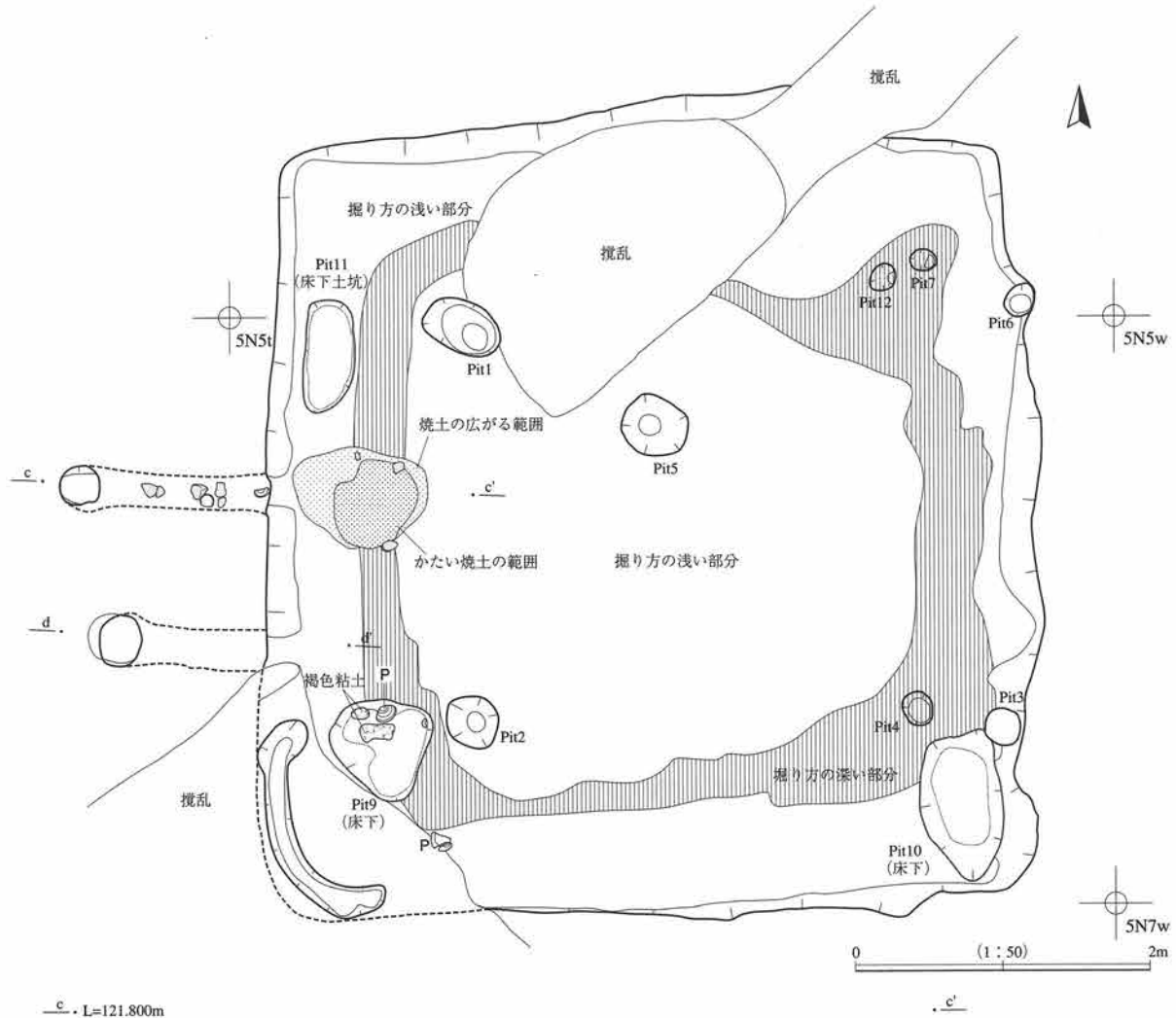


1号カマド

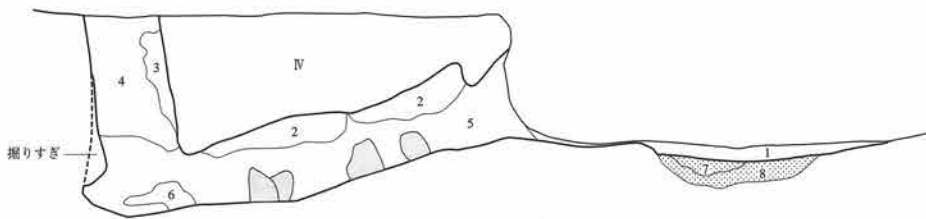
- | | | | | | |
|----|----------|-------|--------|---------|-------------------|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐 | 粘性なし | しまりなし | 焼土・褐色土含む |
| 2 | 5YR4/4 | にぶい赤褐 | 粘性なし | しまりなし | 焼土 |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なし | しまりなし | 褐色土ブロック3~25% |
| 4 | 10YR4/6 | 褐 | 粘性なし | しまりあり | V層崩壊土 |
| 5 | 5YR4/4 | にぶい赤褐 | 粘性なし | しまりなし | 焼土 |
| 6 | 5YR4/4 | にぶい赤褐 | 粘性なし | しまりなし | 焼土 |
| 7 | 5YR4/8 | 赤褐 | 粘性なし | しまりあり | 焼土 |
| 8 | 7.5YR2/2 | 黒褐 | 粘性なし | しまりなし | 焼土ブロック・炭粒焼土ブロック含む |
| 9 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | |
| 10 | 10YR4/4 | 褐 | 粘性なし | V層崩壊土 | |
| 11 | 10YR2/1 | 黒 | 粘性なし | しまりなし | |
| 12 | 7.5YR3/2 | 黒褐 | 粘性なし | しまりややあり | 焼土粒含む |
| 13 | 10YR4/4 | 褐 | 粘性なし | V層崩壊土 | |
| 14 | 10YR3/4 | 暗褐 | 粘性なし | しまりあり | カマド袖崩壊土 |
| 15 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なし | しまりあり | 暗褐色土の同層でab2層に分かれる |
| 16 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりなし | |
| 17 | 5YR4/8 | 赤褐 | 粘性なし | 固くしまる | 焼土 |
| 18 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりなし | 焼土粒含む |
| 19 | 5YR4/4 | にぶい赤褐 | 粘性なし | 固くしまる | 焼土 |

RA089	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5	Pit6	Pit7	Pit8	Pit9	Pit10	Pit11	Pit12
径 (cm)	53×36	30×24	24×23	24×18	46×40	24×18	18×15	79×45	66×65	99×56	78×34	21×16
深さ (cm)	45	41	33	21	7	49	24	13	11	32	7	19

第72図 RA089竪穴住居跡 (2) (47号住)



c. L=121.800m

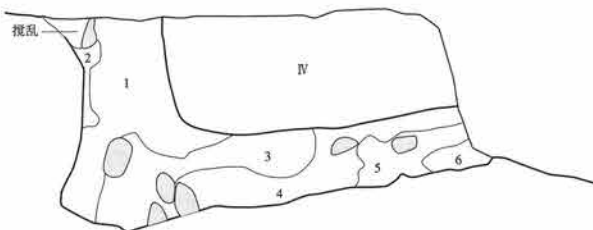


2号カマド

- 1 10YR3/3 暗褐 褐色土・黒色土が斑に混入する 貼り床
- 2 10YR4/4 褐 粘性ややあり しまりなし 黒褐色土ブロックを5%含む
- 3 10YR3/3 暗褐 粘性ややあり しまりなし 褐色土と黒褐色土が斑に混入
- 4 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりなし 褐色土ブロック1%

- 5 10YR3/3 暗褐 粘性ややあり しまりあり 10YR1.7/1黒色シルト 焼土粒・褐色土ブロック含む
- 6 10YR5/6 黄褐 粘性なし しまりなし V層崩壊土
- 7 5YR4/8 赤褐 粘性にとむ しまりあり 焼土
- 8 5YR3/4 暗赤褐 粘性なし しまりあり 焼土

d. L=121.700m



3号カマド煙道

- 1 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりなし 褐色粒7~10%
- 2 10YR5/8 黄褐 粘性なし しまりあり
- 3 10YR2/2 黒褐色ブロック50%
- 4 10YR3/4 暗褐 粘性あり しまりなし 黒褐色ブロック7%
- 5 10YR3/2 黒褐 粘性にとむ しまりなし IV層起源の褐色土全体に含む
- 6 10YR3/3 暗褐 粘性あり しまりなし 炭粒・焼土粒を含む
- 7 10YR3/4 暗褐 粘性にとむ しまりなし 褐色土ブロック3%

0 (1:25) 1m

第73図 RA089竪穴住居跡 (3) (47号住)

<カマド> 3基確認した。最終段階のカマドは1号カマドである。1号カマドは東壁の中央よりやや北側に位置する。天井は失われているが、袖が比較的残っている。袖は一部に礫を使用し、褐色粘土やIV層の暗褐色土で構築している。燃烧部は53×46cmの不整形に焼土が形成されている。焼土の厚さは約8cmである。燃烧部の奥に12×10cmの角柱形の礫を使用した支脚が残っている。煙道は長さ81cmの削り貫き式で、底面は煙出しに向かって緩やかに下降する。煙道入り口と煙出し手前の天井がよく焼けている。煙出しの埋土中には焼けて崩落した天井がブロック状に認められる。埋土の最下層はV層の崩落土、上層はIV層起源の褐色土ブロックを含む黒褐色土である。

2号カマドは西壁の中央付近に位置する。残存状況から1号カマドより古いと推測されるが、3号カマドとの新旧は不明である。袖や天井は失われており、煙道と燃烧部の焼土が残っている。燃烧部は貼り床を1～2cmほどはがして検出した。90×68cmの楕円形に焼土が広がっているが、固く締まっているのは56×58cmの範囲である。焼土の厚さは約9cmである。煙道は長さ1.4mの削り貫き式で、底面は煙出しに向かって下降する。埋土は黒褐色土ブロック、焼土粒、褐色土ブロックを含む暗褐色土が主体で、底面からやや浮いた状態で拳大の礫や土器が出土している。

3号カマドは2号カマドの南側、西壁の中央よりやや南側に位置する。残存状況から、1号カマドより古いと推測される。燃烧部は失われている。煙道のみを検出した。煙道は長さ1.2mの削り貫き式で、煙出しに向かって緩やかに下降する。埋土は褐色ブロックを含む黒褐色土が主体である。

<柱穴・付属施設> 柱穴と思われる小ピットを床上から6個検出した。Pit 1～Pit 4、Pit 6、Pit 7である。長方形の6本柱と思われる、Pit 3とPit 4は東壁にとりつく柱穴である。貼り床をはいだところ、Pit 12を検出した。そのほか、土坑では床上でPit 5、Pit 8を検出した。また、貼り床をはいで、Pit 9、Pit 10、Pit 11を検出した。Pit 9は貯蔵穴と見られ、須恵器坏のほか、底面から褐色の粘土が出土した。Pit 10は埋土中に褐色土粒のほか、焼土粒、炭粒を含む。Pit 11も埋土に炭粒を含む。

東壁のPit 3より南側と南西隅の壁際に壁溝がある。東壁南端が長さ0.9m、幅10cm、南西隅が長さ1.6m、幅18cmである。

(金子佐)

<遺物> (第182、183図、写真図版129、130)

内黒の土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器甕がある。土器の総量は5,058gで、12点を掲載した。埋土1b層から出土した須恵器甕の破片がRA057埋土から出土した破片と接合したが、小片で図化に至らなかった。また、床下土坑のPit 9から土師器甕、Pit 10から内黒土師器坏、土師器甕の破片が出土したがこれも図化に至らなかった。

[土器] 376、377、380は貼り床から出土した。378、381、383は床直上より出土した。379は底部に墨書がある。

[瓦] 388は軒平瓦と考えられるもので、瓦当面のみの断片的な資料である。顎部凸面端部が薄く、6ほどである。范によって唐草文を施文している。焼成は非常に良好でかたく焼き締まっている。2号カマドの貼り床から出土している。

[石器・石製品] 389は安山岩製の荒砥である。両端部を除く四面を作業面としており、表面の作業面には深い溝状の使用痕が観察される。3号カマドの埋土からの出土である。390は粘板岩製の仕上砥で、非常に薄手のものである。表裏2面を作業面としている。埋土からの出土である。図化したもの以外では埋土から剥片が1点出土している。

[鉄器] 貼床から刀子1点、埋土から穂摘具1点、攪乱から棒状鉄製品と板状鉄製品各1点が出土している。391は一端が欠損した穂摘具である。刃部が凸状に湾曲する形態を呈するものである。目釘や木質部が残存している。392は刀子の刀身部の断片的な資料である。393は断面形が方形を呈する棒

状の鉄製品で、両端を欠損しているものである。394は板状の鉄製品で、実測図表側に二箇所、裏側に一箇所の突起物が観察される。部分的な資料のため、器種の特定には至らなかった。

<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

RA090 竪穴住居跡 (46号住) (第74図、写真図版49)

<位置>調査区中央部の504bグリッド付近に位置する。

<重複関係>重複はないが、RA059から5.8m西に位置する。

<検出面>住宅の攪乱によって削平されており、Ⅲ層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向>規模は2.3×2.2mで、方形を呈する。壁高は36cmを測る。カマドによる方向はN-12°-Wで、北壁のほぼ中央に作られる。

<埋土>自然のレンズ状堆積を示す。土層は6層に分層され、2・4・6層のⅡ層流入土層と3・5層の黒色土、焼土が混入する1層の3種がある。2～6層は混入物が認められず、自然流入土と判断される。6層堆積土から住居掘り込み面はⅡ層中と考えられ、2・4・6層が堆積したと考えられる。Ⅱ層再堆積土層に挟まれる3・5層は黒色土で炭化物等の混入物は認められず、層厚も薄いことから、植物堆積に起因する可能性がある。焼土が混入する1層は炭化材・灰が認められない。

<床面・掘り方・貼り床>床面はあまり硬化していないが、カマド周辺がやや硬くなっている。掘り方はカマド周辺ほど6cm程度浅く、カマドから離れるにつれ23cm程度と深くなっている。貼り床はカマドから離れる南側で顕著である。貼り床は暗褐色土ブロック混じりの褐色土を主体に構成される。

<カマド>北壁に1基確認した。北壁のほぼ中央に位置する。カマドの主軸方向はN-12°-Wで、煙道がやや東に曲がる。煙道は長さ1.56m直径39cmで、直径36cm深さ38cmの煙出しに向けて下降する削り貫き式である。煙道および煙出し周囲に被熱した痕跡は認められない。袖は褐色土を基本に構成されている。西袖の長さは41cm、東袖の長さは50cmである。支脚は出土していない。

<柱穴・付属施設>認められない。

(八木)

<遺物>検出面から底面にケズリのある内黒土師器坏、土師器甕、黒色処理のない土師器坏の破片、須恵器甕小片など52gの土器が出土したが、小片のため図化していない。

<時期>出土遺物が少ないので確かではないが、平安時代に属する可能性がある。

RA091 竪穴住居跡 (51号住) (第75、76図、写真図版50、51)

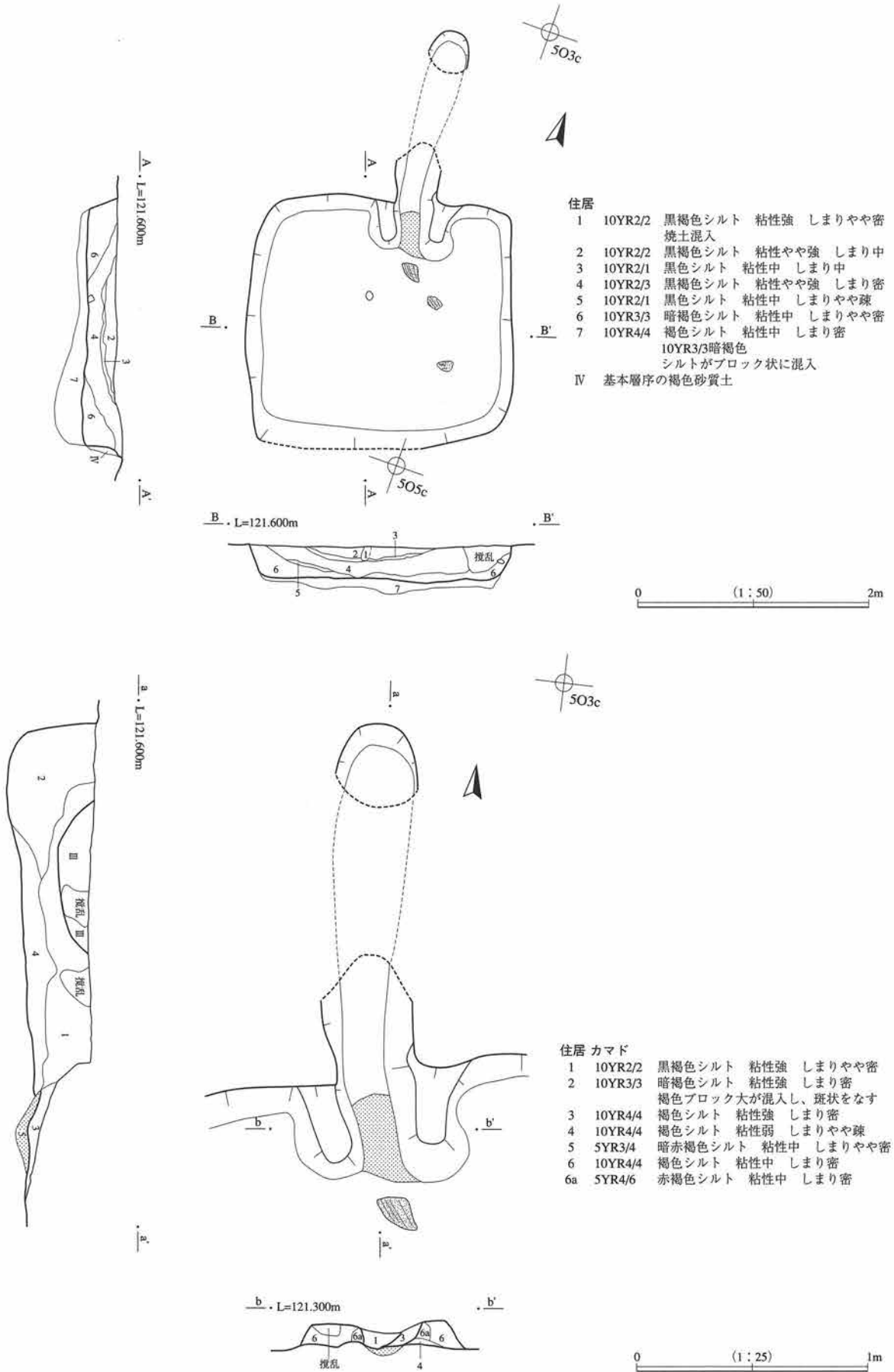
<位置>調査区中央部504fグリッド付近に位置する。

<重複関係>重複関係は認められないが、RA059から南に1.8mの地点に位置する。

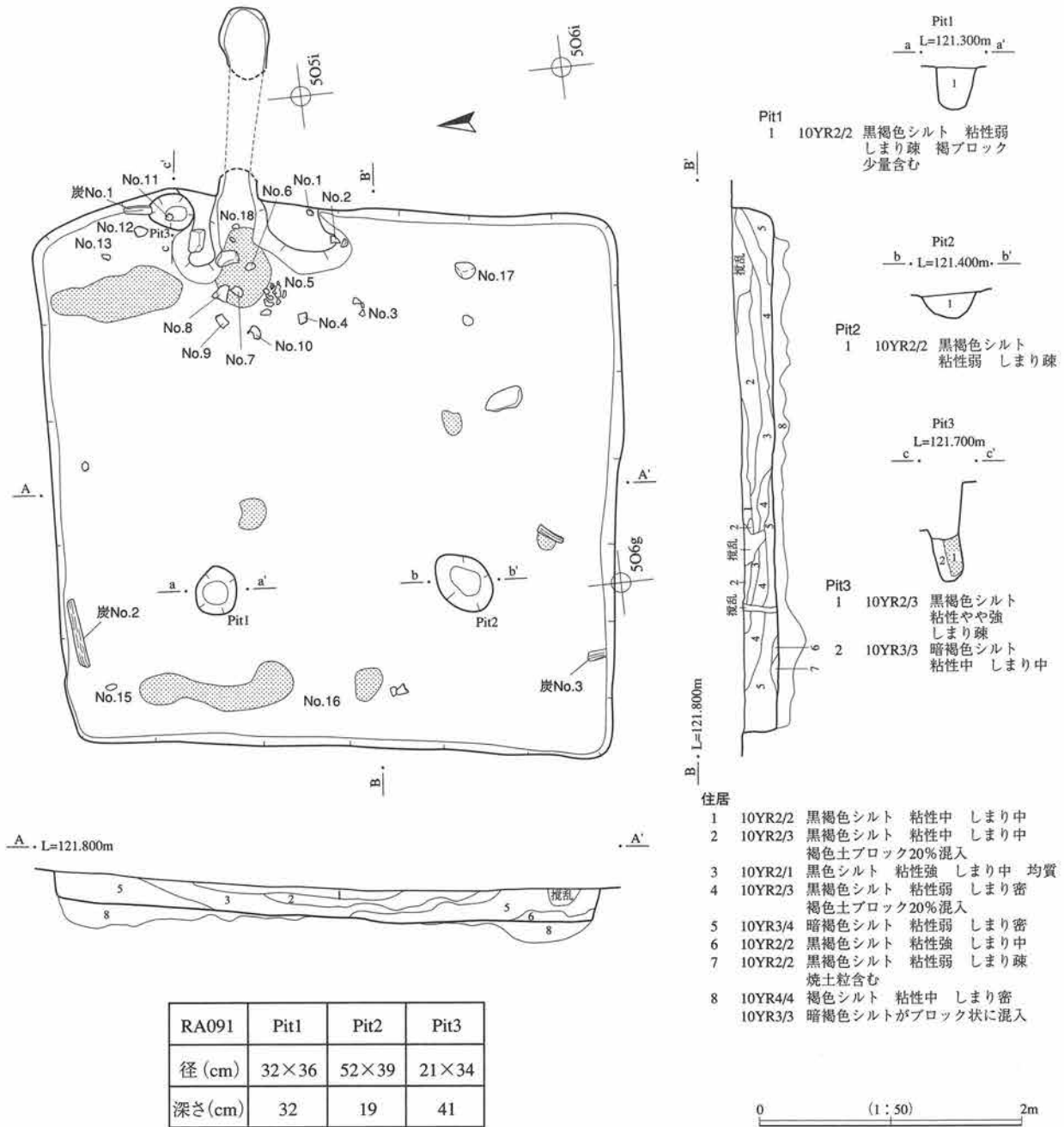
<検出面>RA090と同じく3層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向>4.29×4.14mの方形を呈する。壁高は30cmである。カマドによる方向はN-98°-Eである。

<埋土>黒褐色土と褐色土ブロックを多量に含む黒色土で構成される。住居内の最初の堆積は混入物のない黒色土でⅡ層堆積土と考えられる。褐色土ブロックを多量に混入する堆積土はRA095、RA096、RA098の堆積土にも共通する。褐色土ブロックを多量に混入するには人為行為が介在していると考えられるが、堆積状況は自然堆積のレンズ状堆積の様相を示しており、住居周辺に住居構築の際に生じた廃土によって作られたと考えられる周堤が存在した可能性がある。壁際に炭化材が多量に出土している。また、炭化材付近に焼土も多量に出土している。これらの炭化材は棒状の形状を呈し、壁に並行の状態で見出された。肉眼による炭化材の樹種同定により、炭化材No1がナラ、No2・3がクリであ



第74図 RA090竪穴住居跡 (46号住)

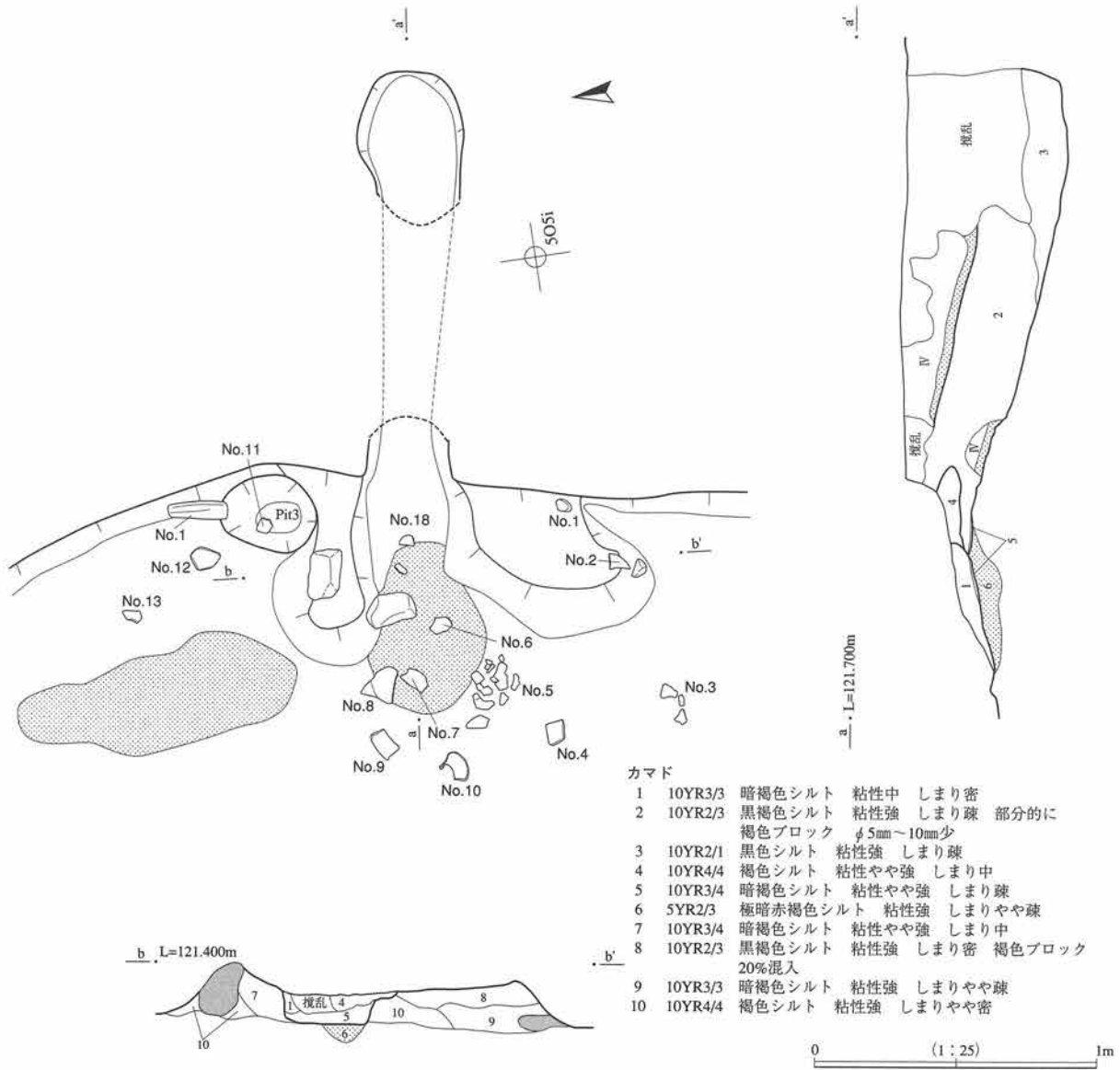


第75図 RA091 竪穴住居跡 (1) (51号住)

る。主に3層に分層される。1層均質な黒色土、2層褐色土ブロック多量混、3層暗褐色砂質土。床面上10cm覆土中位に炭化材が多く検出された。焼土ブロックは床面直上に多い。

<床面・掘り方・貼り床>床面は全体的に硬化しているが、カマド周辺がやや強い。掘り方は床面中央が4cm程度と浅く、壁際にかけて20cm程度と深くなっている。貼り床は暗褐色土ブロック混じりの褐色土を主体とする。

<カマド>東壁に1基確認した。東壁の北寄りに位置する。カマドの主軸方向はN-98°-Eである。煙道は長さ1.47m直径28cmで、上部の攪乱が著しいが直径38cm深さ58cmの煙出しに向けて下降する割り貫き式である。煙道および煙出しは著しく被熱している。煙道内部の煙道入り口付近に煙道天井部



第76図 RA091竪穴住居跡 (2) (51号住カマド)

崩落土IV層が認められ、下部の被熱が顕著である。上面に小礫が混入しているが、袖は褐色土を基本に構築されている。北袖の長さは70cm、南袖の長さは53cmである。支脚は出土していない。

<柱穴・付属施設>柱穴は3個検出した。P1 (直径32cm深さ32cm)・P3 (直径21cm深さ41cm)は規模・堆積土の様相が共通する。P2はごく浅いため、支柱穴ではない可能性もある。P3には柱痕も認められる。

(八木)

<遺物> (第183、184図、写真図版130、131)

内黒、非内黒土師器坏、須恵器坏、土師器耳皿、甕、須恵器壺がある。遺物はカマド周辺に多く出土している。カマド南袖上面には耳皿(400)が逆位の状態で出土している。カマド手前第3層から長頸瓶の口縁部片が出土している。煙出し底面から須恵器甕口縁部小片が出土した。土器の総量は1,420gで、10点を掲載した。

[土器] 墨書土器は2点出土している。396、398で、側面に墨書が施される。400は土師器耳皿である。内外面ともに丁寧に磨かれているが、外面は長径方向の側面及び底部と高台、内面も長径方向の側面

の一部と底面しか黒色処理は認められない。403は、当センター村田淳氏から、確かに口縁部の作出等は東北地方北部のものではないが、胎土に黒色斑点がなく、会津大戸産とは言い切れないとの指摘を受けた。

[石製品] 砥石が1点出土している。405は砥石をカマドの芯材に転用したもので、安山岩製である。表面の一部を作業面としており、面としては5面を数える。右側縁の砥面は強い湾曲を持つ。

<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属する可能性がある。

RA092竪穴住居跡（10号住）（第77～80図、写真図版52、53）

<位置>調査区中央5N6cグリッドに位置する。

<重複関係>35号土坑と重複し、本住居跡が新しい。

<検出面>Ⅲ層である。

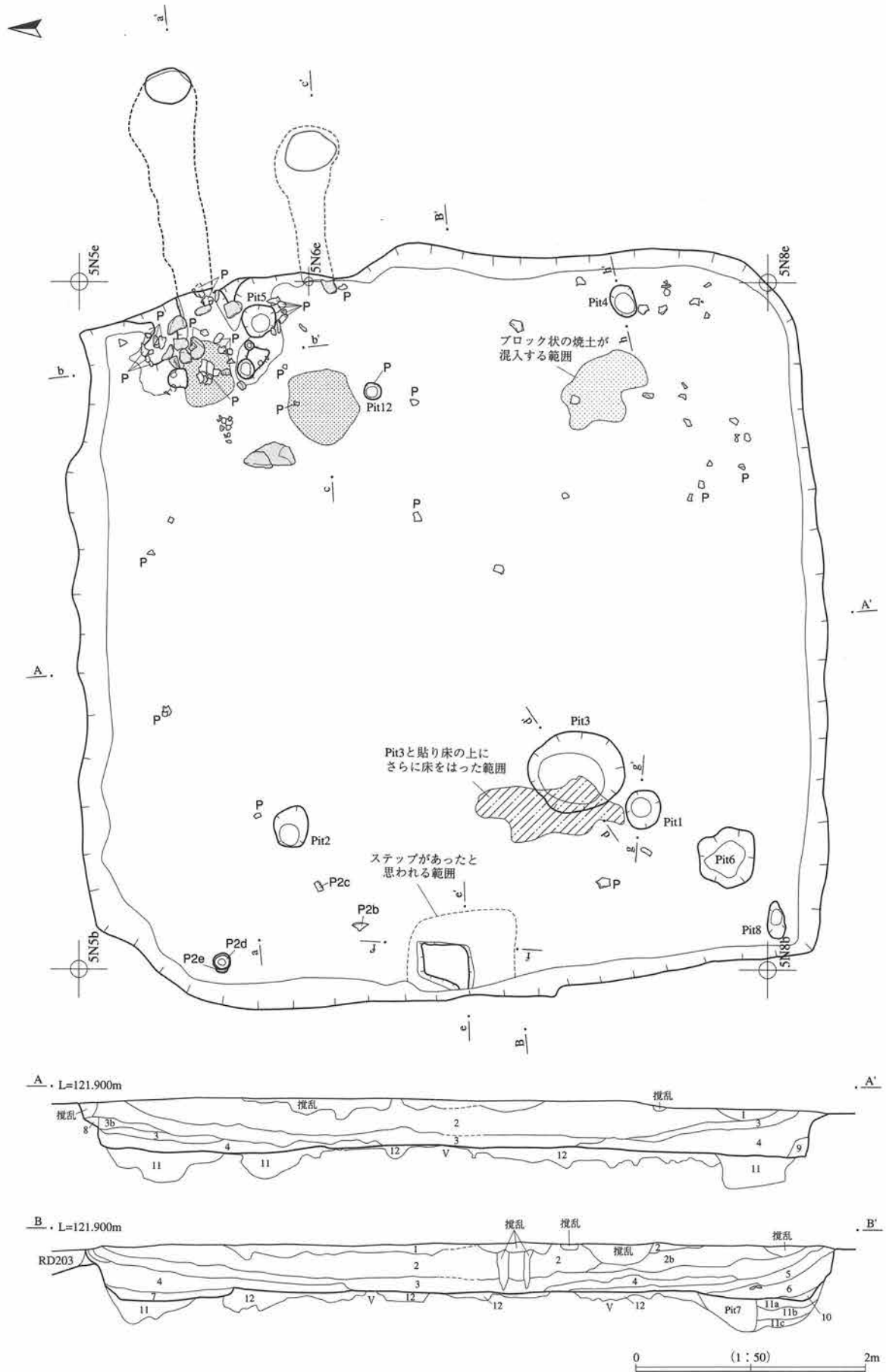
<規模・平面形状・方向>一辺の長さ6.56×6.48m、壁高47cmの隅丸方形で、今回の調査では最大の住居跡である。方向はE-9°-Nである。

<埋土>Ⅳ層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色土が主体であるが、黄褐色土粒の大小や多寡で、10層に細分される。住居南西の4層中に床から10cmほど浮いた高さで、明褐色の灰が薄く検出された。全体的に黄褐色土粒を含んでいるが、人為堆積かどうかは判然としない。特に3層以下は堆積状況から壁から流れ込んだ可能性が高い。

<床面・掘り方・貼り床>床は壁際から0.5～1mほどの間は中央よりやや低く、あまりしまりがながい、これより内側の中央部分が高く、非常に固くしまっている。さらに住居南西の一部に1.04×0.5mの範囲に二次的に床を張った部分がある。周辺より5cmほど高く、非常に固い。貼り床はほぼ全面に施され、壁際はⅤ層起源の褐色土と黒褐色土との混合土、住居中央は褐色土ブロックが混入する褐色土である。住居南東隅床面に焼土や炭を含む厚さ1～2cmの暗褐色土の広がりを検出したが、特に土坑などの施設ではなく、貼り床の一部であった。また、住居北東部分の1号カマド脇壁よりの貼り床から5cm大の粘土塊が出土した。掘り方は床面中央が浅く、壁際が深い。

<カマド>2基検出した。いずれも東壁の北よりに位置する。北端付近にある1号カマドは、残存状況から南の2号カマドより新しいと思われる。袖の一部と燃烧部、煙道が残存している。袖は、長さ20～30cmほどの円礫を芯材にし、Ⅳ層起源の褐色土で構築しているが、褐色土自体は大部分が崩れている。左袖で2個、右袖で1個立った状態の礫が検出されたが、いずれも向かって右に傾いていた。左袖奥、及び右袖の礫の据え方の状況を観察すると、いずれもはじめから斜めに据えているようである。袖及び燃烧部からは掌大の礫、土師器甕破片も出土した。袖を除去したところ、左袖手前から1個、右袖から2個の小ピットが検出された。径8～17cm、深さ3～20cmで、芯材の据え方と考えられる。燃烧部は54×44cmの楕円形の範囲に焼土が形成されている。焼土の厚さは最大で8cmである。焼土の奥やや左寄りに20×13cm大、厚さ5cmの礫が検出されたが、支脚かどうかは判別できなかった。煙道は長さ1.67メートルの削り貫き式である。底面は煙出しに向かって下降する。煙出しの壁及び煙道の天井は一部焼土化している。煙道入り口付近には天井から落ちた焼土を含む暗赤褐色土が堆積する。そのほかは煙道天井のⅣ層崩壊土や焼土粒を若干含む黒褐色土である。なお、煙出しの埋土中位から58個、19kgの円礫が出土した。

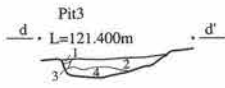
2号カマドは天井、袖は残存していない。燃烧部の焼土と煙道のみである。焼土は南側の一部をPit 7に切られている。また、廃絶後、上面に貼り床を施されており、最終面の床を少しはがしたところ、焼土範囲の全容が明らかになった。67×62cmの不整形である。焼土は1号カマドに比べて壁から遠く、



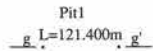
第77図 RA092竪穴住居跡 (1) (10号住)

埋土

- 1 10YR2/3 黒褐 粘性、しまりなし
- 2 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりややあり 黄褐色土ブロック (IV層起源) 0.5~2cm大7% 黒褐色土ブロック (10YR2/2・II層起源) 3~10cm大10%
- 2b 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりややあり 黄褐色土ブロック (IV層起源) 0.5~1.5cm大3% 黒色土ブロック (10YR2/1・0.5~7cm大) 7%
- 3 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりややあり 黄褐色土ブロック (IV層起源) 1cm大2%
- 3b 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりややあり V層起源の黄褐色土を全体に含む
- 3c 10YR2/1 黒 粘性なし しまりややあり V層起源の黄褐色土少量含む
- 4 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりあり 黄褐色土ブロック (0.5~3cm大) 5~20%
- 5 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりあり 黄褐色土ブロック (0.5~1.5cm大) 15% 下位に黒褐色土 (10YR2/1) 層 (層厚2cm)
- 6 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりあり 黄褐色土ブロック (0.5~1.5cm大) 15% 下位に黒褐色土 (10YR2/3) 層 (層厚3cm) 含む
- 7 10YR2/1 黒 粘性あり しまりなし 黄褐色土ブロック (0.5cm大) 2%
- 8 10YR4/3 におい黄褐 粘性、しまりなし 黒褐色土ブロック (10YR2/3) 10%
- 9 10YR3/2 黒褐 粘性ややあり しまり弱 IV層崩壊土を15%含む
- 10 10YR3/2 黒褐 粘性あり しまりなし 0.5cm大の黄褐色土ブロック15%含む
- 11a 10YR3/2 黒褐 粘性なし 上面が固くしまる 3~20cm大の黒褐色土とV層起源の褐色土 (10YR4/6) とブロック状に混合 貼り床
- 11b 10YR4/6 褐 粘性なし かたくしまる 小礫多く含む 貼り床
- 11c 11aとおなじ 貼り床
- 12 10YR4/6 褐 粘性なし かたくしまる 黒褐色土ブロック (0.5~2cm大) 10%



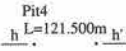
- Pit3
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性、しまりなし 黄褐色土粒5%
 - 2 10YR2/3 黒褐 粘性、しまりなし V層の黄褐色土ブロック (0.5~2cm大) 3%含む
 - 3 10YR4/6 褐 粘性、しまりなし V層崩壊土
 - 4 10YR3/3 暗褐 V層起源の黄褐色砂粒との混合土



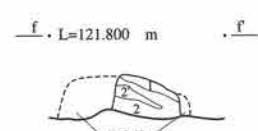
- Pit1
- 1 10YR2/3 黒褐 粘性、しまりなし V層起源の黄褐色砂ブロック (0.5~3cm大) 7% 炭粒を含む
 - 2 10YR3/2 黒褐 粘性、しまりなし
 - 3 10YR3/3 暗褐 粘性、しまりなし 黄褐色土ブロック (0.5~1.5cm大) 10%
 - 4 10YR3/4 暗褐 粘性、しまりなし 黄褐色土ブロック (1~5cm大) 15%



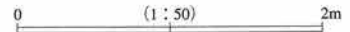
- ステップ e-e', f-f'共通
- 1 10YR4/6 褐 粘性なし しまりあり 10YR2/3黒褐ブロック1~3cm大を5%含む
 - 2 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりなし 褐色土ブロック 1cm大を5%含む
 - 2' 10YR3/3 暗褐 粘性なし しまりなし 黒褐色土粒 (10YR2/3) との混合土



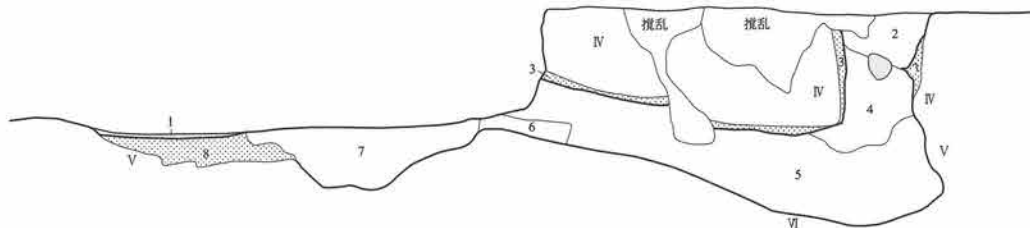
- Pit4
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし 黄褐色土粒2%
 - 2 10YR4/4 褐 粘性なし しまりややあり 黒褐色土ブロック (3~10cm大) 10%



- Pit7
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりあり 黄褐色土粒3%
 - 2 10YR4/6 褐 粘性なし 砂質 (VI層起源) 0.5~1.5cm大の小礫10%含む
 - 3 10YR2/3 黒褐 粘性あり しまりなし 褐色土粒0.2~5cm大20%含む
 - 4 10YR5/4 におい黄褐 粘性なし しまりなし V層起源の砂質土に黒褐色土のブロック3%

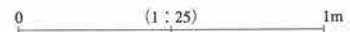


RA092	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5	Pit6	Pit7	Pit8	Pit9	Pit10	Pit11	Pit12
径 (cm)	32×30	35×32	84×72	30×20	19×18	55×54	15	35×15	53×40	49×46	106×38	15×14
深さ (cm)	55	32	18	62	51	9	15	27	33	42	33	10

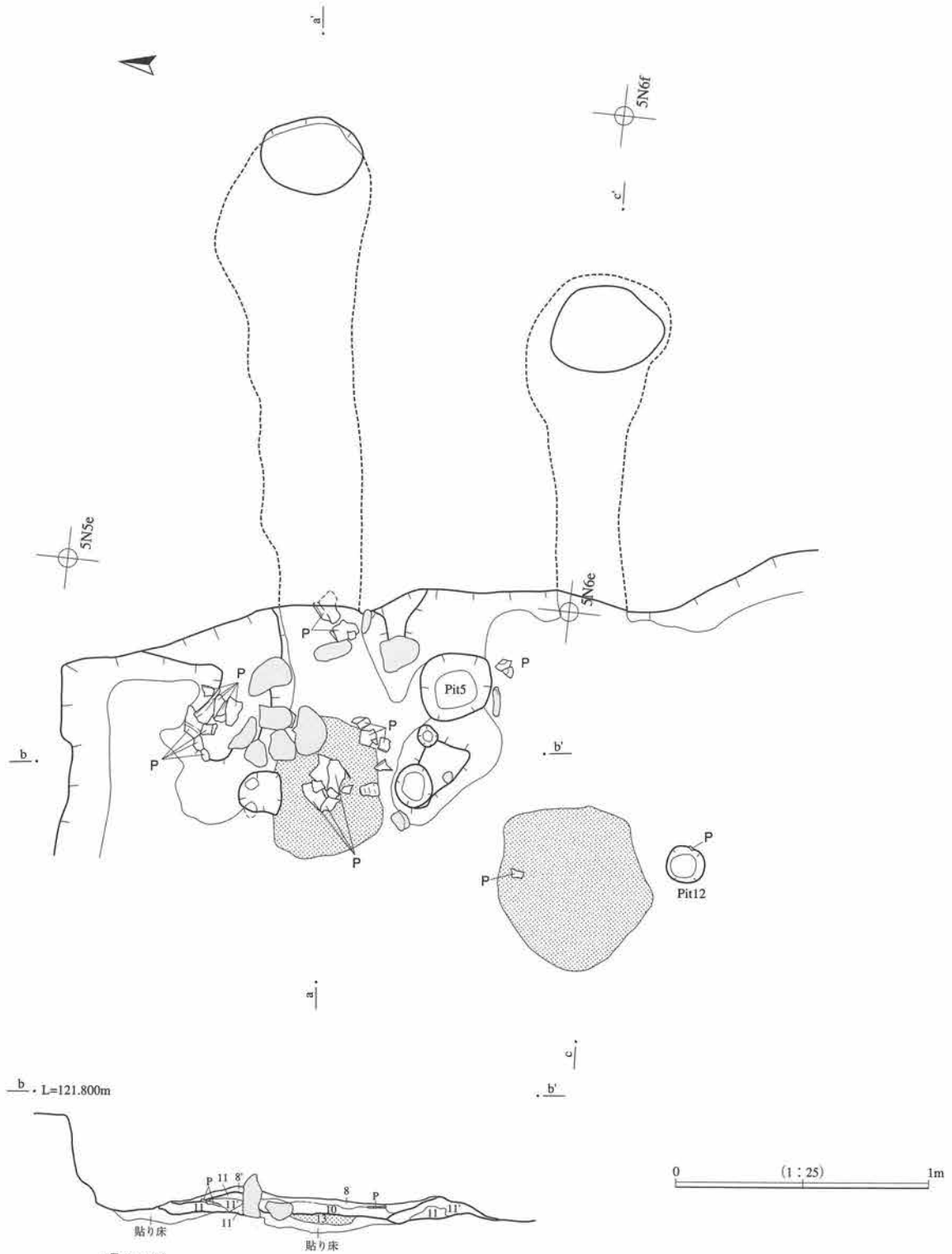


2号カマド

- 1 10YR3/3 暗褐 粘性あり しまりなし 全体に焼土を多く含む
- 2 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりなし 焼土粒少量 黄褐色土粒 (0.1~0.5cm大) 5%
- 3 7.5YR3/3 暗褐 焼土層 粘性、しまりなし
- 4 7.5YR2/1 黒 粘性あり しまりなし 焼土微細粒3% 黄褐色土粒 (0.5cm大) 5%含む
- 5 10YR3/2 黒褐 粘性あり しまりなし 黄褐色土ブロック5~7% 全体に炭粉含む
- 6 7.5YR3/4 暗褐 粘性なし しまりなし 焼土ブロック0.7cm大50% 黄褐色土ブロック50%
- 7 10YR3/2 黒褐 粘性なし しまりあり 黒褐色土ブロック3% IV層起源の黄褐色土 ブロック7%含む 貼り床
- 8 10YR4/6 赤褐 粘性なし 硬くしまる 焼土層



第78図 RA092竪穴住居跡 (2) (10号住)

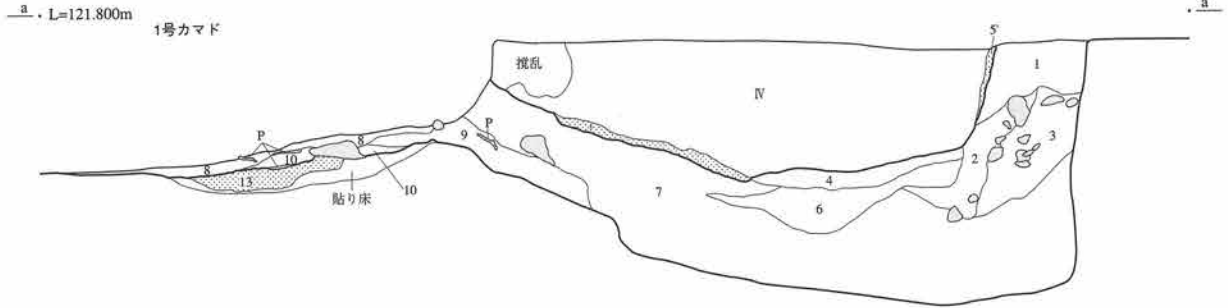


1号カマド

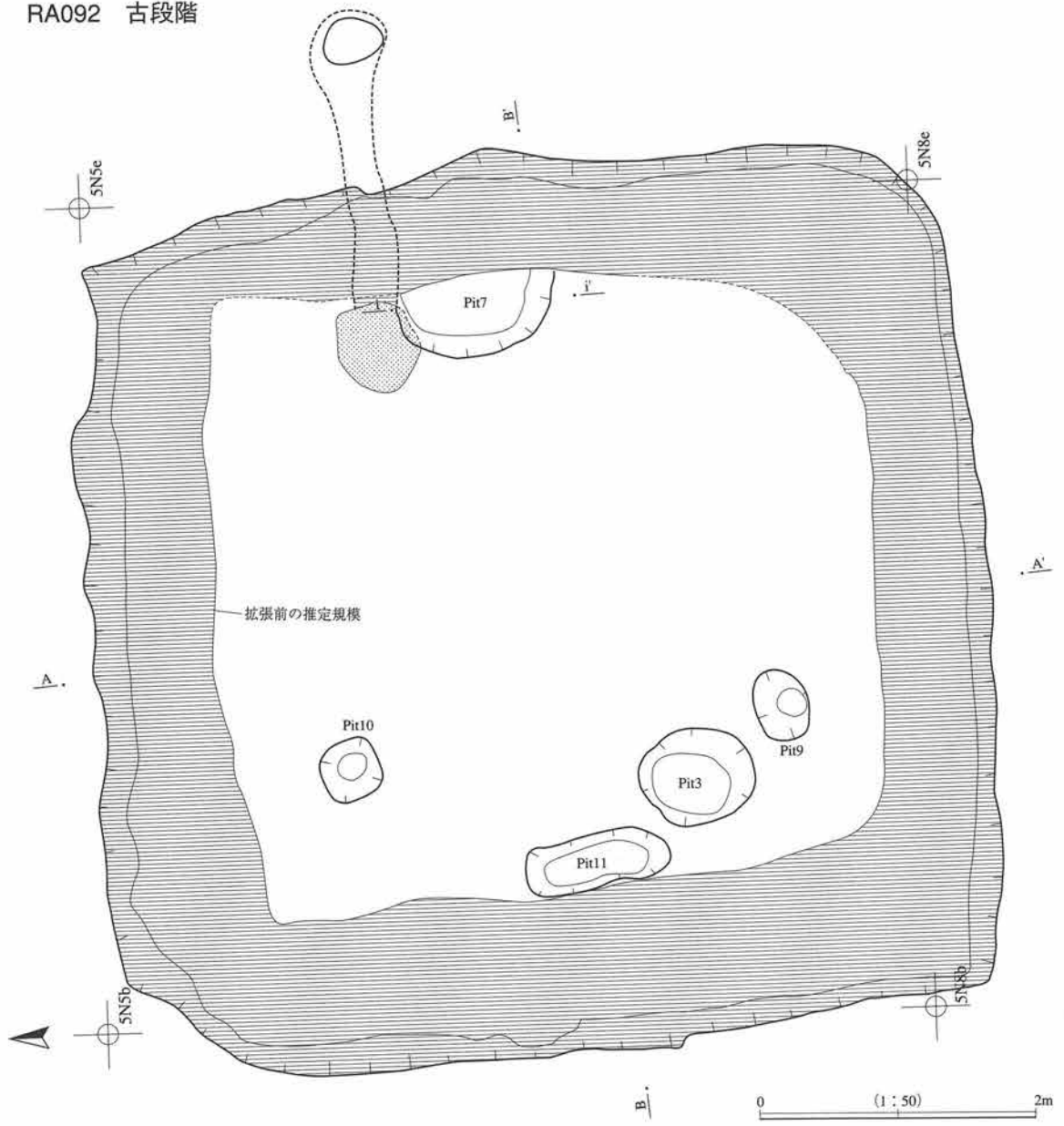
- 1 10YR2/1 黒 粘性ややあり しまりややあり 黄褐色土粒3%含む
- 2 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒5~7%
- 3 10YR3/4 暗褐 粘性あり しまりなし 上位に黒褐色土粒3~5%
- 4 10YR2/3 黒褐 粘性あり しまりなし 黄褐色土粒5%
- 5 5YR4/4 にぶい赤褐 焼土
- 5' 7.5YR4/4 褐 焼土 よく焼けている
- 6 10YR4/4 褐 粘性ややあり しまりなし 黒褐色土ブロック (1~3cm大) 10%
- 7 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし 焼土粒ごく少量含む
IV層起源の褐色土ブロック (0.2~2cm大) 10%
- 8 7.5YR2/2 黒褐 粘性なし しまりなし 微細な焼土粒5%
- 8' 10YR3/3 暗褐 粘性なし しまりややあり 全体にカマドの袖構築土を多く含む

第79図 RA092竪穴住居跡 (3) (10号住)

- 9 5YR3/3 暗赤褐 粘性、しまりなし 1~2cm大の赤褐 (5YR4/8)
焼土ブロック10%含む 天井焼土の崩落土
- 10 5YR4/8 赤褐 粘性なし しまりややあり
暗褐色粘土をブロック状に含む (カマド袖・天井崩落土)
- 11 10YR3/4 暗褐 粘性あり しまりややあり 崩れたカマド袖構築土
- 11' 10YR3/2 黒褐 11よりやや暗い 粘性あり しまりあり カマド袖構築土
- 12 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし 暗褐色粘土を全体に含む
- 13 5YR4/8 赤褐 粘性、しまりなし 焼土
- 14 7.5YR2/3 極暗褐 粘性あり しまりなし 焼土粒をごく少量含む
- 15 10YR3/4 暗褐 粘性あり しまりなし
- 16 10YR2/1 黒 粘性あり しまりなし



RA092 古段階



第80図 RA092竪穴住居跡 (4) (10号住)

30cmほど内側に位置している。焼土の厚さは最大で10cmである。燃焼部と煙道入り口までの間は住居拡張時に掘り方で破壊され、貼り床が施されている。煙道の長さは1.4m、削り貫き式である。底面は煙出しに向かって徐々に下降する。煙出しの上部壁と煙道天井は焼けて焼土化している。埋土は焼土やIV層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色土である。煙出しの埋土中位から7個、6.5kgの円礫が出土した。

<柱穴・付属施設>西壁のほぼ中央にステップ状の施設を検出した。規模を捉える前に埋土と考えて半裁してしまったので、正確な大きさは不明であるが、ステップ直下の貼り床がごく浅いことから、その範囲をステップの大きさと考えたと0.92×0.65mで、残存部の高さは約27cmである。褐色土ブロックを5%含む黒褐色土の上にIV層起源の褐色土を約6cmの厚さに貼り付けて構築しており、上面は固くしまっている。入り口の施設と考えられる。

柱穴は4基検出した。Pit 1、Pit 2、Pit 4、Pit 5の4で方形の柱穴配置である。東側のPit 4とPit 5は壁際にある。住居南西の二次的な貼り床を除去したところ、土坑Pit 3が検出された。二次的な貼り床はPit 3を使わなくなってから、床面の凹凸を埋めるため、施された可能性がある。2号カマド燃焼部の南側から土坑Pit 7が検出された。検出したのは土坑西半のみで、東半は2号カマド燃焼部と同様掘り方で破壊されている。

貼り床を除去したところ、古い柱穴とみられるPit 8、Pit 9が検出された。ともに埋土は黒褐色土と褐色土の混合土で、埋め戻したと考えられる。

本住居跡は、カマドに新旧があること、掘り方及び床面の壁際と内側の深さの違い、古い柱穴の存在、2号カマド燃焼面の壁からの距離、2号カマド燃焼面とPit 7東側が掘り方に切られていることなどから、2号カマドに伴う古い段階では第80図に示したとおり、一辺の長さが4.7m程度の住居跡であった可能性が高い。
(金子佐)

<遺物> (第184～187図、写真図版131～133)

内黒、非内黒の土師器坏、高台付坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器甕、壺がある。総量6,994gの土器が出土し、24点を掲載した。図化したもののほか、カマドから須恵器坏、Pit 3から土師器坏、Pit 7から須恵器小片、土師器甕が出土している。なお、同様に不掲載ではあるが、1号カマド直上及び埋土3層から出土した須恵器壺破片はRA102No 8の破片と、また、床上3cmの埋土と1号カマド出土の須恵器甕破片はRA087から出土した破片と接合した。本住居跡では、埋土から多くの円礫が出土している。カマド煙出しからの出土は前述のとおりであるが、カマドのある住居北東からが最も多く、53個42.3kgである。特に1号カマド前の床上15cmから長さ45cm、幅22cmの大型の礫が出土している。そのほか、南東からが7個3.2kg、南西からが6個5.0kg、北西からが11個、4.5kgである。本住居周辺では礫層の露出がなく、これらの円礫は住居の何らかの施設に使用されたものと思われる。

[土器] 墨書土器が1点出土した。406は墨書土器で、側面に墨書が施される。口縁部内外に油煙状の付着物が認められる。407は刻書土器で、底部及び側面2箇所刻線の認められる。408と415は拡張部と考えられる部分の貼り床から出土したものである。418から420は主に1号カマドより出土したものである。421は拡張部分の貼り床出土である。422は土師器甕としたが、直立し、平坦な口唇部、内外面のハケメなどから、別の器種の可能性がある。423は本住居跡4層から出土した破片とRA093(43号住)2号カマド脇Pitの埋土、煙出し埋土下層、RA098(36号住)No 7の破片が接合したものである。

[石器・石製品] 430は円形の礫を利用した磨石で、作業部位は表面のみである。433～435は砥石で、433・434は荒砥、435は中砥である。433は表面と両側面の一部を、434は表面を中心に少なくとも七

面を作業面としている。433・434は欠損部も作業面として利用しており、欠損後も利用していることが解るものである。435は表裏2面を作業面としており、斜走する使用痕が観察される。図化したもの以外では貼床から砥石が1点、埋土から磨石が2点、砥石が1点出土している。

[鉄器] 438は鉄鏝の茎部である。断片的な資料のため詳細は不明である。439は先端部の欠損した釘である。断面形は方形を呈し、頭部は折り曲げにより作出している。440は板状の不明鉄製品である。上端に二個一対の貫通孔が観察され、形状は小札に類似する。441は側面形がS字状を呈する不明鉄製品である。上端には貫通孔がある。外面と考えられる面には二条一対の並行する線が観察される。

[その他] 上記以外に1号カマド掘り方から1点、貼床から1点、26層から1点の計3点の鉄滓が出土している。鉄滓6は椀形のものである。他の2点は25g未満の軽量なものである。

<時期>出土遺物から9世紀後葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

RA093竪穴住居跡（43号住）（第81～84図、写真図版54、55）

<位置>調査区南よりの5 N15 b グリッドに位置する。住居東側が床面より下まで現代の攪乱を受けている。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層である。

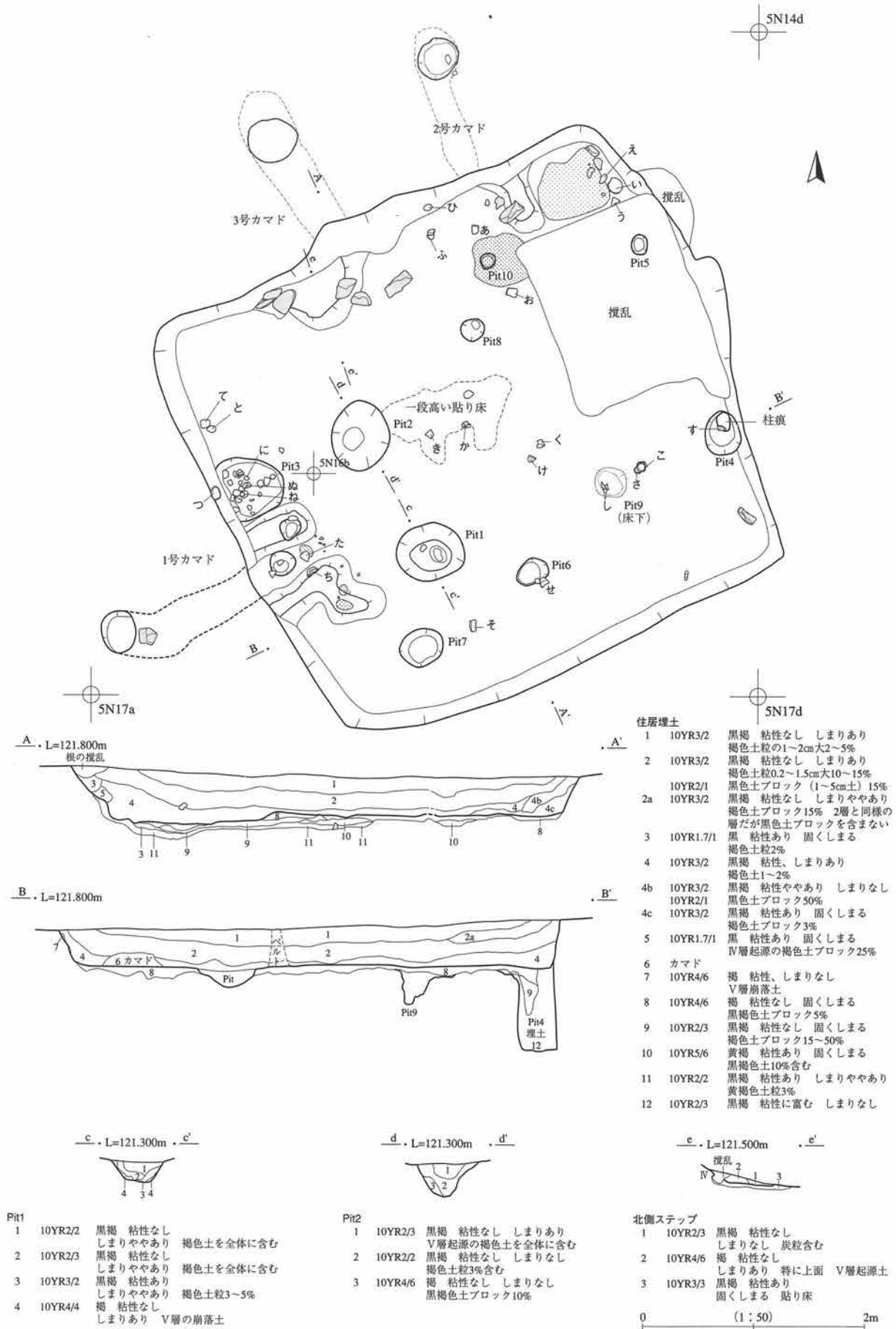
<規模・平面形状・方向>一辺の長さが4.62×4.38m、壁高49cmの隅丸長方形である。方向はW-22°-Sである。

<埋土>埋土は6層に細分され、Ⅳ層起源の褐色土ブロックを含む黒褐色土である。南壁際には褐色土ブロックに加え、Ⅱ層起源の黒色土ブロックも含まれている。2号カマドの右脇、住居北東コーナーの床上埋土は焼土を多く含んでいる。また、住居北西の一角からⅣ層の黄褐色土がまとまって見つかっている。

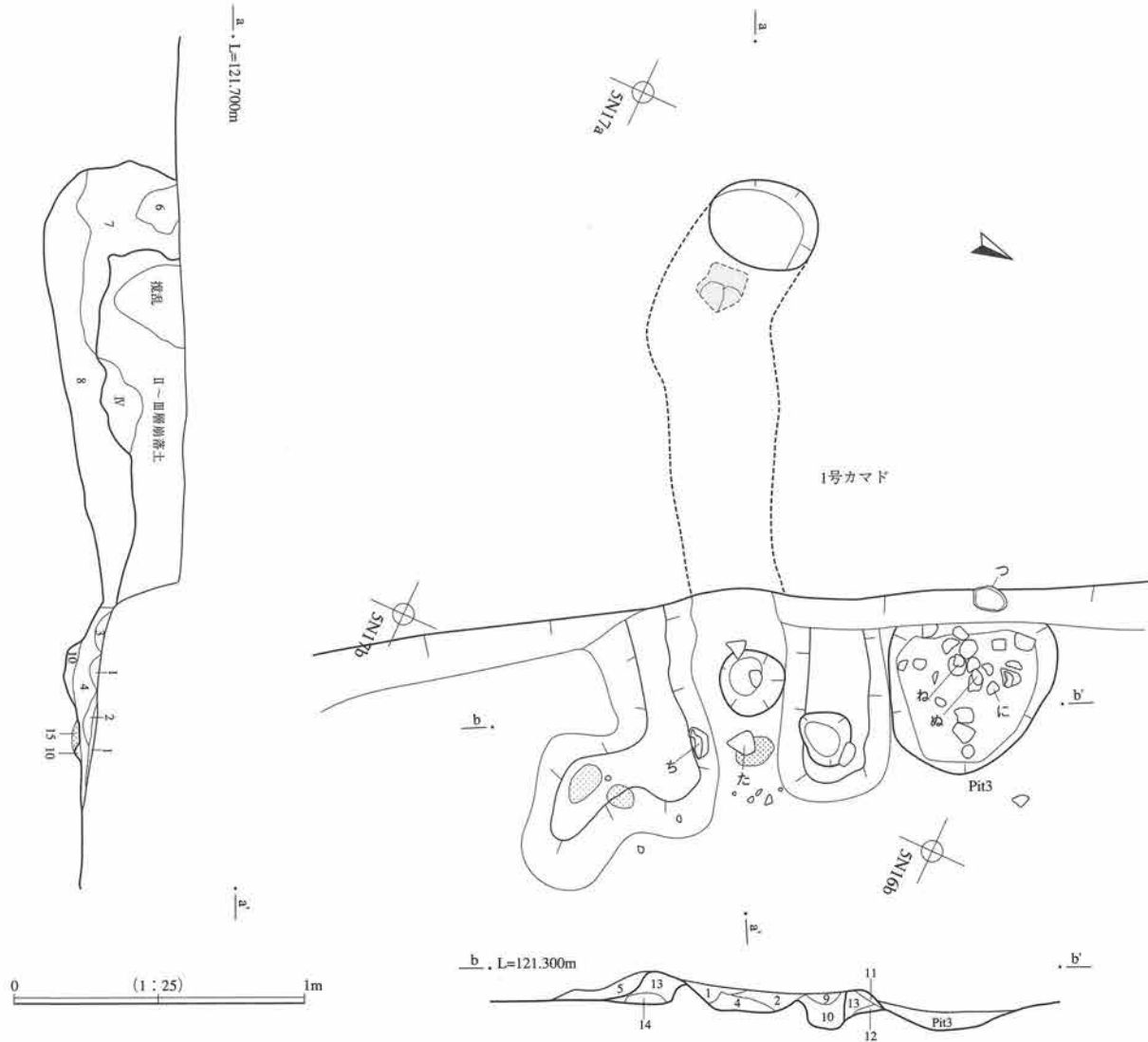
<床面・掘り方・貼り床>床面は中央部分がやや高くなっているが、他は平坦で固くしまる。貼り床は北半が褐色土ブロックを多く含む黒褐色土や黒褐色土ブロックを含む黄褐色土で、3層に細分される。南半は黒褐色土ブロックを含む褐色土が主である。掘り方は特に深浅なく、ほぼ一様に凹凸がある。

<カマド>3基確認された。最も新しいカマドは1号カマドで西壁中央よりやや南よりに位置する。天井は失われているが、袖が残っている。左右とも粘性のあまりないⅣ～Ⅴ層起源の褐色土で構築されている。右袖から芯材の据え方と見られる小ピットが検出された。小ピットの埋土には炭や焼土粒が含まれている。また、左袖の一部に焼土が検出された。燃焼部にはあまり焼土は発達しておらず、径13cm、厚さ3cm程度検出されたのみである。燃焼部の奥から径22cm、深さ4cmの小ピットが検出された。支脚の据え方と思われる。煙道は長さ1.4mの削り貫き式である。底は燃焼部から煙出しに向かって緩やかに下降している。煙道の天井部分のⅡ～Ⅲ層は崩落しておりやや濁っている。

2号カマドは北壁の東よりに位置する。右袖の一部と燃焼部焼土が残存している。カマドの残存状況が新旧を示しているとすれば1号カマドより古く、3号カマドより新しい可能性がある。袖は黒褐色土を主体に構築されている。袖の上から長さ27cmの礫が出土した。燃焼部はPit10に一部が切られているが、44×42cmの楕円形に焼土が形成されている。焼土の厚さは12cmである。燃焼部から煙道までは焼土粒が帯状に広がっていた（第83図）。煙道は1.4mの削り貫き式である。底面は煙出しに向かってごく緩やかに下降する。煙出しの埋土は褐色土ブロック、黒褐色土ブロックの混合土で、埋め戻しの可能性が高い。煙道は焼土粒や炭粉、褐色土のブロックを含む暗褐～黒褐色土である。



第81図 RA093竪穴住居跡(1) (43号住)



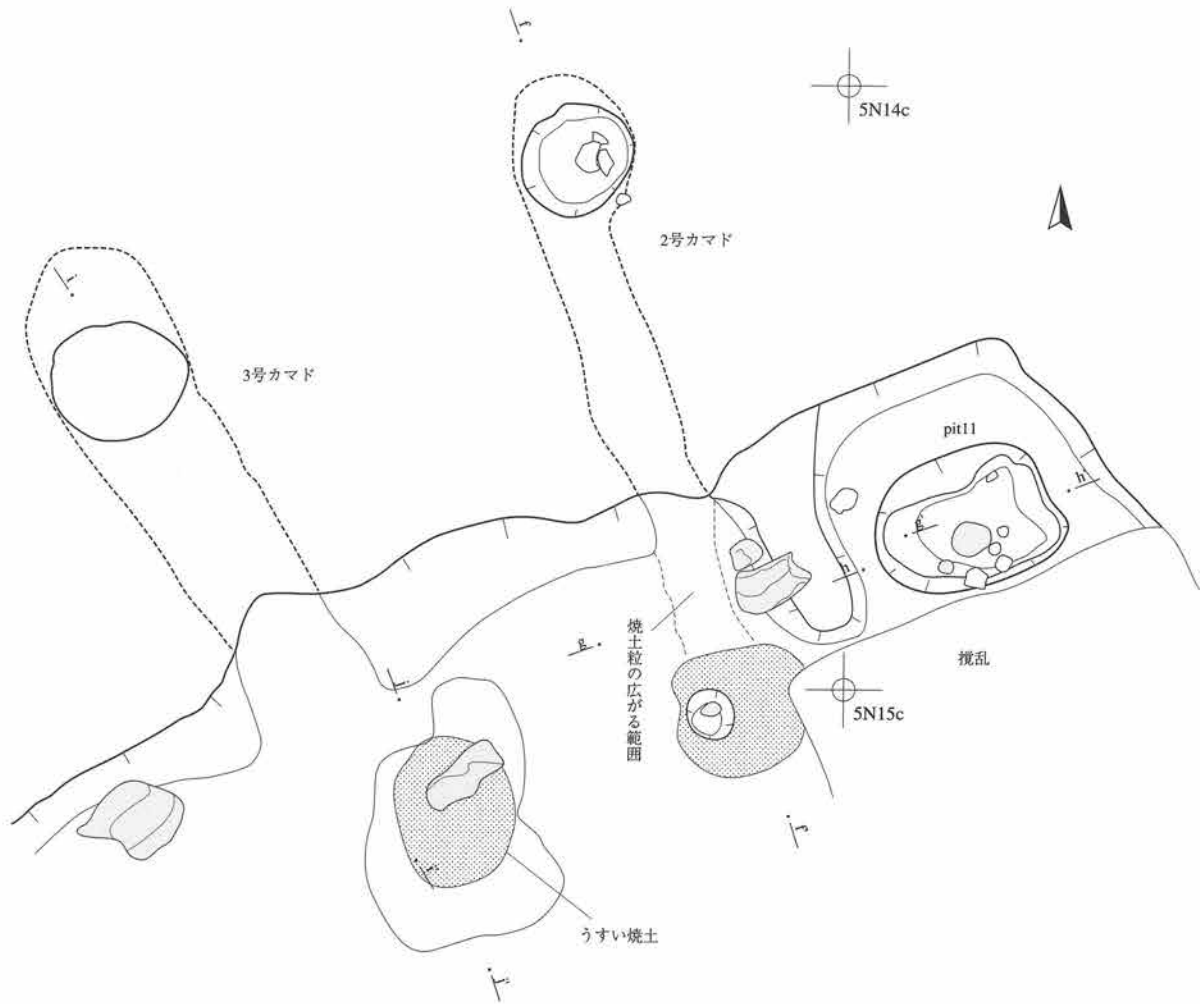
1号カマド

- | | | | | | |
|----|----------|-------|--------|-------|---------------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なし | しまりあり | 炭粒を含む |
| 2 | 7.5YR4/4 | 褐 | 粘性ややあり | しまりなし | 焼土粒・少量の炭粒含む |
| 3 | 10YR3/4 | 暗褐 | 粘性なし | しまりなし | |
| 4 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なし | しまりなし | 焼土・炭粒を含む |
| 5 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なし | しまりあり | 砂質 |
| 6 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なし | しまりなし | V層とII層崩落土の混合土 |
| 7 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | |
| 8 | 10YR4/4 | 褐 | 粘性なし | 砂質 | 焼土ブロック・帯状の黒褐色土ブロック・褐色砂の互層 |
| 9 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なし | 固くしまる | V層起源の砂質土3% 焼土粒少量含む |
| 10 | 7.5YR3/4 | 暗褐 | 粘性なし | しまりあり | 炭粒・焼土粒少量含む |
| 11 | 10YR3/3 | 暗褐 | 粘性なし | 固くしまる | しん材のすえ方? |
| 12 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なし | 固くしまる | 褐色土粒5% 袖 |
| 13 | 10YR4/6 | 褐 | 粘性なし | 固くしまる | 袖 |
| 14 | 10YR5/6 | 黄褐 | 粘性ややあり | しまりなし | IV~V層起源の袖 |
| 15 | 5YR4/4 | にぶい赤褐 | 粘性なし | 固くしまる | 焼土 |

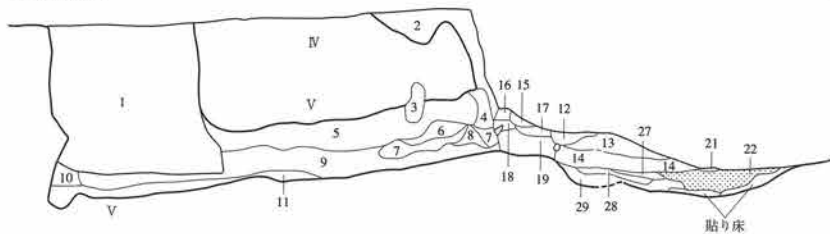
RA093	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5	Pit6	Pit7	Pit8	Pit9(床下)	Pit10
径(cm)	61×51	64×52	58×53	40×30	18×14	30×21	41×32	21×20	30×29	14×13
深さ(cm)	18	30	6	75	24	8	13	19	35	9

第82図 RA093竪穴住居跡(2) (43号住)

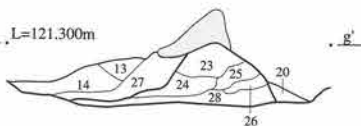
2 竪穴住居跡



f · L=121.700m



g · L=121.300m



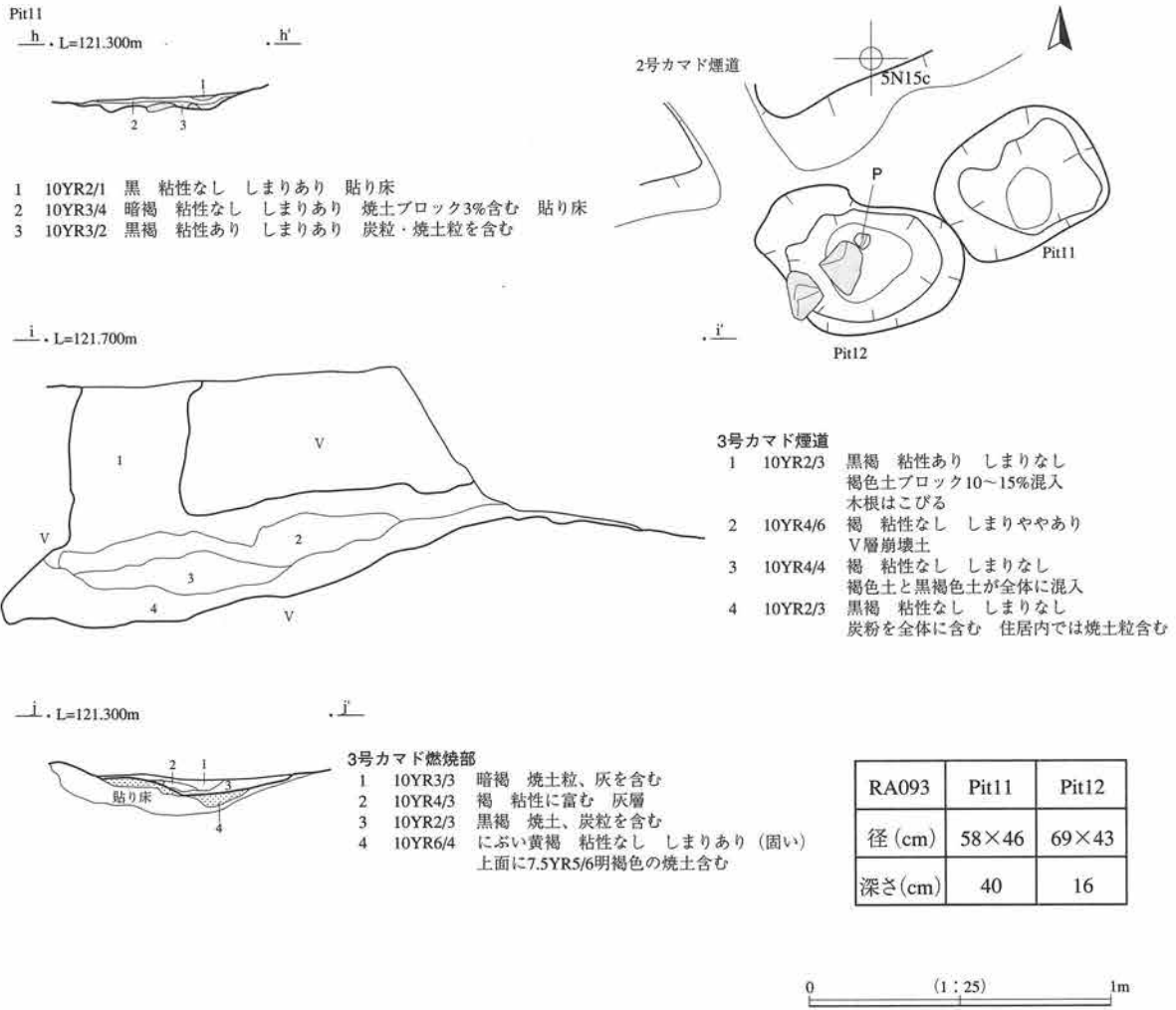
2号カマド

- 1 10YR3/2 黒褐 褐色ブロック・黒色ブロックの混合土 埋め戻しと思われる
- 2 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりなし 住居埋土 焼土粒含む
- 3 根の攪乱
- 4 10YR5/6 黄褐 粘性あり 固くしまる V層 砂質
- 5 10YR3/2 黒褐 粘性ややあり しまりなし 焼土含む 褐色土粒10%

- 6 10YR4/6 褐 粘性なし しまりややあり V層崩壊土 天井崩壊土
- 7 5YR4/4 にぶい赤褐 粘性なし しまりあり 下層がやや黒ずむ 奥のb層は天井崩壊土
- 8 10YR4/4 褐 粘性なし しまりなし
- 9 10YR3/3 暗褐 粘性ややあり しまりなし
カーボンブロック・焼土ブロック・褐色土ブロックの混合土
- 10 10YR2/3 黒褐 粘性ややあり しまりなし
- 11 10YR2/3 黒褐 粘性ややあり しまりなし カーボンを多く含む
- 12 10YR3/2 黒褐 粘性なし しまりややあり 褐色土粒3% 焼土粒2%含む
- 13 10YR4/6 褐 粘性なし しまりややあり 天井袖崩壊土 黒褐色土粒少量含む
- 14 10YR2/1 黒 粘性なし しまりなし 炭粒含む
- 15 10YR3/2 黒褐 1層と同じ層
- 16 10YR4/6 褐 粘性なし しまりなし 天井の崩壊土? 混入物なし
- 17 7.5YR4/4 褐 粘性なし しまりなし 部分的に焼けている 5YR4/8赤褐色シルト
- 18 5YR2/3 極暗赤褐 粘性なし しまりなし 天井焼土の崩壊層
- 19 7.5YR3/3 暗褐 粘性なし しまりなし 炭粒・焼土粒・褐色土粒含む
- 20 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりなし
- 21 7.5YR3/3 暗褐 粘性なし しまりなし 焼土を多く含む
- 22 5YR4/4 にぶい赤褐 粘性なし 固くしまる 焼土
- 23 10YR2/2 黒褐 粘性なし 固くしまる
- 24 10YR3/2 黒褐 粘性なし しまりあり 褐色土粒5%
- 25 10YR3/2 黒褐 粘性なし 固くしまる 褐色土粒2% V層起源の砂質土
- 26 10YR2/1 黒 粘性なし 固くしまる
- 27 10YR3/2 黒褐 粘性なし しまりなし 焼土粒含む
- 28 10YR4/4 褐 粘性あり しまりあり 上面燃で焼ける
- 29 10YR4/3 褐 粘性あり しまりあり 焼土粒・黄褐色土粒少量含む

0 (1:25) 1m

第83図 RA093竪穴住居跡 (3) (43号住)



第84図 RA093竪穴住居跡 (4) (43号住)

3号カマドには、袖は残っていない。燃烧部と見られる箇所の床を2cm程度下げた段階で、焼土や灰が検出された。灰は焼土の上面に2cm程度残っており、焼土も極薄い。燃烧部の上から長さ27cmの礫が出土した。煙道は1.33mの削り貫き式で底面は煙出しに向かって下降している。埋土は最下層に炭粉を多く含む黒褐色土が堆積し、中位はV層崩壊土や黒褐色土が混入する褐色土である。煙出しの埋土は木根が多くはびこり、自然堆積か、埋め戻しか判別できなかった。

<柱穴・付属施設> 1号カマドの右脇からPit3が検出された。埋土に土器片を多く含んでいる。2号カマドの右脇からPit11が検出された。埋土に土器片を含んでいる。これらの土坑は位置と出土遺物からカマド脇の貯蔵穴の可能性が高い。また、2号カマドの右袖を除去したところ、Pit11と同程度の浅いPit12が検出された。本土坑は3号カマドの右脇にあたり、前述の土坑2基と同様3号カマド脇の貯蔵穴と見られる。

柱穴状の小土坑は9基検出された。Pit9は床下から検出されたものである。また、Pit4は床面では柱痕跡の部分しか検出されず、床をはいだところ、掘り方が明らかになった。これらのうち大きさ、深さ等から支柱穴と思われるものはPit1、Pit2、Pit4、Pit5で方形の配置である。また東側のPit4、Pit5は壁にとりつく。

北壁中央より西よりに段差を確認した。3号カマドの左半分の上にあたる。V層起源の褐色土で、

上面がしまっておりやや固い。15～30cm位の礫数点も段差から出土した。入り口状の施設かとも思われたが、本施設のすぐ南からⅣ層起源の黄褐色土がまとまって検出されており、埋め戻し、あるいは廃棄土かもしれない。(金子佐)

<遺物> (第187～189図、写真図版133)

内黒及び非内黒の土師器坏、須恵器蓋、土師器甕、須恵器甕、壺がある。4,464gの土器が出土し、12点を掲載した。

[土器] 446は壁際から出土した須恵器の蓋である。448はPit 3から出土した破片と1号カマド袖から出土した破片が接合したものである。450は1号カマド左袖から出土した。453は本住居跡中の攪乱から出土した破片とRA106から出土した破片が接合したものである。形や法量からは甕とした方が良いと思われるが、成形や調整から壺と判断した。423は本住居跡2号カマド脇Pit及び煙出し埋土出土の破片とRA092、RA098出土の破片が接合したものである。

[石器] 埋土から剥片が1点出土しているが、図化は行っていない。

[鉄器] 456は両端を欠損している、断面形が方形を呈する棒状の鉄製品である。

<時期> 出土遺物から平安時代の9世紀後葉に属すると考えられる。

RA094竪穴住居跡 (34号住) (第85図、写真図版56)

<位置> 調査区中央南よりの5 N16 l グリッドに位置する。南北の長軸1.4m、東西の短軸1.2mの極小の規模である。床面は硬化が認められない。床面には礫が多く残されている。うち2点が岩手山の溶岩であり、遺物として取り上げた。覆土は3層に細分された。基本的な堆積層相は29号住の覆土に近似する。

<重複関係> 東壁が32号土坑を切る。

<検出面> Ⅳ層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向> 不整な方形を呈する。短軸(東西)1.2m、長軸(南北)1.4mである。壁はほぼ直立する。RA094は、カマドが作られて掘り込みを伴う遺構としては、長軸1.4m、短軸1.2mで、これまでの細谷地遺跡調査事例を含めても最小である。

<埋土> 3層に分層され、1層褐色土ブロックを多量に混入し、下層は黒色シルトで構成される。このような堆積土はRA095・RA096・RA099に類似する。

<床面・掘り方・貼り床> 床面は通常の住居跡の床面に認められるような硬化はないが、礫が多量に出土している。

<カマド> カマドは北壁のほぼ中央に作られる。煙道は長さ1.9m直径44cmで、直径58cm深さ84cmの煙出しに向けてやや下降する削り貫き式である。袖には自然礫を芯材に使用している。遺構北東壁からカマド東側にかけて攪乱を受けている。カマドの燃焼面は明確でない。カマド上部から土師器甕が横位で出土した。出土状況からカマド袖芯材礫に伴うものではなく、カマドに据えられていたものが横転した可能性が考えられる。

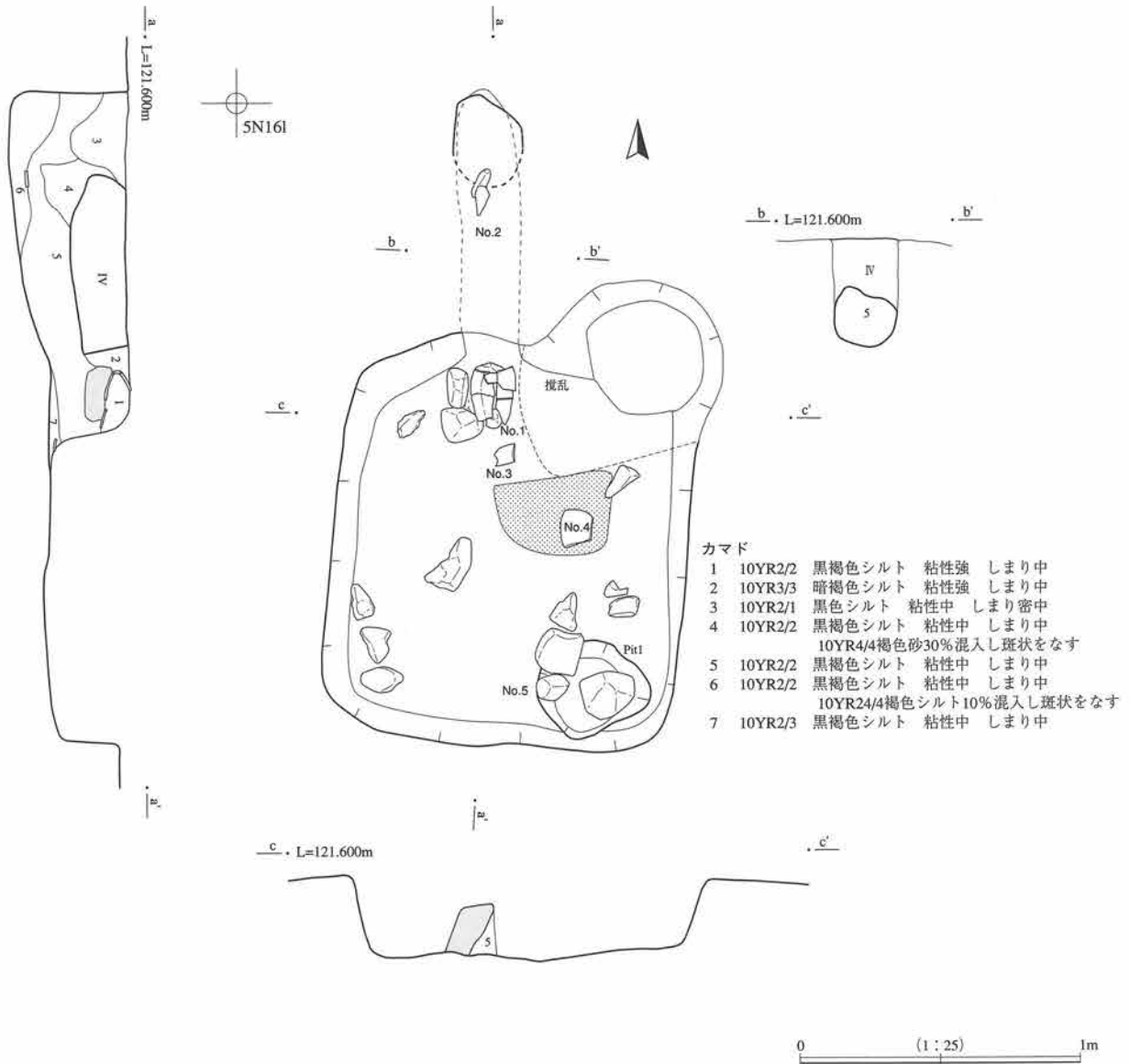
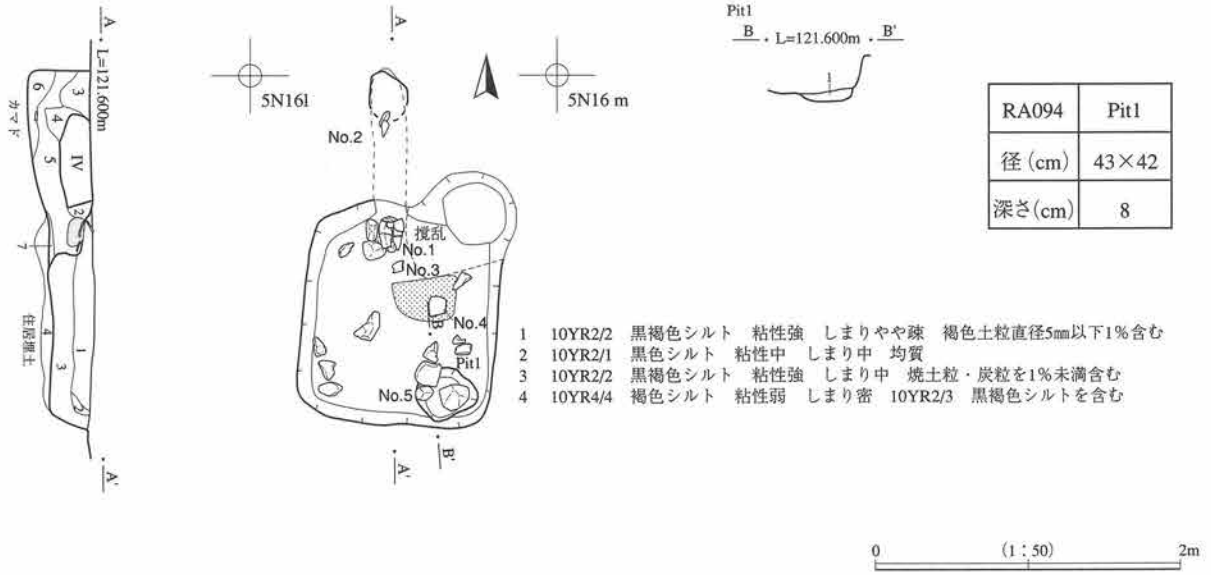
<柱穴・付属施設> 住居南東隅にピットを1基検出した。

(八木)

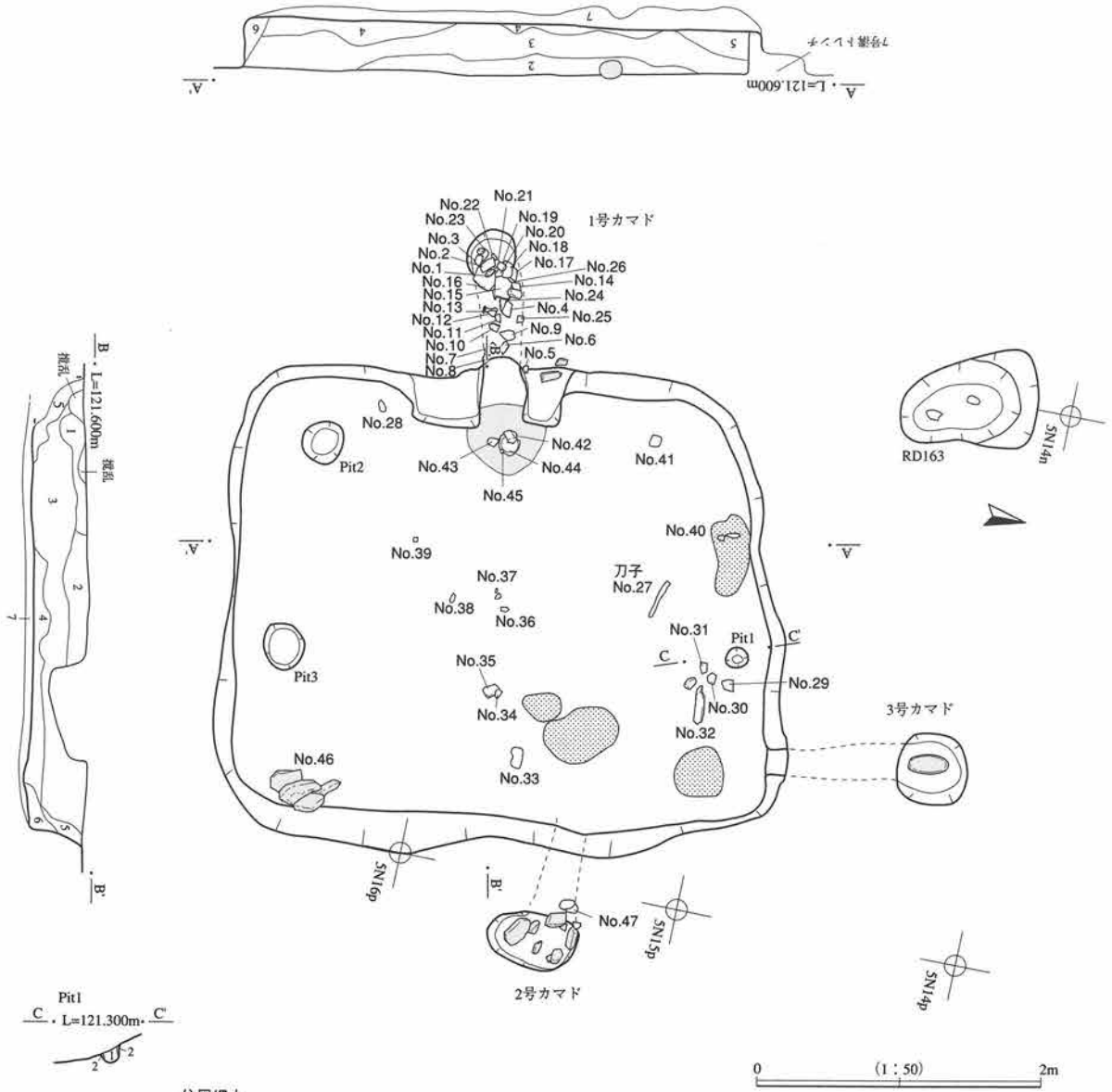
<遺物> (第189、190図、写真図版133、134)

土器はカマド上面の土師器甕とカマド手前床面直上の土師器坏、埋土から出土した非内黒の土師器坏破片である。住居南側床面から自然礫がまとまって出土している。土器の総量は908gで、3点を掲載した。自然礫に溶岩製の砥石が混入して出土している。

[石製品] 460・461は安山岩製の荒砥である。460は表裏2面を、461は表面と側面の一部を作業面と



第85図 RA094竪穴住居跡 (34号住)



住居埋土

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性強 しまり密
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性強 しまりやや密
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性強 しまり密 褐色土粒直径0.5~1cmを3%含む
- 4 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性強 しまり密
- 5 10YR2/1 黒色シルト 粘性強 しまり疎 均質
- 6 10YR4/4 褐色シルト 粘性強 しまり中 10YR2/3黒褐色シルトを含み斑状をなす
- 7 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまり密 10YR2/3黒褐色シルトを含み斑状をなす

RA095	Pit1	Pit2	Pit3
径 (cm)	16×14	30×29	35×28
深さ (cm)	15	5	6

第86図 RA095竪穴住居跡 (1) (29号住)

している。

<時期>カマド袖の出土土器から平安時代と判断される。

RA095竪穴住居跡 (29号住) (第86~89図、写真図版57、58)

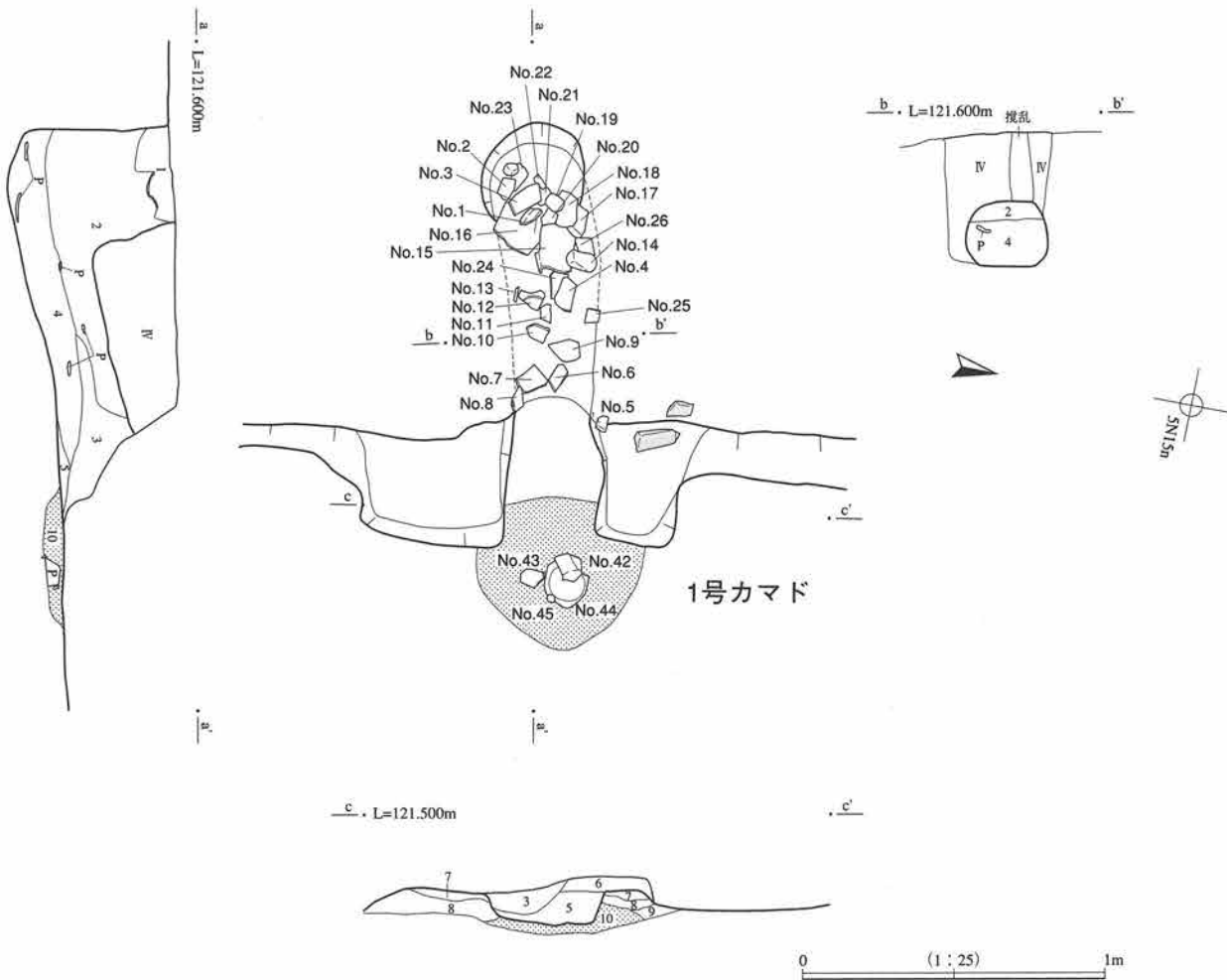
<位置>調査区やや南寄り中央の5 N15 n グリッド付近に位置する。

<重複関係>RA096の煙道と切り合い関係が認められる。RA095がRA096を切っており、RA095が新しい。また、埋土上部がRG028に切られる。

<検出面>表土直下IV層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向>3.9×3.35mの方形を呈する。壁高は42cmである。カマド方向による主軸方向はN-78°-Eである。

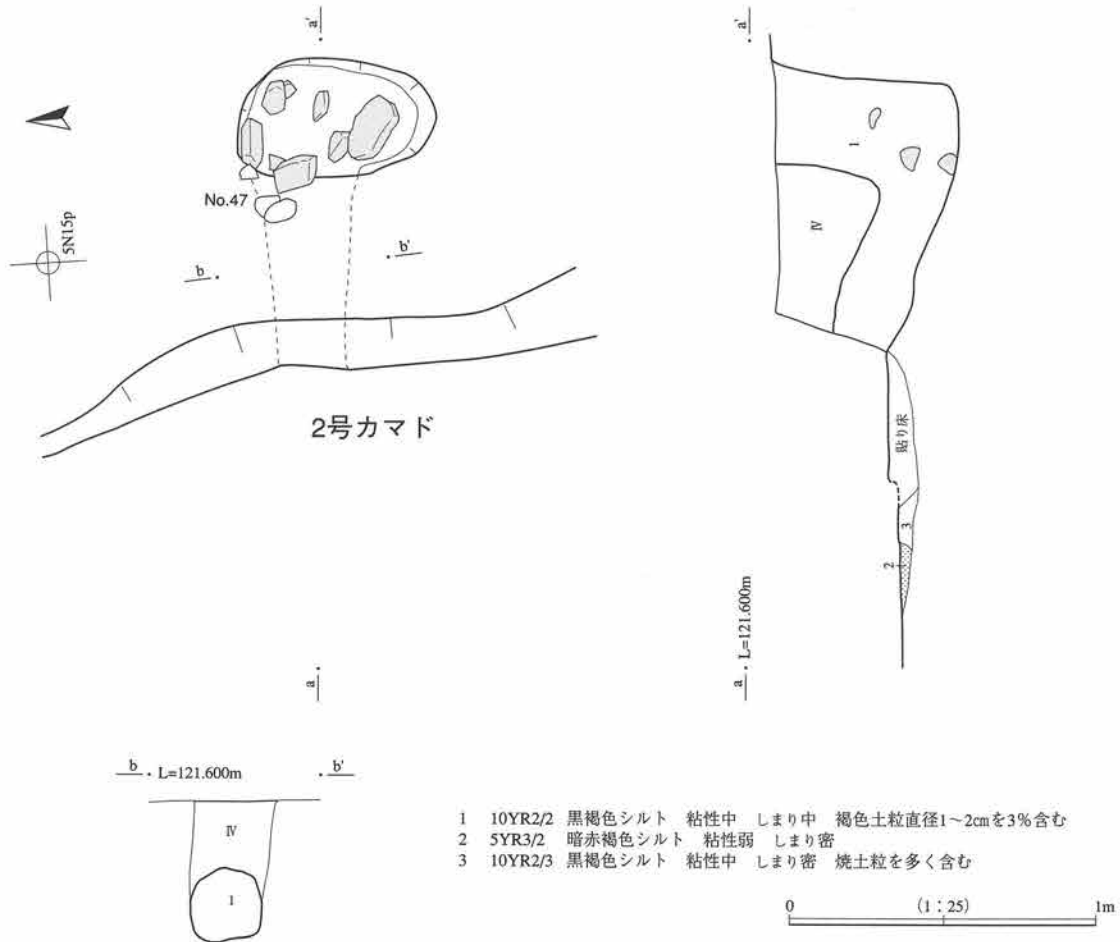
<埋土>1~4層に分層される。1層暗褐色土、2層褐色土ブロックを多量に混入する暗褐色土、3層黒褐色土、4層褐色土ブロックを混入する黒色土である。堆積状況は自然堆積の様相を呈するが、壁際の最初の堆積4層が褐色土ブロック混入土であることから、住居構築の際に生じた廃土を利用し



1号カマド

- | | | | | | | | | | | |
|---|---------|----------|-----|-------|------------------|----|---------|---------|-------|------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまり中 | 褐色土粒直径1~2cmを1%含む | 6 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性中 | しまり中 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまり中 | 褐色土粒直径1~2cmを1%含む | 7 | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性中 | しまり密 |
| 3 | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり密中 | | 8 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性やや強 | 締やや密 |
| 4 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | | 9 | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまり中 |
| 5 | 5YR2/4 | 極暗赤褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | | 10 | 5YR3/3 | 暗赤褐色シルト | 粘性弱 | しまり密 |

第87図 RA095竪穴住居跡 (2) (29号住)



第88図 RA095竪穴住居跡 (3) (29号住)

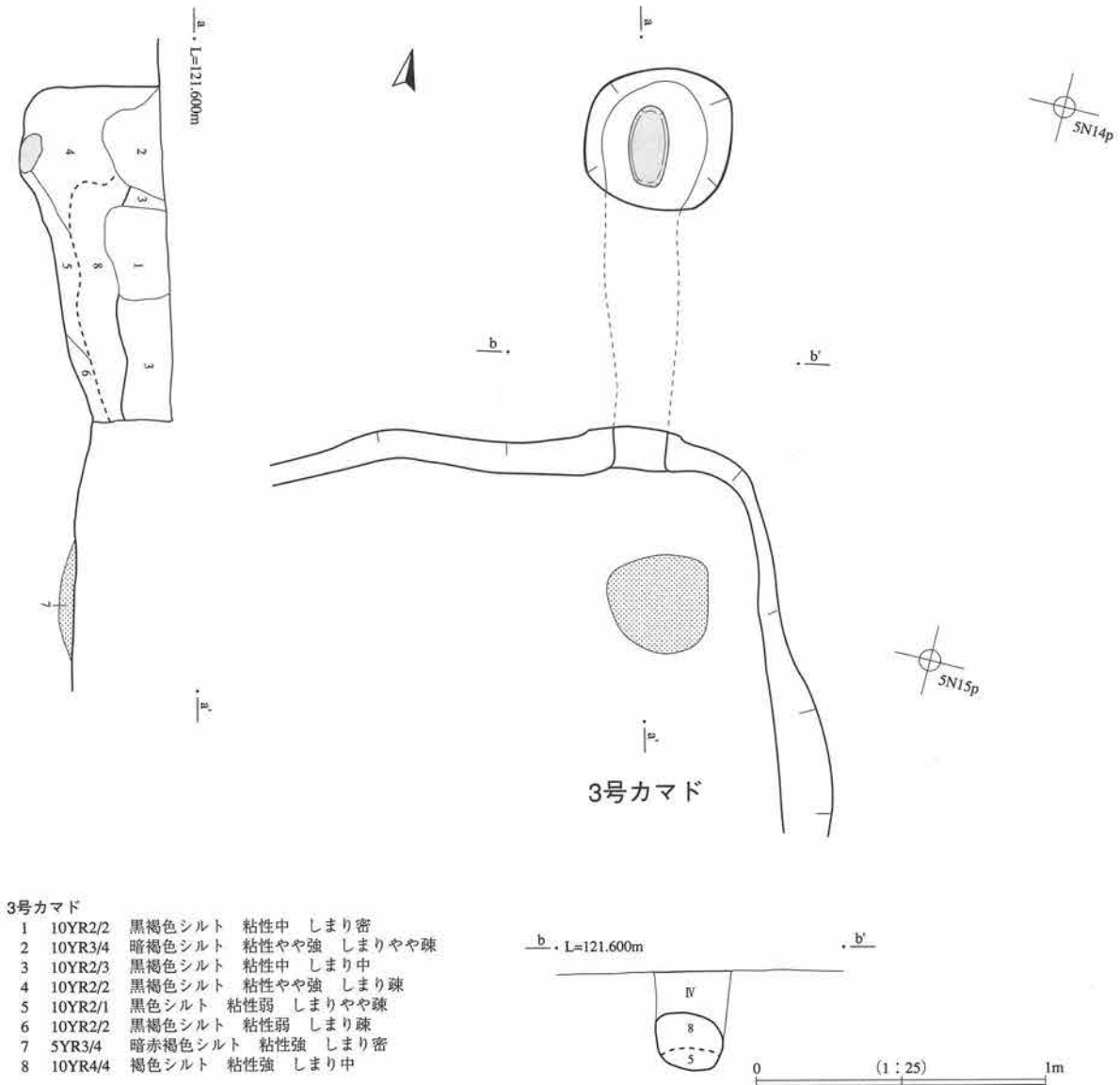
た周堤があった可能性がある。遺物は2層上面から多く出土している。

<床面・掘り方・貼り床>床面は全体的に硬化が認められる。掘り方は全体的に浅く、貼り床は単層である。

<カマド>カマドは3基検出した。最も新しいカマドは西壁のほぼ中央に作られている1号カマドである。袖が残存していることから最も新しいと判断した。東壁の北寄りに作られている2号カマドは袖が認められず、1号カマドに伴う貼り床を除去した状態で燃烧部被熱面を検出したため、旧カマドと考えられる。また、北壁の東寄りに作られている3号カマドは、住居埋土上層~中層に焼土ブロックが認められたが、袖が検出されず、また燃烧部がなかった。ただし1号カマドの床面に被熱面が認められることから、2号カマドより新しく、1号カマドより古いと判断される。

1号カマドの主軸方向はN-78°-Eである。煙道は長さ1.9m直径28cmで、深さ106cm直径64cmの煙出しに向けて降下する刳り貫き式である。燃烧部中央に土師器甕底部が逆位で出土しており、支脚と判断される。煙道部から遺物がまとまって出土している。2号カマドの主軸方向はN-89°-Eである。煙道は長さ1.8m直径30cmで、深さ120cm直径64cmの煙出しに向けて降下する刳り貫き式である。煙出し底面近くから土器および礫が多量に出土している。3号カマドの主軸方向はN-11°-Wである。煙道は長さ2.3m直径20cmで、深さ98cm直径50cmの煙出しに向けて降下する刳り貫き式である。煙出し底面近くから花崗岩の自然礫が1点出土している。

<柱穴・付属施設>柱穴の可能性のあるピットを貼り床除去後に2個検出した。柱穴上面の貼り床も



第89図 RA095竪穴住居跡(4) (29号住)

硬化が認められたため、貼り床下で検出した焼面と同じく、1・3号カマド以前の2号カマドに伴うものと考えられる。(八木)

<遺物> (第190~192図、写真図版134、135)

3号カマド付近の床面から小刀が出土している。土器の総量は4,558gで、内黒及び非内黒土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器甕があり、13点を掲載した。

[土器] 467と468は本住居跡を切るRG028の埋土から出土した破片と本住居跡出土の破片が接合したものである。墨書土器が1点出土した(462)。側面に墨書されており、内面及び割れ口の一部にタール状の付着物が認められる。

[土製品] 475は棒状の土製品で、長軸方向に貫通孔が観察されるものである。カマド付近の埋土からの出土である。

[石器・石製品] 476は頁岩製のスクレイパーである。右側面背面側に調整を施して刃部を作出している。打面側の背面側に連続する微細な剥離痕が観察される。478は安山岩製の荒砥である。表裏面を

作業面としている。表面の作業面は皿状にくぼんでおり、一部には赤色の付着物が観察される。裏面には溝状の使用痕が観察される。図化したもの以外では2号カマド煙出しから砥石が1点、埋土から両面調整石器が1点、剥片が2点、砥石が1点出土している。

[鉄器] 481は平面形が「Y」字状を呈する雁又式の鉄鏃で、先端部を欠損している。482は刃先を欠損している小刀である。関部分は明瞭な屈曲を持っていないものである。

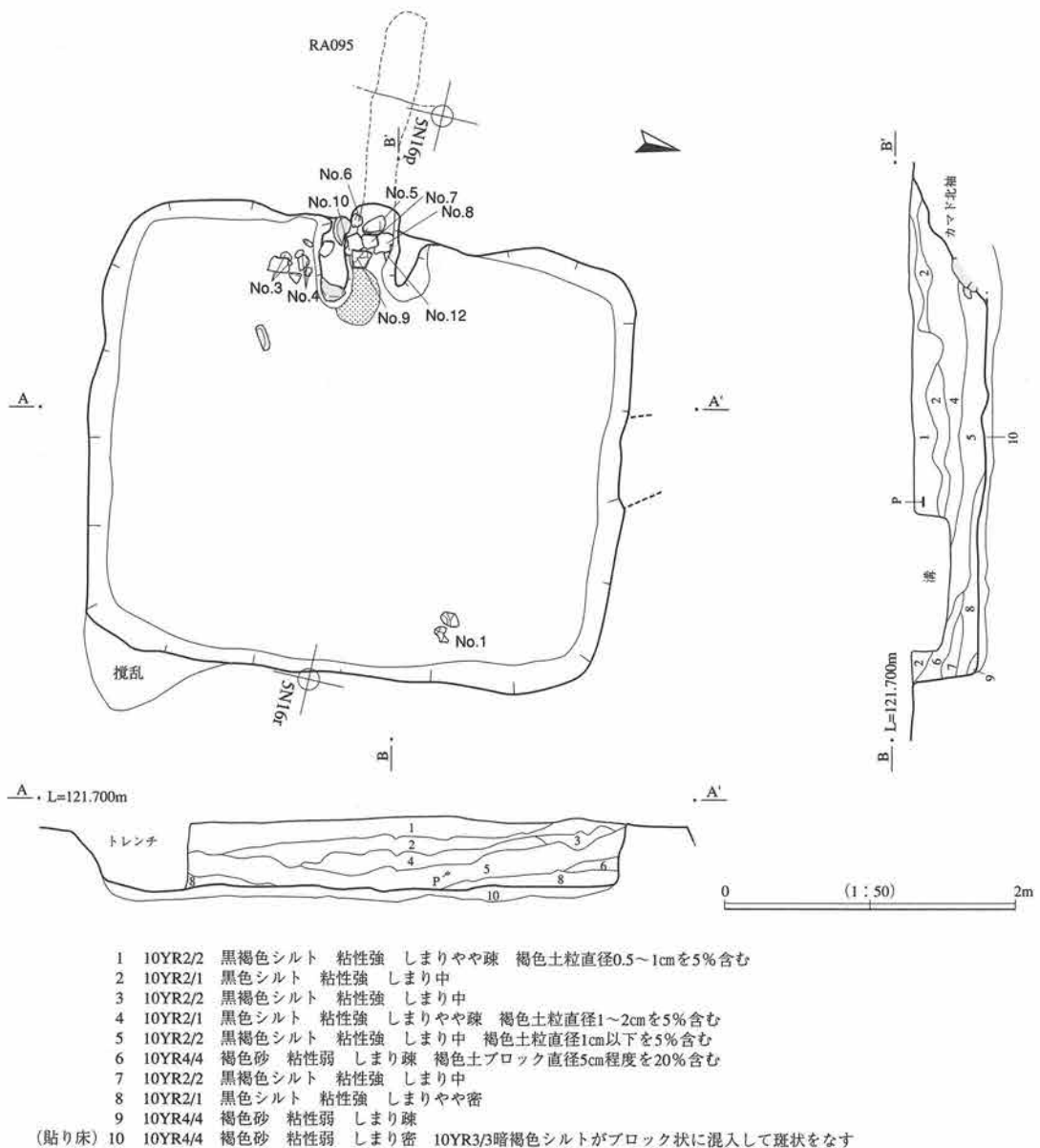
[その他] 上記以外に2号カマド煙出しから鉄滓が1点(483)出土している。

<時期>出土遺物から9世紀後葉から10世紀初頭と考えられる。

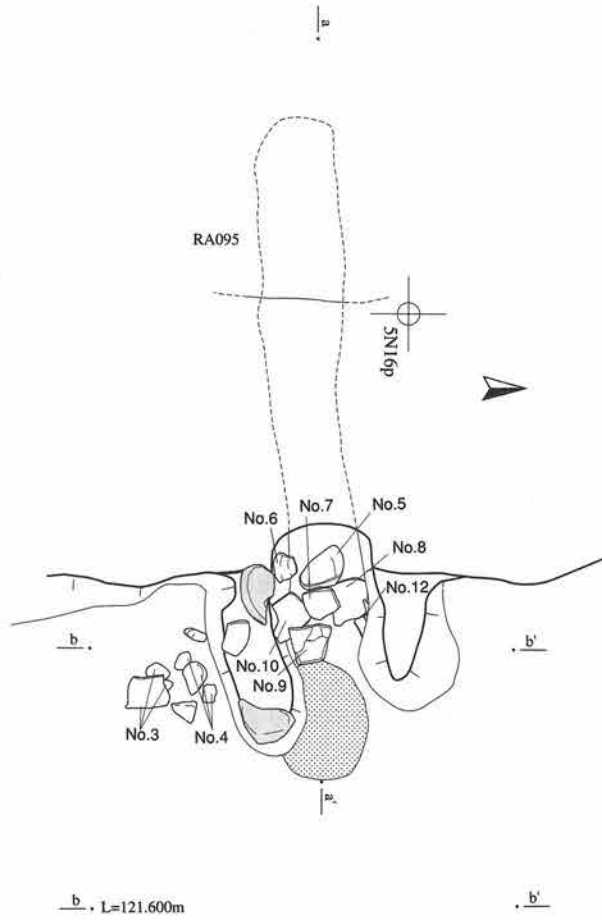
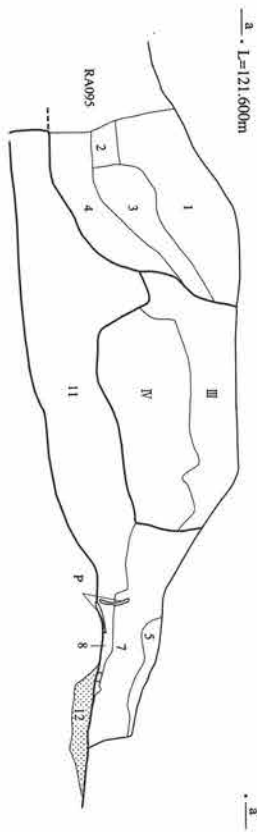
RA096竪穴住居跡(24号住)(第90、91図、写真図版59)

<位置>調査区中央南寄りの5N15pグリッド付近に位置する。

<重複関係>カマド煙道をRA095に切られる。床面の標高はRA095が120.3m前後、RA096が121.07m前後でRA096の方が深い。また、住居覆土上層をRG029に切られている。RG029はRG028に並行しており、灰白色火山灰ブロックが混入するなど層相も近似する。

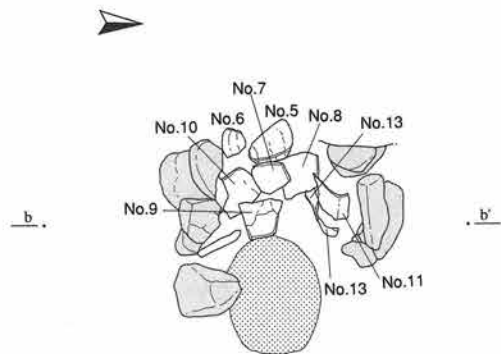
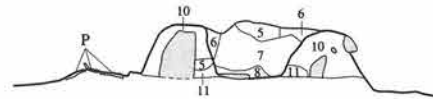


第90図 RA096竪穴住居跡(1)(24号住)

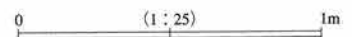


カマド

- | | | | | | |
|-----|---------|----------|-----|--------|---------------------|
| 1 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまり中 | |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまりやや密 | |
| 3 | 10YR2/1 | 黒色シルト | 粘性強 | しまり密 | |
| 4 | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | |
| 5 | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性弱 | しまり中 | |
| 6 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | |
| 7 | 10YR2/1 | 黒色シルト | 粘性強 | しまりやや密 | |
| 8 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまり密 | |
| 9 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 粘性弱 | しまり疎 | |
| 10 | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性中 | しまり密 | 10YR3/3暗褐色シルトが斑状をなす |
| 11 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまり中 | |
| 12 | 5YR2/4 | 極暗赤褐色シルト | 粘性中 | しまり密 | |
| III | (基本土層) | | | | |
| IV | (基本土層) | | | | |



カマド構築礫検出状況



第91図 RA096竪穴住居跡 (2) (24号住)

<検出面>表土直下Ⅳ層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向>3.38×3.1mの方形を呈する。壁高は50cmとやや深い。カマド方向による軸方向はN-94°-Wである。

<埋土>黒色シルトと褐色土ブロック混じりの暗褐色土が互層をなす。堆積状況からは自然堆積と判断できるが、褐色土ブロック混じりの暗褐色土は自然には生成されないため、住居構築の際に生じた廃土を積み上げた周堤が再堆積した可能性もある。このような褐色土混じりの暗褐色土の堆積はRA098等にも認められる。

<床面・掘り方・貼り床>床面はカマド周辺がやや硬化している。掘り方は全体的に均等な深さで、貼り床は単層で認められる。

<カマド>西壁のほぼ中央に1基検出した。カマドの主軸方向はN-94°-Wである。袖芯材に自然礫を用いている。カマド燃焼部およびカマド南袖の南に隣接して遺物がまとまって出土した。煙道は長さ1.4m直径25cmで、深さ75cm直径60cmの煙出しに向けて下降する刳り貫き式である。煙道の一部はRA095に切られている。

<柱穴・付属施設>柱穴・付属施設は認められない。

(八木)

<遺物> (第192、193図、写真図版134~136)

カマド燃焼部およびカマド脇にまとまって出土した。土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器壺がある。土器の総量は3,053gで、9点を掲載した。

[土器] 487は刻書土器で、底部外面に刻書がある。469はRA095出土の破片と本住居跡出土の破片が接合したものである。491はRG029出土の破片と本住居跡出土の破片が接合したものである。

[石器・石製品] 492は平基無茎鏃である。平面形は長三角形状を呈する。493は荒砥である。表裏側面の3面を作業面としており、表裏面には溝状の使用痕が観察される。図化したもの以外では埋土から剥片が1点、砥石が1点出土している。

[その他] 上記以外に1層から鉄滓が1点(495)出土している。

<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後半に属する可能性がある。

RA097竪穴住居跡(38号住)(第92、93図、写真図版60、61)

<位置>調査区中央部南寄り5N18rグリッド付近に位置する。

<重複関係>認められない。

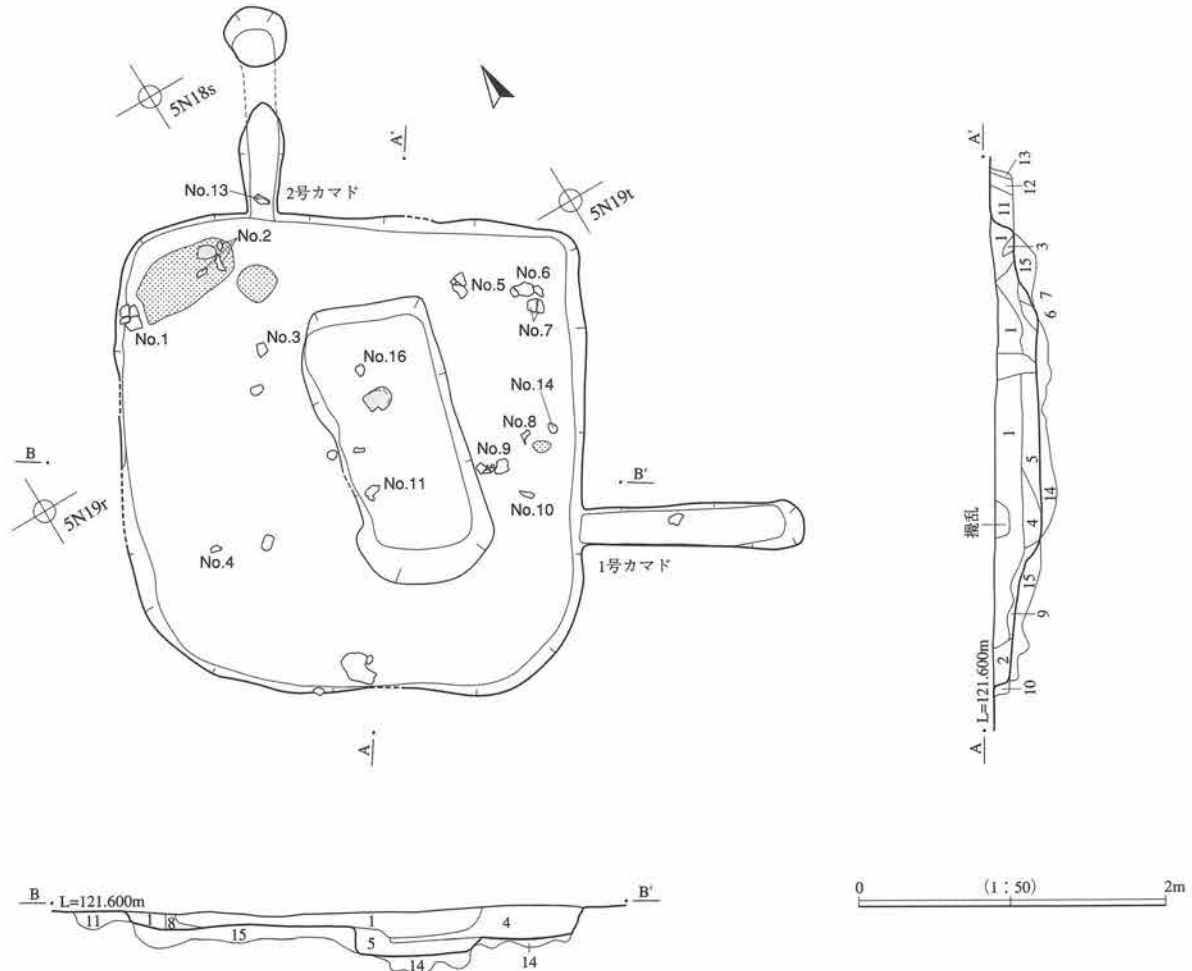
<検出面>Ⅳ層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向>規模は3.12×3.0mで方形を呈する。壁高は16cmで非常に浅い。カマドによる主軸方向はN-123°-Eである。

<埋土>RA097は廃絶後に土坑が作られている。床面北西隅の床面より1段低い面に焼土がある。焼土の上面に土器が敷き詰められるように面的にまとまって検出された。さらに土器の上面に貼り床が施されているため、これらは2号カマドに伴うものと考えられる。また、これらの焼土・土器・貼り床を土坑が切っている。1号カマド燃焼部が認められず、貼り床も土坑によって切られているため、2号カマド→1号カマド→土坑という新旧関係と判断される。

<床面・掘り方・貼り床>床面の硬化はあまり認められない。掘り方・貼り床も非常に浅い。

<カマド>2号カマドの脇に焼土がある。うち東側焼土は貼り床の下で検出される。このため2号カマドは旧カマドである可能性が高くなる。しかしなお1号カマドは袖が明瞭でない。2号カマドが旧カマドで1号カマドが作られ、最後に1号カマドの燃焼部も破壊されて土坑が構築された可能性がある。



住居埋土

1	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性強	しまりやや疎	褐色土粒5mm~1cmを5%含む	11	10YR2/1	黒色シルト	粘性強	しまり中	
2	10YR2/1	黒色シルト	粘性中	しまり密 均質		12	10YR2/1	黒色シルト	粘性強	しまり中	褐色土粒含む
3	10YR2/1	黒色シルト	粘性弱	しまり疎 焼土粒含む		13	10YR4/4	褐色シルト	粘性強	しまり中	
4	10YR2/1	黒色シルト	粘性強	しまりやや疎	褐色土粒5mm以下1%含む	14	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱	しまり密	
5	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性強	しまりやや疎	褐色土粒5mm~1cmを5%含む			褐砂マーブル状に混入			
6	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性強	しまり中		15	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性やや弱	しまり密	
7	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性強	しまり中	焼土粒 含む			褐色土ブロック30%混		斑状をなす	
8	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性弱	しまりやや疎							
9	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性強	しまりやや密	褐色土多						
10	10YR4/4	褐色シルト	粘性弱	しまり密							

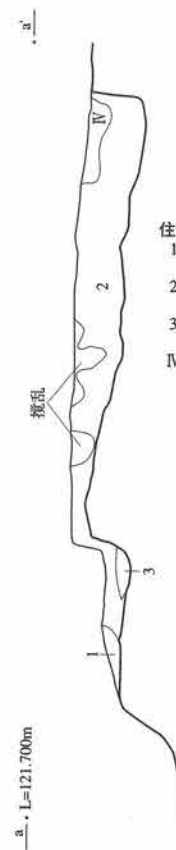
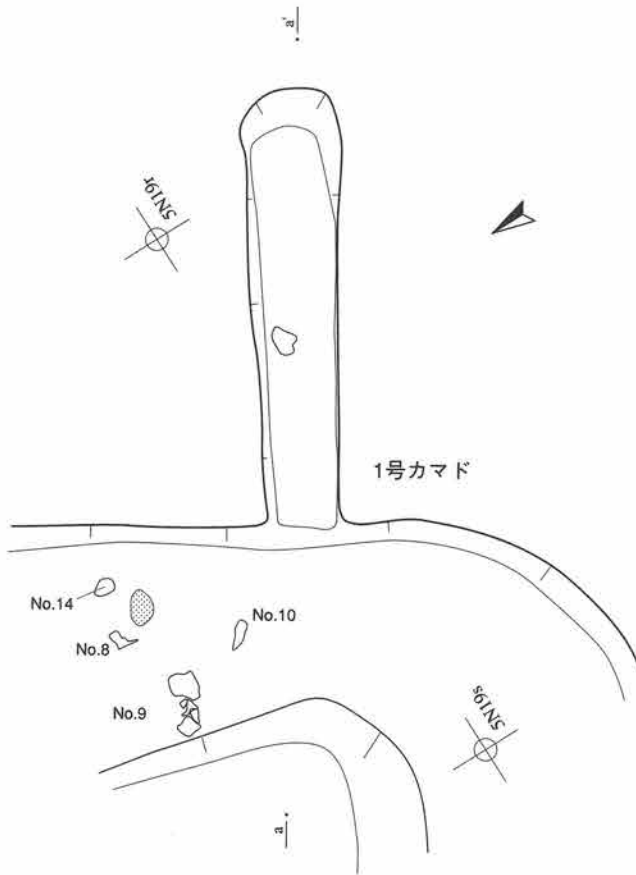
第92図 RA097竪穴住居跡 (1) (38号住)

る。1号カマドは煙道長さ1.45m直径18cmで直径20cm深さ16cmの煙出しに向けてやや下降する。煙道上部は削平されている。2号カマドは煙道長さ1.4m直径20cmで、直径40cm深さ30cmの煙出しに向けてやや下降する列り貫き式である。

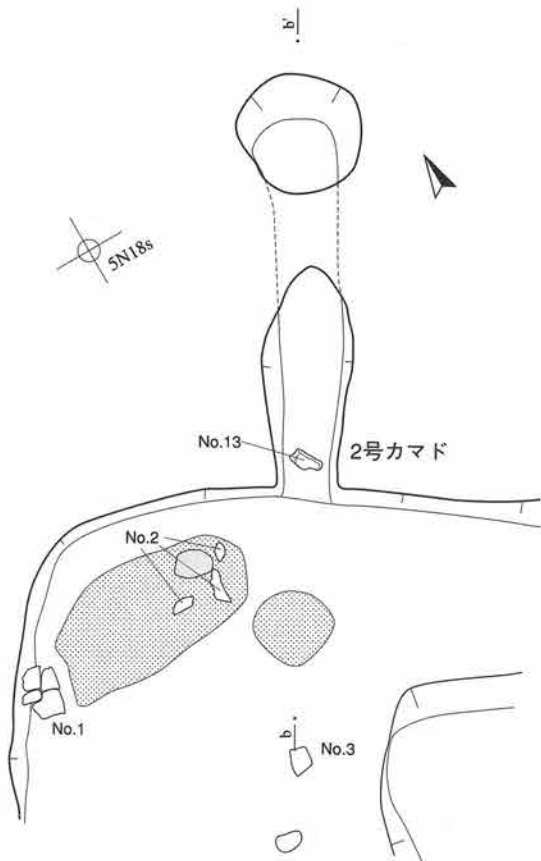
＜柱穴・付属施設＞床面ほぼ中央に土坑がある。土坑上面、床面と同じ面は貼床や床面の硬化が認められない。よって住居以前のものとは考えられない。したがって、住居使用時か住居廃絶直後に掘り込まれた土坑と判断される。土坑堆積土は黒色土を基本とする褐色土粒混じりの土で構成され、住居覆土1層に類似するが、1層よりも褐色土粒が少ない点で異なる。また、土坑床面やや北寄りから自然礫が1点出土した。柱穴は検出できなかった。(八木)

＜遺物＞(第194図、写真図版136)

非内黒の土師器坏、土師器甕がある。遺物は床面に散在するのみで、まとまりは認められない。土坑上面に坏が1点出土している。貼り床から土師器甕、土師器坏の小片も出土した。2,056gの土器が



- 住居 1号カマド
- | | | |
|----|---------|----------------------|
| 1 | 5YR2/3 | 極暗赤褐色シルト 粘性強
しまり中 |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト 粘性強
しまりやや疎 |
| 3 | 10YR3/4 | 暗褐色シルト 粘性強
しまり中 |
| IV | | 基本土層 |



- 住居 2号カマド
- | | | |
|----|---------|--------------------------------------|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト 粘性強
しまり中 焼土粒φ5mmを
10%含む |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト 粘性強
しまり中 |
| 3 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト 粘性強
しまり中 焼土粒含む |
| 4 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト 粘性強
しまり中 焼土粒含む |
| 5 | 10YR2/1 | 黒色シルト 粘性強
しまり疎 |
| 6 | 5YR3/2 | 暗赤褐色シルト 粘性中
しまり密 |
| IV | 10YR4/4 | 褐色シルト 粘性中
しまり疎 |

0 (1:25) 1m

第93図 RA097竪穴住居跡 (2) (38号住)

出土し、5点を掲載した。

[土器] 496はRA062出土の破片と本住居床直上出土ほかの破片が接合したものである。

[土製品] 501は羽口の断片的な資料である。貼床からの出土である。

[石器・石製品] 504は土坑のマクラ石として転用された鉄砧石である。厚みのある楕円形の礫を利用したもので、表裏二面に使用痕跡が確認される。505は扁平な礫の周縁に調整を施して、平面形を円形にしている。片面のやや一端よりに短辺と平行する黒い筋が観察される。剥離調整以外の調整痕跡は認められない。図化したもの以外では砥石が1点出土している。

[その他] 上記以外に埋土上層から焼成粘土塊が1点(502)出土している。

<時期>出土土器から平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属する可能性がある。

RA098竪穴住居跡(36号住)(第94~96図、写真図版62、63)

<位置>調査区中央部やや南寄りの5 N15 u グリッド付近に位置する。

<重複関係>認められない。

<検出面>IV層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向>規模は3.74×3.74mで、壁高は36cmである。カマドによる主軸方向はN-24°-Wである。

<埋土>1~9層に分層される。暗褐色土と褐色土ブロックが多量に混入する暗褐色土で構成される。褐色土ブロックを多量に含む層と暗褐色土が互層をなす。土層堆積状況を観察すると、レンズ状堆積の様相を示しており、自然堆積と考えられる。しかし、褐色土ブロックを多量に混入していることから、住居構築の際に生じた廃土を利用した周堤があった可能性も考えられる。

<床面・掘り方・貼り床>床面はカマド周辺ほど硬化している。カマドから離れた住居南西床面直上に不整形の焼土の広がりがある。掘り方は全体的に標高差は認められない。貼り床は10~15層で、褐色土と暗褐色土が互層をなしている。旧期(2号カマド期)の床面は11層上面である。

<カマド>カマドは2基検出した。新カマドは北壁のほぼ中央に作られた1号カマドである。カマドの主軸方向はN-24°-Wである。袖は芯材に自然礫を用い、シルトで構成される。芯材自然礫のうち①②③は1個体の礫で、分解して据えられている。また、東袖の内側には土師器甕破片が貼り付けてあり、カマドを構成していた可能性がある。燃烧部には土師器甕底部が逆位で出土しており、支脚と判断される。煙道入り口は一段高くなっており、煙道の長さ1.6m直径30cmで、直径36cm深さ43cmの煙出しに向けて下降する削り貫き式を呈する。煙道天井部は崩落している。旧カマドは東壁北寄りに作られた2号カマドである。カマド煙道による主軸方向はN-71°-Eである。燃烧部は残存していない。また、被熱面は1号カマドに付属するPit 2によって壊されている。煙道は長さ1.5m直径27cmで、直径33cm深さ40cmの煙出しに向けてやや下降する削り貫き式である。

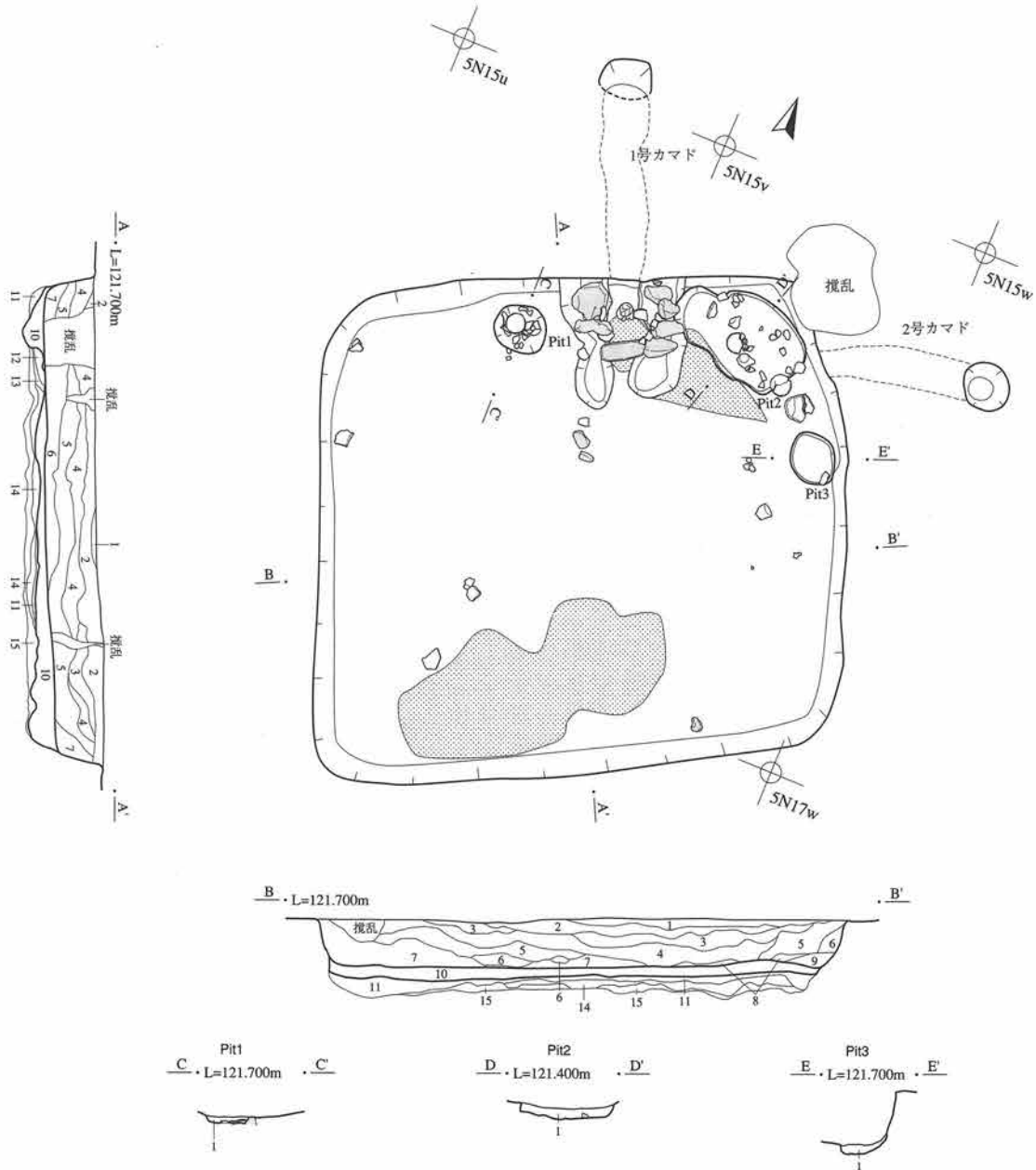
<柱穴・付属施設>カマド東脇に直径96cm深さ8cmの貯蔵穴(pit 2)が検出された。底面から土師器坏等の遺物が出土している。土師器坏が逆位で出土しており、また、pit 2 検出面からも土師器坏(取り上げ番号No.2・3)が正位で出土している。これらの遺物は出土標高が異なる。カマドが複数存在していればpit 2 床面出土資料が旧カマドに伴い、検出面出土資料を新カマドに伴う可能性もある。また、西脇にも直径30cm深さ5cmのピット(pit 1)を検出した。こちらからも土器が出土している。

(八木)

<遺物>(第195~197図、写真図版132、137、138)

カマド周辺から完形の土師器坏が多数出土している。貼り床から土師器甕の破片が多く出土してい

2 竪穴住居跡



住居

- | | | | | | |
|----|---------|-----------|-----|--------|--|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまり中 | 褐色土粒2mm~3mmを5%含む |
| 2 | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまりやや密 | |
| 3 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性弱 | しまりやや密 | 褐色土粒1cmを1%含む |
| 4 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 粘性弱 | しまり密 | 褐色土ブロックが30%混入しマーブル状をなす |
| 5 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまりやや疎 | 褐色土ブロック30%、10YR2/1黒色シルトがブロック状に30%含み斑状をなす |
| 6 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色シルト | 粘性強 | しまり密 | 10YR4/4褐色土ブロック50%含み斑状をなす |
| 7 | 10YR2/1 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまり疎 | 褐色土土粒5mm以下を1%含む |
| 8 | 10YR2/1 | 黒色シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 均質 |
| 9 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまりやや密 | |
| 10 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性弱 | しまり中 | |
| 11 | 10YR2/1 | 黒色シルト | 粘性弱 | しまり密 | |
| 12 | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性弱 | しまり密 | |
| 13 | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまり密 | |
| 14 | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性弱 | しまり密 | 10YR2/3黒褐色シルトが混入し斑状となる |
| 15 | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性弱 | しまり密 | |

Pit1

- | | | | | | |
|---|---------|--------|-----|------|-----|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまり中 | 土器多 |
|---|---------|--------|-----|------|-----|

Pit2

- | | | | | | |
|---|---------|--------|-----|------|---------------------|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性強 | しまり中 | 褐色粒全体的に5% 焼土、炭上面に混入 |
|---|---------|--------|-----|------|---------------------|

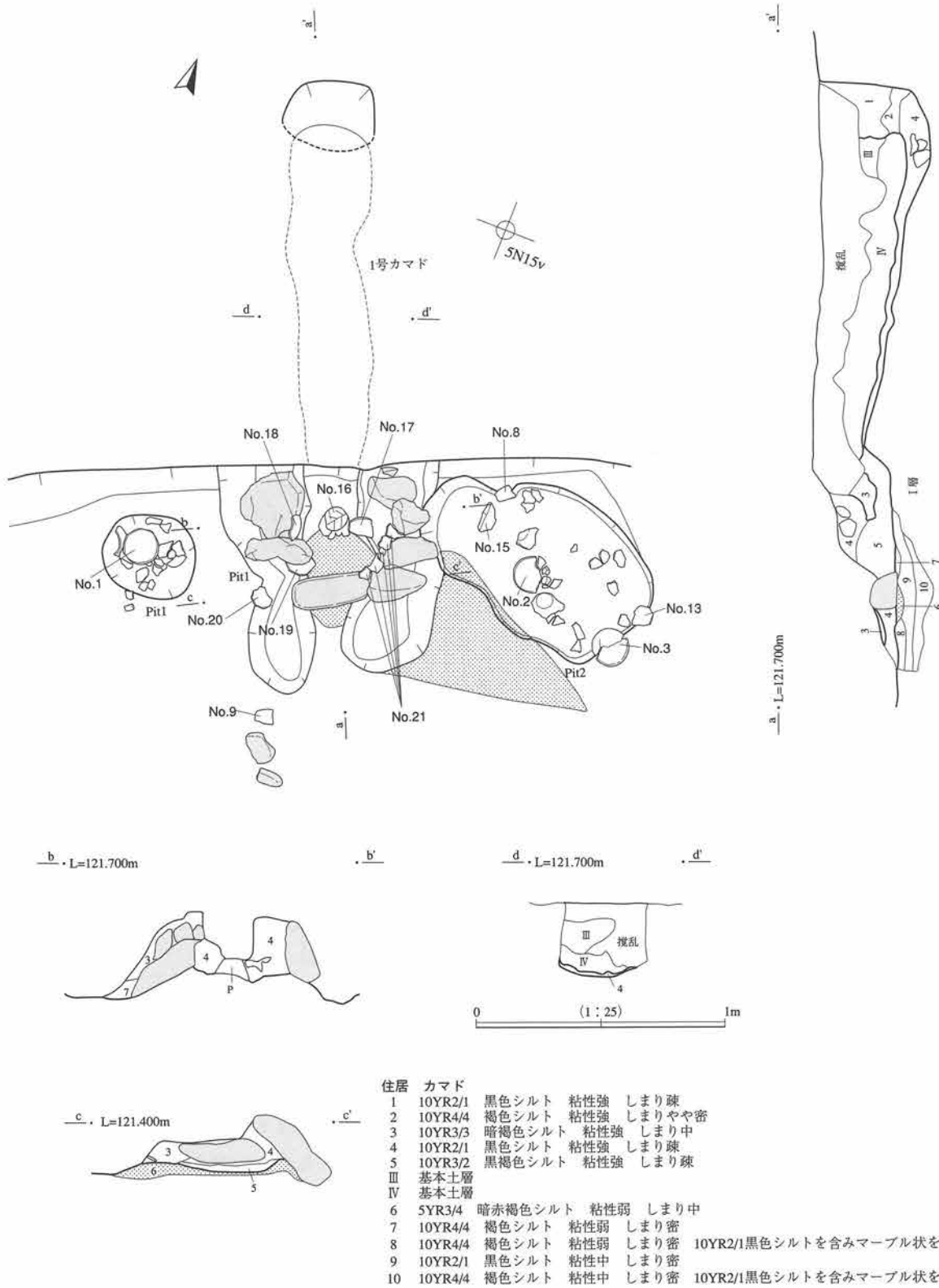
Pit3

- | | | | | | |
|---|---------|--------|-----|------|-------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 粘性弱 | しまり密 | 褐色粒全体に5% 焼土、炭少量混入 |
|---|---------|--------|-----|------|-------------------|

0 (1:50) 2m

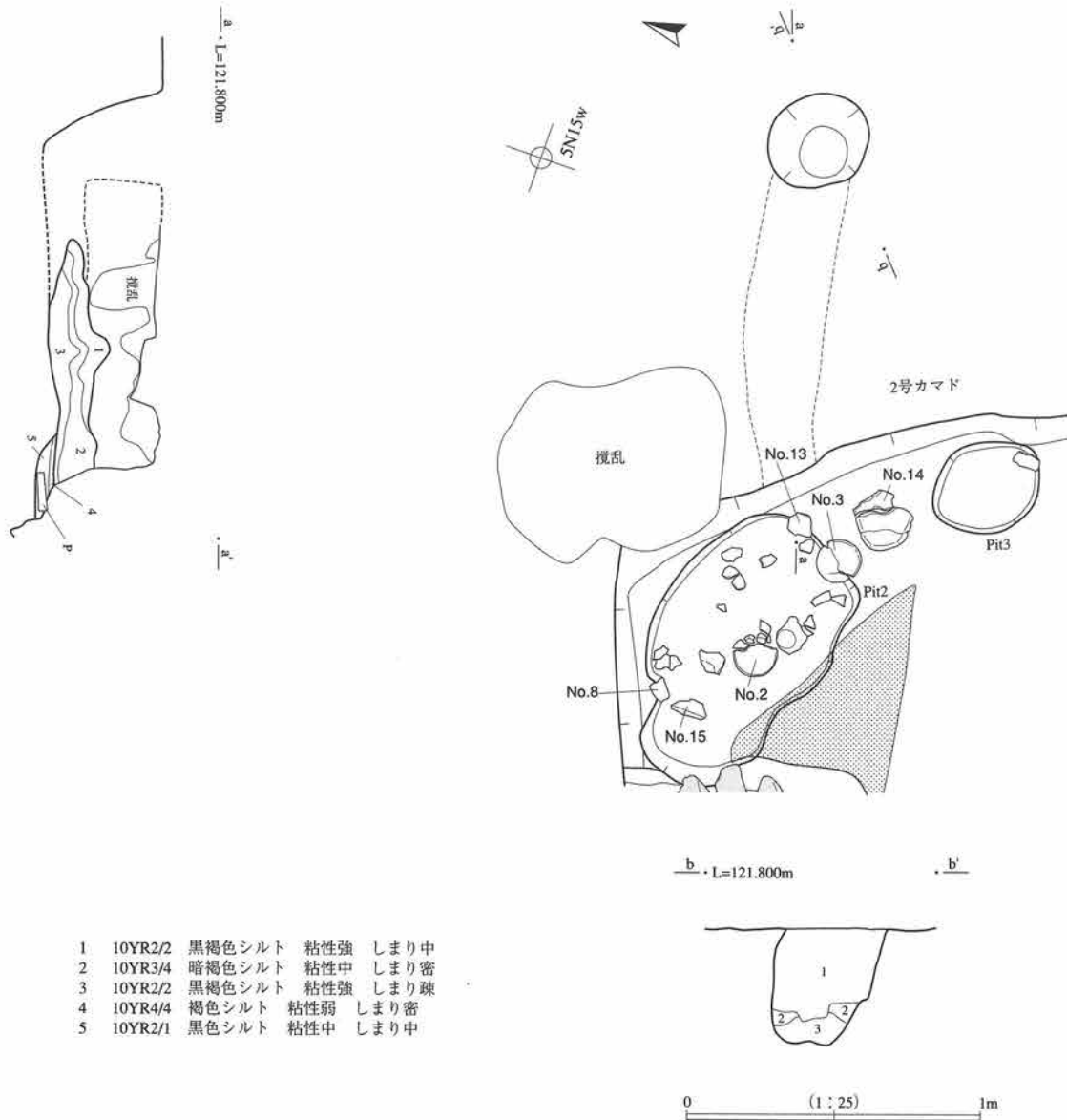
RA098	径 (cm)	深さ (cm)
Pit1	48×45	6
Pit2	96×60	8
Pit3	40×34	12

第94図 RA098竪穴住居跡 (1) (36号住)



第95図 RA098竪穴住居跡(2) (36号住)

2 竪穴住居跡



第96図 RA098竪穴住居跡 (3) (36号住)

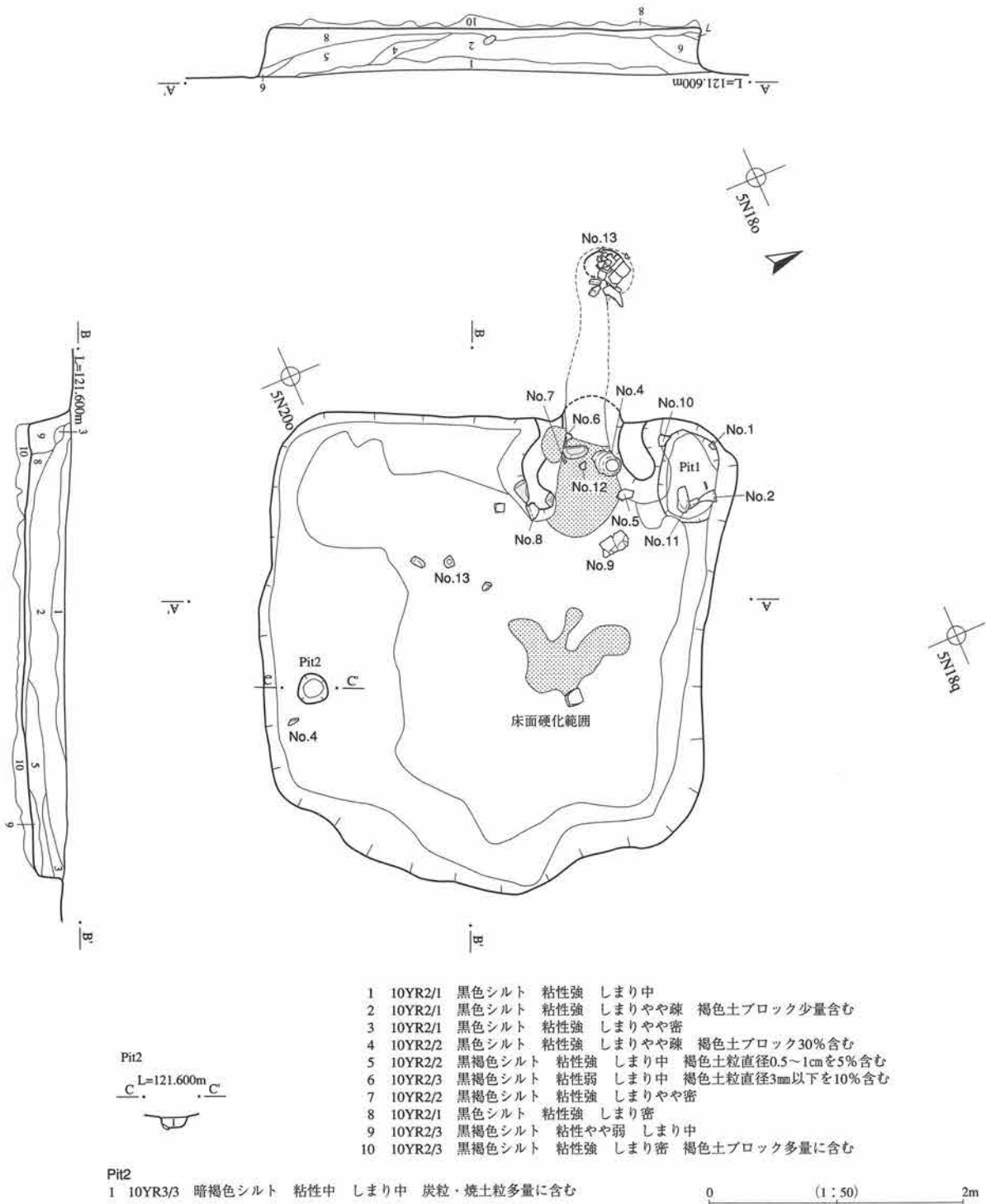
る。土器の総量は5,939gで、内黒、非内黒の土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器甕があり、20点を掲載した。

[土器] 517は2号カマド煙道入り口、Pit 2、Q1の貼り床から出土した破片が接合したものである。423はRA092とRA093、本住居跡出土の破片が接合したものである。523は本住居跡とRA101出土の破片が接合したものである。形や法量からは甕とした方が良いと思われるが、成形や調整から壺と判断した。

[石器・石製品] 526は棒状礫を利用した磨石で、作業部位は表裏2面である。表面の作業面は強い湾曲を持つ。図化したもの以外では剥片が3点、砥石が2点出土している。出土した剥片3点のうち2点は黒曜石製である。

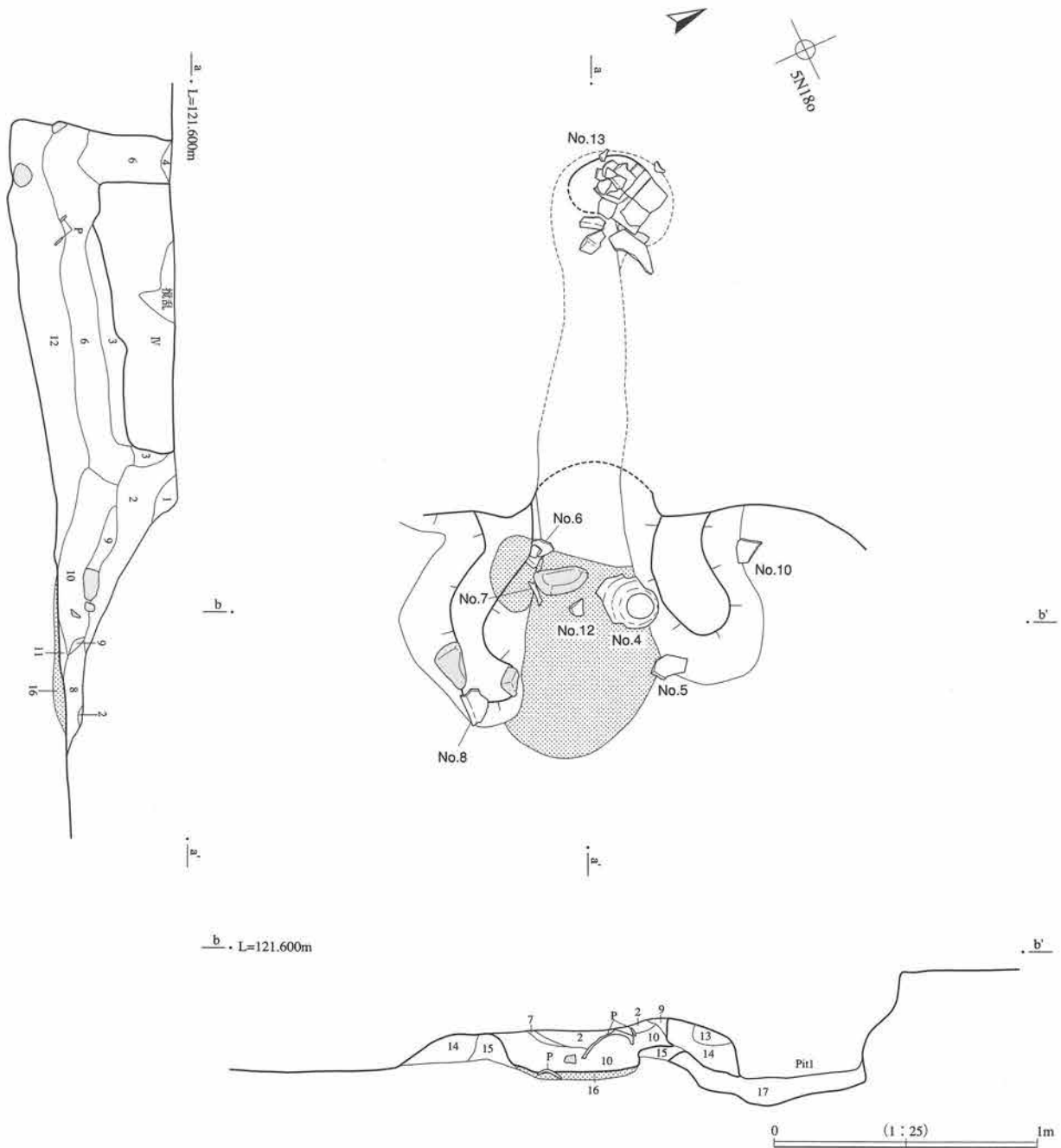
[鉄器] 529は両端を欠損している刀子である。錆びのため二片がくっついている。両関のもので、刀身の平面形は長三角形を呈すると考えられる。

<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後半に属すると考えられる。



RA099	Pit1	Pit2
径(cm)	72×46	25×24
深さ(cm)	17	10

第97図 RA099竪穴住居跡(1)(28号住)



カマド

1	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	
2	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	褐色土ブロック10%含む
3	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱	しまり疎	
4	10YR3/1	黒褐色シルト	粘性やや強	しまりやや密	
5	10YR4/4	褐色シルト	粘性やや強	しまり密	
6	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱	しまり疎	
7	5YR3/2	暗赤褐色シルト	粘性強	しまり中	
8	10YR2/2	暗褐色シルト	粘性強	しまり密	
9	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性弱	しまり疎	
10	10YR3/6	暗赤褐色シルト	粘性強	しまり中	
11	5YR3/2	暗赤褐色シルト	粘性弱	しまり疎	
12	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり疎	
13	10YR4/4	褐色シルト	粘性強	しまり密	
14	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性強	しまり中	
15	10YR4/4	褐色シルト	粘性弱	しまり密	
16	5YR2/4	極暗赤褐色シルト	粘性中	しまり中	
17	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	

第98図 RA099竪穴住居跡(2) (28号住)

RA099 竪穴住居跡 (28号住) (第97、98図、写真図版64、65)

<位置>調査区やや南寄り中央の5 N19 o グリッド付近に位置する。

<重複関係>重複関係は認められない。

<検出面>表土直下IV層上面で検出した。

<規模・平面形状・方向>3.34×3.52mの方形を呈する。住居東壁中央の張り出しは、壁際の堆積層が褐色土であることと床面に全く硬化が認められないことから住居廃絶後の壁崩落によるものと判断した。壁高は40cmである。カマド方位による主軸方向はN-65°-Wを示す。

<埋土>埋土は9層に分層され、黒色土層と褐色土ブロックを多量に含む層が自然堆積層の層相を示す。

<床面・掘り方・貼り床>床面はカマド周辺を中心に広く認められるが、Pit 2 付近は硬化していない。カマド手前の貼床上面に焼土が散らばる。

<カマド>カマドは西壁のやや北寄りで1基検出した。カマドの主軸方向はN-65°-Wである。袖はシルトで構成される。カマド天井部は北側に崩落しており、Pit 1 を部分的に覆っている。支脚はカマド燃焼部中央にNo.4 土師器甕胴部下半部が逆位で出土している。煙道は長さ3.2m直径25cmで、深さ120cm直径32cmの煙出しに向けて降下する刳り貫き式である。煙出しからは遺物がまとまって出土している。これらの土器は12層上面から出土しており、住居廃絶後時間を置いて廃棄されたものと考えられる。遺物は3個体の土器が中心に礫3個を挟んで横位で出土している。礫3個のうち1個は砥石である。

<柱穴・付属施設>カマド北脇にPit 1 が検出され、貯蔵穴の可能性がある。Pit 2 は柱穴の可能性があるが、1個のみの検出であるため、柱を構成するかは不明である。(八木)

<遺物> (第197~199図、写真図版138、139)

カマド周辺および煙出しからまとまって出土している。内黒土師器坏、高台付坏、須恵器坏、土師器甕がある。計4,235gの土器が出土し、12点を掲載した。

[土器] 533は内外面を黒色処理している。535、536はカマドの袖に使用されていたものである。

[石器・石製品] 543・544は安山岩製の荒砥である。543は表面を作業面とし、4面認められる。544は表面の一部を作業面としている。2点とも530の中から出土している。図化したもの以外では埋土から剥片が1点、磨石が1点出土している。

<時期>出土遺物から9世紀後葉~10世紀初頭に属する可能性がある。

RA100 竪穴住居跡 (26号住) (第99図、写真図版66)

<位置>調査区中央よりやや南よりの5 N21 k グリッドに位置する。

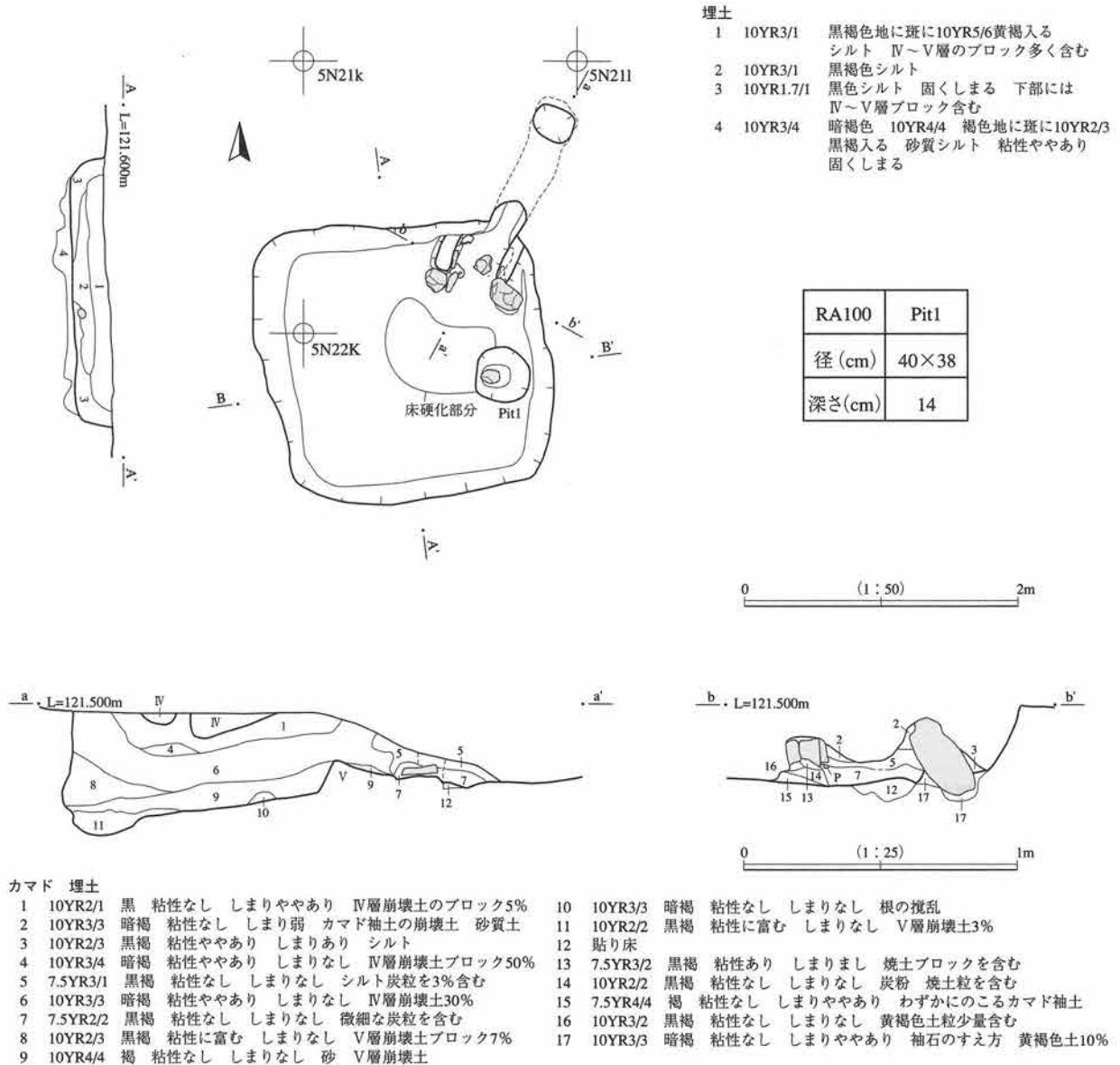
<重複関係>ないと思われる。

<検出面>Ⅲ層~Ⅳ層正面。

<規模・平面形状・方向>一辺の長さが2.05×2.05mの正方形を呈する。主軸方向はN-27°-Eである。

<埋土>3層に分かれ、カマドのあるQ 4 の方向から3層が壁際を埋めるような形で入り込み、その後中央の凹みを2層が埋め、その上全体を埋めるような形で1層が入る。Q 4 は、ほぼ3層単独である。2、3層は、Ⅱ層再堆積の黒土、1層は、Ⅳ層ブロックを多く含む層(埋め戻し?)で、分層前は、1層を上層、2、3層を下層と呼んでいた。Q 3 の土層断面は、上~下までほとんど真っ黒で分

2 竪穴住居跡



第99図 RA100竪穴住居跡 (26号住)

層しにくかった。

<壁>IV層で、垂直に立ち上がる場所が多い。壁高は27cmである。

<床面・掘り方・貼り床>V層にIV層を貼っているのか、床を削るとV層が出てくる。カマドの前だけ、非常に硬く締まる (図に範囲あり)。

<カマド>周囲に柱穴状土坑が見られ、煙出が確認しにくかった。住居北東角にある。残り良く、袖先端に礫が見られ、黒土の混じるIV層土で固めている。

<柱穴・付属施設>カマド南側に小土坑が検出された。すり鉢状の断面形で、覆土は、10YR3/1黒褐色土シルト、IV層ブロック、焼土粒を僅かに含む土である。柱穴かどうかは不明である。住居の周囲にも柱穴状土坑が見られるが、並びに規則性が認められず、本住居に関係するかどうか不明である。

(金子佐)

<遺物> (第199図、写真図版139)

400gの土器が出土し、4点を掲載した。土師器坏、土師器甕、須恵器甕がある。小片で図化に至ら

なかったが、埋土から須恵器坏の破片が出土している。

[土器] 547はカマド袖から出土した。548はRA102出土の破片と接合したものである。

[石製品] 埋土から砥石が1点出土しているが、礫破砕片であるため図化していない。

[鉄器] 550・551は鉄鐸である。鉄鐸は一枚の鉄板を丸めて作られており、550は貼り合わせ部分が観察される。上端部には穿孔が観察される。2点とも舌が伴っており、一端は蕨状に丸まっている。2点ともトレンチからの出土である。 (北村)

<時期>出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

RA101竪穴住居跡 (39号住) (第100、101図、写真図版67)

<位置>調査区中央部南寄りの5 N23 r グリッド付近に位置する。

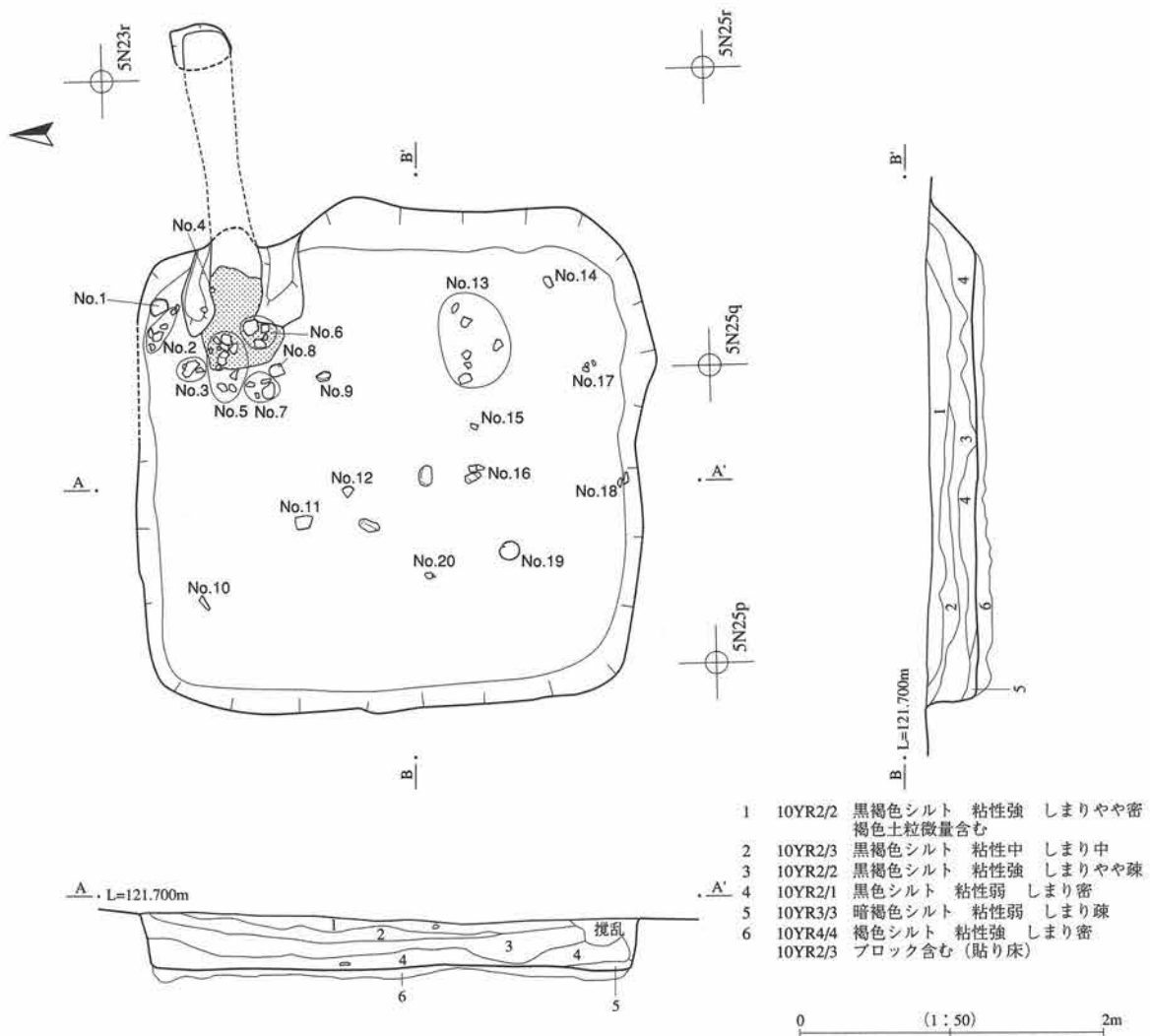
<重複関係>認められない。

<検出面>IV層上面で検出した。

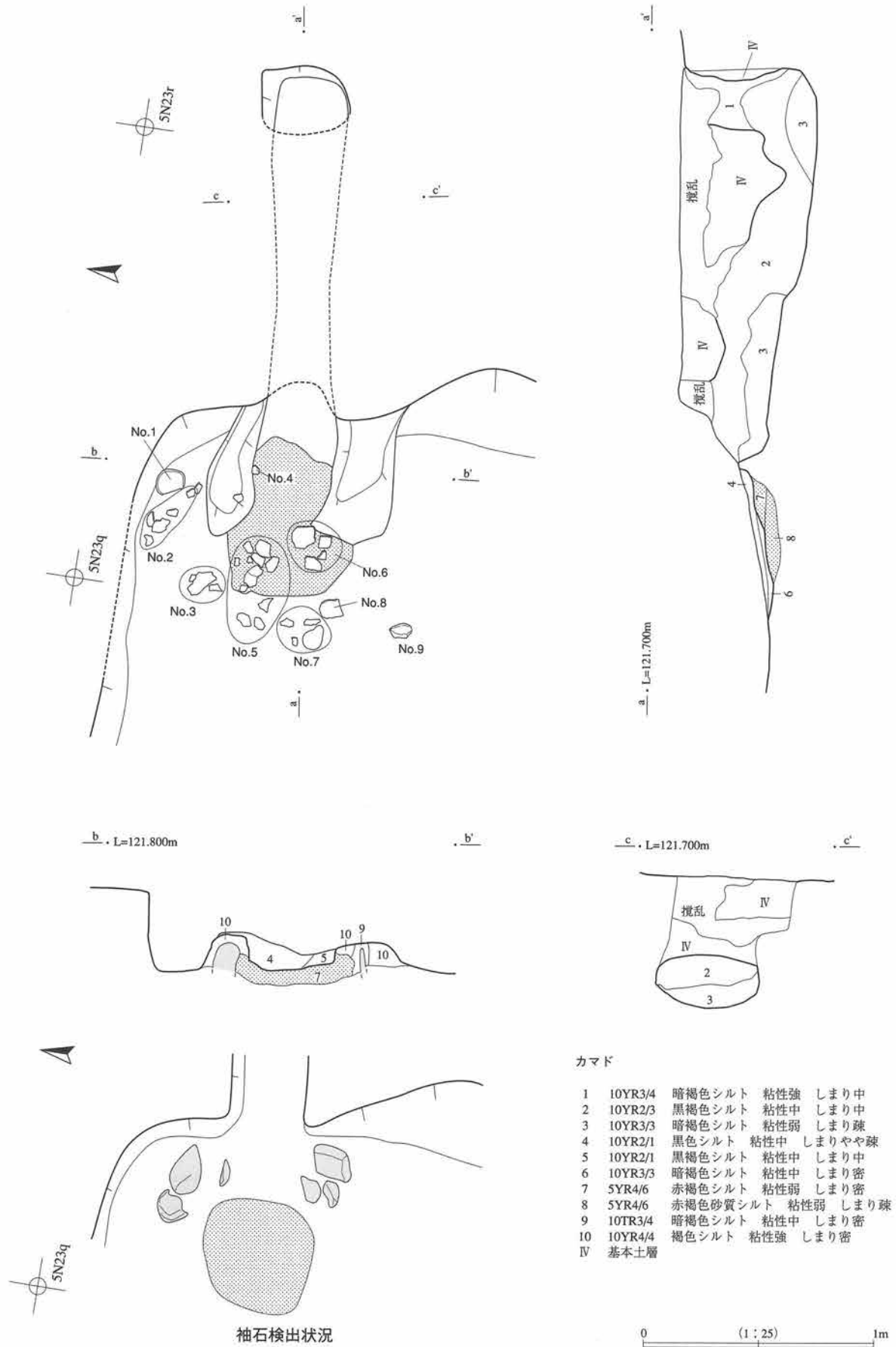
<規模・平面形状・方向>3.34×3.32mで方形を呈する。壁高は38cmを測る。カマドによる主軸方向はN-84°-Eである。

<埋土>自然のレンズ状堆積を示す。土層は5層に分層される。

<床面・掘り方・貼り床>床面はカマド周辺を中心に硬化している。掘り方は全体的に平均的な深さ



第100図 RA101竪穴住居跡 (1) (39号住)



第101図 RA101竪穴住居跡 (2) (39号住)

で浅く、貼り床は単層である。

＜カマド＞カマドは東壁の北寄りに1基作られる。カマドの主軸方向はN-84°-Eである。煙道は長さ1.4m直径25cmで、直径35cm深さ60cmの煙出しに向けて下降する刳り貫き式である。袖は自然礫を芯材にし、褐色土シルトで構成される。南袖の長さは55cm、北袖の長さは60cmである。支脚は出土していない。

＜柱穴・付属施設＞柱穴等柱穴・付属施設は検出されなかった。 (八木)

＜遺物＞(第200、201図、写真図版138～140)

カマド西に内面黒色処理坏が出土しているほか、南西端に土師器坏が出土している。また、燃焼部手前およびカマド北脇に遺物がまとまって出土している。内黒、非内黒の土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器壺がある。土器の総量は3,170gで、14点を掲載した。

[土器] 523は本住居跡とRA098出土の破片が接合したものである。形や法量からは甕とした方が良いと思われるが、成形や調整から壺と判断した。

[石器・石製品] 565は安山岩製の荒砥である。表面の一部を作業面としている。カマド袖からの出土である。図化したもの以外では埋土から剥片が4点出土している。

[鉄器] 566は鉄鐸である。上端に穿孔が観察される。舌が伴っており、一端は鍵状になっている。埋土からの出土である。

[その他] 上記以外に埋土下層から鉄滓(567)が1点出土している。

＜時期＞出土遺物から平安時代の9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

RA102竪穴住居跡(27号住)(第102、103図、写真図版68)

＜位置＞調査区南西部の6N5fグリッド付近に位置する。

＜重複関係＞ない。

＜検出面＞Ⅲ層である。住居跡西半は明確に検出できたが、東側は攪乱のため、はっきりしなかった。

＜規模・平面形状・方向＞一辺の長さが3.73×3.78mのゆがんだ方形である。特に東壁の南よりは張り出しのようなやや膨らんだ形状をしている。北壁の東よりと東壁の北よりの一部は攪乱によって破壊されている。主軸方向はE-22°-Nである。壁高は28cmである。

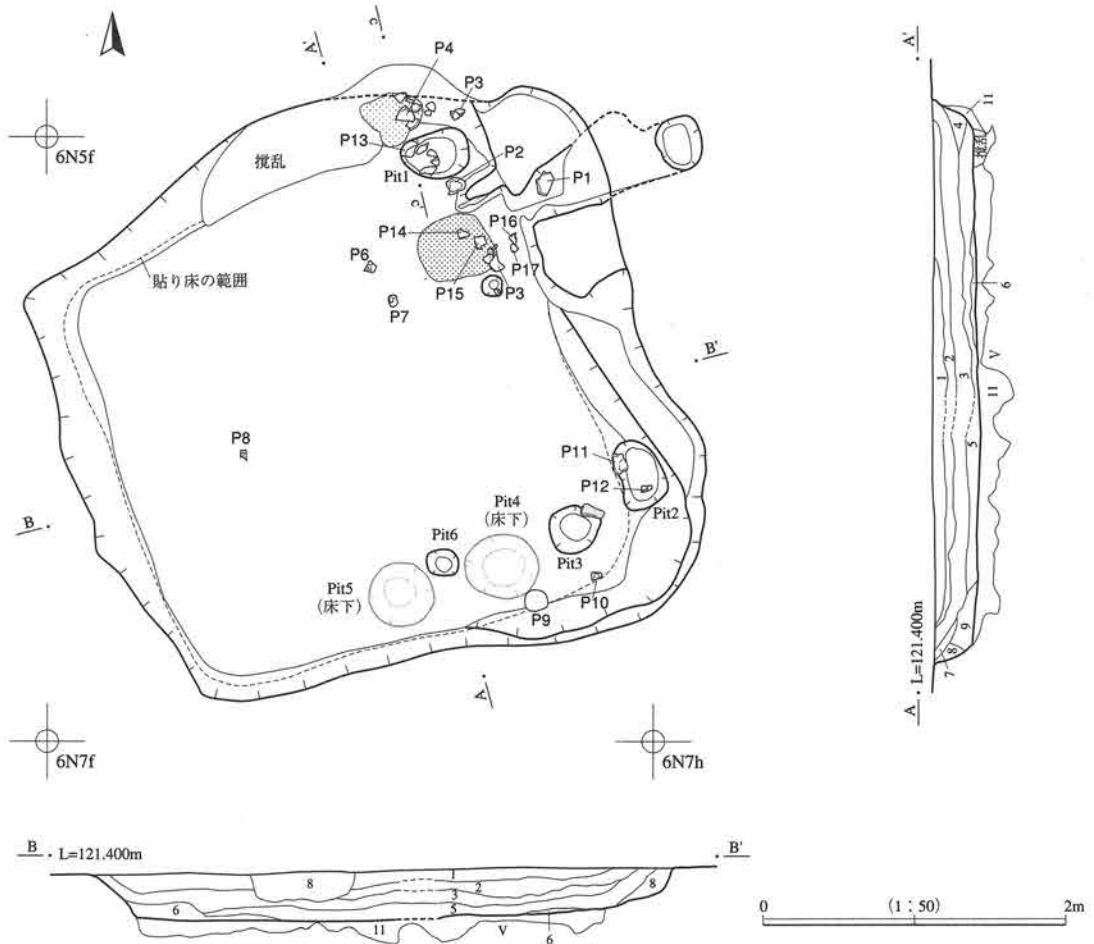
＜埋土＞9層に細分され、粘性のある黒色～黒褐色土が主体であるが、Ⅳ層起源の褐色土がブロック状に混入し、埋め戻しされている可能性が高い。また、埋土下層の5層は黄褐色土ブロックが参加している。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面は硬く締まっている。貼り床はⅣ層褐色土と黒褐色土の粘性の強い混合土である。東側の張り出し部分はⅤ層が露出し、貼り床は施されていない。保水性が強いためか、床面及び貼り床中にも褐鉄が見られる。壁は一部を除き直立気味に立ち上がる。壁高は28cmである。

＜カマド＞東壁の北よりに位置する。煙道の上面を攪乱によって破壊されている。天井と右袖は失われ、確認できたのは左袖と焚口である。残存する左袖は黒褐色土で構築され、その上に褐色の粘土を貼り付けている。袖の内側は焼けている。右袖のあった場所には芯材の据え方と見られる小ピットが確認された。焚口の焼土はよく発達し、厚さは5cmほどである。煙道は刳り貫き式である。

＜柱穴・付属施設＞カマド左脇に貯蔵穴と見られるPit 1が検出され、底面から坏570が出土している。南東隅付近にもPit 2、Pit 3が検出されたが、柱穴かどうか判然としない。貼り床をはがしている段階で、床下から貼り床に使用された土と異なる埋土のPit 4、Pit 5の2基の土坑が検出された。Pit 4の上面には1～2cmの厚さの褐鉄層が認められる。Pit 2～Pit 5の4基の埋土は類似しており、い

2 竪穴住居跡



埋土

- 1 7.5YR1.7/1 黒 粘性なし しまりややあり 西側においてブロック状に10YR5/6黄褐色土混入 15%
- 2 7.5YR2/2 黒褐 粘性ややあり しまりややあり 10YR2/3 黒褐色土粒部分的に入る 5~10%
- 3 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりあり 10YR3/4暗褐色粘土微量含む (西側ではブロック状に10%含む)
- 4 10YR1.7/1 黒 粘性あり しまりあり
- 5 7.5YR2/1 黒 主体 粘性ややあり しまりややあり 7.5YR4/4褐色土 (酸化鉄土) が散在 10%程度含まれる
- 6 10YR2/2 黒褐 粘性ややあり しまりややあり
- 7 10YR2/2 黒褐 粘性ややあり しまりあり 10YR4/4褐色土 ブロック状に10%程度含む
- 8 10YR4/4~3/4 褐~暗褐 ブロック状に入り混じる 粘性ややあり しまりあり 4/6褐色粘土15%程度混じる (壁の崩落土?)
- 9 10YR1.7/1 黒 粘性ややあり しまりあり
- 10 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりややあり
- 11 0.5~2大cmの10YR4/6褐と0.5~5cm大の10YR3/3の混合土 粘性あり (下位はV層褐色砂との混合で粘性はなし) 大変硬くしまる 褐鉄を多く含む
*1~5層 (4層を除く) 壁土 (地山層) のような粘土が粒状またはブロック状に入っている

c. L=121.400m



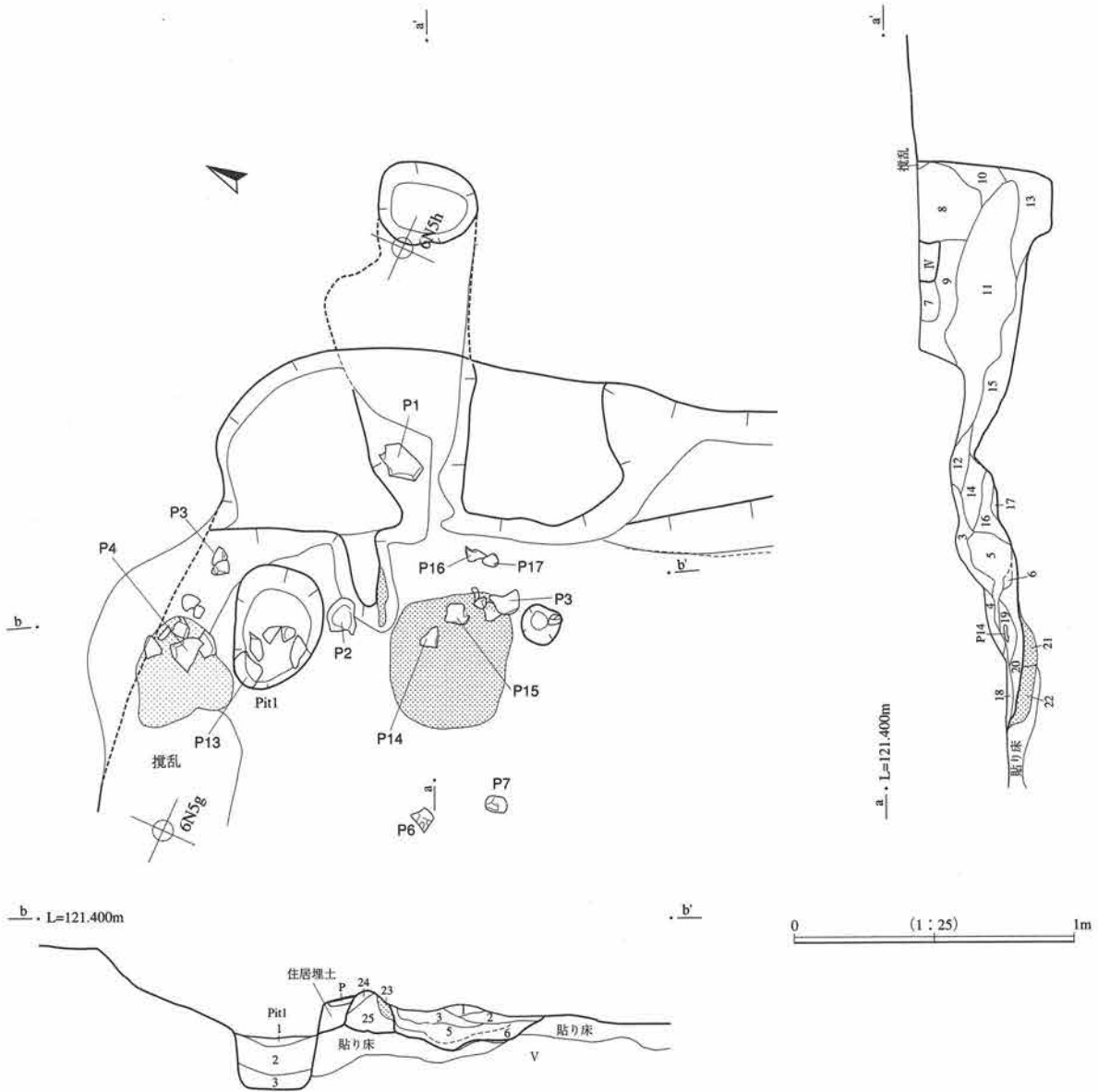
カマド脇焼土

- 1 7.5YR2/3 極暗褐 粘性、しまりなし 焼土及び焼土ブロック (0.5~2cm大)、炭粒を含む

0 (1:25) 1m

RA102	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4(床下)	Pit5(床下)	Pit6
径 (cm)	45×32	47×25	34×32	49×43	43×43	20×17
深さ (cm)	20	18	12	24	19	5

第102図 RA102竪穴住居跡 (1) (27号住)



カマド

- | | | | | | | |
|----|----------|---------------------|--------|---------|---------------------------------|-------------------------|
| 1 | 10YR3/4 | 暗褐 | 粘性あり | しまりややあり | 崩落した粘土粒、焼土を少量含む | カマド天井崩壊土 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | 炭を多く含む | |
| 3 | 7.5YR3/2 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | 焼土を全体に多く含む | |
| 4 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりなし | 炭を多く含む | |
| 5 | 7.5YR4/3 | 褐 | 粘性ややあり | しまりなし | 焼土を全体に多く含む | |
| 6 | 10YR3/2 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | 炭粉を多く含む | |
| 7 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性あり | しまりややあり | IV層起源の黄褐色土ブロック (2~4cm大) 15% | |
| 8 | 10YR2/1 | 黒 | 粘性あり | しまりなし | IV層起源の黄褐色土粒7% | |
| 9 | 10YR3/2 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | IV層起源の黄褐色土粒、ブロック (15cm大) 10% | |
| 10 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | IV層起源の黄褐色土ブロック (0.5~2cm大) 7% | |
| 11 | 10YR2/1 | 黒 | 粘性あり | しまりなし | 黄褐色土ブロック 焼土ブロック (1~5cm大) わずかに含む | |
| 12 | 10YR4/4 | 褐色土と10YR3/2黒褐色土の混合土 | | | | |
| 13 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性あり | しまりなし | IV層・V層起源の黄褐色土ブロックを5%含む | |
| 14 | 10YR4/6 | 褐 | 粘性なし | 砂質 | しまりなし | 黒褐色土粒を少量含む |
| 15 | 10YR2/3 | 黒褐 | 粘性なし | 砂質 | しまりあり | V層起源の砂に黒褐色土が全体に混入 |
| 16 | 10YR3/4 | 暗褐 | 粘性なし | 砂質 | しまりなし | 黒褐色土ブロック (0.5~1cm大) 15% |
| 17 | 10YR3/4 | 暗褐 | 粘性なし | 砂 | 黒褐色土粒2% | 全体に若干酸化 |
| 18 | 7.5YR3/2 | 黒褐 | 粘性なし | しまりなし | 全体に焼土を含む | 炭粒を含む |
| 19 | 5YR4/6 | 赤褐 | 粘性あり | しまりなし | | カマド天井の焼土 |
| 20 | 5YR2/4 | 極暗赤褐 | 粘性なし | しまりなし | 焼土粒、炭粒、炭粉を多く含む | |
| 21 | 5YR3/3 | 暗赤褐 | 粘性なし | しまりあり | 焼土 (V層が焼けたもの) | |
| 22 | 5YR3/4 | 暗赤褐 | 粘性ややあり | しまりあり | 焼土 (IV~V層が焼けたもの) | |
| 23 | 5YR3/3 | 暗赤褐 | 粘性あり | しまりあり | 焼土 | |
| 24 | 7.5YR4/3 | 褐 | 粘性ややあり | しまりあり | 貼り付けた粘土 | |
| 25 | 7.5YR2/2 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりあり | 黄褐色土粒0.2~1.0cm大 | 3~5%含む |

Pit1

- | | | | | | |
|---|---------|----|--------|---------|-----------------------------|
| 1 | 10YR2/1 | 黒 | 粘性ややあり | しまりややあり | 黄褐色土ブロック (10YR5/6) ブロック状に入る |
| 2 | 10YR2/1 | 黒 | 粘性あり | しまりややあり | |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性ややあり | しまりややあり | |

第103図 RA102竪穴住居跡 (2) (27号住)

れも暗褐色の砂に黄褐色土粒、黒褐色土粒が混入する。

Pit 1 の北側付近の壁のみ緩やかに立ち上がり、壁の直上には5 cmほどの厚さの移地性の焼土が堆積している。棚状の施設の可能性もある。この焼土上及び付近からは土器片が多く出土しているが、あまり接合せず、図化に至らなかった。(金子佐)

<遺物> (第201、202図、写真図版140、141)

内黒、非内黒土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器甕がある。2,138gの土器が出土し、8点を掲載した。

[石製品] 576・577は安山岩製の荒砥である。576は表面の一部を、577は上下両端を除く五面を作業面としており、作業面は使用頻度の高さのため凹面をなしている。2点とも埋土からの出土である。

<時期>出土遺物から9世紀後半に属すると考えられる。

RA103竪穴住居跡 (40号住) (第104、105図、写真図版69)

<位置>第10次調査区南側の6 N 4 t グリッド付近に位置する。

<重複関係>なし。

<検出面>検出面はⅢ層上面で、黒褐色シルトの広がりとして確認した。

<規模・平面形状・方向>平面形は東壁中央がやや張り出す方形で、規模は4.03×4.03mである。壁高は最大44cm残存している。主軸方向はN-63°-Eである。

<埋土>埋土は黒褐色シルトを主体とし、色調や地山の混入具合等により9層に分層した。全体的にレンズ状もしくは三角形の堆積状況を呈しており、自然堆積と捉えられる。

<床面・掘り方・貼り床>褐色シルトの掘り方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。特に、床面の硬化が顕著な部分は確認されない。

<カマド>東壁の北寄りに設置され、煙道方位は主軸方向より6度東に振れる。袖は地山黄褐色シルト層の削り出しで、礫等の芯材の使用は認められない。燃焼部底面には46×42cmの焼成面が形成される。燃焼部には方形の垂角礫と土師器坏を倒位に設置して支脚としている。煙道の全長は75cmで緩やかに下降しながら先端の44×43cm、深さ51cmの煙出し孔に向かって削り貫かれている。

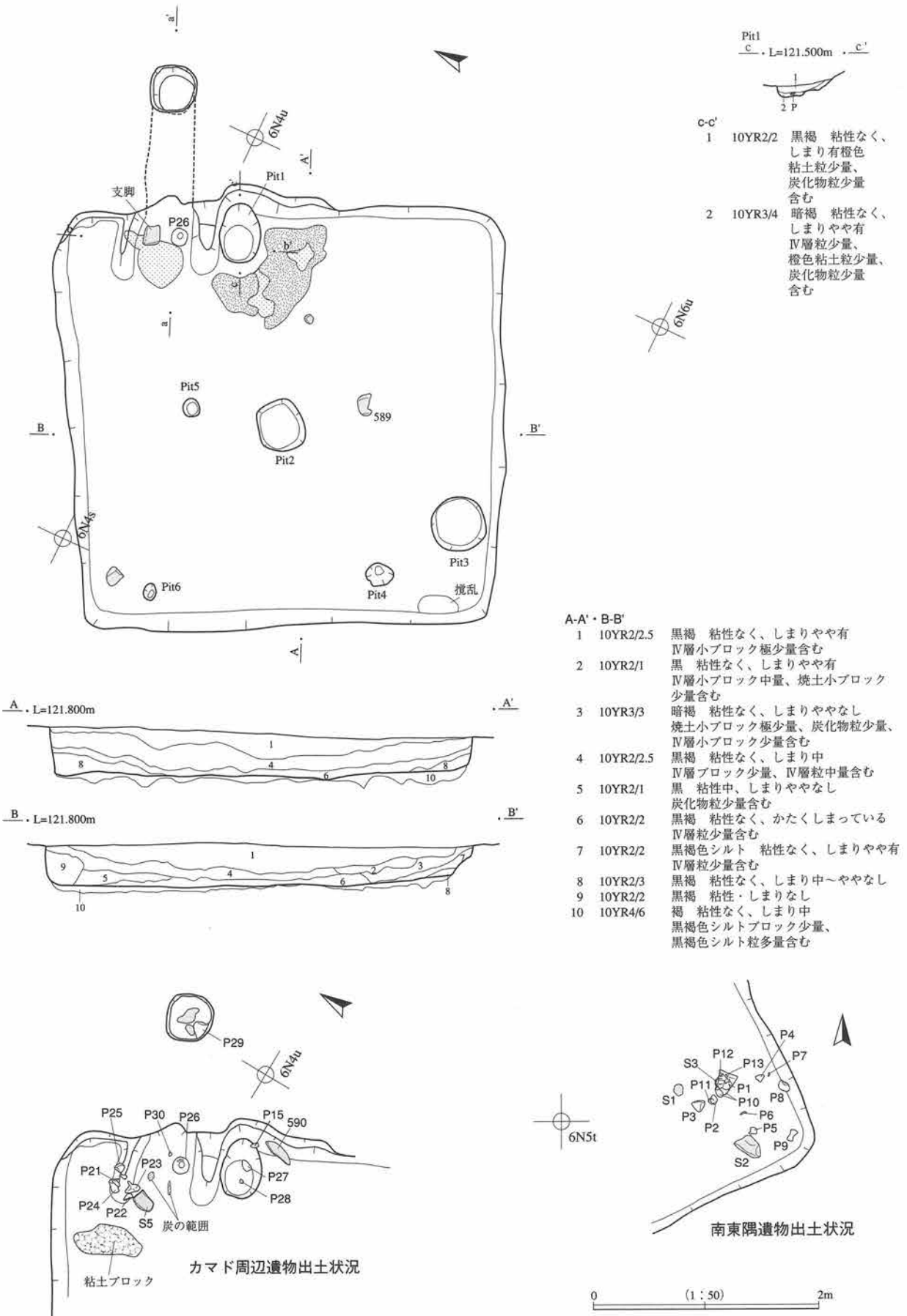
<柱穴・付属施設>カマドの南東脇にPit 1、ほぼ中央にPit 2、南隅にPit 3を検出した。Pit 1の規模は53×36cmで、深さは最大でも16cmと浅い。形状は皿状を呈するが、カマドの脇に構築されていることから判断すると貯蔵穴と考えられる。埋土の上層は黒褐色、下層は暗褐色シルト層で、炭化物粒や橙色粘土粒が含まれている。わずかながら土器も出土している。Pit 2・3は浅い円形の土坑で、2基とも黒褐色シルトで埋没している。南西壁際と中央北西寄りに3基の柱穴を検出した。3基とも円形もしくは楕円形基調で、黒褐色シルトで埋没している。(北村)

<遺物> (第202、203図、写真図版141)

主にカマドの北袖とQ 2の6層から土器がまとまって出土している。3,267gの土器が出土し、10点を掲載した。内黒、非内黒土師器坏、高台付坏、須恵器坏、土師器甕がある。掲載したもの以外では、カマド6層中から土師器甕の口縁部から体部片が出土した。カマド北袖及び埋土から須恵器甕小片が出土している。

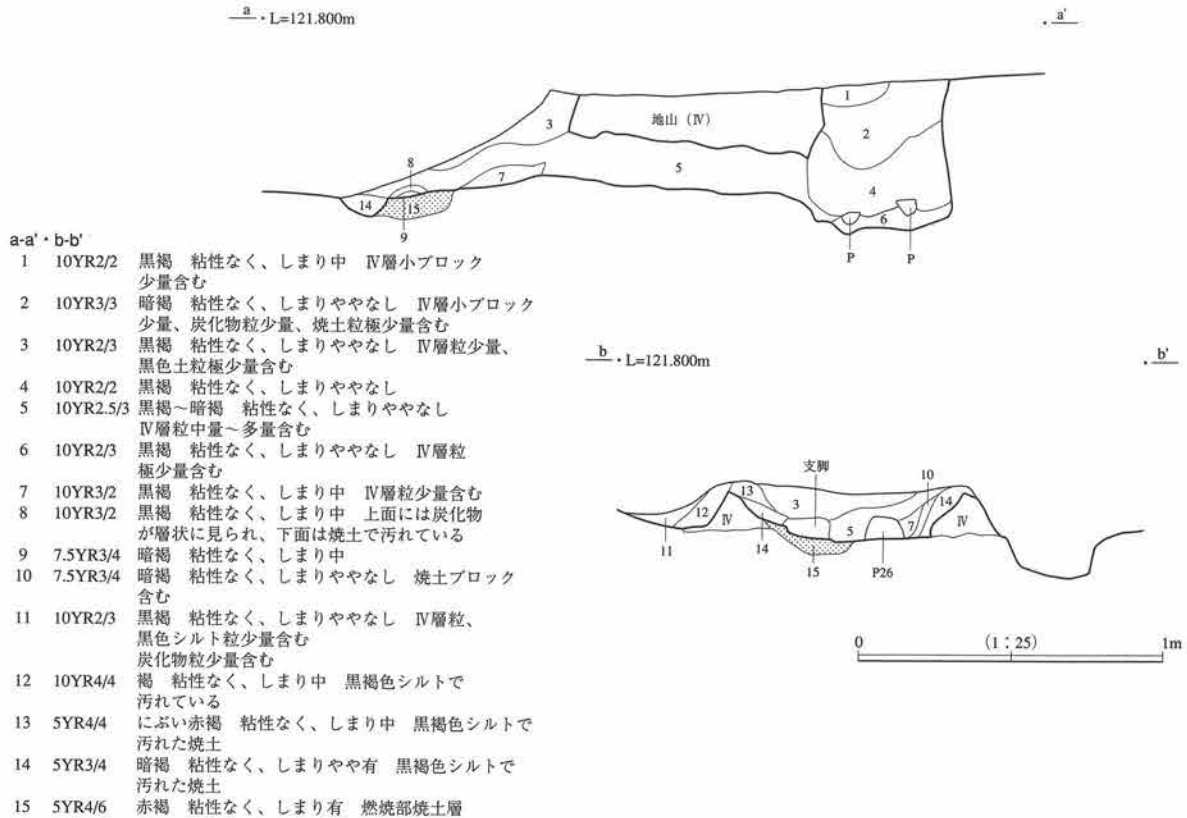
石器・石製品では589が床面直上から、590が埋土から出土している。また、カマドの南西側の6層上面で灰白色の粘土ブロックが出土した。

[土器] Q 2から出土した土器は581・582・587に復元され、カマド北袖から出土した土器はPit 1の埋土下位から出土したものと接合して579に復元された。585は土師器甕で刻線が認められる。小片であ



第104図 RA103 竪穴住居跡 (1) (40号住)

2 竪穴住居跡



第105図 RA103竪穴住居跡 (2) (40号住)

るが、外面に上下方向の刻線が認められる。

[石器・石製品] 589・590は安山岩製の荒砥である。589は表面を、590は表裏2面を作業面としている。図化したもの以外では埋土からRFが1点出土している。

[その他] 上記以外に床面直上から鉄滓が1点、カマド8層から炭化物が出土している。この炭化物の同定を行ったところ、樹種はナラであった。

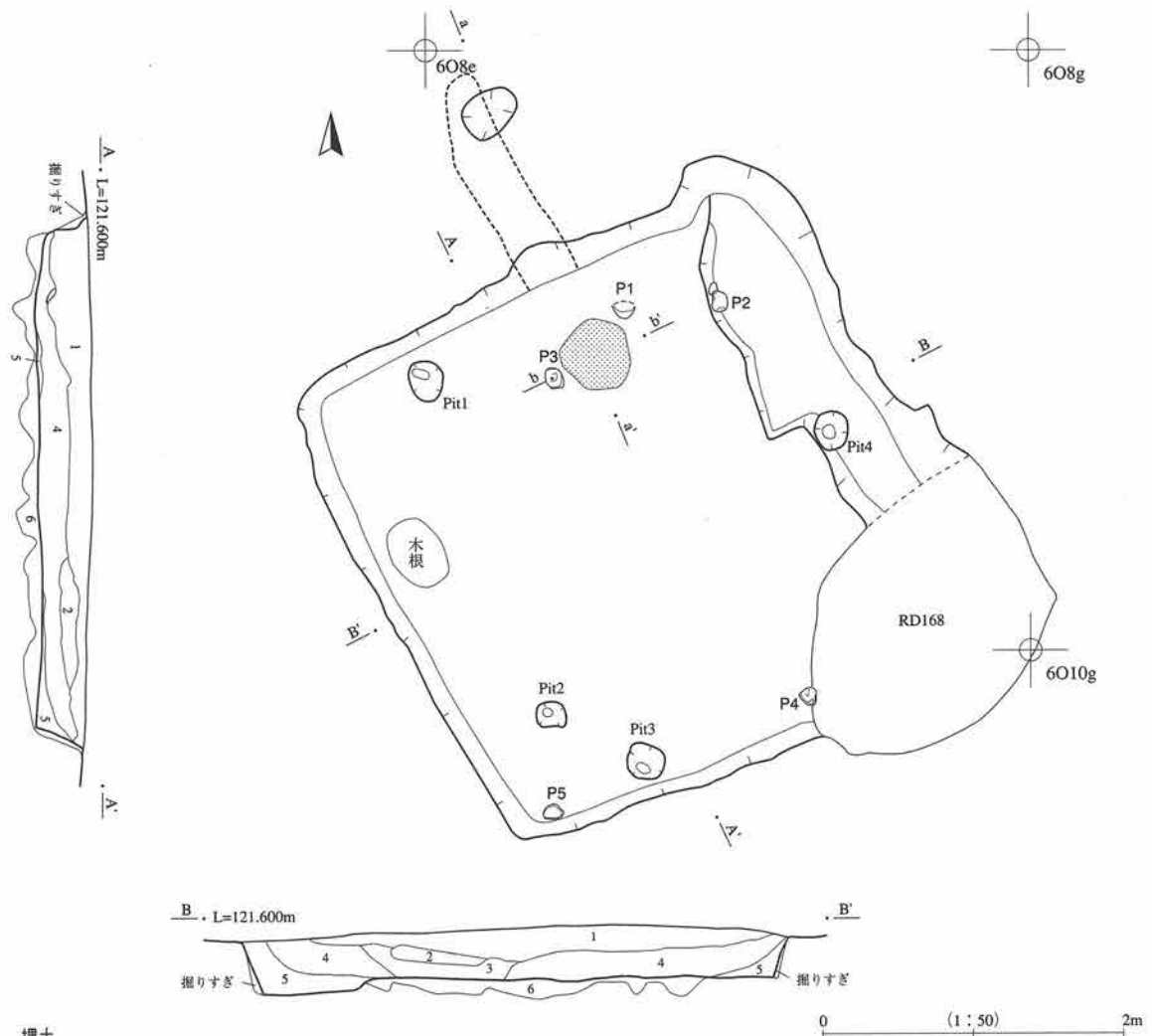
<時期>出土遺物から平安時代の9世紀後半に属すると考えられる。

RA104竪穴住居跡 (22号住) (第106図、写真図版70)

<位置>調査区南端に近い608eグリッドに位置する。当初は、調査区境にあった。

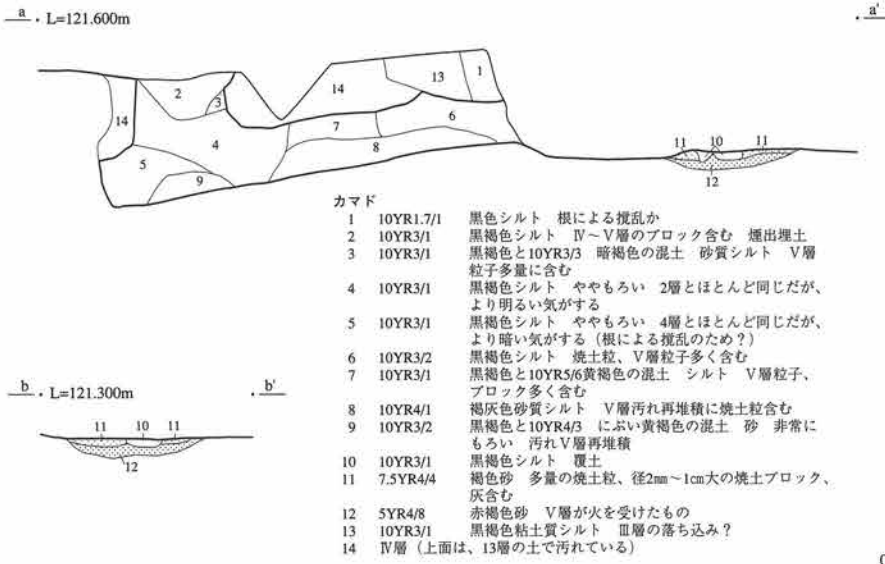
<重複関係>RD168と重複し、土坑の方が新しい。それほど明瞭ではないが、住居の埋土上層に含まれる黄褐色土のブロックが土坑との境界で途切れるので間違いはないと思う。Ⅲ層の比較的高い面で住居を検出し、後述のように木根があったため、検出時には重複に気づかず(南東隅が膨らんでいたため重複があるかとは思っていたが)、気づいたのはベルトを残して床、壁を出していた時である。リング畑時の攪乱や周囲に柱穴状土坑が見られ、土坑埋土中にリングの木根が残っていた。

<検出面>Ⅲ層。



埋土

- 1 10YR2/1 黒色シルト V層のブロック混じる
- 2 10YR4/4 褐色地に黒褐色 (10YR3/1) 混じる 砂質シルト IV~V層のブロック大量に含む 焼土粒含む 貼り床の疑いを持った部分
- 3 10YR3/1 黒褐色地に褐色 (10YR4/4) 混じる 砂質シルト IV~V層の汚れ再堆積
- 4 10YR1.7/1 黒色シルト 基本的に1層より黒いが、一部層のブロック含み、1層と区別しがたい部分あり
- 5 10YR2/1 黒色と10YR5/6・黄褐色の混土 粘土質シルト 粘性あり IV~V層の汚れ再堆積 (3層より暗い)
- 6 10YR5/6 黄褐色地に霜降り状に黒褐色 (10YR3/2) 混じる 砂にシルト混じり 汚れV層の再堆積で、掘り方埋土



カマド

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト 根による攪乱か
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト IV~V層のブロック含む 煙出埋土
- 3 10YR3/1 黒褐色と10YR3/3 暗褐色の混土 砂質シルト V層粒子多量に含む
- 4 10YR3/1 黒褐色シルト ややもろい 2層とほとんど同じだが、より明るい気がする
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト ややもろい 4層とほとんど同じだが、より暗い気がする (根による攪乱のため?)
- 6 10YR3/2 黒褐色シルト 焼土粒、V層粒子多く含む
- 7 10YR3/1 黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土 シルト V層粒子、ブロック多く含む
- 8 10YR4/1 褐灰色砂質シルト V層汚れ再堆積に焼土粒含む
- 9 10YR3/2 黒褐色と10YR4/3 濃い黄褐色の混土 砂 非常にもろい 汚れV層再堆積
- 10 10YR3/1 黒褐色シルト 覆土
- 11 7.5YR4/4 褐色砂 多量の焼土粒、径2mm~1cm大の焼土ブロック、灰含む
- 12 5YR4/8 赤褐色砂 V層が火を受けたもの
- 13 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト III層の落ち込み?
- 14 IV層 (上面は、13層の土で汚れている)

RA104	径 (cm)	深さ (cm)
Pit1	28×21	11
Pit2	21×15	25
Pit3	35×22	25
Pit4	26×23	20

第106図 RA104竪穴住居跡 (22号住)

<規模・平面形状・方向>3.6×3.6mの隅丸方形。方向はN-26°-Wである。壁高は33cmである。

<埋土>5層に分かれる。断面実測時の分層前にも、上層（黄色っぽい土）、下層（真っ黒い土）、最下層（IV層の汚れ再堆積層）に分け、上層はさらに二つに分け、上上層は上下層の上の黒土、上下層は黄褐色土である。概ね、上上層は1層、上下層は2～3層、下層は4層、最下層は5層に相当する。Q2の西半～南北ベルト中にかけて上下層が平らに広がり（焼土粒も散る）、当初貼床が存在するのかもしれない。

<壁・床面・掘り方・貼り床>壁はIV層で、垂直に近い。床はV層で黄褐色土を貼っている（掘り方を持つ）。硬く締まらない。掘り方は、細かい凹凸を持つ一般的なものだが、東壁に沿って溝状に下がる部分がある。

<カマド>煙道は掘り込み式だが、覆土中に焼土粒が入っておらず、検出面が高かったこともあって、検出時には煙道は確認できていなかった。袖の残りは悪く、焚き口のみである。煙出は、下部がかなりオーバーハングする。

<柱穴・付属施設>はっきりした柱穴は確認できなかったが、床面で3つ、東壁付近の溝状の掘り方内から1つ、柱穴状土坑が検出された。住居の周囲にも同じ規模の柱穴状土坑が散在するので、これらが住居に帰属するという保証はないが、他に比べて黒く、明確に検出された。（金子昭）

<遺物>（第204、205図、写真図版123、128、141～143）

内黒、非内黒の土師器坏、須恵器坏、須恵器壺、須恵器甕、土師器甕がある。総量3,451gの土器が出土し、15点を掲載した。

平面図中No1は、土師器坏（592）で、壁側に傾く。4層上面と思っていたが、断面図の層境と対応せず、1層下部らしい。No2も、土師器坏（597）で、上を向いており、4層上面の出土か。No3は、須恵器坏（598）で、やや傾くがほぼ上を向いて水平、底から2～3cmから出土。No4は、欠損した須恵器壺（601）で、床直（4層下部）から横転して出土し、同一個体の破片が11号土坑からも出土している。No5は、坏（593）で、ほぼ上を向いて水平に5層上部から出土。

[土器] 墨書土器が3点ある。いずれも内黒の土師器坏の底部外面に「九」と読み取れる墨書が認められる。これらのうち593には側面にも墨痕が確認された。これら3点はいずれも回転糸切り後、底部周縁に手持ちヘラ削り調整を施されている点でも類似性が高い。354はRA087出土の破片と本住居跡出土の破片が接合したものである。また、260はRA080出土の破片と本住居跡出土の破片が接合したものである。603は本住居跡検出面出土の破片とRD168出土の破片が接合したものである。

[石製品] 埋土から砥石が1点出土しているが、礫破砕片であるため図化していない。

<時期>確実に住居跡に伴う遺物が少ないので確かではないが、9世紀後半～10世紀前半に属する可能性がある。

RA105竪穴住居跡（41号住）（第107図、写真図版71）

<位置>調査区南部の6 N12 r グリッド付近に位置する。約1.2m南にRA106がある。

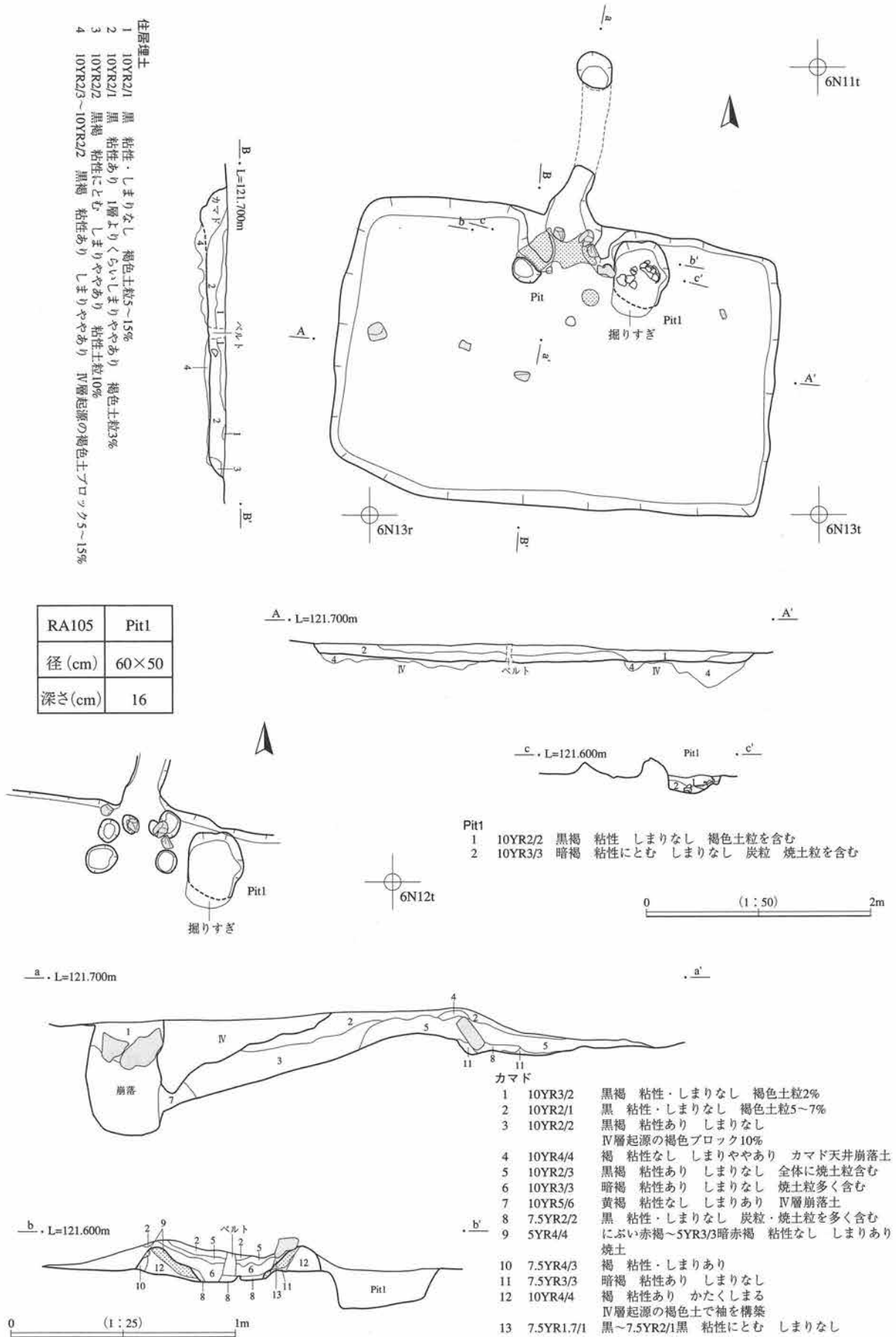
<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ～Ⅳ層である。

<規模・平面形状・方向>一辺の長さが3.78×2.26m、壁高は14cmの隅丸長方形である。方向はN-10°-Eである。

<埋土>4層に細分され、IV層起源の褐色土粒を含む黒色土が主体である。

<床面・掘り方・貼り床>床面は平坦だが、あまり硬化していない。特に住居東側の床面は固くない。



第107図 RA105竅穴住居跡 (41号住)

貼り床はⅣ層起源の褐色土ブロックを含む黒褐色土である。掘り方は住居中央が浅く、壁際が深くなる傾向があるが、東側が特に深い。

<カマド>北壁の中央に位置する。天井は残存しておらず、袖も手前がかなり失われている。袖の内側から礫が出土しており、これらにⅣ層起源の褐色土を貼り付けて構築している。芯材の据え方と見られる小ピットが5個検出されている。小ピットの埋土は焼土を含む暗褐色土である。燃焼部底面には焼土はあまり発達しておらず、袖内側に認められる。焼土の厚さは4cmである。煙道は長さ1.5m、底面は煙出しに向かって徐々に下がっていき、煙出しに至ってさらに一段下がる。煙出しの埋土上層から20cm大の角礫数個が出土した。

<柱穴・付属施設>カマド右脇に貯蔵穴と見られる土坑がある。径0.6×0.5m、深さ16cmで、炭粒や焼土粒を含む暗褐色土である。
(金子佐)

<遺物> (第206図、写真図版143)

877gの土器が出土し、1点を掲載した。Pit 1 から606の土師器甕（体部～底部）がつぶれた状態で出土している。このほかカマドの前及び脇の床面から内黒土師器坏破片、カマド焼土上、袖下の小穴、煙道からロクロ成形の土師器甕が数点出土したが、小片で図化に至らなかった。床面及び埋土中から拳～掌大の礫が数点出土している。

<時期>出土遺物から平安時代に属すると考えられる。

RA106竪穴住居跡（42号住）（第108～110図、写真図版72、73）

<位置>調査区南部の6 N14 s グリッド付近に位置する。1.2m北にRA105がある。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層である。

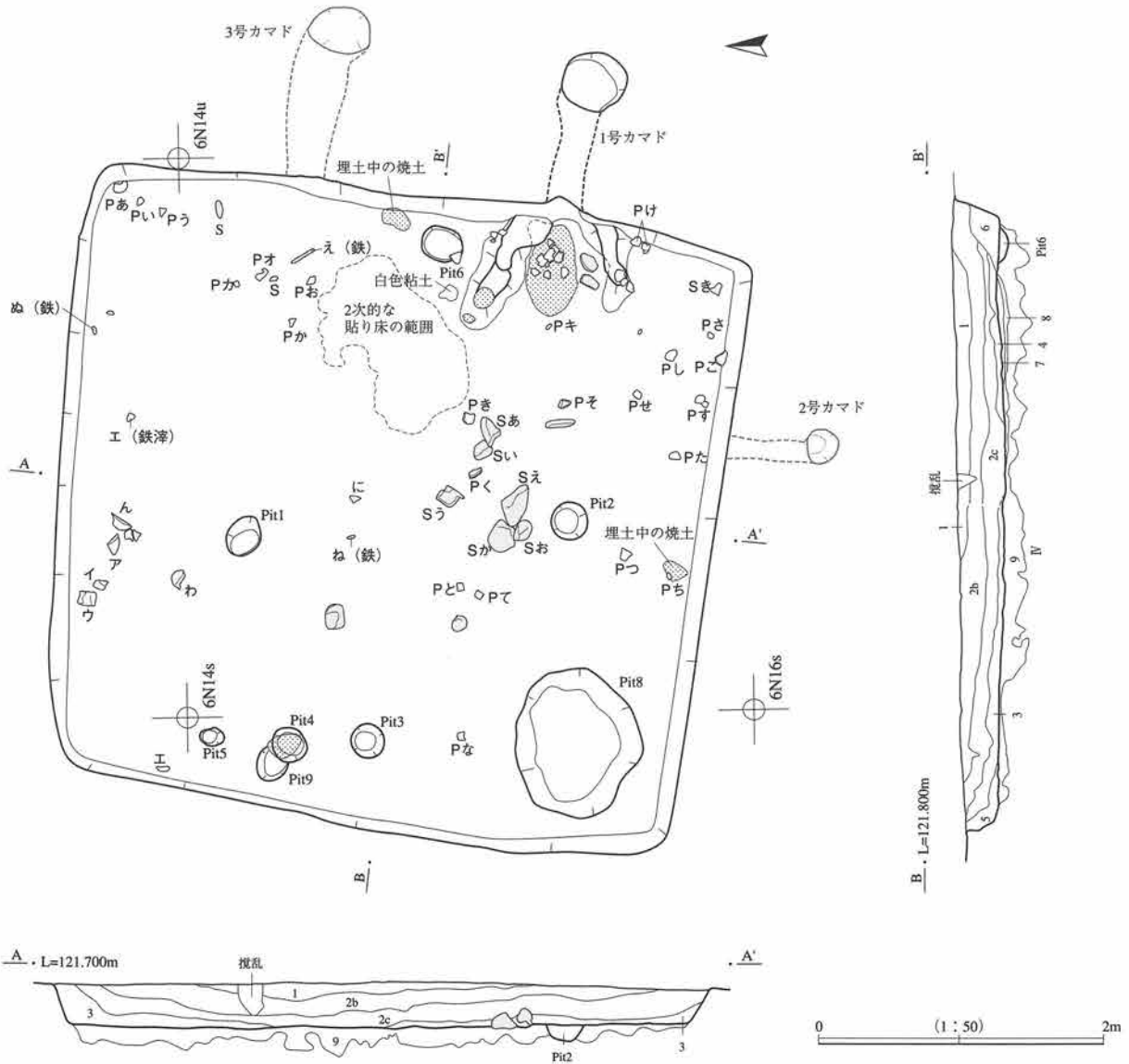
<規模・平面形状・方向>一辺の長さ4.73×4.55m、壁高32cmの隅丸方形である。方向はW-14°-Sである。

<埋土>床面までは6層に細分され、Ⅳ層起源の褐色土ブロック、Ⅱ層起源の黒色土ブロックを含む黒褐色土が主体であるが、自然堆積か人為堆積かは判然としなかった。東および南側の壁際埋土中からは焼土が検出された。焼土は厚さ2～4cmで、床面から10cm程度浮いている。

<床面・掘り方・貼り床>おおむね平坦で固くしまる。西壁よりのPit 3、Pit 4 付近は周囲より若干高い。貼り床はⅤ層起源の褐色土と黒色土の混合土でほぼ全体に施される。床面東寄りに1.3×0.8mの不整形の範囲に周囲よりも2cmほど高く、二次的な貼り床が2回にわたって施される。また、最終床面を1～2cmほど下げた結果、床面中央よりやや南東に砂と灰黄白色粘土の広がりやPit 9、2号カマド燃焼面を確認した。このことから明確にとらえられる二次的な貼り床だけでなく、1層にしか認識できない部分の貼り床にも少なくとも最上層以外に生活面がもう1面あると考えられる。砂と灰黄白色粘土は62×42cmの不整な範囲で、砂の厚さは1～1.5cmあり、それを剥ぐと灰黄白色粘土が広がる。粘土の厚さは1cmである。

<カマド>東壁の南よりに1号カマド、南壁の東寄りに2号カマド、東壁中央よりやや北寄りに3号カマドの3基を確認した。

1号カマドは最も新しいと思われるカマドで、天井は手前が崩落しているが、壁際の天井部分と袖が比較的よく残っている。袖は粘性に富む黒褐～暗褐色土で上面には灰黄白の粘土が用いられている。この粘土は、床面を若干下げて確認された粘土と同様のものである。芯材は大きなものはなく、右袖の中にこぶし大の花崗岩の礫を使用しているのみである。右袖の手前側上面と壁際から土器破片が出

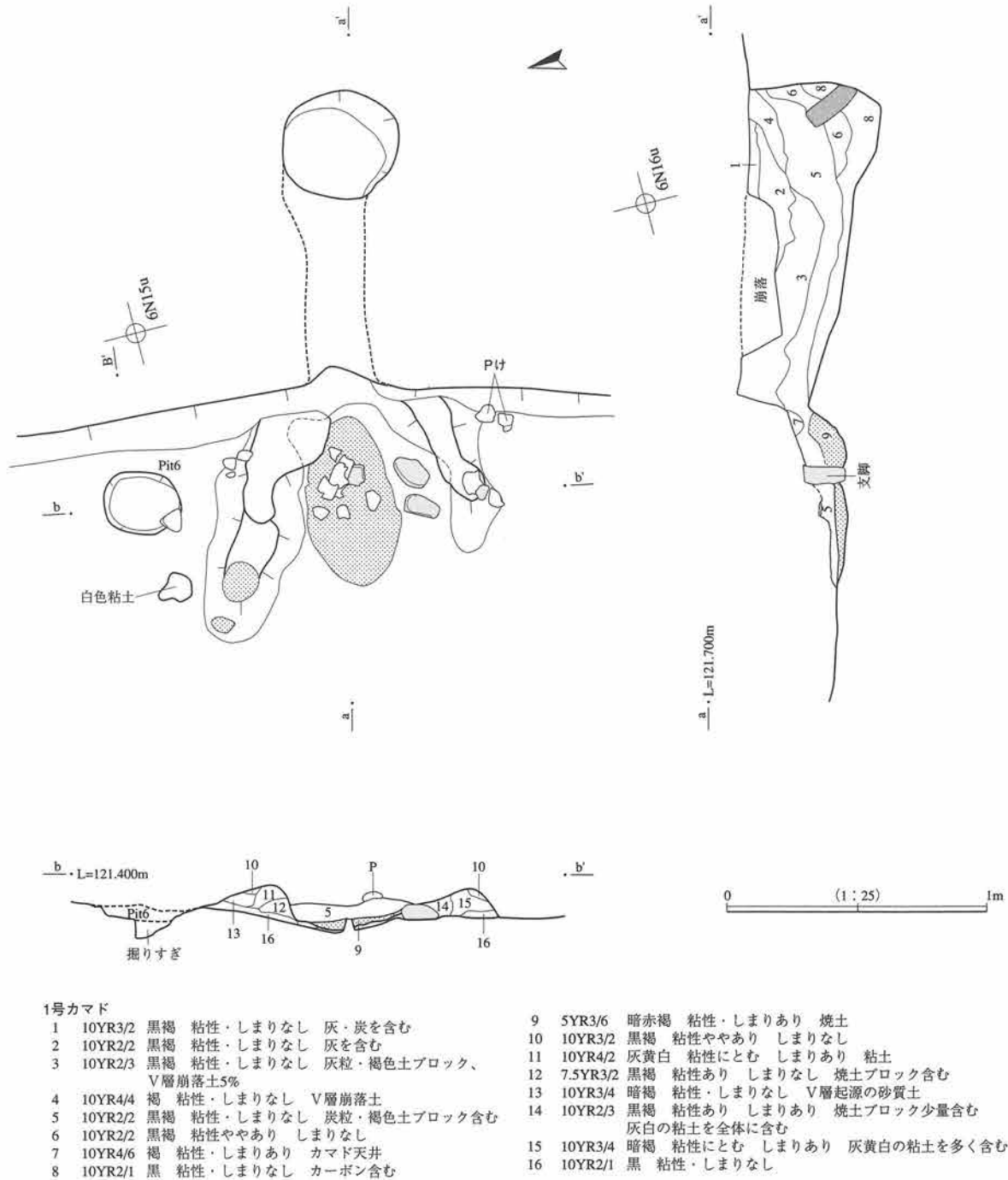


住居

- 1 10YR3/2 黒褐 粘性なし しまりあり 微細な褐色土粒3%
- 2b 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりあり 褐色土粒10%
- 2c 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりなし 黒色土ブロック (10YR2/1) 5% 褐色土粒10%
- 3 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし
- 4 10YR3/4 暗褐 粘性なし 固くしまる 褐色土粒20%
- 5 10YR2/3 黒褐 粘性あり しまりなし 黄褐色土粒15%
- 6 10YR2/2 黒褐 焼土粒含む
- 7 10YR2/1 黒 粘性あり 大変固くしまる 上位に10YR3/4暗褐色シルト V層起源の砂質土がかぶる 貼り床最終面 1号カマドにともなう
- 8 10YR3/2 黒褐 粘性なし 固くしまる 褐色土粒3% 貼り床古層の生活面 2号カマドにともなう
- 9 10YR4/6 褐 粘性・しまりなし 10YR2/2黒褐色シルト 粘性ありしまりなしの混合土 (V層起源の)

RA106	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5	Pit6	Pit8	Pit9
径 (cm)	31×25	27×26	24×24	26×24	17×24	30×24	106×89	22
深さ (cm)	8	10	9	11	12	13	10	9

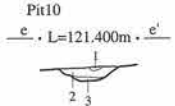
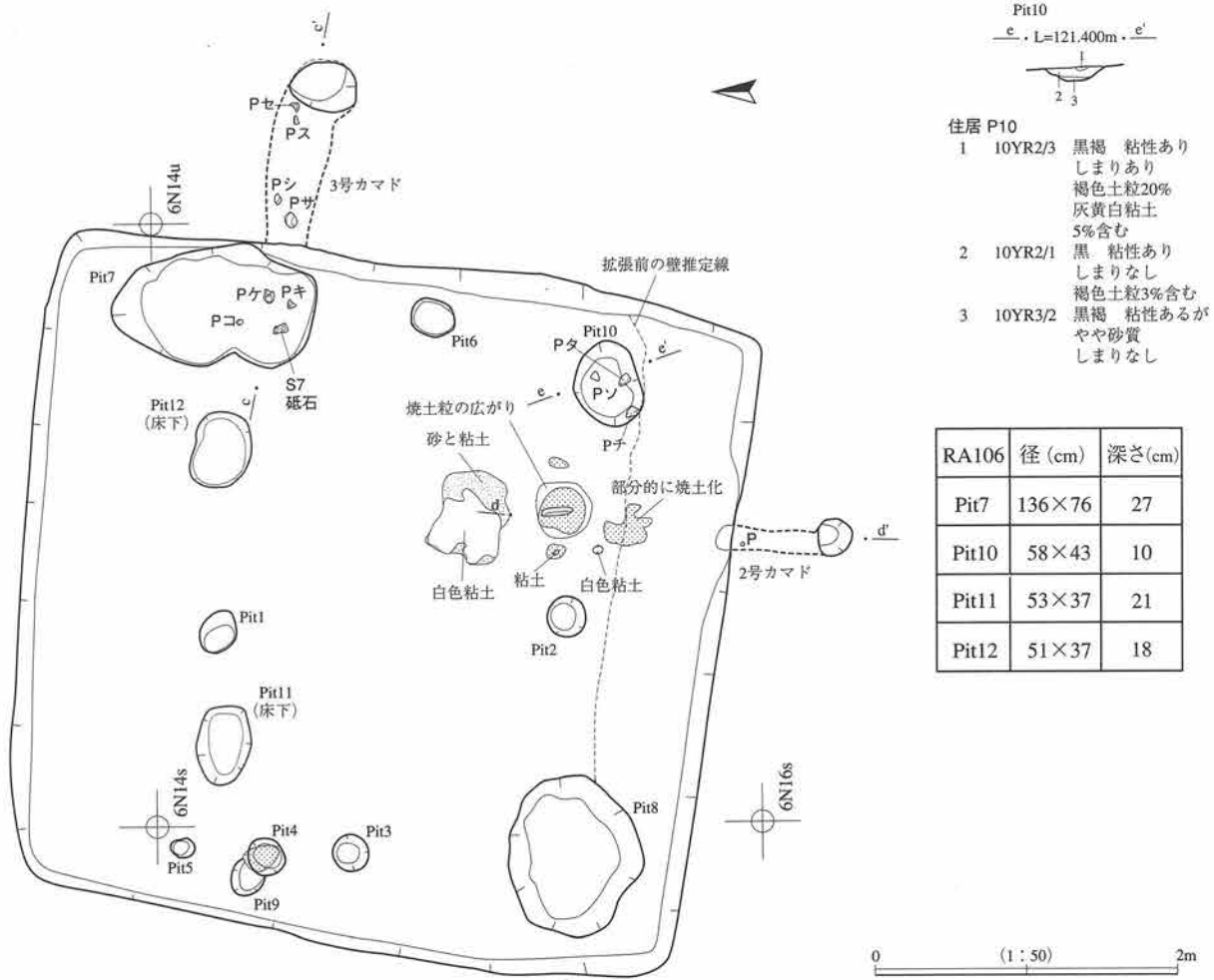
第108図 RA106竪穴住居跡 (1) (42号住)



第109図 RA106竪穴住居跡(2) (42号住)

土しているが、芯材として利用したような状況ではない。左袖の手前側は黒色土に白色粘土、褐色粘土の順に貼り付けて構築しており、最上層は焼けて焼土化していた。燃焼部は66×36cmの楕円形に焼土が形成される。焼土の厚さは最大で8cmである。煙道は長さ1.09mで、削り貫き式である。入り口から煙出しに向かって徐々に下がっていき、煙出しでさらに一段下がる。埋土は黒～黒褐色土が主体で、最下層に炭粉を多く含む黒色土が堆積する。

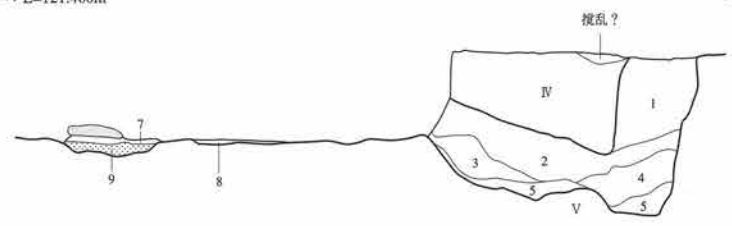
2号カマドは、1号カマドより古く、3号カマドとの新旧は不明である。袖は完全に失われ、煙道と燃焼部の焼土、袖に使用したと思われる灰黄白色粘土が残っているのみである。燃焼部の焼土は南壁から1.0m内側で、床の最終使用面を2cmほど除去した面で確認した。固い焼土は径30×30cmの楕



- 住居 P10
- 1 10YR2/3 黒褐 粘性あり
しまりあり
褐色土粒20%
灰黄白粘土
5%含む
 - 2 10YR2/1 黒 粘性あり
しまりなし
褐色土粒3%含む
黒褐 粘性あるが
やや砂質
しまりなし
 - 3 10YR3/2 黒褐 粘性あるが
やや砂質
しまりなし

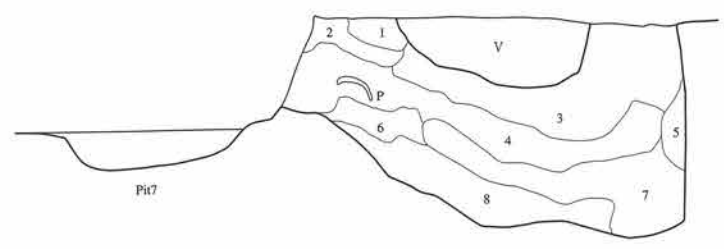
RA106	径 (cm)	深さ(cm)
Pit7	136×76	27
Pit10	58×43	10
Pit11	53×37	21
Pit12	51×37	18

d. L=121.400m

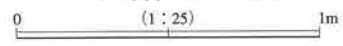


- 住居 2号カマド
- 1 10YR3/3 暗褐 粘性にとむ しまりなし
 - 2 10YR2/1 黒 粘性にとむ しまりなし
褐色土ブロック2~10%
 - 3 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし
褐色土ブロック15%
焼土粒少量含む
 - 4 10YR3/2 黒褐 粘性にとむ しまりなし
 - 5 10YR3/2 黒 粘性にとむ しまりなし
 - 7 7.5YR3/2 黒褐 粘性なし しまりややあり
焼土粒含む
 - 8 10YR3/2 黒褐 粘性なし しまりあり
焼土含む
 - 9 10YR3/3 暗赤褐 粘性なし しまりあり
焼土

c. L=121.700m



- 住居 3号カマド煙道
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性なし 固くしまる
 - 2 10YR3/2 黒褐 粘性なし 固くしまる
褐色土ブロック10% 黒色土3%
 - 3 10YR2/1 黒 粘性あり しまりなし
炭粒・焼土粒含む
 - 4 10YR2/3 黒褐 粘性あり しまりなし
砂質黒色土粒3% 褐色土粒10%
焼土粒含む
 - 5 10YR4/4 褐 粘性あり しまりなし
黒褐色土ブロック20%含む
V層崩落土
 - 6 10YR3/3 暗褐 粘性あり しまりなし
V層崩落土に黒褐色土が混入した層
 - 7 10YR2/1 黒 粘性あり しまりなし
褐色土粒3~5% カーボン含む
 - 8 10YR2/3 暗褐 粘性あり しまりややあり
やや砂質 カーボン含む



第110図 RA106竪穴住居跡 (3) (42号住)

円形に広がり、それを囲むように焼土粒が広がっている。焼土の厚さは最大で4cmである。この上に厚さ2cmほどの間層を挟んで、長さ21cm、厚さ5cmの円礫が出土した、さらに、固い焼土の東西に径6～12cm程の小さな楕円形の範囲に焼土が認められる。西の焼土の中心に灰黄白色の粘土がある。これらは袖の芯材の据え方であった可能性がある。また、固い焼土から煙道に至る部分は部分的に焼土化しており、この部分も煙道であった可能性が高い。燃焼部の壁からの距離が遠いことと固い焼土より壁側は掘り方が内側に比べ浅いことから、2号カマドが機能していた時期には少なくとも南壁は最終位置より90cm程度内側にあったと考えられる。残存する煙道は長さ0.8m、ほぼ南北方向で、削り貫き式である。底面は煙出しに向かって、凹凸しながら下がっていく。

3号カマドは、1号カマドより古く、2号カマドとの新旧は不明である。袖、及び燃焼面はPit7によって完全に失われている。残存する煙道は長さ1.24m、E-15°-Sの方向で、削り貫き式である。底面は煙出しに向かって急に傾斜する。埋土は黒～黒褐色土が主体で、下層には炭粉を多く含む。
 <柱穴・付属施設>最終使用面上で確認したPitは柱穴状のPit1、Pit2、Pit3、Pit4、Pit5、貯蔵穴と思われるPit7、Pit8、カマド脇の貯蔵穴と思われるPit6である。Pit4と最終面より若干下がった面で確認したPit9の底面には固い焼土ブロックを含む黒褐色土が堆積している。Pit7の埋土は褐色土粒を含む黒褐色土で、単層であり、住居埋土と類似している。また、Pit10は1号カマドの右袖下より検出されたことから、1号カマドより古く、2号カマドとの位置関係から2号カマド脇の貯蔵穴である可能性が高い。Pit11とPit12は床下で検出した。(金子佐)

<遺物> (第206～208図、写真図版133、143、144)

土器は西壁よりを除き、全体から出土している。非内黒土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器甕、須恵器壺がある。土器の総量は4,643gで、10点を掲載した。床上中央付近から掌大～人頭大の礫が出土している(Sあ～Sか)。これらのうちSかは被熱している。Pit7の埋土からは須恵器破片、土師器小片のほかに、619の砥石が出土している。

[土器] 609は1号カマド右袖直下のPit10埋土と3号カマド煙道埋土、及びQ1の貼り床出土の破片が接合したものである。453はRA093を切る攪乱出土の破片と本住居跡出土の破片が接合したものである。形や法量からは甕とした方が良いと思われるが、成形や調整から壺と判断した。

[石製品] 617・618は安山岩製の荒砥である。床面直上からの出土である。617は欠損部を除く五面を作業面としており、表裏面・右側面は強い湾曲を持っている。618は裏面を除く五面を作業面としている。表面には横走る溝状の使用痕が多数観察される。619は凝灰岩製の中砥である。表面を作業面としており、強い湾曲を持っている。

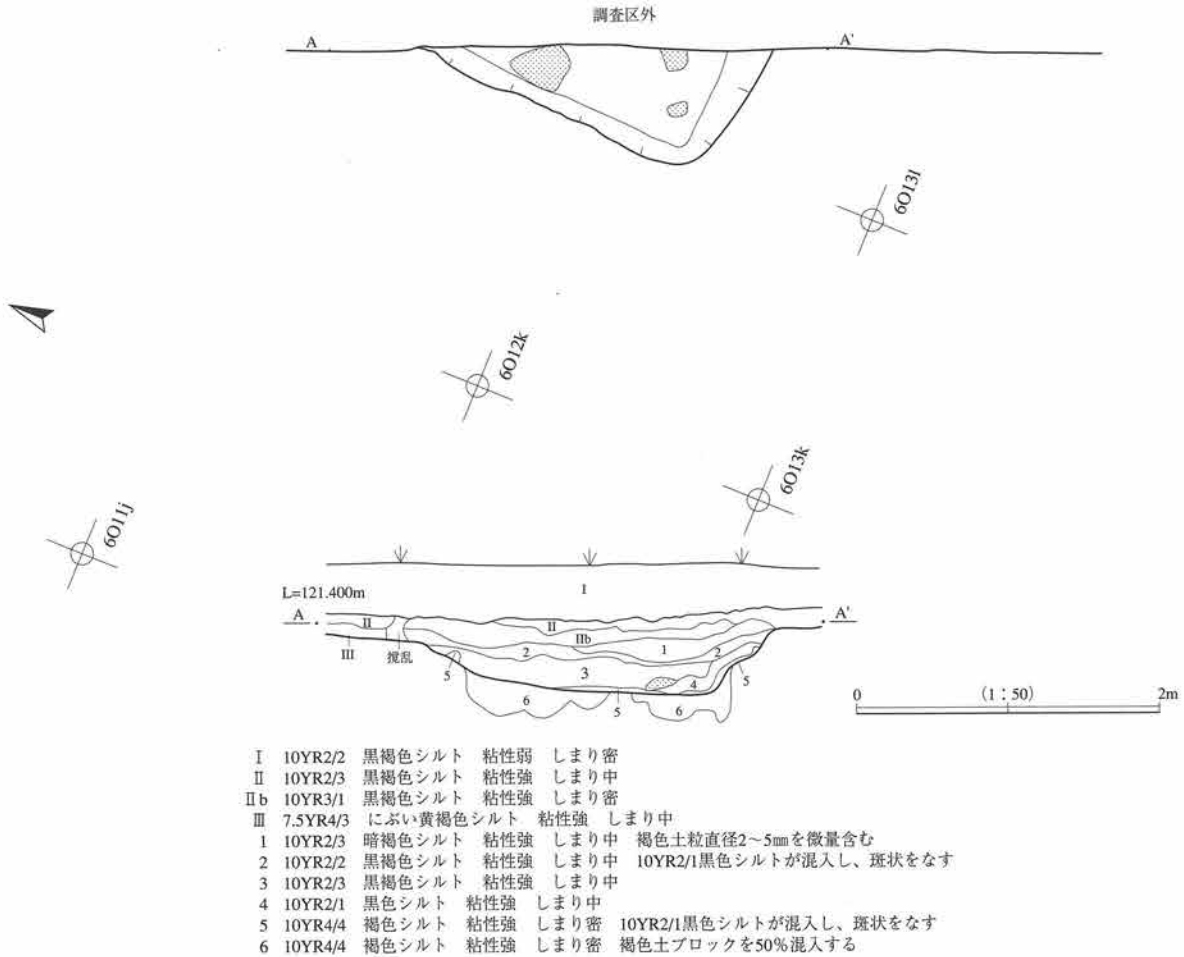
[鉄器] 620は鉄鏃の茎部の資料である。断面形は方形で、両端を欠損している。621～624は刀子である。621・622・624は両端を欠損しているもの、623は刀身部のみのものである。621は棟側に関のある片関の刀子、622は両関の刀子、624は無関の刀子である。622には木質部が残存している。621・622の刀身の形状は長三角形を呈し、623は棟側が直線的で刃側の切先がふくらむ形状を呈している。625は鉄鐸である。穿孔は確認できず、舌も伴わなかった。

[その他] 上記以外に3号カマドの煙出し孔埋土から焼成粘土塊が1点(616)、床面直上から鉄滓が1点(626)出土している。

<時期>出土遺物から9世紀後葉から10世紀初頭に属する可能性がある。

RA107竪穴住居跡(21号住)(第111図、写真図版74)

<位置>調査区南の6O11kグリッド付近に位置する。



第111図 RA107竪穴住居跡 (21号住)

<重複関係>調査区境に位置し、調査区内での重複関係は認められない。

<検出面>II b層下面で検出した。

<規模・平面形状・方向>住居は調査区境に位置し、南西端が確認できるに留まる。壁の方向から方形を呈することは窺えるが、規模は不明である。方向もカマドを検出していないため、不明である。調査区内の規模は現存値で南北2.12m、東西1.12m、壁高は48cmである。

<埋土>黒色土を基本とし、1~5層に分層される。断面からレンズ状の自然堆積を呈すると判断される。焼土ブロックが4層上面に堆積し、焼土の周辺に炭粒が散在する。この焼土は調査範囲内では3箇所認められ、形状からカマドの一部とは考え難く、焼失住居の可能性はある。灰白色火山灰は混入しない。

<床面・掘り方・貼り床>床面は硬化が認められるが、著しい程度ではない。掘り方は24cmと深く、貼り床を伴う。

<カマド>調査区内では検出していない。

<柱穴・柱穴・付属施設>ピット等の柱穴・付属施設は検出していない。(八木)

<遺物>須恵器瓶類の破片が1点(1g)のみ出土している。しかし覆土上層からの出土であるため、住居の時期判断資料とならない。

<時期>遺構の形状から古代と考えられる。

RA108竪穴住居跡（44号住）（第112図、写真図版75）

<位置>調査区南端の6 N21 x グリッド付近に位置する。

<重複関係>調査した範囲では、ない。

<検出面>Ⅲ層上面である。

<規模・平面形状・方向>調査区外に延びているので、全容は不明であるが、隅丸方形を基調としていと考えられる。検出した部分の規模は西壁が2.73m、東壁が2.48m、壁高は27cmである。東壁の方向はW-38°-Sである。

<埋土>6層に細分され、Ⅳ層起源の褐色土ブロックを含む黒～黒褐色土が主体である。

<床面・掘り方・貼り床>床面は平坦で固くしまる。貼り床があり、黒褐色土ブロックを斑に含む褐色土である。

<カマド>調査区内では検出されなかった。

<柱穴・柱穴・付属施設>ない。

（金子佐）

<遺物>（第208図、写真図版144）

埋土から424gの土器片が出土した。平面図中土器うはケズリ調整のある土師器甕体部破片であるが、図化に至らなかった。

[石器] 本遺構から出土した石器の石材はすべて黒曜石である。627の産地同定を行っており、詳細は付編3を参照して頂きたい。627はスクレイパーである。下端の背面側に急斜度の調整を施して刃部を作出している。両側面の背面側には断続的な微細剥離痕が観察される。埋土からの出土である。図化したもの以外では剥片が1点、碎片が1点出土している。

<時期>出土遺物から平安時代に属する。

3 掘立柱建物跡

RB007掘立柱建物跡（1号掘立柱建物跡）（第112図、写真図版75）

<位置>調査区中央の5 N12mグリッド付近に位置する。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層である。

<規模・構造・方向>桁行2間、梁行1間の南北棟建物である。規模は桁行総長3.5m、梁行総長3.32mである。方向は桁方向でN-10°-Eである。

<柱位置・柱間>柱間距離は桁方向で1.5～1.6m、梁方向で3.0mである。

<掘り方・柱痕>掘り方は円形もしくは楕円形で径41～56cm、深さ25～44cmである。埋土は黄褐色土ブロックの混入する粘性のある黒色土である。柱痕跡は径20～30cm程度で、混入物が少なく、しまりのない黒色土である。

<遺物>PP29とPP30埋土から土師器甕体部破片が出土したが、小片で図化していない。

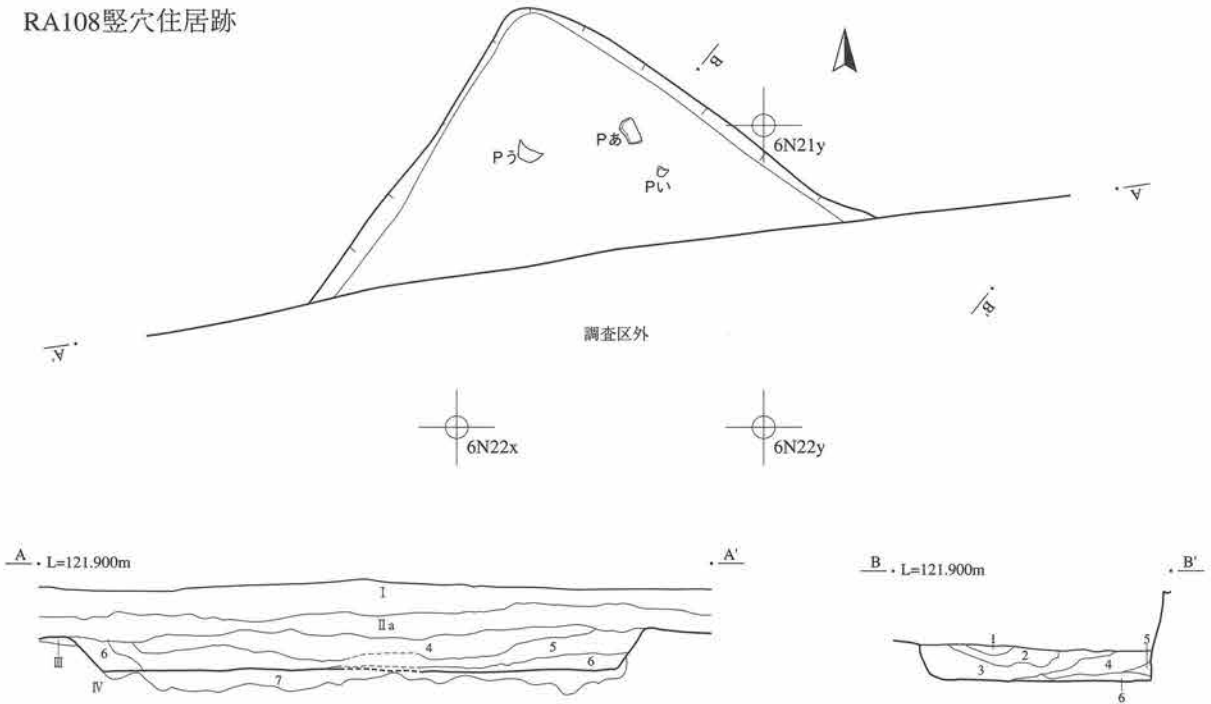
<時期>出土遺物のごく少なく、柱痕跡がかなりしまりのない土であることから確証はないが、埋土が黒色土であることから平安時代に属する可能性が高い。

（金子佐）

RB008掘立柱建物跡（2号掘立柱建物跡）（第113、114図、写真図版76）

<位置>第10次調査区北側の3 Mグリッド南東部付近に位置する。

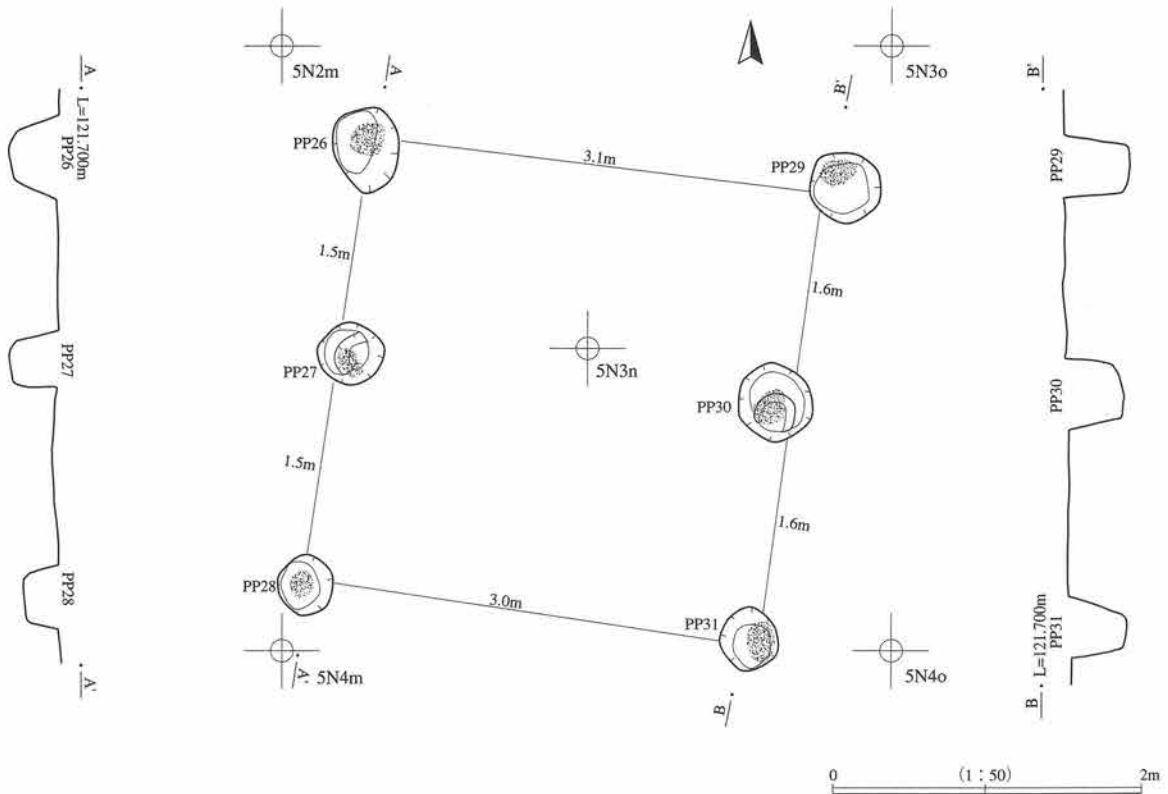
RA108 竪穴住居跡



住居埋土

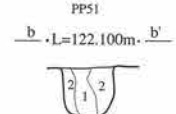
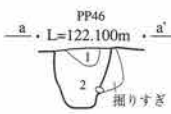
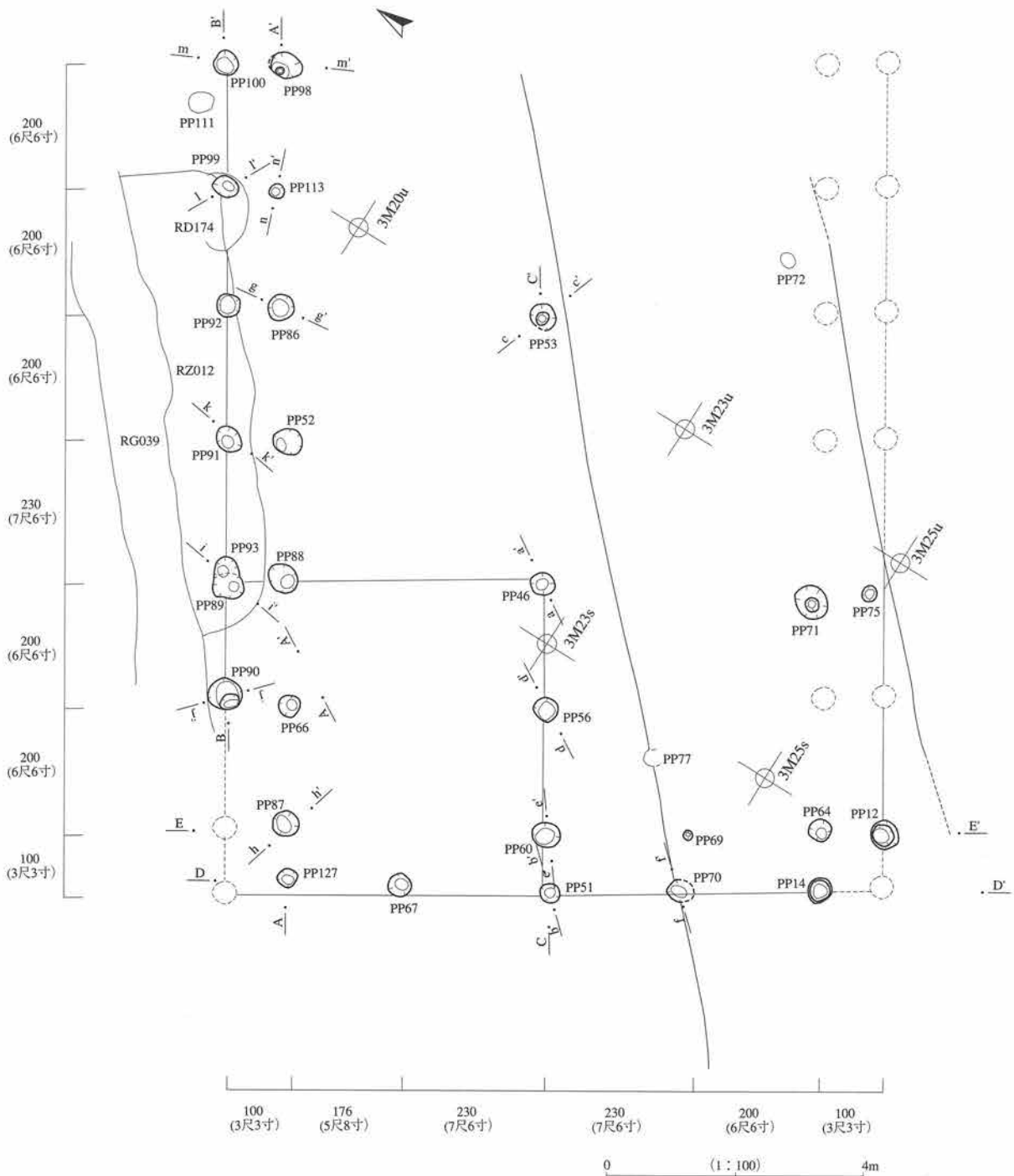
- 1 10YR7/1 黒 粘性なし しまりややあり 黄褐色土粒3%含む
- 2 10YR2/2 黒褐 粘性・しまりなし 褐色土ブロック15%含む
- 3 10YR7/1 黒 粘性・しまりなし 褐色土ブロック2~3%含む
- 4 10YR2/2 黒褐 粘性・しまりなし 褐色土ブロック15%含む
- 5 110YR2/2 黒褐 粘性あり しまりあり 褐色ブロック2~3%
- 6 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし 褐色ブロック3%
- 7 10YR4/6 褐 粘性あり しまりあり 特に上面は非常に固くしまる
10YR2/3黒褐色土ブロックを斑に15%含む 貼り床

RB007



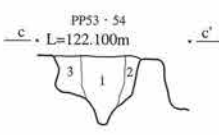
第112図 RA108竪穴住居跡（44号住）・RB007掘立柱建物跡（1号）

3 掘立柱建物跡

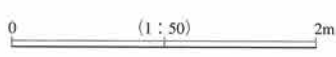


- PP46
- 1 10YR4/3 におい黄褐 粘性・しまりやや有 暗褐色シルトしみ状に見られる
 - 2 10YR3/1 黒褐 粘性なく、しまりややなし 礫少量含む

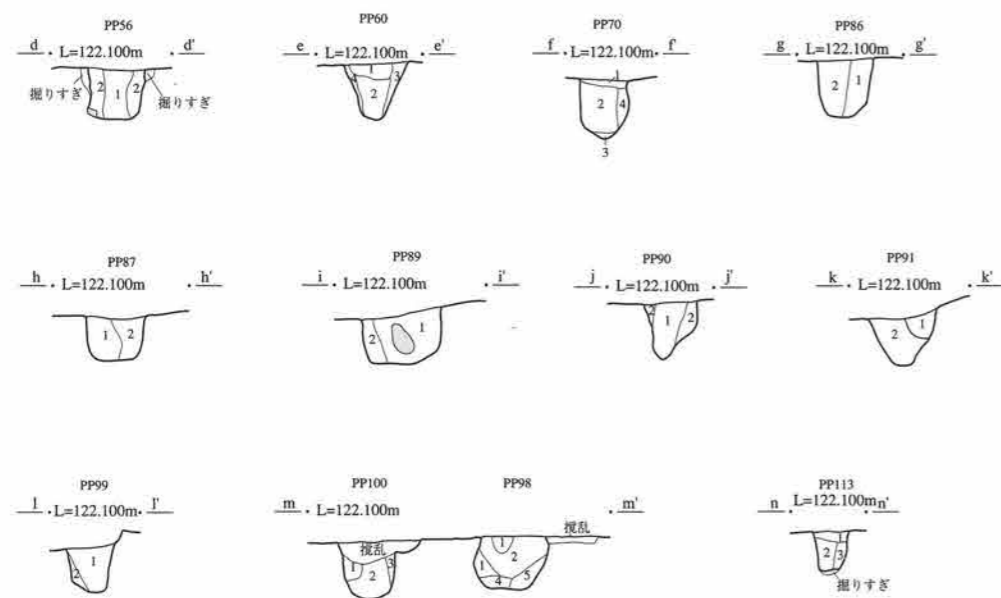
- PP51
- 1 10YR3/2 黒褐 粘性・しまりなし
 - 2 10YR3/1 黒褐 粘性なく、しまりやや有 IV層との混合物



- PP53
- 1 10YR3/1 黒褐 粘性なく、しまりややなし
 - 2 10YR5/6 黄褐 粘性なく、しまりややなし

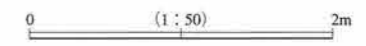
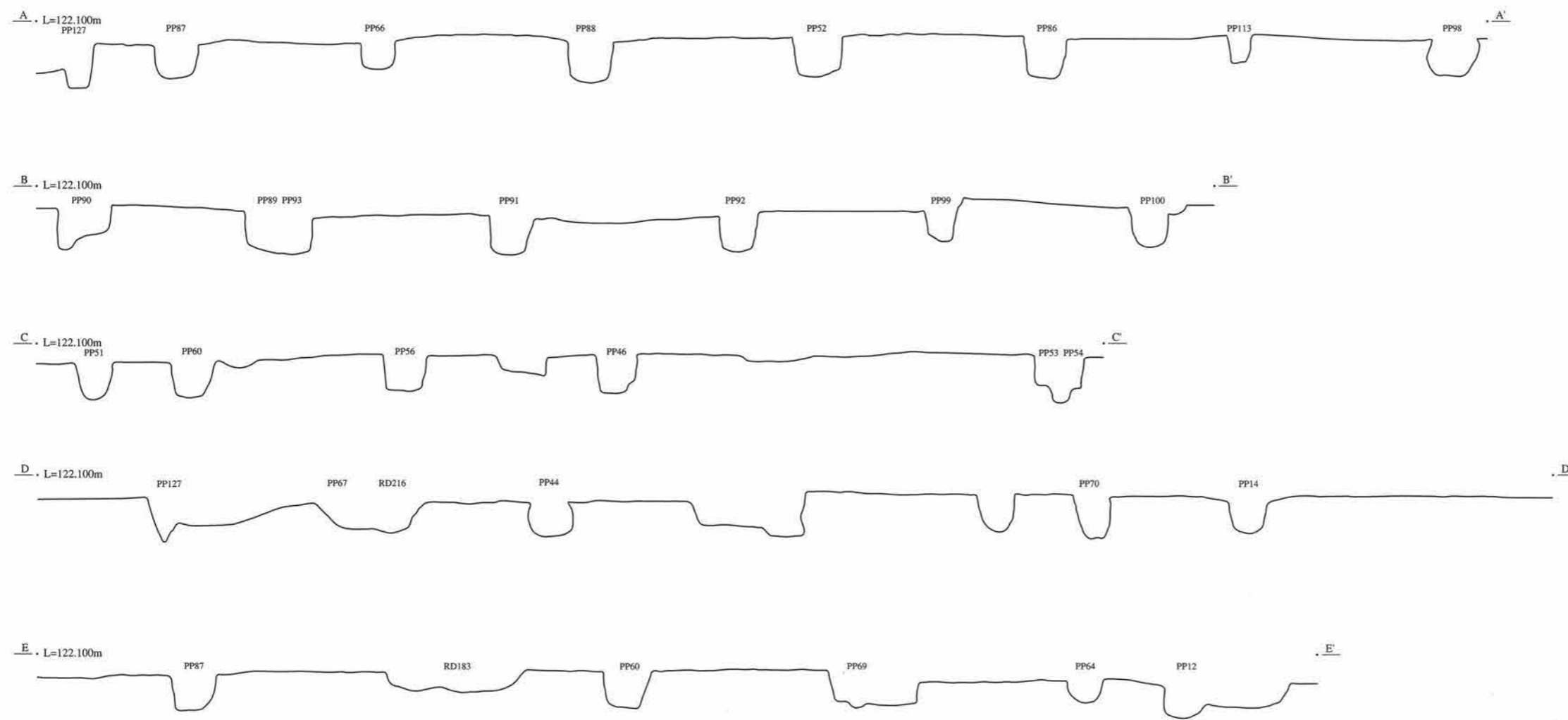


第113図 RB008掘立柱建物跡 (1) (2号)



- PP56**
 1 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりややなし IV層粒少量含む
 2 10YR4/6 褐 粘性なく、しまり有 黒褐色シルトとの混合土
- PP86**
 1 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりややなし
 2 10YR3/2 黒褐 粘性やや有、しまり中 IV層大ブロック少量、
 にぶい黄褐色シルト粒多量含む
- PP87**
 1 10YR5/4 にぶい黄褐 粘性やや有、しまり中
 黒褐色シルト小ブロック中量含む
 2 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまり中 黒色シルト粒少量含む
- PP89**
 1 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまり中 人頭並みの礫含む V層粒少量含む
 2 10YR3/1 黒褐 粘性なく、しまり中 V層小ブロック少量含む (PP93覆土)
- PP90**
 1 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまり中
 2 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりややなし V層ブロック中量含む
- PP91**
 1 10YR5/8 黄褐 粘性・しまりなし
 2 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまり中 V層粒少量、礫含む
- PP99**
 1 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりややなし
 2 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりややなし
 IV層小ブロック少量含む

- PP60**
 1 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりやや有 にぶい黄褐色シルトブロック少量、IV層ブロック少量含む
 2 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりやや有 IV層粒少量含む
 3 10YR2/1 黒 粘性なく、しまりやや有 V層との混合土
 4 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりやや有 IV層ブロック中量含む
- PP70**
 1 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりやや有 IV層粒少量含む
 2 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまり中 IV層粒中量、灰黄褐色土小ブロック少量含む
 3 10YR2/1 黒 粘性ややなし、しまり有 暗褐色シルト層状に見られる
 4 10YR4/6 褐 粘性なく、しまりややなし 黒褐色シルトブロック多量含む
- PP98**
 1 10YR4/2 灰黄 粘性やや有、しまり中 黒褐色シルトとの混合土
 2 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりやや有 IV層小ブロック含む
 3 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりややなし IV層ブロック中量含む
 4 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまりやや有
 5 10YR4/6 褐 粘性なく、しまりややなし 黒褐色シルト層状に見られる
- PP100**
 1 10YR4/4 褐色砂 粘性・しまりなし
 2 10YR2/3 黒褐 粘性なく、しまりややなし V層小ブロック少量含む
 3 10YR2/3 黒褐 粘性なく、しまり中 IV層小ブロック多量含む
- PP113**
 1 10YR2/1 黒 粘性なく、しまりややなし V層小ブロック・暗褐色シルトブロック含む
 2 10YR3/2 黒褐 粘性なく、しまり中 褐色シルトとの混合土
 3 10YR4/6 褐 粘性なく、しまりやや有 黒褐色シルトブロック少量含む



第114図 RB008掘立柱建物跡 (2) (2号)

<重複関係>RA064、RD174・182・186・216、RZ012、PP41・54・89と重複しており、本遺構はRA064、RD174・182・186、RZ012、PP54を切り、RD216、PP41・89に切られている。

<規模・構造・方向>桁行（残存値）1330cm（43.9尺：1尺≒30.3cm）、梁間1036cm（34.2尺）の掘立柱建物跡である。梁間と桁行の残存長の比は約1：1.28である。面積（残存）は137.79m²（41.75坪：1坪≒3.3m²）である。桁行方向はN-57°-Eである。

<柱位置・柱間>建物跡の構造から柱穴は少なくとも43個使用されると考えられるが、そのうち27個を検出した。東側は調査開始直前まで道路として利用されていた部分で、柱穴の遺存状態は非常に悪い。柱間は桁方向で1.00～2.30m（3.3～7.6尺）、梁方向で1.00～2.30m（3.3～7.6尺）であるが、桁方向では2.00m（6.6尺）、梁方向では2.30m（7.6尺）を多用している。

<掘り方・柱痕>掘り方は概ね円形で径40～60cm、深さ20～50cm程の規模である。柱痕はPP56・86・87・113に見られ、径15～20cmである。PP69は底面に限りなく近い部分のみの残存である。下屋柱を構成する柱穴の掘り方も概ね円形である。規模は径20～50cm、深さ10～50cmで、上屋柱の柱穴との差はあまり見られない。PP51やPP90にも柱痕が見られる。

<遺物>（第208図、写真図版144）

[石器・石製品] PP89の埋土から砥石が1点、炭化物の付着した礫1点が出土している。

630は安山岩製の荒砥である。長辺方向に7面形成されており、そのうち4面が作業面である。表面の作業面には広範囲にわたって炭化物が付着している。

[古銭] PP52の埋土最上位から寛永通寶が2点出土している。2点とも新寛永であるが、632は裏に「文」の文字があるいわゆる「文銭」である。

<時期>近世。

（北村）

4 土 坑

今回の調査では74基の土坑を検出した。これらのうち56基については、古代、特に土器の出土により平安時代のと考えられるものが多く、奈良時代と推定できるものは2基のみである。用途については縄文時代の貯蔵穴と見られる3基、平安時代の貯蔵穴と見られる5基、平安時代の墓壇と見られる2基、中近世の墓壇と見られる2基のほか、特定できないものが多い。

焼土を検出した土坑については、細谷地遺跡第4次・第5次調査の報告例に倣い、検出状況により、次の2種に分類している。

底面から側面にかけて焼成面が形成されているもの・・・焼成土坑（1）

ある程度埋没ないし埋め戻された後にレンズ状の焼土面が形成されているもの・・・焼成土坑〈2〉

以下、個々の土坑について表に記した。分類、用途の推測可能なものは記した。

第4表 土坑観察表

報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方・断面	遺物	時期	種類	
RD150	18号土坑	10	Ⅲ層上面	RA080に切られる	黒色土主体6層自然堆積 下位にV層崩壊土	フラスコ状底面は緩やかな凹凸あり開口部より広くオーバーハング	縄文土器(634)1点	縄文晩期前葉	貯蔵穴	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N19o	0.65×0.40	46	楕円形						115 208	77 144

4 土坑

報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方・断面	遺物	時期	種類	
RD151	21号土坑	10	Ⅲ層中	ない	中央上半黒色土壁際、層V層の崩壊土 自然堆積	フラスコ状底面は平坦開口部より広くオーバーハング	縄文土器片 15g	縄文晩期前葉?	貯蔵穴	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N24i	1.20×1.00	64	円形						115	77
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方・断面	遺物	時期	種類	
RD152	17号土坑	10	Ⅳ層上面	ない (RA052の東)	上半有機質?黒色土 壁際、層V層崩壊土 9層 自然堆積	半分がフラスコ状でオーバーハング 底は緩やかな凹凸	縄文土器片 7g	縄文晩期前葉?	貯蔵穴	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N1u	0.98×0.92	50							115	77
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD153	4号土坑	10	Ⅱb層上面	ない (RA057の東)	底面と壁に最大3cm厚の焼土その上に1cmの間層を挟んで灰と思われるにぶい灰黄橙色土が最大2cm厚堆積。上層は自然堆積	北側深く、南に向かって徐々に浅くなる。掘り方はない	にぶい黄橙色土層から外面にケズリのある土師器甕破片、上層から土師器甕破片、須恵器片など247gうち大型の内黒土師器坏1点(637)を図化。	平安	焼成土坑(1)	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N21v	1.87×0.91	31	長楕円						116 208	77 78 144
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD154	3号土坑	10	Ⅲ層	RA087を切る住居跡が埋まり窪み状になっている状態のときに構築	底面にカーボン層壁面とカーボン層上に最大5cm厚の焼土上層は黒褐色土で自然堆積	凹凸なく、内湾して立ち上がる。掘り方はない	焼土上から須恵器壺の体部上半破片など須恵器片、土師器片16g	平安	焼成土坑(1)	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N25r	1.23×0.99	24							117	78
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD155	7号焼土遺構	10	Ⅲ層上面	PP96に切られる	黒褐色土主体 3層 底面直上に炭ブロックを含む黒色土層その上に焼土層を形成 その他は自然堆積	平坦	焼土層に張り付くように土師器甕底部(638)や体部破片が出土 133g 底面の炭化物はケヤキ	平安	焼成土坑(2)	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M22s	1.50×1.32	24	隅丸方形						117 208	78 144
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD156	67号土坑	10	Ⅳ層上面	RA064を切る	黒褐色土主体 5層 底面に地山ブロックを含む暗褐色土層 その上に非常に薄い焼土層上層は炭化物や焼土粒を含む人為堆積	平坦	底面直上からわずかに土師器埋土中からケズリのある土師器甕破片、非内黒の土師器坏破片 須恵器片197g 土師器甕口縁部破片1点(639)を図化	平安	焼成土坑(2)	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M24m	1.33×1.20	29	楕円形						117 208	79 144
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD157	8号焼土遺構	9	Ⅳ層上面	ない	7層 埋土中に炭粉層 焼土層はその上に最大3cm厚 下層は人為堆積	掘り方があり、凹凸が激しい。ある程度埋められた状態で焼土層が形成された	土師器甕剥片。掲載の須恵器壺(311)を除きほとんどが土師器88g 311はRA082出土の破片と接合	平安	焼成土坑(2)	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4M2u	1.12×0.81	25	隅丸長方形						117 209	79 126
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD158	4号焼土遺構	9	Ⅳ層上面	RA054を切る	中位に炭粉層 東半の壁際に焼土層上層、下層ともに人為堆積か否か判断としない	掘り方があり、凹凸が激しい。ある程度埋められた(埋められた?)状態で焼土層が形成された	炭粉層より上でたくさん土師器甕(非ロクロ、外面はナデ、体部下半にケズリが多い)の剥片(640)。割れ口は鋭く磨耗していない。底部破片を数えると少なくとも10個体分ある。須恵器破片もあり、総量1,732g	平安	焼成土坑(2)	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4M3t	1.39×0.91	27	長楕円形						118	79 145

報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD159	5号焼土遺構	9	IV層上面	RA054を切る	上層は自然堆積 底面から壁面に灰 白色の灰層、壁際 に最大厚6cmの焼 土層	緩やかに内湾 する掘り方 はない	底面に板状の炭化 財小片埋土から平 安時代の土師器甕 口縁、体部破片、 内黒土師器の坏破 片など須恵器も合 わせて33g	平安	焼成土坑(2)	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4M5u	0.89×0.78	27	楕円形						118	79
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD160	11号焼土遺構	9	II b層下位	RA070を切る	西半の埋土中に 焼土と炭化物 上 層は混入物少なく 自然堆積 下層は 人為堆積	掘り方があり、 凹凸が激しい	中位から須恵器坏 破片、非内黒土師 器の坏破片、剥片、 掘り方から回転糸 切り痕のある土師 器底 163g 1点 (641)を図化	平安	焼成土坑(2)	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N3h	1.63×1.11	25	不整な長楕円 形						118 209	80 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD161	13号土坑	10	IV層上面	ないが、 RA063の南東 に位置	黒褐色土と暗褐色 土上部に炭化材と 焼土が不整形にま とまる	底面は硬化して いない。緩 やかに立ち上 がる	ない	平安	焼成土坑(2)	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
6O19a	0.84×0.67	14	楕円形						118	80
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方・ 付属施設	遺物	時期	種類	
RD162	55号土坑	10	III層上面	RG022を切る	黒褐色土主体 5 層 炭化物、焼土 ブロックを含む層 があり、これ以下 は人為堆積 上層 は自然堆積	北側約1/3が気 団上に高くなる 掘り方があり、南東側 が深い、柱穴3 個 浅い皿状 の小土坑1基 柱穴は深さが 異なり、柱穴1 と2・3は異なる 用途か。埋 土は人為堆積	掘り方埋土を含む 埋土底面直上から 土師器、須恵器 706gが出土 643、 642は外面を上 にして出土 その他 砥石破片も出土。 3層出土の炭化物2 点はケヤキとケヤ キかと思われるも の	平安 (9c後葉~10c 前葉)	貯蔵穴	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5M2u	1.81×1.49	43	隅丸方形						119 209	80 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD163	26号土坑	10	IV層上面	ないが、 RA095の北西 1mに位置	2層 上層は褐色 土ブロックを多量 に混入する黒色土 下層は黒色土 RA095、RA096と 共通	すり鉢状	1層から須恵器坏 が逆位で出土 他 に土師器坏片など 175g うち1点 (646)を図化	平安	貯蔵穴	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N19k	1.00×0.70	30	不整な楕円形						119 209	80 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD164	36号土坑	10	IV層上面	ない	3層 自然堆積 RA095、RA096、 RD163と共通	凹凸があり、 はっきりしな い	ない	平安	貯蔵穴	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5M20l	1.40×0.68	24	不整な楕円						119	81
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD165	52号土坑	10	IV層上面	ない	3層 自然堆積	すり鉢状で、 はっきりしな い	ない	平安	貯蔵穴	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N18u	1.10×1.10	35	不整な円形						120	81
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD166	51号土坑	10	III層上面	ない	黒褐色土主体 4 層レンズ状の自然 堆積	暗褐色土の掘り 方埋土を底 面とし、ほぼ 平坦 南東側 の掘り方が深 く、西側はや や浅い	土師器須恵器173g が出土3点 (647~ 649) を図化。647 ~648は4層、648、 649は自然石と一 緒に。648は逆位 で、649は壁際か ら出土	平安	貯蔵穴	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
6N5u	158×151	32	隅丸方形						120 209	81 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD167	22号土坑	10	III層上面	ない	4層 黄褐色土ブ ロックを含む黒色 ~黒褐色土主体 壁際は自然堆積 その他は人為堆 積か。	平坦 中央か ら北側よりの 副穴(0.5× 0.37cm、深さ 10cm)から22× 16×13cmの円 礫出土	土師器甕、内黒、 非内黒の土師器坏 破片、須恵器破片 はど212g 651、 652は2層出土の同 一物体か その他 652の荒砥	平安	墓塚?	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N6h	1.70×0.85	28	長方形						120 209	82 146

4 土坑

報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方・断面	遺物	時期	種類	
RD168	11号土坑	10		RA104を切る	1層は攪乱 2, 4層が人為堆積 中層の3層が黒土 (死体が腐食した土?)	平坦 掘り方はない 断面は逆台形	RA104と通して設定したトレンチから内黒土師器破片 土師器甕体部 2層から土師器甕破片 280g 図化した1点(603)はRA104出土破片と接合	平安?	墓塚?	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
609f	2.00×1.58	46	不整な隅丸方形~小判形						120	81 210 142
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD169	12号土坑	10	Ⅱ b	RA055に切られる	2層 上層はⅣ層 ブロックを含む黒褐色土 人為堆積 下層は黒色土 自然堆積	底はやや凹凸があり内湾気味	ない	奈良以前		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N16r	0.56	27	楕円形?						121	82
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD170	62号土坑	10	RD172を除去後検出Ⅲ層?	RD172に切られる	黒色シルトの単層 RD172によって切られているため1層より上に堆積土があったか不明	ほぼ平坦	ない	不明		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M11m	1.43×1.05	30?	隅丸方形						121	82
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD171	61号土坑	10	RD172を除去後検出Ⅲ層?	RD172に切られる	黒色シルトの単層 RD172によって切られているため1層より上に堆積土があったか不明	底面 すり鉢	ない	不明		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M12n	1.50×1.21	23?	楕円形						121	82
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD172	60号土坑	10	Ⅲ層	RD170、RD171を切る	暗褐色シルトの単層 底面近くに拳大の礫	底面はやや波打つ	土師器甕破片、内黒土師器坏破片など総量75g 1点(653)を図化 検出面から永楽通寶1点(流れ込みか?)	奈良?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M12m	2.40×1.69	17	歪んだ長方形						121	83 210 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD173	63号土坑	10	Ⅲ層	PP124、PP125に切られる	5層 レンズ状堆積 2層は十和田a?の1次堆積 自然堆積	ほぼ平坦	内黒、非内黒土師器坏破片、須恵器坏破片など515g 655~658の4点を図化	平安 (9C後~10C初頭?)		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M18o	1.30×1.30	23	円形						121	83 210 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD174	45号土坑	10		RB008のPP99、RZ012に切られる	黒褐色土単層 削平のため堆積状況は判断できず	平坦	小形の磨石(659) 作業部位は部分的に表、裏3面	古代		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M19t	1.25×0.66	14	楕円形						121	83 210 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD175	64号土坑	10	Ⅲ層	ない	2層 自然堆積	底面はやや凹凸	1層から土師器甕、内黒、非内黒土師器坏破片127g うち2点(660、661)を図化	平安 (9C末~10C初頭)		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M19o	1.64×1.06	15	楕円形						122	83 210 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD176	71号土坑	10	Ⅲ層	ない	黒褐色土の単層 焼土粒、炭化物粒、灰白色パミス混入 人為堆積	底面は凹凸	土師器甕破片、内黒、非内黒土師器坏破片 154g	平安 (9C後葉~10C初頭)		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M18o	1.28×1.02	18	隅丸長方形						122	84
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD177	65号土坑	10	Ⅲ層	ない	2層 レンズ状堆積 自然堆積	底面はやや凹凸	土師器甕破片、内黒、非内黒土師器坏破片 335g うち3点を図化(662~664)	平安 (9C後葉~10C初頭)		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M20n	1.36×0.62	11	楕円形						122	84 210 146

報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD178	37号土坑	10	Ⅲ層	PP39を切る	小礫を若干含む黒褐色土単層 自然堆積か RD179と類似	平坦	非内黒土師器底部破片9g	古代	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						122	84
3N22f	0.76×0.68	9	隅丸長方形							
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD179	38号土坑	10	Ⅲ層	ない	黒褐色土単層 自然堆積RD178と類似	平坦	ない	古代	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						122	84
3N22g	0.72×0.68	9	隅丸長方形							
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD180	74号土坑	10	Ⅳ層上面	RA065に切られる	黒～黒褐色土単層 削平のため堆積状況判断できず	平坦	非内黒土師器坏片10g	平安	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						122	85
3M20n	0.74×0.81	17	楕円形?隅丸長方形?							
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD181	42号土坑	10	Ⅲ層上面	RD182を切る	黒褐色土単層 夾雑物ない。短期間の埋没。削平のため堆積状況判断できず	平坦	底面直上、埋土から土師器 甕1点(665)を図化	平安	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						123	85
3M22s	1.37×0.84	21	楕円形						211	146
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD182	43号土坑	10	Ⅳ層上面	RB008のPP46、RD181、PP58、PP65に切られる	黒褐色土単層 削平のため堆積状況判断できず	平坦	土師器片63g 1点(666)を図化	平安	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						123	85
3M22s	1.37×0.99	27	隅丸方形						211	146
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD183	41号土坑	10	Ⅳ層上面	ない	黒褐色土主体Ⅳ層土の混入により2層に細分 削平のため堆積状況判断できず	中央付近に凹凸	土師器甕破片など25g	古代	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						123	85
3M23q	1.22×1.12	23	方形							
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD184	69号土坑	10	Ⅳ層上面	RA064を切る	上層黒褐色土 下層暗褐色土主体炭化物、焼土粒少量 混入4層に細分 自然堆積	平坦	土師器及び須恵器破片55g	平安	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						123	86
3M23p	1.08×0.96	30	楕円形							
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD185	24号土坑	10	Ⅴ層	ない	黒褐色土単層 河原石混入 河川の氾濫による堆積?	掘り方のような凹凸が顕著	ない	古代	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						124	86
3M25r	0.87×0.58	9	台形							
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD186	23号土坑	10	Ⅴ層	PP18、RB008のPP12に切られる	黒褐色土単層 削平のため堆積状況判断できず	掘り方のような凹凸	土師器甕破片、須恵器片11g	古代	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						124	86
3M25s	2.64×1.13	15	不整形							
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD187	44号土坑	10	Ⅲ層	ない	上層拳大の礫を大量に含む下層は礫を含まない2、3層は人為堆積 他は自然堆積	平坦	上層から須恵器坏破片、土師器甕破片38g	平安	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						124	86
3N23a	1.16×1.02	33	楕円形							
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD188	53号土坑	10	Ⅱ b層	RD189を切り、RA067に切られる	黒褐色土主体3層2、3層は人為堆積 1層不明 拳大礫含む	掘り方があり凹凸が激しい	土師器甕破片、1層下位667	平安	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						124	87
3N24c	1.16	20	円形						211	146
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD189	58号土坑	10	Ⅱ b層	RA067、RD188に切られる	2層 黒褐色土主体 下層は人為堆積 上層は不明	掘り方があり凹凸が激しい	ない	古代	図	写図
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						124	87
3N24c	0.87	19	円形							

4 土坑

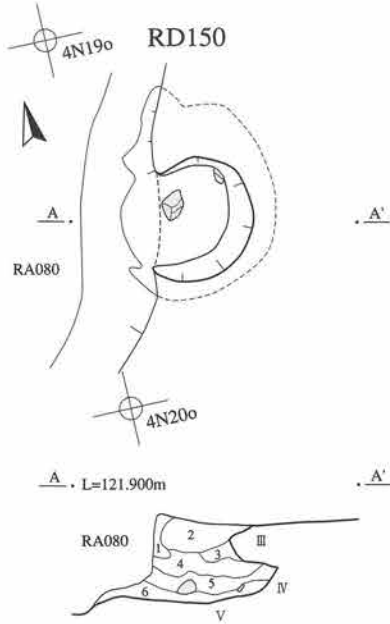
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD190	9号土坑	9	II b層	ない	締りのない黒褐色土主体 焼土、炭片を多く含む 人為堆積	中央が深く緩やかに内湾	土師器細片5g	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N4i	1.47×1.32	32	不整形						125	87
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD191	10号土坑	9	II b層下位	ない	上層 黒色土 自然堆積 下層IV層ブロック混入 人為堆積	平坦 掘り方がある	ない	平安?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N6j	1.29×1.22	18	隅丸方形						125	87
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD192	15号土坑	9	III層	RG023を切る・断面図なし	焼土粒は含まない RD193と類似	掘り方があり凹凸が激しい	平安時代の内黒土師器坏破片13g	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N8h	1.46×1.32	29	隅丸長方形						125	88
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD193	14号土坑	9	II b層下位	RG023と重複(新旧不明)	上層黒色土 中層IV層ブロックを含む黒褐色土 下層は黒褐色土粒を含む褐色土 焼土粒含む 上層以外は人為堆積	掘り方状に凹凸が激しい	平安時代の内黒土師器坏破片19g	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N9g	1.10×1.05	23	隅丸方形						125	88
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD194	7号土坑	9	II b層下位	ない	混入物の少ない黒色土 3層自然堆積	平坦	ない	古代?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N11h	0.92×0.84	17	楕円形						126	88
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD195	25号土坑	9	V層上面	ない	黒褐色土主体5層攪乱、木根の影響あり 主体となる2層はレンズ状の自然堆積	開口部に比し、非常に狭くくぼむ	土師器、須恵器片67g 埋土上層から土師器碗(668)1点図化	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4o8b	1.27	59	円形						126 211	88 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD196	73号土坑	10	III層	ない	中層以下は人為堆積 中層に褐色土ブロック、焼土ブロックを含む	掘り方があり凹凸が激しい	外面に削りのある土師器甕破片32g 1点を図化(669)	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N16h	1.23×0.90	23	不整形						126 211	89 146
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD197	6号土坑	10	III層	RA081を切る	上層は黒褐色土 下層は焼土や炭片を含む暗褐色土 人為か自然か堆積状況不明	中央が深く、内湾	土師器甕体部破片 土師器坏破片63g ロクロ使用土師器甕(670)	平安以降		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4O17b	0.85×0.81	28	円形						126 211	89 147
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD198	16号土坑	10	IV層上面	RG026と重複(新旧は不明)	4層 黒色～黒褐色土主体 自然堆積	底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる	削りのある土師器甕破片、内黒土師器坏破片151g 図化した1点(294)はRA081カマド埋土の破片と接合	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4o19e	1.88×1.26	28	楕円形?						126 211	89 124
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD199	5号土坑	10	II b層	ない	2層に細分 黄褐色土ブロック、焼土ブロック、粘土ブロック含む 人為堆積	やや内湾気味	土師器甕口縁部、体部、非内黒土師器坏破片97g 1点(671)を図化	平安(9c後葉～10c初頭)		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N18q	0.44×0.40	11	楕円形						127 211	89 147
報告名	フィールド名	回数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD200	19号土坑	10	III層下面	RA080号住に切られる?	7層に細分 しまりのない黒～黒褐色土主体 人為か自然か不明	平坦	土師器、須恵器細片3g 鉄器(672)は断面方形、頭部側は軸と比して薄い。扁平にして折り曲げて頭部を作り出している。	切られているとすれば平安以前?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N18l	1.37×1.11	61	楕円形						127 211	90 147

IV 検出された遺構と遺物

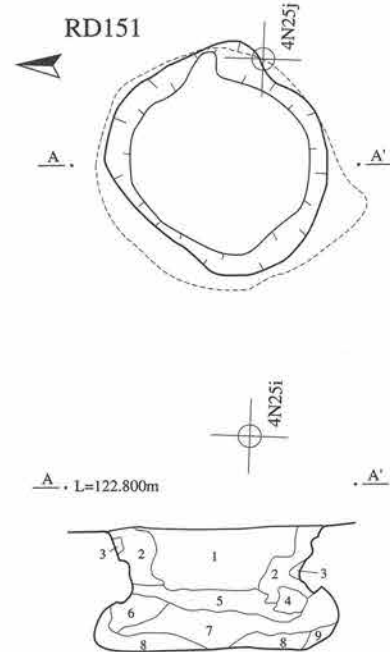
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD201	54号土坑	10	Ⅲ層	ない	褐色土ブロックを少量含む黒色土自然堆積	凹凸があり、内湾する	ない	古代		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N23g	0.88×0.83	21	円形						127	90
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD202	72号土坑	10	Ⅲ層上面	ない	混入物の少ない黒色土 単層 自然堆積	平坦	土師器甕破片76g 1点(673)を図化 674は中砥 表面と右側面一部を作業面 右側面が使用頻度が高い。	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N25y	1.24×1.02	15	隅丸長方形						127 211	90 147
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD203	35号土坑	10	Ⅳ層上面	RA092に切られる	上半攪乱 黒色土主体 焼土含む 人為堆積?	凹凸があり、特に西側が深い	内黒、非内黒土師器坏破片 6g	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N7a	1.20×1.18	23	隅丸長方形						127	90
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD204	33号土坑	10	Ⅳ層上面	RA095、RD205に切られる	黒色土主体 2層に細分 自然堆積	底面、掘り方はすり鉢状ではっきりしない	ない	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N16n	0.80×0.70	28	不整形円形						128	91
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD205	31号土坑	10	Ⅳ層上面	RD204、RD206を切る	3層に細分 自然堆積	凹凸がありはつきりしない	1層上面から内黒、非内黒の土師器坏、甕、須恵器坏破片 105g 1点(675)を図化 下層から縄文土器 48g	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N18m	2.60×1.40	34	不整な楕円形						128 212	91 147
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD206	32号土坑	10	Ⅳ層上面	RD205、RA094に切られる	2層に細分 黒色土主体 自然堆積	すり鉢状ではつきりしない	土師器壺体部破片 非内黒土師器坏破片 内外面黒色の土師器坏 40g	平安		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N16l	0.52×0.48	26	円形						128	91
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD207	30号土坑	10	Ⅳ層上面	RG040に切られる	自然堆積 単層	凹凸がありはつきりしない	ない	平安?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N20m	1.52×0.80	36	不整な円形						128	91
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD208	34号土坑	10	Ⅳ層上面	RG040に切られる	自然堆積 単層		剥片	平安?	木根による攪乱の可能性もあり	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N21n	2.28×1.37	40							128	91
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD209	46号土坑	10	Ⅲ層上面	RG038を切り、RZ011に切られる	黒色土主体 3層下層ほど河原石の混入顕著 レンズ状の自然堆積	目立だった凹凸がない	ない	近世		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M15u	2.27×1.50	67	不整形						129	91
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD210	47号土坑	10	Ⅲ層上面	RG039に切られる	黒色土主体 2層河原石の混入 レンズ状の自然堆積	目立だった凹凸がない	ない	近世?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M17t	1.90×1.60	35	円形						129	92
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD211	39号土坑	10	Ⅲ層上面	PP84を切る	上層黒色 下層黒褐色 夾雑物少ない 自然堆積	底面は掘り方のような凹凸が顕著 平坦に造っておらず、開口した状態で凹凸があったと見られる	ない	近世?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M19u	1.08×0.78	24	不整形						129	92

4 土坑

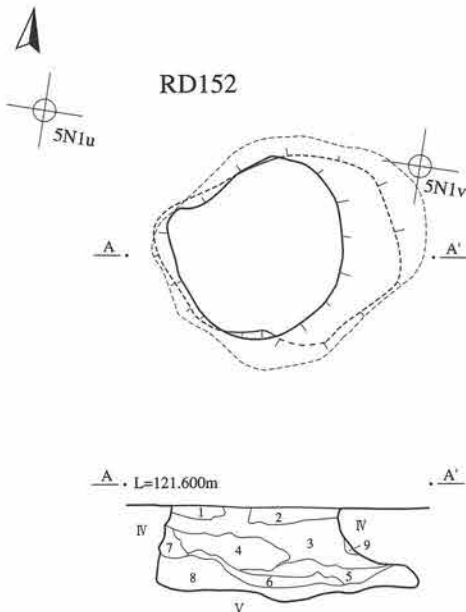
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD212	68号土坑	10	IV層上面	RG037に切られる	2層 底面に褐色砂 上位に地山ブロック含む黒褐色土下層との層理面うねる 人為堆積	RG037に切られて不明	ない	近世?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M16u	2.11×1.22	29	不整形						129	92
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD213	70号土坑	9	II b層上面	RA072を切る	黒色土主体 4層 夾雑物少ない 自然堆積	皿状に浅くくぼむ	上位から非内黒土師器坏、中位から土師器 甕 破片 10g	近世?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N4k	1.19×0.77	38	楕円形						130	92
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD214	48号土坑	10	IV層上面	ない	黒色土3層 全体に1cmの河原石流入 夾雑物少ない 自然堆積	開口部に比し、狭くややくぼむ	ない	近世以降		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M10x	1.56×1.47	64	不整形						130	93
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD215	49号土坑	10	IV層上面	ない	黒色土主体2層 全体に河原石流入 レンズ状の自然堆積	開口部に比し、非常に狭くややくぼむ	ない	近世以降		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M11x	1.36×1.11	58	楕円形						130	93
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD216	40号土坑	10	IV層上面	RB008のPP67を切る	黒褐色土の単層 削平のため堆積状況判断できず	平坦	土師器、須恵器坏 破片6g	近世以降		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M23p	1.12×0.95	10	楕円形						130	93
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD217	50号土坑	10	II b層上面	ない	黒色~黒褐色土主体 中央の下位に締りなくボロボロ柱穴かも? 人為堆積	内湾	ない	不明		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3N24e	0.64×0.40	67	長楕円形						130	93
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD218	8号土坑	9	II a層	ない	木根のはびこる締りのない黒褐色土単層 比較的新しい	平坦	ない	不明古代より新しい		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N6l	0.74×0.76	28	楕円形						131	94
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD219	56号土坑	10	IV層上面	ない	夾雑物少ない レンズ状に近く自然堆積か	平坦	ない	近世以降?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4M25v	0.74×0.64	25	楕円形						131	94
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD220	57号土坑	10	IV層上面	ない	黒褐色土単層 焼土ブロック、暗褐色土ブロックの混入あり 人為堆積	一部しか残存していないため不明	外面に削りのある土師器甕破片、内黒土師器坏破片 6g	近世以降?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5M2x	0.70×0.21	11	不明						131	94
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD221	59号土坑	10	IV層上面	ない	黒褐色土主体4層 壁際や底面は崩落土 自然堆積	平坦	ない	近世以降?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
5N4a	0.85×0.58	19	楕円形						131	94
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD222	2号墓塚	10	II層上面	ない	黒褐色土単層 炭化物微量 削平のため層厚がない	平坦	土師器破片4g	近世以降	墓塚	
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
3M14v	0.52×0.33	7	不整形						131	95
報告名	フィールド名	次数	検出面	重複	埋土	底面・掘り方	遺物	時期	種類	
RD223	1号墓塚	9	II a層	ない	骨片、炭片を大量に含む黒色土単層 人為堆積	緩やかに内湾	腐食により銭種不明の古銭(676、677) 土師器細片	近世か中世?		
グリッド	開口部径(m)	深さ(cm)	平面形						図	写図
4N6j	0.56×0.35	9	楕円形						131 212	95 147



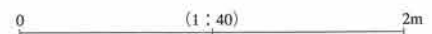
- RD150
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性、しまりなし 微細な焼土粒を少量含む シルト
 - 2 10YR2/1 黒 粘性、しまりなく ポロポロ シルト
 - 3 10YR2/2 黒褐 粘性、しまりなし III層起源の暗褐色土を全体に含む I層に色が類似 シルト
 - 4 10YR1.7/1 黒 粘性ややあり しまりややあり シルト
 - 5 10YR2/1 黒 粘性なし V層起源の褐色土ブロック、粒10%含む シルト
 - 6 10YR2/3 黒褐 粘性、しまりなし V層崩壊土 黒褐色土を含む 砂



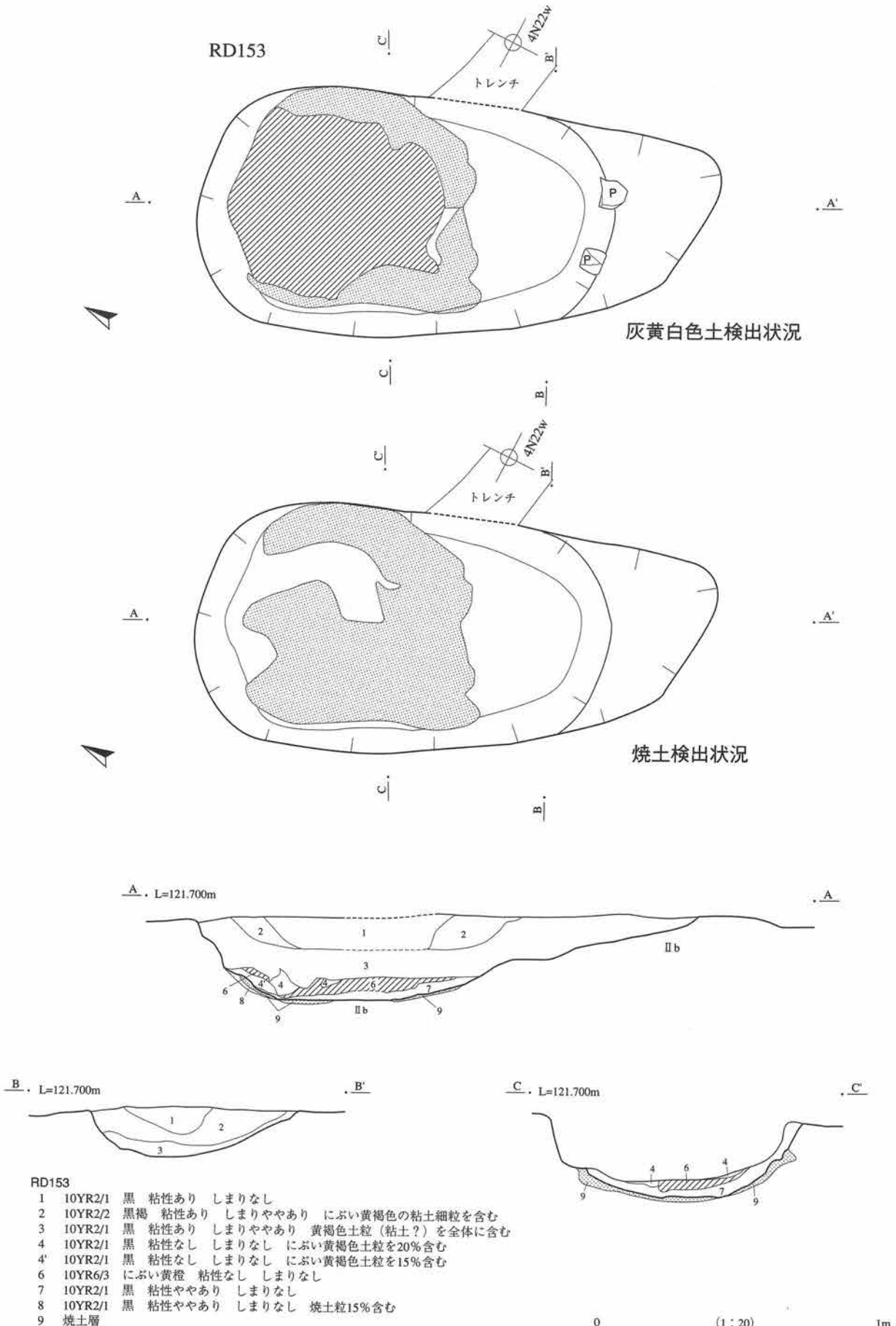
- RD151
- 1 10YR2/1 黒 粘性ややあり しまりあり シルト
 - 2 10YR3/4 暗褐 粘性あり しまり弱 10YR2/2黒褐色土ブロック50%含む シルト
 - 3 10YR4/6 褐 粘性あるが、ざらつく しまりややあり IV層崩壊土 砂質シルト
 - 4 10YR3/4 暗褐 粘性あり しまりなし IV層の崩壊土 シルト
 - 5 10YR2/2 黒褐 粘性に富む しまりなし 10YR3/4暗褐色土との混合土 シルト
 - 6 10YR4/4 褐 粘性に富む しまりなし 10YR3/4IV層崩壊土に暗褐色土ブロックを20%含む シルト
 - 7 10YR2/2 黒褐 粘性に富む しまりなし 両脇に暗褐色土 (V層崩壊土) ブロック50%含む シルト
 - 8 10YR2/3 黒褐 粘性あるが、少しざらつく しまりなし V層崩壊土 砂
 - 9 10YR4/4 褐 粘性弱 しまり弱 V層崩壊土 砂



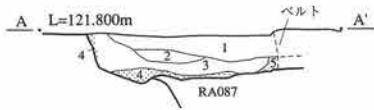
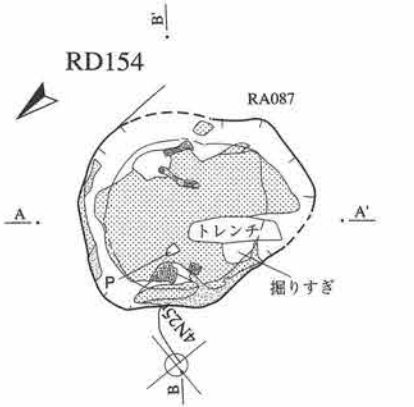
- RD152
- 1 10YR3/4 暗褐 粘性あり しまりなし IV層の崩壊土 シルト
 - 2 10YR2/1 黒 粘性あり しまりなし 炭粒を含む シルト
 - 3 10YR2/1 黒 粘性あり しまりなし IV層崩壊土のブロックを3%含む シルト
 - 4 10YR1.7/1 黒 粘性に富む しまりなし シルト
 - 5 10YR3/2 黒褐 粘性あり かたくしめる シルト
 - 6 10YR1.7/1 黒 粘性あり かたくしめる シルト
 - 7 10YR3/3 暗褐 粘性なし しまりなし 砂質シルト V層の崩壊土 黒褐色土を含む
 - 8 10YR3/4 暗褐 粘性ややあり IV層とV層の崩壊土 しまりなし 砂
 - 9 10YR2/3 黒褐 粘性ややあり しまりなし 砂質シルト



第115図 土坑 (1) RD150~RD152

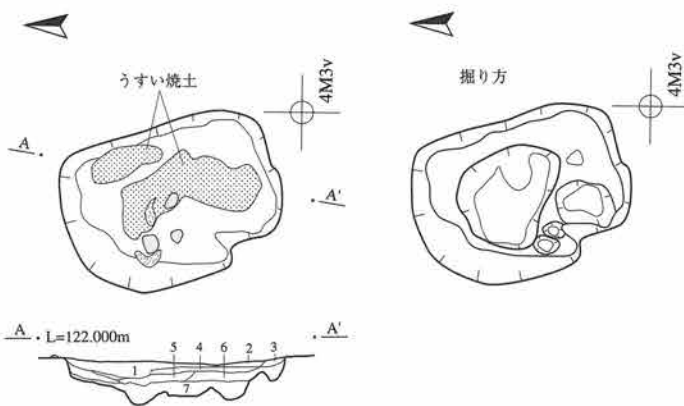


第116図 土坑(2) RD153

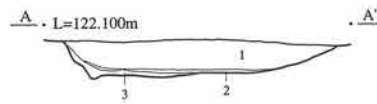
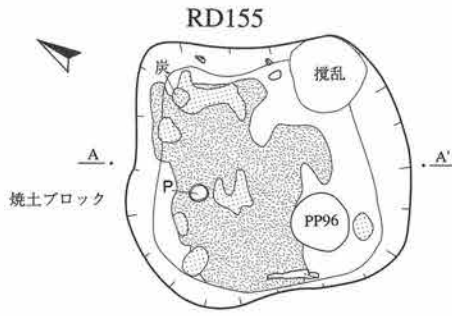


- RD154
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりややあり
IV層粒少量混入 II a層に起因か、RA087 1層と同じ
 - 2 10YR2/2~2/1 黒褐~黒シルト 粘性ややあり しまりなし
II b層に起因
 - 3 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりなし IV層ブロック多量
焼土粒、炭化物粒多量混 (人為堆積) III層起因
 - 4 7.5YR4/6 褐色シルト 粘性なし しまりあり 焼土層
 - 5 7.5YR1.7/1 黒 カーボン層 粘性、しまりなし 炭層

RD157

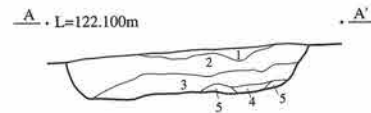
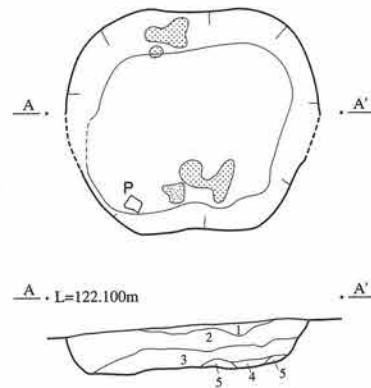


- RD157
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりあり 黄褐色土粒 炭粒を含む
 - 2 7.5YR3/2 黒褐 粘性なし しまりなし 焼土粒を多く含む
 - 3 10YR3/2 黒褐 粘性あり しまりなし
 - 4 7.5YR4/3 褐 粘性ややあり しまりあり 焼土粒をごく多く含む
 - 5 10YR2/1 黒 粘性にとむ しまりなし 炭粉を多く含む
 - 6 10YR2/2 黒褐 粘性ややあり しまりなし
 - 7 10YR3/2 黒褐 粘性あるもV層の砂粒が多くざらつく
V層の褐色土ブロック 3~10cm大15%斑を含む

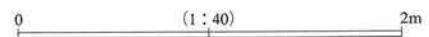


- RD155
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりやや有
焼土粒少量含む
 - 2 5YR6/8 橙色シルト 粘性なく、しまり中
焼土層 焼成面上面に土器片有
 - 3 10YR2/1 黒色シルト 粘性なく、しまりややなし
炭 (大ブロック) を少量含む

RD156

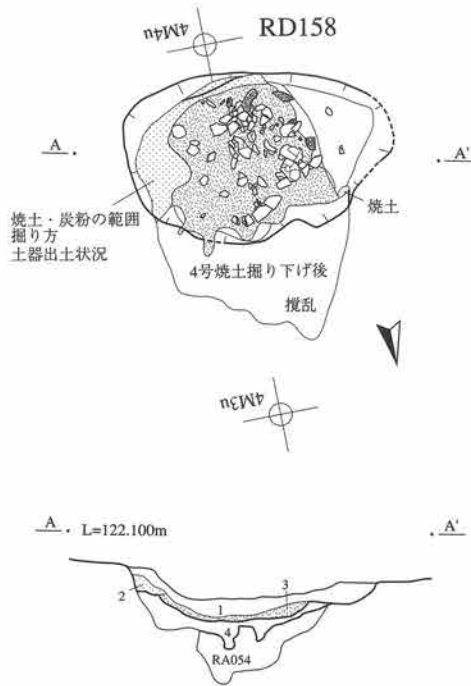


- RD156
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりややなし
 - 2 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややなし
IV層中ブロック極少量、IV層小ブロック少量含む
 - 3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまり中
炭化物中量、焼土粒少量含む
 - 4 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややなし
 - 5 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なく、しまりややなし
IV層小ブロック多量含む



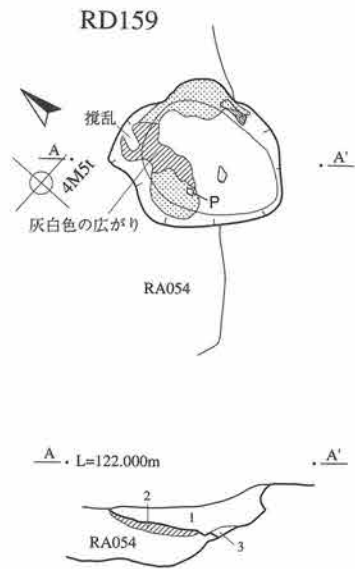
第117図 土坑 (3) RD154~RD157

4 土坑



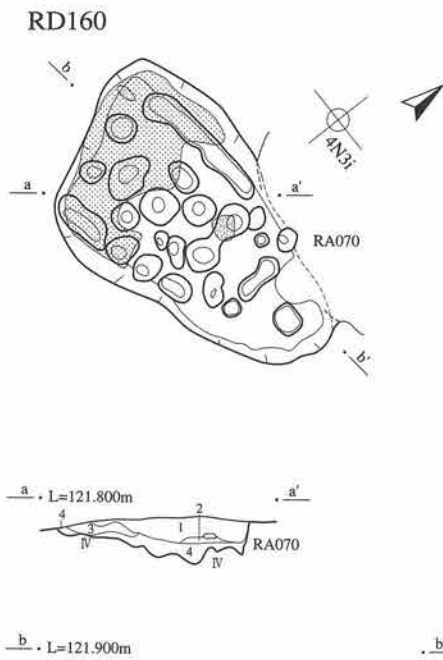
RD158

- 1 10YR3/2 黒褐 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック (0.5~2.5cm大) 5~7%
- 2 7.5YR3/2 黒褐 粘性、しまりあり 焼土粒を多く含む 7~10%
- 3 10YR2/1 黒 粘性、しまりなし 炭粉を多く含む
- 4 10YR3/4 暗褐 粘性あり しまりなし 褐色土粒3~5%、炭粒少量含む



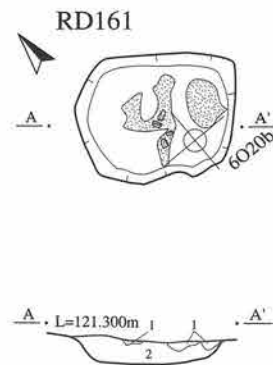
RD159

- 1 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし
- 2 5YR4/8 赤褐 粘性、しまりなし
10YR5/3にぶい黄褐色の灰を含む
- 3 10YR3/3 暗褐 壁の崩壊土



RD160

- 1 10YR1.7/1 黒 粘性あり しまりあり 褐色土ブロック2%
- 2 10YR2/2 黒褐 粘性ややあり しまりなし 焼土粒を含む
- 3 5YR1.7/1 黒 粘性 しまりなし 焼土15% 炭粒含む
- 4 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし 褐色土ブロック10% 上層に炭粉含む

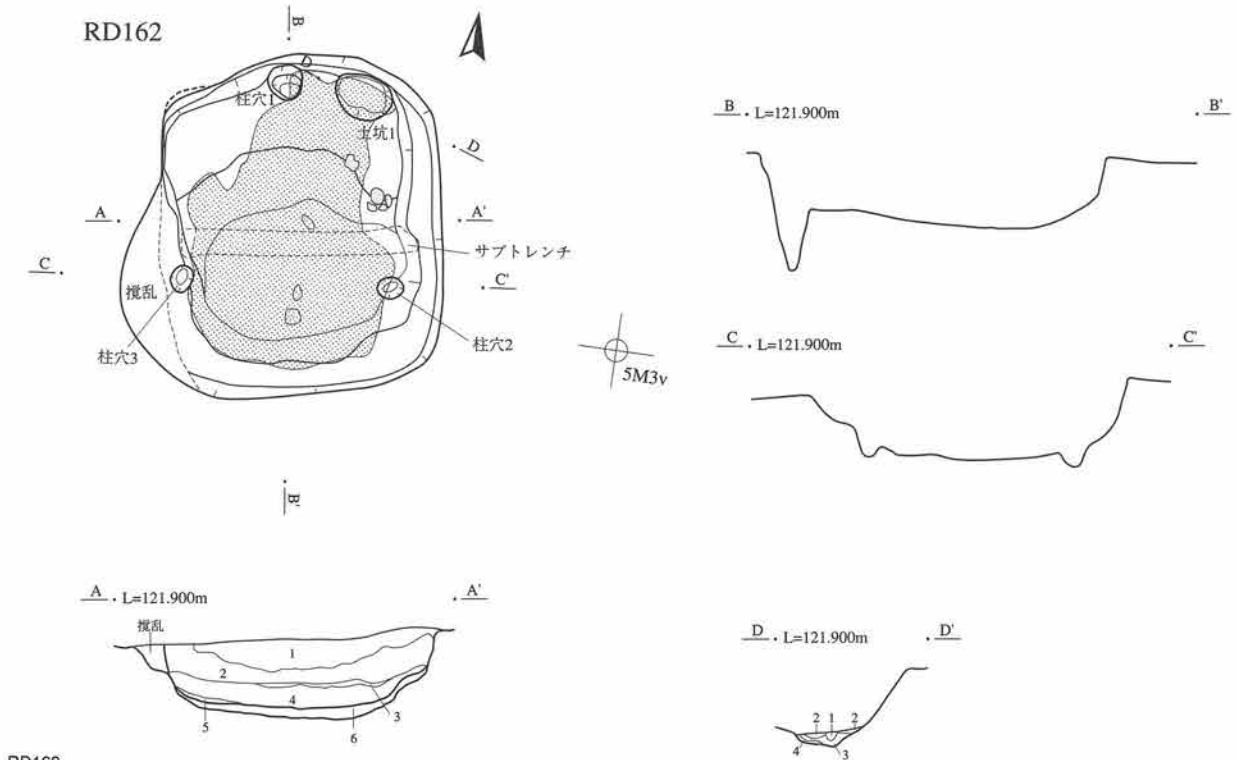


RD161 (RA063の南東に位置)

- 1 10YR2/1 黒色シルト 粘性 中 しまり 疎
焼土・炭多量に含む
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性 強 しまり やや密
褐色土ブロック少量含む

0 (1:40) 2m

第118図 土坑 (4) RD158~RD161

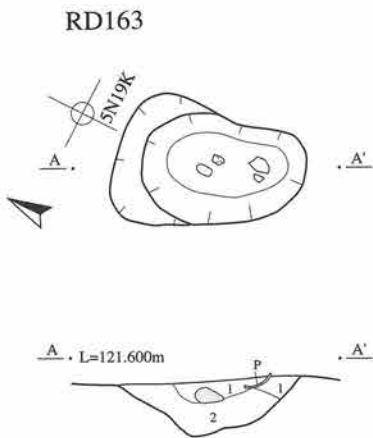


RD162

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性なく、しまりやや有
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまり中 IV層粒少量、IV層小ブロック極少量、焼土粒少量含む
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまり中 炭化物・焼土ブロック多量含む
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりやや有 IV層粒多量、焼土粒少量、炭化物粒少量含む
- 5 10YR2/1 黒色シルト 粘性なく、しまりやや有 IV層粒少量含む
- 6 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性中、かたくしまっている 黒褐色シルトブロック多量含む

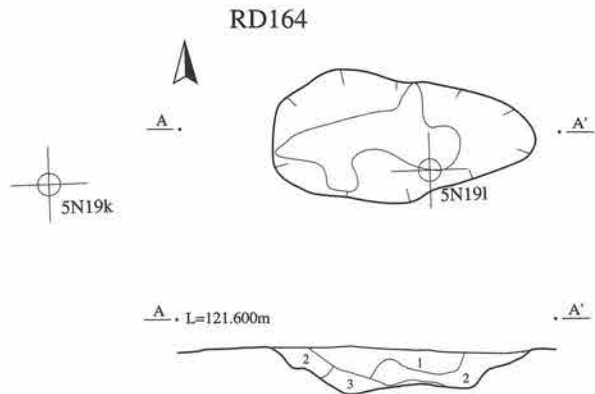
RD162内土坑1

- 1 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性なく、しまりやや有 黒褐色土ブロック少量含む
- 2 10YR2/1 黒色シルト 粘性なく、しまりやや有 IV層粒少量含む
- 3 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なく、しまりやや有 IV層小ブロック中量含む
- 4 10YR4/4 褐色シルト 粘性なく、しまり中 黒褐色シルトで汚れている



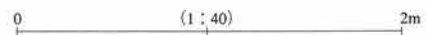
RD163

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまりやや密 褐色ブロック多φ2~3cm30%含む
- 2 10YR2/2 黒色シルト 粘性強 しまり密 褐色ブロックφ5~10cm1%含む 斑状をなす

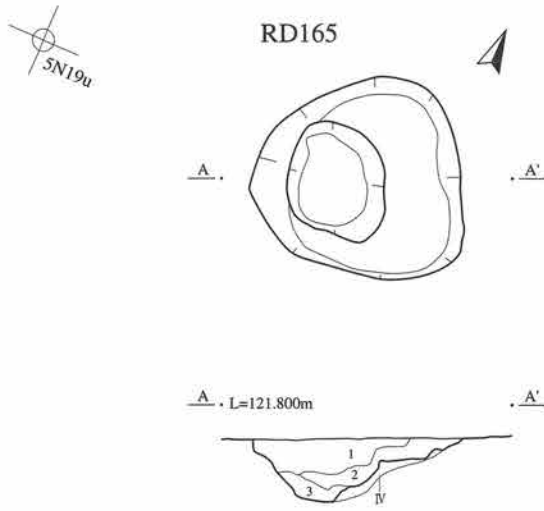


RD164

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性強 しまり中
- 2 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまりやや密 褐色土粒φ5mm以下を10%含む
- 3 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中

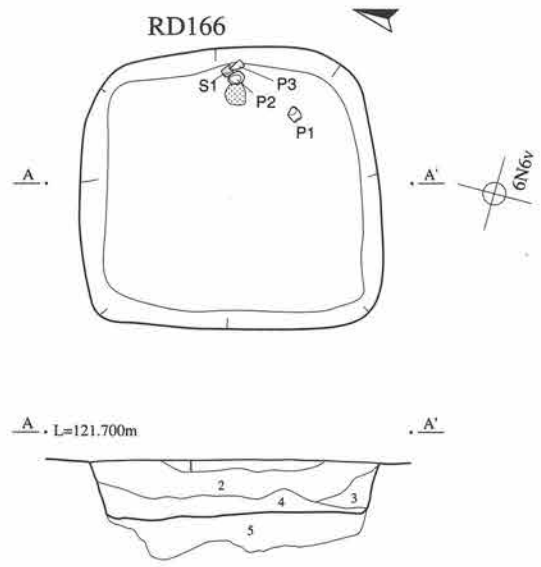


第119図 土坑 (5) RD162~RD164



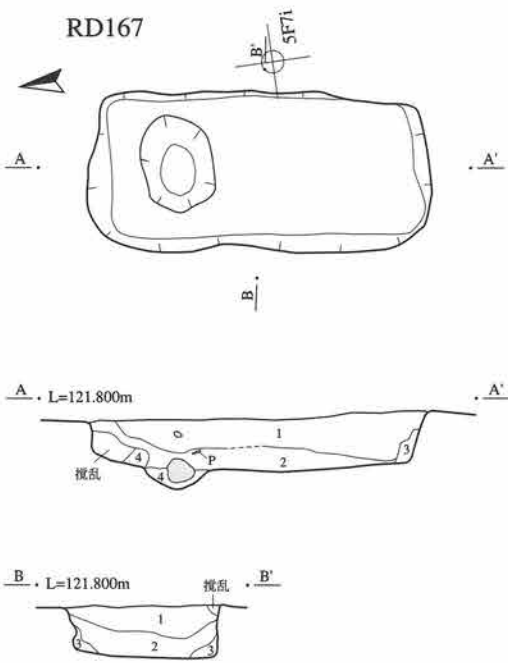
RD165

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 褐色粒5%含む
- 2 10YR2/1 黒色シルト 粘性中 しまり中 褐色粒10%未満含む
- 3 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性強 しまりやや疎 褐色粒10%含む



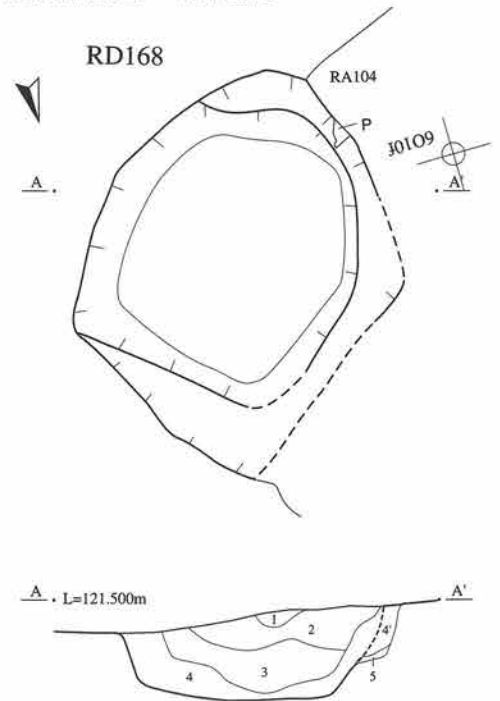
RD166

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり IV層粒少量含む
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり IV層ブロック少量含む
- 3 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり IV層小ブロック含む
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり IV層粒極少量含む
- 5 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なく、しまりややなし IV層粒多量、黒褐色シルト粒中量含む



RD167

- 1 10YR2/3 黒褐 粘性 しまりなし IV層起源の黄褐色土ブロック (0.5~2cm大) 3% シルト
- 2 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりややあり シルト
- 3 10YR4/4 褐 粘性なし 砂 V層の崩壊土
- 4 10YR2/2 黒褐 粘性ややあり しまりややあり シルト

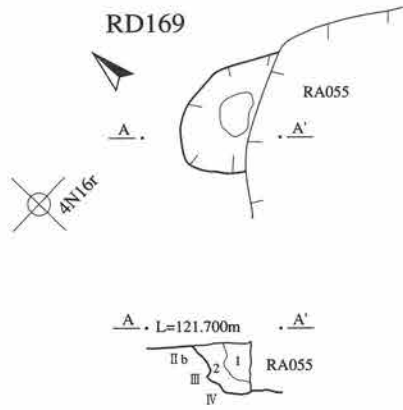


RD168

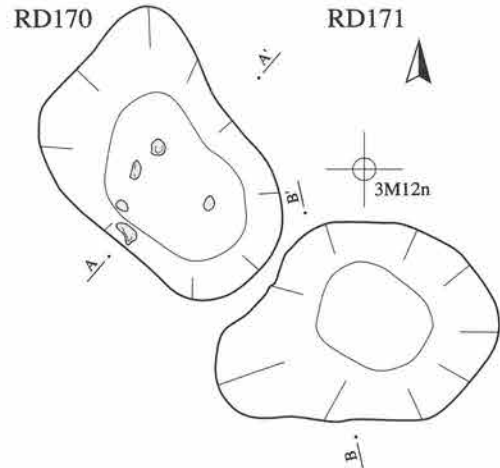
- 1 10YR2/1 黒色シルト 根による攪乱
- 2 10YR2/2黒褐色地に10YR4/4褐色のブロック シルト II層とIV層の混土 埋め戻した土と考えられる
- 3 10YR2/1 黒色シルト 根による攪乱多く、一部IV層ブロック混じる 死体が腐食したものか
- 4 10YR2/2黒褐色地に10YR4/4褐色のブロック (一部霜降り状) シルト 2層とほとんど同じだが、2層より明るい 埋め戻した土と考えられる 半截時には4層と全く区別できなかったが、完掘時にV層ブロックの入り方の違いで区別された RA104の覆土
- 5 10YR5/6黄褐色地に10YR4/1褐色混じる 砂質シルト IV層の汚れ再堆積あるいはIV層の掘りすぎ RA104に帰属

0 (1:40) 2m

第120図 土坑 (6) RD165~RD168

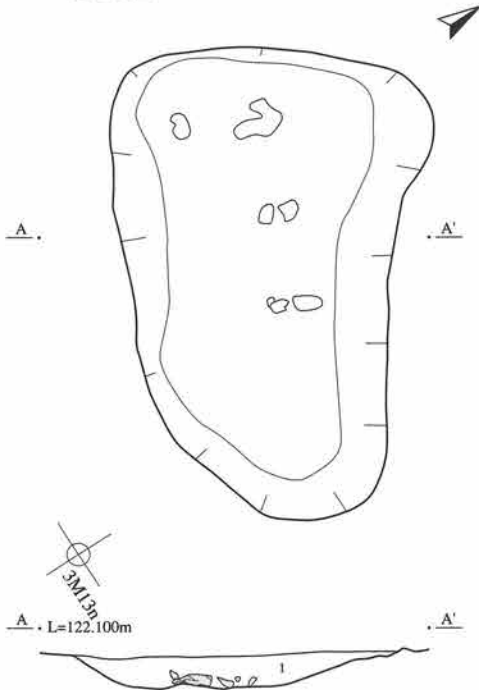


- RD169
- 1 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりなし
IV層起源の黄褐色土を40%含む
人為堆積 シルト
 - 2 10YR2/1 黒 粘性ややあり しまりなし
自然堆積土 シルト



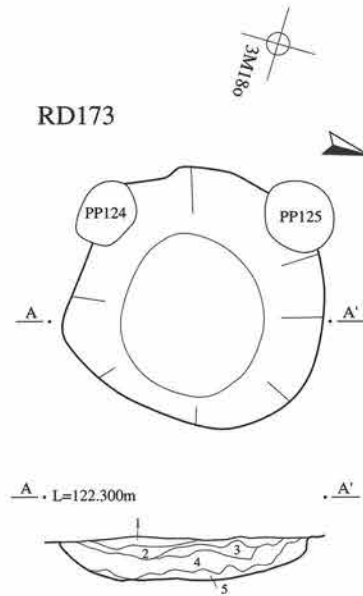
- RD170
- 1 10YR1.7/1 黒色シルト
しまりなし
粘性やや弱
- RD171
- 1 10YR1.7/1 黒色シルト
しまりややなし
粘性やや強

RD172



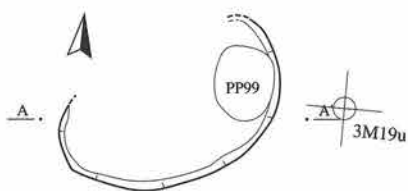
- RD172
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややあり 粘性弱

RD173

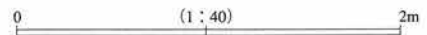


- RD173
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややなし 粘性やや強
 - 2 10YR7/1 灰白色サンド しまりあり 粘性なし To-a?
 - 3 10YR3/2 黒褐色シルト しまりなし 粘性やや強
5YR3/6暗赤褐色シルト5%混入
 - 4 10YR2/2 黒褐色シルト しまりややあり 粘性やや強
 - 5 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややあり 粘性弱

RD174

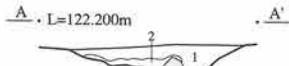
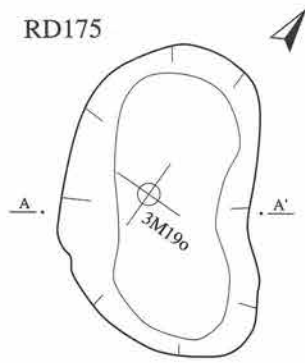


- RD174
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややあり
IV層小ブロック少量含む

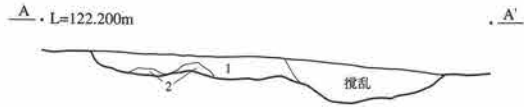
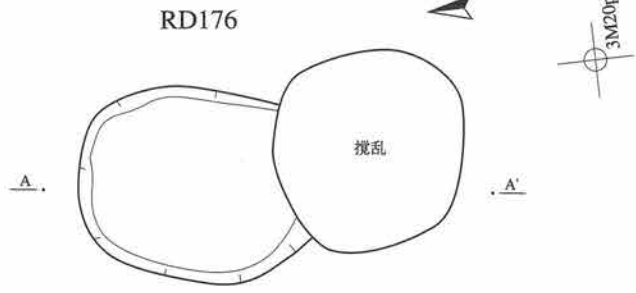


第121図 土坑 (7) RD169~RD174

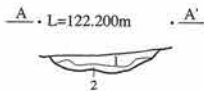
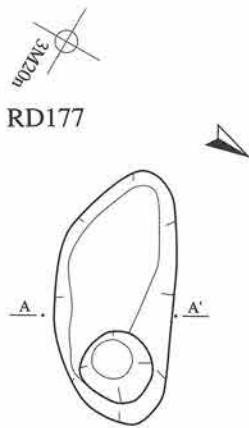
4 土坑



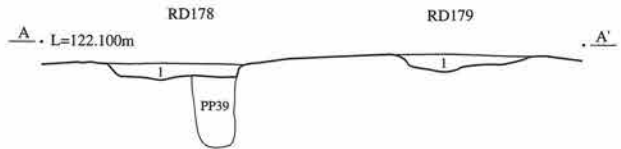
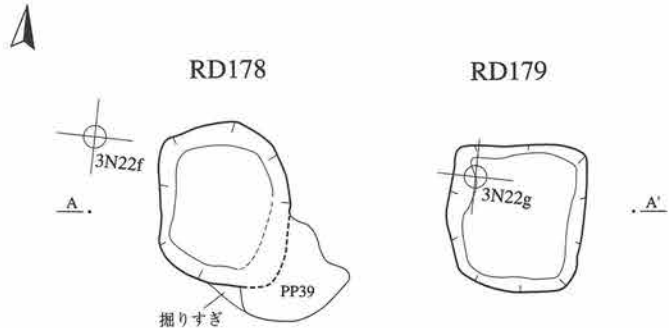
- RD175
- 1 10YR1.7/1 黒色シルト
しまりややあり 粘性やや強
 - 2 10YR3/4 暗褐色シルト
しまりややなし 粘性なし



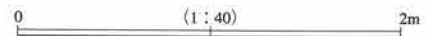
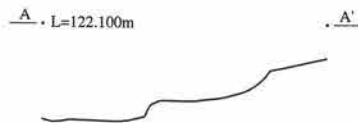
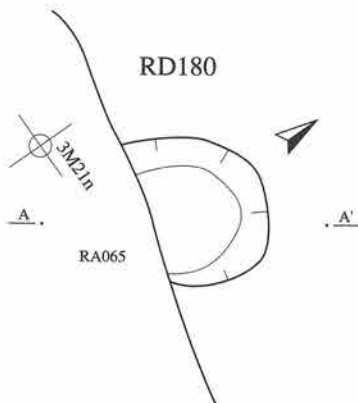
- RD176
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性中、しまりやや有 焼土粒中量、炭化物粒中量、灰白色バミス中ブロック少量含む
 - 2 10YR4/4 褐 粘性なく、しまり中



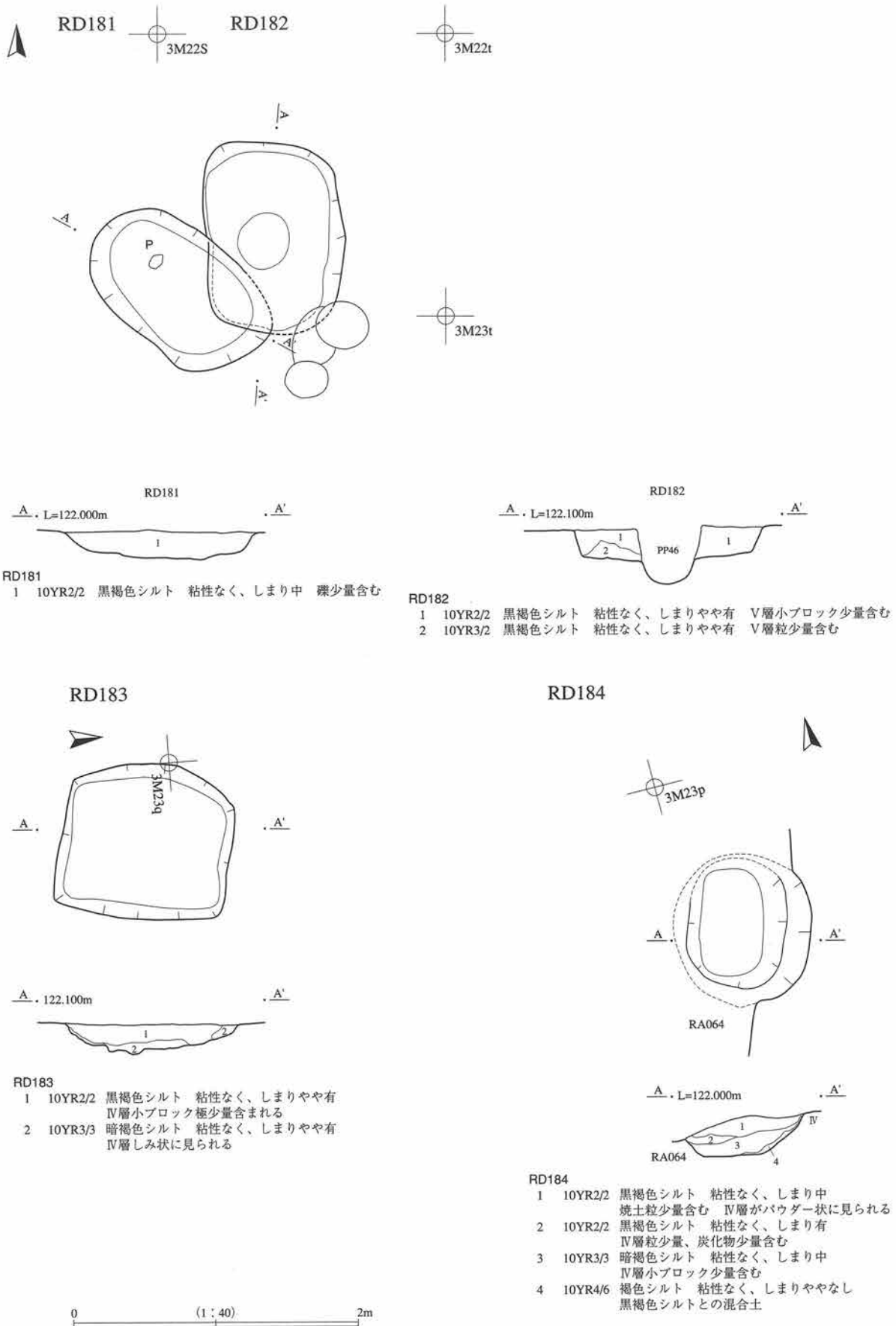
- RD177
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややなし 粘性やや強
 - 2 10YR4/4 褐色シルト しまりあり 粘性なし
砂質を呈する 10YR2/2黒褐色シルト10%混入



- RD178
- 1 10YR2/3 黒褐 粘性、しまりなし 小礫3%含む シルト
- RD179
- 1 10YR2/3 黒褐 粘性、しまりなし シルト

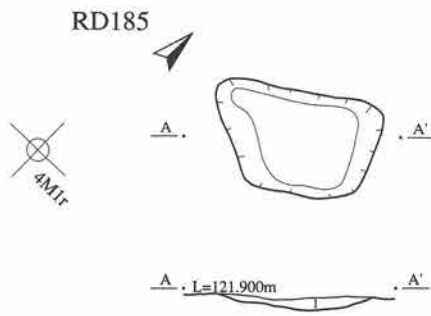


第122図 土坑 (8) RD175~RD180

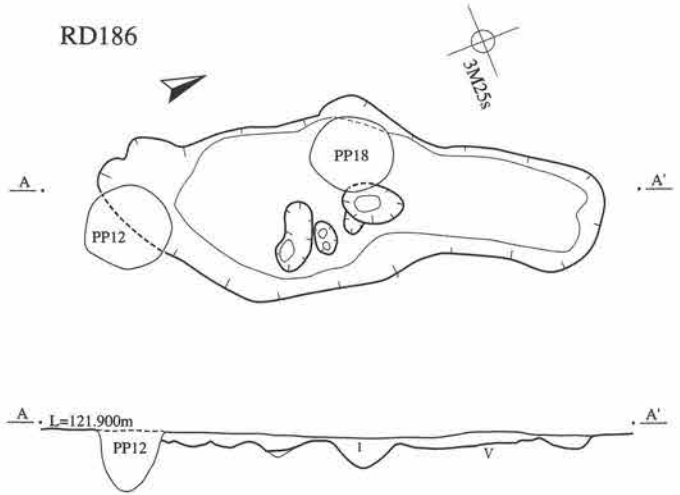


第123図 土坑 (9) RD181~RD184

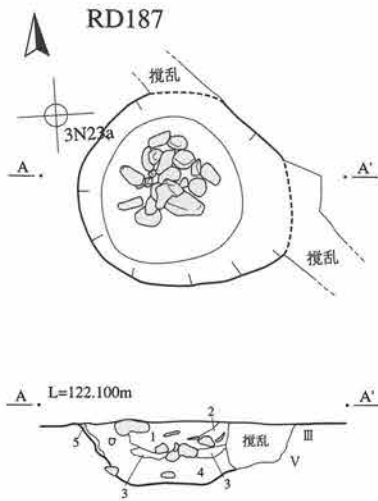
4 土坑



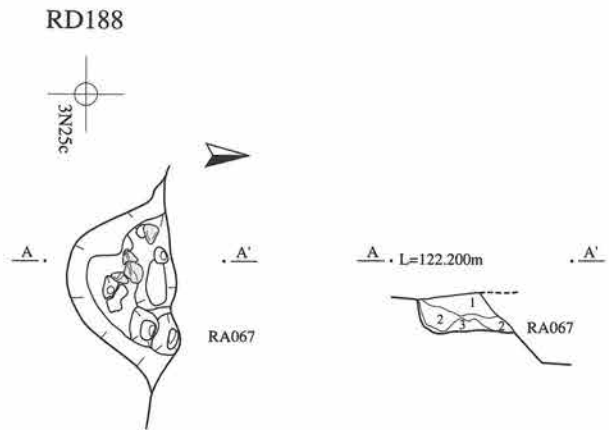
RD185
1 10YR2/2 黒褐 粘性なく、しまり有り
φ2~5cmの礫を多量含む



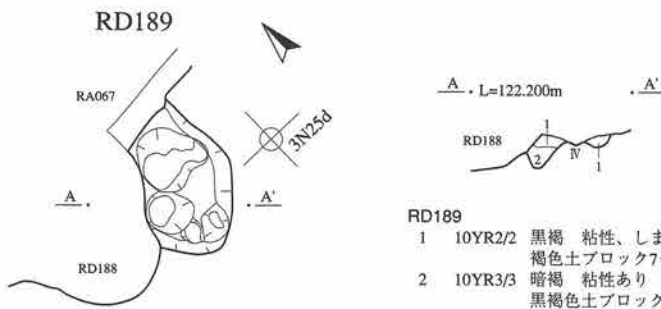
RD186
1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりあり 東側には礫を多く含む



RD187
1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり しまりあり
2 10YR2/2 黒褐色シルト 1層よりやや明るい 粘性なし しまりあり 微細な褐色土粒、焼土粒を少量含む
3 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なし しまりあり V層起源の褐色土粒5%
4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりあり IV層、V層起源の褐色土ブロック1~5cm大7%
5 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性なし しまりあり IV~V層の崩壊土



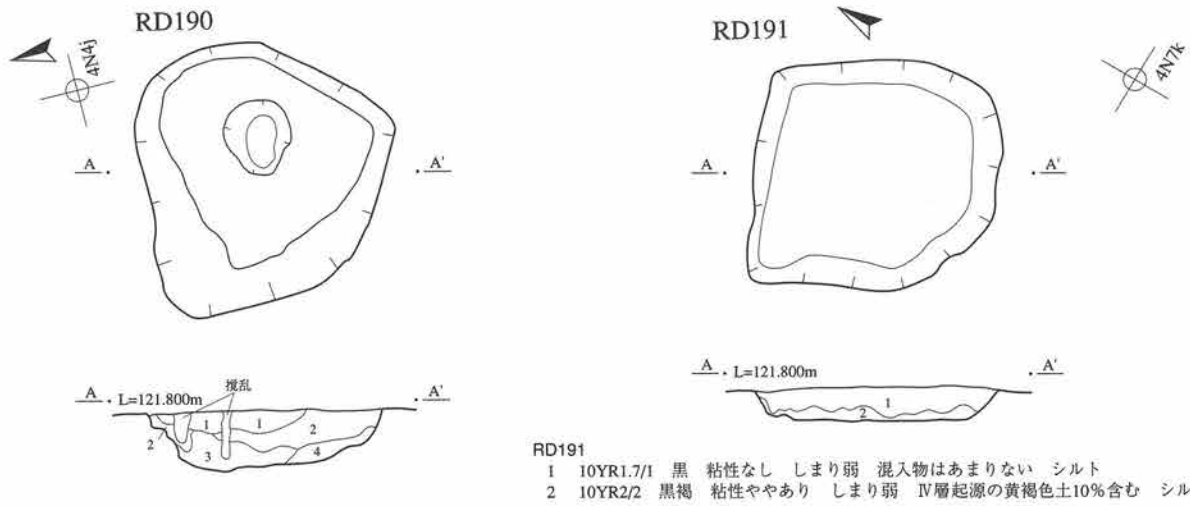
RD188
1 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし
2 10YR2/3 黒褐 粘性あり しまりなし 黄褐色土ブロック(1~3cm大)10%
3 10YR5/6 黄褐 粘性、しまりなし 黒褐色土ブロック10%



RD189
1 10YR2/2 黒褐 粘性、しまりなし 褐色土ブロック7~10%
2 10YR3/3 暗褐 粘性あり しまりなし 黒褐色土ブロック10%

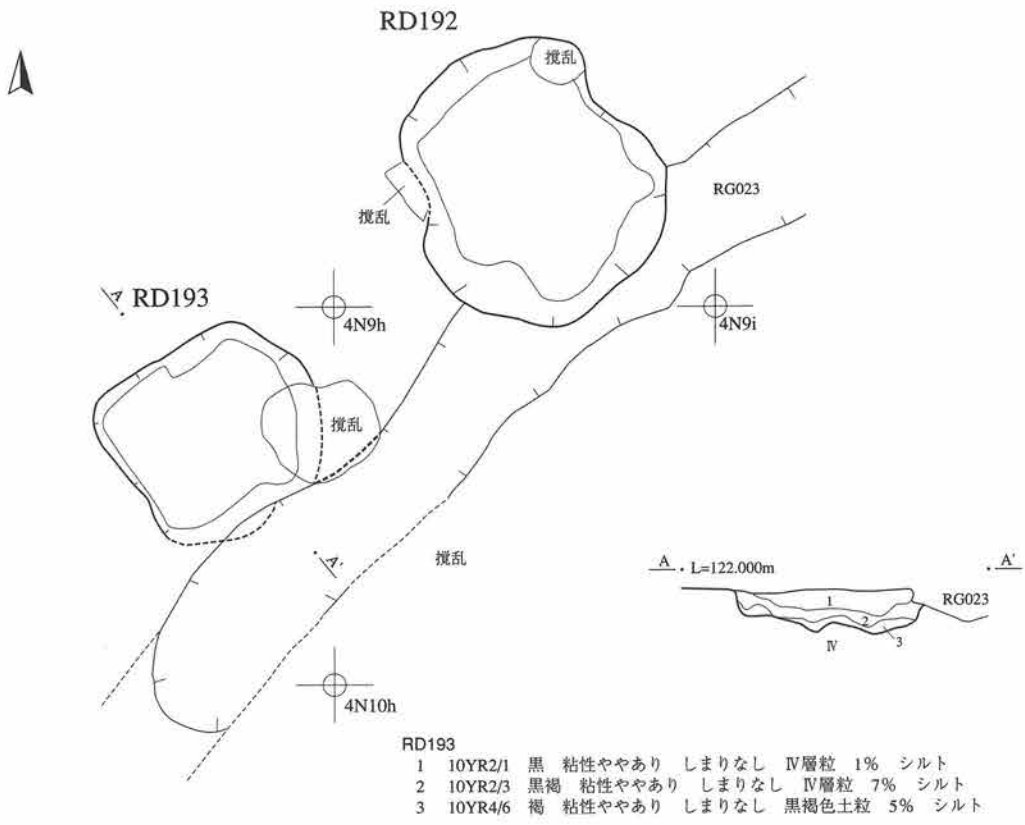
0 (1:40) 2m

第124図 土坑 (10) RD185~RD189

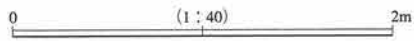


- RD191
- 1 10YR1.7/1 黒 粘性なし しまり弱 混入物はあまりない シルト
 - 2 10YR2/2 黒褐 粘性ややあり しまり弱 IV層起源の黄褐色土10%含む シルト

- RD190
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまり弱 黄褐色土ブロック (IV層) 5%含む シルト
 - 2 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまり弱 混入物はあまりない 底面に炭片含む 部分的に焼土含む シルト
 - 3 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまり弱 黄褐色土ブロック (IV層) 含む シルト
 - 4 10YR2/3 黒褐 粘性あり しまり弱 黄褐色土ブロック (IV層) 15%含む シルト

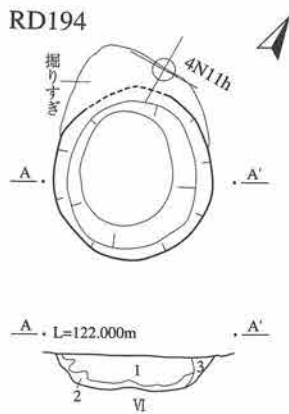


- RD193
- 1 10YR2/1 黒 粘性ややあり しまりなし IV層粒 1% シルト
 - 2 10YR2/3 黒褐 粘性ややあり しまりなし IV層粒 7% シルト
 - 3 10YR4/6 褐 粘性ややあり しまりなし 黒褐色土粒 5% シルト

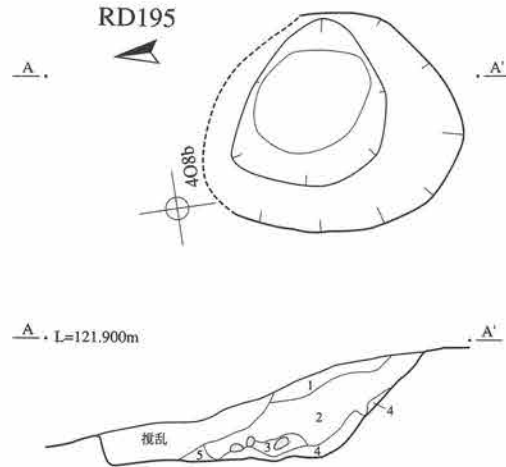


第125図 土坑 (11) RD190~RD193

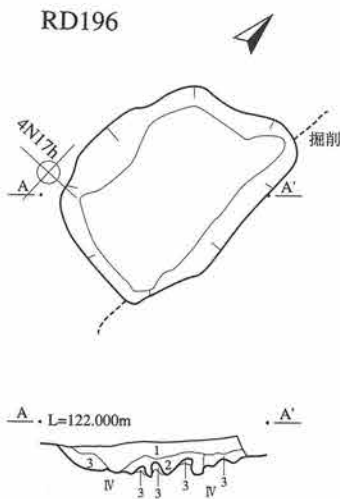
4 土坑



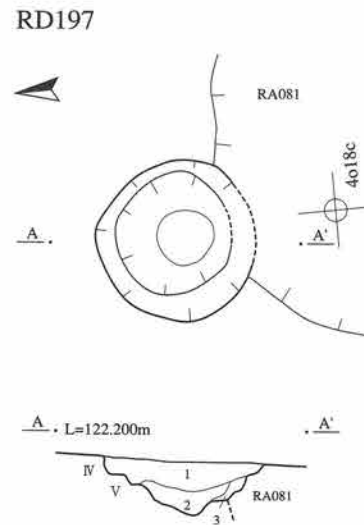
- RD194
- 1 10YR2/1 黒 粘性なし しまりなし シルト
 - 2 10YR2/3 暗褐 粘性あり しまり弱い
IV層起源の黄褐色土粒を7%含む シルト
 - 3 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりあり
III層の崩壊土 シルト



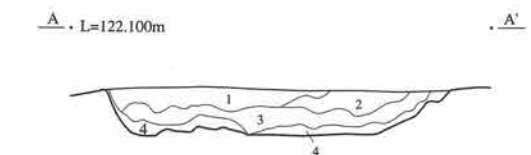
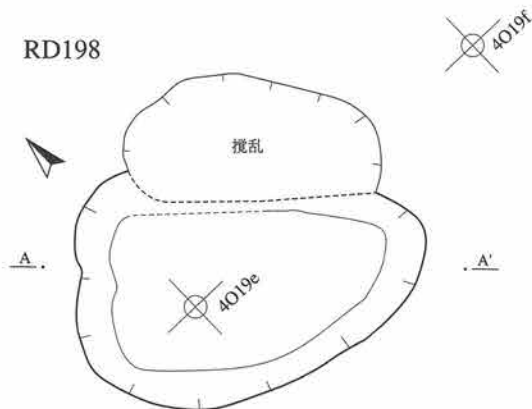
- RD195
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまり中
 - 2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややなし V層粒少量含む
 - 3 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性・しまりなし 2層小粒少量含む
 - 4 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりなし IV層多量含む
 - 5 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりなし IV層との混合土



- RD196
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性 しまりなし
 - 2 10YR2/1 黒 粘性ややあり しまりなし
IV層起源の褐色土ブロック3~5%含む
 - 3 10YR3/4 暗褐 粘性 しまりあり 黒褐色土ブロック3%含む



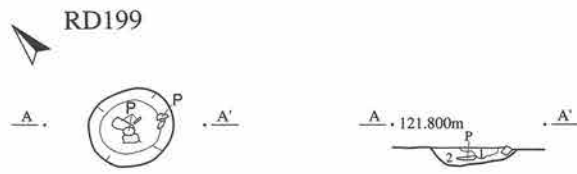
- RD197
- 1 10YR2/3 黒褐 粘性、しまりあり 小礫少量含む
 - 2 10YR3/3 暗褐 粘性あり しまりなし 焼土、燧炭粒を含む
 - 3 10YR3/3 暗褐 粘性あり しまりなし 炭粒を含む



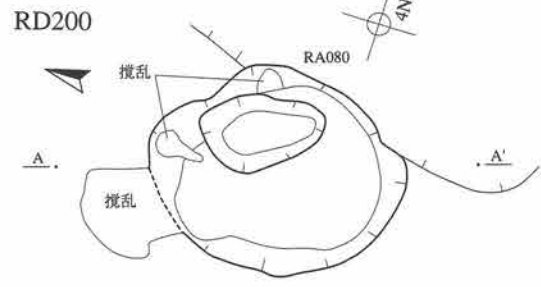
- RD198
- 1 10YR2/1 黒 粘性あり しまりややあり 炭粒を含む
微細な黄褐色土粒を少量含む シルト
 - 2 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりややあり
V層起源の黄褐色砂を全体に3%含む シルト
 - 3 10YR2/1 黒 粘性あり しまりややあり
1層より暗い シルト
 - 4 10YR3/2 黒褐 粘性なし かたくしまる
IV~V層起源の褐色土粒5%含む シルト

0 (1:40) 2m

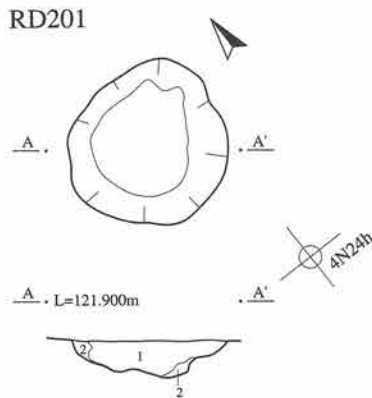
第126図 土坑 (12) RD194~RD198



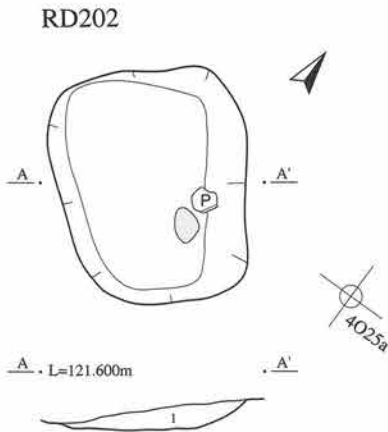
- RD199
- 1 10YR2/1 黒 粘性なし しまりなし シルト
 - 2 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりあり
IV層起源の黄褐色土を全体に含む
焼土ブロック、粘土ブロックを含む
シルト



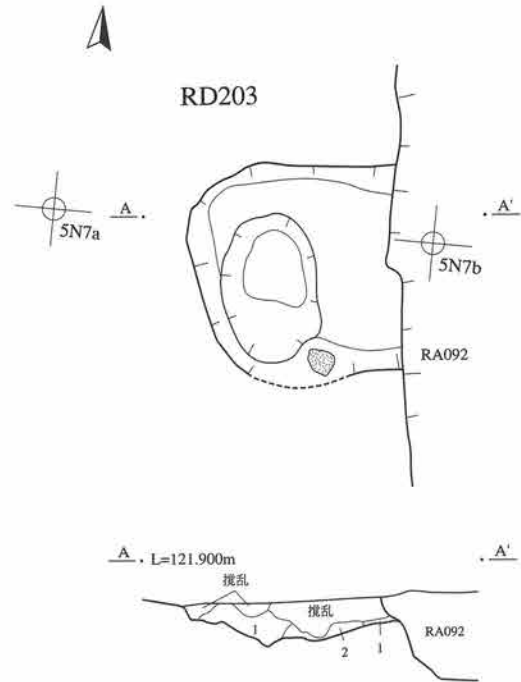
- RD200
- 1 10YR2/1 黒 粘性なし しまりなくポロポロ
IV層～V層起源の黄褐色土ブロック7%
シルト
 - 2 10YR4/4 褐 粘性、しまりなくポロポロ
V層起源の褐色土に10YR2/1黒色土ブロック5%
シルト
 - 3 10YR2/2 黒褐 粘性、しまりなくポロポロ 黒褐色土に
V層起源の10YR4/4褐色土ブロック15% シルト
 - 4 10YR2/2 黒褐 粘性、しまりなし V層起源の砂少量を
全体に含む 根の攪乱? シルト
 - 5 10YR2/1 黒 粘性ややあり しまりなし シルト
 - 6 10YR2/1 黒 粘性あり しまりなし シルト
 - 7 10YR2/2 黒褐 粘性あり しまりなし IV～V層起源の
黄褐色土粒15%含む シルト



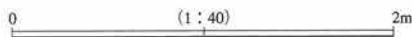
- RD201
- 1 10YR2/1 黒 粘性なし しまりややあり
褐色土ブロック
 - 2 10YR2/3 黒褐 粘性なし しまりややあり
10YR2/1黒色土ブロック10%



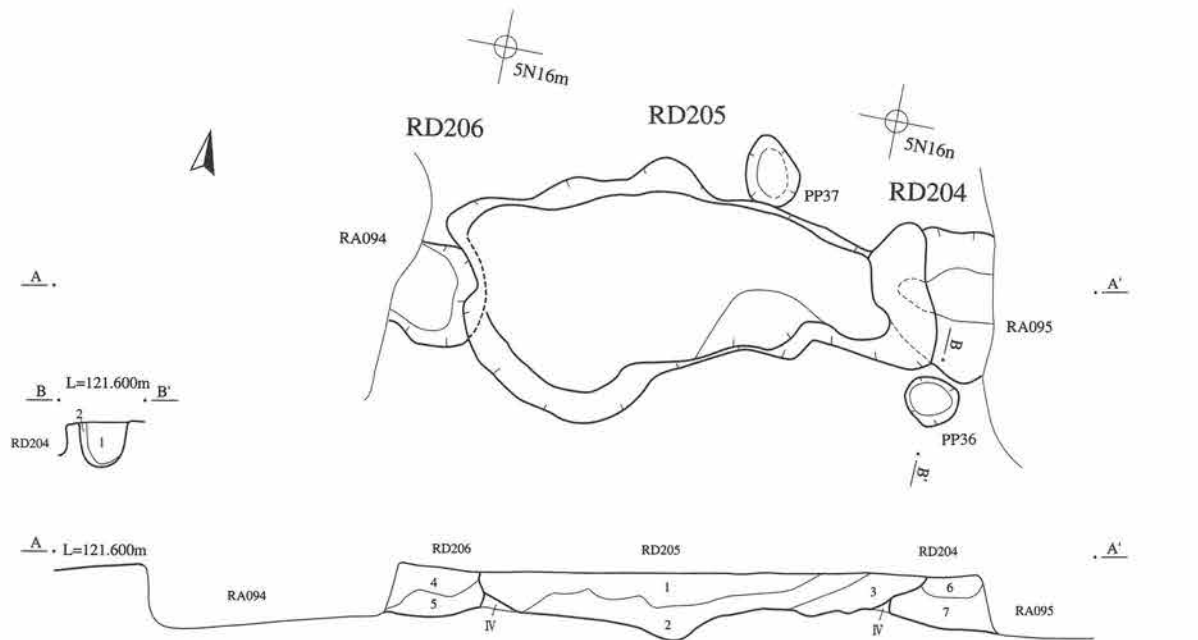
- RD202
- 1 10YR2/2 黒褐 粘性 しまりなし



- RD203
- 1 10YR2/1 黒 粘性あり 硬くしまる IV層起源の黄褐色土3%
 - 2 10YR3/3 暗褐 粘性ややあり しまりなし

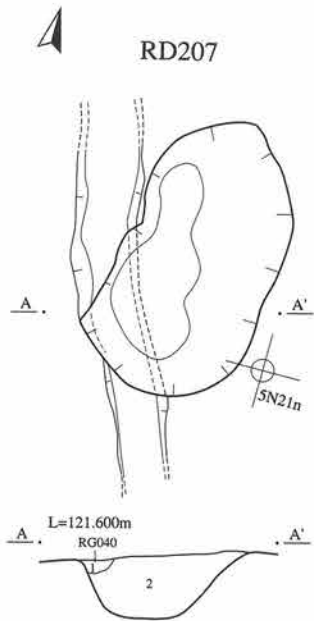


第127図 土坑 (13) RD199～RD203



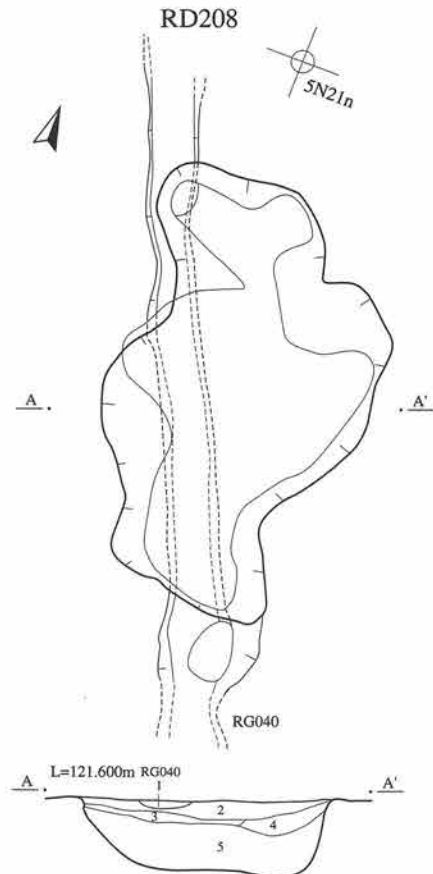
RD204・205・206

- | | | | | |
|---|---------|--------|-------|--------------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまりやや疎 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまり密 褐色土ブロック10%含み斑状をなす |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまりやや疎 褐色土ブロック10%含み斑状をなす |
| 4 | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性弱 | しまり密 褐色土粒φ1~2cm5%含む |
| 5 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性強 | しまり中 均質 |
| 6 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性弱 | しまりやや疎 |
| 7 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性やや強 | しまり中 褐色土粒φ5mm以下3%含む |



RD207

- | | |
|---|-------------------------|
| 1 | RG040 |
| 2 | 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性強 しまり密 |

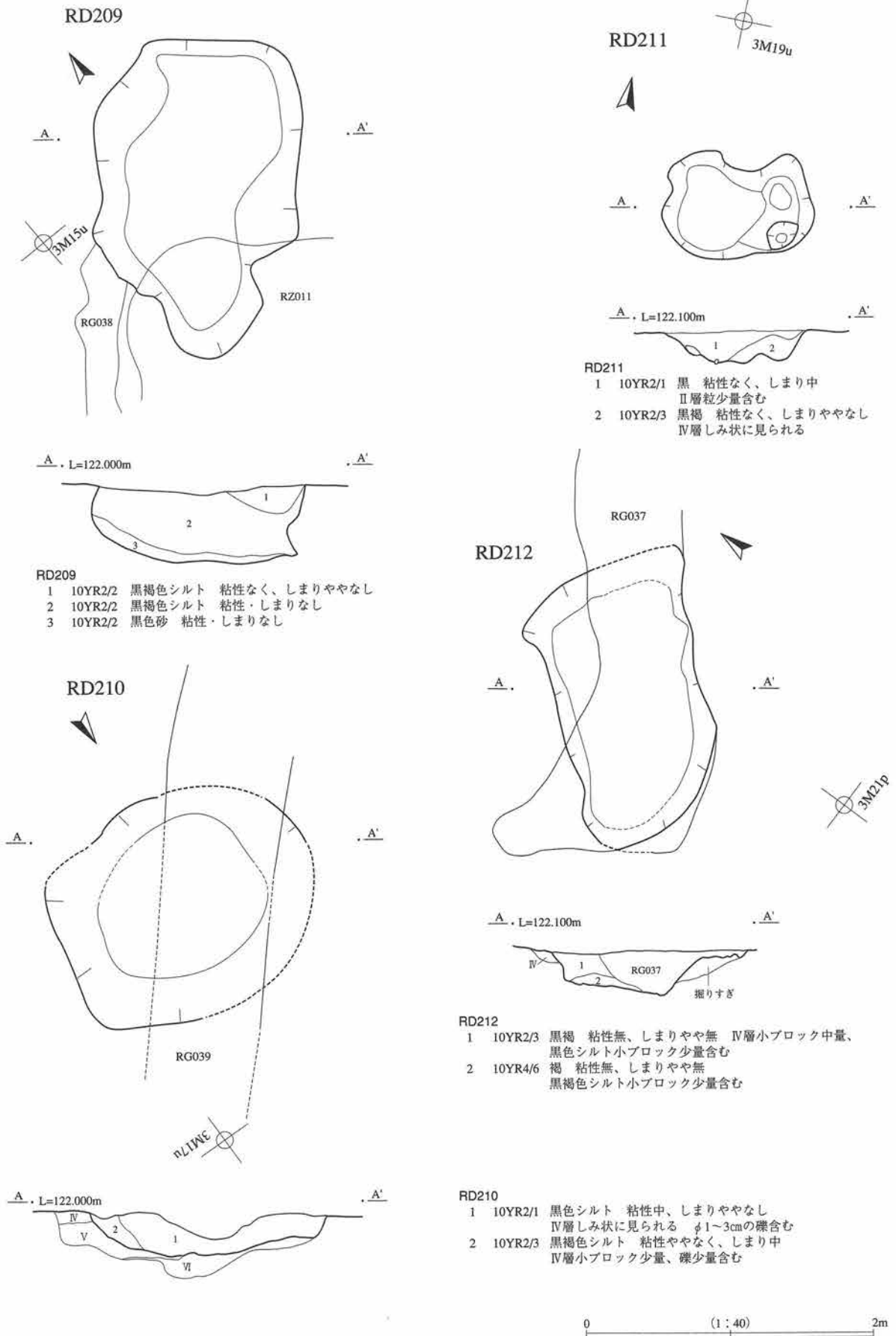


RD208

- | | |
|---|--|
| 1 | RG040 |
| 2 | 10YR2/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 |
| 3 | 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまりやや疎 |
| 4 | 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 褐色ブロックφ1~2cm3%含む |
| 5 | 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 褐色ブロックφ1~2cm3%含む |

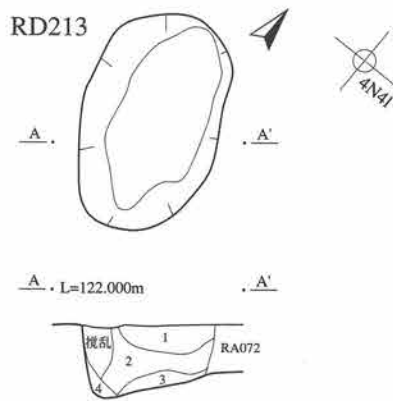
0 (1:40) 2m

第128図 土坑 (14) RD204~RD208

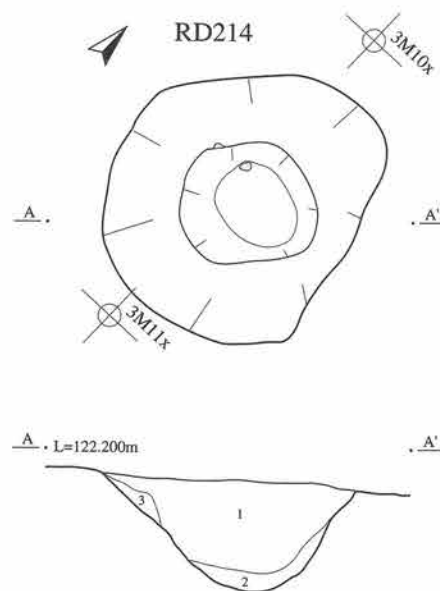


第129図 土坑 (15) RD209~RD212

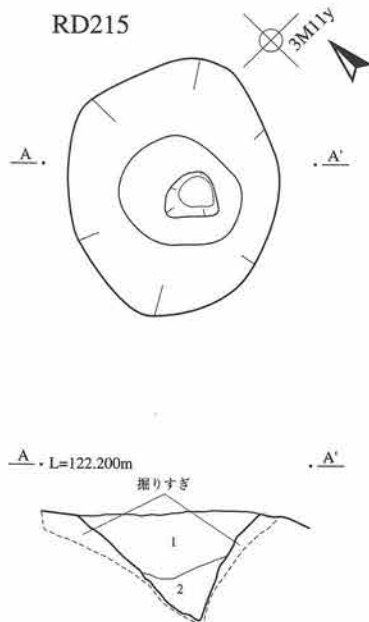
4 土坑



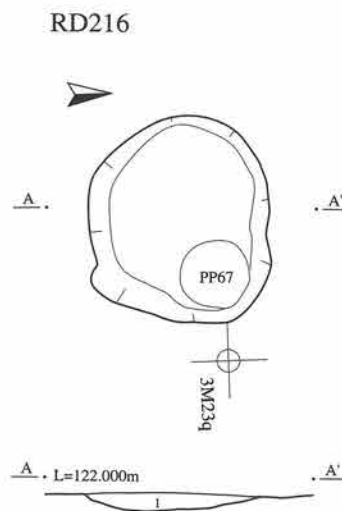
- RD213
- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性なく、しまり中
IV層粒中量含む
 - 2 10YR2/1 黒 シルト 粘性なく、
しまりややなし〜中
 - 3 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性なく、しまり中
IV層粒少量含む
 - 4 10YR4/4 褐 シルト 粘性・しまりなし
黒褐色シルトで汚れている



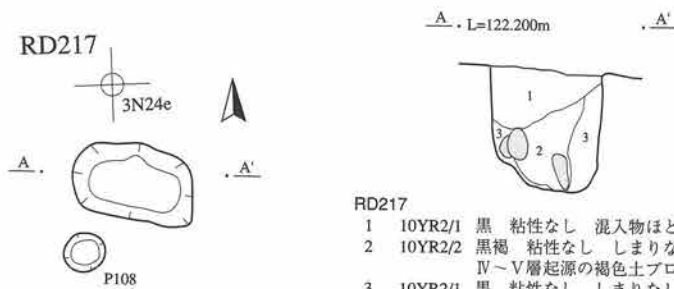
- RD214
- 1 10YR2/1 黒色シルト 粘性なく、しまりやや有 ϕ 1cmの礫中量含む
 - 2 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややなし 礫少量含む
 - 3 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性・しまりなし 黒褐色シルトで汚れている



- RD215
- 1 10YR2/2 黒褐色 粘性なく しまり中
 - 2 10YR2/3 黒褐色 粘性なく しまりややなし



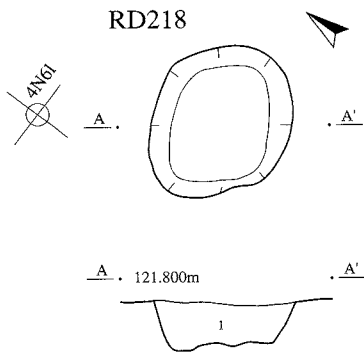
- RD216
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまりややなし
IV層小ブロック少量、礫少量含む



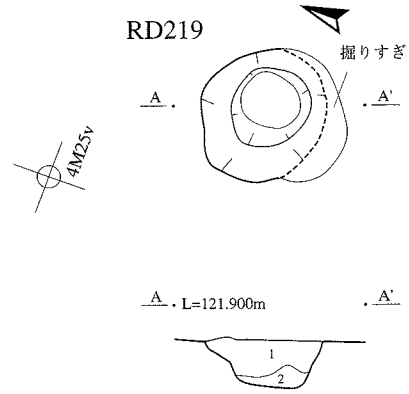
- RD217
- 1 10YR2/1 黒 粘性なし 混入物ほとんどなし
 - 2 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりなくボロボロ
IV〜V層起源の褐色土ブロック 15%含む
 - 3 10YR2/1 黒 粘性なし しまりなし

0 (1:40) 2m

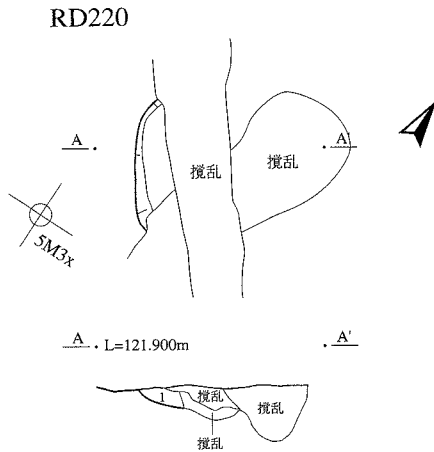
第130図 土坑 (16) RD213~RD217



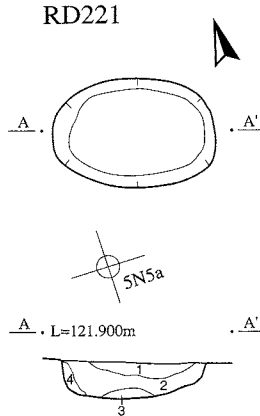
RD218
1 10YR2/2 黒褐 粘性なし しまりなし (II b層上面で検出)
もろい (わりと新しい)
木根はびこる



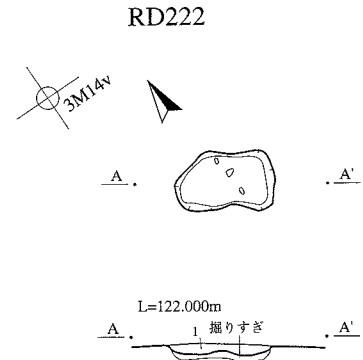
RD219
1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、しまり中
IV層小ブロック少量含む
2 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややなく、しまり中
IV層粒少量含む



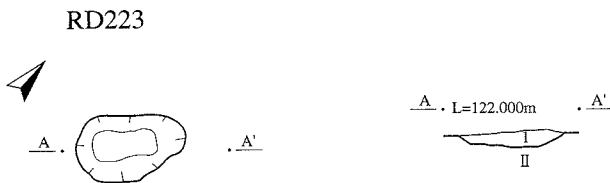
RD220
1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、
しまりやや有 焼土小ブロック・
暗褐色シルト小ブロック少量含む



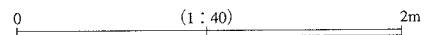
RD221
1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、
しまり中
2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なく、
しまりややなし
IV層小ブロック少量含む
3 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なく、
しまりややなし
IV層小ブロック多量、
黒色シルト粒少量含む
4 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なく、
しまり中 (壁崩落土)



RD222
1 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性なく、
しまりややあり 焼骨少量、
炭化物極少量含む



RD223
1 7.5YR1.7/1 黒 シルト 粘性、しまりなし 炭片、骨片を多量に含む 土器片を少量含む



5 焼土遺構

RF003焼土遺構（3号焼土遺構）（第132図、写真図版95）

<位置>調査区中央の4 N 9 j グリッドに位置する。1.3m北に1号溝、30cm北西にpp5がある。

<重複関係>楕円形の小土坑上に焼土が形成されているが、焼土と土坑幅が一致することから重複ではなく、焼土に伴う施設と考えられる。

<検出面>II層中である。

<埋土・焼土>47×44cmの不整な円形に焼土が形成されている。焼土は3層に細分され、暗褐色土にブロック状に明褐色の焼土が密に混入する2層が主体である。焼土の厚さは4cmである。焼土直下の小土坑は、長径1.65cm、幅0.46m、深さ0.33cmの長楕円形で、埋土は壁際、底部付近のみに黄褐色土粒の混入する黒色土である。なお、本遺構周辺に柱穴状土坑（pp2～pp5）が4個点在するが、本遺構との関係はつかめなかった。

<遺物>ない。

<時期>不明であるが、小土坑の埋土が古代の埋土に類似していることから、古代に属する可能性がある。（金子佐）

RF004焼土遺構（9号焼土遺構）（第132図、写真図版95）

<位置>調査区南西部の5 M24 p グリッドに位置する。本遺構は調査区西側を南北に走る埋没沢の最深部に位置する。

<重複関係>ない。

<検出面>埋没沢中のII b層中位である。埋没沢にトレンチを入れ、遺構、遺物の有無を確認する途上で検出したもので、北半分をトレンチ掘削の際に失ってしまった。沢がまだ全部埋まりきっていない状態で形成されたものと考えられる。

<埋土・焼土>楕円形を呈していたと見られ、残存する最大径は36cm、焼土の厚さは13cmである。赤褐色の焼土は上層に4cm程度堆積している。その下に、赤変していないが火熱を受けて硬化している層が最大8cm程度である。

<遺物>（第212図、写真図版147）

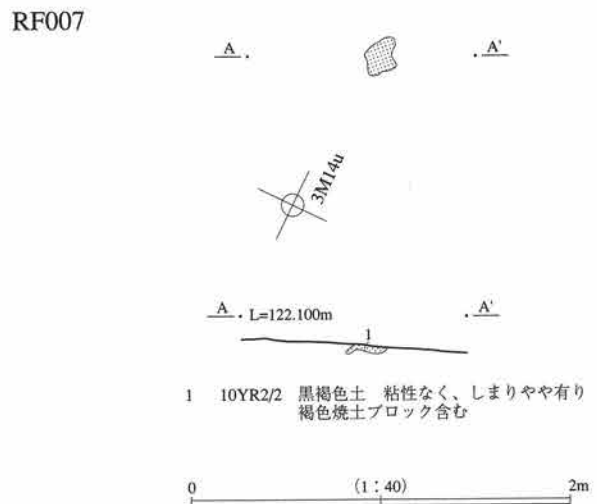
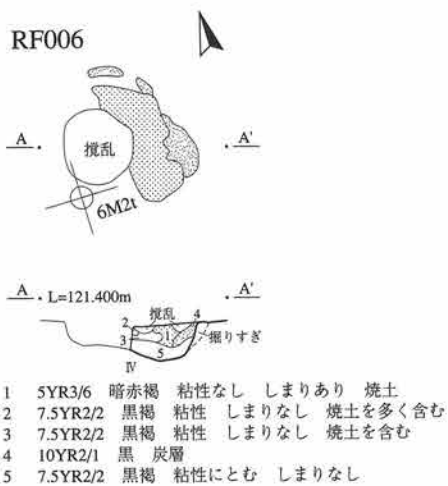
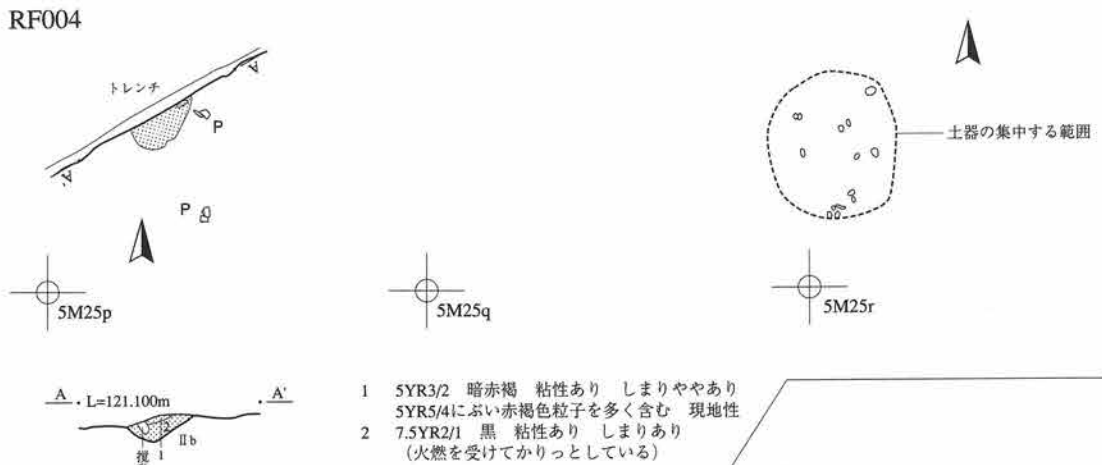
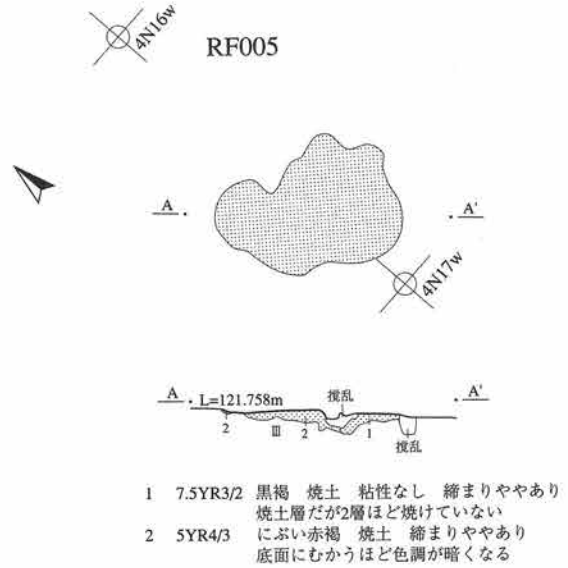
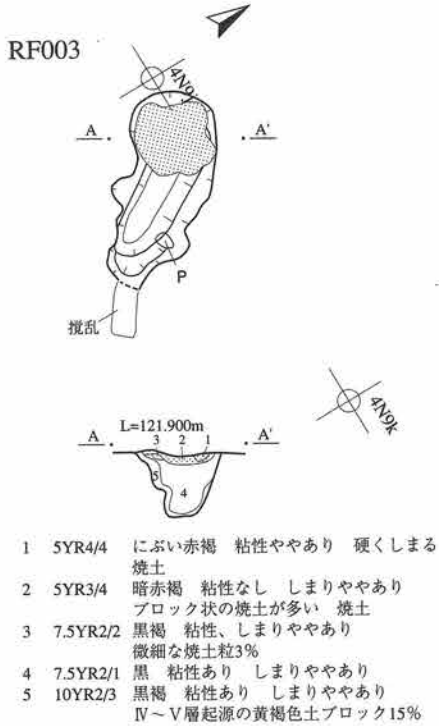
直上および周辺に炭が分布する。焼土中ではないものの、焼土すぐ脇の3cm～40cm程度はなれた同じ層から67gの弥生時代後期と思われる土器の破片が出土した。該期の土器片は周辺半径3mぐらいの場所からも出土している。なお、焼土検出面より下層からは土器は全く出土しない。また、本焼土から東へ3.5mの埋没沢の東の肩から同時代の土器が集中して出土している。本遺構周辺から出土した遺物は弥生時代後期の土器片のみである。

[土器] 678は、焼土のすぐ脇から出土した甕の口縁部破片である。

<時期>周辺から出土した土器片は本遺構に伴う可能性が高いと思われるので、弥生時代後期と考えられる。（金子佐）

RF005焼土遺構（2号焼土遺構）（第132図、写真図版96）

<位置>調査区中央の4 N16w グリッド付近に位置する。本遺構は調査区東側を南北に走る埋没沢の東の肩にあたる。



第132図 RF003~RF007焼土遺構

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層上面である。

<埋土・焼土>径94～73cmの不整形に焼土が拡がっている。焼土の厚さは最大で6cmである。2層に細分され、上層は赤化の度合いが低い黒褐色焼土、下層はにぶい赤褐色の焼土である。

<遺物>焼土中から甕底部破片23gが出土した。

<時期>出土遺物から古代に属すると考えられる。(金子佐)

RF006焼土遺構（10号焼土遺構）（第132図、写真図版96）

<位置>調査区南西の6 M 1 t グリッドに位置する。本遺構は調査区西端を南北に走る埋没沢の東岸部分である。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層である。遺構の一部を攪乱によって破壊されている。

<埋土・焼土>下位に掘りこみを伴う。暗赤褐色の焼土はしまりがあるが、東側及び北側に下位に炭層や焼土を含む黒褐色土が検出されたことから、攪乱され動いている可能性がある。焼土は69～26cmの不整形に拡がり、その周囲に炭が見られる。焼土の厚さは11cmである。

<遺物>ない。

<時期>出土遺物がないことから不明である。(金子佐)

RF007焼土遺構（6号焼土遺構）（第132図、写真図版96）

<位置>第10次調査区北側の3 M14 u グリッドに位置する。

<重複関係>なし。

<検出面>Ⅱ層上面である。

<埋土・焼土>焼土は23～18cmの不整形に拡がる。後世の削平を受けており、残存する焼土層は5cmと薄い。焼成面の赤変は弱く褐色を呈する。掘り込みは見られない。

<遺物>土師器細片7gが出土している。

<時期>不明である。(北村)

第5表 焼土遺構一覧表

	報告名	フィールド名	調査次	グリッド	時期	規模(cm)	焼土厚(cm)	出土遺物	備考
1	RF003	3号焼土遺構	9次	4N9j	古代	47×44	4		掘り込みを伴う
2	RF004	9号焼土遺構	10次	5M24p	弥生後期	36	13	678 周辺から炭・弥生土器片	
3	RF005	2号焼土遺構	10次	4 N16v	古代	94×73	6	土師器甕破片	
4	RF006	10号焼土遺構	10次	6 M1t	不明	69×26	11		掘り込みを伴う
5	RF007	6号焼土遺構	10次	3 M14u	不明	23×18	5		

6 溝 跡

RG022溝跡（21号溝跡）（第133図、写真図版96）

<位置・方向>調査区中央部の4 M25 u から5 M 1 u グリッドに位置し、北側は調査区外に延びている。方向はN-Sである。

<重複関係>RD162と重複しており、本遺構が切られている。

<検出面>IV層上面である。

<規模・平面・断面形>上端幅55~40cm、深さは最大で17cm、全長約3.3mである。断面形は逆台形状を呈する。溝全体に二列の楕円形の工具痕が観察される。

<埋土>黒褐色土を主体とし、地山の混入具合で2層に分層され、2層は工具痕部分の埋土である。2層は地山ブロックが多量に含み人為的な堆積状況を呈しているが、1層は層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できない。（北村）

<遺物>（第212図、写真図版147）

わずかであるが、奈良時代の土師器片が1点27gが埋土中より出土している。

[土器] 679は土師器甕の口縁部のみの断片的な資料である。頸部に段を持たないものの、ハケメを一周巡らせ、体部と口縁部の境界としている。口縁部は外傾しながら立ち上がり、端部は内湾気味になる。口唇部は丸みを持つものの、面取り状になっており、内面には対応する屈曲部が見られる。調整は内外面ともハケメで、口縁部には内外面ともハケメの後ヨコナデが行われる。

<時期>出土遺物から奈良時代の可能性がある。

RG023溝跡（1号溝跡）（第133図、写真図版97）

<位置・方向>調査区中央の4 N 9 g から4 N 4 p グリッドに位置する。この付近を南北に走る埋没沢を横切るように延び、方向はおおむねE-29°-Nである。

<重複関係>RD193、RD192と重複し、RD192より古い。RD193との新旧は重複がわずかなため、不明である。PP2とも重複しているが、検出の際の不注意で新旧関係はわからなかった。

<検出面>埋没沢最深部ではII b層上、II層が削られている東西の端ではIII~IV層である。

<規模・平面・断面形>長さ20.8m、幅は40~80m、深さ13~32cmで、緩やかなうねりのある溝である。底面には深さ3~5cm程度の工具痕がある。工具痕の大きさは径5~15cm、深さは3~6cm程度である。断面形は浅い箇所では内湾する底部から内湾気味に壁が立ち上がる。深い箇所では内湾気味の底部から壁がやや外反して立ち上がる。

<埋土>2~4層に細分され、IV層起源の黄褐色土粒を含む黒色~黒褐色土が主体である。中央付近の一部には焼土や炭を含む。（金子佐）

<遺物>（第212図、写真図版147）

埋土からロクロ土師器甕破片、非ロクロの土師器甕破片、土師器坏破片、須恵器坏破片計187gが出土し、680の須恵器坏1点を掲載した。上記以外に埋土上層から鉄滓（681）が1点出土している。

<時期>出土遺物や埋土の状況から平安時代と考えられる。

RG024溝跡（2号溝跡）（第133図、写真図版97）

<位置・方向>調査区中央東よりの4 O14 p から4 O13 r グリッドに位置する。溝の東よりの南壁を

盛岡市教育委員会の試掘トレンチによって切られている。方向はおおむねE-34°-Nである。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層である。

<規模・平面・断面形>長さ4.9m、幅43~47cm、深さ10cmでほぼ直線である。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。

<埋土>V層起源の褐色砂質土を含む黒褐色土の単層である。

<遺物>ない。

<時期>埋土の状況により古代の可能性もあるが、不明である。 (金子佐)

RG025溝跡 (3号溝跡) (第133図、写真図版98)

<位置・方向>調査区中央の4 N13 t から4 O17 a グリッドに位置する。この付近は南北に埋没沢が走っており、本溝はその東岸に沿って穿たれている。方向は南側でN-70°-W、湾曲して北側がN-39°-Wである。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層である。

<規模・平面・断面形>長さ14.9m、幅25~85cm、深さは最深部で37cmである。南半は緩やかにカーブし、北半は直線的である。底面は平坦で、深さ10cm程度の工具痕が2列規則的に認められる。壁は残りのよいところではいったん直立気味に立ち上がったのち、開口部でやや開く箱薬研状を呈する。北に向かうほど浅くなり、北端は痕跡が残るのみである。

<埋土>Ⅳ層~Ⅴ層起源の黄褐色土、黄褐色砂を含む、黒褐色土が主体である。

<遺物> (第212図、写真図版147)

埋土から奈良・平安時代の土師器甕破片、平安時代の土師器坏破片など須恵器も含め254gが出土した。1点を掲載した。

[土器] 682は長胴形で頸部の段を持たないもので、口縁部から体部上半の断片的な資料である。内面に屈曲部を持たない。口縁部は外傾しながら立ち上がる。口唇部はV字状にくぼんでいる。調整は内外面ともハケメで、口縁部にはその後、ヨコナデが行われる。埋土中位からの出土である。

<時期>掲載した土器は奈良時代(8世紀後半)であるが、破片も含め出土した土器から平安時代に属する可能性が高い。 (金子佐)

RG026溝跡 (4号溝跡) (第133図、写真図版98)

<位置・方向>調査区中央東よりの4 O17 d、4 O18 e グリッドに位置する。方向はN-40°-Wである。

<重複関係>南端がRD198と接するが、新旧関係を確認できなかった。また、RA081と至近距離にあるが、方向が異なり、住居跡に関連する施設ではないようである。方向はN-40°-Wである。

<検出面>Ⅲ層である。

<規模・平面・断面形>長さ3.1m、幅22cm、深さ12cmで、直線である。底、壁ともに内湾気味である。底面に工具痕はない。

<埋土>3層に細分され、上層にはⅣ層起源の黄褐色土を含む黒褐色土、中層~下層は壁のⅣ層崩壊土である。

<遺物>ない。

<時期>不明であるが、埋土の状況から古代に属する可能性もある。(金子佐)

RG027溝跡 (19号溝跡) (第133図、写真図版98)

<位置・方向>調査区中央部の5 M 2 s から5 M15 u 付近に位置し、北側は調査区外に延びている。方向は南側がN-42°-Eであるが、屈曲して北に向かい、N-12°-Wである。

<重複関係>なし。

<検出面>Ⅲ層上面である。

<規模・平面、断面形>上端幅65~35cm、深さは最大で19cm、全長約27.2mである。断面形は不整形を呈する。

<埋土>黒色土を主体とし、地山の混入具合で2層に分層され、2層は工具痕部分の埋土である。2層は地山ブロックが多量に含み人為的な堆積状況を呈しているが、1層は層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できない。

<遺物>頁岩製の剥片が1点出土しているが、図化は行っていない。

<時期>平安時代。(北村)

RG028溝跡 (7号溝跡) (第133図、写真図版99)

<位置・方向>調査区中央部5 N13 n から5 N17 p グリッド付近に位置する。方向はほぼN-30°-Wである。

<重複関係>RA095の覆土上位を切る。

<検出面>基本層序のⅣ層上面で検出した。

<規模・平面、断面形>長さ8.8m、幅58~78cm、深さ22~31cmである。

<埋土>灰白色火山灰を混入する1層と均質な黒色土層、褐色粒子の混入する黒色土の3層に分層される。灰白色火山灰は溝の中心部に多く、細長い平面形を呈している。(八木)

<遺物> (第212図、写真図版134、147)

埋土から土師器甕破片、土師器坏破片、須恵器坏破片236gが出土し、4点(467、468、470、683)を掲載した。うち467、468、470は重複するRA095出土の破片と接合した。

[土器] 683は体部下端及び底部にヘラ削りを施される土師器坏である。

[石器] 頁岩製の剥片が1点出土しているが、図化は行っていない。

<時期>埋土の灰白色火山灰は十和田a降下火山灰の可能性が高いこと、平安時代と考えられるRA095を切っていること、出土土器から、本遺構は平安時代の9世紀後葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

RG029溝跡 (5号溝跡) (第133図、写真図版99)

<位置・方向>調査区中央より南よりの5 N12 o から5 N15 q グリッドに位置する。方向はN-30°-Wである。

<重複関係>RA096竪穴住居跡と重複し、本溝が新しい。溝の覆土は黒く比較的均質で、住居の覆土はⅣ層ブロックが顕著に入るので重複がとらえやすく、間違いないと思う。

<検出面>Ⅲ層下部~Ⅳ層上面で検出した。

<規模・平面形、断面形>長さ6.6m、幅40~50cm、深さ20~30cmである。浅く、所々攪乱を受け別の土が入っているので、途切れがちで、はっきりしない。北側は検出時には既に見えず、南側はちりぢ

りになってしまった。底面は平坦な部分と内湾する部分がある。壁は外形して立ち上がる。

<埋土>黒色土を基本とするが、場所により下部にIV～V層の汚れ再堆積土が入る。

<壁・底面>壁は直線的で、断面形は全体として角張って、箱～バケツ形。

<遺物>(第213図、写真図版136)

埋土から土師器甕破片、内黒土師器甕破片、須恵器壺破片の計147gが出土し、1点を掲載した。

491はRA096出土の破片と接合したものである。

<時期>平安時代のRA096竪穴住居跡を切っていることからこの住居より新しいが、埋土の状況からあまり時期は下らず、平安時代に属すると考えられる。(金子昭)

RG030溝跡(18号溝跡)(第133図、写真図版100)

<位置・方向>調査区中央部5 N19 s から5 N20 u グリッド付近に位置する。方向はE-20°-Sである。

<重複関係>なし。

<検出面>基本層序のIV層上面で検出した。

<規模・平面、断面形>長さ3.9m、幅50cm、深さ23cmである。底面に工具痕が認められる。

<埋土>2層に分層され、自然堆積をなす。

<遺物>(第213図、写真図版147)

土師器甕、坏、須恵器坏破片209gが出土し、3点を掲載した。

[土器] 684～686は内黒及び非内黒土師器、須恵器の坏である。

<時期>出土土器から9世紀後半から10世紀初頭、平安時代に属する。(八木)

RG031溝跡(9号溝跡)(第134図、写真図版100)

<位置・方向>調査区南側の5 M20 u から6 M10 y グリッド付近に位置する。方向は南側でN-32°-W、緩やかに湾曲し、北側でN-9°-Wである。

<重複関係>なし。

<検出面>III層上面である。

<規模・平面、断面形>上端幅75～35cm、深さは最大で19cm、全長約32.1mである。断面形は不整形を呈する。溝全体に二列もしくは三列の楕円形または半円形の工具痕が観察される。

<埋土>黒褐色土を主体とし、地山の混入具合で2層に分層され、2層は工具痕部分の埋土である。2層は地山ブロックが多量に含み人為的な堆積状況を呈しているが、1層は層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できない。

<遺物>縄文土器が数点埋土中より出土しているが、小破片であるため掲載していない。

<時期>形状、埋土の状況から古代に属すると考えられる。(北村)

RG032溝跡(6号溝跡)(第134図、写真図版101)

<位置・方向>調査区中央部5 N23 h から6 M5 n グリッドに位置する。方向はN-39°-Wである。

<重複関係>ない。

<検出面>基本層序のIV層上面で検出した。

<規模・平面、断面形>長さ18.7m、幅18～60cm、深さ20～25cmである。底面に工具跡を確認した。南東から約4mのところ、50cmほど途切れている。

<埋土> 2～3層に細分され、黒色土及び暗褐色土が主体である。

<遺物> (第213図、写真図版132、147)

本遺構出土の破片と424はRA092出土の破片が接合したものである。687、688はともに埋土から出土した。埋土から他に外面にケズリ、内面にハケメのある土師器甕破片、須恵器坏破片、土師器坏破片が出土した。重量は計310gである。

<時期> 出土遺物、埋土、溝の形状から平安時代に属する可能性が高い。 (八木)

RG033溝跡 (11号溝跡) (第134図、写真図版100)

<位置・方向> 調査区南側の6 N 6 c から6 N 5 d グリッド付近に位置する。方向はE-35°-Nである。RG034と近く、平行する。

<重複関係> なし。

<検出面> IV層上面である。

<規模・平面、断面形> 上端幅35～15cm、深さは最大で14cm、全長約3.2mである。断面形は逆台形状を呈する。溝全体に二列の楕円形の工具痕が観察される。

<埋土> 黒褐色土の単層である。層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できない。

<遺物> なし。

<時期> 埋土、溝の形状から古代に属する可能性が高い。 (北村)

RG034溝跡 (8号溝跡) (第134図、写真図版100)

<位置・方向> 調査区南側の6 N 8 a から6 N 5 e グリッド付近に位置する。方向はほぼE-34°-Nである。RG033溝跡と近く、平行する。

<重複関係> なし。

<検出面> IV層上面である。

<規模・平面、断面形> 上端幅55～25cm、深さは最大で13cm、全長約9.9mである。断面形は逆台形状を呈する。不規則であるが、二列の工具痕が観察される。形状は楕円形である。

<埋土> 黒褐色土の単層である。層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できない。

<遺物> なし。

<時期> 埋土、溝の形状から古代に属する可能性が高い。 (北村)

RG035溝跡 (10号溝跡) (第134図、写真図版101)

<位置・方向> 調査区南側の6 M13 y から6 N 9 h グリッド付近に位置する。南北方向に見られる沢状の地形により東西に分断されている。方向はE-28°-Nである。

<重複関係> なし。

<検出面> IV層上面である。

<規模・平面、断面形> 上端幅70～40cm、深さは最大で13cm、全長約9.1mである。断面形は逆台形状を呈する。溝全体に二列もしくは三列の楕円形または半円形の工具痕が観察される。

<埋土> 黒褐色土の単層である。層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できない。

<遺物> なし。

<時期> 埋土、形状から古代に属する可能性が高い。 (北村)

RG036溝跡（12号溝跡）（第134図、写真図版101）

＜位置・方向＞調査区南側の6 N11 aから6 N12 bグリッド付近に位置し、南側は調査区外に延びている。方向はほぼN-28°-Wである。

＜重複関係＞なし。

＜検出面＞Ⅳ層上面である。

＜規模・平面、断面形＞上端幅75～65cm、深さは最大で20cm、全長約1.8mである。断面形は逆台形状を呈する。溝全体に二列の楕円形の工具痕が観察される。

＜埋土＞黒褐色土を主体とし、地山の混入具合で3層に分層される。2・3層は地山ブロックを多量に含んでおり、人為堆積と考えられる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞埋土及び形状から古代の可能性が高い。（北村）

RG037溝跡（14号溝跡）（第134図、写真図版102）

＜位置・方向＞調査区北側の3 M16 tから3 M20 oグリッド付近に位置する。方向はE-37°-Nである。

＜重複関係＞RD212、RZ011と重複しており、本遺構はRZ011に切られ、RD212を切っている。

＜検出面＞Ⅲ層上面である。

＜規模・平面、断面形＞上端幅105～45cm、深さは最大で32cm、全長約13.6mである。断面形はかまぼこ状を呈する。

＜埋土＞黒褐色土を主体とし、地山の混入具合で3層に分層される。夾雑物が少なく、レンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積と考えられる。

＜遺物＞埋土から土師器甕片53gが出土しているが、小破片であるため掲載していない。

＜時期＞埋土、形状から近世と考えられる。（北村）

RG038溝跡（17号溝跡）（第135図、写真図版102）

＜位置・方向＞調査区北側の3 M11 yから3 M16 tグリッド付近に位置する。方向はN-44°-Eである。

＜重複関係＞RD209と重複しており、本遺構はRD209に切られている。

＜検出面＞Ⅲ層上面である。

＜規模・平面、断面形＞上端幅45～20cm、深さは最大で13cm、全長約13.9mである。断面形は不整形を呈する。

＜埋土＞黒褐色土の単層である。後世の攪乱の影響を多大に受けており、人為堆積か自然堆積か判断できない。

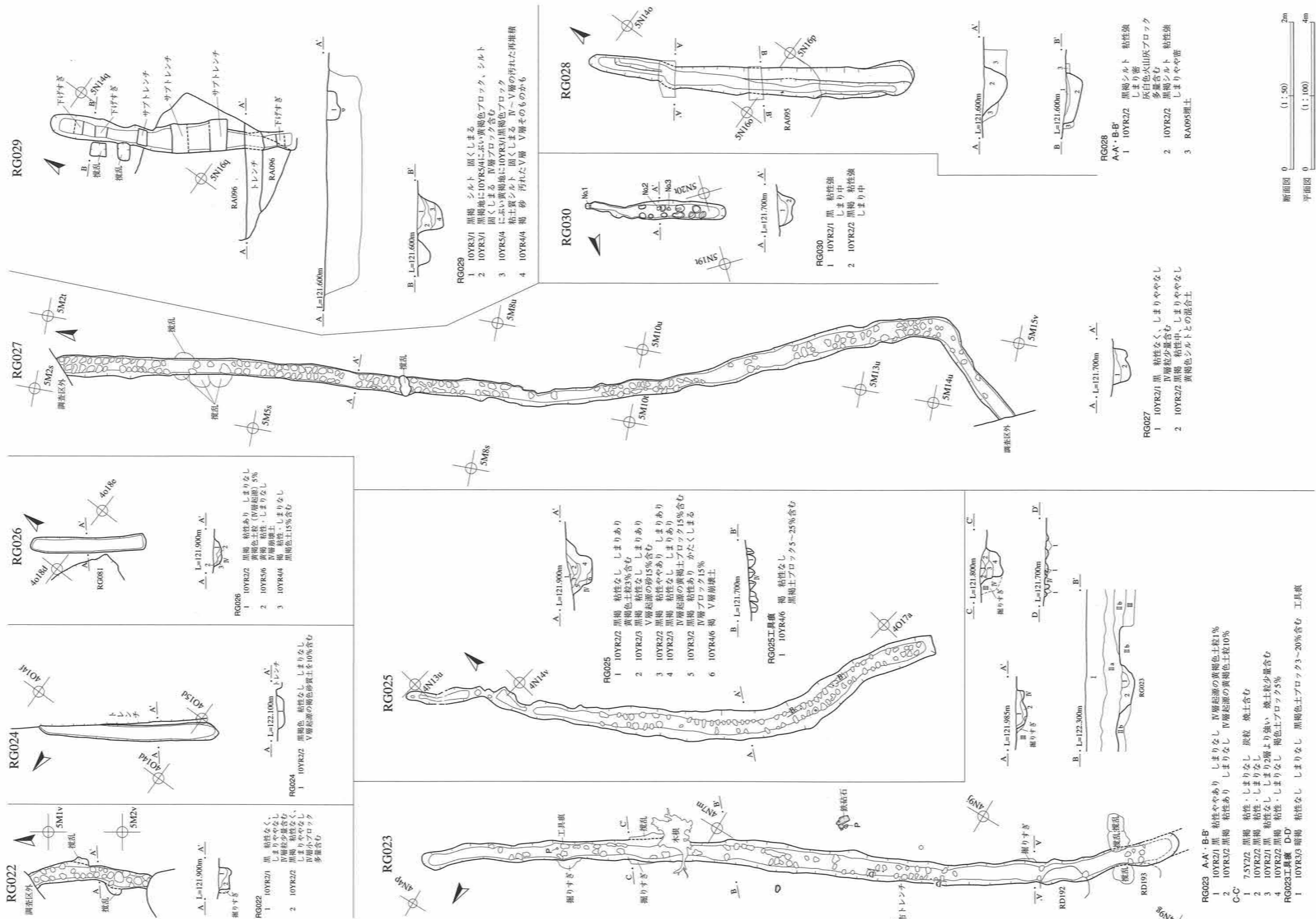
＜遺物＞埋土から土師器甕破片、坏破片17gが出土しているが、小破片であるため掲載していない。

＜時期＞埋土、形状から近世と考えられる。（北村）

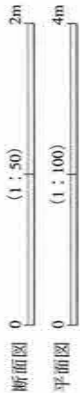
RG039溝跡（13号溝跡）（第135図、写真図版102）

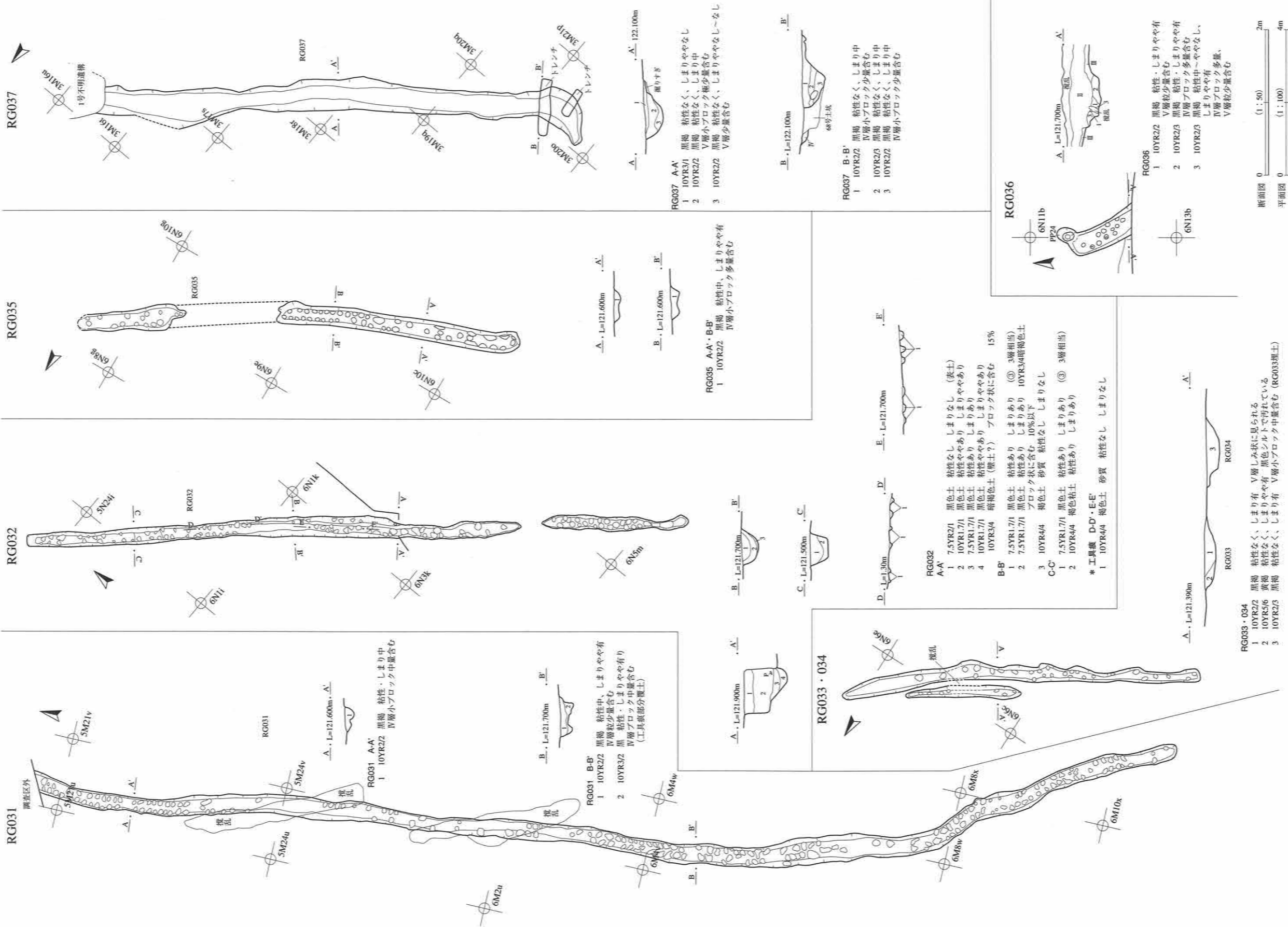
＜位置・方向＞調査区北側の3 M13 xから3 M22 nグリッド付近に位置する。方向はE-43°-Nである。

＜重複関係＞RA064、RA065、RD210、RZ011、RZ012と重複しており、本遺構はRZ011に切られ、

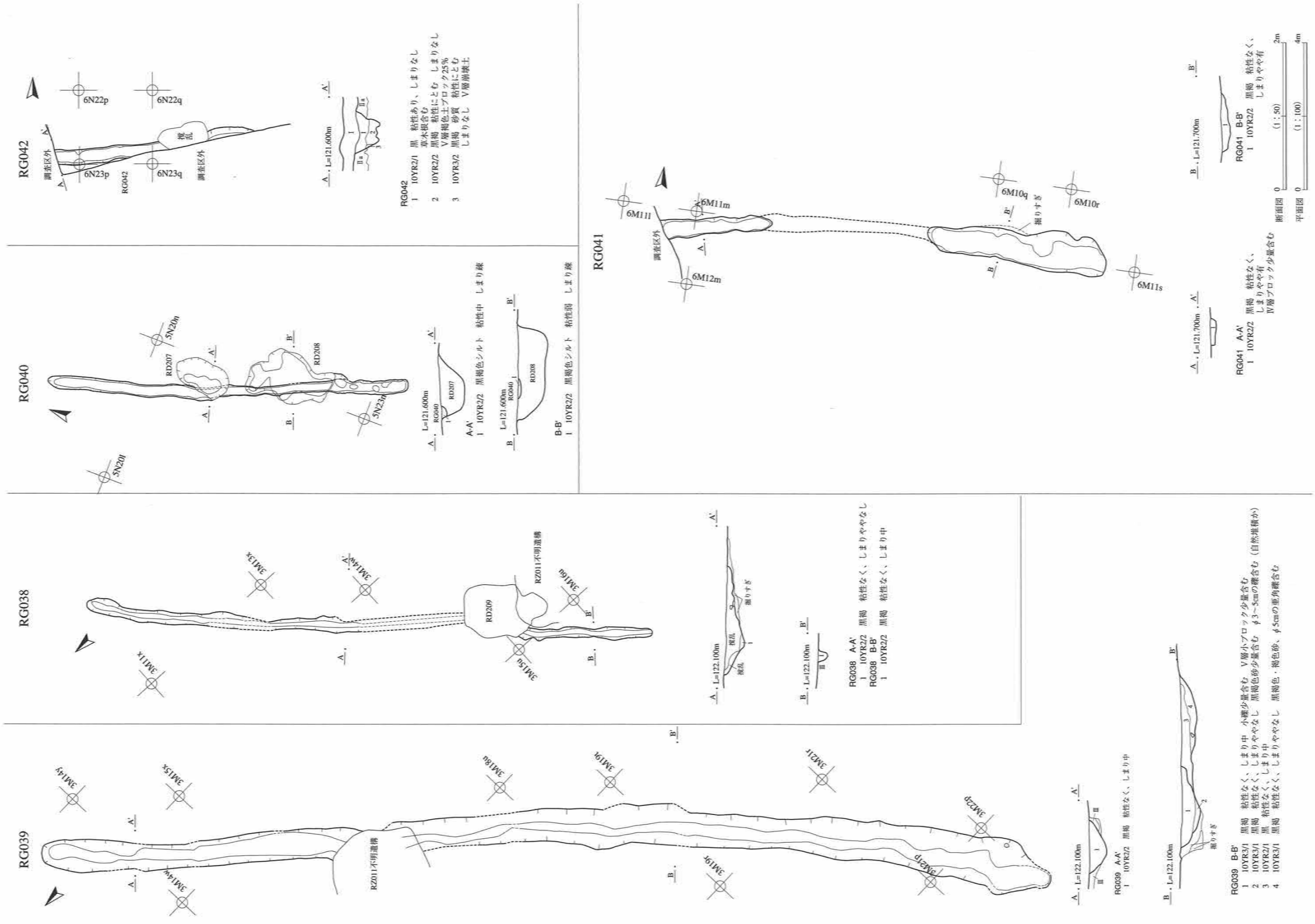


第133図 溝跡(1) RG022~RG030





第134図 溝跡 (2) RG031~RG037



第135図 溝跡 (3) RG038~RG042

RA064、RA065、RD210、RZ012を切っている。

<検出面>Ⅲ層上面である。

<規模・平面、断面形>最大幅153cm、深さは25cm、全長約27.3mである。底面から壁にかけて、緩やかに内湾する。

<埋土>黒褐色土を主体とし、混入物の差異により4層に分層される。夾雑物が少なく、レンズ状の堆積状況を呈しており、自然堆積と考えられる。(北村)

<遺物>(第213図、写真図版147、148)

埋土中より土師器片や須恵器片268gが出土しているが、小破片であるため掲載していない。また、陶器や磁器も土師器や須恵器と同様、埋土中から208g出土し、5点を掲載した。

[陶磁器] 692は青色系染付碗の口縁部である。小破片であるが、梅樹文が描かれている可能性がある。文様などから18世紀の肥前磁器と考えられる。その他は、胎土から在地系の陶器片と思われる。689は、高台立ち上がりから器形は甕と推測される。内面中央まで鉛釉がかけられている。

<時期>出土遺物から近世と考えられる。

RG040溝跡(16号溝跡)(第135図、写真図版102)

<位置・方向>調査区中央部5 N19mから5 N23 nグリッドに位置する。方向はほぼN-20°-Wである。

<重複関係> RD207・RD208を切る。RA099・RA100の間に位置する。

<検出面>表土直下の基本層序のⅣ層上面で検出した。

<規模・平面、断面形>長さ9.7m、幅38cm、深さ7cmである。

<埋土>しまりの弱い黒褐色土の単層である。

<遺物>ない。

<時期>埋土の状況から近世以降に属すると考えられる。(八木)

RG041溝跡(20号溝跡)(第135図、写真図版102)

<位置・方向>調査区南側の6 M11 lから6 M11 rグリッド付近に位置し、西側は調査区外に延びている。方向はE-4°-Sである。

<重複関係>なし

<検出面>Ⅲ層上面である。

<規模・平面、断面形>上端幅115~33cm、深さは最大で13cm、全長約7.9mである。断面形は逆台形状を呈する。

<埋土>黒褐色土の単層である。層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できない。

<遺物>埋土から土師器片、弥生土器片が17g出土しているが、小破片であるため掲載していない。

<時期>不明である。(北村)

RG042溝跡(22号溝跡)(第135図、写真図版103)

<位置・方向>調査区南端の6 N22 pから6 N22 qグリッドに位置する。方向はほぼ東西で、両端は調査区外に延びている。方向はE-4°-Nである。

<重複関係>ない。

<検出面>Ⅲ層で検出したが、調査区境の断面を観察すると、Ⅱ層上で認められる。

<規模・平面、断面形>一部攪乱で破壊されているため明らかでないが、長さ5.4m、幅39~42cm、深さ27cmである。底面には工具痕と思われる凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。

<埋土>上層は草木根の入る黒色土、下層はV層起源の褐色土ブロックを含む黒褐色土である。

<遺物>埋土からロクロ使用の内黒土師器で内面ミガキ、外面ケズリのある埴と思われる破片33gが出土した。

<時期>埋土、出土遺物、遺構の形状から平安時代に属すると考えられる。(金子佐)

第6表 溝跡一覧表

	報告名	フィールド名	調査次	グリッド	時期	方向	長さ(m)	最大幅(cm)	深さ(cm)	工具痕	重複その他
1	RG022	21号溝	10次	4M25u~5M1u	奈良?	N-S	3.3	55	17	2列	RD162に切られる
2	RG023	1号溝	9次	4N9g~4N4p	平安	E-29°-N	20.8	80	32	2列	RD192に切られる。RD193.PP2との新旧不明
3	RG024	2号溝	9次	4O14p~4O13r	古代?	E-34°-N	4.9	47	10		
4	RG025	3号溝	10次	4N13t~4O17a	平安	N-70°-W ~N-39°-W	14.9	85	37	2列	
5	RG026	4号溝	10次	4O17d~4O18e	古代?	N-40°-W	3.1	22	12		RD198との新旧不明
6	RG027	19号溝	10次	5M2s~5M15u	平安	N-42°-E ~N-12°-W	27.2	65	19	2~3列	
7	RG028	7号溝	10次	5N13n~5N17p	平安	N-30°-W	8.8	78	31		RA095を切る To-aを含む
8	RG029	5号溝	10次	5N12o~5N15q	平安	N-30°-W	6.6	50	30		RA096を切る
9	RG030	18号溝	10次	5M20u~6M10y	平安	E-20°-S	3.9	50	23	2列	
10	RG031	9号溝	10次	5N19s~5N20u	古代	N-32°-W ~N-9°-W	32.1	75	19	2~3列	
11	RG032	6号溝	10次	5N23h~6M5n	平安	N-39°-W~	18.7	60	25	2列	
12	RG033	11号溝	10次	6N6c~6N5d	古代	E-35°-N	3.2	35	14	2列	
13	RG034	8号溝	10次	6N8a~6N5e	古代	E-34°-N	9.9	55	13	2列	
14	RG035	10号溝	10次	6M13y~6N9h	古代	E-28°-N	9.1	70	13	2列	
15	RG036	12号溝	10次	6N11a~6N12b	古代	N-28°-W	1.8	75	20	2列	
16	RG037	14号溝	10次	3M16t~3M20o	近世	E-37°-N	13.6	105	32		RD212を切り、RZ011に切られる
17	RG038	17号溝	10次	3M11y~3M16t	近世	N-44°-E	13.9	45	13		RD209に切られる
18	RG039	13号溝	10次	3M13x~3M22n	近世	E-43°-N	27.3	153	25		RA064、065、RD210、RZ012を切り、RZ011に切られる
19	RG040	16号溝	10次	5N19m~5N23n	近世以降	N-20°-W	9.7	38	7		RD207、RD208を切る
20	RG041	20号溝	10次	6M11l~6M11r	不明	E-4°-S	7.9	115	13		
21	RG042	22号溝	10次	6N22p~6N22q	平安	E-4°-N	5.4	42	27		

7 その他の遺構

RZ009カマド状遺構(第136図、写真図版103) 1号カマド状遺構

<位置>調査区北部の4 N 4 gグリッドに位置する。調査区東側を南北に走る埋没沢の西岸部分にあたる。

<重複関係>ない。

<検出面>II b層である。

<平面形・規模>北側がやや幅の広い長楕円形を呈する。南側の一部に攪乱を受けている。調査の際

に西側の立ち上がりがわかりにくく、掘りすぎてしまったため、詳細は不明であるが、径は1.82×0.8 m程度である。深さは北側が16cm、南側が20cmである。

＜埋土・焼土＞埋土は黒色土が主体である。土坑南側の上層には炭粒を含んでいる。焼土は検出面で土坑北よりに径74cmの環状に認められ、精査の結果、椀形で底面まで達することがわかった。焼土は希薄で、黒色土に混入しており、土坑の北よりに径74cmの範囲で認められる。焼土の混入する黒色土は5～8 cmの厚さである。北側の底面は焼成を受けて硬化している。本遺構は中近世のカマド状遺構に類似しているが、焼土の形成が希薄であり、同様の遺構であるか不明である。

＜遺物＞ない。

＜時期＞埋土の状況から古代遺構と考えられるが、詳しくは不明である。

(金子佐)

RZ010畝間状遺構 (第137図、写真図版104)

＜位置＞調査区中央東端に位置する。溝が平行して数条認められる。西の集合(ブロック)と東の集合(ブロック)に分けられ、西ブロックは4 O12 d グリッド～4 O13 e グリッド付近、東ブロックは4 o10 g グリッド～4 O12 g グリッド付近に位置する。

＜重複関係＞ない。

＜検出面＞Ⅲ層である。

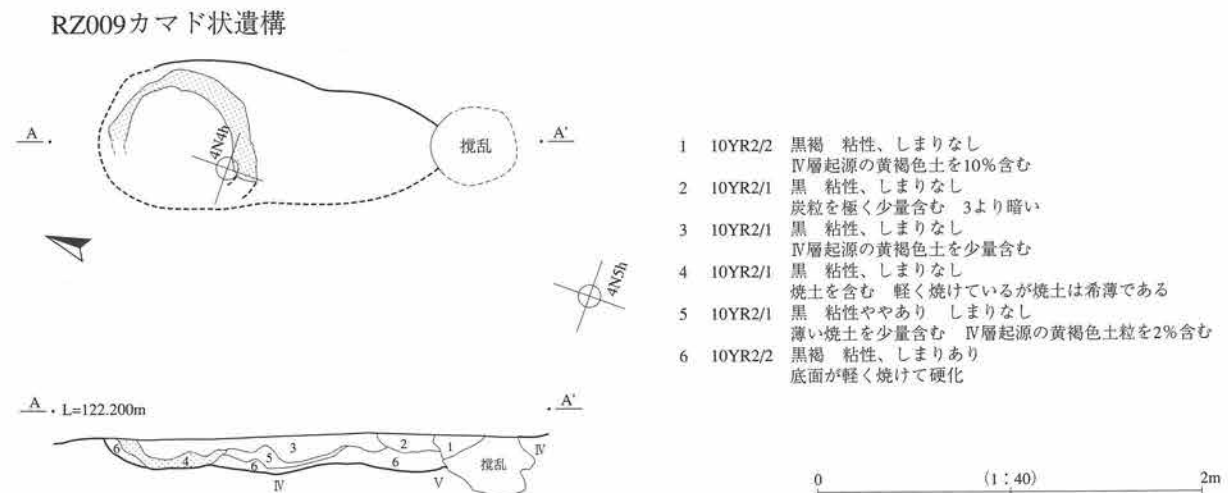
＜平面形・規模＞幅16～58cm、長さ0.4～2.4mの溝が平行して西ブロックで7条、東ブロックで5条検出された。溝間の幅は西ブロックで10～30cm、東ブロックはやや近接して3～10cmである。溝の深さは6～18cmである。溝の底面は凹凸があり、壁は内湾して立ち上がる。面積は西ブロックが約8.3 m²、東ブロックが約6 m²である。畑遺構かとも思われるが、畝と想定するならば、溝と溝の間がいささか狭く、確証は得られなかった。

＜埋土＞Ⅳ層ブロックを50%含む黒褐色土が主体であるが、場所により、Ⅳ層起源の黄褐色土が濁ったような暗褐色土が黒褐色土の周囲に見られる。これらの埋土2種はプラントオパール分析を行っている(付編2)。本遺構周辺からは陸稲栽培か稲藁による敷き藁を行っていた可能性も否定できないという結果が得られている。

＜遺物＞西ブロックから4g、東ブロックから10gの土師器破片が出土しているが小片で図化していない。

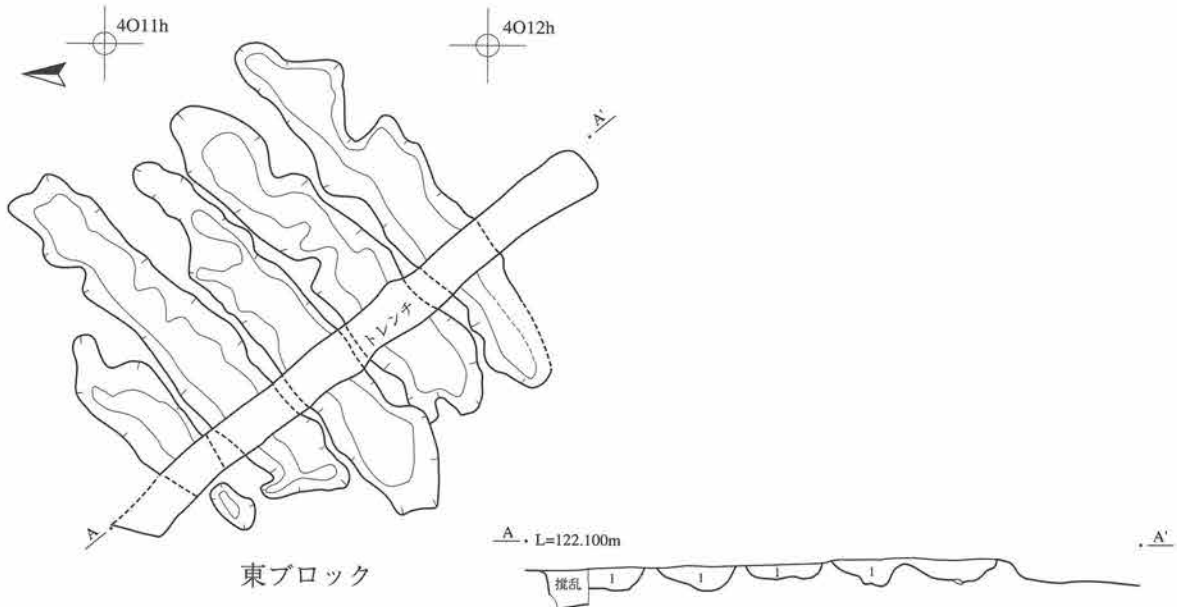
＜時期＞遺物がないことから不明である。

(金子佐)



第136図 RZ009カマド状遺構

7 その他の遺構



東ブロック

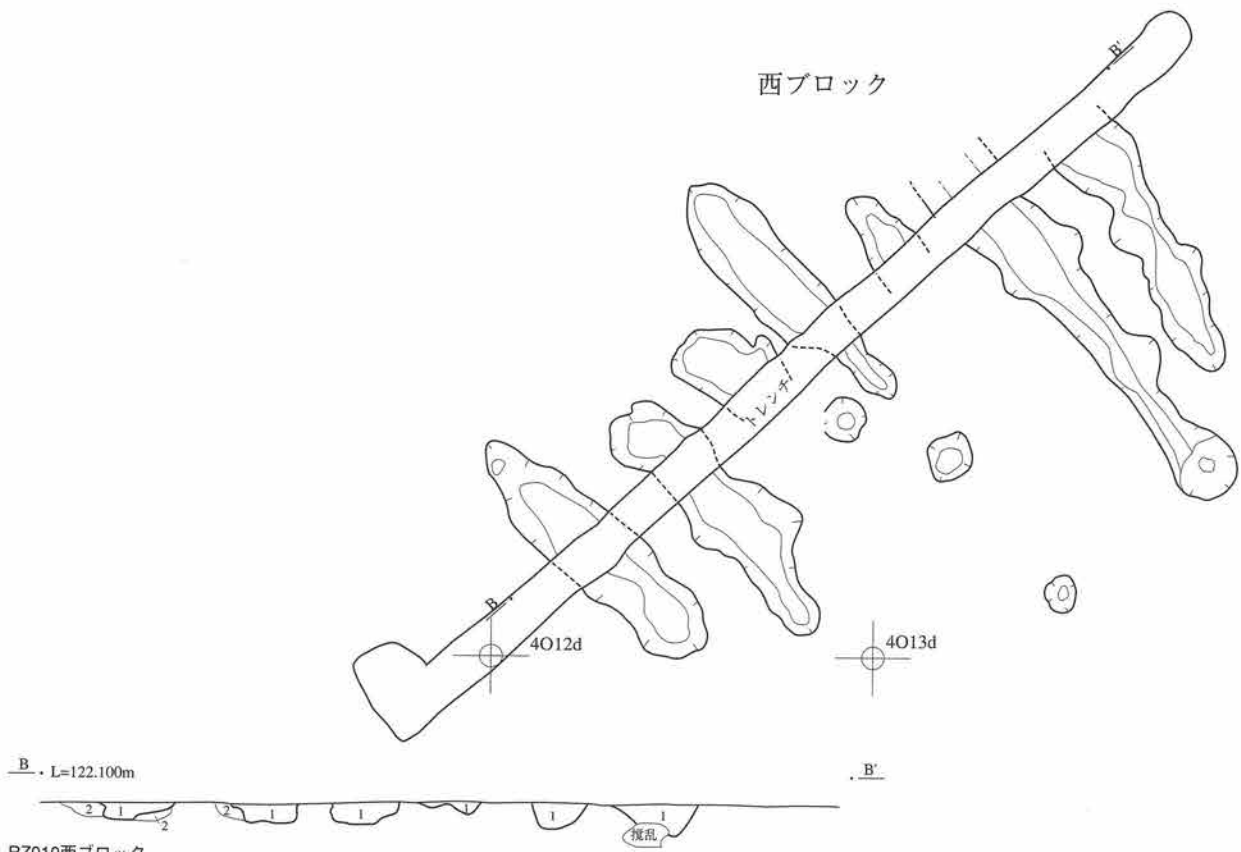
A · L=122.100m

RZ010東ブロック

1 10YR3/2 黒褐 粘性あり しまりなし IV層の褐色土を全体に50%含む



西ブロック



B · L=122.100m

RZ010西ブロック

- 1 10YR3/2 黒褐 粘性あり しまりなし IV層の褐色土を全体に50%含む
- 2 10YR3/4 暗褐 粘性なし しまり弱 少しにごる

0 (1:40) 2m

第137図 RZ010畝間状遺構 (1号畝間状遺構)

RZ011不明遺構（第138図、写真図版105） 1号不明遺構

<位置>第10次調査区北側の3 M16 u グリッド付近に位置する。

<重複関係>RD209、RG037、RG039と重複しており、本遺構はこれらの遺構を切っている。

<検出面>検出面はⅡ層上面で、黒褐色シルトの広がりとして確認した。

<規模・平面形>平面形は南西隅がやや突出する隅丸方形を呈し、規模は2.94_2.55mである。深さは最大で33cmである。

<埋土>埋土は黒褐色シルトを主体とし、地山の混入具合や色調により4層に分層した。底面直上には壁の崩落土と考えられる暗褐色砂が部分的に見られる。全体的に径2～3cmの礫の混入が認められ、南側から北側に向かって堆積した状況を示している。2層目は地山ブロックが多量に見られ、人為的な堆積状況を呈している。

<底面・掘り方>V層からⅥ層上面を底面としている。掘り方は一様ではなく、波板状を呈している。

<遺物>（第213、214図、写真図版148）

埋土中から土師器片8gが出土しているが、埋没過程において、周辺の古代の遺構からの流れ込みと考えられる。また、肥前産と考えられる染付碗21gも埋土中から出土し、図化を行った。

[陶磁器] 694は、高台内に二重方形枠に渦「福」の銘があり、高台脇から圏線のほか牡丹唐草文が描かれる。見込みに2本の圏線、中央にはコンニャク判による五弁花が施されている。器形および高台脇から文様が施されることから碗蓋と思われる。

<時期>埋土、出土遺物から近世と考えられる。

（北村）

RZ012不明遺構（第138図、写真図版105） 2号不明遺構

<位置>第10次調査区北側の3 M19 t グリッド付近に位置する。

<重複関係>RB008（PP91～PP93・PP99）、RD174、RG039と重複しており、本遺構はRD174を切り、RB008、RG039に切られている。

<検出面>検出面はⅢ層上面で黒色シルトの広がりとして確認した。

<規模・平面形>北西側を広くRG039に切られているため、正確な規模や平面形は不明であるが、残存する部分から判断すると、平面形は隅丸長方形を呈し、残存する規模は7.36_1.69mである。深さは最大で21cmである。

<埋土>埋土は上層が黒色シルト主体、下層が黒褐色シルトを主体とする。下層では砂や礫の混入が見られる。北東隅付近の床面及び床面直上、埋土下層から石器・石製品、礫が多量に出土している。また、しまりがなく、砂を多く含むなどの特徴が見られ、人為的な様相を呈している。上層は夾雑物が少なく、レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積と捉えられる。

<底面・掘り方>V層面を底面とし、概ね平坦である。

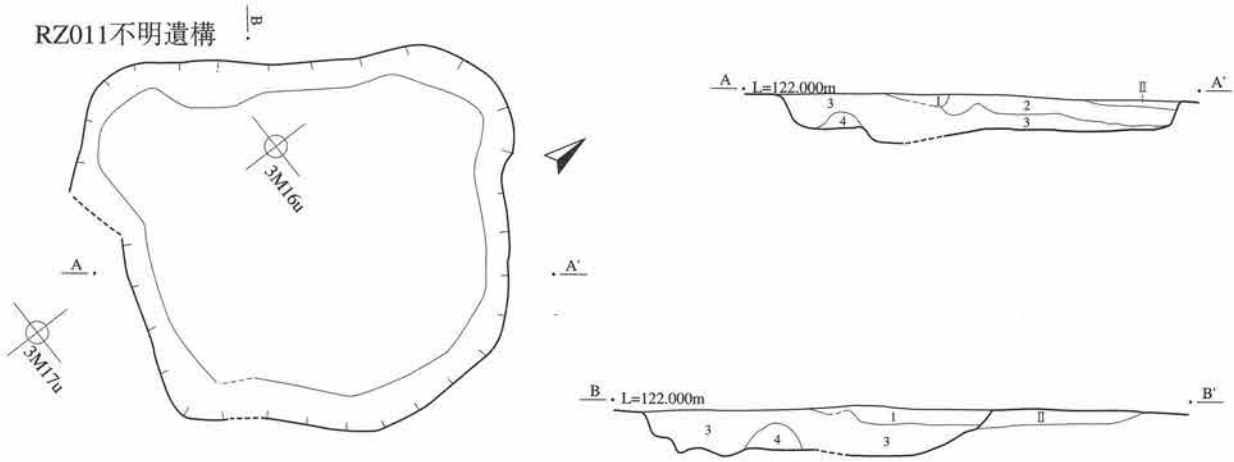
<遺物>（第214、215図、写真図版148）

土師器、須恵器が121g、縄文土器3g出土しているが、流れ込みと考えられる。陶磁器は3g出土した。前述したとおり、北東隅付近の底面及び底面直上、埋土下層から磨石、凹石、敲石、台石の石器、砥石の石製品が出土している。全体の出土状況を第138図に示しているなので、参照していただきたい。[石器・石製品] 底面から凹石が1点、台石1点、底面直上から砥石が4点、敲石が1点、埋土から磨石が2点出土している。そのうち、磨石2点、凹石1点、敲石1点、砥石3点を図化した。

695は楕円形の礫を、696は円形の礫を利用した磨石で、2点とも作業部位は表面のみである。697は

7 その他の遺構

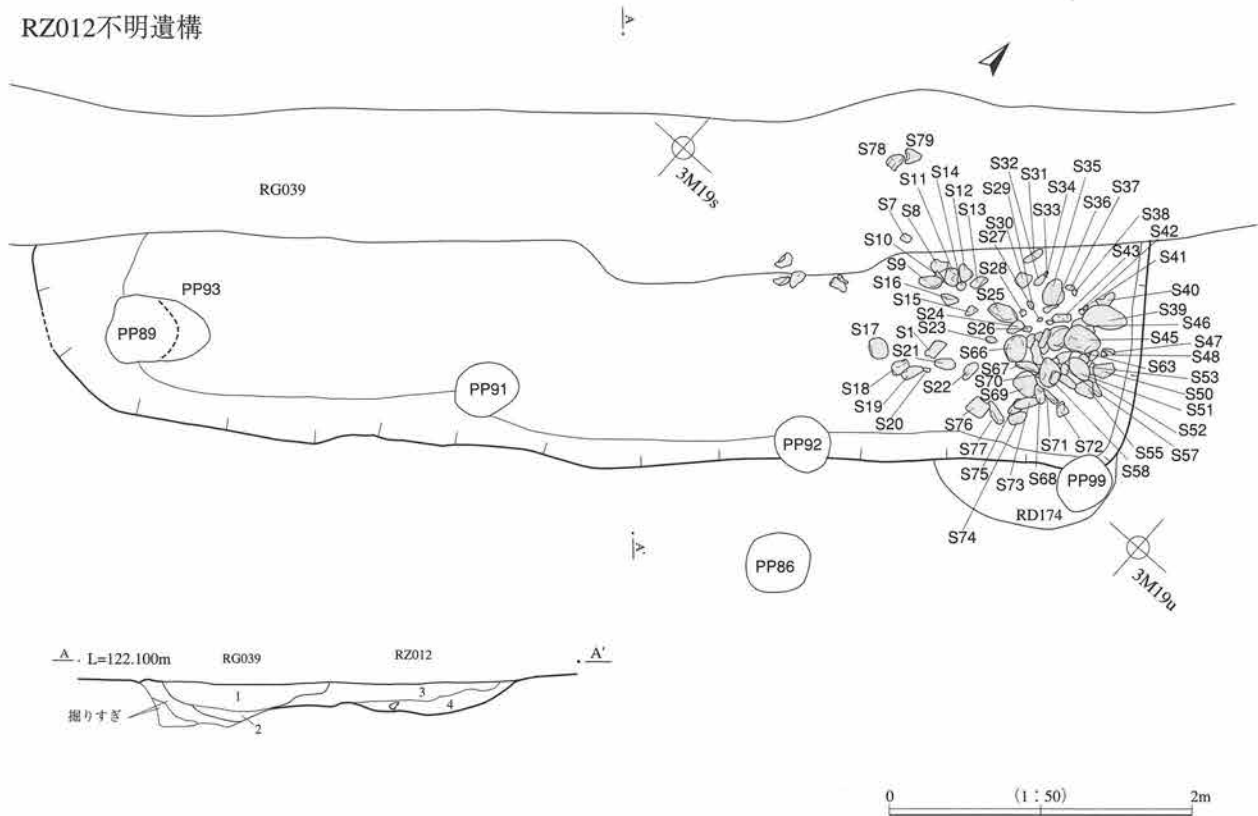
RZ011不明遺構



RZ011

- | | | | | |
|---|---------|----|--------------|-----------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なく、しまりやや有 | φ 2~3 cmの礫少量含む |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なく、しまり中 | IV層ブロック多量、礫多量含む |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐 | 粘性なく、しまりややなし | 礫多量含む |
| 4 | 10YR3/3 | 暗褐 | 粘性・しまりなし | 黒褐色シルト粒少量含む |

RZ012不明遺構



RZ012

- | | | | | |
|---|---------|----|--------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR3/1 | 黒褐 | 粘性なく、しまり中 | 小礫少量、V層小ブロック少量含む (RG039) |
| 2 | 10YR3/1 | 黒褐 | 粘性なく、しまりややなし | 黒褐色砂少量、φ 3~5 cmの礫含む (RG039) |
| 3 | 10YR2/1 | 黒 | 粘性なく、しまり中 | |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐 | 粘性なく、しまりややなし | 黒褐色・褐色砂含む φ 5 cmの亜角礫含む |

第138図 RZ011・RZ012不明遺構 (1・2号不明遺構)

敲石である。作業部位は下端のみである。698は凹石としたものである。表面に円錐状の凹部が1箇所認められる。凹部は平滑になっており、「搗る」作業により形成されたものと考えられる。700～702は砥石で、700・701は荒砥、702が仕上砥である。700は表面には作業面とともに、凹部が1箇所認められる。裏面には幅4cm程の溝状の作業面が観察される。701は表面の一部を作業面としている。702は長辺5面全てを作業面としており、表面と右側面は強い湾曲を持つ。

<時期>近世。

(北村)

8 柱穴状土坑

今回の調査では、柱穴状の土坑が137基検出された。特に多く検出されたのは調査区北側の3Mグリッド、調査区南側の6Nグリッド、6Oグリッド、次いで4NグリッドのRF003周辺である。これらは、掘立柱建物を構成する可能性もあるが、調査では確認できなかった。時期の特定できないものも多い。個々の柱穴の記述は略し、表としてまとめた。以下、群として特筆すべき点について、記した。

3Mグリッド南東部から4Mグリッド北東部の柱穴群（第140～142図、写真図版105）

重複関係は表のとおりである。柱痕が確認された柱穴もある。埋土は黒褐色土もしくは黒色土を主体とし、前者が多い。柱痕の確認される柱穴状土坑でも掘り方との埋土の差は地山の混入量や土質の違いなどあるものの、明瞭ではない。

PP121からロクロを使用していない土師器甕破片（709）が出土している（第215図、写真図版148）。おおむね近世に属すると考えられる。

(北村)

4Nグリッドの柱穴群（第142図）

RF003周辺から検出されたPP1～PP5である。RF003を覆う屋根の柱穴ではないかと考えて精査したが、そのような配置とは考えられなかった。埋土は7.5YR2/2の黒褐色シルトでV層起源の黄褐色土ブロックを含む。PP4とPP5は重複しており、PP4が新しい。PP5には柱痕が認められる。

PP3から須恵器甕の口縁部破片（708）が出土した。また、PP4から須恵器の壺か甕の体部破片が出土しているが、小片で図化に至らなかった（第215図、写真図版148）。

これら5個は埋土から古代に属する可能性がある。

(金子佐)

5Mグリッド北東部の柱穴2個（第142図）

重複関係はない。PP122は柱痕が確認された。埋土は黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。

近世と考えられる。

(北村)

5Nグリッドの柱穴群（第139図）

PP32～PP38は調査初期段階では掘立柱建物を構成するかと考えたが、組み合わせる柱穴が不明である。時期は不明であるが、埋土は古代の住居埋土に似る。

(八木)

6Mグリッド東部から6Nグリッド西部の柱穴群（第144図）

8 柱穴状土坑

PP24がRG036に切られている。PP22・PP23では柱痕は確認できなかった。埋土は黒褐色土もしくは黒色土主体である。遺物は出土していない。

古代か。

(北村)

6 Nグリッド、6 Oグリッドの柱穴群 (第143、144図)

埋土とその堆積状況から以下の3種に分類される。

(八木)

A 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 締りやや強 上層均質 下層 黄褐色土が混入し斑状

B 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 締り中 均質

C 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 締り中 褐色土ブロック混入し斑状 埋土の状況から比較的新しいと判断される。

第7表 柱穴状土坑計測表

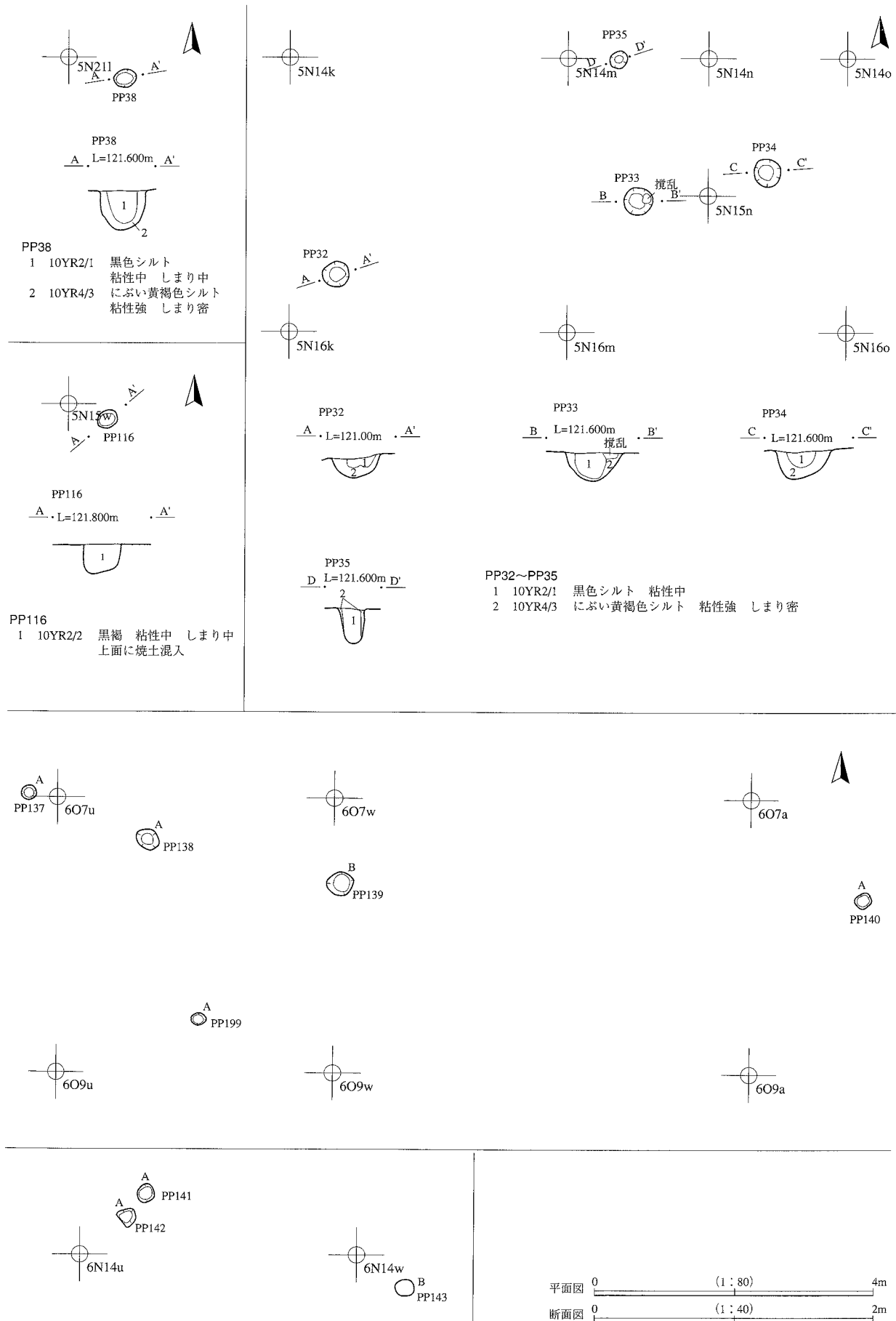
名称	径(cm)	深さ(cm)	埋土・柱痕	出土遺物	出土層位	重複
1 PP1	31×26	27				
2 PP2	23×22	34		土師器・須恵器細片 7g	埋土	RG23と重複 新旧不明
3 PP3	21×21	35		708 須恵器甕 48g	埋土	
4 PP4	24	28		須恵器壺か甕の体部破片	埋土	PP5を切る
5 PP5	25	30	柱痕			PP4に切られる
6 PP7	48×46	36				
7 PP8	32×28	41				
8 PP9	34×28	31				
9 PP10	26×26	31				
10 PP11	30×28	35				
11 PP13	36×32	35				
12 PP15	36×30	31				
13 PP16	25×22	26				
14 PP17	32×28	32				
15 PP18	44×40	28		内黒土師器坏破片、外面 ナアの土師器甕破片 10g	埋土	
16 PP19	48×40	34				RD186を切る
17 PP200	37×30	28				
18 PP21	56×50	37		709土師器甕口縁部	埋土	
19 PP22	28×23		なし			
20 PP23	46×43	37	なし			
21 PP24	52×40					RG036に切られる
22 PP32	38×36	17				
23 PP33	40×38	23				
24 PP34	21×19	23				
25 PP35	24×22	27				
26 PP38	26×24	29				
27 PP39	34×28	44				
28 PP40	33×29	34	柱痕	内黒土師器坏破片 1g	中位	
29 PP41	30×29	31	柱痕			PP66を切る
30 PP42	31×27	32	柱痕	外面にケズリのある土師 器甕破片 8g	上位	
31 PP43	22×22	30	柱痕			
32 PP44	34×33	41	柱痕	土師器小片 1g	上位	
33 PP45	32×31	32	柱痕	内外面にハケメのある土 師器甕破片 8g	上位	
34 PP47	26×25	16				
35 PP48	38×37	53				
36 PP49	22×21	21				
37 PP50	30×27	22				
38 PP54	32×(22)	27				PP53に切られる
39 PP55	31×26	23	柱痕			
40 PP57	29×29	34		土師器甕破片 6g	上位	PP65を切る
41 PP58	36×35	34		土師器甕破片 5g	下位	PP65を切る
42 PP59	32×30	39	柱痕			
43 PP61	23×22	26				
44 PP62	30×24	19				
45 PP63	26×24	37	柱痕			
46 PP65	()×37	39	柱痕	土師器甕破片、須恵器 か壺の破片 40g	1層	
47 PP68	15×14	3				
48 PP72	26×21	13				
49 PP73	35×29	10				
50 PP74	29×26	12				
51 PP76	25×20	3				
52 PP77	30×(20)	21				
53 PP78	23×20	7				
54 PP79	35×32	40				
55 PP80	34×30	42	柱痕			
56 PP81	34×33	33				
57 PP82	36×35	38				
58 PP83	37×32	34		内黒土師器坏破片(黒は とんでいる) 11g	埋土	
59 PP84	17×16	20				RD211に切られる
60 PP85	20×19	28				
61 PP101	31×25	26				
62 PP102	23×22	23				
63 PP103	25×21	22				
64 PP104	23×22	17				
65 PP105	31×29	26				
66 PP106	26×23	32				
67 PP107	36×30	30				
68 PP108	21×21	38				
69 PP109	33×32	48	柱痕			
70 PP110	30×26	38		非内黒土師器坏破片 2g	埋土	
71 PP111	40×32	?				
72 PP112	23×21	?		須恵器甕破片 24g	埋土	
73 PP114	38×36	37				
74 PP115	23×22	14				
75 PP116	31×25	21				

	名称	径(cm)	深さ (cm)	埋土・ 柱痕	出土遺物	出土 層位	重複		名称	径(cm)	深さ (cm)	埋土・ 柱痕	出土遺物	出土 層位	重複
76	PP118	29×25	31	柱痕					110	PP166	17×14	10	C		
77	PP119	37×33	15						111	PP167	25×24	17	C		
78	PP120	35×31	22						112	PP168	45×30	14			
79	PP121	24×22	31		709 外面にケズリのある土 師器瓦破片 31g	埋土			113	PP169	25×22	11	C		
80	PP122	42×38	33	柱痕					114	PP170	21×16	9	C		
81	PP123	31×28	18						115	PP171	30×28	16	A		
82	PP137	22×21	7	A					116	PP172	14×14	5	C		
83	PP138	36×27	22	A					117	PP173	18×16	7	B		
84	PP139	38×34	49	B					118	PP174	18×17	10	B		
85	PP140	24×23	22	A					119	PP175	21×19	3	A		
86	PP141	27×24	13	A					120	PP176	(58)×36	23	B		
87	PP142	(28)×24	12	A					121	PP177	40×20	35	A		
88	PP143	29×25	18	B					122	PP178	23×22	11	C		
89	PP144	48×30	15	B					123	PP179	46×22	9	C		
90	PP145	41×28	61	C					124	PP180	30×25	30	A		
91	PP146	52×38	30	B					125	PP181	24×19	17	A		
92	PP147	30×28	21	A					126	PP182	26×20	14	C		
93	PP148	22×21	15	C					127	PP183	28×24	11	C		
94	PP149	22×20	15	C					128	PP184	20×18	12	C		
95	PP150	24×22	11	C					129	PP185	20×19	10	C		
96	PP151	23×20	21	A					130	PP186	29×20	23	C		
97	PP152	33×28	12	C					131	PP187	28×26	40	A		
98	PP153	38×23	11	B					132	PP188	29×27	16	B		
99	PP154	40×22	16	C					133	PP189	30×22	41	A		
100	PP156	20×17	9	C					134	PP190	18×17	34	A		
101	PP157	22×19	24	A					135	PP191	69×17	11	C		
102	PP158	20×17	1	C					136	PP192	52×48	9	B		
103	PP159	21×16	26	C					137	PP193	18×18	17	C		
104	PP160	16×14	11	C					138	PP194	18×17	21	C		
105	PP161	20×15	10	C					139	PP195	28×19	15	A		
106	PP162	19×18	8	C					140	PP196	25×22	11	B		
107	PP163	33×28	33	B					141	PP197	25×(19)	7	C		
108	PP164	24×20	13	C					142	PP198	30×23	33	A		
109	PP165	26×18	13	C					143	PP199	21×18	26	B		

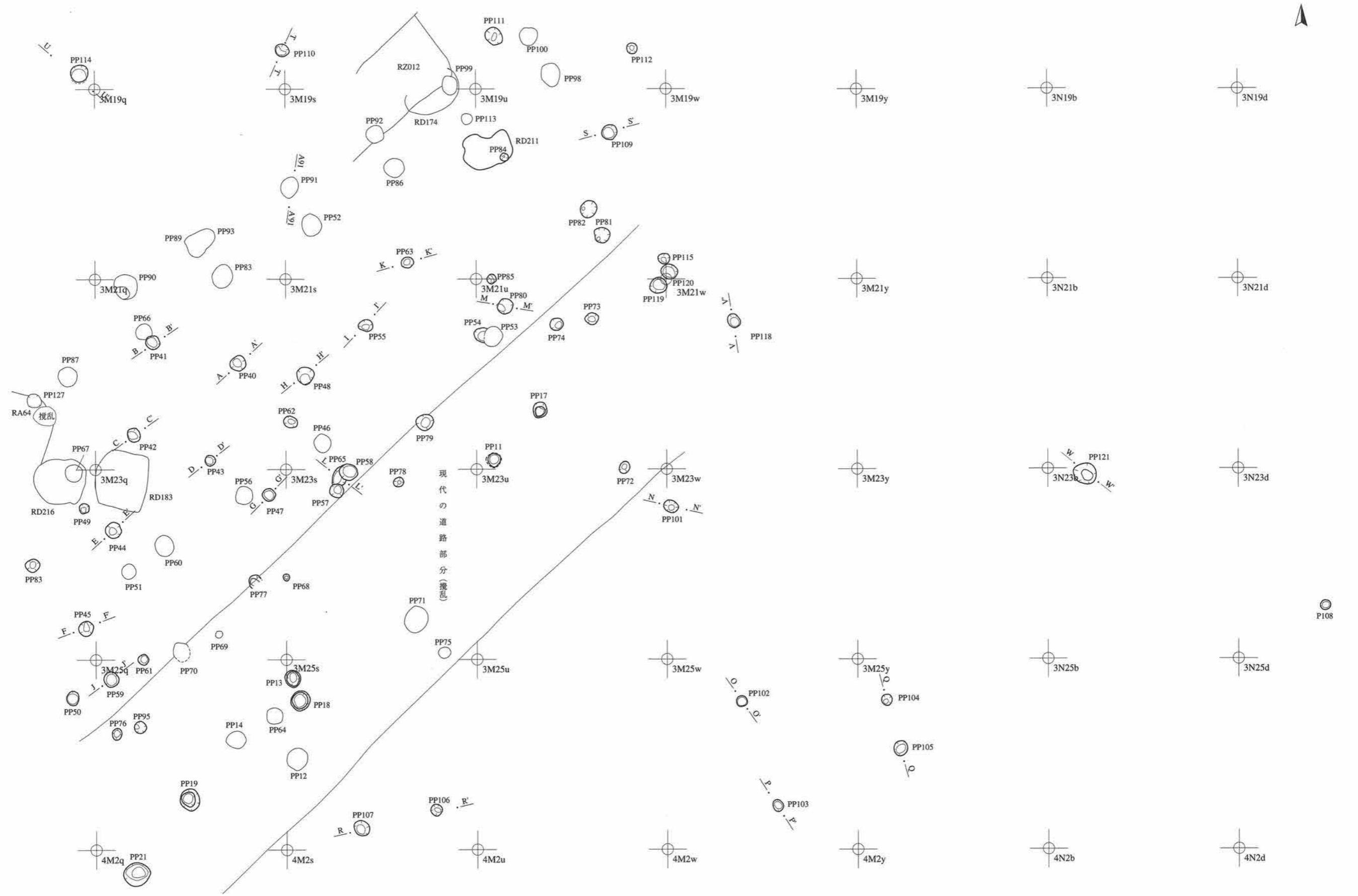
参考文献

- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念
 〃 2001 『国内出土の肥前陶磁—東日本の流通をさぐる』 第11回九州近世陶磁学会資料
 芹沢長介 1987 『日本やきもの集成 北海道、東北、関東』

8 柱穴状土坑

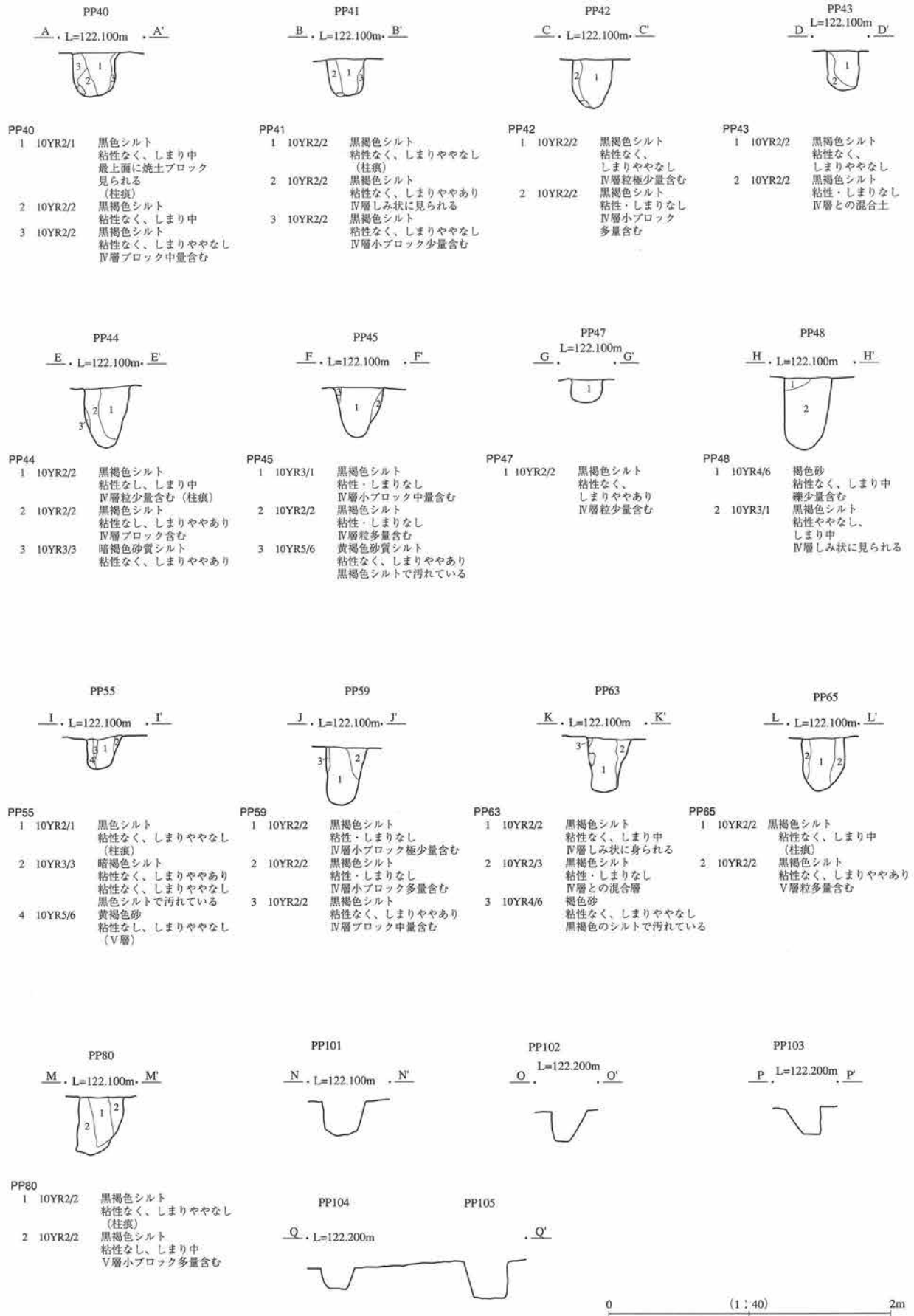


第139図 柱穴状土坑 (1) 5N.6O.6Nグリッド



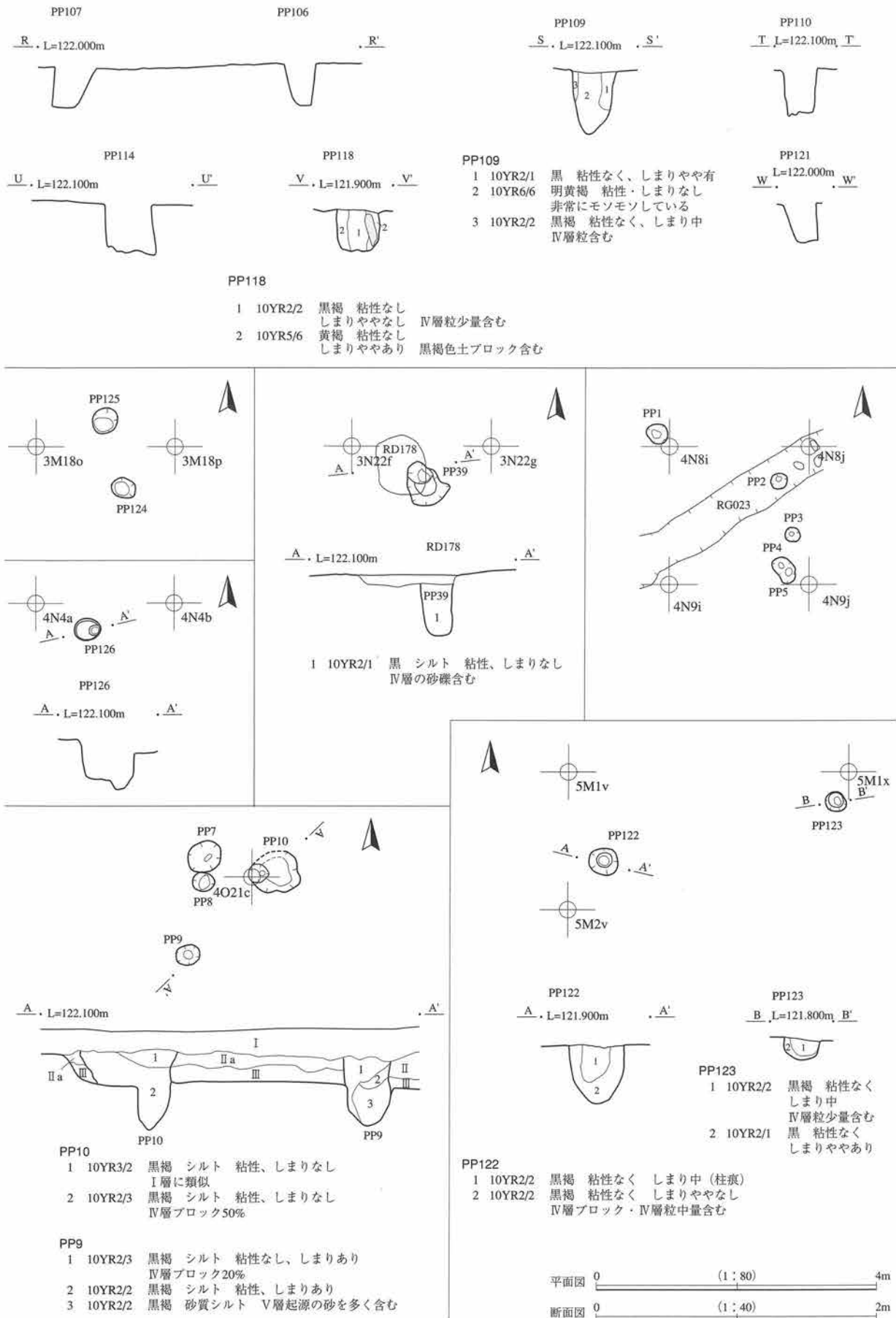
第140図 柱穴状土坑 (2) 3M~4Nグリッド

0 (1:80) 4m

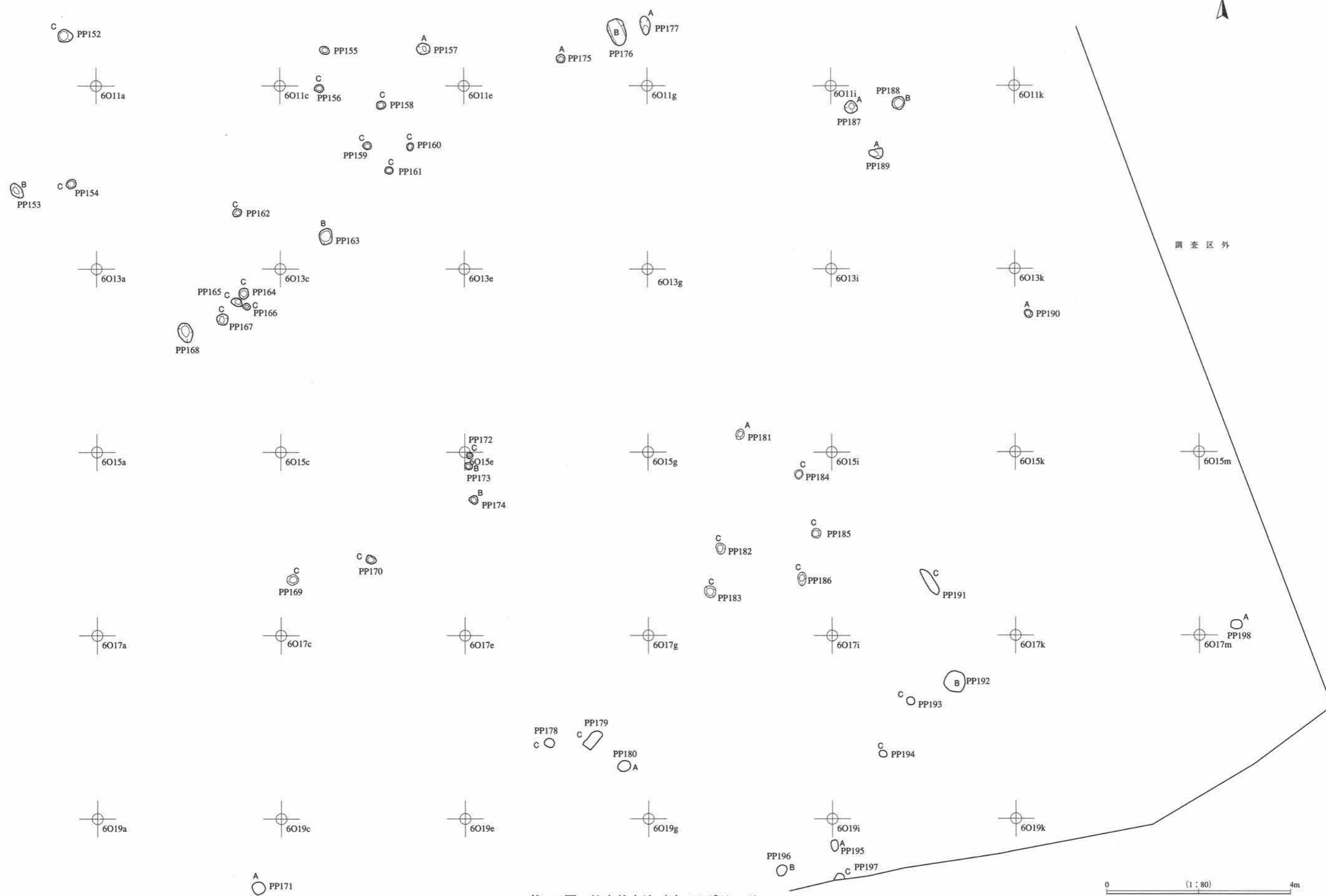


第141図 柱穴状土坑 (3)

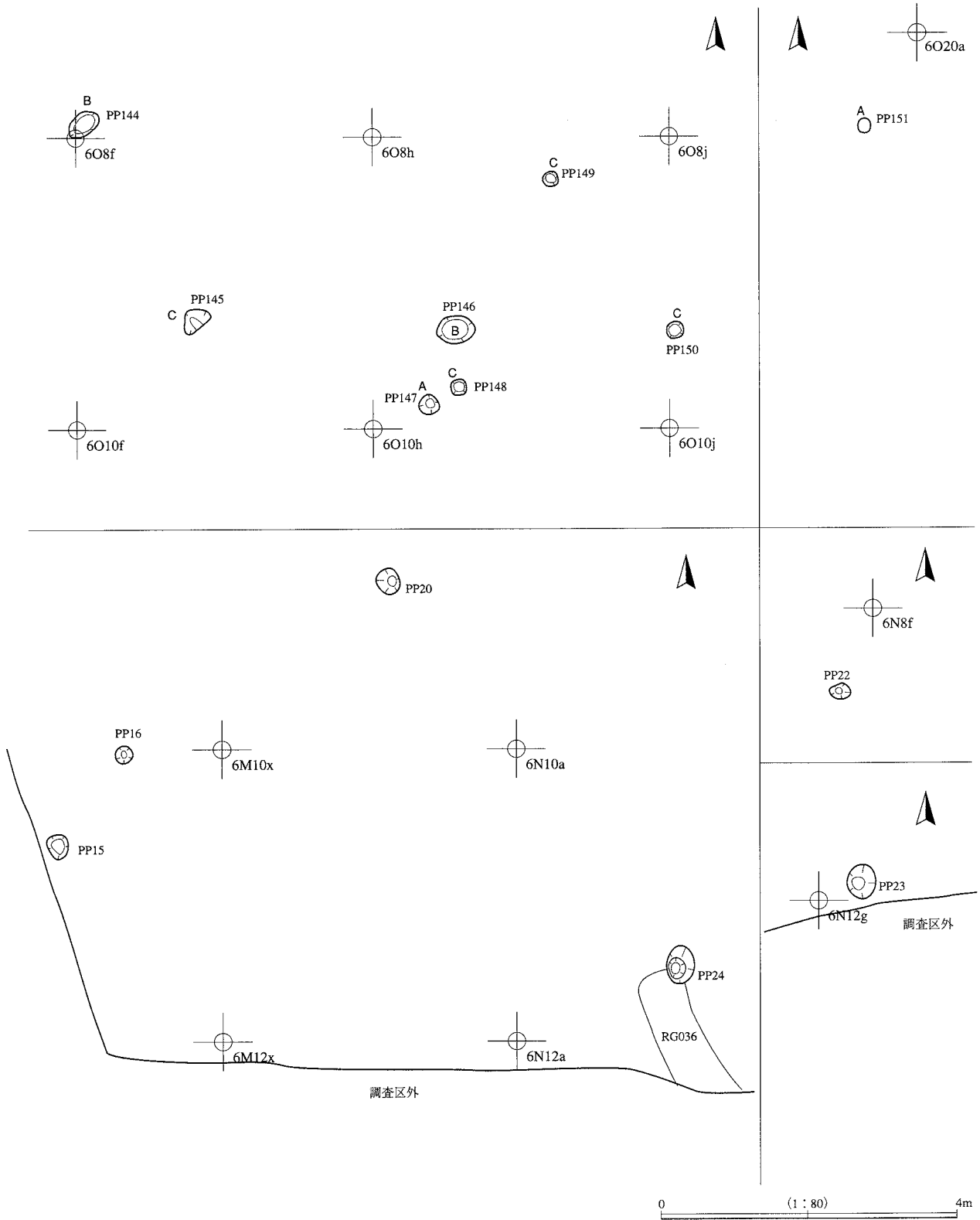
8 柱穴状土坑



第142図 柱穴状土坑 (4) 3M.3N.4N.4O.5Mグリッド



第143図 柱穴状土坑 (5) 60グリッド



第144図 柱穴状土坑 (6) 6O.6Nグリッド

9 遺構外出土遺物

調査区全般の表土、攪乱、及びⅡ a層から、遺物が出土している。総量は土師器、須恵器が約30kg、縄文、弥生土器が約3kg、陶磁器が3.5kgである。最も多かったのは4Nグリッド埋没沢のⅡ a層からの出土で、土師器、須恵器が約20kgに及ぶ。縄文、弥生土器は約2kgである。Ⅱ a層に比べⅡ b層からの出土は少ない。特に集中している地点は3箇所認められる（第9図、遺物集中A、C、E）。当初何らかの遺構かと考えたが、周囲に遺構が多く、沢状にやや窪んでいることから遺物が集中したものと考えられる。

（1）縄文時代の遺物

土器（第215、216図、写真図版148、149）

RA052・RD150以外の遺構内出土は全て古代の遺構内に混入していたものである。縄文土器の混入していた遺構はRA052周辺の古代の竪穴住居跡が多く、包含層出土破片もRA052近辺にまとまる。

710・715・716・717は粗製深鉢である。口縁部文様帯に入組三叉文を有する。口縁端部は緩やかな刻みが施される。

711は台付鉢である。口縁部破片のみの出土だが、類例から台付鉢と判断できる。底部から肩部にかけて直立し、肩部が最大径、肩部から口縁部にかけては「く」の字状に屈曲する。口縁部文様帯と口縁端部に刻みが施される。胴部文様帯には磨消縄文による雲形文が施文される。器形および文様の特徴から大洞C2式と判断される。718・719・721は頸部に横長の列点文を有する鉢である。

722は口縁部文様帯に横位多状沈線が施文される鉢である。器形および文様構成は710・715・716・717と共通するが、胎土の粒子が細かく、器厚は薄く、縄文は微細で沈線施文は繊細であることから精製土器と思われる。時期は大洞C2式と考えられる。

712は胎土の粒子が粗く、器厚が非常に厚く、縄文節が粗いことから粗製深鉢と判断される。底面に木葉痕が残る。713は直立する器形の鉢である。縄文のみの施文である。714は胴部が膨らむ器形を呈する。口縁部は欠損しているため、全体の様相を知りえないが、口縁部文様帯には15号住出土の6に近い文様が施文された可能性がある。胴部縄文は粗製深鉢より細かく、胎土もやや緻密である。

720は精製鉢底部である。文様帯が欠損しているため、全体の様相は不明である。胎土の粒子は細かく、器厚は712より薄い。

以上、晩期前葉が中心である。

（八木）

石器（第218図、写真図版151）

762・764・765は石鏃である。全体的に調整は両面とも入念に行われている。762は凹基有茎鏃で、基部の一部を欠損しているものである。764は平基有茎鏃で、先端部を欠損しているものである。765は凹基無茎鏃で略完形のものである。図化したもの以外では石鏃1点、UFが1点、剥片が8点出土している。

（北村）

（2）弥生時代の土器（第216図、写真図版149）

723、724、725とそれ以外に、整形等を中心として明瞭に分けられる。前者は、前期で、この地域の弥生土器の最初の段階に当たる大洞A'式新段階（砂沢式の古い段階に併行）に位置づけられよう。後者は、概ね後期に相当しようが、RF004出土の678のような典型的なものとはかく、729のような

異質のものも含んでいるので、不明瞭な部分があり、多時期にわたっているのかも知れない。前者は、それぞれ別々の古代の住居から出土しているが、比較的狭い箇所集中している。後者は、RA095付近に比較的集中する部分があるが、基本的には調査区に散在して出土した。(金子昭)

(3) 古代の遺物

奈良時代の土器 (第216、217図、写真図版149)

土師器坏3点、土師器甕3点の計6点を図化した。

734~736は土師器坏である。734は丸底で、体部外面に稜や段が全く見られないものである。内面は酸化して、黒色処理がとんでいる。体部外面の調整は底部に近いほど無調整で、口縁部に近いほどミガキが行われるが、全体的に粗い。735は丸底で、体部外面の段や稜を持たないが、沈線が一条巡っている。内面には沈線に対応する屈曲部を持つ。内面は酸化して、黒色処理がとんでいる。736は丸底で、体部外面に段を持つものである。内面には段に対応する屈曲部を持たないが、端部に対応する屈曲部を持つ。口唇部は丸みを帯びている。体部外面の調整は器面が摩滅しているため不明瞭であるが、ナデ、口縁部はヨコナデの後ミガキである。

737~739は球胴形の土師器甕である。737は口縁部から体部上半の断片的な資料で、頸部に段を持たないものである。内面に屈曲部を持たない。口唇部は面取りされ、角張っている。焼き締まっている。739は厚く、やや大型の球胴甕と思われる。(北村)

平安時代の土器 (第217図、写真図版149、150)

遺構外からは、13点を図化して掲載した。内面黒色処理した土師器坏2点、両面黒色の土師器坏1点、黒色処理していない土師器坏2点、須恵器坏3点、土師器壺1点、須恵器甕1点、壺1点である。741は低い高台の付く坏で、外面も口縁部に横ナデが施される。742は両面黒色の土師器坏で、内外面に丁寧なミガキが施される。740、743は墨書土器である。748は須恵器壺を模倣したと思われる土師器の壺で、ロクロを使用しておらず、外面はナデとミガキが施されるが、器面はやや荒れ気味で光沢はない。頸部に沈線が1条入る。この土器は時期が特定しにくいだが、便宜上ここに載せた。749は形や法量からは甕とした方が良いと思われるが、成形や調整から壺と判断した。(金子佐)

土製品 (第218図、写真図版150)

753は4 NグリッドのII a層から出土した棒状の土製品である。勾玉の一部であろうか。断片的な資料のため詳細は不明である。(北村)

鉄製品 (第218図、写真図版151)

773は鉄鏃の茎部の断片的な資料である。4 NグリッドのI a層から出土した。(北村)

(4) 近世以降の遺物

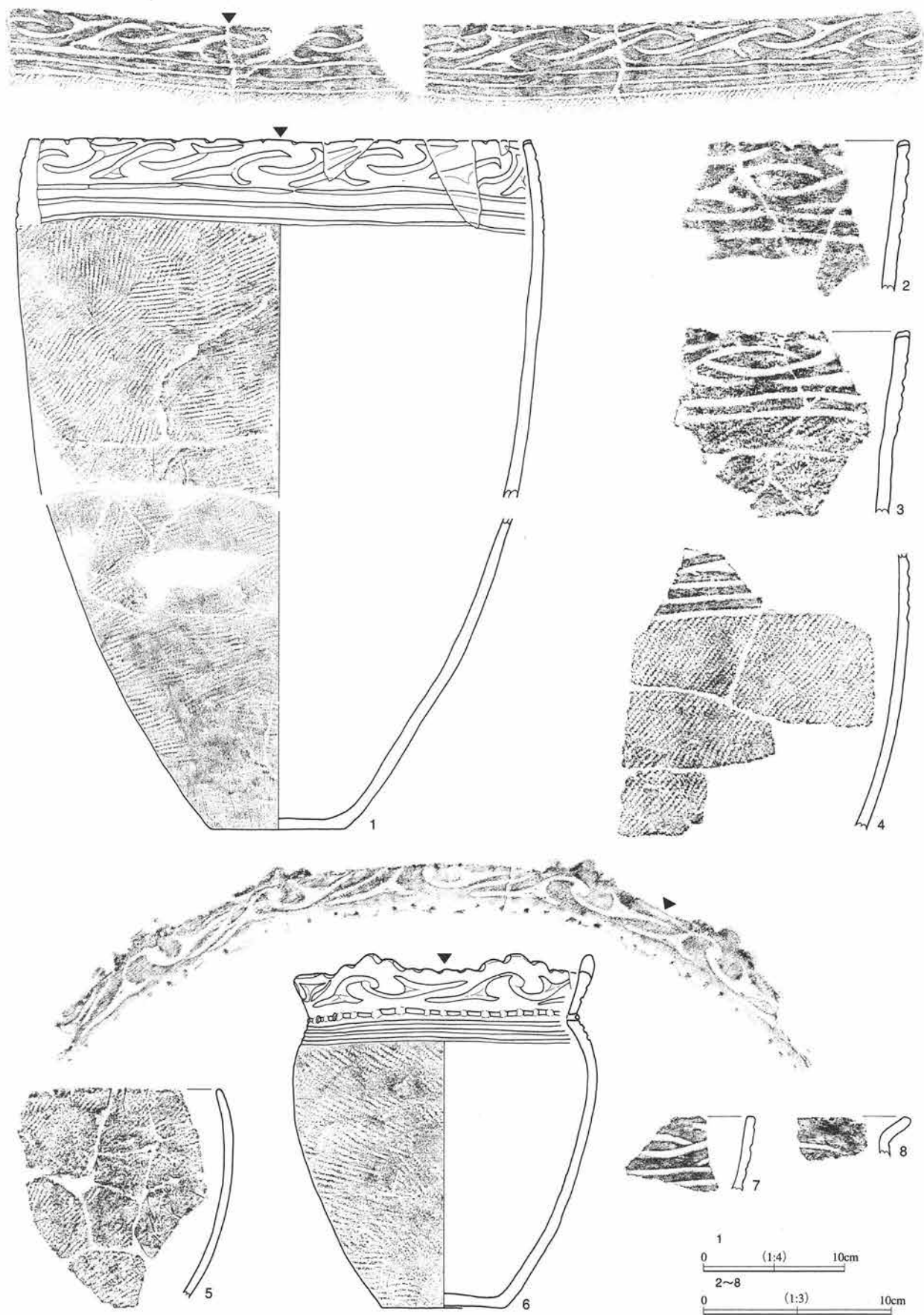
土製品 (写真図版150、151)

土人形2点、不明土製品1点の計3点出土した。751はRA062のトレンチから出土した完形の土人形である。高さ2 cmの小形のもので、型造りの大黒と考えられる。752は第17トレンチから出土した土人形の頭部片である。754は6 Nの攪乱から出土した不明土製品である。(北村)

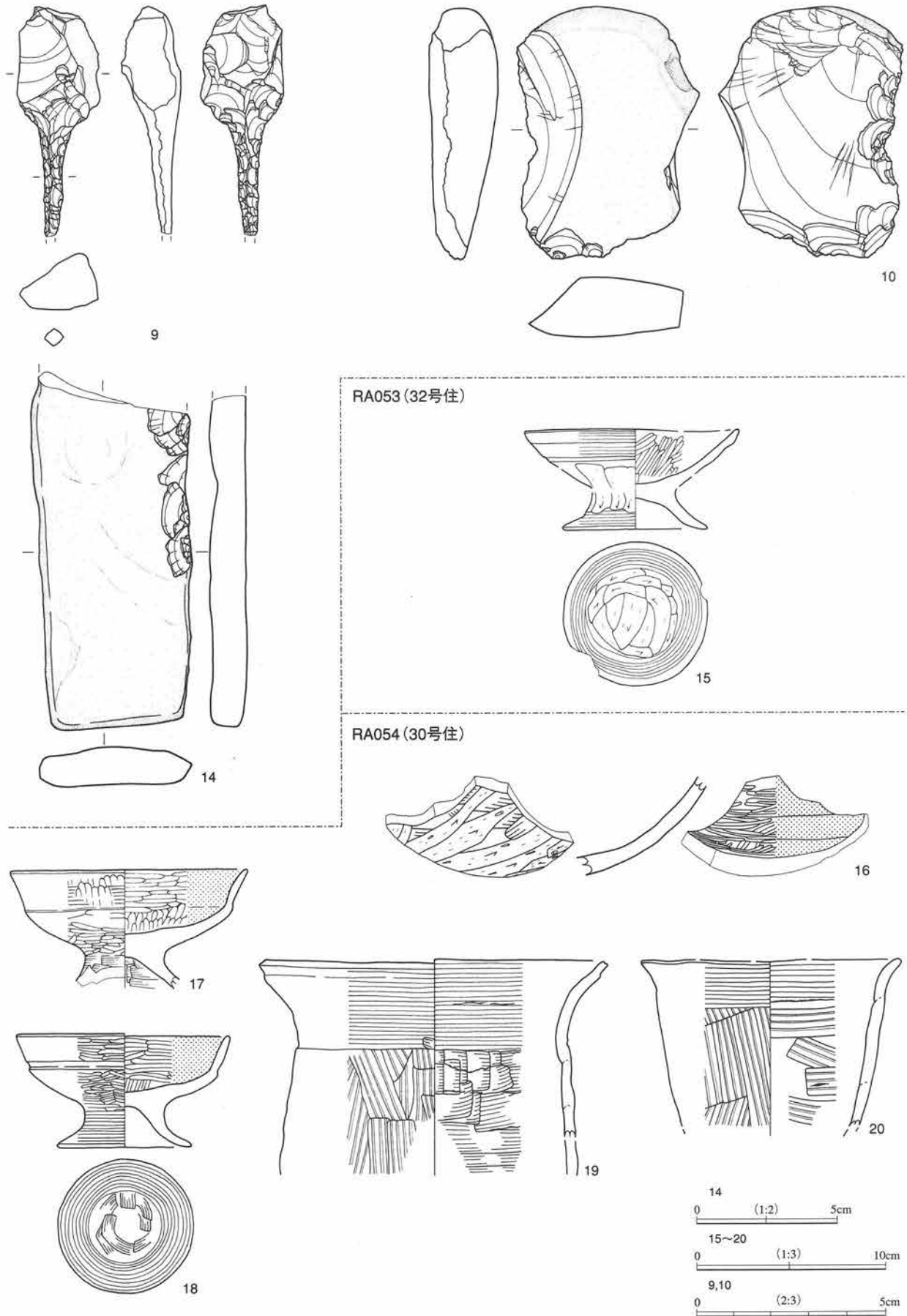
金属製品 (第218図、写真図版150、151)

不明鉄製品1点、煙管1点が出土した。774は一端が欠損した棒状の鉄製品である。断面形は方形で、一端を丸く折り曲げている。火打ち金の一種と考えられる。4 NグリッドのIV層上層から出土した。775は攪乱から出土した煙管の吸口部である。(北村)

RA052 (15号住)

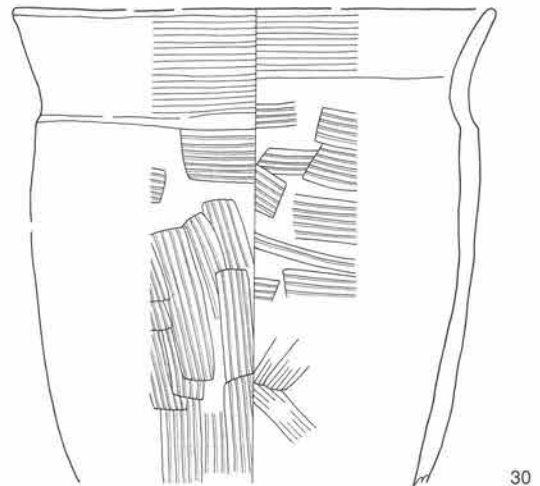
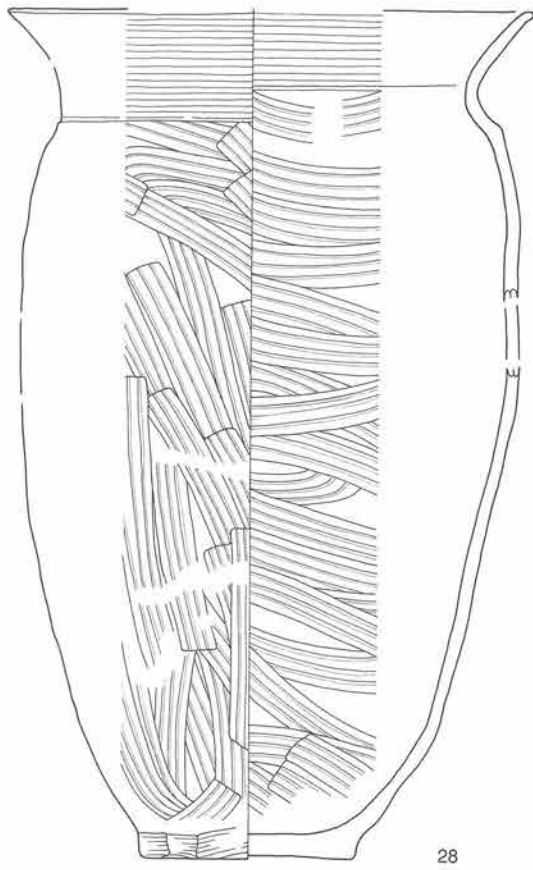
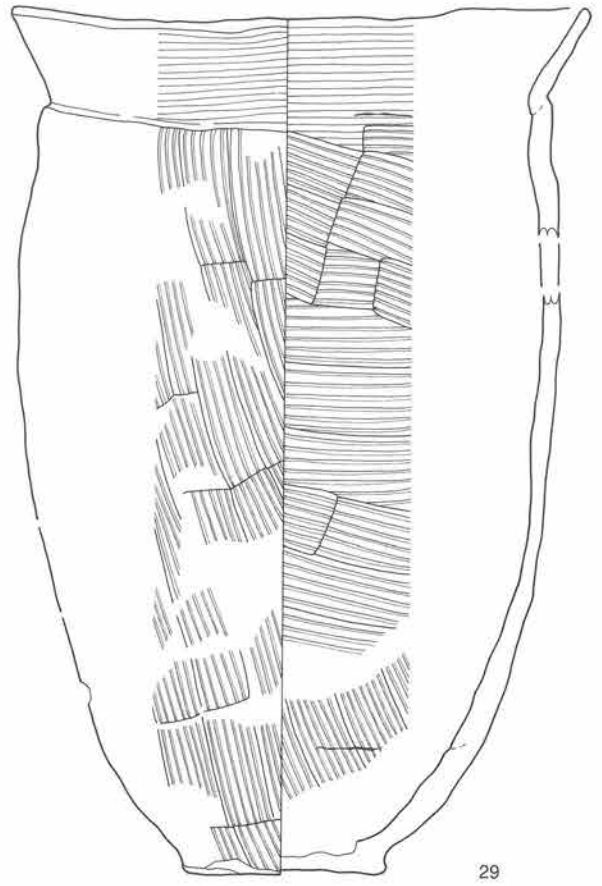
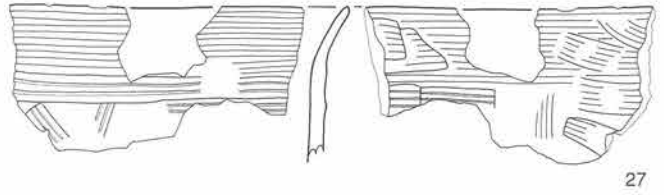
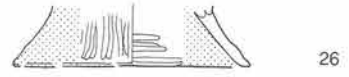
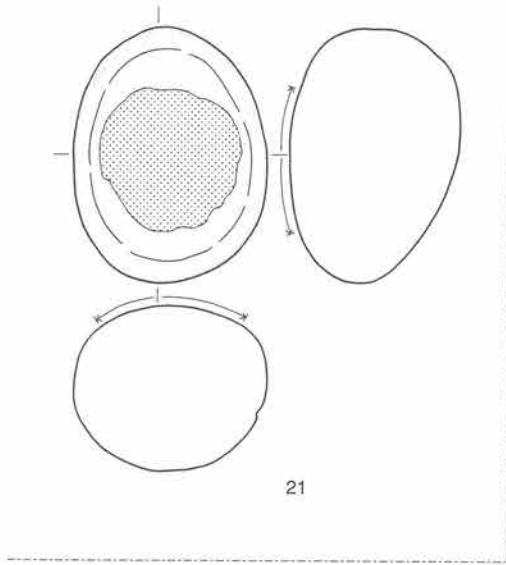


第145図 遺構内出土遺物 (1)

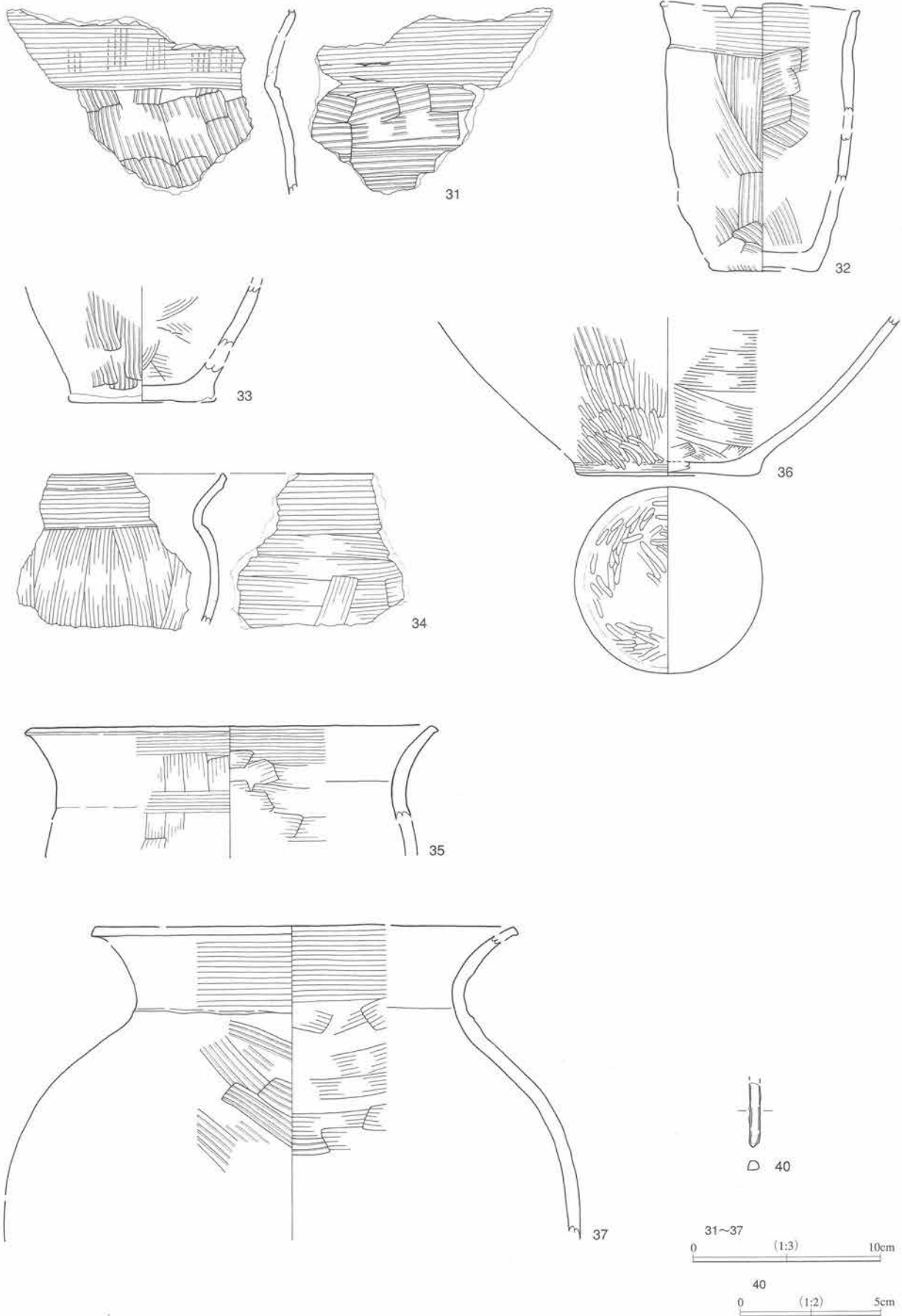


第146図 遺構内出土遺物 (2)

RA055 (16号住)

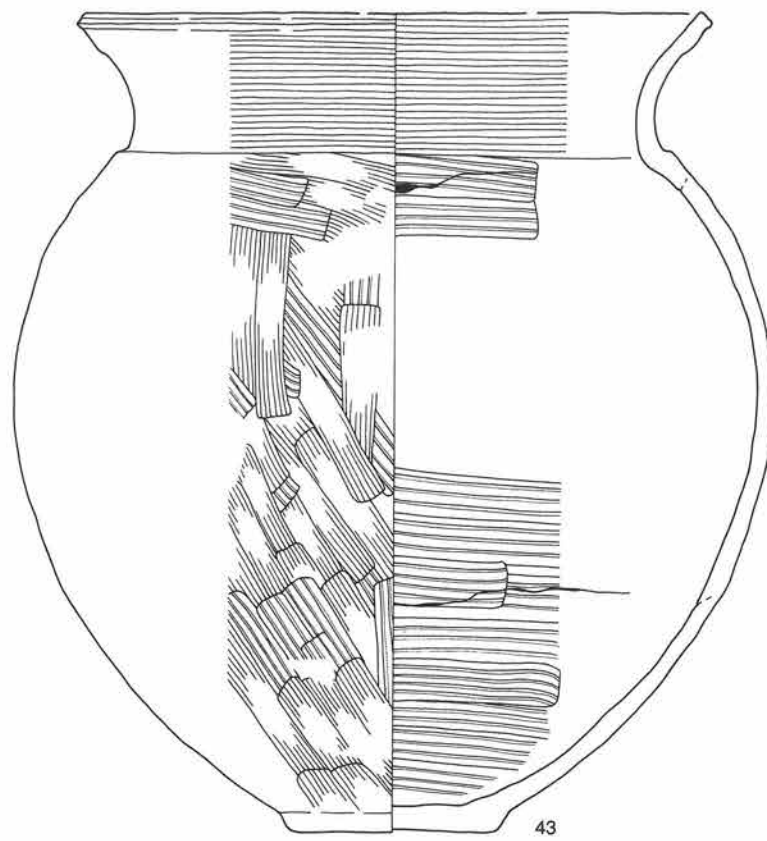
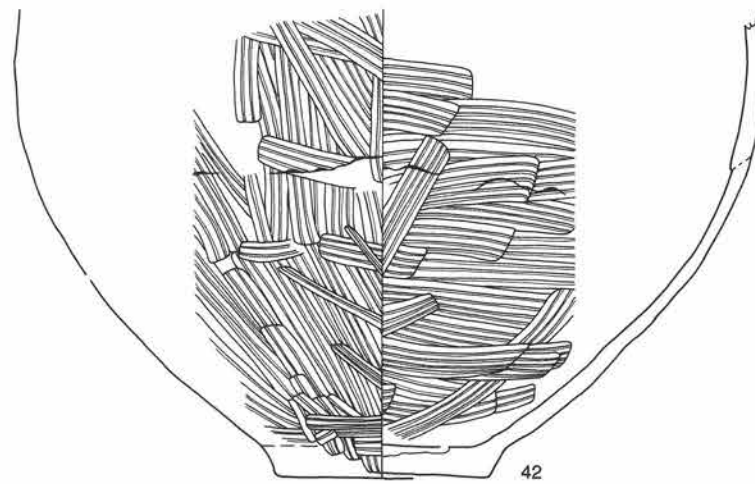


0 (1:3) 10cm

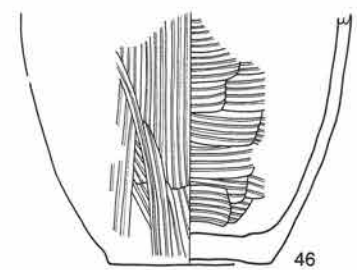
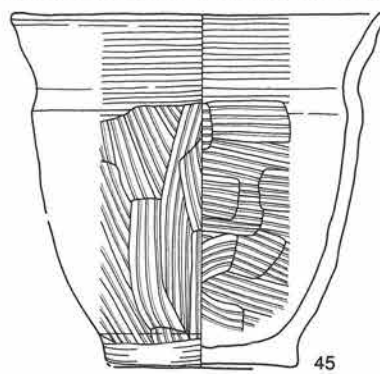


第148図 遺構内出土遺物 (4)

RA056 (1号住)

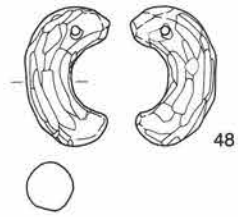
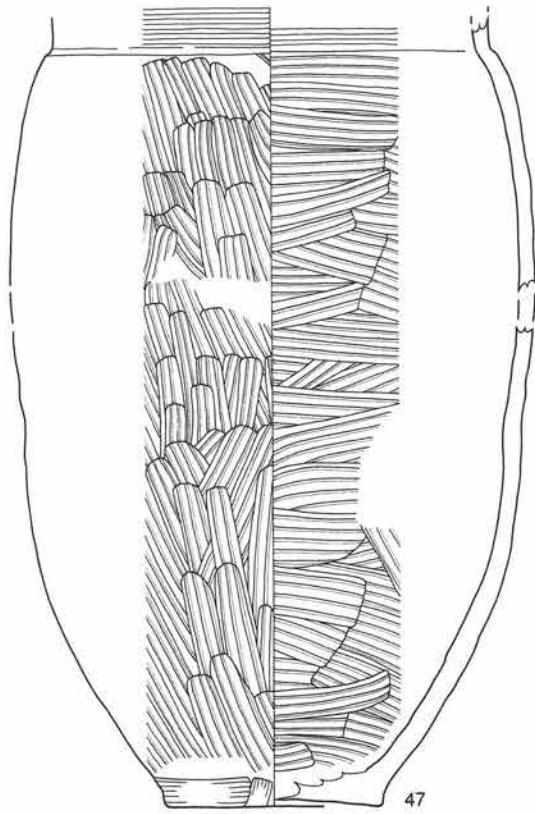


RA057 (17号住)

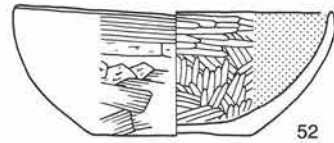
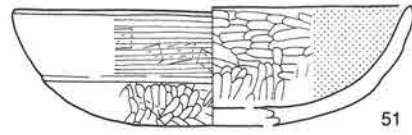


0 (1:3) 10cm

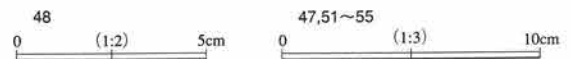
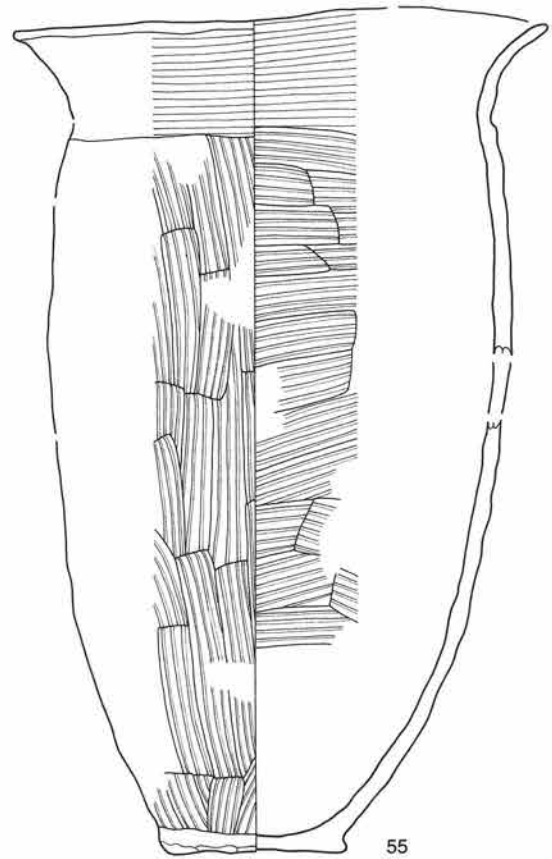
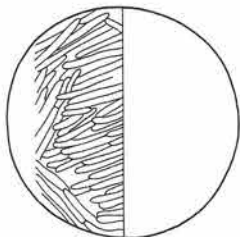
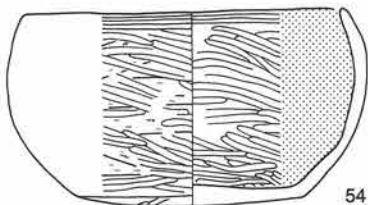
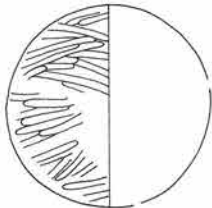
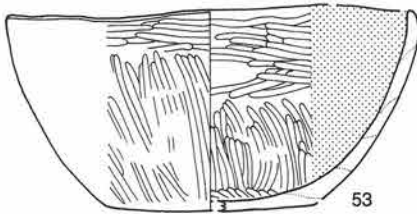
第149図 遺構内出土遺物 (5)



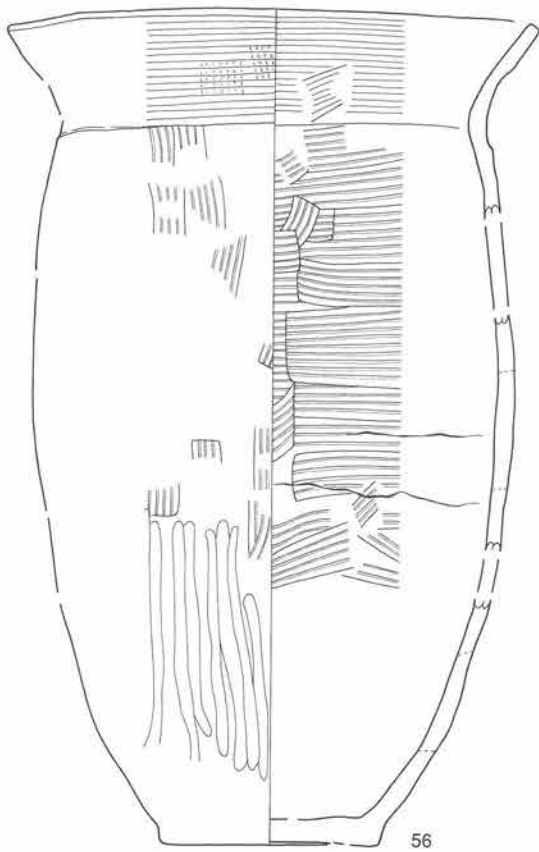
RA058 (5号住)



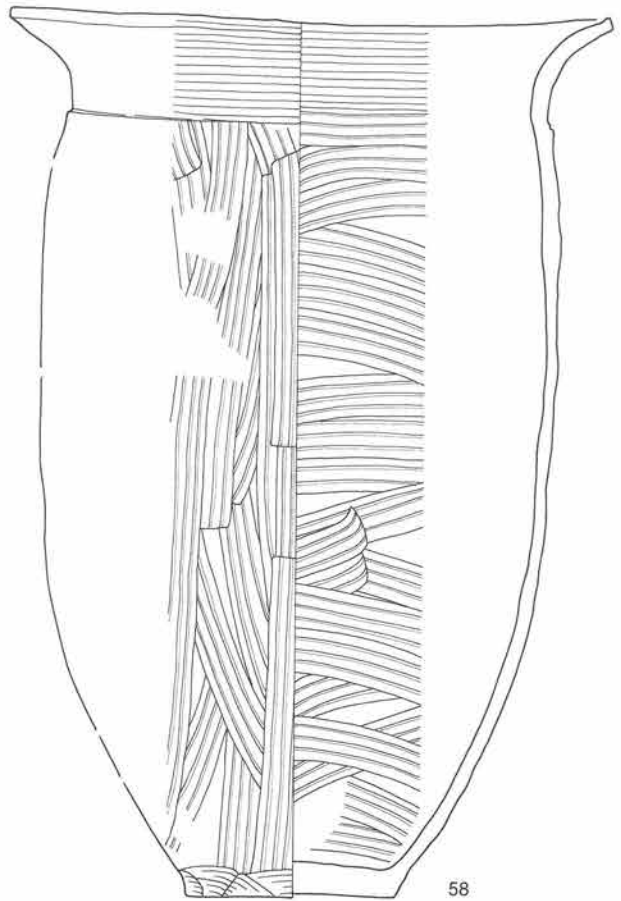
RA059 (49号住)



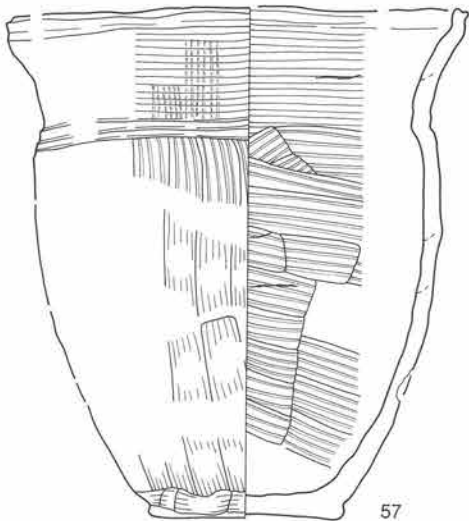
第150図 遺構内出土遺物 (6)



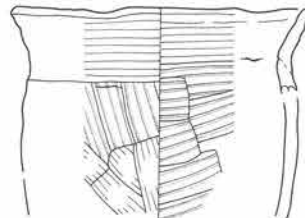
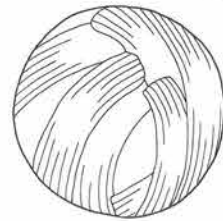
56



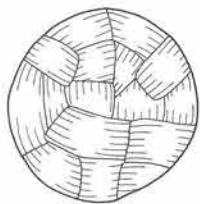
58



57

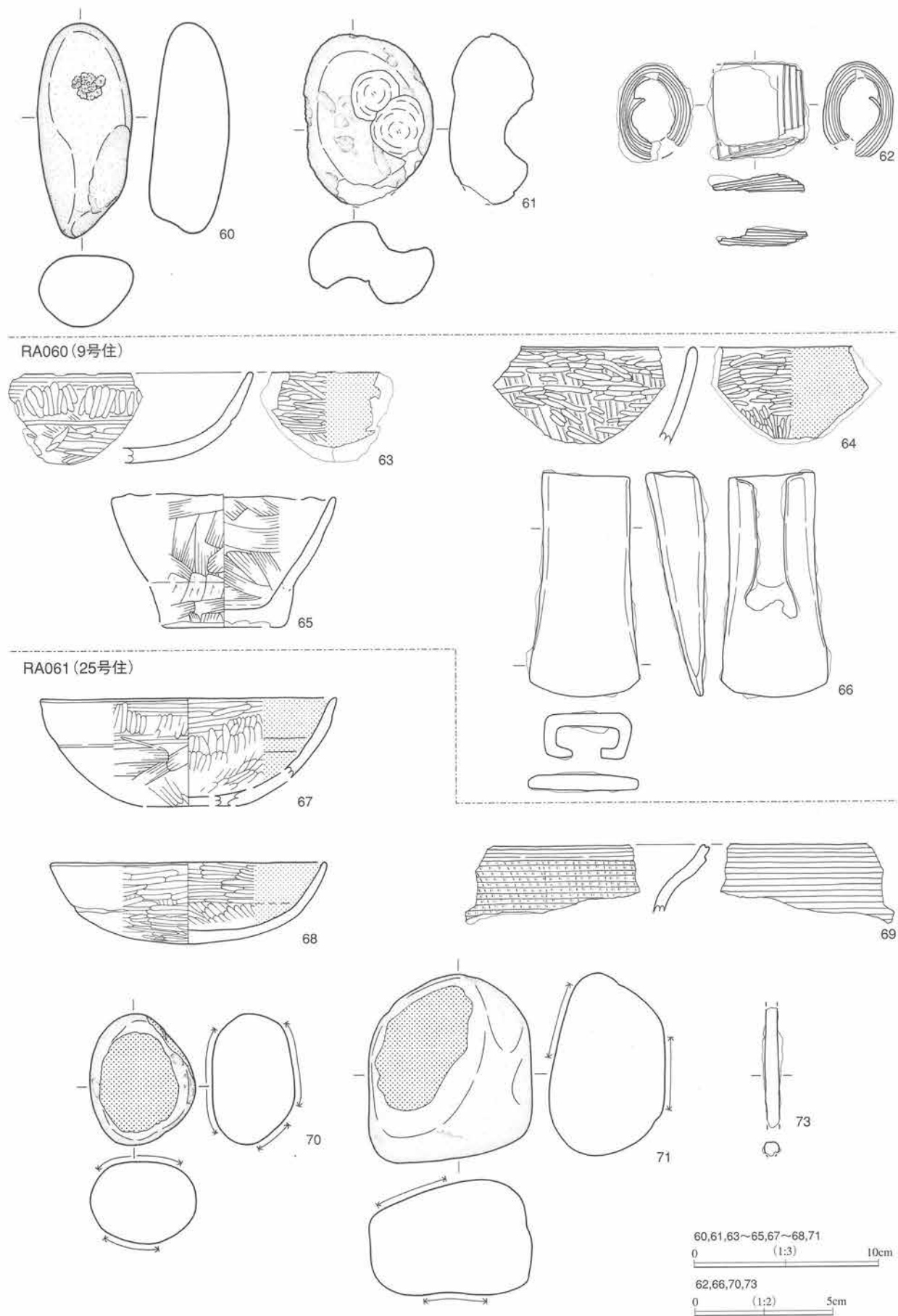


59



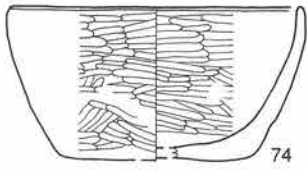
0 (1:3) 10cm

第151図 遺構内出土遺物 (7)

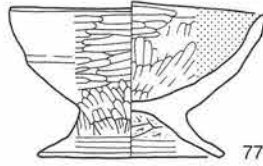


第152図 遺構内出土遺物 (8)

RA062 (37号住)



74

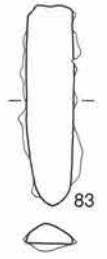


77

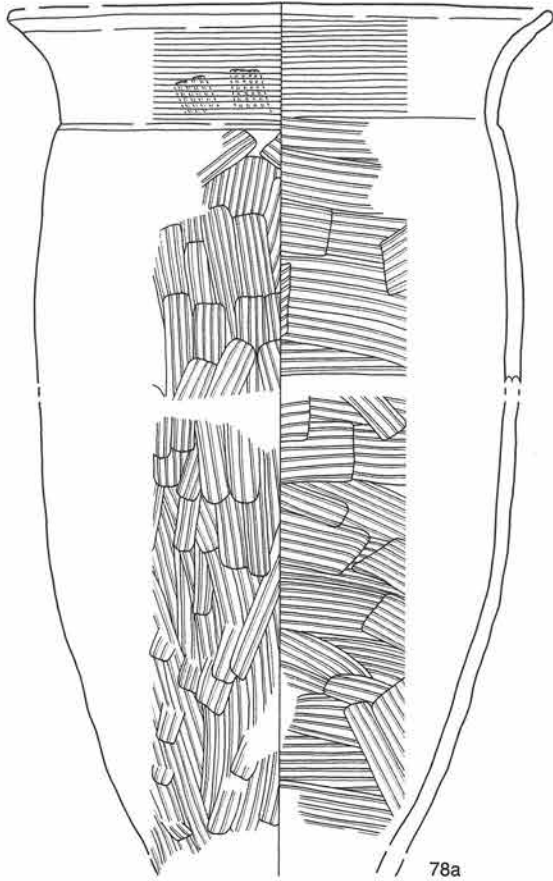


82

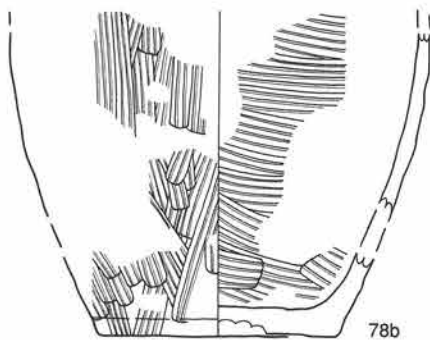
D



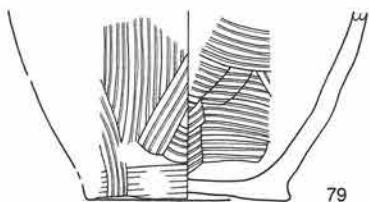
83



78a

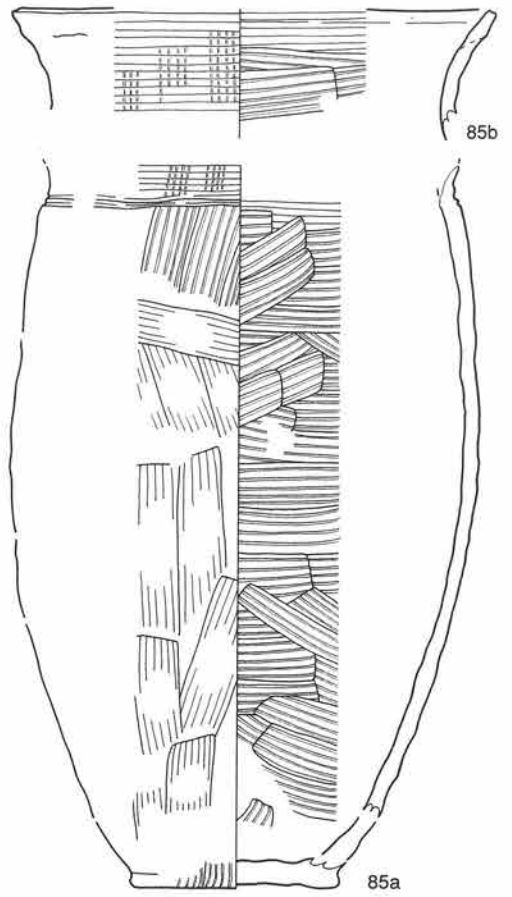


78b



79

RA063 (23号住)



85b

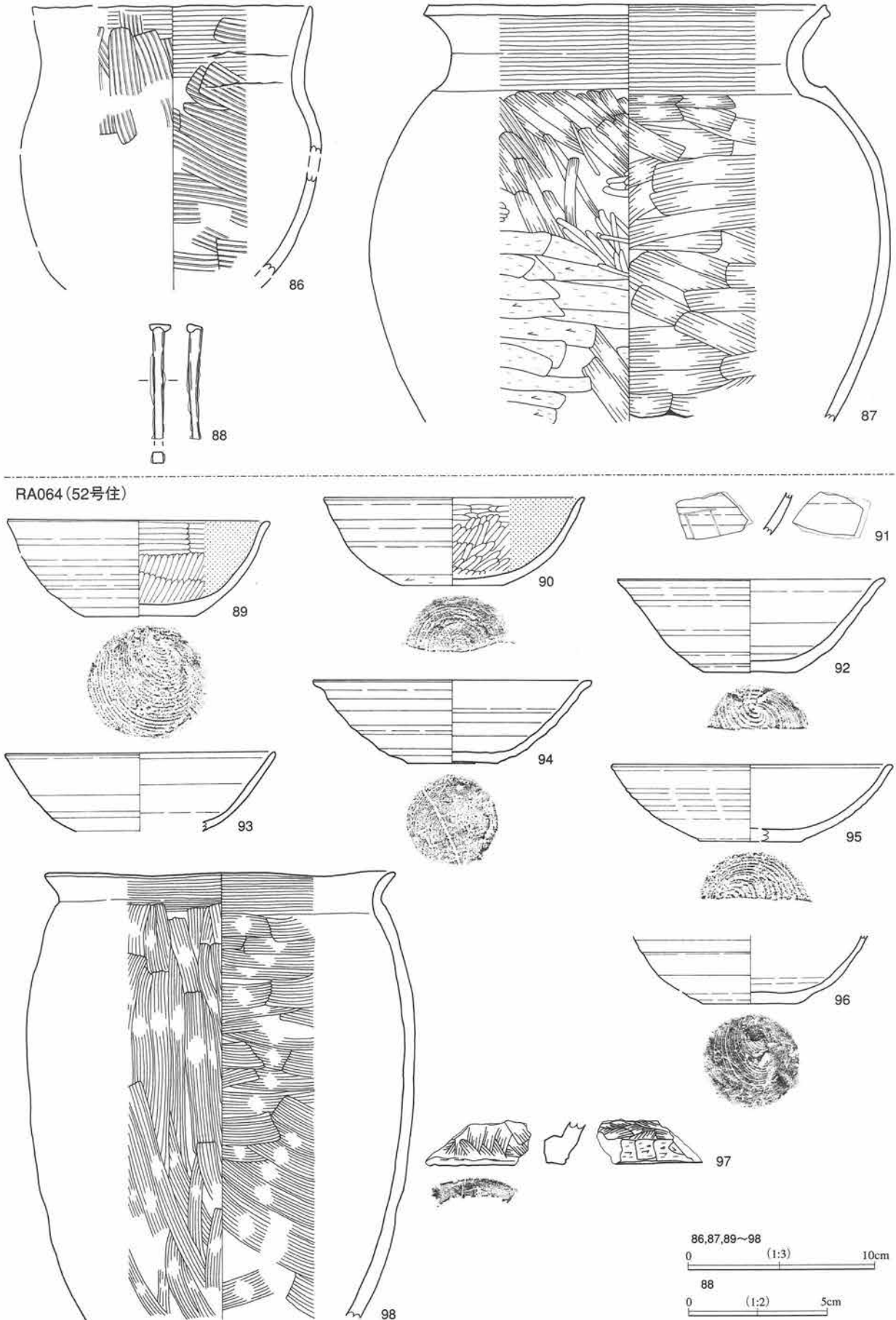
85a



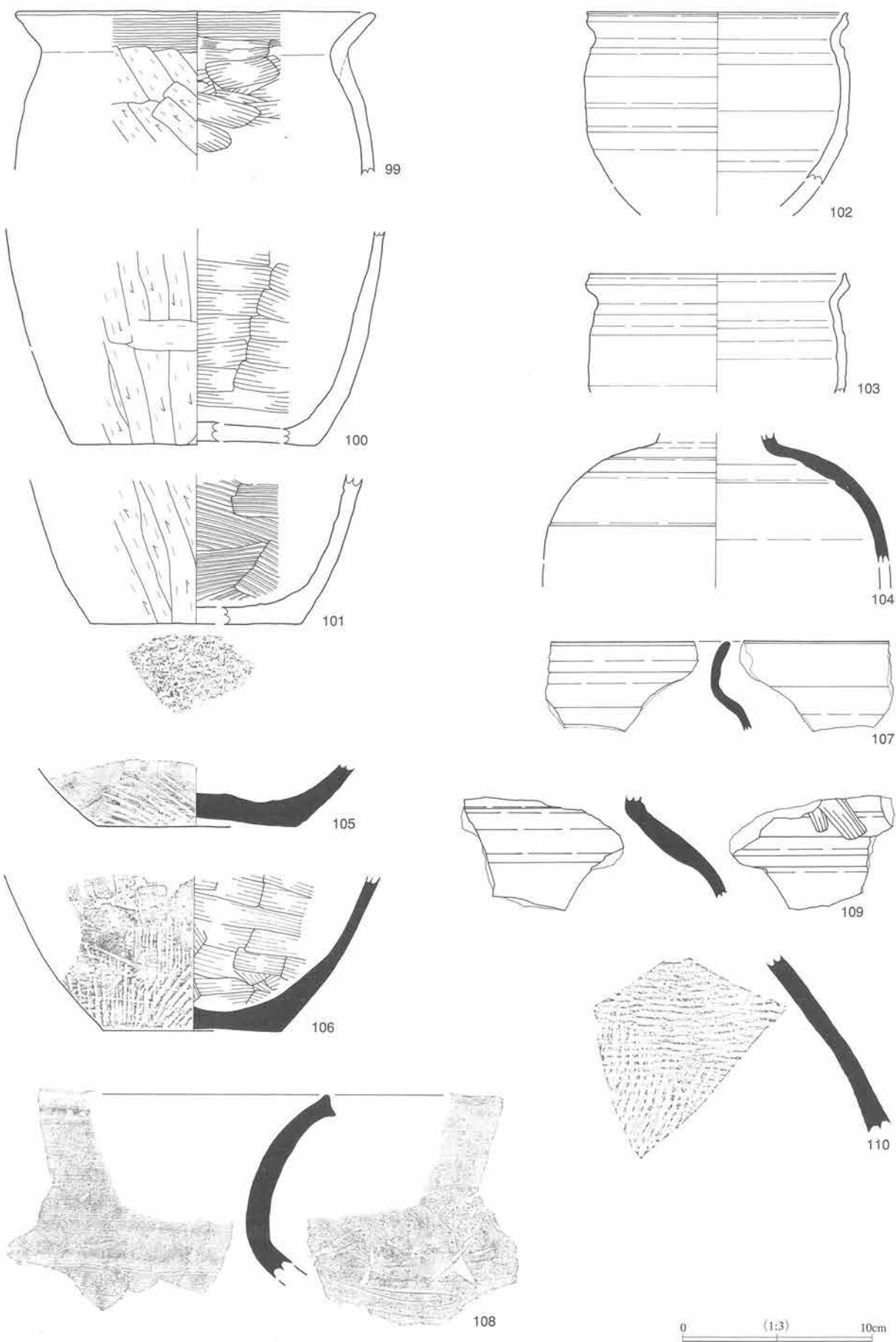
74,77,78,79,85
0 (1:3) 10cm

82,83
0 (1:2) 5cm

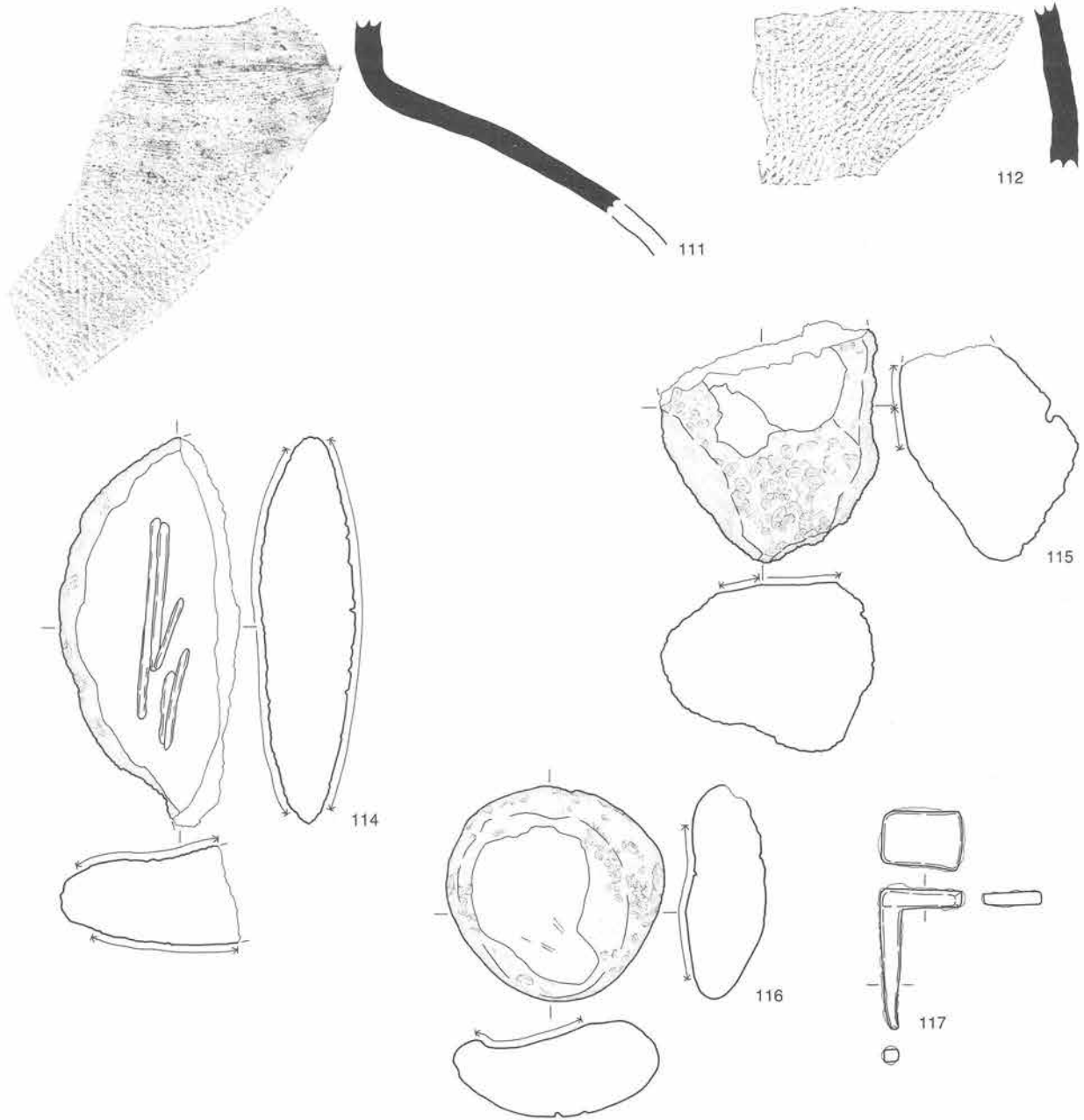
第153図 遺構内出土遺物 (9)



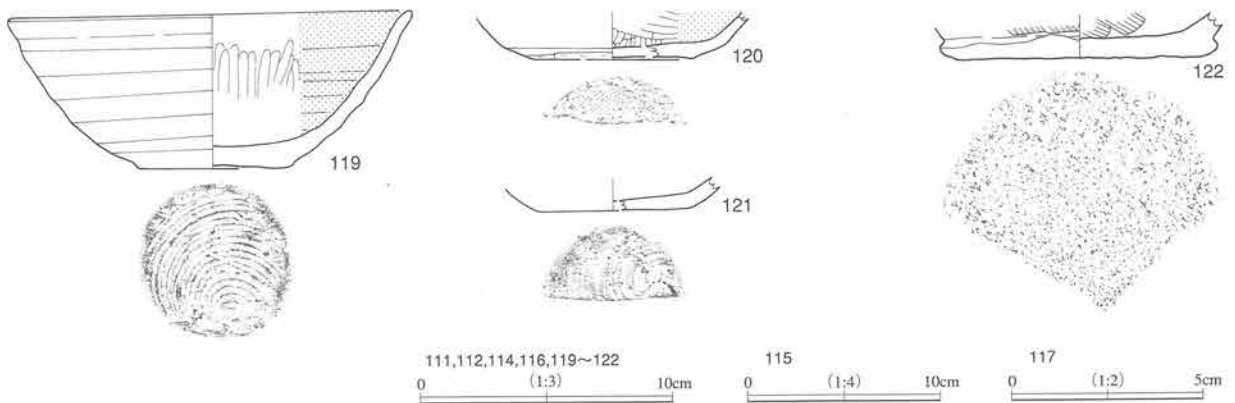
第154図 遺構内出土遺物 (10)



第155図 遺構内出土遺物 (11)

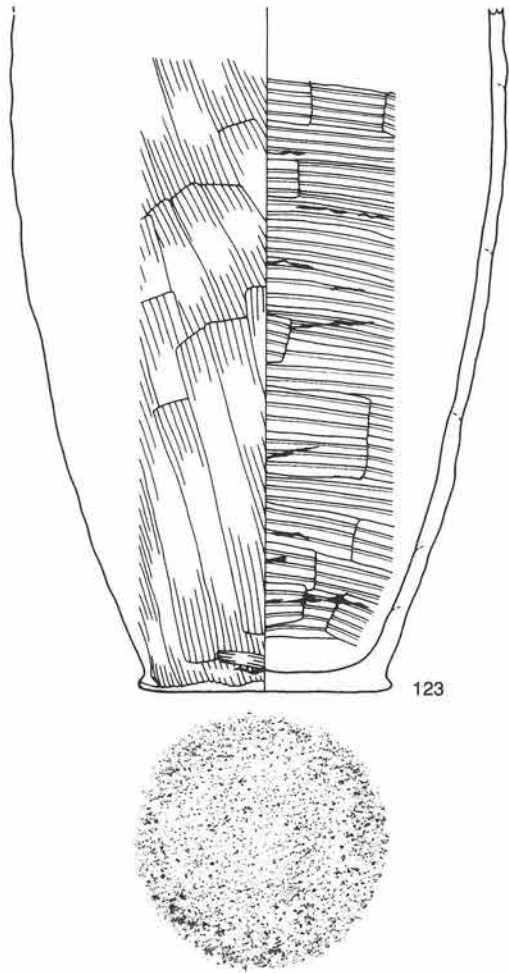


RA065 (54号住)

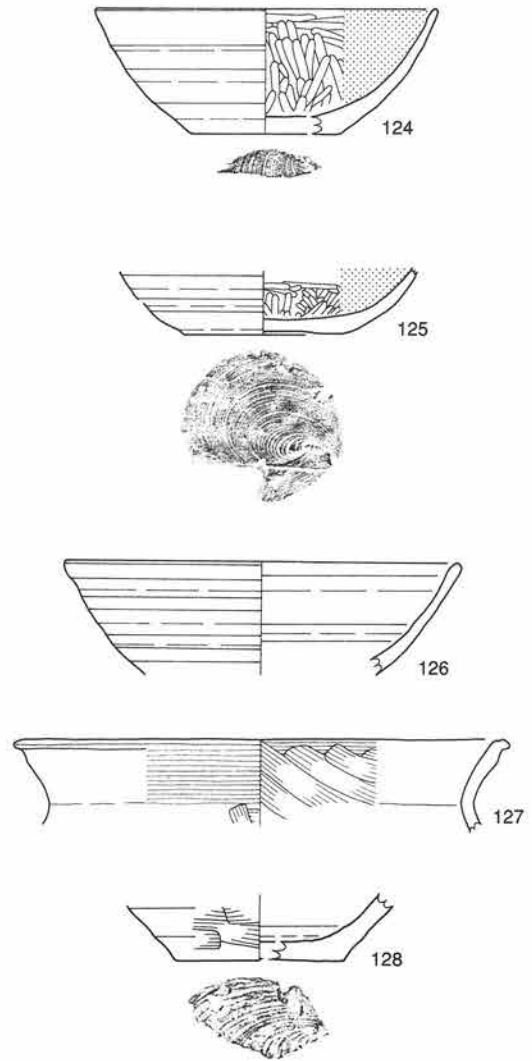


第156図 遺構内出土遺物 (12)

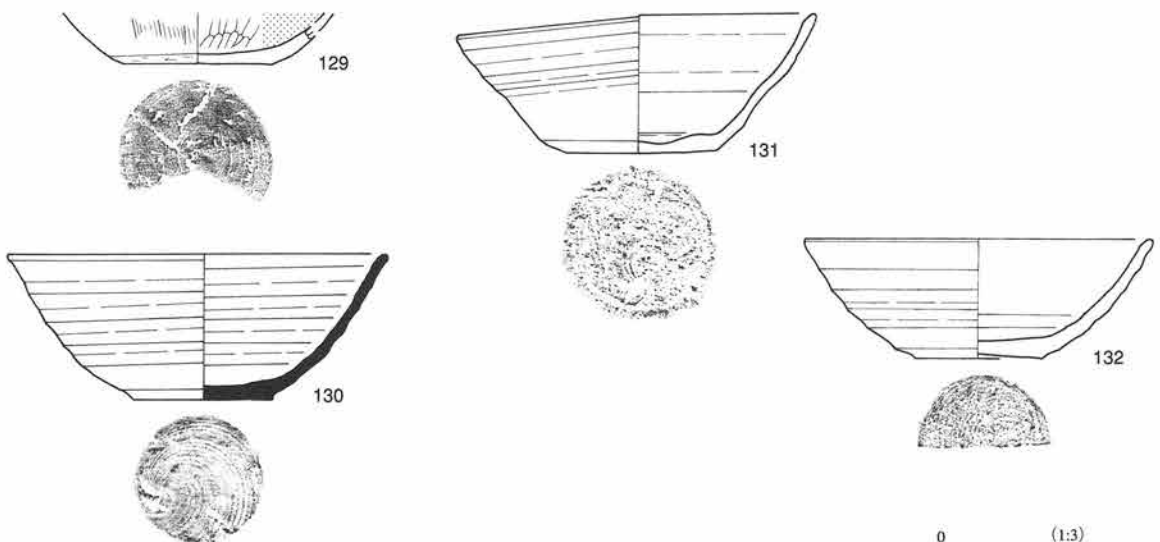
RA066 (31号住)



RA067 (35号住)

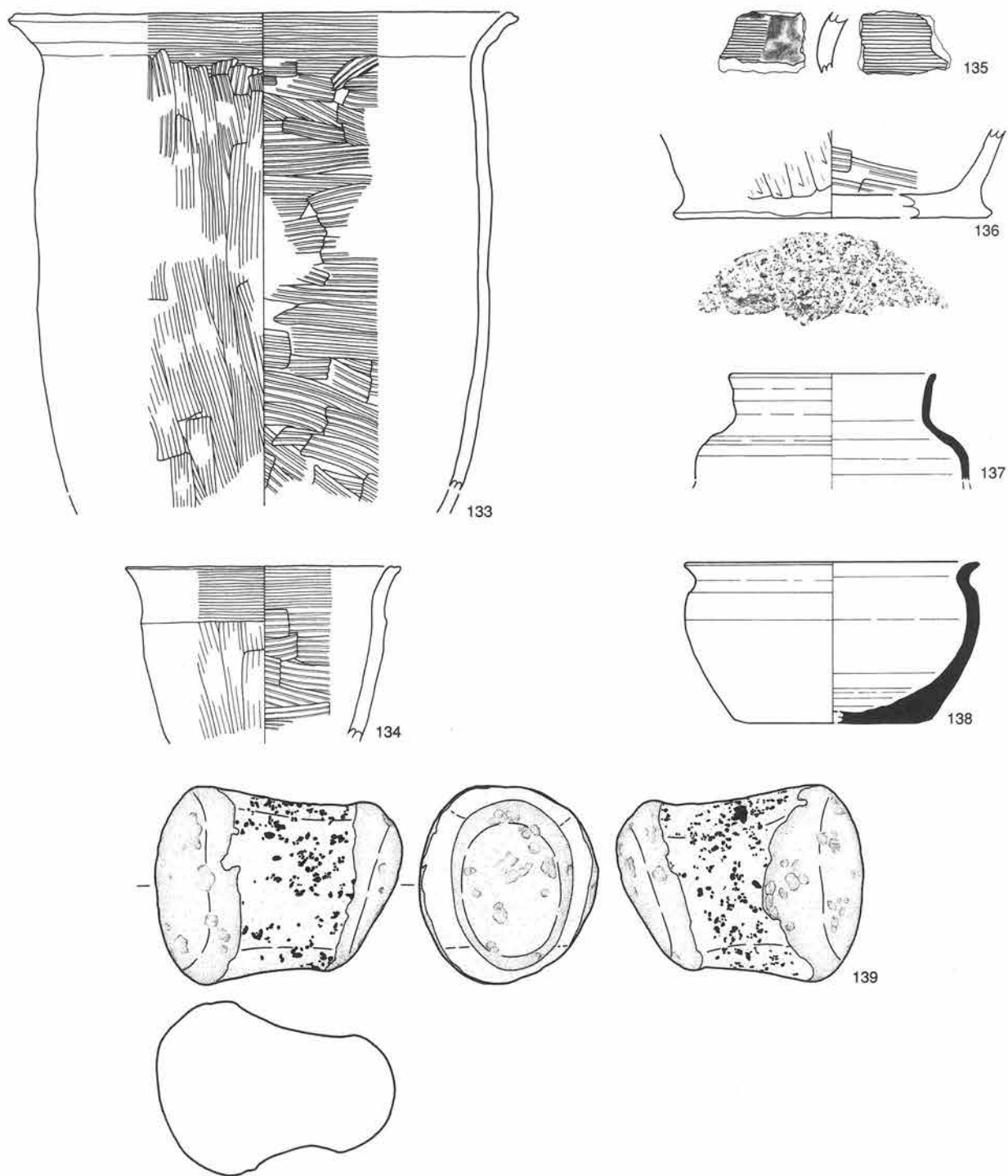


RA068 (50号住)

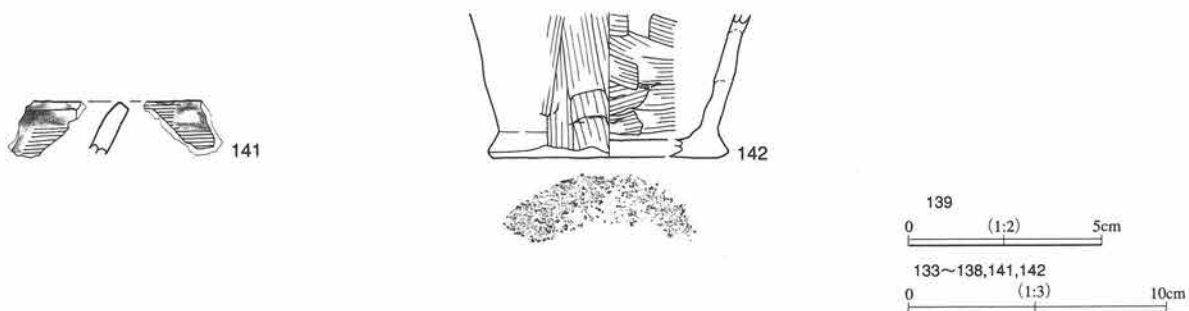


0 (1:3) 10cm

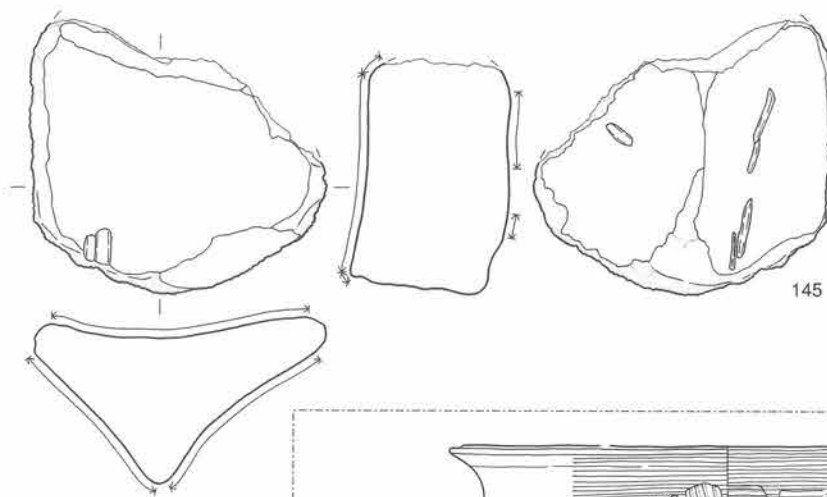
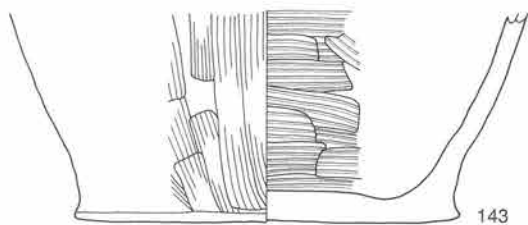
第157図 遺構内出土遺物 (13)



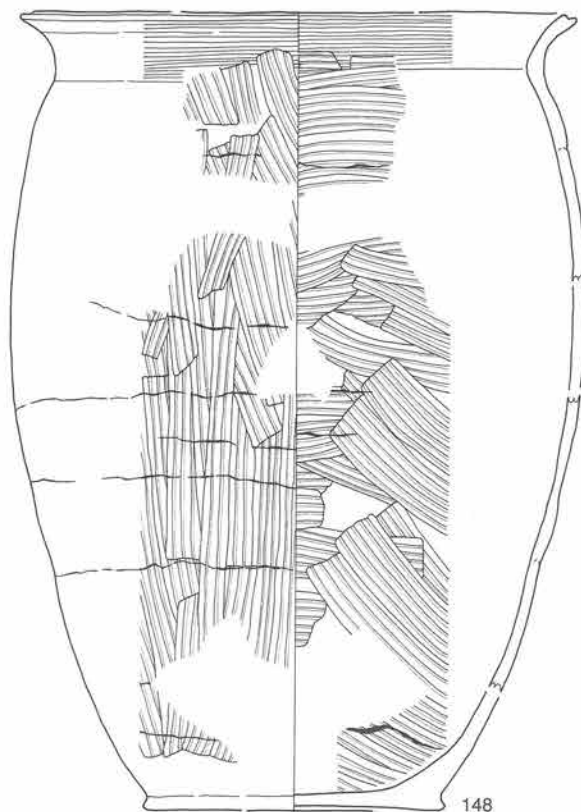
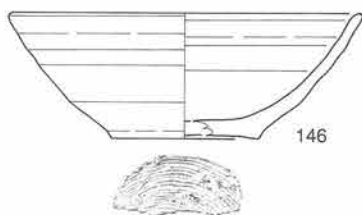
RA069 (50号住・旧)



第158図 遺構内出土遺物 (14)

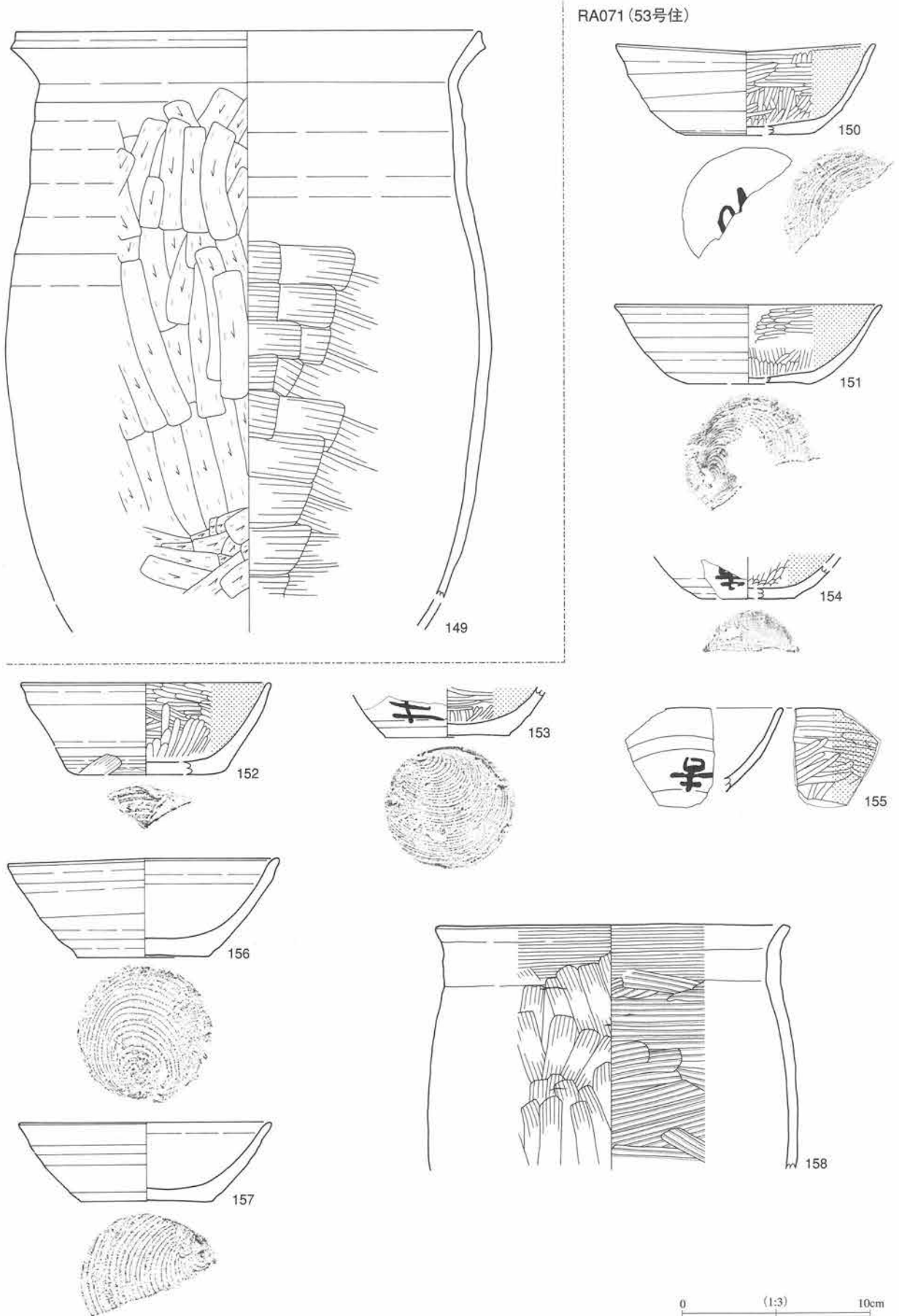


RA070 (59号住)

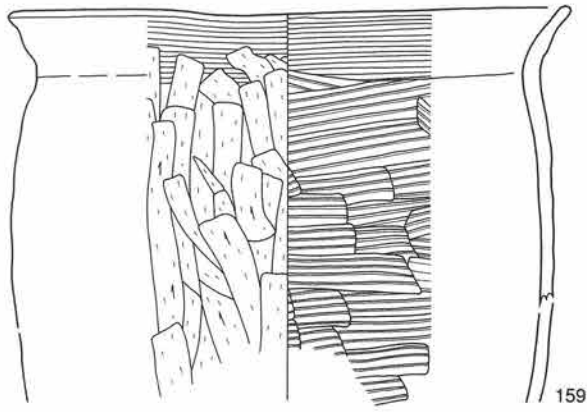


0 (1:3) 10cm

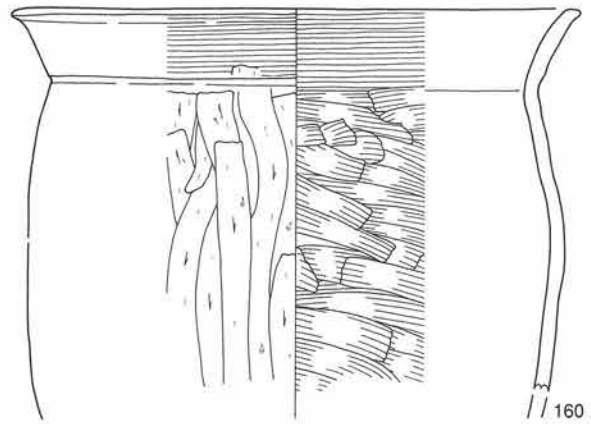
第159図 遺構内出土遺物 (15)



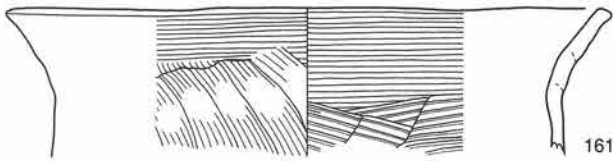
第160図 遺構内出土遺物 (16)



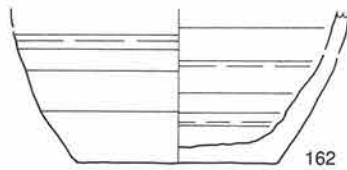
159



160



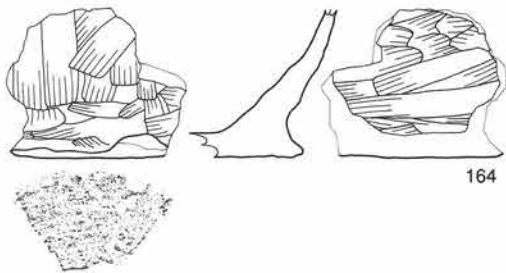
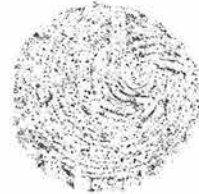
161



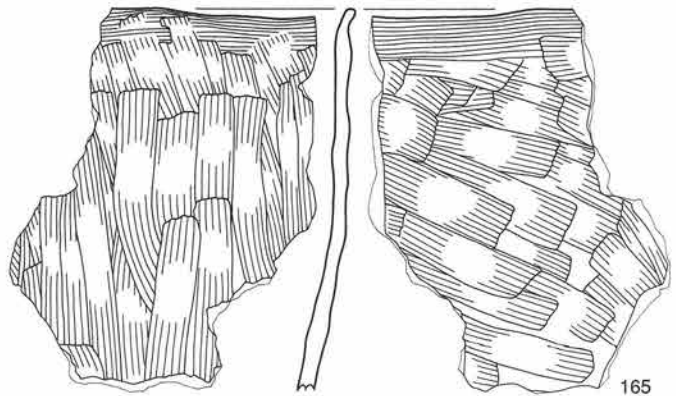
162



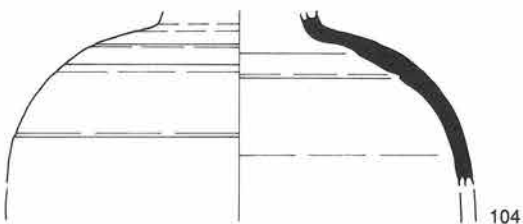
163



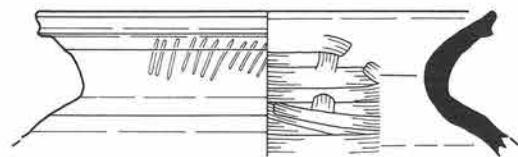
164



165



104



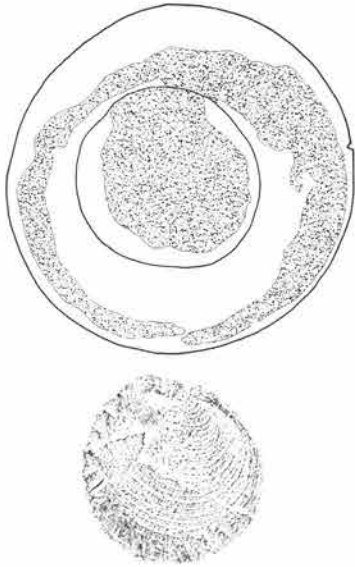
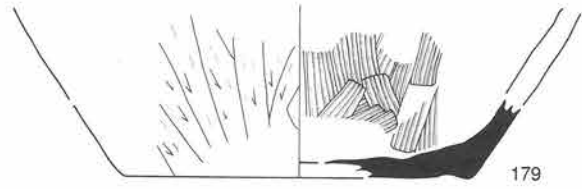
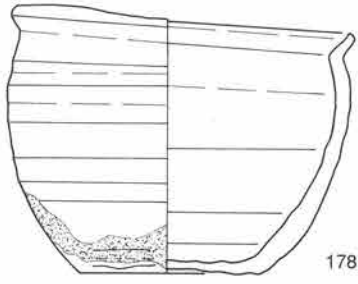
166

0 (1:3) 10cm

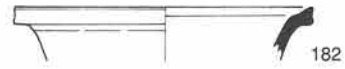
第161図 遺構内出土遺物 (17)



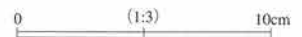
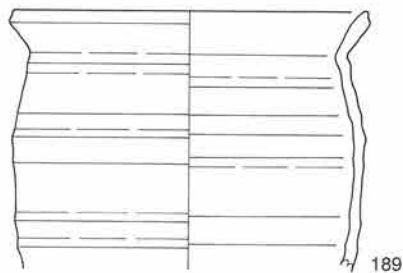
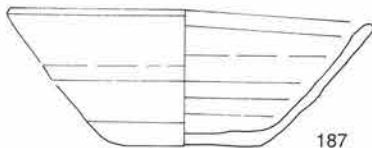
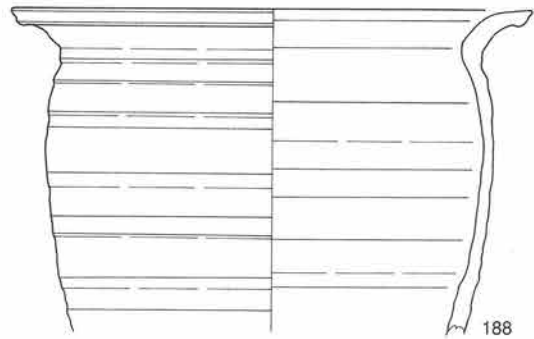
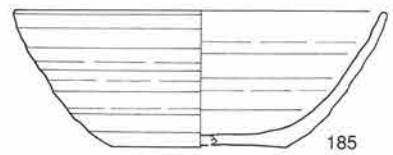
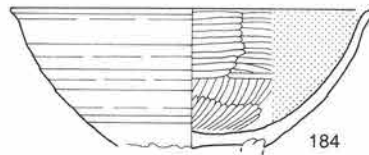
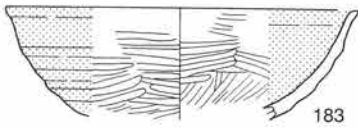
第162図 遺構内出土遺物 (18)



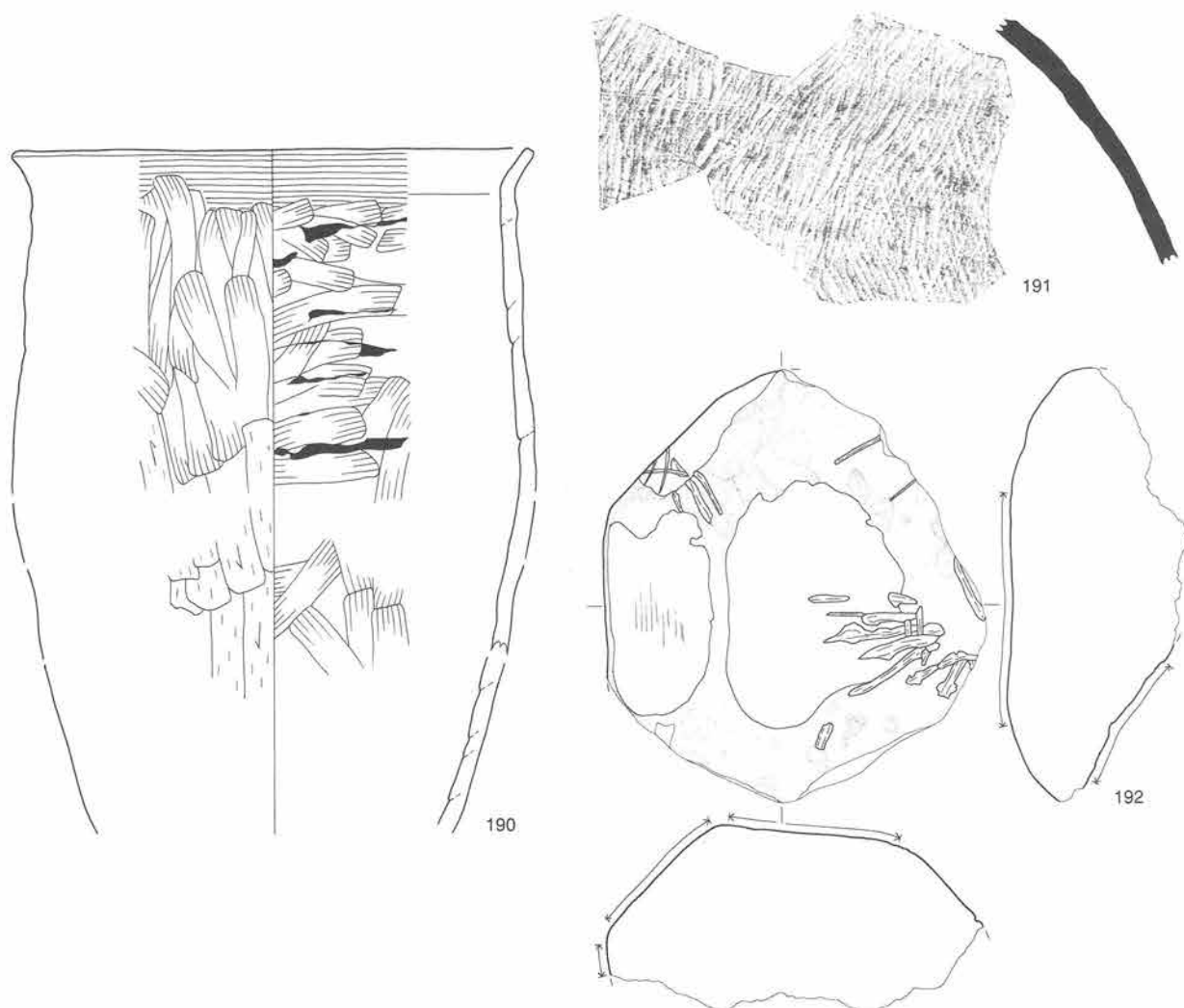
RA074 (12号住)



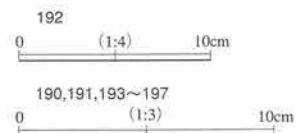
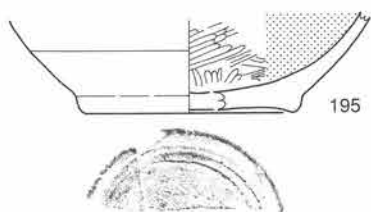
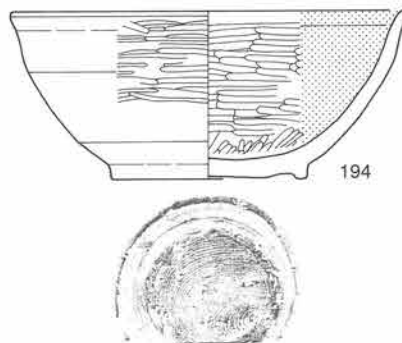
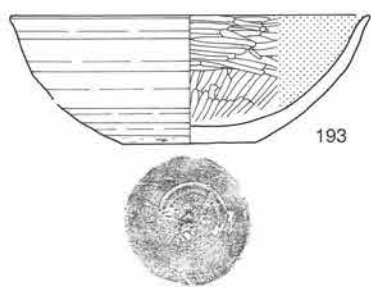
RA075 (48号住)



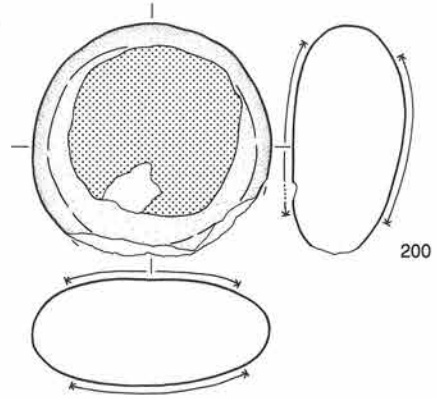
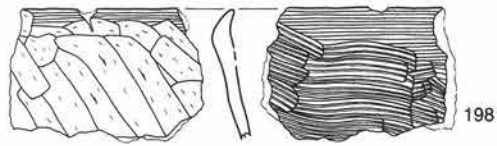
第163図 遺構内出土遺物 (19)



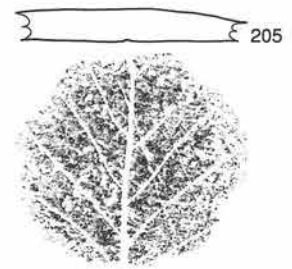
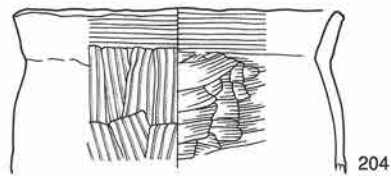
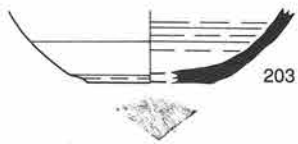
RA076 (33号住)



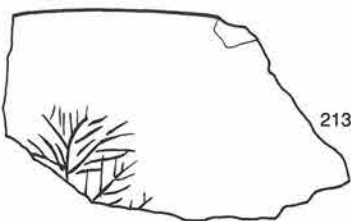
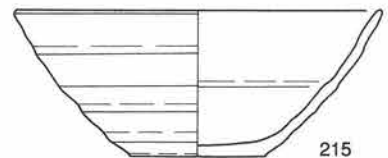
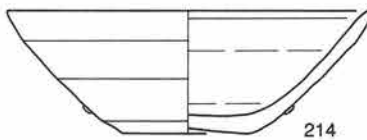
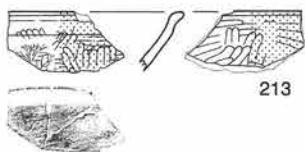
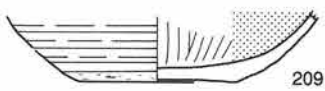
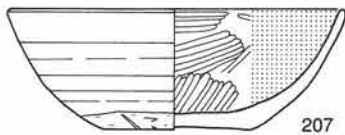
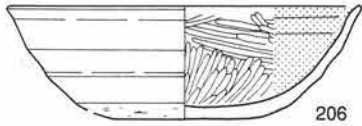
第164図 遺構内出土遺物 (20)



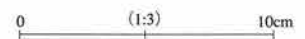
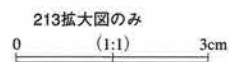
RA077 (19号住)



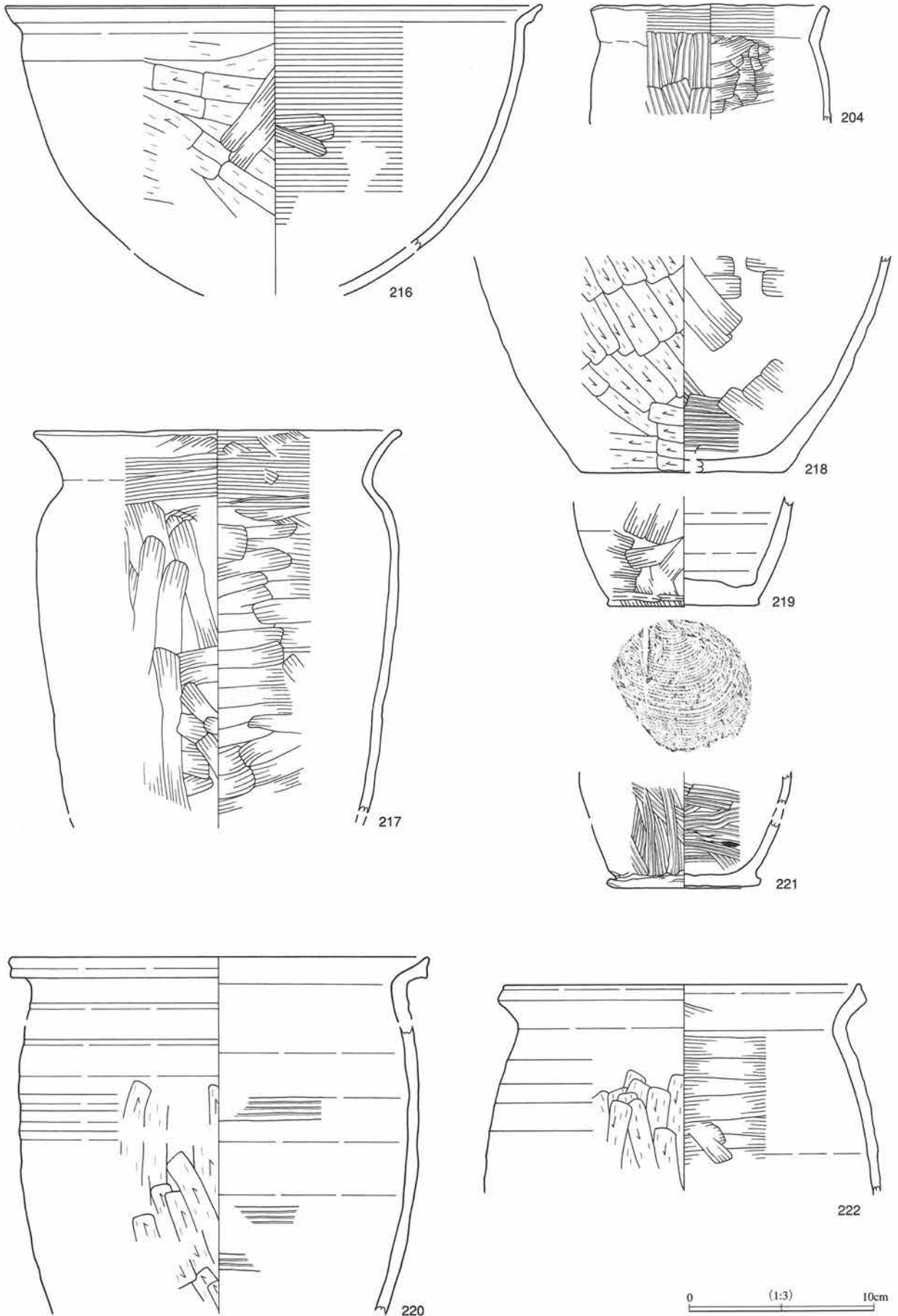
RA078 (18号住)



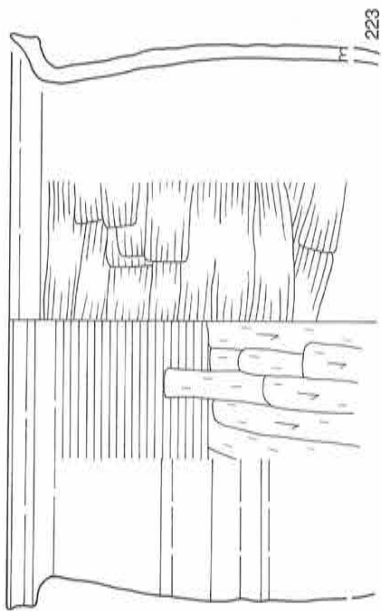
213拡大図



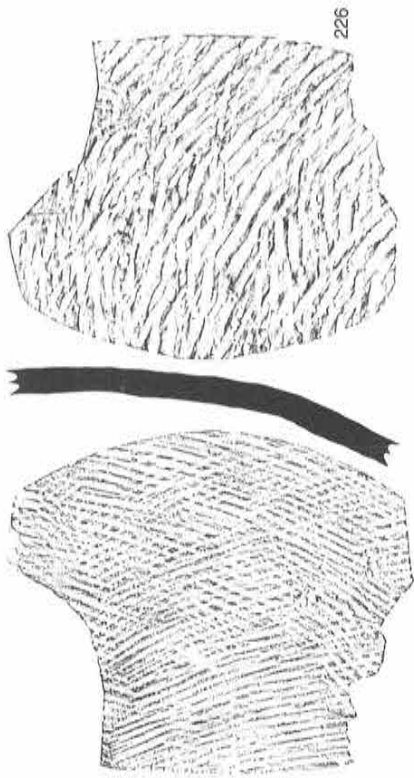
第165図 遺構内出土遺物 (21)



第166図 遺構内出土遺物 (22)



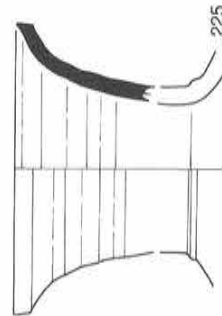
223



226



224



225



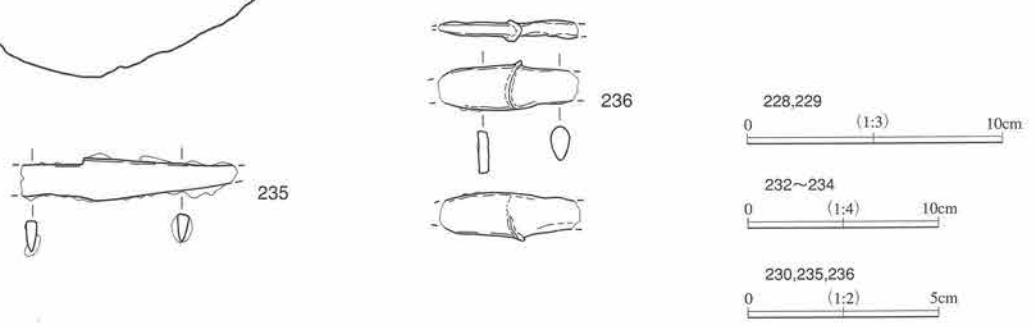
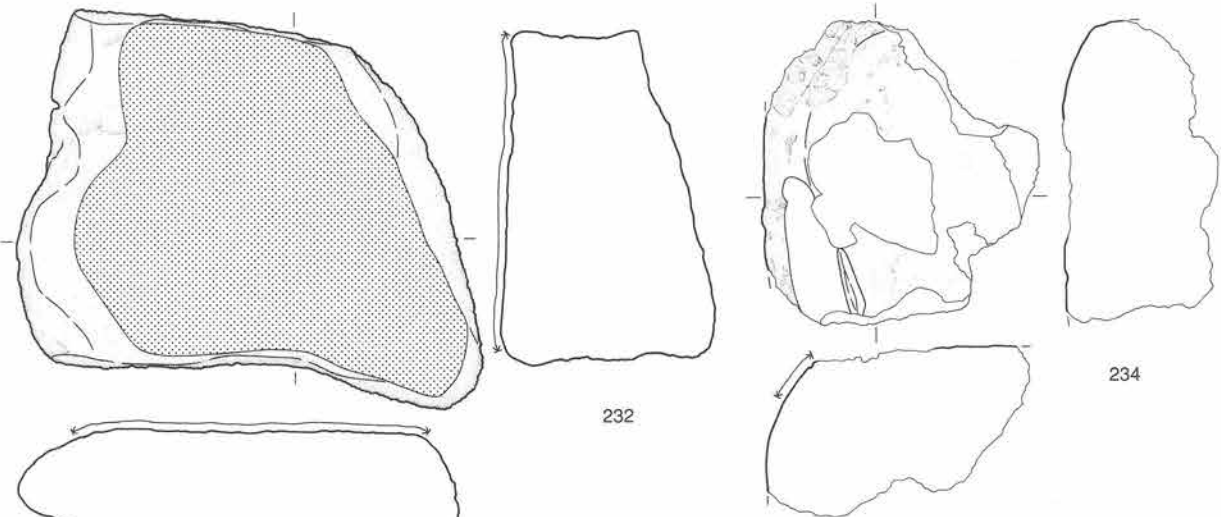
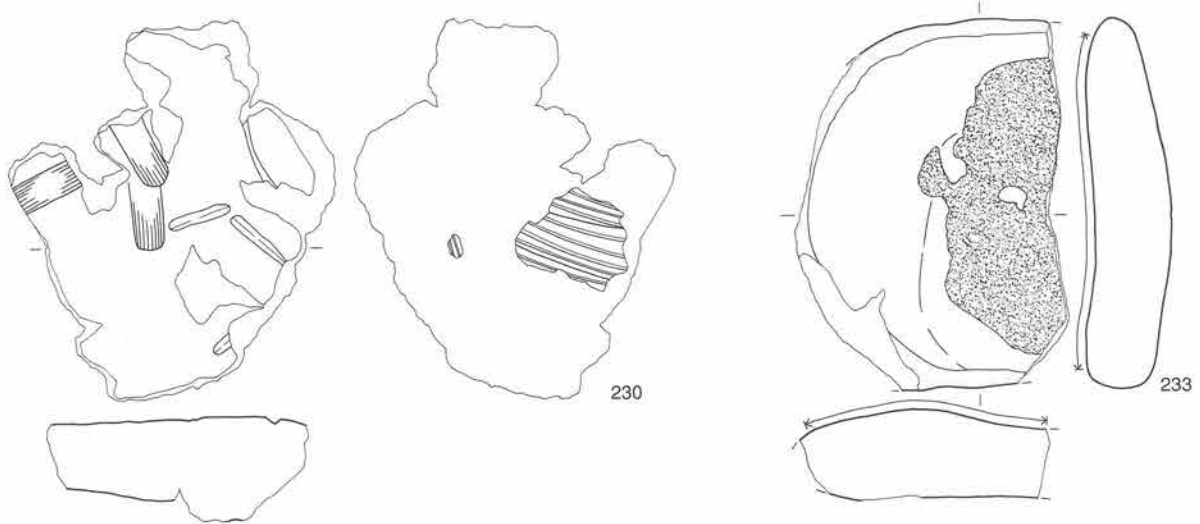
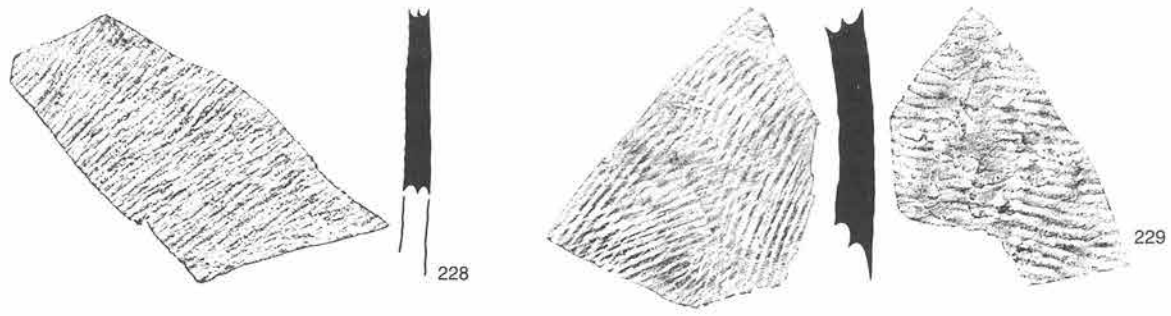
227



1:3

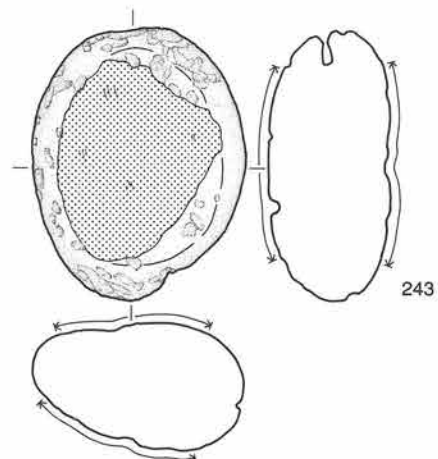
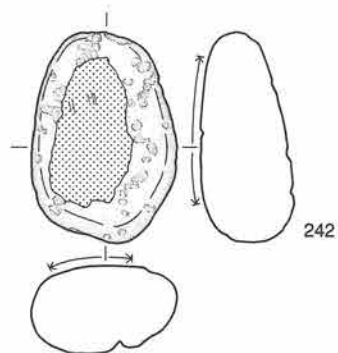
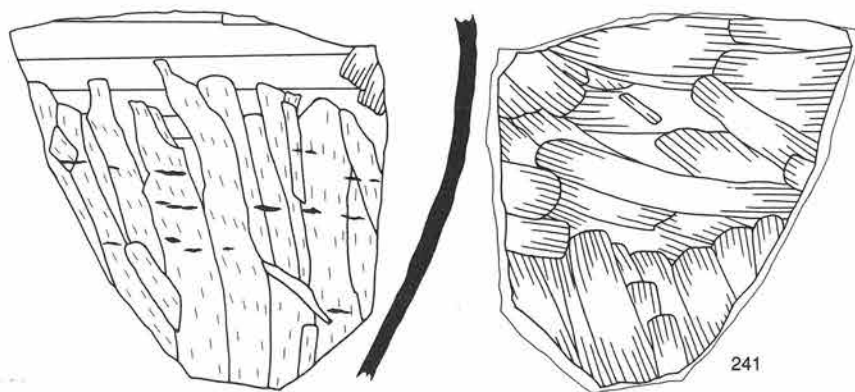
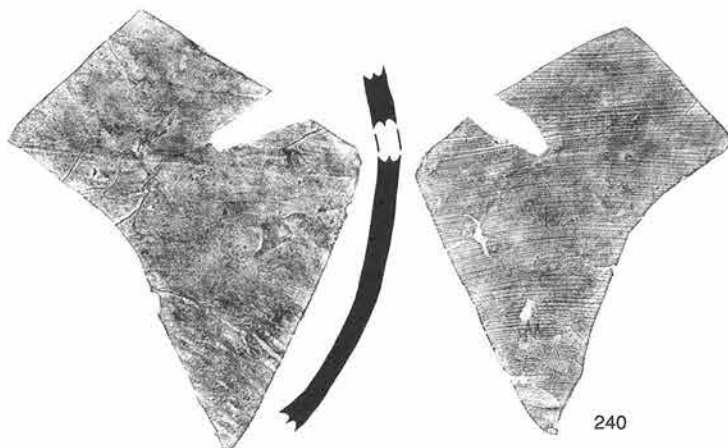
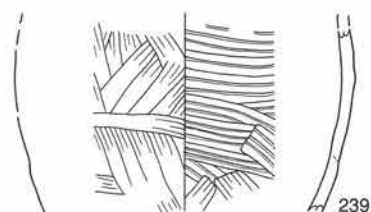
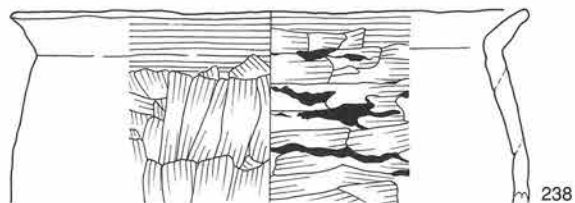
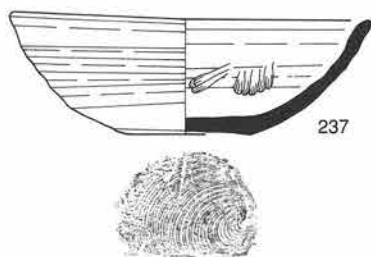
10cm

第167図 遺構内出土遺物 (23)



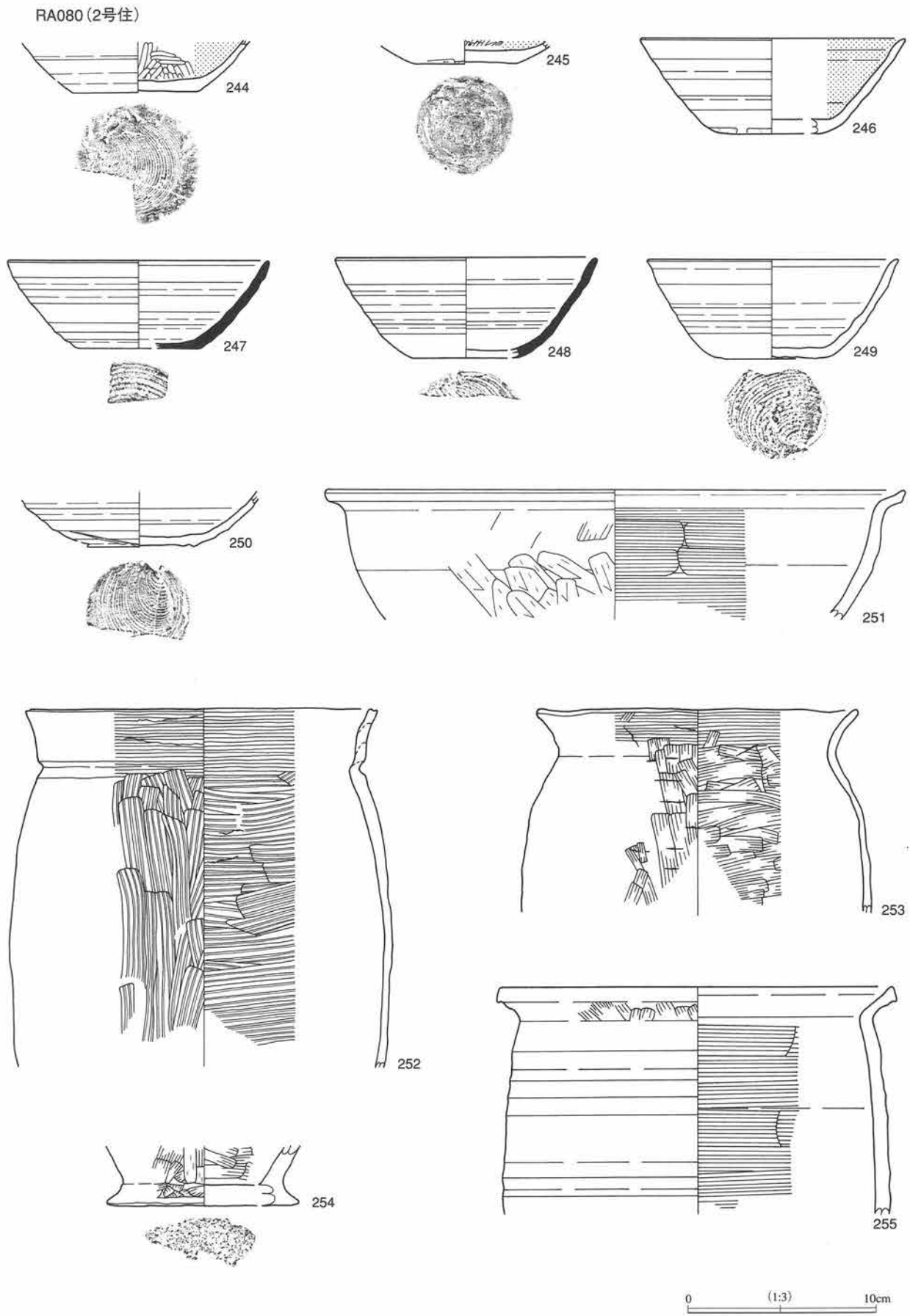
第168図 遺構内出土遺物 (24)

RA079 (20号住)

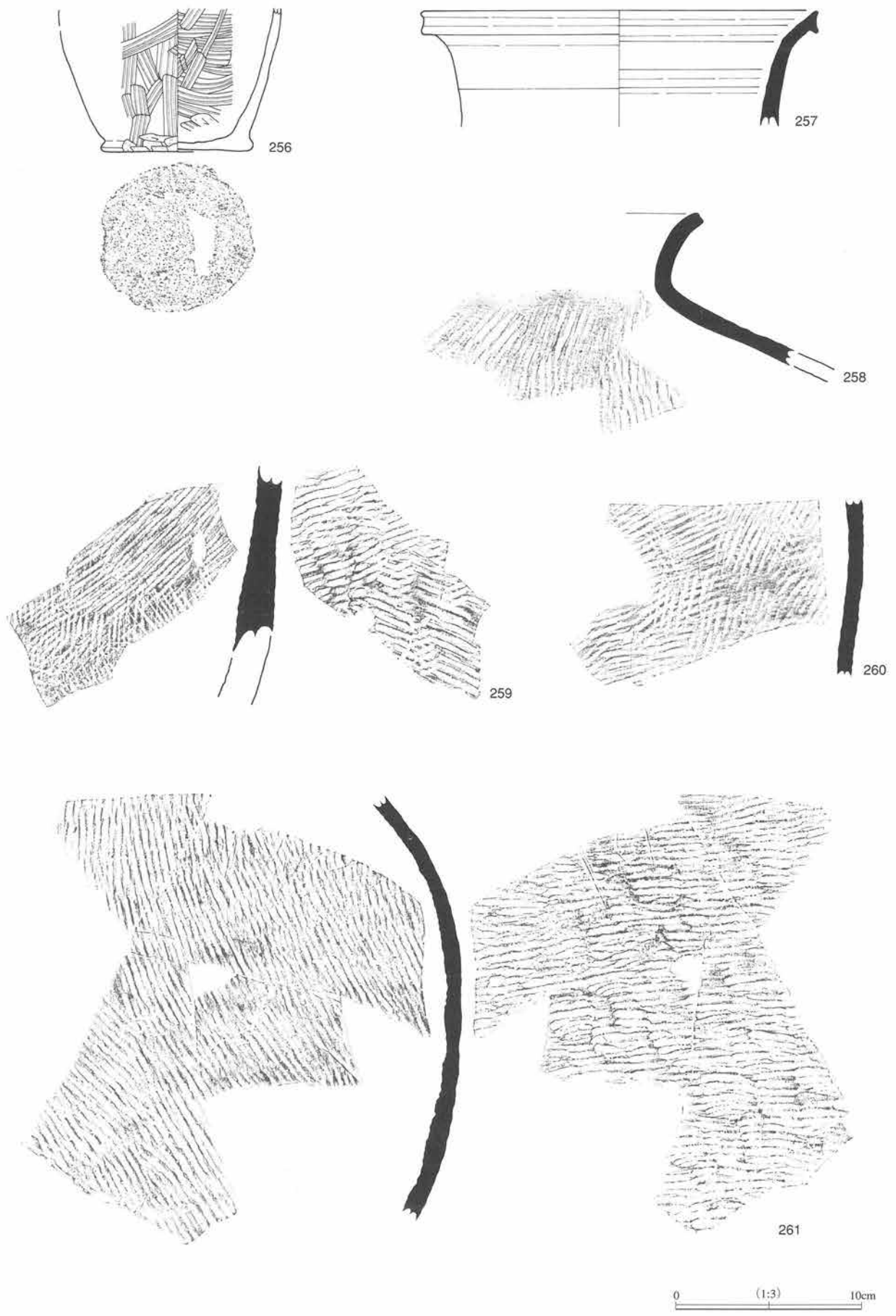


0 (1:3) 10cm

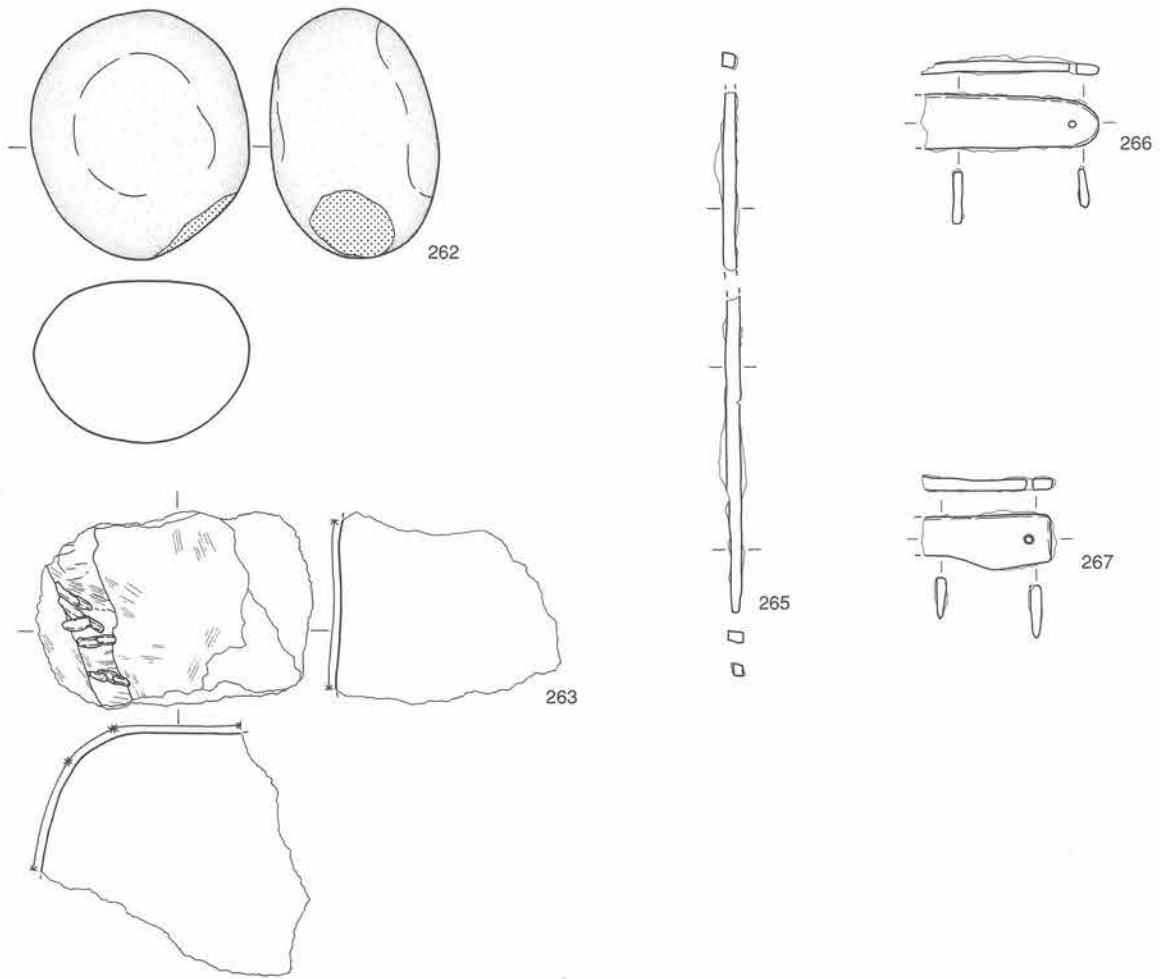
第169図 遺構内出土遺物 (25)



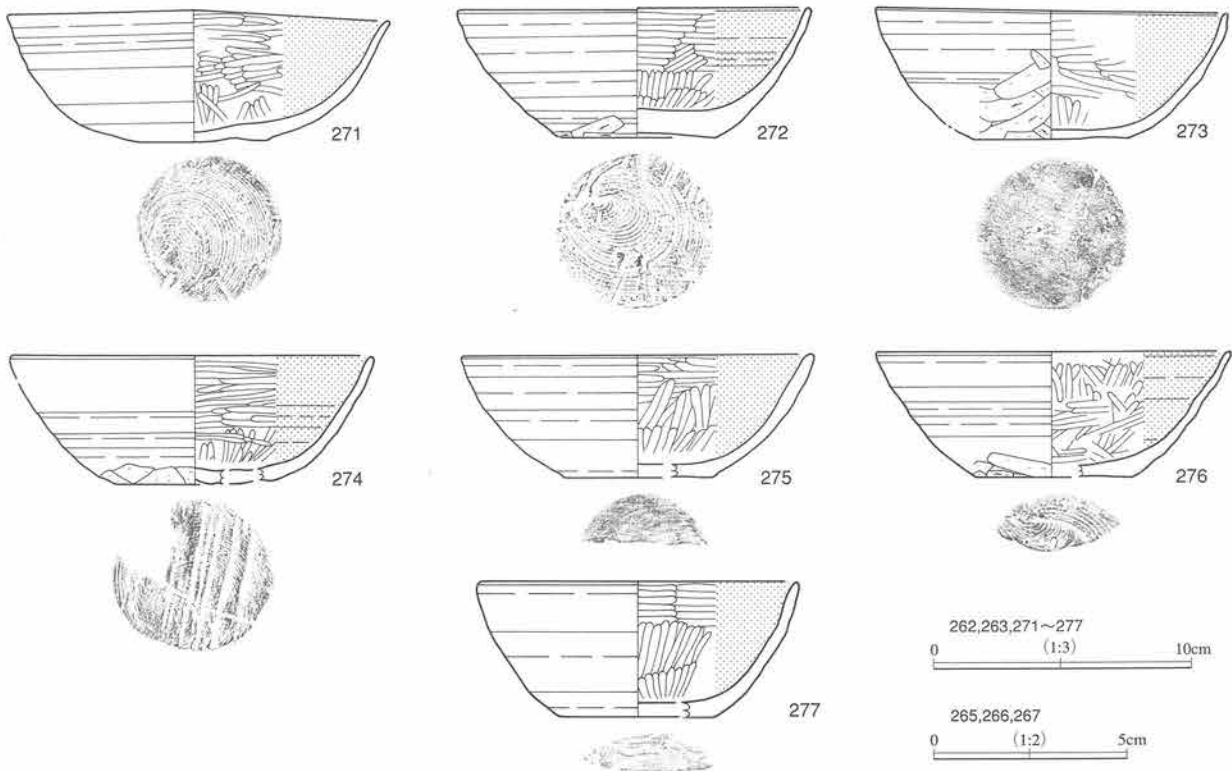
第170図 遺構内出土遺物 (26)



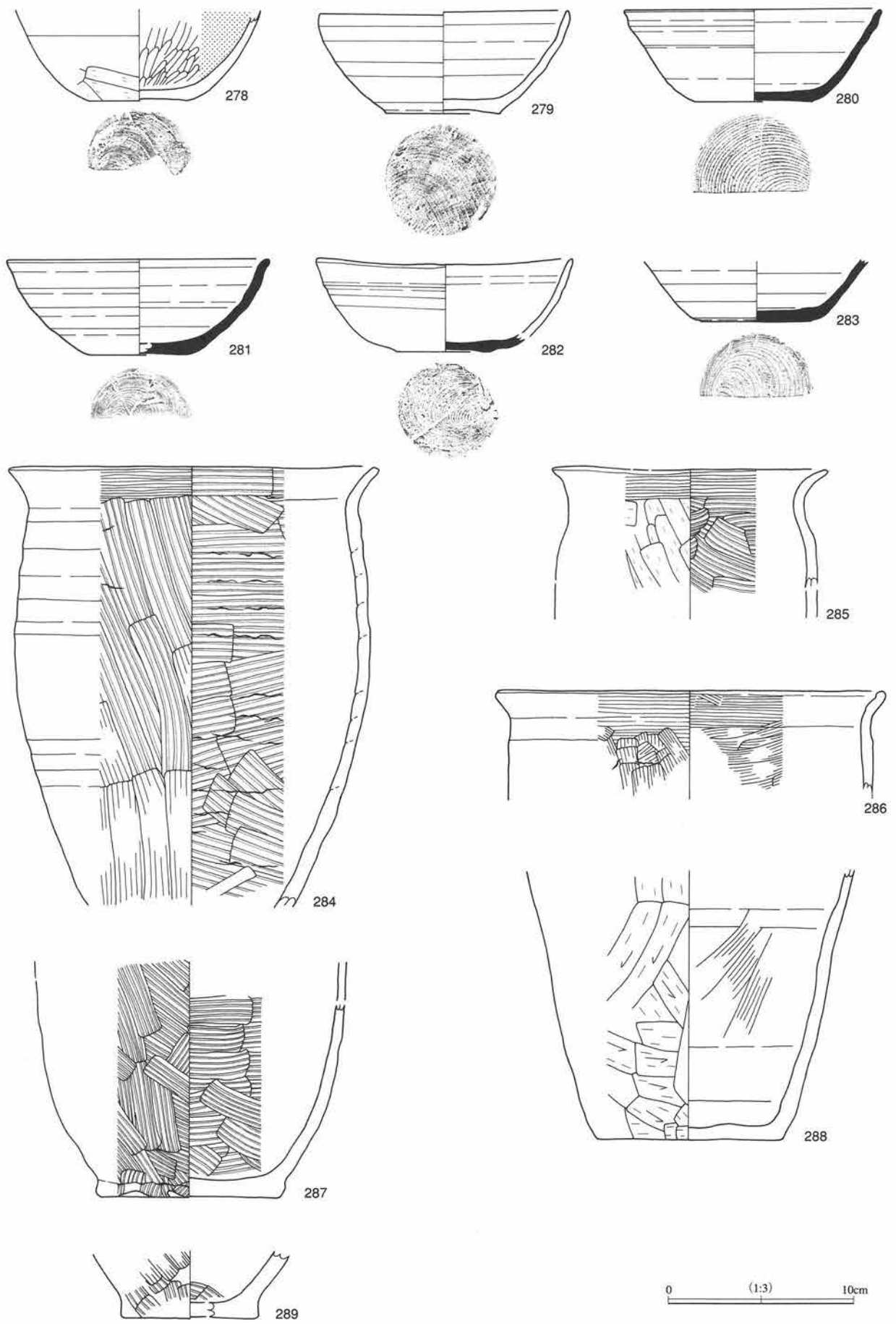
第171図 遺構内出土遺物 (27)



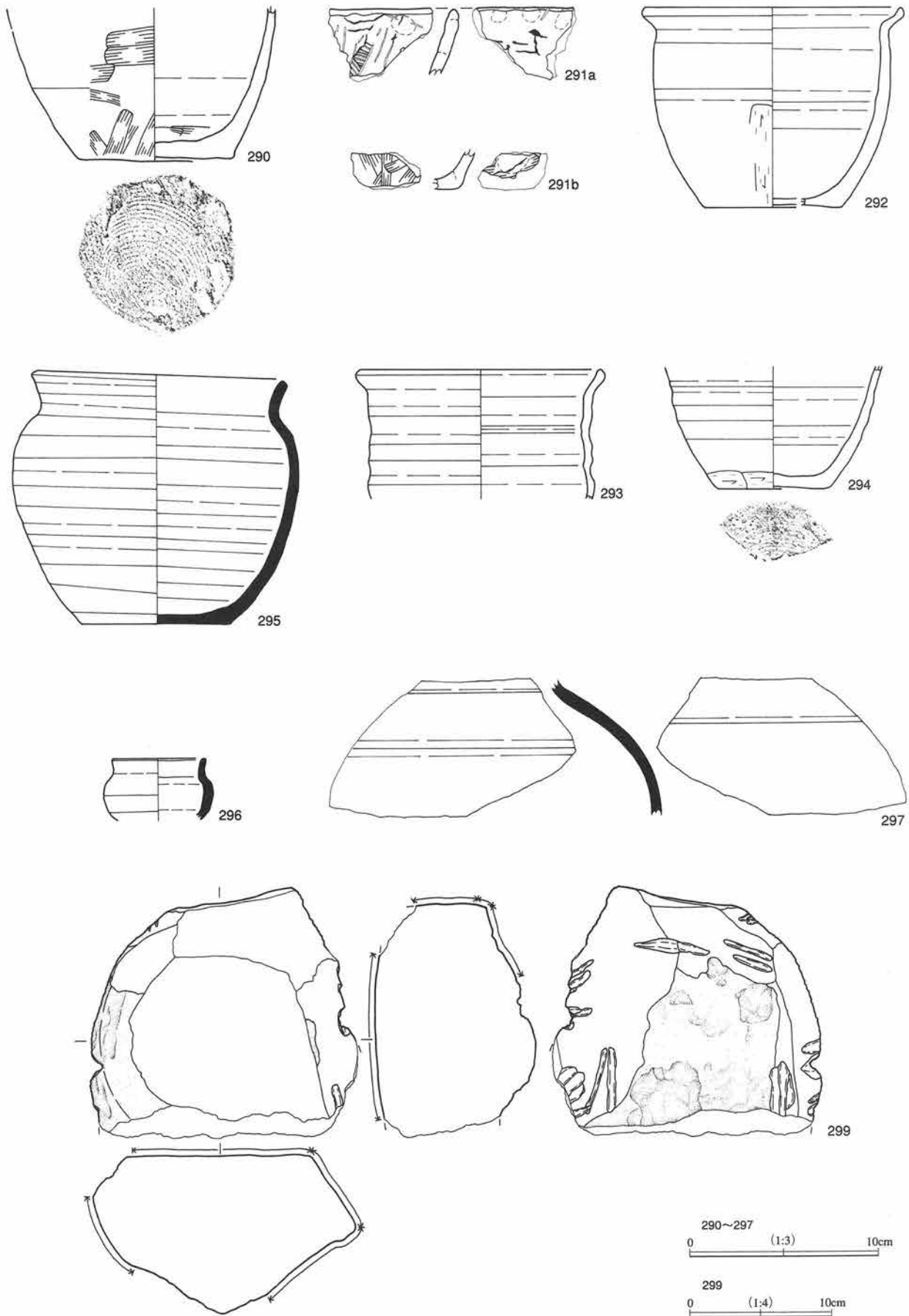
RA081 (13号住)



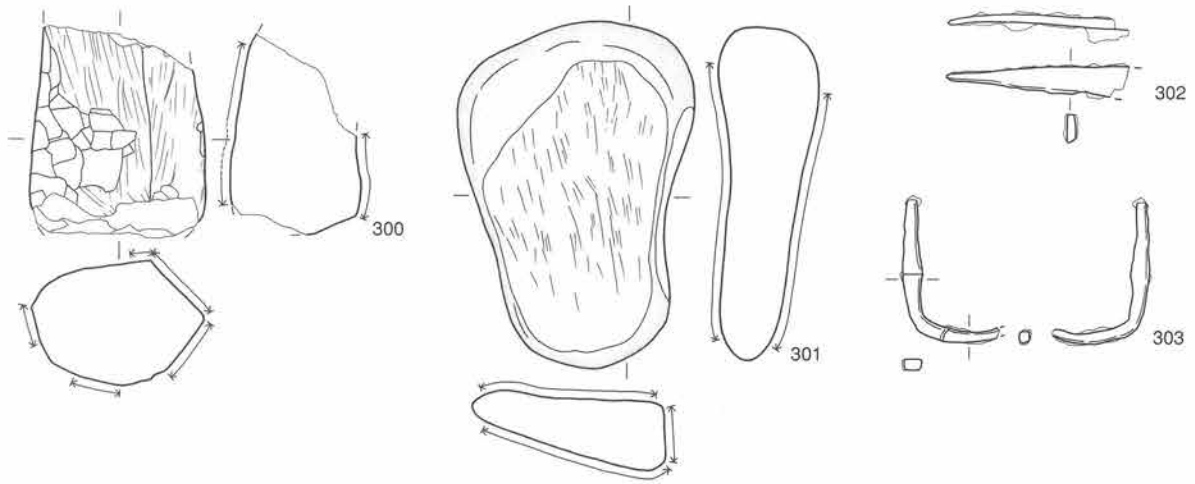
第172図 遺構内出土遺物 (28)



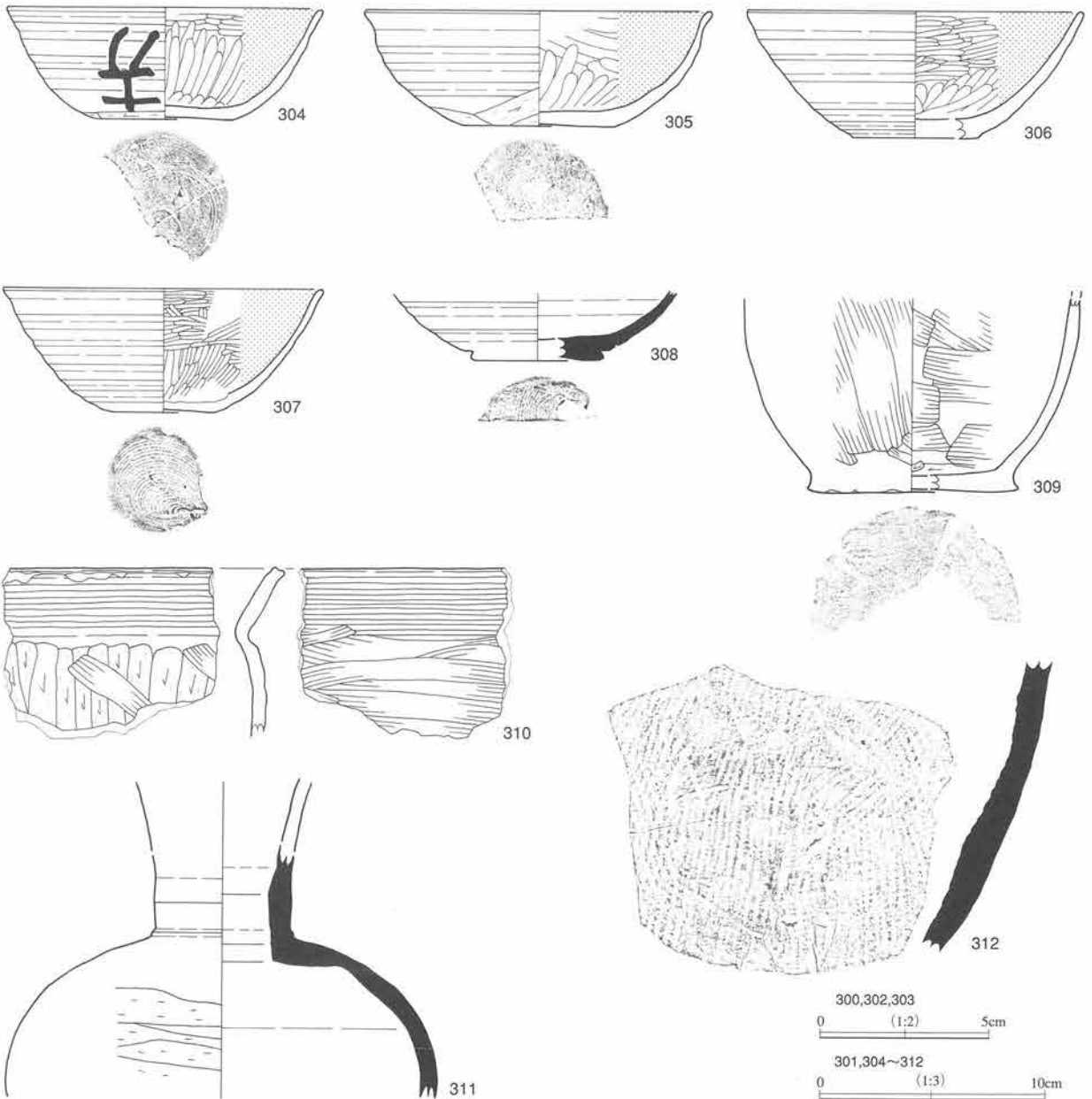
第173図 遺構内出土遺物 (29)



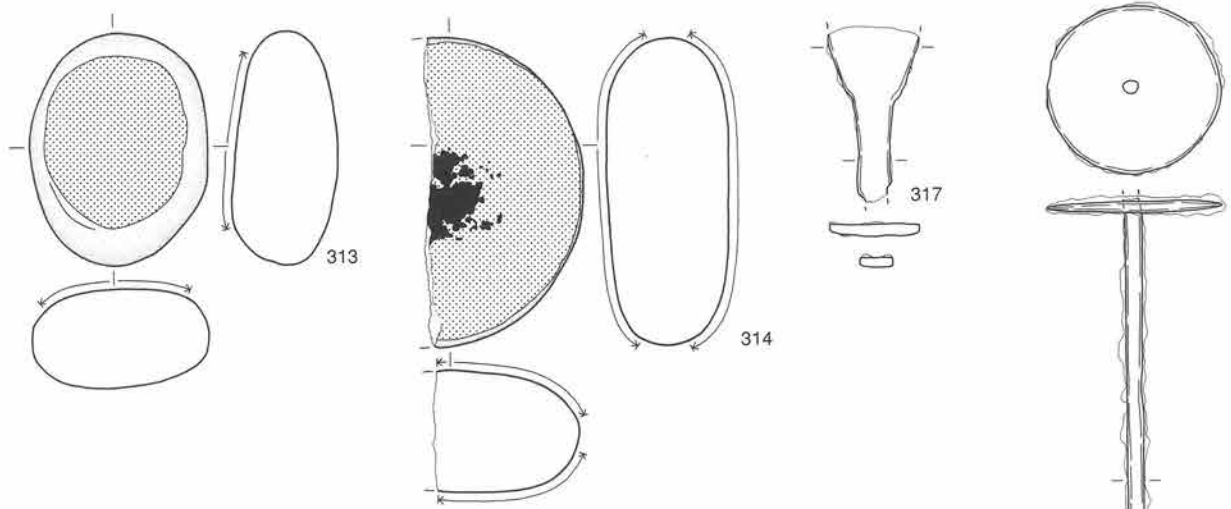
第174図 遺構内出土遺物 (30)



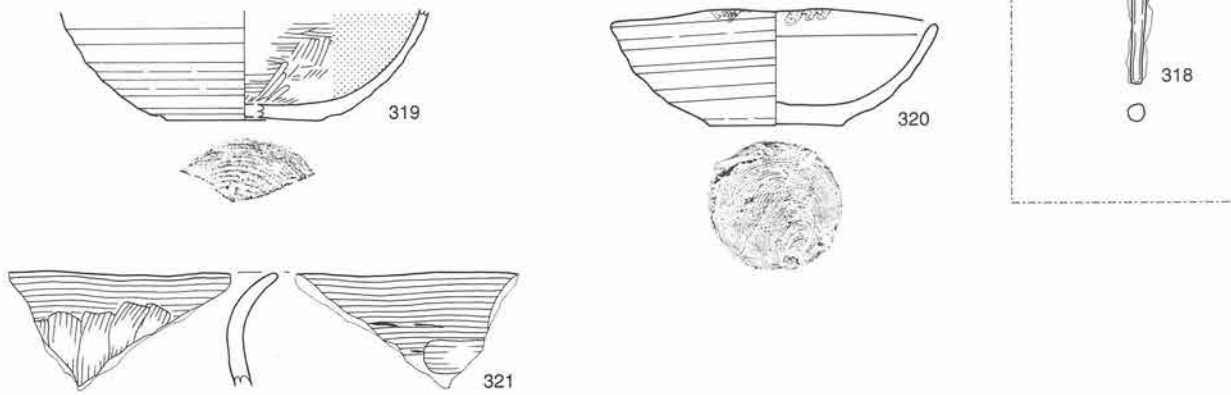
RA082 (57号住)



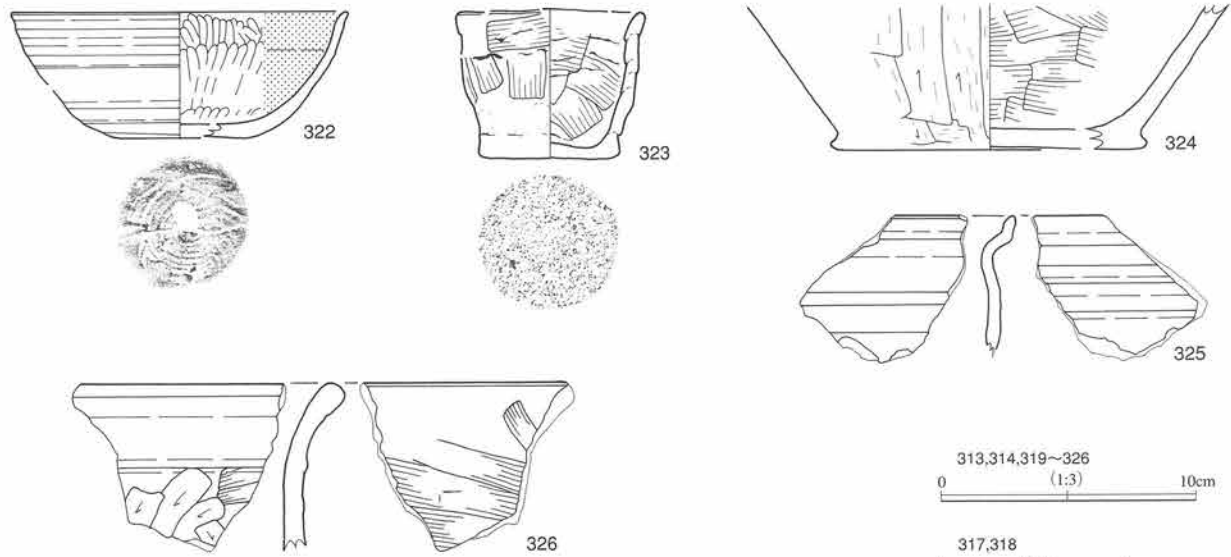
第175図 遺構内出土遺物 (31)



RA083 (58号住)



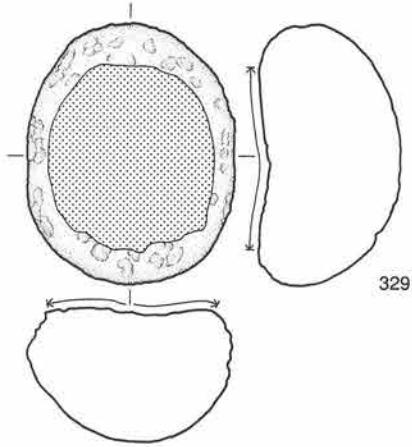
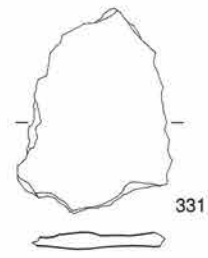
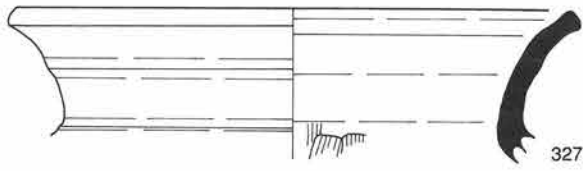
RA084 (55号住)



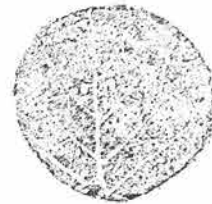
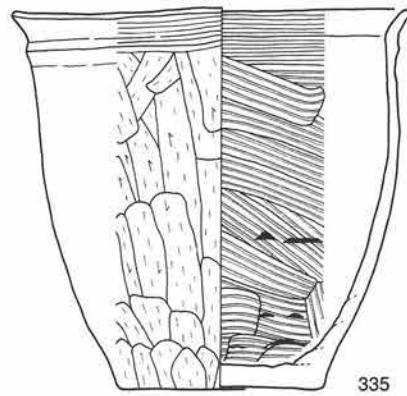
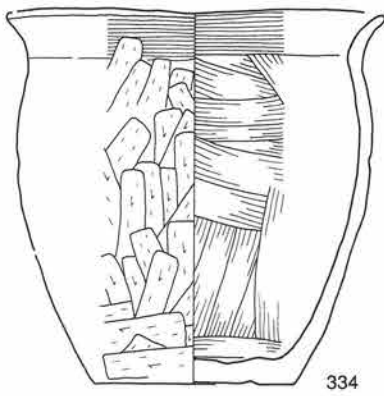
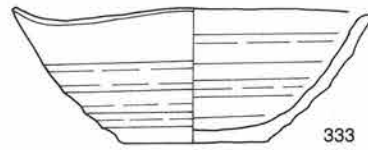
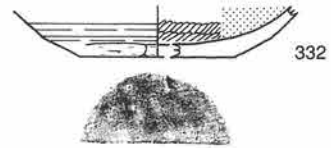
313, 314, 319~326
(1:3) 0 10cm

317, 318
(1:2) 0 5cm

第176図 遺構内出土遺物 (32)



RA085 (45号住)

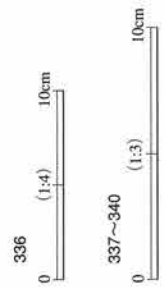
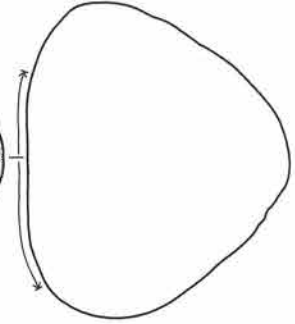
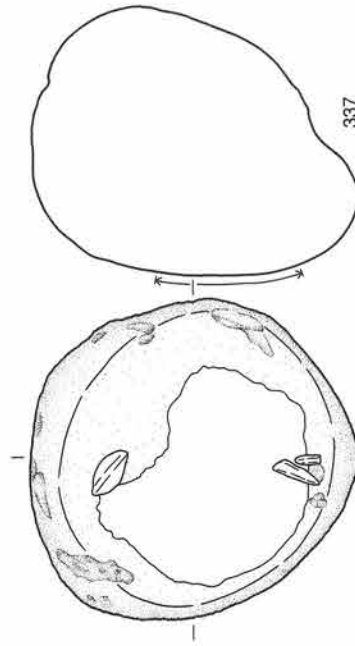
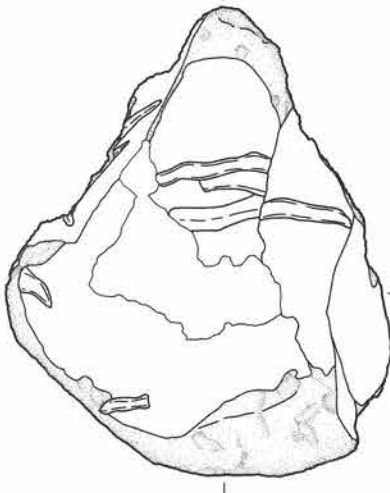
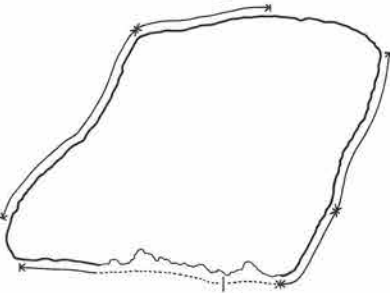
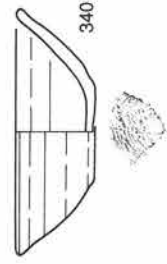
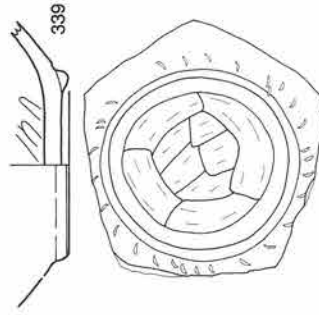
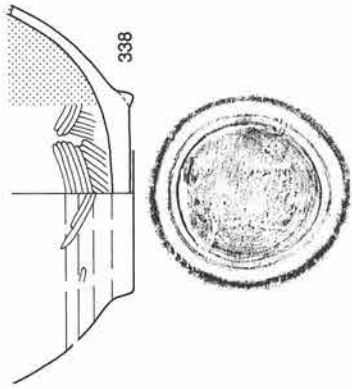


327, 329, 332~335
0 (1:3) 10cm

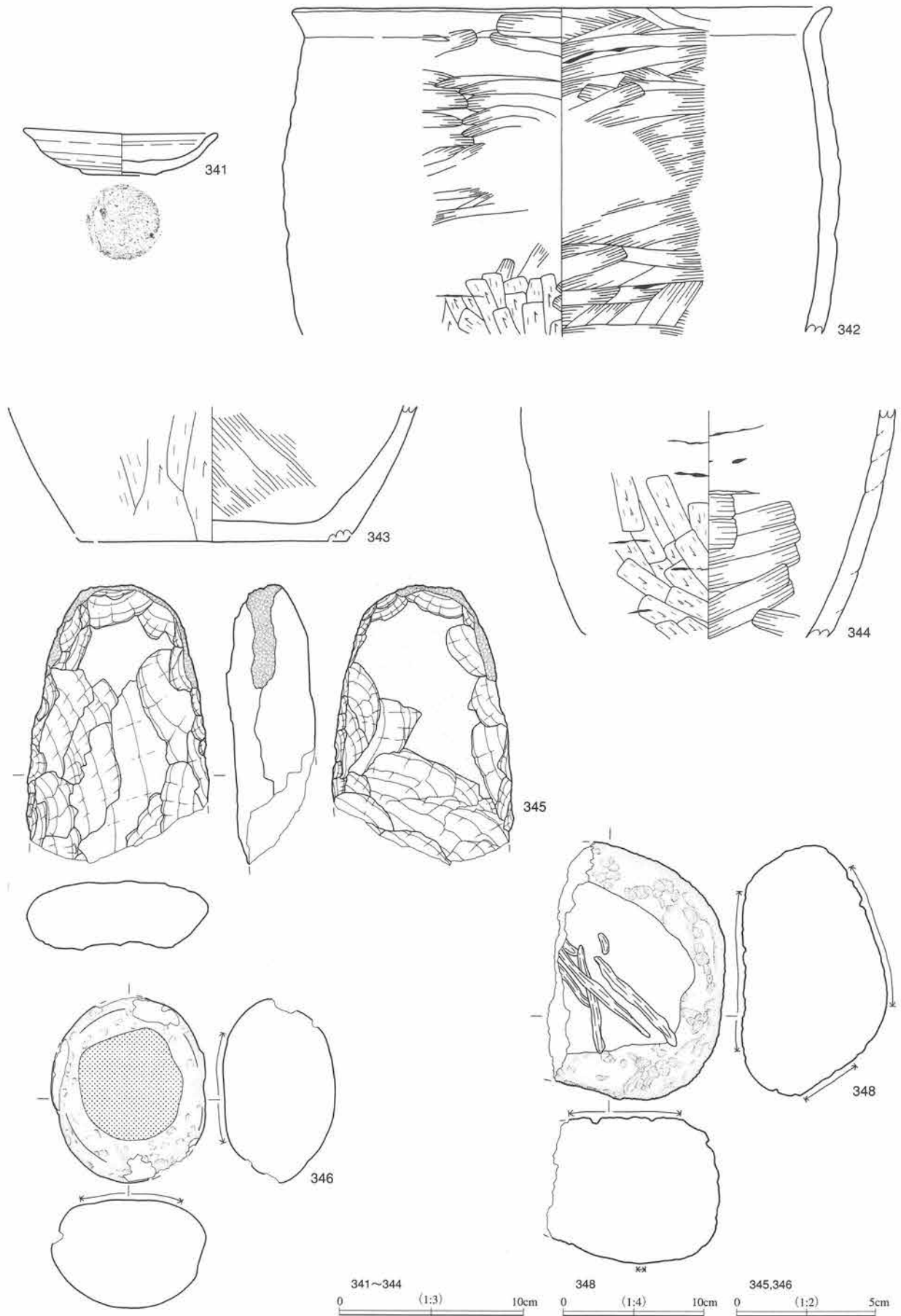
331
0 (1:2) 5cm

第177図 遺構内出土遺物 (33)

RA086 (6号住)

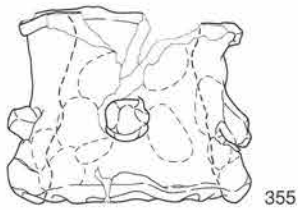
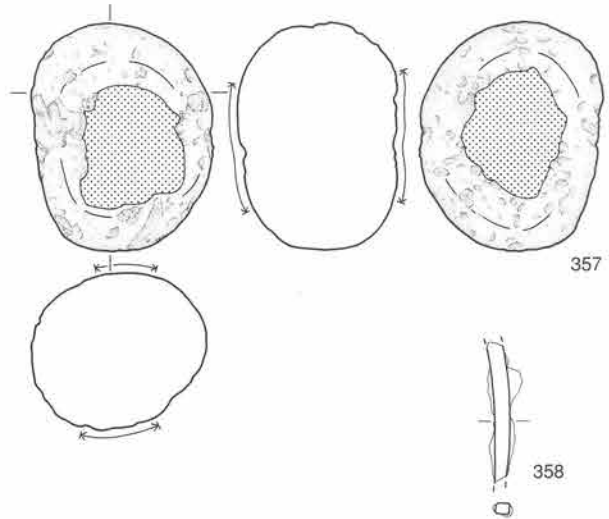
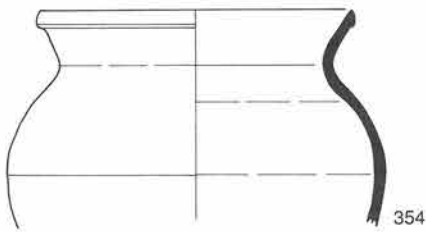
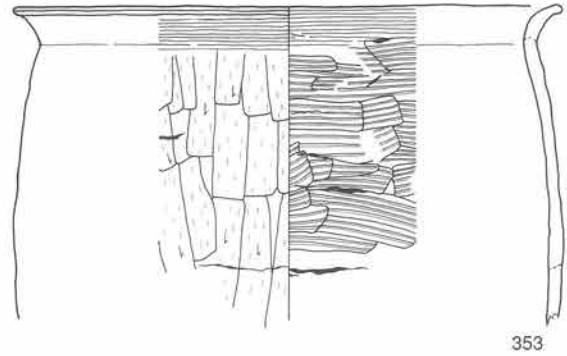
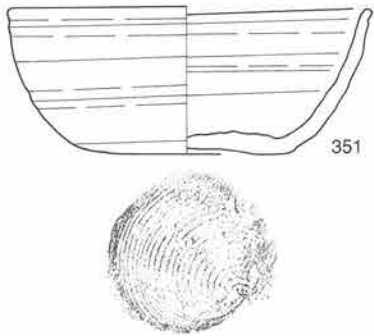
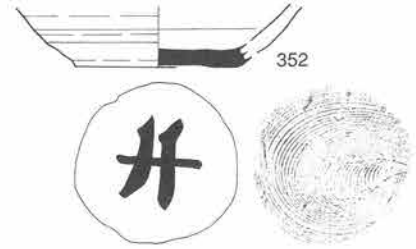
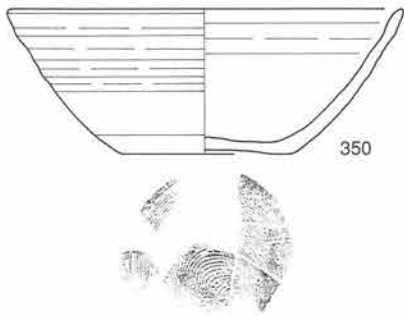


第178図 遺構内出土遺物 (34)

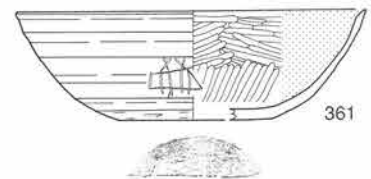
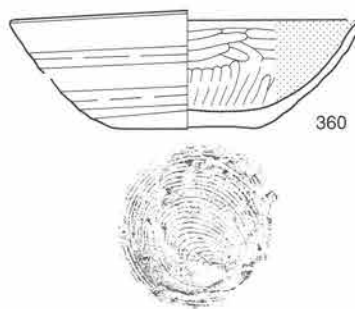
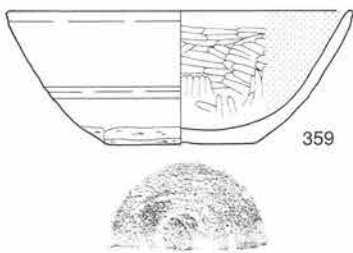


第179図 遺構内出土遺物 (35)

RA087 (7号住)



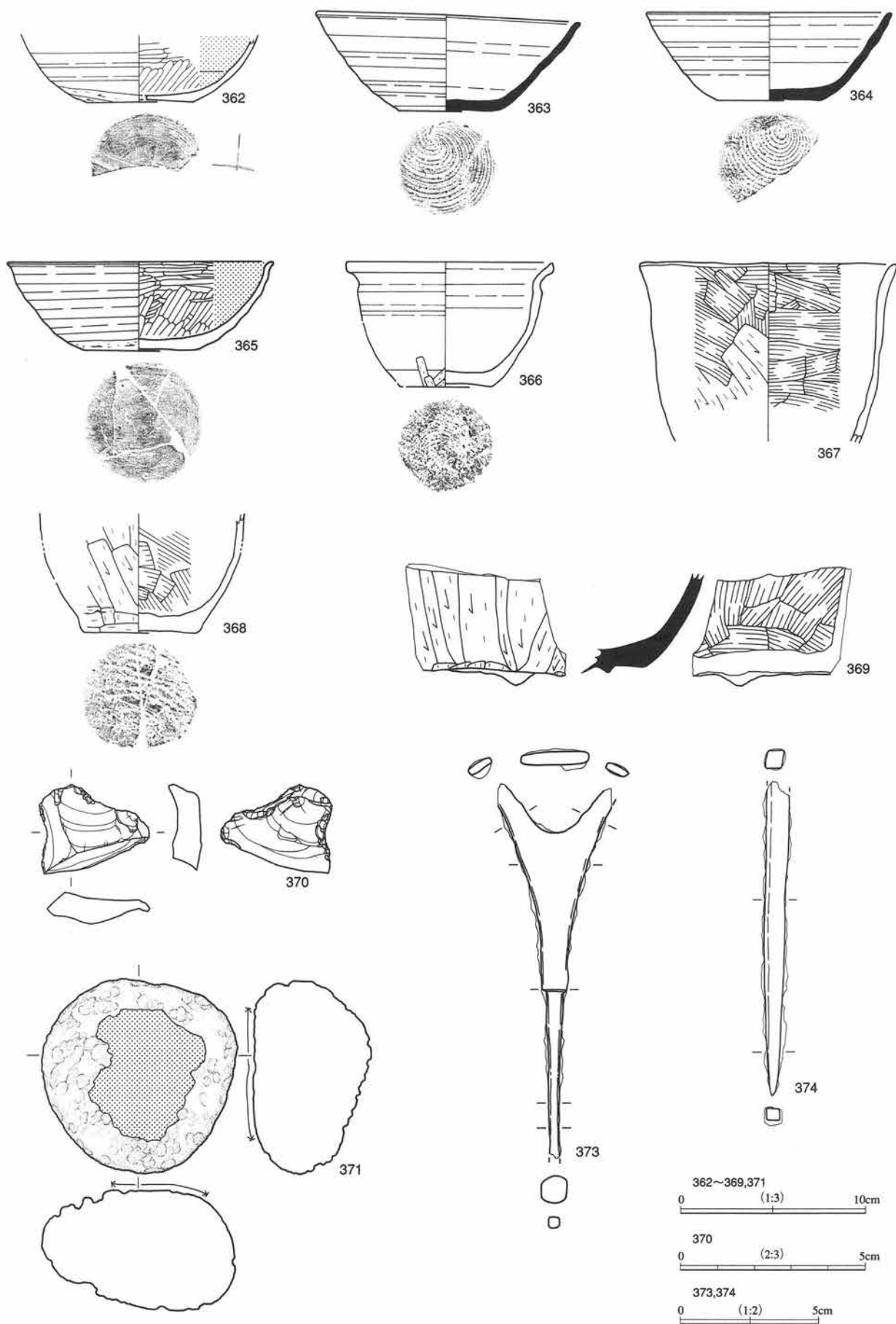
RA088 (8号住)



350~354, 357, 359~361
(1:3) 10cm

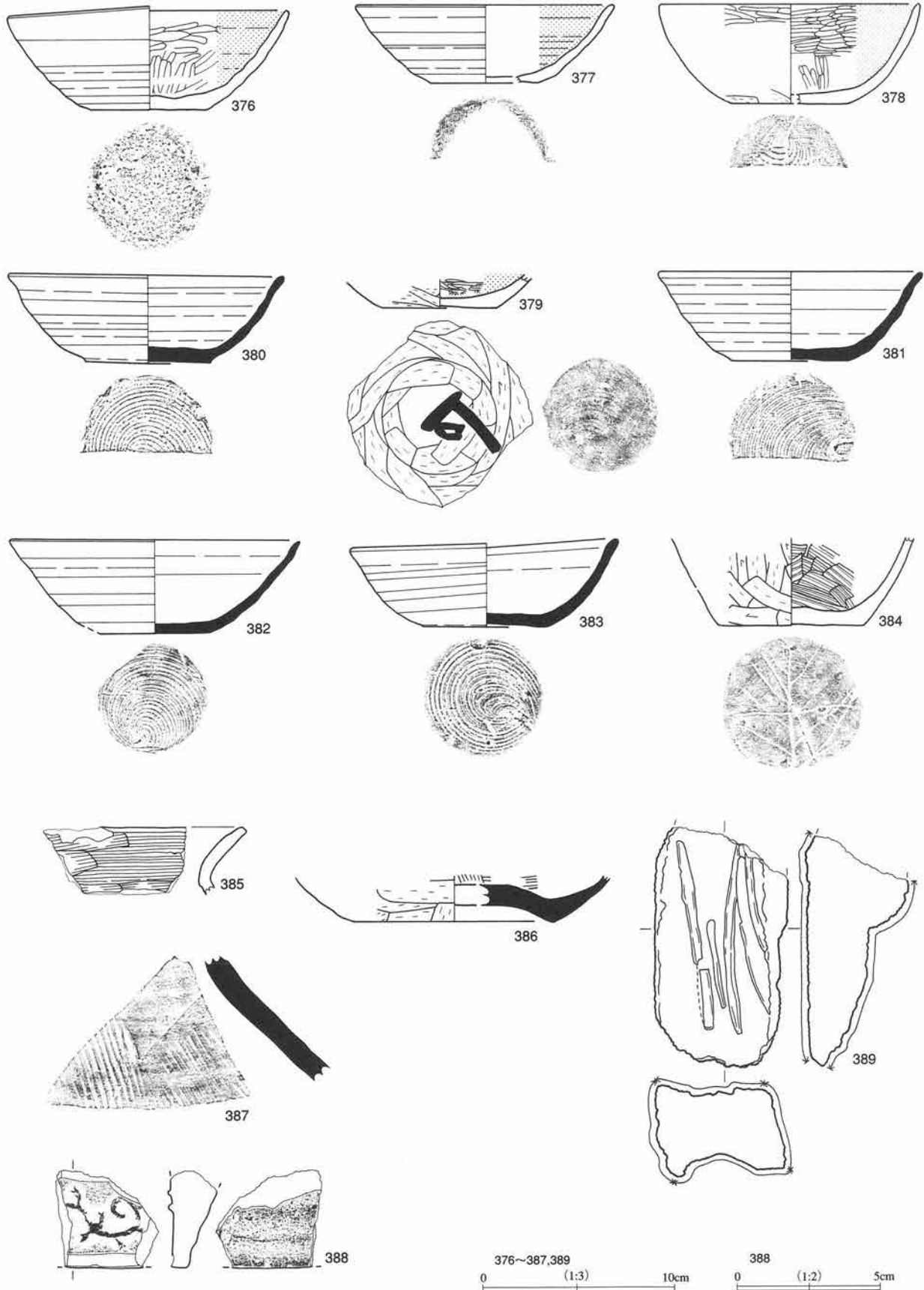
355, 358
(1:2) 5cm

第180図 遺構内出土遺物 (36)

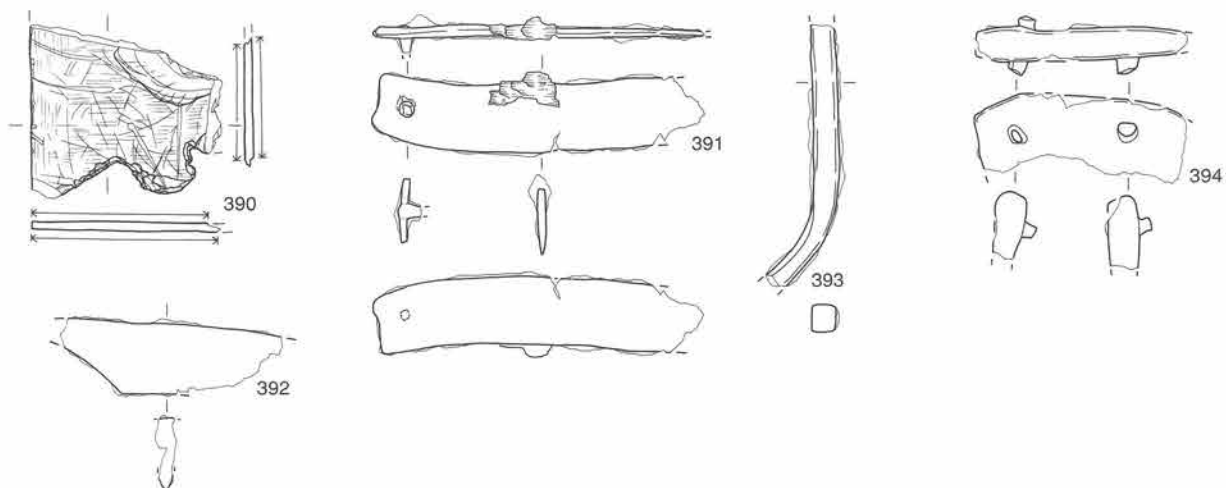


第181図 遺構内出土遺物 (37)

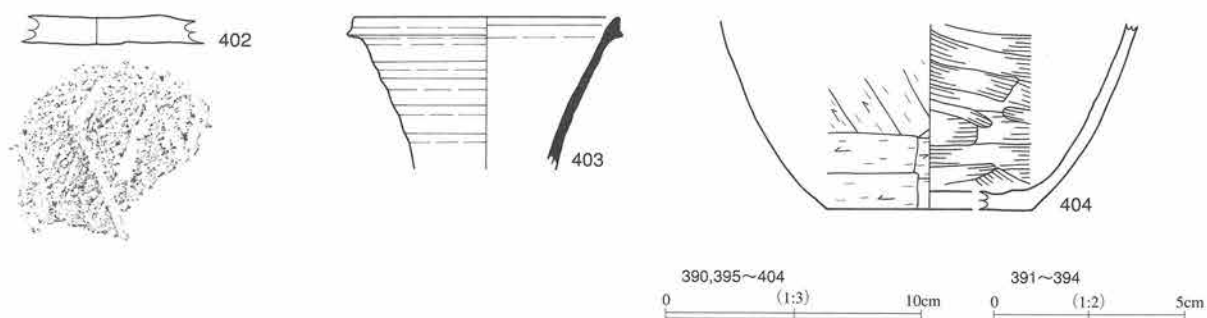
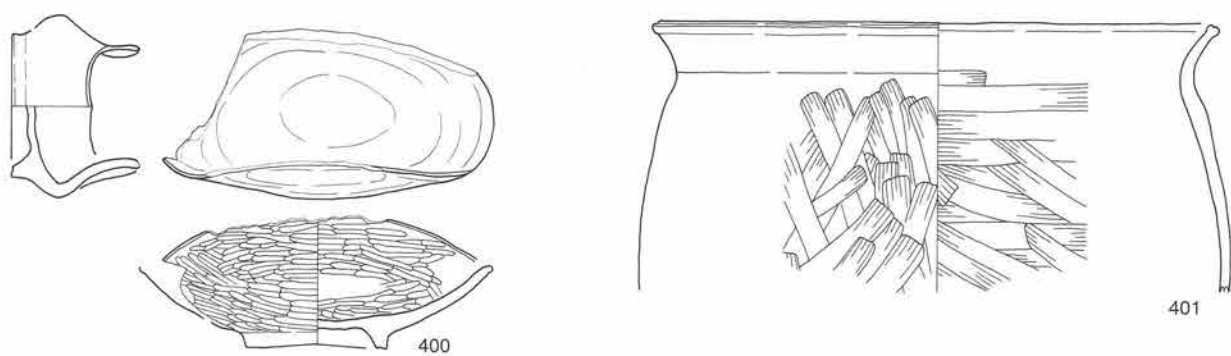
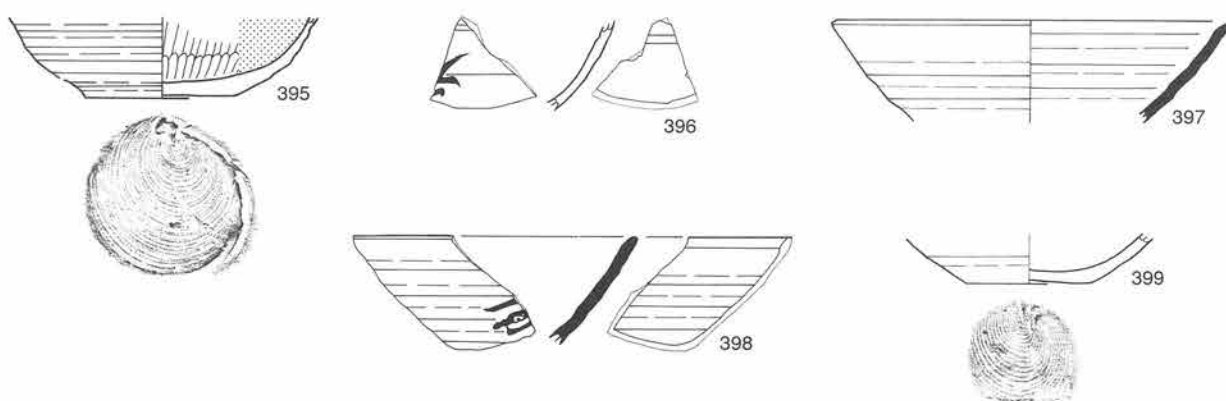
RA089 (47号住)



第182図 遺構内出土遺物 (38)

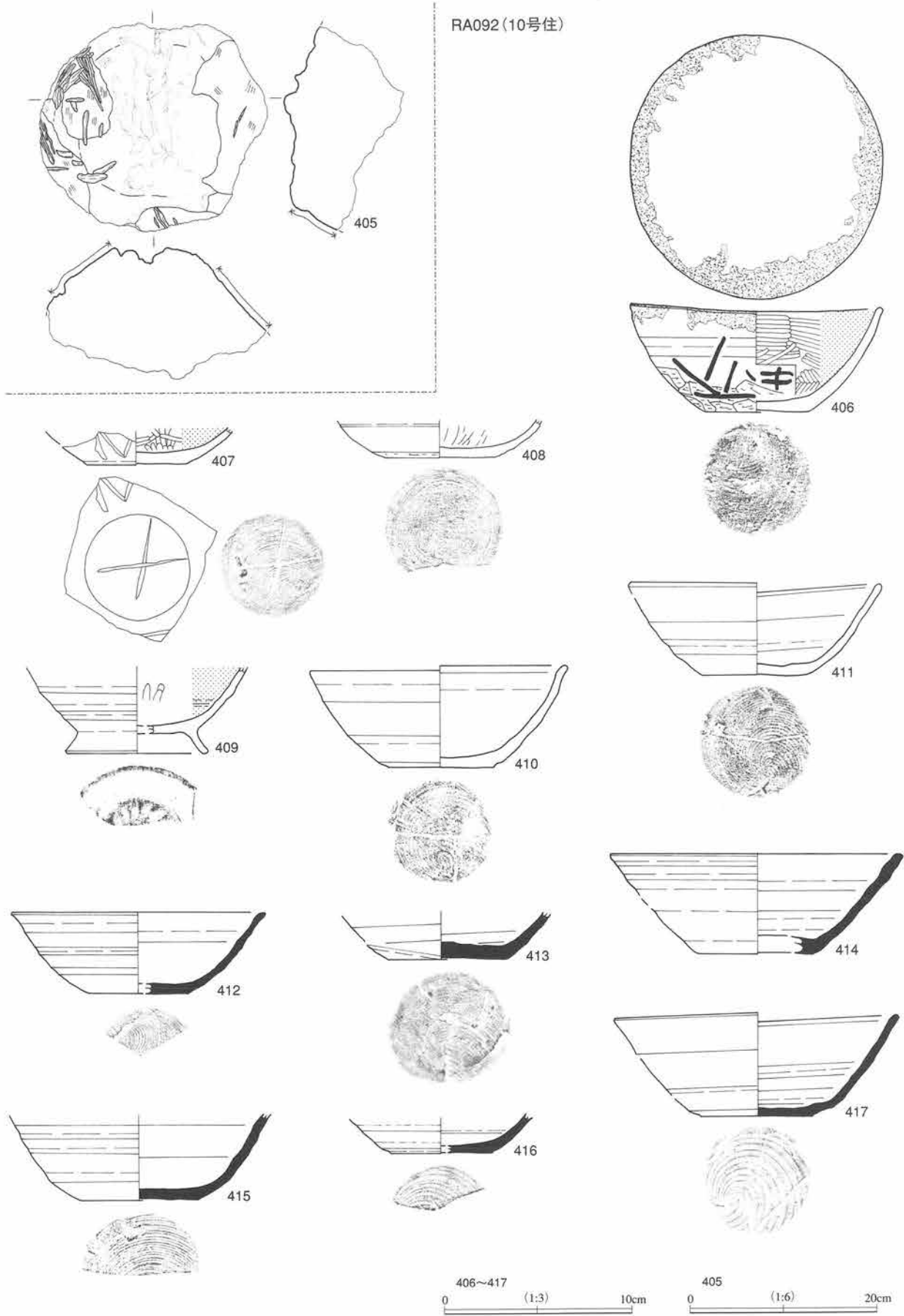


RA091 (51号住)

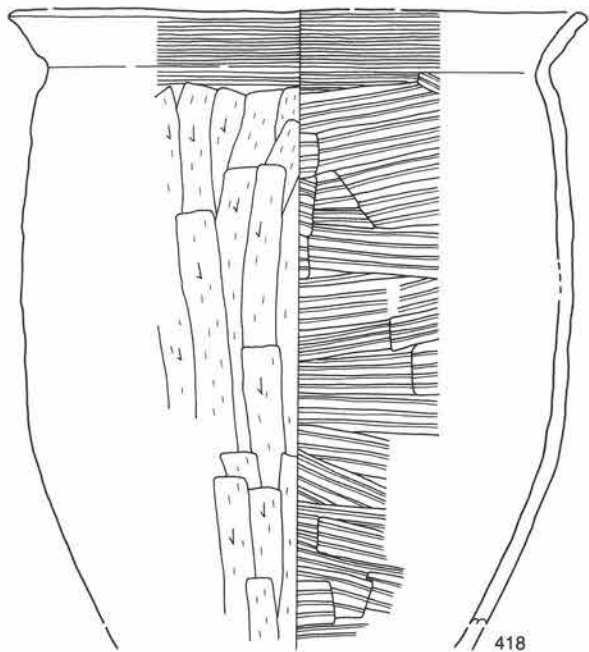


390,395~404 (1:3) 10cm
391~394 (1:2) 5cm

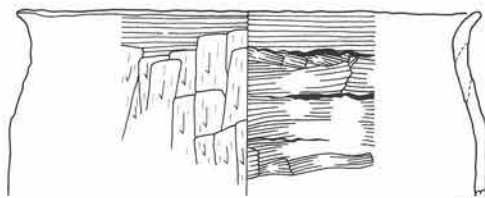
第183図 遺構内出土遺物 (39)



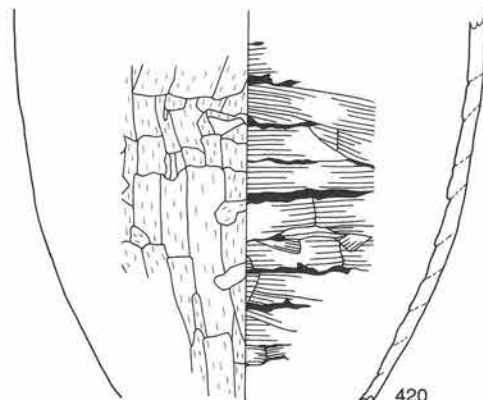
第184図 遺構内出土遺物 (40)



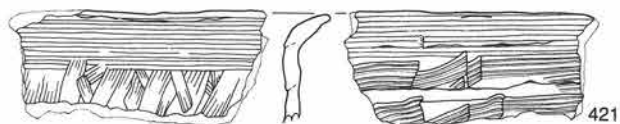
418



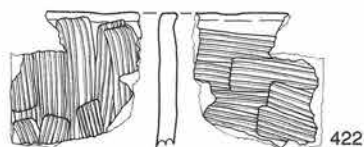
419



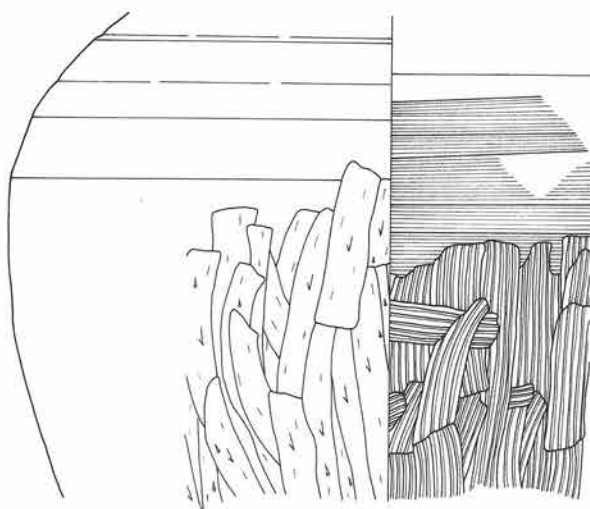
420



421



422



423



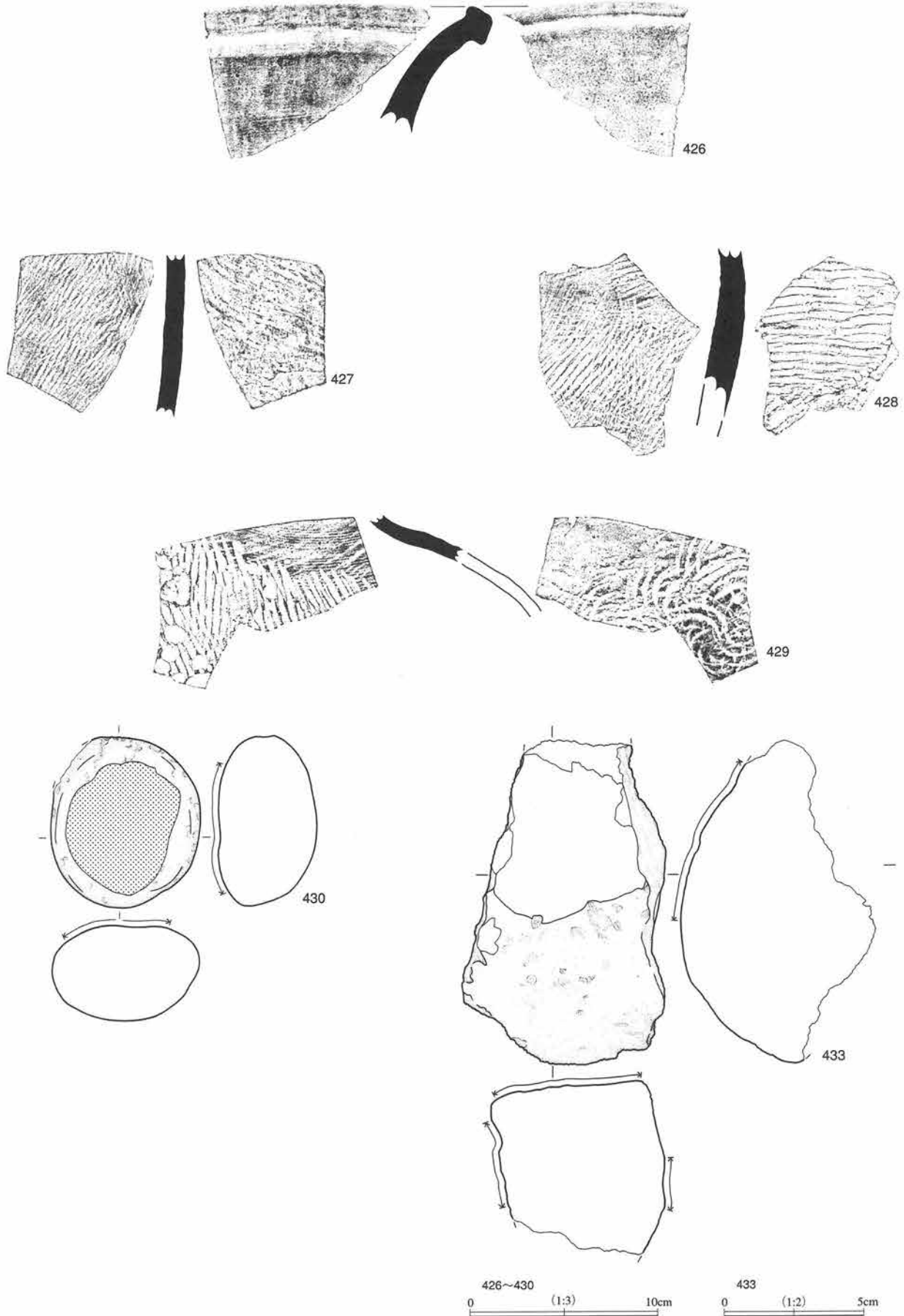
424



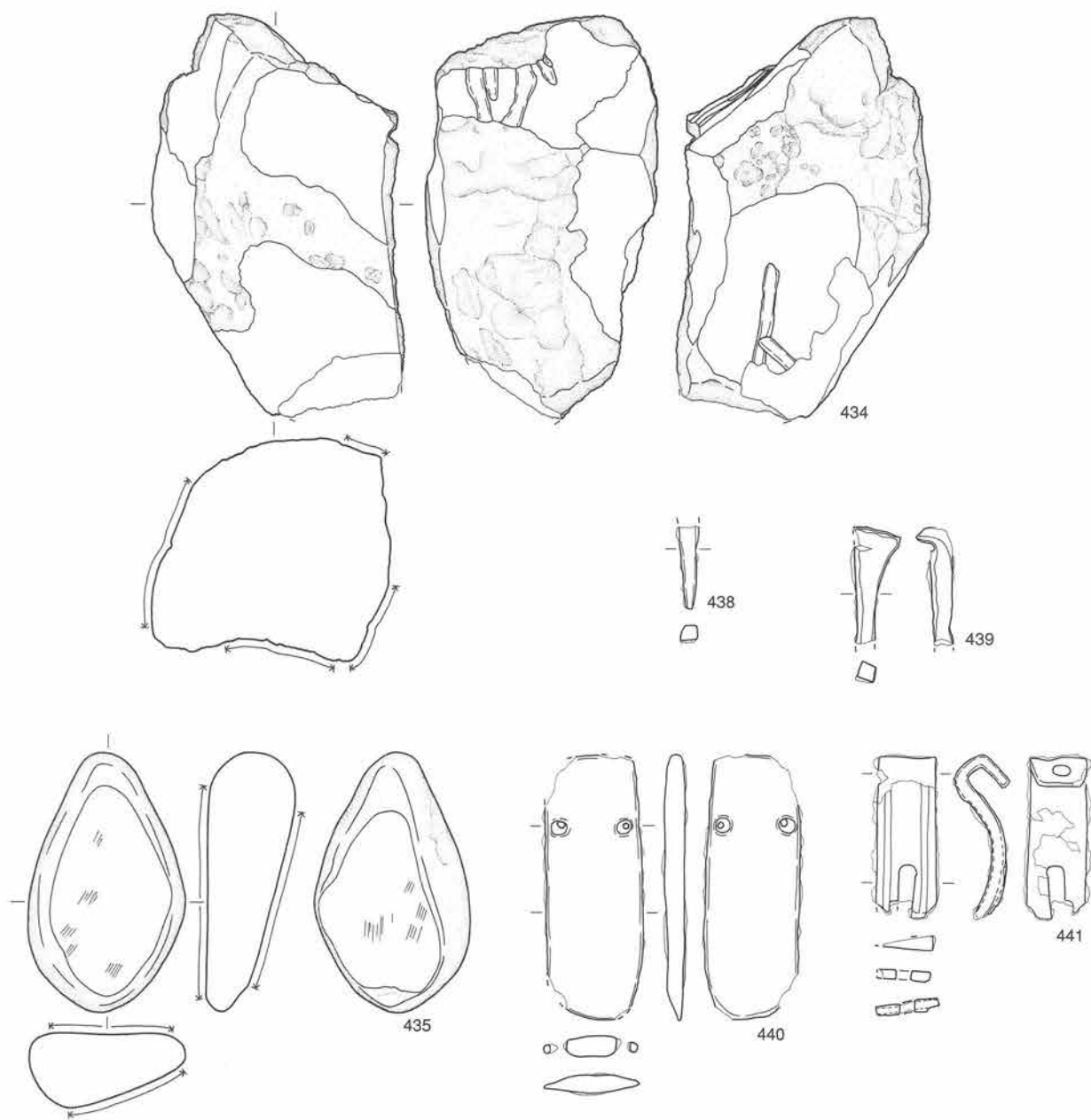
425

418~425
0 (1:3) 10cm

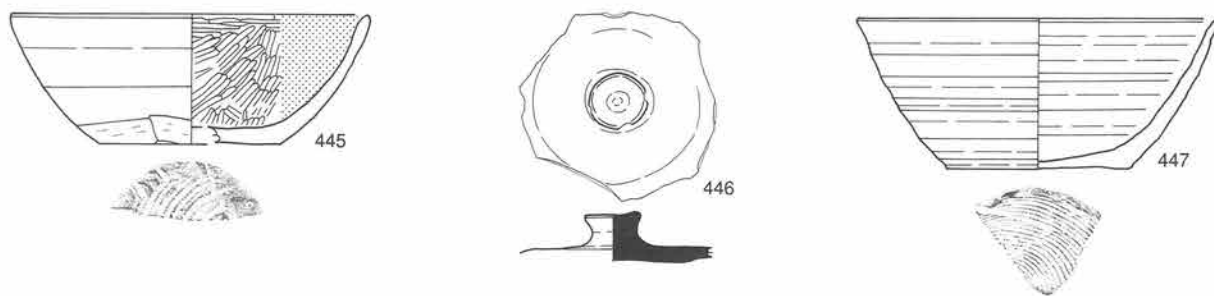
第185図 遺構内出土遺物 (41)



第186図 遺構内出土遺物 (42)

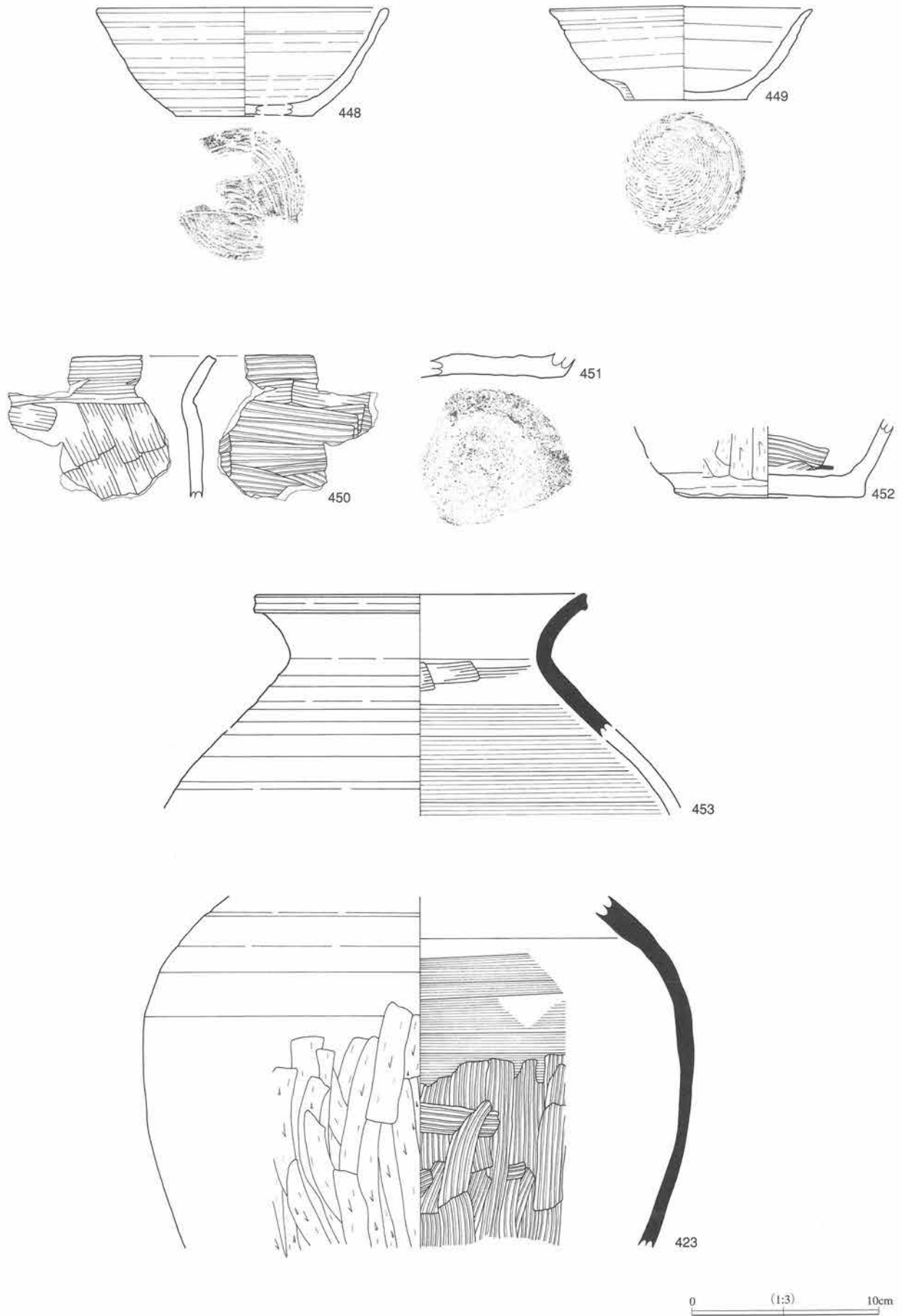


RA093 (43号住)

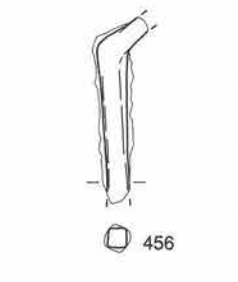
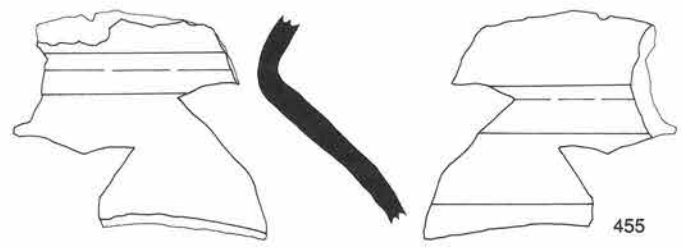
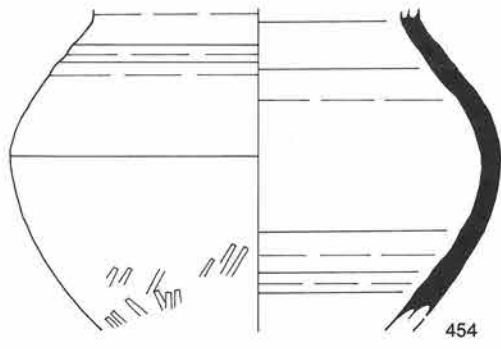


434 (1:4) 10cm 438~441 (1:2) 5cm 435,445~447 (1:3) 10cm

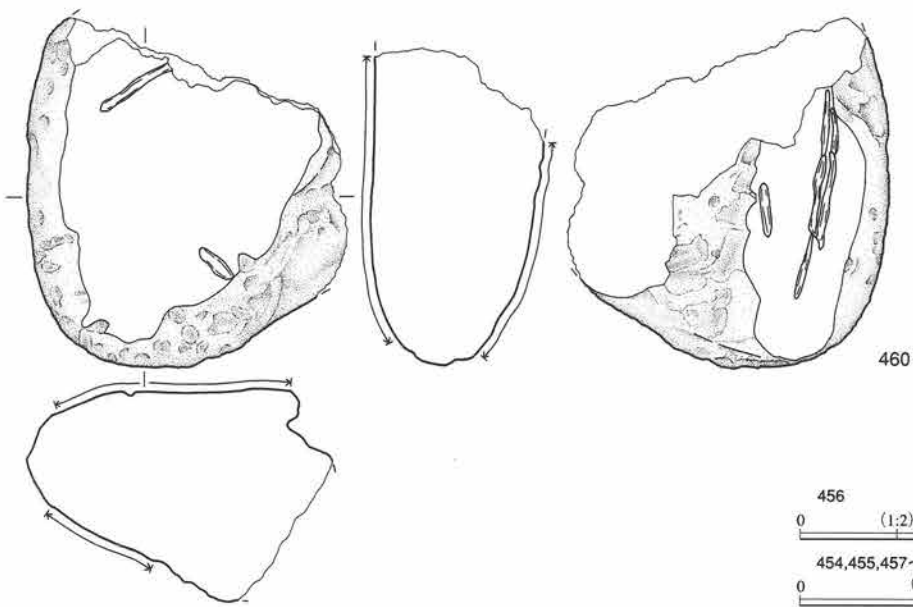
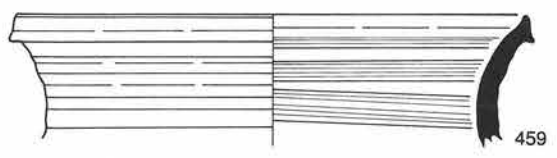
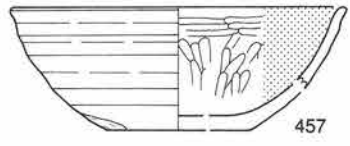
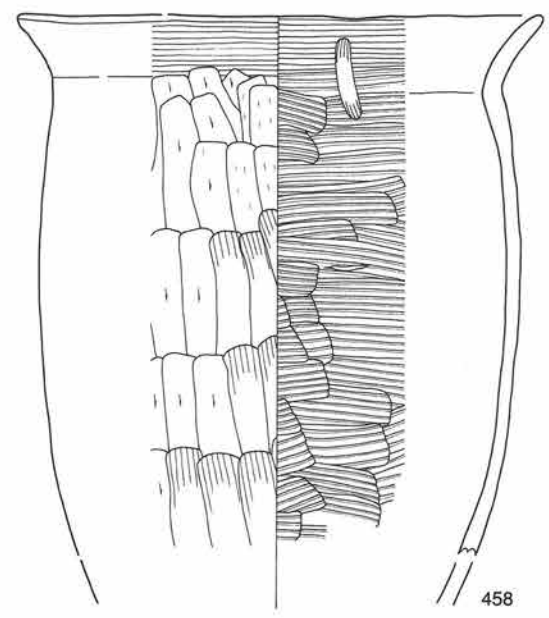
第187図 遺構内出土遺物 (43)



第188図 遺構内出土遺物 (44)

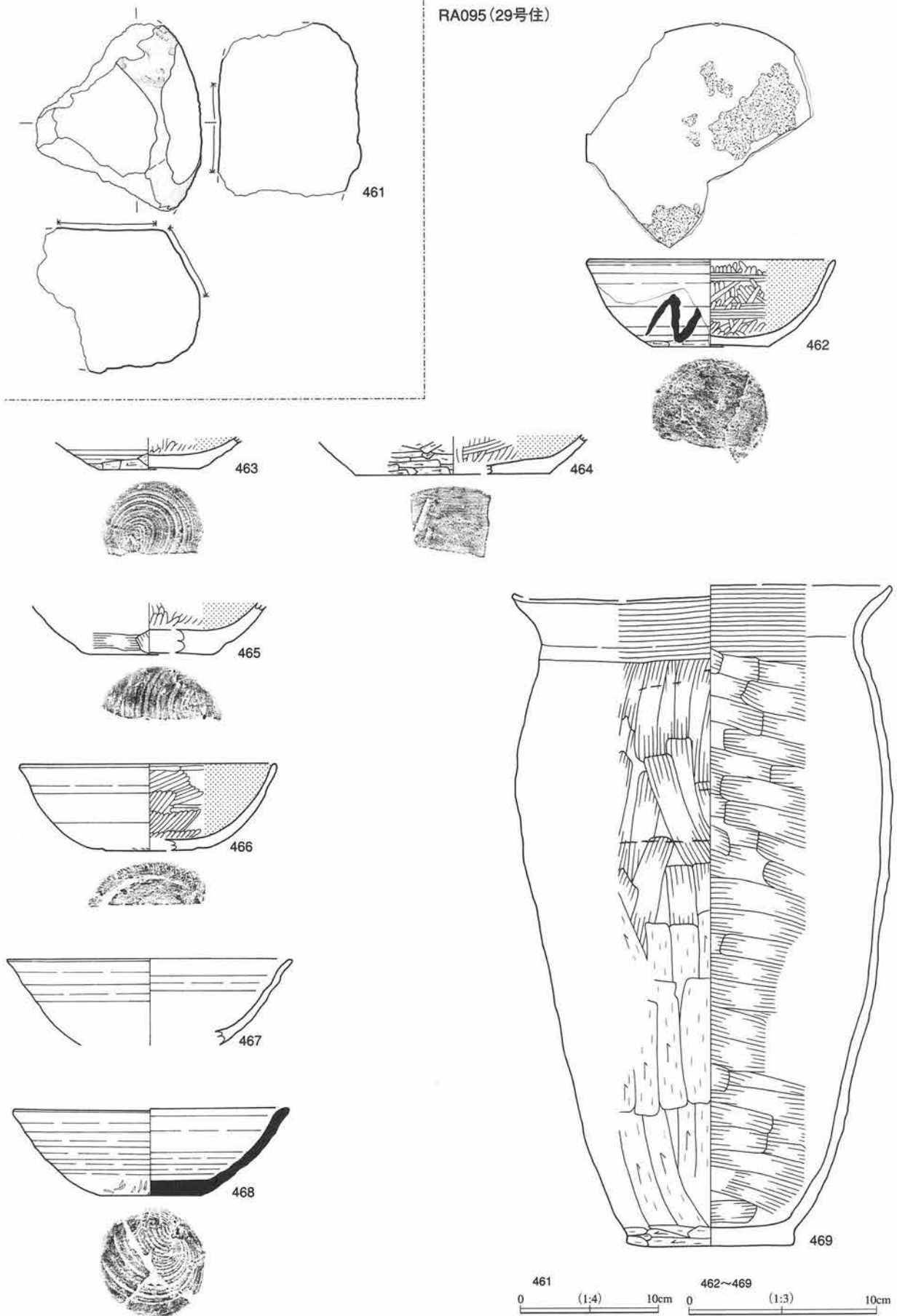


RA094 (34号住)

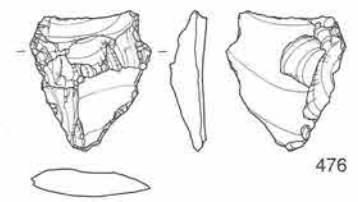
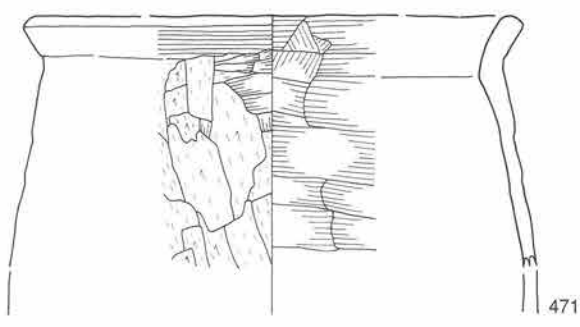
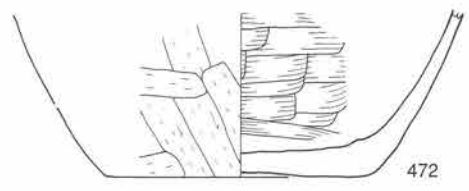
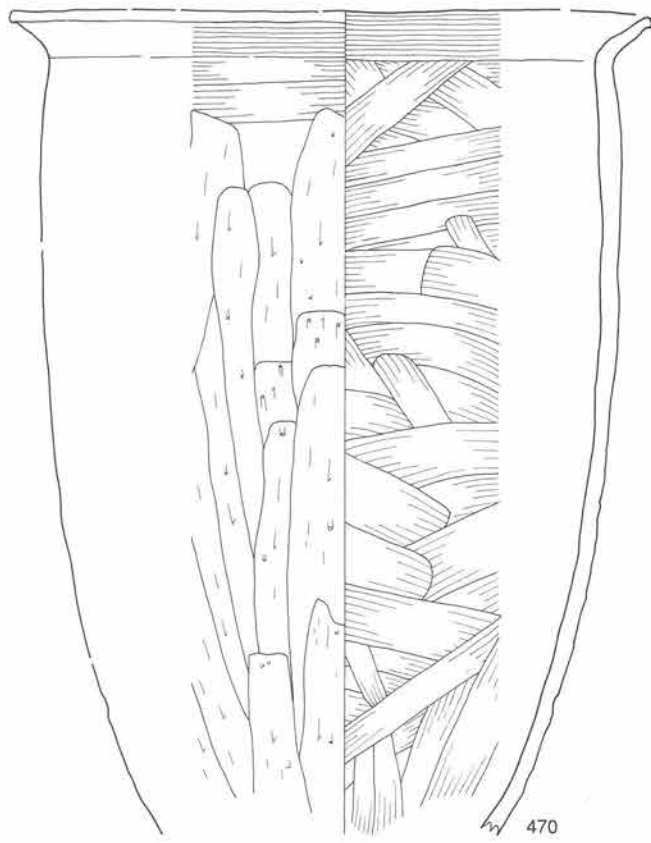


456
0 (1:2) 5cm
454,455,457~460
0 (1:3) 10cm

第189図 遺構内出土遺物 (45)



第190図 遺構内出土遺物 (46)



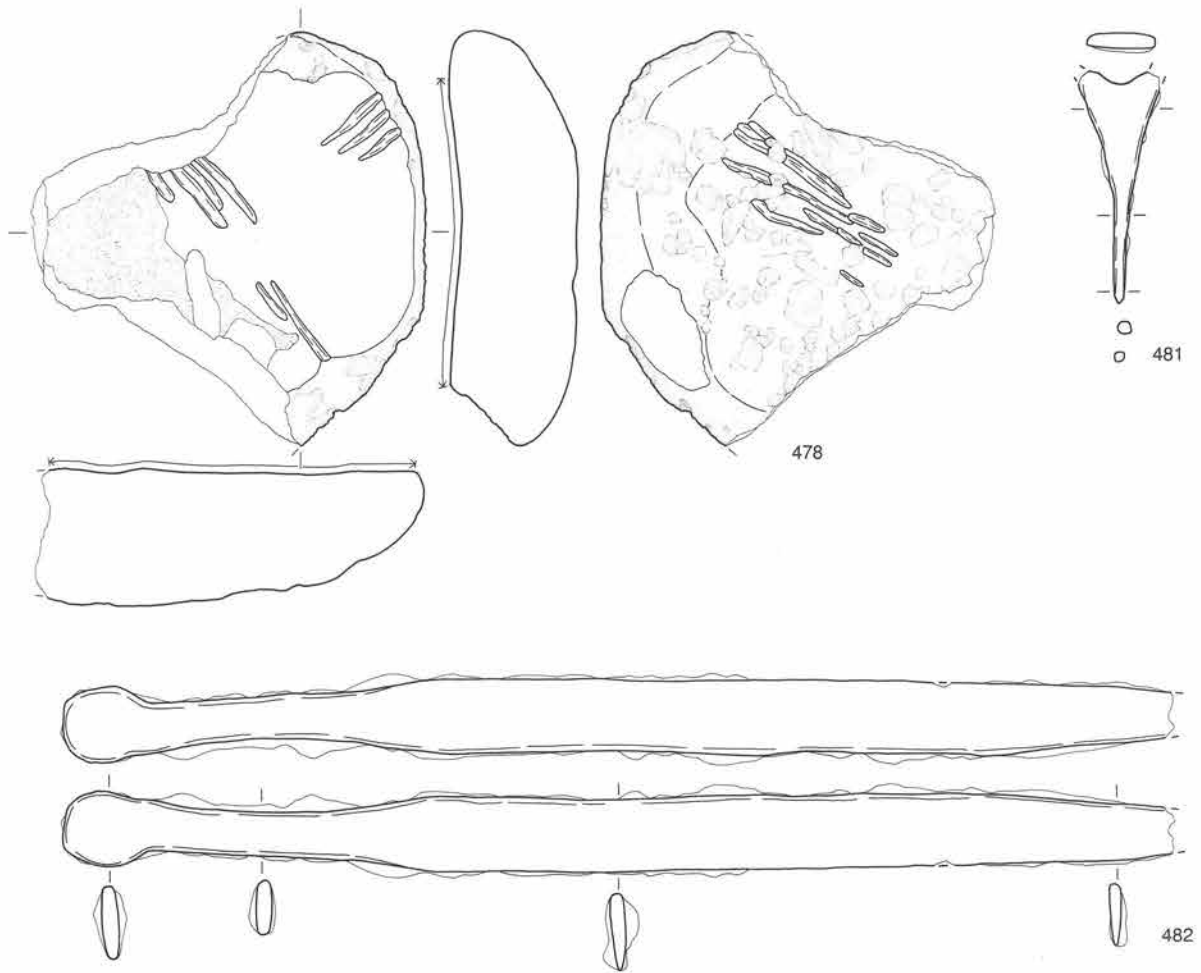
476
0 (1:2) 5cm

475
0 (2:3) 5cm

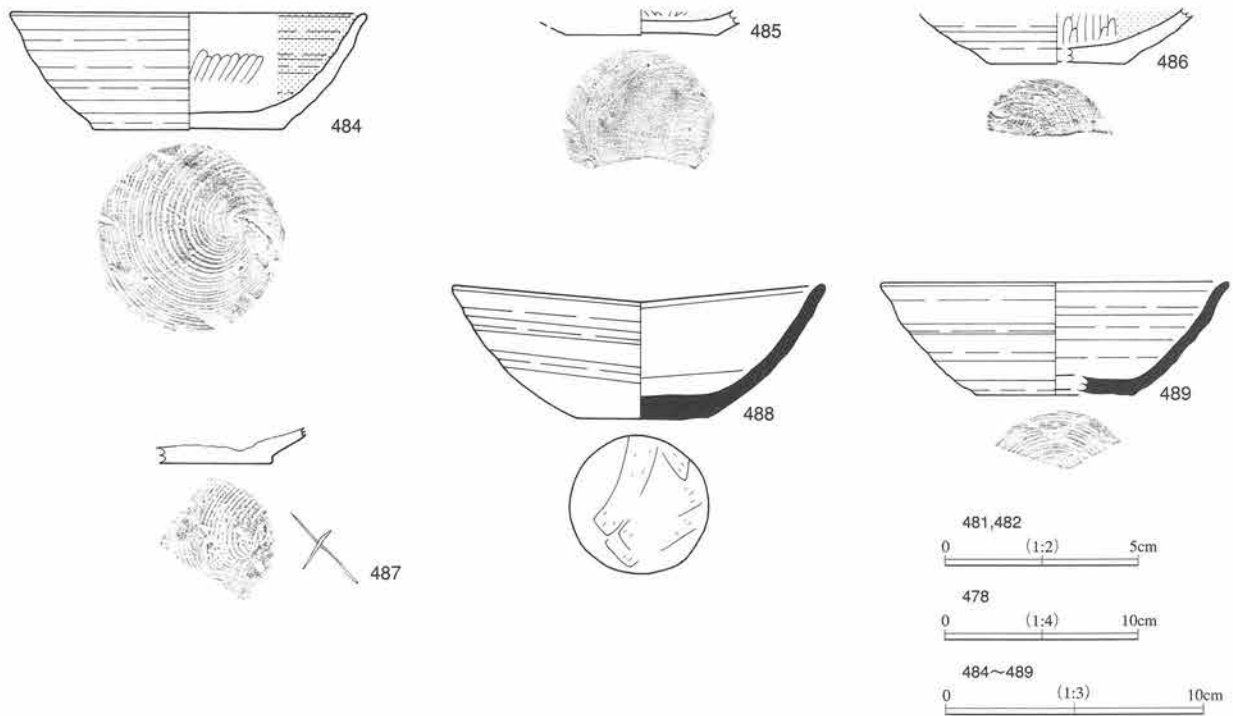
470~474
0 (1:3) 10cm

474

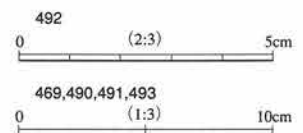
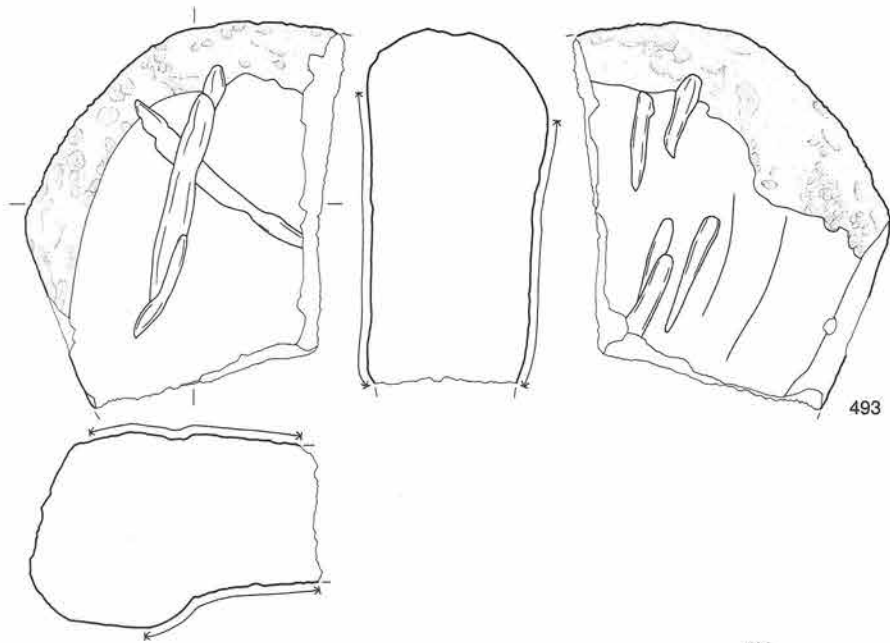
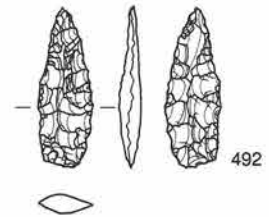
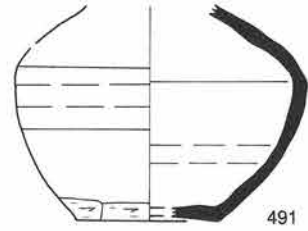
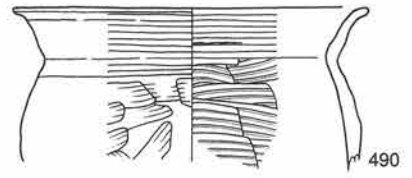
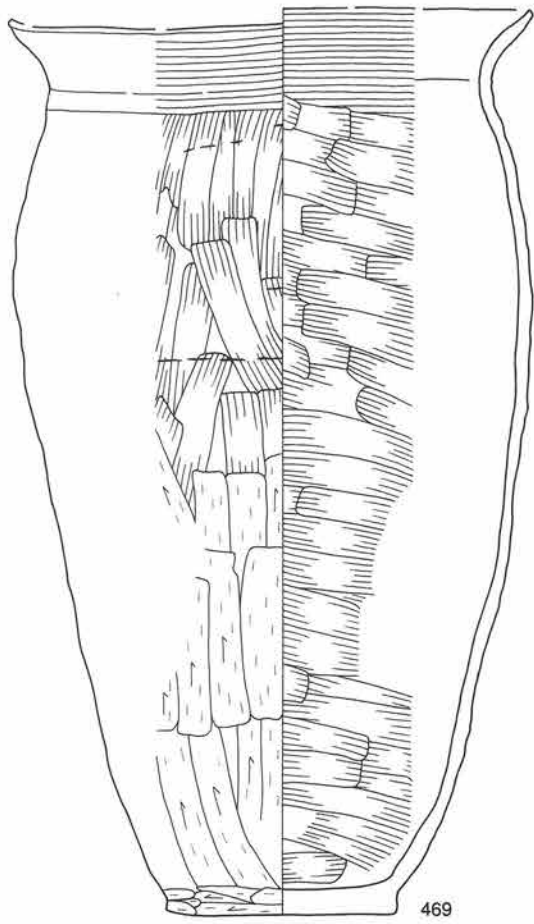
第191図 遺構内出土遺物 (47)



RA096 (24号住)

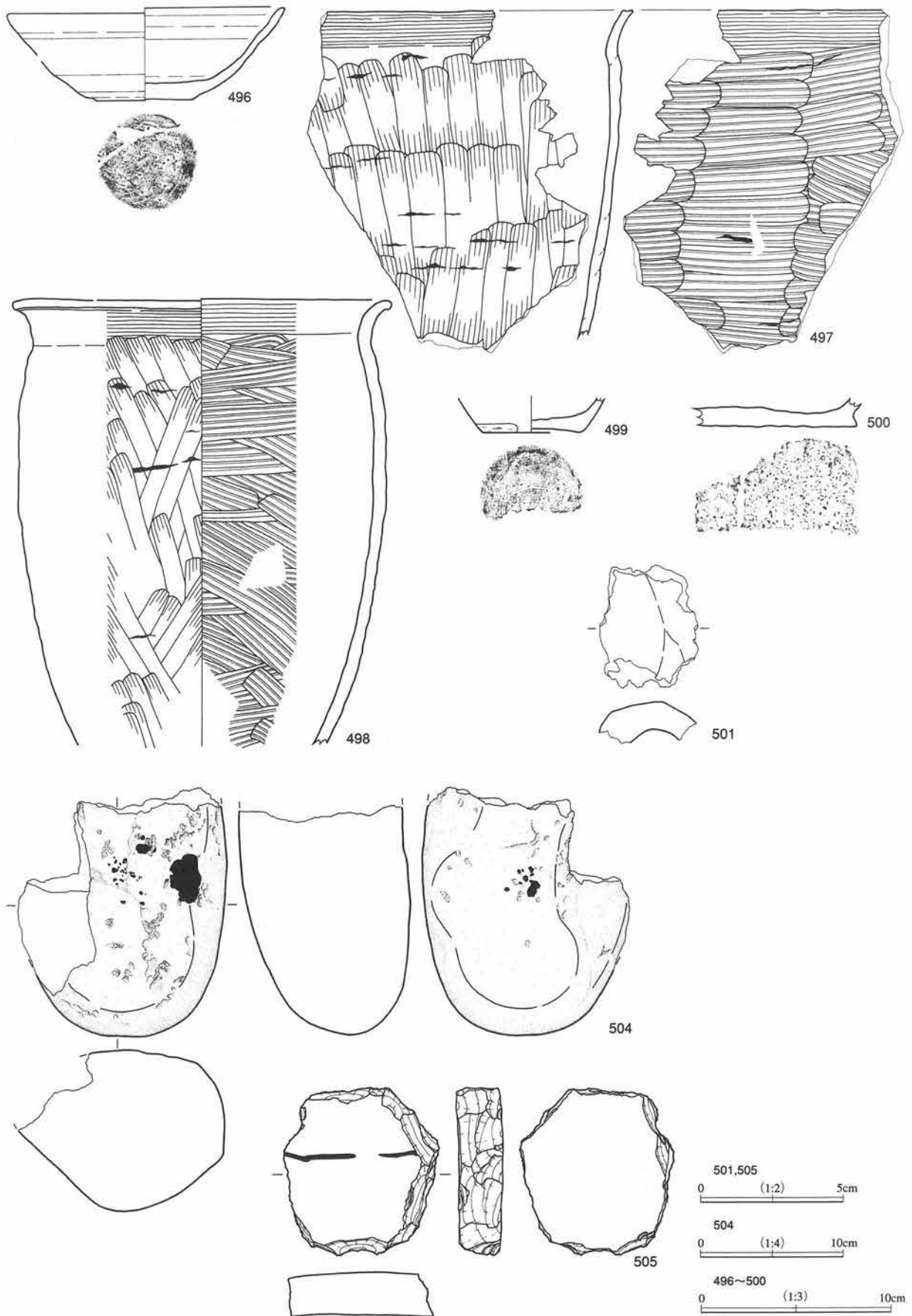


第192図 遺構内出土遺物 (48)



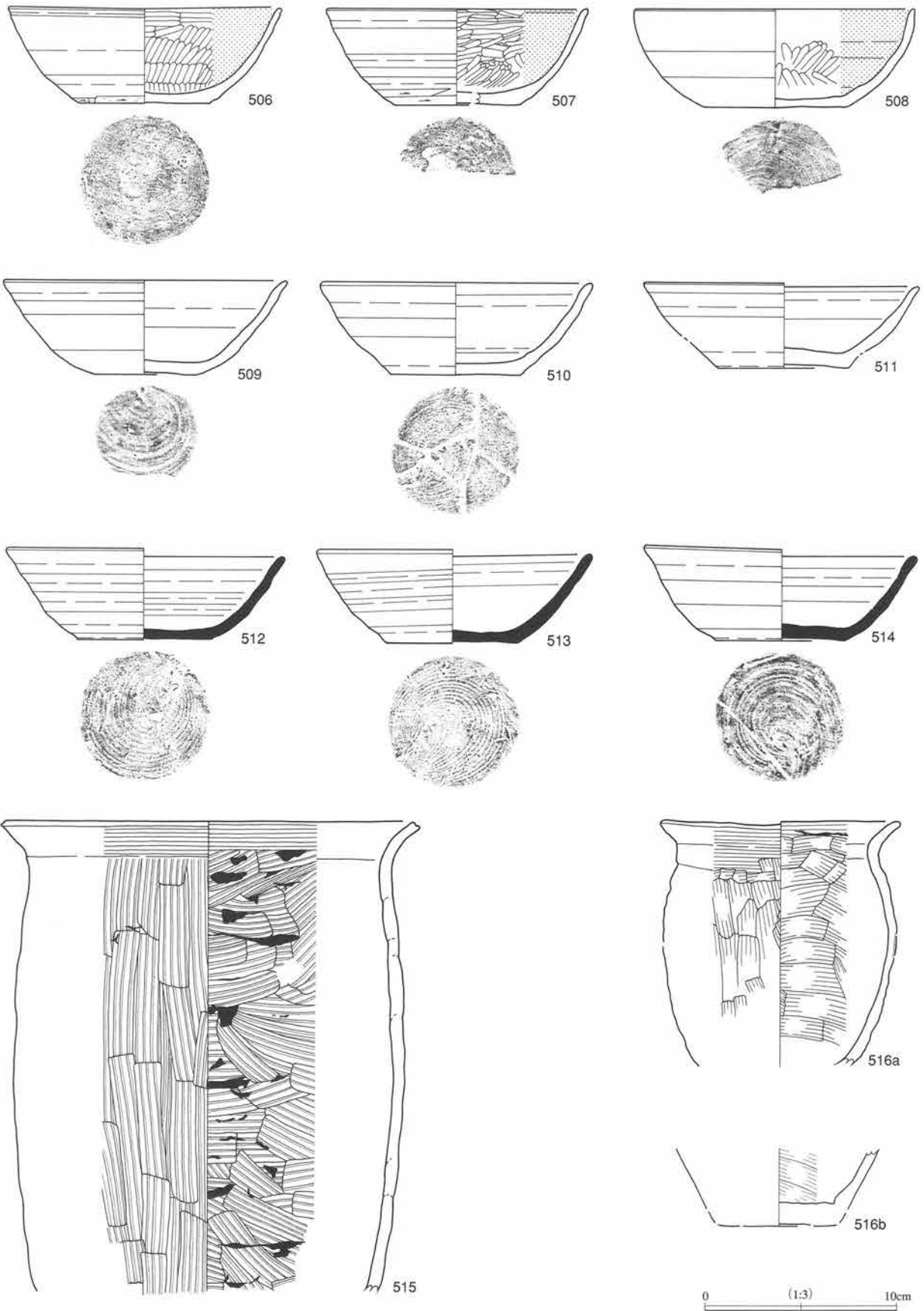
第193図 遺構内出土遺物 (49)

RA097 (38号住)

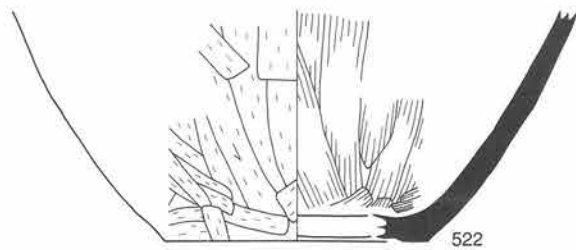
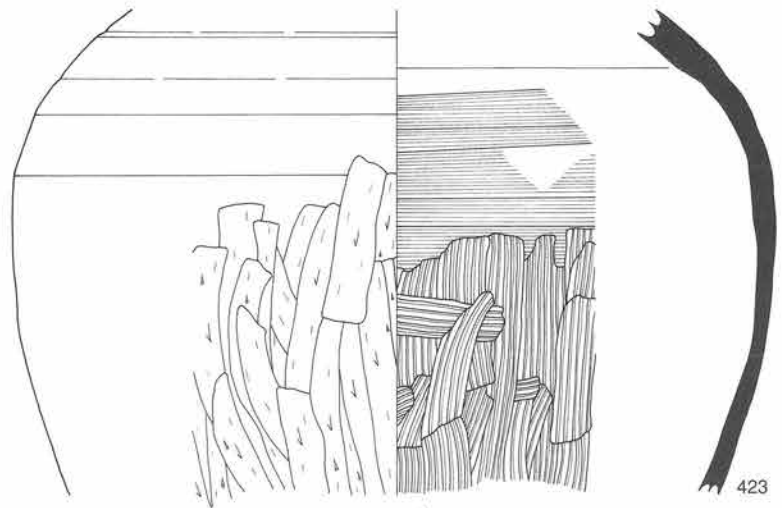
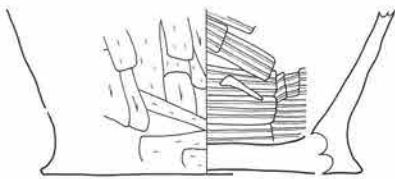
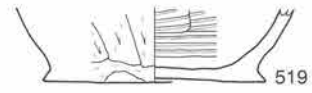
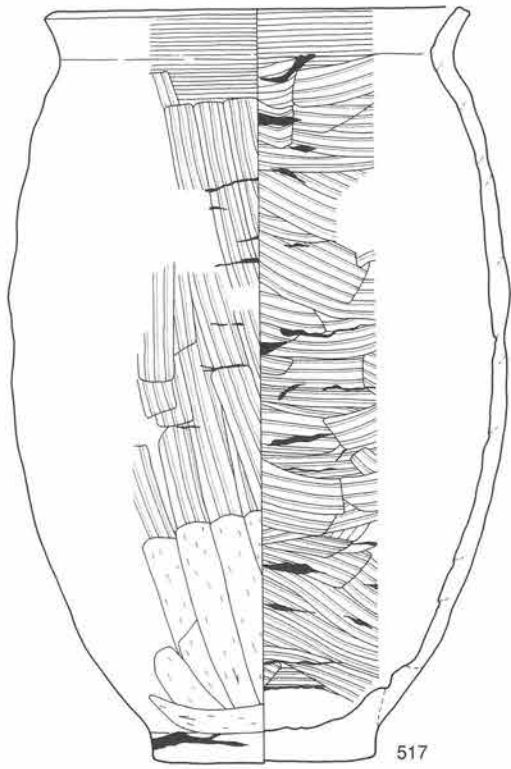


第194図 遺構内出土遺物 (50)

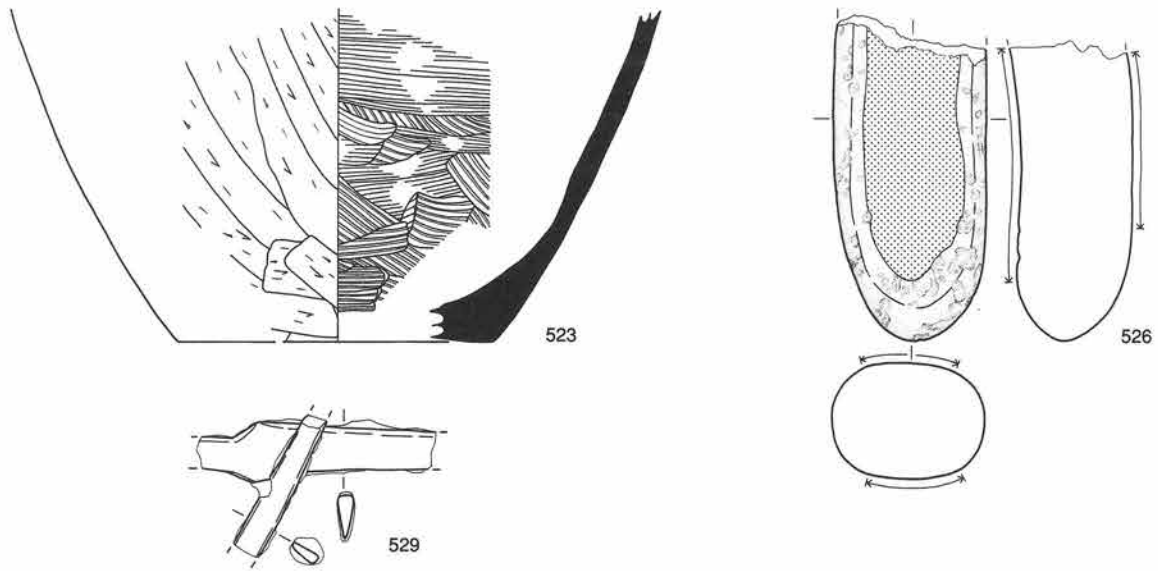
RA098 (36号住)



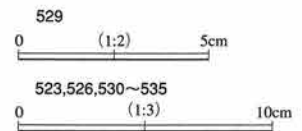
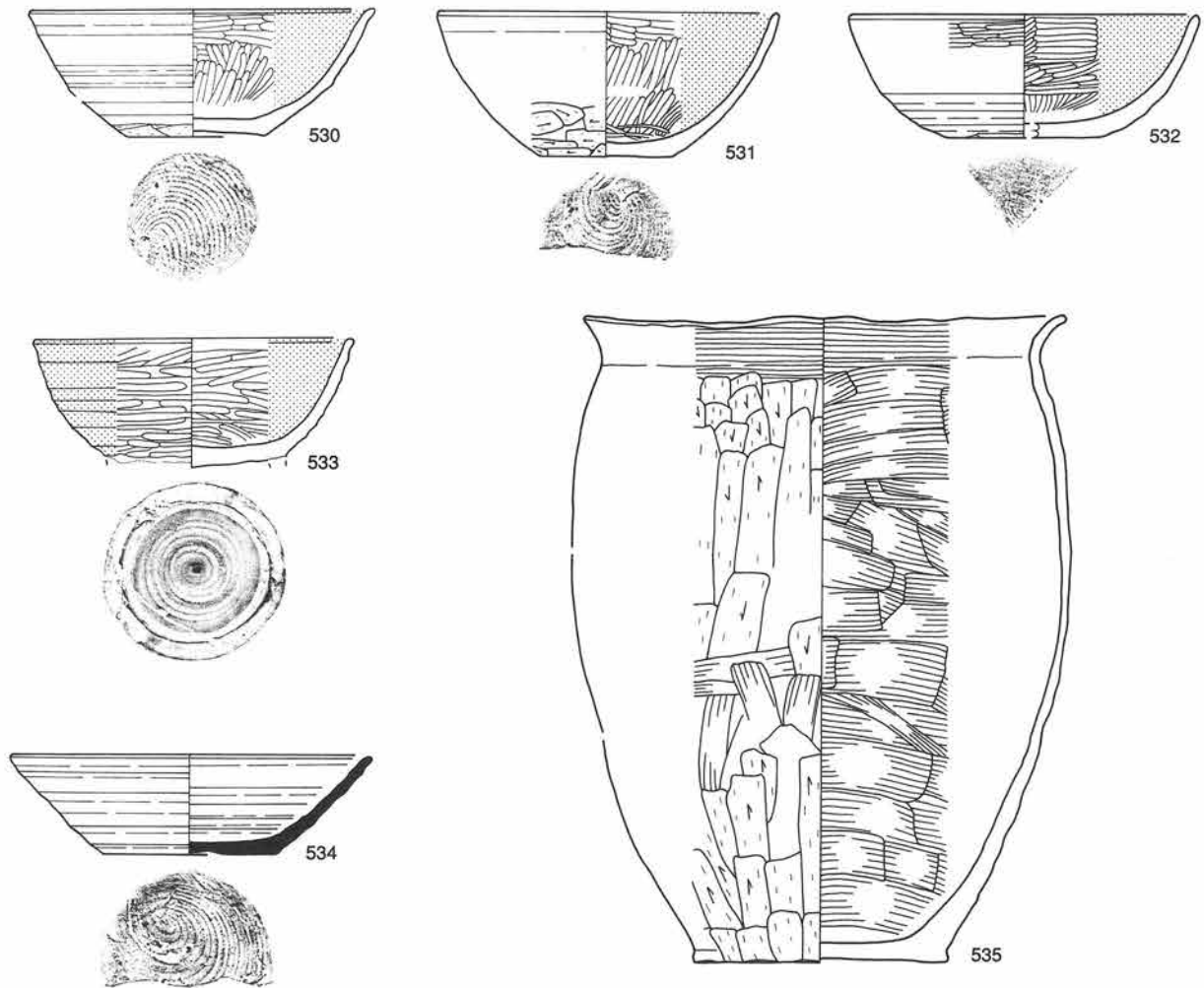
第195図 遺構内出土遺物 (51)



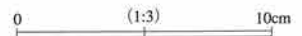
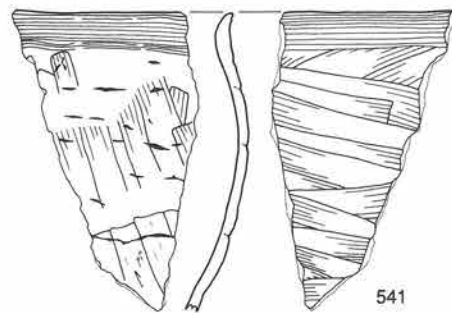
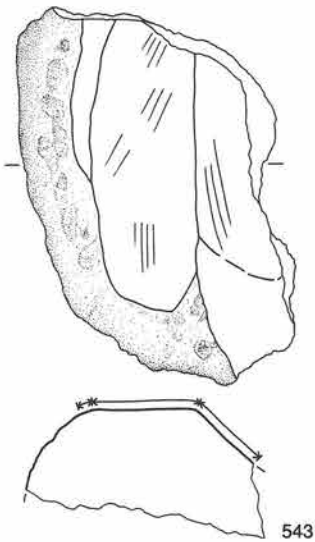
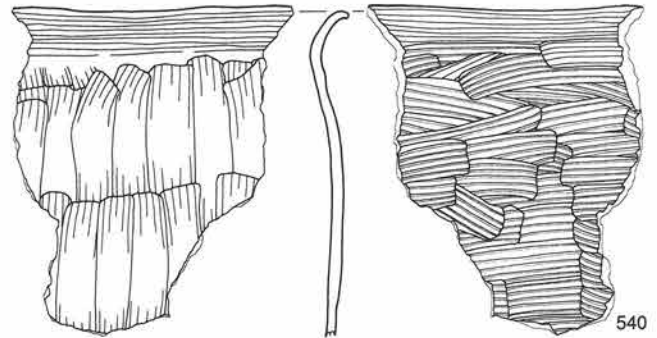
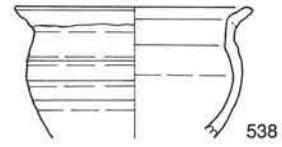
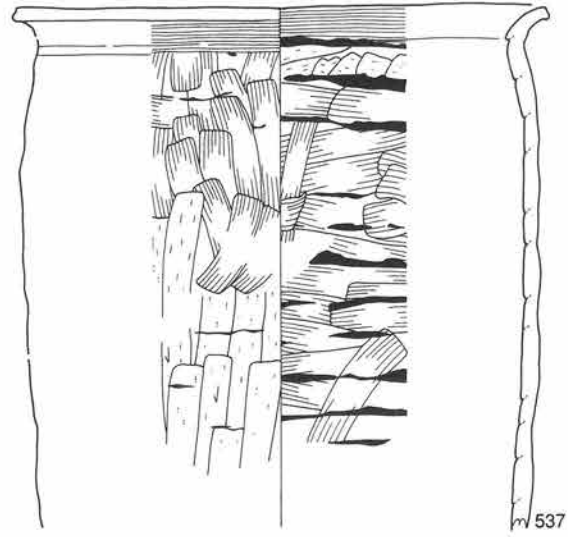
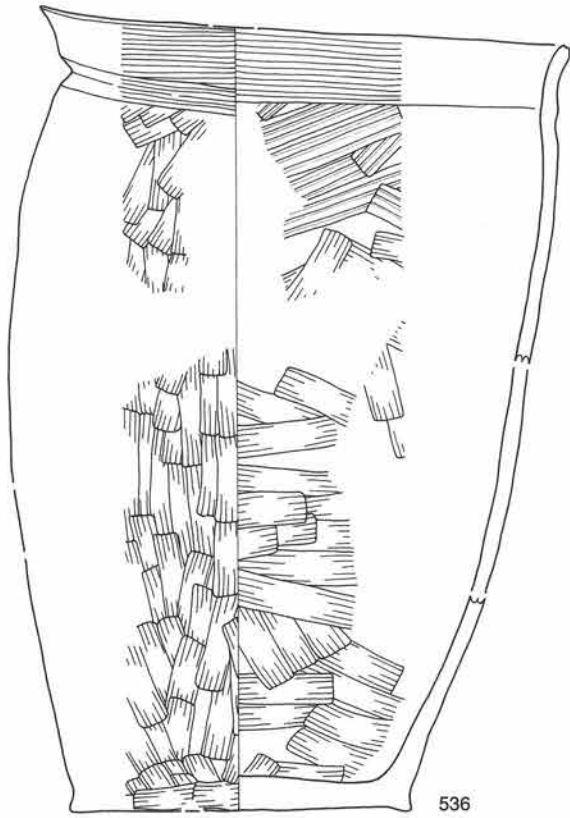
第196図 遺構内出土遺物 (52)



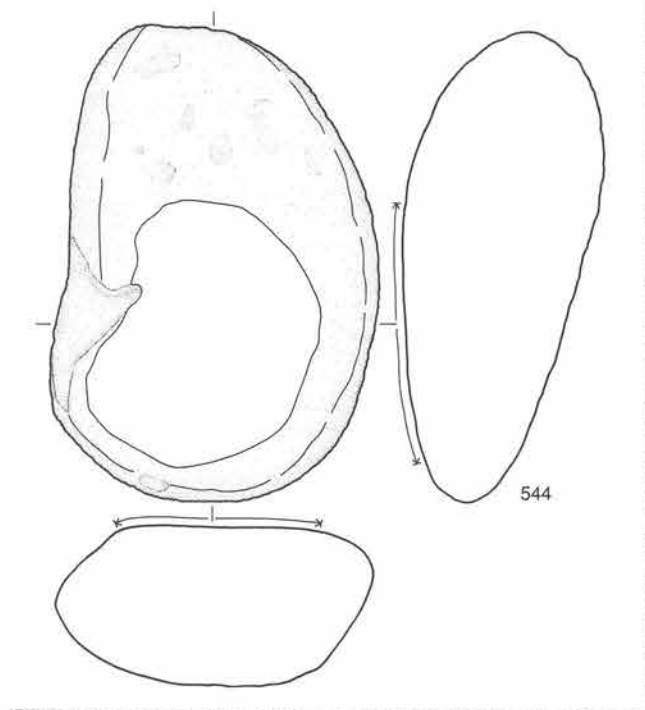
RA099 (28号住)



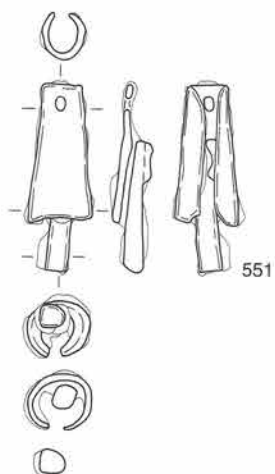
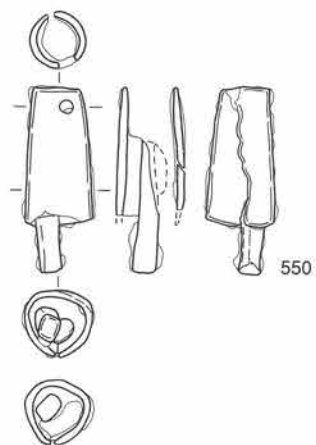
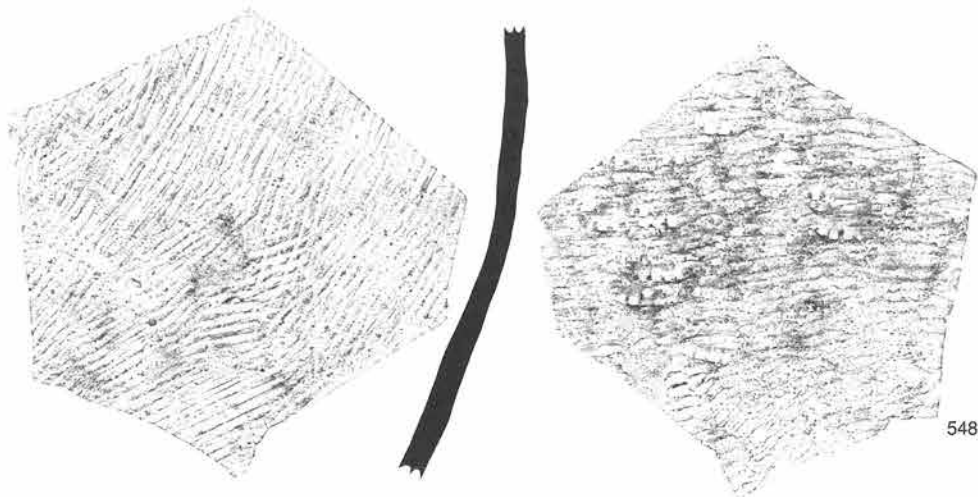
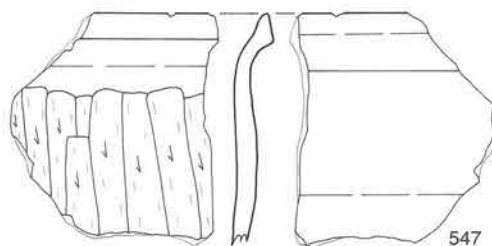
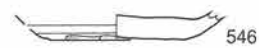
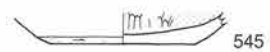
第197図 遺構内出土遺物 (53)



第198図 遺構内出土遺物 (54)



RA100 (26号住)

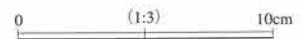
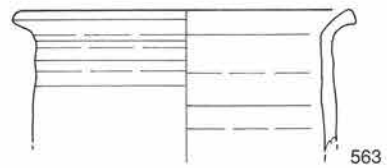
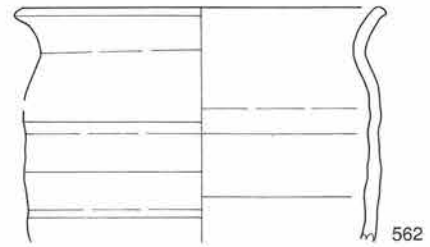
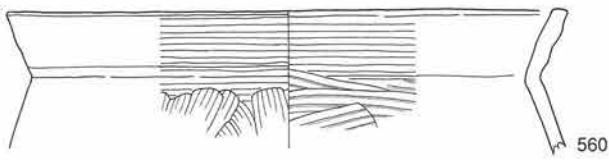
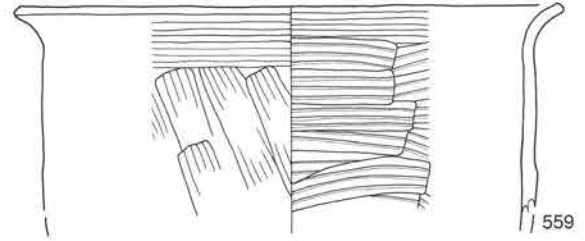
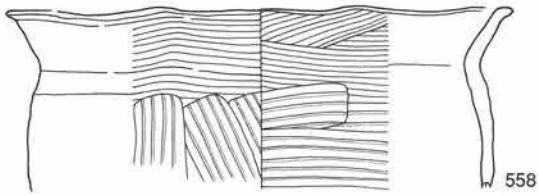
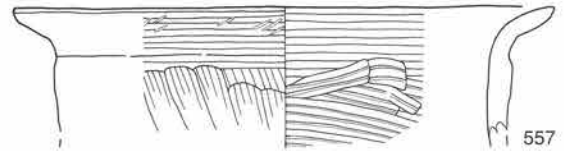
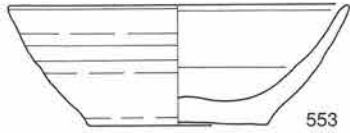
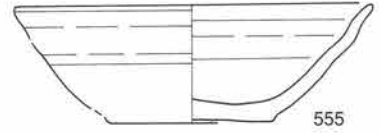


550,551
0 (1:2) 5cm

544~549
0 (1:3) 10cm

第199図 遺構内出土遺物 (55)

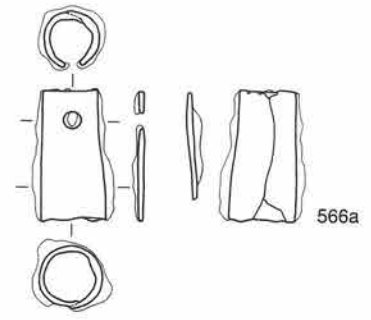
RA101 (39号住)



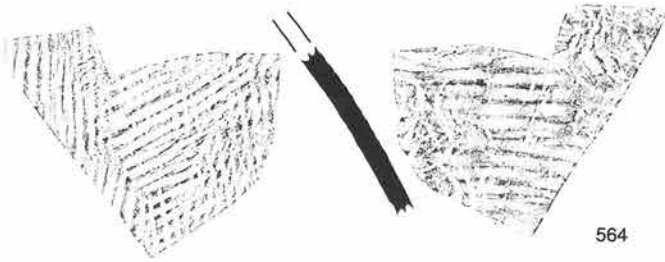
第200図 遺構内出土遺物 (56)



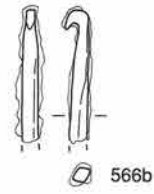
523



566a

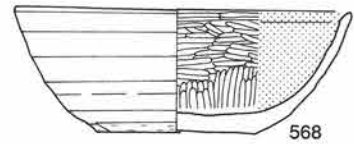


564

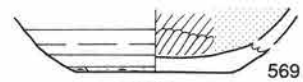


566b

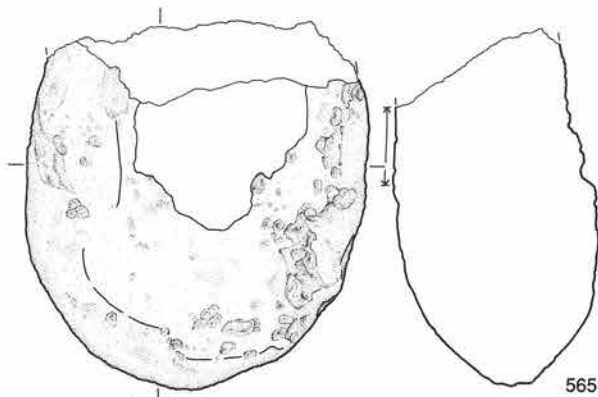
RA102 (27号住)



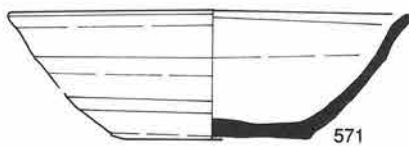
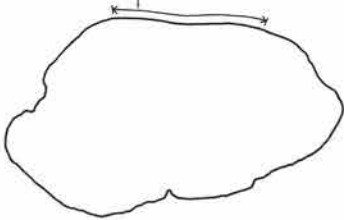
568



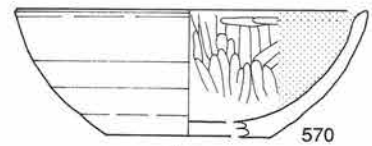
569



565



571



570

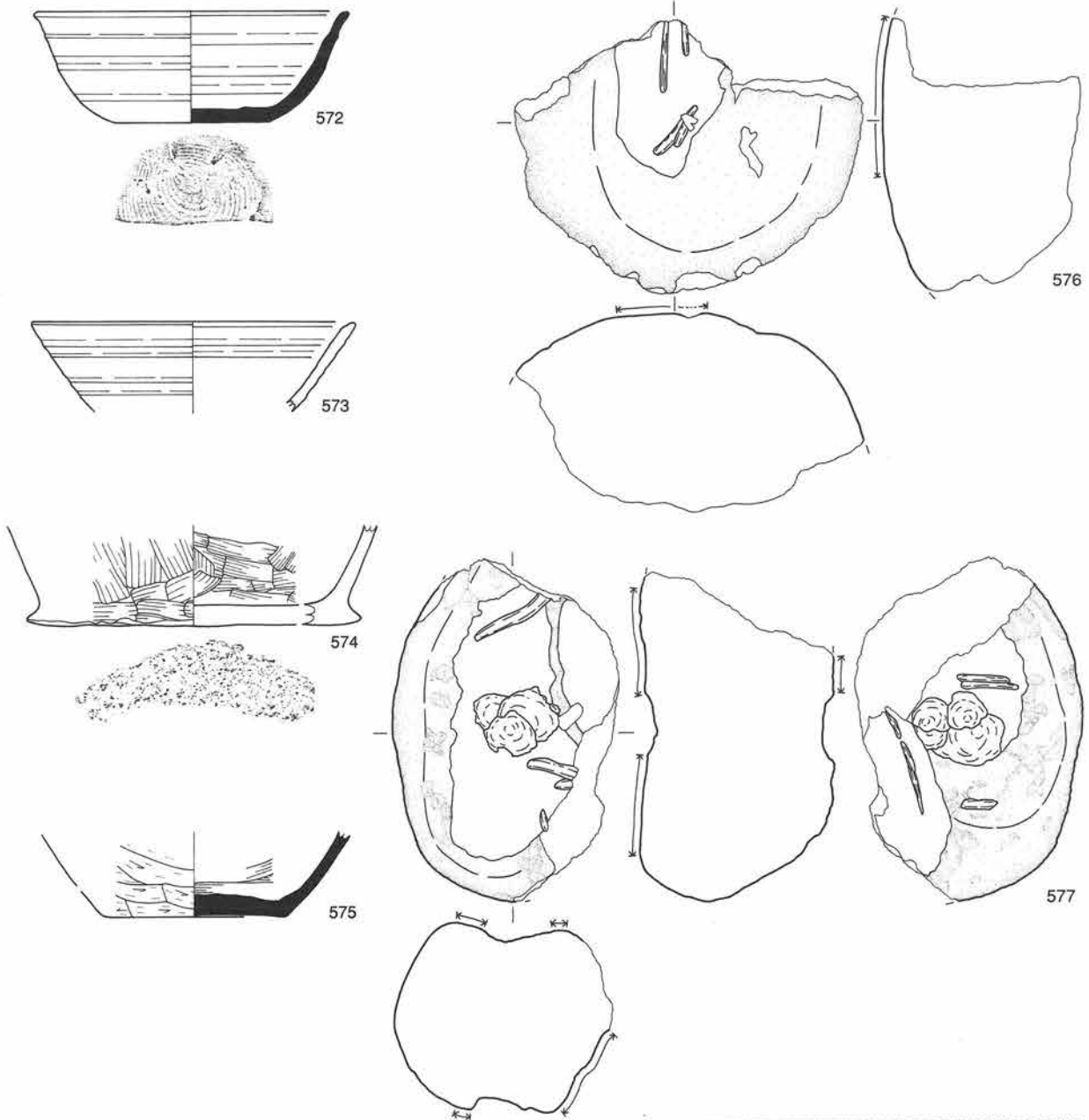


566a,b
0 (1:2) 5cm

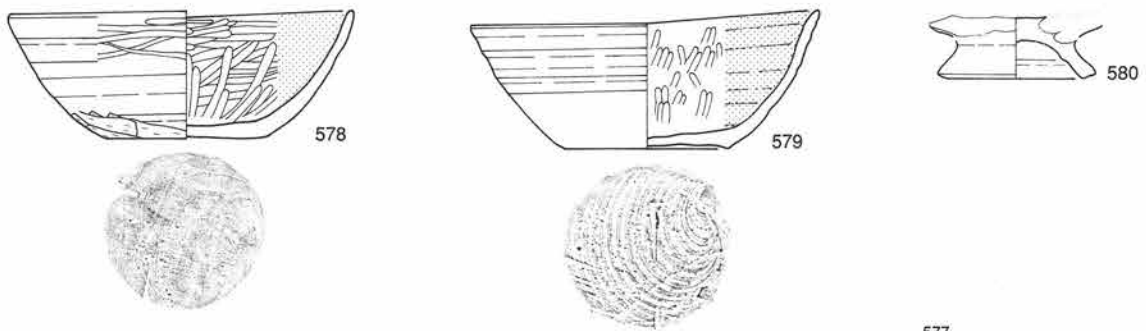
565
0 (1:4) 10cm

523,564,568~571
0 (1:3) 10cm

第201図 遺構内出土遺物 (57)



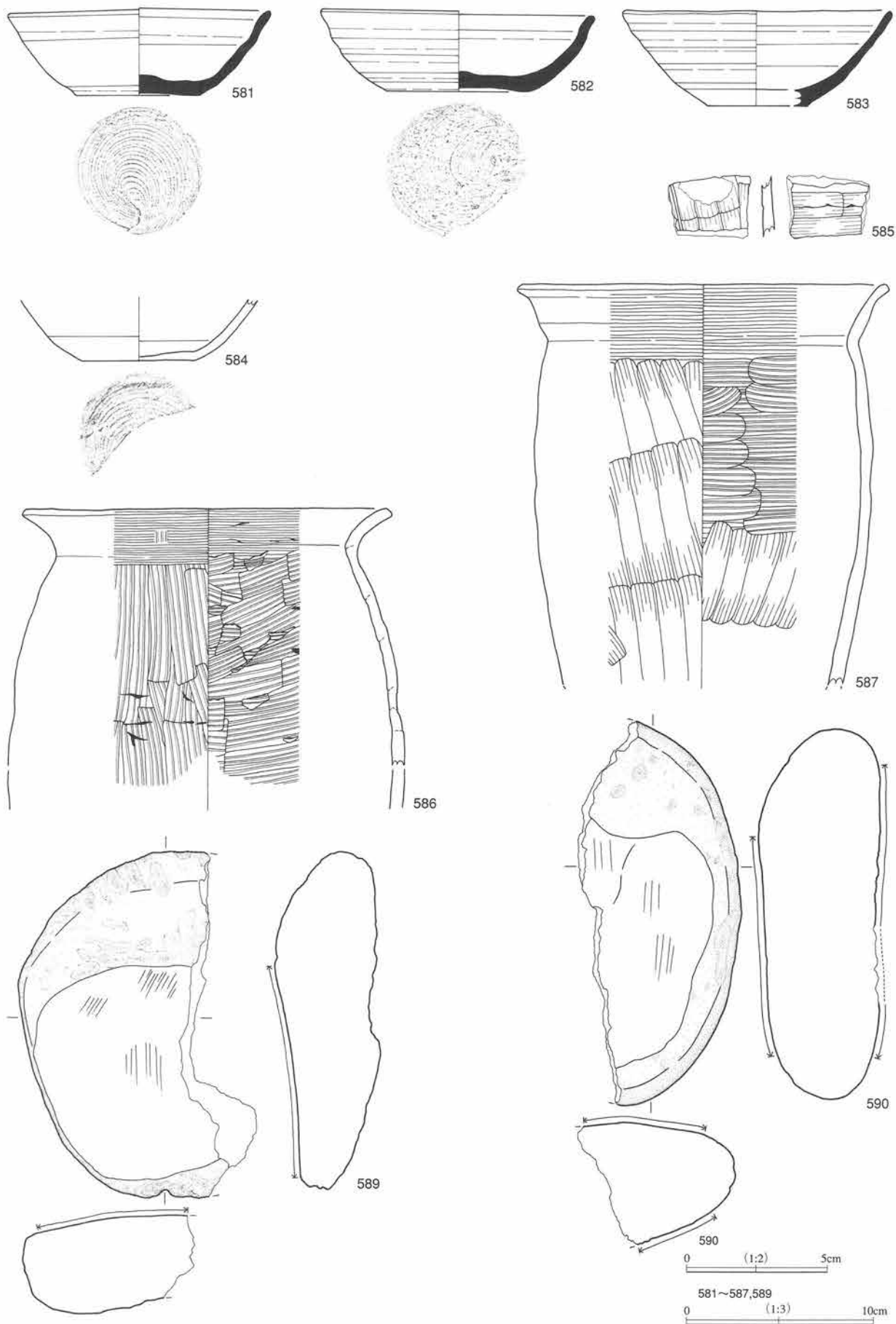
RA103 (40号住)



577
0 (1:4) 10cm

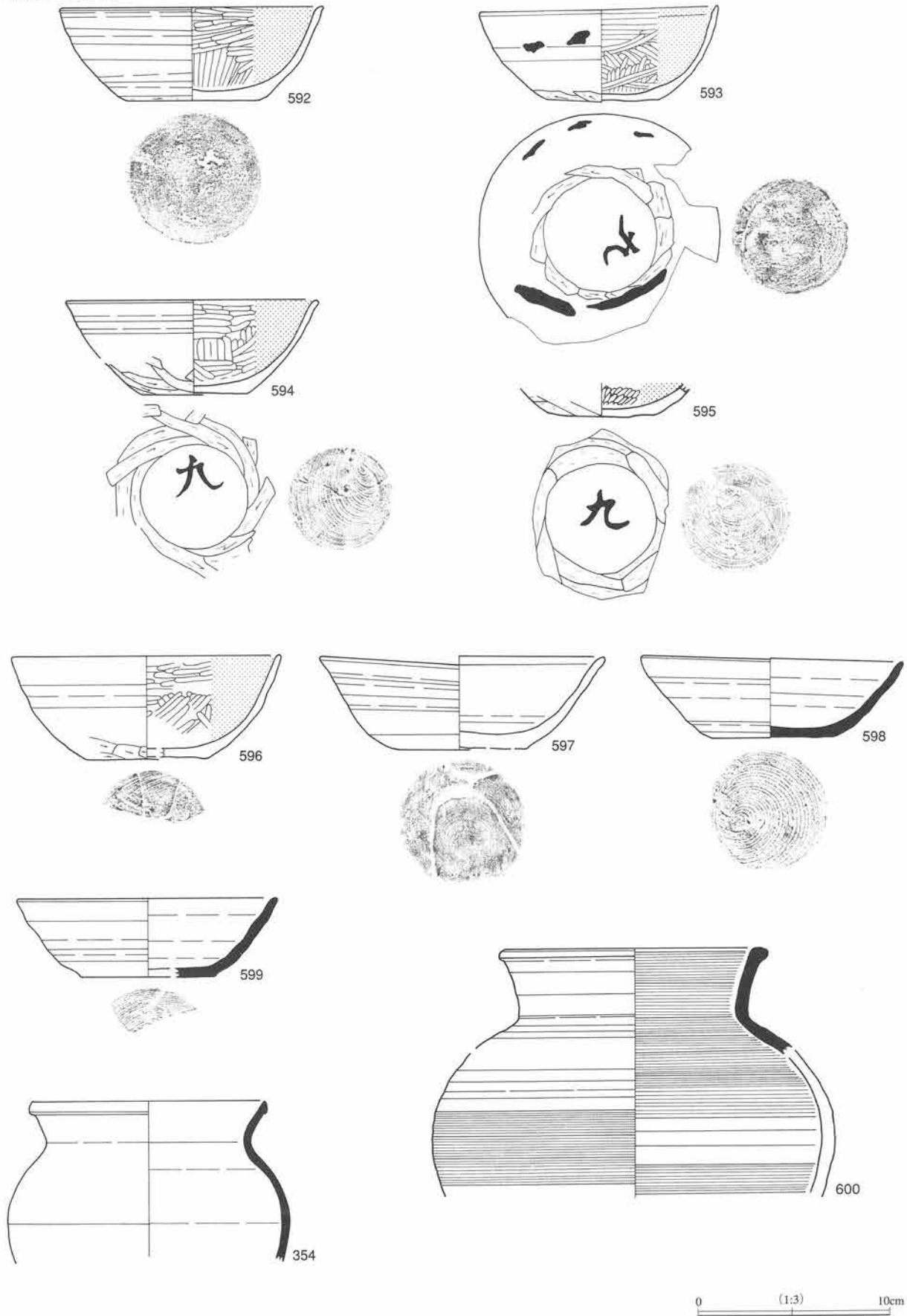
572~576, 578~580
0 (1:3) 10cm

第202図 遺構内出土遺物 (58)

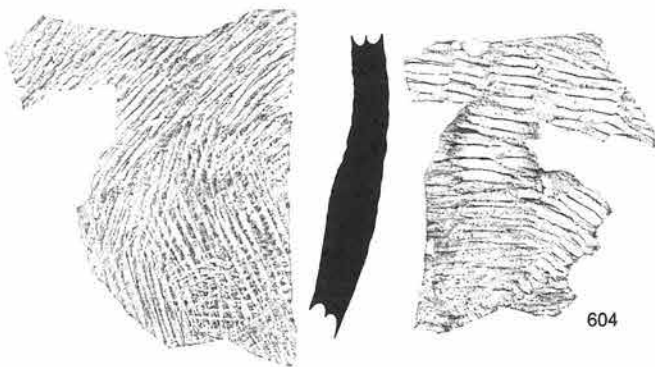
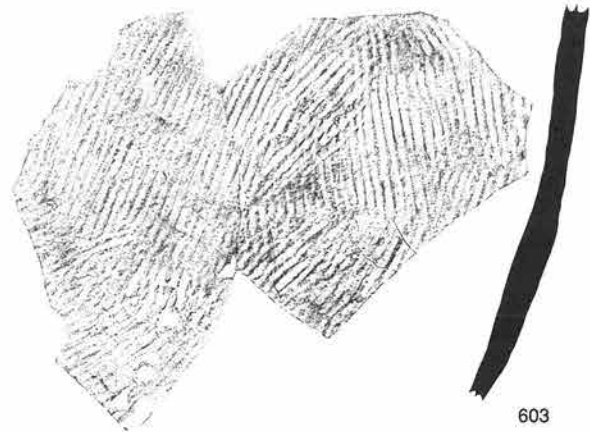
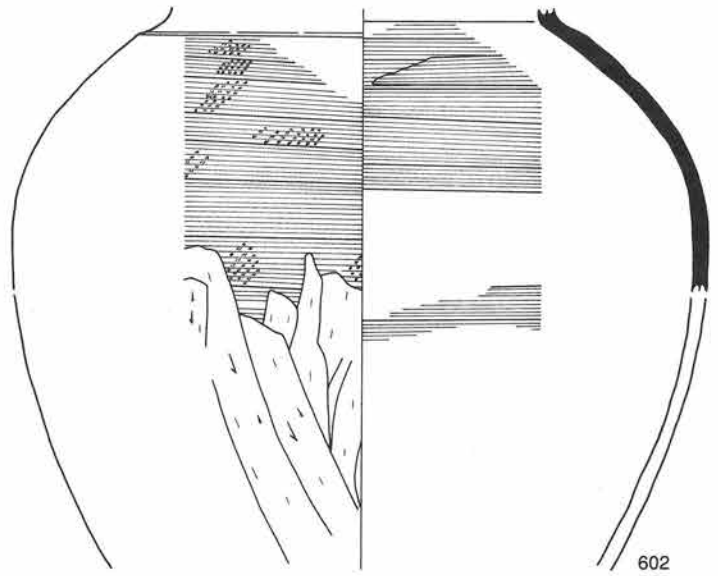
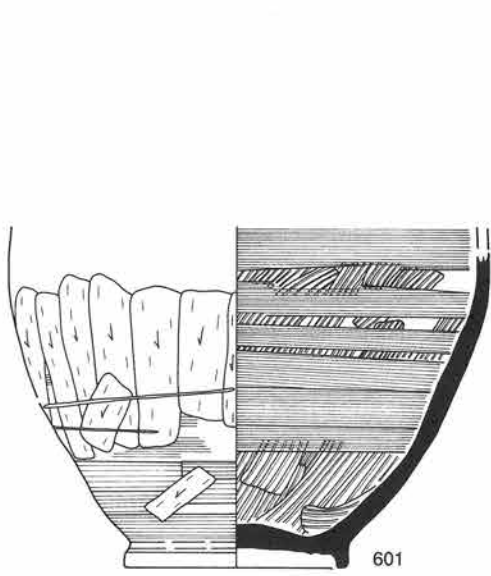


第203図 遺構内出土遺物 (59)

RA104 (22号住)



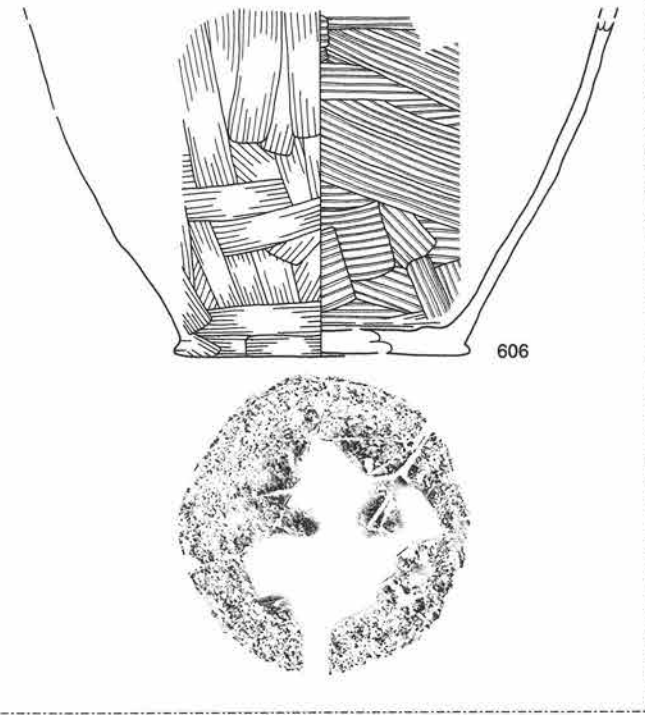
第204図 遺構内出土遺物 (60)



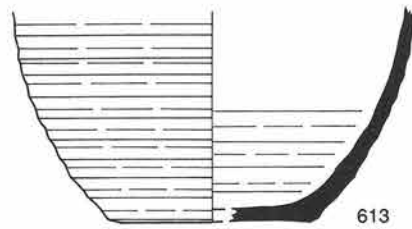
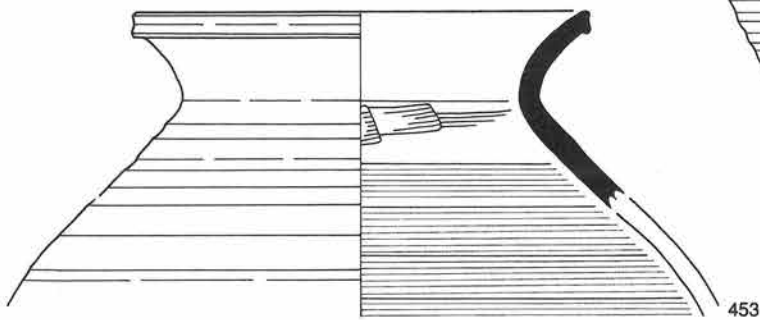
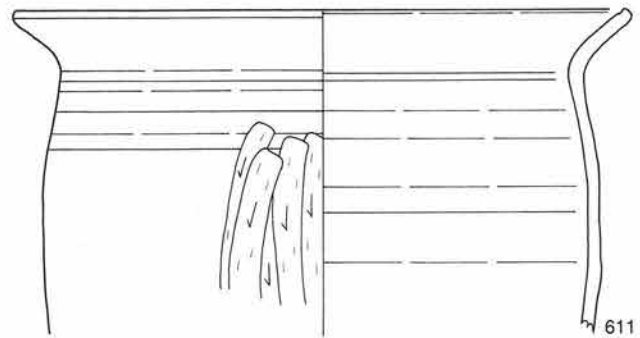
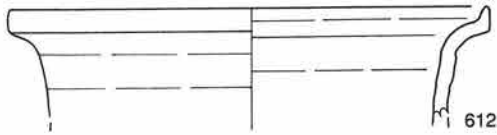
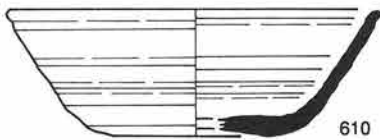
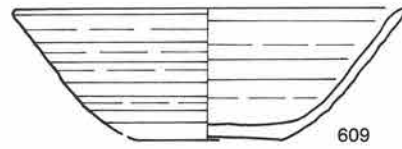
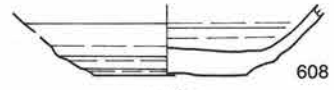
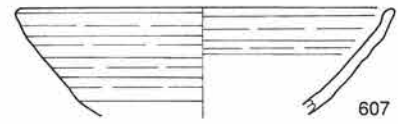
0 (1:3) 10cm

第205図 遺構内出土遺物 (61)

RA105 (41号住)

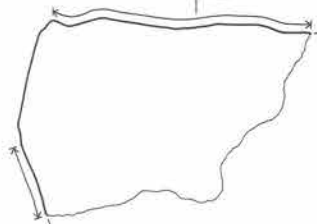
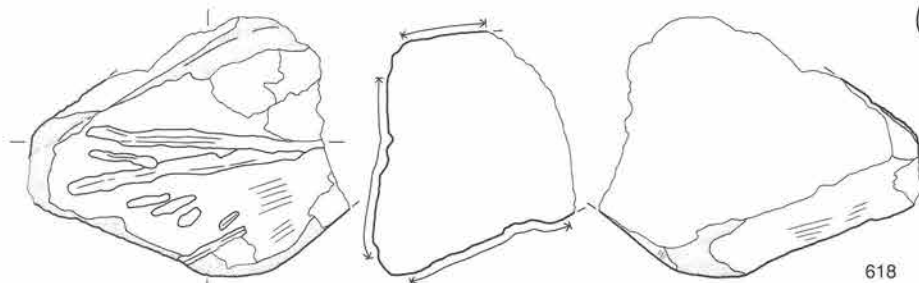
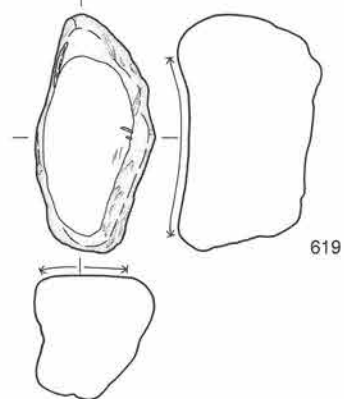
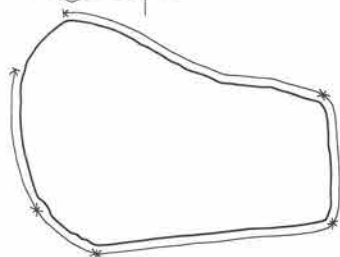
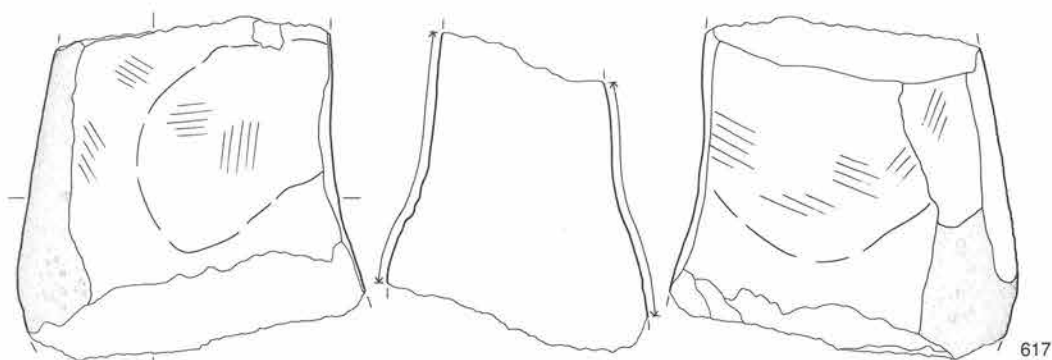
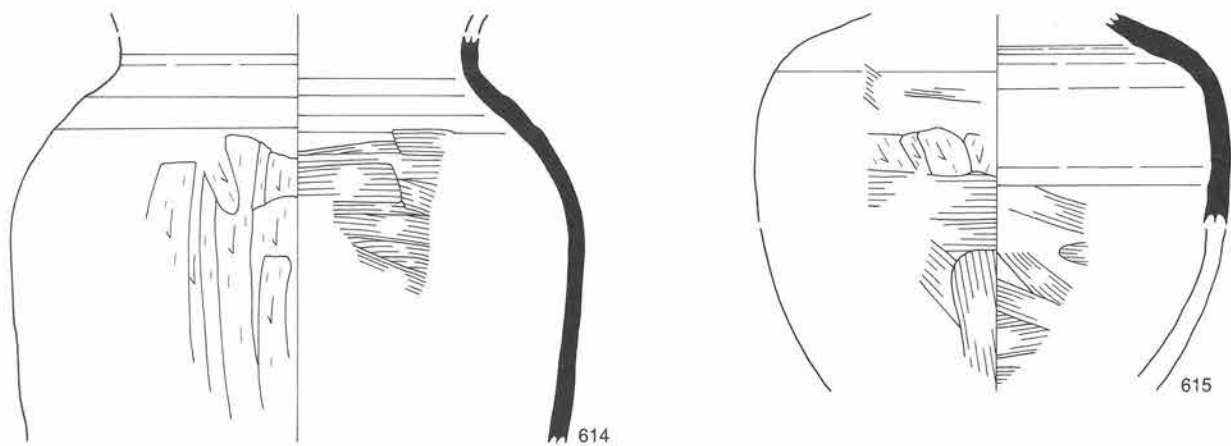


RA106 (42号住)



0 (1:3) 10cm

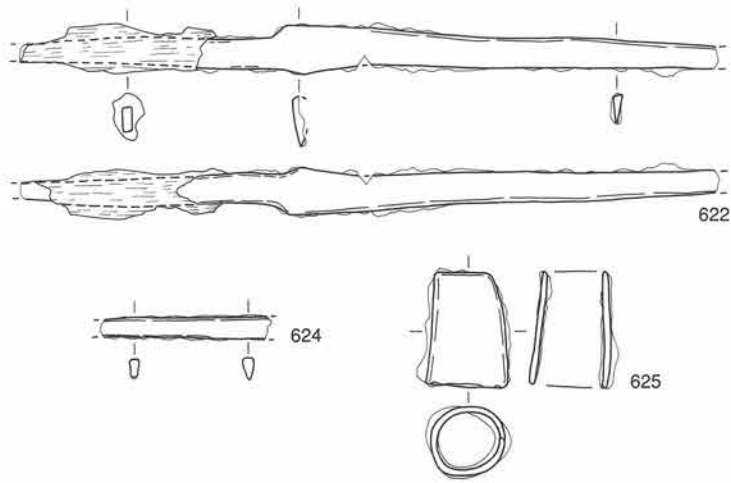
第206図 遺構内出土遺物 (62)



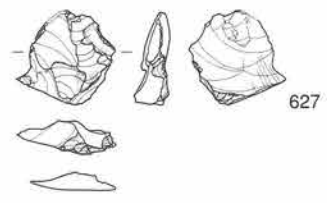
614, 615, 617~619
(1:3) 10cm

620, 621
(1:2) 5cm

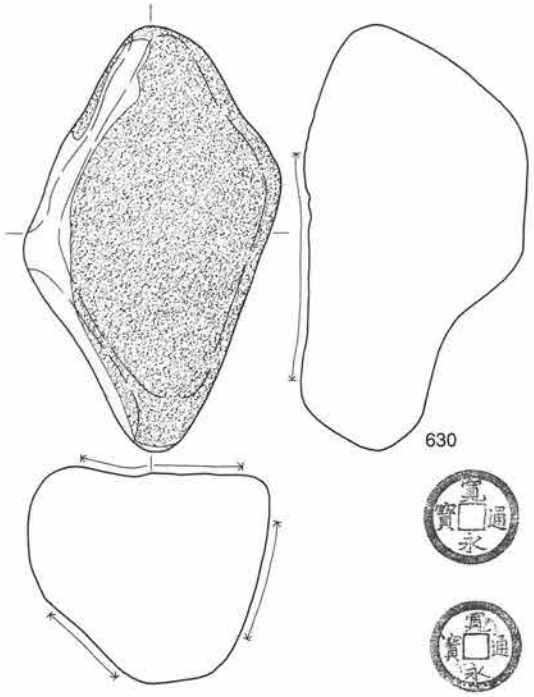
第207図 遺構内出土遺物 (63)



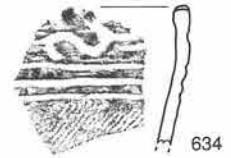
RA108 (44号住)



RB008 (2号掘立)



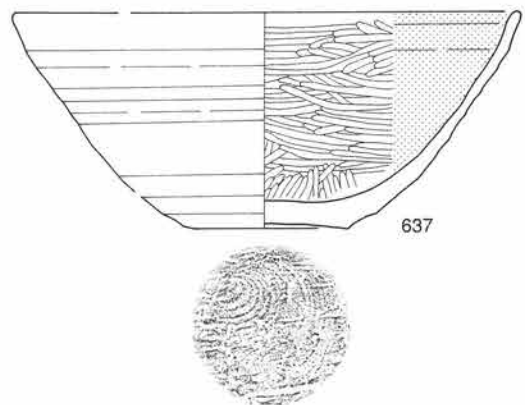
RD150 (18号土坑)



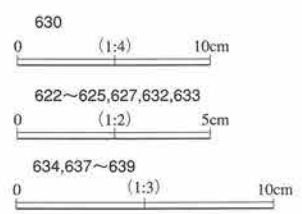
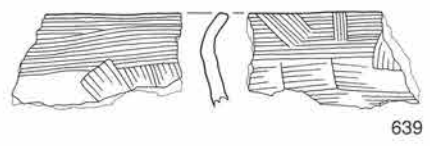
RD155 (7号焼土)



RD153 (4号土坑)

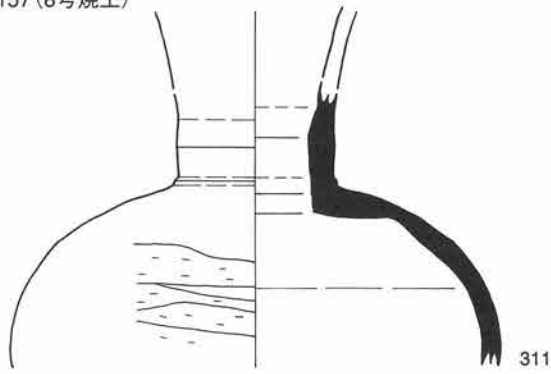


RD156 (67号土坑)

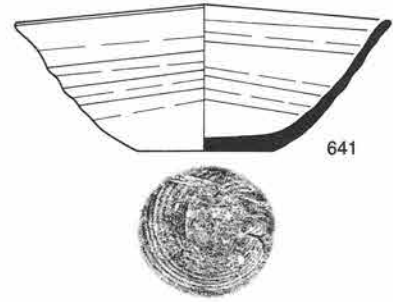


第208図 遺構内出土遺物 (64)

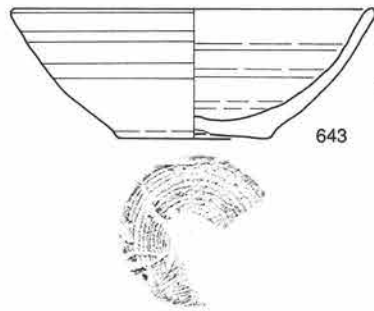
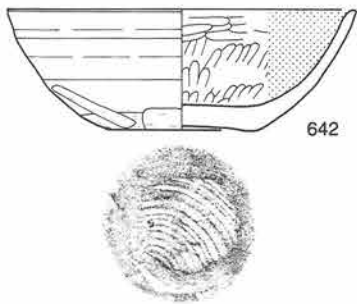
RD157 (8号烧土)



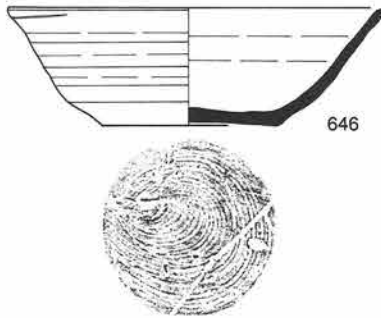
RD160 (11号烧土)



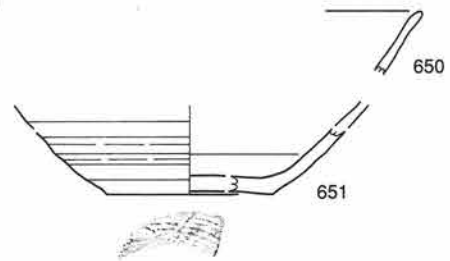
RD162 (55号土坑)



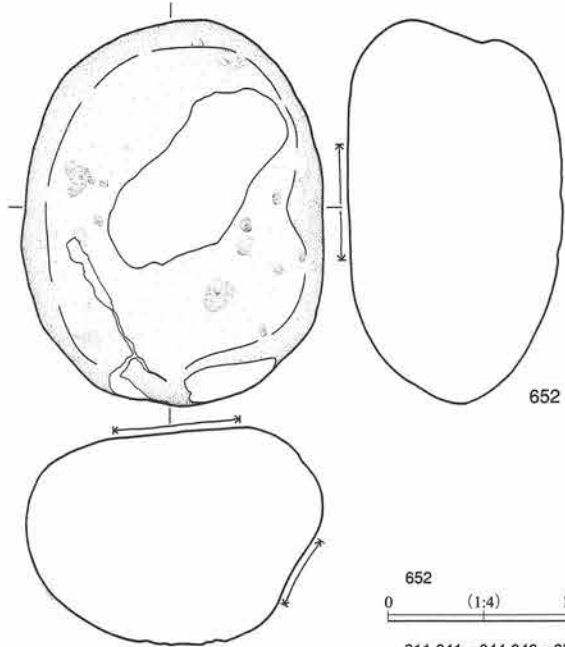
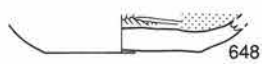
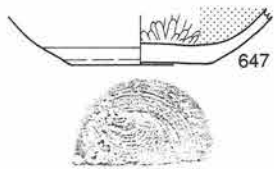
RD163 (26号土坑)



RD167 (22号土坑)



RD166 (51号土坑)



652
0 (1:4) 10cm

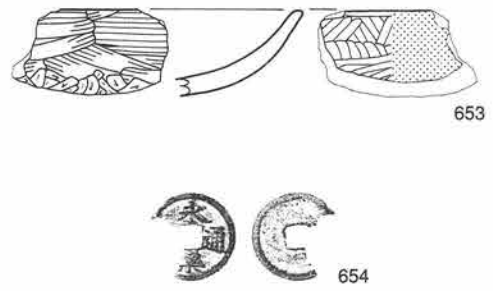
311,641~644,646~651
0 (1:3) 10cm

第209图 遺構内出土遺物 (65)

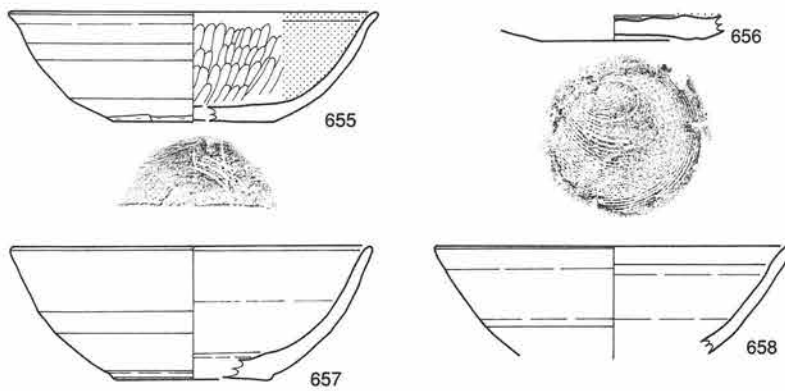
RD168 (11号土坑)



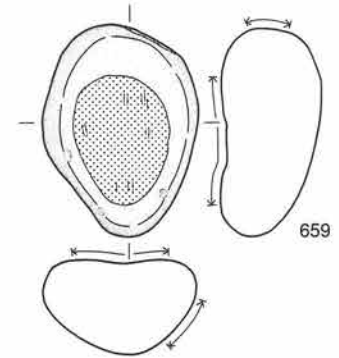
RD172 (60号土坑)



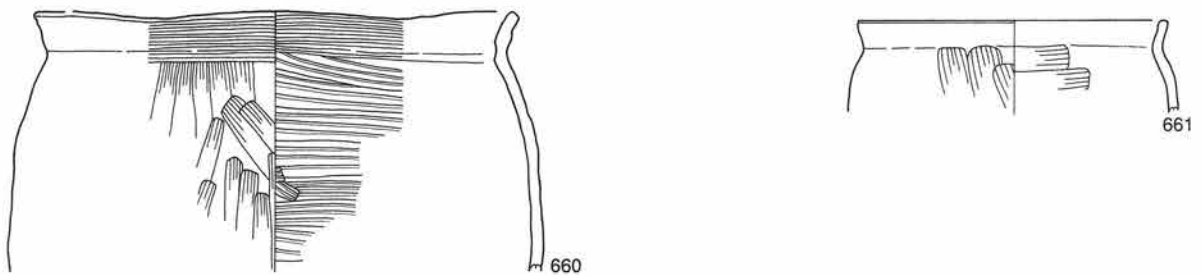
RD173 (63号土坑)



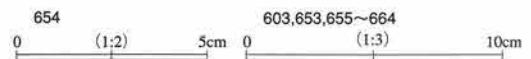
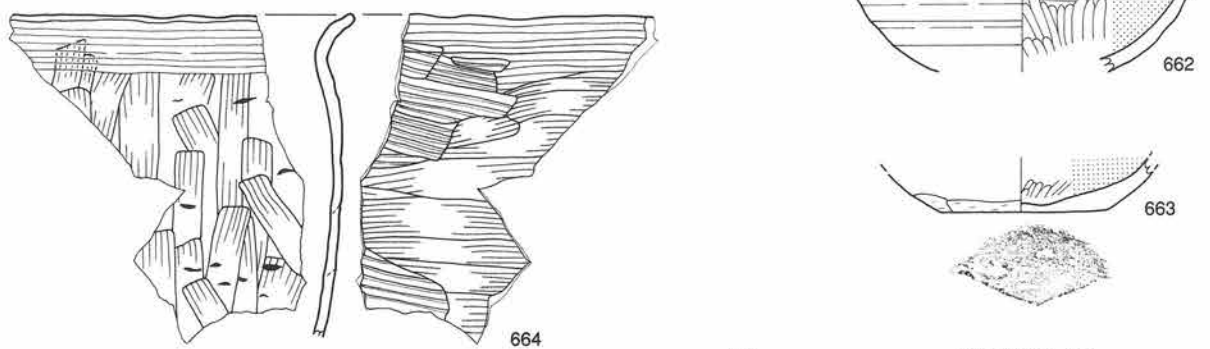
RD174 (45号土坑)



RD175 (64号土坑)

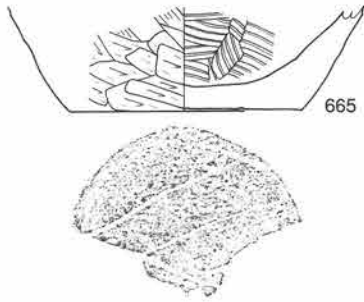


RD177 (65号土坑)

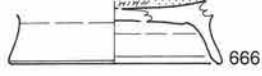


第210図 遺構内出土遺物 (66)

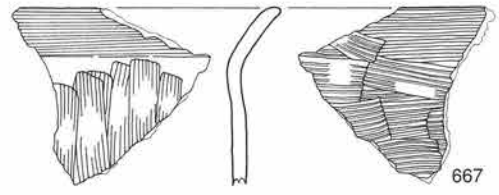
RD181 (42号土坑)



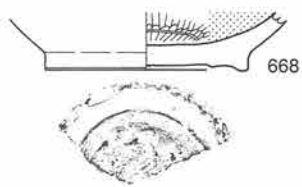
RD182 (43号土坑)



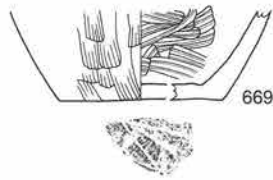
RD188 (53号土坑)



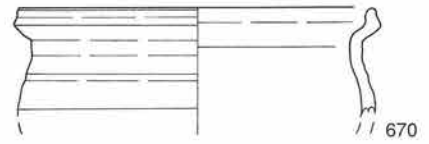
RD195 (25号土坑)



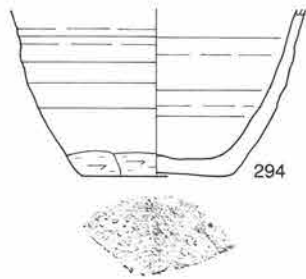
RD196 (73号土坑)



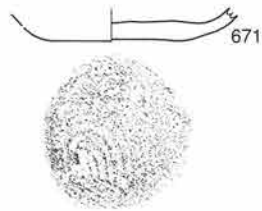
RD197 (6号土坑)



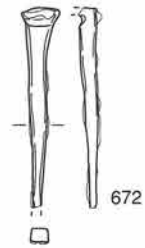
RD198 (16号土坑)



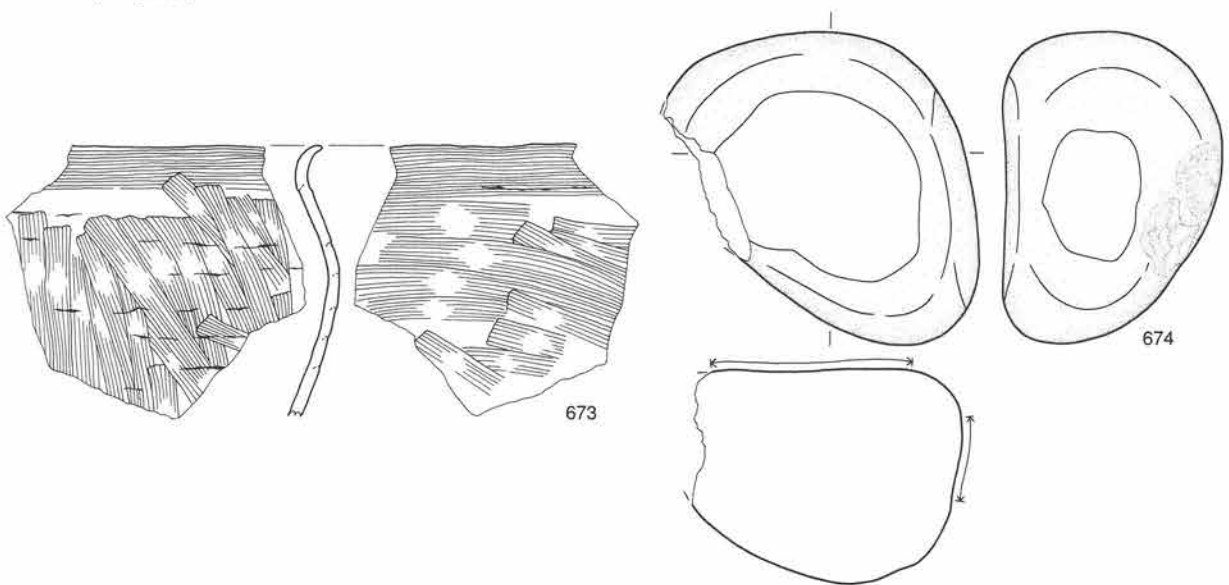
RD199 (5号土坑)



RD200 (19号土坑)



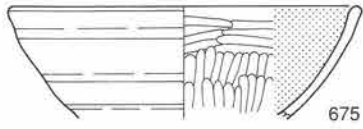
RD202 (72号土坑)



665~671,673,674,294 (1:3) 10cm
672 (1:2) 5cm

第211图 遺構内出土遺物 (67)

RD205 (31号土坑)



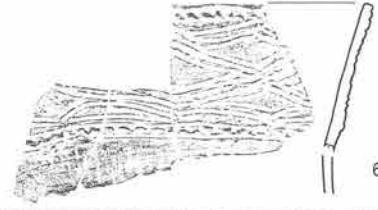
675

RD223 (1号墓墳)



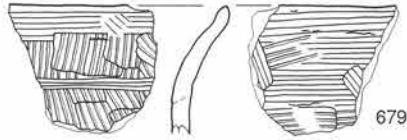
677

RF004 (9号焼土)



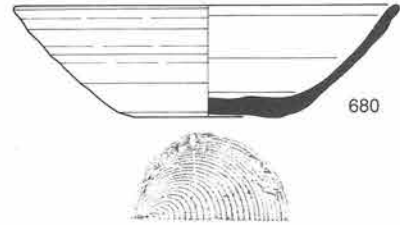
678

RG022 (21号溝)



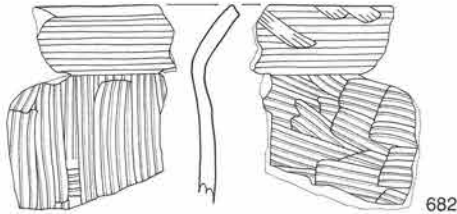
679

RG023 (1号溝)



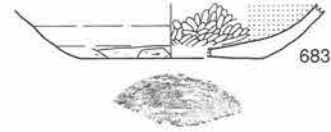
680

RG025 (3号溝)

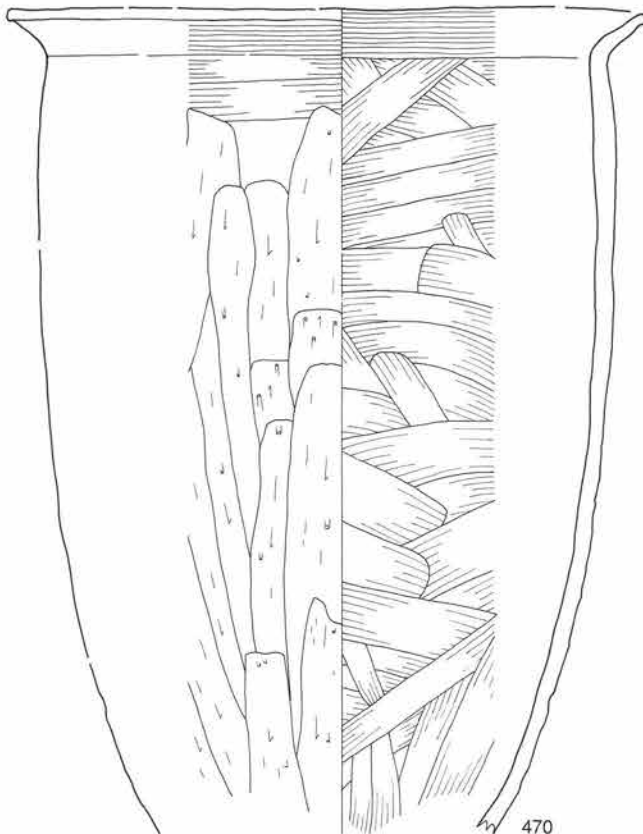


682

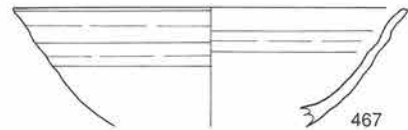
RG028 (7号溝)



683



470



467



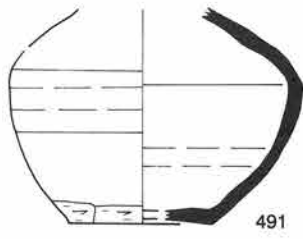
468



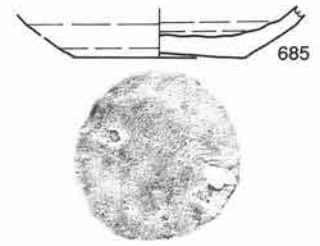
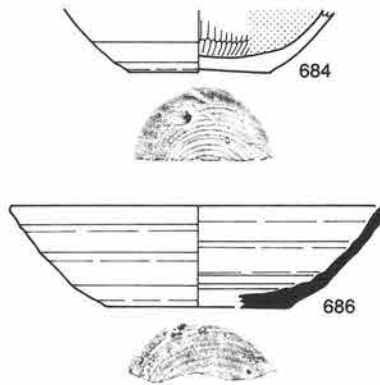
677 (1:2) 5cm 0 (1:3) 10cm
467, 468, 470, 675, 678~680, 682, 683

第212図 遺構内出土遺物 (68)

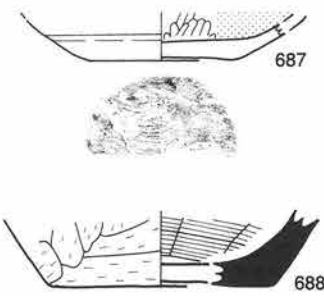
RG029 (5号溝)



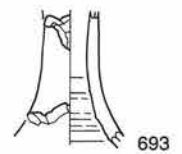
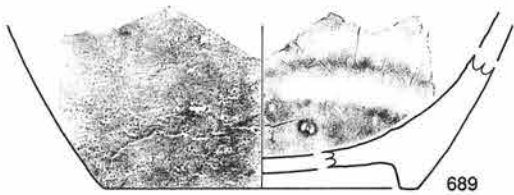
RG030 (18号溝)



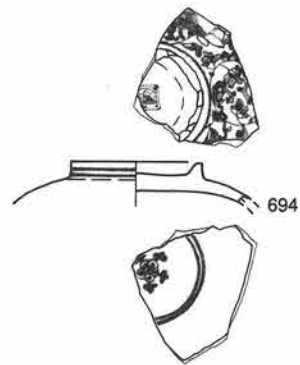
RG032 (6号溝)



RG039 (13号溝)



RZ011 (1号不明遺構)



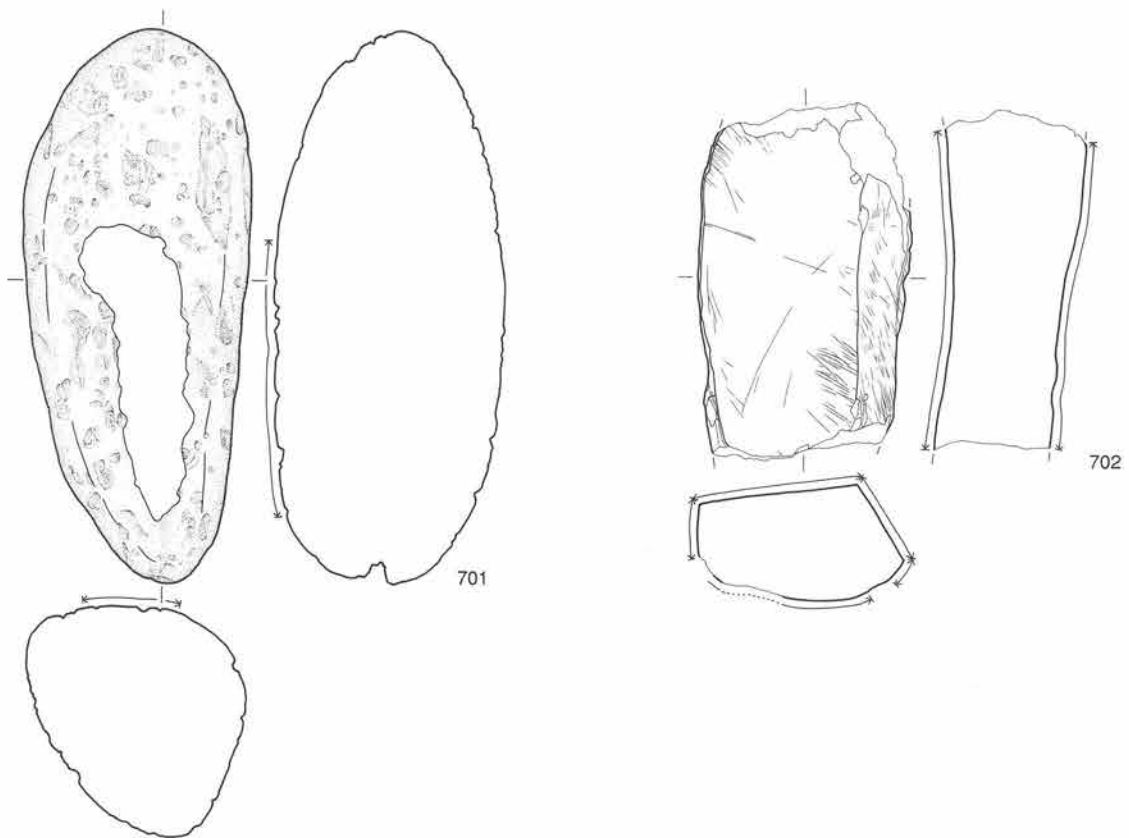
0 (1:3) 10cm

第213図 遺構内出土遺物 (69)

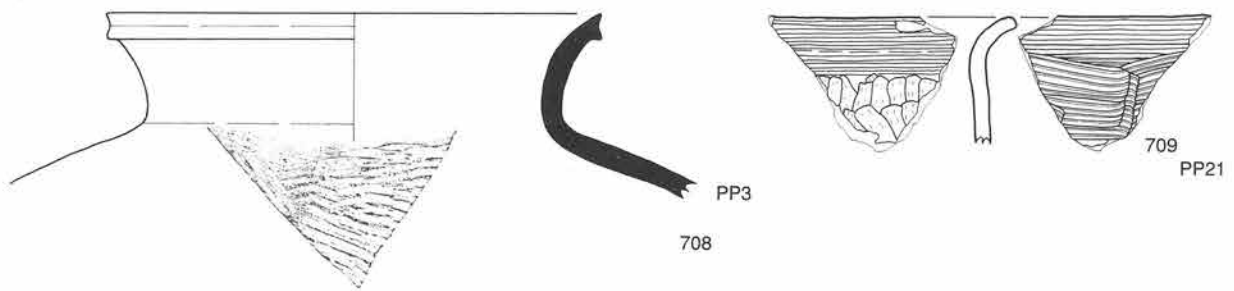
RZ012 (2号不明)



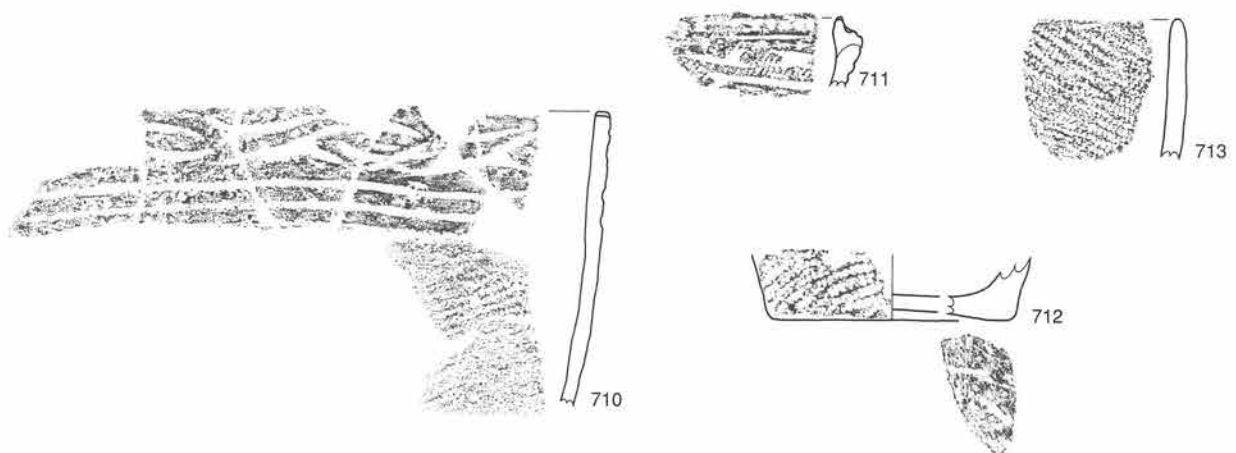
第214図 遺構内出土遺物 (70)



柱穴

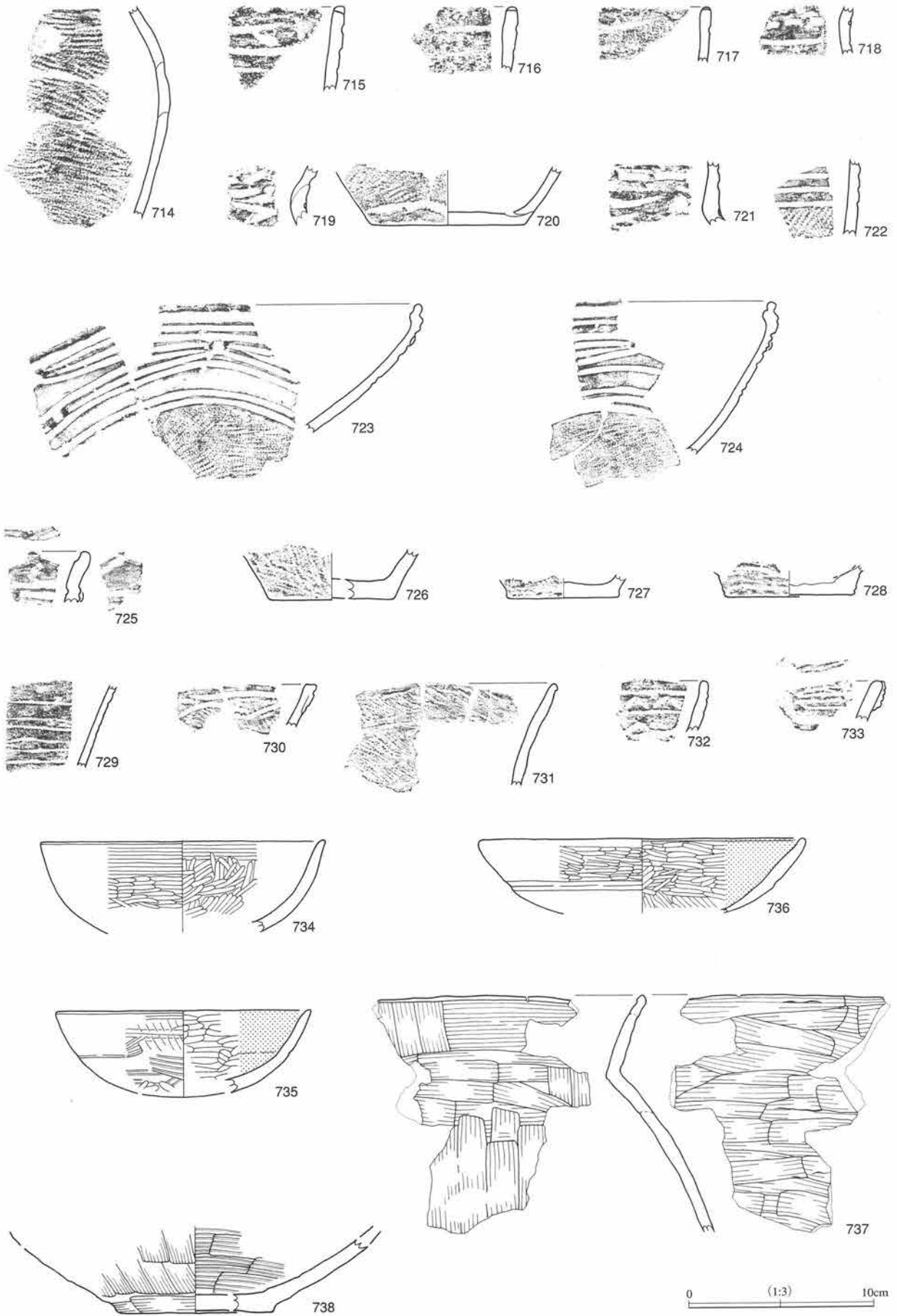


遺構外

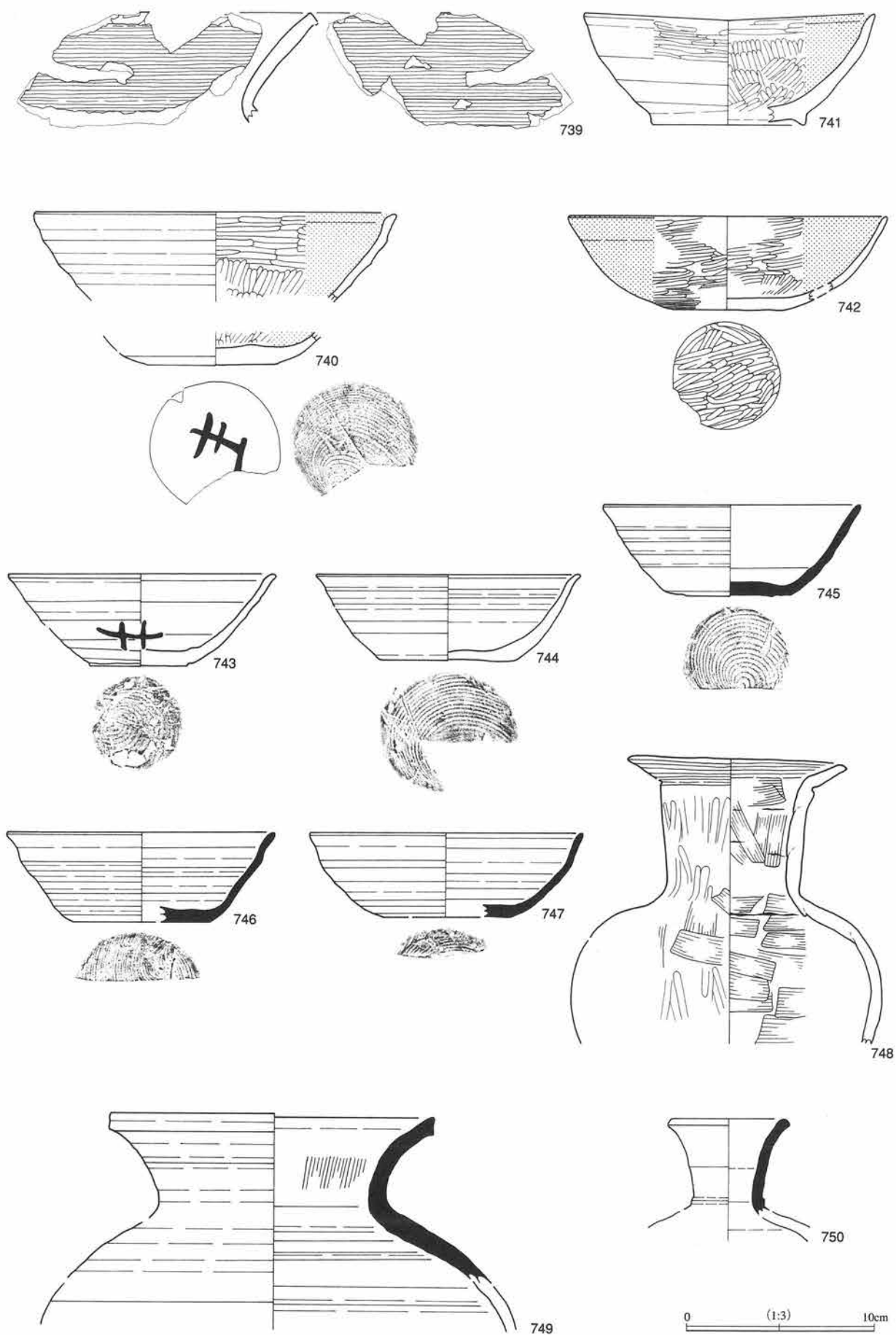


702,708~713 (1:3) 0 10cm
701 (1:2) 0 5cm

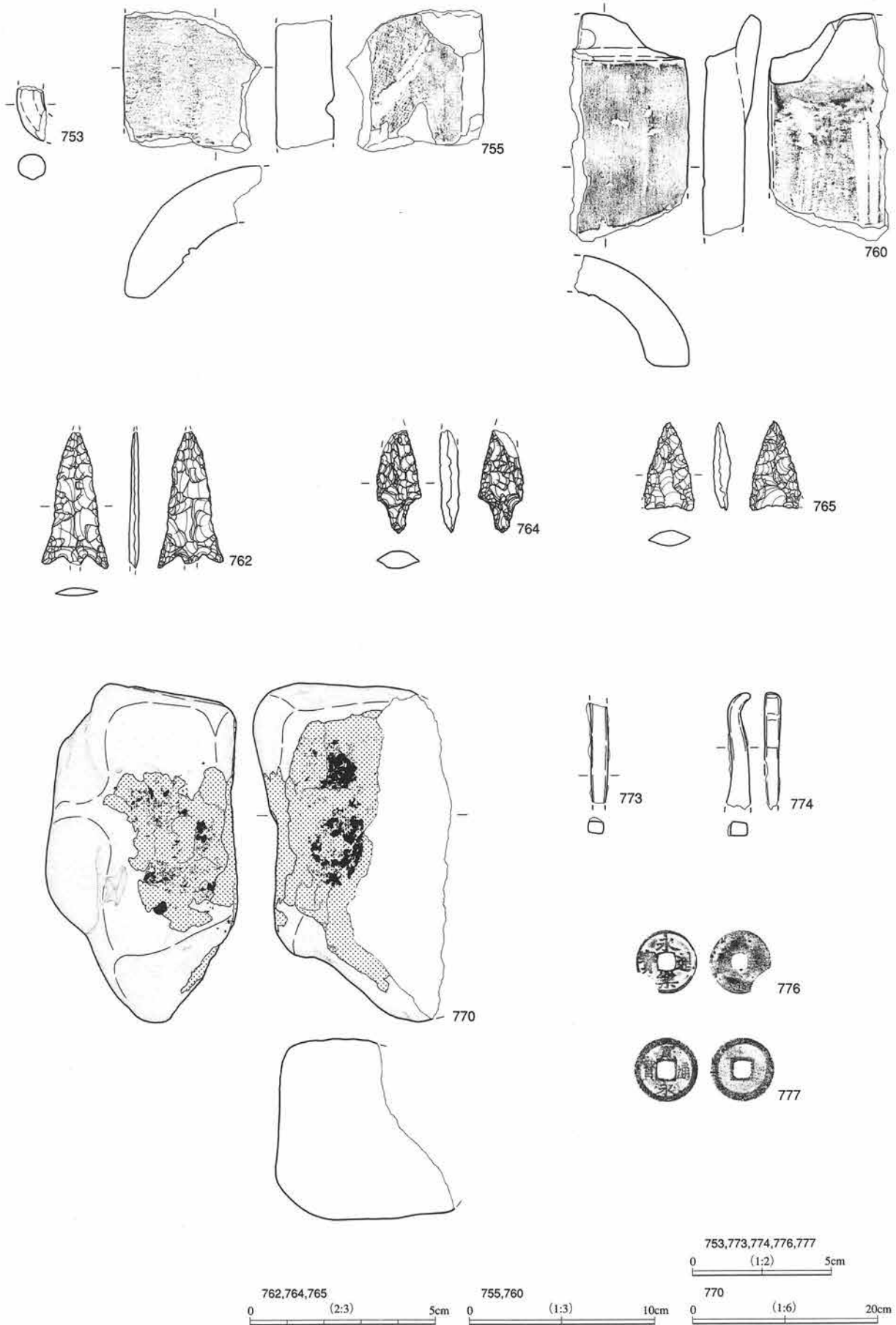
第215図 遺構内出土遺物 (71) ・遺構外出土遺物 (1)



第216図 遺構外出土遺物 (2)



第217図 遺構外出土遺物 (3)



第218図 遺構外出土遺物 (4)

第8表 土器観察表1 縄文土器

掲載番号	出土地点・層位	器種	部位	法量				文様	型式	炭化物		残存率		付着物	調査回数
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)			内面	外面	口縁部	底部		
1	RA052・土器埋設炉	深鉢	口縁部	35.6	9.5	49.2	0.8	RL	大洞B2式	胴部下位に帯状	—	15/24	24/24	—	10
2	RA052・検出面	深鉢	口縁部	—	—	(8.1)	0.7	縄文部摩滅	大洞B2式	—	—	1/24	—	—	10
3	RA052・Q3No2	深鉢	口縁部	—	—	(9.8)	0.7	LR	大洞B2式	—	—	1/24	—	—	10
4	RA052・Q1・1層上層、Q2上層、4N23aⅡb層	深鉢	胴部	—	—	(14.7)	0.6	LR	大洞B2式	—	胴部に部分的	—	—	—	10
5	RA052・3層、Q3No2、第2トレンチⅡ層	鉢	口縁部	12.0	—	(11.1)	0.4	LR・補修孔あり		—	—	5/24	—	—	10
6	RA052・No1	鉢	完形	15.5	6.4	18.8	0.5	RL	大洞B2式	口縁部～胴部中に部分的に帯状	口縁部に部分的	2/24	24/24	—	10
7	RA052・土器埋設炉③	深鉢	口縁部	—	—	(4.0)	0.5		大洞B2式	—	—	1/24	—	—	10
8	RA052・検出面	壺	口縁部	—	—	(2.2)	0.5	LR		—	—	1/24	—	—	10
634	RD150・埋土	鉢	口縁部	—	—	(5.6)	0.5	LR		—	—	1/24	—	—	9
710	RA057・Q3トレンチ、Q3・2層、Q1南ベルト、Q4・2層	深鉢	口縁部	36.0	—	(11.7)	0.6	LR		—	—	4/24	—	—	10
711	RA071・カマド周辺2層	台付鉢	口縁部	—	—	(2.2)	0.6	LR		—	—	1/24	—	—	10
712	RA078・Q1・4層	深鉢	底部	—	9.4	(2.6)	0.7	LR・底面木葉痕	—	—	—	—	5/24	—	9
713	RA087・Q2埋土上層	深鉢	口縁部	—	—	(5.6)	0.7	RL	—	—	—	1/24	—	—	10
714	RA088・Q3埋土、RA087・Q4埋土、RA080Q4ベルト2層	壺	胴部	—	—	(11.5)	0.6	LR		—	—	—	—	—	10
715	RA095・Q3上層	深鉢	口縁部	—	—	(4.6)	0.6			—	—	2/24	—	—	10
716	RG029、RA096トレンチ	深鉢	口縁部	—	—	(4.6)	0.6			—	—	2/24	—	—	10
717	RG029、RA096トレンチ	深鉢	口縁部	—	—	(4.6)	0.6			—	—	2/24	—	—	10
718	4N・Ⅱ層	鉢	胴部	—	—	(2.6)	0.5	列点文		—	—	—	—	—	10
719	4N23j Ⅱb層上面	鉢	胴部	—	—	(3.2)	0.6	列点文		—	—	—	—	—	10
720	4N24f南撓乱・Ⅲ層上面	深鉢	底部	—	8.2	(3.0)	0.5	LR	—	—	—	—	13/24	—	10
721	4N～5N～5O・市トレンチ	鉢	胴部	—	—	(3.6)	0.6	列点文		—	—	—	—	—	10
722	5N・Ⅲ層撓乱	深鉢	胴部	—	—	(4.2)	0.6	LR		—	—	—	—	—	10

第9表 土器観察表2 弥生土器

No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (文様・装飾、地文・原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載
678	RF004周辺	深鉢・口縁	沈線粘土まくれ痕、切り合い明確・交互刺突文・頸：RLナナメ→ナデで消え	ナデ・粘土まくれ痕	外面スス付着	
723	RA077Q4南ベルト・1層	浅鉢1/4周以下	粘土粒貼付・ミガキ・LRイロイロ	水平沈線・ミガキ	内外黒斑	
724	RA078Q2・6層、床面、撓乱埋土	浅鉢	粘土粒貼付・ミガキ・LRヨコ	水平沈線・ミガキ	胎土金雲母少し	
725	RA076Q1・埋土	浅鉢・口縁	二又突起挟んで口唇沈線・粘土粒貼付・やや摩耗	2本沈線・ミガキ?	口内沈線、水平と突起に向かう	
726	4N・Ⅱ層	底部1/3周	ゆるいRLイロイロ・底面丁寧なナデ	ナデ		
727	RD205・2層	鉢?・底部一周	RLヨコ、ナナメ・底面丁寧なナデ・外面朱～肌色	指なで?	内面黒斑、スス付着	
728	RA096Q2・1層	底部	ゆるいRLイロイロ、沈線→ナデ・底面ナデ	剥落	胎土金雲母少し・蓋?	
729	6M沢状地形Ⅱb層	浅鉢?・胴	浅い沈線・摩耗ひどい	摩耗ひどい	「西より2本目の黒」の注記あり	
730	RD205	深鉢?・口縁	RLナナメ(疎でない)・太い沈線→ナデ	ナデ	壺?	
731	土器集中B	深鉢・口縁	口縁粘土まくれ痕・ゆるいRLヨコ	ナデ		
732	4O・Ⅱ層	深鉢?・口縁	太い沈線→ナデ	ナデ		
733	RA095Q4カマド付近・中層	口縁部	口唇縄文・口縁貼り付け・細い沈線→ナデ	ナデ	深鉢?、壺?	

第10表 土器観察表3 奈良時代の土器

掲載No	出土位置	層位	器種	残存率 (%)	法量口径	底径	器高	調整			色調		備考	回数
								外面	内面	底部外面	外面	内面		
15	RA053	2層	高坏	85	11.4	7.6	5.45	□:YN、体:HK、柱:HK、裾:YN	M(KS:酸)	HK→YN	にぶい黄橙	灰黄褐		10
16	RA054	Q1 1層	坏	10	—	—	[5.3]	体:N、HK	体:M(KS)		明黄褐	黒		9
17	RA054	カマド中央前 床面	高坏	80	12.5	—	[6.4]	□:YN→M、体:M、柱:N	M(KS)	N	にぶい黄橙	黒		9
18	RA054	覆土下位壁際	高坏	100	11.3	7.1	6.15	□:YN→M、体:M、柱:N、YN、裾:YN	M(KS)	N→YN	にぶい黄橙	黒		9
19	RA054	Q2 2層	長胴壺	30	18.9	—	[11.5]	□:YN、体:H	□:YN、体:N		にぶい黄橙	にぶい黄橙		9

掲載 No	出土 位置	層位	器種	残存率 (%)	法量 口径	底径	器高	調整			色調		備考	次数
								外面	内面	底部外面	外面	内面		
20	RA054	カマド中央前 床面	甕? 甕?	15	(14)	—	[9.5]	□:YN、体:H	□:YN、体:H		橙	淡黄		9
26	RA055	Q3 2層 Q4南ベルト 5層	高坏?	5未	—	(9.2)	[2.4]	裾:M(KS)	裾:M(KS)		黒	黒褐	脚部裾部?	10
27	RA055	カマド内	甕	5未	—	—	[6.2]	□:YN、頸:H、体:H	□:YN、N、 体:N		にぶい黄橙 半分:橙	明黄褐 半分:橙	長胴形	10
28	RA055	j	甕	85	(20.6)	8.4	[33.5]	□:YN、体:H、底直:N	□:YN、体:H	木葉痕	浅黄橙	にぶい黄橙	長胴形	10
29	RA055	a·d·f·g·h	甕	65	22.7	8	34.3	□:YN、体:H、底直:N	□:YN、体:H	無調整	浅黄橙	にぶい黄橙	長胴形	10
30	RA055	a	甕	35	(18.9)	—	[18.9]	□:YN、体:H	□:YN、体:H →N	—	浅黄橙	浅黄橙	長胴形	10
31	RA055	hi	甕	5未	—	—	[9.9]	□:H→YN、体:H	□:YN、体:H		明黄褐	にぶい黄橙	長胴形	10
32	RA055	c·j	甕	95	10.7	(5.8)	14.5	□:YN、体:H	□:YN、体:H	無調整	浅黄橙	浅黄橙	長胴形	10
33	RA055	Q3 3層下位	甕	5未	—	(7.8)	[6.6]	体:H	体:N	無調整	橙	にぶい黄橙	長胴形	10
34	RA055	k	甕	5未	—	—	[8.4]	□:YN、体:N	□:YN、体:N		明黄褐	にぶい黄橙	長胴か?	10
36	RA055	カマド焼土上	甕	10	—	9.8	[8.5]	体:HK→M(下半のみ)、 底直:YN	体:N	M	にぶい黄橙 下半:黒	橙	球形	10
37	RA055	m	甕	20	(22.4)	—	[16.9]	□:YN、体:H	□:YN、体:H →N		浅黄橙 部 分:にぶい橙	橙	球形胴形、 焼成良好	10
42	RA056	6層	甕	25	—	8.5	[18.5]	体:H	体:H	無調整	橙	にぶい橙	球形	10
43	RA056	6層	甕	45	(24.2)	8.2	32.3	□:YN、体:H、N	□:YN、体:H	無調整	浅黄橙	にぶい橙	球形、内 面摩滅	10
44	RA057	土器b	坏	90	13.6	—	4.8	□:YN、M、体:HK→ M	M(KS)	HK→N?	にぶい黄橙	黒 部分:橙		10
45	RA057	カマド a	甕	35	—	(8.5)	[31.8]	□:H→YN、体:H	□:YN、体:H	無調整	浅黄橙	浅黄橙	長胴形	10
46	RA057	カマド b	甕	30	—	6.5	[9.85]	H	H	無調整	にぶい黄橙	明黄褐	長胴形	10
47	RA057	b·i	甕	50	(14.6)	7.6	13.95	□:YN、体:H、 底直:YN	□:YN、体:H	無調整	にぶい黄橙	黒褐	内面コゲ付 着	10
51	RA058	カマド右袖 5層下位	坏	70	15.6	—	4.7	□:HK→YN、体:HK→ M?	M(KS)	HK→M?	明黄褐	黒		10
52	RA058	4層	坏	60	(12.5)	6	5.2	□:HK→YN、体:HK→ N	M(KS)	N	明黄褐 口:黒	黒		10
53	RA059	床面	坏	90	15.6	8	8.2	□:体:M	M(KS)	M	橙	黒		10
54	RA059	床面	碗	75	12.6	9.15	7.8	□:Y、体:HK→M	□:Y、体:M (KS)	HK→M	にぶい黄橙	黒		10
55	RA059	底面 No3、中央部 下位~底面	長胴甕	90	20.9	7.3	[33.4]	□:YN、体:H	□:YN、体:H	無調整	浅黄橙	にぶい橙		10
56	RA059	床面	長胴甕	80	20.9	8.5	33.1	□:H→YN、体:HK→ N→M(下半のみ)	□:YN、体:H	無調整	にぶい黄橙	にぶい黄橙		10
57	RA059	床面	長胴甕	95	17.9	7.5	20.3	□:H→YN、体:H→N	□:YN、体:H	N	黄褐 体:明褐	にぶい黄橙	内面コゲ付 着	10
58	RA059	南東 上~中層、 床面 No5	長胴甕	90	23.4	8.3	35	□:YN、体:H、 底直:HK→N	□:YN、体:H	N	にぶい黄橙	橙		10
59	RA059	北側壁付近	長胴甕	25	11.8	—	[8.3]	□:YN、体:H→N	□:YN、体:H		にぶい黄橙	にぶい黄橙		10
63	RA060	床面	坏	10	—	—	[4.9]	□:YN→M、体:M	□:体:M(KS)	M	にぶい黄橙	黒		10
64	RA060	Q4 覆土	坏	10	—	—	[5.3]	□:YN?→M、体:H→ M	M(KS)		にぶい黄橙	黒	碗?鉢?	10
65	RA060	床面	鉢	65	(12.2)	(6.8)	(7.3)	HK、N	N	N?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	球金雲母多 量含む	10
67	RA061	カマド上端 No1、3層	坏	35	(15.8)	—	5.9	□:YN→M、体:N	M(KS)	M	浅黄橙	黒	器面摩滅	10
68	RA061	カマド覆土中層	坏	90	14.7	—	4.45	□:HK→YN→M、 体:HK→M	M(KS)	HK→M	明黄褐	黒		10
69	RA061	2層	甕	5未	—	—	[4.3]	□:H→YN	□:YN		浅黄橙	にぶい黄		10
74	RA062	No2、Q1 中層	坏	10	(11.4)	(7.3)	6.1	□:体:M	M(KS:酸)	M?	にぶい黄橙	にぶい黄褐		10
75	RA062	カマド 燃焼面	坏	5未	—	—	—							10
76	RA062	No3	坏	5未	—	—	—							10
77	RA062	No1	高坏	95	9.8	6.9	6.2	□:体:M、 柱:HK→N、裾:YN	M(KS)	HK→YN	にぶい黄橙	黒褐		10
78a	RA062	Q1 上層・2層	甕	55	(21.4)	—	[34.4]	□:H→YN、体:H	□:YN、体:H		にぶい黄橙	にぶい黄橙	長胴形	10
78b	RA062		甕	—	—	(9.4)	—	体:H	体:H	N?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長胴形	10
79	RA062	Q2 下層、Q1 上層	甕	10	—	8.2	[7.5]	体:H、底直:N	体:H	無調整	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長胴形	10
85a	RA063	Q2 根攪乱、No8	甕	50	—	(8.2)	[28.5]	□:H→YN、体:H→N	体:H	N	浅黄橙	にぶい黄橙	長胴形	10
85b	RA063		甕	5未	(19)	—	[5.1]	□:H→YN	□:H、YN		浅黄橙	にぶい黄橙	長胴形	10

掲載No	出土位置	層位	器種	残存率(%)	法量口径	底径	器高	調整			色調		備考	次数
								外面	内面	底部外面	外面	内面		
86	RA063	No11・Q1 覆土	甕	45	15.2	—	[15.4]	□:YN→H、体:H、N	□:YN→H、体:H		にぶい黄橙	浅黄橙		10
87	RA063	No1~6・10~12	甕	60	21.7	—	[22.7]	□:YN、体:N・H→HK→M(部分)	□:YN、体:N		にぶい黄橙	にぶい黄橙	球胴形	10
	RG025	覆土中位	長胴甕?	5未	—	—	[8.05]	□:H→YN、体:H	□:H→YN・N、体:H		淡黄	にぶい黄橙		10
	RG022	覆土	甕	5未	—	—	[5.1]	□:H、YN、体:H	□:YN、H、N、体:H		橙	明黄褐		10
	RD172	覆土	坏	5	—	—	[4.4]	□:YN→N、体:N→HK	□:M→N(KS)		にぶい黄橙	黒		10
	5N	37号住の西2m	球胴甕	5未	—	—	[12.9]	□:YN→N、体:N	□:N、体:N		にぶい黄褐	橙		10
	4N21y 風倒木	IIb	坏	35	(15.3)	—	[5.1]	□:YN→M、体:M	□:YN→M(KS:酸)、体:M(KS:酸)		にぶい黄橙	灰黄褐		10
	4N22u	攪乱	坏	20	(13.8)	—	(4.5)	□:YN→M、体:H→M	□:体:M(KS)	M?	にぶい黄橙	黒部分:明赤褐		10
	4N	IIa・IIb	坏	10	(17.7)	—	[4.1]	□:YN→M、体:N?	□:体:M(KS)		にぶい黄橙 口:黒	黒		10

(推定値) [残存値] HK:ヘラケズリ、YN:ヨコナデ、H:ハケメ、M:ミガキ、KS:黒色処理、N:ナデ、酸:酸化、□:口縁部、体:体部、底直:底部直上、頸:頸部

第11表 土器観察表4 平安時代の土器

掲載No	選標	出土地点・層位	調査次数	時期	種別	器種	黒色処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考
89	RA064	Q4 P1 埋土中位	10	平安	土師器	坏	内	14.2	6.0	5.3	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	2/3	
90	RA064	Q3埋土下位	10	平安	土師器	坏	内	(14.2)	(5.6)	(4.8)	ミガキ	Rナデ 下回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	1/5	飯395と接合
91	RA064	Q3埋土下位	10	平安	土師器	坏	—	—	—	—	Rナデ	Rナデ	—	体部破片	外側面に刻書「口(万々)」焼成後刻書
92	RA064	南ベルト埋土上位	10	平安	須恵系土器	坏	—	(14.6)	5.2	(5.1)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/8	
93	RA064	遺構を切る井戸状攪乱	10	平安	須恵系土器	坏	—	(14.6)	—	(4.2)	Rナデ	Rナデ	—	口縁部~体部1/4	
94	RA064	検出面/Q2埋土上位/Q2攪乱	10	平安	須恵系土器	坏	—	(15.0)	5.0	4.5	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/4	
95	RA064	土坑3柱穴東側埋土上位	10	平安	須恵系土器	坏	—	(15.7)	(6.2)	4.2	Rナデ?	Rナデ	回転糸切り		
96	RA064	Q3土坑底面	10	平安	須恵系土器	坏	—	—	(5.4)	(3.7)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	体部~底部破片1/2	
97	RA064	北ベルト埋土	10	平安	土師器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	底部破片	
98	RA064	Q3カマド周辺焼土層上/Q3(カマド?) 床直? 焼成部上焼土ブロック一括/Q3カクラン下/西ベルト埋土上位/Q3埋土下位/Q3床直	10	平安	土師器	甕		18.8	—	(24.5)	ナデ ケズリ	ナデ	—	口縁部~底部下端1/2	外面ハケメ風 下半ケズリ風
99	RA064	東ベルト1層/Q3北サプトレンチ埋土	10	平安	土師器	甕		(19.2)	—	(8.5)	ナデ	ケズリ	—	口縁部~体部上端破片	
100	RA064	土坑3埋土/Q3埋土下位/井戸の攪乱/Q3 RA065と重複部分埋土/Q3埋土中~下位	10	平安	土師器	甕	—	(13.0)	(11.5)	ナデ	ケズリ	ナデ	ナデ	体部下端~底部破片	
101	RA064	P2埋土中位	10	平安	土師器	甕	—	(11.4)	(8.0)	ハケメ	ケズリ	木裏煎→砂底	体部下端~底部破片		
102	RA064	西ベルト埋土下層/Q3埋土下位/焼土ブロック内出土	10	平安	土師器	甕		(13.9)	—	(10.85)	Rナデ	Rナデ	—	口縁部~体部下端破片	
103	RA064	P3埋土中層/Q2埋土	10	平安	土師器	甕(小)		(13.8)	—	(6.4)	Rナデ	Rナデ	—	口縁部~体部下端破片1/3	
104	RA064-RA071-RG039	RA064-Q1東サプトレンチ埋土上位/Q4埋土上位/東ベルト埋土中~下/RA071・ベルト2層/RG039(西側拡張)埋土	10	平安	須恵器	壺					Rナデ	Rナデ		体1/4周	自然釉
105	RA064	Q1埋土中位	10	平安	須恵器	甕?					ナデ	平行タタキ目→ケズリ	砂底	底1/4周	内部にひび割れ
106	RA064	Q3 P4床直	10	平安	須恵器	壺					ナデ	平行タタキ目→ケズリ	ナデ	底2/3周以下	一部摩耗
107	RA064	検出	10	平安	須恵器	短頸壺					Rナデ	Rナデ		口1/4周	
108	RA064	Q4埋土上位/Q4北サプトレンチ埋土/北ベルト埋土	10	平安	須恵器	甕					ナデ→Rナデ	カキメ→Rナデ		頸1/5周	胎土に黒い粒
109	RA064	Q4埋土下位	10	平安	須恵器	壺					Rナデ→ナデ	Rナデ		体1/5周	胎土に砂混入
110	RA064	検出面	10	平安	須恵器	甕					当て具痕→ナデ	平行タタキ目		体部破片	自然釉
111	RA064	土坑2埋土上位	10	平安	須恵器	甕					当て具痕→Rナデ	平行タタキ目→カキメ→ナデ		体部破片	
112	RA064	Q3埋土下位	10	平安	須恵器	甕					平行タタキ目状当て具痕	平行タタキ目			
119	RA065	北側埋土下位/-P2埋土下位/Q2埋土中~下/北側埋土	10	平安	土師器	坏	不明	16.0	6.3	6.2	ミガキ?	Rナデ	回転糸切り	4/5	二次被熱
120	RA065	Q2埋土中~下位	10	平安	土師器	坏	内	—	(5.6)	(1.9)	ミガキ	Rナデ 下→手持ちヘラ	回転糸切り	底部1/3	
121	RA065	Q2埋土中~下位	10	平安	須恵系土器	坏	—	—	(6.0)	(1.3)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底部のみ1/2	
122	RA065	P1焼土直上	10	平安	土師器	甕	—	(10.0)	(1.7)	ナデ	—	砂底	砂底	底部のみ2/3	
123	RA066	カマド右そで	10	平安	土師器	甕	—	—	10.0	(27.0)	ハケメ	ナデ	砂底	体部上半~底部	
124	RA067	お	10	平安	土師器	坏	内	(13.4)	(6.2)	5.0	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	1/4	
125	RA067	Q2レンチ埋土/Q2 1層	10	平安	土師器	坏	内	—	6.2	(2.7)	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	体部~底部	底部に、もみ痕
126	RA067	カマド焼土上 あ	10	平安	須恵系土器?	坏	—	(15.6)	—	(4.4)	Rナデ	Rナデ	—	口縁部~体部1/5	被熱
127	RA067	Q3 1層/か	10	平安	H? S?	甕	—	(19.4)	—	(3.4)	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	—	口縁部破片	
128	RA067	え	10	平安	土師器	甕	—	—	(6.6)	(2.7)	Rナデ	Rナデ ナデ	—	底部のみ1/3	

Ⅳ 検出された遺構と遺物

掲載No	遺構	出土地点・層位	調査回数	時期	種別	器種	黒色処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考
129	RA068	RA068/069・Q2上層/ベルト一括	10	平安	土師器	坏	内?	—	6.0	<2.0>	ミガキ	Rナデ→下手持ちヘラズリ	手持ちヘラズリ	体部下端～底部3/4	
130	RA068	RA068/069・Q4下層/ベルト一括/北東隅床面 上/2	10	平安	須恵器	坏	—	15.0	5.4	5.7	Rナデ	Rナデ	回転系切り	ほぼ完形	須恵系との中間?
131	RA068	RA068/069・北西隅床面 下/2/ベルト一括	10	平安	須恵系土器	坏	—	14.2	6.0	5.6	Rナデ	Rナデ	回転系切り	ほぼ完形	
132	RA068	RA068/069	10	平安	須恵系土器	坏	—	(13.8)	(5.0)	4.7	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/4	
133	RA068	RA068 カマド直上層上/Q2上層	10	平?	土師器	甕	—	(23.3)	—	<24.3>	ハケメ	ハケメ ナデ	—	口縁部～体部下半破片	
134	RA068	RA068・Q2/カマドの直上層土	10	平?	土師器	甕	—	13.2	—	<8.5>	ハケメ	ナデ	—	口縁部～体部破片	口縁部内面にスス付着
135	RA068	RA068/069・Q2上層	10	平?	土師器	球胴甕	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	朱 外面
136	RA068	RA068/069 ベルト一括	10	—	土師器	甕	—	—	(15.2)	<4.3>	ナデ	ナデ	砂底で木葉痕	体部下端～底部破片1/3	
137	RA068	RA068/069・Q1上層	10	平安	須恵器	短頸壺	—	—	—	—	Rナデ	Rナデ	—	上半1/5周以下	
138	RA068	RA068 最上層	10	平安	須恵器	壺	—	—	—	—	Rナデ	Rナデ	回転系切り	2/3周以下	胎土に黒い粒、繊維質のもの
141	RA069	床面	10	—	土師器	球胴甕	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	内外面 口唇部朱
142	RA069	RA069・床面/RA068・069/Q4上層	10	—	土師器	甕	—	—	(9.4)	<6.0>	ナデ	ナデ	砂底	体部下端～底部破片	
143	RA069	RA068・069/Q4下層/RA069・床面	10	—	土師器	甕	—	—	(15.0)	<8.4>	ハケメ	ナデ	ナデ	体部下端～底部破片	
144	RA069	床面	10	—	土師器	甕	—	—	(16.4)	<3.9>	ナデ	ナデ	ナデ	体部下端～底部1/3	
146	RA070	Q2	9	平安	須恵系土器	坏	—	(14.0)	(5.8)	<5.0>	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/5	
147	RA070	Q3	9	平安	須恵系土器	坏	—	(14.0)	—	<4.8>	Rナデ	Rナデ	—	1/5	
148	RA070	カマド窯道/No2～4/No7/No9～12/Q1/カマド/検出面	9	平安	土師器	甕	—	(21.8)	11.8	(31.8)	ハケメ	ハケメ	木葉痕	口縁部～底部	
149	RA070	カマド窯出/No1/No3/No5/No9/No10/Q1/貼床/Q1	9	平安	土師器	甕	—	25.0	—	<32.5>	Rナデ フナデ	Rナデ ケズリ	—	口縁部～体部下半破片	
150	RA071	カマド左側底面/カマド周辺2層	9	平安	土師器	坏	内	(14.0)	(7.4)	4.8	ミガキ	Rナデ	回転系切り	1/3	底部外面に墨書「口」正位(仮589「主」と同じ可能性あり)
151	RA071	Q3トレンチ	9	平安	土師器	坏	内	(14.4)	(6.8)	4.3	ミガキ	Rナデ	回転系切り	1/4	
152	RA071	2層/Q1～Q4 2層	9	平安	土師器	坏	内	(13.6)	(7.4)	<5.0>	ミガキ	Rナデ	回転系切り	1/3	
153	RA071	カマド左側壁際床面	9	平安	土師器	坏	内	—	6.7	<2.7>	ミガキ	Rナデ	回転系切り	体部下～底部	体部外面に墨書「口」正位(仮589「主」と同じ可能性あり)
154	RA071	ベルト1層	9	平安	土師器	坏	内	—	(5.0)	<2.5>	ミガキ	Rナデ	手持ちヘラズリ	体部下～底部1/3	体部外面に墨書「吉」倒位
155	RA071	2層	9	平安	土師器	坏	内	—	—	—	ミガキ	Rナデ	—	体部破片	体部外面に墨書「吉」倒位
156	RA071	カマド燃焼部上面	9	平安	須恵系土器	坏	—	14.8	7.2	5.4	Rナデ	Rナデ	回転系切り	4/5	
157	RA071	2層上位 No2	9	平安	須恵系土器	坏	—	(13.6)	7.2	4.3	Rナデ?	Rナデ	回転系切り	1/4	
158	RA071	カマド右そで芯材	9	平安	土師器	甕	—	(19.0)	—	<13.3>	ハケメ	ナデ	—	口縁部～体部下半破片	
159	RA071	カマド燃焼部 坏の下/カマド1層/カマド左そで芯材/カマド右端の上	9	平安	土師器	甕	—	21.9	—	<15.6>	ハケメ	ケズリ	—	口縁部～体部上半	仮424と類似 外面一部ハケメ風ナデ
160	RA071	カマド燃焼部 坏の下/カマド周辺2層/カマド燃焼部No1	9	平安	土師器	甕	—	22.4	—	<16.3>	ナデ	ケズリ	—	口縁部～体部上半	外ナデ風ケズリ 内ハケメ風ナデ
161	RA071	カマド左側底面	9	平安	土師器	甕	—	(23.6)	—	<5.9>	ナデ	ハケメ	—	口縁部破片	
162	RA071	No3底面	9	平安	土師器	甕	—	—	7.7	<6.1>	Rナデ	Rナデ	回転系切り	体部下端～底部	
163	RA071	Q1トレンチ	9	平安	土師器	甕	—	—	(11.7)	<4.0>	ハケメ	ケズリ	ナデ	体部下端～底部1/3	二次被熱
164	RA071	床面	9	平安	土師器	甕	—	—	—	<4.9>	ナデ	ナデ	木葉痕	体部下端～底部破片	
165	RA071	カマド燃焼部	9	平安	土師器	甕	—	—	—	—	ナデ	ナデ	—	口縁部～体部上半破片	
166	RA071	カマド左側底面	9	平安	須恵器	壺?	—	—	—	—	Rナデ→ナデ	—	—	—	
172	RA073	Q1トレンチ埋土	9	平安	土師器	坏	内	—	(5.4)	<2.2>	ミガキ	Rナデ→下手持ちヘラズリ	回転系切り→手持ちヘラズリ	底部破片 1/5	
173	RA073	カマド	9	平安	土師器	坏	内?	(13.6)	(6.0)	5.4	Rナデ?ミガキ?	Rナデ→下手持ちヘラズリ	手持ちヘラズリ	1/2	
174	RA073	カマド脇Pit c埋土下位	9	平安	須恵器	坏	—	(14.8)	(5.8)	4.6	Rナデ	Rナデ	回転系切り		
175	RA073	No4	9	平安	須恵器	坏	—	14.3	6.0	4.8	Rナデ	Rナデ	回転系切り	完形	
176	RA073	カマド脇Pit a 底直上	9	平安	須恵器	坏	—	14.5	7.1	4.8	Rナデ	Rナデ	回転系切り	3/4	
177	RA073	No2/No3/Q3トレンチ埋土	9	平安	土師器	甕	—	(24.0)	—	<24.4>	ナデ	ナデ	—	口縁部～体部下半破片	
178	RA073	No1/カマド脇Pit b 下層/土坑2 1層上面	9	平安	土師器	甕(小)	—	13.3	6.0	10.7	Rナデ	Rナデ	回転系切り	完形	外面にスス円環状につく
179	RA073	Q2床直/Q3埋土上位	9	平安	須恵器	甕?	—	—	—	—	胴ハケメ・底指まで	ケズリ	ナデ?	底部1/4周	底面粘土まくれ痕
180	RA074	南壁際床より10cm上	9	平安	須恵器	坏	—	(14.2)	—	<4.2>	Rナデ	Rナデ	—	—	体部外面に墨書「口」正位
181	RA074	Q1 2層	9	平安	須恵系土器	坏	—	—	(6.0)	<1.6>	Rナデ	Rナデ	回転系切り	底部 1/2	
182	RA074	土坑1埋土	9	平安	須恵器	壺?	—	—	—	—	Rナデ	Rナデ	—	口1/4周弱	
183	RA075	Q2埋土覆土	10	平安	土師器	坏	内外	(14.0)	—	<3.4>	ミガキ	ミガキ	—	口縁部～体部1/4	
184	RA075	No9	10	平安	土師器	高台付坏	内	(14.4)	—	<5.5>	ミガキ	Rナデ	—	菊花状	1/6
185	RA075	No3/No4/Q2覆土	10	平安	須恵系土器	坏	—	(14.6)	(6.9)	5.4	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/3	

掲載No	遺構	出土地点・層位	調査 次数	時期	種別	器種	黒色 処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考	
186	RA075	№9/Q2		10	平安	須恵系土器	坏	—	(14.9)	(6.0)	5.1	Rナデ	Rナデ	回転糸切り		
187	RA075	№1/№2/№6/№9		10	平安	須恵系土器	坏	—	(14.5)	6.1	5.4	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/2	
188	RA075	№9		10	平安	土師器	甕	—	(20.4)	—	(12.9)	Rナデ	Rナデ	—	口縁部～体部 中位破片1/4	
189	RA075	№1/№2/№9/Q2覆土		10	平安	土師器	甕	—	(14.0)	—	(10.9)	Rナデ	Rナデ	—	口縁部～体部 中位	
190	RA075	№1/№3/№9/Q2覆土		10	平安	土師器	甕	—	(21.2)	—	(28.1)	ナデ	ナデ 下半ケズリ	—	口縁部～体部 下端破片2/5	
191	RA075	№10		10	平安	須恵器	甕					当て具痕	平行タタキ目→ナデ?	体部破片	胎土に黒い粒	
193	RA076	P1 2層		9	平安	土師器	坏	内	(14.2)	5.2	5.1	ミガキ	ナデ 下回転ヘラクスリ	回転ヘラクスリ	1/3	
194	RA076	カマド北ぞで周辺		9	平安	土師器	高台付坏	内	(15.6)	(7.6)	6.7	ミガキ	Rナデ上～中ミガキ	回転糸切り→高台取り付	1/8	
195	RA076	Q1床直		9	平安	土師器	高台付坏	内	—	(8.3)	(3.76)	ミガキ	Rナデ下	回転糸切り→高台取り付	1/2	
196	RA076	検出面		9	平安	土師器	高台付坏	内	—	8.0	<1.6>	ミガキ	Rナデ	不明	底部破片	
197	RA076	カマド北ぞで周辺2層/カマド周辺1層		9	平安	須恵系土器	坏	—	(15.4)	—	<4.25>	Rナデ	Rナデ	—	口縁部～体部 1/5	
198	RA076	カマド周辺1層		9	平安	土師器		—	—	—	ハケメ	ケズリ	—	口縁部～体部 上端破片		
199	RA076	Q3埋土		9	平安	須恵器	甕					ナデ	平行タタキ目→Rナデ	肩部破片	胎土に黒い顆粒著	
203	RA077	Q4埋土		9	平安	須恵器	坏	—	—	(4.9)	<3.0>	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底部破片	
204	RA078-RA077	RA078-Q1 カマド埋土/P1埋土/RA077-カマド脇		9	平安	土師器	甕(小)	—	(13.5)	—	<6.5>	ナデ	ナデ	—	口縁部破片	
205	RA077	b		9	平安	土師器	甕	—	—	—	—	—	—	木葉痕	底部破片	
206	RA078	Q1西ベルト埋土下層/Q4トレンチ		9	平安	土師器	坏	内	(14.0)	5.8	4.5	ミガキ	Rナデ→下端回転ヘラクスリ	回転ヘラクスリ	1/3	
207	RA078	カマド埋土中/床面		9	平安	土師器	坏	内	(13.4)	5.7	4.75	ミガキ	Rナデ→下端回転ヘラクスリ	回転ヘラクスリ	2/3	底部外面に刻線(焼成前にヘラでつけた?)
208	RA078	Q1埋土中層/Q1 6層		9	平安	土師器	坏	内?	—	(6.0)	<3.5>	ミガキ	Rナデ→下端手持ちヘラクスリ	手持ちヘラクスリ	体部下端～底部 1/4	
209	RA078	c 下層		9	平安	土師器	坏	内	—	6.3	<2.9>	ミガキ	Rナデ→下端回転ヘラクスリ	回転糸切り→回転ヘラクスリ	体部下端～底部	
210	RA078	カマド埋土		9	平安	土師器	坏	内	—	(7.0)	<3.9>	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	体部下端～底部 1/3	
211	RA078	Q2 4層		9	平安	土師器	坏	内	—	—	—	ミガキ	Rナデ	—	体部外面に墨書「口」正位	
212	RA078	床面		9	平安	土師器	—	内外	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	口縁部破片	外側面に線刻面
213	RA078	9層/Q2壁際下層		9	平安	土師器	—	内外	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	口縁部破片	
214	RA078	Q2埋土下層/Q3 6層/カマド埋土/Q4埋土/9層/Q1埋土中層/Q2床直		9	平安	須恵系土器	坏	—	(14.3)	(4.95)	4.9	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/2	
215	RA078	Q4トレンチ/Q4最下層		9	平安	須恵系土器	坏	—	(14.4)	5.4	5.8	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/2	
216	RA078	カマド埋土/埋土下層/Q2トレンチ/下層e		9	平安	土師器	甕	—	(29.0)	—	<15.9>	カキメ風	—	口縁部～体部 下半		
217	RA078	Q1南ベルト埋土中/Q2 3層/下層/カマド埋土中/Q1カマド周辺埋土		9	平安	土師器	甕	—	(20.0)	—	<21.6>	ナデ	ナデ	—	口縁部～体部 下半破片	
218	RA078	下層b/下層o壁際下層		9	平安	土師器	甕	—	(11.0)	<11.8>						
219	RA078	Q2壁際中層/Q2 6層/m壁際下層/Q2埋土下層		9	平安	土師器	甕	—	—	8.0	<6.0>	Rナデ	ナデ	回転糸切り	体部下端～底部	
220	RA078	カマド埋土p/Q2壁際下層/Q2壁際中位/カマド埋土		9	平安	土師器	甕	—	(22.6)	—	<19.5>	Rナデ	Rナデ→下端手持ちヘラクスリ	—	口縁部～体部 上半破片	
221	RA078	a 壁際下層		9	平安	土師器	甕	—	—	8.35	<6.4>	ハケメ	ナデ	ナデ?	体部下端～底部	
222	RA078	埋土最下層s		9	平安	土師器	甕	—	(19.6)	—	<11.3>	Rナデ	Rナデ→下端手持ちヘラクスリ	—	口縁部～体部 上半破片	
223	RA078	カマド埋土中		9	平安	土師器	甕	—	(23.0)	—	<14.3>	Rナデ	Rナデ→下端手持ちヘラクスリ	—	口縁部～体部 上半破片	
224	RA078	カマド埋土上 u/カマド埋土		9	平安	須恵器	長頸瓶					Rナデ→ケズリ	Rナデ		頸1/3周以下	自然釉?・胎土に黒い粒
225	RA078	Q4貼床中/カマド埋土中位/Q1 6層/4N23u 24u風筒木		9	平安	土師器	甕	—	—	7.5	<2.3>	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底部破片	
226	RA078	壁際下層d		9	平安	須恵器	甕					平行タタキ目状当て具痕	平行タタキ目	体部破片	自然釉?・外面光沢	
227	RA078	下層k/床直j/床直h		9	平安	須恵器	甕					平一部当て具痕→指なで?	平行タタキ目→指なで?	体部破片	自然釉?・外面光沢	
228	RA078	埋土下層f/埋土下層i		9	平安	須恵器	甕					平行タタキ目状当て具痕	タタキ目	体部破片	胎土に黒い粒	
229	RA078	カマド埋土		9	平安	須恵器	甕					平行タタキ目状当て具痕	平行タタキ目	体部破片	黄褐色～灰色	
237	RA079	cカマド脇上層		9	平安	須恵器	坏	—	14.1	5.0	4.9	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	3/4	
238	RA079	a埋土下層		9	平安	土師器	甕	—	(20.2)	—	<7.8>	ナデ	ナデ	—	口縁部破片	
239	RA079	カマド支脚		9	平安	土師器	甕	—	—	—	—	ハケメ	ナデ	—	体部破片	
240	RA079	Q3埋土下層/d下層/埋土下層		9	平安	須恵器	長頸瓶?					カキメ→ハケメ	タタキ目→Rナデ	—	体部破片	ロクロナデというよりケズリに近い
241	RA079	b埋土下層		9	平安	須恵器	甕					ナデ	Rナデ→ケズリ	—	体部破片	胎土に黒い粒・ケズリというよりナデに近い
244	RA080	Q4 3層		10	平安	土師器	坏	内	—	6.6	<2.7>	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	底部破片2/3	
245	RA080	№30		10	平安	土師器	坏	内	—	5.2	<1.2>	ミガキ	Rナデ→下端手持ちヘラクスリ	手持ちヘラクスリ	底部破片	

掲載No	遺構	出土地点・層位	調査回数	時期	種別	器種	黒色処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考
246	RA080	No57	10	平安	須恵系土器	坏	—	(14.2)	—	5.15	Rナデ	Rナデ	手持ちヘラケズリ	1/8	
247	RA080	Q1トレンチ/Q4ベルト 3a層	10	平安	須恵器	坏	—	(14.0)	(6.4)	4.8	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/5	
248	RA080	No2/Q3 3層/Q4トレンチ ベルト埋土/Q1ベルト3a層	10	平安	須恵器	坏	—	(14.0)	(4.8)	5.45	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/3	
249	RA080	P1内 pNo3	10	平安	須恵系土器	坏	—	(13.4)	5.0	5.4	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/4	
250	RA080	土器37	10	平安	須恵系土器	坏	—	—	5.7	(3.0)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底部2/3 体部1/3	
251	RA080	土器58	10	平安	土師器	鍋	—	(31.0)	—	(7.0)	カキメ風	Rナデ→ケズリ	—	—	口縁部～体部上半破片
252	RA080	Pit1内 pNo4	10	平安	土師器	甕	—	(19.0)	—	(19.2)	ハケメ	ナデ	—	—	口縁部～体部中位破片
253	RA080	土器3/土器5/土器45	10	平安	土師器	甕	—	(17.3)	—	(11.0)	ナデ	ナデ	—	—	口縁部～体部上半破片
254	RA080	Q1カマド付近4層	10	平安	土師器	—	—	(10.3)	(3.2)	ナデ	ナデ	ケズリ	—	—	
255	RA080	土器41	10	平安	土師器	甕	—	(21.0)	—	(12.2)	カキメ風	Rナデ	—	—	口縁部～体部上半破片
256	RA080	支脚	10	平安	土師器	甕	—	—	8.0	(7.8)	ハケメ	ナデ →下端ケズリ	砂底	—	体部下半～底部
257	RA080	No33	10	平安	須恵器	甕	—	—	—	—	Rナデ→ナデ	Rナデ	—	—	口縁部1/4周強
258	RA080	No47/4N(市3トレより北) II a層	10	平安	須恵器	甕	—	—	—	—	口～肩Rナデ→ナデ、肩平行タタキ目	口～肩Rナデ→ナデ、肩平行タタキ目	—	—	口縁部～肩部破片
259	RA080	Q4ベルト2層/Pit1 pNo1	10	平安	須恵器	甕	—	—	—	—	平行タタキ目 自伏当て具痕	平行タタキ目	—	—	体部破片 胎土に黒い粒多い
260	RA080-RA104	RA080・Q3ベルト3～4層 #RA104Q2上層	10	平安	須恵器	甕	—	—	—	—	当て具痕	平行タタキ目	—	—	体部破片
261	RA080	検出面/Q1 3層/No27/No31/RA055・Q4南ベルト5層/4N(市3トレより北) II a層	10	平安	須恵器	甕	—	—	—	—	平行タタキ目 自伏当て具痕	平行タタキ目	—	—	体部破片
271	RA081	カマド東支脚2	10	平安	土師器	坏	内	14.7	6.0	5.25	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	2/3	
272	RA081	カマド西支脚4-No4	10	平安	土師器	坏	内	13.8	6.0	5.2	ミガキ	Rナデ→下端 手持ちヘラケズリ	回転糸切り	ほぼ完形	
273	RA081	カマド西支脚4-No2	10	平安	土師器	坏	内	13.8	6.1	5.25	ミガキ	Rナデ→下端 手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	ほぼ完形	
274	RA081	Q3カマド埋土/カマドc/カマドk/ベルト床直/カマドt	10	平安	土師器	坏	内	14.3	6.1	5.15	ミガキ	Rナデ→下端 手持ちヘラケズリ	回転糸切り	1/2	
275	RA081	Q4 2層/Q5トレンチ	10	平安	土師器	坏	内	(13.8)	(5.8)	4.9	ミガキ	Rナデ→下端 手持ちヘラケズリ	回転糸切り	1/3	
276	RA081	a カマド埋土上	10	平安	土師器	坏	内	(13.8)	(6.0)	5.0	ミガキ	Rナデ→下端 手持ちヘラケズリ	回転糸切り	1/4	
277	RA081	Q2床直	10	平安	土師器	坏	内	(12.6)	(6.0)	5.4	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	1/5	
278	RA081	カマド埋土/カマドj	10	平安	土師器	坏	内	—	(5.6)	(5.0)	ミガキ	Rナデ→下端 手持ちヘラケズリ	回転糸切り	1/4	
279	RA081	カマド西支脚4-No3/カマド埋土/Q5トレンチ/カマドx	10	平安	須恵系土器?	坏	—	(13.6)	6.2	5.7	Rナデ?	Rナデ	静止糸切り	ほぼ完形	
280	RA081	Q3カマド埋土/カマドq/カマドt	10	平安	須恵器	坏	—	(14.0)	(6.4)	5.1	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/3	
281	RA081	カマドm/カマド右脇埋土/カマド埋土/Q5 3層/Q5トレンチ	10	平安	須恵器	坏	—	(14.2)	(5.8)	5.25	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/2	
282	RA081	Q5トレンチ/Q2 3層/Q5床直/P1直上埋土/カマドt	10	平安	須恵器	坏	—	(13.8)	5.1	5.1	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/2	
283	RA081	Q4カマド埋土/Q3カマド埋土/カマド右脇埋土	10	平安	須恵器	坏	—	—	(6.0)	(3.3)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底1/4	
284	RA081	Q4 2層下位/カマド煙道/煙出埋土上面/カマドc/カマド西支脚4 No1	10	平安	土師器	甕	—	(20.0)	—	(24.2)	ハケメ	ハケメ ナデ	—	—	口縁部～体部下半破片
285	RA081	Q4床直/Q3カマド埋土/Q5 2層/Q5 3層/カマドn/カマドj/カマド埋土/Q1西ベルト1層/P1直上埋土	10	平安	土師器	甕	—	15.0	—	(8.3)	ハケメ	ナデ	—	—	口縁部～体部
286	RA081	Q1西ベルト2層	10	平安	土師器	甕	—	(21.3)	—	(6.0)	ナデ	ナデ	—	—	口縁部
287	RA081	カマド西支脚4-No1	10	平安	土師器	甕	—	—	10.0	(12.9)	ハケメ	ナデ(ハケメ)	ナデ	—	体部下半～底部
288	RA081	カマドj/Q5 2層/カマドg/カマドl/カマドp/Q3・Q4 カマド埋土/カマドs/カマドe/カマド埋土	10	平安	土師器	甕	—	—	(10.2)	(14.7)	ナデ	ケズリ	ナデ	—	体部下半～底部
289	RA081	Q4 1層/Q5床直/RD198・埋土	10	平安	土師器	甕(小)	—	—	(7.6)	(3.5)	ハケメ	ハケメ ナデ	ナデ	—	体部下半～底部
290	RA081	カマド東支脚	10	平安	土師器	甕	—	—	8.5	(8.15)	Rナデ	Rナデ→下端 手持ちヘラケズリ	回転糸切り	—	体部下半～底部
291 _{ab}	RA081	Q3カマド埋土	10	平安	土師器	ミニチュア土器	—	—	—	—	ナデ	ナデ	ナデ	—	口～体部 体部～底部破片
292	RA081	Q3・Q4カマド埋土/カマド埋土	10	平安	土師器	甕(小)	—	(14.0)	(7.4)	(10.8)	Rナデ	Rナデ→下端 手持ちヘラケズリ	ケズリ	1/4	
293	RA081	カマドe/Q3	10	平安	土師器	甕	—	(13.4)	—	(7.0)	Rナデ	Rナデ	—	—	口縁部～体部上半破片
294	RA081-RD198	RA081・Q3・Q4カマド埋土/Q1 3層/カマド内/RD198埋土	10	平安	土師器	甕(小)	—	—	(2.8)	(6.5)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	—	体部下半～底部 口縁部破片
295	RA081	カマド埋土/Q5 3層/埋土Q3・Q4/カマド東支脚3/カマドh/Q5トレンチ/カマドf	10	平安	須恵器	壺	—	—	—	—	Rナデ	Rナデ→底付 近ケズリ	回転糸切り	3/4周以上	粘土まくれ痕・灰白色～黄色
296	RA081	Q4 3層下位	10	平安	須恵器	小型壺	—	(5.1)	—	(3.3)	Rナデ	Rナデ	—	—	口縁部～体部下半
297	RA081	Q4 4層	10	平安	須恵器	壺?	—	—	—	—	Rナデ→頸 ナデ	Rナデ	—	—	体1/4周弱
304	RA082	Pit5 5層下底面/Q2 2層	10	平安	土師器	坏	内	(14.1)	(6.1)	5.0	ミガキ	R→回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	1/5	体部外面に墨書「十万」同位
305	RA082	カマドP38/カマドP39	10	平安	土師器	坏	内	(15.5)	(6.8)	5.15	ミガキ	Rナデ→下 ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	1/4	
306	RA082	カマドP25 6層	10	平安	土師器	坏	内?	(15.0)	(5.6)	5.7	ミガキ	Rナデ	?	1/3	熱により黒が飛んでいる
307	RA082	P9 2層/P17 7層下底面/P10 2層/P8 2層下/床面	10	平安	土師器	坏	内	(14.2)	4.9	5.5	ミガキ	R	回転糸切り	1/3	

掲載 No	遺構	出土地点・層位	調査 次数	時期	種別	器種	黒色 処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考
308	RA082	Q4トレンチ	10	平安	須恵器	坏	-	(6.6)	(3.0)	Rナデ	Rナデ	回転系切り	体部～底部1/4	焼きが甘い 須恵系?	
309	RA082	Pit1 P2 1層/カマドP27 6層	10	平安	土師器	甕	-	(9.3)	(9.0)	ナデ	ナデ	木葉痕	体部下半破片 ～底部破片		
310	RA082	カマドP26 6層	10	平安	土師器	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ	-	口縁部		
311	RA082 RD157	第2トレンチ東拡張部 1a層No5/RA082・床面P6 6層 RD157・埋土	9	平安	須恵器	長頸瓶	-	-	-	Rナデ	Rナデ→下部 ケズリ	-	上半1/2周以下		
312	RA082	Pit1 P1 1層	10	平安	須恵器	甕	-	-	-	当て具痕	平行タキ目→ ナデ?	-	体部破片		
319	RA083	No6/カマド	10	平安	土師器	坏	内	(6.2)	(4.3)	ミガキ	Rナデ	回転系切り	体部～底部 1/4		
320	RA083	No1	10	平安	須恵系土器	坏	-	12.9	5.2	4.6	Rナデ	回転系切り	完形	口縁部に油煙? (1.5×1cm)	
321	RA083	No10	10	平安	土師器	甕	-	-	-	平ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナ デ	-	口縁部破片		
322	RA084	Q1/No1	10	平安	土師器	坏	内	(13.2)	(5.0)	5.4	ミガキ	Rナデ	回転系切り	1/3	
323	RA084	Pit5	10	平安	土師器	甕	-	(3.8)	5.6	5.8	ナデ	ナデ	砂底	体部下端～底 部	体部下端に指紋痕
324	RA084	Q1床直	10	平安	土師器	甕	-	(12.6)	(5.7)	ナデ	ケズリ	ナデ	体部下端～底 部 破片		
325	RA084	Q1床直	10	平安	土師器	甕	-	-	-	Rナデ	Rナデ	-			
326	RA084	Q1床直	10	平安	土師器	甕	-	-	-	Rナデ ナ デ	ケズリ	-	口縁部破片		
327	RA084	Q1床直	10	平安	須恵器	甕?	-	-	-	Rナデ→ナ デ	Rナデ	-	口縁部破片		
332	RA085	カマド9層	10	平安	土師器	坏	内	(6.0)	(2.0)	ミガキ	ナデ→持ち ヘラケズリ	糸切り後持ち ヘラケズリ	底部1/2		
333	RA085	焼土だまり6 7層/カマド支脚	10	平安	土師器	坏	-	13.9	5.8	5.4	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/2	
334	RA085	カマド支脚/カマドそで芯材? P4/中央ベルト3層/ カマド13層/東ベルト中位/焼土だまり8焼土面床直8 層上面/Q2床直/南そで芯材? /南ベルト5層/カマド 支脚P1 1/カマド埋土	10	平安	土師器	甕	-	(15.0)	8.0 ～8.2	14.8	ナデ	ナデ→ケズリ	木葉痕	口縁部～底部 2/3	
335	RA085	焼土だまり2 7層/カマド支脚P1～2/カマド埋土/カマ ド12層/煙道西側埋土/焼土だまり8 8層/Q1埋土下位 /ベルト7層/カマド支脚P1～3	10	平安	土師器	甕 (小)	-	15.5	8.0	15.2	ハケメ	ケズリ	木葉痕	ほぼ完形	外面上半にスス 内面 中位にスス
338	RA086	北西隅の攪乱	10	平安	土師器	高台 付坏	内?	-	7.8	(5.0)	ミガキ	Rナデ	回転系切り	体部～底部破 片	
339	RA086	P15燃焼部	10	平安	土師器	高台 付坏	内?	-	7.2	(2.3)	ミガキ	Rナデ	不明		高台貼付のためキ ザミ(爪のあと?)
340	RA086	Q3覆土上位	10	平安	須恵系土器	坏	-	(9.9)	(3.85)	3.15	Rナデ	Rナデ	回転系切り		
341	RA086	P1床直/Q1埋土	10	平安	須恵系土器	坏	-	10.6	4.4	2.55	Rナデ	Rナデ	回転系切り		
342	RA086	P19床直/P13床直/Q3埋土	10	平安	土師器	甕	-	(29.0)	-	(22.8)	ナデ	ナデ→ケズリ	-	口縁部～体部 破片	
343	RA086	P16燃焼部/P5床直	10	平安	土師器	甕	-	(14.4)	(7.3)	ナデ	ケズリ	ナデ	体部下半～底 部		
344	RA086	P7床直/P14床直/南西グッド皿層/検出面/Q3埋土	10	平安	土師器	甕	-	-	(12.6)	ナデ	ナデ	-	体部破片		
350	RA087	No1/No2/No4～6/Q2・Q5床直/カマド前小pit/床直	10	平安	須恵系土器	坏	-	(15.6)	(7.0)	5.75	Rナデ	Rナデ	回転系切り	2/3	
351	RA087	出土一括No10	10	平安	須恵系土器	坏	-	14.5	7.7	5.9	Rナデ	Rナデ	回転系切り	完形	被熱
352	RA087	カマドa	10	平安	須恵器	坏	-	-	6.3	(2.3)	Rナデ	Rナデ	回転系切り	底部完形 体 部1/3	底部外面に墨書 「升」
353	RA087	煙出埋土	10	平安	土師器	甕	-	(21.6)	-	(12.7)	ハケメ	ナデ→ケズリ	-	口～体部上半 破片	
354	RA104- RA087	RA104・Q2上下層/RA087・Q3埋土上位	10	平安	須恵器	壺	-	-	-	-	Rナデ	Rナデ	-	口1/4周	
359	RA088	a壁際中位/p下層	10	平安	土師器	坏	内	(13.8)	(6.0)	5.3	ミガキ	Rナデ→下 端 手持ちヘラケズ リ	回転系切り→ 手持ちヘラケズ リ	1/3	
360	RA088	カマド右袖上Q1埋土/a Q1トレンチ	10	平安	土師器	坏	内	(14.0)	5.7	4.7	ミガキ	Rナデ	回転系切り	3/4	
361	RA088	カマド埋土/カマド埋土	10	平安	土師器	坏	内	(13.8)	(6.0)	4.3	ミガキ	Rナデ→下 端 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	1/4	側面 刻書
362	RA088	b壁際下層/a中位	10	平安	土師器	坏	内	(5.8)	(3.7)	ミガキ	Rナデ→下 端 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	体部中位～底 部 1/4	底部外面 刻書 「十」(焼成後刻書)	
363	RA088	煙道入り口埋土中	10	平安	須恵器	坏	-	(14.5)	5.2	5.4	Rナデ	Rナデ	回転系切り	2/3	
364	RA088	g床直上/eカマド脇床直	10	平安	須恵器?	坏	-	(13.4)	(5.6)	4.8	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/3	
365	RA088	カマドw焼土上/c	10	平安	須恵系土器	坏	内	14.5	6.3	4.8	ミガキ	Rナデ→下 端 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	3/4	
366	RA088	t煙出埋土上層/煙道埋土	10	平安	土師器	甕 (極小)	-	(11.3)	(5.0)	(5.75)	Rナデ	Rナデ	回転系切り	2/3	
367	RA088	Q1埋土/カマド脇Pit s埋土下層/カマド埋土	10	平安	土師器	甕 (小)	-	14.1	-	(9.75)	ハケメ	ナデ	-	口縁部～体部 1/2	
368	RA088	Q1・Q2トレンチ/d下層	10	平安	土師器	甕 (小)	-	-	5.1	(6.5)	ナデ	ナデ	木葉痕	体部下端～底 部	
369	RA088	Q3床直	10	平安	須恵器	壺?	-	-	-	-	ケズリ	ケズリ?	体部下端～底 部	甕?・自然釉?	
376	RA089	は (貼下土坑P9)	10	平安	土師器	坏	内	14.9	5.2	5.5	ミガキ	Rナデ	回転系切り	4/5	
377	RA089	Q3貼床中/ (3層下位)/Q3貼床2号3号カマド間	10	平安	土師器	坏	内?	(13.6)	(5.6)	4.1	ミガキ?	Rナデ	回転系切り	1/3	
378	RA089	ね 床直	10	平安	土師器	坏	内	(13.8)	(6.0)	5.3	ミガキ	Rナデ 下 手持ちヘラケズ リ	回転系切り→ 手持ちヘラケズ リ	1/8	
379	RA089	3号カマド煙道埋土	10	平安	土師器	坏	内	-	6.0	(1.5)	ミガキ	Rナデ 下 手持ちヘラケズ リ	回転系切り→ 手持ちヘラケズ リ	体部下端～底 部	底部外面に墨書 「口(合カ)」
380	RA089	ま (貼床下)	10	平安	須恵器	坏	-	14.6	6.6	4.8	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/2	
381	RA089	せ 床直	10	平安	須恵器	坏	-	(14.6)	6.0	4.7	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/4	
382	RA089	つ/Q2 1層・ 2層・3層上位	10	平安	須恵器	坏	-	15.3	5.8	5.0	Rナデ	Rナデ	回転系切り	2/3	
383	RA089	そ P3さわ	10	平安	須恵器	坏	-	14.2	6.6	4.7	Rナデ	Rナデ	回転系切り	完形	
384	RA089	2号カマド煙道埋土/2号カマド煙道 と	10	平安	土師器	甕	-	-	7.6	(4.6)	ナデ	下端 ケズリ	木葉痕	体部下端～底 部	

IV 検出された遺構と遺物

掲載No	遺構	出土地点・層位	調査回数	時期	種別	器種	黒色処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考
385	RA089	い (4層下位)	10	平安	土師器	甕	-	-	-	<4.0>	ヨコナデ	ヨコナデ	-	口縁部破片	
386	RA089	Q3 1b層	10	平安	須恵器	壺?					ハケメ→ナデ	ケズリ	ナデ?	底1/4周	自然釉
387	RA089	Q1 1層/1号カマド埋土上 け	10	平安	須恵器	甕					当て具痕→ナデ	平行タタキ目→Rナデ		頸部破片	
395	RA091	No12	10	平安	土師器	坏	内	-	6.0	<2.2>	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	体部~底部破片1/3	
396	RA091	Q4貼床	10	平安	土師器	坏	-	-	-	-	Rナデ	Rナデ	-	体部破片	体部外面に墨書「口」(偏はくしめずへん)倒位
397	RA091	No3/カマド手前床直	10	平安	須恵器	坏	-	(15.8)	-	<4.95>	Rナデ	Rナデ	-	口縁部~体部1/3	
398	RA091	No15	10	平安	須恵器	坏	-	-	-	-	Rナデ	Rナデ	-	口縁部~体部下端破片	体部外面に墨書「口」正位
399	RA091	No14	10	平安	須恵系土器	坏	-	-	5.0	<2.0>	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底部破片	
400	RA091	No1	10	平安	土師器	耳皿	内外面の一部	(14.0)	5.6	<5.2>	ミガキ	ミガキ	不明	2/3	まだらに黒色
401	RA091	No6/No7/No9	10	平安	土師器	甕	-	(22.4)	-	<11.6>	ナデ	ナデ	-	口縁部~体部上半1/3	
402	RA091	No13	10	平安	土師器	甕	-	-	-	-	ナデ		ナデ 砂底?	底部	
403	RA091	No10	10	平安	須恵器	長頸瓶					Rナデ	Rナデ		口縁1/3周	胎土に黒い粒?
404	RA091	No5	10	平安	土師器	甕	-	-	(8.2)	<7.3>	ナデ	ケズリ	ナデ	体部下半~底部破片	
406	RA092	2d 床上5cm	10	平安	土師器	坏	内	13.6	5.8	5.8	ミガキ	Rナデ→下端手持ちヘラケズリ	回転糸切り→手持ちヘラケズリ	完形	体部外面に墨書「口/土」倒位 内外面上端に付着物
407	RA092	Q2	10	平安	土師器	坏	内	-	5.7	<2.3>	ミガキ	Rナデ	回転糸切り		刻書 底部外面「口」正位 「九カ」焼成前刻書
408	RA092	Q4貼床(外側)	10	平安	土師器	坏	内?	-	(6.0)	<2.1>	ミガキ	Rナデ→下端回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	体部下端~底部	
409	RA092	Q2 2層	10	平安	土師器	高台付坏	内	-	(7.7)	<4.7>	ミガキ	Rナデ	菊花状	体部~底部1/3	
410	RA092	Q1南ベルト5層・6層/Q2 1層・4層/Q2トレンチ	10	平安	土師器? 須恵系土器?	坏	内?	14.0	5.7	5.5	ミガキ? R?	Rナデ	回転糸切り	ほぼ完形	
411	RA092	e 6層/5層/床上1cm/床上1cm/k床上1cm/Q2 4層/Q4 貼床A/SN6Q付近 1b層	10	平安	須恵系土器	坏	-	14.2	6.0	5.0	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	ほぼ完形	
412	RA092	Q4貼床A/2m/Q3貼床(内)/Q3トレンチ	10	平安	須恵器	坏	-	(13.8)	(5.4)	4.4	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/4	
413	RA092	2c 床上3cm	10	平安	須恵器	坏	-	-	5.8	<2.5>	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底部破片	
414	RA092	Q1 3層/1号カマドPitc	10	平安	須恵器	坏	-	(15.8)	(6.0)	5.4	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/5	
415	RA092	Q4貼床(外)	10	平安	須恵器	坏	-	-	(6.2)	<4.6>	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	体部~底部1/4	
416	RA092	r床上1cm	10	平安	須恵器	坏	-	-	(5.7)	<1.9>	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底部破片1/4	底部刻書「十」焼成前刻書
417	RA092	e2y壁際埋土下層/g床上2cm/P5 2層/Q2 4層/Q4 根の攪乱	10	平安	須恵器	坏	-	(15.4)	6.0	5.6	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	4/5	
418	RA092	1号カマド エ・オ・ソ→ナ	10	平安	土師器	甕	-	(23.4)	-	<25.3>	ハケメ	ナデ→ケズリ	-	口縁部~体部下半	飯138と同一
419	RA092	1号カマド キ・ケ・サ/Q4 2層	10	平安	土師器	甕	-	(18.3)	-	<7.3>	ナデ	ナデ	-	口縁部破片1/4	飯136と同一
420	RA092	Q2 6層/カマド左そで埋土上/2oカマド埋土直上/2n・2rカマド埋土上/カマド埋土中/1号カマド イ・ウ・カ・ク・ケ・セ	10	平安	土師器	甕	-	-	-	<15.3>	ナデ	ケズリ	-	体部のみ3/4	飯135と同一
421	RA092	Q1貼床(外)	10	平安	土師器	甕	-	-	-	-	ハケメ	ナデ	-	口縁部破片	
422	RA092	北城渠部 1層/Q2 3層/Q1トレンチ	10	平安	土師器	甕?	-	-	-	-	ハケメ	ハケメ	-	口縁部破片	直立する口縁
423	RA092-RA093-RA098	RA092-d 4層/RA093-2号カマド煙出a・b・2号カマド脇Pit埋土/RA098-No7	10	平安	須恵器	壺?					カキメ→ハケメ	Rナデ→下半ケズリ		体1/3周以下	
424	RA092-RG032	RA092-y 2層/RG032-No1	10	平安	須恵器	甕					体平行タタキ目状・底ナデ	平行タタキ目	指なで?	体部下端~底部	
425	RA092	i 床上2cm/Q4 2層	10	平安	須恵器	壺?					ナデ	平行タタキ目→Rナデ	回転糸切り	底部1/4周	高台付
426	RA092	2b 2層	10	平安	須恵器	甕					Rナデ?	タタキ目→Rナデ?		口縁部破片	自然釉
427	RA092	2k 床上1cm	10	平安	須恵器	甕					当て具痕	平行タタキ目			胎土に黒い粒多い
428	RA092	2j 2層	10	平安	須恵器	甕					平行タタキ目状・底ナデ	平行タタキ目→ケズリ		体部破片	
429	RA092	Q1貼床(外)	10	平安	須恵器	甕					当て具痕→頭Rナデ	タタキ目→頭カキメ		頭~体部破片	
445	RA093	ふ	10	平安	土師器	坏	内	(14.1)	(7.0)	5.1	ミガキ	Rナデ 下手手持ちヘラ	回転糸切り→手持ちヘラケズリ	1/6	二度切り?
446	RA093	壁際ひ	10	平安	須恵器	蓋	-	横幅(7.65)	縦幅(7.5)	高(2.05)つまみ(2.2)	Rナデ	Rナデ	-		緑欠損
447	RA093	う 壁際	10	平安	須恵系土器	坏	-	(14.3)	(7.0)	5.95	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底部のみ1/4	
448	RA093	Pit3埋土/Pit3 な/1号カマド右袖/1号カマド左袖/Q4 1号カマド脇埋土下層	10	平安	須恵系土器	坏	-	(16.0)	7.4	(5.9)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/3	内黒?
449	RA093	壁際下層い	10	平安	須恵系土器	坏	-	14.5	6.7	5.2	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	ほぼ完形	
450	RA093	1号カマド左袖/b1号カマド左袖	10	平安	土師器	甕	-	-	-	-	ハケメ	ナデ	-	口縁部破片 凹の口唇部	
451	RA093	た	10	平安	土師器	甕	-	-	-	-	ハケメ	下端 ケズリ	砂底	底部破片	
452	RA093	つ 壁際1層	10	平安	土師器	甕	-	-	10.2	<4.8>	ハケメ	ケズリ	ナデ	体部下端~底部	
453	RA106-RA093	RA106-2号カマド煙道断面/RA093-Q1攪乱	10	平安	須恵器	壺?					カキメ→Rナデ	Rナデ		口~体1/3周以下	
454	RA093	き 1層/せ 2層/Q4トレンチ/Q4 1層/Q1攪乱/	10	平安	須恵器	壺?					Rナデ	平行タタキ目→Rナデ		体1/4周	外磨耗、内焼けはじけ?

掲載 No	遺構	出土地点・層位	調査 次数	時期	種別	器種	黒色 処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考
455	RA093	Q1複乱/複乱	10	平安	須恵器	壺					Rナデ	Rナデ		頭～肩1/4周	外底・内焼けは じけ?
457	RA094	No3/3層	10	平安	土師器	坏	内	(13.2)	(5.8)	(4.9)	ミガキ	Rナデ 下 手持ちヘラケズ リ	糸切り→手持 ちヘラケズリ	1/2	
458	RA094	No1/3層/複乱/カマド	10	平安	土師器	甕	-	(20.8)	-	<23.3>	ハケメ	ナデ ケズリ	-	口縁部～体部 下平	
459	RA094	No2	10	平安	須恵器	甕					Rナデ→カ キメ	Rナデ		口縁部破片	
462	RA095	No12/No24/1号カマド煙道下層	10	平安	土師器	坏	内	(13.4)	(6.2)	4.7	ミガキ	ナデ 下 手 持ちヘラケズ リ?	手持ち?ヘラケ ズリ	1/2	体部外面に墨書 [乙]横位 内 面に付着物
463	RA095	Q3中層	10	平安	土師器	坏	内	-	(5.4)	<1.7>	ミガキ	Rナデ→手持 ちヘラケズリ	回転糸切り	底部破片1/4	
464	RA095	No6	10	平安	土師器	坏	内?	-	(10.4)	<2.1>	ミガキ	手持ちケズリ	手持ちヘラケズ リ	底部破片1/8	内黒とんでいる
465	RA095	Q4貼床	10	平安	土師器	坏	内?	-	(7.4)	<2.8>	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	底部破片1/3	内黒とんでいる
466	RA095	No41	10	平安	土師器	高台 付? 坏	内	(14.0)	(4.8)	4.7	ミガキ	Rナデ	ヘラケズリ?キ ザミ	1/6	底部外面キザミ (爪?) 高台貼付 用?
467	RA095- RG028	RA095・Q4 2層/Q1中層/RG028	10	平安	須恵系土器	坏	-	(15.4)	-	<4.7>	Rナデ	Rナデ	-	1/3	
468	RA095- RG028	RA095・Q2上層/Q1下層/Q1 5層/No35/RG028	10	平安	須恵器	坏	-	15.0	5.5	4.7	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	ほぼ完形	底部外面キザミ 版180と同じか?た だし焼成後キザミ
469	RA096- RA095	RA096・No3～5/No8～13//カマド脇/Q3 下層/RA095 Q1・Q4サブトレ	10	平安	土師器	甕	-	21.6	9.05	35.8	ナデ	ナデ ケズリ	ナデ	口縁部～底部	
470	RA095- RG028	RA095・No2/No3/No12/No15～18/No22/No23/No26/No 29～32/カマド煙道1層/Q1中層/Q2 2層/Q4 5層・上 層/下層/RG028	10	平安	土師器	甕		23.2 25.2	-	<32.5>	ナデ	上端ナデ ケ ズリ	-	口縁部～体部 下端	
471	RA095	No4/No10/Q4 4層	10	平安	土師器	甕	-	(19.6)	-	<11.8>	Rナデ	Rナデ→ケズリ	-	口縁部～体部 上半破片	
472	RA095	No42/No44	10	平安	土師器	甕	-	-	10.6	<6.4>	ナデ	ケズリ	砂底?	底部～体部下 端	
473	RA095	Q1中層	10	平安	土師器	甕	-	-	(11.0)	<3.4>	ハケメ	ナデ	木葉痕	底部破片	
474	RA095	No7/No9	10	平安	須恵器	甕					平行タタキ 目状当て具 痕	平行タタキ目→ ケズリ		体部破片	自然釉・歪みあり
484	RA096	Q2 1層/Q3 上層	10	平安	土師器	坏	内?	14.0	7.4	4.7	ミガキ?	Rナデ	回転糸切り	4/5	
485	RA096	Q3上層	10	平安	土師器	坏	内	-	(6.0)	<1.0>	ミガキ	Rナデ→手持 ちヘラケズリ	回転糸切り	底部破片 2/3	
486	RA096	Q1サブトレンチ	10	平安	土師器	坏	内	-	(5.2)	<3.2>	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	底部破片1/4	
487	RA096	Q1 1層	10	平安	土師器	坏	不明	-	-	<1.4>	-	Rナデ	回転糸切り	底部破片1/3	底部外面に刻書 「十」(焼成前刻書)
488	RA096	No4/カマド脇	10	平安	須恵器	坏	-	(14.6)	5.5	5.35	Rナデ	Rナデ	回転糸切り?	1/4	
489	RA096	No2	10	平安	須恵器	坏	-	(13.6)	(6.1)	4.5	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/8	
490	RA096	Q3サブトレンチQ3上層・中層	10	平安	土師器	甕	-	(13.9)	-	<6.1>	ハケメ	ナデ	-	口縁部破片	
491	RA096- RG029	RA096・Q1下層/No1/RG029とRA096・トレンチ	10	平安	須恵器	壺					Rナデ	Rナデ	回転糸切り	体下半のみ一 周	胎土に5 大の砂
496	RA097	No11/No15/Q1床直/Q2下層/RA062Q2下層	10	平安	須恵系土器 ?須恵器?	坏	-	(14.7)	5.0	5.0	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/2	被熱
497	RA097	No6/Q4上層・貼床	10	平安	土師器	甕	-	-	-	-	ハケメ	ナデ	-	体部破片	
498	RA097	No1～3/No9/No15/Q1 1層/Q2 4層/Q4上層・貼床	10	平安	土師器	甕	-	(20.0)	-	<23.9>	ハケメ	ナデ	-	口縁部～体部 下端	
499	RA097	No12	10	平安	土師器	甕	-	-	(5.4)	<1.9>	Rナデ	Rナデ ケズリ	回転糸切り	底部破片2/3	
500	RA097	No13	10	平安	土師器	甕	-	-	-	-	-	-	砂底	底部破片	
506	RA098	No2	10	平安	土師器	坏	内	14.0	6.8	5.1	ミガキ	Rナデ下回転 ヘラ	回転糸切り→ 回転ヘラケズリ	ほぼ完形	
507	RA098	No17	10	平安	土師器	坏	内	(13.6)	(6.5)	5.1	ミガキ	Rナデ 下回転 回転?ヘラケズ リ	回転?ヘラケズ リ	1/4	
508	RA098	No1/No6	10	平安	土師器	坏	内?	(14.6)	(7.4)	5.2	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	1/2	
509	RA098	Pit2底面/Q2/RA062・Q2上層	10	平安	土師器	坏	-	(15.4)	(5.2)	5.0	ナデ	ナデ	回転糸切り	1/4	
510	RA098	Pit2	10	平安	土師器?須 恵系土器?	坏	不明	14.2	6.8	4.9	ミガキ?	Rナデ	回転糸切り	4/5	
511	RA098	Q2床直/Pit2底面/pit2	10	平安	須恵系土器	坏	-	14.3	6.8	4.5	不明	Rナデ	不明		
512	RA098	No3	10	平安	須恵器	坏	-	14.35	4.85	7.0	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	ほぼ完形	
513	RA098	No1	10	平安	須恵器	坏	-	14.3	7.0	4.9	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	完形	
514	RA098	No9/Q1 6層/Q4中層/Q4トレンチ中位	10	平安	須恵器	坏	-	14.3 ～14.6	6.8	5.0	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	ほぼ完形	
515	RA098	No20/No21/Q1上層/Q4中層	10	平安	土師器	甕	-	21.8	-	<24.7>	ハケメ	ハケメ	-	1/4	
516 ab	RA098	No1/Pit1	10	平安	土師器	甕 (小)	-	a 12.65 b	a - b	a <12.8> b <4.1>	ナデ	ナデ ケズリ?	ナデ	a 口～体部下 端及びb底部	
517	RA098	No4/No8/2号カマド煙道入口/Pit2/Q1貼床	10	平安	土師器	甕	-	(16.3)	8.8	30.05	ハケメ ナデ	ハケメ ナ ズリ	ナデ	1/4	
518	RA098	No16	10	平安	土師器	甕	-	-	9.4	<6.35>	ナデ	ナデ	木葉痕	体部下端～底 部破片	
519	RA098	No16土内より	10	平安	土師器	甕	-	-	(9.0)	<2.7>	ハケメ	ケズリ	砂底	体部下端～底 部破片	
520	RA098	カマド煙道底面/Q1 2層	10	平安	土師器	甕	-	-	(12.5)	<6.5>	ハケメ	ケズリ	木葉痕	体部下端～底 部破片	
521	RA098	No5	10	平安	土師器	甕	-	-	(5.0)	<5.1>	ハケメ	ケズリ	砂底ナデ	体部下端～底 部破片 1/3	
522	RA098	No10/RA062・Q1 1層	10	平安	須恵器	壺?					ナデ	ナデ	ナデ	底1/4周	
523	RA098- RA101	RA098・No14/RA101・No18/5N廃土	10	平安	須恵器	壺?					ハケメ→ナ デ	ケズリ	ナデ?	底1/4周以下	自然釉・胎土に黒 い粒顕著
530	RA099	No3/Q3サブトレンチ	10	平安	土師器	坏	内	(13.7)	(5.3)	5.1	ミガキ	Rナデ→ケズリ	回転糸切り	1/4	

IV 検出された遺構と遺物

掲載No	遺構	出土地点・層位	調査 次数	時期	種別	器種	黒色 処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考	
531	RA099	Q4サブトレンチ/Q4下層	10	平安	土師器	坏	内	(13.6)	(5.4)	5.8	ミガキ	Rナデ 上端ミ ガキ 下端手 持ちヘラケズリ	回転系切り	1/4		
532	RA099	No12/カマド内	10	平安	土師器	坏	内	(14.0)	(6.0)	5.0	ミガキ	Rナデ 手持 ちヘラケズリ?	ヘラケズリ	1/4		
533	RA099	No7/Q1下層	10	平安	土師器	坏	高台 付環	内外	(12.8)	—	<5.2>	ミガキ	ミガキ	回転?	3/4	
534	RA099	Q4埋土下層	10	平安	須恵器	坏		(14.4)	(7.4)	5.0	ナデ	ナデ	回転系切り	1/4		
535	RA099	No4/No8/No9/カマドそで	10	平安	土師器	甕	—	19.2	10.1	26.0	ナデ	ナデとケズリ	—	3/4		
536	RA099	カマドそで/No3/Q3 2層/Q4中層	10	平安	土師器	甕	—	20.8	13.3	31.8	ナデ	ナデ	—			
537	RA099	No3/Q4中層	10	平安	土師器	甕	—	(20.8)	—	<19.5>	ナデ	上ナデ 下ケ ズリ	—		口縁部～体部 下半	
538	RA099	No1/Q4下層	10	平安	土師器	甕	—	(9.4)	—	<5.2>	Rナデ	Rナデ	—		口縁部から体 部中位1/3	
539	RA099	No5	10	平安	土師器	甕	—	(14.6)	—	<10.2>	Rナデ	Rナデ	—		口縁部～体部 中位 破片	
540	RA099	No6	10	平安	土師器	甕	—	—	—	—	ハケメ	ナデ	—		口縁部～体部 中位 破片	
541	RA099	No2	10	平安	土師器	甕	—	—	—	—	ナデ	ナデ 下半ケ ズリ	—		口～体中位	
545	RA100	Q4トレンチ埋土	10	平安	土師器	坏	内	—	(5.8)	<1.3>	ミガキ	Rナデ下→回 転ヘラ	回転系切り→ 回転ヘラケズリ		底部破片1/3	
546	RA100	Q3トレンチ埋土	10	平安	須恵器	坏	—	—	5.25	<1.15>	Rナデ	Rナデ	回転系切り		底部のみ	
547	RA100	カマドP1	10	平安	土師器	甕	—	—	—	—	Rナデ	Rナデ→ケズリ	—		口縁部破片	
548	RA100- RA102	RA100・Q1下層/RA102・No1	10	平安	須恵器	甕					当て具痕	平行タタキ目			体部破片	
552	RA101	No1	10	平安	土師器	坏	内	13.4	6.7	4.95	ミガキ	Rナデ 下回 転ヘラケズリ?	回転系切り→ 回転ヘラケズリ?	2/3		
553	RA101	No6	10	平安	須恵系土器	坏	不明	(13.4)	(7.1)	4.8	ミガキ?	Rナデ	回転系切り	1/4		
554	RA101	No19	10	平安	須恵系土器	坏	—	13.5	6.5	4.4	Rナデ	Rナデ	回転系切り			
555	RA101	No13/No16	10	平安	須恵系土器	坏	—	(14.2)	(6.4)	4.7	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/2		
556	RA101	No2	10	平安	須恵器	坏	—	(15.4)	—	<4.5>	Rナデ	Rナデ	—	1/8 破片	化境土?外一白色 内一灰色(口縁 部一白色)	
557	RA101	No2	10	平安	土師器	甕	—	(21.4)	—	<5.5>	ハケメ	ナデ	—		口縁部～体部 上端	
558	RA101	No3	10	平安	土師器	甕	—	(10.0)	—	<7.2>	ハケメ	ハケメ	—		口縁部～体部 上端	
559	RA101	No7	10	平安	土師器	甕	—	(21.8)	—	<9.0>	ハケメ	ナデ	—		口縁部～体部 上半	
560	RA101	No9	10	平安	土師器	甕	—	(22.2)	—	<5.4>	ハケメ	ナデ	—		口縁部～体部 上端	
561	RA101	No5	10	平安	土師器	甕	—	—	(10.2)	<2.6>	ナデ	ナデ	砂底		底部破片	
562	RA101	No4/カマド熱焼部	10	平安	土師器	甕	—	14.6	—	<9.3>	Rナデ	Rナデ	—		口縁部～体部 上半	
563	RA101	No2	10	平安	土師器	甕	—	(13.0)	—	<6.0>	Rナデ	Rナデ	—		口縁部～体部 上端	
564	RA101	No12	10	平安	須恵器	甕					当て具痕	平行タタキ目			体部破片	
568	RA102	No9	10	平安	土師器	坏	内	13.2	6.2	5.0	ミガキ	Rナデ 下回 転ヘラケズリ	回転系切り→ 回転ヘラケズリ		完形	
569	RA102	Q1 3層	10	平安	土師器	坏	内	—	6.2	<2.5>	ミガキ	Rナデ 下回 転ヘラケズリ	回転系切り		底部のみ2/3	
570	RA102	Pit内出土 No13	10	平安	土師器	坏	内	(13.8)	(6.4)	5.0	ミガキ	Rナデ	回転系切り	1/5		
571	RA102	No12/Q2埋土	10	平安	須恵器	坏	—	(15.8)	(5.9)	5.1	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/3		
572	RA102	No11	10	平安	須恵器	坏	—	(7.0)	(6.8)	5.0	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/3		
573	RA102	No8/Q3 1層・3層/Q2	10	平安	須恵系土器	坏	—	(14.4)	—	<4.1>	Rナデ	Rナデ	—		口縁部のみ1/2	
574	RA102	No10	10	平安	土師器	甕	—	—	(15.0)	<4.5>	ナデ	ナデ	砂底		体部下端～底 部	
575	RA102	No2 1層	10	平安	須恵器	瓶?					Rナデ→ナ デ	ケズリ	ナデ			
578	RA103	カマド支脚P26	10	平安	土師器	坏	内	13.6	6.2	5.1	ミガキ	Rナデ上ミガキ 下手持ちヘラ ケズリ	手持ちヘラケ ズリ		ほぼ完形	
579	RA103	土坑1埋土下層P27/北側までP25/Q1床面/北袖	10	平安	土師器	坏	不明	(13.6)	6.5	5.5	ミガキ	Rナデ	回転系切り		ほぼ完形	
580	RA103	Q2 P5 6層	10	平安	土師器	高台 付環	内外	—	(6.3)	<2.5>	ミガキ R ナデ	ナデ	ナデ		台部破片	
581	RA103	Q2 P6 6層/Q2 P8 壁際8層/Q2床直/Q2 P13 6層	10	平安	須恵器	坏	—	14.1	6.8	4.8	Rナデ	Rナデ	回転系切り		ほぼ完形	
582	RA103	Q2 P12 6層/Q1 P15 床直	10	平安	須恵器	坏	—	14.6	7.6	4.5	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/2		
583	RA103	Q1	10	平安	須恵器	坏	—	(14.4)	(5.4)	5.2	Rナデ	Rナデ	回転系切り		口縁部のみ1/4	
584	RA103	Q2 P9 8層	10	平安	須恵系土器	坏	—	—	(6.2)	<3.5>	Rナデ	Rナデ	回転系切り		体部～底部の 破片1/2	
585	RA103	Q3南サブトレ埋土上層	10	平安	土師器	甕	—	—	—	—	ナデ	ナデ	—		体部小破片 外部刻線	
586	RA103	P29 4層上面	10	平安	土師器	甕	—	(19.8)	—	<16.4>	ハケメ	ハケメ	—		口縁部～体部 上半	
587	RA103	Q2・P3 6層/P10 6層/P2 6層/P11 6層/P4 8層/埋土下位/P1 6層	10	平安	土師器	甕	—	(20.0)	—	<20.0>	ハケメ ナ デ	ナデ	—		口縁部～体部 下半	
592	RA104	No1(1層下部?)/Q1下層/1層下部	10	平安	土師器	坏	内	15.8	5.9	5.05	ミガキ	Rナデ 下回 転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ		ほぼ完形	
593	RA104	No5(5層上部)/Q2トレンチ/4層	10	平安	土師器	坏	内	(12.8)	6.0	5.1	ミガキ	Rナデ 下 手 持ちヘラケズリ	回転系切り	2/3	底部外面に墨書 「九」	
594	RA104	Q4下層・上層・トレンチ	10	平安	土師器	坏	内	(13.6)	5.6	5.0	ミガキ	Rナデ→手 持ちヘラケズリ	回転系切り	2/3	底部外面に墨書 「九」	
595	RA104	5層	10	平安	土師器	坏	内	—	5.8	<1.8>	ミガキ	Rナデ→手 持ちヘラケズリ	回転系切り		体部下端～底 部 底部外面に墨書 「九」	

掲載No	遺構	出土地点・層位	調査回数	時期	種別	器種	黒色処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考
596	RA104	Q3上層/2層/Q2トレンチ	10	平安	土師器	坏	内	14.2	(6.2)	5.5	ミガキ	Rナデ 下手持ちヘラズリ	回転糸切り	1/3	
597	RA104	Q1サブトレンチ/No2(4層上面)	10	平安	土師器	坏	-	14.9	7.0	6.5	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	4/5	
598	RA104	No3 5層上面床直	10	平安	須恵器	坏	-	13.8	6.4	4.5	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	完形	
599	RA104	1層	10	平安	須恵器	坏	-	(13.8)	(7.0)	4.2	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/5	
600	RA104	Q1下層上面/Q1サブトレンチ/2層/4層	10	平安	須恵器	壺					カキメ	体下カキメ→Rナデ		1/2周以下	体、自然釉
601	RA104	No4(4層下部)	10	平安	須恵器	長頸瓶?					ハケメ、カキメ→Rナデ	カキメ→ケズリ	放射状痕跡	1/4周以上	高台付・胎土黒い粒
602	RA104	Q2検出面・トレンチ・上下層・上層/Q1最下層?	10	平安	須恵器	壺					カキメ→Rナデ	カキメ→下半ケズリ		1/3周以下	ケズリ、ナデ的・自然釉?
603	RD168・RA104	RA104・Q2検出面/RD168・半裁時埋土	10	平安	須恵器	甕					当て具痕	平行タタキ目		体部破片	自然釉
604	RA104	Q2上下層/4層	10	平安	須恵器	甕					平行タタキ目状当て具痕	平行タタキ目		体部破片	胎土黒い粒?・二次的スス付着?
606	RA105	Q1床直・1層・2層/Pit1埋土	10	平安	土師器	甕	-	-	(11.8)	<13.7)	ハケメ	ナデ	木葉痕 砂底?	体部下半~底部	
607	RA106	い/2号カマド煙道下位/Q1 1層/Q2 2b層	10	平安	土師器	坏	-	(14.8)	-	(4.2)	Rナデ	Rナデ	-	口縁部~体部1/3	
608	RA106	七 3号カマド煙道埋土/ス 3号カマド煙道埋土/3号カマド煙道埋土	10	平安	須恵系土器	坏	-	-	6.1	<2.8)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	体部~底部1/2	
609	RA106	タ Pit10埋土1層下位/サ 3号カマド煙道埋土/Q1貼床	10	平安	須恵系土器	坏	-	(15.4)	6.0	5.2	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	2/3	
610	RA106	あ	10	平安	須恵器	坏	-	(14.7)	(7.0)	4.95	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/6	
611	RA106	埋土下層 ん・ア・イ・ウ	10	平安	土師器	甕	-	(24.4)	-	(12.8)	ナデ	Rナデ→ケズリ	-	口縁部~体部上半	
612	RA106	く	10	平安	土師器	甕	-	(19.0)	-	(4.8)	Rナデ	Rナデ	-	口縁部破片	
613	RA106	こ	10	平安	須恵器	甕?	-	-	(8.4)	(8.3)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	体部下半~底部の破片	
614	RA106	1号カマド埋土へは 1号カマド埋土/ま 1号カマド/ぬ 1号カマド左Pit上層/わ 埋土下層/壁際床直エ/1号カマド支脚直上/Q2床直/2号カマド煙道下位	10	平安	須恵器	壺?					Rナデ→ナデ	Rナデ→下部ケズリ		体1/3周以下	二次焼成?で赤褐色に
615	RA106	そ/床直 ク/Q2床直/・2b層/Q2トレンチ/Pit10 ナ1層/検出面	10	平安	須恵器	壺					Rナデ→ナデ	Rナデ→ケズリ→Rナデ		体1/4周以下	
637	RD153	RD153・底面/1層壁際/埋土上層/埋土最上層/RA057・Q1西ベルト1層/RA057・周辺I b層/4N~4O・II層	10	平安	土師器	大型坏	内	(20.0)	6.6	(8.6)	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	1/3	
638	RD155	P1	10	平安	土師器	甕	-	-	8.0	<2.9)	ハケメ	ナデ	ナデ	底部	
639	RD156	南側埋土東側	10	平安	土師器	甕	-	-	-	-	ナデ	ナデ	-	口縁部破片1/6	
640	RD158写真のみ	bブロック/cブロック/eブロック/fブロック/埋土	9	平安	土師器	甕								20破片	
641	RD160	埋土中位/拡張部上層	9	平安	須恵器	坏	-	14.8	5.7	5.8	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/2	
642	RD162	P2底直/北側4層	10	平安	土師器	坏	内	13.7	6.0	4.8	ミガキ	Rナデ 下手持ちヘラズリ	回転糸切り→手持ちヘラズリ	2/3	
643	RD162	P1 4層/埋土中位	10	平安	須恵系土器	坏	-	(14.4)	6.1	5.2	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	1/5	
644	RD162	北側4層/P2底直	10	平安	須恵系土器	坏	-	(17.6)	-	(5.2)	Rナデ	Rナデ	-	口縁部のみ1/5	
646	RD163	No1	10	平安	須恵器	坏	-	14.7	7.0	4.7	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	ほぼ完形	
647	RD166	P1埋土下位	10	平安	土師器	坏	内	-	(5.7)	<1.9)	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	体部下~底部1/2	
648	RD166	P2 4層	10	平安	土師器	坏	内	-	6.3	<1.5)	ミガキ	Rナデ	回転糸切り	底部のみ	
649	RD166	P3 4層	10	平安	須恵器	坏	-	-	(6.4)	(2.4)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	体部下~底部1/3	被熱?
650	RD167	Q1 2層/Q4 1層	10	平安	須恵系土器	坏	-	-	(6.5)	(3.55)	Rナデ	Rナデ	-	口縁部小破片	飯472と同一?
651	RD167	Q4 上層/ベルト2層	10	平安	須恵系土器	坏	-	-	-	-	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	体部~底部1/5	被熱?飯471と同一?
653	RD172	埋土	10	奈良?	土師器	坏	内	-	-	(4.4)	ミガキ	ナデ、ヘラズリ	-	5%	
655	RD173	2、3層の間	10	平安	土師器	坏	内	(14.6)	(6.4)	(4.4)	ミガキ	Rナデ 下手持ちヘラズリ	手持ちヘラズリ?	1/4	
656	RD173	2、3層の間	10	平安	土師器	坏	内	-	6.0	<1.0)	ミガキ	ナデ	回転糸切り	底部のみ	
657	RD173	の 5層	10	平安	須恵系土器	坏	-	(14.2)	(6.4)	5.3	ナデ	ナデ	手持ちヘラズリ?	1/4	飯488に類似
658	RD173	2、3層の間	10	平安	須恵系土器	坏	-	(14.0)	-	(4.3)	Rナデ	Rナデ		口縁部のみ1/4	
660	RD175・RD177	RD175・埋土/RD177・埋土	10	平安	土師器	甕									
661	RD175	埋土	10	平安	土師器	甕(小)	-	(12.0)	-	(3.7)	ナデ	ナデ	-	口縁部破片	
662	RD177	埋土	10	平安	土師器	坏	内	(14.0)	-	(4.5)	ミガキ	Rナデ	-	口縁部1/3	
663	RD177	埋土	10	平安	土師器	坏	内	-	(16.6)	(2.2)	ミガキ	Rナデ 下手持ちヘラズリ	手持ちヘラズリ	底部のみ1/3	
664	RD177	埋土		平安	土師器	甕									
665	RD181	P床直	10	平安	土師器	甕	-	-	(9.0)	(4.3)	ハケメ	ケズリ	木葉痕	体部下端~底部	
666	RD182	埋土	10	平安	土師器	高台付坏	内	-	(8.4)	(2.5)	ミガキ	Rナデ	不明	高台部のみ破片1/2	
667	RD188	1層下位	10	平安	土師器	甕	-	-	-	-	ハケメ	ナデ	-	口縁部破片	
668	RD195	西埋土上	9	平安	土師器	高台付坏	内	-	(8.0)	(2.3)	ミガキ	-	回転糸切り後高台付	底部破片1/4	
669	RD196	埋土	10	平安	土師器	甕	-	-	(6.4)	(3.55)	ハケメ	ナデ	木葉痕	底部1/8	
670	RD197	埋土	10	平安	土師器	甕(小)	-	(14.0)	-	(5.0)	Rナデ	Rナデ	-	口縁部破片	口縁部外側にスス
671	RD199	埋土	10	平安	須恵系土器	坏	-	-	5.85	(1.05)	Rナデ	Rナデ	回転糸切り	底部のみ	

掲載No	遺構	出土地点・層位	調査回数	時期	種別	器種	黒色処理	口径	底径	器高	内面調整	外面調整	底面調整	残存状況	備考
673	RD202	埋土	10	平安	土師器	甕	—	—	—	—	ナデ	ナデ	—	口縁部～体部破片	
675	RD205	No1	10	平安	土師器	坏	内	(13.8)	—	<4.4>	ミガキ	Rナデ	—	口縁部破片1/6	
679	RG022	埋土	10	奈良	土師器	甕	—	—	—	<5.1>	ハケメ、ナデ	ハケメ	—	5%未満	
680	RG023	埋土	9	平安	須恵器	坏	—	(15.0)	(6.3)	<4.45>	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/5	
682	RG025	埋土中位	10	奈?	土師器	甕	—	—	—	<8.05>	ハケメ	ハケメ	—	5%未満	
683	RG028	埋土	10	平安	土師器	坏	内	—	(7.0)	<2.2>	ミガキ	Rナデ→手ヘラ	手持ちヘラズリ	底部のみ1/3	
684	RG030	No1	10	平安	土師器	坏	内	—	(5.6)	<2.5>	ミガキ	Rナデ	回転系切り	体部下端～底部1/2	
685	RG030	No2	10	平安	土師器	坏	—	—	6.7	<2.1>	Rナデ	R	回転系切り	底部のみ	
686	RG030	No3	10	平安	須恵器	坏	—	(14.6)	(3.3)	4.1	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/4	
687	RG032	埋土	10	平安	土師器	坏	内	—	(5.6)	<1.18>	ミガキ	Rナデ	回転系切り	体部～底部1/2	
688	RG032	埋土	10	平安	須恵器	壺	—	—	—	—	ハケメ	ケズリ	ナデ	底1/4周	
689	RG039	埋土上位	10		陶器										
690	RG039	検出面/II層3M15V	10		陶器										
691	RG039	埋土/3M17～18	10		陶器										
692	RG039	埋土	10		磁器										
693	RG039	東ベルト埋土	10		磁器										
694	RZ011	3M埋土	10		磁器										
708	柱穴	PP3・埋土	10		須恵器	甕	—	—	—	—	当て具痕→Rナデ	平行タタキ目→Rナデ	—	口1/4周	自然物?胎土に黒い粒?
709	柱穴	PP121・埋土	10	平安	土師器	甕	—	—	—	—	ハケメ	ケズリ	—	口縁部のみ	
734		4N21y・風割木IIb層/40市トレ1～2間 II層	10	奈良	土師器	坏	内	(15.3)	—	<5.1>	ミガキ	ミガキ	—	35%	
735		4NCプラン?・IIb層攪乱/4N22a攪乱/4NIIa層	10	奈良	土師器	坏	内	(13.8)	—	(4.5)	ミガキ	ミガキ	—	20%	
736		4N・IIa層/IIb層/4N	10	奈良	土師器	坏	内	(17.7)	—	<4.1>	ミガキ	ミガキ、ナデ?	—	10%	
737															
738		4N・IIa層/土器集中部AQ1 II層/土器集中部AQ3 II層/市教委トレ3埋土/4N東より(市トレと3間)土器集中II層中	10	奈平?	土師器	球鬮甕	—	—	(8.4)	<5.7>	ハケメ	ナデ	ナデ	体部下端～底部破片	
739		4N・市トレ・IIa層/4N南側・IIa層/4N(市トレと3の間)IIb層//	10	奈平?	土師器	甕	—	—	—	<6.0>	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	
740		4N9g・IIb層直上/4N10g・木根跡?	9	平安	土師器	坏	内外	(19.6)	(7.1)	(7.0)	ミガキ	Rナデ	回転系切り	1/4	底部外面に墨書「王」
741		4N18i・攪乱/4N7K IIb層	9	平安	土師器	高台付坏	内外	(15.6)	(8.0)	6.1	ミガキ	Rナデ	回転系切り→高台取付	1/4	
742		RA055-Q1 2層/Q2 2層/Q3 2層/4N・II層/4N・IIb層上面/4N(市トレと3の間)IIa層	10	平安	土師器	坏	内外	(15.2)	5.7	(5.1)	ミガキ?	ミガキ	ミガキ	1/4	
743		4N7k・IIb層	9	平安	須恵系土器	坏	—	(14.3)	5.1	5.0	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/3	体部外面に墨書「正」位
744		調査区中央攪乱大溝	10	平安	須恵系土器	坏	不明	(14.2)	7.0	4.8	ミガキ? Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/3	
745		5N・攪乱(RA087東)	10	平安	須恵器	坏	—	(13.8)	5.8	5.0	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/4	
746		RA055・トレンチ埋土/Q2西ベルト 5層/Q2 3層上半	10	平安	須恵器	坏	—	(14.4)	(7.4)	4.9	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/4	
747		RA062-Q1 2層・上層・中層/カマド周辺	10	平安	須恵器	坏	—	(14.5)	(6.8)	4.6	Rナデ	Rナデ	回転系切り	1/3	
748		4N・IIa層/土器集中部A II層/土器集中A Q1 II層//	10	平安	土師器	壺	—	(11.7)	—	<15.5>	ヨコナデ	ミガキ ナデ	—	口縁部～体部上半	
749		4N23y・IIa層/RA089-Q4 1層/か 3層/攪乱/RA103-Q1豊原埋土下位/カマド北袖P21/北袖直上P24/北袖P23/土器集中A Q1 II層	10	?	須恵器	甕	—	—	—	—	Rナデ→ナデ	Rナデ	—	口4/5周以下	摩耗・整形から考える壺?
750		土器集中部B/4N IIa層/5N～40・市トレ内1内埋土	10	?	須恵器	長頸甕	—	—	—	—	Rナデ?	Rナデ?	—	頸のみ2/3周	自然物多く調整不明
778	遺構外	4N・IIa層	10	奈平?	土師器	球鬮甕?	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	口縁部と口唇部の粘土紐貼り付け部分の口縁部側にキザミ 779～784と同一個体
779	遺構外	4N・IIa層/土器集中区A II層	10	奈平?	土師器	球鬮甕?	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	口縁部と口唇部の粘土紐貼り付け部分の口縁部側にキザミ 778～780、780～784と同一個体
780	遺構外	4N・土器集中区II層	10	奈平?	土師器	球鬮甕?	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	口縁部と口唇部の粘土紐貼り付け部分の口縁部側にキザミ 778、779、781～784と同一個体
781	遺構外	4N・II層	10	奈平?	土師器	球鬮甕?	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	口唇部との貼り付け部分にキザミ 778～780、782～784と同一個体
782	遺構外	4N・IIa層/土器集中区A II層	10	奈平?	土師器	球鬮甕?	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	口縁部との貼り付け部分に凸状のキザミ 778、781、783と同一個体
783	遺構外	4N・IIa層	10	奈平?	土師器	球鬮甕?	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	口唇部との貼り付け部分にキザミ 778～782、784と同一個体
784	遺構外	4N・土器集中区A II層	10	奈平?	土師器	球鬮甕?	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	—	口縁部破片	口縁部との貼り付け部分に凸状のキザミ 778～783と同一個体
785	遺構外	4N・IIb層	10	奈平?	土師器	球鬮甕?	—	—	—	—	ハケメ	ナデ	—	口縁部破片	破片下位の接合面に凸状のキザミ

第12表 石器・石製品観察表

掲載No	器種	出土遺構	出土地点・出土層位	石質	長さ	幅	厚さ	重量(g)	残存	備考	次数
9	錐形石器	RA052	検出面	頁	(6.2)	2.3	1.6	12.29	先端部欠	縦長剥片素材	10
10	スクレイパー	RA052	検出面	頁	6.8	4.95	1.85	69.52			10
11	剥片	RA052	Q1 埋土下層	頁	(00.60)	(03.30)	(00.40)	00000.86	—		10
12	剥片	RA052	検出面	頁	(4.8)	3.5	0.7	7.36	—		10
13	剥片	RA052	検出面	頁	6.4	4.8	1.9	41.64	—		10
14	加工痕のある礫	RA052	床面直上 No4	頁	(12.9)	(5.7)	1.3	176.00			10
21	磨石	RA054	Sそ	安	10.1	7.5	6.6	725.00	完形		9
22	磨石	RA054	Sき	安	(6.3)	(9.5)	(3.5)	269.00	半欠		9
23	磨石	RA054	Sお	安	(7.2)	(7.1)	3.6	234.00	破砕礫	被熱	9
24	磨石	RA054	Sと	閃	10.6	(8.6)	(2.2)	232.00	半欠		9
25	台石	RA054	Sし	砂	(6.5)	(8.7)	(2.6)	203.00	破砕礫	被熱(赤)	9
38	砥石	RA055	Q3 3層	安	(5.0)	(4.2)	(2.9)	47.44	破砕礫	少なくとも一面使用	10
39	砥石	RA055	トレンチ 埋土	安	(5.2)	(3.8)	(4.1)	37.61	破砕礫	少なくとも二面使用	10
49	砥石	RA057	Q1南ベルト 2層	安	(3.3)	(3.0)	(1.8)	9.00	破砕礫	二面使用	10
50	砥石?	RA057	Q1南 1層	安	(9.7)	(7.3)	(7.8)	693.00	部分	一面使用	10
60	凹石	RA059	床面	砂	11.7	5.1	4.3	287.86		凹部1箇所	10
61	凹石	RA059	南西 埋土上～中層	安	(9.3)	7.0	4.6	179.65	略完形	凹部3箇所	10
70	磨石	RA061	床下土坑2 埋土	凝	4.3	3.8	3.0	47.00	完形		10
71	磨石	RA061	9層	テ	10.3	8.8	6.3	903.24	完形		10
72	砥石	RA061	3層	凝	(1.4)	(2.3)	(1.5)	3.96	破砕礫	少なくとも一面使用	10
80	UF	RA062	Q2 埋土下層	頁	(4.1)	2.9	0.7	5.27	打面側欠		10
81	砥石	RA062	Q2 撥乱	粘	(6.4)	(2.1)	0.4	7.34	一部	二面使用、線条痕有	10
113	台石	RA064	Q4 埋土中層	テ	(15.0)	14.3	(11.0)	4500.00	半欠	被熱(赤)	10
114	砥石	RA064	Q3焼土ブロック面	安	(17.45)	(8.1)	(4.45)	470.00	半欠	二面使用	10
115	砥石	RA064	Q3 埋土下層	安	(14.6)	(13.0)	10.8	1300.00	大・部分	少なくとも一面使用	10
116	砥石	RA064	北ベルト 埋土上層	安	9.7	9.8	4.8	405.00	略完形	一面使用	10
140	砥石	RA068	Q2 埋土上層	安	(5.5)	(7.6)	(4.2)	72.91	破砕礫	少なくとも一面使用	10
141	不明	RA068	Q1 埋土上層	安	6.4	7.9	5.7	306.00	完形	石錘?	10
145	砥石	RA069	床面	安	(10.8)	11.6	6.6	380.00	大・部分	五面使用	10
167	磨石	RA071	Q2トレンチ	砂	9.2	7.7	5.6	395.00	完形	部分使用	9
168	砥石	RA071	カマド袖上	テ	11.4	9.6	4.3	521.00	大・部分	五面使用、欠損後も使用	9
192	砥石	RA075	カマド袖	安	(23.7)	(20.7)	(10.1)	2520.00	大・部分	六面使用	9
200	磨石	RA076	南ベルト 床直	砂	(9.2)	9.2	4.4	411.49	略完形	被熱	9
201	砥石	RA076	西ベルト 1層	凝	(4.5)	(4.5)	(3.4)	30.00	破砕礫	多面使用	9
202	砥石	RA076	カマド周辺 7層	凝	(3.9)	(3.5)	(2.0)	11.00	破砕礫	少なくとも一面使用	9
232	台石	RA078	カマド	※	21.3	24.3	11.3	6500.00	略完形	被熱、破砕礫素材?	9
233	台石	RA078	カマド	テ	19.7	(14.5)	4.8	1760.00	半欠	被熱(赤)	9
234	砥石	RA078	カマド	安	(15.1)	(14.5)	(9.1)	1300.00	部分	一面使用	9
242	磨石	RA079	Q2 埋土下層	安	8.3	5.7	3.7	212.00	完形		9
243	磨石	RA079	Q1 埋土下層	安	10.8	8.4	5.0	493.00	完形	使用頻度低	9
262	磨石	RA080	2号カマド煙出し 底部	安	9.8	8.4	6.6	769.00	完形	使用面部分	10
263	砥石	RA080	1号カマド煙出し 底部	安	(7.8)	(10.7)	(9.6)	419.00	部分	三面使用、線条痕有	10
264	砥石?	RA080	Q1 3層	安	(3.3)	(3.2)	(3.1)	12.46	破砕礫		10
298	台石	RA081	カマド前 床直	安	—	—	—	21000.00	略完形	台石?	10
299	砥石	RA081	南西隅 床直	安	(18.0)	(19.1)	11.4	2320.00	半欠	九面使用	10
300	砥石	RA081	Q1 5層	テ	(5.7)	(4.1)	(3.4)	105.00	部分	五面使用	10
301	砥石	RA081	P1 埋土下層	頁	13.7	9.3	4.0	487.12	完形	三面使用、線条痕有	10
313	磨石	RA082	埋土	テ	9.2	7.0	4.1	391.00	完形		10
314	磨石	RA082	埋土	砂	12.2	(6.2)	4.8	546.00	半欠		10
315	砥石	RA082	埋土	安	16.4	6.0	4.9	705.00	略完形	三面使用、棒状	10

掲載 No	器種	出土遺構	出土地点・出土層位	石質	長さ	幅	厚さ	重量(g)	残存	備考	次数
316	砥石	RA082	埋土	安	(7.0)	(5.0)	(2.3)	94.00	破砕礫	二面使用	10
328	剥片	RA084	攪乱	黒	(1.9)	(2.0)	(0.75)	2.78	—		10
329	磨石	RA084	Q1	安	10.3	8.1	5.5	544.00	完形	砥石か	10
330	磨石	RA084	Q1	安	10.3	7.4	5.2	434.00	完形	使用頻度低、砥石か	10
336	砥石	RA085	S2 カマド袖芯材	安	20.2	24.8	15.3	2770.00	大・部分	少なくとも七面使用	10
337	砥石	RA085	煙出し 15層	安	12.8	12.7	10.7	1490.00	完形	一面使用	10
345	石斧	RA086	S3 埋土	閃	(10.1)	(6.6)	3.2	276.94	刃部欠損		10
346	磨石	RA086	土坑1 2層	安	(6.7)	5.6	4.0	190.02	部分欠		10
347	台石?	RA086	S2 床直	安	—	—	—	1210.00	破砕礫	被熱(黒)、多数	10
348	砥石	RA086	S1 埋土	安	18.7	(12.7)	10.7	2280.00	半欠	三面使用、線条痕有	10
349	砥石	RA086	土坑1 東側埋土中層	安	(9.5)	(6.4)	(5.8)	178.48	破砕礫	多面使用	10
356	UF	RA087	Q2 埋土中層	頁	3.5	3.2	1.0	8.56			10
357	磨石	RA087	Q4 埋土下層	安	8.9	7.2	6.2	406.00	完形		10
370	RF	RA088	Q1トレンチ	頁	2.4	3.0	1.2	4.83		覆面に挟入状の調整痕	10
371	磨石	RA088	煙出し 埋土	安	10.5	10.4	6.5	733.00	完形	被熱	10
372	砥石?	RA088	Q4 埋土	安	(3.1)	(3.0)	(1.8)	6.00	破砕礫		10
389	砥石	RA089	3号カマド 4層	安	(12.7)	7.0	(5.4)	224.00	部分	四面使用、深い線条痕有	10
390	砥石	RA089	Q3 1b層	粘	(6.85)	(7.4)	0.3	27.36	部分	二面使用、線条痕有	10
405	砥石	RA091	カマド北袖	安	(22.8)	(24.5)	(14.3)	4000.00	大・部分	少なくとも五面使用	10
430	磨石	RA092	Q3 3層	安	9.2	7.9	5.2	451.24	略完形		10
431	磨石	RA092	Q1トレンチ	テ	8.4	5.6	4.4	260.61	完形		10
432	磨石?	RA092	Q1・Q2埋土	砂	(12.4)	(6.9)	4.1	367.92	一部欠	付着物	10
433	砥石	RA092	埋土	安	(23.4)	14.5	(13.9)	2950.00	欠損部も使用	三面使用、側面整形	10
434	砥石	RA092	不明	安	(24.0)	(14.9)	13.5	3030.00	欠損部も使用	九面使用	10
435	砥石?	RA092	Q1・Q2トレンチ	テ	11.6	6.9	3.9	360.31	完形	二面使用	10
436	砥石	RA092	P7	安	(7.9)	(6.1)	(2.35)	45.29	破砕礫		10
437	砥石?	RA092	1号・2号カマド付近 貼床	安	(2.9)	(2.2)	(2.5)	9.61	破砕礫		10
460	砥石	RA094	No4	安	(13.9)	(12.6)	(8.4)	829.00	大・部分	二面使用、線条痕有	10
461	砥石	RA094	No5	安	(13.6)	(11.9)	(10.5)	1198.19	破砕礫	二面使用	10
476	スクレイパー	RA095	Q4 3層	頁	3.8	3.2	1.0	8.50	—		10
477	両面調整石器	RA095	Q2 埋土中層	頁	4.5	3.9	1.1	16.00			10
478	砥石	RA095	No46	安	(21.9)	(20.7)	7.3	1952.00	半欠	二面使用、線条痕有、赤色付着物有	10
479	砥石	RA095	2号カマド煙出し	安	(8.1)	(6.2)	(6.1)	171.00	破砕礫	少なくとも三面使用、線条痕有	10
480	砥石	RA095	Q2 埋土中層	安	(5.2)	(4.1)	(2.4)	20.06	破砕礫	少なくとも一面使用	10
492	石鏃	RA096	Q1 5層	頁	3.2	1.1	0.45	1.08	完形		10
493	砥石	RA096	No14	安	(15.2)	(12.4)	7.8	879.00	半欠	三面使用	10
494	砥石	RA096	Q1サブトレンチ	安	(5.3)	(4.8)	(3.4)	41.00	破砕礫	一面使用	10
503	砥石?	RA097	No15	安	(3.0)	(2.2)	(0.8)	2.75	破砕礫		10
504	鉄砧石	RA097	No17	安	(17.8)	(14.8)	12.1	3700.00	大・部分	砥石の転用か	10
505	円盤状石製品	RA097	No16	砂	6.0	5.5	1.7	77.55	完形	紡錘車の未成品か	10
524	剥片	RA098	埋土下層	黒	(1.5)	(1.8)	(0.6)	1.35	—		10
525	剥片	RA098	Q1 攪乱	黒	(1.9)	(1.8)	(0.6)	1.13	—		10
526	磨石	RA098	Q2 埋土上層	テ	(12.9)	6.0	5.2	514.75	半欠	砥石か、被熱	10
527	砥石	RA098	Q1礫集中区	安	(7.7)	(14.7)	(10.2)	1100.00	礫多数	少なくとも二面使用	10
528	砥石	RA098	No15	安	(14.8)	(7.5)	(5.7)	594.00	破砕礫	二面使用、被熱(弱)	10
542	磨石	RA099	Q4 2層	砂	(7.9)	(4.0)	(2.1)	45.00	破砕礫		10
543	砥石	RA099	No3の土器の中	安	(15.0)	(10.9)	(5.1)	456.00	部分	四面使用	10
544	砥石	RA099	No3の土器の中	安	18.8	12.8	7.9	1858.00	完形	一面使用	10
549	砥石	RA100	Q4 埋土下層	安	(9.3)	(6.2)	(3.8)	138.00	破砕礫	少なくとも一面使用	10
565	砥石	RA101	カマド袖	安	(19.5)	18.0	10.8	2790.00	半欠	一面使用	10
576	砥石	RA102	Q4 3層中層	安	(12.3)	(15.3)	(8.9)	930.00	大・部分	一面使用	10

掲載 No	器種	出土遺構	出土地点・出土層位	石質	長さ	幅	厚さ	重量(g)	残存	備考	次数
577	砥石	RA102	3層中層	安	(20.6)	(13.6)	11.4	2435.00	大・部分	五面使用、線条痕有、表裏面に凹部	10
588	RF	RA103	Q4 埋土上層	頁	(2.25)	(2.8)	(0.75)	2.77	—		10
589	砥石	RA103	Q2 床直	安	18.8	(12.8)	(5.7)	710.00	半欠	一面使用	10
590	砥石	RA103	Q1 S4 埋土下層	安	(28.0)	(12.0)	(8.9)	1860.00	半欠	二面使用	10
605	砥石	RA104	4層	頁	(5.2)	9.5	2.3	159.00	破砕礫	二面使用	10
617	砥石	RA106	Sう 床直	安	(13.6)	(13.7)	(10.2)	1210.00	大・部分	五面使用	10
618	砥石	RA106	Sい 床上	安	(10.2)	(12.6)	(7.8)	537.00	大・部分	五面使用、破砕後も使用	10
619	砥石	RA106	P7 埋土上層	凝	9.4	4.6	5.6	239.40	部分	一面使用	10
627	スクレイパー	RA108	Q2 5層	黒	2.6	2.7	0.95	3.73	—		10
628	剥片	RA108	Q1	黒	1.4	1.8	0.4	0.52	—		10
629	碎片	RA108	Q1	黒	(1.3)	(0.7)	(0.45)	0.36	—		10
630	砥石	RB008	PP89 1層中層	安	22.5	13.4	11.7	3750.00	完形	四面使用、付着物	10
631	礫	RB008	PP89 覆土上層	頁	19.6	15.4	12.6	4500.00	—	付着物	10
635	剥片	RD152	埋土	頁	(3.85)	(2.9)	(1.45)	9.87	—		10
636	剥片	RD152	埋土	頁	(2.35)	(4.25)	(0.8)	5.28	—		10
645	砥石	RD162	南側 4層	安	(3.0)	(5.7)	(2.3)	18.50	破砕礫		10
652	砥石	RD167	副穴 埋土	安	20.4	15.85	11.5	5500.00	完形	三面使用	10
659	磨石	RD174	S2	安	8.4	6.0	3.9	266.00	完形		9
674	砥石?	RD202	埋土	安	12.3	(12.3)	8.6	1700.00	略完形	二面使用	10
695	磨石	RZ012	No74 埋土下層	テ	12.35	8.1	4.1	576.00	完形		10
696	磨石	RZ012	No57 埋土下層	安	6.7	6.9	4.9	298.00	完形		10
697	砥石	RZ012	No19 底直	テ	13.1	5.6	5.1	452.00	完形	一端に剥離面と敲打痕	10
698	凹石	RZ012	No69 底面	安	20.4	17.15	9.2	1920.00	完形	凹部(深)有、側面に使用面有	10
699	台石	RZ012	No65 底面	安	(13.7)	(13.6)	(3.9)	740.00	—	付着物	10
700	砥石	RZ012	No45 底直	安	23.6	20.7	11.2	4500.00	完形	二面使用、凹部1箇所	10
701	砥石	RZ012	No39 底直	安	29.2	11.8	12.2	5000.00	完形	一面使用	10
702	砥石	RZ012	No1 底直	頁	(14.1)	(8.4)	(5.9)	870.00	両端欠損	五面使用	10
703	砥石	RZ012	No16 底直	凝	(4.5)	(7.6)	(8.0)	206.00	破砕礫		10
704	礫	RZ012	No12 底直	安	11.5	7.4	4.8	580.00	—	付着物	10
705	礫	RZ012	No10 底直	不	(6.8)	(7.2)	(2.4)	150.00	—	付着物	10
706	礫	RZ012	No8 底直	不	(11.4)	(7.2)	(2.2)	198.00	—	付着物	10
707	礫	RZ012	No46 底直	不	15.1	12.6	5.8	1100.00	—	付着物	10
762	石鏃	遺構外	4N II	ホ	(3.7)	1.8	0.3	1.28	基部一部欠		10
763	石鏃	遺構外	4N市教委トレンナ3	英	(1.8)	1.7	0.3	0.54	基部欠		10
764	石鏃	遺構外	4N II	頁	(2.8)	1.2	0.5	1.41	先端部欠		10
765	石鏃	遺構外	4N15r II b	頁	2.4	(1.4)	0.5	1.16	略完形		9
766	UF	遺構外	4N25u II b上面	頁	6.4	3.9	1.4	20.59	—	背面左側面に微細剥離痕	10
767	UF	遺構外	表採	頁	(3.0)	(2.7)	1.0	6.14	—		10
768	磨石	遺構外	6O I	安	11.1	8.1	5.4	435.13			10
769	砥石	遺構外	4O Ia	凝	(3.3)	(2.5)	(2.2)	8.42	破砕礫	少なくとも二面使用	9
770	鉄砧石	遺構外	4N7k II b	テ	37.1	(21.7)	21.0	19000.00	半欠		9
771	鋳形石器	遺構外	表採	頁	(26.18)	(10.22)	2.74	802.61	—		—
772	原石	遺構外	表採	黒	3.59	3.14	2.36	16.54	—		—

【長さ・幅・厚さ】 単位はcm

【石質】 頁：頁岩、安：安山岩、閃：閃緑岩、砂：砂岩、凝：凝灰岩、テ：テイスサイト、ホ：ホルンフェルス
粘：粘板岩、※：花崗閃緑岩、黒：黒曜石、閃：閃緑岩、英：石英、不：不明

第13表 土製品・瓦・焼成粘土塊観察表

掲載No	器種	遺構名	出土位置・出土層位	残存	計測値 (cm)	重量 (g)	備考	次数
48	勾玉	RA057	Q4 6層	完形	□3.7・2.2・1.3	8.5		10
230	不明	RA078	カマド埋土	一部	□(10.05)・(8.6)・(3.1)	101.3	内面：ハケメ、外面：ナア?	9
231	焼成粘土塊	RA078	Q1・Q2 埋土	—		17.0		9
355	支脚	RA087	No3	75%	○5.2・6.5・1.3	82.5		10
475	土錘?	RA095	29号住 Q4 カマド付近 下層	完形	□1.4・0.75・0.2	0.6		10
501	羽口	RA097	38号住 Q4 貼床	一部	□(4.35)・(3.5)・(1.3)	15.9		10
502	焼成粘土塊	RA097	38号住 Q4 覆土上層	—		4.8		10
616	焼成粘土塊	RA106	42号住 3号カマド煙出し 覆土	—		12.1		10
751	土人形	遺構外	37号住 Q1 トレンチ	完形	○2.0・1.65・1.15	2.9		10
752	土人形	遺構外	第17トレンチ Ia	頭部	○(2.3)・(1.95)・(1.4)	4.1		10
753	勾玉?	遺構外	4N IIa	一部	□(2.0)・(1.05)・0.9	1.9		10
754	土人形?	遺構外	6N 攪乱	一部	○(1.7)・(1.9)・(1.0)	2.2		10
388	軒平瓦	RA089	47号住 Q3 2号カマド 貼床	一部	△(1.7)・(3.7)・(3.4)・(1.7)	16.3	瓦当面に唐草文	10
755	丸瓦	遺構外	47号住 Q1 攪乱	一部	△(7.6)・(7.5)・(7.0)・(3.1)	282.0	凹面に布目圧痕(細)、凹面中央に縫いとり、凸面ケズリ?	10
756	丸瓦	遺構外	6O 攪乱	一部	△(4.6)・(5.9)・(2.8)・(2.3)	72.7	凹面に布目圧痕、凸面ナア?	10
757	平瓦	遺構外	5N 攪乱溝	1/4	△(13.2)・(8.9)・(4.5)・2.1	279.4		10
758	丸瓦	遺構外	5N 攪乱溝	一部	△(7.7)・(7.1)・(3.0)・(2.7)	106.5		10
759	丸瓦	遺構外	5N 攪乱溝	一部	△(8.3)・(5.5)・(1.7)・(1.7)	54.7		10
760	丸瓦	遺構外	5N 攪乱溝	1/4	△(12.3)・(6.5)・(6.0)・(2.7)	272.0	凹面にコビキ痕→布目痕→タタキ	10
761	瓦	遺構外	5N 攪乱溝	一部	□(2.4)・(3.1)・(0.8)	4.8		10

計測値 □:長さ・幅・厚さ ○:高さ・幅・厚さ △:長さ・幅・高さ・厚さ

第14表 金属製品・古銭・鉄滓観察表

掲載No	器種	遺構名	出土位置・出土層位	残存部位	計測値 (cm) 長さ・幅・厚さ	重量 (g)	備考	次数
40	棒状(方)	RA055	Q1西ベルト 5層	一端欠損	(2.3)・(0.4)・0.3	0.4	釣針か	10
41	不明	RA055	Q1西ベルト 5層	不明	(1.85)・(0.4)・(0.3)	0.6		10
62	不明	RA059	埋土最上面	不明	(3.3)・(3.45)・(2.7)	25.6	蛇腹状、刀身具?	10
66	鉄斧	RA060	埋土上層	完形	8.15・3.95・1.9	115.7	袋状	10
73	棒状(丸)	RA061	Q1 検出面	両端欠損	(4.35)・(0.5)・(0.5)	2.2	鉄鏃の茎部か紡錘車の軸か	10
82	棒状(丸)	RA062	Q2トレンチ	一端欠損	(7.45)・(0.75)・0.65	4.9		10
83	板状	RA062	Q2 上層	完形	5.3・1.25・0.55	13.8		10
88	釘	RA063	埋土	一端欠損	(4.2)・0.7・0.5	2.6	角釘	10
117	釘	RA064	Q4 埋土上層	完形	4.25・2.4・1.8	15.4	角釘、軸幅0.65cm、厚さ0.7cm	10
169	紡錘車	RA071	Q2 攪乱際 床面	両端欠損	(14.05)・0.5・0.55	35.0	円盤部径5.3cm、厚さ0.35cm	9
170	不明	RA071	2層	一端欠損	(2.15)・(6.2)・0.9	7.1	二点同一個体	9
235	刀子	RA078	Q2 9層	刀身部	(5.7)・1.1・0.3	5.5		9
236	刀子	RA078	Q2 9層	茎部	(3.7)・(1.3)・0.55	3.6		9
265	鉄鏃	RA080	No25	茎部	(13.05)・(0.4)・0.4	4.8		10
266	穂摘具?	RA080	No26	一端欠損	(4.7)・(1.4)・0.3	5.2	端部穿孔	10
267	穂摘具?	RA080	No26	一端欠損	(3.45)・(1.45)・0.35	3.7	端部穿孔	10
302	刀子	RA081	Q5トレンチ	茎部	(4.8)・(0.8)・(0.25)	2.5		10
303	釣針	RA081	カマド	両端欠損	(3.9)・(2.1)・0.3	1.9	断面方形	10
317	鉄鏃	RA082	鉄2 7層	両端欠損	(4.65)・(2.4)・0.3	5.7	方頭(斧箭)式?	10
318	紡錘車	RA082	鉄1 2層	一端欠損	(14.95)・0.45・0.45	25.6	円盤部径4.6cm、厚さ0.3cm	10
331	板状	RA084	Q2	不明	(5.55)・(4.0)・0.4	13.5		10
358	棒状(方)	RA087	Q3 埋土上層	両端欠損	(3.7)・(0.45)・0.3	1.3	鉄鏃の茎部か	10
373	鉄鏃	RA088	q	両端欠損	(13.5)・(4.1)・1.0	23.8	雁叉式	10
374	鉄鏃	RA088	r	茎部	(11.3)・(0.85)・0.7	13.1		10
391	穂摘具	RA089	あ 3層下層	略完形	(8.65)・(2.15)・0.3	6.7	目釘状金具付、木質部残存	10
392	刀子	RA089	Q2 貼床	両端欠損	(5.8)・1.9・(0.4)	6.1		10
393	棒状(方)	RA089	攪乱	両端欠損	(7.0)・0.7・0.7	8.2	鉄鏃の茎部か	10
394	板状	RA089	攪乱	不明	(5.65)・(2.3)・0.85	15.9	表に二箇所、裏に一箇所の突起有	10
438	鉄鏃	RA092	Q2 床面	茎部	(2.5)・(0.55)・0.45	1.2		10
439	釘	RA092	b	先端部欠損	(3.5)・(1.4)・(0.65)	3.9	角釘	10

掲載No	器種	遺構名	出土位置・出土層位	残存部位	計測値 (cm) 長さ・幅・厚さ	重量 (g)	備考	次数
440	板状	RA092	a 4層	略完形	7.9・2.85・0.6	40.9	穿孔1対2個、小札状	10
441	不明	RA092	Q1 2層	不明	(4.85)・1.8・(1.6)	12.1	穿孔1箇所	10
456	棒状(方)	RA093	攪乱	両端欠損	(4.95)・(0.85)・0.5	6.6	鉄鍔の基部か	10
481	鉄鍔	RA095	No28	先端部欠損	(6.2)・(2.1)・0.4	5.5	雁又式	10
482	小刀	RA095	No27	刃先欠損	(29.2)・2.0・0.4	86.0		10
483	刀子	RA098	No12	両端欠損	(10.25)・1.6・0.45	10.3	2点が鑿で接合	10
550	鉄鐸	RA100	Q4トレンチ	略完形	4.9・1.8・1.8	13.7	内側に舌部伴う、鐸部長さ3.65cm	10
551	鉄鐸	RA100	Q4トレンチ	略完形	4.95・1.7・1.5	10.3	上端部に穿孔有、内側に舌部伴う、鐸部長さ3.7cm	10
552	鉄鐸	RA101	Q2 中層	略完形	3.5・1.7・1.55	14.1	端部に穿孔有、舌部を伴う、舌部(長さ3.5cm、幅0.5cm、厚0.4cm)	10
620	鉄鍔	RA106	ね	基部	(5.2)・(0.8)・0.75	3.7		10
621	刀子	RA106	Q4 貼床	両端欠損	(7.0)・(0.95)・0.45	4.1		10
622	刀子	RA106	え	両端欠損	(18.15)・1.3・(0.3)	14.7	木質部残存	10
623	刀子	RA106	ぬ	刀身部	(6.7)・(1.1)・0.4	6.1		10
624	刀子	RA106	Q4 1層	両端欠損	(4.5)・(0.6)・0.3	1.5		10
625	鉄鐸	RA106	Q3 3層	完形	3.1・2.1・2.0	10.2	舌部なし	10
672	釘	RD200	埋土	両端欠損	(5.3)・(0.95)・0.5	3.0	角釘	10
773	鉄鍔	遺構外	4N Ia	基部	(3.65)・(0.65)・0.5	3.9		10
774	棒状(方)	遺構外	4N IV層上層	一端欠損	(4.2)・(0.85)・0.55	3.5	火打ち金か	9
775	煙管	遺構外	攪乱	吸口	8.75・径0.85	15.8	材質不明	9
632	銭	RB008	PP52 覆土最上面	完形	径2.55	3.60	寛永通寶(銅銭)、新寛永(文銭)、初鑄年は1668年	10
633	銭	RB008	PP52 覆土最上面	完形	径2.5	3.22	寛永通寶(銅銭)、新寛永	10
654	銭	RD172	検出面	70%	径2.35	0.90	永楽通寶(銅銭)、初鑄年は1408年	10
676	銭	RD223		完形	径2.1	0.51	不明(銅銭)	9
677	銭	RD223		70%	径2.3	0.92	不明(銅銭)	9
776	銭	遺構外	4N I	略完形	径2.3	1.14	永楽通寶(銅銭)、初鑄年は1408年	9
777	銭	遺構外	6N3g I	完形	径2.35	2.02	寛永通寶(銅銭)、新寛永	10
84	鉄滓	RA062	No4			200.0	椀形滓	10
118	鉄滓	RA064	Q2 攪乱			39.0		10
171	鉄滓	RA071	カマド付近 検出面			15.1		9
268	鉄滓	RA080	No24			89.0		10
269	鉄滓	RA080	No35			64.0		10
270	鉄滓	RA080	Q3 トレンチ			20.0		10
375	鉄滓	RA088	カマド 袖脇 床上			246.0	椀形滓	10
442	鉄滓	RA092	1号カマド下 掘り方			15.0		10
443	鉄滓	RA092	Q2 貼床			243.0	椀形滓	10
444	鉄滓	RA092	Q1 26層			23.0		10
483	鉄滓	RA095	2号カマド煙出し No47			278.0		10
495	鉄滓	RA096	Q2 1層			27.0		10
567	鉄滓	RA101	下層			3.0		10
591	鉄滓	RA103	Q4 西サブトレ 床直			8.2		10
626	鉄滓	RA106	エ 床直			97.0		10
681	鉄滓	RG023	埋土上層			254.0		9

第15表 近世磁器観察表

掲載No	出土位置	種別	器種	部位	口径	底径	器高	胎土	釉薬その他	産地	年代
689	RG039 埋土上位	陶器	甕	底部破片					内面鉛釉	在地系か	
690	RG039 検出面	陶器	壺	胴部破片					鉄釉	在地系か	
691	RG039 埋土17~18	陶器	碗?	体部破片						在地系か	
692	RG039 埋土	磁器	碗	口縁部破片					染付 梅樹文?	肥前	18C末
693	RG039 東ベルト埋土	陶器	徳利	頸部破片					すず徳利	在地系か	
694	RZ011 不明遺構	磁器	蓋?	底部破片					染付 見込みコンヤク判五弁花牡丹唐草文「渦福」銘	肥前	18C

*単位はcm

第16表 竪穴住居跡一覧表

報告名	旧遺構名	調査次	時期	カマド 壁	位置 グリッド名	切り合いその他	規 模			
							m	m	壁高cm	床面積m ²
RA052	15号住	10次	縄文		4N25s		2.72	2.68	18	5.6
RA053	32号住	10次	奈良	北西	3M14s		4.00	3.80	32	11.6
RA054	30号住	9次	奈良	北西	4M3s		4.50	4.22	37	13.9
RA055	16号住	10次	奈良	北西	4N16r	RD169を切る	4.58	4.35	54	11.9
RA056	1号住	10次	奈良	北西	4N22j		2.67	2.89	47	4.4
RA057	17号住	10次	奈良	北西	4N22u		4.44	4.12	56	13.9
RA058	5号住	10次	奈良	北西	5N2k		3.09	3.19	49	5.8
RA059	49号住	10次	奈良	北西	5O2e		3.00	3.00	43	6.9
RA060	9号住	10次	奈良	北西	5N8g		3.03	3.27	12	7.8
RA061	25号住	10次	奈良	北西	5N10s		2.93	3.01	40	6.7
RA062	37号住	10次	奈良	北西	5N20w		6.20	4.40	22	19.9
RA063	23号住	10次	奈良	北西	6O18a		3.09	3.00	30	9.8
RA064	52号住	10次	平安	西	3M22n	RA065を切る	5.59	5.24	23	19.1
RA065	54号住	10次	平安	東	3M21u	RA064に切られる	3.76	3.46	28	12.6
RA066	31号住	10次	平安	北西隅	3M22y		2.51	2.43	31	4.4
RA067	35号住	10次	平安	西	3N24c		2.88	2.86	31	5.1
RA068	50号住新	10次	平安	北西	3N25f		3.70	3.40	20	10.1
RA069	50号住旧	10次	平安	北西	3N24g		5.50	5.50	15	20.4
RA070	59号住	9次	平安		4N2h		2.80	2.58	20	5.8
RA071	53号住	9次	平安	東・西	4N4a		4.08	<3.82>	35	<10.5>
RA072	56号住	9次	平安	北東	4N4l		3.39	3.10	30	7.6
RA073	11号住	9次	平安	北西	4N13h		4.18	4.14	28	<14.4>
RA074	12号住	9次	平安	東以外	4N8d	カマド調査区外	3.60	<2.50>	32	<5.6>
RA075	48号住	9次	平安	北東	4N6s		5.46	4.62	18	17.8
RA076	33号住	9次	平安	西	4O9a		4.38	4.21	12	15.3
RA077	19号住	9次	平安	北東	4O12b		3.30	3.16	--	7.9
RA078	18号住	9次	平安	北東	4O14h		5.19	4.65	47	19.9
RA079	20号住	9次	平安	南	4O14g		4.26	4.04	18	14.8
RA080	2号住	10次	平安	東2基	4N18m	RD150、RD200を切る	4.60	3.80	45	15.0
RA081	13号住	10次	平安	北西	4O18c	RD197に切られる	3.98	3.08	51	9.0
RA082	57号住	10次	平安	東	4O21d		4.66	4.52	33	16.6
RA083	58号住	10次	平安	東	4O21j		3.70	3.64	10	8.8
RA084	55号住	10次	平安	東	4O23i		4.52	4.34	20	18.1
RA085	45号住	10次	平安	東	4N25g		3.20	3.04	27	7.5
RA086	6号住	10次	平安	北	4N25o		4.51	3.76	16	14.1
RA087	7号住	10次	平安	東	4N25q	RD154に切られる	3.92	3.80	50	13.6
RA088	8号住	10次	平安	東	5N3q		3.98	3.08	38	11.1
RA089	47号住	10次	平安	東・西2基	5N5t	現代溝に切られる	5.28	5.23	37	18.9
RA090	46号住	10次	平安	北	5O4b		2.30	2.20	36	3.6
RA091	51号住	10次	平安	東	5O4f		4.29	4.14	30	16.1
RA092	10号住	10次	平安	東2基	5N6c		6.56	6.48	47	35.4
RA093	43号住	10次	平安	南西・北西2基	5N15b	榊の攪乱	4.62	4.38	49	17.5
RA094	34号住	10次	平安	北	5N16l		1.40	1.20	30	1.4
RA095	29号住	10次	平安	西・北・東	5N5h		3.90	3.35	42	10.7
RA096	24号住	10次	平安	西	5N15n		3.38	3.10	50	9.5
RA097	38号住	10次	平安	北東・南東	5N19r	床面中央に住居内土坑	3.12	3.00	16	8.0
RA098	36号住	10次	平安	北西・北東	5N15u		3.74	3.74	36	10.8
RA099	28号住	10次	平安	北西	5N19c		3.52	3.34	40	10.2
RA100	26号住	10次	平安	北東隅	5N21k		2.12	2.05	27	2.9
RA101	39号住	10次	平安	東	5N23r		3.34	3.32	38	8.7
RA102	27号住	10次	平安	東	6N5f		3.95	3.79	28	8.6
RA103	40号住	10次	平安	北東	6N4t		4.03	4.03	44	12.7
RA104	22号住	10次	平安	北西	6O8e	RD168に切られる	3.72	3.62	36	12.5
RA105	41号住	10次	平安	北	6N12r		3.78	2.26	14	8.3
RA106	42号住	10次	平安	東2基・南	6N14s		4.73	4.55	32	16.7
RA107	21号住	10次	平安?	不明	6O11k	コーナーのみ	<2.12>	<1.12>	48	0.6
RA108	44号住	10次	平安	不明	6N21x	コーナーのみ	<2.73>	<2.48>	27	<2.9>

V ま と め

1 遺 構

今回の調査で検出された主な時期と主な遺構について述べる。

縄文時代

晩期前葉の竪穴住居跡1棟、フラスコ状土坑1基、埋土の状況から同時期の可能性があるフラスコ状土坑2基が検出された。これまで盛岡南新都市土地区画整理事業地内では本遺跡から北西に1.2km離れた本宮熊堂A遺跡や0.5km北の台太郎遺跡で晩期中葉以降の集落が検出されており、今回の検出遺構が最も古い遺構である。竪穴住居跡は1棟のみで、調査区外にも集落が広がる可能性はあるが、遺構外からの同時期の遺物が少ないことから、住居の数はそう多くないと思われる。この竪穴住居跡のマウンド状に盛り上げたかのような埋め戻しの痕跡や、埋め戻しの後に焼けたことを示す炭化材のあり方は廃屋葬の可能性も考えられる。

弥生時代

西側の埋没沢が埋まり始め、窪地となっていたところに最深部から焼土遺構1基が検出された。後期の土器片は遺跡内各地から少量ずつ出土しているが、特にこの焼土遺構近辺が多く、窪地をキャンプサイトとしていたと思われる。

奈良時代

前回までの遺跡の西側及び中央付近の調査では検出されなかった奈良時代の集落跡が、今回の調査区である遺跡東側には存在することが明らかになった。東側の埋没沢周辺とその西側から竪穴住居跡11棟が検出された(第219図)。特に沢の最も深い位置から検出された中型のRA055、RA056の検出層位を見ると、沢が埋まりきらないうちに造られており、わざわざ窪地を選んで造られたようである。その他の竪穴住居跡も小型のものを除いて、沢に沿ったやや窪んでいて、Ⅱ層の厚い場所に作られた可能性が高い。このような傾向は飯岡沢田遺跡第9・10次調査区内でも見られており、奈良時代の選地が何に起因するのか興味深い。

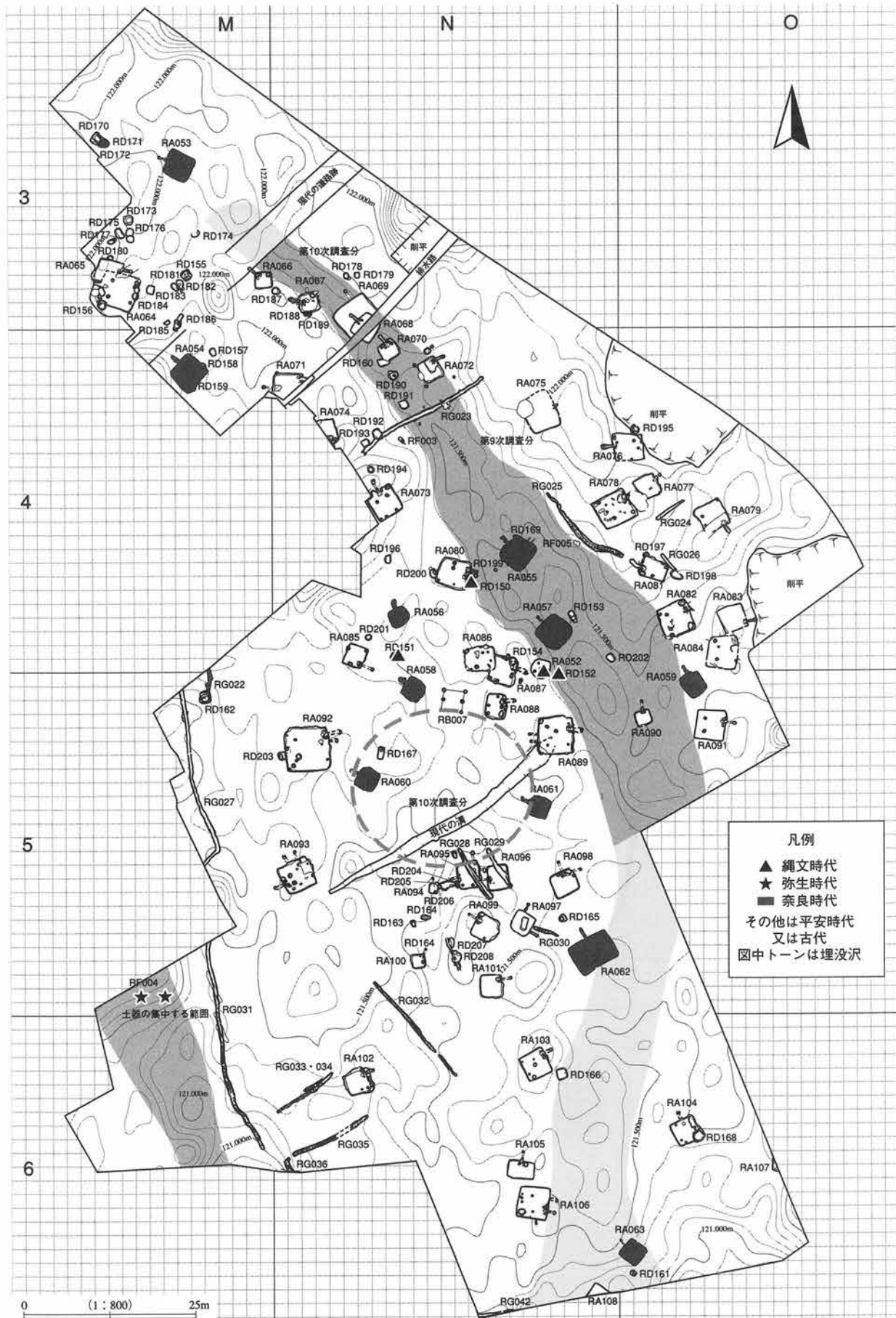
埋土は混入物が少なく、自然堆積と思われる住居跡が11棟中8棟である。なお、埋土最上層に灰白色火山灰が含まれる住居跡が1棟(RA053)ある。

カマドはすべて北西壁中央に取り付く。遺物は総じて少ない。カマド周辺から極少量の遺物しか出土しなかったRA053のほか、住居跡が埋まりかけたころ、一括して廃棄したかのように土器が出土したRA055、RA056、RA059がある。

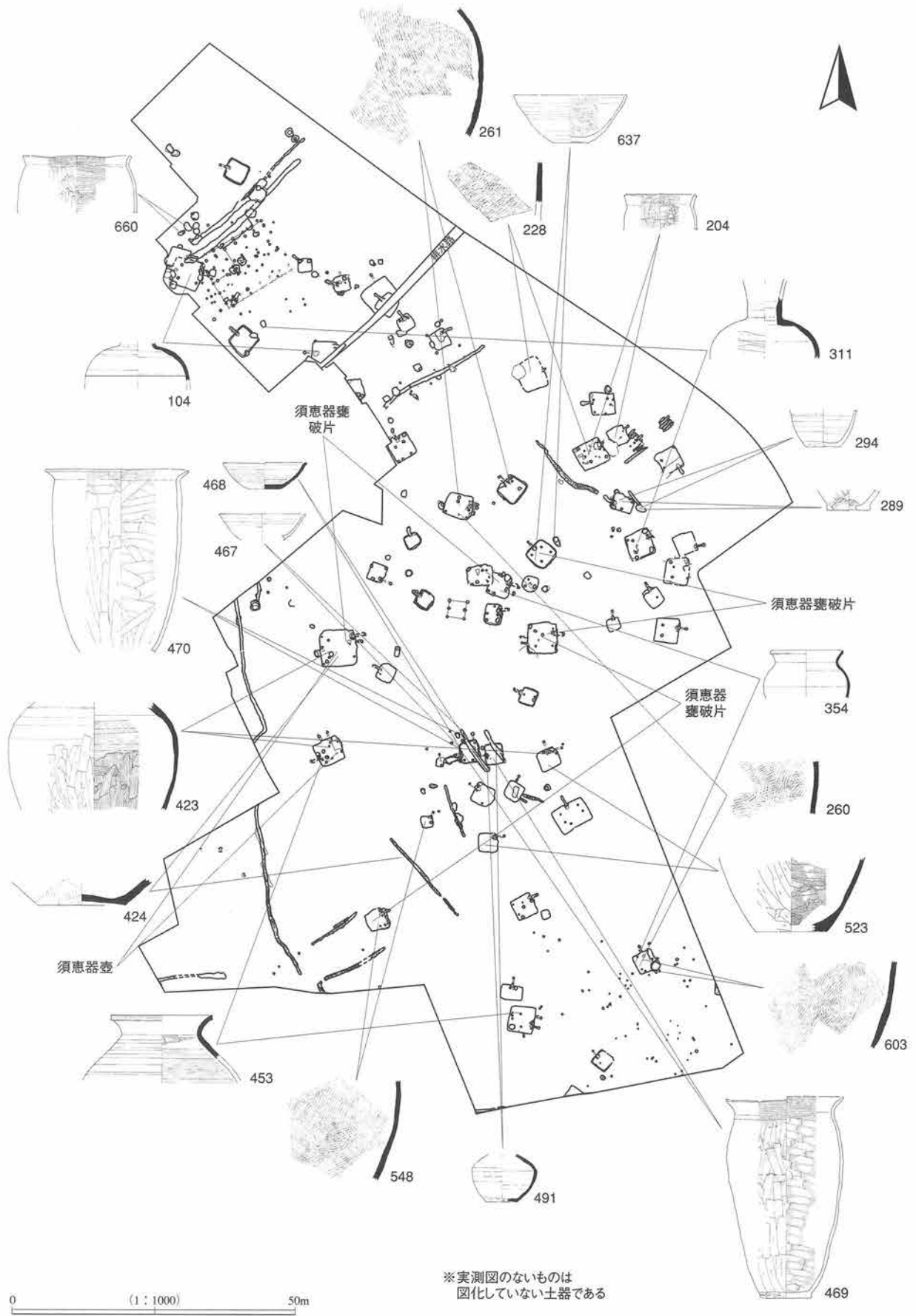
平安時代

竪穴住居跡45棟は南西調査区と北東の段丘縁辺部を除いて広く分布している。場所により粗密があり特に調査区中央東よりと南よりに多い。注目されるのはRA092、RA085、RA089、RA096、RA095、RA093を結ぶ線の内側(第219図網枠内)で、ここには竪穴住居跡は見られず、墓と思われるRD167、RB007掘立柱建物跡といった特殊な遺構のみである。また、RA092、RA089は大型の竪穴住居跡である。さらにRA093を除く他の竪穴住居跡はすべて軸方向がほぼ同一で、この空間は偶然できたものではなく、何らかの規制があったのではないかと考えられる。

竪穴住居跡の規模は最も大きいものが一辺の長さが約6.5mのRA092で本遺跡のこれまでの調査のなかでも最大級に属し、今回の調査区では突出した大きさである。また、最も小さいものは1.4×1.2mのRA094で、過去の調査に照らしても最も小規模である。住居として使用したというより、カマドを



第219図 遺構配置図（縄文時代～古代）



第220図 遺物の遺構間接合図

使用するための施設かもしれない。6 m²以下が6棟、7～12m²が15棟、12～21m²が18棟である。平均は12m²前後である。

住居跡の埋土に灰白色火山灰の含まれる例は以下の3棟のみである。RA067の検出時には火山灰が認められたが、この付近は埋没した沢状の地形で、竪穴住居跡廃絶時にも窪地となっていたと思われる、その窪地全体を覆っていた層に入っていたものである。火山灰は住居跡周辺と同じ地形、同じ標高からも検出されている。RA072では、埋土下層の4層にブロック状に認められた。RA078では埋土上層3層から検出された。この火山灰はブロック状に粗密があるものの、層全体に混入している。

本遺跡第8次調査のRD140から出土したものと類似する剥片状の土器片が今回の調査でも出土した。RD158及びRD157出土土器である。RD140は焼成の痕跡のない土坑と報告されているが、RD158の場合、壁際に形成された焼土層、掘り方上の炭粉層などから、RD157の場合は炭粉層から焼成が行われた可能性が高い。出土した剥片土器はRD158が1,732 g、RD157が88 gで、量にはかなりの差があるが、土坑の形態、埋土が類似しており、位置も近接している。剥片状の土器が土器生産の副産物であるならば、今回の調査区内ではこの付近で生産行為が行われた可能性が高い。

2 遺物

紙幅の都合上、土器についてのみ述べる。縄文時代、弥生時代の遺物については、遺構外出土遺物の項で、全体を含め概観しているので、参照されたい。

奈良時代

坏、高坏、椀、埴、鉢、長胴甕、球胴甕、甕か甗か不明なものがある。

坏の器形は丸底で体部外面に沈線を持つもの(44、68)、丸底に近い平底で体部外面に沈線か段を持つもの(51、67)、平底で、口縁部が内湾気味に収まるもの(52、53、74)がある。すべて内面が黒色処理され、外面にナデ、ケズリが施されるもの(16、44、52)とミガキが主体のもの(51、53、63、64、67、68、74)がある。

高坏5点のうち、器形が明らかな4点は、すべて脚が短く、裾はハの字状に開く。坏部の暖が明瞭なもの(17、18)、やや不明瞭なもの(77)、段を持たないもの(15)がある。外面調整はミガキ主体のもの(17、18、77)、横ナデとケズリが施されるもの(15)がある。

埴は1点のみで、内湾して立ち上がり、口縁部も内湾して収まるもので、内外面ともにミガキが施される(54)。

鉢は1点で、底部から直立気味に立ち上がり、外傾して直線的に開く(65)。

長胴甕は大と小がある。大型の甕は外形の判別できるものは最大径がすべて口縁部にあり、底部の突出はない。口縁部のやや長いもの(19)があるが、他はあまり差異がない。口縁部が外反気味のもの(19、28、30、35、55、58、78a、85b)、外傾するもの(29、56)がある。外面調整の判別できるもの12点のうち10点は外面がハケメ調整される。ほかはハケメ+ナデ、ハケメ+ミガキである。内面は11点がハケメで、1点がナデである。小型の甕は5点あるが、全体の器形が分かるものが少ないので、ここでは割愛する。

球胴甕は口縁部の形体の分かる4点のうち86以外は口唇部が面取りされ、角張っている。86は他に比べると、小型であり、胴部の張りも少なく、他と一線を画する。外面調整はハケメ、ナデ、ケズリ、ミガキと長胴甕より多様である。

以上の土器は坏、甕の形態などから8世紀中葉から末葉までに収まるものと思われる。

平安時代

1 遺構

ここでは、今回の調査で最も多く出土した平安時代の土師器と須恵器坏について述べる。これらの土器を器種別に分類し、抽出して掲載したのが、第221図、222図である。

内黒土師器坏

内面を黒色処理し、ミガキを施された土師器坏で、外面の調整で3種に大別される。

1 体部下端及び底面に回転ヘラケズリを施されるもの

回転ヘラケズリは体部下端に1回転か多くても2回転ほどしか行われていない。(第221図中1段目361、206、193、592など)

2 体部下端もしくは体部下端及び底面に手持ちのヘラケズリを施されるもの

手持ちヘラケズリは体部中ほどまで行われている例が406、594、273などあるが、大半は下端にわずかに施されるものである。(第221図中1段目406、594、506、530など)

3 ヘラケズリのないもの(第221図中1段目 484、152、307、119など)

ヘラケズリのないものについては法量が口径にして3割ほど大きい大型のもの(図中下段中央637、740)もある。

以上の内黒土師器坏は口径1に対する底径の割合が大型のもので0.3~3.8、通常の坏がおおよそ0.39~0.52の中に納まっている。

黒色処理のない土師器坏

外形、法量で以下の4種に大別される。

1 器高が比較的低く4.3~5.5cmぐらいに収まるもので、体部が直線的に立ち上がり、口径1に対し底径が0.5前後とやや大きいもの(第221図中2段目 744、156、157など)

2 器高が高く5.4~5.8cmぐらいで、体部が直線または丸みを帯びて立ち上がり、口径1に対し、底径が3.3~4.8ぐらいと小さいもの(第221図中2段目 187、410、215、448、279など)

3 器高が低く4.6~5.3cmぐらいで底部がやや突出し、全体に丸みをおびて体部が立ち上がるもの(第221図中2段目 657、320など)

4 器高が3cm前後より低く、口径が10cm前後と小さいもの(第221図中2段目341、340)

須恵器坏

外形と法量から以下の3種に大別される。

1 器高が比較的低く5cm以下で体部が直線的に立ち上がるもの

口径1に対し、底径は0.5前後である。(第221図中3段目 534、598など)

2 器高が比較的低く5cm以下で体部が丸みを帯びて立ち上がるもの

口径1に対し、底径は0.45~0.55前後である。(第221図中3段目 582、610、513、746など)

3 器高が比較的高く5~5.8cmで、底径の小さいもの

口径1に対し、底径は0.33~0.39である。(第221図中3段目 282、363、641、130など)

土師器高台付坏・埴

高台の欠損する両面黒色の533、184をのぞくと外形で2種に大別される。

1 短い高台が付き、内外面にミガキの施されるもの(第221図中4段目184、194など)

2 ハの字状の高台が付くもの(第221図中4段目409、580)

内面黒色の409と黒色処理のない580がある。

以上の器種のほか、土師器には甕、埴、両面黒色処理した坏、耳皿がある。甕はロクロ使用のものと不使用のものがあり、法量に大小がある。埴はロクロを使用しており、体部外面にケズリが施される。なお、図示したものは2点のみで、内面黒色処理は施されていないが、不掲載に内黒の破片が1点ある。

今回は1つの遺構からの出土土器が少ないものが多いことから、個々の堅穴住居跡の詳細な年代的位置づけは難しいが、全体としては、内黒土師器坏1～3の外表面調整と法量、黒色処理のない土師器坏1～3及び須恵器1～3の法量、外形などからおおむね9世紀後半から10世紀中葉までに属するのではないかと考えられる。黒色処理のない土師器坏4(341、340)と高台付坏・埴1、については伊藤(1990)、八木(1993)、西野(1998)により、10世紀中葉以降と位置づけられている。これらが出土しているRA086と高台付埴1の出土するRA076は今回の調査区内で最も新しい堅穴住居跡と思われる。

遺構間の接合について

室内整理において、須恵器は総量が少ないこともあって、器種別に分け、全体で接合を行うことができた。その結果が第220図である。接合しても器形をある程度復元できることはまれで、ほとんどが破片のままであった。また、多くは重複や、隣接する遺構間で接合するが、260の須恵器甕破片、311の壺のように最大80～90m離れた遺構間で接合することもあった。特に須恵器大甕の場合、調査区全域から集めても到底一個体になりえない破片量しかない場合が多い。少しずつ集落の中にばらまかれたような出土状況が何によるのか、須恵器は貴重品であったと思われるが、興味深い。このような傾向が本遺跡に特徴的なものか、比較例がほとんどなく、不明である。(金子佐)

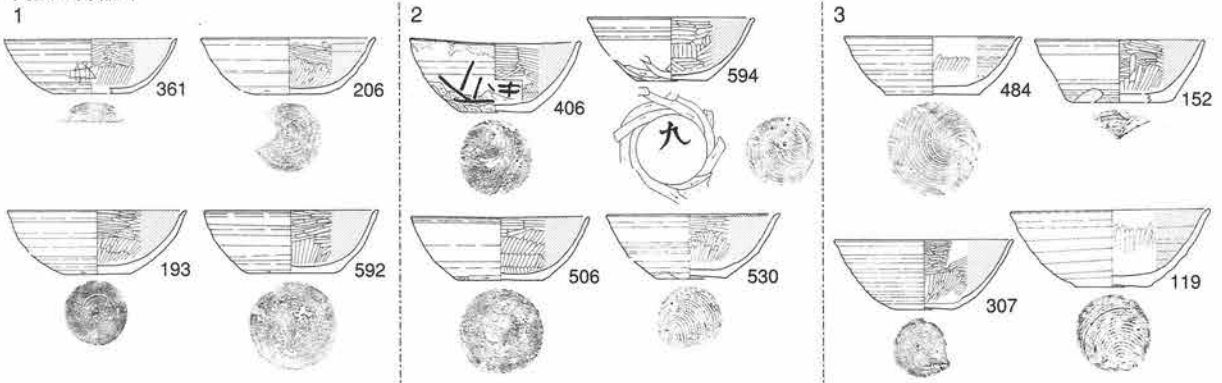
参考文献

- 伊藤博幸 1990 「陸奥国における黒色土師器—その展開と終焉」『東国土器研究』第3号
 1998 「城柵と地域社会の変容—北上盆地南部の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 2003 『細谷地遺跡発掘調査報告書—第4・5次調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集
 2004 『細谷地遺跡第8次発掘調査報告書』々 第454集
 2006 『本宮熊堂A遺跡第24次・本宮熊堂B遺跡第25次発掘調査報告書』々 第470集
 2006 『飯岡沢田遺跡第9・10次発掘調査報告書』々 第489集
 西野 修 1998 「城柵と地域社会の変容—北上盆地北部の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
 八木光則 1993 「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料

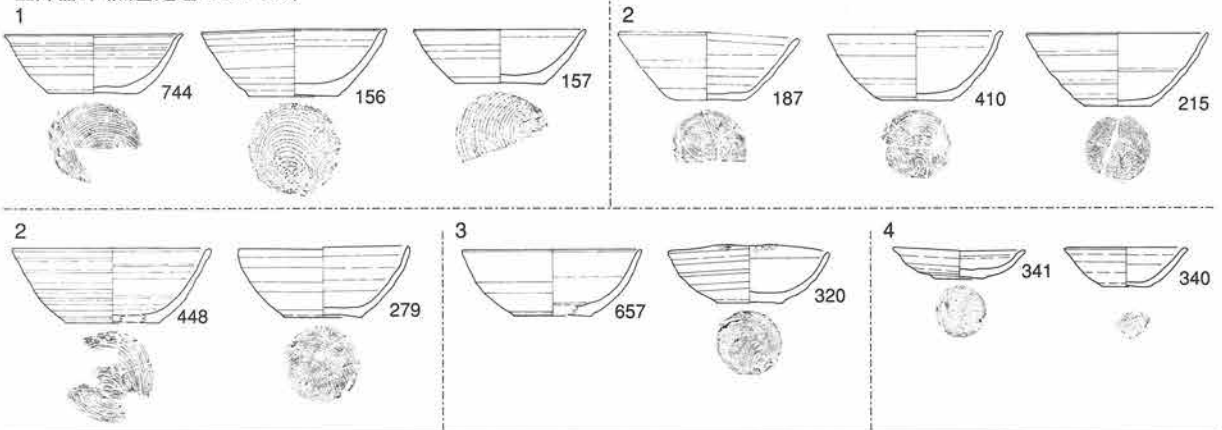
第17表 墨書土器・刻書土器一覧表

No.	種別	器種	出土遺構	墨書・刻書部位	釈文・その他
150	墨書	内黒土師器坏	RA071	底部外面	<input type="checkbox"/> 462の乙と同じ可能性あり
153	墨書	内黒土師器坏		体部外面正位	<input type="checkbox"/> 740の「主」と同じ可能性あり
154	墨書	内黒土師器坏		体部外面倒位	吉
155	墨書	内黒土師器坏		体部外面倒位	吉
180	墨書	須恵器坏	RA074	体部外面正位	<input type="checkbox"/>
211	墨書	内黒土師器坏	RA078	体部外面正位	<input type="checkbox"/>
304	墨書	内黒土師器坏	RA082	体部外面倒位	十万
352	墨書	須恵器坏	RA087	底部外面	升
379	墨書	内黒土師器坏	RA089	底部外面	<input type="checkbox"/> (合カ)
396	墨書	非内黒土師器坏	RA091	体部外面倒位	<input type="checkbox"/> (偏はネ)
398	墨書	須恵器坏		体部外面正位	<input type="checkbox"/>
406	墨書	内黒土師器坏	RA092	体部外面倒位	<input type="checkbox"/> /土
462	墨書	内黒土師器坏	RA095	体部外面横位	乙
594	墨書	内黒土師器坏	RA104	底部外面	九
593	墨書	内黒土師器坏		底部外面	九
595	墨書	内黒土師器坏		底部外面	九
740	墨書	内黒土師器坏	遺構外	底部外面	主
743	墨書	非内黒土師器坏	遺構外	体部外面正位	卅
207	刻書	内黒土師器坏	RA078	底部～体部下端	焼成後にヘラでつけた傷か?
213	刻書	両黒土師器椀?		体部外面正位	焼成前に刻まれる 樹木か?
361	刻書	内黒土師器坏	RA088	体部外面正位?	焼成前に刻まれる 建物?
362	刻書	内黒土師器坏		底部外面	十 焼成後刻書
407	刻書	内黒土師器坏	RA092	体部外面正位	<input type="checkbox"/> (九カ) 焼成前刻書
416	刻書	須恵器坏		底部外面	× 焼成後刻書
487	刻書	非内黒土師器坏	RA094	底部外面	卅 焼成前刻書 記号?
91	刻書	非内黒土師器坏	RA064	体部外面正位	<input type="checkbox"/> (万カ) 焼成後刻書

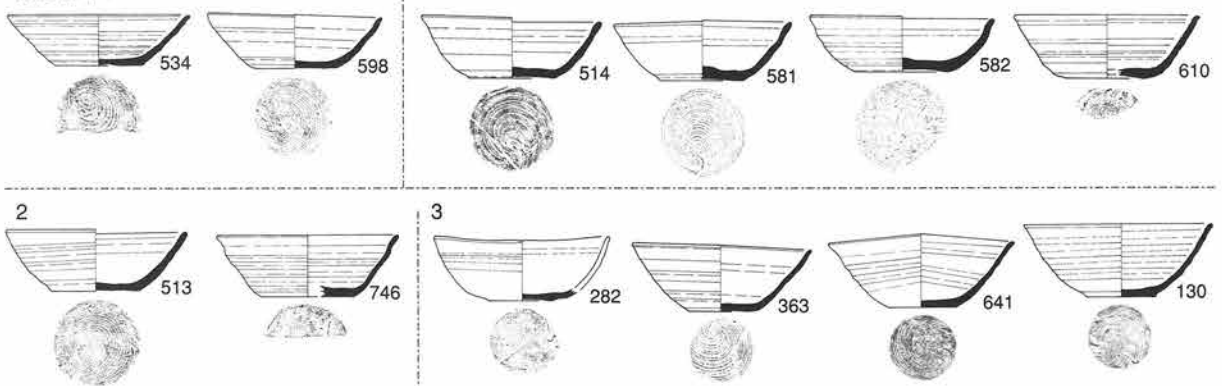
内黒土師器坏



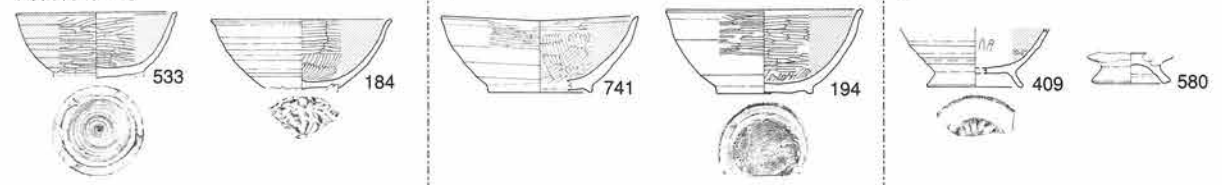
土師器坏 (黒色処理のないもの)



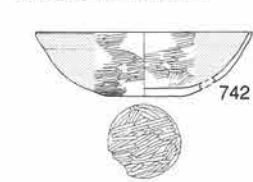
須恵器坏 1



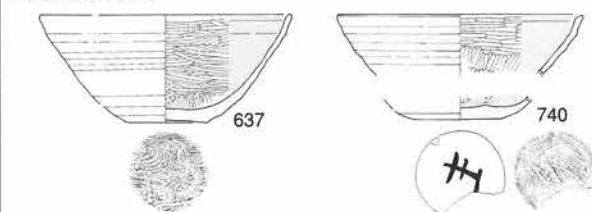
高台付坏・埴



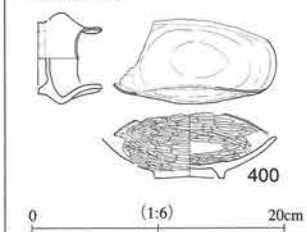
両面黒色の土師器坏



大形の土師器坏

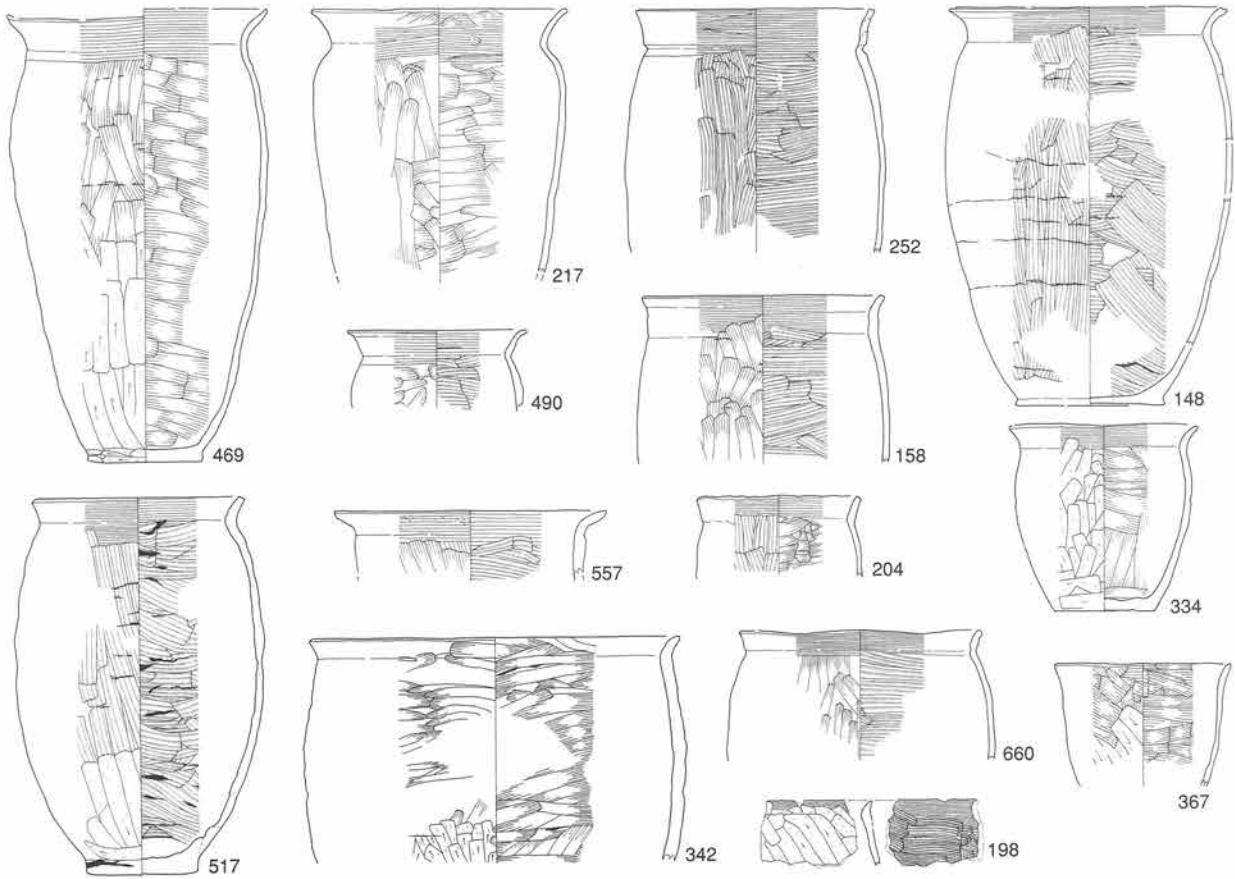


土師器耳皿

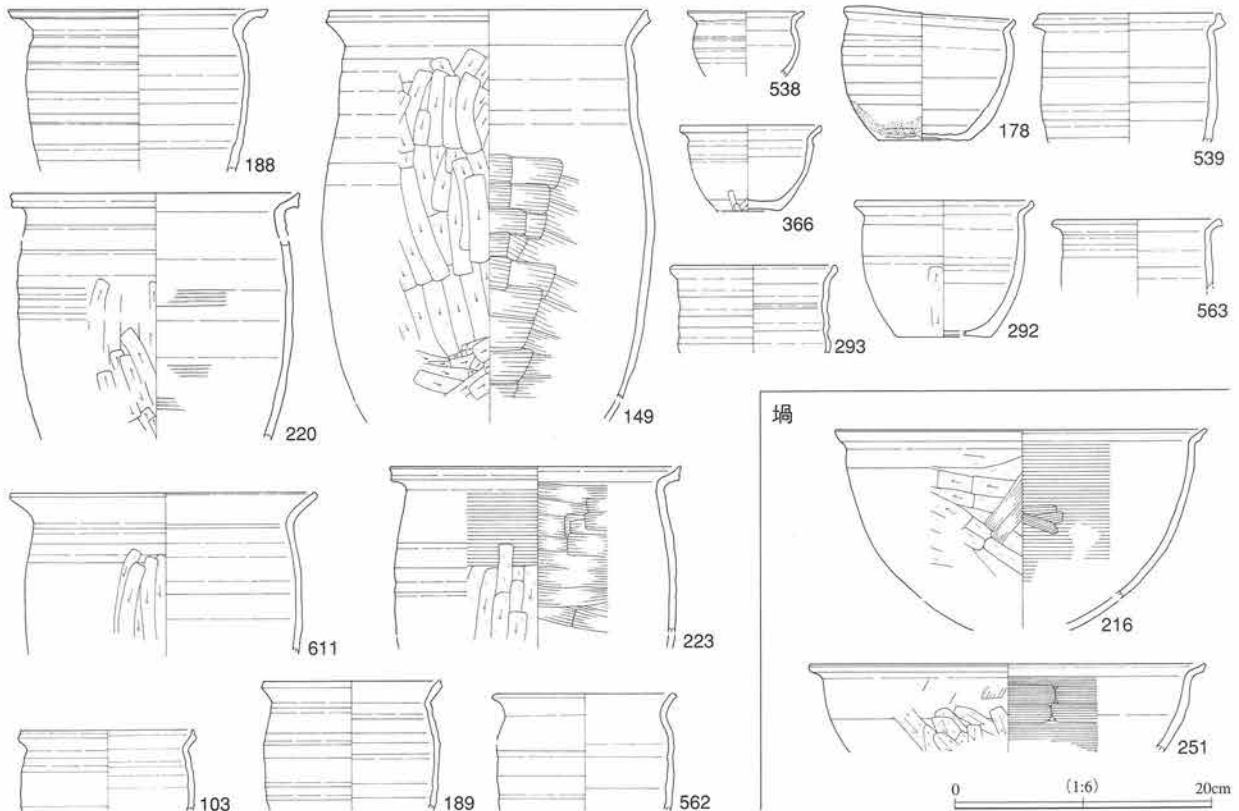


第221図 土器分類図 (1)

ロクロを使用していない土師器甕



ロクロ使用の土師器甕



第222図 土器分類図 (2)

墨書土器

RA071 (53号住)



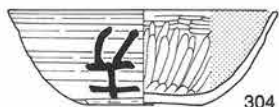
RA074 (12号住)



RA078 (18号住)



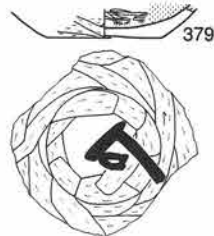
RA082 (57号住)



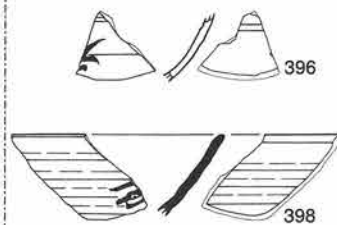
RA087 (7号住)



RA089 (47号住)



RA091 (51号住)



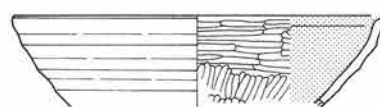
RA092 (10号住)



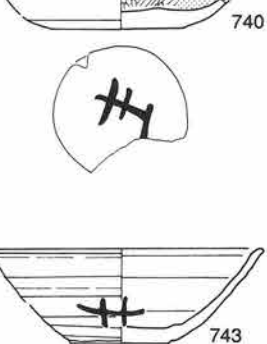
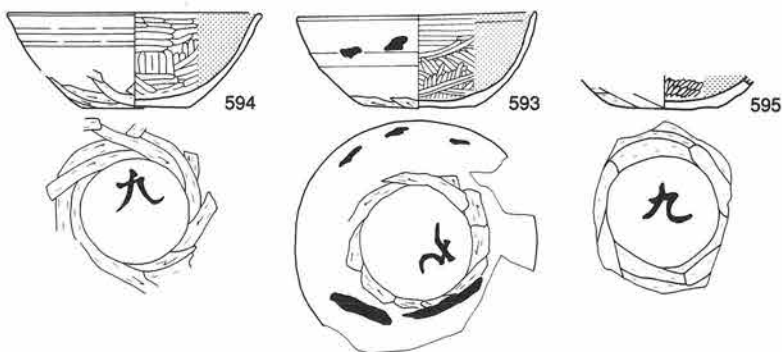
RA095 (29号住)



遺構外



RA104 (22号住)



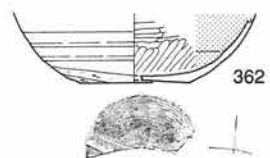
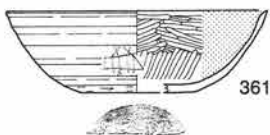
刻書土器

RA078 (18号住)



213拡大図のみ (3:4) 3cm 213拡大図

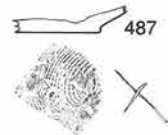
RA088 (8号住)



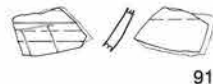
RA092 (10号住)



RA094 (24号住)



RA064 (52号住)



0 (1:4) 10cm

第223図 墨書土器・刻書土器集成

付編 細谷地遺跡の自然科学分析

1 細谷地遺跡第10次調査出土炭化材年代測定結果報告

株式会社加速器分析研究所 (IAA)

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出しています。
複数回（通常は4回）の測定値について χ^2 検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される ^{13}C の値を用いることもあります。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_S$ ：試料炭素の ^{14}C 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_S$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_S$

${}^{14}\text{A}_R$ ：標準現代炭素の ^{14}C 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_R$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_R$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ ${}^{13}\text{A}_S = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの ^{14}C 濃度（ ${}^{14}\text{A}_N$ ）に換算した上で計算した値です。（1）式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算します。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起瀨となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになります。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional

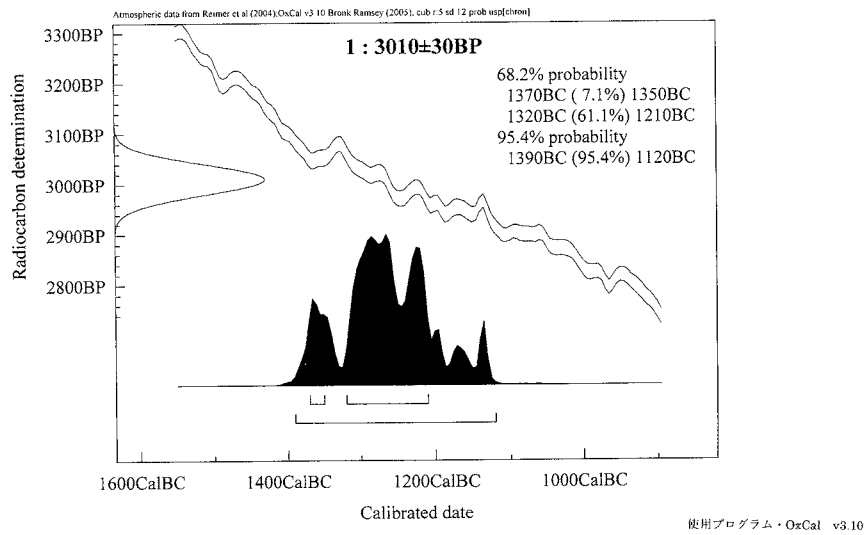
Radiocarbon Age (yrBP) が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

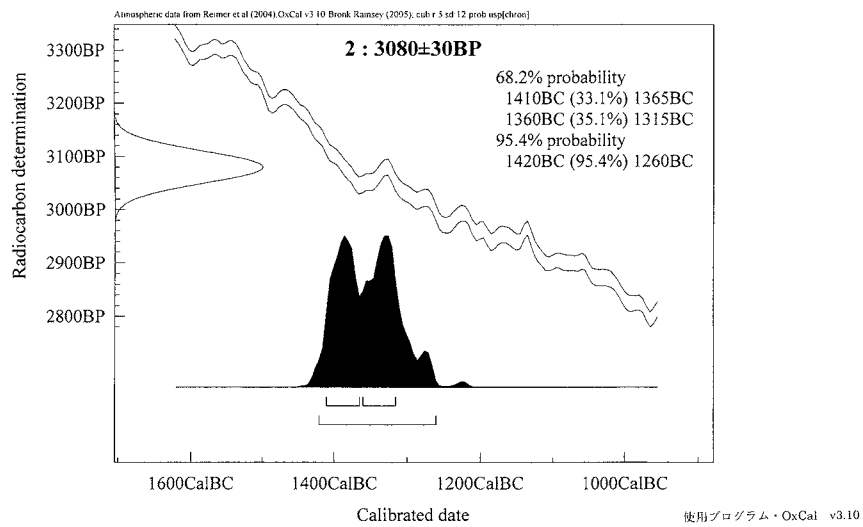
$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-51925 # 1152-1	試料採取場所：岩手県盛岡市向中野字野原 試料形態：木炭 試料名(番号)：1 (RA052 取り上げ番号：炭No 1)	Libby Age (yrBP) : 3,010 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -22.13 ± 0.91 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -312.6 ± 2.9 pMC(%) = 68.74 ± 0.29
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -308.5 ± 2.6 pMC(%) = 69.15 ± 0.26 Age (yrBP) : 2,960 ± 30
IAAA-51926 # 1152-2	試料採取場所：岩手県盛岡市向中野字野原 試料形態：木炭 試料名(番号)：2 (RA052 取り上げ番号：炭No 3)	Libby Age (yrBP) : 3,080 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -25.49 ± 0.81 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -318.8 ± 2.7 pMC(%) = 68.12 ± 0.27
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -319.5 ± 2.4 pMC(%) = 68.05 ± 0.24 Age (yrBP) : 3,090 ± 30
IAAA-51927 # 1152-3	試料採取場所：岩手県盛岡市向中野字野原 試料形態：木炭 試料名(番号)：3 (RA052 取り上げ番号：炭No 9)	Libby Age (yrBP) : 3,100 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -20.00 ± 0.84 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -320.5 ± 2.6 pMC(%) = 67.95 ± 0.26
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -313.5 ± 2.4 pMC(%) = 68.65 ± 0.24 Age (yrBP) : 3,020 ± 30
IAAA-51928 # 1152-4	試料採取場所：岩手県盛岡市向中野字野原 試料形態：木炭 試料名(番号)：4 (RA052 取り上げ番号：炭No11)	Libby Age (yrBP) : 2,990 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -22.53 ± 0.83 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -310.4 ± 2.9 pMC(%) = 68.96 ± 0.29
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -306.9 ± 2.7 pMC(%) = 69.31 ± 0.27 Age (yrBP) : 2,950 ± 30
IAAA-51929 # 1152-5	試料採取場所：岩手県盛岡市 試料形態：炭化物 試料名(番号)：5 (RA052 取り上げ番号：No 1)	Libby Age (yrBP) : 3,080 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -23.39 ± 0.85 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -318.8 ± 2.9 pMC(%) = 68.12 ± 0.29
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -316.6 ± 2.6 pMC(%) = 68.34 ± 0.26 Age (yrBP) : 3,060 ± 30

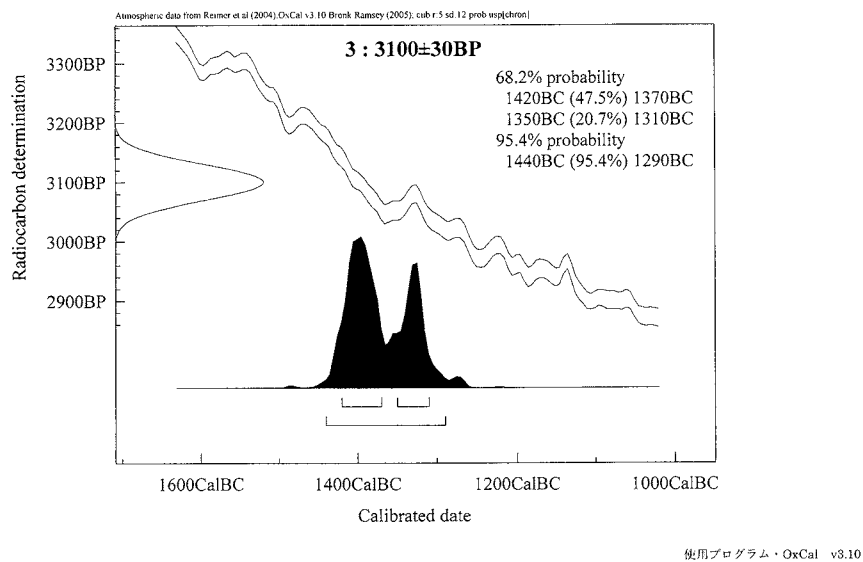
【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



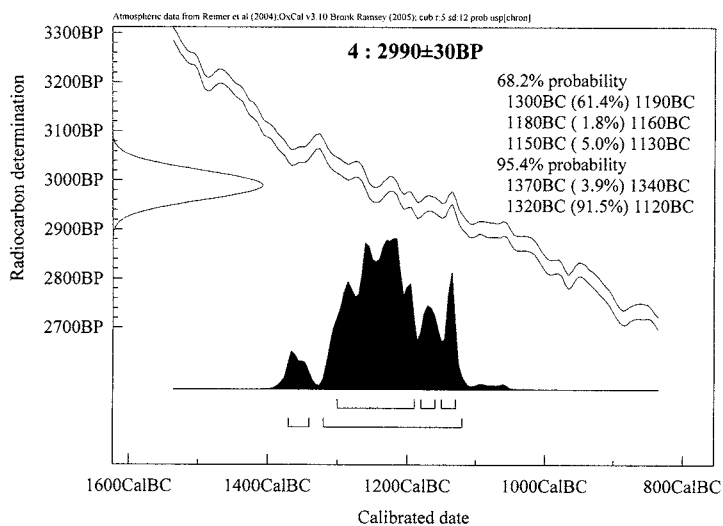
【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】

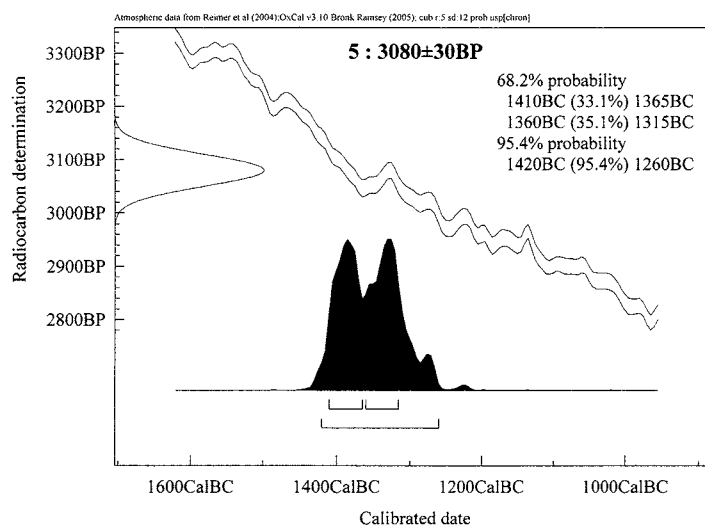


【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

2 細谷地遺跡第9次調査区の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

細谷地遺跡は、雫石川により形成された低位段丘上の東西に延びる微高地に立地する。本遺跡周辺には台太郎遺跡や飯岡才川遺跡などが分布し、これまでに平安時代の集落跡などが検出されている。

これまでの発掘調査により、本遺跡では平安時代の竪穴住居跡や畑状遺構が検出され、当社により住居跡の年代や栽培植物の種類に関する自然科学分析調査が行われている。

今回の発掘調査では、第9次調査区の北側で畑跡の可能性が考えられる小溝群が検出された(RZ010畝間状遺構)。当社では現地調査を行い、畑跡の可能性を検証する上で、畑作物の有無を調査することとした。今回は、調査対象とする土壌が黒ボク土に類似しており、有機物で構成される花粉化石や種実遺体が分解・消失しやすいと考えられたことから、黒ボク土の調査でも有効な植物珪酸体分析を選択した。

1 試料

分析試料を表1に示す。

第9次調査区内の堆積物は、下位より砂礫層、黒ボク土層、現表土の3つに大きく分けられる。砂礫層の表面には、東西方向に延びる凹凸部が見られる。調査区の微地形もこれに応じており、凸地では砂礫層までが浅く、凹地では黒ボク土が厚い。

当社の現地調査の際に、南側の凸地に1地点、北側の凹地に2地点と4地点を設定した。1地点では、厚さ約1mの堆積物が見られ、発掘調査時に大きくI層-V層に区分された(図1)。最下部には砂礫層が見られ、その上位に、黄褐色砂で構成されるV層、黄褐色土のIV層、漸移部分のIII層、黒ボク土と考えられるII層(IIb層)、砂やローム粒を含むIb層、現表土のIa層が見られる。なお、IIb層は層厚10cm程度であり、下位のIII層との境界が漸移的である。1地点では、II層からIV層にかけて層厚5cmの連続試料8点(試料番号1-8)を採取した。この中から、分析試料として試料番号2を選択した。

一方、凹地の2地点と4地点では漸移層のIII層から現表土のI層が観察される。II層の層厚は1地点よりも厚く、20cm前後である。また発掘担当者によれば、IIb層上部で十和田aテフラ(To-a)がブロック状に認められる場所も存在する。試料は、4地点のIIa層とIIb層から層厚5cmの層位試料3点(試料番号1-3)を採取した(図1)。分析試料には、試料番号2と3を選択した。なお、1地点と4地点の3点を小溝群試料の対照試料とする。

調査区の北側では小溝群(RZ010畝間状遺構)が検出され、3地点に設定した。いずれの小溝も、南北方向に延びる。小溝群は北側の凸地に位置し、砂礫層の上部の砂層が認められ、部分的に下位の砂礫層も見られる。本来の土壌の残りは不良である。小溝の覆土は砂層を母材としている。現地調査所見では、2種類に分けられる。ひとつは、上位の黒ボク土が偽礫状や塊状に混入する部分(a部とする)である。もうひとつは、やや土壤化の影響を受け、下位のロームを含んで灰-暗黄褐色化する部分(b部とする)が認められる。なお、現地表面から浅いために、現世の植物による攪乱が顕著で、削剥の様子も見られることから、本来の小溝の形状を推定することは難しい。また、小溝を畝溝と仮

定すると畝に相当する部分が幅狭であるため、畑跡でない可能性や小溝が重複して構築された痕跡である可能性も想定される。

小溝群の試料は、埋積状態を観察するために設けられた東西方向の土層断面から、小溝の覆土7点(試料番号1-7)を採取した。この中から分析試料として、西側から試料番号1(b部)、試料番号2・3・5(a部)を選択した。

植物珪酸体分析では、これら7点を分析に供した。

2 分析 方 法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から栽培植物や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

3 結 果

結果を表2、図2に示す。

各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

II層での植物珪酸体の産状や植物珪酸体含量は、1地点と4地点で異なる。1地点の試料番号2では、植物珪酸体含量が約4,800個/gである。栽培植物ではイネ属の短細胞珪酸体が検出されるものの、その含量は40個/g程度である。また、クマザサ属やヨシ属、ススキ属などが認められ、ヨシ属の産出が目立つ。

一方、4地点では試料番号3の植物珪酸体含量が約3.6万個/g、試料番号2が約6.2万個/gであり、1地点よりも多い。栽培種を含む分類群では、いずれの試料からもキビ属とオオムギ族の短細胞珪酸体が認められる。その含量は、キビ属が200個/g前後、オオムギ族は試料番号3で約300個/g、試料番号2で約700個/gである。試料番号2では、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体、籾殻の形成される穎珪酸体も認められる。その含量は、短細胞珪酸体と穎珪酸体が200個/g前後、機動細胞珪酸体が約600個/gである。この他には1地点と同様な種類が見られるものの、ヨシ属およびススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。

小溝群の3地点のうち、b部の試料番号1では植物珪酸体含量が約9,300個/gであり、3地点の中で最も少ない。イネ属などの栽培植物を含む分類群は、全く認められない。この他にはクマザサ属やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められ、ヨシ属の産出が目立つ。

a部の試料番号2・3・5では、植物珪酸体含量が4万個/g前後である。また、4地点と同様な産状が見られる。試料番号2と5ではキビ属の短細胞珪酸体、試料番号3と5でオオムギ族の短細胞珪酸体が検出される。その含量はキビ属が試料番号2で約400個/g、試料番号5で約180個/g、オオムギ

族が200個/g前後である。イネ属は、いずれの試料からも、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体、穎珪酸体が認められる。その含量は、試料番号2と3で多く、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が1,000個/g前後、穎珪酸体が試料番号2で約2,000個/g、試料番号3で約600個/gである。試料番号5は、4地点の試料番号2と比較して、短細胞珪酸体でやや多いものの、機動細胞珪酸体は少なく、穎珪酸体は同等である。この他にはクマザサ属やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められ、ヨシ属およびススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。

4 考 察

小溝群（RZ010畝間状遺構）（3地点）では、土質や混入物の違いから、覆土にa部とb部が見られた。これらには、植物珪酸体の産状や含量に違いが見られた。すなわち、b部よりもa部で植物珪酸体含量が多く、栽培種を含む分類群もa部で検出された。a部には、上位の黒ボク土が偽礫状あるいは塊状に見られた。また、a部の植物珪酸体の産状は4地点の黒ボク土試料に似ている。そのため、a部の植物珪酸体の産状は、混入した黒ボク土の産状を反映したものと言える。

ただし、3地点の試料番号2と3では、イネ属に由来する植物珪酸体の含量が4地点の黒ボク土試料よりも多かった。この要因として、試料番号2と3が採取された小溝内あるいは周辺でイネ属の植物体（稲藁や稲籾殻）が混入した可能性がある。またイネ属の含量は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が1,000個/g前後、穎珪酸体が試料番号2で約2,000個/g、試料番号3で約600個/gであった。このうち、特に機動細胞珪酸体の含量は、安定した水田稲作地の土壌で見られるイネ属機動細胞珪酸体の含量5,000個/gである（杉山,2000）ことと比較すれば少ないものの、岩手県軽米町の皂角子久保IV遺跡で検出された平安時代の畝溝でのイネ属機動細胞珪酸体含量が約600個/gであった（古環境研究所,1988）こと、あるいは先に調査した7・8次調査区で検出された畑状遺構bで約1,000個/g以上であったことと比較すれば、稲作地と同等視できる含量と言えそうである。また、土壌中にイネ属の植物体が混入する要因として、保温・保湿のための敷き藁、あるいは稲藁などを用いた堆肥による施肥が行われた場合も考えられる。これらの点を考慮すれば、小溝群の試料番号2や3が採取された溝付近では陸稲栽培あるいは稲藁による敷き藁があった可能性が考えられる。

また、試料番号2ではキビ属の短細胞珪酸体も、その含量が4地点の黒ボク土試料よりも多かった。調査した7・8次調査区で検出された畑状遺構bでもキビ属の栽培の可能性が指摘された。そのため、試料番号2が採取された付近でも、キビ属が栽培されていた可能性がある。なお、畑状遺構bではムギ類の栽培の可能性も指摘されている。試料番号3や5が採取された小溝でもオオムギ族が検出されているが、黒ボク土試料よりも含量が少なく、特に土壌中に濃集しているとは言えない。しかし、栽培が短期間であれば土壌中に植物珪酸体が蓄積しにくいことも考えられることから、ムギ栽培の可能性も否定できない。

なお、b部の試料番号1で植物珪酸体含量が少なかった点は、b部が下位のロームを含むことに起因すると思われる。腐植の混入が少ないローム層では、植物珪酸体が含まれるものの、含量が少ないことが多い。そのため、b部ではロームの混入により土壌中の植物珪酸体が希釈され、相対的に含量が低下したと思われる。

また、b部の試料番号1やa部の試料番号5で、a部の試料番号2や3のようにイネ属の植物体が供給されなかった原因として、作物の種類や農法の違いを反映する可能性がある。二戸市大向II遺跡の平安時代の畑跡では栽培種のイネやムギ類などのイネ科作物に由来する植物珪酸体は全く検出されず、イネ科以外の作物（根菜類、豆類、野菜類など）が栽培されていた可能性も指摘された（パリ

ノ・サーヴェイ株式会社,未公表)。そのため、イネやキビ、ムギ類以外の作物が栽培された可能性も否定できない。

ところで、黒ボク土試料での植物珪酸体の産状からは、黒ボク土が形成された頃にヨシ属やスキ属をはじめとして、タケ亜科やイチゴツナギ亜科などのイネ科植物の生育がうかがえる。これらは、開けた草地に生育する種類が多い。そのため、調査区の周囲は、かつて開けた草地であったことが想定される。また、ヨシ属は湿潤な場所に生育する種類であることから、周辺に凹地などの低地に湿潤な場所が存在したと思われる。これらの種類は、7・8次調査の畑跡や上位の黒ボク土層でも認められており、第9次調査区にも広がっていたことがうかがえる。

なお、4地点では1地点よりも植物珪酸体含量が多かった。4地点は凹地に当たることから、周囲から植物珪酸体を含む土壌や植物体が流入して集積しやすく、土壌中に蓄積されたためと思われる。また、1地点の黒ボク土は、4地点の黒ボク土試料よりも植物珪酸体含量が少なかった。1地点のⅡb層は下位のⅢ層との境界が漸移的であり、下位のロームを含んでいる。そのため、小溝群のb部のように、ロームの混入により土壌中の植物珪酸体が希釈され、相対的に含量が低下したと思われる。

引用文献

近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究,ペドロジスト,48,46-64.

古環境研究所,1988,プラント・オパール分析調査報告書.岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集「皂角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書 一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査」,財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター,116-128.

バリノ・サーヴェイ株式会社,1988,皂角子久保Ⅵ遺跡出土試料種子同定報告.岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集「皂角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書 一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査」,財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター,129-134.

杉山 真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール).辻 誠一郎編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.

表1 分析試料

地点	試料番号	層位	分析項目
			PO
1地点	2	基本土層Ⅱb層	●
3地点	1	小溝覆土(b部)	●
	2	小溝覆土(a部)	●
	3	小溝覆土(a部)	●
	5	小溝覆土(a部)	●
4地点	2	基本土層Ⅱa層	●
	3	基本土層Ⅱb層	●

PO:植物珪酸体分析

a部:上位の黒ボク土を偽深状、塊状を含む

b部:やや土壌化して、灰-暗黄褐色化

表2 各地点の植物珪酸体含量

(個/g)

種類 試料番号	1地点		3地点			4地点	
	2	1	2	3	5	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	37	0	1,120	850	538	234	0
キビ族キビ属	0	0	407	0	179	234	108
タケ亜科クマザサ属	147	212	407	364	538	350	216
ヨシ属	848	2,054	9,369	5,340	8,429	9,574	6,491
ウシクサ族スキ属	295	708	7,739	5,947	7,174	15,995	8,330
イチゴツナギ亜科オオムギ族	0	0	0	243	179	701	325
イチゴツナギ亜科	37	71	1,018	1,092	1,793	1,518	649
不明キビ型	1,106	1,842	8,961	9,102	7,981	11,792	5,085
不明ヒゲシバ型	258	1,062	4,684	3,762	4,484	4,553	2,596
不明ダンチク型	442	1,983	4,990	6,068	4,304	5,137	2,705
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	0	0	1,222	850	359	584	0
キビ族	0	0	204	121	90	0	0
タケ亜科クマザサ属	405	142	102	121	359	584	216
ヨシ属	442	567	1,120	728	2,331	2,335	3,029
ウシクサ族	295	283	1,527	1,699	1,345	5,371	3,570
不明	442	425	1,222	850	1,614	3,386	2,488
珪化組織片							
イネ属顆粒珪酸体	0	0	1,935	607	179	117	0
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,170	7,932	38,695	32,768	35,599	50,088	26,505
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1,584	1,417	5,397	4,369	6,098	12,260	9,303
珪化組織片	0	0	1,935	607	179	117	0
総計	4,754	9,349	46,027	37,744	41,876	62,465	35,808

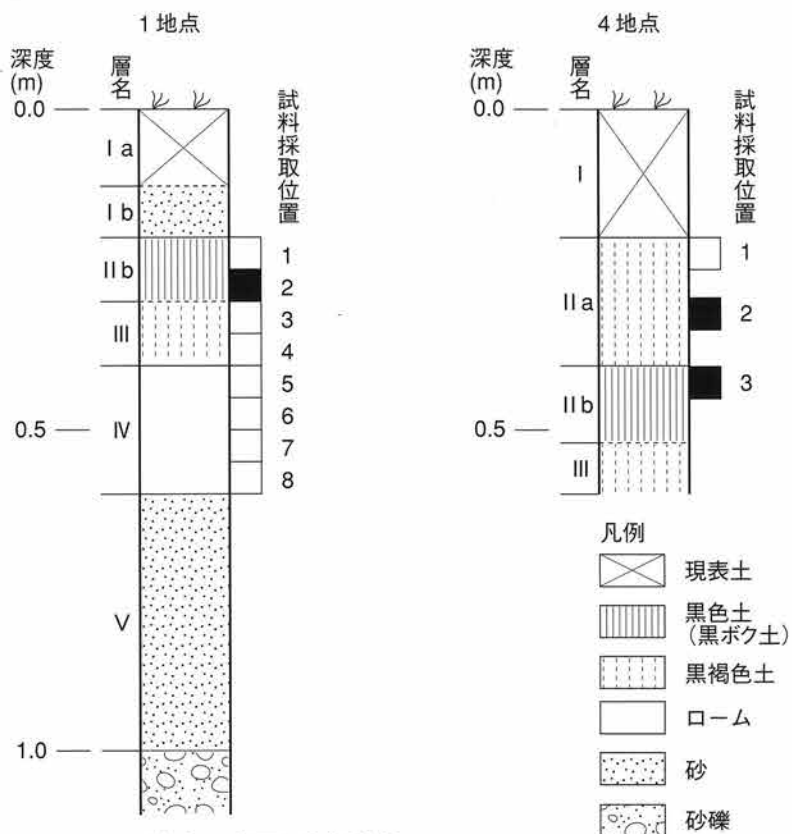


図1. 1・4地点の土層と分析試料
試料採取位置で、黒く塗りつぶした部分が植物珪酸体分析の分析試料である。

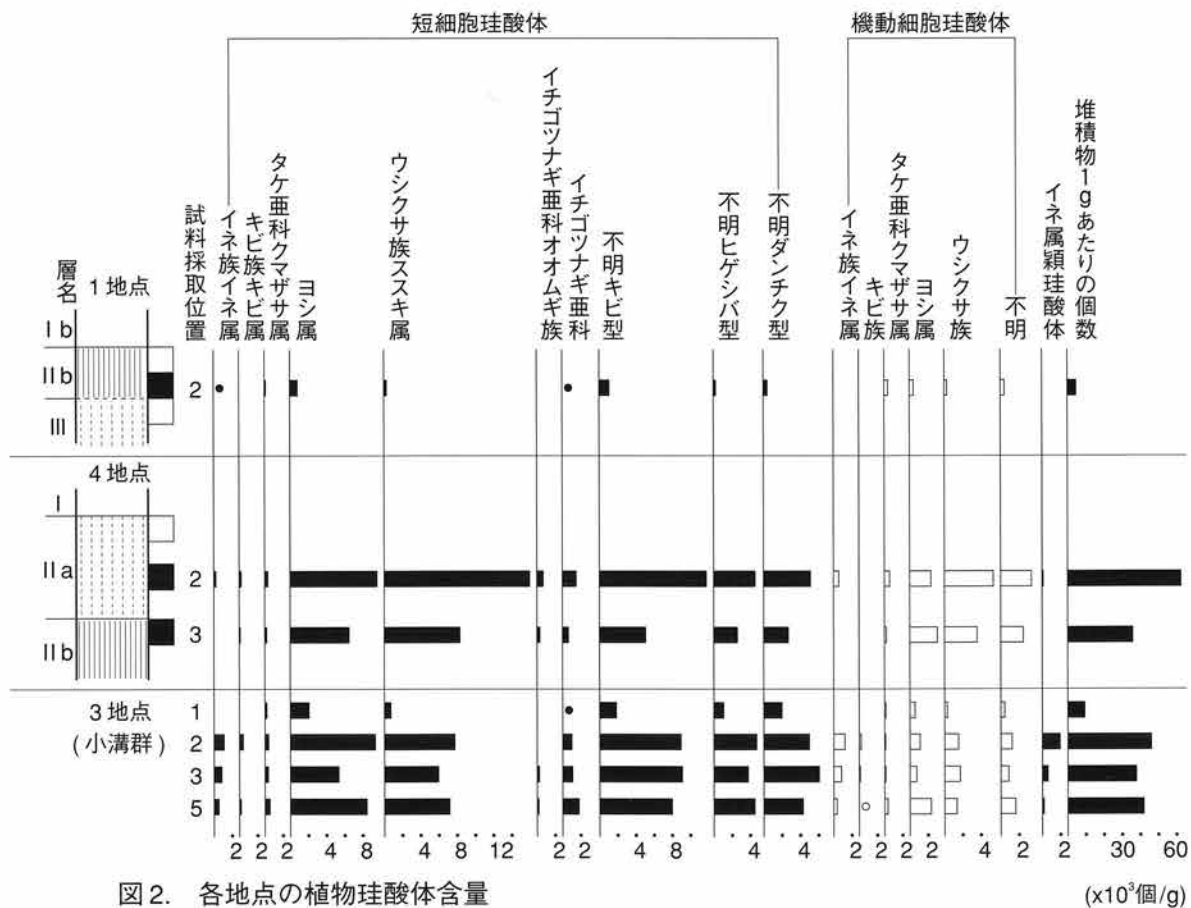
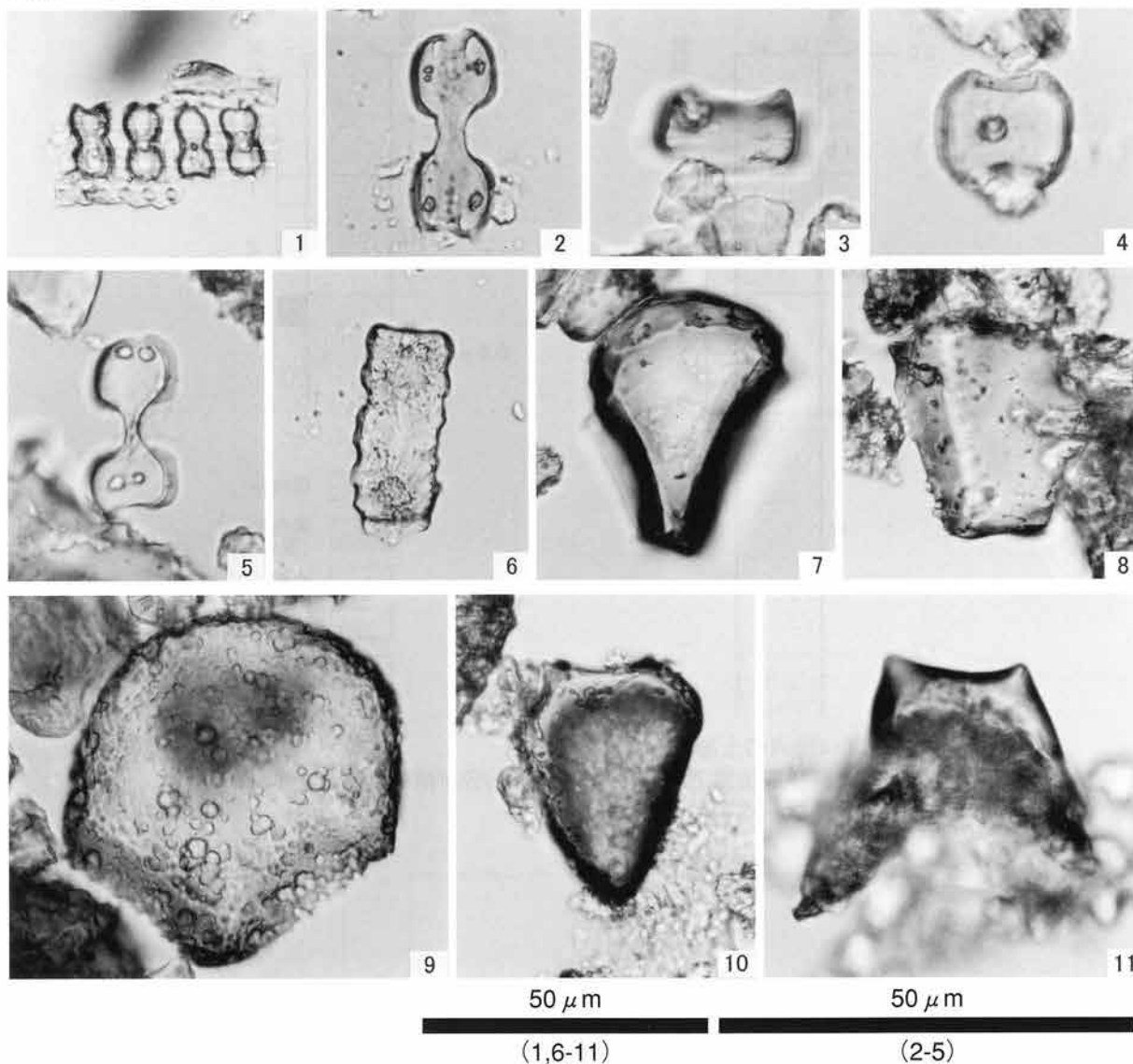


図2. 各地点の植物珪酸体含量
堆積物 1gあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g未満の種類を示す。

図版1 植物珪酸体



- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (3地点;2) | 2. キビ属短細胞捷酸体 (3地点;2) |
| 3. クマザサ属短細胞撞酸体 (1地点;2) | 4. ヨシ属短細胞蛙酸体 (1地点;2) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体 (4地点;3) | 6. オオムギ族短細胞撞酸体 (3地点;2) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体 (3地点;2) | 8. クマザサ属機動細胞珪酸体 (1地点;2) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体 (1地点;2) | 10. ウシクサ族機動細胞捷酸体 (4地点;3) |
| 11. イネ属穎珪酸体 (3地点;2) | |

3 細谷地遺跡第10次調査出土黒曜石の産地推定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県盛岡市細谷地遺跡の第10次調査では、縄文時代、奈良・平安時代、江戸時代以降の各時代の遺構・遺物が確認された。その中で、平安時代とされる竪穴住居跡より、黒曜石製のエンドスクレイパーが1点出土している。この遺物は、古代の黒曜石製石器であることと盛岡市周辺には黒曜石の産地が知られていないことから、古代の細谷地遺跡における石材獲得方法の一端を伝える資料として注目された。

今回の分析調査では、この黒曜石資料1点について、蛍光X線分析により化学組成を求め、原産地を推定する。なお、本分析では遺物保存の観点から、非破壊分析を前提とする。

1 試料

試料は、平安時代の竪穴住居跡とされるRA108のQ2 5層より出土した黒曜石製のエンドスクレイパー1点である。1辺の長さ約25mmのほぼ正方形を呈し、重量は3.73gである。

2 分析方法

a) 測定

調査はセイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光X線分析装置（SEA2120L）を用いた非破壊分析法により、半定量的に化学組成を求める。

試料は超音波洗浄を行い、表面に付着した土壌を落とした後、以下の条件で測定を実施する。得られた蛍光X線スペクトルからファンダメンタルパラメーター法（FP法）に基づいたノンスタンダードによる定量演算を実施し、化学組成を算出する。

測定条件

測定装置	SEA2120L	
管球ターゲット元素	Rh	
対象元素	Na~Ca	Sc~U
励起電圧(kV)	15	50
管電流(μ A)	自動設定	自動設定
測定時間(秒)	300	300
コリメータ	ϕ 10.0mm	
フィルター	なし	
マイラー	OFF	
雰囲気	真空	

b) FeとRbによる黒曜石産地判別

黒曜石は、流紋岩～デイサイトに相当するガラス岩である。流紋岩～デイサイトの成因は多様であるが、その反面出発物質としてのマグマの生成過程および分化過程で化学組成の挙動が異なることが

期待される。大沢ら（1991）の黒曜石の化学組成を岩系別に見ると、Rb（ルビジウム）、La（ランタン）、Ce（セリウム）、Eu（ユウロピウム）、Th（トリウム）、Sc（スカジウム）の変動が著しく、地域的な特性を示す微量成分元素として注目される。

そこで黒曜石の岩系に基づいた化学成分の変化を背景に、産地判定の指標成分としてコンパティブル元素であるFeとインコンパティブル元素であるRbを選択し、産地ごとの2成分の領域を図示した黒曜石の産地判別図（図1）を作成する。本判別図は、当社保有の原産地黒曜石110試料のほか、これまでに当社で調査を実施した遺跡出土黒曜石（産地未確定も含む）など計500試料以上の黒曜石を基に、破壊調査により得られた化学組成を用いて作成した。作成した判別図は縦軸にRb（ppm）、横軸にFe（%）をとると指数関数的な分布を示し、産地間の分離が良好であることから、分析精度が十分に高ければ産地の識別は可能であると考えられる。なお、この図はFe（%）とRb（ppm）の値を採用しているため、酸化物の分析結果をそれぞれ換算して用いている（表1中の参考値）。

3 結果および考察

今回の試料について、Fe-Rbによる産地判別図にプロットしてみると、白滝、十勝、置戸、赤井川など道内産の領域に属する試料であることが示唆されるが、非破壊分析法による半定量的な結果ではFe-Rb法のみでこれらの産地のいずれかに該当するのか判別し難い。

一方、産地判別の別指標としてSr-Rb判別図（図2）、Sr-Zr判別図（図3）、Ti-Rb判別図（図4）を用いこれら原産地の分離を試みた結果、これらの判別図を用いることにより、十勝、置戸、赤井川の3産地間の分離は難しいものの、白滝産の黒曜石に関しては分離することが可能である。したがって、本試料についてはいまのところ白滝産の黒曜石である可能性があると考えられる。今後、より定量的な手法による化学組成を得ることができれば、より確実な原産地の推定が期待される。

引用文献

五十嵐俊雄・斉藤紀行・中根秀二, 2001, Fe-Rb法による黒曜石の産地推定. PALYNO, No.4, 16-25.

大沢真澄（研究者代表）, 1991, 黒曜石の化学組成. 遺跡出土黒曜石石器の原産地推定の基礎として. 平成2年度科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書, 69p.

表1 黒曜石元素分析結果（非破壊EDX分析法）

測定試料		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Rb	Sr	Zr	Ba	推定原産地	Fe	Rb
No.	試料名	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%		%	ppm
1	RA108 Q2 5層	74.10	0.03	15.80	1.07	0.05	0.86	0.30	3.62	4.08	0.016	0.003	0.008	0.069	北海道白滝	0.75	155

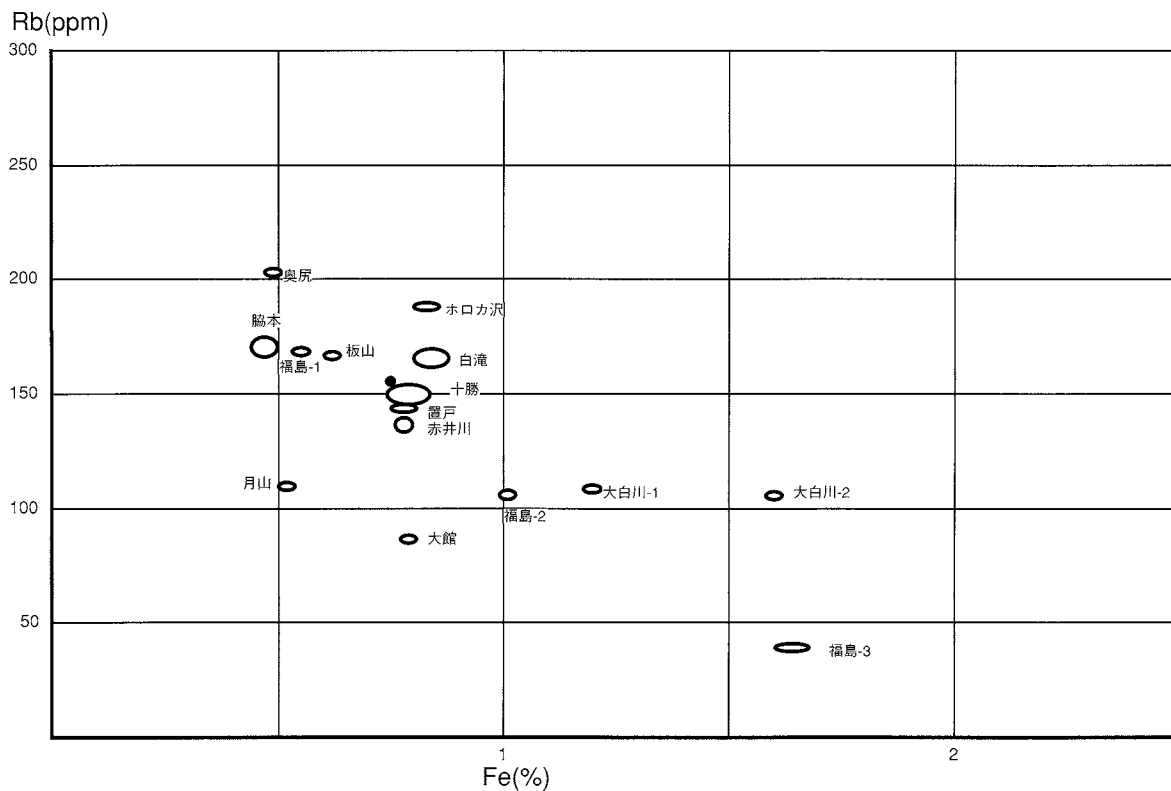


図1 Fe-Rb判別図

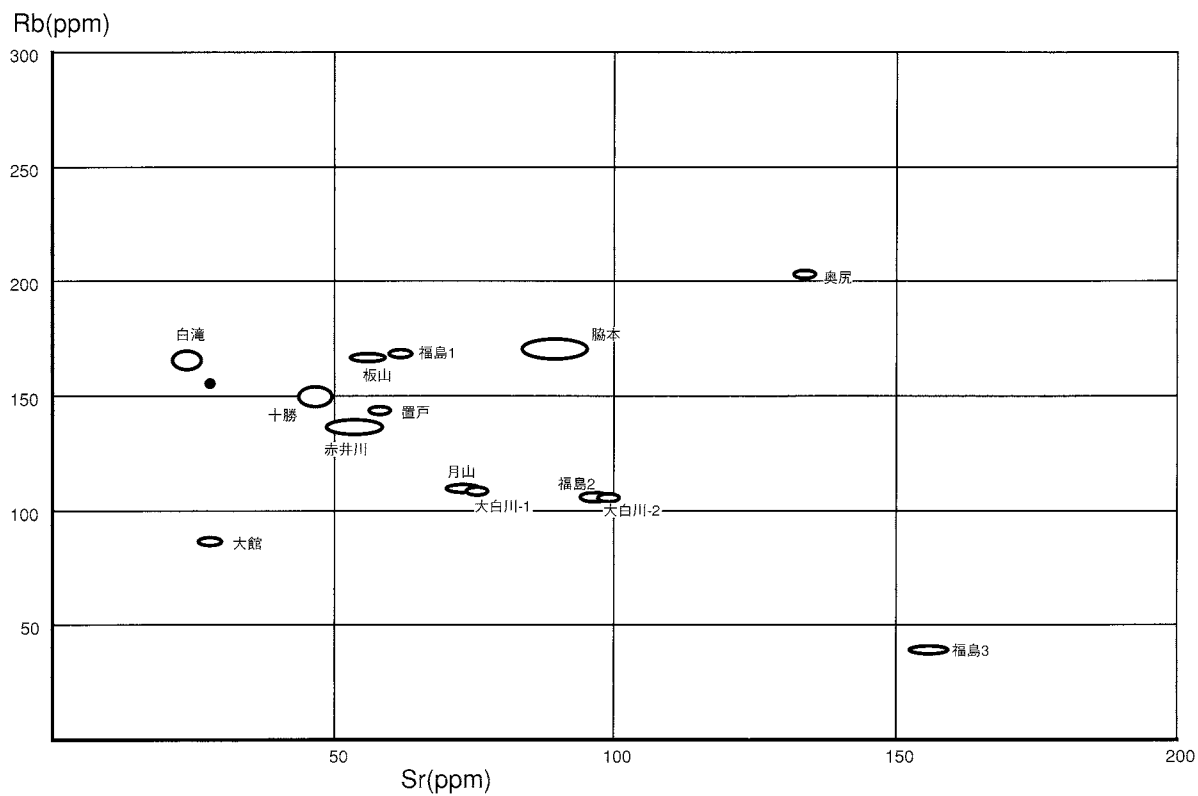


図2 Sr-Rb判別図

3 細谷地遺跡第10次調査出土黒曜石の産地推定

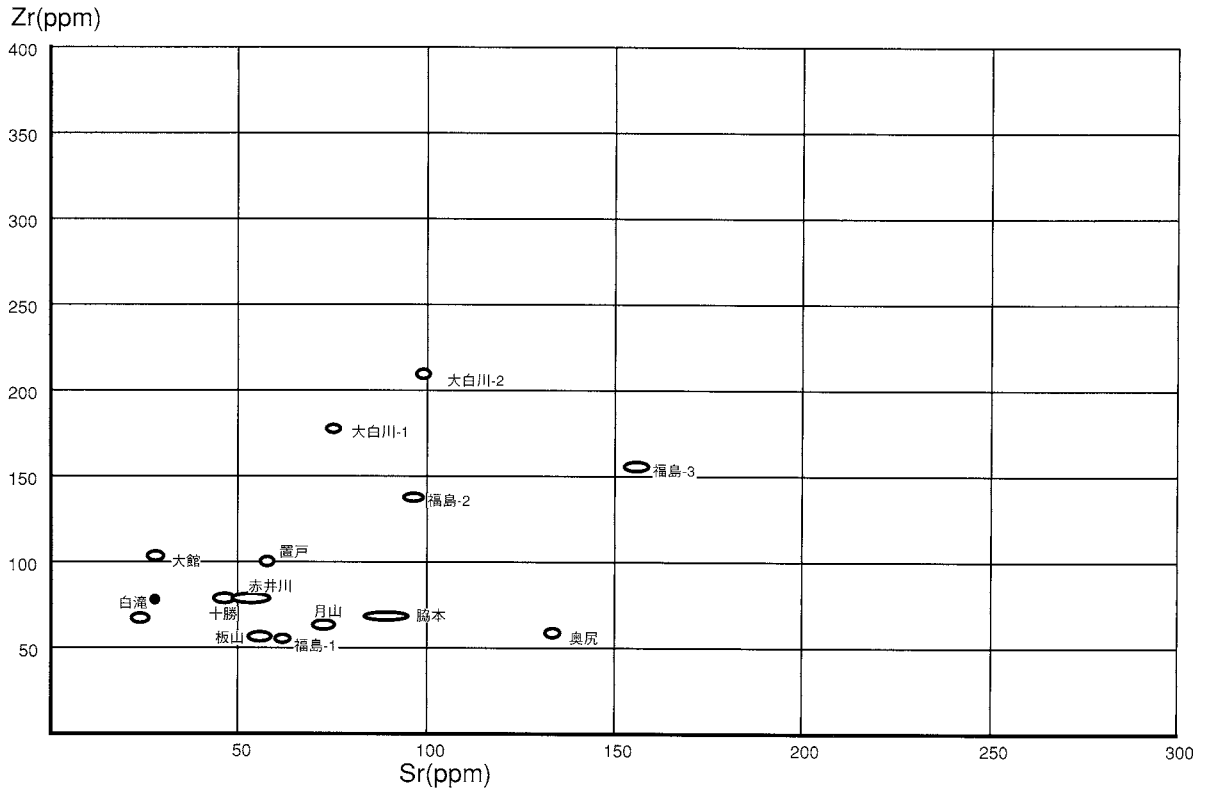


図3. Sr-Zr判別図

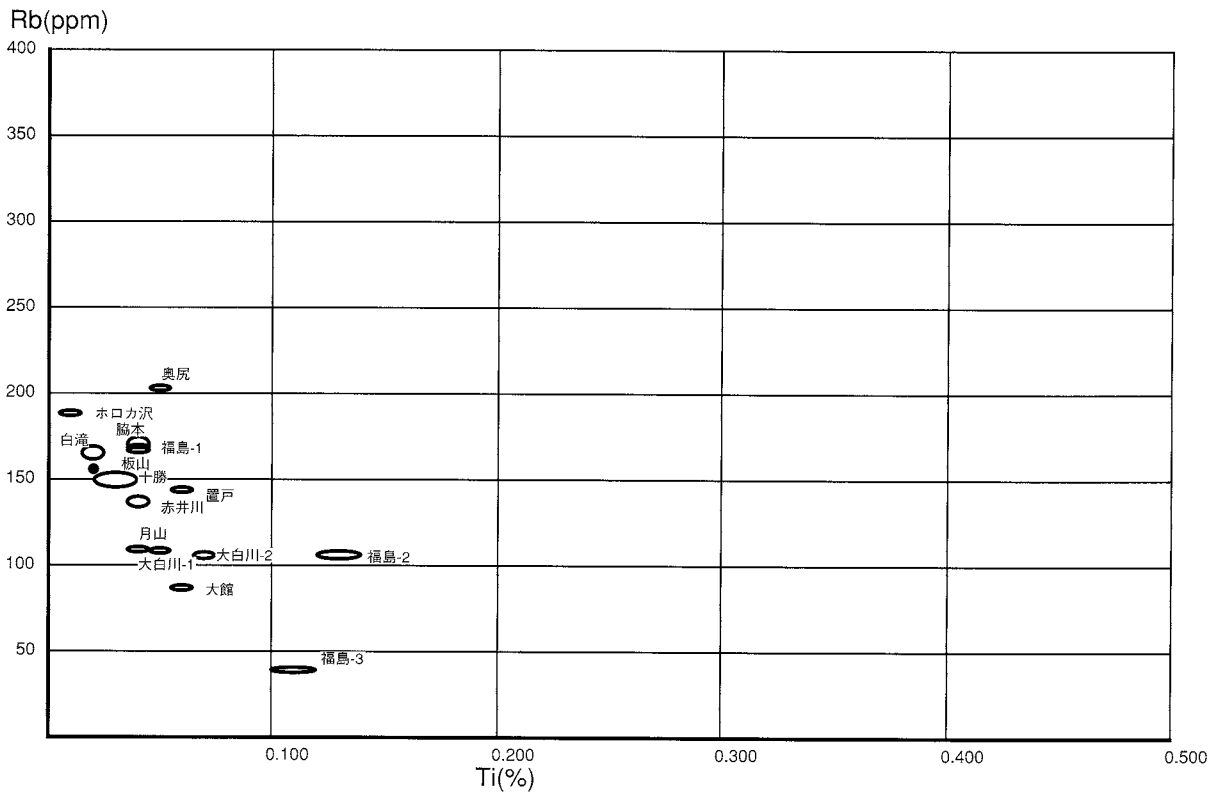


図4. Ti-Rb判別図

4 細谷地遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

岩手県盛岡市に所在する細谷地遺跡は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴い、平成17年4月12日～11月18日に発掘調査された遺跡である。調査の結果、縄文時代、奈良時代、平安時代、および江戸時代以降の建築遺構が検出され、奈良時代および平安時代の遺構からは鉄製品が出土した。出土した鉄製品の中には、鉄鐸、鉄鍬のように、形態の点でも層序の上からも、確実に平安時代に比定可能な資料がある一方、器種および層序の点で時期の特定が困難なものもみられた¹⁾。

出土鉄器を分類する方法の一つに、出土資料の金属考古学的方法がある。金属考古学的方法により得られた調査結果に考古学の調査結果を重ね合わせることによって、資料のより精密な分類が可能となり、資料の来歴に迫る情報が得られる可能性がある。以下に、細谷地遺跡出土資料の金属考古学的調査結果を報告する。

2 調査資料

金属考古学的調査を行った資料は表1に示す鉄器9点である。表1のうち、No1不明鉄器、No3不明鉄器、およびNo5不明鉄器は検出層位が浅く、平安時代よりも新しい時代の資料の可能性が指摘されている¹⁾。No5についてはところどころに銀に類似する光沢を放つ、薄膜状の金属が固着している。

3 調査試料の摘出

調査資料の摘出は、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリルを使って実施した。調査資料の摘出に先立ち、X線透過写真撮影を行い、資料の残存状況を観察した。X線透過写真から、残存状況が比較的良好で、形態学的研究に影響を与える可能性が乏しいと判断された部分から、約0.5gの試料を摘出した。試料摘出部位は、保存処理の過程で修復した。摘出した試料をさらに2分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。No5については摘出できた試料量が少なかったため、化学成分分析のみを実施した。No5の表面に固着する剥片状金属片については、ピンセットで微小試料を摘出し、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）でその組成を調べた。それぞれの資料からの試料摘出位置は、図1～図7に示すとおりである。

4 分析方法

組織観察用試料についてはエポキシ樹脂で包埋した後、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。このようにして得られた鏡面を金属顕微鏡で観察し、錆化前の鉄器地金の組織を推定できる領域、および地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された鉄器の非金属介在物（鋼を製造する過程で分離することができずに残った異物）を、EPMAで分析した。

化学成分分析用試料は外表面に付着する土砂を除去するため、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で2時間以上乾燥し、テフロン分解容器に直接秤量して、塩酸、硝酸、フッ化水素酸、および蒸留水を加え密栓した後、マイクロウエーブ分解装置を使って分解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、Ni（ニッケル）、Co（コバルト）、Mn（マンガン）、Cr（クロム）、P（リン）、Ti（チタン）、Si（ケイ素）、Ca（カルシウム）、Al（アルミニウム）、Mg（マグネシウム）、V（バナジウム）、As（砒素）、Mo（モリブデン）、およびZr（ジルコニウム）の16元素を、誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法）で分析した。

5 調査結果

5-1 鉄器の化学組成

表2に鉄器から摘出した試料の化学成分分析結果を示す。摘出した試料のT.Feはいずれも64mass%未満で、相当に錆化が進んでいる。No 4 およびNo 8を除く8試料からは、0.005mass%を上回るCu、Ni、およびCoが検出されている。特にNo 3 およびNo 5からは0.177mass%以上のCuの含有が確認されていて、他の試料に比べ含有量が高い。No 1 Sa1、No 1 Sa2、No 3、およびNo 5からは、0.139mass%以上のMnが、No 9からは0.09mass%のAsが分析されている。

錆化が進んだ試料に含有される微量元素を検討する場合、埋蔵環境からの富化について検討する必要がある²⁾。これまでの列島内出土鉄器の金属考古学的調査によると、遺物を埋蔵する土砂に50ppm（0.005mass%）以上のCu、Ni、およびAsが含有されることはまずない³⁾。金属考古学的調査を行った鉄器に、銅またはその合金をはじめとする異種金属の付着がみられなかったこと¹⁾を考慮すると、0.005mass%以上のCo、Ni、Cuが検出された試料については、含有される三成分のほとんどが、錆化前の地金に含まれていたと判断される。No 9から検出された0.09mass%のAsについても同様に解釈することができる。

5-2 鉄器の組織観察結果

No 6～No 9の鉄鐸は外観形状をよく留めている。No 6 およびNo 7のX線透過写真像には、舌の陰影が明瞭に観察される（図1）。No 6から摘出した試料（図1）には、空隙や亀裂がいたるところに認められる。錆化が進んでいることを示している。枠で囲んだ内部のEPMAによる反射電子像（BEI）には、微細な線状の空隙が層状に重なり、島状組織を形成した領域が観察される。これまでに行われた組織観察結果に基づけば^{2) 4)}、この組織はパーライト中のフェライトが錆化し、セメントライトが抜け落ちることによって生成したものと推定される。この組織を錆化前の地金のパーライトとし、錆化による組織の膨張を無視すると、No 6から摘出した試料は炭素量0.3～0.4%の鋼とみることができる⁵⁾。No 7 およびNo 2から摘出した試料にもほぼ同様の組織がみられ（図2、図4）、いずれも0.2～0.3mass% Cの鋼と推定された。No 1 Sa2（図1 a1）から摘出した試料には、金属光沢を呈する線状の結晶（Cm）とその欠落孔が観察され（図5 c1・2）、その分布状況から、0.1～0.2mass%の鋼と評価される^{2) 5)}。No 8（図1）、No 9（図1）、No 1 Sa1（図5 b1）、およびNo 4（図6）から摘出した試料には、錆化前の地金の組織を推定できる領域を見出すことができなかった。

No 7 およびNo 1 Sa1から摘出した試料には、それぞれガラス質ケイ酸塩（Gl）、Fe-Mn-O系領域によって構成される非金属介在物が観察される（図2、図5 b2）。既述のとおりNo 1 Sa2からは0.139mass%のMnが検出されているが、その多くは地金中に残存する非金属介在物に起因すると推定される。

No 3 から摘出した試料には片状黒鉛 (G) が観察される。この組織の検出によってNo 3 は鑄造鉄器であることが明らかとなった。外観形状を考慮すると、鍋の破片と推定される。

2 で述べたとおり、No 5 (図 5 a₁) の矢印の部分から摘出した試料には、局所的に金属光沢を呈する剥片が固着している。図 5 a₁ の矢印の部分から摘出した試料のEPMAによる 2 次電子像 (SEI) には、その状況が明瞭に観察される。図 5 b₁ の枠で囲んだ内部をさらに高倍で観察し、金属光沢を呈する剥片を定性したところ、剥片部分はNiおよびCrを主成分とすることがわかった (図 5 b₂・c₁)。この分析結果から、金属光沢部分はCrおよびクロム金属からなる被膜で、腐食防止のために施された措置と推定される⁶⁾。上述の組織観察結果を整理すると表 2 右欄のとおりとなる。

6 考 察

6-1 鉄器の分類

後述するように、鉄器製作の素材となる地金は銑鉄 (現代の金属工学の定義に従えば炭素量が 2 % を上回る鉄) と鋼 (現代の金属工学の定義に従えば炭素量 2 % 以下の鉄) に分類される。金属考古学的調査を行った 9 点の鉄器のうち、No 3、No 4、No 5、No 8、およびNo 9 を除く 4 資料は鋼製鉄器、No 3 は銑鉄を素材とする鑄造鉄器であることが判明した。No 4、No 5、No 8、およびNo 9 については、鋼製鉄器または鑄造鉄器のいずれかに区分するための金属考古学的根拠を得ることができなかった。No 8 およびNo 9 については、No 6 およびNo 7 と同一器形であることから、鋼製鉄器と推定される。

5 の組織観察結果から明らかのように、No 1、No 2、No 6、およびNo 7 には炭素量 0.5mass%未満の亜共析鋼が配されている。調査のため摘出した試料は調査対象とした鉄器の一部であり、資料全体の断面構造は不明である。古墳出土刀剣の中に人為的に炭素量の異なる鋼を合わせ鍛えて作刀したと推定される資料がみられること⁷⁾、奈良時代の直刀の中にも炭素量の高い鋼を心金としその両側を炭素量の低い鋼で挟んだ断面構造を有するものが確認されていること⁸⁾を加味すると、上記 4 資料についても炭素量の異なる鋼を合わせ鍛えて製作された可能性がある。この点については当該資料から広領域にわたる調査試料を摘出し確認する必要がある。ただし、複雑な形状に加工されたNo 6 およびNo 7 については、高炭素鋼に比べ加工・成形が容易な低炭素鋼が配されていた可能性が高い。

古代および中世には複数の鋼製造法があった可能性がある^{9) -12)}。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは確実である。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、製造される鋼の組成にはばらつきが生じる。従って、表 2 の分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。表 2 の中で、Cu、Ni、Coの三成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタルに取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまる。合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。図 8 a および図 8 b はいずれも、金属考古学的調査を行った 10 試料のうち、錆化しNiおよびCoが 0.005mass% (50ppm)未満にあるNo 4 およびNo 8 を除く 8 試料の (mass%Cu) / (mass%Ni) と (mass%Co) / (mass%Ni)、および (mass%Cu) / (mass%Co) と (mass%Ni) / (mass%Co) を求め、それらの値をプロットしたものである。

図 8 a ではNo 3 およびNo 5 は左上に、No 1 Sa₁ およびNo 1 Sa₂ は左方中央に、No 2、No 6、No 7、およびNo 9 は右下にはばまとまって分布する。図 8 b における分布の状況は図 8 a とほぼ同じである。図 8 a および図 8 b から、以下の 2 点を指摘できる。

① No 3 およびNo 5 の 2 資料、No 2、No 6、No 7、およびNo 9 の 4 資料はそれぞれ組成が同じ製鉄原料を使って生産された地金を用いて製作された可能性が高い。

② No 1 Sai・Sa2は、No 2、No 3、No 5～No 7 およびNo 9 の製作に使用された地金とは異なる組成の地金を用いて製作された可能性が高い。図 5 から明らかなように、No 1 資料は破片の状態で検出されている。

この場合、同一資料とする見方の他、それぞれ別個体とする見方もとれる。No 1 の Sai および Sa2 から抽出した試料が、図 8 a および図 8 b のいずれにおいてもほぼ同じ領域にプロットされることを考慮すると、破片の状態で検出された 2 資料は同一個体であった可能性が高い。

2 で述べたとおり、金属考古学的調査を行った 9 資料のうち、No 2、No 6～No 9 資料は平安時代の可能性がきわめて高いものの、No 1 不明鉄器、No 3 不明鉄器、およびNo 5 不明鉄器の検出層位は浅く、平安時代よりも新しい時代の資料の可能性が指摘されている¹⁾。②に基づけば、No 2、No 6、No 7、およびNo 9 の 4 資料は地金の組成の上からもほぼ同じ時代の資料とみることができる。考古学の研究結果に基づく分類結果と、金属考古学的調査結果はよく整合する。なお、器形の上から鉄鐸であることが明らかなNo 8 についてはNi、Co含有量がともに0.003mass%と低レベルなため、Cu、Ni、およびCo三成分比に基づく分類はできなかった。この理由として錆化の進行による微量成分の溶出、または製作に使用された地金そのもののNi、Co含有量の低さが考えられる。後者の場合、鉄鐸は地金の組成の上から2つに細分されることになるが、この点については類例の蓄積を重ねさらに吟味する必要がある。

No 5 からはニッケルおよびクロム金属からなる被膜が観察された。新しい時代の資料である。No 5 とほぼ同じCu、Ni、Co三成分比をとるNo 3 についても、新しい時代の資料の可能性が高い。Fe-Mn-O系領域によって構成される非金属介在が観察されたNo 1 についても、Cu、Ni、Co三成分比に基づく分類結果および検出された層序を考慮すると、平安時代よりも後代の資料とみることができる。特異な器形のNo 4 についても、No 8 と同様の理由で、Cu、Ni、Co三成分比に基づく分類はできなかった。化学組成の点でNo 8 に近似することを考慮すると、No 4 も平安時代の資料の可能性もある。この点については層序の吟味、当該時期における類似資料の確認を待って判定する必要がある。

7 ま と め

細谷地遺跡出土鉄器の金属考古学的調査によって、以下の4点が明らかとなった。

① 調査した9資料のうち、1資料は鑄造鉄器（No 3：鍋の破片と推定される）、4資料（No 1、No 1、No 6、No 7）は鋼製鉄器で、いずれにも亜共析鋼が配されている。No 4、No 5、No 8、No 9のうち、鉄鐸に分類されるNo 8 およびNo 9 については、鋼を素材としていると推定される。

② 4点の鉄鐸（No 6～No 9）のうち、No 8 を除く3資料とNo 2 は、ほぼ同じ化学組成の地金を用いて製作された可能性が高い。

③ ニッケルおよびクロム金属からなる被膜が残存するNo 5、No 5 とほぼ同じ化学組成をとるNo 3、No 6～No 9 とは化学組成が異なるNo 1 については、検出された層序を考慮すると、平安時代よりも新しい時代の資料の可能性が高い。

④ No 4 の時代比定については類例の蓄積を図り、慎重に判定する必要がある。

出土資料の金属考古学的調査をとおして、資料の組成に基づいた資料分析が可能であることが確かめられた。今後同様の調査を積み重ね、その結果と考古学の調査結果を重ね合わせることによって、

鉄に関する物質文化交流の変遷解明ができるものと期待される。

註

- 1) 遺跡を発掘調査された財団法人岩手県文化振興事業団・北村忠昭氏からのご教授による。
- 2) 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、1984、pp.27-33。
- 3) 赤沼英男『出土遺物の組成からみた物質文化交流－古代北方地域出土鉄関連資料を中心に－』岩手県立博物館調査研究報告書、19、2005年。
- 4) Knox, R. 'Detection of carbide structure in the Oxide remains of ancient steel', Archaeometry, Vol.6, 1963, pp.43-45.
- 5) 佐藤知雄編『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社、1968年。
- 6) 吉沢四郎、山川宏二、片桐晃『金属の腐食防除論』株式会社化学同人、1981、pp.177-180。
- 7) 依国一『日本刀の科学的研究』日立印刷、1982年。
- 8) 赤沼英男、木村克則「東北地方北部終末期古墳出土直刀の材質と製法」岩手県立博物館研究報告、7、1989、pp.63-74。
- 9) 大澤正己「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」季刊考古学、8、1984、pp.36-40。
- 10) 福田豊彦「近世前期、和鉄の生産と流通の基本形態」たたら研究、39、1999、pp.15-24。
- 11) 福田豊彦「近世における『和鉄』とその技術-中世の『和鉄』解明のために-」『製鉄史論文集たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会、2000、pp.195-228。
- 12) 赤沼英男、佐々木稔、伊藤薫「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集』たたら研究会編、2000、pp.553-576。

表1 調査資料の概要

No	資料名	検出遺構	層位	遺物番号	調査資料番号
1	不明鉄器	RA071	2層	170	43
2	鉄鏃	RA082	7層	317	42
3	板状鉄器	RA084		331	39
4	板状鉄器	RA092	4層	440	28
5	不明鉄器	RA092	2層	441	25
6	鉄鐸	RA100	トレンチ	550	36a
7	鉄鐸	RA100	トレンチ	551	36b
8	鉄鐸	RA101	中層	566a	35a・b
9	鉄鐸	RA106	3層	625	34

注1) Noは分析番号、検出遺構、資料番号、資料名は岩手県埋蔵文化財センター・北村忠昭氏による。

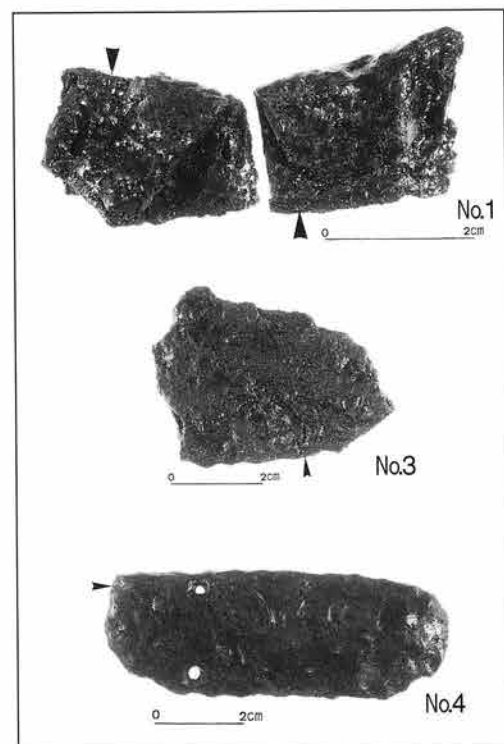


図2

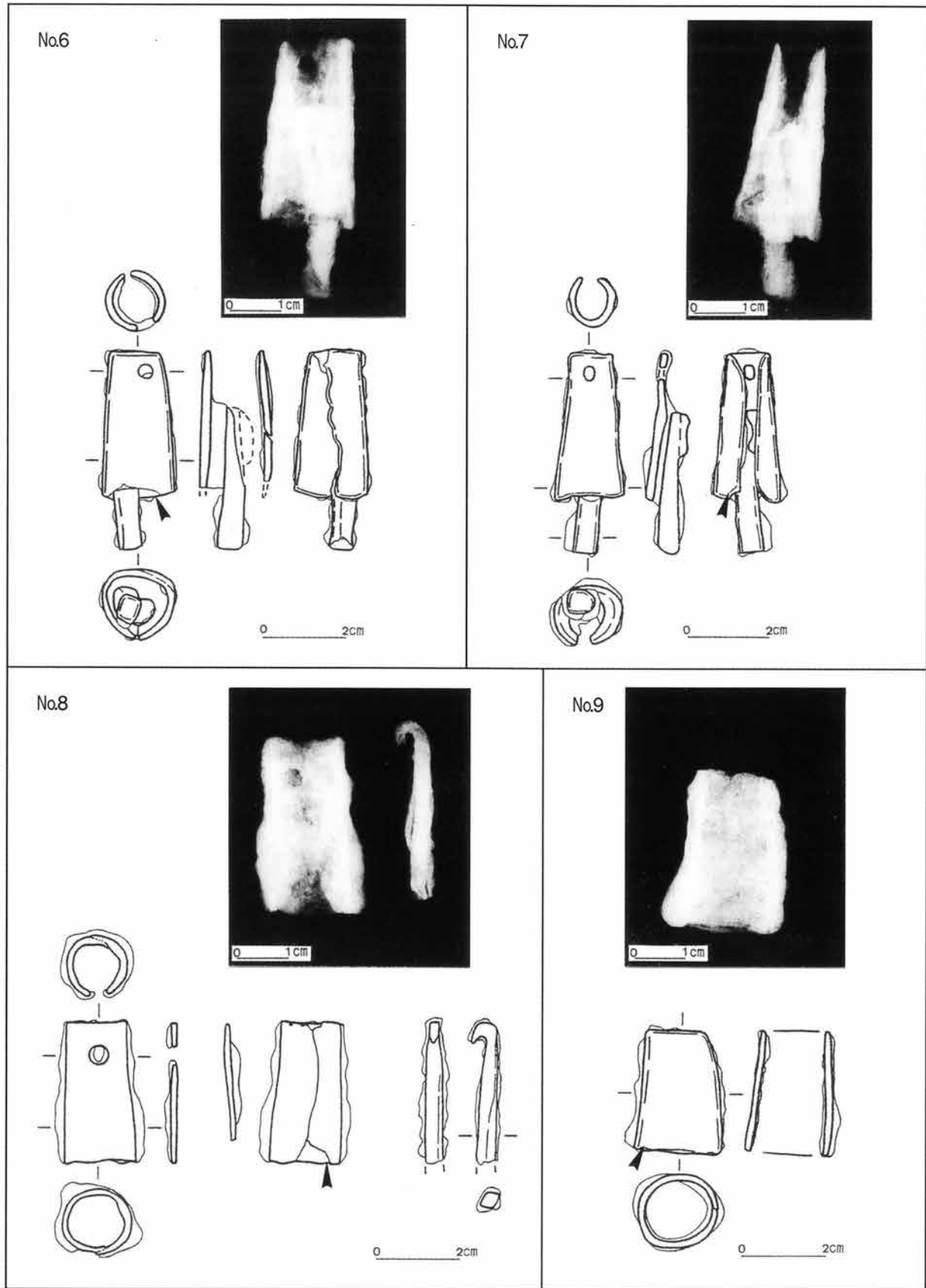


図1 鉄鐸の実測図とX線透過写真像

No.は表1に対応。実測図の矢印は試料摘出位置。X線透過写真撮影条件は80kVP、2mA、15sec。

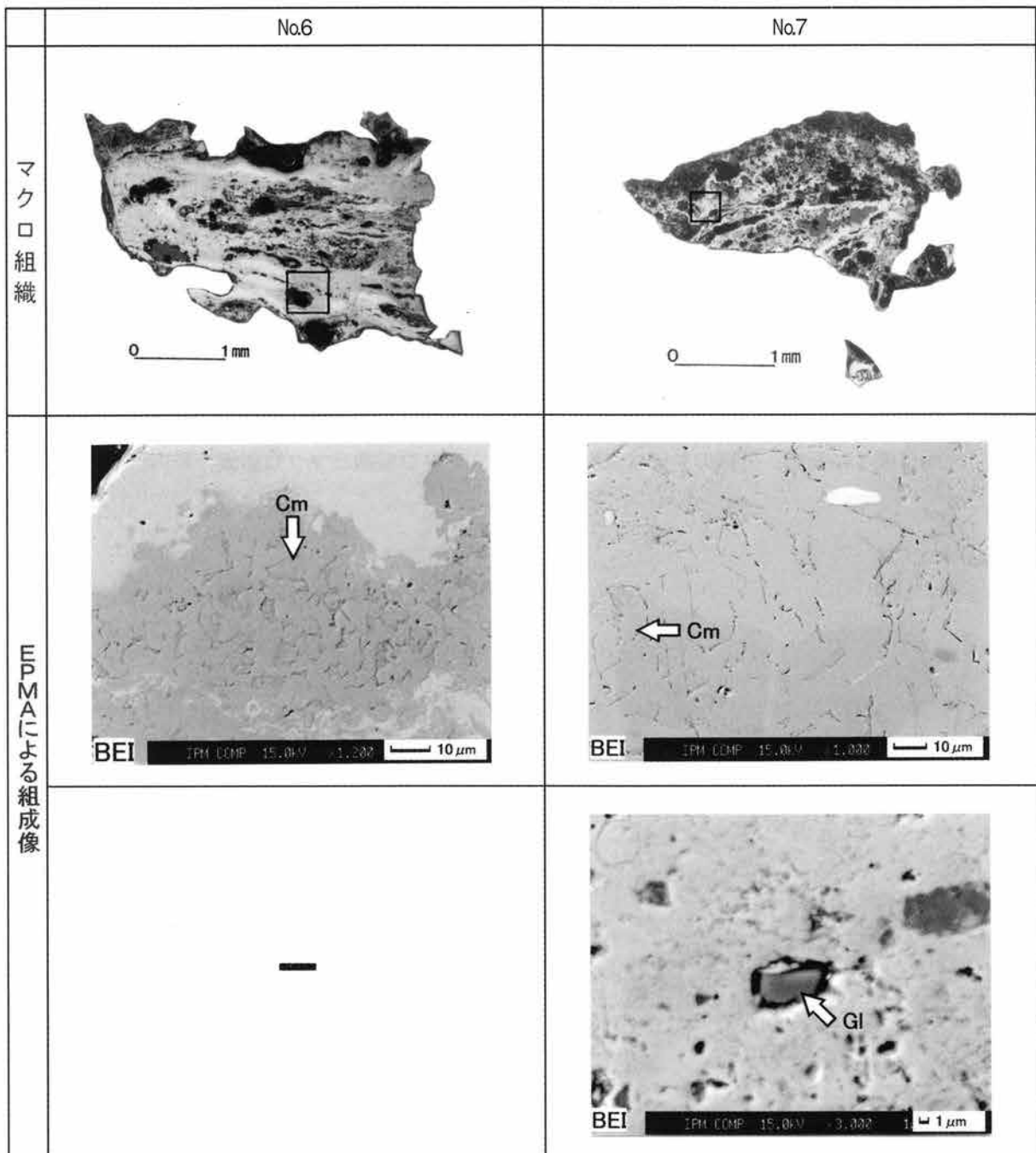


図2 No.6およびNo.7から抽出した試料の組織観察結果

No.は表1に対応。No.6およびNo.7反射電子像(BEI)上段はマクロ組織枠内部。Cmはセメントイト(Fe_3C)またはその欠落孔。Glはガラス質ケイ酸塩。

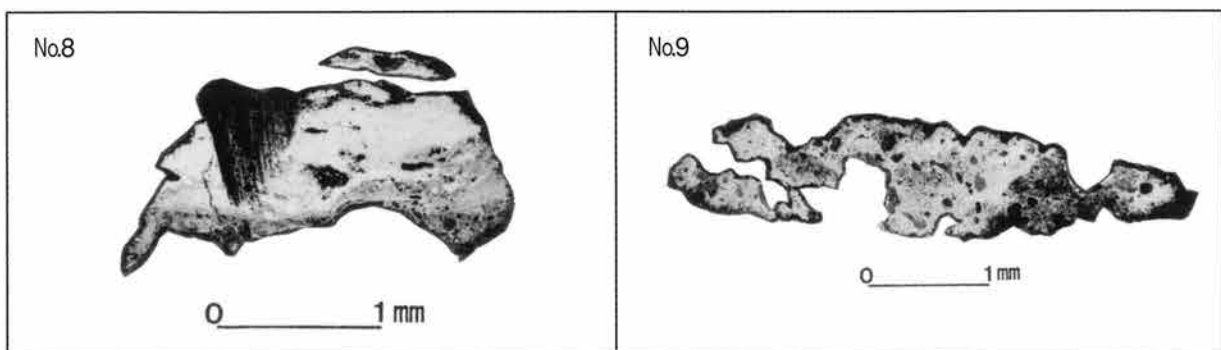


図3 No.8およびNo.9から抽出した試料のマクロ組織

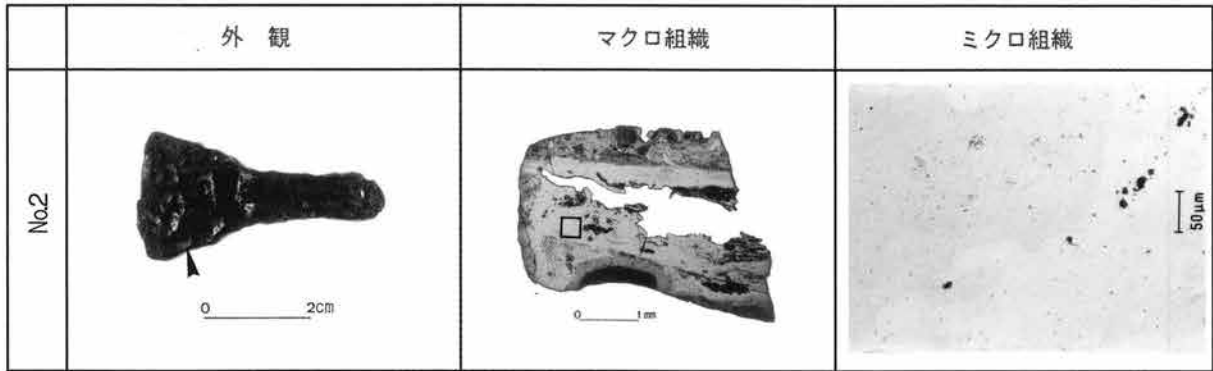


図4 No.2の外観と摘出した試料の組織観察結果

No.は表1に対応。外観の矢印は試料摘出位置。ミクロ組織はマクロ組織の枠内部。

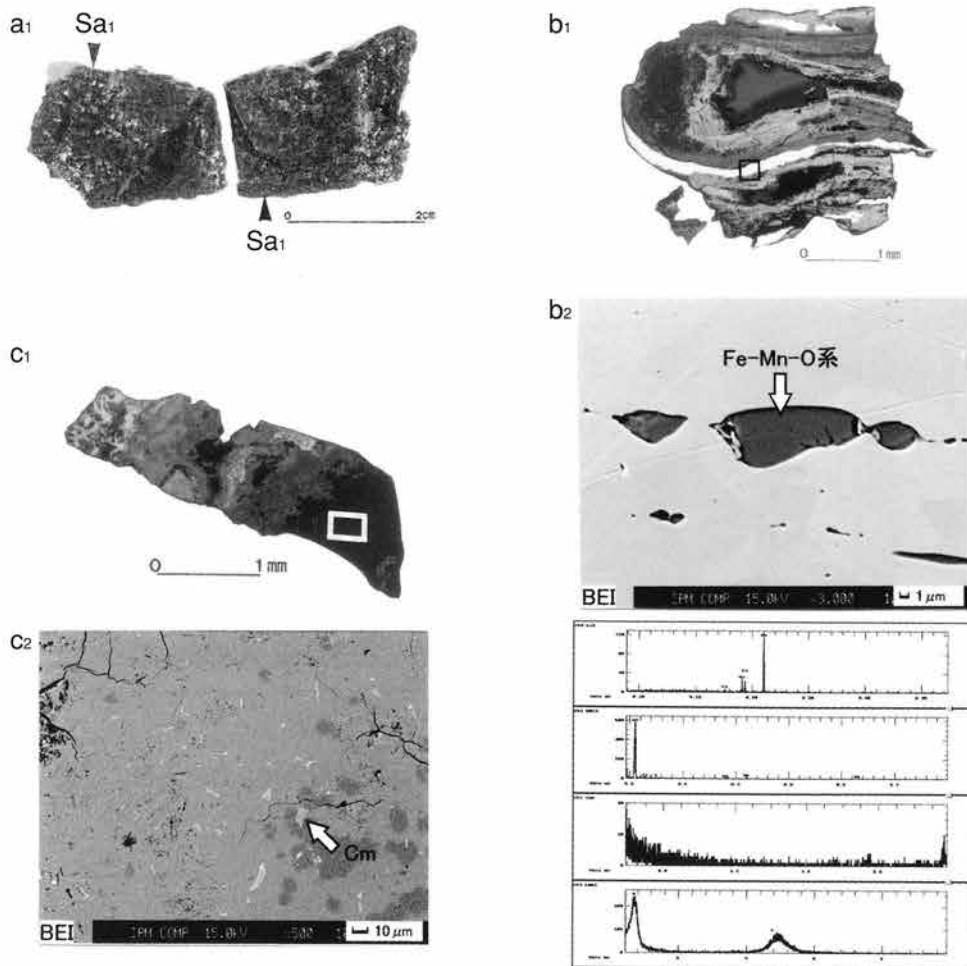


図5 No.1の外観と摘出した試料の組織観察結果

a₁ : 外観、矢印は試料摘出位置。b₁ : a₁のSa₁部から摘出した試料のマクロ組織。b₂ : b₁枠内部のEPMAによる反射電子像(BEI)と定性分析結果。c₁ : a₁のSa₂部から摘出した試料のマクロ組織。c₂ : c₁枠内部のEPMAによる反射電子像(BEI)。Cmはセメンタイト(Fe₃C)またはその欠落孔。

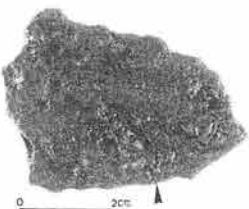
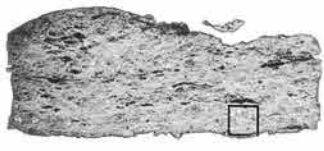
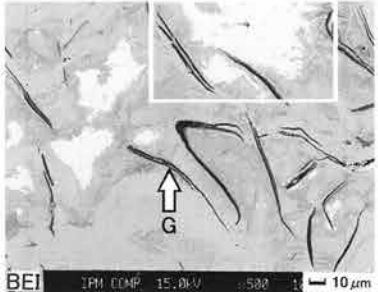



	外 観	マクロ組織	EPMAによる組成像
No.3			
No.4			

図6 No.3およびNo.4の外観と抽出した試料の組織観察結果

No.は表1に対応。外観の矢印は試料抽出位置。EPMAによる反射電子像(BEI)はマクロ組織の枠内部。Gは片状黒鉛。

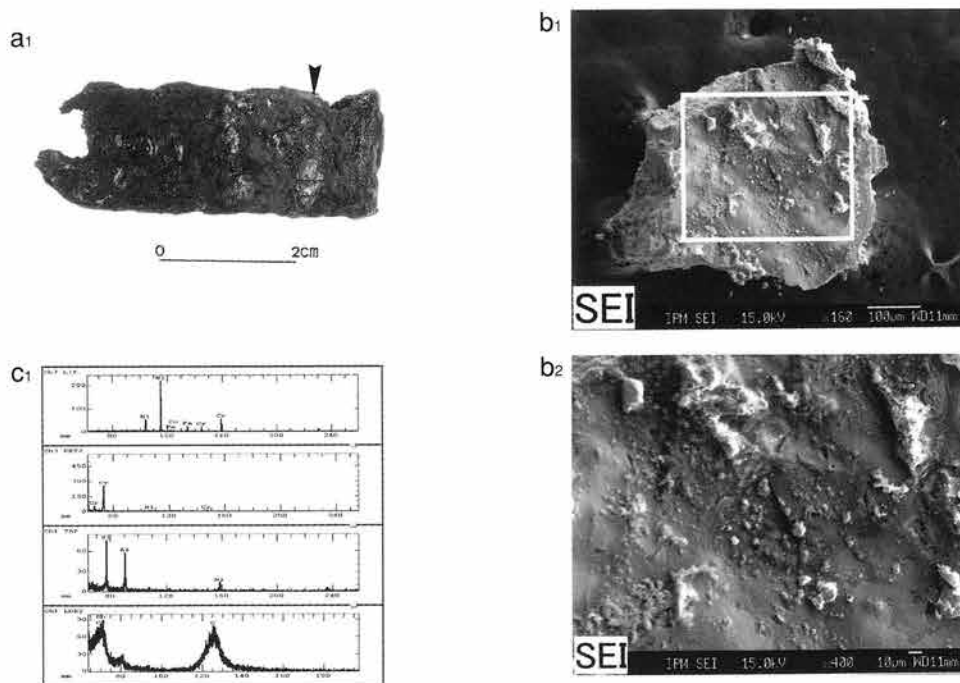


図7 No.5の外観と抽出した試料の組織観察結果

a₁: 外観、矢印は試料抽出位置。No.は表1に対応。b₁: a₁から抽出したEPMAによる二次電子像(SEI)。b₂: b₁の枠内部の二次電子像(SEI)。c₁: b₂金属光沢部分のEPMAによる定性分析結果。

表2 調査資料の概要

No	資料名	サンプル 掘出位置	化学組成 (mass%)																Cu・Ni・Co三成分比			
			TFe	Cu	Ni	Co	Mn	Cr	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	As	Mo	Zr	Co*(Co/Ni)	Cu*(Cu/Ni)	Ni**(Ni/Co)	Cu**(Cu/Co)
1	不明	Sa1	57.17	0.027	0.011	0.006	0.161	—	0.01	0.020	—	0.504	0.310	—	<0.001	0.01	0.001	<0.001	0.55	2.45	1.83	4.50
2	鉄鏢	Sa2	46.85	0.029	0.011	0.006	0.139	—	0.03	0.159	—	1.580	2.030	—	0.004	0.01	0.001	<0.001	0.55	2.64	1.83	4.83
3	鉄鏢	—	63.91	0.015	0.037	0.084	0.002	—	0.05	0.021	—	0.021	0.475	—	<0.001	0.01	0.006	<0.001	2.27	0.41	0.44	0.18
4	板状	—	59.50	0.177	0.039	0.009	0.180	—	0.07	0.062	—	0.090	0.009	—	0.006	0.02	0.005	<0.001	0.23	4.54	4.33	19.7
5	不明	—	60.15	0.001	0.001	<0.001	0.009	<0.001	0.09	0.010	1.05	0.032	0.239	0.043	0.001	<0.01	<0.001	—	—	—	—	—
6	鉄鏢	—	59.94	0.251	0.066	0.014	0.204	0.028	0.03	0.003	0.45	0.036	0.073	0.018	0.001	0.09	0.005	<0.001	0.21	3.8	4.71	17.9
7	鉄鏢	—	58.26	0.022	0.034	0.072	0.031	<0.001	0.07	0.017	0.52	0.020	0.073	0.014	0.001	0.01	0.006	0.001	2.12	0.65	0.47	0.31
8	鉄鏢	—	53.49	0.015	0.055	0.113	0.053	<0.001	0.11	0.027	1.47	0.047	0.498	0.061	0.001	<0.01	0.002	0.001	2.05	0.27	0.49	0.13
9	鉄鏢	—	45.95	0.001	0.003	0.003	0.010	<0.001	0.03	0.058	3.55	0.166	1.270	0.233	<0.001	<0.01	<0.001	0.001	—	—	—	—
9	鉄鏢	—	51.37	0.010	0.008	0.020	0.011	<0.001	0.06	0.057	2.80	0.157	1.040	0.244	<0.001	<0.01	0.001	2.50	1.25	0.4	0.50	

注1) Noは表1に対応。化学成分分析はICP-AES法による。

注2) IO: Fe-O系領域、G: ガラス化した領域。

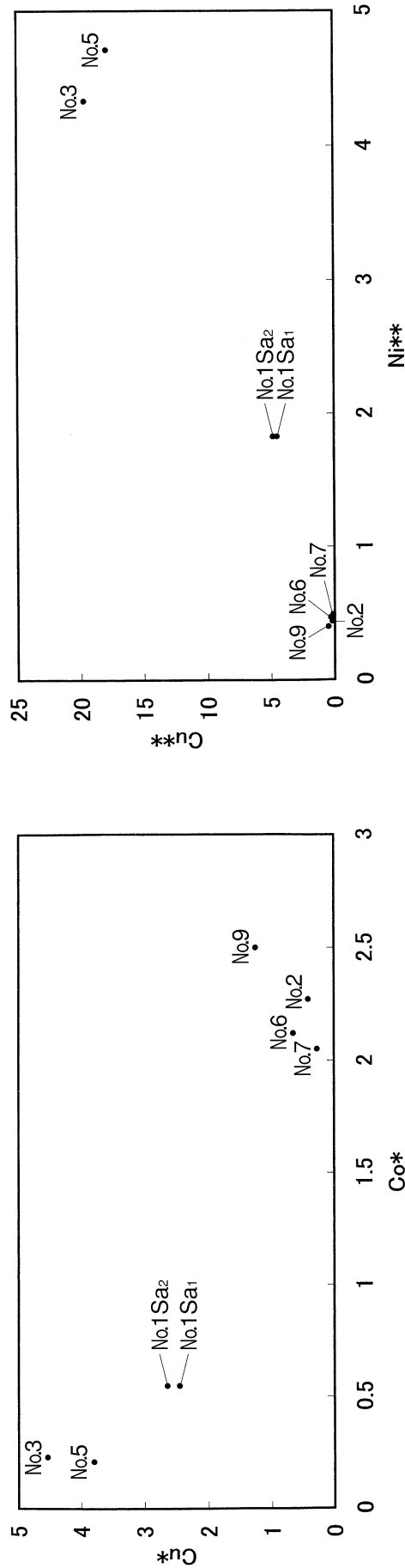


図8 鉄器に含有されるCu、Ni、Co三成分比

Co* : (mass%Co)/(mass%Ni)、Cu* : (mass%Cu)/(mass%Ni)。

Ni** : (mass%Cu)/(mass%Co)、Cu** : (mass%Ni)/(mass%Co)。

No.は表1に対応。

写 真 图 版



調査区北半



調査区南半



調査区南側（北から）

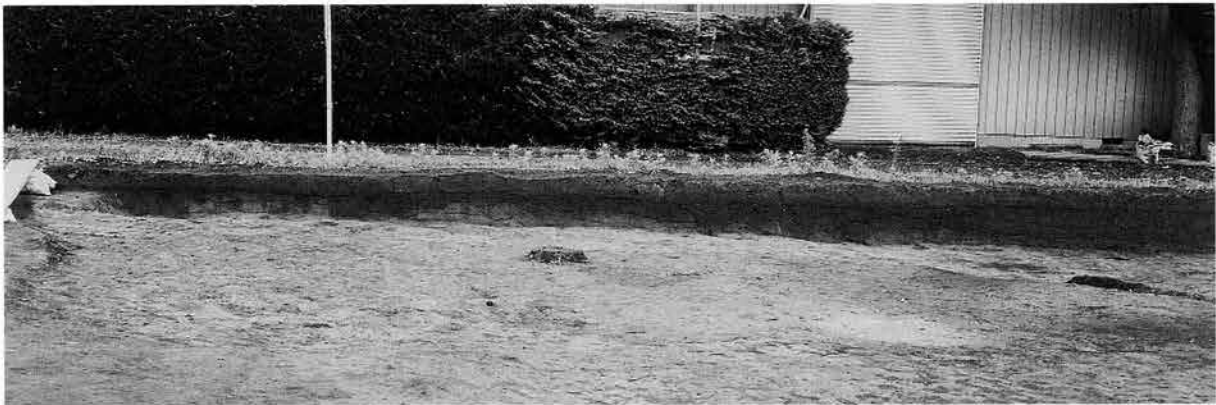


調査区北側（南から）

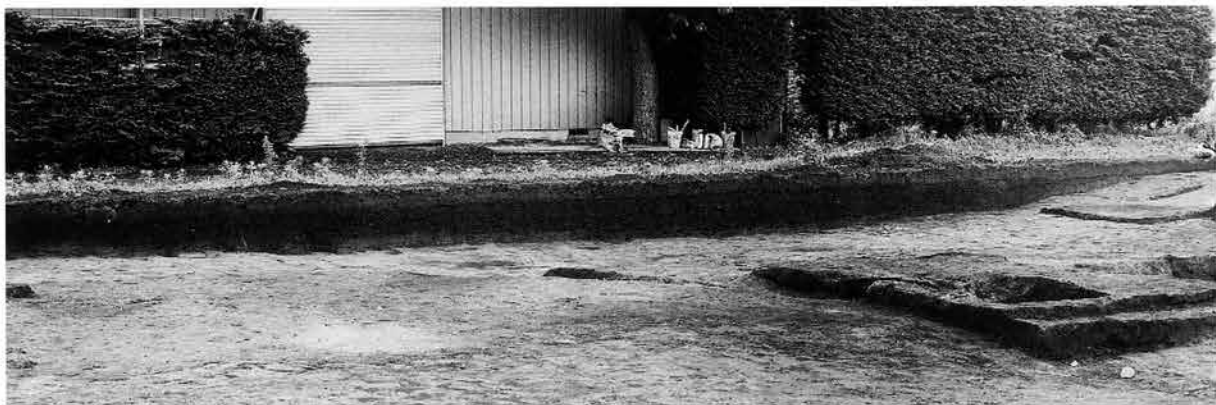
写真図版2 調査前風景



基本土層



調査区中央 埋没沢 土層（北から）東半



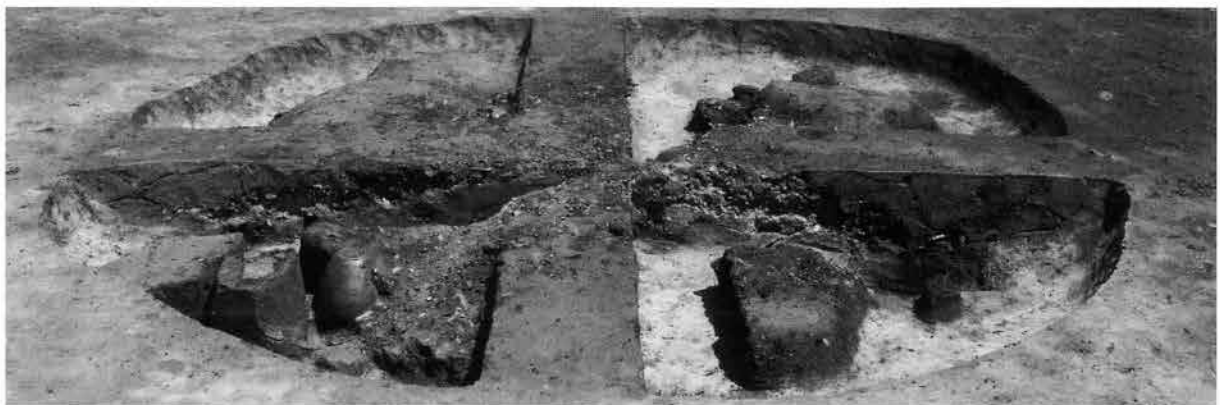
調査区中央 埋没沢 土層（北から）西半



15号住 全景（南から）



南北断面（東から）



東西断面（南から）

写真図版4 RA052竪穴住居跡（1）（15号住）



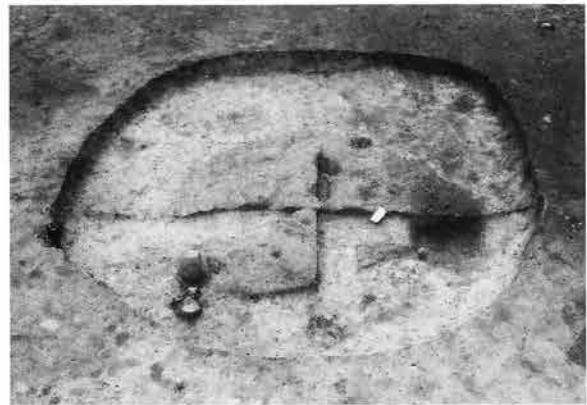
遺物出土状況



炭化材検出状況



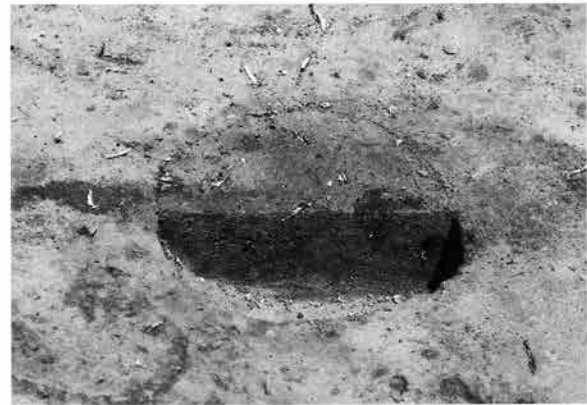
砂利検出状況



10層検出状況



Pit1断面



Pit2断面



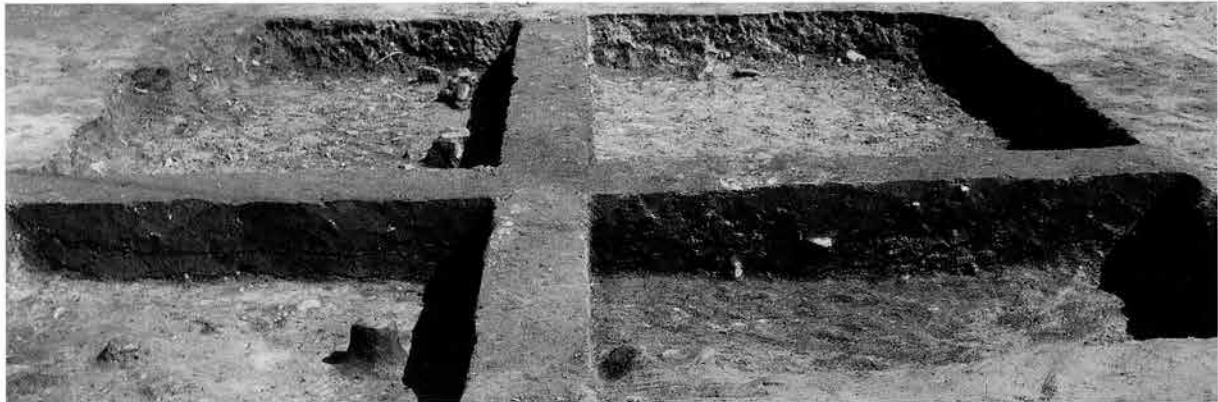
Pit3断面



土器埋設炉断面



全景（南東から）



断面（北西から）



カマド全景（南東から）

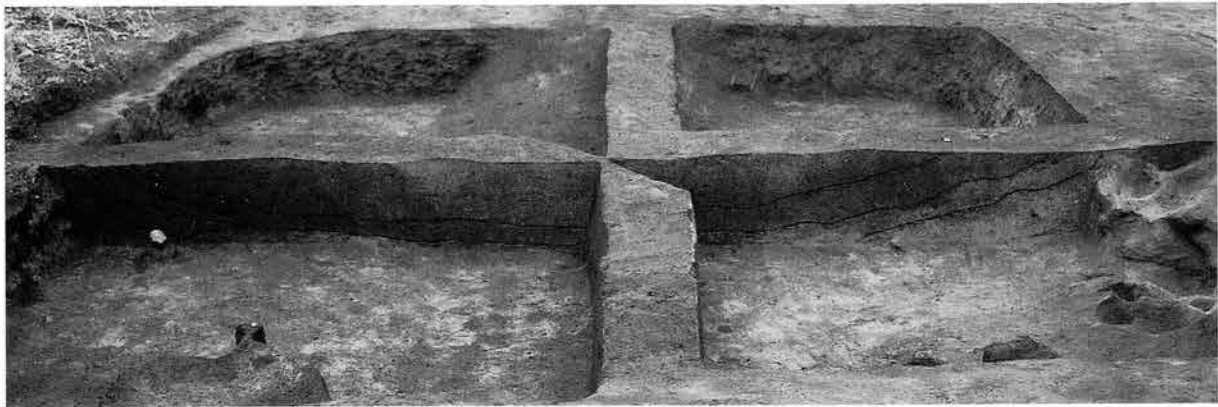


遺物出土状況（南から）

写真図版6 RA053竪穴住居跡（32号住）



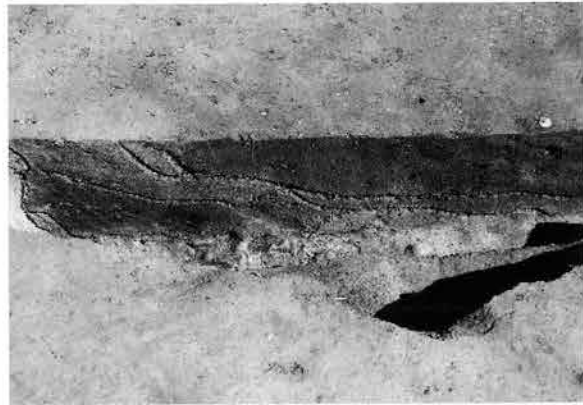
全景（南東から）



断面（南東から）

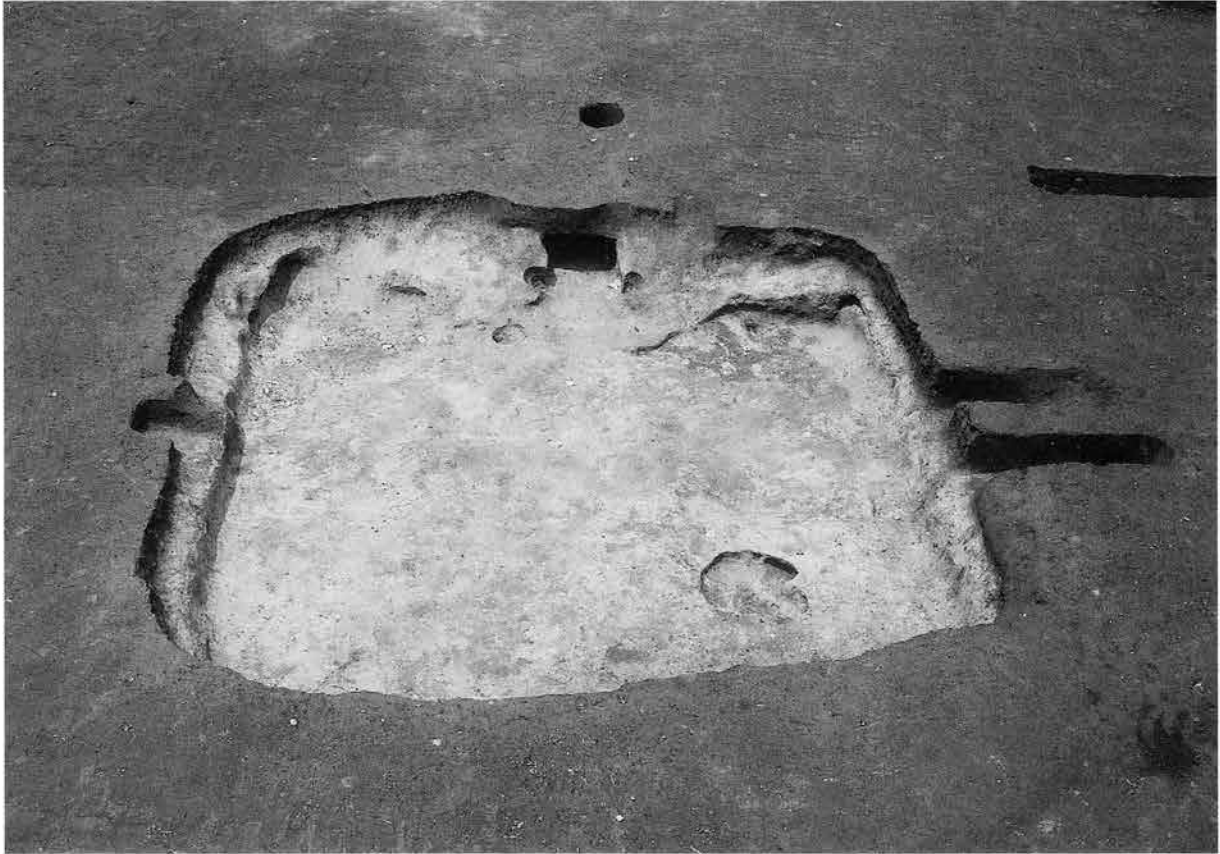


カマド周辺遺物出土状況

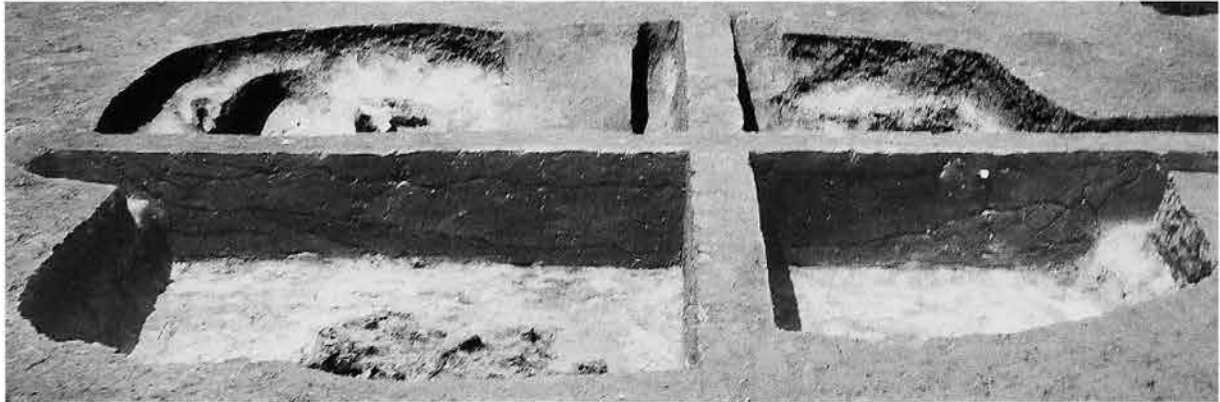


カマド煙道断面

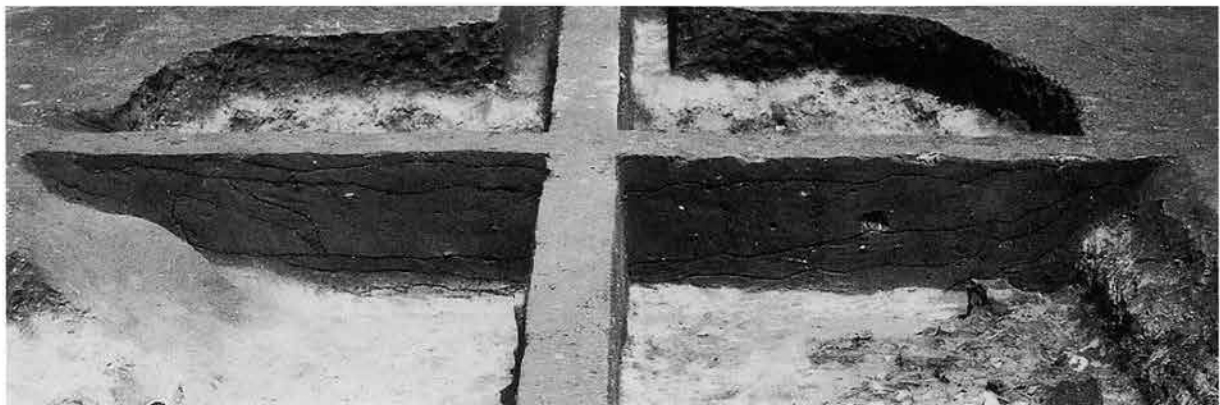
写真図版7 RA054竪穴住居跡（30号住）



全景（南東から）



断面（南東から）



断面（北西から）

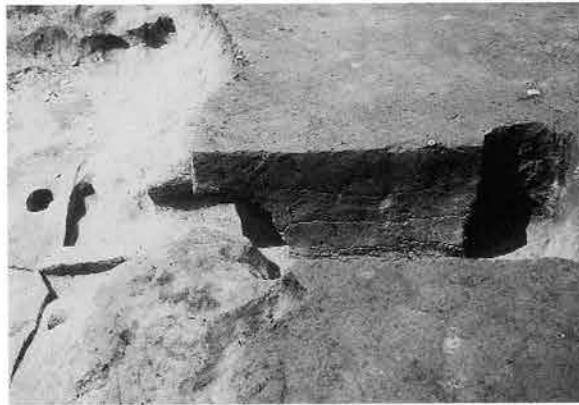
写真図版8 RA055竪穴住居跡（1）（16号住）



カマド



カマド埋土断面



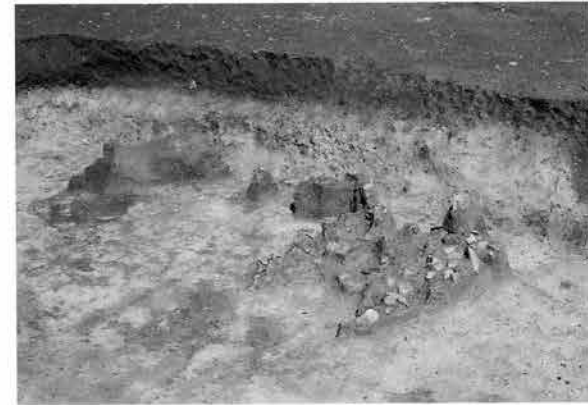
カマド煙道断面



カマド燃焼部断面



遺物出土状況



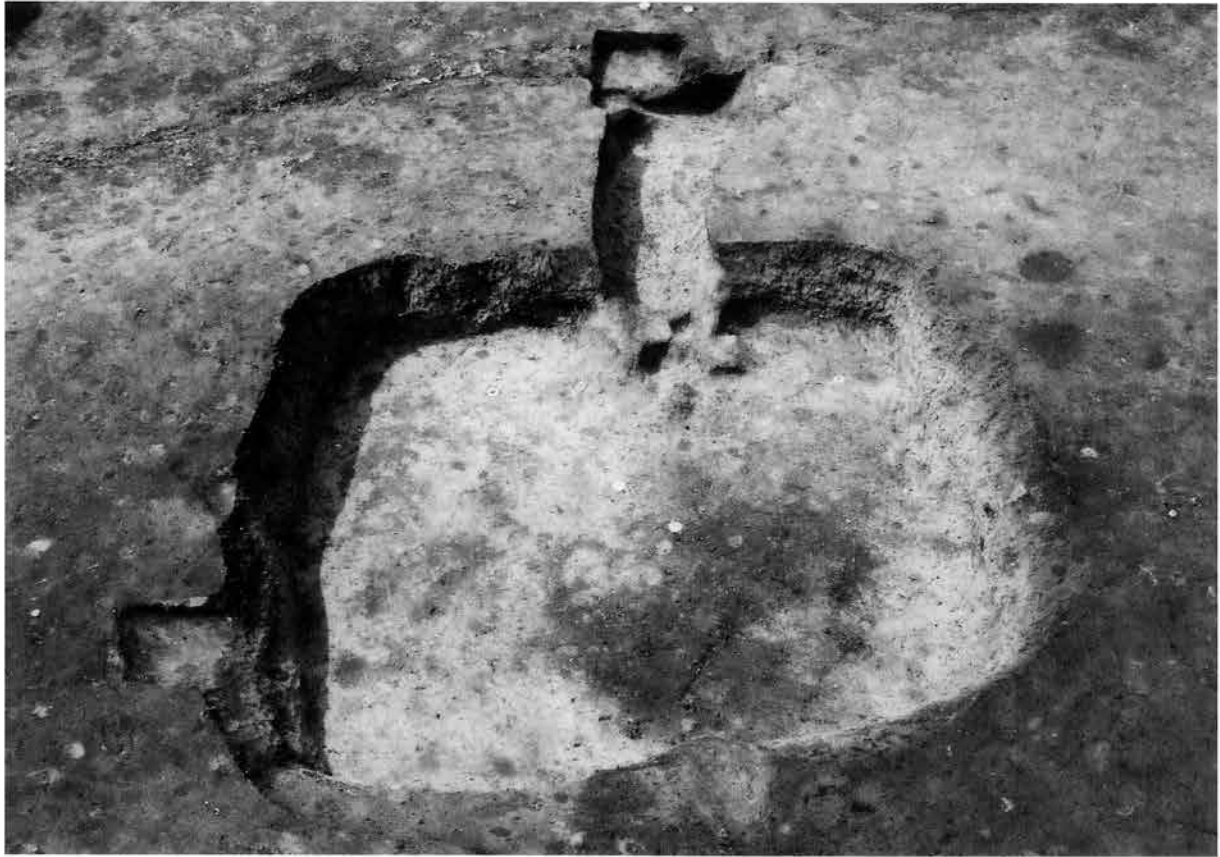
遺物出土状況



遺物出土状況



焼土検出状況



全景（南東から）



断面（南東から）



カマド全景（南東から）

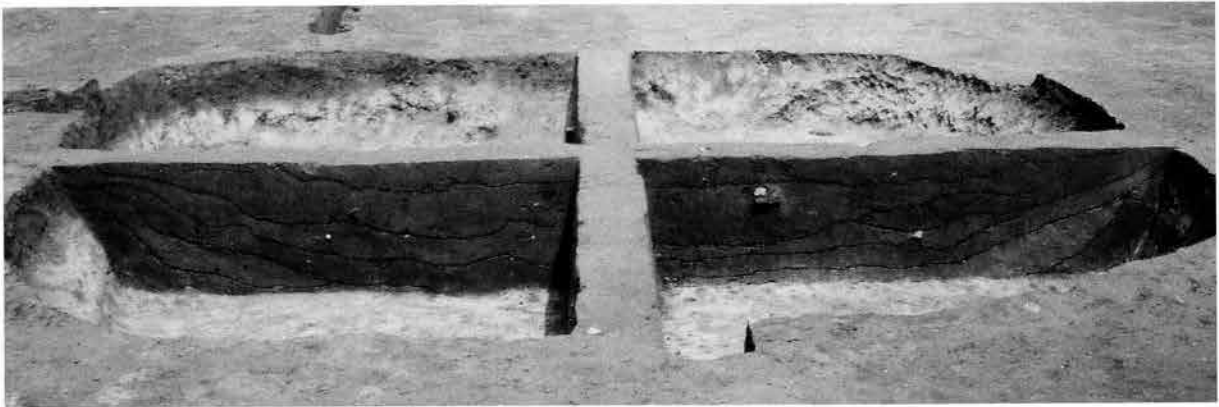


遺物出土状況（北東から）

写真図版10 RA056竪穴住居跡（1号住）



全景（南東から）



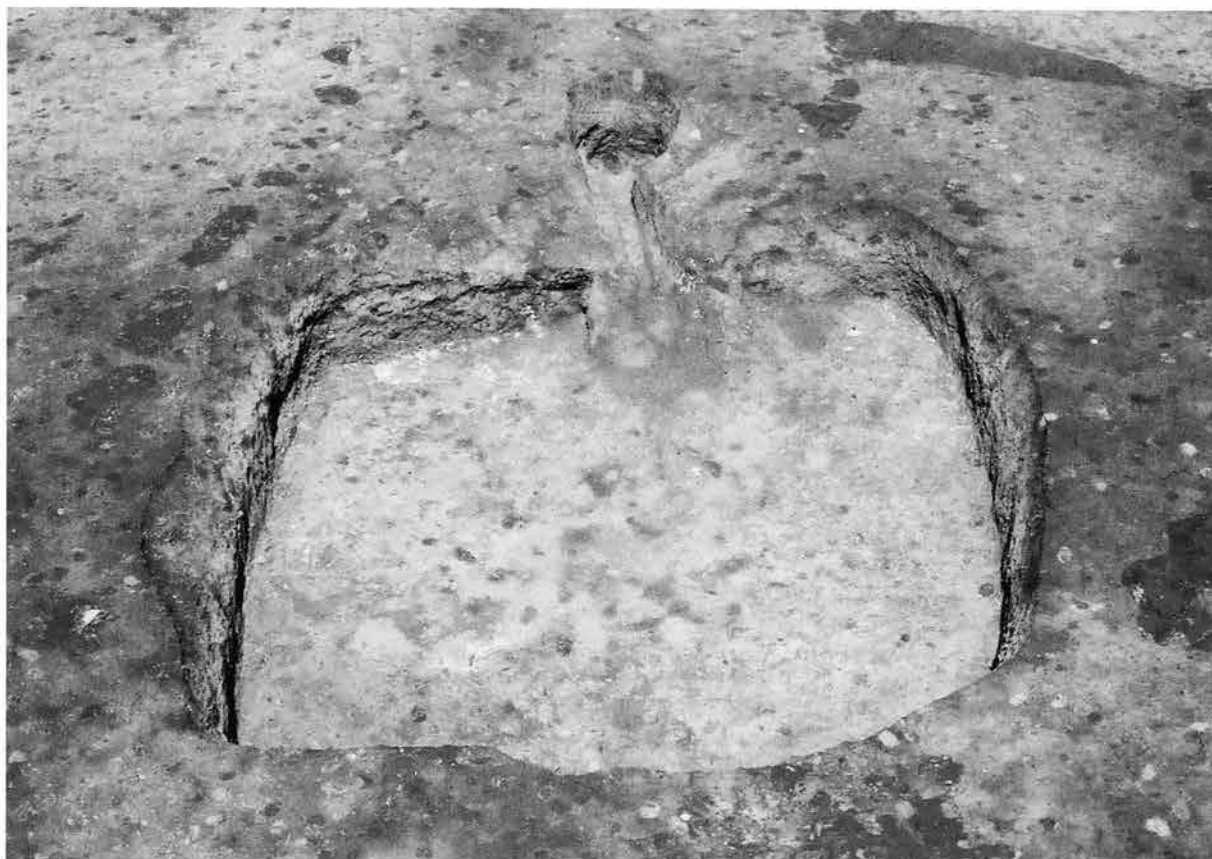
断面（南東から）



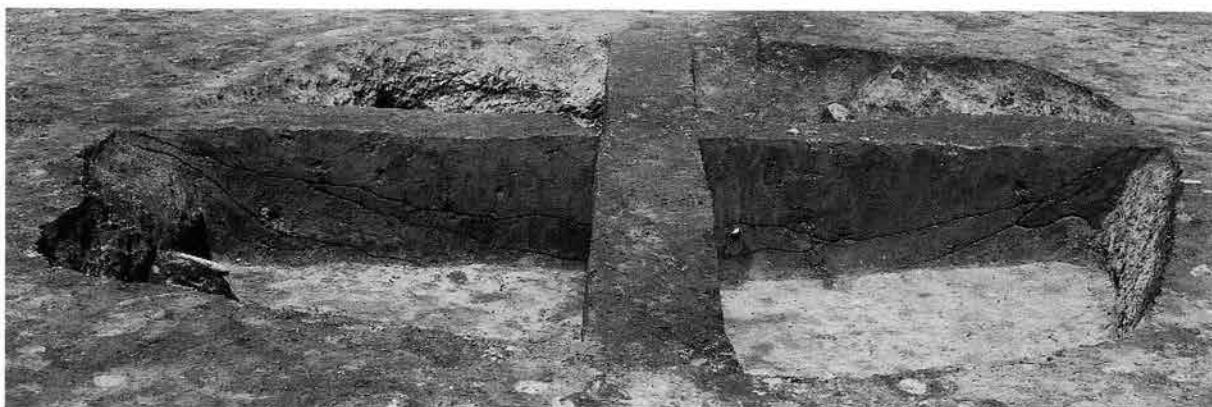
カマド



カマド断面



全景（南東から）



断面（南東から）



カマド全景（南東から）

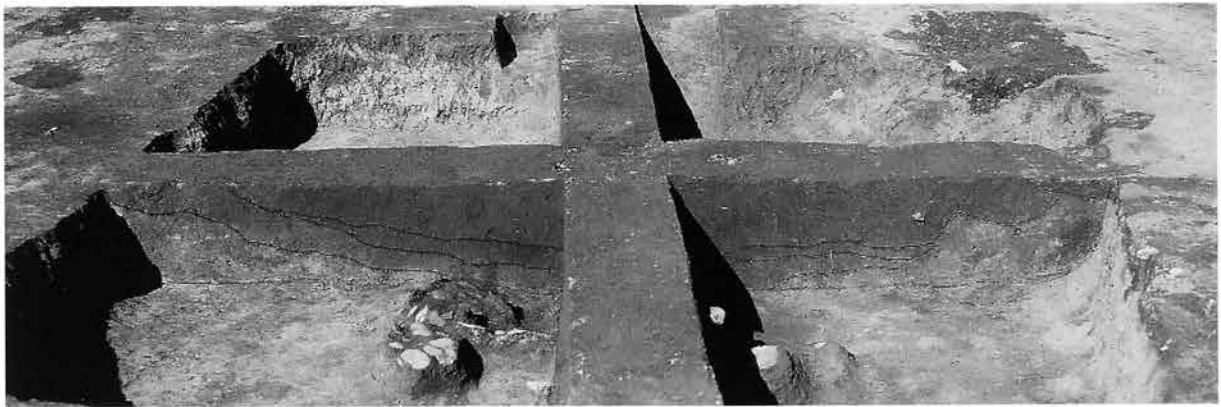


遺物出土状況（南東から）

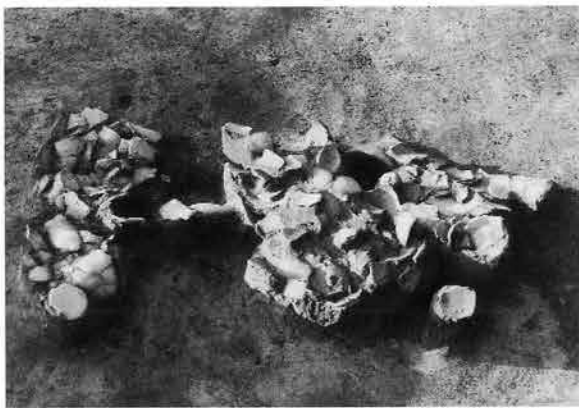
写真図版12 RA058竪穴住居跡（5号住）



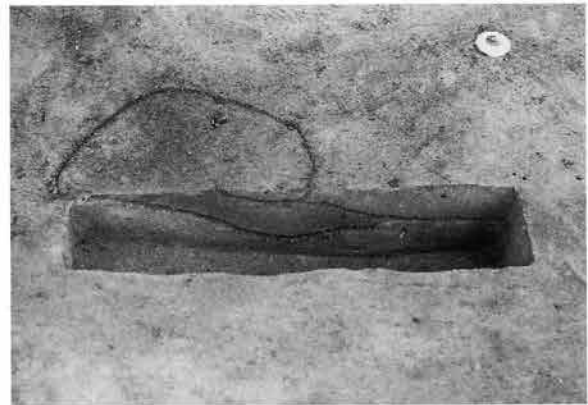
全景



断面（南東から）



遺物出土状況



カマド燃烧部断面



全景（南東から）



断面（南東から）



カマド全景（南東から）



鉄斧出土状況（東から）



全景（南東から）



断面（南西から）



カマド



床下土坑



37号住全景（南から）



カマド全景（南から）

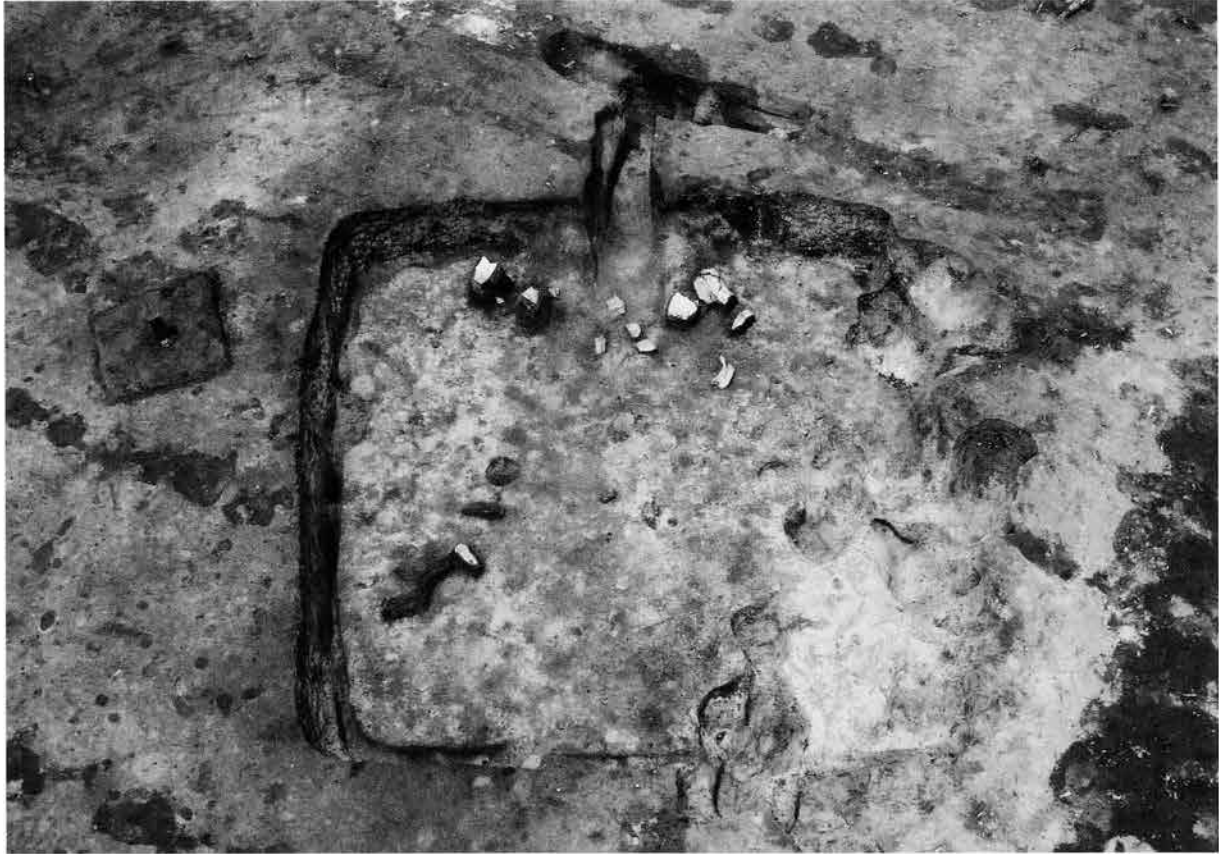


覆土断面（西から）

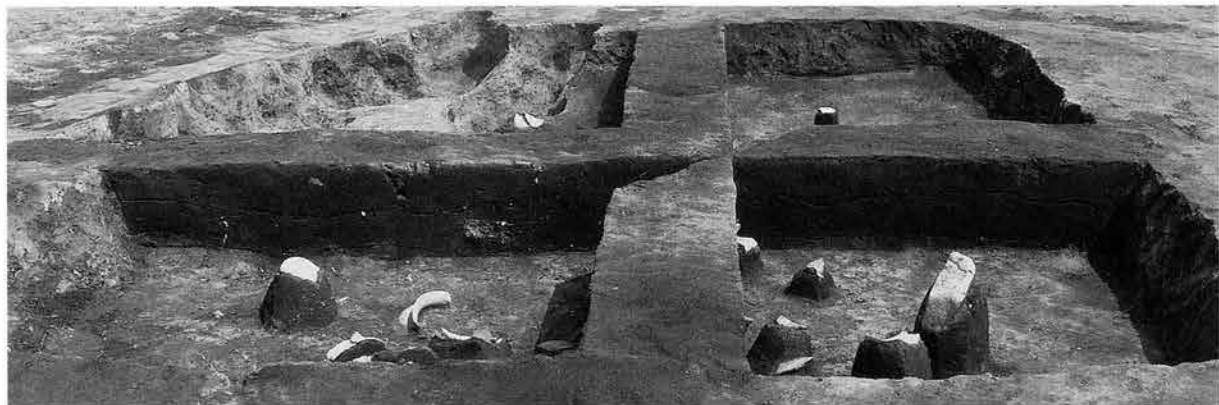


燃焼部断面（南から）

写真図版16 RA062竪穴住居跡（37号住）



全景（南→）



南北断面（西から）



東西断面（南から）



カマド全景（南から）



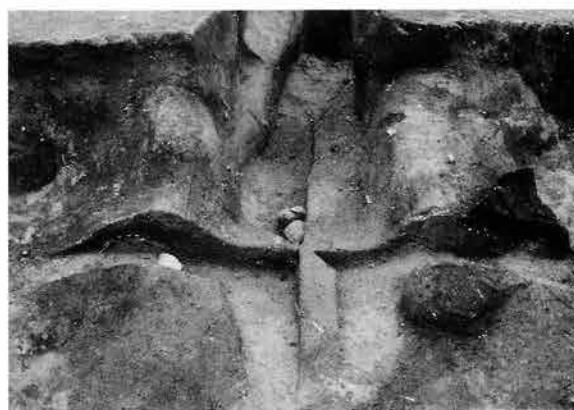
カマド長断面（西から）



煙道断面（南から）



カマド短断面（南から）



カマドソデ断面（南から）

写真図版18 RA063竪穴住居跡（2）（23号住）



全景（東から）



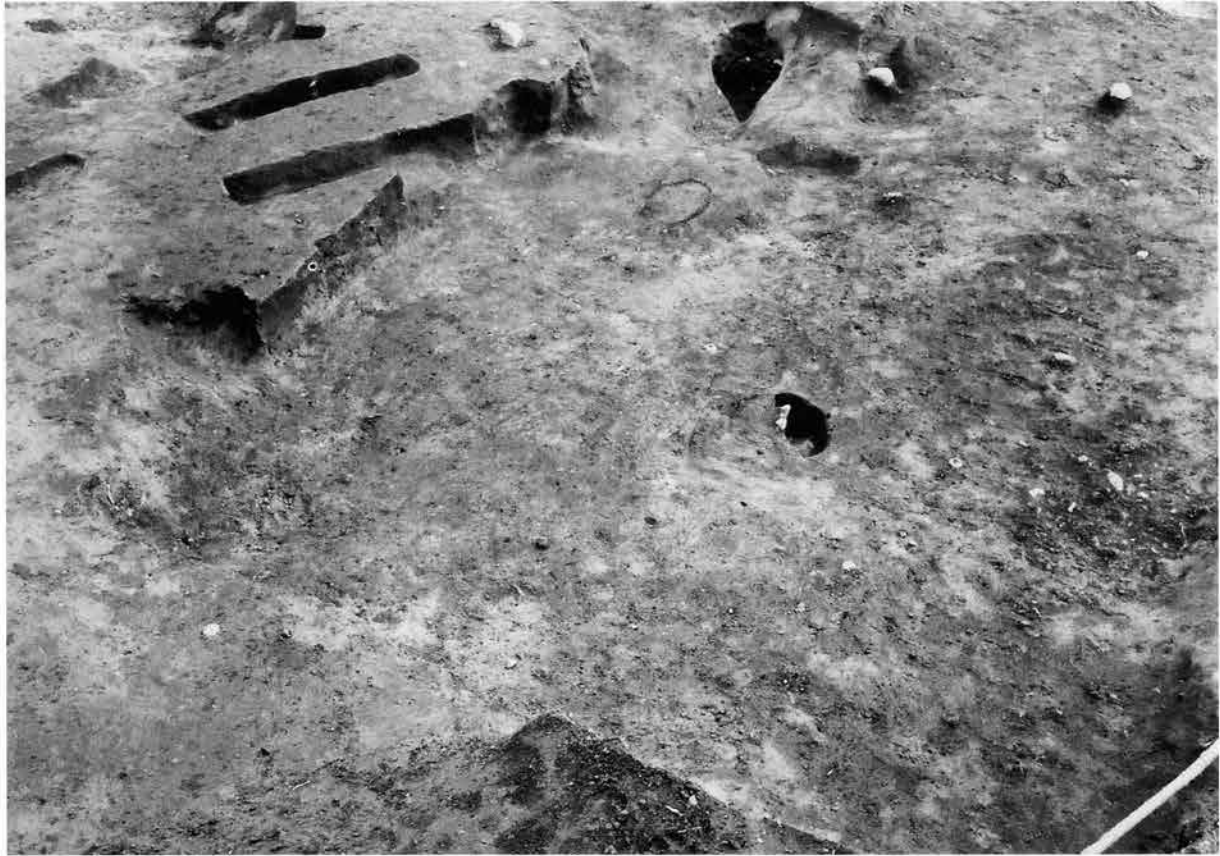
断面（北西から）



カマド全景（東から）



遺物出土状況（南西から）



全景（西から）



カマド全景（北西から）



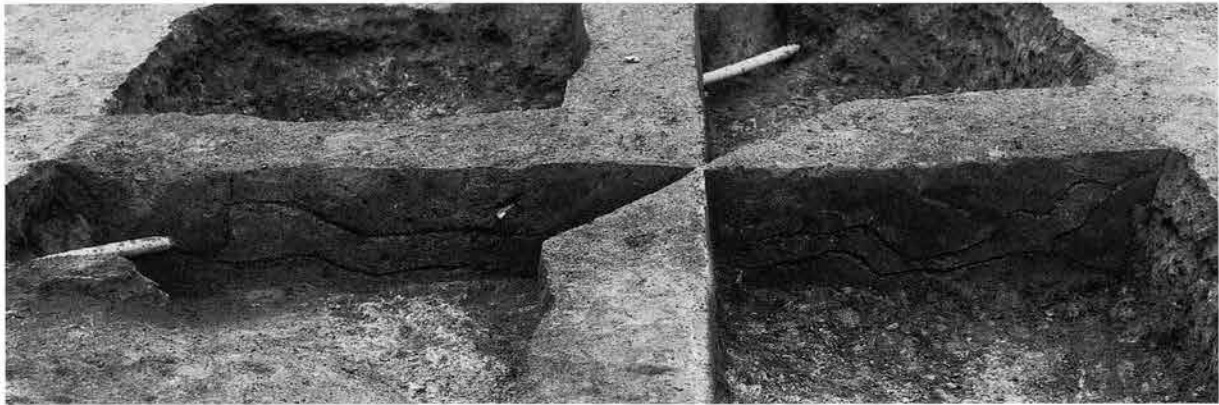
断面（西から）



遺物出土状況（西から）



全景（南東から）



埋土（西から）



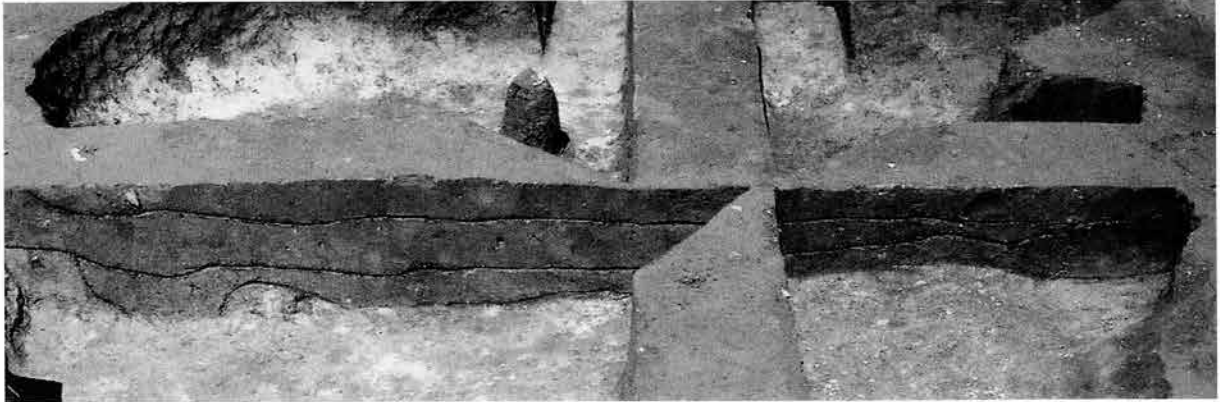
カマド煙道断面



カマド断面



全景（東から）



断面（南から）

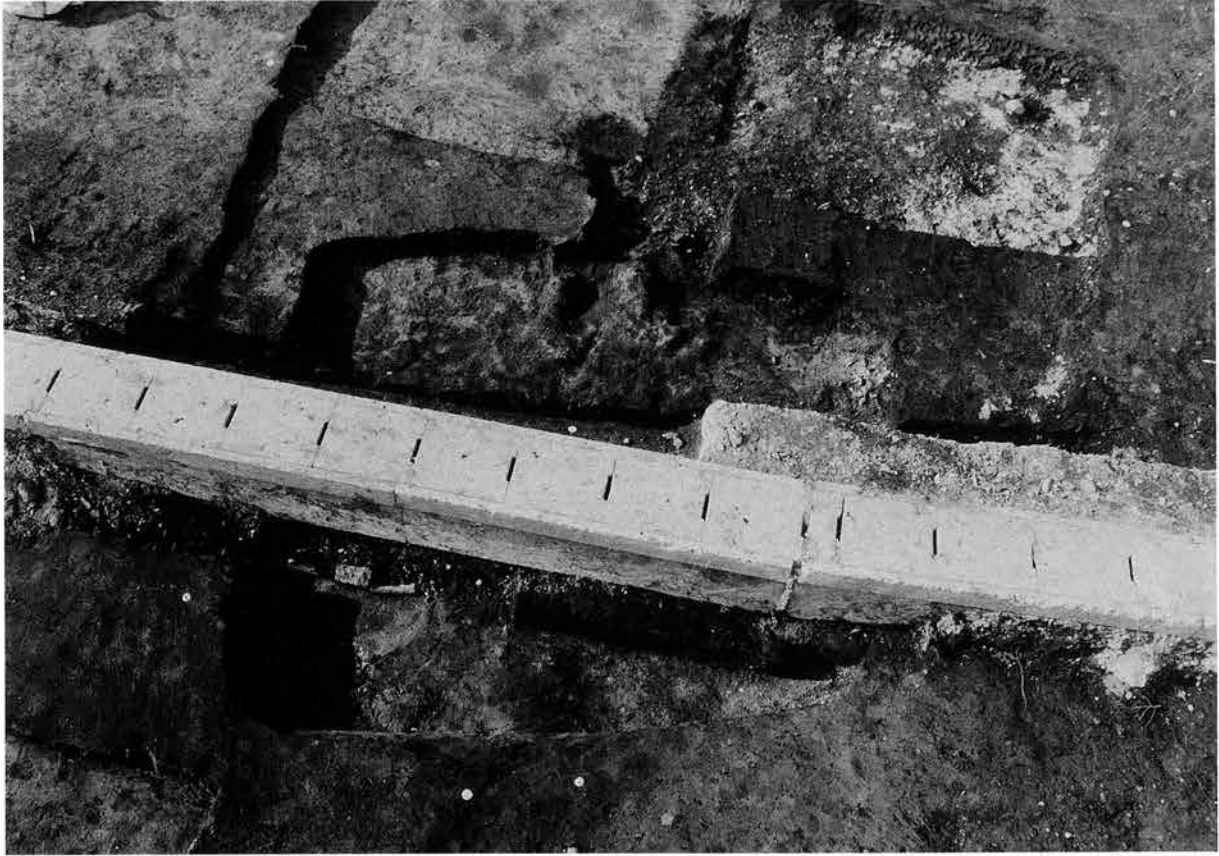


カマド煙道断面



カマド断面

写真図版22 RA067竪穴住居跡 (35号住)



完掘全景（南から）



カマド完掘全景（南から）



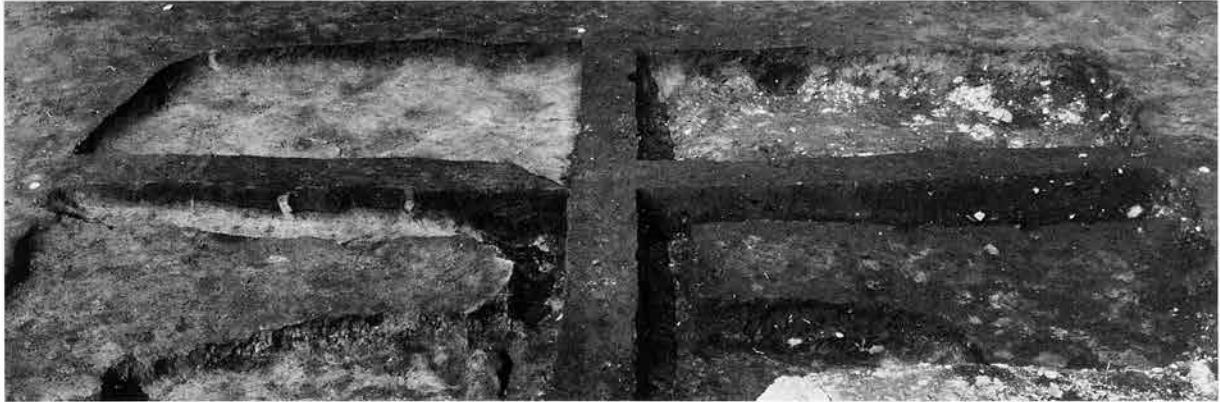
断面（西から）



土器出土状況（北西から）



完掘全景（南から）



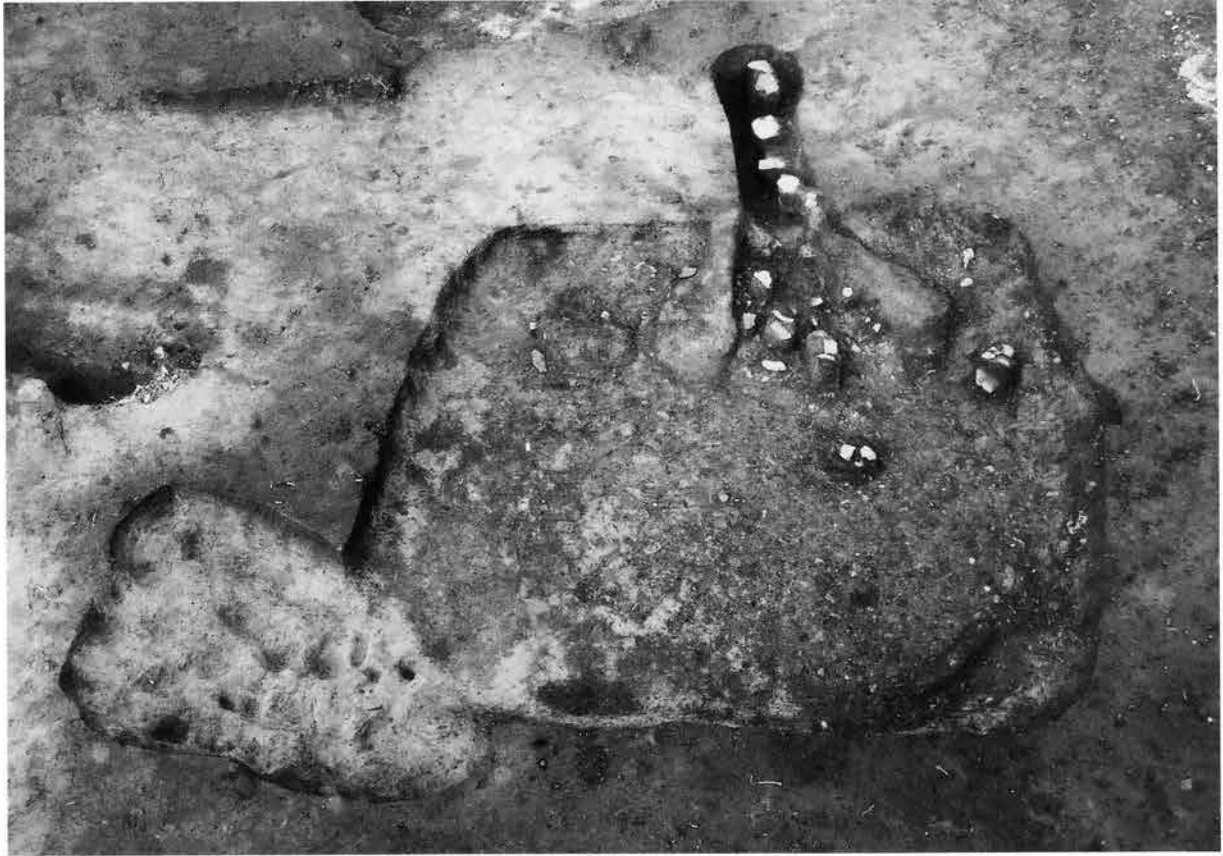
断面（南から）



カマド断面（東から）



土器出土状況（南西から）



全景（南から）



カマド全景（南から）



覆土断面（南から）



燃烧部断面（南から）



完掘全景（北西から）



1号カマド断面（北東から）



断面（北西から）



2号カマド断面（北西から）



土器出土状況（北東から）



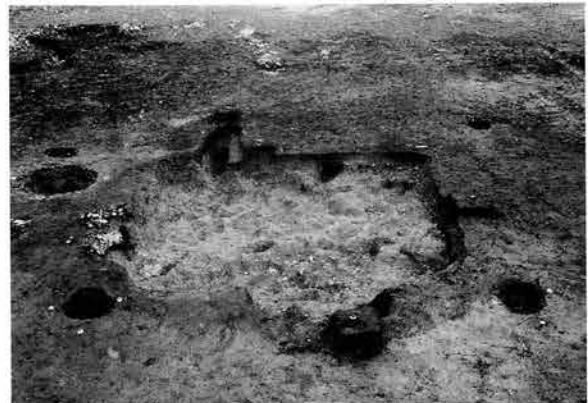
全景（南西から）



断面（西から）



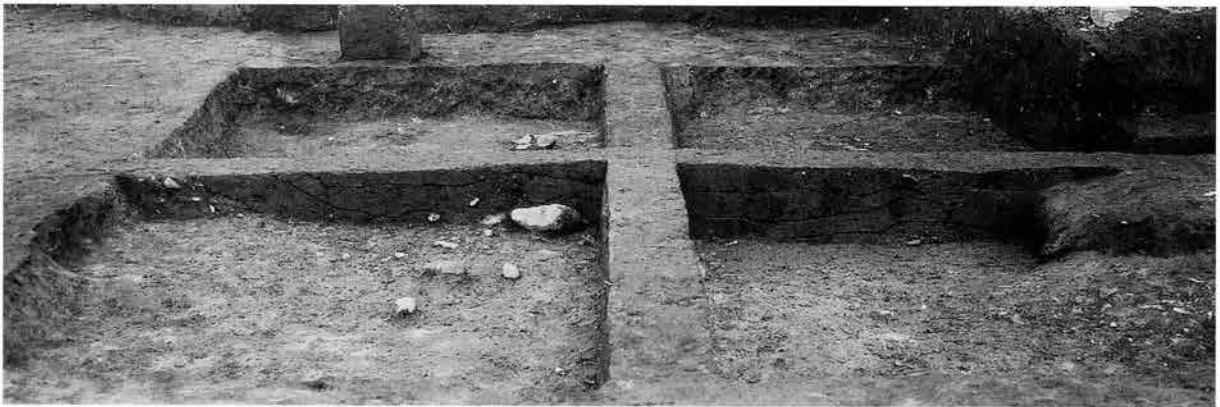
カマド全景（南西から）



掘り方全景（南西から）



全景（南東から）



断面（北東から）



カマドとPit3



遺物出土状況

写真図版28 RA073竪穴住居跡（11号住）



全景（東から）



断面（東から）



断面（南から）



Pit2断面



全景（西から）



カマド全景（西から）



南北断面（西から）



煙道断面（南から）

写真図版30 RA075竪穴住居跡（48号住）



全景（東から）



カマド全景（南東から）



断面（南から）



遺物出土状況（南西から）



全景（西から）



断面（南から）



カマド

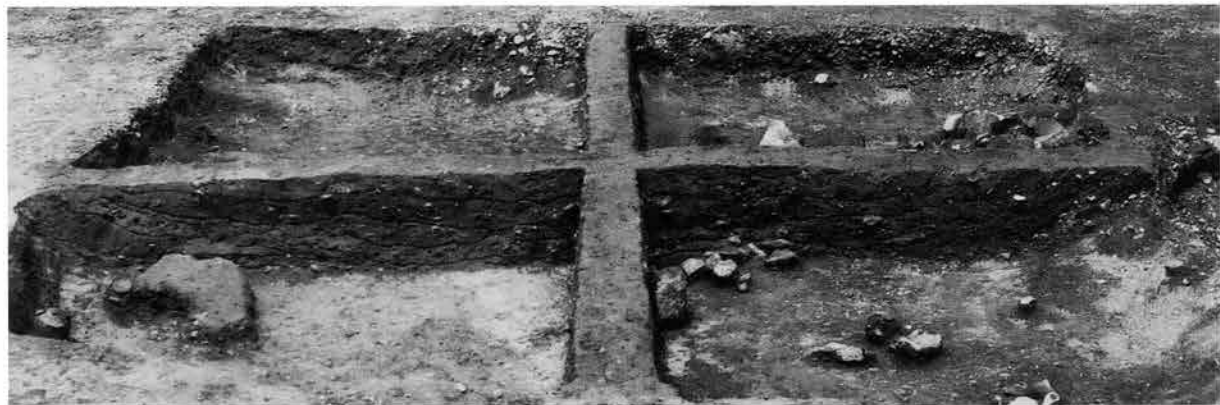


床面の焼土

写真図版32 RA077竪穴住居跡（19号住）



全景（南西から）



断面（南東から）



断面（南西から）



カマド



カマド埋土断面



カマド構築礫



カマド埋土断面



床面の焼土と礫



埋土中 焼土検出状況



遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版34 RA078竪穴住居跡 (2) (18号住)



全景（北から）



断面（南から）

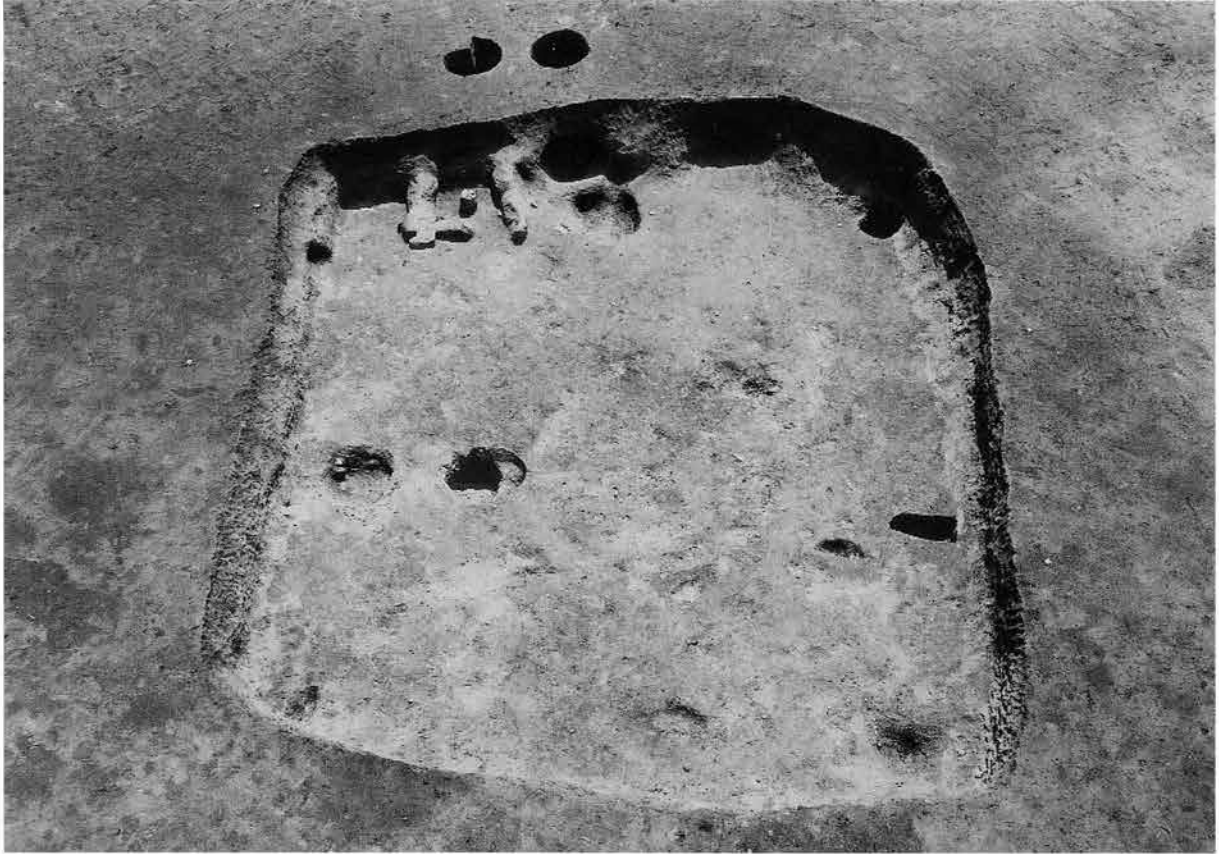


カマド



カマド焼土断面

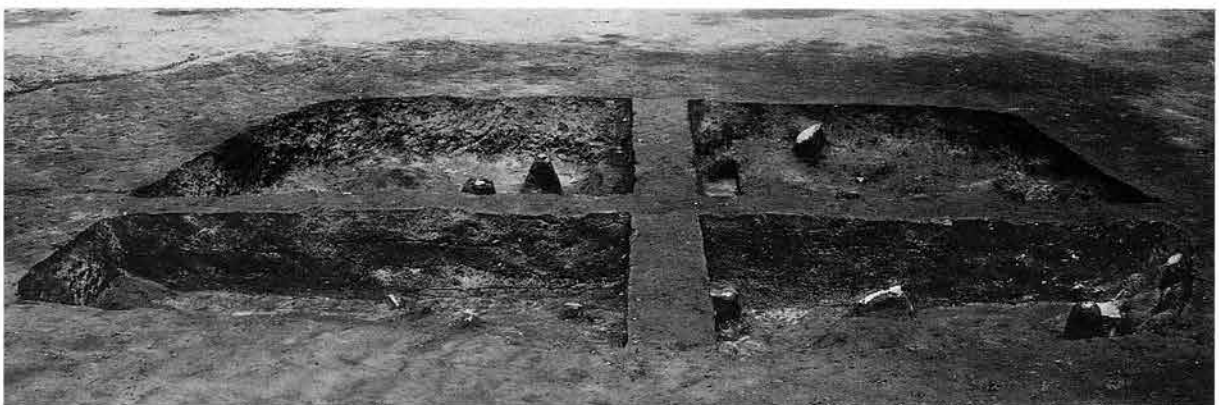
写真図版35 RA079竪穴住居跡（20号住）



全景（北西から）



断面（東から）

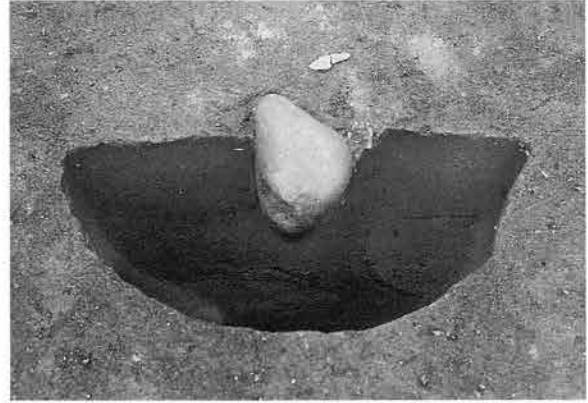


断面（南から）

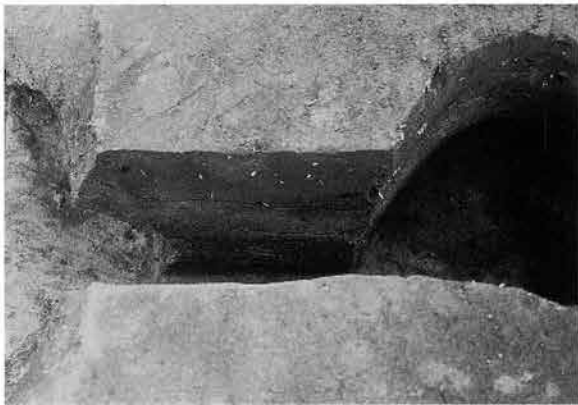
写真図版36 RA080竪穴住居跡（1）（2号住）



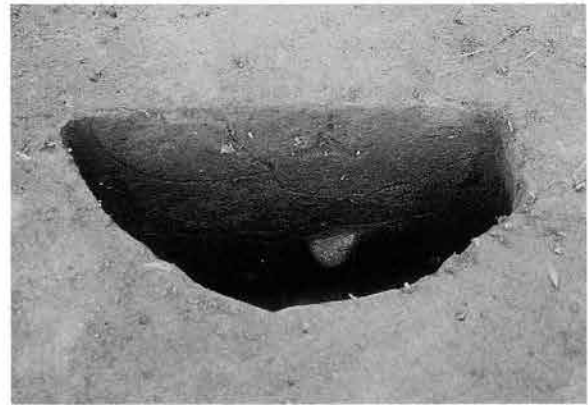
1号カマド煙道断面（南から）



1号カマド煙り出し断面（南から）



2号カマド煙道断面（南から）



2号カマド煙り出し断面（南から）



1号カマド2号カマド近撮（北西から）



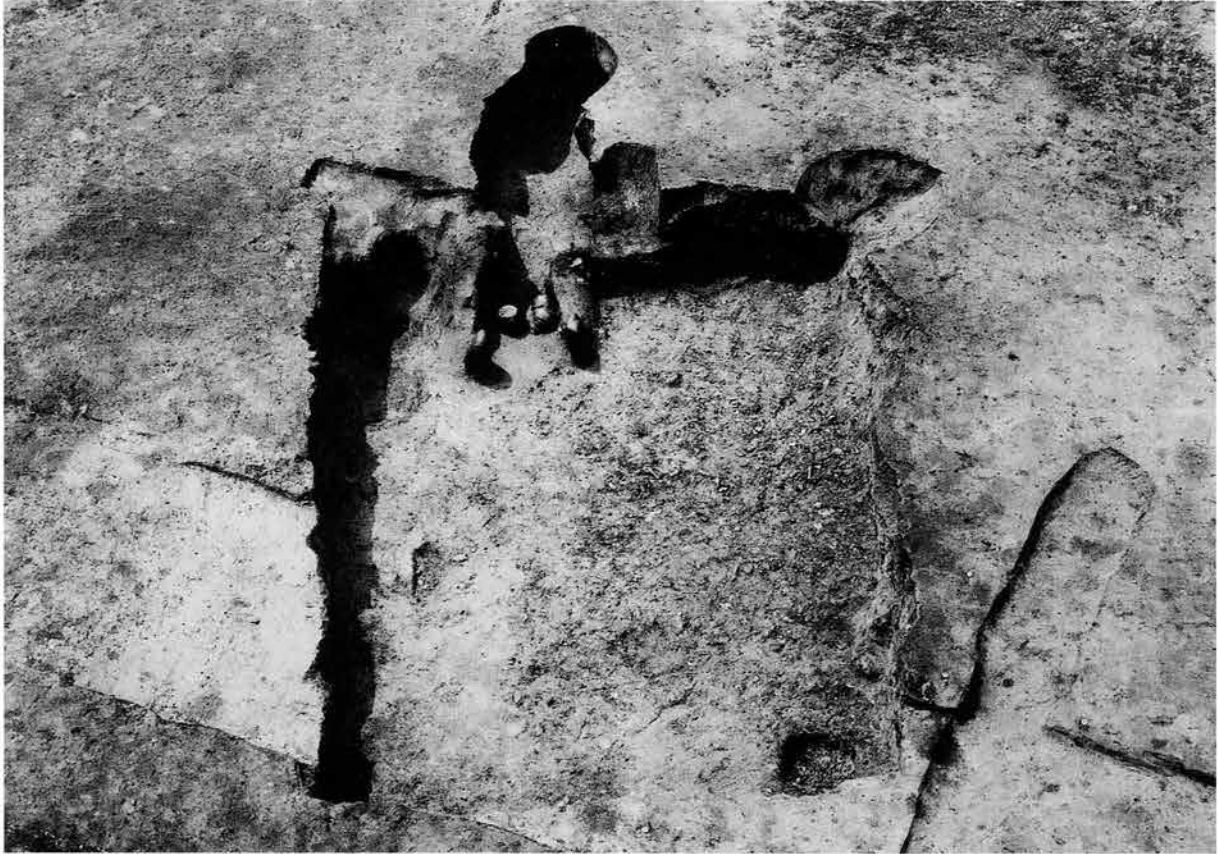
1号カマド燃烧部断面（北西から）



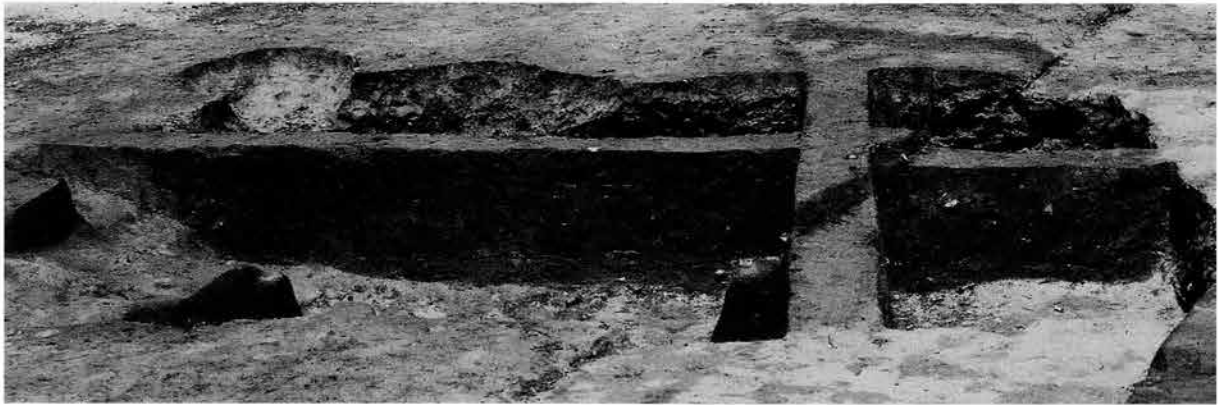
遺物出土状況（北西から）



Pit1遺物出土状況（北から）



全景（南東から）



埋土（南西から）



カマド 遺物出土状況

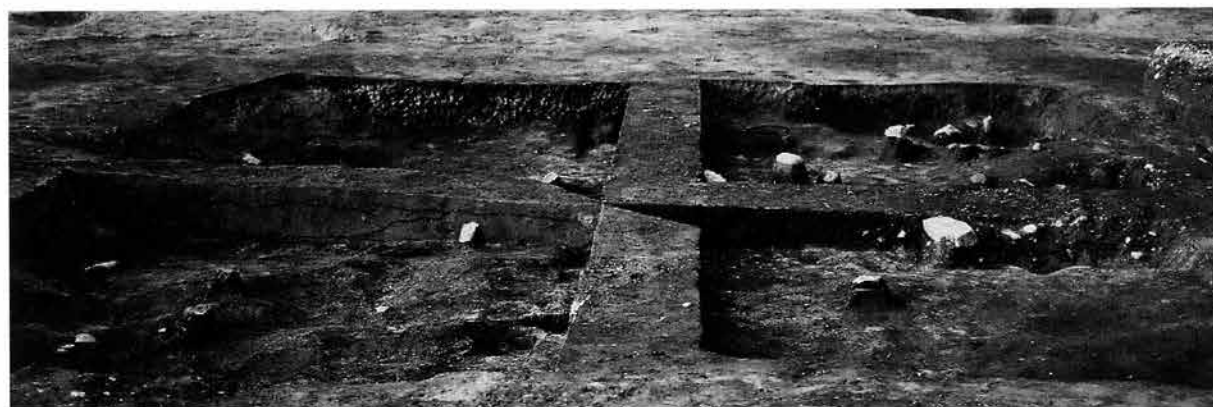


カマド

写真図版38 RA081竪穴住居跡 (13号住)



全景（西から）



断面（南から）



断面（西から）



焼土・炭化材出土状況（南から）



炭化材出土状況（西から）



炭化材出土状況（東から）



カマド（西から）



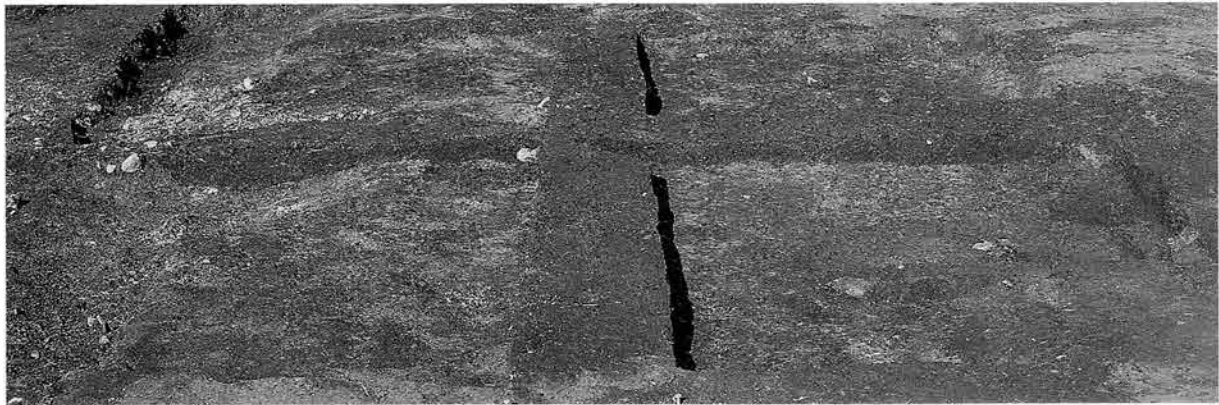
カマド断面（西から）



Pit1遺物出土状況（東から）



58号住全景（西から）



覆土断面（南から）



煙道断面（北から）



燃焼部断面（西から）



全景（西から）



覆土断面（南から）



カマド断面（西から）



カマド断面（南から）

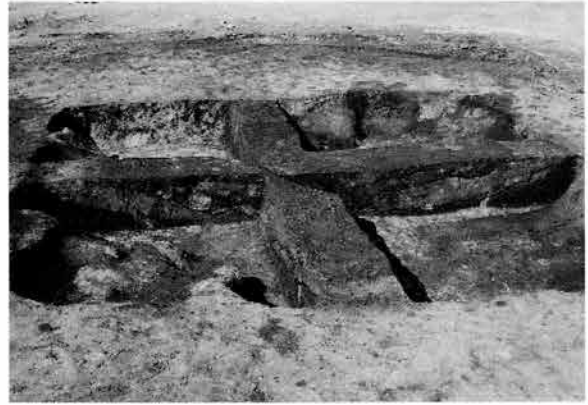
写真図版42 RA084竪穴住居跡（55号住）



全景（西から）



焼土検出状況（西から）



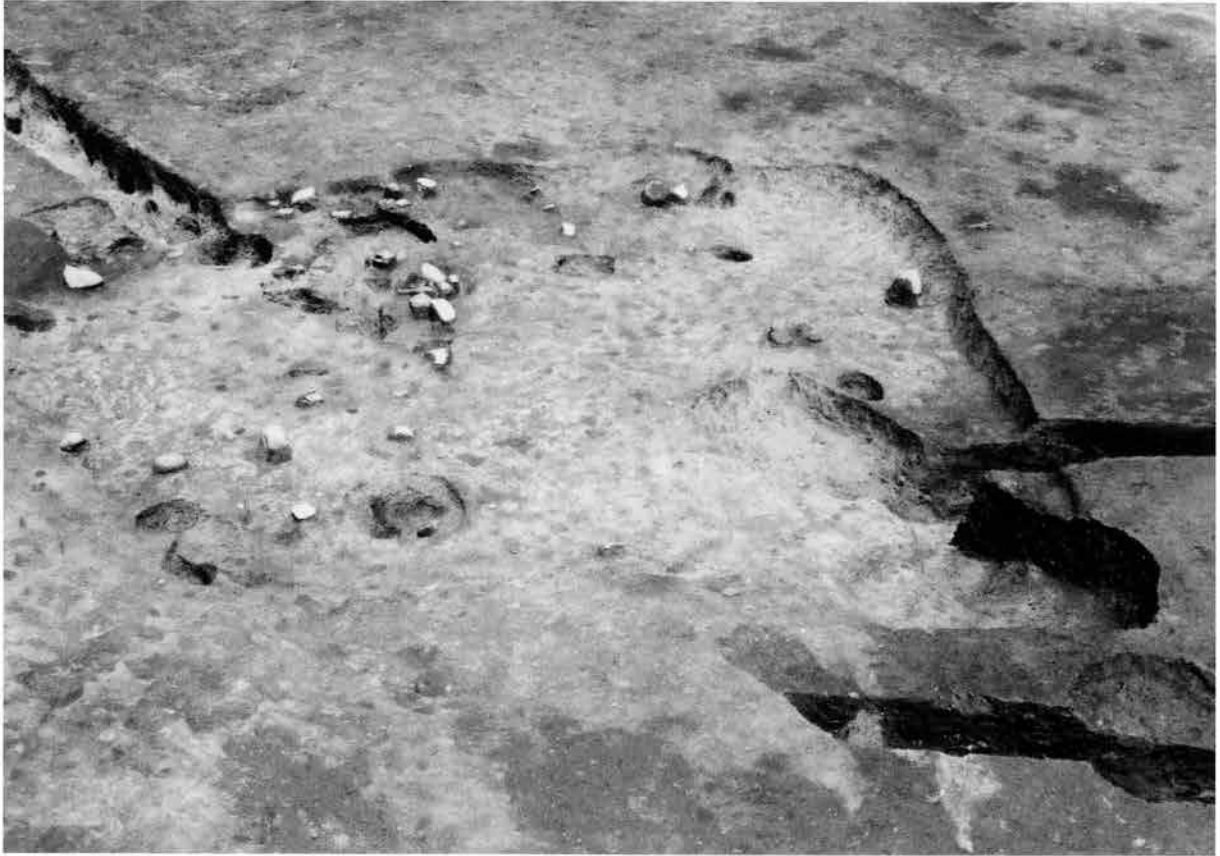
断面（南東から）



カマド全景（西から）



カマド芯材検出状況（西から）



全景（南から）



断面（南から）



燃烧部全景（南から）

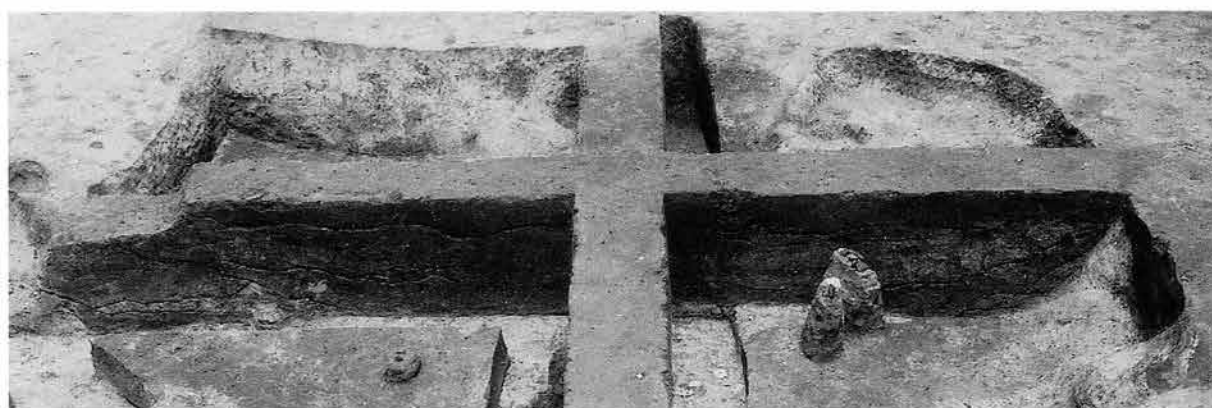


遺物出土状況（南東から）

写真図版44 RA086竪穴住居跡（6号住）



全景（西から）



断面（南から）



カマド



煙道・煙出し断面



全景（西から）



断面（西から）



カマド埋土断面

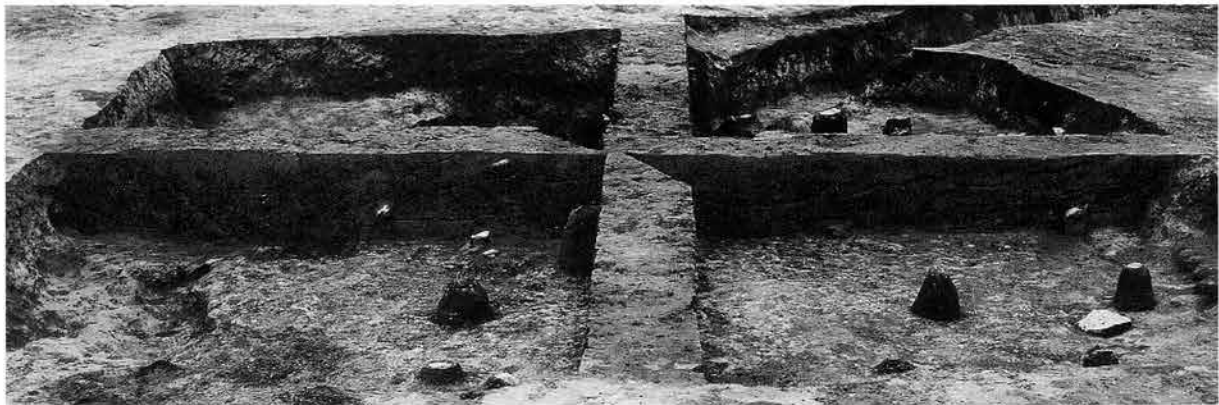


カマド燃烧部断面

写真図版46 RA088竪穴住居跡（8号住）



全景（東から）



断面（南から）



1号カマド



1号カマド断面



1号カマド煙道断面



2号カマド



2号カマド煙道断面



2号カマド煙道遺物出土状況



3号カマド



3号カマド煙道断面



遺物出土状況



床下土坑 (Pit9) 遺物出土状況



全景（南から）



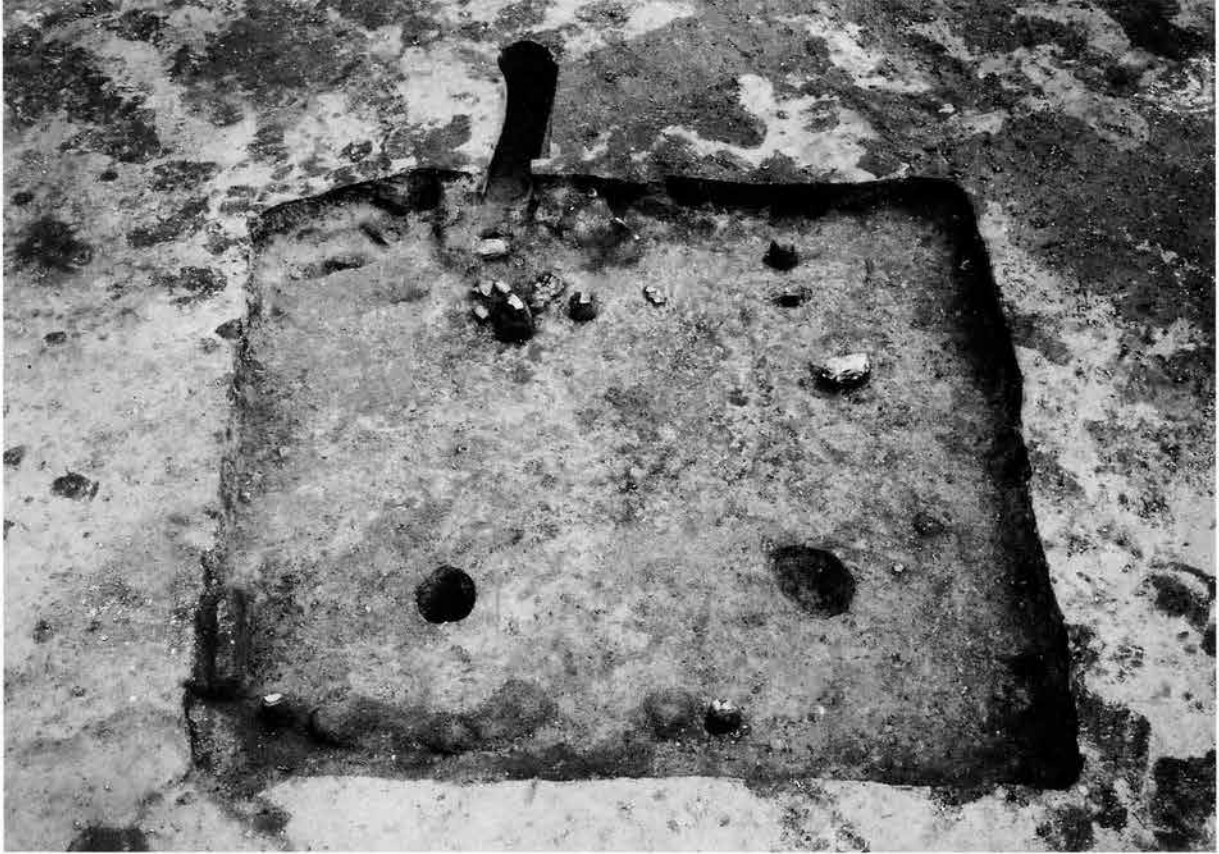
南北断面（西から）



東西断面（南から）



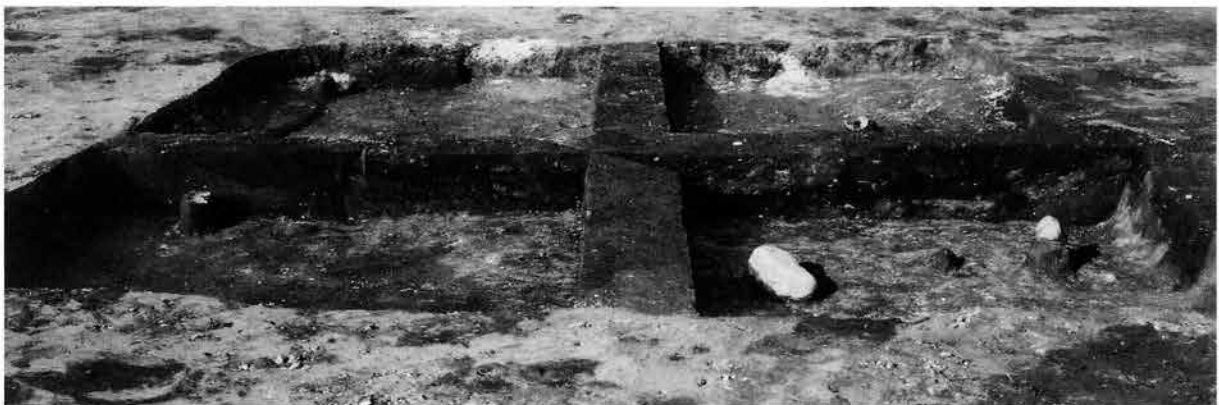
カマド全景（南から）



全景



南北断面（西から）



東西断面（南から）

写真図版50 RA091竪穴住居跡（1）（51号住）



カマド全景（西から）



カマド袖石検出状況



燃烧部断面（西から）



煙道断面（南から）



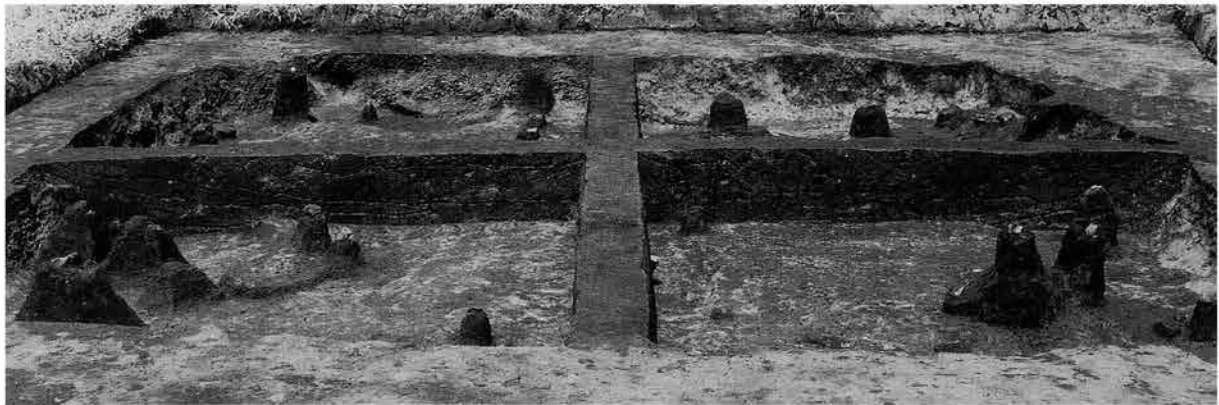
カマド袖断面（西から）



燃烧部断面（南から）



全景（西から）



断面（南から）

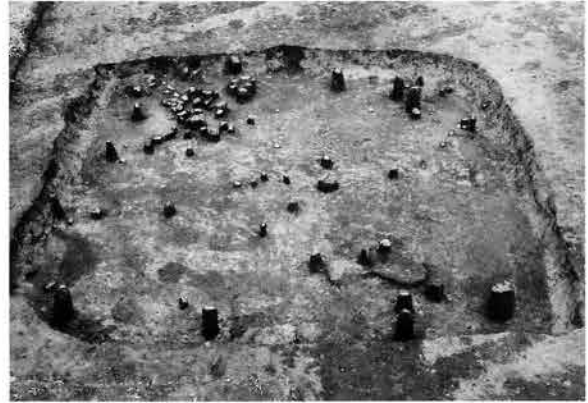


断面（西から）

写真図版52 RA092竪穴住居跡（1）（10号住）



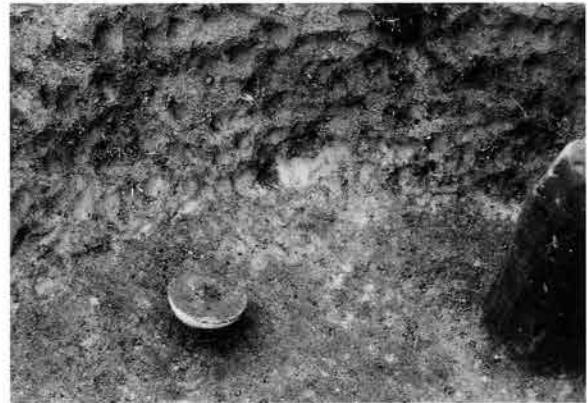
1号カマド (左) 2号カマド



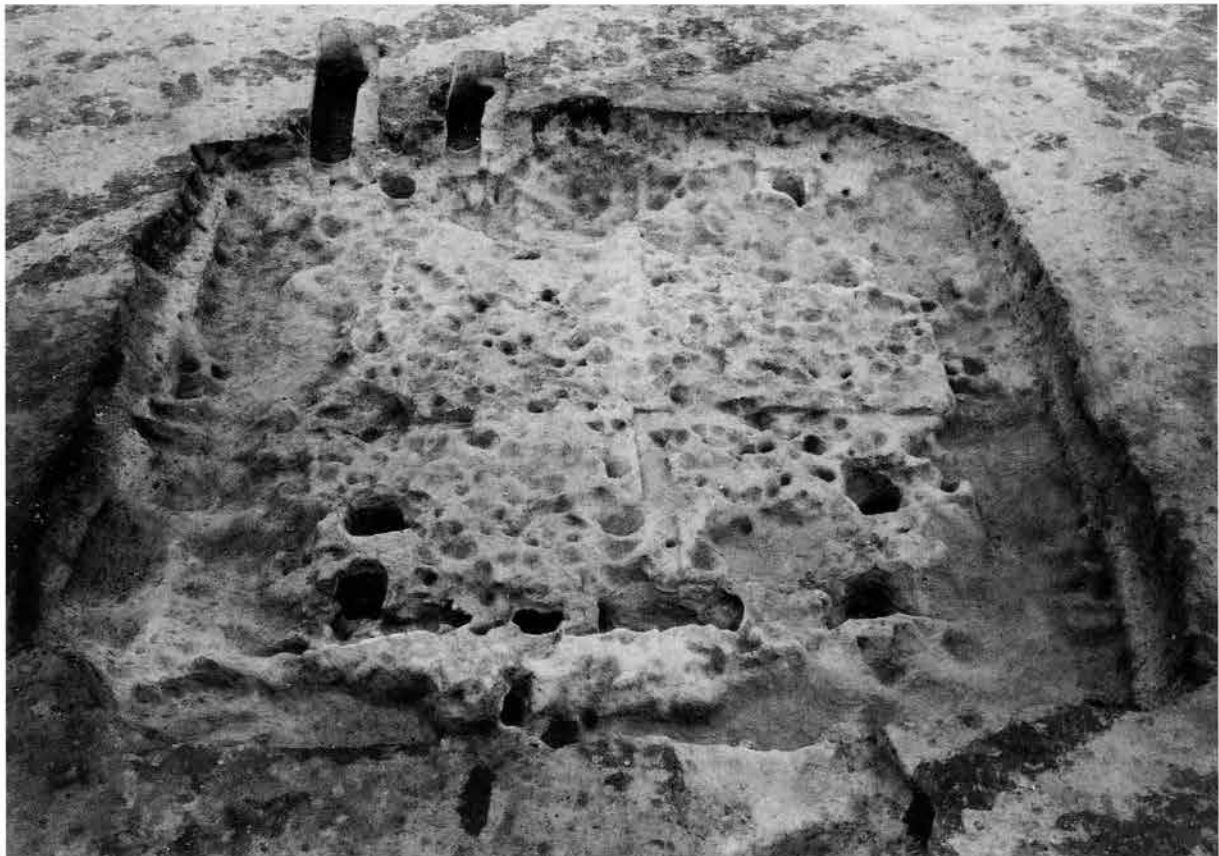
遺物出土状況 (西から)



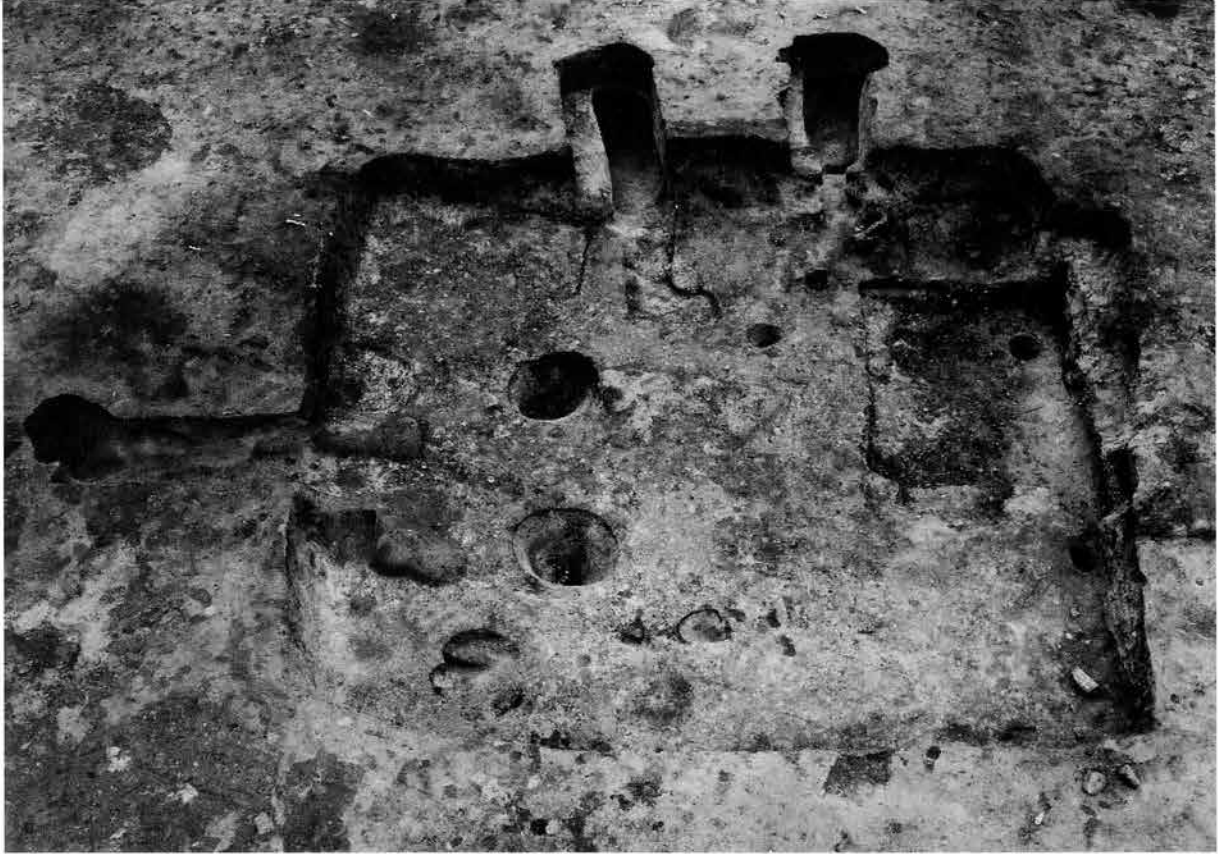
カマド付近遺物出土状況



西壁際遺物出土状況



掘り方 (西から)



全景（南から）



断面（南から）

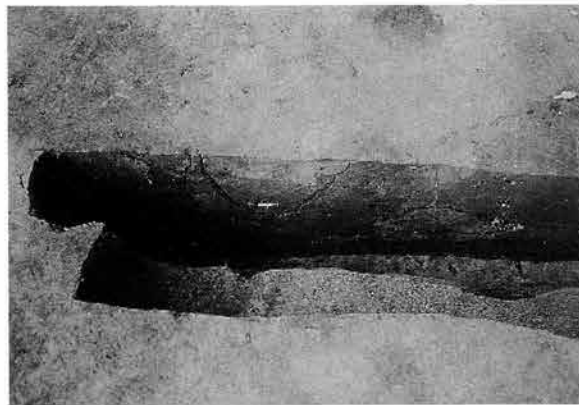


断面（西から）

写真図版54 RA093竪穴住居跡（1）（43号住）



1号カマド



1号カマド断面



2号カマド



2号カマド煙道断面



2号カマド断面



2号カマド脇Pit11



3号カマド



3号カマド煙道断面



全景（南から）



南北断面（西から）

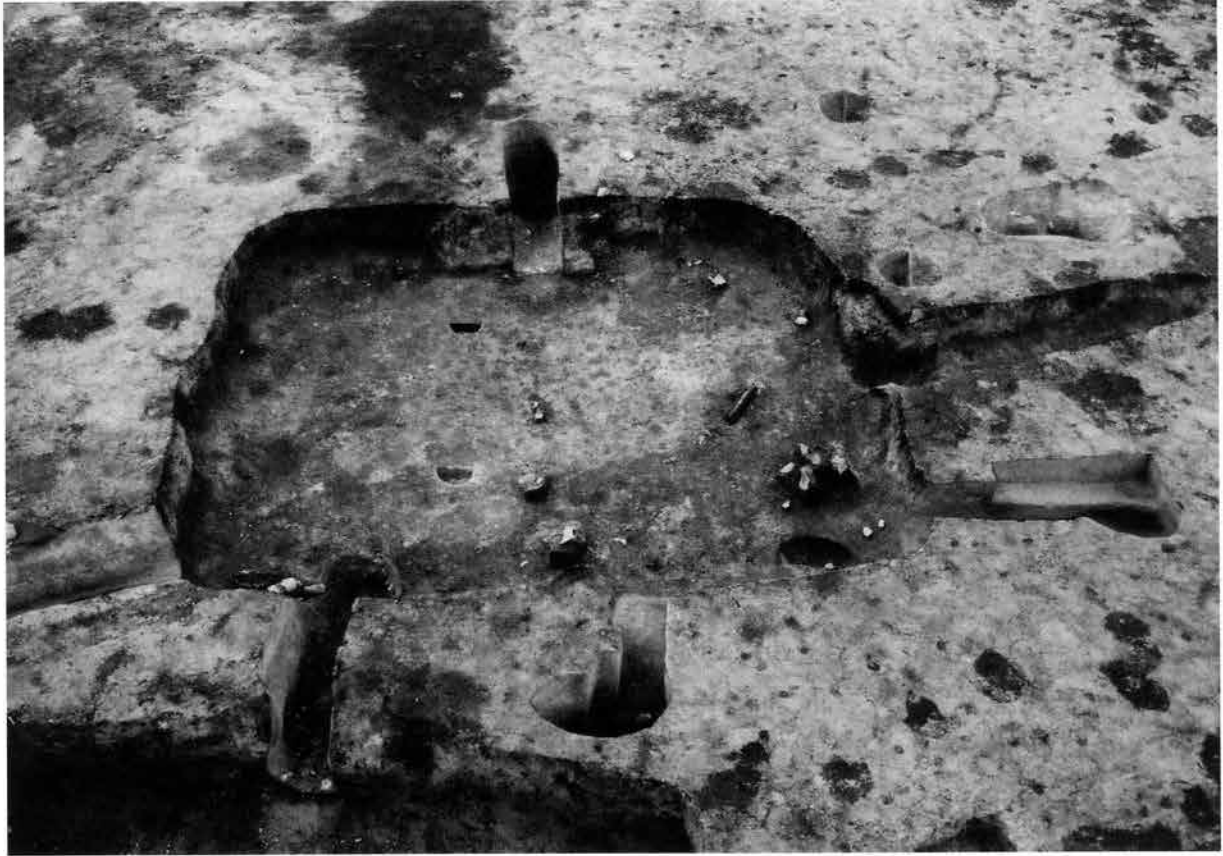


燃烧部断面（南東から）

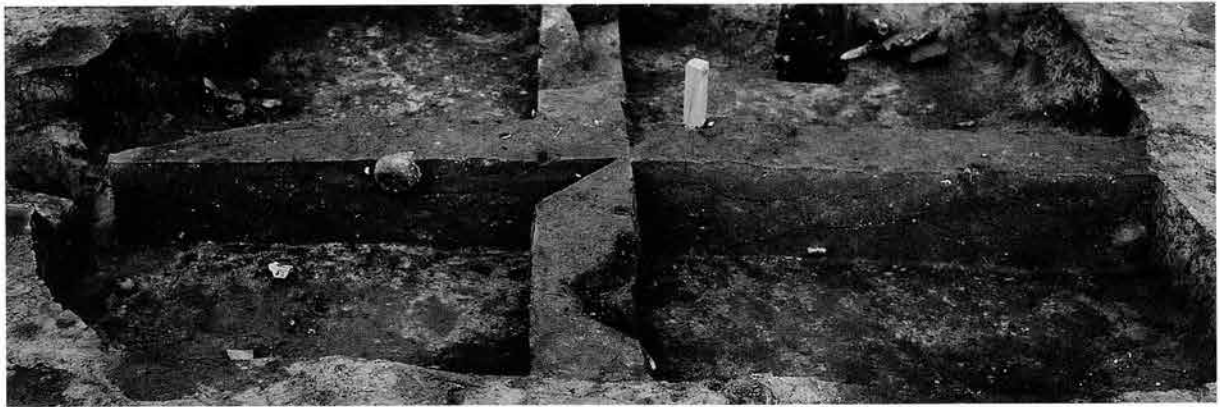


煙道断面（南から）

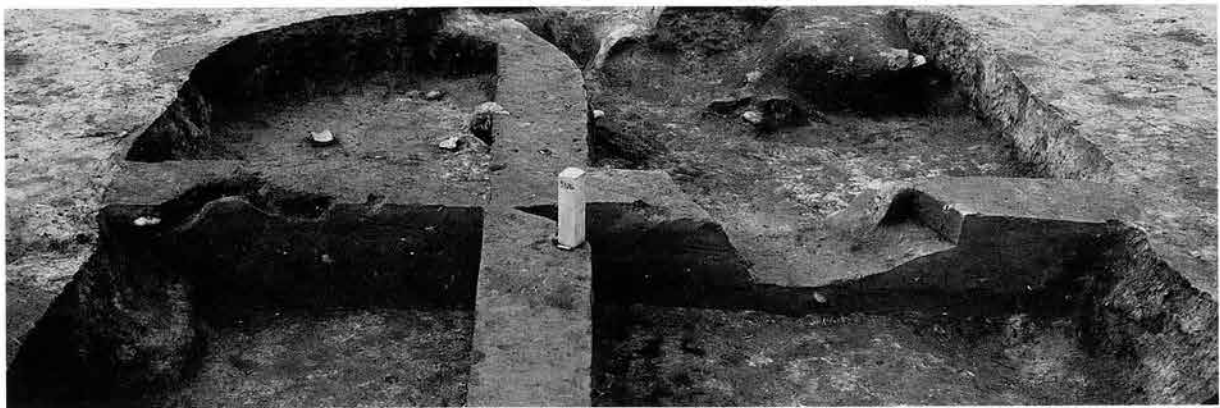
写真図版56 RA094竪穴住居跡（34号住）



全景（東から）



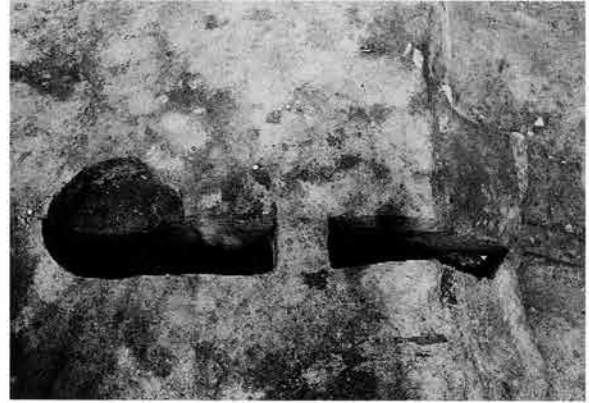
南北断面（西から）



東西断面（南から）



1号カマド全景（東から）



1号カマド煙道断面（南から）



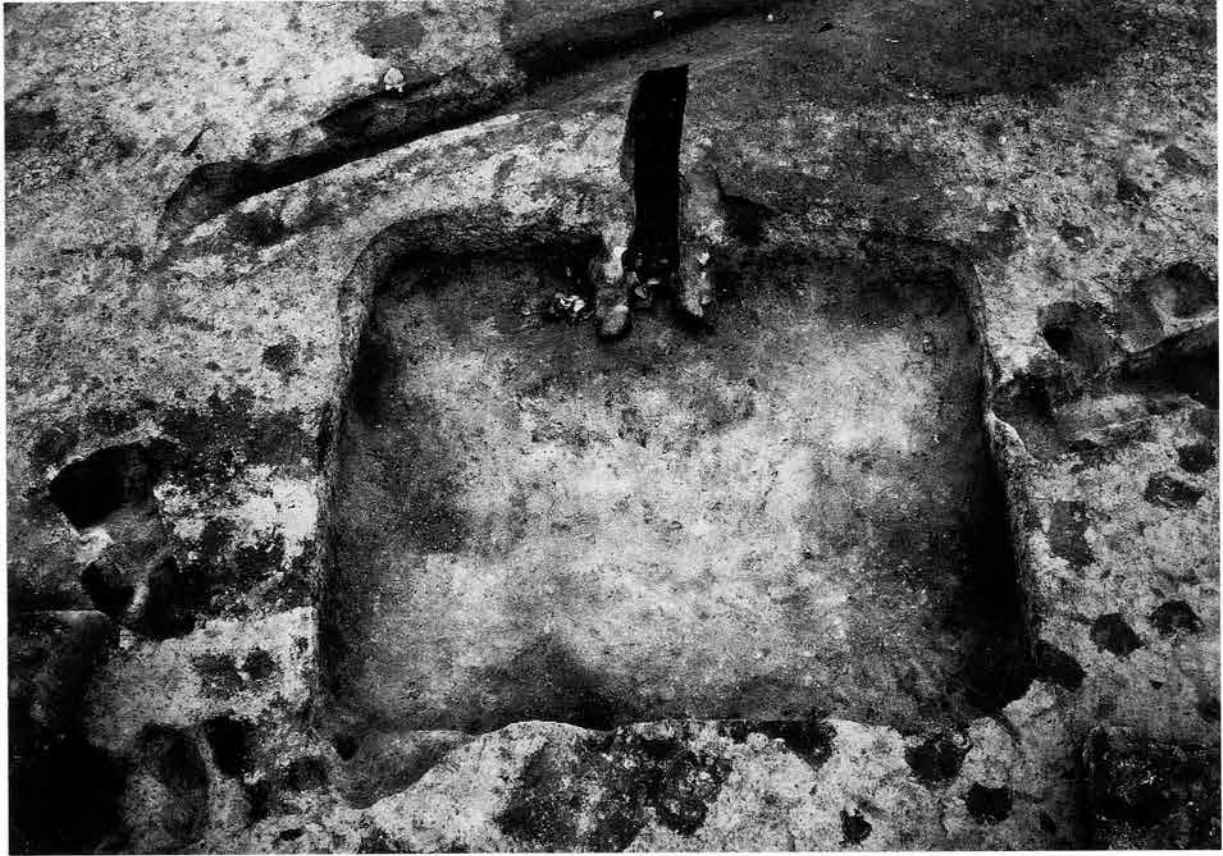
1号カマド煙道横断面



2号カマド全景（西から）



3号カマド全景（南から）



全景（東から）



カマド全景（東から）



埋土断面（東から）



燃焼部断面（東から）



全景（東から）

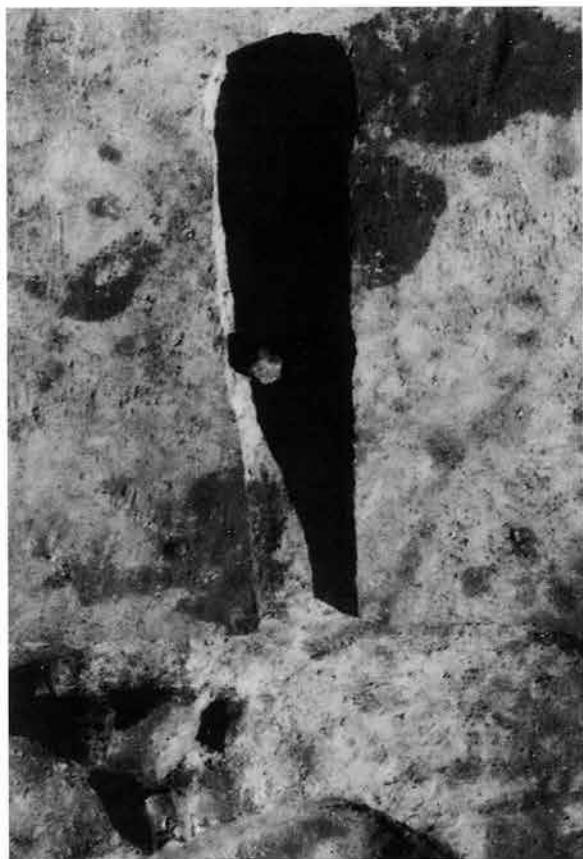


南北断面（東から）



東西断面（南から）

写真図版60 RA097竪穴住居跡（1）（38号住）



1号カマド全景



2号カマド全景



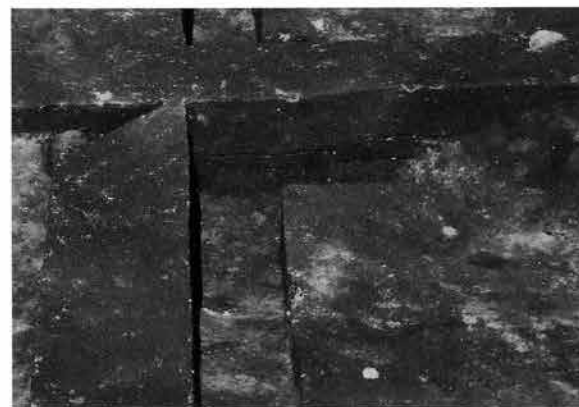
1号カマド断面



2号カマド断面



住居内土坑全景



住居内土坑断面



全景（南から）



南北断面（西から）



東西断面（南から）

写真図版62 RA098竪穴住居跡（1）（36号住）



1号カマド全景（南から）



1号カマド燃焼部断面（南から）



1号カマドソデ石検出状況



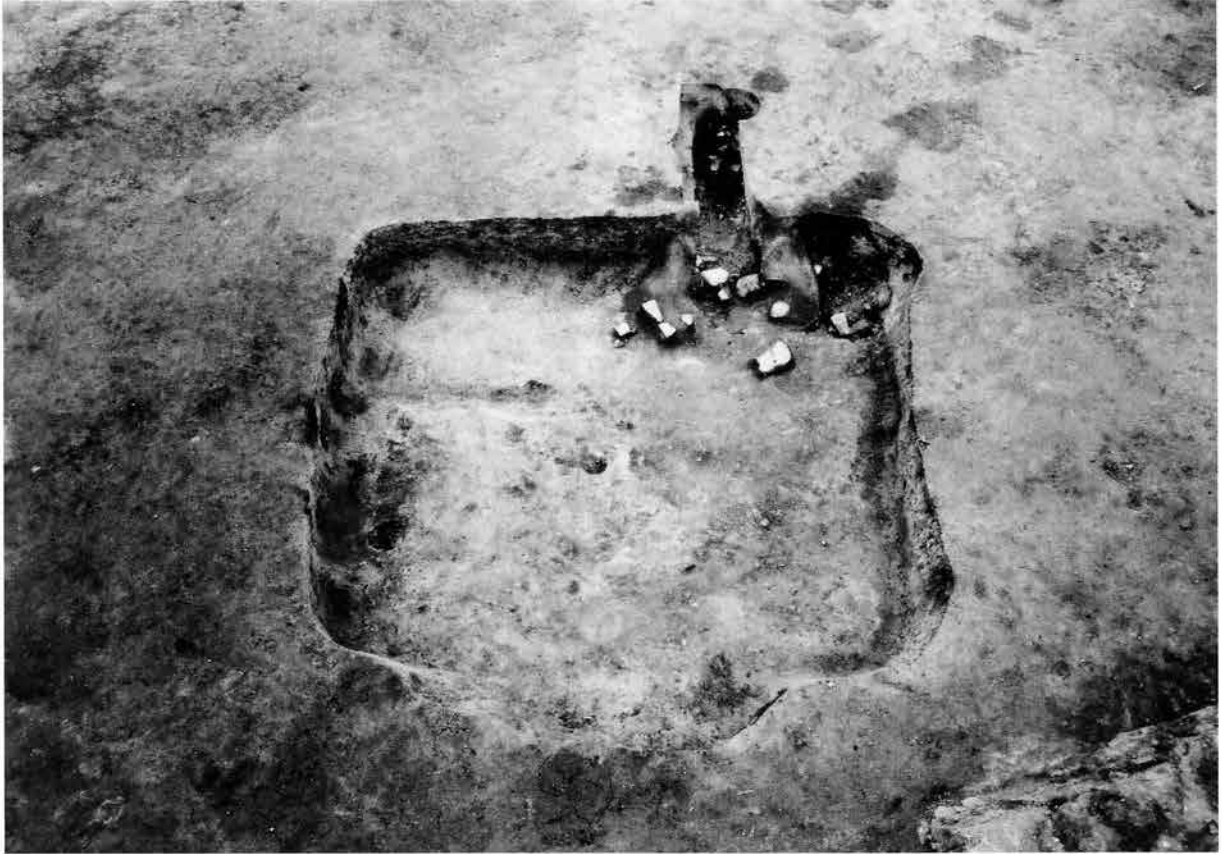
2号カマド全景（西から）



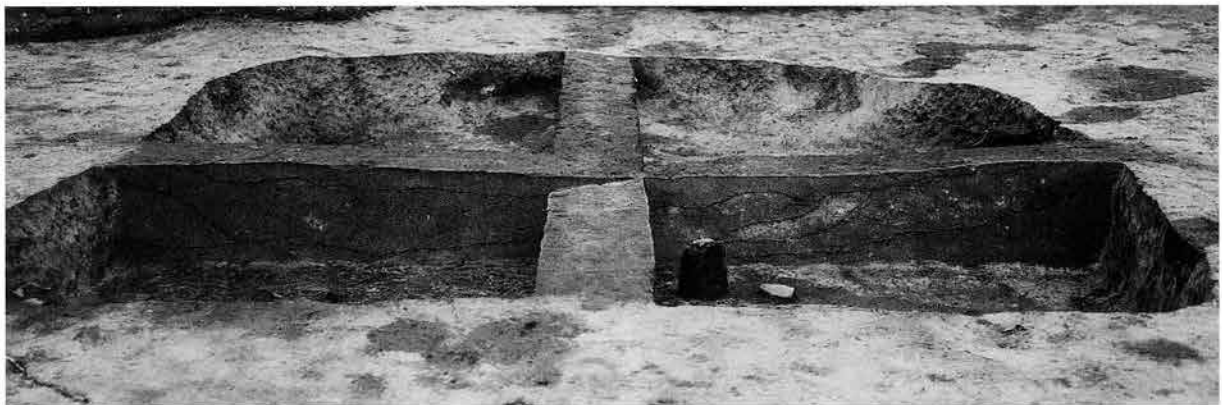
Pit1遺物出土状況（南西から）



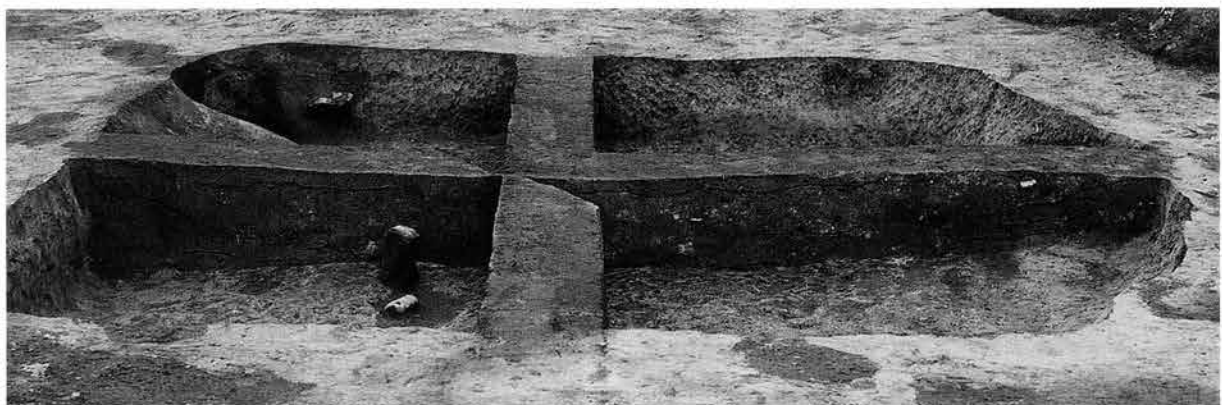
Pit2（南東から）



全景（東から）



南北断面（西から）



東西断面（南から）

写真図版64 RA099竪穴住居跡（1）（28号住）



カマド全景（東から）



煙出遺物出土状況



煙道断面（南から）



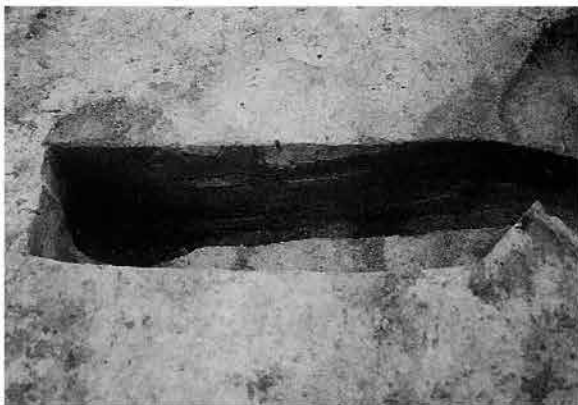
燃焼部断面（東から）



全景（南東から）



断面（西から）

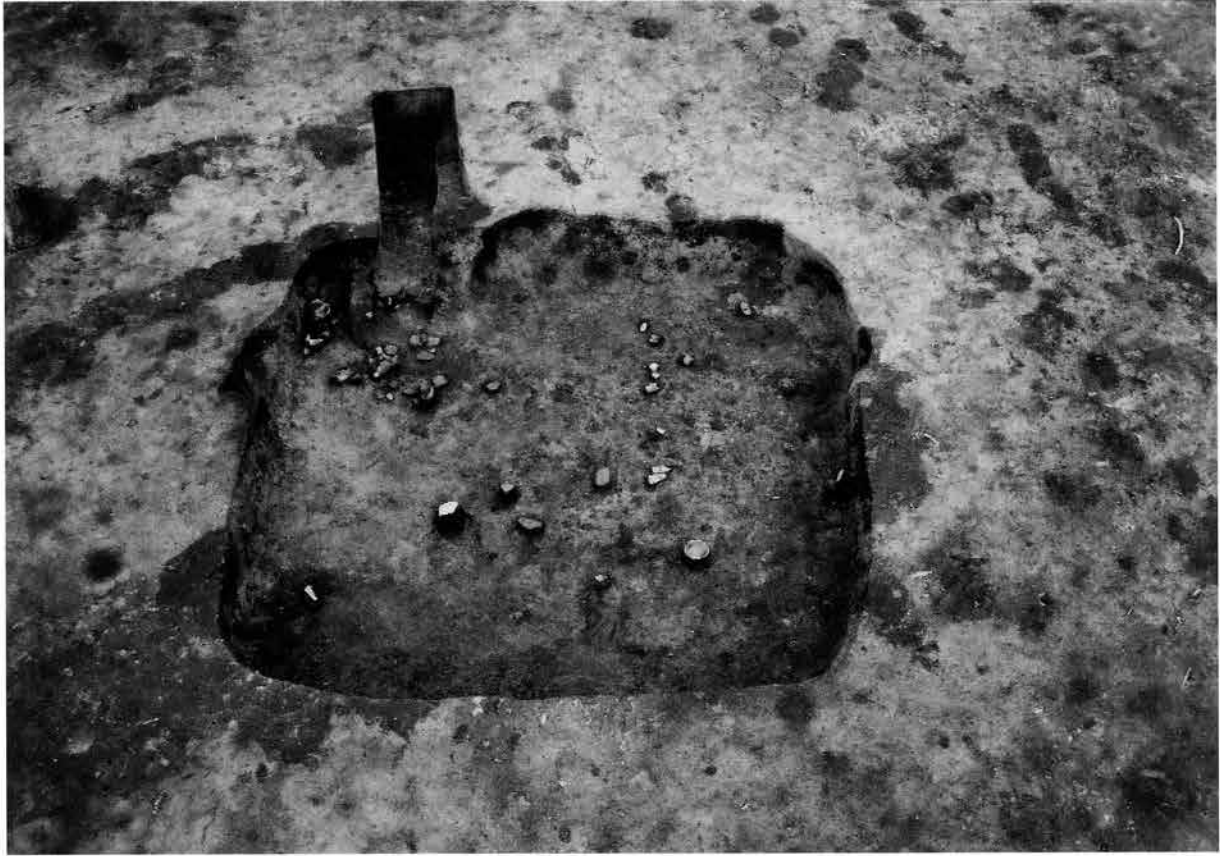


カマド煙道断面



カマド断面

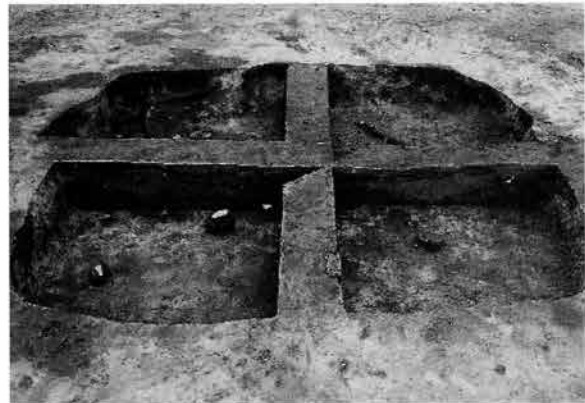
写真図版66 RA100竪穴住居跡 (26号住)



全景（西から）



カマド全景（西から）



覆土断面（西から）



燃焼部断面（西から）



全景（西から）



断面（南から）



カマド

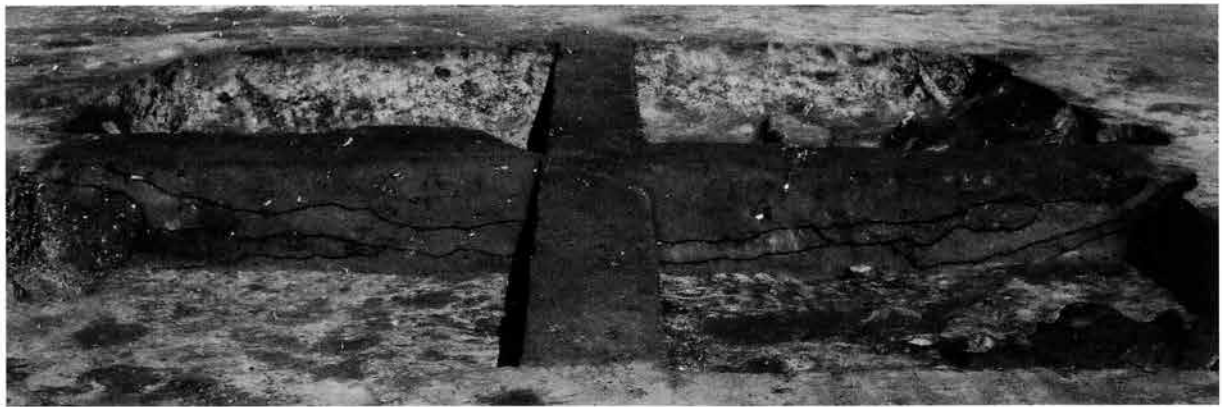


カマド断面

写真図版68 RA102竪穴住居跡（27号住）



全景（西から）



断面（南から）



カマド全景（西から）



遺物出土状況（南から）



全景（南から）



断面（南から）



カマド断面



土器出土状況

写真図版70 RA104竪穴住居跡 (22号住)



全景（南から）



断面（南から）



カマド



Pit1土器出土状況



全景（西から）



断面（南から）



1号カマド



1号カマド煙道断面

写真図版72 RA106竪穴住居跡（1）（42号住）



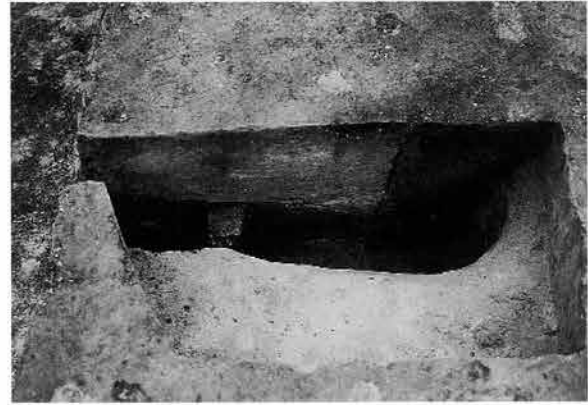
1号カマド断ち割り



1号カマド焼土断面



2号カマド



2号カマド煙道断面



3号カマド



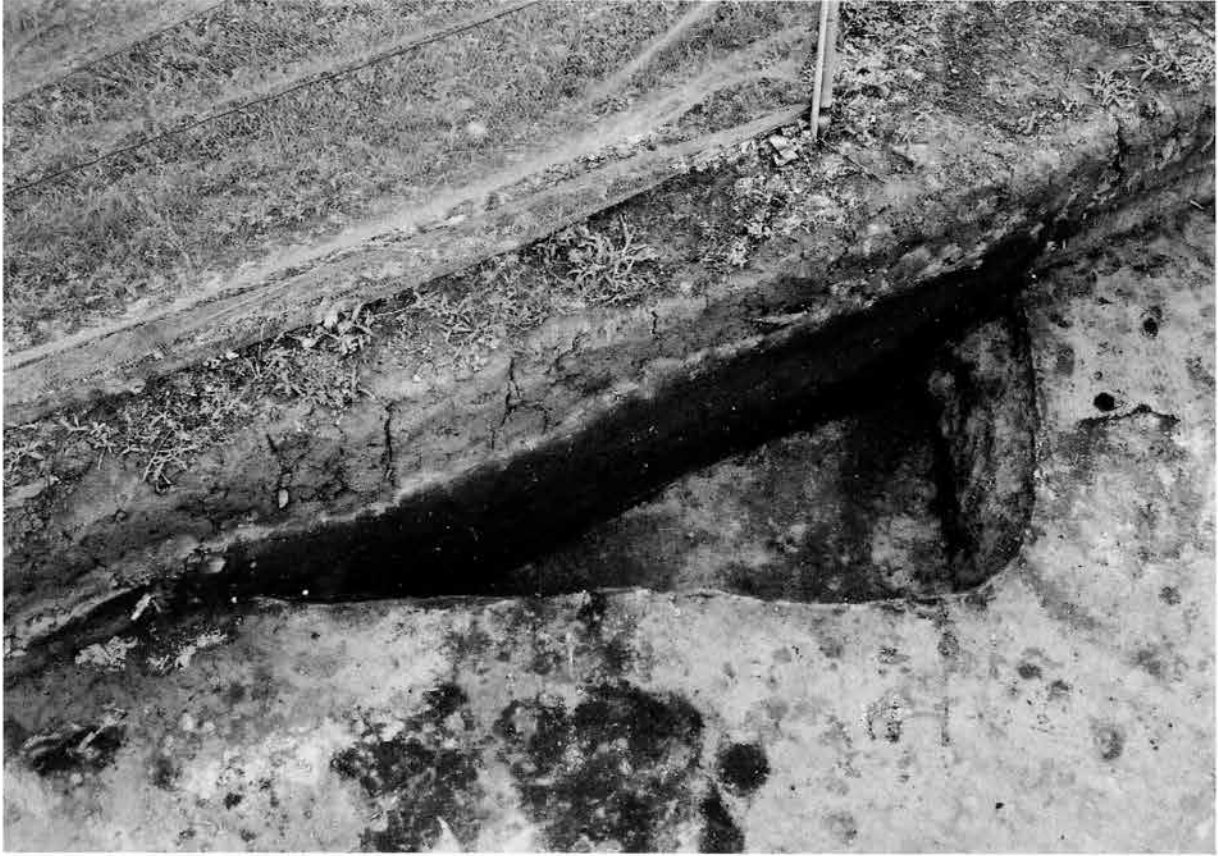
3号カマド煙道断面



遺物出土状況



Pit10断面



全景（西から）



21号住 断面（南西から）

写真図版74 RA107竪穴住居跡（21号住）



RA108 (44号住) 竪穴住居跡全景 (北東から)



RB007 (1号) 掘立柱建物跡 (南から)

写真図版75 RA108竪穴住居跡 (44号住) ・RB007 (1号) 掘立柱建物跡



全景（南西から）



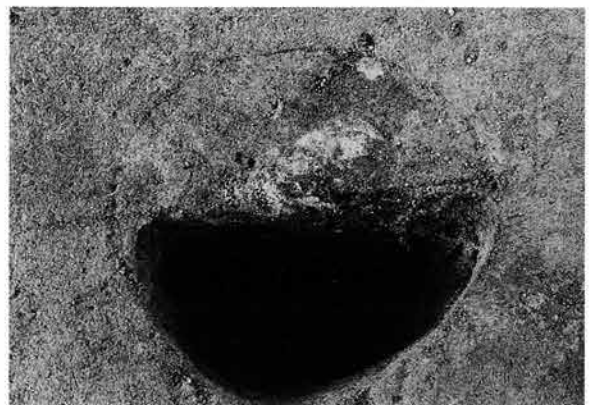
PP56断面（南東から）



PP87断面（南東から）



PP98断面（南西から）



PP113断面（東から）



RD150



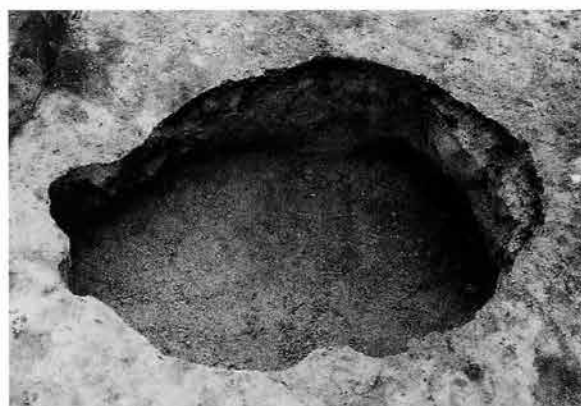
RD150断面



RD151



RD151断面



RD152



RD152断面



RD153断面



RD153烧土面



RD153灰黄色土検出状況



RD153灰黄色土断面



RD154



RD154埋土断面



RD154焼土断面



RD154焼土断面



RD155 (北東から)



RD155断面

写真図版78 RD153~RD155土坑



RD156 (西から)



RD156断面 (北西から)



RD157



RD157断面



RD158



RD158焼土断ち割り



RD159



RD159断ち割り



RD160



RD160断面



RD161 (南から)



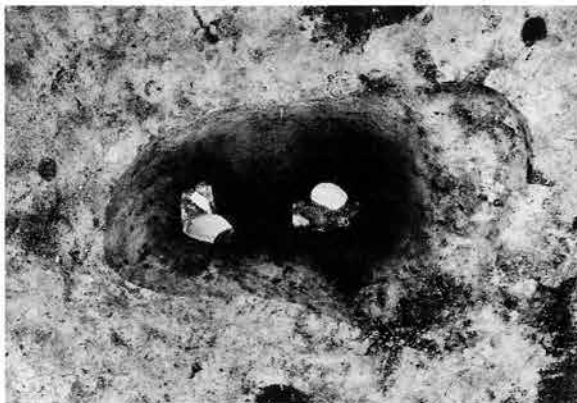
RD161断面 (南西から)



RD162 (南から)



RD162断面 (南から)



RD163 (西から)



RD163断面 (西から)

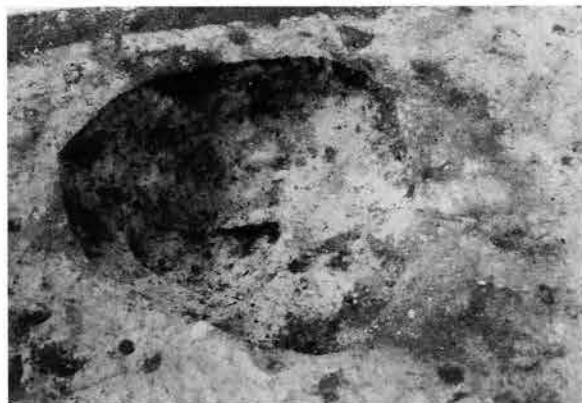
写真図版80 RD160~RD163土坑



RD164 (南から)



RD164断面 (南から)



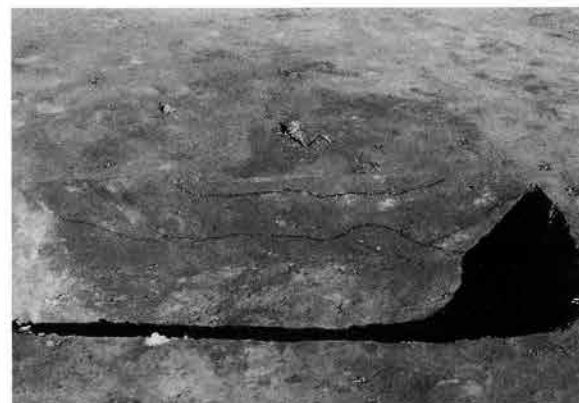
RD165 (南から)



RD165断面 (南から)



RD166 (西から)



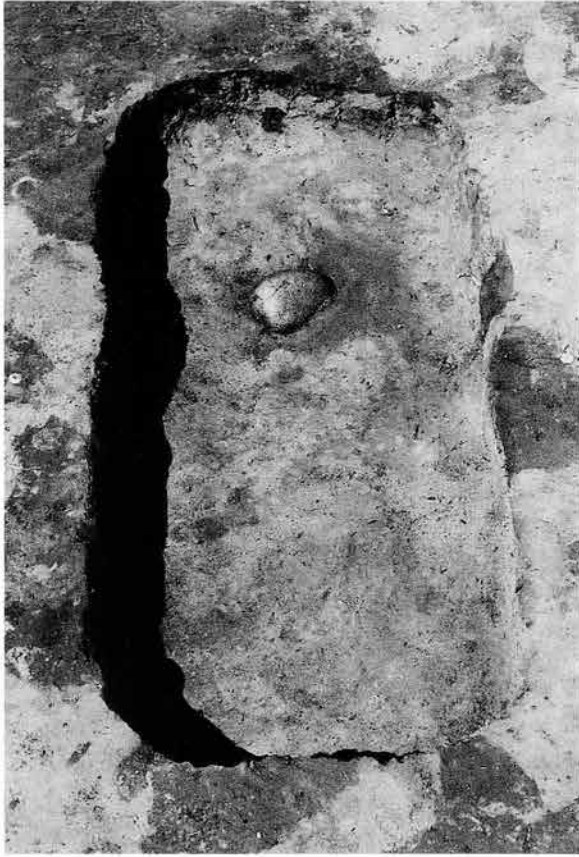
RD166断面 (西から)



RD168



RD168断面



RD167



RD167断面



RD167断面



RD169



RD169断面



RD177



RD171断面

写真图版82 RD167 · RD169 · RD171土坑



RD172断面



調査風景



RD173



RD173断面



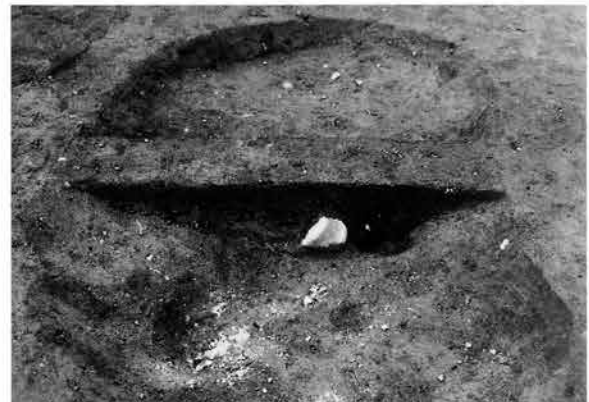
RD174 (北から)



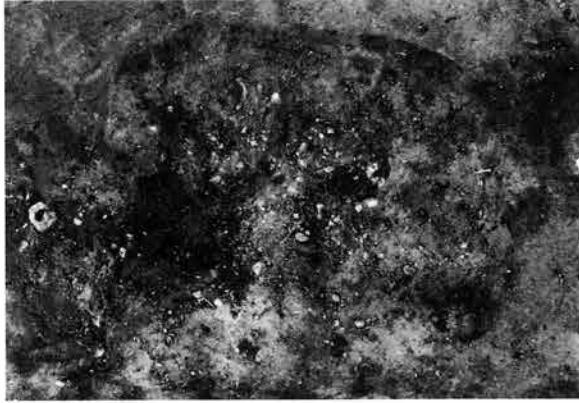
RD174断面 (南から)



RD175完掘



RD175断面



RD176 (東から)



RD176断面 (西から)



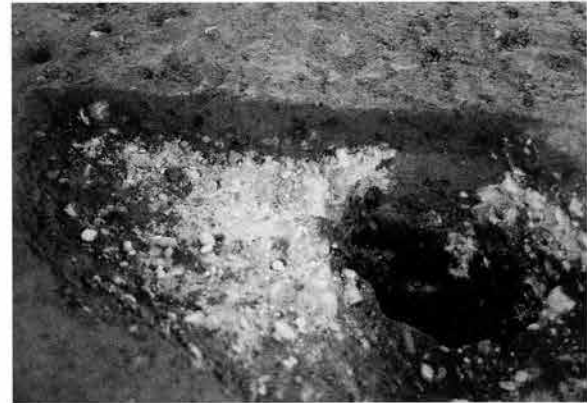
RD177完掘



RD177断面



RD178



RD178断面



RD179



RD179断面

写真図版84 RD176~RD179土坑



RD180 (北西から)



RD180断面 (西から)



RD181 (北東から)



RD181断面 (南西から)



RD182 (西から)



RD182断面 (東から)



RD183 (西から)



RD183断面 (南西から)



RD184 (東から)



RD184断面 (南から)



RD185 (北西から)



RD185断面 (南東から)



RD186 (北東から)



RD186断面 (南東から)



RD187



RD187断面

写真図版86 RD184~RD187土坑



RD188



RD188断面



RD189



RD189断面



RD190



RD190断面



RD191



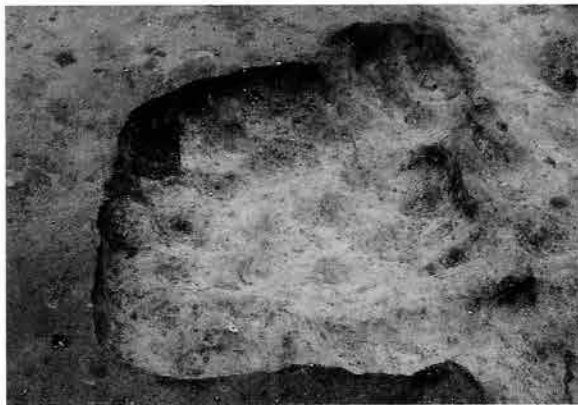
RD191断面



RD192



調査区中央 (南西から)



RD193



RD193断面



RD194



RD194断面



RD195 (南東から)



RD195断面 (西から)

写真図版88 RD192~RD195土坑



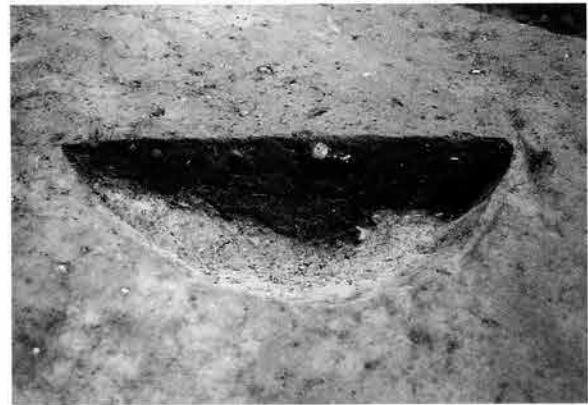
RD196



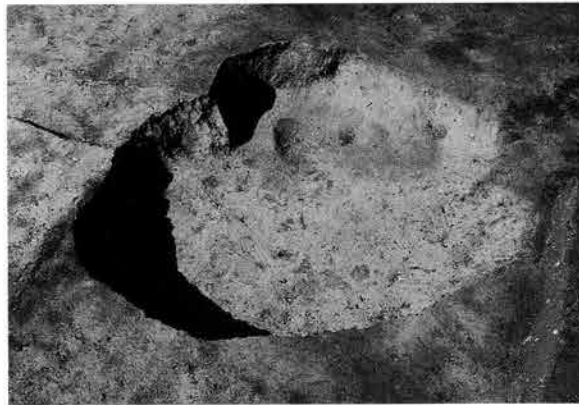
RD196断面



RD197



RD197断面



RD198



RD198断面



RD199



RD199断面



RD200



RD200断面



RD201



RD201断面



RD202



RD202断面



RD203



RD203断面

写真図版90 RD200~RD203土坑



RD205・206・204 (南から)



RD205・206・204断面 (南から)



RD207 (南から)



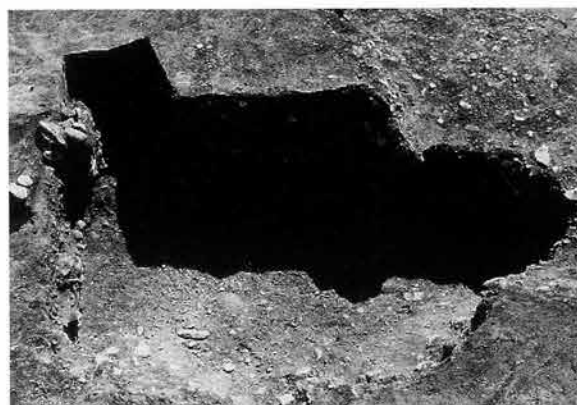
RD207断面 (南から)



RD208 (南から)



RD208断面 (南から)



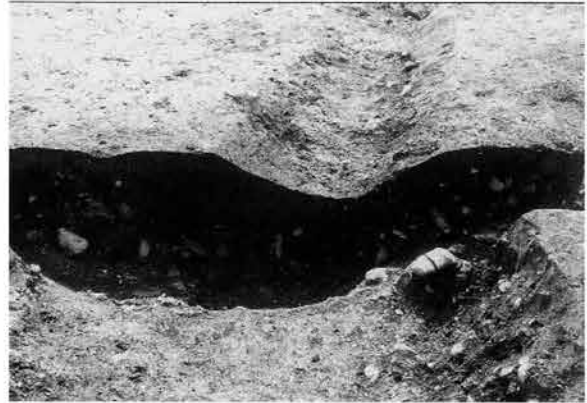
RD209 (北西から)



RD209断面 (南西から)



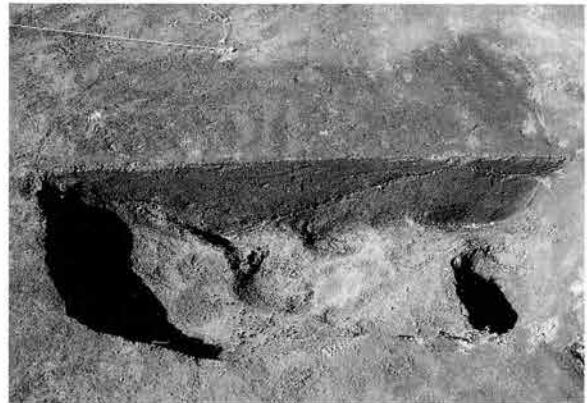
RD210 (北東から)



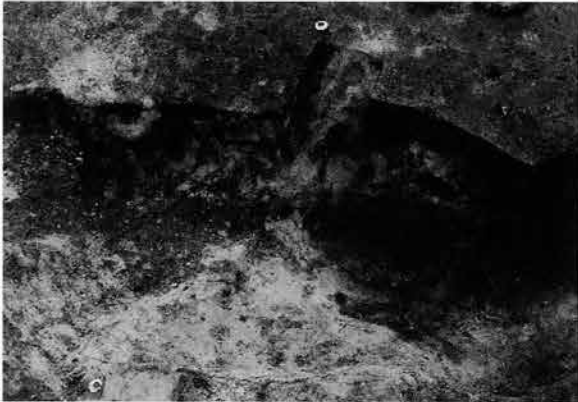
RD210断面 (北東から)



RD211 (北西から)



RD211断面 (南から)



RD212 (西から)



RD212断面 (南西から)



RD213 (北東から)



RD213断面 (南から)

写真図版92 RD210～RD213土坑



RD214 (南西から)



RD214断面 (南から)



RD215 (北東から)



RD215断面 (南から)



RD216 (南東から)



RD216断面 (南東から)



RD217



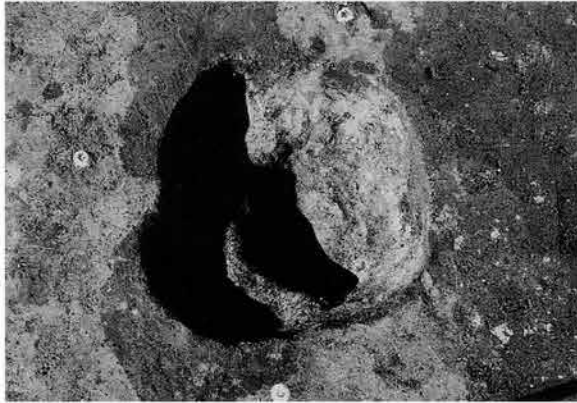
RD217断面



RD218



RD218断面



RD219 (南東から)



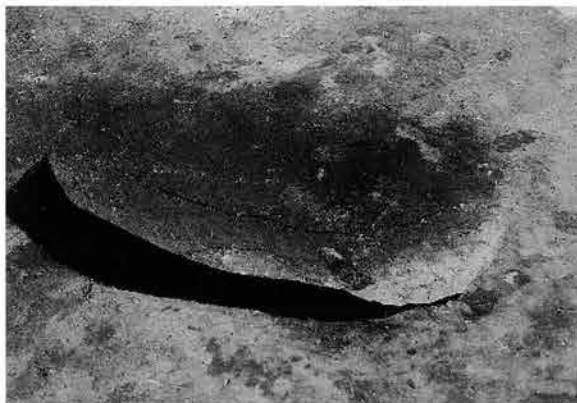
RD219断面 (西から)



RD220 (南から)



RD220断面 (南東から)

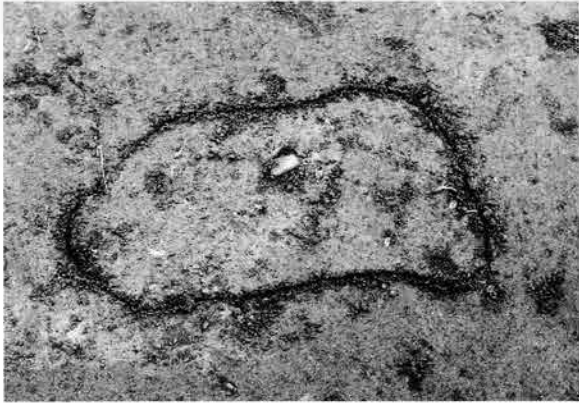


RD221断面 (南から)

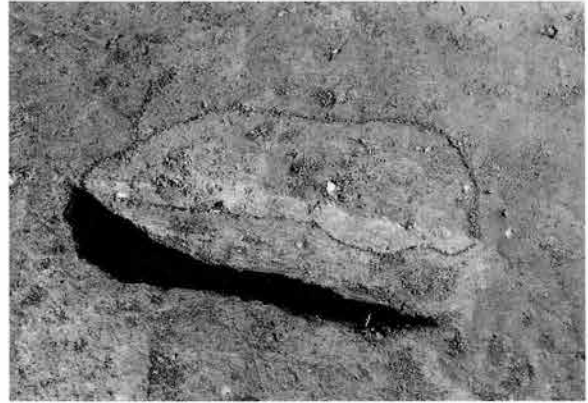


調査区南側 (北西から)

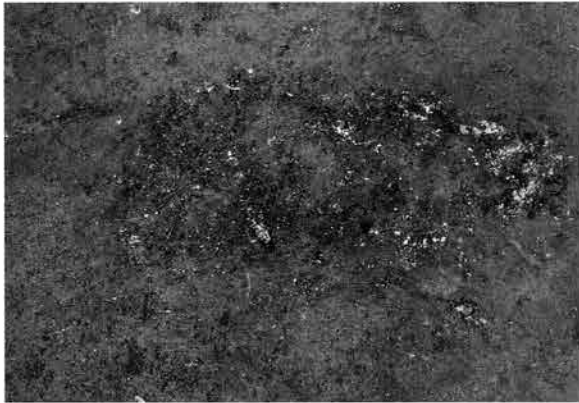
写真図版94 RD218~RD221土坑



RD222検出状況（南西から）



RD222断面（南西から）



RD223検出面



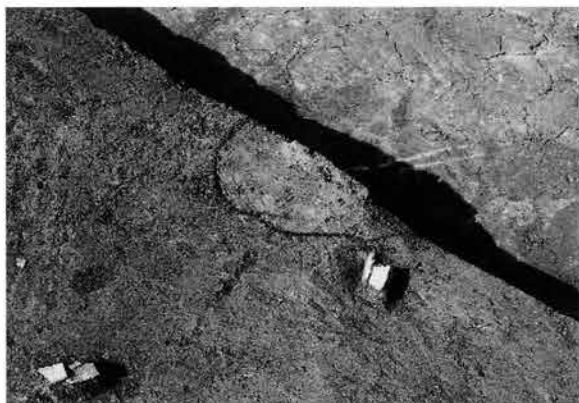
RD223断面



RF003（3号）焼土遺構（南から）



RF003（3号）焼土遺構断面



RF004（9号）焼土遺構（東から）



RF004（9号）焼土遺構断面



RF005 (2号) 焼土遺構 (南西から)



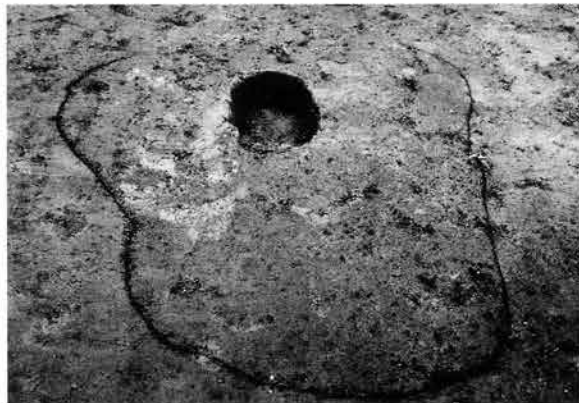
RF005 (2号) 焼土遺構断面



RF006 (10号) 焼土遺構 (南から)



RF006 (10号) 焼土遺構断面



RF007 (6号) 焼土遺構 (西から)



RF007 (6号) 焼土遺構断面 (南西から)

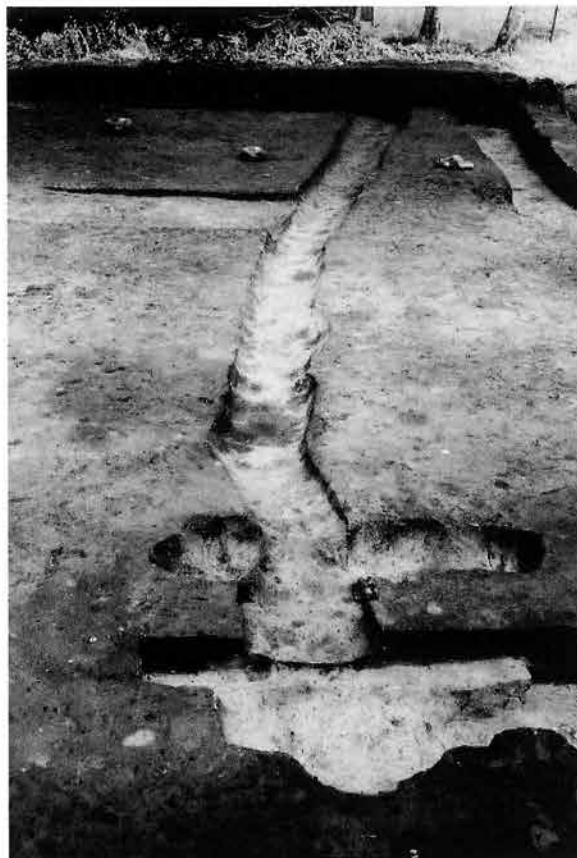


RG022全景 (南から)

写真図版96 RF005～RF007焼土遺構・RG022溝跡



RG023東半（西から）



RG023西半（西から）



RG023断面（西から）



RG023工具痕断面



RG024



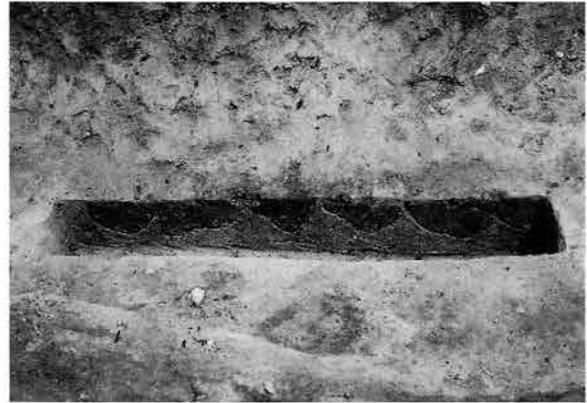
RG024断面（西から）



RG025



RG025断面



RG025工具痕断面



RG026



RG026断面



RG027全景 (南から)



RG028全景



RG028断面① (北から)



RG028断面② (北から)



RG029全景



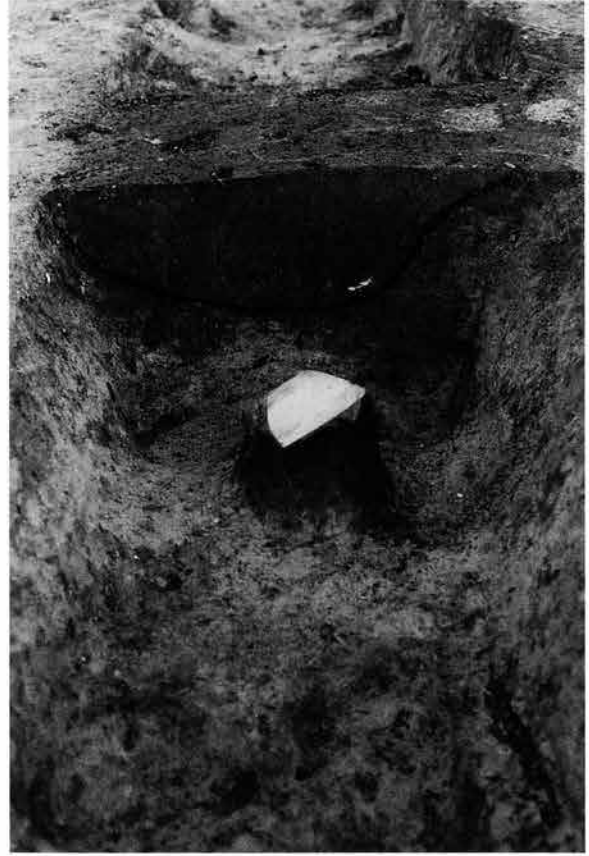
RG029断面



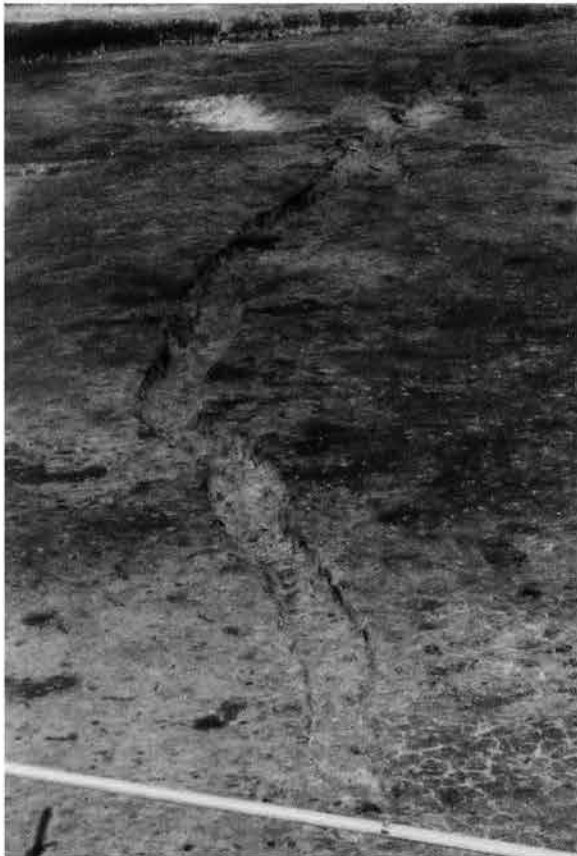
RG029断面



RG030全景（西から）



RG030断面・遺物出土状況（西から）



RG031全景（南から）



RG033・034全景（東から）

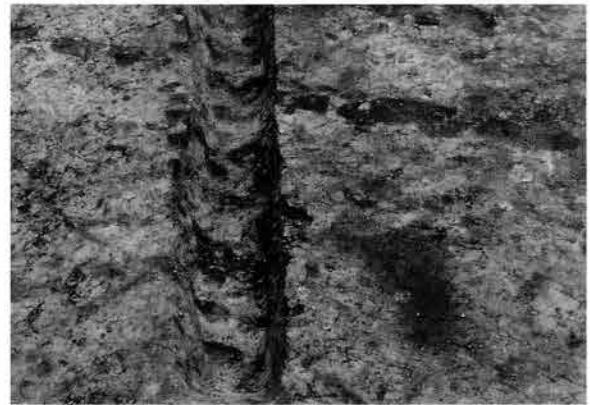
写真図版100 RG030・RG031・RG033・RG034溝跡



RG032全景（南から）



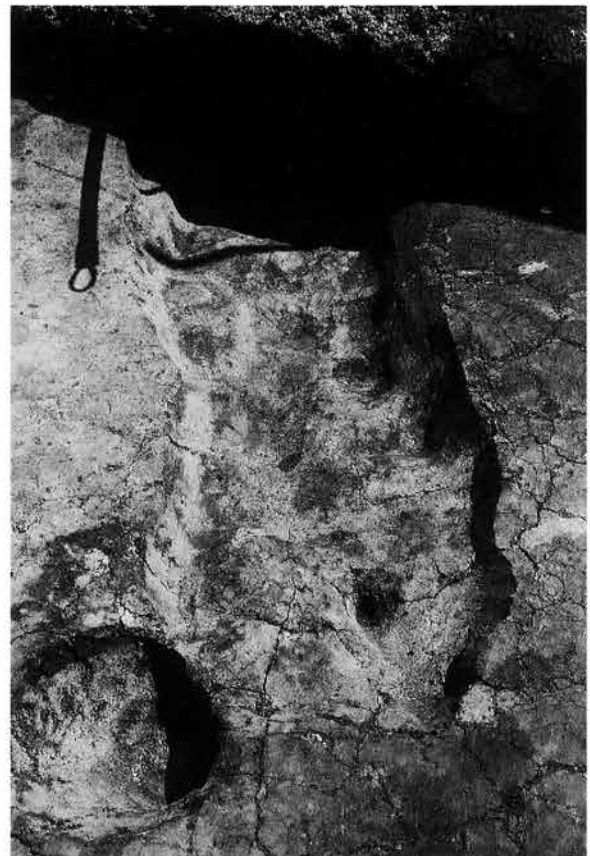
RG032断面（北から）



RG032工具痕（北西から）



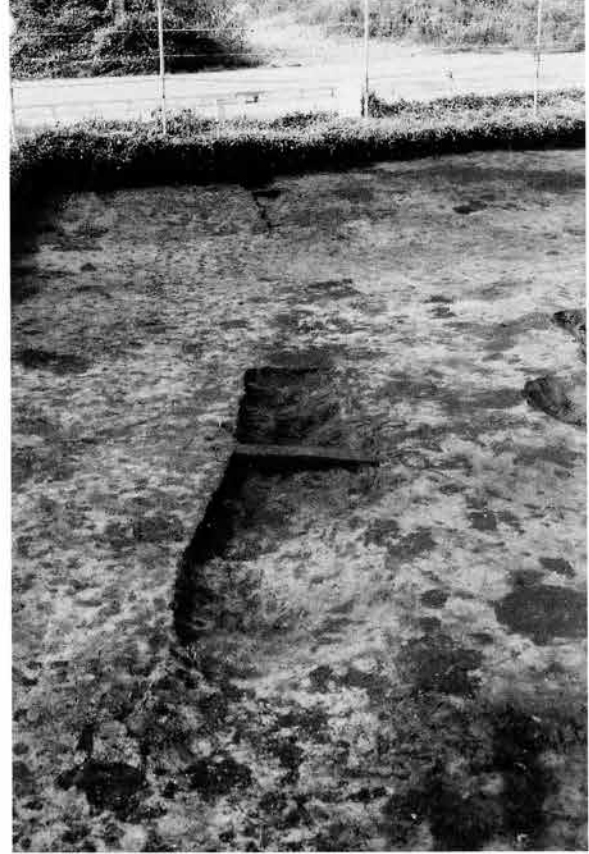
RG035全景（西から）



RG036全景（北西から）



RG037~039全景（北東から）



RG041全景（東から）



RG040全景（南から）



RG040・RD208断面（南から）



調査風景



RG042



RG042断面



RZ009 (1号) カマド状遺構 (南から)



RZ009 (1号) カマド状遺構断面





東ブロック断面・検出状況



西ブロック断面・検出状況

写真図版104 RZ010畝間状遺構



RZ011不明遺構全景（南東から）



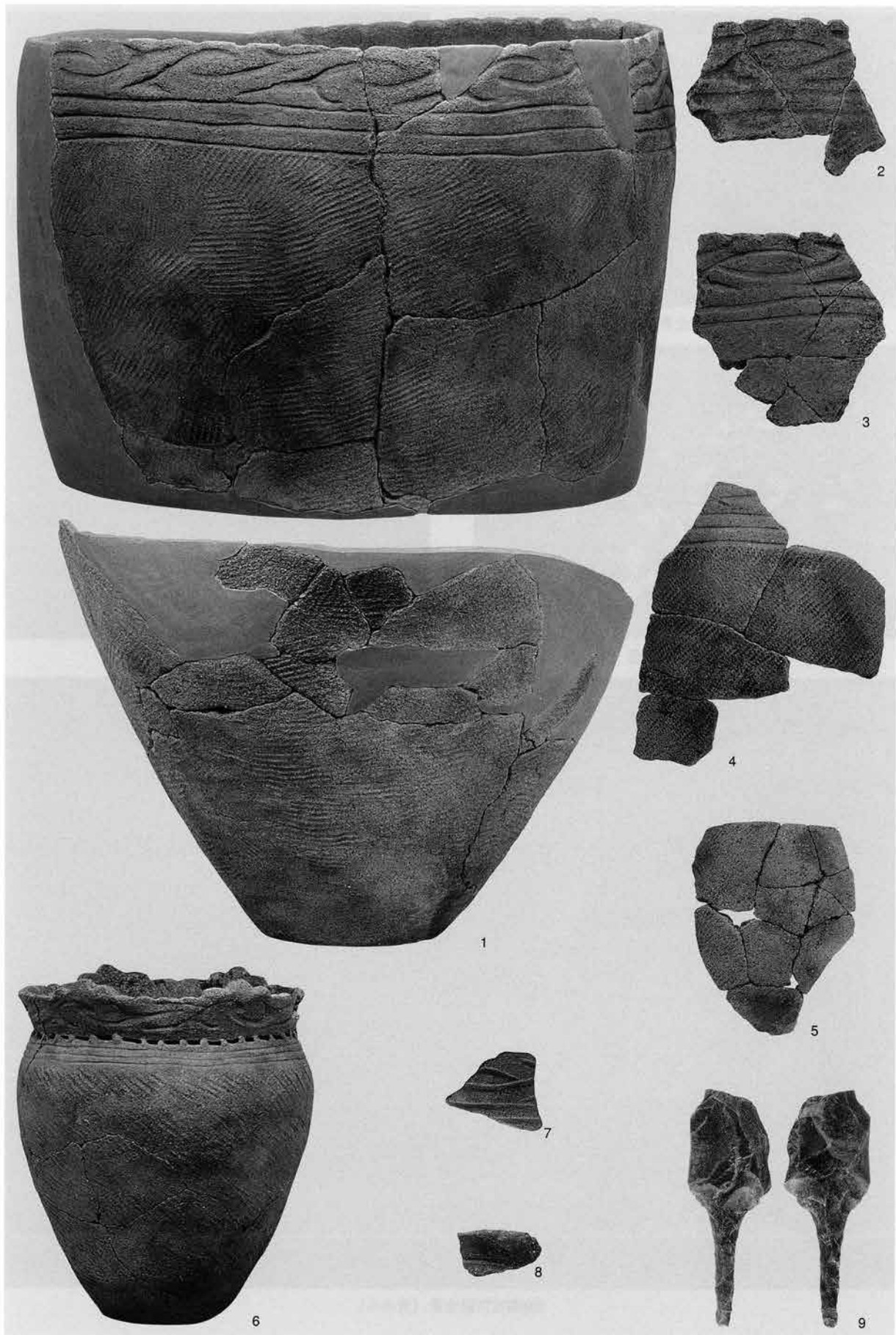
RZ012不明遺構遺物出土状況（南東から）



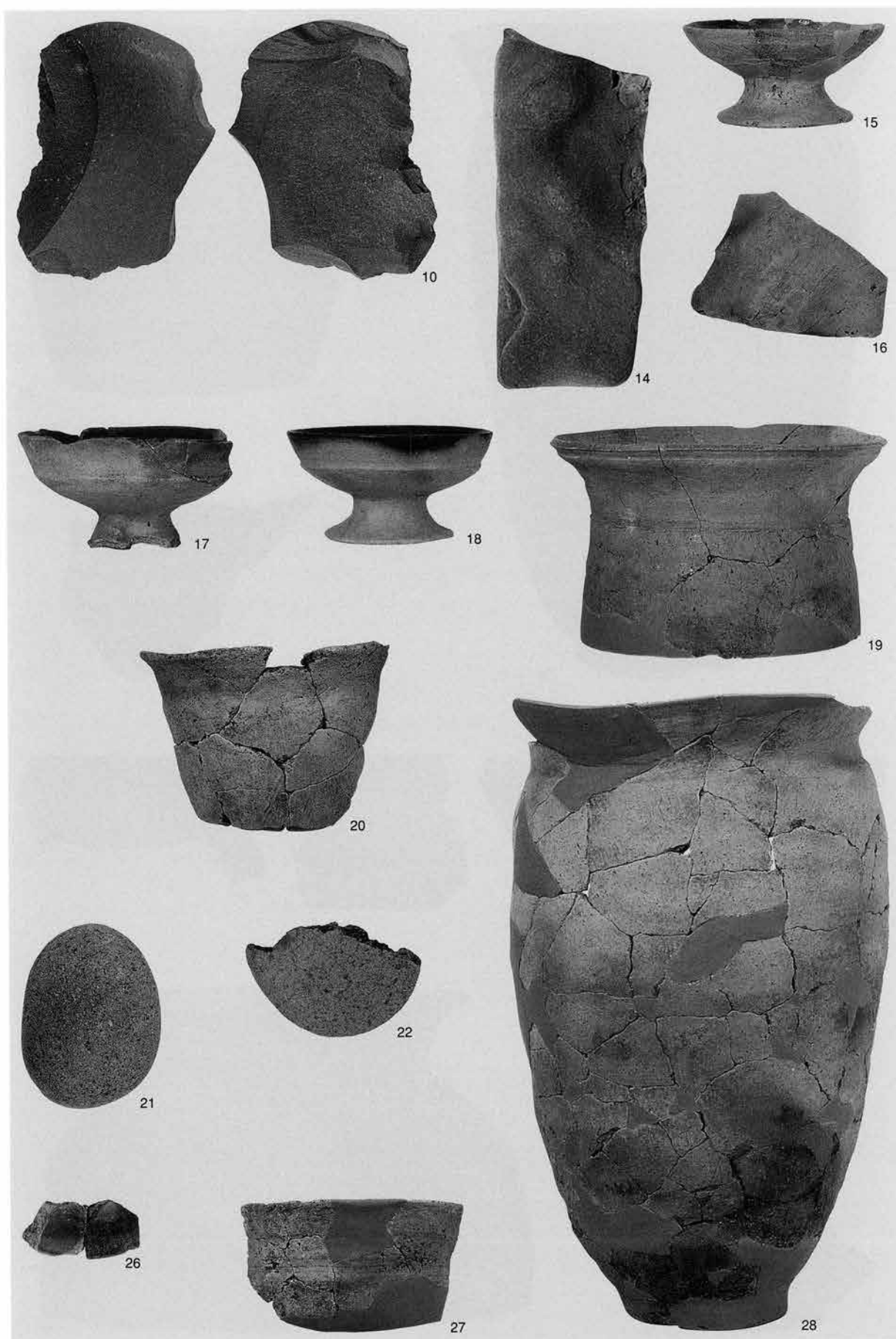
RZ012不明遺構全景（南西から）



3M南柱穴群全景（東から）



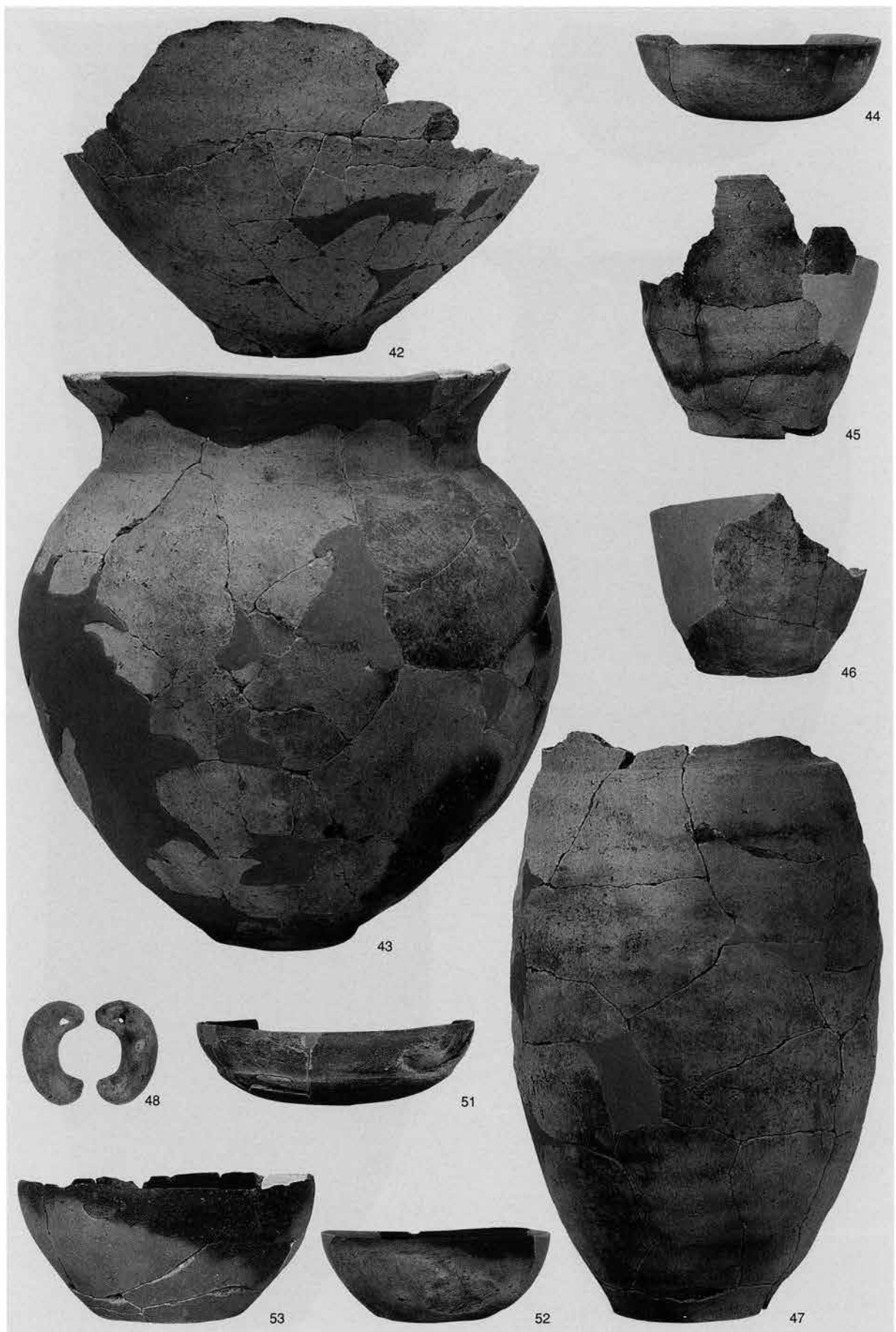
写真図版106 出土遺物 (1)



写真図版107 出土遺物 (2)



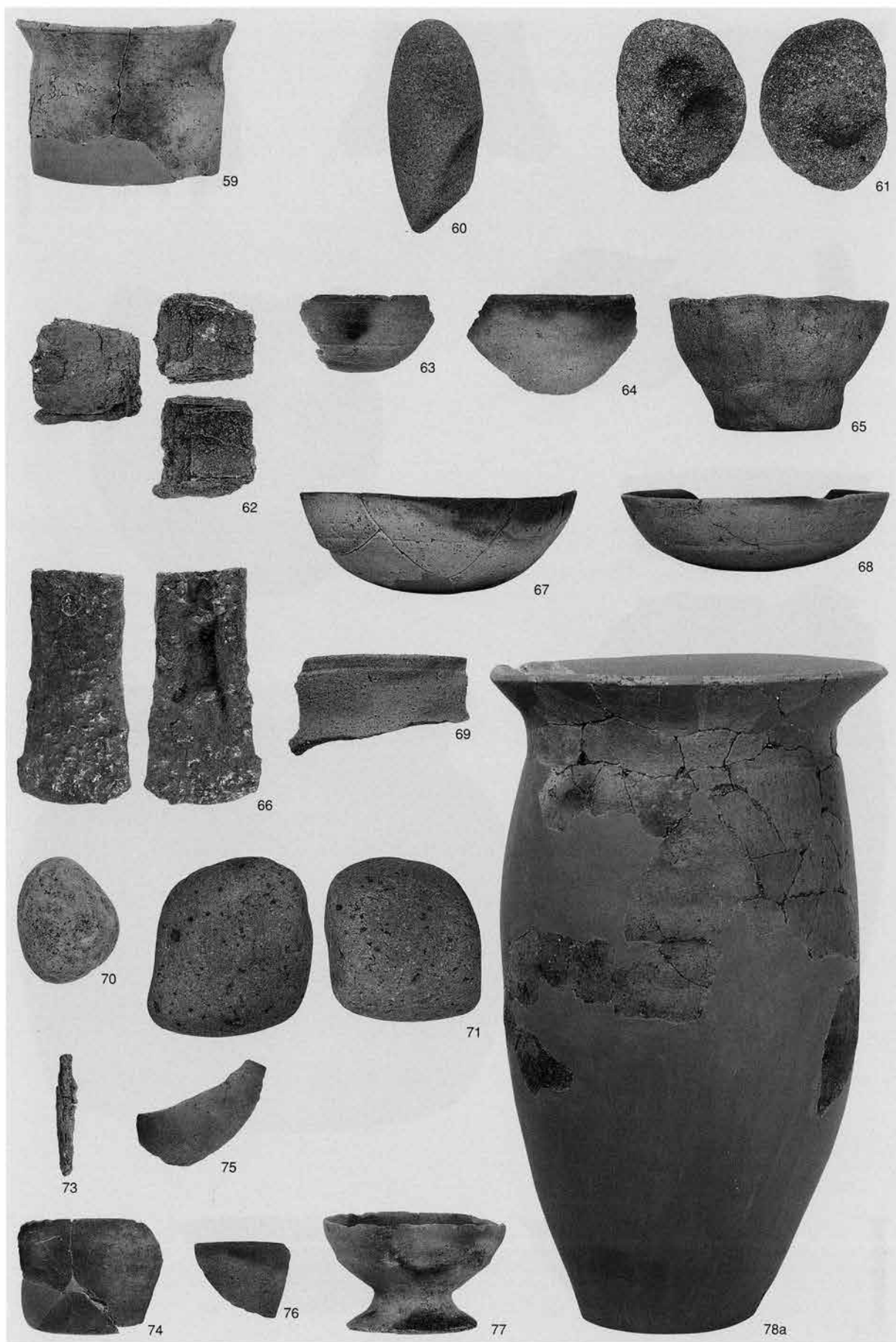
写真図版108 出土遺物 (3)



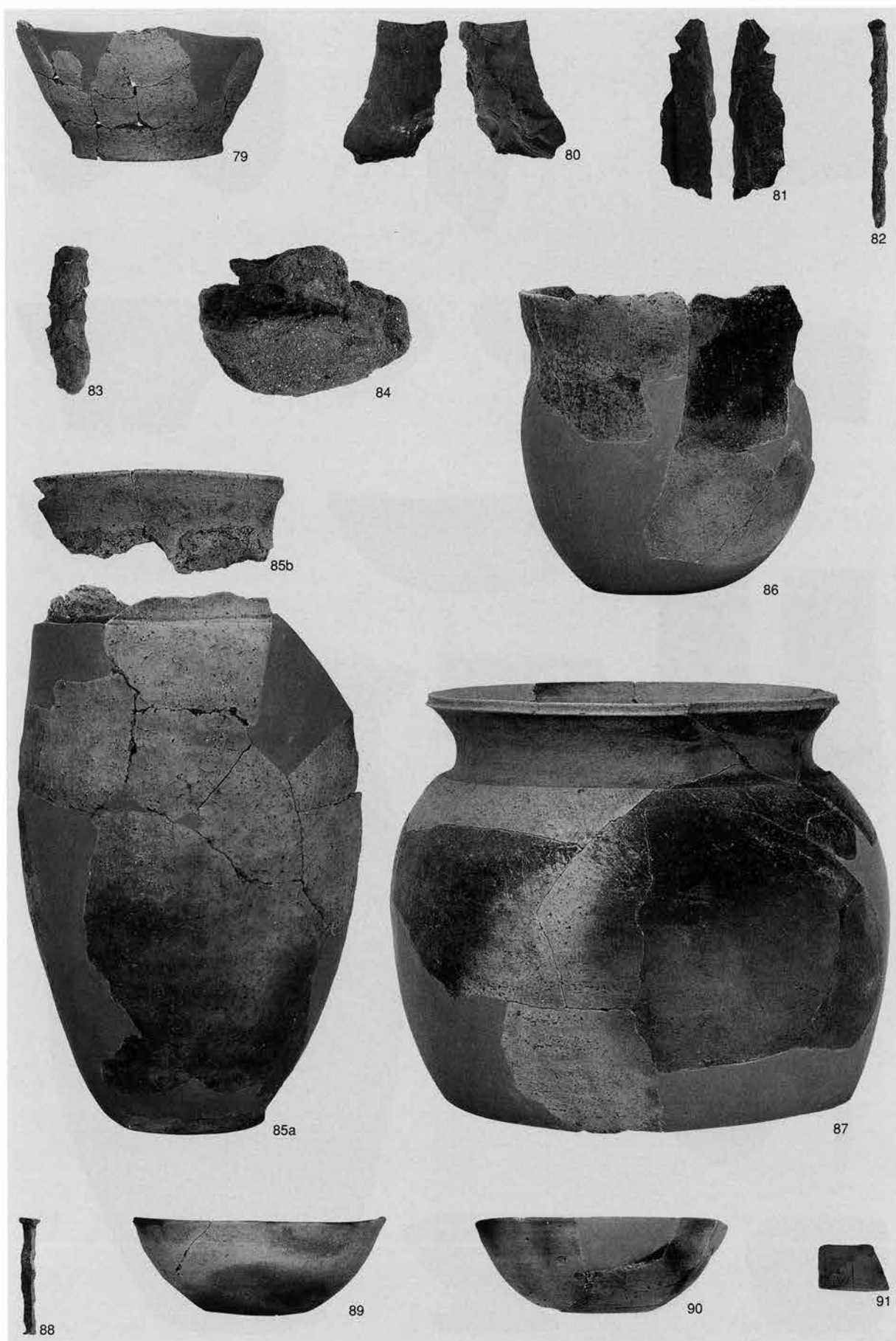
写真図版109 出土遺物 (4)



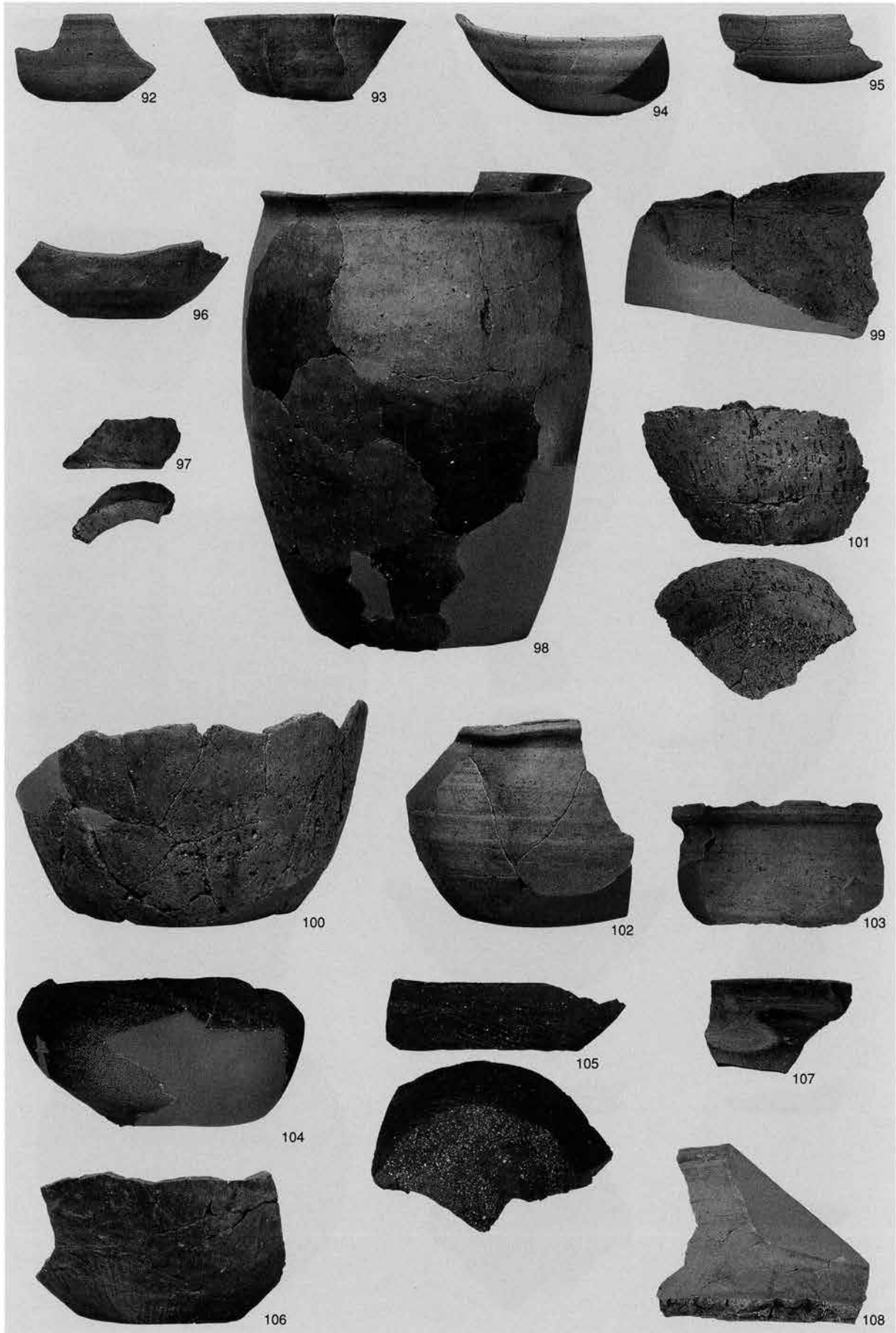
写真図版110 出土遺物 (5)



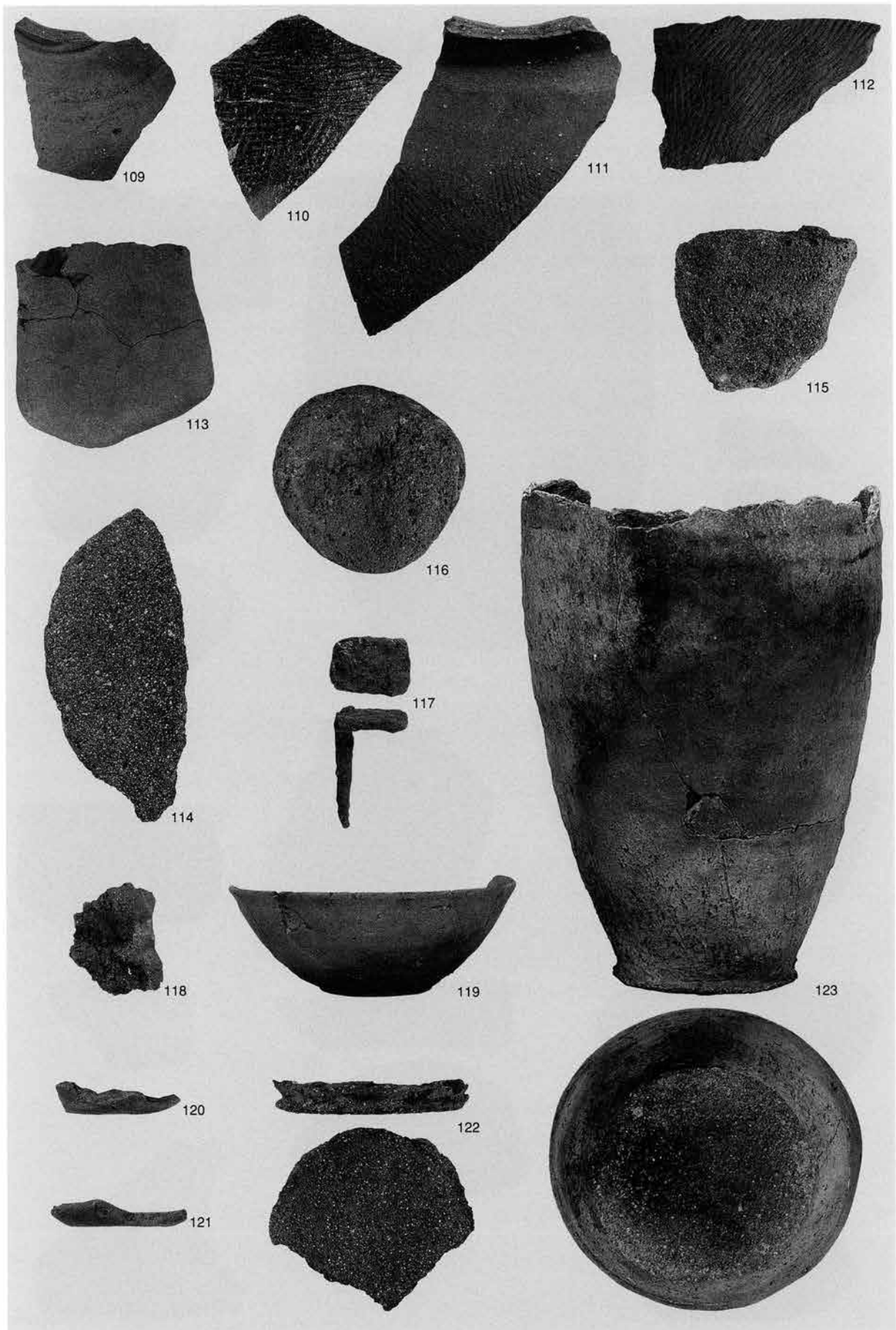
写真図版111 出土遺物 (6)



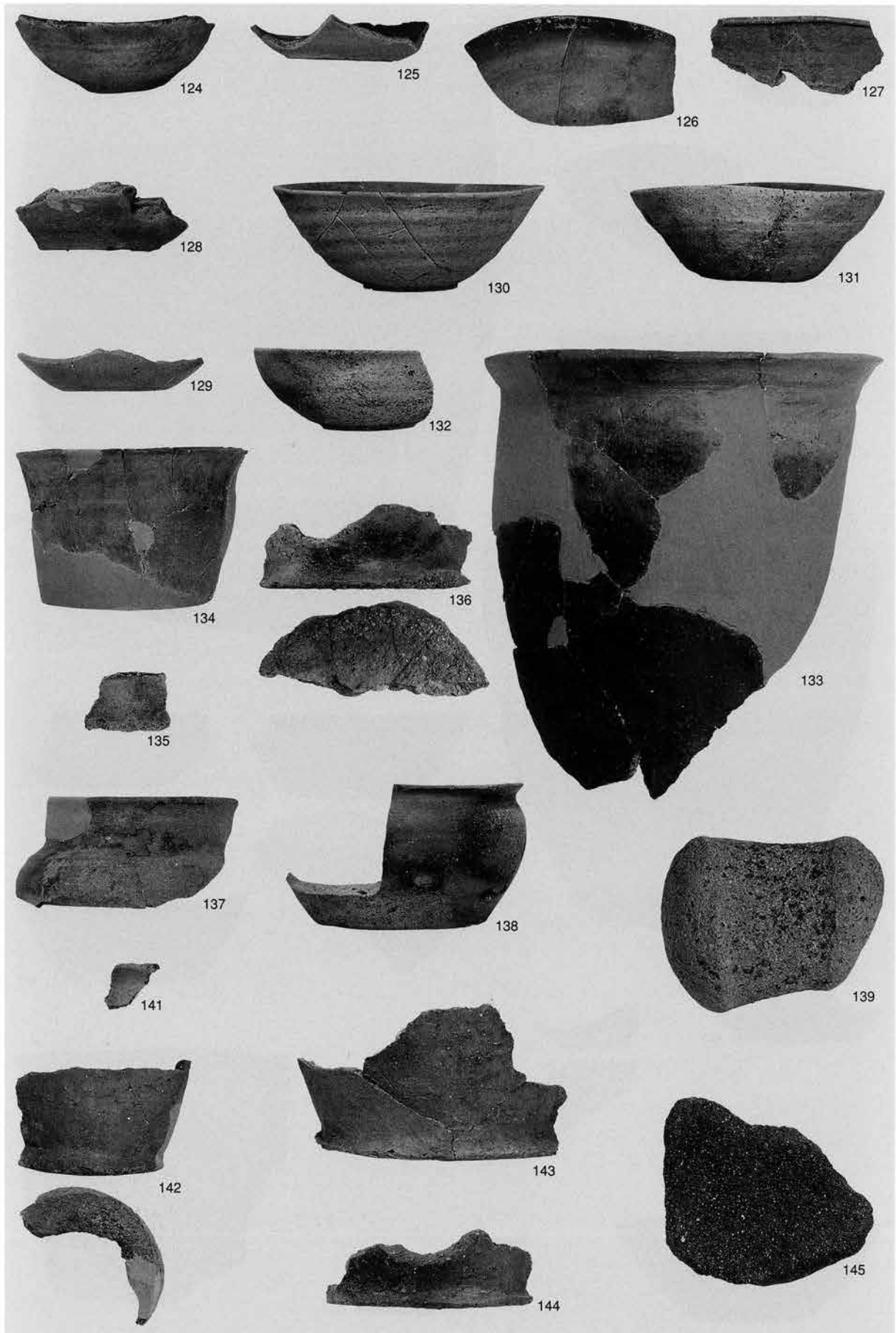
写真図版112 出土遺物 (7)



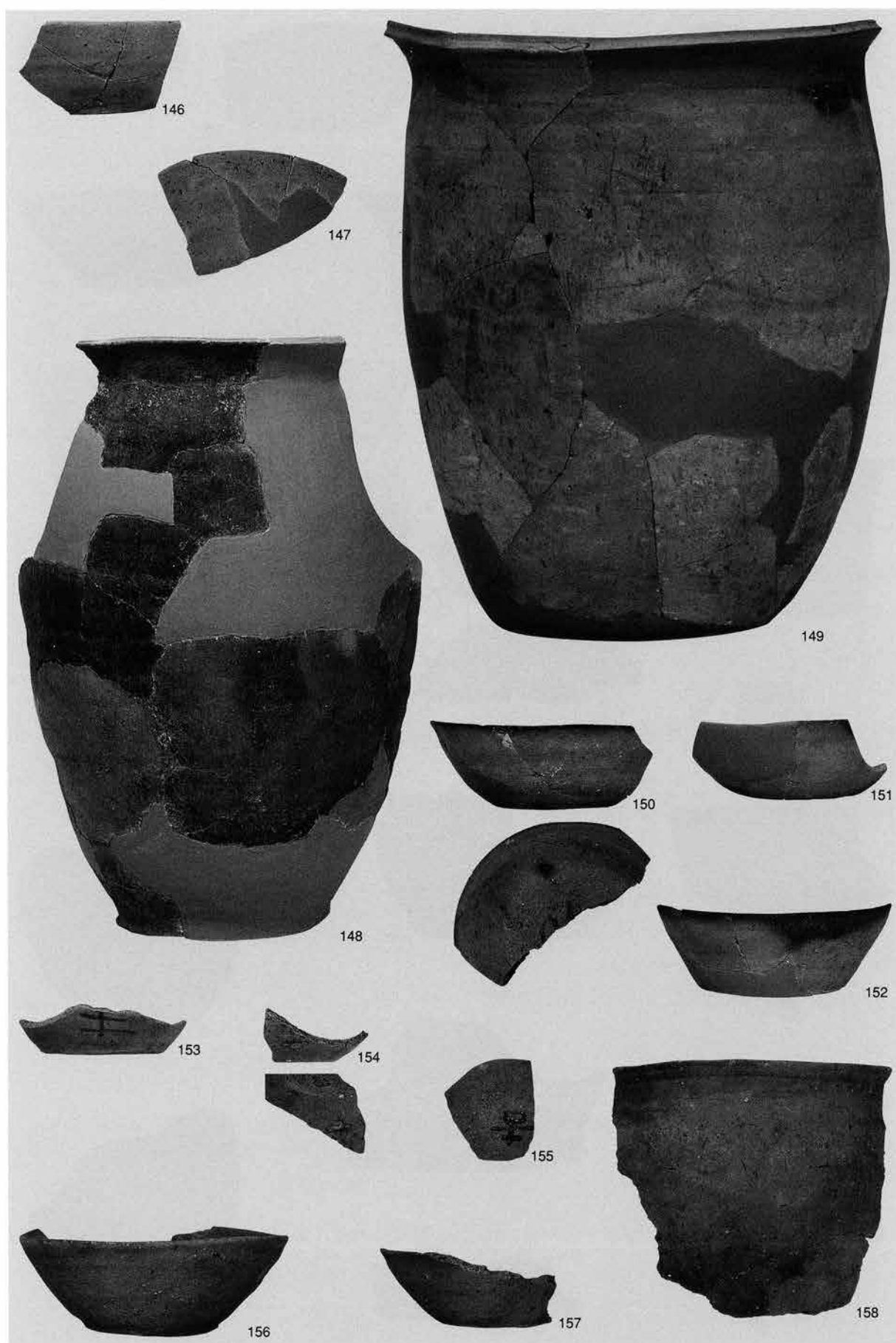
写真図版113 出土遺物 (8)



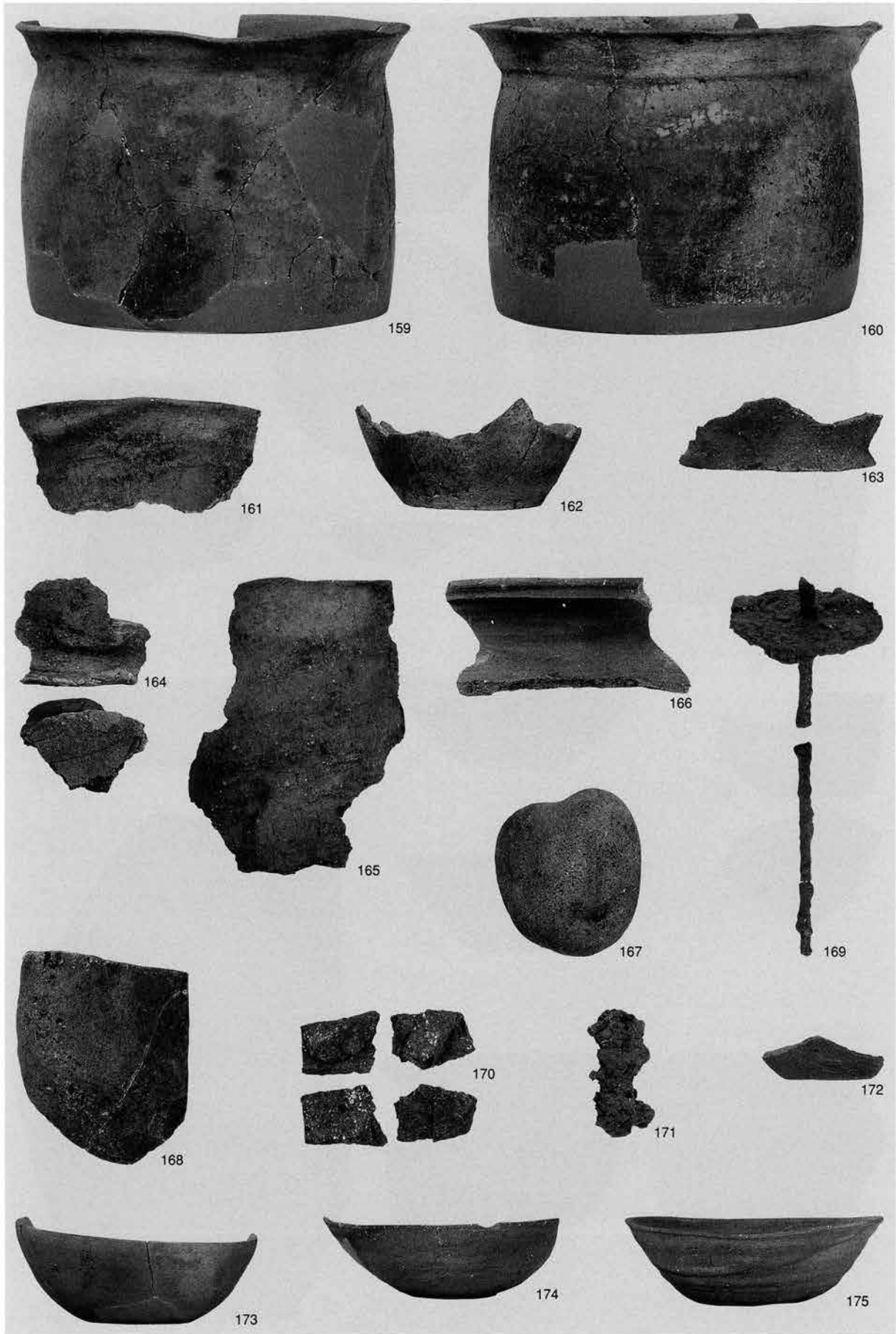
写真図版114 出土遺物 (9)



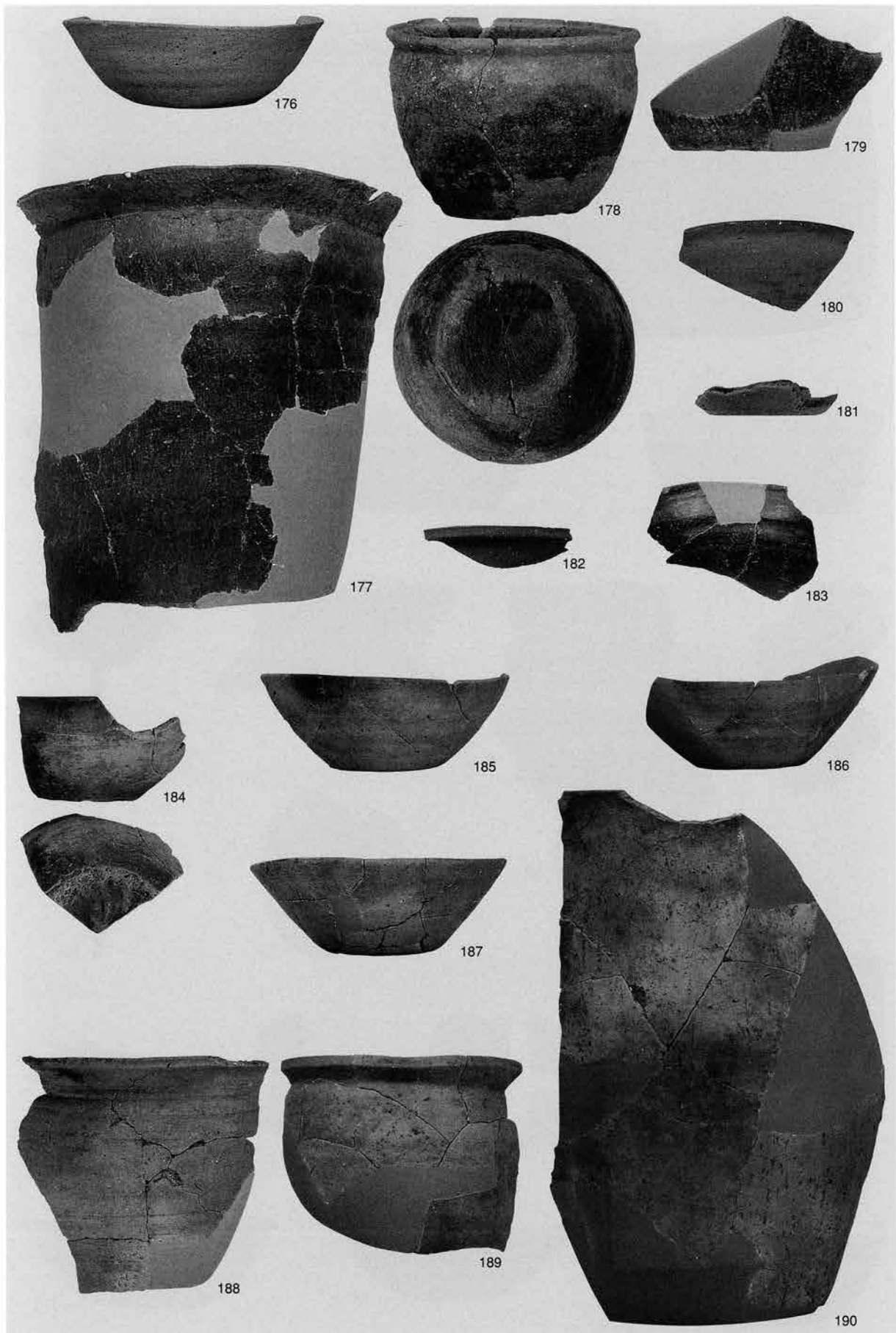
写真図版115 出土遺物 (10)



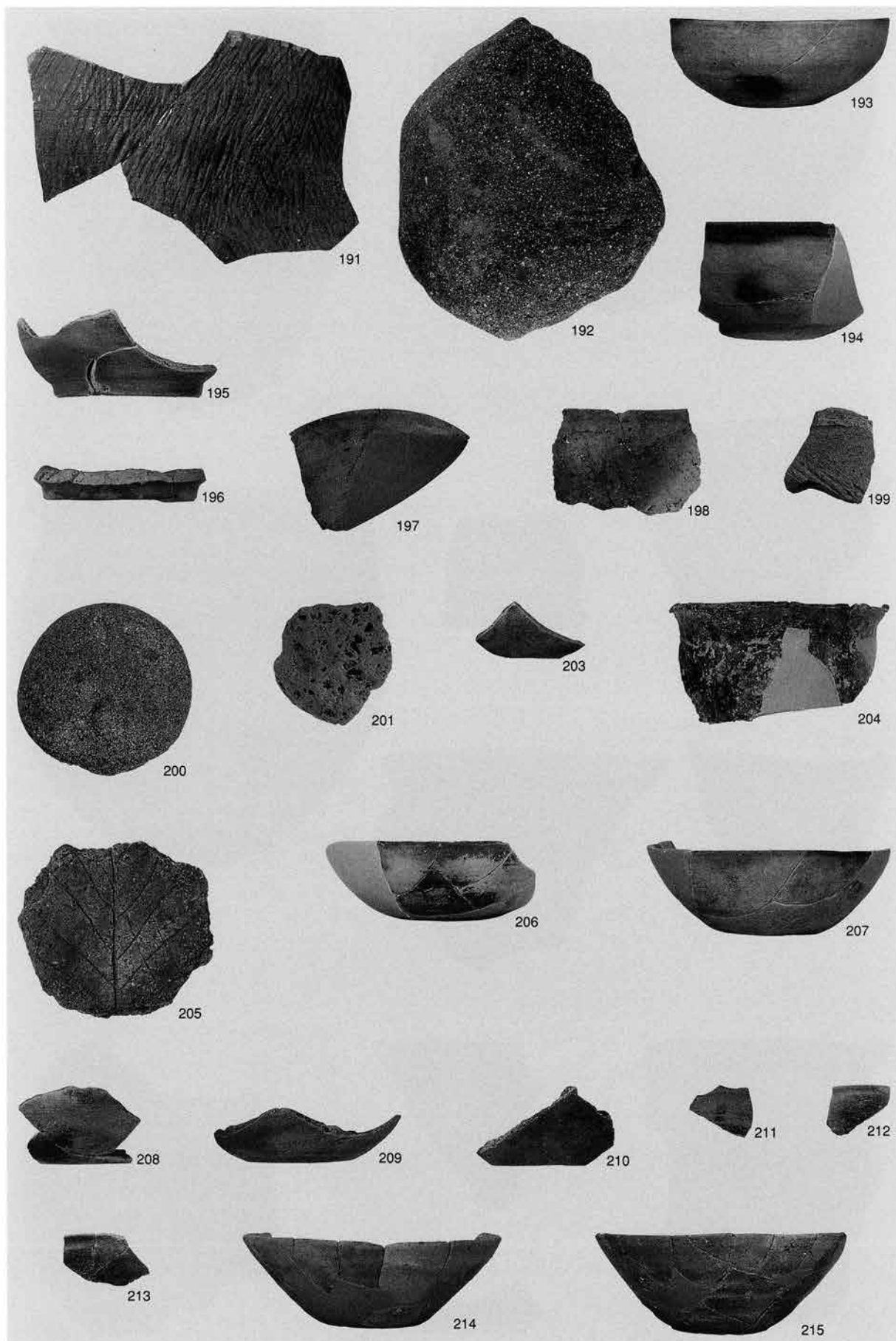
写真図版116 出土遺物 (11)



写真図版117 出土遺物 (12)



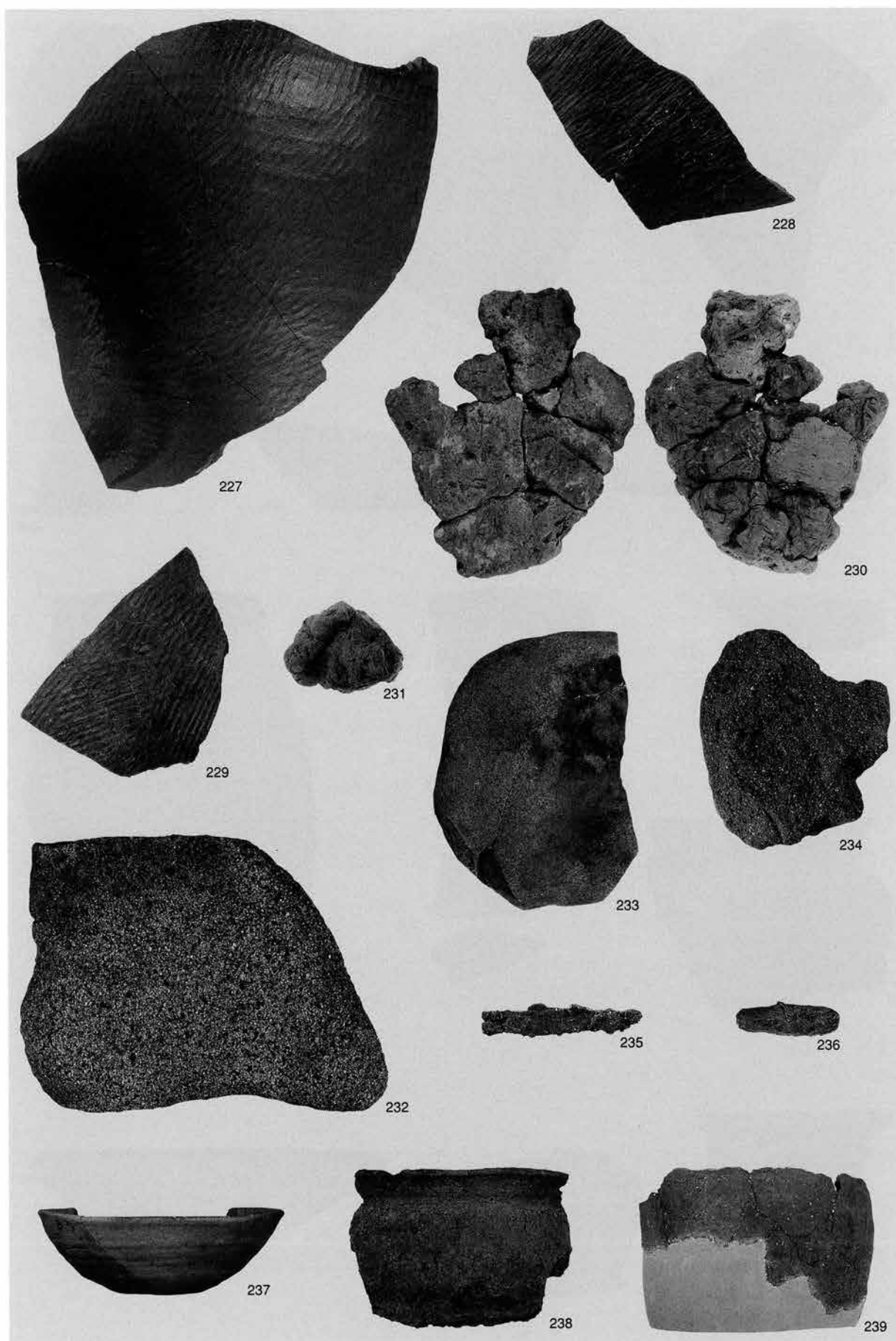
写真図版118 出土遺物 (13)



写真図版119 出土遺物 (14)



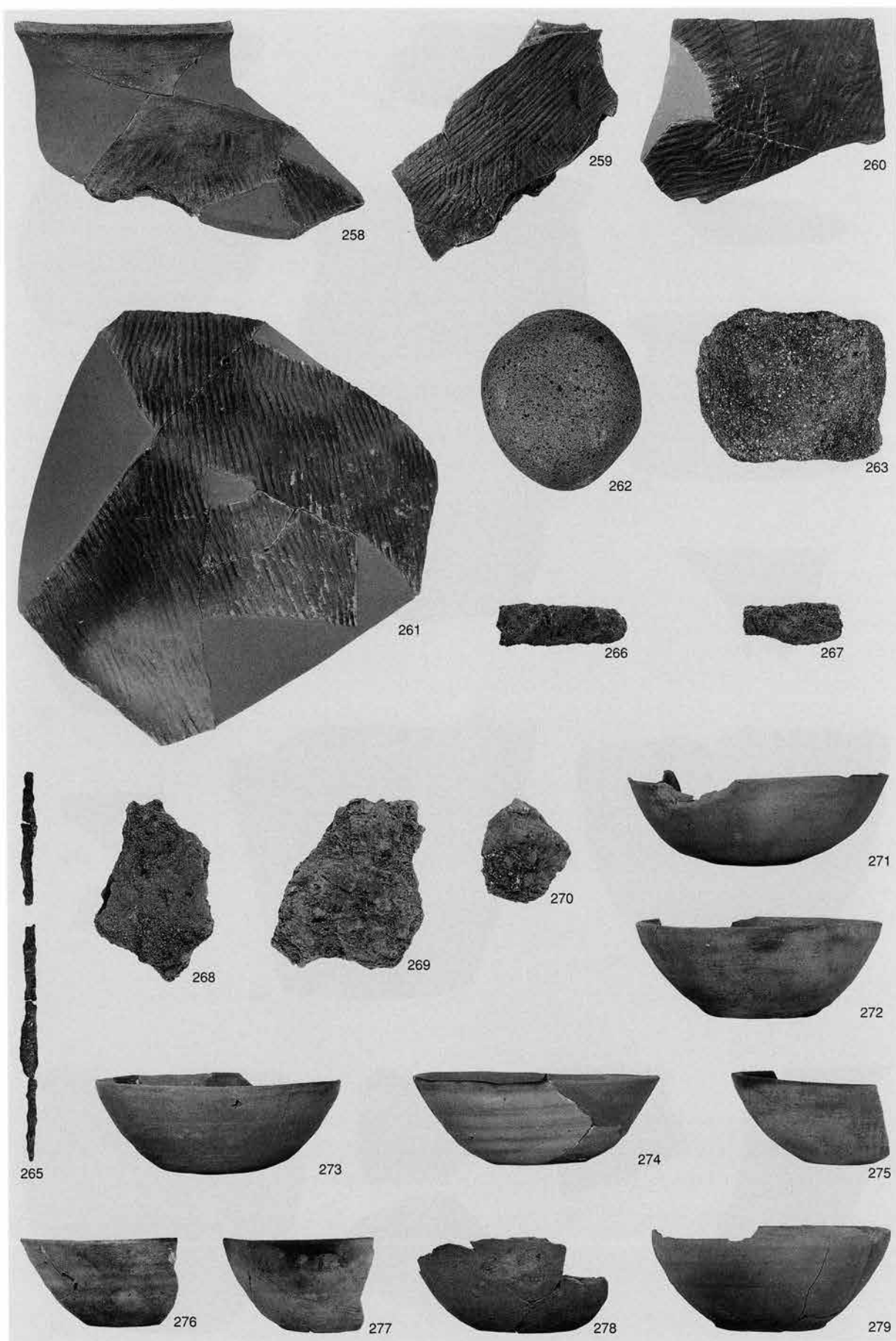
写真図版120 出土遺物 (15)



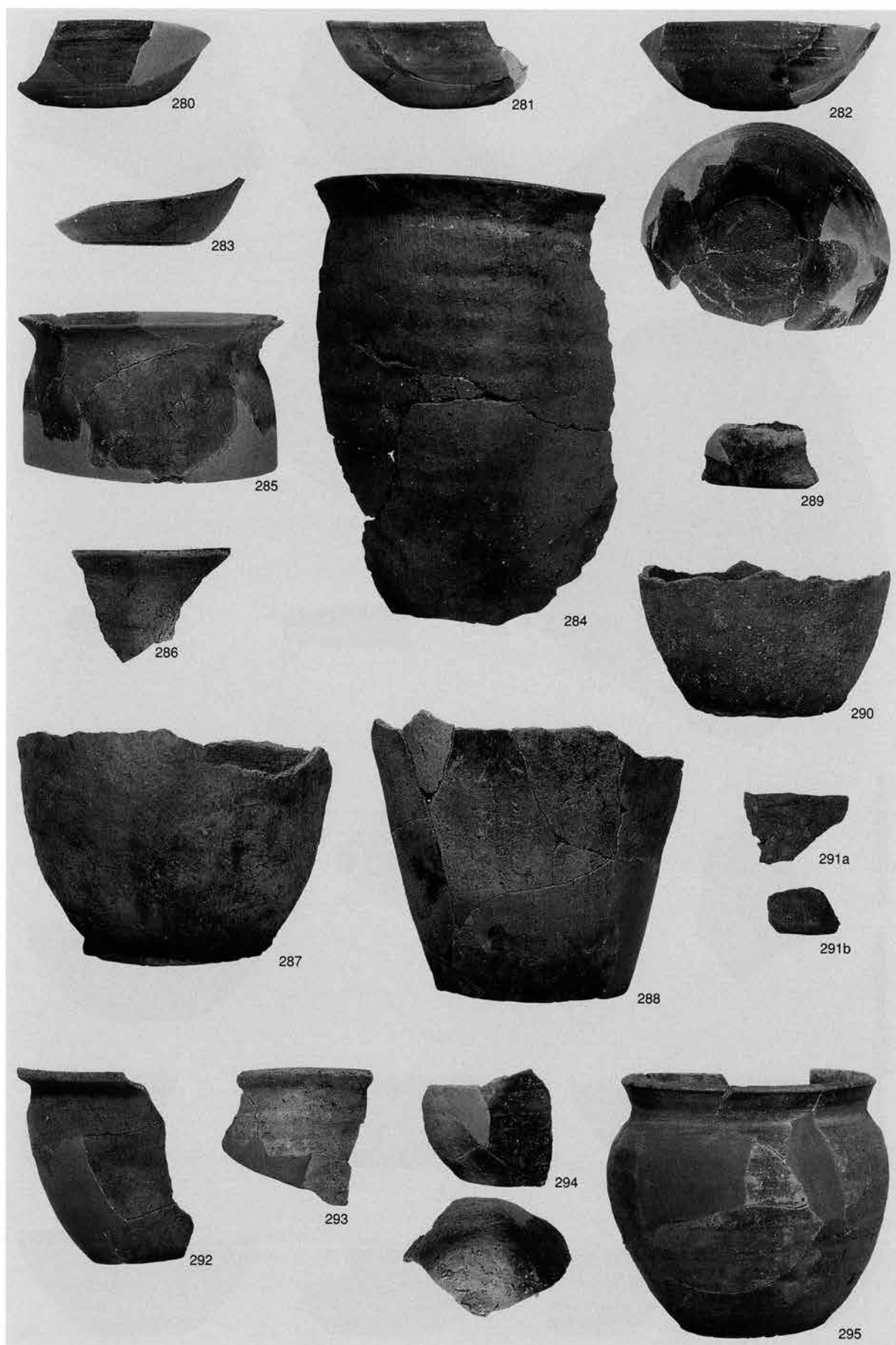
写真図版121 出土遺物 (16)



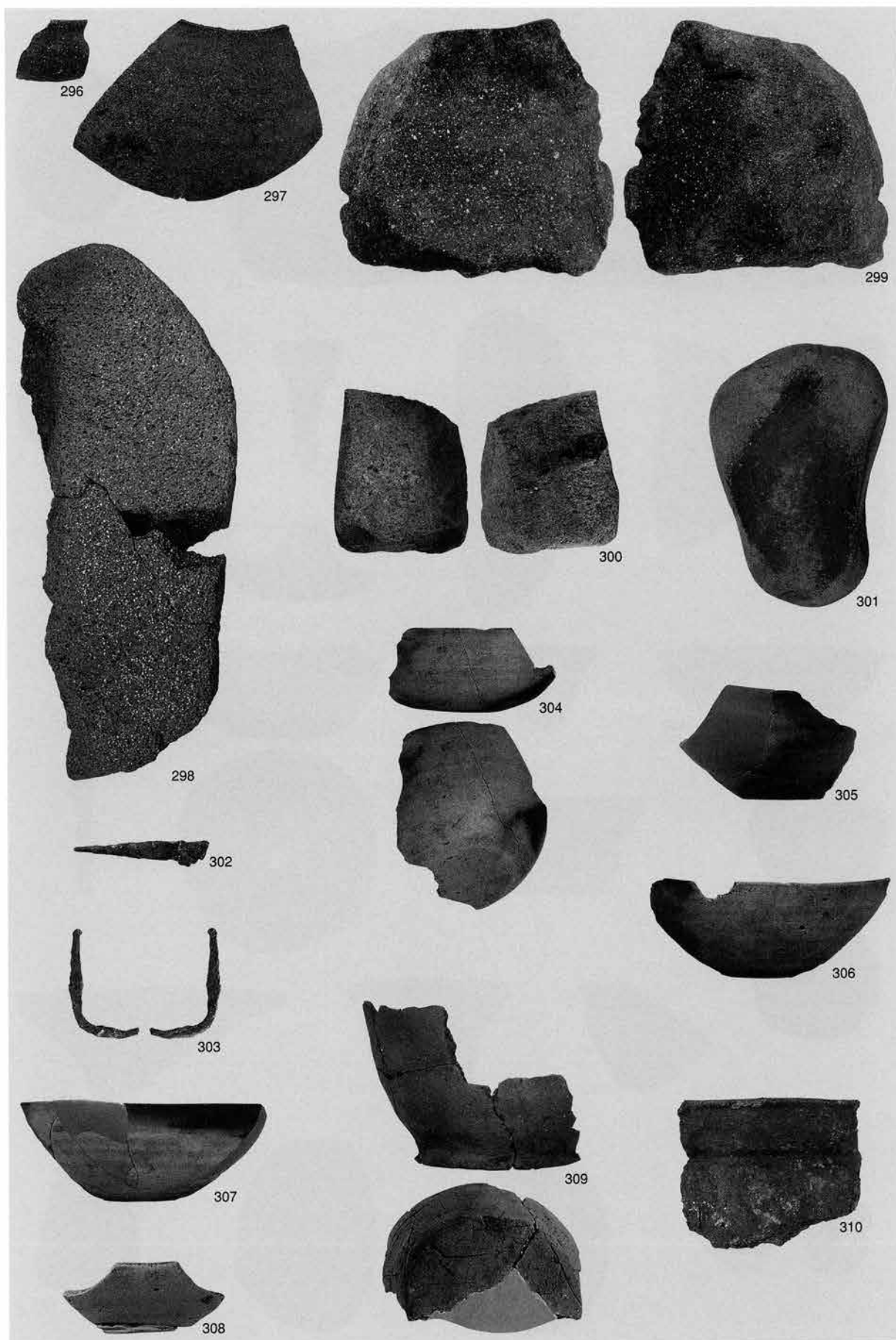
写真図版122 出土遺物 (17)



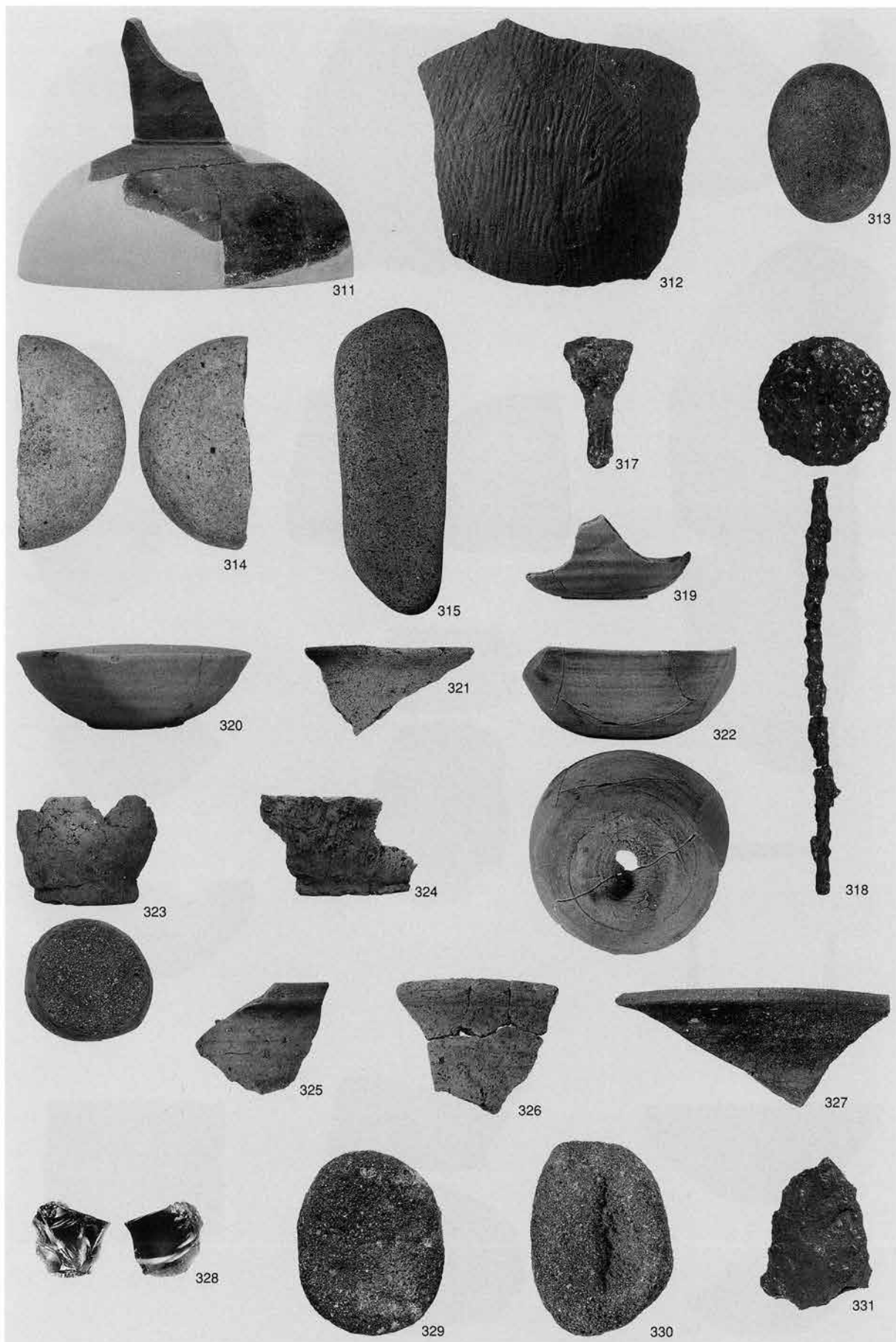
写真図版123 出土遺物 (18)



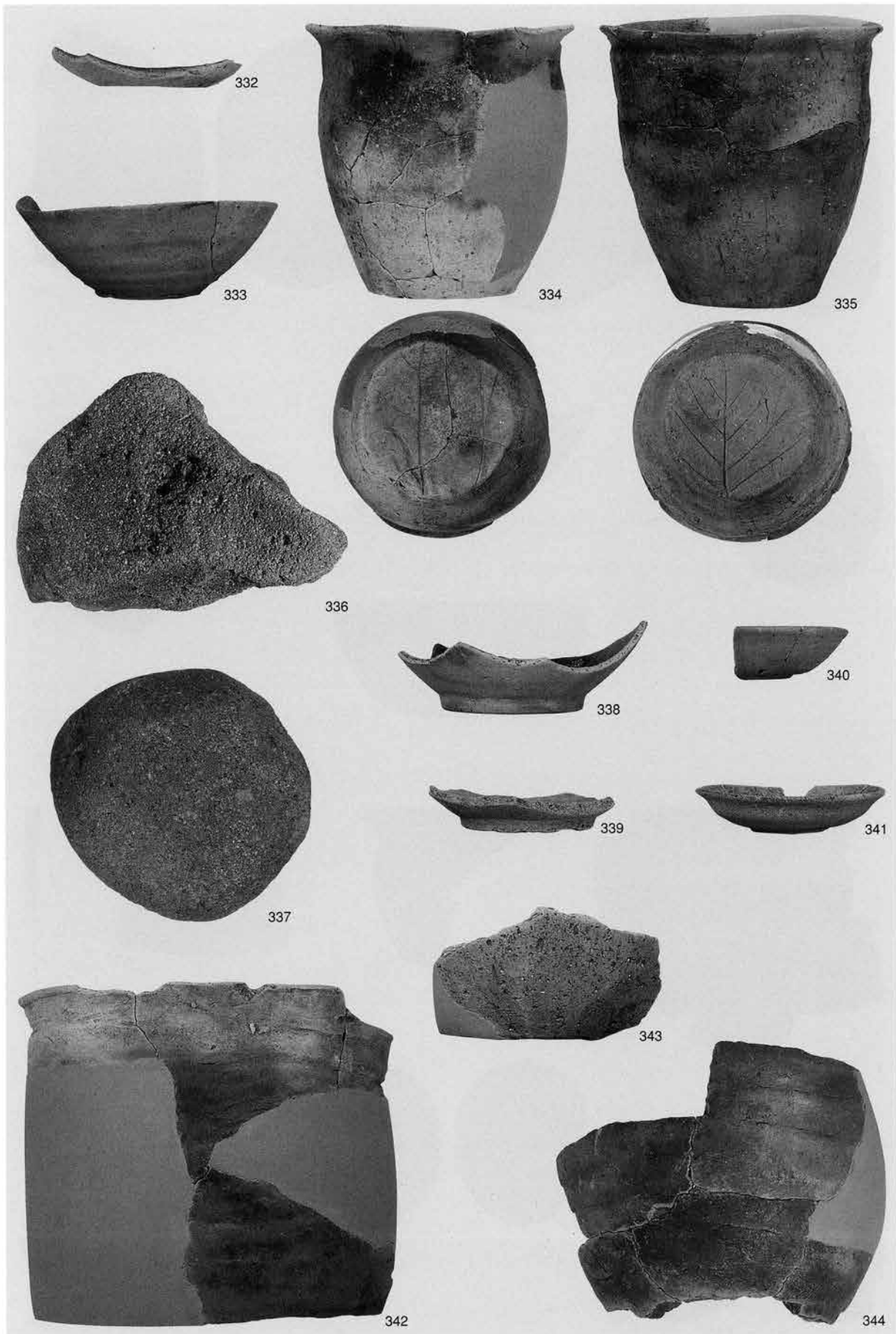
写真図版124 出土遺物 (19)



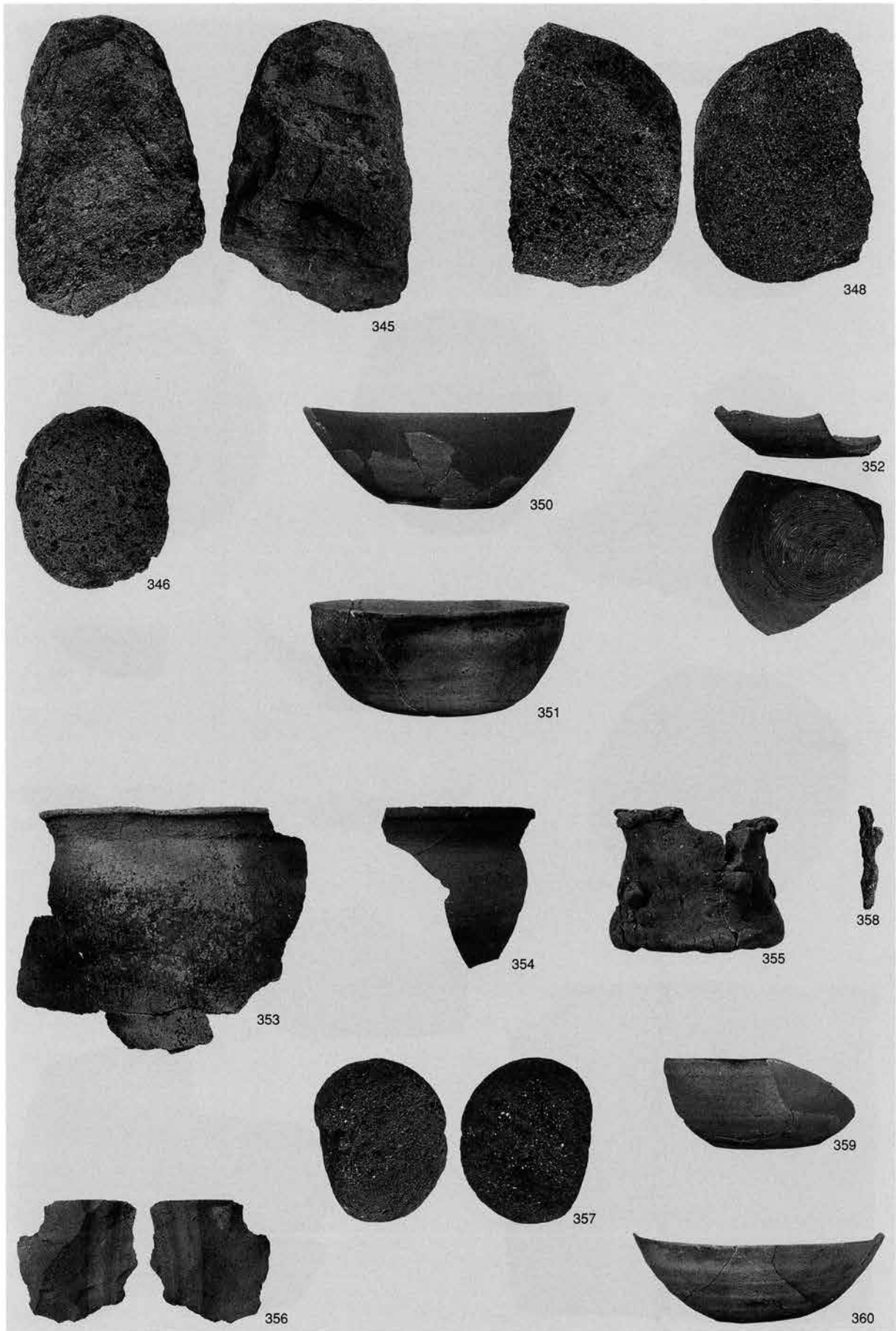
写真図版125 出土遺物 (20)



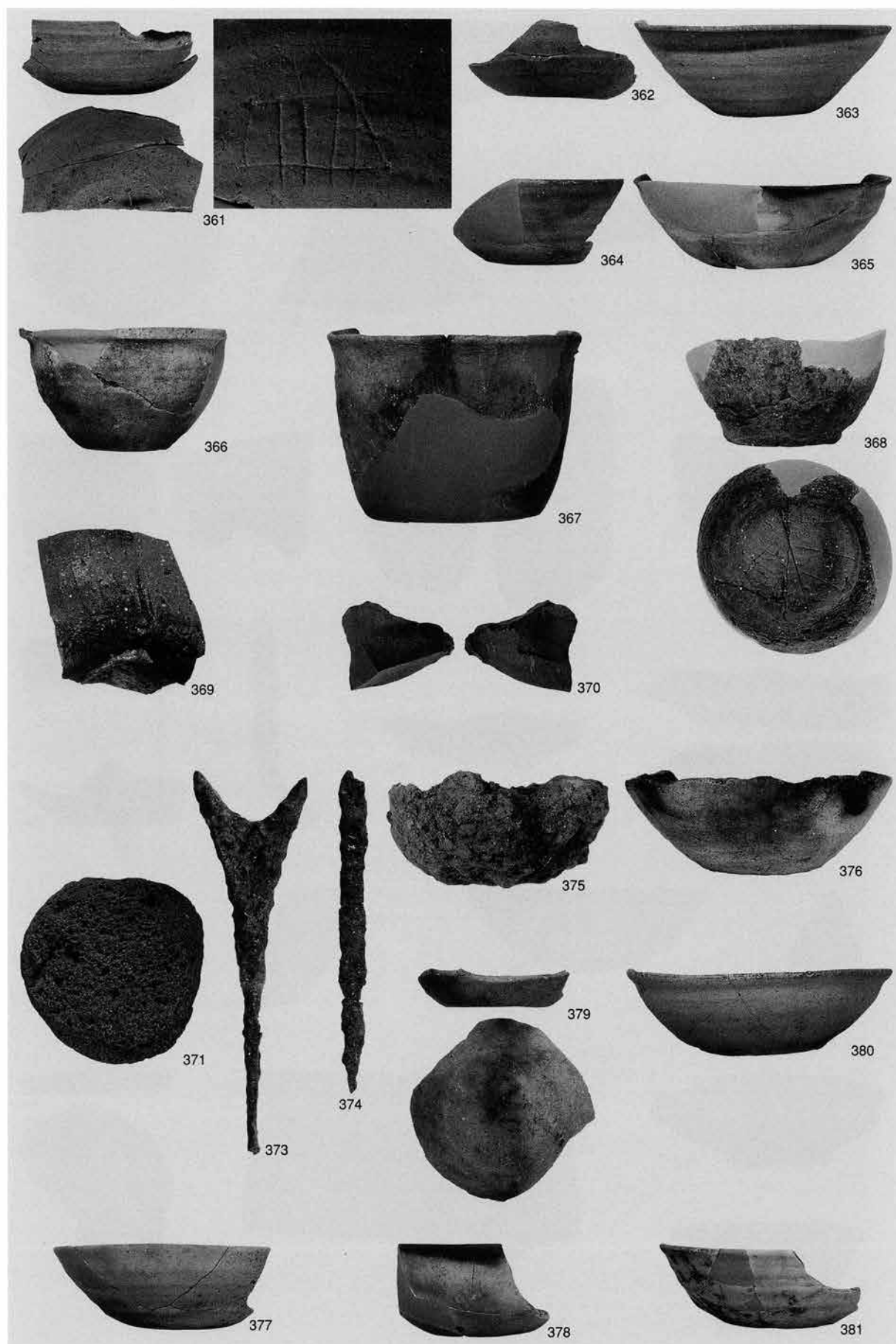
写真図版126 出土遺物 (21)



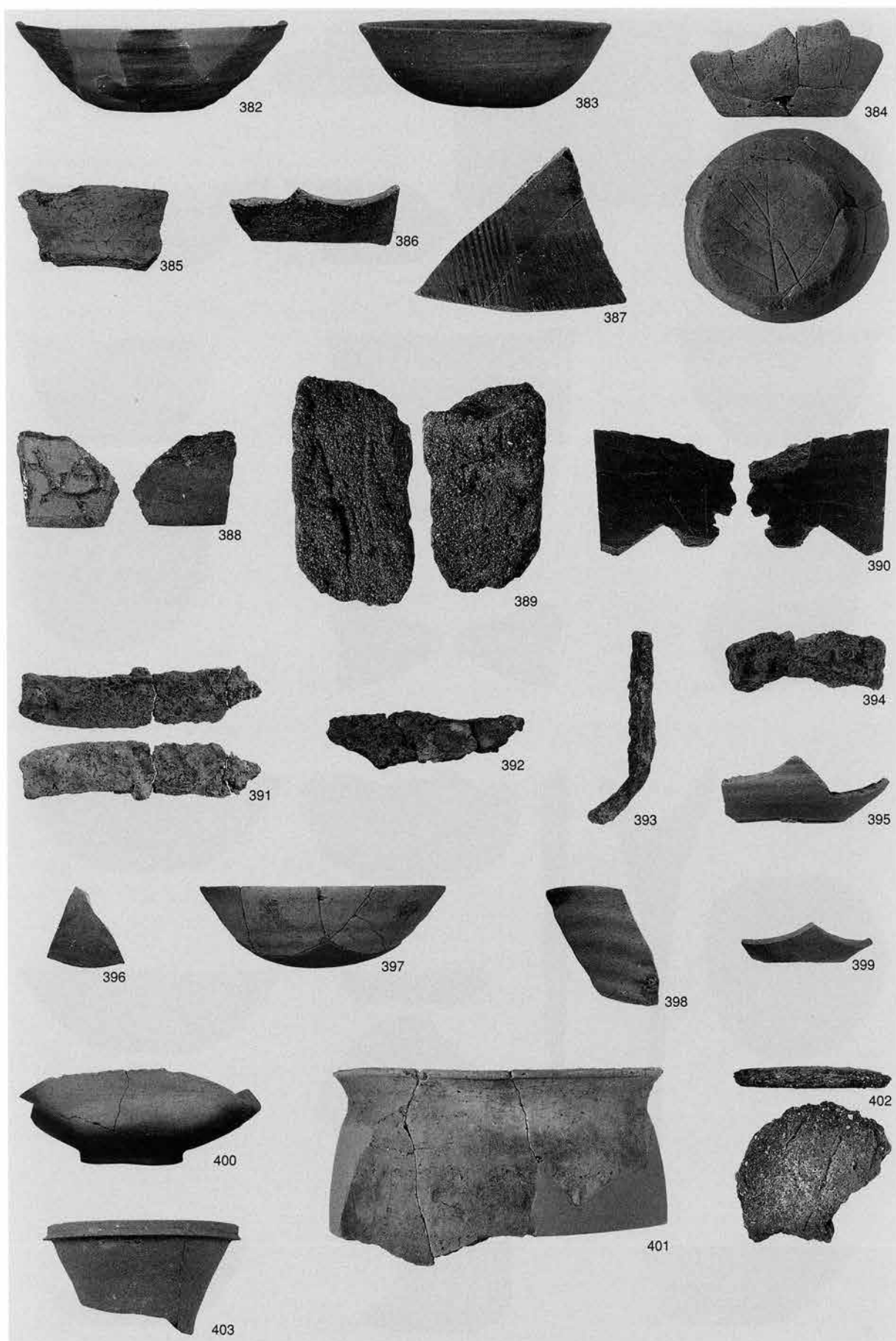
写真図版127 出土遺物 (22)



写真図版128 出土遺物 (23)



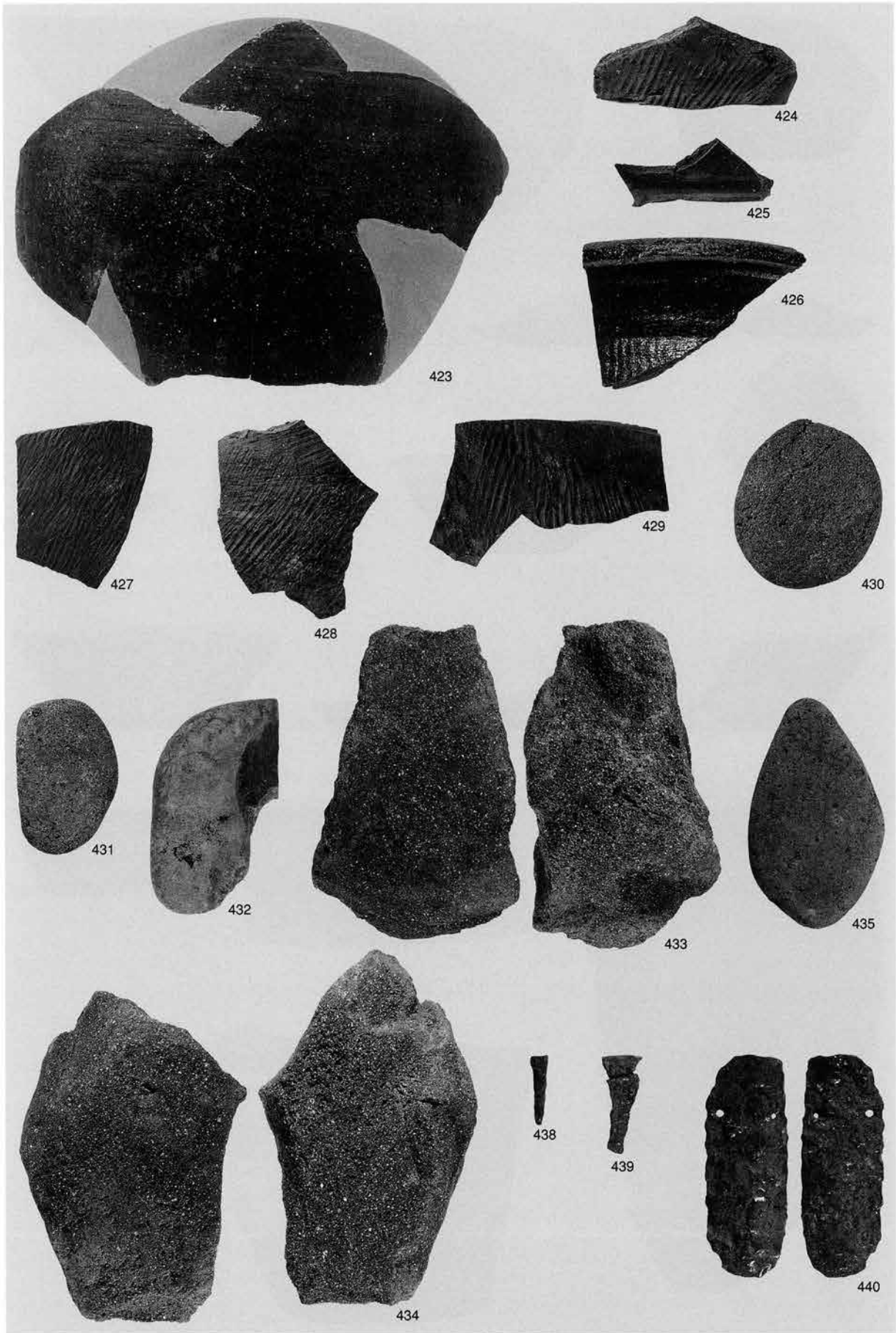
写真図版129 出土遺物 (24)



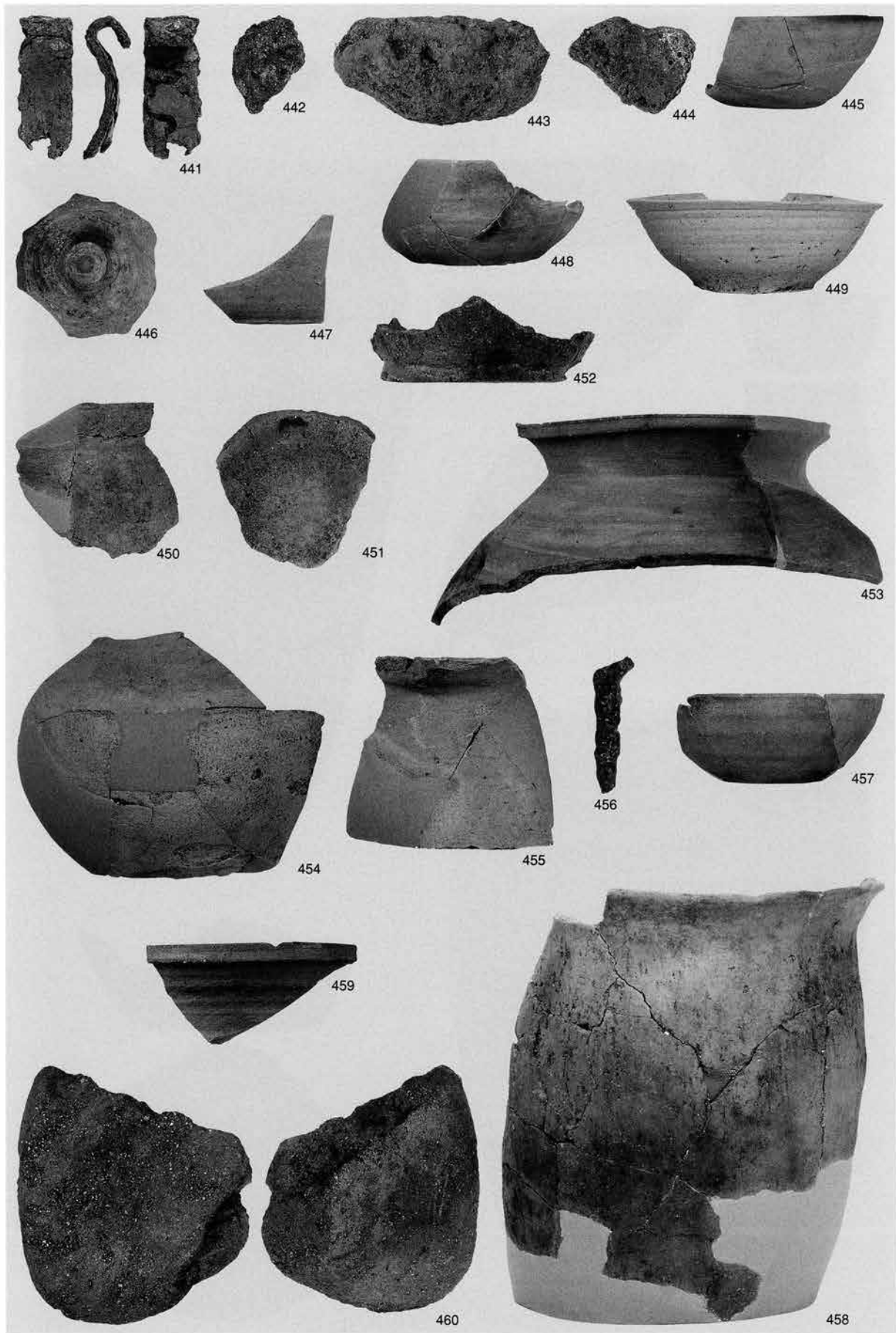
写真図版130 出土遺物 (25)



写真図版131 出土遺物 (26)



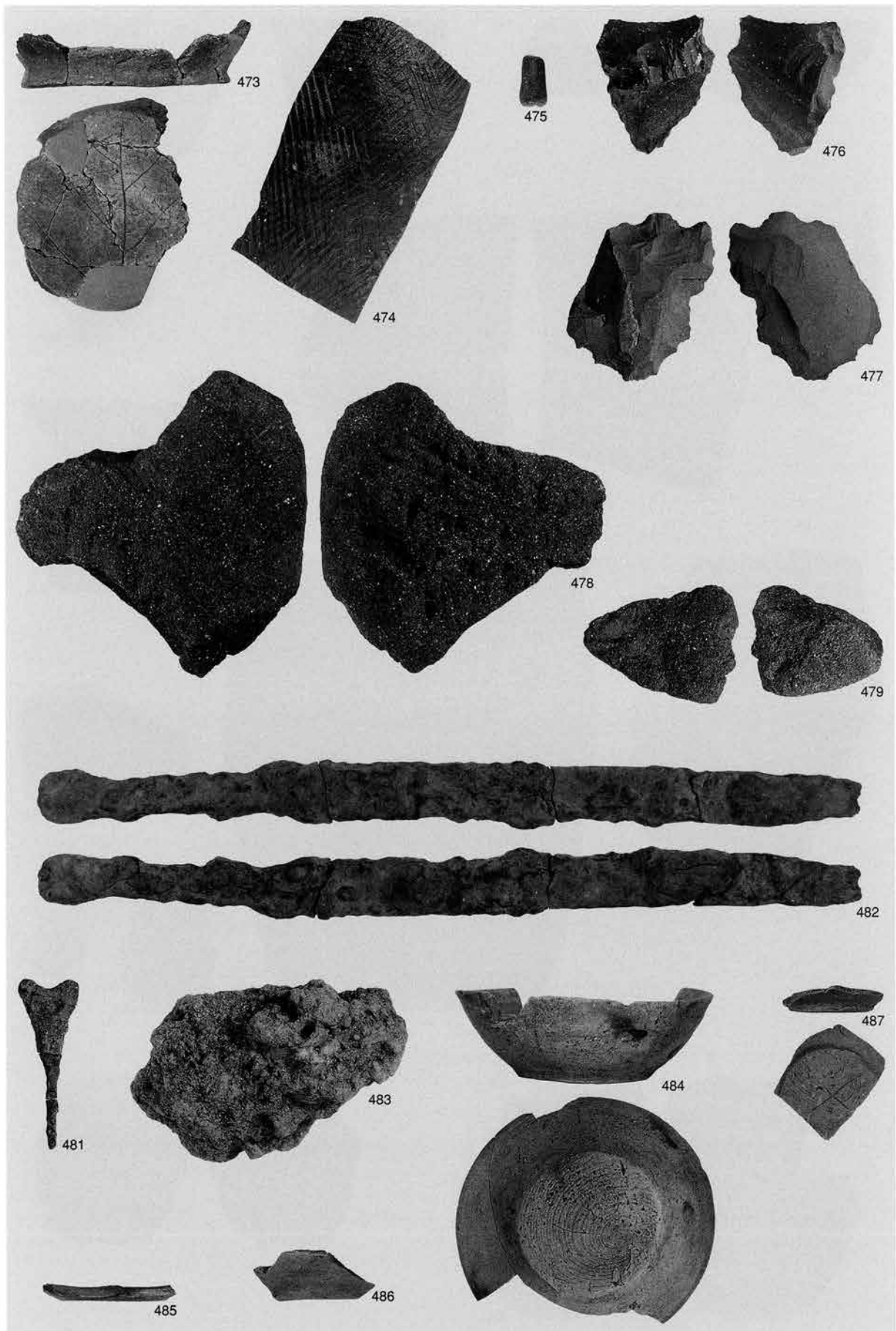
写真図版132 出土遺物 (27)



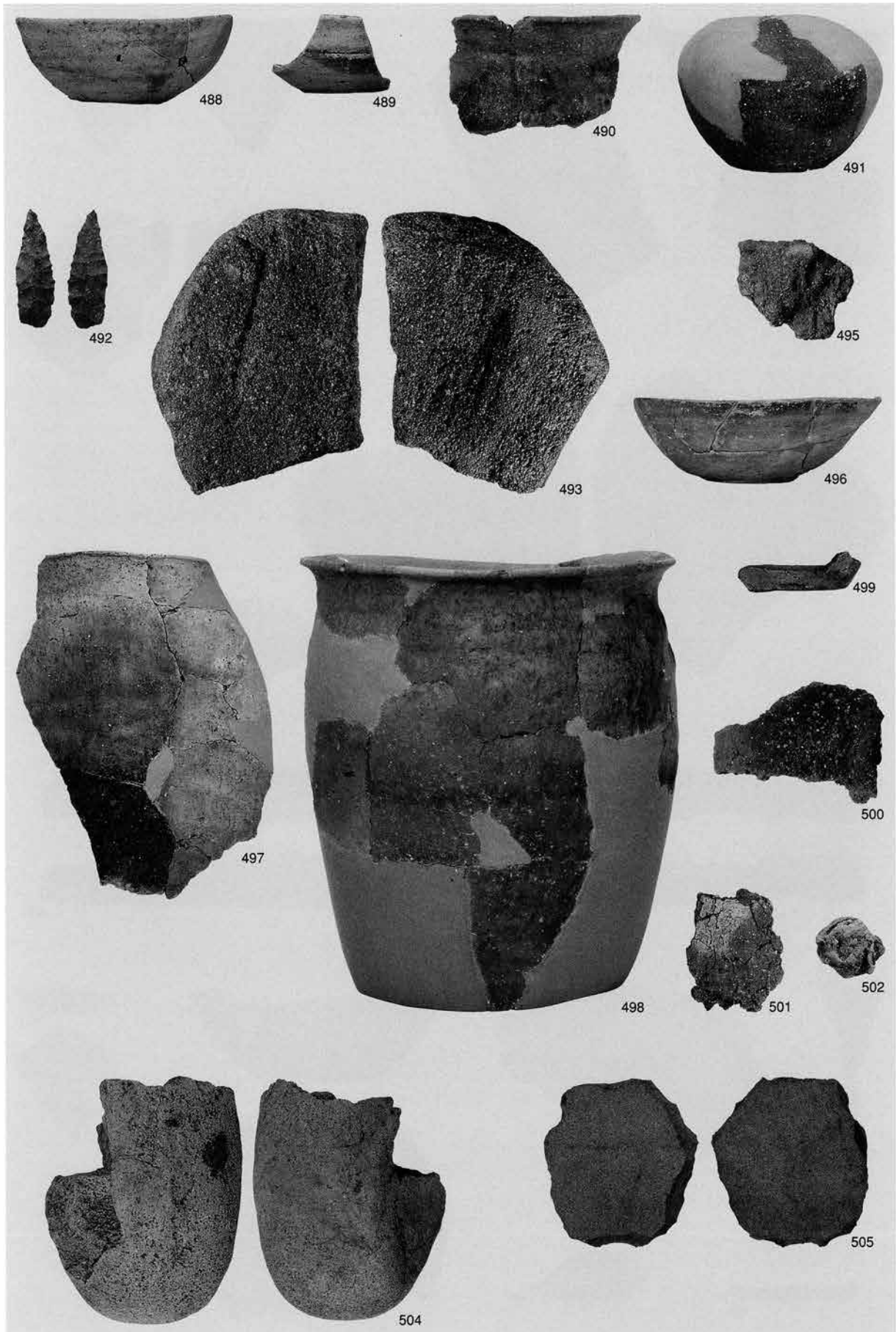
写真図版133 出土遺物 (28)



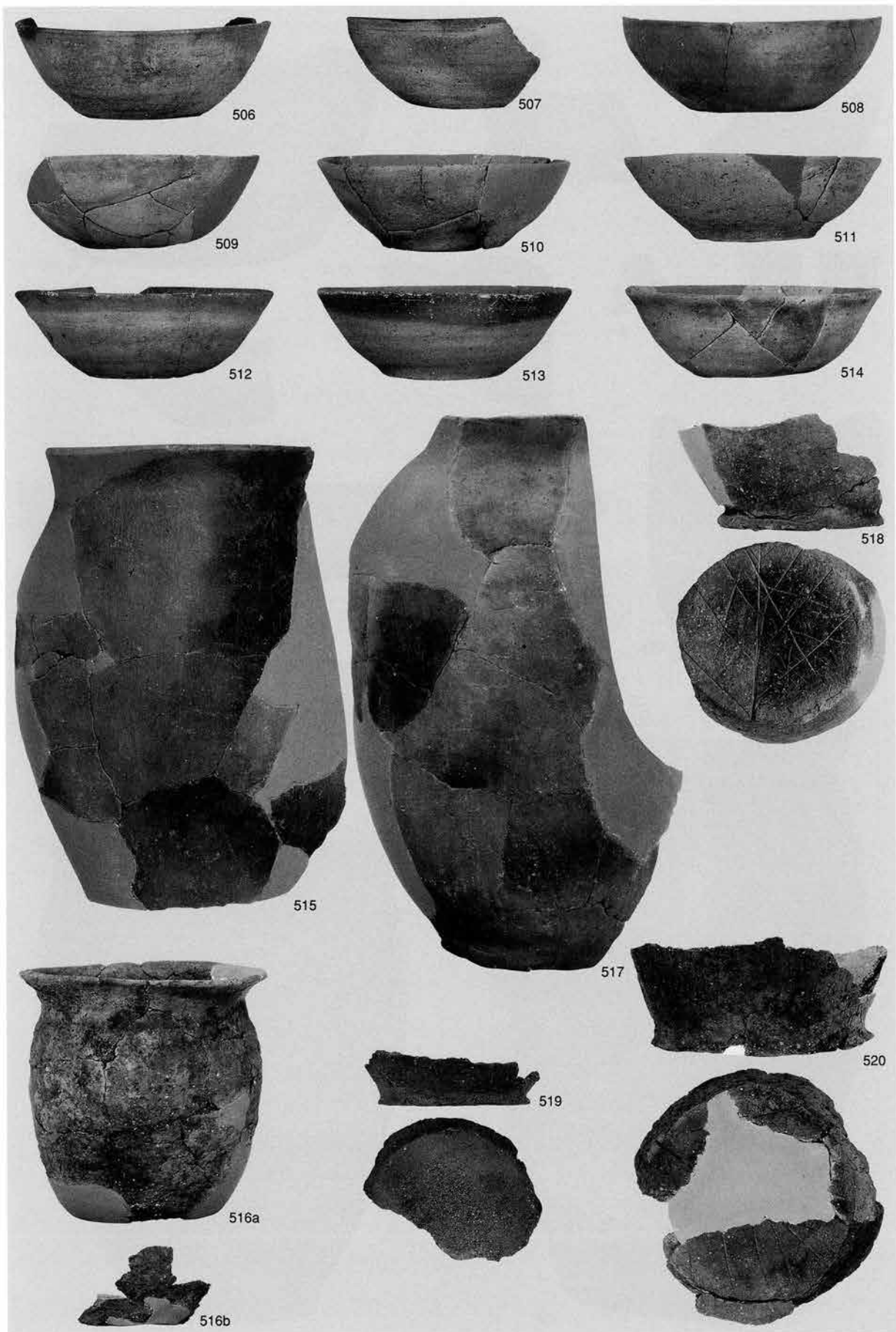
写真図版134 出土遺物 (29)



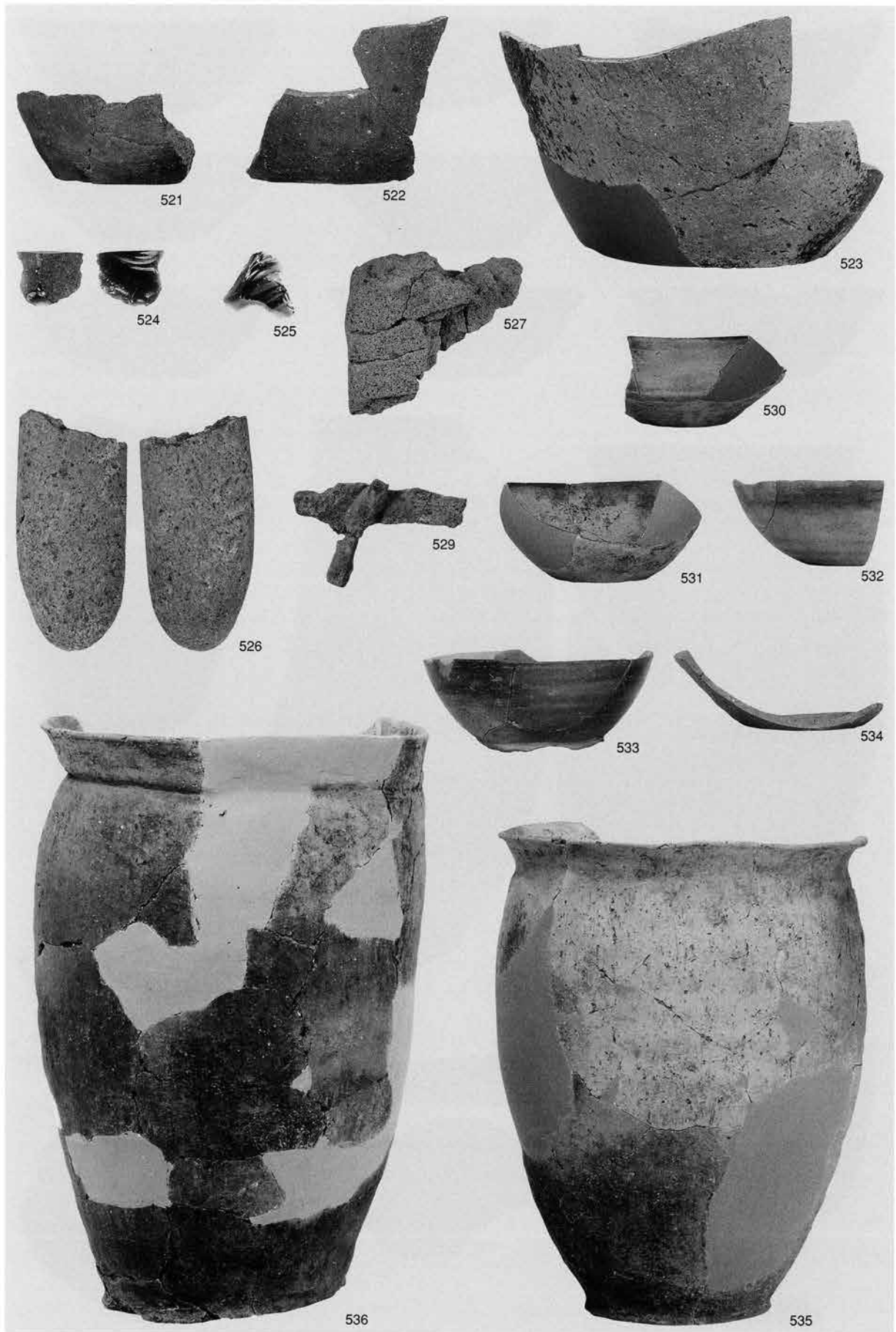
写真図版135 出土遺物 (30)



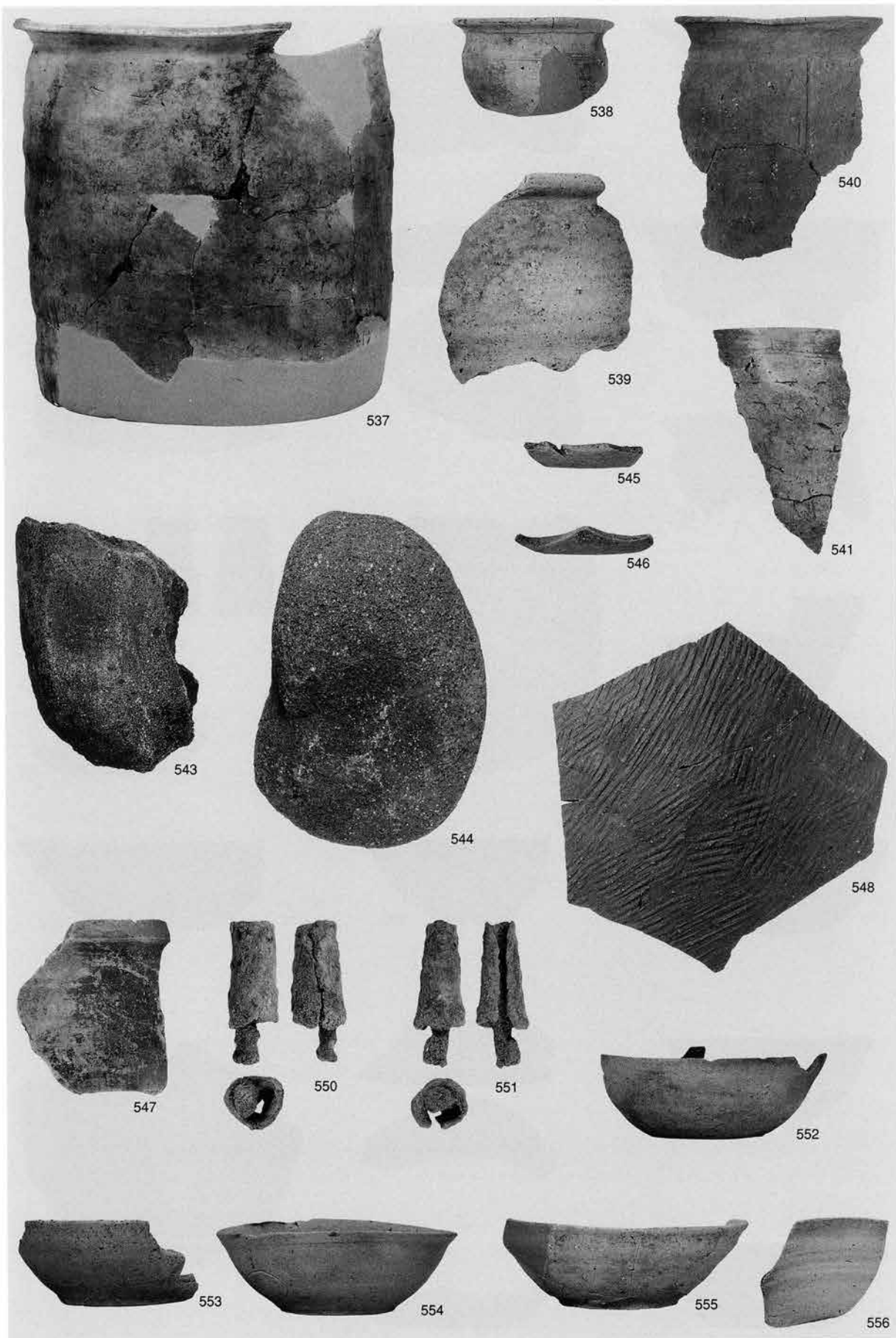
写真図版136 出土遺物 (31)



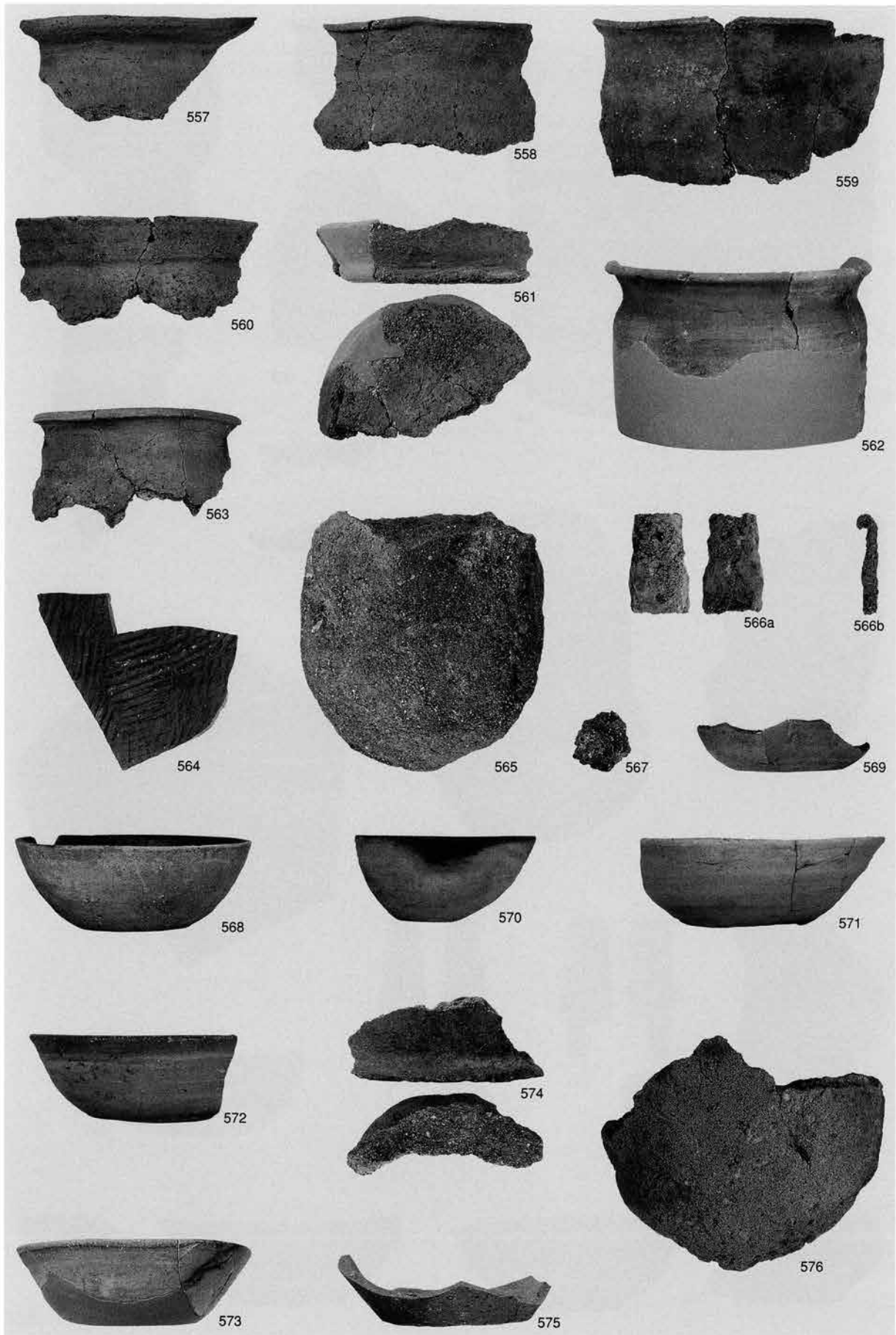
写真図版137 出土遺物 (32)



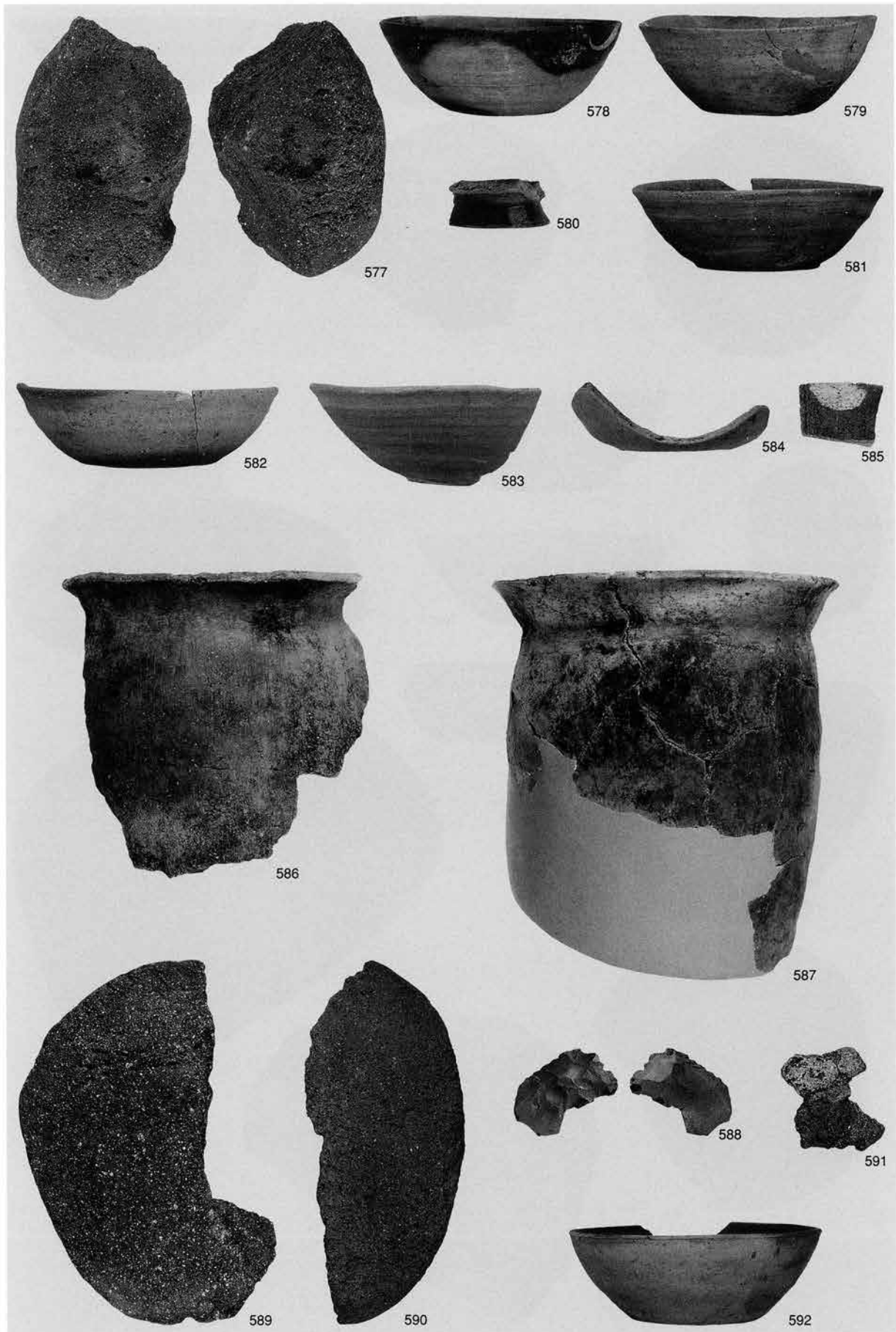
写真図版138 出土遺物 (33)



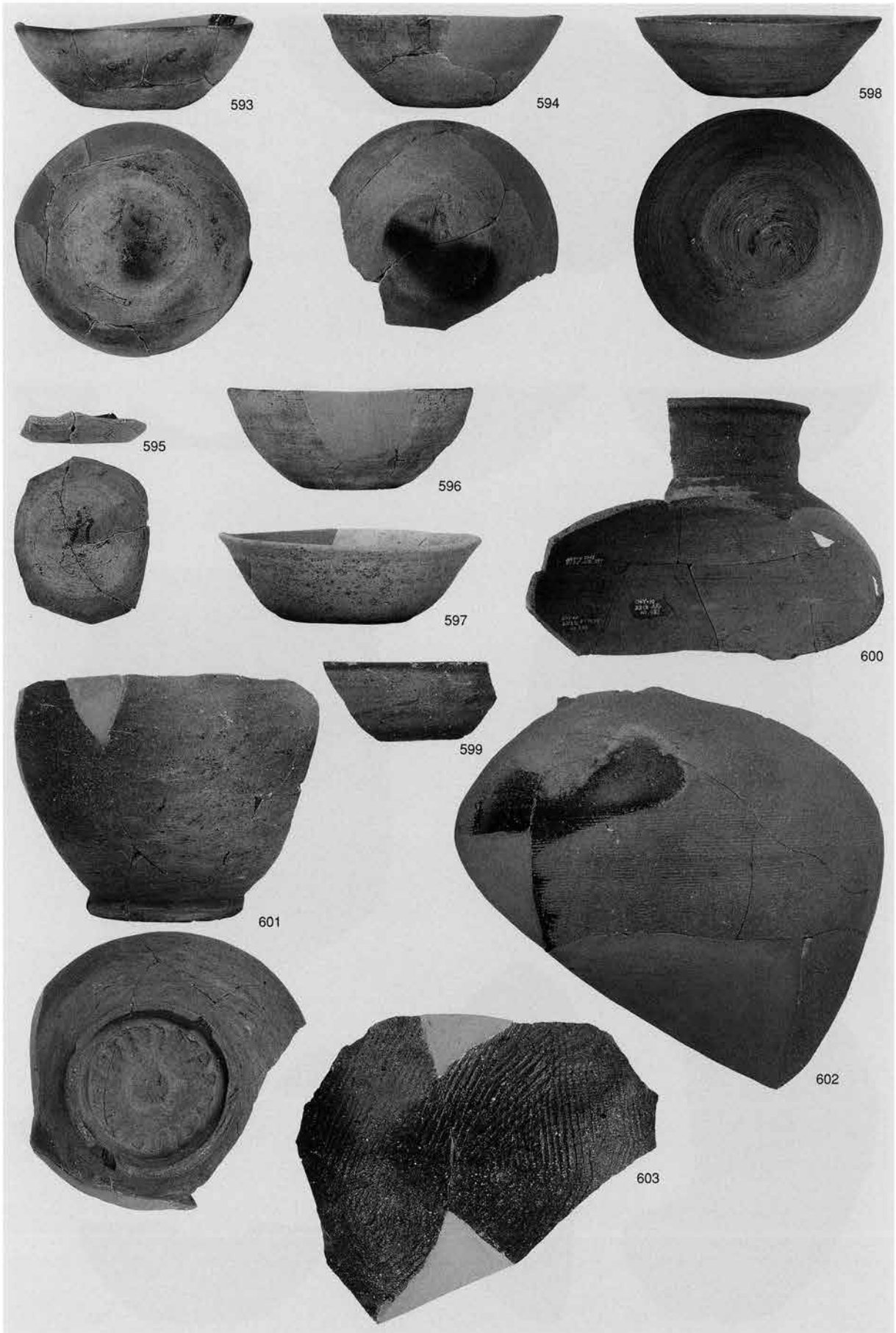
写真図版139 出土遺物 (34)



写真図版140 出土遺物 (35)



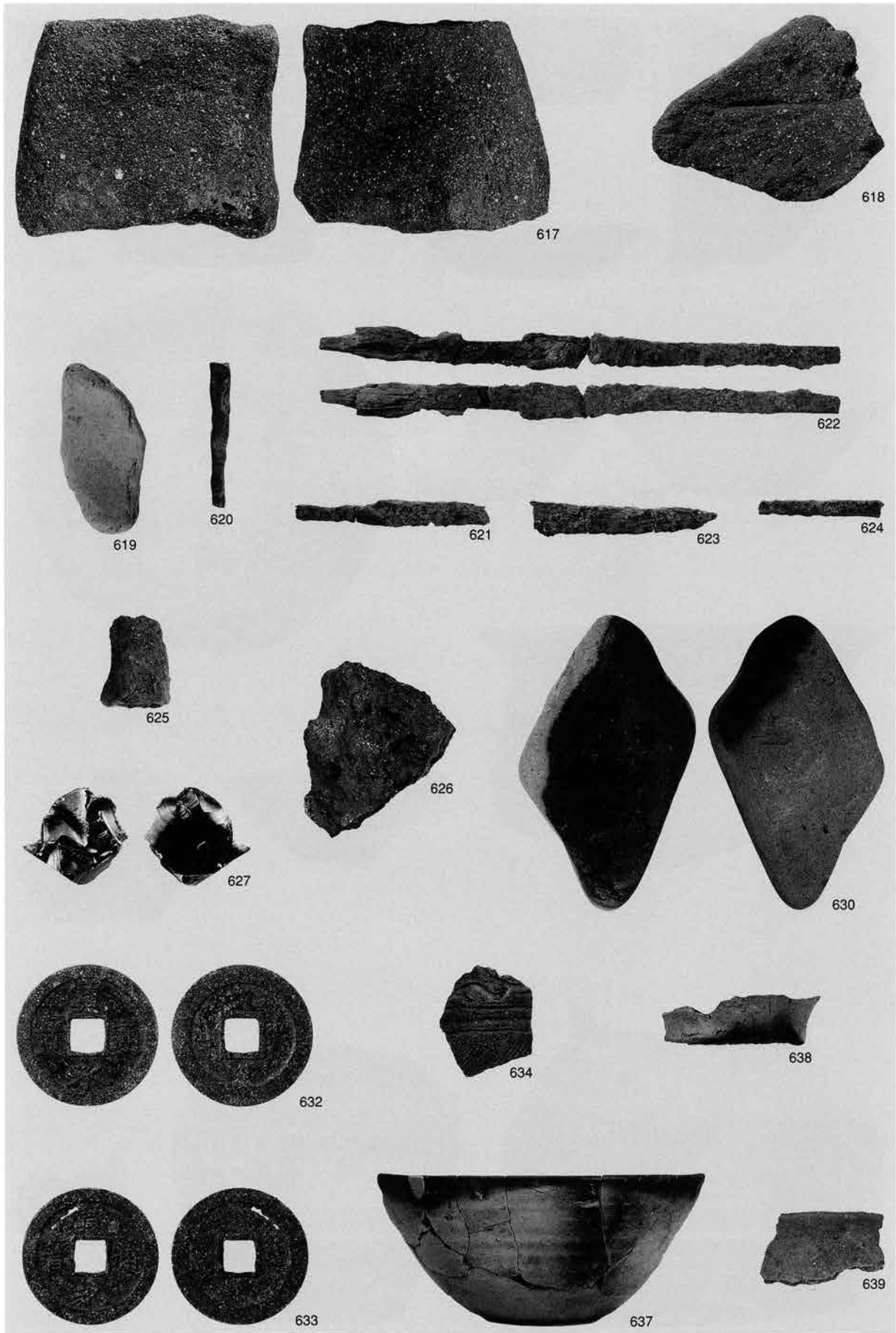
写真図版141 出土遺物 (36)



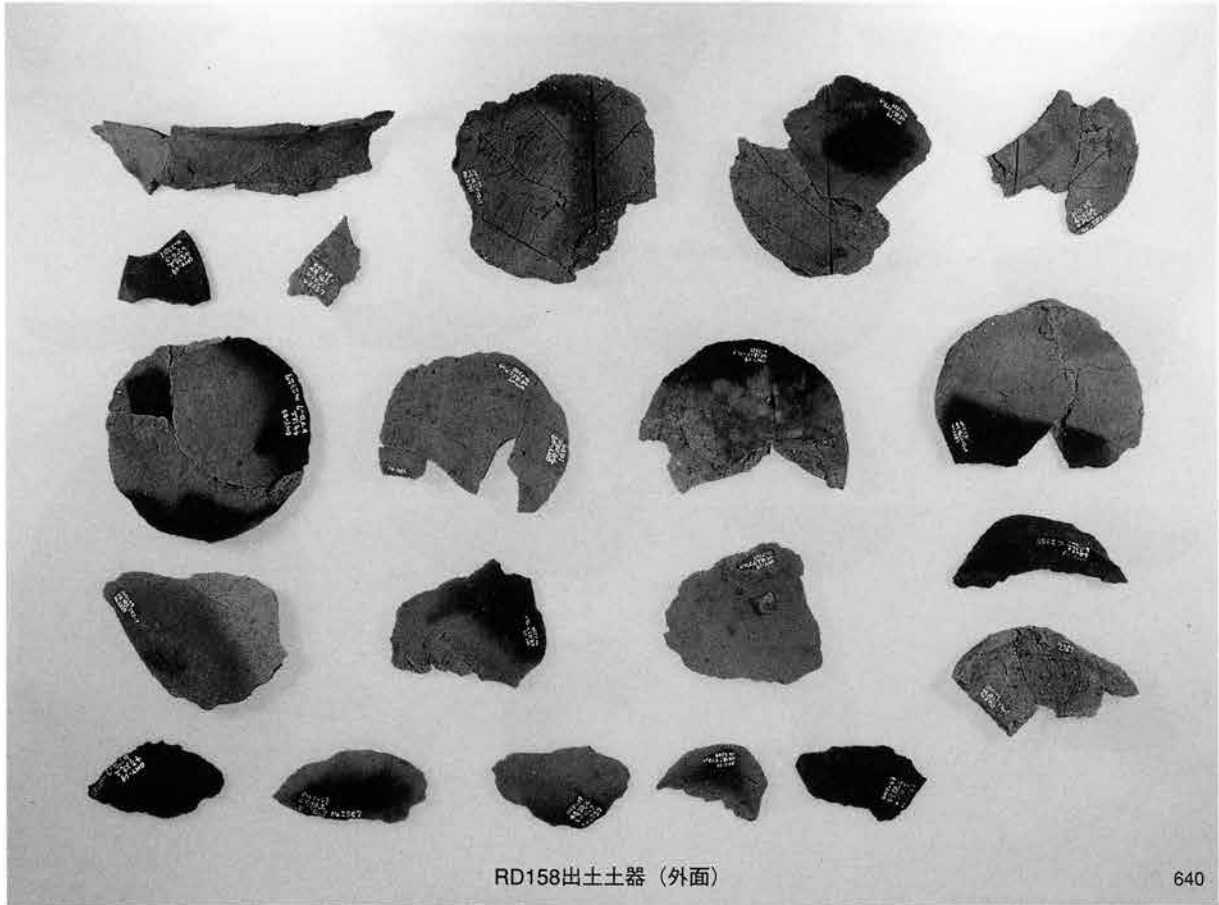
写真図版142 出土遺物 (37)



写真図版143 出土遺物 (38)

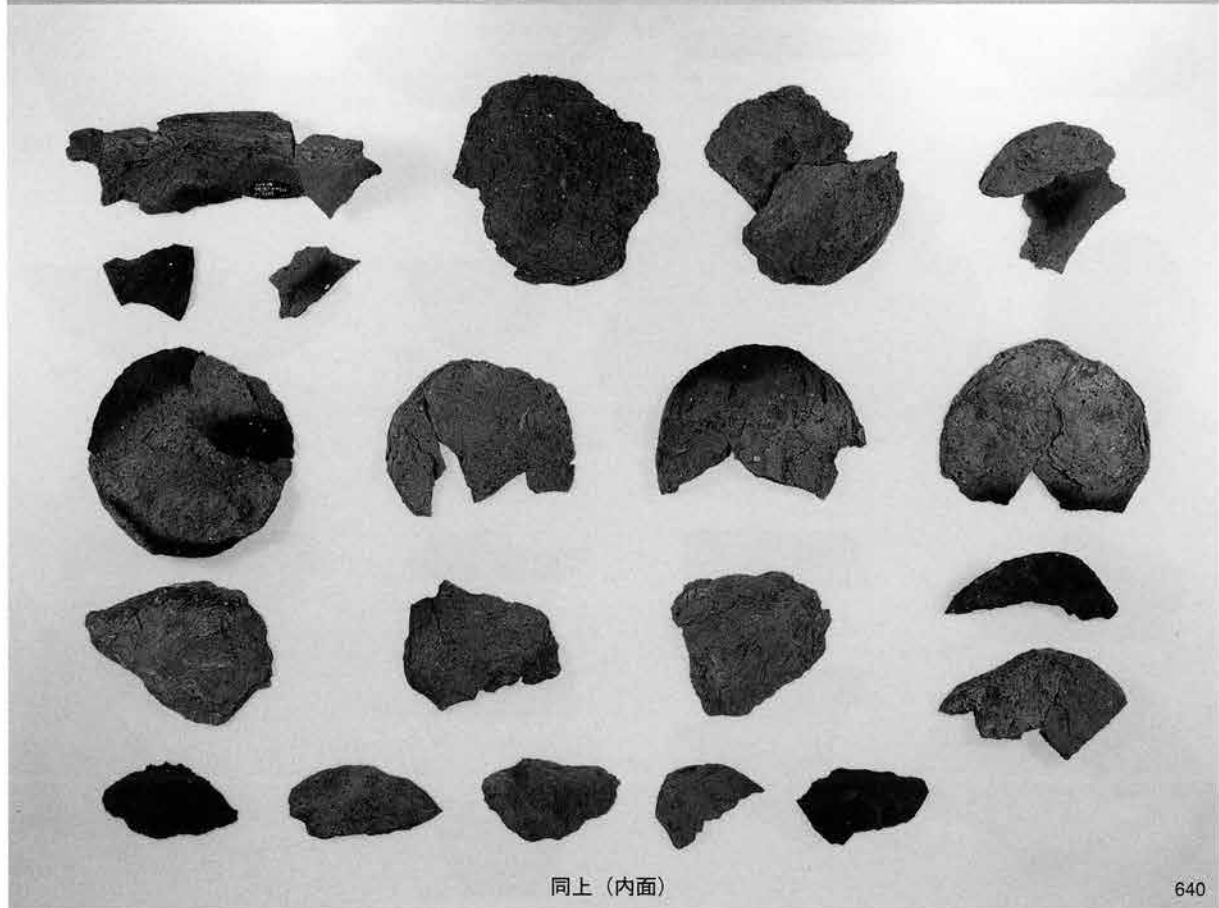


写真図版144 出土遺物 (39)



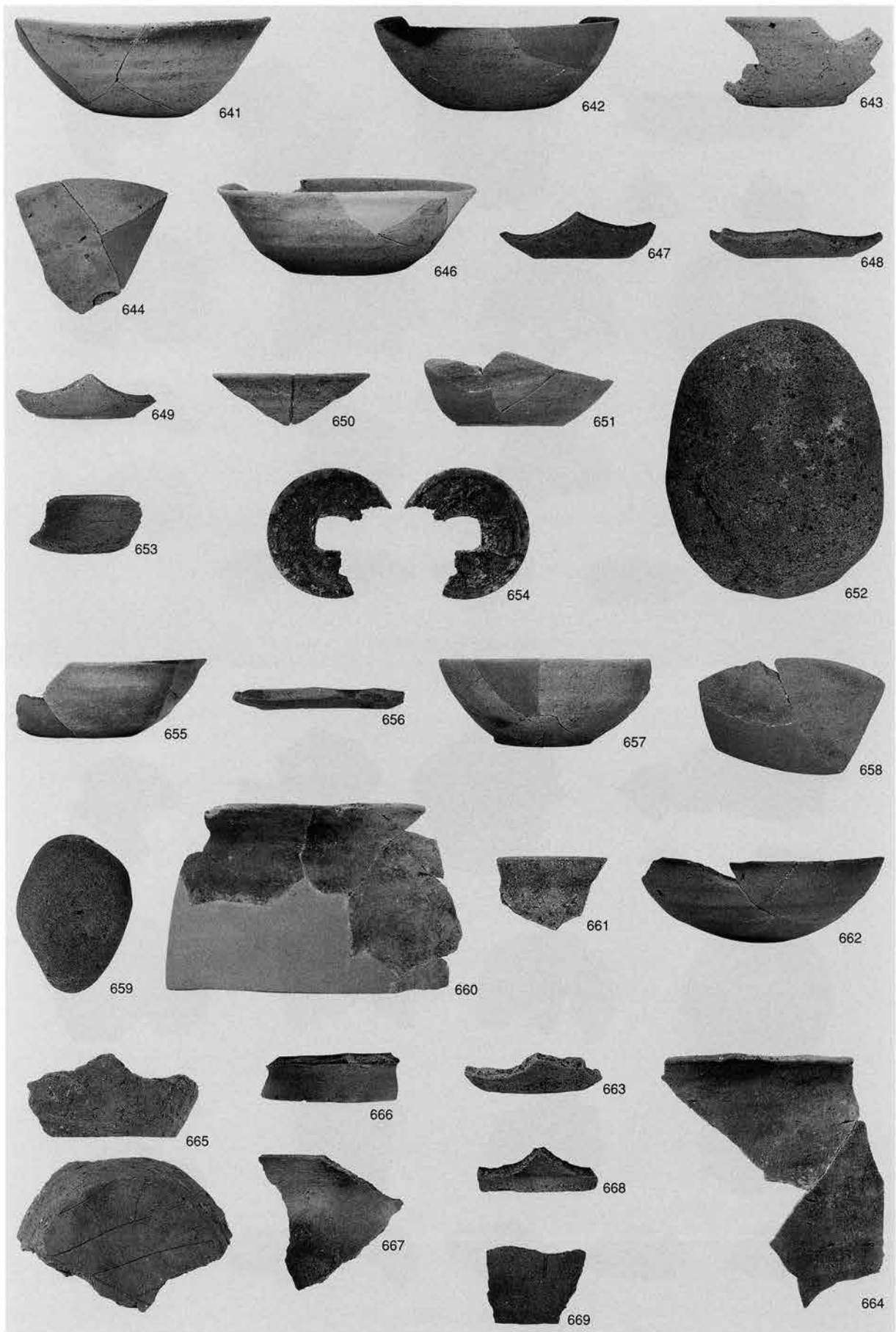
RD158出土土器（外面）

640

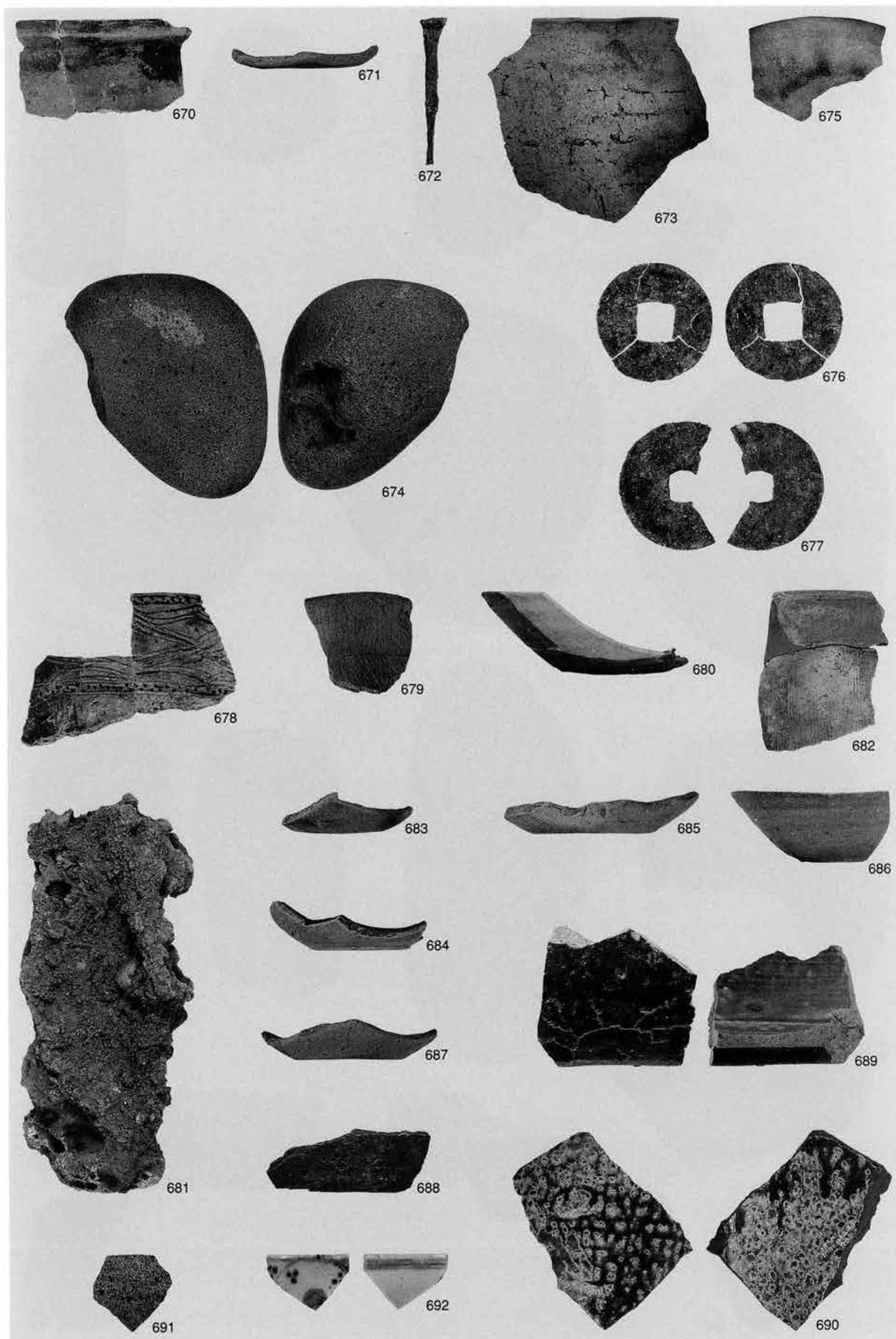


同上（内面）

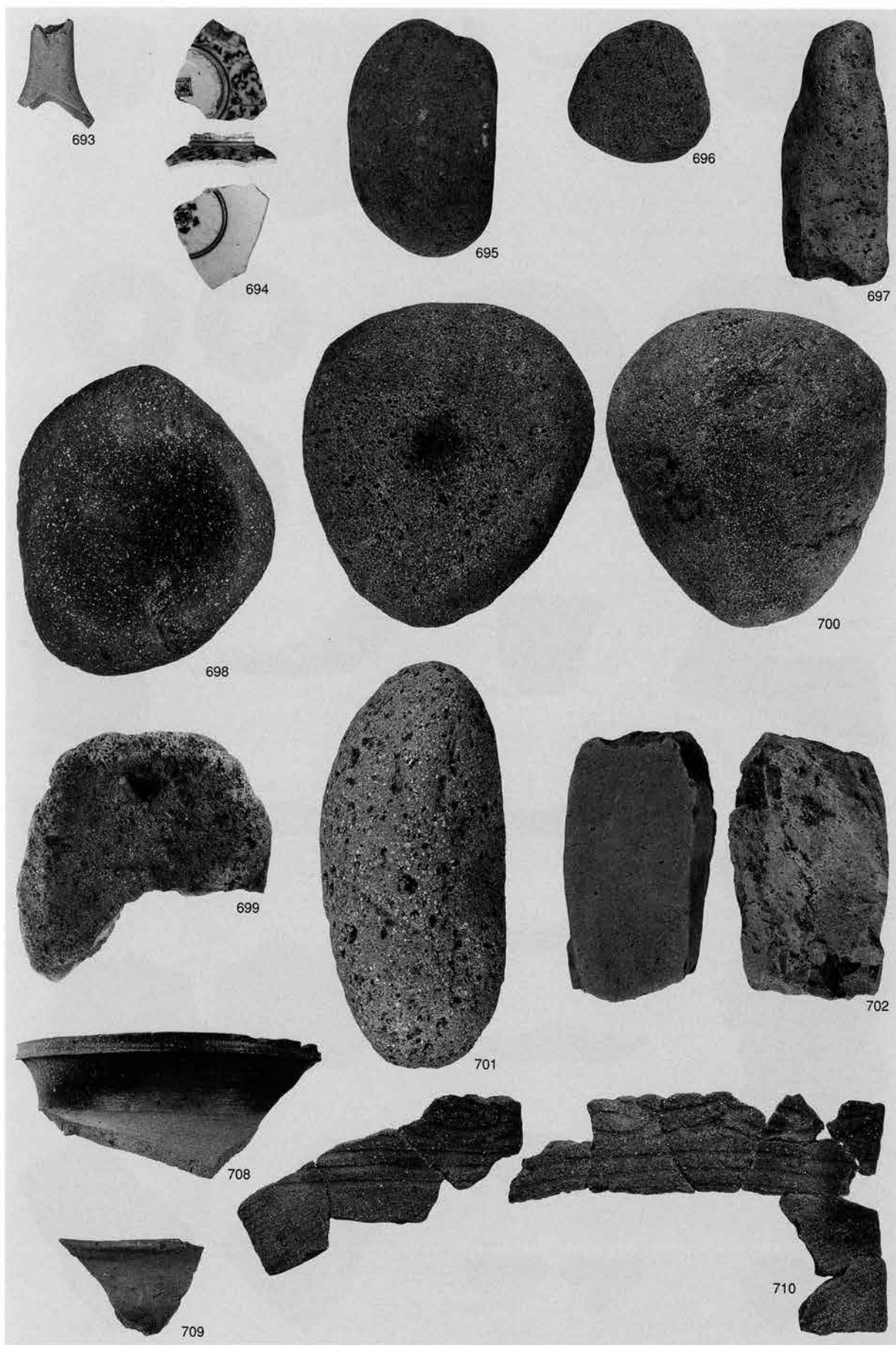
640



写真図版146 出土遺物 (41)



写真図版147 出土遺物 (42)



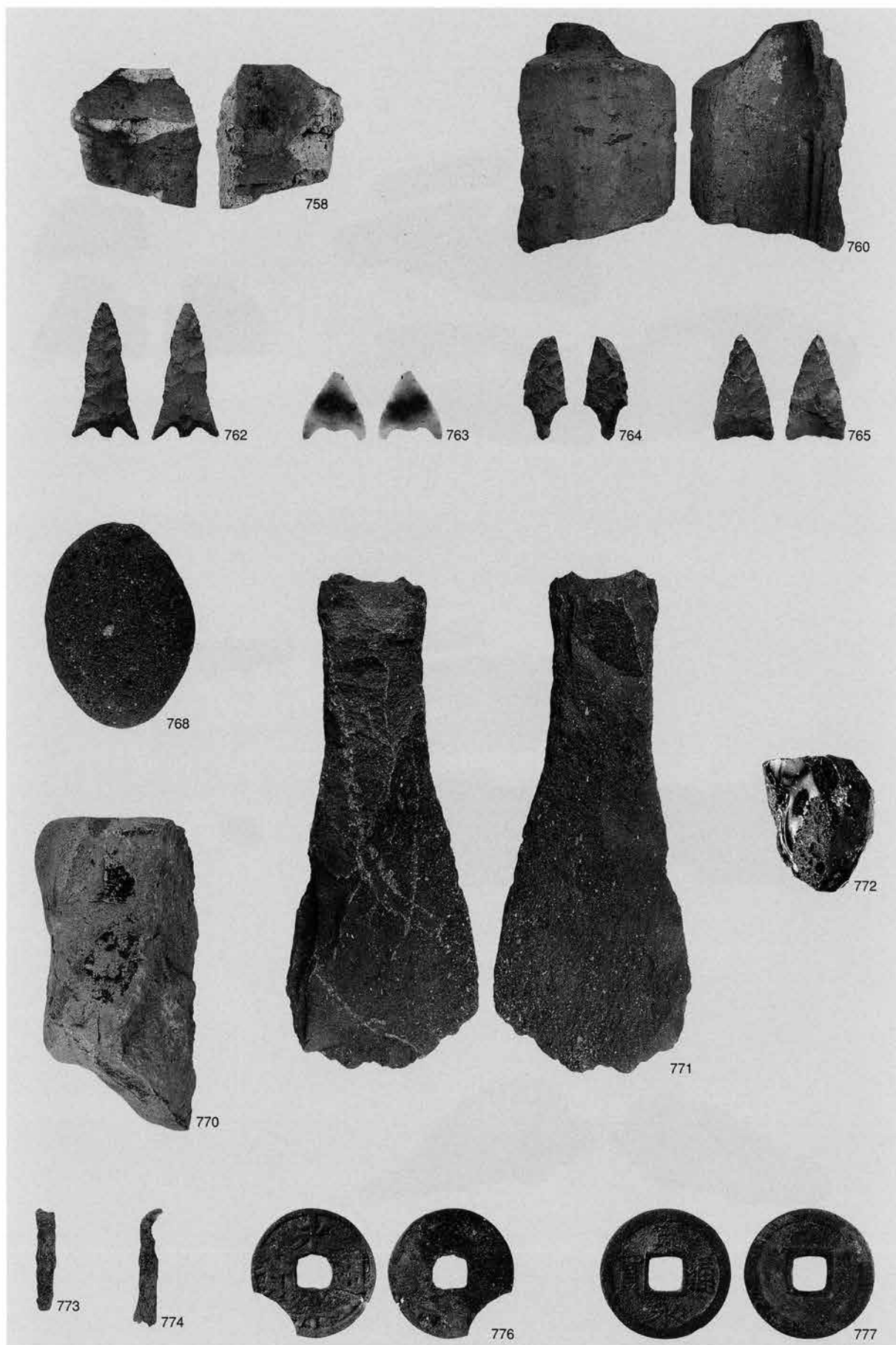
写真図版148 出土遺物 (43)



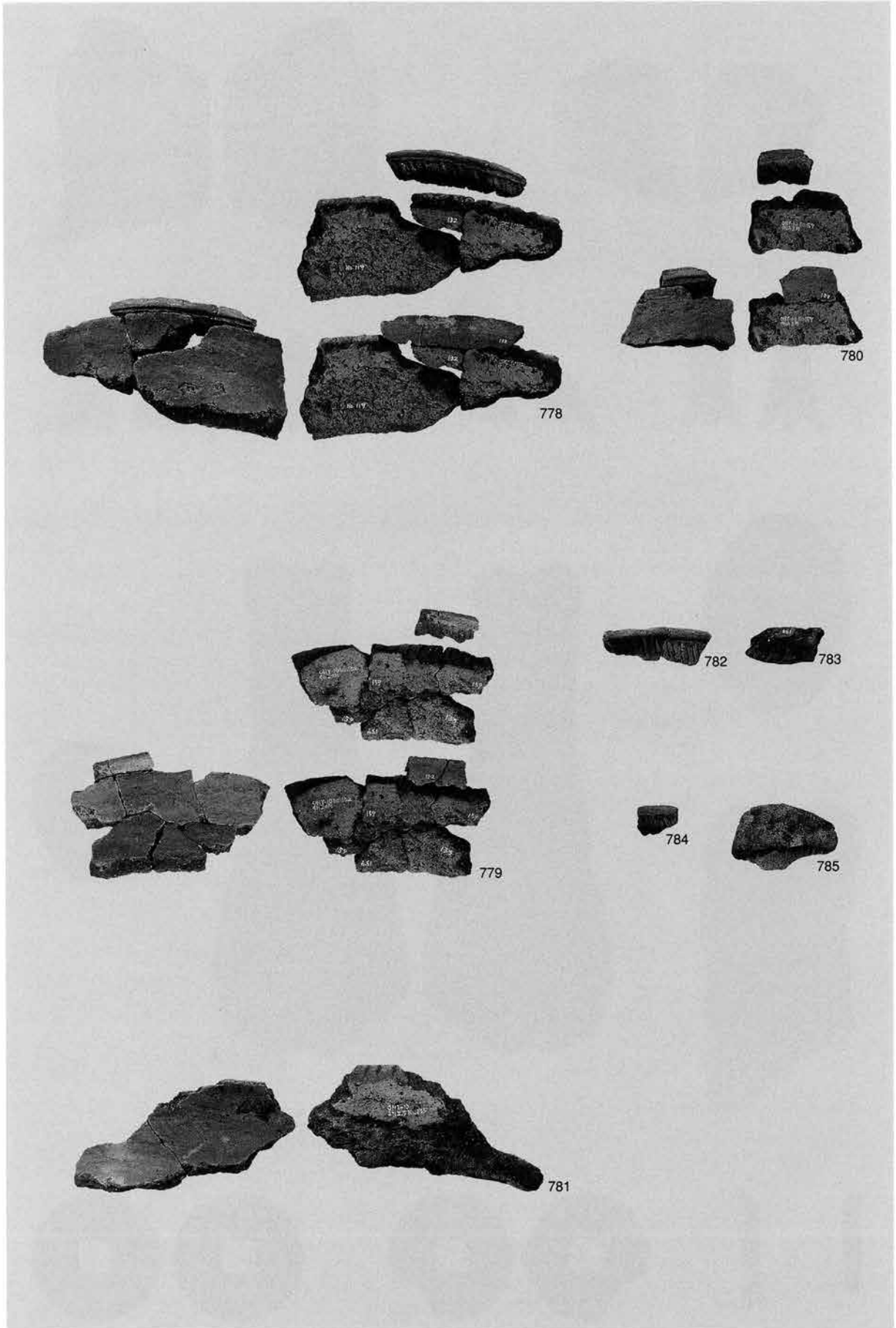
写真図版149 出土遺物 (44)



写真図版150 出土遺物 (45)



写真図版151 出土遺物 (46)



写真図版152 出土遺物 (47)

報告書抄録

ふりがな	ほそやちいせきだいきゆうじだいじゅうじはくつちようさほうこくしよ							
書名	細谷地遺跡第9次・第10次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第500集							
編著者名	金子佐知子・北村忠昭・八木勝枝・金子昭彦・木戸口俊子							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019-638-9001							
発行年月日	西暦2007年3月12日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ほそやちいせき 細谷地遺跡 (第9次・第10次)	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 むかいなかのあざのほら 向中野字野原 1-17ほか	市町村 03201	遺跡番号 LE26-0214	° , ' , '' 39° 40' 42''	° , ' , '' 141° 08' 19''	2005.04.12 ~ 2005.11.18	1,835 (第9次) 10,545 (第10次)	盛岡南新都市土 地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
細谷地遺跡	散布地 ?	弥生時代 (後期)	焼土遺構 1基	弥生時代の土器小コンテナ (30×40×10) 4分の1		沢状の窪地に焼土遺構を形成 (キャンプサイト?)		
	集落跡	縄文時代 (晩期前葉)	竪穴住居跡 1棟 フラスコ状土坑 3基	縄文土器大コンテナ (30×40×30cm) 1箱 剥片石器・礫石器・石製品		住居跡の埋土はマウンド状 の人為堆積、廃屋に埋葬?		
		奈良時代 (8世紀後半)	竪穴住居跡 11棟 土坑 2基?、溝跡 1条?	土師器・須恵器中コンテナ (30×40×20cm) 23箱		小形の軒平瓦のような土製品 が出土 樹木様の文様を刻書した両 面黒色処理の土師器壺が出土		
		平安時代 (9世紀後半 ~10世紀前半)	竪穴住居跡 45棟 掘立柱建物跡 1棟 貯蔵穴 5基、墓壇 2基 焼成土坑 9基 土坑 28基、溝跡 8条	砥石・鉄砧石1点 勾玉2点?・軒平瓦?1点 焼成粘土塊3点・土錘?1点 土製支脚1点・羽口1点 棒状鉄製品・鉄斧				
		古代	土坑 8基、焼土遺構 2基 溝跡 7条 柱穴群 2箇所?	板状鉄製品・釘 紡錘車・鉄鏃、刀子・鈎針 穂摘具・小刀、鉄鐸・鉄滓				
	中世		永楽通寶 2点					
	集落跡	近世以降	掘立柱建物跡 1棟 土坑 11基? 墓壇2基、溝跡4条 性格不明遺構 2基 柱穴群2箇所	陶磁器 6点 凹石1点、磨石2点、砥石4点 台石1点、寛永通寶3点				
時期不明		柱穴群2箇所、溝跡 1条 焼土遺構2基、土坑4基 カマド状遺構 1基 畝間状遺構 1箇所						
要約	<p>今回は6回目の本調査である。今回の調査区は、遺跡の東よりで調査区東端は沖積段丘の縁辺である。</p> <p>これまでの本調査で、平安時代(9世紀中~10世紀初頭)の集落跡、縄文時代の狩場(陥し穴群)などが確認されていたが、今回は平安時代の集落に加え、新たに縄文時代晩期前葉と奈良時代の集落が発見された。</p> <p>縄文時代の竪穴住居跡は1棟のみであるが、調査区外に集落の広がる可能性がある。奈良時代の竪穴住居跡は調査区を南北に走る沢状地形に沿って形成される。平安時代の集落跡は多くの竪穴住居跡が検出され、おおむね9世紀後半から10世紀までのものと思われる。住居跡は調査区全体に広がっているが、分布には粗密があり、広場のような空間のあった可能性がある。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書500集
細谷地遺跡第9次・第10次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成19年3月11日

発行 平成19年3月12日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001

F A X (019) 638-8563

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020-0016 岩手県盛岡市名須川町23-27

電話 (019) 625-2323

F A X (019) 622-1377

